ソプラノ

BAGO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソプラノ

【Ｎコード】
Ｎ６１５４Ｑ

【作者名】
ＢＡＧＯ

【あらすじ】
ピアノを奏でるヒロインと、それをサポートする主人公との純愛ラブストーリー。
果たして、主人公は無事に儀式をクリアできるのか……。
ゲームのような感じで、共通ルートが終わり次第、個別という形になっていきます。
目的は儀式を成功させることですが、個別ストーリーで取り上げる内容はそれぞれ違います。
攻略対象は、ピアノを弾く４人のヒロインです。他はサブキャラな

ので、ご了承ください。

アンダンテ

……。

……。

……。

チリリリリリリリリリ。

「ん……朝か……」

くっつく瞼を無理やり引き剥がして、俺は目覚ましのスイッチを押した。んぅ……目覚ましがなったってことは、もう7時か。朝になるのが早い気がするが、もう少し寝ていたいんだけどな。

だが、仕方あるまい、俺が起きなきゃ、朝飯が食えないもんな。それもこれも、あのチビ介が何の家庭スキルも持っていないせいだ。

嘘じゃない、洗濯、掃除、料理、何をやらせても全くこなす事ができないすごい人。ある種の才能とも思えるな。

さて、ぶつくさ言ってても始まらんし、さっさと作るとするか。

俺は寝巻きを脱ぎ、制服に着替え、台所へと向かった。

……。

これでよし。後はあの人が起きてくればいいんだが……んなわきゃないよな。目覚ましをかけたところで自力で起きれるわけがない。

長い付き合いだ、薄々分かってた。

「本当に、あれで大丈夫なのか？」

俺はあの人の待つ部屋へと向かった。

……。

「はあ、やっぱり寝てるよ……」

「スピー、スピー……」

気持ち良さそうに寝やがって、つか目覚ましかけてねぇじゃねえかこのチビ介。俺任せってことですか？　あなた。

「おい、マユ姉、朝だよ、起きな」

「んん……グー……グー」

「起きろって、マユ姉」
「んぎゅぅ……後27分34秒……」
何じゃその数字は？　長いし刻んでるし……どんな時間計算だよ。
「起きろ、起きないと、飯抜きだぞ」
「ご飯はフォアグラですかぁ～～？」
「んなわけねえだろ」
そんな食材スーパーで売ってねえよ。
「じゃあフグ～？」
「だから、高級食材から離れろ」
「知ってる～？　ふーちゃん、フグは河の豚って書くんだよ～？」
「だからなんだよ！？」
「寝ま～す……グー、スー、ピー」
「このチビ介……」
毎朝こんなのってないよな……。本当にもう……こうなったら強行手段に出るか。
バサっと。
「う、うう～～、寒い～～～」
「だったら起きろ、茶の間は暖かいぞ」
「くそー、負けるものかー。ワタシは寒くても寝れるんだから～。……スピー」
「本当に寝やがった」
なら、これならどうだ。
「お・き・や・が・れ！」
「んぎゃう～～～世界が回る～～～～」
肩に手を置いてマユ姉をシェイクする。
「あー、何か気持ちよくなってきた……グー」
「だから、寝るなって言ってんだろー！」
「お休みー……グスー、ズオー」
「いい加減起きないと、さすがに俺もプッチンするぞ？　マユ姉」
「グピー……ズコー……」

「ああ、そうか、よーく分かったよ」
そうまでして起きないっていうなら、俺ももう、容赦しないからな？　よし、やってやるぜ！
「――エル、エルアリス、水の精よ、我に力を与えたまえ……」
よし、詠唱完了。
「そら！」
ボスッ。俺が何を出したかって言うと――。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……ゴボゴボゴボ！　ん、んんぅ～～～～！」
「お、苦しみだしたぞついに」
「んぐ、んぐぐ～～！　ゴボゴボ、ん、んん～」
「出して欲しかったら、ちゃんと起きるんだ。約束する？」
「んん、んん。ゴボゴボ」
よし、なら出してやろう。俺は詠唱によって出現させた水のボールを消してやった。
「ゲホゲホ、ちょっと、何してるのよふーちゃん！」
「何してるだ？　どの口がそれを言ってんだよ」
「んぎー、ひっふぁらないでよー」
「元はと言えば、マユ姉が起きねーからこうなったんだろうが。全部マユ姉の性なんだぞ。それを分かって言ってんのか？　ええ？」
「もちろん、分かった上で言ってるのよ」
「この、チビ介がー」
「んぎー！　口が、口が裂けるー、口裂け女になっちゃう～～！」
「なっちまえ、口裂け女になっちまえ！」
「んぎゅあーー！　誰か助けてー！」
「謝れ、許してほしかったら謝れ。俺に謝れー」
「わ、わ、分かりましたー。だから、手をはにゃして～～」

俺はマユ姉を解放してやった。
「うう……絶対口が大きくなってるよー」
「物がたくさん入れられるようになってよかったじゃねぇか」
「誰がやったことだと――」
「あん？　何だって？」
「はい、全てワタシのせいです」
「分かればよろしい」
「うう、まだ眠いよー髪が濡れてるよ～」
「ぎりぎりまでいつも寝かせてやってんだ、少しは我慢しろって」
「だって、睡魔には人間勝てないんだよ？　敗北は約束されてるんだよ？」
「気持ちは分かるけど、そこで負けてたら遅刻確定じゃないか。それに、マユ姉の仕事は何だ？」
「ん、教師」
「だろ？　生徒の模範になるべき存在が、遅刻したなんて笑い者になるじゃねぇか」
「こうなっちゃだめよ？　ってことを教えられるんじゃない」
「反面教師かよ、却下。俺の評判がさらに下がっちまう」
「えー？　何よ、それ。ワタシのせいでふーちゃんの評価が下がってるみたいじゃーん」
「正にそのとおりなんだよ」
「ガーン」
「分かったらさっさと着替えて、仕度してくれ。朝ご飯できてるからよ」
「はーい」
全く、昔から変わらず寝ぼすけで困ったもんだ。
大久保繭子（おおくぼまゆこ）、俺の義理の姉で、俺が通う学園の教師でもある。あんなんで教師が務まるって考えると、世も末だなって思えてしまう。
悪い人じゃないんだが、さっきも言ったとおり、家では何の役にも立たない&いつも駄々をこねるから時々悩まされるんだ。まあいて

くれるだけで、心の支えにはなってくれてるんだけどな。
「――さてと」
テーブルに並べるか。
「はい、お姉ちゃん登場～～」
「……んー」
「どうかした？　ふーちゃん」
「いや、別に」
この容姿に教師のスーツを着せて「教師です」って言っても、信じてくれる人は一割もいないだろうな。俺自身、本当に教師であることがまだ半信半疑だ。何故か？　それは後々分かってくるはずだ。
「何か気に食わないような顔してるね？　ふーちゃん」
「そんなことはないよ、気にしない気にしない」
「ホントに？」
「ああ、んなことより朝飯食おうぜ？　時間がなくなっちまうよ」
「わーい、ご飯だご飯だ」
マユ姉は嬉しそうに朝飯に食らいついた。
「あむ、あむ、もぐもぐ……」
朝からよく食うな、マユ姉は。作ったほうもこれくらい食ってもらえると嬉しいけど。
「ふーちゃん、おかわり」
「はいはい」
空になった茶碗に新しくご飯を装う。
「はいよ」
「ありがと」
そう一言いって茶碗にかぶりつく。
「んー、ふーちゃんのご飯はおいしいねー」
「ありがとよ」
「ワタシじゃ出せないよーこの味は」
「出せないっつうか、料理しようとしねぇじゃねぇか、マユ姉は」
「ん？　そんなことないよー」

「見事に棒読みだな」
「そんなことないよー」
「棒読みじゃねぇかよ」
「いいじゃん、そんなことは」
「マユ姉が言い出したんじゃねぇか」
「とにかく、おいしいよ、朝ご飯」
「まあ、ありがとよ」
お礼の言葉は素直にもらっておこう。
……。
「ごちそうさまでしたー」
「すぐ行くから準備してろよ」
「はーい、じゃあワタシは――」
「間違っても二度寝したりすんなよ？」
「わ、分かってるよ……」
あれはするつもりだったな、油断も隙もあったもんじゃないぜ。
「いいかマユ姉。準備し終わったら外で待ってろ、いいな？」
「はーい、分かりましたー」
子供っぽい声で返事して、マユ姉はピョコピョコと玄関に走っていった。
さて、俺は、洗い物だな。
……。
「よし、行くか」
カバンを持って俺は外に出る。
「あ、吹雪くん、おはよう」
そこには親しい幼馴染の姿があった。
「おう、舞羽」
「今日は少し遅かったね」
「ああ、そこのチビ介が寝坊したからな」
「何よー？　チビ介ってー、好きでこうなったんじゃないもん」
「問題はそっちじゃねぇんだよ」

「だって仕方ないよー、睡魔は――」
「それはさっき聞いたからいい。二番煎じだ」
「むー、ふーちゃん冷たい」
「マユ姉のために言ってんだよ、俺は」
「これでも教師だよ？　ワタシ」
「教師が生徒に教えてもらってちゃ世話ないだろうが」
「グサー」
自分で効果音を付けてるし……。
「舞ちゃーん、ふーちゃんがいじめるー」
「いじめてはないと思いますよ？　繭さん」
「舞羽に助けを求めんな。１０：０でマユ姉が悪いじゃないか」
「そ、そんなことないもん」
「じゃあ、俺の何処に否があるっていうんだ？」
「……義理の弟」
「何も関係ないじゃねぇかよ！」
ビシッ。
「あう、イターイ」
「ごめんな、舞羽」
「ううん、全然」
須藤舞羽（すどうまいは）、俺の子供の頃からの幼馴染だ。舞羽とはもう、十年以上の付き合いになる。何処に行くにも何処で遊ぶにも、いっつも一緒だった。ぶっちゃけ、俺の中では家族みたいなものだ。気の置けない、とてもできた子だと思う。
「ほら、いつまでも頭抑えてないで、行くぞ」
「ふーちゃんがやったんじゃないのー」
「うふふ」

アンダンテ（後書き）

これから、頑張って書いていくのでよろしくお願いします。
よろしければ評価のほうお願いします＾＾

アンダンテ（2）

「うー、寒いー」
「冬だからな」
「そんな簡潔な答えを聞きたかったわけじゃないよー」
「じゃあ何だ？」
「……」
「何もないんじゃないかよ！」
ビシッ。
「ふーちゃん、叩きすぎ」
「叩いてはない、チョップだ」
「もっと優しくしてよ～」
「じゃあ、魔法で攻撃してやろうか？」
「う、それは、結構です……」
他愛もない話をしながら学園へと向かう。
聖ハルモニア学園。そこが、俺たちが通っている学園だ。歴史と伝統が深く、俺たちが生まれるずっと前からこの学園は存在し、生徒を世に送り出してきたらしい。この島唯一の名所と言っても過言じゃないな。魔法学園に分類されるだけあって、魔法に長けた生徒が数多く在籍していることでも知られている。俺がここに通えるのも、そういうわけだったりする。俺の親は、先祖代々魔法使いの血筋らしく、俺の親も、魔法の扱いには長けていた。自分で言うのも何だが、どうやら俺も、他の人たちから見ると、魔法の力は上位に入るらしい。よく分からないがな。まあ何にしても、この学園はなかなかの有名校なわけだから、留年しないように努力しないといけないってことだ。
「あ、そうだ吹雪くん」
「ん？　何だ？」
「今日出てた宿題、全部解けた？」

「ん？　ああ、一応な、当たってるかは自信ないけど」
「よかった、後でちょっと見せてもらえないかな？」
「何だ？　解けなかったのか？」
「う、うん。ちょっと難しくて、あきらめちゃった」
舌を出しておどけて見せた。
「まあ、確かに難しかったからな。分かった、その代わり、ジュース１本な」
「はーい」
「うー……」
「何だ？　胃潰瘍の人のモノマネか？」
「違うよ！　ちょっとちょっと舞ちゃん、何かがおかしくない？」
「え？」
「え？　じゃないよ、何かおかしくない？」
「……何か私おかしなこと言いました？」
「言ってるよ、腕白と卵白を間違えるくらいおかしいこと言ってる」
「その例えは一体なんだよ」
「確かにふーちゃんは頭いいよ？　ワタシが誇れる自慢の弟だよ。でも、だけど、ＢＵＴ
ワタシの職業は何？」
「あ、先生だ」
「そうだよ。分かんないところがあるんなら、先生であるワタシに相談してよ～。ふーちゃんに相談する前にワタシに相談してよ～」
「あう……ごめんなさい」
謝る必要はないと思うんだがな……。
「ワタシ、そんなに頼りないように見える？」
「え？　そ、それは……。……」
「即答してくれないの～！？」
「あ、できます、頼りにしてます」
舞羽、無理をしたな……。
「じゃあ相談して？　繭子に相談して？」

「相談をせがんだら相談じゃねぇだろうが」
「さあ、どーんと来て？　舞ちゃん」
「あ、はい。えーっと、魔法使い、ルイスが詠唱した魔法の中で一番高度な魔法と言われるものを挙げなさい。っていうのなんですけど」
「ふむふむ、なるほど……」
「……分かりますか？」
「……」
「……」
「……ふーちゃん、後はよろしく」
「しっかりしろよ、教師！」
「繭子難しいの分かんな～い」
「難しいこと教えんのが教師の仕事だろうが馬鹿チン」
ビシッ。
「うう～、ふーちゃん、ワタシのことぶってばっかり～」
「しつけだ」
「ぶーぶー」
完全に子供だな。
「本当に分からないんですか？　繭さん」
「うーん、……自信がないんだよね、当たってるかどうか」
「そうですか、分かりました」
「面目ありません～」
「いえ、相談に乗ってくれただけで嬉しいです」
実際は無理やりマユ姉に乗せられたんだけどな……。
「じゃあ……吹雪くん、後でいいかな？」
「ああ、了解だ」
できる限り尽力はしよう。
「頑張ってね、二人とも」
「マユ姉は学園着いたら教科書読み直せ」
「うう……分かりました……」

「到着～」
「ねえ、いいじゃないですか？　ね？　少しだけ、少しだけ俺に付き合ってくださいよー？」
「いやよ、あなたみたいな不埒な男なんて」
「オレの何処が不埒ですか？　何処をどう見てそんな発言をするんですか？」
「全てよ、全て！　あっち行きなさいよ、着いてこないで」
「そんな言い方しなくたっていいじゃないですかー？　オレ、こう見えてエスコートは得意ですよ？」
「……いい加減にしないと、炎の槍をお見舞いするわよ？」
「それは、オレに対する愛情と受け取ってもいいんですか？」
「……炎の精霊よ、我の身を脅かす輩を焼き払いたまえ」
「あれ？　ちょっと、お嬢さん？　それ、マジで――！？」
「灰になりなさーい！」
「ぎょえええーーー！？」
「あーあー」
またやってるよ、アイツ……。
「おお、何て熱さだ、まるで火だるまになってるみたいだぜ」
正しく火だるまになってるんだけどな。
「でも、これだけオレのことを思ってくれてるなんて、何てオレは幸せなんだ」
一体どう解釈すればそんな結論に至るんだろう。
「う、でもちょっと熱すぎるよな……アツアツアツ！？　あつい～～」
「ふ、吹雪くん。あのままだと――」
「ああ、焦げちまうな」
世話の焼ける奴だ。
「水の精よ、もう一度我に力を与えたまえ――そらっ！」
今日二回目となる水のボールを、ナンパ野郎に落としてやる。

「ふー、一瞬でクール……お？　吹雪じゃねぇか。お前が冷やしてくれたのか？」
「ああ、まあな」
「ありがとよ、さすがは吹雪なだけあるぜ」
「名前は関係ないだろう。というより、また朝っぱらからんなことやってんのか？　翔」
「当然だ、オレが誰だか分かってんのか？」
「翔だろ」
「ああ、翔だ。翔＝恋、この法則をお前は知らないのか？」
「初めて聞いたぞ。な？」
「うん、そうだね」
「おお、須藤も一緒じゃないか？　これはグッドモーニング」
「う、うん、おはよう」
「朝から須藤に会えるとは、今日はなかなか付いてるじゃないか、オレ」
「いや、ここで会わなくても教室で会うだろ」
「分かってないな、吹雪。美少女とは数分でも他の男より早く会うと幸運を分けてくれるんだぜ」
「いやいや、ねーよ、んなもん」
「あるよ、オレがあるって言ったらあるんだ。そう決まったんだ」
「何じゃそりゃ、単なるお前の思い込みじゃないか」
「まあ、そうとも言うかもな」
「あ、あはは……」
相変わらずだな、コイツは。
島貫翔（しまぬきかける）。クラスメイトで、キレイな女性に目がないトラブルメーカーだ。悪い奴じゃないんだが、暇さえあればナンパしたりしていい女を手に入れようとしてる。その行動が女性を寄せ付けなくしてるって事実には、どうやら気付いてないらしい。
「しかし、どうすっかな～。こりゃ制服が使い物にならねぇな」
「自業自得だろ、それは」

「オレがいい男なばっかりに、こんなことになるとは……ああ、かっこいいって罪だな」
「アホ」
「吹雪ちゃん冷たい！」
「一般的な返答をしたつもりだが」
「ひょっとして、須藤もそう思ってる、の？」
「え？　……あ、あはは」
「ぐおお……肺に、肺に穴が……」
舞羽は引きつった笑いを浮かべていた。
「とにかくだ、あんまり目立つようなことはしないほうがいいんじゃないか？　また捕まっちまうぞ」
「ええ？　できねぇよ、そんなこと～。これ、オレの生きがいみたいなもんだぜ～？　それを取り上げる＝オレに死ねって言ってるみたいなもんだぜ」
「そんなんで人間は死にゃあしねぇよ」
「物の例えだよ、オレの有り余るリビドーが、オレにそうしろって訴えかけてくるんだ。だから、簡単にはやめられねぇよ」
「……教師として、この発言はどう受け止めますか？　繭子先生？」
「え？　先生？」
「うう～～～～」
「あ、マユちゃんいたんだ」
「か～け～る～く～ん」
「ひょっとしてオレ、ヤバイこと言った？」
「……かもな」
仮にもマユ姉は教師だからな。風紀の乱れは見逃すことはできないだろう。
「よくも、よくもよくも～」
「えっと、その……あ、あはは」
「よくもワタシを無視して話を進めたわね～～～～！」
「って、そっちかよ！？」

問題はそこじゃないだろうが！
「ずっとワタシ、ここに居たのに、ワタシのことには一切触れずにふーちゃんと舞ちゃんと楽しそうに話して～。ワタシを仲間はずれにするなんてあんまりだよ～」
「す、すいません。つい同級生のほうに目が入っちゃって」
「もう、注意してよね？　ワタシだって、会話したいもん」
「はい。じゃあトーキングしましょう」
「うん、しよしよ」
「……待てい、馬鹿もん」
「ぐええ、ぐ、ぐるじい……」
「おお、吹雪の得意技が出た……」
「マユ姉、あんたの仕事はなんだ？」
「き、教師です」
「なら、こんなところで翔とトーキングしてる場合じゃないよな？」
「う、はい、おっしゃるとおりです」
「言うべきことがあるだろ？　分かるよな？」
「はい、はい！　言います、ちゃんと言います」
「吹雪くん、すごい……」
マユ姉は翔に向き直った。
「か、翔くん。あんまり、そういうことはしちゃいけません。いいね？」
「……ここは時の流れに身を任せてこの場をやり過ごすのがよさそうだな、はい、注意します」
「聞こえてるぞ？　オイ」
「じゃあオレ、先に行ってるな？　じゃあ、トゥービーコンティニュー」
その台詞は一体なんだ！？
「行っちゃったね」
「相変わらず、忙しい奴だ……」
「ううん、苦しかったよ～」

「もう少し教師としての自覚を持てよ、マユ姉」
「厳しいな、ふーちゃんは」
「教師を甘く見んなってことだよ」
「はーい、努力します～」
「――あ、五分前だ。吹雪くん」
「ああ、行かないとな」
「あ、ワタシは歩いて――」
「あんたも急ぐんだよチビ介！」
「やー、首根っこ掴まないでよ～」
俺はマユ姉を引き摺って校門をくぐった。
……。
……。
――で、そんなこんなで朝のホームルームなわけだが。
「はいはーい、みんなおはよ～～」
こんなんで、本当に担任が務まるのが不思議でしょうがない今日この頃だ。初めてこの光景を見た人はきっと「え？　このクラスって生徒が生徒を教えるの？」って思う人が大半を占めるだろう。俺が初見でも、きっとそういう自信がある。俺から言わせれば、あのマユ姉が教師をしてるってことが一番の不思議なんだけどな。
「みんな元気ですか～？　先生はとっても元気でーす。どれくらいかって言うと、グランドを3周半できるくらい元気でーす」
何だその中途半端な周数は、しかも3周半など体調が優れない人でも頑張れば走れるわ。
「じゃあ、早速出席取りますね～。安孫子くん」
「はーい」
「……以下略でーす」
「馬鹿ったれ！」
持っていたペンをおでこ目掛けて投げた。
「にゃあああうっ！？」

「おお、すげー」
「さすがは大久保だぜ……」
「楽をしようとするな楽を。生徒の確認は教師の基本だ、それくらいしっかりやれ」
「ぶー、はーい。じゃあ続けまーす。池上さん――」
「どっちが先生だか分かんないな」
近くの生徒がそんなことをつぶやいている。俺も正直そう思っていた。
「じゃあ、連絡がありますから、よーく聞いてください。いいですか？　もう一度いいますよ？　よーく聞いてください。いいですかー？」
そこは繰り返さんでもいいだろうが……。
「明日から暦は十二月に変わりますけど、それに伴って、いよいよ代表４人のピアニストとハーモニクサーが発表されます。誰が選ばれるかは、先生も分かりません。生徒かもしれないし、教師の中かもしれない。ひょっとしたら、選ばれないかもしれない」
ねぇよ！
「とにかく、年を無事に越すためのだいーじな式典なので、代表に選ばれたかたは、強い意志と志を持って望んでください。いいですね？」
――四季を司るピアノがこの島には存在する。『桜花のピアノ』、『海風のピアノ』、『月影のピアノ』、『風花のピアノ』。この四つのピアノを奏でることで、島の四季は保たれ、平和に過ごすことができるんだ。この時期には毎年、そのピアノを奏でるためのピアニストを４人と、ハーモニクサーと呼ばれる、ピアニストの力を最大限引き出す者を一人選出するのだ。ピアノを奏でるために必要なものは、才能と魔法、そして、平和を願う強い心。これらを兼ね備えたものが、ピアノを奏でることが可能なんだ。ハーモニクサーにおいても同じようなことが言える。ピアニストを信頼し、平和を願う心を兼ね備えた者がこの役職に選ばれる。蓋を開けて見るまでは

誰が選ばれるかは分からない。しかし、選ばれた者は確固たる意志を持ってやり遂げなければならない。選ばれたということは、それだけ名誉なことでもあるからだ。これは、ハルモニア学園の歴史と伝統だ。

「日にちは今から一週間後です。絶対に忘れずに来てくださいね」

一週間後か。

「後もう一つあります。少々疲れましたが、頑張って伝えたいと思います」

いや、疲れんの早すぎだろ……。

「近日中にはもう二つ大きな行事があります。何か分かるかな～？　シンキングタイムは３０秒です」

別にいらないだろ、考える時間なんて。

「はい、時間でーす。じゃあその二つの行事とは何でしょうー？　じゃあ、舞ちゃん」

「あ、はい」

「行事を言ってください」

「えっと……マジックコロシアムです」

「そう、大正解～。座布団１枚～」

大喜利じゃないだろうがよ……。

「今週の土曜日に、マジックコロシアムが開催されます。みんなもう知ってると思うけど、マジックコロシアムだから、魔法以外は使っちゃだめだからね？　参加を考えてる人はそこを十分注意してね～？　ちなみに、優勝するとステキな賞品が送られるから、魔法に自信がある人は是非是非参加してねー？　嫌いなあいつをぶっ飛ばしてやるーとか、ここで活躍すれば女の子はイチコロにぐへへ――とか、そういう邪な考えでもオーケーらしいでーす」

嫌いな奴をっていうのは分かるが、その後のは明らかにおかしいと思うが。そんなフレーズに惹かれる奴なんて――。

「女がイチコロ、ふふふ、オレの時代が来たか？」

いやがったぜ、極身近に……。

「ケガには十分注意してくださーい。ではもう一つは何でしょうか？　時間がないので先生が言っちゃいまーす」
最初からそうしてろよな。
「明日は、みんなの頑張ったテストの結果が発表されまーす。パンパカパーン」
クラスメイトはそれぞれ色々な反応を示している。
「うわー、来ちゃったよー」
隣で舞羽も苦笑いを浮かべている。
「自分が今どんな状況にいるか、しっかり確認するよーに。ちなみに、現段階で成績が悪い人は留置される可能性もあるから、十分注意してね。先生からの一言メモでーす」
さらっとすごいことを言いやがったぞ、あのチビ介は。
「ってことで、先生の連絡は以上です。何か連絡ある人はいる？」
――いないんなら終わりにしよう。やった～」
この短い時間で飽きたんだろうかあの人は……こんなんで授業が出来るのか？　ひどく不安に思えてしまった。

アンダンテ（3）

――というわけでだ、オレはマジックコロシアムに出るぜ」
「ふーん」
「おいおい、反応薄すぎじゃないかい！？　吹雪よ」
「というより、もっと分かりやすく話を始めてくれ。はい、もう一回」
「オレは、マジックコロシアムに出る」
「おい、同じじゃねぇかよ」
「これで分かりやすいじゃないか、オレが言ったとおりだよ」
「分かりずらいことこの上ないぞ？　どうして、何故、ＷＨＹ？」
「おお、見事な三連コンボだぜ」
「食いついてないで質問に答えな」
「オレとお前の仲じゃないか～？　言わなくても薄々分かってんだろ？」
「……かわい子ちゃんゲットを狙ってか？」
「そのとおり、グットアンサー！」
普通は否定するのが筋なんだが、こいつには何を言っても無駄か。
「マジックコロシアムって言えば、この島じゃ指折りの注目イベントだろ？　そこでオレが華麗にエレガントにそしてかっこよくステージで舞えば、オレの評価はぐっと上昇。女の子もメロメロになるに違いない。どうだ？　いい考えだろ？　否の打ち所ないだろ？」
「残念だが、とってもたくさん非の打ち所があるぞ？　まず、華麗とエレガントは似たような言葉だから、同じことを二回言っているようなものだ。繰り返す必要はない。お前を見てくれる女の子も確かにいないとは限らないが、お前の他にも男の出場者はたくさんいるはずだ。お前だけを観客が見てる可能性は０だ。勝手に良いように解釈はしないほうがいい。後、これが最大の否の打ち所だ」
「あ、ああ……」

「お前、魔法ほとんど使えねぇだろうが！」
「はっ！？」
「マジックコロシアムは、名前のとおり、魔法で戦うイベントなんだ。肉弾戦は基本的に禁止だ。さっきマユ姉も言ってただろう？」
「んーそうだったぜ。どうすっかな～。あ、その唐揚げ一つもらい」
「おい、俺のメインディッシュに何をする？」
「いいだろ～？　一個くらい。んー、なかなか美味いな、これは」
「ったく、後二つしかないってのに……でだ。そんなわけだから、お前はコロシアムには出ないほうがいいと思うぞ？」
「でもよー、折角の行事だぜ？　楽しまなきゃ損じゃないか？　観戦するよりかは、対戦したほうが楽しいだろ？」
「確かにそうかもしれないが、お前は魔法をほとんど使えない。そんな奴が出場しても、勝てる可能性なんてぶっちゃけ０に等しいだろ」
「何かないかよ？　詠唱しなくても成功する魔法とか」
「ねぇよ、そんなもの」
「じゃあ、手軽に使えて威力絶大なものとかは？」
「あったらとっくにみんな使ってんだろ？」
「んー、くそー、何か打開策はないのかー？」
「俺が知るわけないだろ？　あ、舞羽、それと俺のシューマイ交換しようぜ」
「あ、うん、いいよ。はい」
「サンキュー」
「おい～、楽しそうに昼食食ってないで、何かいい方法考えてくれよー」
「んなこと言われてもよー、なあ？　舞羽」
「うん、私たちは出ないから。マジックコロシアムに」
「友達が、親友が困ってるのにお前らは手を貸さないというのか？　その行為はあれだぞ？　下が谷底になってる不安定なつり橋を渡ってる最中に不運にも橋が壊れて、かろうじてぶら下がって下に落

ちないように必死にこらえてる友人を、『ふ、お前とはここまでだ』って言ってその場を去ろうとする行為と同じだぞ」
「長いんだよ台詞が！　もっとコンパクトにまとめろ、コンパクトに」
「助けてー」
「だが断る！」
「そこを何とか吹雪ちゃん」
「じゃあ、一つだけアドバイスしてやる」
「え？　何なに？」
「出るのやめな」
「解決してねぇじゃーん」
「だー、飯くらいゆっくり食わせてくれよ」
さっきから箸を進めることができねぇんだよ。
「なあ、何かないのか？　オレでも簡単に使える魔法って」
「教科書を読めばいいんじゃない？　1年生で習うのだったら翔くんでもできるんじゃない？」
「1年生で習ったのって何だっけ？」
「忘れちゃったの！？」
「えーっと……えへ♪」
「マジでやめれ、お前」
「あきらめたらそこで試合終了だよ！」
「お前は論外なんだよ！　あきらめなかったらどうにかなるレベルじゃない」
「そ、そんなにバッサリと……ひどいよ吹雪ちゃん」
「現実をありのままに伝えて何が悪いというんだ」
「もうちょっとオブラートに包んでくれてもいいじゃない、な？」
「お前は、ダメな子」
「ぐああ……穴が、肺に穴が開くぅ～～」
「――何話してるんだい？　吹雪」
「おう、祐喜」

紳士的な笑顔を浮かべて、かっこいい青年がこちらにやってきた。
コイツは芳田祐喜（よしだゆうき）。俺の友達で、同級生だ。翔とは違って真面目で話が分かるいい奴だ。実は生徒会に入ってたりもする。だから風紀にもしっかりしている。
「何か楽しそうにしゃべってたみたいだけど。何の話をしてたんだい？」
「コイツに自分の現状を突きつけてやってたんだ」
「オレ、すっげぇ傷つけられた」
「そうなんだ。で？　翔がどうかしたの？」
「慰めてくれないの？　祐喜よ」
「事の経緯を知らないとね。何かあったのかい？」
俺は今の話を祐喜に説明してやった。
「――ってわけなんだ」
「うん、なるほど。翔」
「ああ？」
「出るの、やめなよ」
「お前まで同じことを～～！？」
「だって、はっきり言っちゃえば自業自得だろう？　授業を話半分に聞いてた翔に否があるよ」
「祐喜のおっしゃるとおりだぞ、翔」
「そんなこと言われたって……睡魔っていうモンスターがオレに容赦なく襲いかかってくるんだぜ？　あれはどんなに足掻いても倒せないじゃねぇか」
マユ姉と同じようなことを言いやがる。
「確かにそうかもしれないけど、そこで踏ん張らなきゃ。だから、翔はテストの点数が上がらないんだよ」
「グッサー……痛恨の一撃がオレの左胸を抉った……」
「事実だからさ、真摯に受け止めなきゃ」
「真摯って何？」
「そこからかよ！」

「あはは……」
横で舞羽は苦笑いを浮かべていた。
「明日って言ってたよね？　テストの結果が分かるのって？」
「ああ、そう言ってたな」
「吹雪はどうなんだい？　いい成績が残せそうなの？」
「んー、まあ、いつもどおりかな？　キープできていればいいって感じだ」
「舞羽ちゃんは？」
「私は……前より上がってると嬉しいかな？」
「勉強したもんな、３人で」
「３人……あー、繭子先生か」
「役立たずだったけどな」
「あ、あはは、疲れてたんだよ、きっと」
「舞羽、かばわなくていい。あれは誰がどう見ても役立たずだった」
「う、うん……」
「そんなにひどかったのかい？　繭子先生」
「ああ、ひどいなんてもんじゃない。あれは、完全に俺たちの邪魔をしてた」
「そうなの？」
「祐喜は考えられるか？　勉強してるっていうのに、横でハマってるアニメの話をするなんて」
「ん、ん……」
「集中して勉強やろうとしているのに、ゲーム一緒にやろうよと誘ってきたり」
「……うん、それはちょっとね」
「だろ？　テストがない時ならまだしも、テスト期間中にそれってどうなのよ？　普通教師なら、勉強を促すのが当たり前だろ」
「そうだね」
「だから、あの時ばかりは説教したね。邪魔しないでくれと」
「吹雪くん、すっごいチョップしてたもんね」

「チビ介のしつけにはあれが一番効果的だからな。それに、あれをしなかったら自室に退却してくれなかっただろうよ」
「そうかもしれないね」
「大変だったんだね、二人とも」
「ああ、祐喜はどうなんだ？」
「僕？　僕も……そうだね、前と同じくらいだと嬉しいかな」
「そうか、お前ならきっと大丈夫だろ」
「あはは、そうかな？」
「祐喜くんは頭がいいから。私も大丈夫だと思うよ」
「ありがとう舞羽ちゃん。うん、頑張るよ、何を頑張ればいいのか分からないけど」
「終わっちまってるもんな」
「だね」
顔を合わせて笑いあった。
「――で？　お前はどうなんだ？　翔よ」
「今回は、最下位じゃない予感がするぜ。オレは」
「その台詞、一年の時からずーっと聞いてるが？」
「今回は大丈夫だ、自信があるぜ」
「それも、前から聞いてるよね……」
「今回のオレは一味違う、何故ならだ――全ての空欄を埋めたからな」
おお、それは確かに、今までとは違うな。
「何も書かなければ正解はもらえない。だったら何かしら書いて正解の可能性を少しでも上げればってことに気付いたんだ」
「お前にしては、まともな考えだな」
「オレはいつだってまともだぜ」
「それはない」
「即答！？」
「声がでかいって。でもそうか、全部埋めたんであれば、守り続けてきた最下位を返上できるかもな」

「だろ？　だろ？　頑張っただろ？　オレ」
「喜ぶのはまだ早いだろ？　明日にならないと分からない」
「いい結果になるといいね、翔くん」
「須藤は優しいな～。ミス・ハルモニアに選ばれても全くおかしくないぜ」
「え？　そ、そんなことないよ」
舞羽は少し赤くなりながら手を横に振った。
「あるある、大アリクイだぜ」
「……」
「突っ込まないの？　吹雪ちゃん」
「ん？　ああ、そのほうがお前のためになると思って」
「いらねぇよ、そんな気遣い！　吹雪の鋭いツッコミが入らないと、ボケが成仏できないだろう」
「ボケる必要性なんてないんだよ、それよりも、話を続けろ」
「ああ、そうだ。お世辞じゃなく、須藤は美人だぜ。オレが保障する」
「そ、そんなことないってば」
「いや、ある。このオレが言ってるんだぜ？　女の子は星の数ほど見てアタックしてきてるんだぜ？」
「でも、星の数ほど失敗してるよね」
「ぎゅあああ！？　それは、言ってくれるな……」
胸を押さえて苦しそうにもがいてみせる。
「とにかくだ、須藤が初対面で街を歩いてたら、間違いなくオレは声をかける自信がある。そう、翔だけに！」
「……」
「……」
「……」
「だから、何か突っ込んでくれよ」
「いやお前、今のはないわ」
「うん、食堂中が凍りついたよね」

「あ、あはは……」
「どうしてくれるんだ？　この空気」
「え、あの、その……さーせんした！」
翔は立ち上がり、深々と頭を下げた。
「これでいいですか？」
「もう、寒いギャグは言うな。オーケー？」
「オーケーオーケー」
本当に分かってるんだろうな、コイツ。
「とにかく、声をかけたくなるほど、須藤はかわいいってこと」
「ふ、普通だよ、私は」
「普通なものか、美女だよ美女。――というわけで、今度デート行きませんか？」
「唐突だな、おい」
「オレの生きがいだぜ？　どうでしょうか？　須藤さん」
「えっと……ごめん、遠慮しとくよ」
「何故？　何故に？」
「え、えっと……」
「理由ないのに断ったの！？」
「う、うん……」
「がはああっ！？　痛恨の一撃……」
「まあ、普通はそうなるよね」
「ああ、当然だ」
そんなんで女の子が着いてくるわけはない。
「ふ、だがオレはあきらめないぜ？　今からでも、この食堂にいる女子を――」
「はい、アウト」
「あおおっ！？」
祐喜は翔の前にイエローカードを差し出した。
「一応僕は風紀委員だからね。公共の場でナンパはダメだよ、翔」
「い、いいじゃねぇかよ少しくらい。減るもんじゃないだろ～？」

「翔はそうかもしれないけど、翔に声をかけられた女の子がかわいそうでしょ？」
「ぐあああああっ！？」
なかなかにストレートなものいいだな、祐喜よ。
「だから禁止、次やったら、ペナルティーだよ」
「ううー、仕方ねぇな」
当然のことなんだがな。コイツに言っても無駄か……。
騒がしい昼食タイムだった。

アンダンテ（4）

――さてと、授業も終わったし行くとしよう。
「舞羽、行こうぜ」
「あ、うん、ちょっと待って。えーっと……」
「何だ？　探し物か？」
「うん、ちょっとね。えーっと……あ、あった」
「何だそれ？　ペンダントか？」
「うん、お守りなの。これを持ってると、何だか落ち着くんだ」
「お守りか。俺は専らマユ姉のお守りしかしてないな」
「あはは、仲が良くていいじゃない」
「ええ～？　普通は逆なんじゃねぇの？　にしたってダメダメすぎるけどよ。はあ、俺に何かあったら、マユ姉のこと頼むな？　舞羽」
「え？　う、うん。何かあるの？　近々」
「……ぐわあああああっ！？」
「ひゃっ！？　どどど、どうしたの？　吹雪くん！」
「く、苦しい……俺は、もう、ダメだ……がくっ」
「ちょ、ふ、吹雪くん！」
「――てなことがあったらの話さ」
「あ、う……もー、吹雪くんのバカ、バカ～」
「はっはっは、俺は殺されても死なねぇよ」
「そういうのはやめてよー、縁起が悪い」
「いや、ついな。舞羽はからかいたくなるんだよ」
「もう……イジワル……」
「さ、そろそろ行こうぜ」
「うん」
……。
「おいっす」
「こんにちは～」

「あ、来たわね」
座って待っていた女子が一人、こちらに向かって歩み寄ってくる。
「遅いわよー二人とも。何処で油売ってたの？」
「ちょっと探し物してて」
「何探し物って？　恋？　愛？　優しい心？」
「何でそんな目に見えないものばかりだよ」
「うん、今日も鋭いツッコミね、大久保くん」
「相変わらず元気だね、愛海は」
「当たり前じゃない毎日全力で生きなかったらもったいないじゃない？　今日と言う日はもう今日しかないんだから。そこんとこ分かってる？　二人とも」
「まあな」
「うん」
「ならもっと楽しそうな顔して、笑って、泣き笑って」
「な、泣く必要はないでしょう」
「そう？　何か感動シーンっぽくなるでしょ？　泣き笑ったら」
「今はそんなシーン必要ないでしょ？」
「サービスショットじゃない？　ユーザーに対しての」
「な、何の話？」
「ま、とにかく。二人とも、笑って過ごしたほうがいいよ。アンダースタン？」
「ああ、努力する」
「分かった」
「よろしい」
――日野愛海（ひのなるみ）。舞羽の友達で、同じ部活の仲間だ。いつも元気なのがトレードマーク、少し翔と相通ずるものがある。こんなんだから、部の雰囲気はいつも明るくなるんだ。
「そろそろ入れてくれないか？　中に」
「合言葉」
「何だよそれ！？」

「部に入りたいなら、合言葉を言いなさい」
「き、聞いてないよーそんなの」
「うん、だって今思いついたから」
「思いつきかよ」
「いいからー、合言葉。行くわよ？　――山」
「えっと……川？」
「ブッブー、舞羽ハズレ～」
「いや、ハズレじゃないだろ。山っていったら普通は川なんじゃねぇのか？」
「大久保くん、私がそんなノーマルな答えを望むと思う？　答えは捻って、捻って編み出すものよ。はい、山？」
「……分からないよ～」
「はい時間切れ～。答えは――上憶良（のうえのおくら）でしたー」
「分かるか、そんなもん！」
「分からないよー！」
「おお、ダブルツッコミ、やるわね二人とも」
「もっと簡単なのにしてくれよ」
「うーん、じゃあ……私の好きな食べ物は何でしょう？」
「あ、それなら私が分かるよ」
「はい、じゃあ答えをどうぞ」
「確か……カステラとチーズケーキだったよね」
「ブッブー」
「え？　何で？」
「確かに大好きよ、その二つは。でも、私が望んだ答えじゃなかったわね」
「え？　何だったの？」
「正解は――男の子です」
「食う意味違うわ、馬鹿チン」
ビシッ。
「おおー、炸裂したわね、吹雪チョップが」

「まだ昼間だ。下ネタは夜まで我慢しろ」
「もう午後じゃないのー。午後になったらこっちのものでしょー？」
「一応公共の場なんだから、大概にしとけよ」
「楽しいのになー、残念」
「というか、本当に入れてくれよ。日野の問題は難しすぎる」
「ウソー？　これでも簡単に作ってるつもりよー？」
「日野の簡単は俺たちにとっての難しいに値するんだよ」
「これが個性って奴なのね。みんな違ってみんないいなのね」
「丸パクリじゃねぇか」
「ｂｙ、日野愛海」
「勝手に著作権を略奪すんな」
ビシッ。
「あーん、容赦ないわねー、大久保くんは」
「もういいだろ？　入れてくれって」
何だかんだ言って、少々人に見られているんだ。
「じゃあ、激甘の問題にしてあげる。これならきっと解けるはずよ」
「本当に解けるの？」
「ええ、ディップさんでも解けるわ」
「誰だよソレは」
「それじゃあ行くわよ？　今私たちはマラソン大会に出ています。大久保くんが5位を、舞羽は4位を走っています。さて問題、大久保くんが舞羽を抜くと、大久保くんの順位は何位になるでしょうか？」
「えっと、私が4位なんだから、吹雪くんはさん――」
「待て、舞羽」
「んむううっ！？」
危なかった、コレは引っ掛け問題だぜ。
「答えは、4位だ」
「ファイナルアンサー？」
「ファイナルアンサー」

「タララーン……正解！」
「よし」
「よく引っかからなかったね、大久保くん」
「まあな、危なかったけど、何とか分かった」
俺が5位で舞羽が4位、これがポイントだ。4位の舞羽を抜くと3位に順位が上がると考えがちだが、4位の人間を5位が抜くということは単純に順位が入れ替わるということ。つまり、4位の人間を抜いたら、自分が4位に変わるということになる。よくできた引っ掛け問題だと思う。
「さすがね、おめでとー。あ、そうだ吹雪くん」
「ん？」
「そろそろ、舞羽の口から手を離してあげたほうがいいかもよ」
「あ、しまった！」
「ん、……むふぅ……」
慌てて離したが、少々舞羽はぐったりしてしまっていた。
「すまん、舞羽」
「うう、一瞬お花畑が見えたよ……」
「悪い、つい……」
「うん、大丈夫。また戻ってこれたから」
「どんな花が咲いてた？」
「えーっと……ラベンダーとかコスモスとか、いっぱい咲いてたよ」
「そーなんだー、へー」
「いや、真面目に答えなくていいって」
まだまだそこに行くのは後の話だ。
「ま、とりあえず、正解したから入っていいわよー」
俺たちはようやく中に入れてもらった。中にはまだ誰もいなかった。
「愛海、一人だったの？」
「うん、空けた瞬間、冬を彷彿とさせるとても肌寒い風が私を包み込み、全身をブルブル震えさせながら待ってたわ」
「いや、ストーブついてんだろこの部屋」

「う……」
部屋は十分暖かかった。
「話を盛ろうとするな」
「……えへ♪」
「かわいく言ってもダメだよ、愛海」
「お茶目よ、お茶目。笑って流してよ」
「もう」
「とりあえず、だ。3人になったし、あれ、やり始めよう」
俺たちは部室の奥の、開発中の品を持ってくる。
――魔法研究部。俺たちが所属する部活だ。その名のとおり、魔法を研究する部活だ。歴史、実践、魔法のアレンジなど、魔法に関することを色んな視点から見て学び、魔法に親しむのがこの部活の目的だ。実は俺が部長、舞羽は副部長だ。あまり人員は多くないが、みんなそれぞれ楽しく活動できているようだから問題はない。翔も一応この部活所属なんだが、魔法が得意ではない故、あまり足しげくここに来ることはない。まあ、来てもしゃべってるだけだから、居ても居なくてもあまり問題はない。
まあ、そんなことよりだ。
「もう少しで完成するね、吹雪くん」
「そうだな、頑張ったからな」
俺たちが作っていたのはマジックプラネタリウムだ。魔法を主な動力源として動かす星を見る装置だ。普通に作ったんじゃおもしろくないってことで、魔法を軸にして作っていたんだ。まずは動力となる魔法ブースターを中に仕込み、周りをピンホールの形に模っていく。外側が出来たら、今度は内側に仕込みを入れていく。ここがかなりの難問だ。投影フィルムを貼り付け星の構造を作っていくわけなんだが、何か一工夫あるものにしたいという意見が満場一致で決まっているんだ。で、決まったはいいのだが、その先はノープランだったというわけだ。
「でも、ここからどうするよ？」

「うーん、そうだね。このままじゃあ、在り来たりだもんね」
「シンプル・イズ・ベスト！　じゃダメなの？」
「悪くはないがな……ってか、最初に一工夫入れようって言ったのは日野だったじゃねぇかよ」
「あり？　そうだったかしら？」
「言ってたよな？」
「うん、私たち魔法研究部の実力を学園に知らしめてやりましょーって確かに言ってた」
「……そう言われると、そうだったかしら？」
「忘れんなよ、言い出しっぺだろ？　何か案はないのか？」
「そうねー……誘惑系の魔法を練り込んでみる？」
「却下だ。学園の生徒をおかしくするつもりか？」
「私の得意分野なのに～」
「だから困るんだよ、そんなもんを使われると」
日野の誘惑系魔法はかなりの威力を誇ってるんだ。この前噂で聞いたんだが、男子学生が陶酔して腰砕けになっていたらしい。何を見せられたのかは知らんが、とりあえず、気持ち良さそうな顔をしていたらしい。
「使わない方向で何かないのか？」
「そうねー……うーん……」
腕組をして悩むこと数分。
「……ぐう」
「寝んなよ、おい！」
何て古典的なギャグを使うんだこいつは。
「はっ！？　何？　どうしたの？」
「……愛海、わざとやってるんじゃない？」
「そんなことないわよ、私はいつだって真面目よ」
「じゃあ、何かいい案は出たのか？」
「……何にもー」
「だと思ったよ」

「あ、アテにしてなかったようなものいいね？　大久保くん」
「ストレートに言ってもいいか？」
「バッチこい」
「現時点で、日野はただの頭打ちだ」
「ホントにストレートー！？」
「真面目にはどう頑張っても見えないし、途中で寝てみるし、考えてるようには俺たちの目には見えないんだ」
「そんなことないわよ、ちゃんと考えてるってばー」
「じゃあ、もう少し俺たちの目にも分かるように真剣に悩んでくれ。アンダースタン？」
「オー、イエー」
「はい、じゃあもう一回。熟考開始」
俺たちはもう一度考えてみる。
……。
「なかなか、出てこないね」
「だなー」
普通とは違うものを作るというのは、やはり骨がいるな。それが研究のおもしろいところでもあるんだが。
「ここはやっぱり、先輩に頼るしかないかな？」
「確かに、先輩の案は聞いてみたいよな」
「愛海、今日先輩は？」
「来るって言ってたわよ？　多分もうそろそろじゃないかしら？」
「なら、考えながら待つとしよう」
……。
そして待つことしばし――。
「私だ、入るわよ」
「はい、どうぞ」
――いつものように威風堂々とした様子で、先輩は部室へと来てくれた。
「こんにちは、みんな」

「こんにちは、カホラ先輩」
「こんにちは」
「うん。今日も頑張ってるみたいね」
「せ、先輩、私は？」
「愛海もいたのね、二人の邪魔はしてなかった？」
「い、いきなり疑いから入るなんて、そりゃないですよ～」
「いつも邪魔をしてる印象があるからついね」
「も、ものいいがストレートだわ……」
「ごめんごめん、で？　本当はどうなの？」
「そりゃもちろん――全力で尽力してましたよ」
嘘つけ、と言ってやりたかったが、途中からは少し大人しくなったからよしとしておこう。
「ならよろしい」
「今日は、授業が長引いたんですか？」
「そうね、もう少しでシーズンだし、今が書き入れ時だからね」
「そんな時にすいません、何度も来てもらっちゃって」
「気にすることはないわ、私も来たくて来てるんだし、それに、そこまで勉強に力を入れることはないから」
「カホラ先輩、さすがです」
「まあね、うふふ」
くすくすと笑っている様子は、親しみやすいことを象徴するようだった。
沢渡・E・カホラ（さわたり・エレディ・カホラ）、俺たちの一つ上の先輩で魔法研究部の前部長だ。性格と人柄の良さを併せ持ち、さらには頭も良い、部が誇る素晴らしい逸材だ。多くの人から尊敬されるのもうなずける。今はもう部活を引退しているんだが、時折こんな風にチョクチョクと部に顔を出しに来てくれる。何故なら、もう次の就職先が決まっているから。
「私もカホラ先輩のような人になりたいです」
「あら、そう？」

「それはもう、カホラ先輩は女子の鏡みたいなものですから」
「それは言い過ぎじゃない？　愛海」
「いえいえ、全然全く。学園のみんなもそう思ってるはずです。ね？　吹雪くん」
「何故男の俺に聞く！？」
女子の鏡だと言ってたじゃないか。普通そこは舞羽だろう。
「吹雪、いいツッコミね」
今日は随分とツッコミを褒められるな。
「で、話を戻すと――私は、カホラ先輩になりたいです」
「あら？　随分話が曲解してない？」
「私も思いました」
「言ったの愛海じゃない」
「んー、まあいいや。とにかく、近いうち手解きをお願いします」
「今度ね、別にいいと思うんだけどね、私を真似なくても」
「カホラ先輩だから真似たいんですよ」
「ありがとね」
さすがだ、笑顔を絶やすことがないから、見ていてすごく穏やかになる。
――と、そうだ。
「あの、先輩、ちょっと相談いいですか？」
「うん？　どうしたの？」
「ひょっとして、恋のなや――ぶにゃっ！？」
余計なことを言われる前に、俺は手刀を振り下ろした。
「実は――これなんですけど」
「あ、すごいじゃない。ここまで出来たのね」
「ありがとうございます、でも、ここからが進まなくて」
「ふーん、ちょっと見せてもらってもいいかしら？」
「はい、どうぞ」
俺は先輩に機械を手渡した。
「ふんふん、なかなかしっかりしてていいんじゃない？　魔法ブー

スターも問題なく完成してるようだし」
「ありがとうございます」
「このフィルムは、舞羽が作ったの？」
「はい、あまり上手くはできなかったんですけど」
「全然問題ないわよ、じゃあ、魔法ブースターは吹雪が作ったのね」
「はい、一度作ったことはあったんで」
「上手ね、売り出すことも可能かもしれないわよ？」
「いや、それはないですよ」
先輩に褒めてもらえるのは、やはり嬉しいな。
「なるほど、それで、何に悩んでるのかしら？」
「えっと、もう一工夫を加えたいって思ってるんですよ。で、さっきから考えてるんですけど、何処に工夫を加えたらいいかが分からなくて」
「つまり、もっと完成度の高いものにしたいってことね？」
「そうですね」
「これでも十分高い気もするけど、二人はまだ物足りないって思ってるのよね」
「カホラ先輩、私はー？」
「愛海は口出ししかしてないんでしょー？」
「え、そ、そんなことはありませんよ？」
「じゃあ、何処を作ったの？　愛海の製作した部分が、私には見えなかったんだけど」
「えっと、私は……応援をしてました」
「翔と一緒に、でしょ？」
「う、はい……」
何でもお見通しなんだな、先輩は。
「でも、一生懸命頑張りましたよ、応援を」
「そうなの？　二人とも」
「……」
「……」

「……はい」
「今の間がちょっと気になるけど、そういうことにしておこっか」
俺たちは顔を見合わせて苦笑いするしかなかった。
「あれ？　そういえば翔は？」
「ああ、今日は来ないって言ってました」
「あ、そうなの」
「はい、野暮用があるとかないとか」
どうせどうでもいいことなんだと思うが。アイツの野暮用なんて、俺たちにとっての下らないものに違いないからな。
「明日聞いてみます」
「多分、いつものだよね」
「多分な」
「そっか、分かったわ。――さて、話を戻しましょう」
「はい」
「うーん、そうね。完成度の高いものにするってなると、もっと大きいものにするのが手っ取り早いんだけど、ここまで来てそれはちょっとあんまりよね？」
「そうですね、ちょっと捻った感じが理想的かもしれないです。な？」
「そうだね」
「なるほど……ちょっと時間もらってもいいかしら？」
「はい、もちろんです」
先輩はしばらく機械を見つめながら、腕を組んで考え始める。
「俺たちももう一度考えよう」
「そうだね」
……。
……。
……。
空の色が変わり始めた頃、先輩はうなずいた。
「よし、これかな」

何やら思いついてくれたようだ。
「舞羽、このプラネタリウムってもう動かすことはできるの？」
「あ、はい。型にはめ込めば、多分動かすことができると思います」
「よし、じゃあはめ込んでみよう。実際に動かしてみましょう」
「あ、はい。分かりました」
俺たちは言われるままにプラネタリウムを組み立てていく。
「魔法ブースターに魔法を送らないとな」
精神を集中させ、詠唱を始める。
「――エル、エルフィアス、……雷(いかずち)よ、我に力を与えたまえ、――ライトニング！」
動力口に向けて魔法を送り込む。それに合わせて、ブースターは少しずつ光始め、エネルギーを蓄えていることを教える。
「……そろそろいいよ、吹雪くん」
「おう」
ふー、詠唱にはやっぱり体力を要すな。これくらいでへばってはいられないんだが。さて、次は部屋をカーテンで閉めなければ。
「投影フィルムを貼って……できました。カホラ先輩」
「うん、愛海、電気オフにして」
「了解でーす」
入り口のスイッチに走っていく。
「いいですか？　先輩」
「ええ、いいわよ」
「じゃあ、行きまーす」
カチッ。部屋の電気が止まると同時に――部屋中が一杯の星空に包まれた。
「うわー、綺麗」
「確かにすごいな。なかなか上出来だったんだな」
「そうだね、頑張った甲斐があったね」
暗くてよく見えないが、舞羽の口調からして、嬉しがっているようだ。

「すごいじゃない二人とも、これでも十分ステキよ」
「本当ですか？」
「ええ、とっても見応えがあるもの」
「ありがとうございます」
「でも、ここから一工夫を入れたいのよね」
「はい、そうですね」
「ちょっと上を見ててね」
言われるままに、俺たちは上に目を戻す。
「――エル、エルス、ファルディアード……星の瞬きを我らに示したまえ……はっ！」
先輩の詠唱と同時に、上では素晴らしいことが起きていた。それは――、
「うわー、すごーい」
「すっげー」
思わず感嘆の声が漏れてしまった。先輩の詠唱と同時に、それはもうすごい数の流れ星が天井を覆い尽くしていたんだ。キラキラ光りながら空を流れる様子はとても煌びやかで心を奪われるものだった。
「ステキ」
「これ、先輩が？」
「そうね、どうかしら？」
「どうも何も、感動です。すっごく綺麗で何ていうか……すいません、言葉がでないです」
「私も……」
「気に入ってもらえたならよかったわ」
「……」
あまりの美しさに、俺たちは時間を忘れて見入っていた。
……。
「すっごい感動しちゃったよ」
「俺もだ」
「私もー」

俺たちは口を揃えてそう言った。
「あれって、魔法で出したんですか？」
「うん、そうよ。吹雪たちが作った投影の内側に、透明の膜を貼って、そこに頭の映像を映し出したのよ。機械に仕掛けをしたわけではないわ」
「そうなんですか」
「すっごい良いもの見せてもらって、感激です」
「何を言ってるの、あなたたちが頑張ったからでしょ？　私は大したことはしてないわ」
「ありがとうございます。これが、先輩の案ですか？」
「そうね、じっくり見させてもらったけど、この機械にはもう治すようなところは見当たらなかったからね。だったら、機械じゃないところにこういった仕掛けを施したほうが効果的かなって思ったのよ。それが今の流れ星の映像。どうかしら？」
言われなくても、もうこれは――、
「はい、使わせてもらいます」
「気に入ってもらえた？」
「そりゃもう、脱帽です。帽子は持ってないですけど」
「脱毛なら、いずれなるんじゃない？　大久保くん」
「やかましい、まだ髪はたくさんあるわ！」
「うふふ、ならよかったわ」
先輩のおかげで、政策方針が固まったな。
――その後は、４人で楽しくお茶を飲んでこの日の部活動は終わった。先輩は頼れる人だと改めて実感した俺たちだった。

アンダンテ（5）

11月25日（木曜日）

「――吹雪くん、あれじゃないかな？」
「ああ、そうかもな」
「行ってみようよ」
「おう」
俺たちは、グランドに掲示板に張り出されたテスト結果を見に行く。
「ん？　あ、吹雪、こっちこっち」
一足先に来ていた祐喜が、俺たちに手招きしていた。
「早いな、祐喜」
「気になっちゃって早く来ちゃったよ。それより吹雪、あれ見てよ、舞羽ちゃんも」
「どれどれ」
「うーん」
掲示板にはそれぞれの教科ごとの結果と、全体の成績が記されている。
「――あ、ねえ吹雪くん。あれあれ」
「ん？　どれ？」
「吹雪くん、魔法の実技試験、1位に入ってるよ」
「何？　マジか！？」
「マジマジ。ほら、あそこ」
舞羽の指差したところに目を凝らしてみる。……1位、大久保吹雪　94点。
「ホントだ、やったぜ」
「よかったね、吹雪」
「おめでとう」
「おう、サンキュー」

二人とハイタッチを交わした。普通に嬉しかった。頑張って練習した甲斐があったってものだな。
「二人は何かランクインはあったか？」
「うーん……私は何も」
「僕は、一つだけ筆記でランクインしてるよ。５位だけどね」
「だっていいじゃないか？　へい」
バチっとハイタッチをもう一度交わす。
「後は全体結果だね。探そう」
「そうだな」
「うん」
俺たちは協力してそれぞれの全体順位を探す。
「お、舞羽あったぞ」
「え？　ホントに？」
「ああ、２００人中、６８位だ」
「やったー、前より上がったよー」
「やったな、へい」
バチっ。
「――お、僕のあった」
「何位だ？　祐喜」
「６５位、舞羽ちゃんと同じくらいだね」
「でも、上なのは祐喜くんだよ？　すごいなー」
「あはは、ありがとう。後は、吹雪のだけだね」
「何処にあるんだろうな、俺の」
「きっと吹雪くんのは前のほうだよ、前のほう探してみよう」
「そうだね」
三人で掲示板を見回す。
「うーん――あ、あった。吹雪くん、あったよ」
「何処だ？　何処だ？」
「ほら、あそこ」
「お、ホントだ」

大久保吹雪、３４位。掲示板にそう書かれていた。
「おお、前よりも上がってる」
「やったね、吹雪くん」
「おめでとう、吹雪」
「サンキュー、二人とも」
今日すでに４回目のハイタッチを三人と交わした。
「やっぱりすごいな吹雪は。尊敬するよ」
「そうか？　面と向かって言われると照れるぞ」
「本当のことだよ、僕は本気で思ってるよ」
「マジか？　……」
「あれ？　吹雪くん、顔赤いよ？」
「い、いや、気のせいだ。うん、そうに違いない」
「怪しいな～」
「気にするな。あんまり言うと、デコピンすんぞ？」
「それはイヤだな～」
「じゃあ、下手な干渉は避けていただきたい。オーケー？」
「はーい」
「邪魔になるから、そろそろ引き上げようか？　ある程度人が引いたら、また見に行こうよ」
「そうだな」
「じゃあ、一旦帰ろう」
……そういえば、翔の順位見てなかったな。ビリではないと自信満々だったが、果たしてどうだったのか、後で本人に聞いてみるか。

「……」
「聖奈美、そんなに気にすることはないよ」
「このあたしが、また負けるなんて……何てことなの……」
「……たった１点だよ？　悲観することじゃないよ」
「１点でも負けは負けよ。……大久保吹雪、覚えてなさい」

教室に入った瞬間だった――。
「吹雪～！」
「おわあっ！？」
突然デカ物に胸に飛び込まれた。
「な、何だよ突然、気持ち悪いから離れろ！」
「オレ、頑張ったんだぜ？　今までにないくらい全力でテストに挑んだんだぜ、それなのに……それなのに……くう……」
ああ、なるほど。こいつの反応から察するにまたダメだったんだろう。これで掲示板の後ろからトップの座を6回防衛成功か。
とりあえずだ……。
「いい加減離れろ、白い目で見られちまうだろ」
「もう少し、このままでいさせて……」
「やめんか！　お前は女子か！」
無理やり引っぺがした。
「くそ、何でだよ……何がダメだったって言うんだよ」
「勉強しないで遊んでたからに決まってんだろ」
「そんなことはない、前よりも大幅に勉強時間は増やしたはずだ」
「何分したんだよ、一体」
「1時間」
「少ないんだよ、それじゃあ」
「そんなことは、いつもの60倍勉強したんだぞ？」
「全然足りねぇんだよ」
つうか60倍って、今まで1分しかしてないってことか？　宿題すらできねぇぞそれじゃあ。
「そんなんじゃあ当たり前だよ、お前がビリなのは必然だ」
「でも、全部埋めたんだぞ？　一つ残らず埋めたんだぜ？」
「埋め方に問題があったとしか言いようがない。関係ないことでも書いてたんじゃないのか？」
「……くそ、悔しいぜ」
「勉強時間をもっと増やせ、それしか方法はねぇよ」

「それじゃあナンパができないじゃないか！？」
「それを削れって言ってんだよ！　一番いらねぇ時間だろそれが」
「生きがいなんだよ、吹雪はオレに死ねって言ってるの！？」
「そんなことしなくても人間生きていけるって何度も言ってるだろうが。いい加減目を覚ませ」
「覚めてるからこうなってるんだよ」
「アホかお前は！」
「うわあああ、吹雪～」
「だから、抱きつくな！　顔が近い！　乳首を触るなー！」
「……大変だよな、大久保も」
いやいやクラスメイトたちよ、静観してないで少しは手伝ってくれよ！
俺と翔の戦いはしばらく続いた。

「――というわけで、みんなよく頑張ったね。一先ずはお疲れ様～」
あれから翔は机に突っ伏してぴくりとも動かなくなった。どうやらビリということが結構ショックだったらしいな。
「特にふーちゃん、実技で1位はとってもすごいです。おねーちゃんは感動しました、また次も、1位狙って頑張ってね」
「はいはい」
「あーちょっと～、口調が荒っぽいよ～？　ふーちゃん」
「今は、その呼び方はやめてください、先生」
「ぐすん……繭子悲しい……」
どうせウソ泣きだろ。
「えっと、後は……そうだ。大半の人は済ませたとは思うけどー、マジックコロシアムの締め切りは今日の夕方までだから、出ようか考えてる人は急いで生徒会まで行ってね～？　それと、ピアニストとハーモニクサーの発表も、絶対に忘れないように～。いいですか～？」
「はーい」（全員）

「はい、じゃあ朝のホームルームはこれで終わりー、みんなまた授業でね～、ばいばーい」
チビ介はトットコ走って教室を出て行った。
「おめでとう、ふーちゃん」
「からかうなよな、日野」
「いいじゃなーい、愛されてる証拠じゃないの？」
「学園では公私混同はしてほしくないんだよ」
学園に着いたら、あくまであっちは先生、こっちは生徒。けじめはつけないとダメだろう。
「そんなこと言ったって、もうみんな分かっちゃってるわよ？　大久保くんと繭子先生の関係のことは」
「まあ、そりゃそうだろうな」
あんだけ連呼されてれば、誰だって分かるだろう。
「今更気にしてもしょうがないんじゃないの？」
「そうかもしれないけどよ……」
「それにかわいいしさ、ふーちゃんって呼び方」
「やめんか、それは」
「吹雪っていう勇ましい名前を完璧に打ち壊す柔らかい呼び方、よく考えたものだわ、うん」
「こっちは結構恥ずかしいんだぞ。しかもみんながいる前であんな呼び方されて……赤っ恥じゃねぇかよ」
「大丈夫よ、もうみんな分かってることだから」
「何か納得いかねぇな、それは……」
「仲がいいってステキじゃない？　ねえ舞羽」
「あ、うん。そうだね」
斜め前の舞羽がこっちを振り向く。
「吹雪くんと繭さんは、見ていて羨ましいよ」
「ホントかよ？」
「うん、今時珍しいと思うよ？　あんなに仲がいいのは」
一方通行の気もするんだけどな、俺としては……。

「私は、一人っ子だから分からないけど、繭さんみたいなお姉ちゃんなら欲しいと思うな」
「あげるぞ？　よかったら」
「え、ええ？　それは遠慮するよ」
「何だよ、ウソかよ、舞羽」
「そ、そうじゃなくて。いたらいいなってことで、実際にはもらえないよ……」
「冗談に決まってるだろ？　本気にするなよ」
「もう、イジワル～……」
――そんなゆったりとした会話をしている時だった。
バン。教室のドアが力強く開け放たれた。教室にいるクラスメイトは一瞬ピタリと止まる。
「げっ！？　あ、アイツは……」
「な、何しに来たんだ？」
何やらクラスメイトが怯えているぞ。開け放たれたドアの場所にいるのは、一人の女性……随分と厳しそうな顔をしている。それに、見覚えがないわけでもない。あれは確か……隣のクラスの……。
「……」
こっちに歩いてくるぞ、……ひょっとして、俺か？
「……っ！」
バン。突然机を叩かれた。
「な、何だよ？　いきなり来てその態度は」
「あなたが、大久保吹雪？」
「だったらどうしたっていうんだ？」
「あなた、一体どんな方法で1位になったの？」
「な、何がだよ……」
「実技試験よ。魔法の実技試験」
「それがどうしたって言うんだよ」
「あなた1位になっていたじゃない。あたしを、杠聖奈美（ゆずりはみなみ）を差し置いてね」

杠……ああ、そうだ、思い出したぞ。こいつは、生徒会の会長だ。周りの男子たちが怯えてるのはそのせいか。別名風紀の鬼、学園のルールにめっぽう厳しいことからその名が付けられたって翔が前言ってたな。そいつが、一体俺に何のようだ？

「一度ならず二度までも、このあたしが実技で負けるなんて……信じられないわ」

「さっきから何だって言うんだよ、お前は」

「このあたしが、二度も凡人に負けるなんて、あってはいけないことなのよ。いえ、有り得ないわ。あなた、どんなインチキを使ったの？」

「……いきなり人のところに来て何言うかと思えば、随分とひどいこと言うじゃねぇか。やってねぇよ、インチキなんざ」

「じゃああなた、実力で1位になったって言うの？」

「それ以外に何があるっつうんだよ。実技だぞ？　誤魔化しようがねぇだろうが」

「そ、それはそうだけど……だってあたしは見てないもの。証拠にはならないわ」

「……アホかてめぇは」

「あ、アホ！？　あなた、今あたしにアホって言ったの？」

「当然だろうが、証拠にはならねぇだ？　テストだぞ？　横で教師がじっくり見てるんだぞ。それであたしが見てないから証拠にはならないだ？　訳分かんない事言ってんじゃねぇよ」

「ぐぐぐ……この男……」

「何だよ？　じゃあお前は教師よりも偉い立場だって言うのか？　じゃあ聞いてみろよ、俺が担当してもらった先生の名前教えてやるからよ」

「ぐうう……」

「おお、すげー、あの杠が押されてるぞ」

「大久保すげー……」

「い、言っておくけどね」

「何だよ？」
「あたしはアホじゃないわ。テストだって、ずっといい点数をキープしてるんだから。実技以外は、あなたよりもずっといい点数を取ってるんだから。全体順位だって、あんたよりもずーっと上なんだから」
「だから何だって言うんだよ？　俺に自分の成績を自慢しに来たのか、お前は」
「分からないの？　あんたは？」
「何が？」
「杠の法則よ」
「何じゃそりゃ！？」
「杠聖奈美＝頭がいい＝テストでいい点を取るのは当たり前＝負けるわけがない＝負けることは許されない＝あたしが負けたというのなら、そいつはインチキを使ってる――ってことよ」
「ただのやっかみじゃねぇかよ！　アホ！」
「キー！　あんた、またアホって言ったわね！？」
「言われるようなことしてるからだろ」
「一度ならず二度までも、こんな屈辱味わったのは生まれて初めてだわ」
「お前が勝手に来たんじゃねぇかよ……」
「うるさい、とにかく、あたしは納得できないの！」
「お前になんて納得してもらわなくても結構だ」
「してもらわないと困るの。というかしなさいよ、あたしを唸らせて見なさいよ」
「何で上から目線なんだよお前は！　仮にも負けたのはお前なんだぞ」
「あたしは負けてない。まだ決まってないわ」
「決まってるだろ！　掲示板見ただろ！」
「あたしが決まってないって言ったら決まってないの。そう決まってるの」

何ていうエゴなんだ……本当にコイツ、風紀の鬼なのか？　やってること無茶苦茶だぞ。
「大体何よ、その吹雪って名前は。氷系の魔法を得意とするあたしへの挑戦状？」
「名前は関係ないだろ。俺の意思でこの名前にしたんじゃないんだよ」
変わってる名前だとはよく言われるが、今問題はそこじゃない。
「あなた、気に入らないわ」
「俺の台詞だ！　それは。ホントに何なんだ？　お前は。俺に喧嘩売りに来たのか？」
「だから言ってるでしょ？　納得させて欲しいの」
「それが人にものを頼む態度かよ？」
「見せてくれてもいいわよ？」
「何も変わってねぇじゃねぇかよ！」
「とにかく見せてほしいの！　それまであたしは、あなたが実技で1位だって認めないからね」
「だから、お前に何て認めてもらわなくても……」
「逃げるの？　あたしに怖気づいて、尻尾巻いて逃げるの？」
何なんだこの状況は……どうして俺が不利な状況に追い込まれているんだ。
「その程度の男なの？　あなたは」
「……ち、じゃあどうすりゃいいんだよ」
「ふふん、簡単なことよ。マジックコロシアムに出てちょうだい。それで、決勝の舞台であたしと戦って、見事あたしに勝てたならば、認めてやってもいいわ」
やってもいいって……俺が言いたいよ、その台詞。
「実技でそこそこの成績をキープしているようだし、まさか決勝までこれないということはないでしょう？　あたしが直々に、あなたの力を試してあげるわ」
「お前が決勝まで上がってこれるって保障もないだろう」

「何ですって!?　あなた、去年のマジックコロシアムを見てなかったの?」
「見てたけど、それがどうしたっていうんだよ」
「あたし、去年1年生だけど、優勝したのよ。自分の実力を学園中に知らしめたのよ。それを知らないっていうの?」
「そうだったのか……」
「くううう……何よそのどうでもよさそうな反応は」
確かにすごいとは思ってるけど、コイツが言うとどうもすごいと思えなくなる。
「ホントに、あなたはあたしを怒らせるのが得意ね」
「お前がこの教室に来なきゃこんなことにはならなかったと思うぞ」
「とにかくよ、あたしは今年、マジックコロシアムで二連覇がかかってるの。言わば優勝候補よ。そのあたしを下してみなさい。ま、無理だとは思うけどね」
随分と自信があるようだな、コイツは。やっぱり、出なきゃダメなのかね?　流れからして。
「ここまで来て、出ないなんてことはないわよね。大久保吹雪」
「ちょっと待て、今考えてる……」
「考えないでそこはスパっと決めなさいよ。男でしょう、あなた!」
「うるさいんだよ!　少し口閉じてろ馬鹿たれ」
「アホに続いて馬鹿ですって……少ししか言われたことないのに」
言われたことあるんかい。
「吹雪くん……」
確かに、ここまでコケにされて（?）黙ってるのもおもしろくないな。出る気なんてなかったけど……仕方ない。
「分かった、出てやるよ」
「ふふん」
「おおー、大久保くんが立ち上がった」
「いいの?　出たことに後悔するかもしれないわよ?」
「お前が出ろって言ったんじゃねぇかよ」

「そういうのは言わなくていいのよ」
「何なんだよ……」
「見てなさい、あたしは絶対、あなたに勝ってみせるわ。絶対にね」
「ああ、そうかい」
「その冷めた口調、ホントに気に食わないわね」
「お互い様だよ」
「逃げるんじゃないわよ？　ふんっ」
言うだけ言って、杠は身を翻して帰っていった。何ちゅう女だ、アイツは……。
「ふ、吹雪くん」
「――てわけだ。出ることになっちまったから、応援よろしくな」
「う、うん。頑張ってね、吹雪くんなら絶対に勝てるよ。でも……大丈夫なの？　急にこんなことになって」
「――まあ、大丈夫だろう」
最近は――落ち着いてもいるしな。
「やるからには頑張るよ」
「これはおもしろくなってきたわねー。今年のマジックコロシアムは必見ね」
「そんな大事じゃあないだろ？」
「いやいや、これはとんでもない名勝負になる予感がするわよ。近年は凡戦ばっかりであんまり見る気はしなかったけどさ、実技1位と2位の者同士の争いなんて、胸躍る大イベントじゃない。……どっちに賭けようかしら」
「賭博かよ、おい！」
「大丈夫よ～、大久保くんのほうにも賭けるから～」
「そういう問題じゃねぇだろ」
「よし、オレも吹雪に一点賭けだ。負けんなよ？　吹雪」
「賭けんな！」
「翔だけに？」
「寝てろ」

「ふぐおっ！？」
翔はまた机に突っ伏した。
「ふう……にしても、すごい奴だったな、あいつ」
「うん、そうだね」
「あまり、聖奈美を憎まないでやってくれませんか？」
「ん？　誰だ？」
「あ、ここ、ここです」
「おお！？」
ふと顔を上げると、目の前にふわふわと浮かんでいる生き物の姿があった。
「君は？」
「あ、わたし聖奈美の使い魔やってます、ダルクっていいます。始めまして」
「ああ、どうも」
「おはようございます」
とりあえずは自己紹介をしておいた。何だ、あいつ使い魔なんて持ってるのか。杠とは違って理解力がありそうで。
「すいません、えっと……」
「ああ、吹雪だよ」
「舞羽です、よろしくね」
「吹雪さん、ごめんなさい。驚いたでしょう？」
「まあ、ちょっとな」
あんな唐突に勝負を申し込まれるとは思わなかったからな。
「俺、あいつに何か悪いことってしたか？」
「いえ、そんなことは。吹雪さんは何にも悪くありませんよ」
「そうなのか？」
「はい、吹雪さんは自分で努力してあの結果を出したんですから、誰も口出しすることはできません。それに、誰も吹雪さんがズルをする人なんて思ってないでしょう？」
「もちろんだよ」

いち早く舞羽がうなずいてくれた。
「聖奈美は昔からあんな感じなんです。さっきのあれも、別に吹雪さんにイラついてたんじゃないと思います。多分、負けてしまった自分に対してイラついてたんだとわたしは思ってます」
さすが使い魔、主のことを理解しているようで。
「聖奈美はとんでもない負けず嫌いでして。何でもトップになりたい性格なんです」
「だから、生徒会か？」
「そうかもしれないですね」
なるほどね。まあ、勝ちたいと思う気持ちは悪いとは思わないが。
「根は普通の女の子ですから」
「確かに、いや、それ以上だ」
「うわっ！？　急に起きんな」
「見てたか？　吹雪よ」
「何をだよ？」
「杠のことだよ。あいつ、かなり胸でかかったぞ」
「どこ見てんだよ！　お前は」
「女性って言ったらまずは体チェックだろ。基本だぞ」
「――ふんっ！」
「んがあっ！？」
ふう、大人しくなったな。
「悪い、忘れてくれ」
「あ、あはは……」
ダルクと舞羽は案の定苦笑いを浮かべていた。
「男の人って、みんなあんなのなんですか？」
「……無きにしもあらずだが、あいつは自他ともに認める変態だから。普通はあんなオープンではない」
「な、なるほど」
「悪いな、気持ち悪い奴で」
「あ、大丈夫です」

「――ダルク、別に敬語じゃなくていいぞ。普通にしゃべれ、何だかむずがゆい」
「そ、そうですか？」
「ああ、落ち着かないからよ」
「――分かった。これでいい？」
「うむ」
「ところで、吹雪は本当に出るの？　マジックコロシアムに」
「ん？」
「だって、聖奈美が勝手に決めたことでしょ？　無理に出なくても問題ないと思うから」
「んー、でもな。一度言った手前、キャンセルってのはちょっと気が引けるんだよな」
それに、あそこまで言われてしまうと、どうも気分がすっきりしない。
「問題ない、出る。出て杠を打ち負かして、完全に証明してやるさ」
「……そっか。本当はマスターを応援しなくちゃいけないんだけど、頑張ってね」
「おう、サンキュー」
「決勝の時は聖奈美を応援しなきゃいけないから、許してね」
「ダルクは、杠が決勝にいけることを確信してるんだな」
「まあね、何だかんだいっても、聖奈美は魔法が得意だし、去年は優勝してるし。いける可能性は高いと思う」
「なるほど」
いい使い魔じゃないか、ダルクは。
「じゃあ、そろそろ戻らないと。またね」
「ああ」
「バイバイ」
ダルクはふわふわと教室を出ていった。
「杠さん、あんなかわいい使い魔飼ってたんだね」
「みたいだな」

悔しいがそれだけ杠は力を持ってるということになる。人並みの魔力では使い魔は召喚することはできない。だけどあいつはそれを飼っている。使い魔を召喚するだけの魔力を持っているということだ。ナメてかかると痛い目を見そうだな、こりゃ。

「私もほしいな、あんな使い魔」

「魔導書でもあさってみたらどうだ？　明日から飼える使い魔、みたいな」

「そんな簡単に召喚できたら苦労しないよー」

「言ってみただけさ」

「というか、吹雪よ」

「もう起きるなよ、お前」

「お前マジックコロシアムに出るのか？」

「ん？　ああ、そういうことになっちまった」

「じゃあ、オレと一緒に――」

「却下だ」

「まだ全部言ってないのに！　どうして？　何で？」

「邪魔なの」

「そんなはっきりと！？」

「というか、今回はだめなんだよ。俺一人で出なきゃいけないんだ」

「残念だぜ、じゃあ、来年一緒に出ような？　な？」

「か、考えといてやるよ」

というか、やっぱりお前出るのかよ……。

アンダンテ（6）

カランカラン。
「いらっしゃいませー、バーバロへようこそ――あ、吹雪くん、それに繭さん」
「おう、やってるな」
「こんばんはー、舞ちゃん」
「今日はどうしたの？」
「いや、料理作るのが面倒くさくなってな。ならここがいいってなってな」
「困ったものだよー、ふーちゃんには」
「どの口がそんなことを言うんだ？　ああ？」
「いひゃーい、くふぃよふぉにひっふぁらないでー」
「まあ、そんなわけだ。いいか？」
「もちろんだよ、ゆっくりしていって」
「サンキュー」
「では、こちらにどうぞ」
喫茶店バーバロ、舞羽と日野が働いてる喫茶店だ。商店街の中にある人気のある店で、軽食からしっかり食べれるものまでバリエーション豊富なメニューがお客に好評のようだ。俺たちもここの料理は口に合うから、暇があればこうしてちょくちょく店に来ている。
「はい、メニュー。決まったらボタンを押してね？　すぐに行くから」
「おう」
ピンポーン。
「あ、はーい、ただいま伺います」
舞羽は走ってお客のテーブルに向かっていった。
「完璧に板についたねー、舞ちゃん」
「そうだな」

まあ、一年もやればマスターしてもおかしくないか。スキルはあるはずだし、むしろ半年くらいでマスターしていたかもしれない。
「ワタシもやってみようかなー」
「やめとけ」
「考えもしないでー、否定するの早いよふーちゃん」
「教師もまともにこなせてない人間に喫茶店の店員などつとまるわけがないだろう」
「分からないよー？　教師の時は見せなかった意外な才能が開花するかも」
「教師って時点で意外性は使い果たしてるよ、マユ姉は」
「そ、そんなー。冗談きついよーふーちゃん」
「冗談だと思うか？」
「いやー、そんな目で見ないでー」
「さて、何にする？　マユ姉」
「そんなさらっと切り替えるなんて！」
「いいから、早く決めて早く食おうぜ」
「うーん、じゃあ……何円までオーケーなの？」
「１０００円がいいとこだな」
「１０００円、野口さん１枚ぶんか、なるほど」
メニューをじっと見つめている。
「よし、きーめた」
「何にしたんだ？」
「鮭のムニエルセット」
「……おい、マユ姉の目は腐ってるのか？」
「ええ？　何で？」
「何で？　値段を見ろ値段を」
「１１８０円だよ」
「んなことは分かってる。１８０円オーバーしてるじゃないか。１０００円までって言っただろ？　俺」
「だって、上一桁を切り捨てれば１０００円になるじゃない」

「切り捨てを使うな。普通は１０００円までって解釈で受け取るだろ」
「いいじゃーん、１８０円ぽっちー。細かい男は嫌われるよー？　ふーちゃん」
「大ざっぱすぎる女もモテんぞ？　マユ姉」
「ぶーぶー。こう見えて、ワタシ教師の間では評判いいんだからねー？　ふーちゃんは知らないと思うけど」
「どうせロリ好きだろ、その先生」
「違いますー、そんなんじゃないもーん。というかふーちゃん、さらっとひどいこと言ったねー？　お姉ちゃん結構気にしてるのにー」
「じゃあそのテキトーな振る舞いをやめるんだな。じゃなきゃ、どう頑張っても大人には見てもらえないぞ」
「年齢詐称じゃないよ、ワタシ」
「んなことは分かってる」
してると言われても納得できるが。
「努力しろってことだ」
「はーい。――で、いい？　ムニエルセット食べても」
「はあ、……次はダメだからな」
「わーい♪　ふーちゃんありがとー」
しょうがない、俺は安いものにしよう。俺は呼び出しボタンをプッシュした。
「はーい、今行きます」
舞羽がオーダー用紙を持ってこちらに走ってきた。
「決まった？」
「ああ、客、結構いるのか？」
「人数はいつもとおなじくらいなんだけど、学生の団体が入ってて結構注文が入ってるんだ」
「なるほど。繁盛してるんだな」
「それなりにね。あ、メニューお伺いします」
「ああ、えっとマユ姉がムニエルセット、俺がミートスパゲティで」

「はい、かしこまりました。ムニエルセットの食後のお飲物は何がよろしいですか？」
「マユ姉、何がいい？」
「コーヒー、舞ちゃんの愛情ブレンドでー」
「ふふ、分かりました。じゃあ、少々お待ちください、なるべく早く持ってくるから」
「おう」
「……人気ありそうだねー、舞ちゃんは」
「まあ、性格いいからな、誰かと違って」
「なーんか心にダメージを負った感じがするのは気のせいかな」
「さあねー」
「ぶーぶー」
口を尖らせて言葉通りのブーイングをする。
「あ、そうだ、ふーちゃん」
「何だよ？」
「何だっけ？」
「知るかよ俺が！」
思い出したからそうだって言ったんじゃないのかよ。
「ちょっと待って、今思い出すから、うーんと」
……待つことしばし。
「あ、そうだ！」
「で、何だ？」
「……えっと」
「しっかりしろ、同じ件でお茶を濁すな」
「そうだそうだ、今度こそ思い出したよ」
しっかりしてくれよ……。
「ふーちゃん、マジックコロシアム出るんだってね？」
「あ、誰から聞いたんだ？」
「翔くーん。校内で言い回ってたのが聞こえてきたのー」
アイツ、別に教えてもいいが多分話を盛ってしゃべり散らしてるに

違いない。
「出ないって言ってたのに、何でまた急に出る気になったのー？」
「まあ、ちょっとな」
「ふーん。そっか、出るのであれば、優勝目指して頑張ってね？　クラスで応援してあげるから」
「そうか？　でも、あんまり激しいのはやめてくれよ」
恥ずかしさを覚えるようなのは勘弁願いたい。
「分かった。情熱的なのにしてあげるねー」
「分かってないだろ、絶対に」
「にひひ。でもそっかーふーちゃんが出場かー。何か一気に楽しくなりそうな予感がしてきたわー」
「日野と同じようなことを言うんだな、マユ姉は」
「愛海ちゃんとー？　そうなんだ、でも、普通の人はそう思うものじゃないの？」
「俺に聞かれても分からんよ」
「だってー、何て言ったって魔法の実技1位でしょー？　ふーちゃんは。その人が出るってなれば、イヤでも期待は高まるよー」
「そんなもんかね？」
「そんなもんだよー。えへへー、さすがワタシの弟だね」
「……」
「ど、どうしてそこで無言ー！？」
「まあ、ほどほどにやるよ」
「……無理はしなくていいからね？　一応言っておくけど」
「分かってる」
「――でも、本当に吹雪くんには注目が集まってるみたいだよ？　愛海が言ってた」
舞羽が料理を持ってこちらにやってきた。
「お待たせしました。ミートスパゲティとムニエルセットです」
「わーい、おいしそう」
「日野が言ってたのか？」

「うん、ハルモニア学園最大のイベントになるかもって楽しそうに言ってた」
「あいつも翔と同じようなこと……」
まああいつらは性別は違えど、似たような性格をしてるからな。
「実を言うと、私も少し期待しちゃってたり……」
「おいおい、お前もかよ」
「だって、吹雪くん実力あるのに全然出ようとしないし、もったいないなーって思ってたの。無理強いはしたくないから言わなかったけどね」
「ああいうのは見てナンボだろう」
「ええ？　そうなの？」
「俺の中ではそういう感じなんだけどな」
観戦するからこそ、コロシアムというのは最大限に楽しいものだと思う。自分が出るのは少々気が退ける。それに……まあ、これだけで理由としては十分だろう。
「舞羽も出てみればいいんだよ」
「ええ？　私は、あんまり自信ないから……」
「それだよ、それ。自分がその立場になったら躊躇っちまうだろう」
「ああ、そっか。でも、今回は絶対に出るんでしょう？」
「まあ、言っちまったからな」
今キャンセルなんてしたら、杠はカンカン&みんなの笑い者になること必至だ。
「全力を出すしかない」
「応援してるから、頑張ってね」
「ああ」
「勝ったらパーティしようよ？　ホームパーティー」
「あ、いいですね。私、お料理作りますよ」
「舞羽が作ってくれるのか？」
「うん、久しぶりに作ってあげたいし」
「そりゃあ楽しみだな」

「でも、勝ったら、だよ？　優勝しなかったら少しだけ」
負けても食べさせてくれるってところが、こいつの優しいところだよな。
「頑張ってーふーちゃん。ワタシのために」
「ただ食いたいだけだろ、舞羽の料理が」
「ふーちゃんだって食べたいでしょー？　優勝目指すのみだよ」
「尽力はするよ」
「ふふ、あ、呼んでるから私行くね？　ゆっくりしてってね」
「おう」
「ご馳走になるねー」
――バーバロの料理は、いつもどおりおいしかった。

アレグロ（1）

11月27日（金曜日）

「あ、いたいた、ふーちゃーん。おーい」
「ん？　ねえ吹雪。繭子先生が呼んでるみたいだよ」
「おーい」
この近さなのに手を振る必要性はあるんだろうか。マユ姉はこっちに走り寄ってきた。
「ふーちゃんだ。元気ー？」
「いや、朝も一緒に登校したし、第一一緒に住んでるんだから分かるだろ」
「むう、そういう返答を女の子は求めてるわけじゃないよー？　もっと心に響くような返事をしなくちゃさあ」
「どんなのだよ」
「例えば――ついさっきまではあんまり元気がなかったけど、お前の姿が見えたら、一気に元気が沸き上がってきたよ。見たいなー？」
「何処のバカップルだよ、それ」
「いいのー？　そんな風に否定してー？　全世界のカップルを敵に回しちゃうわよー？」
「あんたは姉だろ？　姉にそんなこと言えるわけないだろ普通に考えて」
「――からの」
「ねぇよ」
「もう、ふーちゃん冷たいなー。やっぱり吹雪だから？」
「祐喜、行こうぜ」
「あーん、待ってプリーズ！」
服の裾をぐいっと引っ張られた。
「先生を無視するなんてひどいんじゃないのー？」

「先生が生徒をからかっていいのかよ？」
「うぐ……からかってないもん。指導だもん」
「生徒の名前を馬鹿にするのが指導だと？」
「馬鹿になんてしてないよー。遊んだだけだよー」
「それが馬鹿にするって言うんだよ、馬鹿もの」
「先生に向かって馬鹿って言った？　先生に言いつけるよ」
「あんたが先生だろうが」
「ああ、そうだったね」
話が前に進まない……。
「で？　何の話だったっけ？」
「俺は呼んでねぇよ。つか忘れるな、その件は昨日聞いた」
「昼間からトリプル突っ込み、日に日に腕を上げていくね、ふーちゃんは」
「マジで、用件あるなら言ってくれよ。祐喜もいるんだからよ」
「あ、ヨッシー。元気―？」
「はい、出席の時に言った気がしますけど」
「うん、生徒が元気だと、ワタシも元気になる。これが、元気の連鎖ってものなのかしら」
「……そんな世間話をしに来たのかよ」
「ううん」
「……そろそろ切れちゃうぜ？　俺も」
「あーん、待って待ってー。プリーズウェイト！」
「ならさっと言え、さっと」
「うんとね……そう、これこれ」
マユ姉は胸ポケットから一枚の封筒を取り出した。
「これを、フェルに渡して欲しいの。ワタシ、これから職員ミーティングがあるからさあ」
「話す時間があったなら渡せたんじゃないのか」
「あはは、そうかもね」
笑ってごまかされても困るよな。

「もう時間ないからさー。ねえ、お願い」
手を合わせて首を傾げられる。
「お礼は今度するからさー」
「今までしてもらった覚えないんだけども？」
「じゃあ、お給料入ったら何か買ってあげるわー。ふーちゃんの好きなもの。それならいいでしょー？」
「別にそこまでしてもらわなくてもいいよ」
仕方ないな。
「早く行きな。遅れちゃうだろ」
「行ってくれるの？　ありがとーふーちゃん。持つべきものはマーベラスブラザーだね」
「ミーティング中に寝るなよ」
「うん、頑張って起きまーす」
「起きてるだけじゃなくてちゃんと話を聞いてろよ」
「分かってるよー、これでも教師だもーん」
ふらふらーっと、マユ姉は職員室に戻っていった。
「さて、ごめんな祐喜」
「持っていかないといけないのかい？」
「ああ、これをな」
預かった封筒を見せる。
「昼食を早く済ませて行かにゃあ」
「そっか、じゃあ少し急ごうか」
「ああ、悪い」
「いいよ、これくらい」
俺たちは早足で食堂に向かった。

さて、先生はいるかね。俺は保健室のドアをノックした。
「はーい、どうぞー」
「失礼します」
ガラガラ。

「――あ、吹雪くんじゃない」
イスに座っていた背の高い先生がこちらに歩み寄ってきた。
「フェルシア先生、いつも姉が世話になってます」
この人が、さっきマユ姉がフェルと呼んでいた先生だ。
本名はフェルシア・アスタルテ。保健の先生であり、実技の先生でもある。保健の先生だけあって、フェルシア先生は回復系の魔法が長けていて、生徒の傷をしっかりと治してくれる。まあ、怪我してなくても来る生徒も多数いるようだが。マユ姉とはすごく仲がいいようで、よく構ってくれているようだ。
「どうしたの？　体調が優れないのかな？」
「いえ、全然。元気ならとてもありますよ」
「あら、どれくらい？」
「そうですね。マユ姉をぶん投げれるくらいですかね」
「吹雪くんなら元気なくても投げれるでしょう？　マユは軽いもの、私と違って」
「そんなことないですよ。先生は全然太ってないじゃないですか」
先生で太っているなど言ったら、世の女性全てを敵に回すことになるぞ。
「それに、先生は身長ありますし。マユ姉より体重があるのはどうしたって当たり前のことですよ」
俺より大きかったりするしな、フェルシア先生は。
「気にする必要などこれっぽっちもありませんよ」
「うふふ、そこまで言ってもらえると、少し自信が沸いてくるわね」
「いや、本当のことですよ」
「ありがとね、あ、お茶でも出すわ。座って」
「いいんですか？」
「時間、まだあるでしょ？　少し付き合ってよ、暇だから」
イスに座ってと手招きされる。
「じゃあ、失礼します」
俺は言われるままに座った。

「えっと、あ、これかな？」
急須にお湯を注ぎいれながら、何やらポケットを探っている。そこから出てきたのは――。
「はい、どうぞ」
「先生、いいんですかね？」
先生はお茶とチョコレートをお皿に乗せて持ってきた。
放課後ならいいんだろうが、まだ学園の中だからして、お菓子を食べるのはよろしくないと思うんだが。
「食べてたんですか？」
「うふふ、つい、おいしくってね」
舌を出しながらそう言った。
「共犯ってことにさせてもらうわ。いいでしょう？」
「もしバレたら先生の名前出していいんですよね？」
「バレないわよ、大丈夫」
「じゃあ、いただきます」
先生の好意に甘えることにしよう。
「あ、そうだ」
甘える前に、言われたことは消化しておかなければ。
「なに？」
「はい、これを姉が先生に渡してくれって」
封筒を先生に手渡した。
「何かは聞いてませんが」
「ああ、多分あれよ、あれ」
「あれって言いますと？」
「んーっと、宿題の問題とか、授業中に聞かれそうな質問とかに関する答えとか」
「え、じゃあ先生がその答えを考えてるんですか？」
「ううん、違うわよ。マユが自分で出した答えを、私がチェックしてるのよ。これはちょっと理解に難しいとか、この答えはおかしいって感じで」

「なるほど」
「見えないところでマユは努力してるのよ、びっくり？」
「まあ、少し。でも、先生にまで協力してもらっていいのかな」
「いいに決まってるわよ。教師間は助け合いが必須なんだから。それに、私は毎日授業があるわけじゃないし、手伝わない理由はないわ」
「優しいですね、先生は」
「あら、吹雪くんには負けるわよ」
「はい？　俺ですか？」
「そうよ、いつもマユから聞いてるわよ。吹雪くんの活躍っぷりは」
「言わなくていいのに」
「毎日家事をやってくれてるらしいじゃない。ワタシが教師を続けられてるのは吹雪くんがいるからって言ってたわ。笑顔でね」
「マユ姉は、家事全くできませんからね。俺がやるしかないんです」
「まあ、そうでしょうね。あの子、見た目からしてできなそうだし」
悪い意味で期待に答えてしまってるからな。
「好きで進んでやってるわけじゃあないんですよ」
「まあ、そうよね。家事は女の仕事みたいなものだもんね」
「少しでいいから覚えてほしいものですよ。皿洗いとかでいいから」
「あ、それもできないんだ」
「はい、必ず一枚は割っちゃいますから」
「……筋金入りなのね」
「そうなんですよ」
「まあ、マユらしいといえば繭子らしい、か」
「それくらいできないでどうするの、って思うんですけどね」
「甘えてるのかもしれないわよ、吹雪くんに」
「甘えすぎてると思うんですけどね」
「まあまあ、その分、暮らすためのお金を稼いでるわけだし」
「そうなんですよね」
そこが一番のポイントだ。何だかんだ言っても、マユ姉が給料をも

らってくれてるから、こうして二人で生活が可能なんであって。稼ぎがなければ、俺一人では家計を賄っていくことは不可能だ。
「せめて学園卒業まではやって上げないと、ね」
「そうですね、やるつもりではいますけど」
「うん、エライ。それでこそ吹雪くんね」
「いや、そんなことは」
俺はお茶を一口啜った。
「あ、そういえば聞いたよ。マジックコロシアム出るんだってね」
「マユ姉からですか？」
「ええ、というより、結構噂になってるみたいよ」
あの二人の仕業なんだろうか？
「優勝候補の一角だとかなんとか」
「そんなこと言ってたんですか？」
「ううん、私が今考えた」
「先生」
「うふふ、でも、嘘じゃないわよ。私は優勝する可能性はかなり高いと思ってるわ」
「そうなんですか？」
「ええ、吹雪くんの部活の副顧問ですからね、こう見えても」
指で自分を差しながら。
「補正かけてるんじゃないですか？」
「かかってもかかってなくても好勝負が期待できるわね」
「そうですか？」
「だって、何だかんだ言っても、吹雪くん、上位進出狙ってるでしょう？」
「ま、まあ」
やるからには、全力で望まなければもったいないからな。俺で通用するのかがよく分からないが。
「応援してるわ、がんばって」
「はい、先生は明日は救護班に回るんですか？」

「おそらくね。無傷で終わる試合は多分ないと思うからね」
そりゃそうか、コロシアムだからな。
「あらかじめ自然治癒の魔法を出場者にかけておくってのもありかもしれないけど、そこまでタフじゃないからな、私は」
「先生がいるからこそ、こういう大会も開催できるんだと思いますよ」
「ふふ、本当に吹雪くんはいい子ね。繭子に譲ってもらおうかしら？」
「いやいや、先生はもっといい男ゲットできますよ」
「……結構本気なのに、残念」
冗談、だよな、うん。
「先生も頑張ってください、明日」
「ええ、合点承知」
ちょうど、授業5分前のベルが鳴った。
「おっと、そろそろ行かなきゃ」
「そお、もう少し話したかったわね」
「また今度ってことで、ごちそうさまでした」
「ええ、また来てね？」
「はい、失礼します」
俺は頭を下げて保健室を後にした。応援してもらったし、やれるだけのことはやらないとな。

アレグロ（2）

「よし、舞羽、次頼む」
「うん、行くよ」
舞羽は目を閉じ、精神統一に入る。
「――悪しきものを振り払う凍てつく冷気、我に力を与えたまえ、アイスエッジ！」
舞羽の両手から、氷の刃が一斉に解き放たれる。
「――エル・エルファンディス。全てを燃やし尽くす熱き波動、我に力を、バーニングエッジ！」
俺の手から飛び出した炎の槍は、舞羽の氷の刃を全て溶かした。
「ふう、よし」
「すごいよ吹雪くん、もう完璧なんじゃない？」
「あはは、そうかな？　もう一回やるよ、お願いできるか？」
「うん、もちろん」
「サンキュー、舞羽」
「魔法は、何でもいいの？」
「ああ、舞羽の好きなので頼む」
「うん、分かった。じゃあ――風の精よ、我に力を与えたまえ、ウィンドカッター！」
風か、ならここは――。
「我を守る強靱なる壁よ、我の前に現れん、リフレクト！」
透明の壁が、風の刃から俺の身を守る。攻撃が終わると、透明の破片が一面に散らばる。
「よし、舞羽。一旦いいよ」
「はあ……はあ……」
舞羽は息を荒げながらこっちに戻ってきた。
「悪い、疲れさせちゃったか？」
「ううん、大丈夫。私は明日出ないし、役に立ててるならそれで」

「そこで待ってな。今ジュース買ってくるから」
「え、いいの？」
「付き合ってくれたお礼だ、気にするな」
俺は小走りで自販機に向かった。
……。
「ほれ」
「ありがとう」
二人一緒に喉を鳴らして飲む。
「はあ、生き返るね」
「だな」
「かなり形になってきてるんじゃない？　吹雪くん」
「そうか？　まあ、舞羽に手伝ってもらったからな」
「うん、この分なら優勝も夢じゃないよ」
「はは、まあ全力は出し切るよ」
「繭さんも、優勝候補筆頭だって嬉しそうに言ってたし」
「筆頭ね、あのチビ介、話を勝手に盛ってやがるな」
「それだけ期待してるってことだと思うよ」
「ちょっとプレッシャーだな。――そう言えば、翔は結局明日出るのか？」
「うん、そうみたい。昨日の休み時間にせっせとエントリー表書いてたから」
「魔法を使えもしないのにか」
無謀にも程がある……。
「気合いはすごく乗ってるみたいだったけど」
「気合いだけじゃどうにもならないだろう。気合い玉でも打てるんなら話は別だが」
「できないもんね、翔くん」
一回戦敗退筆頭だな、こりゃあ……。
「あら、そこにいるのは大久保吹雪ね」
この声は……。振り返った先にいたのはやっぱりあいつだった。

「何のようだ？　用がないなら失礼してもらうぞ」
「何て言うものいい、せっかく話しかけてあげたというのに」
「誰も頼んでねぇよ、んなこと。別に話しかけていただかなくても結構だ」
「ぐぐぐ、相変わらずひどいことを言いやがるのね、あなたは」
それはこっちの台詞だと思うんだが。
「吹雪、こんにちは」
「お、ダルクか」
「舞羽ちゃんも」
「うん、こんにちは」
「何だ、ダルクも明日出るのか？」
「ううん、私は横で見守るだけ。使い魔は出場禁止みたいだから」
「そうなのか」
「……随分、ダルクと仲がいいのね」
「まあな、お前みたいに尖ってないからな」
「と、尖ってる！？」
「そうだろうが、いきなり俺に突っかかってきたわけだし。誰がどうみてもそうだろう」
「つ、突っかかってなんてないわよ。変なこと言わないで」
「じゃあ何だって言うんだよ」
「し、少女の汚れなき主張よ」
「ただのエゴだろうが、馬鹿もん！」
「また馬鹿って言ったわね？　馬鹿っていうほうが馬鹿だってあなたの両親は教えなかったの」
「馬鹿と言わざるを得ない状況下では許されるはずだ。単純に考えてそうだろう」
「違う、断じて違うわ、そんなこと」
「じゃあ何が違うんだよ、言ってみろよ」
「――あたしだからよ」
「訳分かんないこと言ってるんじゃねぇよ！」

「ま、まあまあ、二人ともそのへんで」
「吹雪くん、落ち着いて」
舞羽とダルクが仲裁に入ってきた。
「聖奈美、抗戦的になっちゃダメだってば。言ってるでしょう？吹雪は悪い人じゃないって」
「だって、この男」
「言っちゃ悪いけど聖奈美にも悪いところ結構あるからね、今回の件に関しては」
「な、ダルク、この男の肩を持つの」
「認めたくないのは分かるけど、かと言ってその人を蔑むようなことは言っちゃダメ。ちゃんと見極めなくちゃ、そうでしょ？」
「む、むむ……」
ダルク、すごいな。聖奈美の扱いを完全に把握している。
「ごめんね、吹雪」
「いや、俺も悪かったな。軽口を叩いちまったし」
「そ、そうよ。あたし、結構傷ついたんだからね」
「聖奈美も謝るのよ。ほら、早く」
「む、ぐぐ……わ、悪かったわよ。でも、これで負けたわけじゃないんだからね」
ビシっと指をこちらに向けながら。
「明日は、絶対に負けないんだから。いい勝負になるといいわね」
「ああ、そうだな」
「どうやら練習していたみたいだけど、あたしに通用するかしらね」
「やってみなくちゃ分かんないだろ。変に俺を舐めないほうがいいかもしれないぞ」
「ふふん、絶対にあなたを倒して、ギャフンって言わせてやるんだから」
ものすごい自信だな、どこからそれは溢れてきているのか。
「肝に銘じておくよ」
「絶対、絶対に倒すわ、あなたを」

「分かったから、何回も言わなくても聞こえてるよ」
「ふん、行くわよ、ダルク」
「う、うん。分かった」
「じゃな」
「うん、吹雪も頑張ってね」
「おう」
ダルクは手を合わせて聖奈美の後ろを付いていった。
「大変だな、ダルクも」
「そうだね」
舞羽も少々困惑気味のようだ。
「でも、相当自分に自信を持ってるんだね、杠さん」
「そうみたいだな」
「強いのかな、やっぱり」
「まあ、何だかんだ言っても、去年のチャンピオンだからな」
弱いわけはないだろう。
「でもまあ、やることはやったし、何とかなるだろ」
「吹雪くんなら、きっと大丈夫だよ」
「おう、舞羽の料理を腹一杯食わなきゃいけないからな」
「うん」
モチベーションは高まっている。後は、どう転ぶかだな。

アレグロ（3）

11月28日（土曜日）

――そして、マジックコロシアム当日。

「いいね？　みんな。今日は、ワタシの弟のふーちゃんを全力で応援してあげてね？　いいですかー？」

「おー！」（全員）

何でこんな乗り気なんだ？　みんなは。応援してくれるのは素直に嬉しいけど。

「ちょっとー、先生」

「うん？　何？　翔くん」

「マジックコロシアムに出るの、吹雪だけじゃないんですけど」

「あり？　翔くんも出るんだっけ」

「言ったじゃないですか。オレも出ますって」

「あ、ごめーん。すっかり忘れちゃってたよー」

「がはぁ！？」

翔は声を上げて机につんのめった。

「ひどい、みんなして吹雪ばっかり……」

「だってよ、翔には期待しても無駄だもんな」（男子A）

「そうよね。魔法できないし、成績も悪いし」（女子A）

「初戦敗退が妥当だろう」（男子B）

「ぐにょうるむふぐは……がくっ」

あまりのショックに、翔は完全にダウンした。でもまあ、事実だから何のフォローもできないっていう。今は自分のことを心配してたほうがよさそうだ。

「ふーちゃん、こんなに期待が寄せられてるんだから、絶対に勝ってね」

「まあ、全力は尽くすよ」
「そして、舞ちゃんの手料理を……じゅる」
やっぱり、狙いはそっちかい。薄々感づいてはいたけどよ。
「それじゃあ、一旦終わります。今日は授業はないから、各自自由に行動していいから。でも、ふーちゃんの出番になったら全員集合。みんなで応援しましょー」
――さて、俺はトーナメント表を見に行くか。
……。
えーっと、俺の名前は……。お、発見。エントリーナンバー17思ったよりも出場者は多いんだな。アイツは――何だ？　一回戦がシードになってやがる。あれだろうか？　去年の優勝者だから少し優遇されているんだろうか？　分からなくもないけどよ。
「確認に来たの？　吹雪」
「ん？　あ、先輩、おはようございます」
振り返った先にはカホラ先輩が立っていた。
「後姿が吹雪っぽかったから来てみたら、やっぱり吹雪だったわね。どうなの？　調子は」
「まあ、ボチボチ。昨日は練習もしたんで、簡単にはやられないと思いますよ」
「3年の間でも結構噂になっててさ。杠さんに刺客現るみたいな話が流れてて、それってやっぱり吹雪だったのね」
「だ、誰からそんな話を聞いたんですか？」
「愛海」
やっぱりアイツか……。
「強ち間違いじゃないと私は思ってるけど」
「ありがとうございます、やる気が益々出てきましたよ」
「ふふ、本当？」
「はい、先輩は出ないですよね？」
「もちろん、私は観戦。攻撃系の魔法は得意じゃないから」
「いいとこイケると思うんですけどね、先輩ならば」

「またお世辞言って。吹雪は口が上手すぎるわよ」
「ええ？　ホントのことを言ってるだけですよ、俺は」
「ありがと。でも、やっぱり出ないわ、というより、もう参加申し込みは終了してるもの。出たくても出れないわ」
「そうですか」
「その代わり、吹雪を全力で応援するわ。少なくとも、決勝までは行かないとね」
「ぷ、プレッシャーですね」
「いつもどおりにいけば大丈夫よ。絶対いいとこまで行けるわ」
「期待に応えられるように頑張ります」
「ええ、その意気よ」
「ちょっとすいませんー。翔が通りますよー」
おっ、復活したのか。あれだけ貶されても立ち上がれるとは、ハートだけはすごく堅いようだ、翔は。
「翔もコロシアムに出るの？」
「はい、どうやらそうみたいで……」
「あの子、魔法不得意なんじゃなかったかしら？」
「と思って、出るのやめたほうがいいんじゃないかって止めたんですけど、聞かなくて」
「そうなんだ……出来ない子が出ても、どうにもならないと思うんだけどね」
「そうですよね」
「――呼びましたか？　カホラ先輩」
「きゃあ！？」
「き、急に出て来んな。びっくりするだろうが」
「いや、オレを呼ぶ声がしたからよー。何か言ったか？」
「いや、お前、本当に出るのか？」
「もちろんだぜ！　何もしないでいるよりは、出たほうが絶対にいいはずだからな。……そしてかわい子ちゃんを、いひひっ」
「欲望が隠しきれてないみたいね……」

「そんな考えで勝てるほど、この大会は甘くないんじゃないか？」
「ふっふっふ……そんなこともあろうかと対策はちゃんと考えてきたさ」
「あら、意外ね」
「先輩、オレはやるときゃやる男ですよ。見くびってもらっちゃあ困ります」
「お前、魔法使えるようになったのかよ」
「それは、オレの番になったら分かるぜ。きっと吹雪もびっくりするはずだ。『なひょー』とか言っちゃうぜ、きっと」
「いや、言わねぇし」
「とにかく、今のオレは昨日のオレとは違うぜ！　善戦して、注目を集めてみせる！」
「まあ、頑張ってね、翔」
「ありがとうございます。応援してくれたのはカホラ先輩が初めてです」
先輩の手を持って、翔はブンブンと上下に振った。
「あはは……」
「よし、じゃあオレは自分の最終確認してくるからこれで。では、アデュー」
「……急に来て急に帰って行きましたね」
「そうね、元気だけはすごいと思うわ」
そうだよな、やっぱり……。
「――まあとりあえず、自分のペースでしっかり、ね？」
「はい、了解です」
「頑張ったら、何かご褒美あげようかしら」
「え、本当ですか？」
「うん、そうねベスト４に入ったら、かしら？　何かご褒美考えとくわ」
「よっしゃ、俺、頑張ります！」
モチベーションが益々上がってきたぜ。

「さあ、第二試合に行ってみましょう。仲野健太選手（１年）ＶＳ小林啓太選手（二年）の対決です。この戦いを制し、二回戦に駒を進めるのは一体どちらの選手でしょうか？」

俺の出番は４試合目だから、もう少し時間があるな。今魔法を使うのは体力の消費になってしまうし……教室で座りながら観戦してるか。

……。

ガラガラガラ。

「ん？　舞羽か」

「あ、吹雪くん」

どうやら俺と同じことを考えてた奴がいたらしい。

「どうしたんだ？　こんなところで」

「下だと人がいて混んでるから、ここなら落ち着いてみられるかなーって思って」

「なるほど、俺と同じだな」

「あ、吹雪くんも？」

「ああ、自分の出番まで、ここで観戦しようかと」

「４回戦だったっけ？」

「ああ、後、４０分後くらいだな」

「じゃあ、一緒に見よう」

「ああ」

俺は舞羽の横に座った。

「――お、すごいなあいつ。あれを相殺しやがった」

「そうだね。あの二人、結構戦い慣れてるのかな」

「かもな。特に小林のほうはさっきから戦いの主導権握ってるし……去年のコロシアムにも出場してたのかもな」

「えーっと……」

舞羽はプログラムをペラペラと捲っている。

「舞羽、それ買ったのか？」

「えへへ、３００円だったから。どんな人が出てるのか知りたかったし」
ペラペラ。
「えっと、小林くんは……あ、ホントだ。去年のコロシアムにも出場してる。しかも去年はベスト４に入ってるよ。結構注目はされてるみたい」
「じゃあ、実力者ではあるってことだな」
「そうだね。杠さんが目立ってるから、それに隠れちゃってるだけで上位に食い込んでくる可能性は高いかも」
「もし俺が勝ち続けることができれば、準決勝あたりでぶつかるってことだな」
「そうだね、彼の戦い、見ておいたほうがいいかもしれないね」
「よし、じゃあ二人で小林をサーチングだ」
「了解」
……。
「どうやら、得意魔法は炎系みたいだな。で、仲野ってほうは補助系の魔法でかき乱す戦い方が主な戦法のようだ」
「そうだね、霧系の魔法を使ってたし、バリアも使ってたしね」
「こりゃあ、どっちが勝ってもおかしくないな」
そして、マークしておいたほうがよさそうだ。
「おっと、小林選手の魔法が仲野選手のバリアを突き破って命中したー！」
「あ、仲野くんが倒れちゃった」
「仲野選手立ち上がれるか？　――ダメです、立ち上がれません。試合終了、勝ったのは小林啓太、昨年の準決勝進出者としての実力を見せつけました！」
「小林が勝ったか」
「でも、すごいいい勝負だったね」
「だな、カードが違っていたら、どっちも二回戦に進めてたかもな」
あんな奴らが出るのが、マジックコロシアムか。想像以上の戦いに

なりそうだ。
「次は――あ」
「どうした？　舞羽」
「うん、次の三回戦に翔くんが出るみたい」
「本当かよ」
「相手は――後藤鮎美さん、三年生だね」
「あいつ、本当に大丈夫なのかよ」
「少しは張り合えるといいんだけどね」
俺たちの不安は募るばかりだ。

「では三回戦いってみましょう！　島貫翔選手（二年）ＶＳ後藤鮎美選手（三年）です」
「みなさーん、こんにちはー、島貫翔でーす！　みんな、元気ですかー？」
「……」
「あれ、みんな元気がないな。もう一回、こんにちはー！」
「……」
「おっと、まだみんなにエンジンがかかってないようだな。分かった、オレの熱い戦いで、みんなにエンジンをかけてやるぜ！」
翔、そこはライブ会場とはわけが違うんだぞ。
「えー、対するは、後藤鮎美選手、今年でマジックコロシアムは三年連続の出場、今年最後、この舞台で大輪を咲かせることができるでしょうか」
「みなさん、よろしくお願いします」
「わー！」
「えー！？　ちょっとちょっとー、みんなー、さっきと全然勝手が違うんじゃないのー？」
お前が出しゃばってるからだろうが。
「くそーみんなオレの力を試してるんだな。よし分かった。オレの力、全て出し切ってやるぜ！」

それ以前に使える魔法がお前にはあるのか？　そういえばさっき秘策があるとか何とか言ってたが。
「吹雪くん、翔くん、大丈夫なの？」
「どうだろうな、多分瞬殺だと思うが」
「善戦、はちょっと無理かな？」
「多分な」
どうやら、舞羽でもフォローは難しいようだ。
「やりきっては欲しいね。せめて」
「まあ、な」
秘策が秘策であれば、だが。
「ふん、ふん、よし、体調も万全だ」
「（不安だな……）」
「さあ、それではいってみましょう。三回戦、レディー・ゴー！」
試合開始の鐘が鳴った。
「行くわよ――エル・エルアス・グローリア、水の精よ、我に力を与えたまえ。スプラッシュ！」
「うおお！？　な、なんだ！？」
大地が激しく揺れだし、翔は体をよろつかせる。割れ目からは、勢いよく水柱があがり始めていた。
「出ました、スプラッシュ。水系の高位魔法。島貫選手、果たしてこれを交わすことはできるのか！？」
「うわ、すげぇ、何だよこれ」
「翔くん、初めから後藤さんにペースを持ってかれてるね」
「まあ、当然って言えば当然なんだけどな」
何にも魔法を使えないような奴だ。ペースを握られても何ら不思議はない。
「お、やべぇぜ」
「島貫選手、徐々に逃げ場を失っていく。尚周りから上がる水柱、このピンチ、逃れることはできるのか」
「ふっふっふ……」

「翔くん、ひょっとして笑ってる？」
「ああ、俺にもそう見えてる」
「ふっふっふ……苦節二日、頑張って練習したかいあってようやくこの技を会得することができた。もう今までのオレとは違う。オレは覚醒したんだ」
翔は大きく手を振りかぶった。
「いくぜ！　エル・エリアーデュス・精霊よ、我を守りたまえ。――マジックバリア！」
翔がそう唱えると、目の前に透明の壁のようなものが姿を現した。その壁は翔を覆い、水柱をはじき返す。
「翔くん、あんな技使えたんだね」
「みたいだな」
二日で覚えたようだが、どこで一体覚えたんだか。
「はっはっは、この技がある限り、オレに攻撃は通らない。どうしますか？　後藤さん」
「く、バリアか」
「島貫選手、見事なディフェンスを見せました。後藤選手、この状況をどう変えていくのか」
「なら、これでどうかしら。エル・エルフィディウス・雷よ我の力となれ、――ボルテクス！」
「おお、何だ!?　手から稲妻らしきものが！」
「おおっと、ボルテクスです。雷系の中でかなりの威力を誇る攻撃魔法。この攻撃が、果たして島貫選手に届くのか」
「後藤さん、すごい攻撃を連発してるね」
「だな、ボルテクスは俺も初めてみた」
さすが3年生か、高度な魔法も何のそのってところだろうか。この攻撃、翔は切り抜けることができるのか？
「もう一回だ。――マジックバリア！」
翔の前に、また透明の壁が現れる。
「これもダメか……」

「ふっふっふ、通りませんよ、攻撃は」
「これも島貫選手に通りません。島貫選手のバリアの前に攻撃が通りません」
「翔くん、すごい」
「マジかよ、あれを抑えたのか？」
しかもバリアだけで、あいつどんだけの強度のものを出現させてるんだ。
「これって、ひょっとしちゃうのかな？」
「いや、言っても相手は経験者だ、翔よりもたくさんの苦難を乗り越えてきてる。簡単にはいかないはずだ」
「そうだよね、後藤さんにも意地があるはずだしね」
「ここからだろう、きっと」
向こうだって、このままで終わるわけはない。
「攻撃は効かないってことね、なら――」
「……瞑想か」
「瞑想？」
「ああ、精神を集中させて、己の力を引き上げるんだ。翔のバリアを、能力をあげて突き破ろうって考えたんだと思う」
「大地の精霊よ、我の奥に眠りし力を解放したまえ、――ふっ！」
「後藤選手のオーラが変わった。パワーが溢れているのが伝わってきます」
「おっと、パワーアップってことですかい？」
「さっきのようには行かないわよ。――エル・エルフィディウス、雷よ、我の力となれ、ボルテクス！」
「おおっと、すごい威力の雷が指から迸っています。島貫選手、これを切り抜けることは可能なのか！？」
「威力が上がったって、こっちにはバリアがあるんだぜ！　精霊よ、我を守りたまえ、マジックバリア！」
「――あれ？　出てこないよ」
「……ついにやらかしたか」

「あれ？　出ない？　何で？」
「おおっと、島貫選手、バリアが現れません」
「――あ、そうか。バリアは魔力の消費が激しいから多用しちゃいけないんだったっけ。授業で習ったの、忘れてたぜ、えへ、翔大失敗」
「喰らいなさい！」
「え？　マジで？　あ、ひ、いぎゃあああああああああああああああああああ！！」
「あーあー」
「……でも、後藤さんみたいな女性の技を喰らって負けるなら、痛さも快感、だぜ」
「う……」
「キモっ！」
おそらく、会場全員がどん引きしたに違いない。
「し、島貫選手、立ち上がれるかどうか？」
「こんなことなら、攻撃魔法も何か覚えてくればよかった、ぜ、ふっ」
って覚えてなかったのかよ！　お前防御系だけで張り合おうとしてたのかよ。
「オレの、屍を越えていってください」
「し、試合終了、勝ったのは、後藤選手です。二回戦に駒を進めました」
「負けちゃったね、翔くん」
「まあ、誰もが予想した結果だろう」
攻撃を防いだのは、結構驚いたけどな。
「おっと、次は俺だな。召集場所に行かないと」
「あ、いよいよ吹雪くんかー。じゃあ、私も繭さんのところに行かなくっちゃ」
「頑張って勝つぜ」
「うん、私、信じてるよ」

俺は召集場所へと向かった。

アレグロ（4）

「――では、四試合目行ってみましょう。加藤洋（一年生）ＶＳ大久保吹雪（二年生）の対決です。成長著しい一年生の加藤選手が勝つか、それとも、学園で噂になっている『杠の刺客』大久保選手か。注目の対決です」

いざこの場に自分が立たされると、結構緊張するな。何にしても、全力を尽くすのみだ。

「はーい、みんないくよ？　せーのっ！」

「フレー、フレー、ふ・ぶ・き！

はい、フレ、フレふぶき、フレ、フレふぶき、ワー！」（クラスメイト）

「ふーちゃーん、頑張って～、負けちゃダメだよ～」

「おーっと、クラスメイトと担任教師の直々の応援、大久保選手にはかなりの期待が寄せられているのが伺えます」

応援は素直に嬉しいが、これで負けでもしたら赤っ恥もいいところだ。これは、負けられない、いや、負けることができない。それに、よく目を凝らしてみれば――、

「……」

杠がこちらをじーっと見てやがるし。シードだから俺の動きやら何やらを研究しておこうとでもしてるんだろうか？　何にしても、だ。結局のところは、ここで負けることはできないってことだ。二回戦に駒を進めなければ。

「吹雪ー、オレの分まで頼んだぞー！」

いや、お前はどうだっていいって。

「吹雪ー、ファイトー」（先輩）

俺のモチベーションはかなり上昇している。

「さあ、注目のカード、いってみましょう！　レディー・ゴー！」

「行きますよ、先輩」

「望むところだ」
互いにあいさつを交わしたところで試合開始だ。
「エル・エルファードゥス。水の精霊よ、我を包み込みたまえ」
実を固めてからってことか。なら、俺は――。
「炎の精霊よ、我に力を与えたまえ」
自らをブースト状態にして、魔法の威力アップを図る。
「行きます、エル・エルス・水の精霊よ、我に力を与えたまえ、ウォータードラゴン！」
加藤がそう唱えると、その名の通り、竜の形をした水がこちらに向かって襲いかかってくる。
初めから、なかなかの大技を使ってくるな。短期決戦で勝負をかけようとしているのか。水、それならこっちは――、
「エル・エルファクス、大地の精霊よ、我の絶対的盾となれ」
これで、加藤の攻撃は防げる。……。
「く、やりますね」
「大久保選手、見事に加藤選手の攻撃を防ぎきりました」
「いいぞー、ふーちゃん、その調子～」
「吹雪くーん、頑張ってー」
よし、それなら今度は、俺からいかせてもらおう。
「エル・エルファンディウス、炎の精霊よ、我に力を与えたまえ。クロスフレイム！」
指を交差させて強く念じると、十字型の炎が加藤めがけて一直線で飛んでいった。
「大久保選手の攻撃が炸裂、加藤選手、どう出るか！？」
「炎には水です。ウォーターウォール！」
現れた水の防壁に、俺の技は消えてなくなってしまう。
なるほど、加藤は水系の魔法に長けているわけか。補助系も場面に応じて使い分けていて、一年生と言えど実力はかなりあるようだ。
だとすれば、炎系の魔法は使うべきじゃないな。戦略を変えていこう。

「加藤選手、見事に大久保選手の攻撃を防ぎました」
「ふーちゃーん、もっと攻めて攻めて～」
うるさいな、応援するのはいいが、集中を途切れさすようなことは言うなよ。
――よし、なら次だ。
「いくぜ。――エル・エルフィシャス、雷よ、我に力を与えたまえ、ライトニングジュエル！」
俺の両手から、雷の玉が発射される。水には電気、属性的に、これは相性がいいはずだ。
「くっ……」
加藤は走りながら攻撃を交わしていく。俺は攻撃を続けながら加藤を追いかける。
「大久保選手の攻撃の嵐、加藤選手はこれを防ぐことはできるのか！？」
「ふーちゃーん、そのまま押しちゃえ～！」
「水の精霊よ、我に力を与えたまえ、アクアブースト！」
守りを固めてきたか、……この場面じゃ、まだあの技は使わないほうがよさそうだ。ここは押すのみ。
「――エル・エルフィデス、雷よ、我に力を与えたまえ。――ボルトブレーブ！」
「雷系の強力な魔法が加藤選手に襲い掛かる！」
「くそ……このままじゃあ」
加藤に焦りが見え始めているようだ。
「水の精霊よ、我に力を――ウォーターウォール！」
水の防壁が目の前に現れる。しかし、水に対して雷は相性がいい。力で破壊することは、果たして可能か？　……やってみなくちゃ分からないな。
もう一度だ！
「ライトニングジュエル！」
連射系の魔法でシールドの消失を狙う。

……。
……。
……。
ピシッ。
「ま、まずい……」
どうやらシールドの耐久力が落ちてきているようだ。よし、これでトドメだ。もう一度、あの技をお見舞いする。
「ボルトブレーブ！」
――衝撃波が、水の防壁を突き破った。
「うわああっ！？」
加藤の体は衝撃で後退し、体勢を崩す。俺はその隙に加藤に自分の身を近づけた。そして立ち上がる前に――。
「……」
「く、完敗です」
「大久保選手の勝利です。加藤選手を破り、見事二回戦に駒を進めました！」
「ふーちゃーん、わー！」
「おめでとう、吹雪くーん！」
「吹雪―、愛してるぜー！」
いや、今のはおかしいだろう。
「さすがですね、全然歯が立ちませんでしたよ」
「いや、今回は相性だろう。お前の実力は確かなはずだ」
「大久保先輩にそう言っていただけると、俺も嬉しいです。この調子で、さらに上を狙ってくださいね」
「ああ、サンキュー」
加藤と俺は、握手を交わした。

アレグロ（5）

あー、興奮した～。もう心臓が飛び出そうだったよ～」
「うん、確かに白熱しましたね。長期戦にはならなかったけど」
「次もあるから、ちょうどよかったんじゃない？　一回戦から長期戦じゃあ、決勝まで魔力がもたないし」
「ワタシは確信したよ。ふーちゃんは絶対に高みを目指せる、優勝はもらったも同然だよ～」
買ってきたおにぎりにパクつきながらマユ姉はそんなことを言っている。
「吹雪の次の対戦者は……後藤さんだね」
「さっき、オレの屍を越えていった先輩だな。手強いぜ、注意しろよ、吹雪」
「まあ、そのつもりではいるけどよ」
お前の屍を越えたから強いんじゃなく、もとから実力者なんだと思うが。三年連続でこの大会に出場しているわけだし。
「でも、後藤選手は確かに今大会の中でかなりの力を持っているみたいだよ」
「そうなのか？」
「うん、生徒会で仕事してるときに、そんな話を耳にしてね。カホラ先輩は知ってますよね？」
「ええ、三年生間では、結構注目されてたみたいだったわ。何と言っても皆勤賞だもんね。一年生の頃から善戦してたみたいだし、経験豊富だからね」
「翔が負けるのは必然ってことだね」
「ぐほっ、祐喜、人が気にしてることを。気だけに振舞ってるけど、結構くやしかったんだぞ」
「だってさ、いくら勝つ気があったとしたって、攻撃魔法一つもできないのに勝てるわけないじゃん。跳ね返して攻撃しようとでも思

ったの？」
「うっ……」
「今回で分かったでしょう？　やる気だけじゃ、どうにもならないこともあるってこと。後、勝てもしないのに、下心も持つものじゃないよ」
「ううん、言い返したいけど言い返す言葉も」
祐喜、すごいな。あんなはっきりと、さすがは生徒会だ。――というよりだ。
「祐喜」
「ん？　何だい吹雪」
「翔にバリア系の魔法を教えたのって、お前なのか？」
「まあ、そうなるかな」
やっぱりか。
「翔に泣きつかれてさ、何でもいいから教えてくれって」
「だから、バリアか」
「長く生き残るためには、あれが一番のはずだからね。攻撃できないから、勝ち目はゼロだって教えたけど、それでもいいって言い出してさ」
「き、奇跡が起きるかもしれないじゃないか」
「そんな何回も奇跡が続いたらそれもう奇跡じゃないでしょう」
「うぐ……」
「でも、ちょっとびっくりしたな。翔くんが魔法使ってたから」
「須藤、それってどういう意味だよ……」
「それ俺も思ったぜ。てっきり一つもできないものだとばかり思ってたからよ」
「ワタシも～」
「確かにそうね」
「み、みんなして、ひどいよ……う、うわあああっ」
翔は泣き崩れた。
「にしてもマジックバリアか、それを二日で教えるなんてすごくな

いか？　祐喜」
「こんなこと言っていいのか分からないけど、ちょっとだけ細工をしてたんだよね」
「細工？」
「うん、僕の魔力を、翔に分け与える魔法」
「なるほど。魔力が増大していたから、翔でも成功したってわけか。じゃあ魔法を使ったのは翔っていうよりは祐喜じゃないか」
「そう、なるのかな？」
「なるなる」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。確かに祐喜に魔力は分けてもらったけど、オレ、頑張って詠唱したんだぜ。だから、そこまで言わなくてもいいじゃない？　オレなりに結構頑張ったんだぜ」
「でも、使ったのは祐喜の魔力じゃないか」
「それは、そうだけどさ……」
「次は、祐喜に頼らずとも使ってみせてみろ。そしたら、認めてやる」
「うう、吹雪がいじめる」
「祐喜に出してもらっただけいいじゃないか。本来なら、魔法を使えない奴は出場できないんだぜ」
「ご、ごもっともです。チクショー、来年は魔法を使えるようになって再挑戦してやる！」
こいつ、やっぱり本能で生きてるんだな。
まあ何にしてもだ、次も全力で行こう。そのためにも、ここでエネルギーを充填しておかなければ。
俺はしっかりと昼食を食べた。

アレグロ（6）

「さあ、二回戦第二試合です。後藤選手（三年生）ＶＳ大久保選手（二年生）です。どちらも好位圧倒の試合を繰り広げた二人の対決これは見逃せません」

「フレー、フレー、ふ・ぶ・き、はい、フレ、フレふぶき、フレ、フレ、ふぶき、ワー！」

一回戦を勝ち抜いてきた相手だ、気を抜くことは許されない。後藤さんは、さっきの翔の時に雷の魔法と水系の魔法、それに瞑想を唱えていたな。それに合わせた魔法を使わなければ。特に瞑想は唱えられると、かなり戦いがキツくなりそうだ、できれば使ってほしくはない。させないためにも、隙を与えないようにしないといけないだろう。

……あの技も、できれば温存しておきたいしな。

「さあ、注目の第二試合です。レディー・ゴー！」

「行きます、――エル・エルファンディス・炎の精霊よ、我に力を与えたまえ、バーニングエッジ！」

「それならこっちは――エル・エルセリウス、アクアリングシールド！」

――シールドの前に、俺の攻撃はかき消されてしまった。

水の前では炎は通じない。それなら、俺も雷だ。

「雷よ、我に力を与えたまえ。――ライトニングジュエル！」

「来たわね、雷なら負けないわ！　――ボルテクス！」

お互いの魔法が拮抗し、そして爆発を起こした。

「おっと、序盤から激しい魔法の撃ち合いです」

さすがは雷系の高位魔法、威力が半端じゃあない。あれをまともに喰らったら、きっと立っていられないな。

「――エル・エルフィニウス、風の精霊よ、我に力を与えたまえ、ウィングセイバー！」

「くっ、噂には聞いていたけど、何て多彩な技を。――ウォーターウォール！」

……。

少々荒っぽいが、隙を与えないためには攻撃を仕掛けるのが一番だ。

ここは、ごり押しでいく。

「大久保選手の激しい攻撃、後藤選手、反撃体勢に入ることはできるか？」

「――スプラッシュ！」

水柱が足下から上がり出す。

「おっと……」

少々危なかったが、何とか持ちこたえる。休まずいくぜ。

ウォーターウォールを使ってたはず、ならもう一度、雷だ。

「――ライトニングジュエル！」

「くそ……、ボルテクス！」

あっちも打ってきたか。だが、シールドを張っている分、先程よりも威力は落ちるはず。

バーン、バーン。雷がぶつかり合い、激しい爆発が連続で起こる。

そのうちの一つが、後藤選手のボルテクスをすり抜け、シールドにぶち当たった。

「きゃあっ！？」

やはり相性がいいのか、一発の雷で水のシールドはかなりのダメージが蓄積された。このままいけば、シールドは破壊できるんじゃないか。

バーン、バーン。

「まずい……壊される」

「（――届け！）」

ズガーン。

「きゃああっ！？」

「おおっと、ついに後藤選手のシールドが壊れました！　後藤選手、ここから立て直すことは可能なのか！？」

「（このまま行くぞ！）――ウィングセイバー！」
「く、水の精霊よ、我に力を与えたまえ、――アクアマシンガン！」
水と風、相性的には同じくらいだ。……相打ちか？　水と相性がいいのは雷なんだが、後藤選手は雷系を得意としてる。相殺されることは必至だ。水と雷、どちらにも同じくらい効果がある魔法……。
バーン、バーン。
「（そうか、あるぞ、地属性だ――）」
水に強く、雷に強い。地属性なら、水を吸い込み、雷を無効化する。やってみる価値はあるんじゃないか？
善は急げだ、魔力に余裕があるうちに。
「――エル・エルティクス、大地の精霊よ、我に力を与えたまえ。――スティンガー！」
「また、別の魔法を……」
「大久保選手、またしても新たな魔法を唱えました。後藤選手、この猛攻を抑えられるのか！？」
「おのれ、――アクアマシンガン！」
……。
「き、効かない？　――ボルテクス！」
さすがの雷も、地の前には無力のようだ。
「くそ、やはり地には効果が……」
どうやら大当たりだったらしい。
「うっ、きゃあああああっ！」
俺の攻撃は、後藤選手にヒットした。
「く――」
「……」
「ま、参ったわ……」
「勝負ありです。大久保選手、後藤選手に見事勝利しました！」
周囲から大きな歓声が上がった。
「ふーちゃーん、いいぞー！」
「ふう」

安心した。正直、かなり後藤さんは手強かった。これが経験の差ってやつか。

「いい勝負でした」

「そんなことはないわ。防戦一方で、完敗よ。でも、あなたと戦うことができてよかったわ」

「自分も、先輩と戦えてよかったです」

「ありがとう。あなたなら、杠さんを倒せるかもしれないわ、頑張りなさい」

「はい、ありがとうございます」

俺たちは、握手を交わした。

アレグロ（7）

［実況者］：「勝負ありです。大久保選手、後藤選手に見事勝利しました」
［聖奈美］：「……あの後藤さんをあんなに圧倒して倒すなんて。それにあの魔法の豊富さ。く、何なのよ、あの男は」
［ダルク］：「聖奈美、どうしたの？」
［聖奈美］：「何でもないわ。さあ、試合の前にウォーミングアップしなきゃ」
［ダルク］：「う、うん」
［聖奈美］：「（今に見てなさい、絶対に、負かしてやるんだから！）」

――その後の三回戦、準決勝を俺は何とか勝ち抜くことに成功した。さすがはマジックコロシアム、上に行けば行くほど苦戦を強いられたが、辛くも勝利することに成功した。特に小林はかなり強かった、さすがは去年の準決勝出場者と言ったところだろうか。大分疲れが溜まってきたがここからが本番だ。あの女と勝負するために、俺はここまで勝ち抜いてきたわけだし。あいつに勝って、俺の実力を証明してやらなければ。
［舞羽］：「まだいけそう？　吹雪くん」
［吹雪］：「ああ、何とかな」
［愛海］：「いやー、それにしてもやるわね大久保くん。現時点でみんな脱帽状態じゃーん。何で去年出場しなかったのかみんな不思議がってるわよ」
［吹雪］：「前にも言っただろ？　俺は見るのが好きなんだ、実際に出るのは好きじゃないの」
［愛海］：「――本当は？」
［吹雪］：「いや、本当だよ」

［愛海］：「ええー？　じゃあ来年は出ないの？」
［吹雪］：「まあ、何事もなければな」
［愛海］：「うわー、つまんなーい。つまんなすぎてぬるぬるするー」
［吹雪］：「例えがわけわかんねぇよ」
［舞羽］：「愛海、もともとは吹雪くん出る予定なかったんだよ？　無理強いしちゃダメだよ」
［愛海］：「だってー。舞羽は来年も大久保くんの勇姿を見たいと思わないのー？」
［舞羽］：「え？　それは、見れるなら見たいけど」
［愛海］：「でしょー？　仮に今回優勝しちゃって来年は出ないなんて言ったら、大久保くん相当嫌われるわよ」
［吹雪］：「な、何でだよ」
［愛海］：「あなたの戦いぶりを見たくてマジックコロシアムを楽しみにしていたのにまさかの欠場、嫌われるのは目に見えてるじゃない」
［吹雪］：「そんな大げさな」
［愛海］：「大げさ？　分かってないわね大久保くんは。こういうトレースがみんなの中では成り立ってるのよ、すでに。今回の大会で大久保くんが善戦する＝大久保くんの知名度が上がる＝来年も出るものと期待される。なのに、来年の大会で大久保くんが出ない＝去年の戦いぶりを見て大久保くんのファンになった人が驚愕する＝ファンが悲しむ＝マジックコロシアム見る気がなくなる＝マジックコロシアムの人気がなくなる＝マジックコロシアムが廃止される＝大久保くんが嫌われる＝大久保くんが殺される、ってことになるのよ」
［吹雪］：「待て待て、最後の飛躍がおかしすぎるだろ」
［愛海］：「ええ？　一体どこが？」
［吹雪］：「俺の人気がなくなるっていうのは何となく分かるが、最後の二つ、コロシアム廃止と、俺が殺されるってどう考えてもあ

り得ないだろ」

［愛海］：「イッツ・ア・バイオレンス、ね」

［吹雪］：「ね、じゃねぇよ！」

［愛海］：「それだけ大久保くんには出てほしいのよ、みんなは」

［吹雪］：「そんな声は去年聞かなかったぞ」

［愛海］：「今年になって大爆発したのよ。特に今、ナウ、初出場で決勝まで進出したのよ。嫌が応にも注目は集まるでしょう」

［吹雪］：「それ言ったら、杠のが注目度は高いじゃないか」

あいつは一年生にして優勝を果たしたわけだし。

［愛海］：「確かに、彼女はすごい人気よ。去年なんて本当にすごかった。だから、今年二連覇を果たせば、もう学園中の注目は彼女に集まるでしょうね」

［吹雪］：「まあ、そうだろうな」

［愛海］：「でも、バット」

［舞羽］：「ちょくちょく英語挟まなくても……」

［愛海］：「今年はその注目も真っ二つに分かれてる、何故って、それはユーが出てるからよ大久保くん」

［吹雪］：「関係ないだろ、俺は」

［愛海］：「あるわよ、おおあり地獄」

［吹雪］：「何だよそれは」

［愛海］：「今言ったとおり、大久保くんの注目は現在鰻登りよ。何でかって、初出場で決勝まで来たからよ」

［吹雪］：「それくらいでそこまで――」

［愛海］：「来るのよ、それが」

［吹雪］：「うわっ！？」

［愛海］：「確かに、みんな杠さんには注目してるわ。去年の鮮やかな勝ち方をみんな知ってる。でも、中には順当にいくのをつまんないって思う人もいるわけよ。あまりの強さに見応えがないって意見を持ってる人もいるわけ。そこに大久保くんが現れた。しかも、初出場で決勝まで。ダークホースの登場に、みんな期待は急上昇」

［吹雪］：「それなら誰でもいいじゃねぇか」
［愛海］：「それは違うわ」
［吹雪］：「何が？」
［愛海］：「みんな知ってるからよ、あの日のことをね」
［吹雪］：「あれか……」
確かに、声でかかったからな杠の。
［愛海］：「あんな大きな声で喧嘩してれば、気づくのは当たり前でしょう？　みーんな集まってきてたわよ、何事かってね。おまけで私もたくさんの人に教えたし」
［吹雪］：「じゃあお前が情報を流したんじゃねぇかよ」
［愛海］：「大丈夫よ、主に三年生だから」
［吹雪］：「何が大丈夫なんだよ」
［愛海］：「まあまあ。それを抜きにしたって、二年生間では注目度マックスなことは確かよ」
［吹雪］：「ん、んん……」
［愛海］：「次の決勝、すごいことになってるわよー？　きっと」
何か、無駄にプレッシャーだな。
［愛海］：「名勝負、期待してるからねー？」
［吹雪］：「まあ、全力は尽くす」
［舞羽］：「頑張って、吹雪くん」
［吹雪］：「おう」
舞羽の料理、食いたいしな。
［吹雪］：「よし、行ってくる」
俺は召集場所に向かった。
……。

アレグロ（7）（後書き）

誰がしゃべってるのか分かりやすくしてみました。
よければ評価お願いします＾＾

アレグロ（8）

［カホラ］：「あ、おーい吹雪」
［吹雪］：「あれ、先輩」
召集場所の近くに先輩がいた。
［吹雪］：「どうしたんです？　こんなところで」
［カホラ］：「うふふ、ちょっとした後押し？　吹雪をね」
［吹雪］：「マジですか？　ありがたいです」
［カホラ］：「もう私との約束は果たしたものね、準決勝進出は。次は決勝。優勝したら、もっといいご褒美を考えておくわ」
［吹雪］：「そんな、恐縮です」
［カホラ］：「ふふ、頑張って？　ファイト」
先輩は握り拳を二つ作って、俺の前で力を入れた。
［カホラ］：「応援してるわ」
［吹雪］：「はい、全力で行きます！」
何ともありがたい後押しだ。余計に気合いが入ったぜ。よし、やってやる。
……。
召集場所には、すでに杠の姿があった。俺を見つけるやいなや、鋭い視線を俺に向けてくる。
［聖奈美］：「来たわね、大久保吹雪」
［吹雪］：「来たぞ、約束通りに」
［聖奈美］：「ふん、途中でやられるかと思ったけど、まあ、ここまで来れたのは誉めてやるわ」
［吹雪］：「そりゃどうも」
［聖奈美］：「でも、次はそうは行かないわよ。次の対戦者はあたし、二連覇のためにも、この上は絶対に譲らないわ」
［吹雪］：「なら俺は、それを奪うつもりでやってやるよ」
［聖奈美］：「ふふ、あなたにできるかしらね」

［吹雪］：「勝負は、ゲタを履くまで分からないさ」
勝負前から、敵意剥き出しだな俺たち。ぶっちゃければ、こんな風にいがみ合うのは好きじゃないんだが。今ばっかりは仕方ないか。
［召集者］：「じゃあお二人とも、会場に入ってください」
［二人］：「はい」
俺たちはそれぞれの場所に向かった。
［実況者］：「――さあ、マジックコロシアムもいよいよクライマックスです。会場はたくさんの観客で溢れかえっております。この戦いに勝利したものが、歴代マジックコロシアム優勝者に名前が刻まれます。これから始まる激戦を制すのは果たしてどちらなのでしょうか？　それでは、決勝に駒を進めた二名を紹介しましょう。左サイド、学園で噂になっていた杠の刺客、果たして、勢いそのままに去年のチャンピオンを破ることは可能なのか？　能力の高さは先の試合で立証済み、大久保吹雪選手です」
ものすごい歓声が周囲から上がりだした。さすがは決勝、こんな歓声を浴びたのは人生初めてだ。
［クラスメイト］：「フレー、フレー、ふ・ぶ・き。それ、フレ、フレ吹雪、フレ、フレ吹雪、ワー！」
［実況者］：「そして右サイド、去年の鮮やかな勝利はみなさんの心に焼き付いていることでしょう。一年生にして圧巻の試合を見せてくれた去年、今年も大いな期待がかかっています。二連覇なるか、前チャンピオン、杠聖奈美選手です」
一際大きな歓声がどっと上がった。だが、杠は涼しい顔をしている。もう、会場の空気には慣れているんだろう。威風堂々、そんな様子が目に見える。
［実況者］：「共に二年生の対決となります。噂の二人が、いよいよ合間見えます」
［繭子］：「ふーちゃーん、負けちゃダメよー」
［舞羽］：「吹雪くーん、頑張ってー」
［クラスメイト］：「いけー、杠ー、大久保を打ち負かせー！」

［女子生徒］：「聖奈美ちゃーん、今年も優勝を勝ち取ってー」
［実況者］：「会場のボルテージも一気に急上昇。二人の選手にたくさんの声援が飛んでいます」
杠、あいつはどんな魔法が得意なんだ？　以前の言い合いの時、氷系の魔法が得意と言っていたが……。杠に限って、それ一辺倒ってことはおそらくないだろう。得意なだけで、きっといろんな魔法が使えるはずだ。何と言っても去年のチャンピオン、実力は折り紙付きのはず。慎重にいったほうがいい、か？
［実況者］：「さあ、いよいよ試合が始まります」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
一瞬の沈黙が周囲を包む。
［実況者］：「決勝戦、レディー・ゴー！」
ついに戦いの火蓋が切って落とされた。
［聖奈美］：「いくわよ！　大久保吹雪」
［吹雪］：「ああ、こい！」
［聖奈美］：「――エル・エルゼウス、氷の精霊よ、我に大いなる力を与えたまえ。――アイシクルボム！」
やはり氷系か。氷には、炎だ。
［吹雪］：「――クロスフレイム！」
俺の魔法が、杠の魔法を打ち消す、と思われたが――。
［吹雪］：「な、何？」
［聖奈美］：「ふふ……」
杠の放った魔法は俺の魔法ではかき消えず、俺の元に一直線で飛んできた。
［吹雪］：「な、何でだ？　相性は抜群のはず」
［聖奈美］：「ふふ、あんた、あたしを誰だと思ってるの？　杠聖奈美よ、そんな簡単にかき消えるような柔な魔法なんて打たないわよ」
［吹雪］：「何？」

［聖奈美］：「まあ、せいぜい足掻くといいわ」
［吹雪］：「く、うわっ！？」
［実況者］：「おおっと、杠選手、最初からものすごい攻撃です」
溶けない氷、これは想像以上だ。今までのとはわけが違う。
［聖奈美］：「ほら、どんどんいくわよ！　――ブリザード！」
強風と共に、ものすごい勢いで雪が俺に襲いかかる。
［吹雪］：「くそ……」
もう一度だ、もう一度試してみよう。
［吹雪］：「――バーニングエッジ！」
……。
［聖奈美］：「ふふ、攻撃したつもり？　それで」
うん、やっぱりダメか……。というか、溶けない氷なんて、今まで見たことがないぞ。一体どうやって……何か打開策を立てないと。
［実況者］：「杠選手、強力な攻撃で大久保選手を押しています」
［繭子］：「ふーちゃーん、気合いよ～」
分かってるっての。でも今は、やり過ごすしかない。
［聖奈美］：「む、身のこなしが速い男ね。――アイシクルボム！」
攻撃する隙を与えない気か？
［吹雪］：「むう……」
くそ、防戦一方じゃないか俺。何だか釈然としないぞ。
［聖奈美］：「ふふ、やっぱり、あたしにはかなわないのかしら？」
［吹雪］：「何だと？　まだ始まったばかりだ」
［聖奈美］：「早く本気を出しなさいよ、大久保吹雪」
言われなくても……。そうだな、氷の魔法を相殺しなくちゃいけない理由はない。要は杠に俺の魔法を当てればいいわけだ。よし、やってやるぜ。
［吹雪］：「――エル・エルフィリス、風の精霊よ、我に力を与えたまえ、ファインブロー！」
［聖奈美］：「んう！？　この猪口才な」
杠はステップを踏んで俺の魔法を交わした。

［吹雪］：「くそ、避けたか」
［聖奈美］：「そう簡単には当たらないわよ。女を舐めないで」
別に舐めてるつもりはないんだが……。
［聖奈美］：「次いくわよ？　――エル・エルバヌス、氷の精霊よ我に力を与えたまえ。――アイスレイン！」
また氷系か、くそ、うっとうしいな。
空から、たくさんの氷が俺めがけて降り注いでくる。
［聖奈美］：「喰らいなさい！」
避けれるか？　俺は影を見て、落下してくる場所を予測する。
［吹雪］：「よっ――と」
何とか避けれた、と思ったが。
［吹雪］：「つ――！？」
どうやら掠っていたらしい。俺の右腕に傷が付いていた。
［聖奈美］：「また避けたのね、あんた」
［吹雪］：「そりゃ避けるだろ、普通」
［聖奈美］：「次は、外さないわよ。もう一度、喰らいなさい！――アイスレイン！」
［吹雪］：「この……」
またしても降り注ぐ氷の雨。それに、一発目よりもたくさん降っているように見えるのは気のせいか？
［吹雪］：「いや、気のせいじゃないぞこれは」
明らかに影の量が増えている。相殺は、可能か？　やるしかない。
［吹雪］：「――ウィングエッジ！」
俺は降ってくる氷めがめて魔法を放った。
バーン！
［吹雪］：「うわっ！？」
［聖奈美］：「きゃっ！？」
爆発音と共に、氷の破片が降ってきた。
［吹雪］：「これは、危ないな」
尖ってないだけいいが、少々失敗した。

［聖奈美］：「危ないじゃないの、ちょっと」
［吹雪］：「危ないって、お前が打ってきたんだろ」
［聖奈美］：「確かにそうだけど、あたしを巻き込むのはやめなさい！」
［吹雪］：「横暴だぞ、それは」
［聖奈美］：「何ですって、この――アイシクルボム！」
［吹雪］：「くそ……」
早く何とかしないと、いずれ直撃しちまう。ブースト状態にしたいが、なかなかその隙を与えてくれない。
［聖奈美］：「そうやって走り回ってるといいわ」
いちいち馬鹿にするようなことを言いやがって。というか、さっきからアイツの魔法の威力が上がってるように見えるのは俺の気のせいか？　今のアイシクルボムに至っても最初に打ってきた時よりも爆発力が高かったように見える。あれだけ打っているっていうのに……どういうことだ？
［聖奈美］：「ふふ……」
笑ってやがる。俺からも仕掛けたいが……。
［聖奈美］：「そこよ！　喰らいなさい！」
［吹雪］：「なっ――！？」
しまった、一瞬の隙を付かれた。
［聖奈美］：「アイシクルボム！」
［吹雪］：「く、間に合え――うぐっ……！？」
俺は大きく後ろに吹き飛ばされてしまった。
［実況者］：「大久保選手、直撃です！　大丈夫なのか！？」
［繭子］：「ふーちゃん！」
［舞羽］：「吹雪くん！」
……。

アレグロ（9）

……。

［吹雪］：「うー、イテテテ」

［聖奈美］：「く、甘かったか……」

［実況者］：「大久保選手、立ち上がりました！」

［吹雪］：「すげー威力だったぜ……」

［聖奈美］：「直撃の前に、威力軽減の魔法を唱えたのね」

［吹雪］：「ああ、出なきゃ、俺は立ってない」

［聖奈美］：「倒れていればよかったのに……」

［吹雪］：「そんな簡単にはやられんよ。じゃなきゃ、つまんないだろう」

［聖奈美］：「ふん、いいわ。あたしの力、とくと見せてやるんだから」

周囲からは、何故か大きな歓声が上がった。

［実況者］：「さすがは決勝戦、両者、一歩も譲りません」

［繭子］：「ふーちゃーん、負けるなー」

［翔］：「吹雪ー、気合いだー！」

［女性生徒］：「聖奈美ー、その調子でガンガンいっちゃえー」

［男子生徒］：「大久保は疲れてるぞ、押し切れー！」

どうやら会場はもう一段階ボルテージが上がったようだ。

それにしてもだ、さっき喰らってみて分かったが、やっぱり杠の魔法の威力は増幅しているように感じた。威力を軽減してもあんなに俺の体は吹き飛ばされた。一体あいつは何をしたんだ？　そんな素振りは見えなかったはずだが……。

［聖奈美］：「いくわよ。――エル・エルジオス、氷の精霊よ、我に力を与えたまえ。――アイスインパクト！」

よく目を凝らせ、杠の動きを読みとるんだ。俺は攻撃を交わしながら、杠をじっと観察する。

［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
杠のオーラが、さっきよりも濃くなっているような……。気のせいか？　さっきまでは気づかないような感じだったのに今ははっきり分かる。
［聖奈美］：「もう一度、――アイスインパクト！」
［吹雪］：「――ライトニングジュエル！」
防御してばかりでは気づかれる。一度ここは攻撃をしておく。
［聖奈美］：「く、……そんなのじゃあ効かないわよ、――ブリザード！」
［吹雪］：「……」
氷系がほとんどだというのに、こんなにも厳しい戦いを強いられるのは、やはり杠が実力者だってことだろう。いい加減何とかしないと、俺の攻撃は奴に届かない。
［聖奈美］：「ほら、今度はどうかしら？」
［吹雪］：「ちっ……」
［実況者］：「大久保選手、怒濤の攻撃に耐えられるのか？」
よく見るんだ、きっと、きっと何かがあるはず。
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ん？」
気のせいだろうか？　杠の口がわずかに動いていたように見えた。
詠唱は終わっているはずなのに……。
ひょっとしたら、あいつは本当に単純なことをやってたんじゃないか？　このままじゃあどっちみちやられる。温存してきた魔力を使って、一度試してみよう。とりあえず、時間を稼ぐためにも――。
［吹雪］：「――エル・エルフュリス、風の精霊よ、我を守る盾となれ。――エンブレイス！」
［聖奈美］：「く、何？　――バリアね、く、見てなさい、すぐに破壊してやるんだから」
これでしばらくは時間が稼げるはず。今のうちに魔法の詠唱をしな

ければ。
［聖奈美］：「――エル・エルゼクス、炎の精霊よ、我に力を与えたまえ」
くそ、あいつもあれが使えたのか。
［聖奈美］：「これで、すぐに壊してあげるわ。ふふ」
ただでさえ能力が上昇してるってのに、これ以上上げてどうするっていうんだ。急いで唱えなければ。とりあえずは、落ち着くんだ、俺。精神を集中させて、詠唱に入る。
［吹雪］：「――我を包み込む暖かな光よ。その力を今、我に与えん。――エル・エルフィリード、マーキス。光の精霊よ、我に大いなる力を与えたまえ。――セイクリッドスパークル！」
詠唱と共に、目映い光が杠を包み込んだ。
［聖奈美］：「えっ！？　な、何！？」
どうやら状況を飲み込めていないらしい。光は尚輝きを増し、杠を包み込んでいる。
［聖奈美］：「うっ、な、何よこれ……どうして」
［実況者］：「な、何が起こったのでしょう？　これは大久保選手の魔法でしょうか？」
俺はその状況をじっと見続ける。……お、徐々に杠のオーラが消えていくぞ。読みは、当たったか？　しばらくして、輝きはなくなり、消えていった。だが、それと共に、杠のオーラも完全に消えていた。
［聖奈美］：「く……あんた、一体何を――」
［吹雪］：「魔法だ、お前が気づかれないように唱えていた覚醒呪文を掻き消したのさ」
［聖奈美］：「――っ！？」
［吹雪］：「最初は全く気づかなかった。そんな素振りは全く見えなかった、いや、見れなかったからな。それはそうだ、お前は俺に攻撃を放ちながら唱えていたからだ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「普通の奴なら、一つの魔法を唱えている最中じゃあ集

中力が続かないから唱えることはできない。考えてみれば単純なことだったんだ。ただ、そんなことが学生でできるなんて、って考えが先に働く。お前はそれを逆手にとったってわけだ」

［聖奈美］：「……ふ、そうよ。あたしは二つの魔法を同時に詠唱できるの。これに気づいたのは、あなたが初めてよ」

［吹雪］：「やっぱりか……」

［聖奈美］：「でも、それが分かったところであたしを倒せるのかしら？　勝負はまだ終わってないわよ。それにあなたが唱えたのは光魔法、消費は激しいんじゃない？」

さすが、伊達に成績が優秀じゃない、か。

［聖奈美］：「このまま押し切ってやるわ。見てなさい！」

［実況者］：「た、大変なことになってきました。このような試合が近年でありましたでしょうか！　これこそ決勝戦、両者のハイレベルな攻防に目が離せません！」

［繭子］：「みんなー、ふーちゃんに声援をもう一度送りましょー！　いくわよーせーの――」

［クラスメイト］：「フレー・フレー、ふ・ぶ・き。それ、フレ、フレ吹雪、フレ、フレ吹雪、ワー！」

みんなサンキュー、まだ、頑張れそうだ。

［聖奈美］：「さあ、まだまだいくわよ！　――アイスエッジ！」

よし、ここは戦法を変えていこう。奴の意表を突いてやれ。

［吹雪］：「……」

俺は、気づかれないように準備を始める。

［聖奈美］：「ふん、やっぱりもう魔力は残ってないんじゃないの？」

［吹雪］：「く……」

［聖奈美］：「避けるのも辛いのかしら？　ふふ、いいわ、じわじわ追い詰めてあげる」

ブーストは解けたといっても、威力が大きいのは変わらない。直撃をしないように最新の注意を払いながら、俺は準備を進める。

［聖奈美］：「もう、しつこいわね。――アイシクルボム！」
よし、後少し――。
［聖奈美］：「喰らいなさい！」
［吹雪］：「何！？　――うぐっ！？」
直撃、はギリギリで避けたが、それによって起こる爆風までは避けられなかった。俺の体に切り傷がついていく。
［聖奈美］：「ふふ、どお？　大人しくあきらめたら？」
［吹雪］：「……ふ、ここからさ」
傷は負ってしまったが、準備は出来た。
［聖奈美］：「何よ、笑ってる余裕なんてあるの？」
杠がこちらににじり寄ってくる。――その瞬間。
ズガーン。
［聖奈美］：「きゃあっ！？」
杠の近くで、大きな爆発が起こった。すんでの所で交わしたようだが、動揺は隠し切れてない。
［聖奈美］：「今のは一体……まさか、あなた……」
［吹雪］：「ふ、俺が何もしないでいると思ったら大間違いさ」
［聖奈美］：「くそ……さっきのは演技だったのね」
俺が何をしたか。
俺は逃げる振りをしながら、爆弾を一帯に埋め込んでおいたんだ。
詠唱して出現させた球体のボムを地面一帯に設置する。よく目をこらさなければ見えない大きさ、まして地面が荒れた今の状態ならさらに撹乱が利く。逃げながら詠唱するのは少々きつかったが、それでも不思議と集中力は続いていた。
奴の集中力を削るにはこれが最善の策だろう。
［聖奈美］：「くそ、あたしとしたことが……」
［吹雪］：「これで、互角以上に戦えるな」
［聖奈美］：「そ、そんなことないわよ。これくらいで、あなたと互角になんて――」
ズガーン。

［聖奈美］：「っ――！？」
強気ではあるが、少々不利になったのは確かだろう。よし、今のうちに攻撃を仕掛けるぞ。
［吹雪］：「――クロスフレイム！」
［聖奈美］：「く、この……」
足下に注意を払っているせいか、杠の動きは大幅に鈍ってきている。能力が上がっていない今が、奴を追い込む絶好のチャンスだ。
［吹雪］：「――バーニングエッジ！」
［聖奈美］：「ん、ふっ……」
ただ闇雲に攻撃をしているわけじゃない。炎の魔法を打っているのには理由がある。たとえ杠に命中しなくとも――。
ズガーン。
［聖奈美］：「きゃあっ！？」
地面にばら撒いた魔法爆弾の誘発を可能にする。
［聖奈美］：「うっ、集中さえできれば……」
［吹雪］：「そう簡単にはさせないぜ。――エル・エルウィアス、炎の精霊よ、我に力を与えたまえ。――ファイヤーブレード！」
［聖奈美］：「っ、避けなきゃ……――！？　しまった、足下に……」
［吹雪］：「そこだ！」
俺は足下の爆弾めがけて魔法を放った。
［聖奈美］：「きゃあああああっ！」
爆発が巻き起こり、土煙が舞い上がる。俺は急いで杠の近くに走り寄る。
［聖奈美］：「く……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「う、……ま、負けたわ」
その言葉と同時に、周囲から大きな歓声とどよめきが沸き起こった。
［実況者］：「大久保選手の勝利です！　去年のチャンピオンを破り、見事優勝を手にしました！」

［繭子］：「きゃー、ふーちゃーん！」
［舞羽］：「吹雪くん、おめでとー！」
［翔］：「吹雪ー、大好きだー」
男に言われても、あまり嬉しくないな。でも今は、そこまで悪い気はしなかった。勝った、んだよな？　俺。
［聖奈美］：「……く」
杠のこの様子を見る限り、どうやら本当のようだ。まさか本当に勝てるとは……よく頑張ったな、俺。今はこの雰囲気に酔ってもいいかな？
［吹雪］：「……ん！」
俺がガッツポーズをすると、会場からはたくさんの歓声が再び起こった。

アレグロ（10）

［聖奈美］：「うう、何でなのよ……このあたしが……」
［ダルク］：「聖奈美、そんなに落ち込まなくても……」
［聖奈美］：「だって、あんなにあたしが優勢だったのに、最後はあんなあっけなく……」
［ダルク］：「吹雪の実力が一回り大きかったんだよ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「失礼します。……お、まだいたか、杠」
［聖奈美］：「大久保吹雪！」
［吹雪］：「な、何だよ。そんなに驚いて」
こっちまで驚いてしまう。
［聖奈美］：「な、何の用よ」
［吹雪］：「ああ、ちょっとな」
［聖奈美］：「あたしのことを馬鹿にしに来たのかしら？」
［吹雪］：「んなことしねーよ。お前じゃあるまいし」
［聖奈美］：「あ、あたしは馬鹿になんてしてないわよ！　人聞きの悪いこと言わないでちょうだい」
［吹雪］：「俺のこと思い切り侮辱したじゃないか、初見の時」
［聖奈美］：「あれは罵声じゃないわ。あたしの存在表明よ」
［吹雪］：「何だよそれ……」
［聖奈美］：「あたしは馬鹿にしようと思って馬鹿にしたことなんて一度もないわ」
［吹雪］：「その言い方だと、無意識には馬鹿にしてることになるぞ」
［聖奈美］：「そういう意味じゃないわよ。あーもう、納得しなさいよ、男でしょう、あんた」
［吹雪］：「性別は関係ねーだろ」
［聖奈美］：「もう細かいこと気にする男ね。いいから用件を言い

なさいよ」
［吹雪］：「へいへい、分かったよ」
こんな風なやりとりをしに来たんじゃないしな。
［聖奈美］：「で、何よ？　一体」
［吹雪］：「とりあえずは……大丈夫か？　傷」
［聖奈美］：「……は？」
［吹雪］：「だから傷だよ。さっき、俺が起こした爆風で切り傷ついてただろ？」
［聖奈美］：「何であんたがそんなことを気にするのよ」
［吹雪］：「そりゃあ、お前女だし。俺のせいで傷跡が残ったりしたら悪いだろ？」
［聖奈美］：「あっそう。問題ないわよ、フェルシア先生に手当してもらったし、試合の前に保護魔法はかけてもらってたもの、傷があったとしてもすぐに引くわ」
［吹雪］：「そうか、なら安心した」
［聖奈美］：「変な男ね、あんた……」
［吹雪］：「お前ほどじゃないさ」
［聖奈美］：「な、何ですって！？」
［吹雪］：「あーあー、悪かったって。そんな怒るなよ」
［聖奈美］：「やっぱり、からかいにきたんじゃないの？　あんた」
［吹雪］：「何でそんな風に思うんだよ」
［聖奈美］：「だって……あたしに勝ったじゃないの、あなた」
［吹雪］：「ん？」
［聖奈美］：「だから、優勝したじゃないの、さっきの試合で。絶対勝つとか言って負けたあたしを笑おうと思ったんじゃないの？」
［吹雪］：「……そんなこと思うわけないだろ」
［聖奈美］：「同情なんていらないわよ」
［吹雪］：「同情じゃないって、お前はマジで強かったよ。あの時、軽減魔法を唱え遅れてたら俺は負けてたし」
［聖奈美］：「たらればなんてどうでもいいのよ。あんたが勝者で

あたしは敗者。その事実に変わりはないもの」
［吹雪］：「お前らしくないな、負けたことを潔く認めるなんて」
［聖奈美］：「認めざるを得ないじゃないの、あんな高度な魔法を使われたんだからね」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「あの光魔法を使えるなんて、あんた、一体何者なの？」
［吹雪］：「……俺は普通の学生だよ」
俺がすごいっていうよりは、俺の親がすごいはずだからね。そんなことよりだ。
［吹雪］：「それより、お前に一つお願いがある」
［聖奈美］：「お願い？」
［吹雪］：「ああ、お願い」
［聖奈美］：「何よ、一体」
［吹雪］：「その……これも何かの縁だからよ。変ないがみ合いはこれまでにしないか？」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「今回の試合で分かったよ。お前は優れた魔法使いだ、みんなが認めるのも今回で納得できた。お前にはそれだけの実力が備わっている。だから、見くびってたことを謝らせてくれ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「だからさ、あんな形といえど、知り合ったわけだし、できれば仲良くしないか？　お前が悪い奴じゃないことはダルクから聞いてるしな」
［聖奈美］：「なっ――ダルク、あなた」
［ダルク］：「えへへ、ごめんね」
［聖奈美］：「……ま、まあ、あなたがそこまで言うのなら、少しは考えてみてあげてもいいわよ？　あたしが実力者だってことを素直に認めたのでしょう？」
［吹雪］：「ん、まあな……」

［聖奈美］：「いいわ、そのお願い、聞いてあげる。あなたが言ったんだから、そっちから喧嘩とか売ったりしてこないでよね？」
［吹雪］：「俺、そんなことした覚えなんて――」
［聖奈美］：「男なら二つ返事で聞き入れなさいよ」
［吹雪］：「わ、分かったって」
［聖奈美］：「……ちょっと癪だけれど、今回はあなたの実技の結果は認めてあげるわ。ズルをしてあたしを倒すことはできないでしょうからね」
［吹雪］：「そりゃあ、ありがたい」
［聖奈美］：「ただし！　次はあたしが絶対勝つわ、覚えておきなさい」
［吹雪］：「ああ、望むところだ。――というわけでだ」
［聖奈美］：「え？　何？」
［吹雪］：「握手だ、仲直りの印、か？」
［聖奈美］：「ま、まあ、いいけど？」
俺の差し出した手を杠はぐっと握り返した。
［ダルク］：「吹雪、優勝おめでとう」
［吹雪］：「サンキュー、ダルク」
［ダルク］：「聖奈美のこと、これからよろしくね」
［聖奈美］：「ちょっと、ダルク」
［吹雪］：「こちらこそだ、お前ともしておかないとな。これからよろしくな、ダルク」
［ダルク］：「うん、よろしく」
俺の小指くらいの小さな手で、ダルクは俺の手に自分の手を重ねた。
［吹雪］：「さて、用件は以上だ。俺はお暇するよ」
［聖奈美］：「あ、そう」
［吹雪］：「じゃあな、いい勝負だったぜ」
……。
［ダルク］：「ね？　だから言ったでしょう？　吹雪は悪い人じゃないって」

［聖奈美］：「ま、まあ、物わかりはいいんじゃない？　あたしの実力を認めたようだしね」
［ダルク］：「ふふ……」
［聖奈美］：「な、何よダルク」
［ダルク］：「別に、何でもない」
［聖奈美］：「大久保吹雪、ね」

アレグロ（11）

［場所：道路］

［吹雪］：「悪い、遅くなった」
［舞羽］：「ううん、大丈夫だよ」
［吹雪］：「よし、帰ろう」
［舞羽］：「うん」
俺たちは帰り道を歩き出す。
［舞羽］：「はい、コレ」
［吹雪］：「おお？　サンキュー」
［舞羽］：「優勝したお礼」
［吹雪］：「これから褒美をもらうってのに、いいのか？」
［舞羽］：「いいの。それに、いつも手伝ってもらってるからね」
［吹雪］：「宿題か？」
［舞羽］：「その他もろもろ」
［吹雪］：「じゃあ、ありがたくいただくよ」
俺はプルタブを開けて一口飲んだ。
［吹雪］：「ぷは、試合後のジュースは格別だな」
［舞羽］：「改めて、優勝おめでとう、吹雪くん」
［舞羽］：「サンキュー、お前たちが応援してくれたおかげさ」
［吹雪］：「あ、聞こえてた？」
［吹雪］：「もちろんだ、メチャクチャ聞こえてたぞ」
［舞羽］：「届いてよかったよ」
［吹雪］：「だから、喉が少し枯れてるんだろ？」
［舞羽］：「えへへ、こっちも燃え上がっちゃってたから。見てるだけですっごく興奮してたよ」
［吹雪］：「マジか」
［舞羽］：「おおマジだよ。特に決勝戦はすごく見応えがあったよ」

［吹雪］：「本当か？」
［舞羽］：「うん、あれこそが決勝戦って言うんだね。再認識したよ」
［吹雪］：「確かに、すごい戦いだったな」
あんな激しい試合をするのは、今回限りかもしれない。
［舞羽］：「私なら5秒で気絶は必至だね、きっと」
［吹雪］：「爆発がよく起こってたしな。確かに危険ではあったな」
［舞羽］：「まるで戦争を見てるみたいだったよ」
［吹雪］：「戦争みたいなもんだろ、あれは」
地雷みたいなものも設置してたからな。
［舞羽］：「吹雪くん、前世は将軍だったりして」
［吹雪］：「それは、ないんじゃないか？」
［舞羽］：「そうかな？」
［吹雪］：「神のみぞ知る、ってか？」
［舞羽］：「だね」
［吹雪］：「あれ？　そういえばマユ姉はどうした？」
［舞羽］：「この後に仕事が入ってるんだって。パーティーまでには帰ってくるって言ってたよ」
［吹雪］：「そうか、ならいい」
俺たちと同じ時間に帰れるってのも少々違和感があるしな。
［吹雪］：「しっかり職務を全うしてほしいもんだ」
［舞羽］：「大丈夫だよ、きっと。でも、十二月は忙しくなりそうだね」
［吹雪］：「まあ、大事な行事があるからな」
そう、ピアニストとハーモニクサーの選出。問題なく年を越すために、教師はいつも以上に周囲に気を配る必要がある。
［舞羽］：「誰が選ばれるのかな？」
［吹雪］：「ひょっとしたら、お前だったりして」
［舞羽］：「えー？　それはない、絶対ないよー」
［吹雪］：「分かんないぞ？　なんちゃってピアノ経験者だからな、

舞羽は」

［舞羽］：「確かに少しやってたけど、だからって優遇されるわけじゃないし」

［吹雪］：「でもまあ、可能性はないわけじゃないだろ？　全校生徒及び教師に可能性があるんだ。その中にお前も入ってることに変わりはない」

［舞羽］：「なら、吹雪くんにだって可能性はあるじゃない」

［吹雪］：「いや、俺はないだろ」

［舞羽］：「ええ！？　おかしくない？　その返答」

［吹雪］：「俺にはピアノの才がないからな」

［舞羽］：「そんなの理由にならないじゃない」

［吹雪］：「いや、なる」

［舞羽］：「吹雪くん、言ってること矛盾してない？」

［吹雪］：「そんなことはない。でも、俺は有り得ない、どこがおかしいっていうんだ？」

［舞羽］：「有り得ないってことはないと思うんだけど」

［吹雪］：「まあまあ、納得しておけって。な？」

［舞羽］：「え、ええ？　う、うん……」

［吹雪］：「うん、それでこそ舞羽だ」

［舞羽］：「その言いくるめ方が納得いかないよ……」

首を傾げる舞羽だが、まあ気にしないでいいだろう。

［吹雪］：「さ、早く家帰ろうぜ。俺もう腹減って」

［舞羽］：「そうだね、少し急ごっか」

［吹雪］：「優勝したから豪勢なんだよな？　今日の晩飯は」

［舞羽］：「うん、腕によりをかけて作るよ」

［吹雪］：「そりゃ楽しみだ」

今からすでに涎が出そうだ。

［場所：吹雪の家］

［繭子］：「――じゃあ、ふーちゃんの優勝を祝して」
［三人］：「かんぱーい！」
吹雪「サンキュー、みんな」
俺は三人とグラスを合わせた。
［繭子］：「わーい、ごちそうだー」
［舞羽］：「いっぱい作ったから、たっくさん食べてね」
［繭子］：「やったー」
［フェルシア］：「マユ、今日は吹雪くんがメインだから、少しは加減して食べきゃダメよ？」
［繭子］：「うん、加減していっぱい食べるよ」
［フェルシア］：「本当に分かってるのかしら……」
すみません、フェルシア先生、こんな姉で。
［繭子］：「ねえ、食べていい？　もう仕事でお腹ペコペコなの」
［舞羽］：「うん、どうぞ」
［繭子］：「わーい、いっただっきまーす！」
さて、俺も食うか。俺は手前にある料理を皿に取った。
［繭子］：「あむあむ……、んー、おいしー」
早速俺も口に運んだ。
吹雪「おお、すっげー美味い」
［舞羽］：「ホント？」
吹雪「ああ、メチャクチャ」
［舞羽］：「よかったー」
舞羽は安堵の表情を浮かべた。
吹雪「こりゃあ箸が止まらないな」
［舞羽］：「フェルシア先生もどうぞ」
［フェルシア］：「ええ、いただくわ」
［繭子］：「あむあむんむ……、ん、はぐはぐ」
吹雪「マユ姉、飲み込んでから次の口に入れろよ」
［繭子］：「んむんむ……んんっ！？　んぐぐー」
言ったそばから……。

吹雪「ほら、これ飲め」
［繭子］：「んっ、んっ、んっ……ぷはっ！　ほえー、助かったよ」
［吹雪］：「舞羽の料理は逃げないから、もう少し落ち着いて食いな」
［繭子］：「はーい」
［フェルシア］：「あ、美味しいー。舞羽ちゃんかなり料理のスキルが高いわねー」
［舞羽］：「ありがとうございます。先生に言ってもらえると嬉しいです」
［フェルシア］：「これは将来いいお嫁さんになるわね」
［舞羽］：「お、お嫁さん!?」
［フェルシア］：「うん、先生保障するわ」
［舞羽］：「あ、ありがとうございます」
舞羽の顔は赤くなっていた。
［吹雪］：「マユ姉、口拭け、油まみれだぞ」
［繭子］：「え？　これグロスだよー」
［吹雪］：「嘘言うな、そこまでピカピカなグロスなんてないだろ」
俺は布巾をマユ姉の口元に持っていく。
［繭子］：「んむー」
［吹雪］：「ちょい落ち着けって。……よし、適度に拭くようにしろ」
［繭子］：「ふーちゃん、マナーに厳しい」
［吹雪］：「マユ姉が無頓着すぎるんだ。女だろ？　あんたは」
［繭子］：「家でくらいは……」
［吹雪］：「親しき仲にもって言葉知ってるだろ？　口を拭くくらいは定期的にしろ」
［繭子］：「んー、はーい」
［フェルシア］：「初見の人は、マユのほうが義姉だなんて絶対に思えないでしょうね」
［繭子］：「何をー？　ワタシは義姉だよー」

［フェルシア］：「それは知ってる、だから初めて見た人の話よ。舞羽ちゃんもそう思うでしょ？」
［舞羽］：「ええ？　……あ、それ、は……」
［繭子］：「すっげー歯切れ悪いよ舞ちゃん！」
［フェルシア］：「マユ、吹雪くんがいて本当によかったわね」
［吹雪］：「何ですか？　急に」
［フェルシア］：「だって、こんな誰でも分かるようなことを懇切丁寧に教えてあげてくれるんだもの。普通はそんな風に教えないわよ、だって考えなくても分かることなんだもの」
［繭子］：「フェルー、ワタシのことバカにしてるでしょー？」
［フェルシア］：「そんなことないわよ、マユはちゃんと分かってるんでしょ？　やってないだけで」
［繭子］：「うぐ……」
［フェルシア］：「吹雪くん、これからもよろしくね、マユのこと」
［吹雪］：「まあ、出来うる限りで」
［繭子］：「ワタシ、子供じゃないもん、教師だもん」
その言い分が子供だということを物語っているな。
［フェルシア］：「――にしても、いい試合だったわね、今日の決勝戦」
［舞羽］：「そうですね」
［繭子］：「だねー」
三人が口々にそうつぶやいた。
［フェルシア］：「見応え十分、近年稀に見る好勝負だったわ」
［吹雪］：「周りではそう見えてたんですか？」
［舞羽］：「もちろんだよ。言葉が出てこないけど、とにかくすごかったよ」
［繭子］：「ドカーン、ズガーン、すごかったよー」
その効果音は必要だったのか？
［フェルシア］：「あの杠さんを打ち負かしたんだもんね、吹雪くんの実力と可能性は計り知れないわ」

［吹雪］：「いや、でも、あいつは手強かったですよ、かなり」
［フェルシア］：「チャンピオンだもんね、彼女は」
［吹雪］：「あんなに強い相手は初めてでしたよ。正直、倒せる自信はあまりなかったです」
［フェルシア］：「でも倒せたからいいじゃない」
［吹雪］：「そうですね、嬉しかったですよ」
［舞羽］：「そういえば、実技の結果は認めてもらえたの？　吹雪くん」
［吹雪］：「ん？　ああ、何だかんだで認めてくれたよ。でも、次はあたしが勝から覚悟してろって言ってた」
［繭子］：「じゃあ負けられないね、ふーちゃん」
［吹雪］：「うん、来年も勝てるように努力するつもりだ」
［舞羽］：「吹雪くんなら、きっと勝てるよ」
［吹雪］：「サンキュー舞羽。今からやる気出てきたぜ」
［舞羽］：「うん、頑張って」
［吹雪］：「あ、でも舞羽も頑張るんだぜ？　受けるのは俺だけじゃないからな」
［舞羽］：「う、うん。最善は尽くすよ」
［フェルシア］：「担当の生徒が真面目でよかったわね、マユ」
［繭子］：「うん」
――そんな感じの楽しい祝賀会だった。大きなイベントが終わった次は、大きな行事がやってくる。

アニマート（1）

12月1日（水曜日）

［場所：教室］

［繭子］：「えー、いよいよ明日はピアニストとハーモニクサーの選出があります。生徒のみなさんは絶対に出席するように。何があってもね、たとえ先生が何かしらの理由で倒れたとしても――」

［吹雪］：「無駄話はいりませんよ、先生」

［繭子］：「むうー、まだ話始めてもないのに」

［吹雪］：「先生が倒れるなんてあり得ません、それで終わる話ですよ」

［繭子］：「ふーちゃんのけちんぼー」

……全く、新しい月に入っても何ら変わりはないな。大事なことだって言うのに、マユ姉が言うと軽い話に聞こえてしまうから不思議だ。

［舞羽］：「いよいよ明日だね、吹雪くん」

［吹雪］：「そうだな、心の準備はできたか？　舞羽」

［舞羽］：「え？　何の？」

［吹雪］：「ピアニストになる心の準備」

［舞羽］：「ええ？　だ、だから私になると決まったわけじゃないってばー」

［吹雪］：「あれ？　そうだったか？」

［舞羽］：「そうだよー、少し前にその話したじゃない」

［吹雪］：「はは、でもまあ準備くらいしとけよ。可能性はないわけじゃないんだ」

［舞羽］：「うーん？」

［翔］：「にしても、実際誰がなるんだろうな、今年は」

［吹雪］：「おわっ！？　だから唐突に出てくるなって」
［翔］：「歩いて2秒の距離じゃないか。オレが来ることを察してくれよ、心の友だろ？」
［吹雪］：「何だそれは？　お前の心の中だけに住んでる人か？」
［翔］：「その返しには無理があるだろ吹雪ちゃん！　え？　吹雪はオレのこと親友と思ってないのか？」
［吹雪］：「……」
［翔］：「黙ったー！？」
［吹雪］：「ノーコメントってことにしてくれ」
［翔］：「うぐ、翔大ショック……」
［祐喜］：「吹雪ー、じゃあ僕は？」
［吹雪］：「ああ、祐喜は大事な友達だよ」
［翔］：「何ですとー！？　ちょちょちょ、吹雪さん、何かおかしくありませんか？」
［吹雪］：「ん？　何がだ？」
［翔］：「オレの時はノーコメントなのに、どうして祐喜は即答なんですか？」
［吹雪］：「俺にだって、言いたいこと、言いたくないことはあるんだ」
［翔］：「オレにも即答してくれてもいいんじゃないの！？　オレはお前のこといい奴だと思ってるんだぜ？」
［吹雪］：「あ、そうなのか？　それはありがたい」
［翔］：「だろ？　じゃあ、お前はオレのことどう思ってるの？」
［吹雪］：「……」
［翔］：「また黙ってる！」
［吹雪］：「ノーコメントってことで」
［翔］：「うがー！？　吹雪のイジワルー」
翔はそのまま走って教室を出ていってしまった。
［祐喜］：「いいのかい？　泣いてたみたいだけど？」
［吹雪］：「まあ、あれぐらいで機嫌を損ねる奴じゃないだろ。出

なきゃナンパは出来ないだろう」
［祐喜］：「それもそうだね」
［愛海］：「でも、ホントに気になるわよねー？　ピアニストとハーモニクサー」
今度はこいつか……。
［愛海］：「あ、大久保くん、今、今度はこいつかーって思ったでしょう？」
［吹雪］：「え？　そんなこと思ってないぞ？　断じて」
［愛海］：「嘘、顔に書いてるわよ？　あー、日野かよー、折角舞羽と楽しくしゃべってたのによーって」
［舞羽］：「え！？」
［吹雪］：「おい、勝手に俺の心の内を予想すんな。思ってないぞ、別にそんなことは」
［愛海］：「えー？　嘘ばっかり」
［吹雪］：「本人が違うと言ってるんだから、お前は否定できないだろ」
［愛海］：「舞羽がかわいそうー」
［吹雪］：「別にそういう意味で言ったんじゃないぞ？　分かってるよな？　舞羽」
［舞羽］：「う、うん。もちろん」
［愛海］：「んー、つまんないわね、その反応。そこはもっと媚びるべきよ？　舞羽」
［舞羽］：「こ、媚びる？」
［愛海］：「私は、二人でモーニングトークを楽しみたかったなーとか、もっと側にいたい、とか。何かあるでしょ？　大久保くんが気になるような言葉」
［舞羽］：「ええ？　む、無理だよ、私にはそんな……」
［吹雪］：「俺がすぐ横にいること、分かってるよな？」
［愛海］：「……横に大久保くんなんていなかった」
［吹雪］：「勝手に俺の存在を消すな！」

［愛海］：「そう、こういう突っ込みを私は待ってたのよ。大久保くんグッジョブ！」
［吹雪］：「お前、結局何の話がしたいんだよ」
［愛海］：「ああ、そうだった。すっかり話が逸れちゃったわ。もー、舞羽ったらー」
［舞羽］：「ええ？　私のせいなの？」
［愛海］：「冗談よー、本気にされると私が困っちゃうわー」
舞羽も大変だな……。
［愛海］：「で？　何の話だったっけ？」
［祐喜］：「ピアニストの話じゃなかったかな？」
［愛海］：「ああ、そうそう。誰になるのかしらねー？　ピアニスト&ハーモニクサー」
［吹雪］：「さあな、俺たちが決めることじゃないから分からないだろ」
［愛海］：「そんな返答、私は求めてないわよ大久保くん」
指差されても困るんだが……。
［愛海］：「誰でもいいから、とりあえず答えは言ってみるものでしょ？　じゃなきゃ一生答えは導き出せないわ」
［吹雪］：「俺たちが導き出す必要性は特にないはず」
［愛海］：「いいのいいの、こういうのも楽しいじゃない。はい、シィンキングターイム！」
仕方ないな……。俺たちは言われるままに考える。
［愛海］：「はい、じゃあヨッシー、どうぞ」
［祐喜］：「ん、僕は聖奈美かなって思うな」
［愛海］：「聖奈美っていうと、杠さんだね」
［祐喜］：「そう、生徒会長だし、少し融通聞かないけど、悪い人じゃないからね」
［愛海］：「伊達に一緒に仕事してないわねーヨッシーは」
［祐喜］：「まあね」
［舞羽］：「オッケー、じゃあ次は舞羽、どうぞ」

［舞羽］：「私は……、カホラ先輩、かな？」
［愛海］：「おー、なるほど。して理由は？」
［舞羽］：「え？　理由って聞かれると、とにかく、やってくれそうな気がするから。カホラ先輩はすっごく頼れる人だし」
［愛海］：「確かにねー、先輩は何でもできるもんねー、選ばれるかもしれないわねー。うん、オッケィ。じゃあ最後大久保くん、どうぞ」
［吹雪］：「ん？」
［愛海］：「ちなみに言っておくと、今出た二人以外はダメだよ？　被るのはＮＧって方向でよろしくー」
……だとしたら、もう横にいる奴以外選択肢はないな。
［吹雪］：「ん」
［舞羽］：「……ん？」
［愛海］：「あ、舞羽ってこと？」
［舞羽］：「ええ！？　だ、だから吹雪くん！」
［愛海］：「理由は？」
［吹雪］：「こいつはピアノを幼い頃からやってるし、性格もしっかりしてる。選ばれても何もおかしくはないはずだから」
［愛海］：「ふーん、なるほど。んふふふ」
［舞羽］：「――っ」
何故か舞羽の顔は赤くなっていた。
［愛海］：「頑張れー、舞羽」
［舞羽］：「ま、まだ決まったわけじゃあ」
［愛海］：「準備しておくに越したことはないでしょ？　ファイト」
［舞羽］：「んー、吹雪くんと同じこと言うんだね」
舞羽はそんなことを言ってるけど俺は本当に選ばれそうな感じがするんだよな、舞羽は。
［繭子］：「よーし、授業するよー」
俺たちは席に戻った。

アニマート（2）

［場所：部室］

［吹雪］：「――ついに、完成だー！」
［舞羽］：「わーい！」
［カホラ］：「おめでとう、二人とも」
俺たちは三人でハイタッチを交わした。
製作期間約半年、あきらめず頑張った甲斐があったってもんだ。
［カホラ］：「よく頑張ったね。本当にすごいと思うわ」
［吹雪］：「いや、先輩の手助けがあったからすよ」
［舞羽］：「はい、先輩が最後にアドバイスくれなかったら、今年中には完成しなかったと思いますし」
［カホラ］：「あら？　そうかしら？」
［吹雪］：「そうです、本当に感謝してます」
［カホラ］：「ふふ、役に立てたなら私としても嬉しいわ。お茶にしましょう？　完成祝いに」
［舞羽］：「あ、じゃあ私が煎れますよ、お茶」
舞羽は準備室へと入っていった。

［舞羽］：「じゃあ、お疲れさまでしたー」
［カホラ］：「お疲れさま」
［吹雪］：「お疲れ」
音頭をして、お茶を一口飲む。
［カホラ］：「ふー、美味しい」
先輩がそうつぶやいた。
［カホラ］：「あ、そういえば、出来たプラネタリウムはどうするんだっけ？　出展するのかしら？」
［吹雪］：「はい、来年の学園のイベントで発表すると思います」

［カホラ］：「そっか、いい結果になるといいわね」
［舞羽］：「えへへ、今回は、少し自信があるね、吹雪くん」
［吹雪］：「ん、そうだな。なかなかに納得のいく出来になったからな」
［カホラ］：「ふふ楽しみに待ちましょう」
先輩は優しい笑顔を浮かべていた。
［カホラ］：「いよいよ明日ね、選出の日」
［吹雪］：「そうですね」
［舞羽］：「はい」
［カホラ］：「誰が選ばれるのかしら、今年は」
［吹雪］：「誰でしょうね」
［カホラ］：「今日ばっかりは、どこもかしこもこの話で持ちきりみたいだったわ」
［吹雪］：「そうでしょうね」
［舞羽］：「この島で一番の行事ですもんね」
［カホラ］：「これによって、来年を平和に過ごせるか決まってくるわけだものね。当然って言えば当然よね」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「選ばれるってことは、島の代表になるってこと。なった人には、自覚を持って望んでほしいわね」
もっともな意見だ。誰がなったとしても、それは忘れてはいけないこと。
［舞羽］：「うー、何か緊張してきちゃうね」
［カホラ］：「そうね、島の存亡がかかってるようなものだものね」
［舞羽］：「そうですね」
［カホラ］：「不思議よね、ピアノを奏でることによって島の四季が保たれる。誰が残したのかも、どうしてそうなったのかも分かってない。だけど、私たちは弾き続ける。ロマンを感じるわ」
［吹雪］：「確かに、普通の島ではこんなことはないですもんね」
［カホラ］：「文献にもあんまり残ってないのよね、このことにつ

いては。もし分かったら、偉人になれるわね」
［吹雪］：「先輩は、知りたいんですか？」
［カホラ］：「ええ、もちろん。というか、定期的に調べてもみてるわ」
［吹雪］：「あ、そうなんですか？」
［カホラ］：「まあ、一度気になっちゃうと何度も気になっちゃう質だから、つい、ね」
［吹雪］：「で、何か分かったんですか？」
［カホラ］：「うーん、それがほとんど。図書館で歴史を見ても、それらしきことは書いてないのよね。今のところは有力なことはあまり分かってないわ」
［吹雪］：「そうなんですか」
［カホラ］：「まあ、そんな簡単に見つかったら、今まで詳細不明ってことは有り得ないわよね」
［吹雪］：「確かに」
［カホラ］：「でも、一応これからも続けてはいくよ。まだ時間はあるしね」
［吹雪］：「暇があれば、俺たちも手伝いますから、言ってくださいよ」
［カホラ］：「あら？　いいの？」
［吹雪］：「もちろん、な？　舞羽」
［舞羽］：「はい、プラネタリウムが完成したのは、カホラ先輩のおかげですから」
［カホラ］：「ありがと、二人とも」

［カホラ］：「さて、今日はそろそろ上がりましょうか？」
［吹雪］：「そうですね」
空の色も大分変わり始めていた。
［吹雪］：「あ、俺が洗うよ、舞羽」
［舞羽］：「え？　いいの？」

［吹雪］：「ああ、お前は帰る準備してろよ」
［舞羽］：「ありがとう、吹雪くん」
［吹雪］：「いいってことよ」
俺は三人の湯呑み茶碗を持って準備室へと向かう。
［カホラ］：「ふーぶーき！」
［吹雪］：「おっと、先輩？」
音がしなかったからびっくりした。
［吹雪］：「どうしたんです？　別にすぐ片づけは終わるから」
［カホラ］：「ああ、違う違う、そうじゃなくて」
先輩は一歩俺のほうに近づいてきた。
［吹雪］：「ど、どうしたんですか？」
［カホラ］：「うん、ちょっとね」
先輩の顔はにやにやと笑っているように見える。
［吹雪］：「な、何です？」
［カホラ］：「いいから、ちょっと」
黙ってろってことか？
［カホラ］：「ふふ、――それ！」
［吹雪］：「なっ！？」
突然すぎて、何にもできなかった。
［カホラ］：「ふふ、どう？　吹雪」
［吹雪］：「ど、どうって、ど、ど、どうしたんですか？　いきなり」
突然、抱きついてくるなんて思わなかった。
［カホラ］：「ふふ、何って、ご褒美よ、ご褒美」
［吹雪］：「ご褒美？」
［カホラ］：「ほら、吹雪、マジックコロシアム優勝したじゃない。そのご褒美よ」
［吹雪］：「あ、なるほど……いやいや、こんなことしてもらわなくても別に俺は」
賛辞の言葉だけで十分なんだけど。

［カホラ］：「だって、優勝したんだから、これくらいのことはしなくちゃいけないかなって思ってさ。悪くはないでしょう？」
［吹雪］：「そ、それは……」
もちろんなんだが。すぐにさっきの感触が思い出される。
［カホラ］：「優勝おめでとう、吹雪」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［カホラ］：「ふふ、顔赤いわよ？」
［吹雪］：「そ、それはそうですよ」
赤くならないわけがないじゃないか。
［カホラ］：「じゃあ、私は部室の外で待ってるわね」
［吹雪］：「は、はい」
先輩はほほえみながら準備室を出ていった。
［吹雪］：「……」
何というか、普段先輩はあんなことをしないからな。大胆な行動に少々驚いた。先輩にも、あんな一面があったとは……覚えておこう。

アニマート（3）

12月2日（木曜日）

［場所：教室］

いよいよ今日は、ピアニストとハーモニクサーの発表か。学園もいつも以上にがやがやと騒がしい。落ち着いてられない気持ちはすごく分かるからな。各言う俺も、落ち着いてられない。一体誰が選ばれるのか。この学園の関係者全員に可能性があるわけだから選ばれた人は相当な才能を持ち合わせていることになる。そいつが一体誰なのか、若干のわくわくと、若干の緊張と、遠足の前日みたいな心境だ。

［翔］：「吹雪、飯食いに行こうぜ！　今日はA定食が先着40名まで百円引きなんだぜ」

［吹雪］：「翔」

［翔］：「ん？　何だ？　吹雪ちゃん」

［吹雪］：「ちゃんやめろ、何だじゃなくて、お前の目はドコについてるんだ？」

［翔］：「え？　おでこの下だけど」

［吹雪］：「じゃあ、俺たちが今何をしてるか分かるよな？」

［翔］：「……とても楽しそうにお昼ご飯を頂いているようで」

［愛海］：「あ、舞羽。その卵焼きいっただき！」

［舞羽］：「あ、それ二個しかないんだよ？　最後に食べようと思ってとっといてたのにー」

［愛海］：「ごめんごめん、お詫びにコレあげるわ。私の卵焼き」

［舞羽］：「何で入ってるのに私の食べたの？」

［愛海］：「舞羽の家の卵焼きが食べたかったから。家庭それぞれ

の味があると思ってね。とても美味だったわ」
［舞羽］：「ホントに？」
［愛海］：「うん、甘くてフワフワで」
［舞羽］：「今度は、食べたい時に言って？　多めに入れてくるから」
［愛海］：「ホント？　センキューベリーマッチ！」
［吹雪］：「見えたか？　この風景が」
［翔］：「ああ」
［吹雪］：「分かったのなら、学食には一人で行ってくれ。俺たちはすでに間に合ってるから」
［翔］：「なら、食い終わるまで待ってるさ。そしたら一緒に行けるぞ？」
［吹雪］：「あのな、俺は学食に行く予定がないんだよ。行ったって何のメリットがないだろうが」
［翔］：「あるぞ、一つ」
［吹雪］：「何だよ？」
［翔］：「オレがご飯を食べてる姿を見ることができる」
［吹雪］：「んなもん見たくないわ！」
［翔］：「あ、牛乳こぼしちゃった。口元に白いものが、とかサービスショットあるかもしれないぜ？」
［吹雪］：「死ねよ、お前」
［翔］：「ひどくストレートね、ものいいが」
［吹雪］：「いまの発言でますます行く気がなくなったわ。一人で行け、俺は絶対に行かん」
［翔］：「そんなー、何故だよ？　なにゆえだよ」
［吹雪］：「飯時に不適切な発言をしたからだ」
［翔］：「心頭を滅却すれば、そんな発言も適切に早変わりだぜ」
［吹雪］：「お前の中だけだろ、それは」
［翔］：「冷たいぞ吹雪。名前のようになってるって」
［吹雪］：「何でそこまで一人で行きたがらない？」

［翔］：「一人じゃ寂しいんだもん」
［吹雪］：「子供か？　お前は」
［翔］：「そういう年頃なんだよ、人肌が恋しいっていうのか？」
［吹雪］：「知らねぇよ、そんなもん」
［翔］：「なあ頼むってー、割り箸あげるからよー」
［吹雪］：「無料だろそれ」
［翔］：「こんな男を一人にするなんて、心が痛まないの？」
［吹雪］：「全く」
［翔］：「ぐっさー、痛恨の一撃……」
［吹雪］：「いい加減飯食わせてくれよ、食い終わらないだろうが」
［翔］：「時間に縛られる人生なんてイヤだ」
［吹雪］：「じゃあこんなところで油売ってるなよ」
［翔］：「オレは友との時間を大切にしたいんだ」
［吹雪］：「だったら、購買でパンでも買ってここで食えばいいだろ」
［翔］：「オレは学食が食べたいんだよー」
［吹雪］：「ああいえばこういう奴だな」
［翔］：「翔の主張だ！」
［吹雪］：「胸張って言い放つな」
［翔］：「ほら、行こうよ吹雪。学食が、オレたちを待ってる」
［吹雪］：「青春ドラマ風な台詞を使うな！」
［翔］：「それほどまでにオレの学食への愛は深いんだ」
［吹雪］：「じゃあ行けばいいさ、俺は行かん」
［翔］：「オレはお前と一緒に行きたいんだ」
［吹雪］：「男に言われても嬉しくないわ」
［愛海］：「あーもう、見てられないわね」
［翔］：「何だよ？　日野」
［愛海］：「翔っち、今日は一人で学食に行くのをオススメするわよ」
［翔］：「ええ？　どうしてだよ？」

［愛海］：「今日はピアニストとハーモニクサーが決まる日よ？みんなのドキドキハラハラしてる。そんなドキドキを翔っちが沈めてあげなくちゃ。学食にいる女の子は、みんな翔っちを待ってるわよ」

［翔］：「そ、それホントか！？」

［愛海］：「ええ、ホントよ」

［翔］：「おお、こうしちゃいられねぇぜ。学食の女子のハートをオレが沈めなくては。待っててくれ、ハニーズ！」

翔はそう叫ぶと、猛ダッシュで教室を出ていった。

［愛海］：「ふう、これでオーケーね。大丈夫？　大久保くん」

［吹雪］：「まあ大丈夫だけど、いいのか？　あんなこと言って」

［愛海］：「大丈夫よ、もし何か言っても適当に誤魔化すから」

［吹雪］：「そうか」

にしても、翔、単純な奴だな。

［吹雪］：「これでやっとゆっくり飯が食える。あ、舞羽、お茶くれお茶」

［舞羽］：「はい、どうぞ」

それからは、有意義なお昼休みを過ごすことができた。

アニマート（4）

［場所：職員室］

［吹雪］：「何だ？　急に呼び出して」
［繭子］：「ああ、ふーちゃん、来てたんだ～」
［吹雪］：「いや、マユ姉が呼び出したんだろうが」
［繭子］：「ああ、そうだね。繭子大失敗」
［吹雪］：「あーあー」
［繭子］：「あ、何よふーちゃん。その顔は？」
［吹雪］：「別に？　何でも」
［繭子］：「言ってよー、生徒の悩みは教師の悩み。先生にどーんとしゃべっちゃって、玉砕覚悟で」
［吹雪］：「玉砕て……砕けたらダメだろうが」
［繭子］：「人生砕けてナンボだよ」
［吹雪］：「それ違うと思うぞ」
［繭子］：「あり？　そうかな？」
［吹雪］：「まあ何でもいい。それより何だよ？　用件は？」
［繭子］：「ああ、うん。コレ」
マユ姉は紙束を俺に渡した。
［繭子］：「それをクラスメイトに配ってほしいの」
［吹雪］：「これだけか？」
［繭子］：「うん、後コレ」
今度は紙切れを渡される。
［繭子］：「ワタシ、これから職員会議があるの。だから、ワタシの代わりにこのお知らせをしてほしいんだよね」
［吹雪］：「会議っていうと、この後のことか？」
［繭子］：「うん、そう。ちゃんと聞かないと」
［吹雪］：「寝るなよ？　会議中」

［繭子］：「大丈夫だよ～、ノープロブレム！」
不安は拭いきれないが、信じるとしよう。
［吹雪］：「じゃあ、俺は教室に戻るよ」
［繭子］：「うん、よろしくね～」
［吹雪］：「分かった」
……。

［場所：教室］

［吹雪］：「――以上です。帰宅しても問題はありませんが、時間に遅れないように学園に帰ってくるように」
さて、夜までに暇が出来たな。一旦帰ってもいいけど、することもないな。
［吹雪］：「舞羽、お前はどうするんだ？」
［舞羽］：「私は、時間までバーバロでアルバイト。今日もシフト入っちゃってるから」
［吹雪］：「そうか、大変だな」
［舞羽］：「ううん、結構楽しいよ？　慣れてくると」
［吹雪］：「そんなもんか？」
舞羽「ふふ、吹雪くんもどお？　バーバロでバイト」
［吹雪］：「何を言ってるんだ、俺があそこで働いたら浮いちまうだろ？」
［舞羽］：「あはは、そうだね」
［吹雪］：「日野と一緒か？」
［舞羽］：「うん、今日は一緒。二人でホールを任されてるよ」
［吹雪］：「そうか、頑張れ」
［舞羽］：「うん、今度、また来てね」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
［舞羽］：「じゃあ、また後でね」
本当にどうしよう？　やっぱり一回帰ろうかね？　そんなことを考

えていると――。

［祐喜］：「吹雪、帰らないのかい？」

祐喜に話しかけられた。

［吹雪］：「どうしようか悩んでたところだ」

［祐喜］：「帰るか残るか？」

［吹雪］：「ああ、考え中だ」

［祐喜］：「あ、ならさ」

［吹雪］：「ん？」

［祐喜］：「僕、これから生徒会で仕事があるんだけど、今日は人が少なくてさ、ちょっと大変なんだよね。もし、吹雪に暇があるんなら、手伝ってほしいんだけど」

［吹雪］：「あ、そうなのか？」

［祐喜］：「うん、今年ももうすぐ終わりだからね。今年にあった資料とかをまとめなきゃいけないんだ」

［吹雪］：「なるほど、でも俺、難しいことは分かんないぜ」

［祐喜］：「ああ、大丈夫だよ。ただ資料を整理してほしいんだ。生徒会関係のものは僕たちがやるから」

［吹雪］：「そうか、ならいいぞ、手伝うぜ」

［祐喜］：「本当に？　助かるよ」

［吹雪］：「どうせ暇だしな」

何にもやることがないなら、手伝ったほうがいいだろう。

［祐喜］：「じゃあ行こう」

［吹雪］：「生徒会室は、三階か？」

［祐喜］：「うん、こっちだよ」

祐喜に導かれて生徒会室に向かう。

……。

アニマート（5）

［場所：生徒会室］

［祐喜］：「入るのは、初めてだよね？」
［吹雪］：「ああ、初体験だ」
［祐喜］：「ちょっと資料だらけで汚いけど、許してね」
［吹雪］：「ああ、問題ない」
それくらいの汚さ、マユ姉で慣れてるからな。
［祐喜］：「じゃあ、どうぞ」
［吹雪］：「お邪魔します」
ガラガラガラ。
中に入ると、真っ先に目に飛び込んできたのは。
［聖奈美］：「な！？　大久保？」
［吹雪］：「あ、杠、それにダルク」
［聖奈美］：「どうしてあなたがここに来てるのよ？　ここは生徒会よ？　あなたは無関係でしょう」
［吹雪］：「無関係だけどよ、暇だったから手伝いに来たんだ」
［聖奈美］：「ふーん」
［吹雪］：「お前は――ああ、生徒会長だったな」
［聖奈美］：「それはさすがに知ってるみたいね」
［吹雪］：「まあ、投票したしな」
［聖奈美］：「知ってるならいいわ。知ってなかったら氷魔法の刑に処すところだけど」
［吹雪］：「おっかねぇな、もっとスマートにいこうぜ」
［聖奈美］：「いいじゃないの、やらないんだし」
口調を柔らかくしてほしいんだけどな。
［聖奈美］：「祐喜が連れてきたの？」
［祐喜］：「うん、手伝ってって頼んだら、快くオーケーしてくれ

たんだ」
［聖奈美］：「そう。……」
［吹雪］：「な、何だよ？」
［聖奈美］：「別に、なかなか殊勝な心がけじゃない」
［吹雪］：「まあ、どうせなら役に立つほうがいいだろ」
［聖奈美］：「そうね、まあいいわ。手伝ってくれるんなら手伝ってもらいましょう。今日はあたしと祐喜とダルクだけだったから、人手は多い方が助かるわ。とりあえず、空いてる席に座りなさい」
［吹雪］：「お、おう」
俺は近くのイスに腰を下ろした。机の上にはたくさんの資料が高く積まれている。
［聖奈美］：「狭いってのは禁句よ？　片づけたくても片づけるスペースがないんだから」
［吹雪］：「いや、別に言う気はないって。この資料の数だけ、お前たちが働いてるってことだし」
［聖奈美］：「まあ、そうね。でも、学園にあんまり関係ない資料も混じってるわよ。生徒会と教師は嫌が応にも密接な関係があるから、教師が会議で使用した資料とかも混じってるかもしれないわ」
［吹雪］：「なるほど、何割くらいだ？」
［聖奈美］：「2、3割くらいかしら？　頻繁に会議やミーティングが開かれるから、数えたことないわ」
［吹雪］：「忙しいんだな、生徒会は」
［聖奈美］：「そりゃそうでしょ、学園を仕切ってるんだから。それ相応の準備は必須よ」
［吹雪］：「なるほど」
［聖奈美］：「じゃあ、作業始めましょう。ダルク、大久保に何をするか教えてあげて」
［ダルク］：「うん、分かった」
ふわふわとダルクは俺のほうに近づいてくる。
［ダルク］：「ありがとね、オーケーしてくれて」

［吹雪］：「これくらいは別にいいさ。ダルクはいつも手伝ってるのか？」
［ダルク］：「まあね、早く帰る理由もないし、聖奈美は私のマスターだからね。マスターに使えることが私の存在意義だから」
［吹雪］：「そうか。偉いな、ダルクは」
［ダルク］：「そんなことないよ、これは使い魔共通の暗黙の了解だから」
暗黙の了解ね、使い魔の世界も大変なんだろうな。
［ダルク］：「じゃあ、準備室に行こう。私たちはこっちで作業だから」
［吹雪］：「ああ、分かった」
ガラガラガラ。
［吹雪］：「うわ……随分けぶたいな、ここ」
［ダルク］：「掃除する時間がないからね、生徒会室は掃除の範囲内だからいいけど、ここはそうじゃないから」
［吹雪］：「けほ、すごい埃だ。何か年代物のお宝でも出てきそうだ」
［ダルク］：「雰囲気はね、でもあるのは印刷資料ばっかりだよ」
俺たちは少し奥のほうに進んでいく。
［ダルク］：「ここかな、うん」
［吹雪］：「ここにあるのは？」
［ダルク］：「近年使用した学園を住みよくするための提案資料だね。昔の会長さんたちがどんな風にやってきたのかを参考にしながら決める場合もあるから、捨てずに取っておいてあるの」
［吹雪］：「ほお、それにしてもすごい量だな」
［ダルク］：「一週間に一回は会議やらミーティングがあるからね。増えちゃうのは必然、かな」
［吹雪］：「ふーん」
［ダルク］：「よいしょっと」
ダルクは上の棚からファイルを取り出して机に置いた。

［ダルク］：「とりあえずは整理だね。これを会議した日にち順に揃えてほしいんだ」
［吹雪］：「分かった。ん？　でもきちんとファイリングされてるじゃないか」
［ダルク］：「ああ、見た目はね。でも、よく見るとどれもこれもバラバラだよ。ほら、これなんか半年もズレが生じてる」
［吹雪］：「あ、本当だ」
［ダルク］：「整理してる暇がないから、とりあえずファイルに入れてるだけで、順番なんてあったもんじゃないんだ」
［吹雪］：「じゃあ、俺たちの仕事はこれか」
［ダルク］：「うん、下に日にちが書いてあるから、古い順に重ねていってもらえる？」
［吹雪］：「了解だ。この上の棚全て、か？」
［ダルク］：「うん、そうだね。でも、二人なら早く終わるよ」
早速作業に取りかかろう。
［吹雪］：「ん、これは二ヶ月前、これは四ヶ月前、ん？　ダルク、日にちが重なってるのがあるが、これはどうするんだ？」
［ダルク］：「あ、それは議題の頭文字が早いほうを上にして。そっちのほうが分かりやすいから」
［吹雪］：「オッケー」
ってことは、こっちが下だな。
［吹雪］：「それにしても、あれだな。こうやって見ると、生徒会って何でもやってるんだな」
［ダルク］：「そうかもしれないね」
手は休めずにダルクは返事する。
［吹雪］：「水質調査とか、窓ガラスの修復とか、ベニヤ板の配送の申請とか、普段日常で出てこない雑務も生徒会が担当してたのか」
［ダルク］：「まあね。それが生徒会のメインの活動だから。生徒が部活や勉強に専念できる環境を作ってあげる。住みよい学園生活のサポートだね」

［吹雪］：「なるほどな。じゃあ、マジックコロシアムの日も、生徒会は動いていたんだ？」
［ダルク］：「うん、もちろん。受付はもちろん、パトロールだって生徒会がやってたんだよ」
［吹雪］：「やっぱりか、どうりで祐喜がいなかったわけだ」
［ダルク］：「祐喜さんは副会長だからね。その日はパトロールの代表だったから、休憩時間以外はずっと歩き回ってたよ」
［吹雪］：「そうだったのか。ん？　じゃあその流れでいくと、杠も仕事してたってことだよな？」
［ダルク］：「うん、もちろん。会長が仕事しなきゃ、生徒会は成り立たないからね」
［吹雪］：「でも、あいつコロシアムに出てただろ。準備とか忙しいだろうに」
［ダルク］：「うん、だから聖奈美が主にやってたのは、この部屋での情報処理だったの」
［吹雪］：「あ、なるほどな」
役員を捌いていたってわけか。
［ダルク］：「処理が遅れると、問題解決も遅れちゃうから、結構重要な役回りなんだ。それをやりながら、聖奈美はコロシアムに出場してたの」
［吹雪］：「そうか。……じゃあ、俺が決勝で勝てたのは――」
［聖奈美］：「関係ないわよ、それは」
［吹雪］：「おわっ！？」
気付けば後ろに本人が立っていた。
［吹雪］：「い、いつからそこに？」
［聖奈美］：「たった今よ、ちょっと資料を取りにね。言っとくけど、あんたが思ってることは度外視していいことだからね。こんなこと肯定したくはないけど、あんたは実力であたしを任したんだから」
［吹雪］：「だが、仕事と両立してたんだろ。俺以上に疲労は」

［聖奈美］：「溜まってなかった、って言えば嘘かもしれないけど、大したことはなかったわ。それに、あたしは一回戦シードだったし、疲労の度合いはあんたと同じくらいよ。条件的にはほぼ同じよ」
［吹雪］：「そうか？」
［聖奈美］：「そうよ、イチイチそんなことは気にしないほうがいいわ。そんなこと言ってたらいくらでも理由が作れるじゃない」
［吹雪］：「ま、まあな」
［聖奈美］：「しゃきっとしなさい、しゃきっと」
［吹雪］：「お、おう」
［聖奈美］：「さあ、仕事仕事。ダルク、去年の年末の日程資料、出してもらえる？」
［ダルク］：「うん。えーっと……はい、コレ」
［聖奈美］：「ありがと、じゃあ、サボるんじゃないわよ？　大久保」
［吹雪］：「分かってるよ」
杠は生徒会室に戻っていった。
［吹雪］：「認めてくれたんだな、俺のこと」
［ダルク］：「うん、最初は悔しがってたけど、区切りをつけたみたいだよ」
［吹雪］：「ふーん」
俺が思ってるよりも、あいつはいい奴なのかもしれないな。まあ、出会いが出会いだから、というのもあるかもしれないが。
［ダルク］：「再開しよっか、仕事」
［吹雪］：「おう」
気を取り直して資料に目を落とした。
……。
［吹雪］：「大分、揃ったな」
［ダルク］：「うん、次はこれを綴じ込まないとね」
［吹雪］：「このファイルに入れるのか？」
［ダルク］：「うん、これでパッチンしてからね」

ダルクは穴開けパンチを持ってやってくる。
［ダルク］：「これが終われば、一段落するよ」
［吹雪］：「よし、じゃあ早速やるか」
［ダルク］：「うん、頑張ろう」
一旦これをこっちに置いてと。しかし、本当にたくさんあるな。よく見ると１０年前の資料とかも中から出てくる。卒業生の意見を参考にするのも大切なことなんだろう。
［ダルク］：「気になる？　吹雪」
［吹雪］：「ん、少しな。こうして見ると結構おもしろい」
［ダルク］：「忙しいけど、やってみると色々分かることもあるんだよ。完全な雑学だけどね」
［吹雪］：「そうなのか、例えば？」
［ダルク］：「そうだねー、じゃあ。マジックコロシアムで優勝した人でも、テストで実技試験を受けなきゃいけないよね」
［吹雪］：「ああ、成績を付けなきゃいけないからな。当然のことだな」
［ダルク］：「当時、マジックコロシアムで優勝した人は、魔法関連のテストは全て免除になるっていう特権があったんだ」
［吹雪］：「何ー？　それマジか！？」
［ダルク］：「うん、優勝できる力を持ってるなら実技でも結果は見えてるってことで、しなくても最高点を上げるってことになってたんだって」
［吹雪］：「何だそれ、教師も楽がしたかっただけなんじゃ」
［ダルク］：「どうなんだろうね。でも、今からは考えられないくらいとっても素敵な特権だったんじゃないかな」
［吹雪］：「まあそりゃあ嬉しいだろうな」
［ダルク］：「でも、その当時、ちょっとした問題があってね。多分それがあったからそういう特権を設けたんだと思うの」
［吹雪］：「問題？」
［ダルク］：「うん、マジックコロシアムの出場者が激減したんだ

って」
［吹雪］：「ああ、なるほど」
［ダルク］：「年々出場者が減っちゃって、このままじゃ大会がなくなってしまうんじゃないかって言われてたんだって。でも、伝統行事を途切れさせるわけにはいかない。それで思いついたのがその特権ってわけ」
［吹雪］：「で、効果は？」
［ダルク］：「もう絶大。テストが免除になるならって人がたくさんいたみたいでその年の出場者は５０人を越えたみたい」
［吹雪］：「５０人？　そりゃ多いな」
今年の出場者を倍にしても足りないぞ。
［ダルク］：「おかげで生徒会も保健室もてんてこ舞いの忙しさで、一日じゃ終わらないから大会日程も二日に変更になったんだって」
［吹雪］：「じゃあ、大盛況だったんだな」
［ダルク］：「うん、予想以上のものだったみたいだけどね」
［吹雪］：「その特権は約束通りに適応されたのか？」
［ダルク］：「うん、優勝者は実技テスト諸々免除、来年も出る意思を見せてた人もたくさんいたみたい」
［吹雪］：「ほお」
［ダルク］：「でも、学生の本分は勉強なのに、テスト免除っていうはやっぱりやりすぎだって声が大きくなってきて、その年から三年後くらいにその特権は廃止されたんだ。それでも、マジックコロシアムのおもしろさは生徒に伝わったみたいで、出場者は今年ぐらいをキープできてるみたいだよ」
［吹雪］：「そうか、じゃあ特権はもうないのか」
［ダルク］：「どうだろう。ひょっとしたら、少しは評価されてるのかもしれないけどね」
［吹雪］：「でも、廃止にしたのは間違ってないかもな」
テストしたくないから頑張るっていうのは、動機が不純だしな。
［吹雪］：「当時の優勝者に会ってみたいもんだ」

［ダルク］：「まだこの島にいるのかな？」
［吹雪］：「どうだろうな」
……。

アニマート（6）

……。

［吹雪］：「ようし、終了」

全ての整理と綴じ込みが終了した。

［ダルク］：「お疲れさま」

［吹雪］：「ダルクもな」

［ダルク］：「うん。ふう」

ダルクは急にキョロキョロとし出す。

［吹雪］：「どうしたんだ？　ダルク」

［ダルク］：「え？　ううん。ちょっと座りたいなーって思って」

ああ、なるほど。ずっと浮いてるのも疲れるんだろうな。だが、ここら辺、埃が多いから躊躇ってるわけか。

［吹雪］：「ダルク、俺の頭使いな」

［ダルク］：「え、ええ！？　吹雪の？」

［吹雪］：「ああ、別に構わないぞ。座る場所ないんだろ」

［ダルク］：「そ、そうだけど、悪いよ」

［吹雪］：「本人が了承してるんだぜ？　気にすんなって。それに、使い魔って言ったら頭の上が相場だろう？」

［ダルク］：「そ、そうなのかな？」

［吹雪］：「というか、俺から頼む。乗ってみてくれ」

［ダルク］：「う、うん。じゃあ」

ダルクはふわふわと俺の頭上にやってくる。そして――。

モフ。俺の頭に乗った。

［吹雪］：「おおっと？」

［ダルク］：「あ、大丈夫？」

［吹雪］：「ああ、全然。うん、なるほど、こんな感じなのか」

［ダルク］：「え？　何が？」

［吹雪］：「うん、よく使い魔って頭の上に乗ってるイメージが俺

の中ではあってな。一度味わってみたかったんだよ」
［ダルク］：「そうなんだ」
［吹雪］：「思ったよりも、重くないものだな」
［ダルク］：「まあ、吹雪たちみたいに大きくないからね」
［吹雪］：「それもそうか。どうだ？　俺の頭」
［ダルク］：「うん、すごくいい感じ。ほっとするよ」
［吹雪］：「ならよかった。しばらくそこにいていいからな」
［ダルク］：「ありがとう、吹雪」
モフモフ。
［ダルク］：「ど、どうかした？」
［吹雪］：「いや、ちょっと触ってみたく。ふかふかだな、ダルクは」
［ダルク］：「そ、そうなのかな？　聖奈美にもよく言われるよ」
［吹雪］：「そうなのか？」
［ダルク］：「うん、冬の日とかは、よく抱きしめられてたよ。寒いからって言って。湯たんぽ代わり、かな？」
［吹雪］：「なるほど、気持ちは分かるな。現にダルクは暖かい」
［ダルク］：「女の子はただだけど、男の子からはお金取りますよ？」
［吹雪］：「何ー？　それは困ったな」
［ダルク］：「えへへ、タッチまでなら許すよ」
［吹雪］：「よし、なら今のうちに体温を奪っておこう」
［ダルク］：「あはは、くすぐったいよ、吹雪」
［聖奈美］：「ダルク、今年度の補修費の金額の資料――な、何やってるのよあんたたち！」
［吹雪］：「おおっ！？」
［ダルク］：「きゃ！？」
［聖奈美］：「お、お、大久保吹雪、あたしの使い魔に何してくれてるのよ！」
［吹雪］：「は？　い、いや、ただ少し休憩してただけだぞ？」

［聖奈美］：「嘘おっしゃい、今、ダルクの体触ってたでしょう？　あたしは見たわよ。この変態、スケベ」
［吹雪］：「ち、違う。それは誤解だ」
［聖奈美］：「何が誤解なのよー。しかもダルクを自分の頭の上に乗せたりして、親密な関係になりすぎなのよあんたたち。キー！」
［吹雪］：「お、落ち着け。話せば分かる」
［聖奈美］：「う～～～～～！」
［吹雪］：「やばい、何だかおかしくなってる」
［ダルク］：「聖奈美、誤解なんだって。私の話聞いてよ」
［聖奈美］：「ダルク、あんたは被害者なのよ？　何こいつの肩持とうとしてるのよ！」
［ダルク］：「だからそれも違うんだって。今から話すから落ち着いてよ」
……。
［聖奈美］：「ふうん、だからそんなにじゃれてたのね？　二人で」
［ダルク］：「じゃれてたって……私は吹雪の好意に甘えただけだよ」
［聖奈美］：「むううう……」
［吹雪］：「な、何だよ？」
［聖奈美］：「変態」
［吹雪］：「な、何でだよ。誤解は解いただろ？」
［聖奈美］：「あなた分かってるでしょ？　ダルクはメスの使い魔なの。それにタッチしてるんだから、それはもう完全な痴漢よ、痴漢」
［吹雪］：「痴漢て、ダルクからオーケーもらったぞ、俺は」
［聖奈美］：「もらったってダメ！　あなたは男でダルクはメス、それは変わらない事実なんだから」
［ダルク］：「聖奈美、そんなに怒らないでよ。私が悪かったんだよ、吹雪は悪くないの」
［聖奈美］：「だから何でそこまで大久保の味方をするのよダルク

は」

［ダルク］：「だって、吹雪は友達だもん。当然じゃない」

［聖奈美］：「……なんだから」

［ダルク］：「へ？　何？」

［聖奈美］：「ダルクはあたしの使い魔なんだから。あたしより仲良くなっちゃダメ！」

［吹雪］：「……」

［ダルク］：「……」

［聖奈美］：「――しまった。あたしとしたことが！　――キッ！」

［吹雪］：「うっ……」

［聖奈美］：「今、何か聞いた？」

［吹雪］：「え？」

［聖奈美］：「聞いてないわね？」

ここは聞いてないと言うしかあるまい。俺は首を縦に振った。

［聖奈美］：「ならいいわ、とにかく、今後は軽率な行動は慎むことね。ひどかったら、氷魔法で氷づけの刑に処すわ」

［吹雪］：「あ、ああ。気をつける」

［聖奈美］：「ふ、ふん！」

踵を返して杠は向こうに戻っていった。

［吹雪］：「なあ、今のってさ」

［ダルク］：「うん、あれだよね」

これからは、時と場所を選んだほうがよさそうだな。杠にあんな一面があったとは、ちょっとびっくりした。

［吹雪］：「ダルク、頑張れよ」

［ダルク］：「う、うん。もちろんだよ」

生徒会での出来事だった……。

アニマート（7）（前書き）

攻略対象は、選出された４人のピアニストになります。

アニマート（7）

［場所：グランド］

［繭子］：「はいはーい。みんな並んでー」
マユ姉の声がけで一列に並ばされる。さて、いよいよか。空は完全に暮れ、星と月が煌めいている。
［吹雪］：「誰が選ばれるんだろうな」
［舞羽］：「そうだね、何だか緊張してきちゃうね」
横にいた舞羽がそう答える。
［吹雪］：「頑張れよ、舞羽」
［舞羽］：「もお、吹雪くん最近それぱっかりー」
［吹雪］：「期待してるんだよ」
［舞羽］：「もお」
それにしても、みんなやっぱりどこか緊張の面もちをしているな。この島の明暗を分けるものだからだろう。
［教頭先生］：「はい、聞いてください。知ってるとは思いますが、一応説明をします」
教頭が手短に説明を開始する。
流れとしては、学園長が月に向かって祈りを込める。その祈りと、この島にあるピアノが同調すると、月の光が、ピアニストを選出するんだ。ハーモニクサーもまた然り。月の光に照らされたものが、ハーモニクサーに決定される。一体誰がなるのか？　その問いの答えがもうすぐ分かる。
［教頭先生］：「では、学園長、お願いします」
［セフィル］：「……」
学園長が、壇上に上がる。溢れ出る威厳は、学園長と呼ぶにふさわしい。
［教頭先生］：「生徒は静かにするように。学園長の集中を途切れ

させないようにしましょう」
その言葉に俺たちは口を閉じる。生徒と教師が、答えを待つ。
「……」
［セフィル］：「――エル・エルファンドリウス、フリアディス。月の光よ、そして四季のピアノ。桜花のピアノ、海風のピアノ、紅葉のピアノ、風花のピアノよ、我らハルモニアの意志を継ぐものを、今ここに選ばん。我らに道を示したれ！」
校長が両手を広げると、一筋の光が月に向かって飛んでいった。
――キーン。
――キーン。
――キーン。
――キーン。
俺たちの前から光が消える。しかし、すぐに明るくなり、選ばれた者を月の光が照らしていく。
……。
……。
［舞羽］：「あっ！？」
［繭子］：「あれれ～？」
［聖奈美］：「……」
［カホラ］：「え、本当に！？」
「月の光よ。ハルモニアの意志を継ぐもの、ハーモニクサーを今ここに選ばん。我らに道を示したまえ！」
一筋の光はまた空へ向かっていく。
――キーン。
――キーン。
――キーン。
――キーン。
月から、光が降りてくる。照らし出したのは――。
［吹雪］：「お、俺かよ！？」

周りを見渡しても他に照らされてる人はいない。じゃあ、今年は俺がハーモニクサーをするってことなのか？

［舞羽］：「ふ、吹雪くん」

［吹雪］：「ああ」

こりゃあ、ちょっとびっくりだぜ。

カンタービレ（1）

12月3日（金曜日）

［場所：学園長室］

［セフィル］：「――というわけで、私が学園長だ。まあ、本名を言っておけば、セフィルだ。沢渡・E（エレディ）・セフィルだ」

［吹雪］：「沢渡……？　え？　先輩？」

［カホラ］：「うん、実はね」

［舞羽］：「そ、そうだったんだ」

［吹雪］：「学園長が、カホラ先輩のお母さんだったのか」

二年も同じ部活で過ごしていたのに全く気付かなかったぞ。

［カホラ］：「言ってなかったかしら？」

［吹雪］：「初耳ですよ」

［カホラ］：「ごめんね、別に言う必要もないかなって思って。先入観持たれるのも少しイヤだしね」

［セフィル］：「そんなことでそんな風に見る生徒は放っておけばいいんだ。気にすることはない」

［カホラ］：「まあ、そうなんだけどね。お母さん、威厳あんまりないし」

［セフィル］：「何を言うんだ。時折お茶目をするだけだぞ」

［カホラ］：「それがいけないのよ」

［セフィル］：「そうなのか？　それは困った……」

確かに、言われてみると親子って感じがするな。顔が結構似てる気がする。

［セフィル］：「それにしても、こうしてみると見知った顔ばかりだな。須藤に繭子に杠にカホラ、そして大久保だな」

［俺&舞羽］：「ど、どうも」
［聖奈美］：「知っていただけて光栄です」
［繭子］：「まさかワタシが選ばれるなんてな～」
［セフィル］：「そうだな。教師で選ばれるのは、かなり久しぶりかもしれんな」
［繭子］：「どうしてワタシだったんでしょうか～？」
［セフィル］：「それは決まってるだろう、四季のピアノに気に入られたからだ」
［繭子］：「それしかないですよねー」
［セフィル］：「繭子はピアノに選ばれたんだ、たくさんいる学園の者たちの中でな。しっかりしなければならないぞ」
［繭子］：「はい」
［セフィル］：「で、こっちは生徒会長だな。お前の活躍はよく知ってるぞ」
［聖奈美］：「お褒めに預かり光栄です」
［セフィル］：「そんなに堅くなるな、もっと柔らかく接してくれ」
［聖奈美］：「いえ、しかし、この学園で一番偉いわけですし」
［セフィル］：「何を言う、お前とは立場上ちょくちょく顔を合わせているじゃないか。こんなガチガチな会話をする仲じゃないはずだ」
［聖奈美］：「わ、分かりました。でも、敬語は使わせてください、これはケジメですので」
［セフィル］：「うん、頼んだぞ」
［聖奈美］：「はい」
［セフィル］：「そして、魔法研究部の二人だな」
［舞羽］：「（ペコリ）」
［吹雪］：「はじめまして」
［セフィル］：「うん、君たちの作品は評判がいいぞ。完成度が高いようだな、カホラからよく聞いてるぞ」
［吹雪］：「そう言ってもらえると嬉しいです」

［舞羽］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「また新しいのが完成したと聞いてるが」
［吹雪］：「あ、はい、プラネタリウムを作ってみました」
［セフィル］：「プラネタリウム？　それはすごいな。一度見てみたいものだ」
［舞羽］：「部室にありますから、よければ見にいらしてください」
［セフィル］：「それは楽しみだ。もし暇があれば、私の欲しい物を作ってほしいな」
［吹雪］：「学園長、何か欲しい物があるんですか？」
［セフィル］：「うむ、ある」
［吹雪］：「それは一体？」
［セフィル］：「車だ」
［吹雪］：「いやいやいや、ちょっと待ってください。車はちょっと無理がありますよ」
［セフィル］：「む？　そうか？　君たちなら出来そうな気がするんだが」
［舞羽］：「そう言ってもらえるのは嬉しいですけど、多分学園生活中には終わらないです」
［セフィル］：「そうか、ではミニカーでもいいぞ」
［吹雪］：「それは玩具ですから、学園長乗れなくなりますよ」
［セフィル］：「確かにそうだな。じゃあ何でもいいから私に作ってくれ」
そんなアバウトな……。
［セフィル］：「今から楽しみにしているぞ」
［カホラ］：「お母さん、吹雪たちが作りたい物とかを優先させてあげようよ」
［セフィル］：「うん、それでいい。それを私が奪うというわけだ」
［カホラ］：「それって犯罪じゃないの？」
［セフィル］：「ギリギリ冤罪だろう」
［カホラ］：「ギリギリって……」

［セフィル］：「まあ暇があったらでいい。考えてみてくれ」
［カホラ］：「はい、分かりました」
［セフィル］：「さて、全員との面識を確認したところで、そろそろ本題に入ろうか」
［全員］：「はい」
［セフィル］：「一応聞いておくが、ピアニスト、ハーモニクサーを辞退したいって者はいないよな？　うん、ないようだな。まあ不安は持ってる者が多いとは思うが、学園側が全力でサポートするから、あまり気を張らずに望んでほしい」
［全員］：「はい」
［セフィル］：「君たちのやるべきことだが、大体は把握してるはず。でも、今一度説明しておこう。君たちがしなければならないことは、ピアニストはピアノを弾き、ハーモニクサーはそれをアシストする。ただ弾けばいいわけではない。一番大事なことは、ピアノと心を一つにすること。ピアノと波長を合わせることで、ピアノに願いが届いて、来年も平穏な四季を送らせてもらうんだ」
［聖奈美］：「波長を合わせるっていうのは、具体的にはどういうことなんですか？」
［セフィル］：「言い表すのは少々難しいんだが、ピアノの気持ちになることが大事だろうな」
［聖奈美］：「気持ちになる、ですか？」
［セフィル］：「うむ、四季のピアノは生きている。私たちと同じで心がある。気持ちのいい弾きかた、気持ちが悪い弾きかた、良い悪いがあるだろう。ピアノが心地良いメロディーを奏でてやるのが、君たちがしなければならないことだな」
［舞羽］：「なるほど、生き物なんですね」
［セフィル］：「まあそうと言うほうが自然だろうな。君たちはピアノに選ばれたわけだ。
それは即ち、ピアノに心が宿ってるってことと同義だろう」
［吹雪］：「そうですね」

［セフィル］：「ピアノは四つ存在する。春を司る『桜花のピアノ』、夏を司る『海風のピアノ』、秋を司る『紅葉のピアノ』、そして冬を司る『風花のピアノ』。この四つを大久保弟以外の四人に弾いてもらう」

［繭子］：「名前からして、冬のピアノはふーちゃんが弾くのが妥当そうなのにな～」

［吹雪］：「名前で決めんな、名前で」

［聖奈美］：「でも、大久保が弾いたら冬が大変になるんじゃないですか？　先生」

［繭子］：「あーそっかー。常に豪雪になっちゃうかな～？」

［吹雪］：「だから、名前で勝手に想像すんな。なりたくてこの名前になったんじゃないんだよ」

［カホラ］：「珍しい名前よね、吹雪って」

［吹雪］：「まあ、あんまりいないみたいですけど……って今は俺の話じゃあないでしょう」

話が脇道に反れてってる。

［吹雪］：「俺のことはどうでもいいから。すいません、学園長」

［セフィル］：「うむ、でも、私も少々気になるな。大久保弟の名前は」

［吹雪］：「ええ～！？」

［セフィル］：「それなりに学園長生活は送ってきたが、吹雪という名前は耳にしたことがない。君が初めてだ」

［繭子］：「でしょ～？　学園長は分かってるね～」

［セフィル］：「繭子、弟のネーミングの由来は知らないのか？」

［繭子］：「うーん、正直聞いたことはないです～。でも、吹雪だから勇ましいってことなんじゃないのかなーって思います」

［セフィル］：「なるほど、まあそう考えるのが妥当だな」

［繭子］：「ふーちゃんにはこの名前が合ってると思いますよ、ワタシー」

［セフィル］：「だそうだ、モテモテだな、弟」

［吹雪］：「いや、違うと思いますけど……」
［セフィル］：「うむ、よく考えてみると、このメンバーには結構珍しい名前の者が多いな。須藤の名前も、私は初めてみるぞ」
［舞羽］：「そうですか？」
［セフィル］：「うん、舞羽か。ありそうでなかった名前だ」
［舞羽］：「そうですね、たまに、まいはじゃなくてまうって読まれちゃいますけど」
［セフィル］：「でも、素敵な名前じゃないか。須藤に似合っているぞ」
［舞羽］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「杠は、漢字が少々難解だな。これでみなみと読ませるのだろう？」
［聖奈美］：「はい。聖と書いて「み」とは読みませんからね」
［セフィル］：「そうだな、でも、何か意味があって付けられたのだろう？」
［聖奈美］：「親の名前にも同じように聖の字が入っているので、それを受け継いだのだと思います」
［セフィル］：「なるほど、親の字を受け継いだわけか」
［聖奈美］：「はい、結構間違われるのでたまに、はぁってなりますね」
［セフィル］：「そうか、でも君にあったいい名前だと思うぞ？似合っている」
［聖奈美］：「本当ですか？　ありがとうございます」
［セフィル］：「うむ、自信を持ってもいいだろう」
［聖奈美］：「はい」

カンタービレ（2）

……。

［セフィル］：「おっと、本題を忘れるところだった。そろそろ話を戻そうか」

［カホラ］：「お母さん、戻すのが遅いよ」

［セフィル］：「いやいや、つい話がおもしろくなってしまってな」

［カホラ］：「もう、お話なら本題が終わってからでも問題ないでしょう？」

［セフィル］：「うむ、気をつけるとしよう」

こほんと咳払いを一つ挟んだ。

［セフィル］：「えっと、どこまで話したかな？」

［繭子］：「ふーちゃんの名前が難しいってことじゃないですか？」

［吹雪］：「それはもう終わってるんだよ、バカたれ！」

［繭子］：「うひゃううっ！？」

［吹雪］：「吹雪くん、すごい突っ込み……」

［繭子］：「うう、イターイ、身長がさらに縮んじゃうよ……」

［吹雪］：「安心しろ、そこまで低かったら縮んでも分かんない」

［繭子］：「せめて手加減してよー。ふーちゃんが思ってる以上に強力なんだからね」

［吹雪］：「じゃあ、もっと教師らしい振る舞いをするんだな。それができたら手加減手加減してやる」

［繭子］：「う、うにゅう～」

［セフィル］：「大久保弟、いや、もう吹雪でいいか。吹雪は繭子よりも強いのだな」

［カホラ］：「まあ、吹雪はしっかり者だからね」

［吹雪］：「すいませんでした。学園長、話の続きをどうぞ」

［セフィル］：「ああ。えっと、そうだ。四つのピアノを吹雪以外の四人に弾いてもらうというところまで話したんだっけな」

［聖奈美］：「ええ、そうです」
［セフィル］：「そのピアノをどうやって選ぶかだが、自己申告ではもちろんない」
［聖奈美］：「そうでしょうね」
［セフィル］：「というわけで、四人にはこれを渡しておこう」
学園長はみんなに石のようなものを手渡した。
［繭子］：「うわ～、きれい～」
［聖奈美］：「学園長、これは？」
［セフィル］：「宝玉だ。口で説明するのは難しいのだが、ピアノに選ばれた者は、その宝玉が違う形に変化するんだ」
［舞羽］：「変化ですか？」
［セフィル］：「うむ。それは後で自ずと分かるだろう。次に、何を弾くかだが、四人はピアノの経験はあるか？」
［繭子］：「趣味でくらいしかないです～」
［カホラ］：「音楽の授業で少ししか……」
［聖奈美］：「ええ、まあ」
［舞羽］：「あ、私は昔習い事でやってました」
［セフィル］：「なるほど、鍵盤の位置は掴んでいるか？」
［繭子］：「何となくは～」
［聖奈美］：「はい、大丈夫です」
［セフィル］：「それならよかった。何分儀式だからな、少々曲調が難解なものなんだ」
［聖奈美］：「確かに、去年聞きましたけど、すごく複雑なメロディーでしたもんね」
［舞羽］：「でも、すごく綺麗だったな」
［セフィル］：「そう思うか？　舞羽」
舞羽も名前呼びに変わっていた。
［舞羽］：「はい、あのメロディーは一つのピアノじゃ奏でられないものです。四つのピアノだからできるメロディー構成でした」
［セフィル］：「うむ、舞羽はよく分かっているな」

［舞羽］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「折角だ、去年の生徒が奏でたそれがここにある。一度聞いてみるとしよう」
学園長が音源を機械にセットする。しばらくして、メロディーが流れてきた。
……。
何とも言えないような綺麗な音だ。複雑なテンポなんだけども、決してイヤなテンポではない。どこか心が落ち着く柔らかなメロディー。
［繭子］：「すごい、何だか体にすーっと染み込んでくるよ～」
［カホラ］：「ホント、すごくステキ」
［聖奈美］：「でも、かなり難しそうな感じね」
［セフィル］：「そうだな、でも、決してできないものではないはずだ。君たちなら可能だろう」
［舞羽］：「これを私たちが弾くのか」
［吹雪］：「頑張れってしか言えないな、俺には」
［舞羽］：「ふふ、その言葉で十分だよ、吹雪くん」
しばらく、俺たちはピアノの音色に聞き入っていた。
……。
［セフィル］：「という感じだ。どうだったかな？」
［舞羽］：「すごかったです。何ていうか、さすが四季のピアノって感じです」
［繭子］：「そうだね～、何だか穏やかになった気がするよ～」
［セフィル］：「良さを分かってくれたか？」
［舞羽］：「はい、とっても」
［セフィル］：「弾く曲は難解だが、音色の良さは本当に素晴らしいんだ」
［舞羽］：「そうですね、他のピアノとは、何か少し違いますよね。何とは言い表せないんですけど」
［セフィル］：「うむ、やはり舞羽は分かっているな。さすがは経

験者だ」
［舞羽］：「いえ、そんなことはありませんよ」
舞羽は恥ずかしそうに笑った。
［セフィル］：「今聞いてもらった曲を、四人には弾いてもらう。それに伴って練習スケジュールを決めなくてはいけないな。一応こちら側で仮のスケジュールは立てている。教師たちには君たちを全力でサポートするように伝えてある。だから、なるべくそれに従って君たちには動いてほしい」
［四人］：「はい」
［セフィル］：「一応印刷してある。持っていてくれ」
学園長が用紙を配っていく。
［聖奈美］：「基本は午前中、か……」
［セフィル］：「日にちが近くなった時は授業を免除することもあると思う。出席できなかったからと言って評価を下げたりはしないから安心していい。無事にピアノを弾くことだけを考えてくれて構わない」
［繭子］：「うわー、何だかピアニストに選ばれた実感が沸いてきたよ～」
［吹雪］：「なかったのかよ、今まで……」
［セフィル］：「まあ一握りの中の一人に選ばれたわけだからな。無理もないだろう」
［吹雪］：「全力でやれよ？　マユ姉」
［繭子］：「もっちろん！　ワタシが本気を出せば、さっさっさーと弾いてみせるよー」
例えはよく分かんないけど、それなりにやる気はあるみたいだな。
［セフィル］：「うん、じゃあ次に吹雪の担当するハーモニクサーについて説明しよう」
［吹雪］：「あ、はい」
［セフィル］：「吹雪よ、ハーモニクサーの役割は知っているか？」
［吹雪］：「何となくは。ピアニストのサポートが仕事ですよね？」

［セフィル］：「まあ、端的に言えばそういうことだ。ピアノを弾いている最中に、集中力が途切れて曲調が変化してしまうと、平穏な四季を遅れなくなってしまうかもしれない。それをアシストするのが、ハーモニクサー、吹雪の仕事だ」

［吹雪］：「なるほど」

［セフィル］：「ピアニストはピアニストで練習に励んでもらうわけだが、ハーモニクサーにはハーモニクサーの練習に励んでもらう予定だ」

［吹雪］：「俺は、何をすればいいんでしょうか？」

［セフィル］：「うむ、吹雪には、一つの魔法を拾得してもらいたい」

［吹雪］：「魔法ですか？」

［セフィル］：「そうだ。吹雪は今年のマジックコロシアムの優勝者だ。魔法は得意だろう？」

［吹雪］：「それは、どうなんでしょう？　得意っていうよりは、俺の両親のおかげだと思いますけど」

［セフィル］：「それはそうかもしれんが、実力があることは確かだろう。杠を負かしたわけだからな」

［聖奈美］：「う……」

横にいる杠が小さくダメージを受けていた。

［セフィル］：「杠、吹雪はなかなかの強さだったんだろう？」

学園長、何という質問を……。

［聖奈美］：「そ、そうですね。この学園の中では、それなりの実力は兼ね備えてるんじゃないでしょうか」

［セフィル］：「うむ、だそうだ吹雪。杠がそう言ってるんだ。お前は実力者だぞ」

［吹雪］：「は、はい。ありがとうございます」

［聖奈美］：「次は、絶対負けないわよ……」

杠は小さな声でそうつぶやいた。

［セフィル］：「唱えてもらう魔法なんだが、吹雪は光系魔法は使

えるか？」
［吹雪］：「光ですか？　唱えられるのもありますが、あまり得意じゃないです」
光系魔法は他の属性魔法と比べて体力の消耗が激しく、且つ難しい。以前俺が唱えたセイクリッドスパークルも、あの場では成功したけど、何度も何度も失敗した記憶がある。
［セフィル］：「高等魔法だからな。他の属性魔法と比べて数も限られている。普通は唱えられなくてもおかしくはないんだが、お前は使えるのだな」
［吹雪］：「親のおかげですよ、それも」
［セフィル］：「君は謙虚だな。もっと誇ってもいいものを」
［繭子］：「ふーちゃんは昔からこんな感じなんですよー。だから代わりにワタシが誇ってまーす」
［セフィル］：「なるほど、だから学園の知名度が高いんだな、吹雪は」
マユ姉、言い散らしてやがるのか。
［セフィル］：「ピアノも良い人材を選んだもんだ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「唱えられるならそこまで苦労はしないかもしれないな。君に唱えてほしいのは、光魔法なんだ。ホーリーカルムという魔法を知っているか？」
［吹雪］：「ホーリーカルム？」
［セフィル］：「ああ。うーん、何と説明すればいいのか、簡単に言うと、能力を分け与える感じか？　マジックコロシアムで君が使った魔法と逆と考えるのがいいかもしれない」
［吹雪］：「逆ですか」
セイクリッドスパークルは全てを打ち消す効果を持つ技、とするとホーリーカルムは俺の力を四人に与えるってわけか。
［セフィル］：「始めに言っておくと、かなりの魔力を必要とする。普通の供給魔法とは種類が違うからな。君の前にハーモニクサーを

担当してくれた者たちは終わった後にかなり疲労していた。いつだったか、唱え終わって保健室に行った者もいたな」

［吹雪］：「本当ですか？」

［セフィル］：「うん、本当だ」

それは、相当だな。

［セフィル］：「自分の力を分け与えるわけだからな。打ち消すよりも疲れるのは当然と言えば当然だ。大変なのは、その状態をキープするってことだろう」

［吹雪］：「キープか……」

［セフィル］：「だがまあ、吹雪は素質持ちだ。他の者たちよりも楽にできるかもしれないがな」

［吹雪］：「いや、それはないですよ」

選ばれるだけの実力を持ってる人が疲労してるわけだ。俺も例外じゃないはず。

［セフィル］：「とりあえずは、吹雪の魔力が現時点でどれだけあるかを知らなければならないな。ちょっと見せてもらえるか？」

［吹雪］：「え？　いいですけど、どうやってですか？」

［セフィル］：「まあ、そこに立っていてくれ」

［吹雪］：「は、はい」

言われたとおりにすると、学園長は俺に近づいてきた。

［セフィル］：「目を閉じろ」

［吹雪］：「はい」

［繭子］：「わー、ドキドキイベントの予感」（繭子）

［聖奈美］：「先生、少し静かに」

［繭子］：「はーい」

［セフィル］：「……」

［吹雪］：「……」

……。

［セフィル］：「うむ、なるほど。いいぞ、吹雪」

［吹雪］：「あ、はい」

俺が目を開けると、学園長はうなずいていた。
［セフィル］：「うん、なかなかの魔力を秘めているな。さすが杜を打ち破っただけのことはある」
［聖奈美］：「う……」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「現段階で、７５ってところか。後２５必要だな」
［吹雪］：「俺の魔力分量ですか？」
［セフィル］：「ああ、平均を５０として考えてな」
２５と言っていたからホーリーカルムを唱えるには１００必要ってことか。
［セフィル］：「スケジュールに活かすとしよう」
［聖奈美］：「普通にしてて７５って、あんたどんだけ持ってるのよ」
［吹雪］：「そんなこと言われてもな……」
［聖奈美］：「……」
怖いな……。
［繭子］：「後２５ってことは、ふーちゃんの魔力じゃまだ足りないってことですかー？」
［セフィル］：「そうだな、頑張ればできるのかもしれないが、倒れる危険性があるな」
［繭子］：「そうなんだ、ふーちゃんでもかー」
［セフィル］：「だが、現時点でこの魔力なんだ。歴代のハーモニクサーの中でもかなり高い能力を持っているよ、吹雪は」
［繭子］：「ホントですか？　さすがワタシの弟だー」
［セフィル］：「ふむ、ラブラブだな、二人は」
［吹雪］：「ら、ラブラブって……」
［セフィル］：「とりあえずは、だ。吹雪にもスケジュール表を渡しておこう。飽くまでも仮だから、変更の場合も大いにあるから、そこを抑えていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」

紙を受け取り、ざっと目を通す。

……。

［セフィル］：「まあ、後でゆっくり目を通すといい。ホーリーカルムを拾得するのが、吹雪のすべきことのまず一つだ」

［吹雪］：「はい」

［セフィル］：「もう一つだが、吹雪には四人の練習を見てもらおうと思う」

［吹雪］：「見る？　練習に付き合うってことですか？」

［セフィル］：「うむ、そういうことだ」

学園長はうなずいた。

［セフィル］：「ホーリーカルムを拾得するのも大事だが、ハーモニクサーでもっとも大事なのはピアニストとのつながりだ。自分の能力を分け与えるわけだから、友好を結んでおかないといい結果にはつながらないからな」

［吹雪］：「そうですね。付き合うっていうのは、どんな風にでしょうか？」

［セフィル］：「それは吹雪の自由だ。吹雪のスタイルで四人の練習に付き合ってくれ。こちら側からは特に指示はない」

［吹雪］：「分かりました」

［セフィル］：「心を一つにして頑張ってくれ」

［吹雪］：「はい、了解です」

心を一つに、か。

［セフィル］：「ああ、ピアニストのみんな。吹雪が来たからって追い返したりしないようにな」

［繭子］：「はーい」

［舞羽］：「分かりました」

［カホラ］：「分かったわ」

［聖奈美］：「……」

三人はすぐに返事をしたが、杠はちょっと顔をしかめていた。

［セフィル］：「よし、そろそろいい時間だな。みんな、行くぞ」

［舞羽］：「え？　行くってどこに？」
［セフィル］：「もちろん、ピアノのところにだ。あ、さっき渡した石を忘れるなよ」
［聖奈美］：「ピアノって、それぞれ違うところにあるんですよね？」
［セフィル］：「ああ、少し歩くが、大丈夫か？」
［舞羽］：「はい、大丈夫です」
［セフィル］：「よし、では行くぞ」

カンタービレ（3）

［場所：山道］

四季のピアノはそれぞれ、島の最北、東、南、西に存在している。で、そのピアノは小さな神殿のような中に置かれている。どうしてかは、分からない。俺が生まれた頃にはすでにそこにあった。当たり前か、何年も何年も繰り返してきたことだしな。なければ逆におかしいだろう。

ま、しかし、先輩が気になるのも分かるな。神殿の中に設置されてるピアノだからな、それなのにあまり詳しい文献が残されてない。浪漫があるもんな。真実を聞いてみたい気もする。

にしてもだ。

［舞羽］：「はあ、はあ……」

［セフィル］：「疲れたか？　舞羽」

［舞羽］：「あ、大丈夫です。はあ、はあ」

［繭子］：「ふーちゃーん、おんぶ～」

［吹雪］：「だー、もう少しだろう？　一人で歩け一人で」

［繭子］：「だってー、疲れたんだもん」

［吹雪］：「普通は教師が率先して生徒を心配すべきじゃないのか」

［繭子］：「今は教師じゃないもん、ピアニストだもん」

［吹雪］：「まだ弾いてもないくせに」

［繭子］：「おんぶして～、ワタシはお姉ちゃんだよ～」

［吹雪］：「関係ねぇだろそれは。ギャーギャー騒ぐんじゃねぇ」

［カホラ］：「相変わらず仲いいね、あの二人は」

［セフィル］：「……ふむ、カホラ」

［カホラ］：「何？　お母さん」

［セフィル］：「疲れた、おんぶして」

「お母さんは真似しなくていいから！」

……。

［セフィル］：「よし、着いたぞ」

道が開けると、そこには立派な神殿があった。

［繭子］：「ふー、疲れたね～」

［吹雪］：「何が、疲れただよ、このチビ介が」

［繭子］：「ふーちゃん、ありがとね～」

結局俺は、マユ姉をおぶってここまで歩いてきた。

［繭子］：「さすがは男の子だー」

［吹雪］：「勝手に飛びついてきたんだろうが。もうしないからな」

［繭子］：「えー！？　横暴だよ～」

［吹雪］：「どっちがだよ！　このままじゃあ俺の体が保たないだろ」

［繭子］：「大丈夫だよ、男の子じゃない」

［吹雪］：「男にも限界ってものがあるんだ」

［繭子］：「うー」

［セフィル］：「おい、吹雪、繭子、早く中に入るぞ」

［繭子］：「あ、はーい」

［吹雪］：「走れるんじゃねぇかよ」

何が一歩も歩けない、だよ……。

［カホラ］：「大丈夫？　吹雪」

［吹雪］：「あ、はい。何とか……」

［カホラ］：「ふふ、お疲れさま」

先輩に言葉をかけてもらいながら、俺は神殿の中に足を踏み入れた。

［場所：神殿］

［繭子］：「うわー、すごいなー」

［セフィル］：「中に入るのは初めてか？」

［繭子］：「はい」

［吹雪］：「というより、普通そうですよね、学園長」

［セフィル］：「まあ、普段は立ち入り禁止だからな。入ったら校則違反だ」
［聖奈美］：「じゃあ、みんな初めてじゃなきゃおかしいですよ」
［セフィル］：「そうだな、よく校則を守ってくれたな、みんな」
言っちゃ悪いが、いらない確認だな。
［舞羽］：「――うわー、すごい」
［カホラ］：「そうね」
［聖奈美］：「これが、四季のピアノ……」
［繭子］：「おっきい～」
本当に、でかいな。グランドピアノと同じくらいだろうか。さすがは四季のピアノ、神々しいというか威風堂々というか、人目でこの島の誇る聖なる楽器ということが分かる。
［セフィル］：「どうだ？　初めて見た感想は」
［舞羽］：「はい、すごいです。こんなすごいピアノ見たの、生まれて初めてです」
［セフィル］：「普通はあるってことを知らされるだけで、実際に見ることはできないからな。ピアニストとハーモニクサーのみが見ることが可能なんだ」
［舞羽］：「やっぱりそうなんだ。何だか、得した気分」
［繭子］：「おっきいなー、ホントに。一体いくらなんだろう」
［吹雪］：「おい、値段を計ろうとするなよ」
お金で換算できる価値のものじゃないだろう。
［セフィル］：「どうだろうな、億ではきかないだろうな、おそらく」
［吹雪］：「学園長、真面目に返さなくていいですから、こんな戯れ言に」
［繭子］：「ひゃう！？」
［セフィル］：「うむ、やはり素晴らしい突っ込みだ。惚れ惚れするな」
［吹雪］：「食いつかなくていいですよ、そこは」

学園長には、カホラ先輩と似てる面と似てない面があるな。
［セフィル］：「よし、みんな、こっちに来るんだ」
学園長がピアノの近くに呼び寄せる。
［セフィル］：「ここは春を司るピアノだから、桜花のピアノだ。今からピアノに、弾いてもらう者を選んもらう。四人はさっき渡した石を用意しろ」
言われて四人は石を取り出す。
［吹雪］：「学園長、俺はどうしてればいいですか？」
［セフィル］：「ああ、悪いが端の方で見ていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「さあ、四人とも、もっと近づくんだ」
［繭子］：「何だか、緊張してくるね」
［舞羽］：「そうだね」
［セフィル］：「よし、じゃあ宝玉を握って、そして集中するんだ」
［舞羽］：「……」
［繭子］：「……」
［聖奈美］：「……」
［カホラ］：「……」
四人は目をつぶって、精神を集中させる。すると――。
［舞羽］：「わわっ！？　な、何！？」
舞羽の右手から、すごい輝きが放たれる。
［舞羽］：「ど、どうすれば」
［セフィル］：「落ち着け舞羽、そのままでいい」
［舞羽］：「は、はい」
しばらくすると、光は少しずつ収まっていく。
［セフィル］：「うむ、終わったか」
［吹雪］：「びっくりしたな」
［セフィル］：「どうやら、桜花のピアノは舞羽を選んだようだな」
［舞羽］：「え？　今のがそうなんですか？」
［セフィル］：「ああ、右手を開いてみるといい」

［舞羽］：「はい。――あっ！」
舞羽は驚いたような声を上げた。
［繭子］：「何なに？　舞ちゃんどうしたのー？」
［舞羽］：「は、はい。宝玉が……」
［聖奈美］：「変化、してるわね」
［カホラ］：「すごい」
確かに、三人が持っている石と舞羽の持っている石はかなり違いが生じている。色が赤に変わっていて、何より輝きが増している。さながら宝石のようになっていた。
［舞羽］：「学園長、これって」
［セフィル］：「うん、その宝玉の変化が、舞羽が桜花のピアノに選ばれた証拠だ」
［舞羽］：「そうなんだ」
［カホラ］：「宝玉が違う形に変化するなんて、不思議ね」
［繭子］：「でも、さっきよりもキレイ～」
［セフィル］：「そうだな。私たちはそれを、レッドジャスパーと呼んでいるよ」
［舞羽］：「レッドジャスパー？」
［セフィル］：「うん、ピアノに選ばれた印だ。大切に持っておくんだぞ？」
［舞羽］：「はい、分かりました」
舞羽の目はどこか嬉しそうだった。

カンタービレ（4）

［場所：神殿・外］

［セフィル］：「さて、次のピアノの所に向かうぞ」
［繭子］：「ええ！？　まだ歩くんですか～？」
［吹雪］：「当たり前じゃないか。全てのピアノを回らなければ意味がないだろう」
［繭子］：「ふーちゃん――」
［吹雪］：「却下だ」
［繭子］：「まだ何も言ってないのに～」
［吹雪］：「言わなくても分かるわ。何があろうとも俺はおぶわん」
［繭子］：「大丈夫、ワタシ軽いよ？　４０くらいしかないよ？」
［聖奈美］：「そ、それしかないんですか？　先生は」
杠、何故そこに食いついている。
［繭子］：「うん、そうだよ？　え？　聖奈美ちゃんは」
［聖奈美］：「え？　あ、その……てい！」
［吹雪］：「がっ！？　な、何すんだよ」
［聖奈美］：「何でもないわよ、別に」
［吹雪］：「じゃあどうして叩く！？」
［聖奈美］：「仕方なくよ」
［吹雪］：「仕方なくて叩くな！」
［セフィル］：「うん、私もそれくらい軽くなりたいな」
［カホラ］：「お母さん、お母さんがそんな軽くなったら骨と皮しか残らないわよ」
［セフィル］：「そうか？」
［カホラ］：「そうよ、吹雪と同じくらい身長あるんだから。繭子先生が軽いのは小さいからでしょ」
［セフィル］：「そうか、なら現状維持で大丈夫か」

一体何でこんな話になっているんだろう。
［繭子］：「ほらふーちゃん、おんぶ」
［吹雪］：「やらん」
［繭子］：「何で～？　こんなに軽いのに～」
［吹雪］：「軽かろうが重かろうが、もう俺はおぶわん。もうしないって言っただろうが」
［繭子］：「えー？　もうこれ以上歩けないよ」
［吹雪］：「さっき走ってただろうが。嘘を言うな嘘を」
［繭子］：「走ることはできるの。でも歩くことはできないの」
［吹雪］：「何だよそれは」
［繭子］：「とにかく疲れたのー、何とかしてー」
［吹雪］：「だー、くっつくなー！」
［舞羽］：「でも、確かにここから全てのピアノの場所までは距離があるね」
［カホラ］：「そうね、疲れるのは無理ないかもしれないわ」
［セフィル］：「そうだな、よし、じゃああれを使うか。おーい、繭子、吹雪、こっちに来い」
［吹雪］：「え？　はい」
［繭子］：「んぎぎー、くふぃが、くふぃがー！」
俺は学園長のところに向かう。
［セフィル］：「三人もこっちに来るんだ」
［舞羽］：「は、はい」
俺たちは学園長の周りに集まる。
［セフィル］：「よし、じゃあみんな目をつぶって、そして集中するように」
［聖奈美］：「え？　は、はい、分かりました」
学園長の言従って、俺たちは目をつぶった。
［セフィル］：「エル・エルプリウス……はっ！」
……。

……。

［セフィル］：「よし、目を開けていいぞ」

［舞羽］：「……え？　ここは？」

［セフィル］：「もちろん、神殿だ。ここは夏を司るピアノがある場所だ」

［吹雪］：「なるほど――ってそれもそうなんですけど、どうして俺たちここにいるんですか？」

［セフィル］：「ん、ああ、転移の魔法を使ったんだ。これなら移動時間もかからないからな疲労も軽減できるし一石二鳥だろう」

［聖奈美］：「学園長、転移魔法を使えるんですね」

［セフィル］：「まあな、これでも魔法は結構得意だからな」

［聖奈美］：「さすがですね」

でも、ちょっと待てよ？

［吹雪］：「学園長」

［セフィル］：「ん？　何だ？」

［吹雪］：「転移魔法を最初から使っていれば、もっと疲労も軽減できたんじゃないんですか？」

［カホラ］：「そうね、別に桜花のピアノまで歩いていく必要はないはずだものね」

［セフィル］：「……」

［吹雪］：「……」

［セフィル］：「よし、中に入ろうか」

なかったことにした！？　でもまあ、運んでくれた人に文句はつけられまい。

［カホラ］：「……とりあえず、入りましょうか」

［吹雪］：「そ、そうですね」

俺たちは神殿に足を踏み入れた。

［セフィル］：「よし、三人はさっきと同じようにするんだ」

［三人］：「はい」

俺と舞羽は端の方で待機する。
［舞羽］：「今度は、誰が選ばれるのかな？」
［吹雪］：「どうだろうな？　何となく、夏ってイメージがするのは」
三人に目をやる。
［吹雪］：「杠、のような感じがするんだが」
［舞羽］：「吹雪くんはそう思うんだ？」
［吹雪］：「何となく、な。選ぶのはピアノだから何とも言えないけど」
［舞羽］：「そうだね」
［セフィル］：「よし、三人とも、目をつぶるんだ、そして集中だ」
［三人］：「はい」
そして、ピアノに意識を集中させる。
……。
……。
少しすると――。
［聖奈美］：「んんっ！？」
杠の右手が光を放ち始めた。
［聖奈美］：「……」
さっき学園長に言われたように、杠は何も言わずにそのまま精神集中をする。やがて、光は収まっていった。
［聖奈美］：「あたし、ですね」
「そうだな、手を開いてみるといい」
［聖奈美］：「はい。……」
［繭子］：「わー、キレイだね」
［カホラ］：「舞羽とはまた違った色ね」
遠目からだが、確かに舞羽のジャスパーとは色が違う。
［セフィル］：「グリーンジャスパーになったな」
［聖奈美］：「この色って、季節毎に異なるんですね」

［セフィル］：「そうだな、それぞれの季節のイメージによって色は異なってくるようだ」
［聖奈美］：「そうですか」
［セフィル］：「それを無くすんじゃないぞ」
［聖奈美］：「はい」
［舞羽］：「吹雪くん、予想当たったね」
［吹雪］：「そうだな、当てずっぽうだったんだが」
［舞羽］：「でも、何となく分かるよ。杠さんって夏ってイメージが合うもの」
［吹雪］：「舞羽はそう思うのか？」
［舞羽］：「うん、杠さんの名前に“ナミ”って入ってるしね」
［吹雪］：「……ちょっとこじつけっぽくないか？」
［舞羽］：「そうかな？」
［吹雪］：「まあ、どう思うかはそれぞれの自由だけどよ」
［舞羽］：「うん。これで、後は二人だね」
［吹雪］：「ああ」
先輩とマユ姉だな。

［繭子］：「う〜、後になればなるほど、本当に選ばれるのか不安になってくるなー」
［セフィル］：「分からなくはないが、それはないと思うぞ繭子。お前を選んだのは四季のピアノには違いないんだ。それらが選ばないなんてことはあり得ない」
［繭子］：「ホントかな？　やっぱや〜めた、とか言われたらワタシ立ち直れないよ」
［セフィル］：「ないから、安心しろ」
［繭子］：「ふー、ドキドキだよ」
［セフィル］：「うむ、大分日が暮れてきたな、少し急ぐか」
［吹雪］：「集まったほうがいいですよね？」
［セフィル］：「そうだな、私の周りに」
俺たちはわらわらと集った。
［セフィル］：「よし、では行くぞ」
……。
［繭子］：「うー、緊張するよー」
［カホラ］：「大丈夫ですよ先生」
落ち着かないマユ姉を、先輩が宥めている。
［聖奈美］：「どっちが先生なのかしら」
［吹雪］：「そう思うのも無理ないな」
［聖奈美］：「あら、珍しく肯定するのね」
［吹雪］：「正論だからな」
［聖奈美］：「先生をかばうってことはしないのね」
［吹雪］：「どうしてする必要があるんだよ」
［聖奈美］：「ま、まあ、あなたがそう言うのならいいけどね、別

に」

［吹雪］：「あれ？　そういえばダルクはどうしたんだ？　一緒じゃないのか？」

［聖奈美］：「ああ、今日はお留守番してるわ。今頃家で昼寝でもしてるんじゃないかしら」

［吹雪］：「体調でも悪かったのか？」

［聖奈美］：「そういうのじゃないわ。ダルクから今日は行かないって言ったのよ。あの子なりの気遣いなんじゃないかしら」

［吹雪］：「なるほど。いい使い魔じゃないか」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「な、何だよ」

［聖奈美］：「あなた、ダルクのこととなると随分優しいのね」

［吹雪］：「ん、そんな風に見えるのか？」

［聖奈美］：「ええ、すごく。ダルクを否定してるところを見たことがないもの」

［吹雪］：「そりゃそうだろ、否定する理由がない」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「だ、だからその目はなんだよ」

［聖奈美］：「言っておくけど、ダルクはあげないからね」

［吹雪］：「んなことは分かってる。ダルクだってそう思ってるだろうよ」

［聖奈美］：「そ、そうかしら」

［吹雪］：「当たり前だろ。俺とお前って言ったら、真っ先にお前の元に行くさ」

ダルク自身も、杠のことを大事に思ってるようだし。

［吹雪］：「仲良くしろよ、あんないい使い魔、他にいないはずだ」

［聖奈美］：「あ、あなたに言われなくとも分かってるわよ」

相変わらず口調はキツいな……。

［舞羽］：「吹雪くん、杠さん、始まるみたいだよ」

［吹雪］：「お、そうか」

［聖奈美］：「……」
［セフィル］：「よし、二人とも、さっきのようにするんだ」
［繭子］：「はーい」
［カホラ］：「はい」
二人は目を閉じ集中する。
［繭子］：「……」
［カホラ］：「……」
……。
……。
少しすると――。
［繭子］：「あっ！？」
どうやら、紅葉のピアノはマユ姉を選んだようだ。
［繭子］：「しゅ、集中、集中……」
そう言いながら目をつぶる。しばらくして、光は収まった。
［繭子］：「ふう、よかった～」
［セフィル］：「繭子、手を開いてみるんだ」
［繭子］：「あ、はい」
手を開くと、石は黄色に変化していた。見た目からして、イエロージャスパーだろう。
［繭子］：「やった、選ばれたんだー」
［セフィル］：「だから言っただろう？　選ばれないことはないって」
［繭子］：「はい、ホントによかったよー」
本当に心配だったんだな、マユ姉。
［繭子］：「ふーちゃん、ふーちゃん。ワタシ選ばれたよー」
［吹雪］：「あー、見てたから分かってるって」
［繭子］：「誉めて、誉めて」
［吹雪］：「はいはい、よかったな、選ばれて。だが、これからが本番なんだから、手を抜くなよ」

［繭子］：「はーい」
［聖奈美］：「……本当に、教師なのかしら」

［セフィル］：「さて、残るはカホラだけだな」
［カホラ］：「順当に行けば、私は風花のピアノってことになるわね」
［セフィル］：「うむ、そうなってほしいものだ。みんな、後少しだから付き合ってくれ」
［４人］：「はい」
［セフィル］：「よし、行くか」
……。
……。

［繭子］：「えーっと、舞羽ちゃんが桜花のピアノで、聖奈美ちゃんが海風のピアノ、で、ワタシが月影のピアノだね」
［舞羽］：「そうですね」
［聖奈美］：「で、カホラさんが風花のピアノになるわけですね」
［繭子］：「そっか。うん、みんなそれぞれ季節にピッタリ合ってるね」
［聖奈美］：「そうですか？」
［繭子］：「うん、舞ちゃんは、春ーって感じだし、聖奈美ちゃんも夏ーって感じがするよ」
よく分からない主張だな、というかさっきの舞羽の言ったことに若干似ている。
［繭子］：「カホラちゃんも冬ーって感じがするしね」
［聖奈美］：「そ、そうですか」
［繭子］：「うん、頑張らなくちゃ」（繭子）
［聖奈美］：「その意見には賛成ですね」
［セフィル］：「よし、じゃあカホラ、以下略だ」
［カホラ］：「はい」

先輩は目をつぶり、集中を始める。
［カホラ］：「……」
……。
……。
［カホラ］：「きた……」
光が右手から放たれる。
［セフィル］：「うん、これで全員の役割が決まったな」
［カホラ］：「はあ、安心した」
［セフィル］：「手を開いてみるんだ」
［カホラ］：「うん。……何だか、みんなとは違う色をしてるわね」
［繭子］：「えー？　どれどれ？」
［舞羽］：「あ、ホントだ。何だかまだらみたいな模様してる」
［聖奈美］：「確かに、あたしたちの色合いとは違うわね」
［カホラ］：「お母さん、これは何ていうの？」
［セフィル］：「それは、オビキュラージャスパーだな」
［カホラ］：「オビキュラー？」
［セフィル］：「うむ、おそらくは雪みたいなのを現しているんだと思う」
［繭子］：「そうなんだー。そう言われてみるとそんな感じがするかもー」
［セフィル］：「まあ、何にしても、全員立派な宝玉に変化してよかった」
［舞羽］：「そうですね、全員四季のピアノに認めてもらえたわけですし」
［セフィル］：「うむ、そういうことだ。これで、遠慮なく特訓に望むことができるな」
［舞羽］：「頑張らなくちゃ」
［繭子］：「そうだね」
全員、やる気を表に出していて、モチベーションが高まっているよ

うだ。俺も、頑張らないといけないな。ホーリーカルム、絶対に取得しなければ。

「セフィル」：「さて、今日は終わりだ。疲れただろう、ゆっくり休むといい」

俺たちは神殿を後にした……。

カンタービレ（6）

12月4日（土曜日）

［場所：吹雪の家］

［舞羽］：「――くん、朝だよ」
［吹雪］：「んん？」
［舞羽］：「吹雪くん、起きて」
［吹雪］：「ん、あれ？　舞羽？　来てたのか？」
［舞羽］：「うん、おはよう、吹雪くん」
［吹雪］：「おはよう」
目覚ましを見ると、まだ起床時間は来ていなかった。
［吹雪］：「まだ朝早いけど、どうかしたのか？」
［舞羽］：「あれ？　ホントに？」
［吹雪］：「ああ」
時計を舞羽に見せてやる。
［舞羽］：「うわー、やっちゃったよー。ごめん、吹雪くん」
［吹雪］：「はは、まあ気にするな。今日は学園に行かなきゃいけないしな」
たまには早起きもいいだろう。カーテンを開けると、たっぷりの日差しが部屋に注がれてきた。
［吹雪］：「うん、いい天気だ」
天気がいいと、心も晴れてくる気がするな。
［舞羽］：「私、朝ご飯の用意するね」
［吹雪］：「ホントか？」
［舞羽］：「うん。あ、何か食べたい物ある？」
［吹雪］：「何だよ、作ってくれるのか？」
［舞羽］：「うん、早く起こしちゃったお詫び」

［吹雪］：「じゃあ、そうだな……野菜スープが飲みたいかもしれない」
［舞羽］：「野菜スープだね、任せて、美味しいの作るから」
拳をぎゅっと握ってやる気十分のようだ。
［舞羽］：「じゃあ、少し待っててね。作ってく――きゃあ！？」
ドテン。舞羽は躓いて前のめりにこけた。
［吹雪］：「お、おい、大丈夫か？」
［舞羽］：「いたた、うん、大丈夫」
一体何に躓いて、ああ、イスの足に引っかけたのか。というか――。
［吹雪］：「あー、舞羽よ」
［舞羽］：「え？」
［吹雪］：「その、さっきから、パンツ見えてるぞ」
［舞羽］：「え？　――ひゃあ！？」
舞羽は慌てて立ち上がろうとする。だが、それがいけなかったようで、
［舞羽］：「ひぎゃあっ！？」
今度は足マットで足を滑らせ、また前のめりにずっこけた。もちろん、スカートは全部めくれあがっている。本当は見ないほうがいいんだだろうが、そこは悲しき男の性、そこから目が離せない。
［吹雪］：「（あの色は、ライトブルーだな）」
っと、そんなことを考えてる場合じゃない。助け起こしてやらなければ。俺はモガいてる舞羽に手を差し出した。
［吹雪］：「ほら、大丈夫か？」
［舞羽］：「あ、吹雪くん。……」
舞羽は赤くなりながら俺の手を取った。
［舞羽］：「うう、はずかしー」
［吹雪］：「まあ、あんまり気にするなよ」
［舞羽］：「だって、見た、でしょ？」
［吹雪］：「あ、ああ」
［舞羽］：「どれくらい？」

［吹雪］：「そりゃもう、バッチリと」
［舞羽］：「やっぱりー！」
舞羽は顔を覆ってしまった。
［吹雪］：「ほ、本当に気にするなって。俺は別に気にしてないから」
むしろ眼福だ。
［吹雪］：「大丈夫だって、な？　な？」
［舞羽］：「うう、でも吹雪くん、何か嬉しそうだよ」
［吹雪］：「そ、そんなことは、ないはず」
［舞羽］：「……エッチ」
［吹雪］：「ゆ、許してくれ。あんなの目の前にあったら、誰だって見るって」
［舞羽］：「それは、そうかもしれないけど」
［吹雪］：「それに、俺たちは幼なじみだろ？　風呂だって一緒に入ったことあるし、そこまで大げさなことじゃ」
［舞羽］：「む、昔と今は全然違うよ～」
［吹雪］：「分かった、謝る。謝るから許してくれ」
俺は両手を合わせて頭を下げた。
［吹雪］：「もうあまり見ないようにするから」
［舞羽］：「ホントに？」
［吹雪］：「ホント」
［舞羽］：「ん、私にも否はあるもんね。うん、分かった。お互いに忘れよう」
［吹雪］：「おう、そうしよう」
［舞羽］：「お、思い出しちゃダメだからね？」
［吹雪］：「あ、ああ、善処するよ」
そう言われると、思い出しそうになるな。
［舞羽］：「あー、ダメだってば～」
騒がしい朝となってしまった。

カンタービレ（7）

［場所：グランド］

［吹雪］：「はあ、はあ……」
［セフィル］：「いいぞ、その調子で後3周だー」
［吹雪］：「は、はい。はあ、はあ……」
俺は走っていた、それこそフルマラソンのランナーばりに。何でか、それはもちろん練習の一環だ。ホーリーカルムを取得するためには、不足している魔力、その他もろもろを補わなければならない。これもそのための訓練だ。スタミナを付けて、ホーリーカルムを持続させるための訓練。スタートしてから2時間、ようやく終わりが見えてきた。
［セフィル］：「ほら、落ちてきてるぞ。踏ん張るんだ、吹雪」
後ろから学園長の檄が飛ぶ。競争馬って、こんな気持ちなのかもしれないな。
［吹雪］：「はあ、はあ……」
［セフィル］：「よし、ラスト1周だ、スパートをかけろ」
［吹雪］：「はあ、ふっ、はあ……」
俺は力を振り絞ってピッチを上げる。
……。
……。
［セフィル］：「よーし、ゴールだ」
［吹雪］：「はあ、疲れた……」
俺はグランドの芝に仰向けに倒れた。
［セフィル］：「とりあえずは及第点だな。よく走りきった」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます。はあ、はあ……」
［セフィル］：「ははは、まともにしゃべれないくらい疲れたか」

［吹雪］：「そう、ですね。とにかく、限界です」
初っ端から走り込みはかなり応えた。
［セフィル］：「ほら、飲むといい」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
渡してくれたドリンクを飲ませてもらう。
［吹雪］：「はあー、うめー」
［セフィル］：「ふむ、私も飲みたくなってくるな」
［吹雪］：「学園長、別に喉渇いてないんじゃ？」
［セフィル］：「吹雪飲みっぷりを見てたら渇いてきてしまった。一口飲ませてくれ」
［吹雪］：「あ、はい。どうぞ」
学園長は受け取ると、一口口に含んだ。
［セフィル］：「うん、練習に付き合った後のドリンクはうまいな」
学園長が吐き出した息は白かった。
［吹雪］：「にしても、俺なんかに付き合ってくれてよかったんですか？　学園長」
［セフィル］：「え？　どうしてだ？」
［吹雪］：「だって、俺はピアニストのサポートの役回りでしょう？　ピアニストのほうが重要視されるはずなのに」
［セフィル］：「うーん、６５点の解答だな、吹雪」
［吹雪］：「え？」
［セフィル］：「ちょっと考えが甘いぞ。たかがサポートと思っているかもしれないが、されどサポートだ」
［吹雪］：「は、はい」
［セフィル］：「確かにピアニストは重要な役回りだ。だが、それと同じくらいハーモニクサーも重要な役回りなんだ。吹雪が思ってる以上にな」
［吹雪］：「は、はい」
［セフィル］：「私の考えとしては、ハーモニクサーをこれ以上ないくらいに仕上げることで、ピアニストが最高の演奏ができるもの

と思っているんだ。どうしてか分かるか？」
［吹雪］：「それは……俺がしっかりしてれば、変に緊張もせず、本来の演奏ができるから、ですか？」
［セフィル］：「そう、その通りだ。分かっているじゃないか。吹雪が完璧なサポートをすればそれだけ四人の負担も減らすことができる。成功への近道なんだよ」
［吹雪］：「なるほど」
［セフィル］：「だから、私は吹雪の練習に付き合っているというわけだ。理解できたか？」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「まあ、私がこっちを手伝いたかったってのもあるんだがな？」
［吹雪］：「え？」
［セフィル］：「カホラにその気は……いや、どうだろうな」
［吹雪］：「学園長？　どうかしました？」
［セフィル］：「いやいや、何でもないぞ。さあ、もう一回ランニングを開始しようか」
［吹雪］：「え？　これで終わりじゃなかったんですか？」
［セフィル］：「急遽予定を変更だ。吹雪の基礎体力はこんなものじゃないと私は踏んだ。もう１０周くらいいけるだろう」
［吹雪］：「え？　マジですか？」
［セフィル］：「うん、マジだ。さあ、行くぞ！」
学園長に急かされ、俺は再スタートを切ることになった。

はあ……疲れた。さすがに限界状態からの１０周プラスは辛すぎた。さっきから足が悲鳴を上げている。でもまあ、スタミナがついた実感はあるな、確実に。スピードを緩めるわけにもいかなかったし（学園長が後ろから追いかけてくるから）いい練習にはなっただろう。
さて、ここからはハーモニクサーの第二の使命を果たさなければ。ピアニストとの連携を深め、良い演奏にするために。さて、何処に

行こうか。

・第一音楽室
・第二音楽室
・第三音楽室
・第四音楽室

カンタービレ（7）（後書き）

次回から選択肢の内容が入ってきます。好きな子を選んでくれると、お話が楽しくなるかもしれません。

今後もお付き合いよろしくお願いします。

カンタービレ（8）

・第一音楽室

［場所：第一音楽室］

さて、誰がいるんだろう。誰がどの場所にいるかまでは把握してないからな。まあ誰がいても普通に接するだけだけど。

［吹雪］：「入るか」

俺はドアを開けた。

［吹雪］：「失礼します」

［舞羽］：「あ、吹雪くん」

お、ここは舞羽の練習場所だったのか。

［舞羽］：「どうしたの？　あ、ひょっとして」

［吹雪］：「そう、ハーモニクサーのお仕事だ」

［舞羽］：「わー、私なんだ。何か少し緊張しちゃうな」

［吹雪］：「何でだよ？　緊張する要素なんてないじゃないか」

［舞羽］：「あるよー、だって、練習風景を観察されるんでしょう？　吹雪くんのポジションはピアノの先生と同じだよ」

［吹雪］：「そ、そうなのか？」

［舞羽］：「そうです」

［吹雪］：「お前が思うほど厳しくなんてしないよ。安心しろって」

［舞羽］：「本当に？」

［吹雪］：「当たり前だろ？　今まで俺、舞羽に厳しくしたことあるか？」

［舞羽］：「……」

［吹雪］：「お、おい、どうして黙る？」

［舞羽］：「だって、吹雪くん時々怖いんだもん。見てて」

［吹雪］：「例えば？」
［舞羽］：「繭さんを怒る時とか、怒る時とか、怒る時とか」
［吹雪］：「マユ姉のあれはしつけだ。舞羽には絶対にしないって」
［舞羽］：「……本当に？」
［吹雪］：「本当だ、破ったらマーブルチョコ奢ってやる」
［舞羽］：「わあ、百円で４つ買えるよ」
［吹雪］：「ん？　何か言ったか？」
［舞羽］：「いえ、何でもありません」
［吹雪］：「うん、それでよし。にしても、先生はいないのか？　ずっと一人で練習？」
［舞羽］：「ううん、さっきまではいたよ。でも、ここからは一人でって言って出てっちゃった」
多分、俺が来ることも予定の内に組み込まれてるんだろうな。
［舞羽］：「だから一人だったんだ」
［吹雪］：「なるほど」
［舞羽］：「よろしくお願いします、吹雪先生」
［吹雪］：「はい、よろしくお願いします。……何だ？　このやりとり」
［舞羽］：「あははは」
［吹雪］：「ま、さっきやってたように練習してくれ。とりあえず横で見てるから」
［舞羽］：「うん、分かった」
舞羽はイスに座ってピアノに向かい合わせになる。
［吹雪］：「じゃあ、弾きます」
［舞羽］：「うん」
舞羽は一回深呼吸して、ゆっくりと鍵盤に指を走らせた。昨日聞いたものよりもスローテンポだ。だがそれは仕方がない、いきなりそんな早く弾けるわけなどないからな。それに素人でも分かる難解なメロディーだ、むしろゆっくりでもペースを乱すことなく弾けていることに尊敬の念を抱く。俺はしばらく聞き入っていた。

……。

……。

……。

［舞羽］：「――ふう」

俺は拍手を送った。

［舞羽］：「あ、ありがとう」

［吹雪］：「今ので全部か？」

［舞羽］：「ううん、これで、半分くらいかな」

［吹雪］：「結構今のでも弾いたよな？　でも半分か？」

［舞羽］：「うん、半分」

［吹雪］：「うーん、まだまだ先は長いか」

［舞羽］：「そうだね、でも、私はまだ恵まれてるほうだよ。一応経験してるからね」

［吹雪］：「今日は？　全部通すのか？」

［舞羽］：「そうだね、通せるのならそうしたいな。でも、思った以上に難しくて、まだ半分までしか弾けてないんだ」

［吹雪］：「そうなのか。ちょっと見てみたいな、その楽譜」

［舞羽］：「見たい？　これがそうだよ」

［吹雪］：「お、サンキュー」

俺はそれを受け取って少し眺めてみた。

……。

……。

［舞羽］：「吹雪くん？」

［吹雪］：「舞羽、お前こんなの弾いてたのか？」

［舞羽］：「え？　う、うん」

［吹雪］：「すごいな……」

楽譜に目を通すのは初めてじゃあない。小さい頃、よく舞羽の弾いてたピアノの楽譜を見たことがあったからな。だが、その頃見たものとは、明らかに格が違っていた。

［吹雪］：「何だよコレ。メチャクチャ難しいじゃないかよ。記号たっくさんあるし、五線紙の中音符ばっかりじゃん」
［舞羽］：「うん、そうだね」
［吹雪］：「……恐れ入ったよ、舞羽さん」
［舞羽］：「え？　え？」
これならピアノも人を選ぶのが分かる。
［吹雪］：「舐めてた、俺、どれだけ年越しの行事が大事なのかを」
テキトーにやってたら、間違いなく島が崩壊しているな、きっと。
［吹雪］：「なるほど、だからハーモニクサーか」
［舞羽］：「え？」
［吹雪］：「ああ、俺学園長とさっきまでトレーニングしてたんだ。走り込みの」
［舞羽］：「そうなんだ」
［吹雪］：「うん、死ぬかと思った」
［舞羽］：「何周くらい？」
［吹雪］：「うーんと、３０周くらい走ったかな」
［舞羽］：「ろ、３０周！？　もうランナーじゃない」
［吹雪］：「ああ、ヘロヘロになった」
［舞羽］：「よく、走りきれたね」
［吹雪］：「後ろから学園長が追いかけてたからな、ほうきに乗って」
［舞羽］：「あ、それはやめられないね」
［吹雪］：「ああ、頑張ったと思うよ、我ながら」
［舞羽］：「お疲れさま」
［吹雪］：「うん。で、その後に学園長が言ってたんだ。ハーモニクサーはこれ以上ないくらい大事な役割を担っているって」
［舞羽］：「うんうん」
［吹雪］：「ハーモニクサーをこれ以上ないくらいに万全な状態に仕上げれば、成功への近道になるって言ってたんだ。その意見が正しいことに、今身を持って感じた。こんな難しい曲を弾かなきゃい

けないから、ハーモニクサーが全力でカバーしなくちゃいけないんだって」

［舞羽］：「そうかもしれないね、私から見ても、この曲は難しいもの」

［吹雪］：「やっぱそうだよな？　これを簡単だって言ったら、正直気持ちが悪い」

中にはいるのかもしれないけど……。

［吹雪］：「全力でやらないと、四季のピアノに怒られちまうぜ」

［舞羽］：「そうだね、お互いに頑張ろう？　吹雪くん」

［吹雪］：「ああ、そうだな」

［舞羽］：「じゃあ、早速弾かなくちゃ。新しいところにチャレンジだよ」

［吹雪］：「うん、やるか」

俺は舞羽の奏でるメロディーを熱心に聞いていた。

カンタービレ（9）

・第二音楽室

［場所：第二音楽室］

さて、第二音楽室に来てみたけど、誰がいるんだろう。
［聖奈美］：「ダルク、どう？」
［ダルク］：「うーん、もう少しそこは弱く弾いたほうがいいんじゃないかな？　じゃないと力任せに弾いてるように見えるかも」
［聖奈美］：「そう、分かったわ。気をつけてみる」
中から声が聞こえる。ダルクって呼んでるあたり、中にいるのは杠だろうか？　何か言われるかもしれないが、とりあえず入ってみよう。
［吹雪］：「失礼します」
ノックをして俺は入室した。当たり前だが、一人と一匹は俺のほうに視線を向ける。
［ダルク］：「あ、吹雪」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「おう、ダルク」
やっぱり、杠からあいさつはないか。まあ、薄々分かってたけどな……。
［聖奈美］：「ハーモニクサーの仕事で来たのかしら？」
［吹雪］：「ああ、そうだ」
［聖奈美］：「そう、あたしを指名した理由は？」
［吹雪］：「いや、教室に誰がいるまでは把握してなかったから、特に理由はないんだ」
［聖奈美］：「ふぅん、そう」

［吹雪］：「邪魔になるなら、違う所に行ってもいいぞ？　別に」
［聖奈美］：「……まあいいわ。折角だし、練習でも見てもらおうかしら。こっちに来て」
相変わらず上からなのは変わらないか。まあこれがあるから杠だってことを認識できるわけでもあるが。
［聖奈美］：「ほら、早く」
［吹雪］：「あ、ああ」
俺は言われるままに杠の元に向かう。
［聖奈美］：「まずは、これ」
［吹雪］：「ん？」
どうやら楽譜のようだ。
［吹雪］：「いいのか？　俺に渡して」
［聖奈美］：「問題ないわ、ん」
杠は俺の前にもう一つ楽譜を見せる。
［聖奈美］：「こんなこともあろうかと、何部か余分に印刷しておいたのよ」
［ダルク］：「私も持ってるよ」
ダルクも小さい体に楽譜を抱えている。
［聖奈美］：「何事にも準備は怠っちゃだめなのよ」
［吹雪］：「なるほど」
［聖奈美］：「じゃあ、早速弾くから。ここはこうしたほうがいいとかあれば、遠慮なく言ってちょうだい」
［吹雪］：「ああ、分かった」
［聖奈美］：「行くわよ」
杠は一度深呼吸して、指を鍵盤に走らせた。
［聖奈美］：「……」
何て言うか、普通に上手い。まだ最初だからか、少し突っかかりそうなところはあるけど、大きく停止することはなく、流れるように曲が紡がれていく。
……。

……。

［聖奈美］：「――ふう」

数分して、一旦杠の演奏は終わった。

［聖奈美］：「どうだったかしら？」

［吹雪］：「その前に一つ、いいか？」

［聖奈美］：「え？　何よ？」

［吹雪］：「お前、ピアノの経験者なのか？」

［聖奈美］：「ええ、そうよ。それがどうかしたの？」

［吹雪］：「いや、どうしたっていうか……」

［聖奈美］：「あたしがピアノ経験者だと、何か問題でもあるの？」

［吹雪］：「いや、そういうことを言ってるんじゃなくて」

［聖奈美］：「じゃあ、何？」

［吹雪］：「いや、特にはないんだけど」

［聖奈美］：「興味本位ってわけ？」

［吹雪］：「まあ、うん」

そうなるの、か？

［聖奈美］：「ま、別にいいけど。そうよ、あたしはピアノ習ってたわ。小学校の頃からかしら。歴としては6年くらいってところかしら」

［吹雪］：「そうなのか」

［聖奈美］：「これで満足？」

［吹雪］：「え？　あ、ああ」

［聖奈美］：「じゃあ、話を戻すけど、どうだった？　聞いた感想は？」

［吹雪］：「ああ、普通に上手だったと思うが」

［聖奈美］：「……ちょっと大久保、もう少し真面目にしなさいよ」

［吹雪］：「え？」

［聖奈美］：「あたしはそんな解答を求めてないの。何かしらあるでしょう？　ここはこうしたほうがいいとか。本当にそう思ったの

なら、あまり強くは言えないけど、そんな生易しさでクリアできるほど、この行事は甘くないわ」

［吹雪］：「あ、ああ、そうだな」

［聖奈美］：「もっと突っ込んだ意見を言ってちょうだい。でないと、あたしのためにならないわ」

［吹雪］：「そうだな、悪かった」

こんな形で反感を買ってしまうとは、ちょっと予想外だ。確かに、こんな曖昧な意見じゃあこいつに失礼か。次はもっと真剣に意見を出すとしよう。

［ダルク］：「ドンマイ、吹雪」

［吹雪］：「おう」

［ダルク］：「じゃあ、もう一回、今弾いたとこまで弾くから」

杠はもう一度鍵盤に向かった。

カンタービレ（１０）

・第三音楽室

［場所：第三音楽室］

よし、入るか。俺はドアをノックした。コンコン。
［繭子］：「はーい、どうぞー」
この声は、うん、絶対にそうだな。
［吹雪］：「失礼します」
俺はドアを開けて入室する。
［繭子］：「あ、ふーちゃん、おーい」
［吹雪］：「そんな近いところで手を振らなくても、分かってるよ」
ちっこいのがピアノの前に座っていた。どうやらマユ姉の練習場所だったようだ。
［繭子］：「どうしたの？　職員室と勘違いー？」
［吹雪］：「んなわけないだろ？　ハーモニクサーの使命として来たんだよ。学園長から説明聞いただろ？　昨日」
［繭子］：「あ、そっか。じゃあ、ふーちゃんはワタシを選んでくれたんだねー？」
［吹雪］：「まあ、選んだっていうか」
テキトーに選んだっていうか。
［繭子］：「さすがふーちゃん、姉を尊重する心をちゃーんと持ち合わせてるんだね」
［吹雪］：「尊重？」
［繭子］：「うん、尊重」
［吹雪］：「ま、まあいい。とにかく、練習してたんだろ？　マユ姉は」
［繭子］：「うん、そうだよ。偉い？　エラい？」

［吹雪］：「いや、使命なんだから当然だろ」
［繭子］：「うー、エラいって言ってほしかった～」
［吹雪］：「ちゃんと使命を全うできたら言ってやるよ」
俺も人のことは言えないんだろうけど。
［吹雪］：「どこまで進んだんだ？」
［繭子］：「実を言うと、まだ弾いてないんだ。一応、どれがどの音の鍵盤かってことは分かってるんだけど、記号とかまでは完璧に覚えてなかったから」
［吹雪］：「なるほど」
そうだよな、マユ姉は音楽の先生とか言うわけでもない。ピアノは弾けなくはないだろうが、舞羽ほどではないだろうしな。
［繭子］：「道は険しそうだよー」
［吹雪］：「かもしれないけど、頑張るしかないだろ。選ばれたんだしな」
［繭子］：「そうだねー、んー、フェルにでも手伝ってもらおうかなー？」
［吹雪］：「フェルシア先生、ピアノできるのか？」
［繭子］：「ううん、ワタシとどっこいどっこいだよ」
［吹雪］：「じゃあ、ダメじゃないか」
［繭子］：「いるだけでお手伝いになるんだよー」
なるほど、お守りってわけだな、だがー、
［吹雪］：「フェルシア先生の迷惑になるから却下だ」
［繭子］：「う、やっぱり……」
［吹雪］：「やっぱりって、分かってたのかよ」
［繭子］：「うん、薄々ー」
［吹雪］：「じゃあ口に出さなくてもいいだろ」
［繭子］：「ひょっとしたら、って思ってー」
［吹雪］：「ねぇよ」
［繭子］：「ぶー」
［吹雪］：「俺が手伝うから、文句言うな」

［繭子］：「え？　ホントに？」
［吹雪］：「だから言っただろ。ハーモニクサーの使命で来たって」
［繭子］：「あ、そっかー。わーいやったー」
［吹雪］：「話聞いてろよな、ホント」
［繭子］：「うん、次はききまーす」
ホントに分かってんだろうか、多分分かってないんだろうな。
［吹雪］：「時間がもったいない。俺は何を手伝えばいいんだ？」
［繭子］：「うーん、じゃあ、そうだなー。……今は特にないから、ふーちゃんはワタシを見守っててくれない？　まずは楽譜を読めるようにしないと始まらないからね。今日で一通りに目を通しておきたいから。いい？」
［吹雪］：「ああ、構わないよ」
そもそも俺に口出しできる権限はない。
［繭子］：「じゃあ、そんな感じでよろしくしていい？」
［吹雪］：「分かった」
俺はマユ姉の要望どおり、マユ姉の様子を見守っていた。久々に、マユ姉が真剣に物事に取り組んでいる姿を見た気がした

カンタービレ（11）

・第四音楽室

［場所：第四音楽室］

よし、中に入ろう。俺は音楽室のドアをノックした。
［カホラ］：「はーい、どうぞ」
［吹雪］：「失礼します」
返事をして俺は入室した。
［カホラ］：「あら、こんにちは、吹雪」
ここは、先輩の練習場所だったんだな。
［吹雪］：「こんにちは、先輩」
［カホラ］：「ひょっとして、お付き合いしに来てくれたのかしら？」
［吹雪］：「そう、なるんですかね？」
［カホラ］：「ハーモニクサーとして、馳せ参じたんでしょう？」
［吹雪］：「はい、そうです」
［カホラ］：「なら、お付き合いね、練習のお付き合い」
［吹雪］：「そういうことになります、ね」
［カホラ］：「ふふ」
何でか分からないが、先輩は少し嬉しそうに笑っていた。
［カホラ］：「吹雪の練習は終わったの？」
［吹雪］：「はい、一応。終わったのでこっちにやってきました」
［カホラ］：「そう、じゃあ、時間はあるのね」
［吹雪］：「はい。先輩は、ずっとここで練習してたんですか？」
［カホラ］：「ええ、まだあまり弾いてはいないんだけどね。舞羽たちのようにピアノ経験者ってわけじゃないし」
［吹雪］：「やっぱり、難しそうですか？」

［カホラ］：「そうね、昨日聞いてそんな風な予感はしてたけど、見事に的中したわ。楽譜からも簡単にはいかせないよって臭いがプンプンするし」

そう言ってばっと楽譜をこちらに見せる。

［吹雪］：「確かに、すごいですね」

素人が見ても、びっしりと音符で埋め尽くされたそれは、難しいということが容易に理解できた。

［カホラ］：「でしょう？　ピアノをほとんど体験したことがない人間にとっては試練の場ねぇ、これは」

［吹雪］：「鍵盤の位置とかは把握してるんですか？」

［カホラ］：「それはね、音楽の授業とかあったし。でも、簡単な曲しか弾いたことないからね。舞羽たちよりも遅れはとってるわね」

［吹雪］：「舞羽は経験者ですからね」

［カホラ］：「でしょう？　こんなことなら少し練習しておけばよかった、なんて、選ばれるなんて思わないからそんなことしなかっただろうけど」

舌を出しておどけてみせる。

［カホラ］：「でも、これもいい機会ね。少しピアノにも興味はあったし、触れ合ってみるのも悪くはないかな」

［吹雪］：「舞羽は、ピアノは楽しいって言ってましたよ」

［カホラ］：「あら、ホントに？」

［吹雪］：「はい、結構前ですけど、あいつが習ってる時にそう言ってました。着実に成長してることが実感できるって」

［カホラ］：「そうね、ちゃんと流れるように弾けたら、きっと気持ちいいでしょうね。頑張らなくちゃ。吹雪」

［吹雪］：「はい」

［カホラ］：「練習しましょう。付き合ってもらえる？」

［吹雪］：「はい、俺は何をすればいいですか？」

［カホラ］：「一回、実際に弾いてみるから、ここはこうしたほうがいいとか、アドバイスをもらえない？」

［吹雪］：「え？　でも、俺素人ですよ」
［カホラ］：「いいわよ、むしろ素人のほうがいい意見出るかもしれないじゃない」
［吹雪］：「なるほど」
逆転の発想だな。
［吹雪］：「分かりました、じゃあ印刷いってきます」
［カホラ］：「うん、先に少し弾いてるから」
［吹雪］：「了解です」
頑張ろう、そんな気持ちが新たに燃え上がってきたのだった。

ドルチェ（1）

12月6日（月曜日）

［場所：教室］

［翔］：「で？　どうなんだ？　吹雪よ」
［吹雪］：「何だよ、急に」
［翔］：「どうなんだって言ったら分かるだろー？　オレとお前の仲なんだから」
［吹雪］：「……で？　何のことだ？」
［翔］：「分からないの！？　マジで！」
［吹雪］：「ああ、マジで」
［翔］：「嘘だ、オレとお前は――」
［吹雪］：「悪友だな」
［翔］：「早いな返事！　っていうか悪友！？　親友じゃなくて！」
［吹雪］：「他に何があるっていうんだ」
［翔］：「何てこった……翔ダイショック」
全くかわいくないな……。
［吹雪］：「いいから、普通に言えよ。じゃないと分からないだろ」
［翔］：「ああ、そうだな。分かった」
テンションががっくり下がっていた。
［翔］：「どうなんだ？　ピアニストとハーモニクサー。もう練習始まったんだろ」
［吹雪］：「ああ、そのことか」
［翔］：「他に何があるんだよ……」
［吹雪］：「主語言われなかったら分かるわけないだろうが」
［祐喜］：「でも、確かに気になるね。午前中は二人ともいなかったし、それに繭子先生の授業の時も代わりの先生が来てたし。練習

してたんだよね？　二人は」
［舞羽］：「うん、そうだよ。それぞれ別メニューだけど」
［祐喜］：「やっぱりそうだったんだ。でもそうだよね、失敗は許されない行事だし」
［吹雪］：「まあな、多分しばらくはこんな感じだろう。午前は練習、午後は授業」
［祐喜］：「土曜日とか日曜日は？」
［吹雪］：「多分一日中練習だと思うぞ。な？　舞羽」
［舞羽］：「うん、そうだね。表にはそんなことが書いてあったと思うよ」
［祐喜］：「へえ、じゃあお休みないんだ」
［舞羽］：「仕方ないことだよ。学園の代表なわけだから」
［祐喜］：「僕たちには何にもできないけど、頑張ってね。応援してるから」
［吹雪］：「おう」
［舞羽］：「ありがとう」
［祐喜］：「にしても、吹雪、さっきからすごい水分取ってるけど、気のせいじゃないよね」
［吹雪］：「ああ、もう喉が渇いて仕方ないんだ」
［祐喜］：「「練習？」」
［吹雪］：「ああ」
［祐喜］：「何の練習？」
［吹雪］：「スタミナをつけるための走り込みだ。グランドを３０周」
［祐喜］：「さ、３０周？　本当に？」
［吹雪］：「ああ」
［舞羽］：「吹雪くん、昨日もそのメニューだったよね」
［吹雪］：「ああ、三日目だけど、まだ慣れそうにないよ」
［祐喜］：「よく走りきれるね」
［吹雪］：「というか、走りきらなきゃいけないんだ。学園長が後

ろをついてきてるからさ」
［祐喜］：「え？　走って？」
［吹雪］：「いや、ほうきだ」
［祐喜］：「じゃあ、あれみたいな感じ？　駅伝チームの監督みたいな」
［吹雪］：「そうだな、そんなとこかもしれない」
［祐喜］：「大変だね、僕は走りきれそうにないよ」
［吹雪］：「そのせいで、ちょっと体がダルくてな」
［祐喜］：「そりゃあそうだろうね」
［舞羽］：「大丈夫？　吹雪くん」
［吹雪］：「大丈夫だけど、体の節々が痛いな」
俺は別にマラソンランナーってわけじゃないし……。
［舞羽］：「明日も走り込みなの？」
［吹雪］：「多分な。　別のメニューも入れるって言ってたけど」
どっちにしても明日も死にそうになるだろう。
［吹雪］：「せめて痛みはなくしたいんだけどな」
［愛海］：「――そんな大久保くんに、イイものをあげちゃおう～」
［吹雪］：「おわぁ！？」
［舞羽］：「な、愛海！？」
［愛海］：「いやー、ようやく完成したわー」
［舞羽］：「ドコから出てきたのよ、愛海」
［愛海］：「え？　下からだけど」
［舞羽］：「そ、そんな当たり前のように……」
［舞羽］：「ちなみに、フェードインした時に見えたけど、舞羽、今日の下着は白だったわね。見えちゃった」
［愛海］：「ち、ちょっと愛海～～！？」
［翔］：「何？　白だと！？」
［吹雪］：「どりゃあ！」
［祐喜］：「えいっ！」
ドガ、ボコ。

［翔］：「ぐああ、どうして、二人してオレを……がく」
よし、悪魔は排除したぞ。
［舞羽］：「き、聞いてた？　吹雪くん」
［吹雪］：「い、いや、何も」
［舞羽］：「うう、聞いてたんだ……」
［吹雪］：「ふ、不可抗力だ。日野が急に言い出すから」
［愛海］：「そんなこと言って、ホントはおいしかったんじゃないのー？　にひひ」
こいつ、端っからこういう状況を狙ってたんじゃないだろうな。
［吹雪］：「と、とにかく。気にするな舞羽、今は何も起こらなかった、俺は何も聞かなかった、そういうことだ。いいな？」
［舞羽］：「う、うん」
［愛海］：「えー、そんなのつまらないわよー、もっと盛り上げてくれなきゃさー」
［吹雪］：「日野、お前も翔のようにしてもいいんだぞ？」
［愛海］：「あー、女の子に暴力って最低の男のすることだよ？　大久保くん」
［吹雪］：「お前が女性だとしても、今の状況を把握している奴らなら、きっと許してくれるはずだ」
［愛海］：「やーん、暴力反対ー」
［吹雪］：「じゃああんまり場を荒らすなよ」
［愛海］：「はーい、善処しまーす」
全く、分かってんのかコイツは。
［愛海］：「じゃあ、はいコレ」
［吹雪］：「ん？」
［愛海］：「お詫び、あげるわ」
［吹雪］：「何だよ、コレ」
［愛海］：「え？　栄養ドリンクよ」
［吹雪］：「いや、そういうことじゃなくて」
［愛海］：「大丈夫、飲めるわ」

［吹雪］：「そういうことでもなくて、むしろ飲めなかったらドリンクじゃないだろ」
［愛海］：「私が丹精込めて作った嗜好の一品よ」
［吹雪］：「市販品じゃないのかよ」
［愛海］：「もちろん、自家製だもの」
［吹雪］：「どうせくれるなら市販品にしてくれよ」
［愛海］：「それじゃあおもしろくないじゃないの」
［吹雪］：「おもしろさを求める必要性なんてないだろ」
［愛海］：「まあいいからいいから、とりあえず飲んでみてよ」
受け取ったドリンクを見てみる。……見た目は確かに普通っぽいんだが。
［吹雪］：「ちょっと聞いていいか？」
［愛海］：「一つだけね」
［吹雪］：「一つだけかよ」
［愛海］：「だって、そうやってお茶を濁して飲まなそうなんだもん。だから一つだけね」
［吹雪］：「……飲むことは決まりなのか？」
［愛海］：「もちろん、大久保くんのために作ってきたんだから」
［吹雪］：「……」
［愛海］：「ほら、いいわよ、質問、一つなら答えるわよ」
聞きたいことはたくさんあるんだが、くそー仕方ない。
［吹雪］：「疲れは取れるのか？　これを飲んだら」
［愛海］：「ええ、もちろん、バッチリよ」
なら、いいだろう。
さすがの日野でも、神経をおかしくするようなものは作らないだろう。
［舞羽］：「の、飲むの？　吹雪くん」
［吹雪］：「まあ、死にはしないだろう」
［愛海］：「作った本人がいるのに、失礼ね」
［吹雪］：「じゃあ、いただきます」

［愛海］：「一気に、ググーっとね」
注文が多いな……。俺は蓋を開けて――、
［吹雪］：「んっ、んっ、んっ……」
言われたとおり、一気に全部飲みきった。
［吹雪］：「――はあ」
［愛海］：「どうだった？　お味は？」
［吹雪］：「分かんないな、何味にしたんだ？」
［愛海］：「えーっと、ミックスかな？」
［吹雪］：「何の？」
［愛海］：「果物の、さすがに魚介類とかのミックスなんてしないってば」
そこの配慮はしてるか……。
［吹雪］：「効果は？　いつ頃に出てくるんだ」
［愛海］：「すぐに出ると思うわよ」
［吹雪］：「本当か？」
［愛海］：「私の計算に狂いがなければ」
［吹雪］：「ふぅん」

――続く……

ドルチェ（2）

……。

……。

……。

［愛海］：「あり？　おかしいな、すぐに効果が出るはずなんだけど」

［舞羽］：「愛海、やっぱり失敗じゃ――」

［愛海］：「う、ぐううう……」

［舞羽］：「ど、どうしたの！？　吹雪くん」

［愛海］：「お？　これは、ひょっとして？」

［吹雪］：「……」

［舞羽］：「ふ、吹雪くん？」

［吹雪］：「舞羽……」

［舞羽］：「ちょ、ちょっと愛海。吹雪くんの様子がおかしいんだけど」

［愛海］：「え？　気のせいじゃない？」

［舞羽］：「そ、それはないよ。だって目が虚ろじゃないの」

［愛海］：「そうかしら？　――もうちょっと観察してましょうよ」

［舞羽］：「え、え～？」

［吹雪］：「……」

［舞羽］：「だ、大丈夫？　吹雪くん？」

［吹雪］：「食べたい……」

［舞羽］：「え？」

［吹雪］：「腹が減った。何か食べたい」

［舞羽］：「え？　今昼食食べたばっかりじゃ」

［吹雪］：「そうか、じゃあいいや、舞羽にしよう」

［舞羽］：「……え？」

［吹雪］：「お前を、今から俺が食う」

［舞羽］：「え、えええええええええ！？」
［翔］：「な、何だとーーーーー！？」
［クラスメイト］：「何ーーーーー！？」
［舞羽］：「ちょちょちょちょちょちょっと愛海、一体吹雪くんに何したのよ！？」
［愛海］：「いや、本当に疲れは取れるのよ？　疲労を浄化する作用をたっぷり含んだし。ただ、副作用として情欲が少し表に出るようになるのよね、これはちょっと失敗だったわー」
［舞羽］：「ど、どうやったらそんな風な副作用が生まれるの？」
［愛海］：「どうって言われてもなー、なっちゃったものはしょうがないよねー」
［舞羽］：「しょうがないじゃないよー！　みんな大パニックだよ。吹雪くんが吹雪くんじゃなくなってるよ！」
［愛海］：「心配ないわよ、副作用は3分で治まるから。すぐに終わるわ」
［舞羽］：「そ、そんな気楽に……」
［吹雪］：「もう、限界だぜ、舞羽」
［舞羽］：「だ、ダメだよ吹雪くん、そんなの」
［吹雪］：「んがーー！」
［舞羽］：「き、きゃあああああ！？」
［翔］：「おー、すげー、吹雪が普段見せない一面をオレたちにみせている！」
［祐喜］：「何興奮してるの、早く吹雪を止めようよ、翔」
［翔］：「えー？　マジかよ、もう少し見ていたい――」
［祐喜］：「いいから、来なって」
［翔］：「いやーん」
［祐喜］：「変な声出してないで、ほら」
［吹雪］：「ふっふっふ、追い詰めたぜ、舞羽」
［舞羽］：「も、元に戻ってよ、吹雪くん」
［吹雪］：「心配するな、ちゃんとする」

［舞羽］：「そ、そういう問題じゃないよー」
［吹雪］：「さあ行くぞー、無限のかなたに」
［祐喜］：「吹雪、やめなよ」
［翔］：「名残惜しいが、とおっ！」
［吹雪］：「む、何するんだ。祐喜、翔」
［祐喜］：「こんなこと吹雪らしくないよ、やめようよ」
［翔］：「オレはもう少し修羅場を見ていたいんだけどな」
［祐喜］：「何か言った？」
［翔］：「いえ、何にも。お前らしくないぜ、正気になるんだ」
［吹雪］：「離せー、俺は腹が減ってるんだ、舞羽を絶対に食うんだー！」
［祐喜］：「食べるの意味間違ってるって。そんな言葉を大きな声で言っちゃダメ」
［翔］：「そうだぞ、そ、そんな羨ましいこと、お前一人するなんて許されちゃいけないんだ」
［祐喜］：「だからそこじゃないでしょって、もっと真剣に止めて」
［吹雪］：「えーい邪魔だ、どけー！　ウィングセイバー！」
［祐喜］：「うわっ！？」
［翔］：「ぎゃあああっ！？　何じゃこりゃーー！？　ん？　何だコレは？　何か背筋が寒いんだけど、ヤベ寒い、くしゃみ出そう、風邪引きそうだ。あれ？　吹雪のウィングセイバーってこんなのだっけ？」
［祐喜］：「そんなの今いいから！　とにかく何とかしないと。――マジックバリア！」
……。
……。
［祐喜］：「危なかった」
［翔］：「あー、深爪が痛いぜ」
［祐喜］：「いつしたの！？」

［翔］：「え？　いや、風邪ひいたっぽいから爪を煎じて飲もうかと」
［祐喜］：「――それより何とかしないと」
［翔］：「おい、ツッコんでくれよー」
［祐喜］：「よし、今度こそ」
［吹雪］：「ふっふっふ、追い詰めたぞ？　舞羽」
［舞羽］：「うぅ、戻ってよ吹雪くん」
［吹雪］：「心配はいらない、ちゃんと手加減してやってやる。加減を間違ってもおっぱいが引き千切れるくらいだ」
［祐喜］：「十分心配だよ！　それはー！」
［翔］：「お前、どれだけ全力で須藤とやろうとしてるのよ！」
［吹雪］：「うるせーな。黙ってろよヌキヌキ翔が」
［翔］：「おい、何だその呼び名は！　それだとオレが毎日致してる見たいじゃねぇかよ！」
［祐喜］：「……最低だね、翔」
［翔］：「ちがっ！　祐喜違うぞ？　今のは吹雪のデタラメだから！　そんな毎日は致してないから」
［祐喜］：「致していることは否定しないんだね」
［翔］：「え？　だって、普通、でしょ？」
［女子生徒Ａ］：「島貫くん、最低ね」
［翔］：「そ、そうじゃないんだって！　誤解だってば～！」
［女子生徒Ｂ］：「少しは大久保くんを見習いなさいよね」
［翔］：「えー？　何で？　アイツ今卑猥なことやろうとしてる真っ最中でしょうよ！」
［女子生徒Ａ］：「だって副作用でしょう？　普段は優しくていい人じゃない」
［女子生徒Ｂ］：「島貫くんとは違うのよ」
［翔］：「不公平だー！　どうして吹雪ばっかり許されるんだよ～！　うわあああん！」
［祐喜］：「ほら翔。泣いてないで、吹雪を止めてあげなくちゃ。

このままだと舞羽ちゃんがとんでもないことに」
［翔］：「うう……吹雪め、須藤はお前だけのものじゃないんだからな？」
［祐喜］：「だから、そこじゃないでしょう。ほら、早く」
［吹雪］：「ふっふ、じゃあ頂かせてもらうぞ？」
［舞羽］：「うう、吹雪くん……」
［吹雪］：「食うぜ！　うおおおおおっ！」
［舞羽］：「いや……」
［祐喜］：「吹雪、ストーーーップ！」
［吹雪］：「……」
［舞羽］：「……」
［吹雪］：「……」
［舞羽］：「……」
［吹雪］：「……？」
［舞羽］：「……吹雪、くん？」
［吹雪］：「舞羽？　あれ？　あれ？」
［舞羽］：「よかった、元に戻ったんだね」
［吹雪］：「俺、一体何を」
［舞羽］：「記憶がないの？」
［吹雪］：「あ、ああ。ひょっとして、俺、何かしたか？」
［舞羽］：「う、うん、少しだけ……初めてを奪われそうになっただけで」
［吹雪］：「ん？　何か言ったか？」
［舞羽］：「う、ううん、何でもないよ」
［吹雪］：「何か、ごめんな」
気付かぬうちに、俺は何か問題を起こしていたようだ。
［祐喜］：「あー、よかったー、吹雪が元に戻って」
［翔］：「やっぱりオレ、何か風邪っぽいんだけど、あ、熱もありそう。ゾクゾクしてきたー」
［祐喜］：「家に帰ったら？」

［翔］：「オレ、ホントに寒くなってきたよ……心も……」
［祐喜］：「そういうことばっかり言ってるから女子たちの反感を買うんだよ」
［愛海］：「うーん、やっぱこの副作用は失敗だったわね。まあ、大久保くんの新しい一面を見れたから良しとしよっか」
［舞羽］：「なーるーみー？」
［愛海］：「あれ？　私も風邪かしら？　これは早く帰ったほうがよさそうね。――じゃ、じゃあそういうことでー！」
［舞羽］：「待ってー！　この騒動起こしたの愛海じゃないのー！　責任とってよー！」
ドドドドドドドド。
［吹雪］：「……俺、本当に何もしなかったのか？」
［祐喜］：「う、うん。何とかスレスレで止まったよ」
［翔］：「オレが風邪を引いただけさ。ヘックシ！」
［吹雪］：「ああ、そう」
［翔］：「オレの心、今南極大陸より寒いかもしれない……」
二人の後ろ姿を、俺はただただ見ていることしかできなかった。

ドルチェ（3）

［場所：学園長室］

［吹雪］：「泊まり込みですか？」
［セフィル］：「うん、そのほうが効率がいいのではないかと思ってな。どうだろう？」
［舞羽］：「そうですね」
［カホラ］：「それくらいしなくちゃ、やっぱりダメだと思うしね。いいんじゃないかな？」
［セフィル］：「よし、じゃあそういうことにしよう」
どうやら決定したようだ。
［セフィル］：「日にちは１５日から。その日からは夜の練習も織り交ぜていくから、それぞれメモしておいてくれ」
［聖奈美］：「はい、分かりました」
学園長の提案は、より効率的な練習に望むために、学園を寝床にして行事の練習を計ろうというものだ。学園を拠点にすれば、普段は帰宅などで潰れてしまう時間が有効的に利用できる。また、同じ時間をみんなで過ごしていれば、お互いの意志疎通も取れる。特に俺なんかはみんなと親睦を深めるのも大事な役割、イヤでもピアニストのみんなのことが少しは分かるはずだ。むしろこの泊まり込み計画は俺のためにあるのかもしれないな。
［セフィル］：「泊まる部屋はこちら側で手配する。各自、その日が近づいてきたら準備をしておくように。あ、そうだ。夕食に関してなんだが、少し意見を聞かせてくれ。各自がそれぞれ勝手に済ませたいか？　それともみんなで作ってそれを食べたいか？」
［舞羽］：「どっちがいいんだろう」
［繭子］：「みんなで分担するって何かいいなー。合宿してるみたいで楽しそうー」

［吹雪］：「実際合宿みたいなもんだろ」
［聖奈美］：「学園側としてはどっちのほうがいいんですか？」
［セフィル］：「一応、こちら側の提案だから、どっちがいいとしても援助金は出すつもりだ。だが、一人一人が違う食事をとるよりも、みんなで同じ料理を食べたほうが金の節約にはなるだろうな」
［カホラ］：「そっか、そうなるとあまり別々にっていうのはよろしくないわね」
［繭子］：「じゃあ、みんなで作ろうよ。舞ちゃんは料理得意だし」
［セフィル］：「お？　そうなのか？　舞羽」
［舞羽］：「と、得意ってほどじゃないですけど、作ることはできます」
［セフィル］：「それは心強いな、一人得意な人間がいるだけで救いがあるってものだ」
［繭子］：「ね？　だからみんなで作ろう。ね？　ふーちゃん」
［吹雪］：「俺は別にいいが、他の奴らにも聞いておけよ」
［繭子］：「ねえ、どう？　みんなー」
［カホラ］：「そうね、そっちのほうがもっと仲良くなれそうだし」
［聖奈美］：「学園の経済状況のためにも、そのほうがいいでしょうしいいんじゃないですか？」
［繭子］：「やったー」
［セフィル］：「じゃあ、みんなで、ということでいいのか？」
［吹雪］：「みたいですね」
みんなもうなずいている。「本音を言えば、こちら側としてもそのほうが助かった。感謝するよ」
［聖奈美］：「あ、それにあたって一つ提案があるんだけど、いいかしら？」
［カホラ］：「何？　聖奈美？」
［聖奈美］：「いくら半月って短い期間だとしても、ずっと須藤さんに料理をさせるっていうのは須藤さんに負担をかけることになるわ。だから、今日は誰が作る、みたいな当番制にするのがいいとあ

たしは思うんだけど」
［カホラ］：「うん、そうね。ずっと舞羽に作らせるっていうのは、ちょっと悪き気がするわね」
［舞羽］：「別に大丈夫ですよ？　私は」
［聖奈美］：「いえ、それじゃあ少々不公平だわ。ここは仕事を分けたほうがいい」
［舞羽］：「じゃ、じゃあこういうのはどうかな？　私は料理を担当するから、身の回りの家事をみんながやってくれるみたいな。ほら、家事って言っても料理だけじゃないでしょ？　洗濯とか買い出しとかもあるわけだし、それをみんなにやってもらえれば、バランス的には同じにならない？」
［聖奈美］：「まあ、確かにそうかもしれないけど、一番手間がかかるのは料理でしょう？　釣り合わない気がするのよね」
［カホラ］：「うーん、じゃあ、こういうのはどうかしら？　この中で、自分はそれなりに料理できるって思う人は手を挙げてみて」
三人の手が上がった。
［カホラ］：「なら、私を含めて舞羽、聖奈美の三人で夕食の仕込みを回しましょう。これなら舞羽だけに負担が偏らないでしょ。で、吹雪と繭子先生に身の回りの家事をやってもらう。どうかしら？　悪くない案だと思うんだけど」
［聖奈美］：「確かに、三日に一回ならそこまで苦にもなりませんね。あたしは賛成です」
［カホラ］：「舞羽は？　どう？」
［舞羽］：「うーん、いいのかな？」
［カホラ］：「いいに決まってるでしょ？　みんなで生活を送るわけだし」
［舞羽］：「はい、なら私も賛成です」
［カホラ］：「吹雪と繭子先生は？　いいかしら？」
［吹雪］：「はい、問題ありません」
［繭子］：「全然オーケーだよー」

［カホラ］：「じゃあ、これで決定ね」
俺とマユ姉が身の回りの家事ってことは、実質俺一人がそれを全てやるってことになるのか。
［繭子］：「よーし、ワタシ頑張るよ」
［吹雪］：「いや、マユ姉は何もしなくていい。ただ静観していてくれ」
［繭子］：「えー？　どうしてー？」
［吹雪］：「それはマユ姉が一番知ってるだろうが」
［繭子］：「うーん。……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「よーし、頑張って静観するぞー」
［吹雪］：「うん、それでいい」
［繭子］：「あ、あははは……」
［カホラ］：「じゃあ、どうしましょうか？　どうローテーションするのがいいかしら？」
［聖奈美］：「別にどう回してもリスクはないでしょうし、適当でいいんじゃないですか？」
［カホラ］：「そうね、じゃあ……私は三番目にするわ。二人で一番か二番を決めてちょうだい」
［聖奈美］：「須藤さん、どっちがいい？」
［舞羽］：「じゃあ、私が最初にするよ」
［聖奈美］：「分かったわ、じゃああたしは二番目ね」
［カホラ］：「ということになったわ、お母さん」
［セフィル］：「うむ、了解した。その日になったら、こちら側で食材費を出そう。遠慮なく言ってくれ」
［カホラ］：「ええ、分かったわ」
［繭子］：「なーんか、ちょっとわくわくしてきたよー」
［舞羽］：「うん、ちょっと楽しみかも」
１５日からって言ってたな、覚えておかないと。

ドルチェ（3）（後書き）

次回から二回目の選択肢が入ります。
好きな子をセレクトしてみてください＾＾

エスプレッシーヴォ（1）（前書き）

12月7日（火曜日）

・バーバロ
・図書室
・生徒会室
・自宅

エスプレッシーヴォ（1）

・バーバロ

［場所：喫茶店・バーバロ］

カランコロン。

［舞羽］：「いらっしゃいませー。あ、吹雪くん」

［吹雪］：「おう、頑張ってるか？」

［舞羽］：「うん、このとおり」

［吹雪］：「今日も盛況みたいだな」

［舞羽］：「うん、おかげさまで。あ、お席案内します。こちらにどうぞ」

［吹雪］：「ああ」

俺は舞羽の後ろをついていく。

［舞羽］：「待ってて、お水持ってくるから」

舞羽は盆を持ってトコトコ走っていく。行事の合間を縫ってこうしてバイトをしてるわけだから、本当にあいつは頑張りやなんだとつくづく思う。

［吹雪］：「片手間になってもおかしくはないんだがな」

［舞羽］：「え？　何が？」

［吹雪］：「あ、いや、何でもないよ」

［舞羽］：「そう？　はい、どうぞ。ご注文はお決まりですか？」

［吹雪］：「あ、まだ。決まったら呼ぶよ」

［舞羽］：「うん、分かった。あ、向こうで呼んでる。ちょっと行ってくるね」

［吹雪］：「おう、頑張ってこい」

［舞羽］：「はーい」

朗らかに返事をして舞羽はお客のほうへと向かっていった。

［吹雪］：「さて、何にしようか――」
［愛海］：「これなんかどうですかー？　バーバロ特製大盛りパフェ」
［吹雪］：「夕飯前にこんなたくさんのデザート食べれないっての」
［愛海］：「いけるわよー大久保くんなら。気合いで」
［吹雪］：「気合いって、一服しに来て気合い使ってたら意味ないだろう」
［愛海］：「男なら、チャレンジすることが大事な時もあるのよ？　大久保くん」
［吹雪］：「それが今だって言うのか？」
［愛海］：「ええ、男はいつだってチャレンジよ」
［吹雪］：「いや、却下だ……つうかいいのかよ？　俺なんかに構ってて、仕事中だろ？」
［愛海］：「ああ、問題も心配もないわよ。今は舞羽一人で手が回るから」
二人でやればもっと効率が上がると思うんだが、俺の気のせいなのか？
［愛海］：「私は休憩がてらここにやってきたってわけ」
［吹雪］：「別に俺に構わなくていいぞ。休憩室で休憩してこいよ」
［愛海］：「いやよそんなの。せっかく大久保くんが来てるのに大久保くんに絡まないなんて、そんなもったいないことできないわよ」
［吹雪］：「別にもったいなくないだろ」
［愛海］：「いえ、もったいないわ。オークションで廃盤の品を逃すくらいもったいないことよ」
［吹雪］：「俺は廃盤ってことかよ」
［愛海］：「そゆことじゃなくて、暇だから来たの、ただそれだけ」
［吹雪］：「お前は客をからかって暇を潰すのか？」
［愛海］：「そんなことはないわよ。大久保くんだからに決まってるでしょー？」
［吹雪］：「今メニュー決めるから、ちょっかい出すなよ」

［愛海］：「はーい」
［吹雪］：「……」
［愛海］：「じーーーー」
［吹雪］：「……」
［愛海］：「じーーーー」
［吹雪］：「おい」
［愛海］：「はい、何ですか？　お客様」
［吹雪］：「ちょっかい出すなって言っただろ」
［愛海］：「出してないじゃん。何にも」
［吹雪］：「そんなにじっと見てくんな、決めずらいだろ」
［愛海］：「えー？　心外だわ、それは」
［吹雪］：「じゃあ何だっていうんだよ」
［愛海］：「慧眼な眼差しを一心に送ってただけよ」
［吹雪］：「同じじゃないか！」
［愛海］：「全然違うわよー見るだけと慧眼な眼差しを送るは意味が全く違うもの」
［吹雪］：「――おーい、舞羽ー、注文お願いします」
［愛海］：「従業員の私がいるのに舞羽に頼んだー」
［吹雪］：「当然だ、日野になんて構ってたらずっと注文ができない」
［愛海］：「はーい、ただいま。……あ、愛海？　吹雪くんのところで何してるの？」
［吹雪］：「ああ、聞いてくれよ舞羽。日野の奴、さっきから俺のことをからかって――」
［愛海］：「あー、そうだ。厨房が忙しそうね、私、あっちを手伝って来よーっと」
［舞羽］：「あ、愛海――また、吹雪くんにちょっかいを」
［吹雪］：「危うく大盛りパフェを頼まされるところだった」
［舞羽］：「ごめんね、いつもいつも」
［吹雪］：「舞羽が来てくれたからいいとしよう。注文、いいか？」

［舞羽］：「うん、もちろん」

……。

……。

……。

エスプレッシーヴォ（1）（後書き）

次回はこの選択肢ルートの後半です。

エスプレッシーヴォ（2）

［吹雪］：「ふう、うまかった」
今日もバーバロの料理は美味しかった。どうしよう、直帰してもいいんだが、別に混んでる様子もなさそうだし少し休んで行っても罰は当たらなそうだけど。……家に帰ってもダラダラするだけだし、どうせならここで休ませてもらってもいいか。暖かいしな、ここ。
　そうと決まれば――
［吹雪］：「はあー」
［舞羽］：「お客様、食べ終わったお皿をお下げしてもよろしいですか？」
［吹雪］：「お、どうもー」
舞羽が腰を低くしてトレイに皿を乗せていく。
［吹雪］：「吹雪くん、まだバーバロにいる？」
［舞羽］：「ああ、ちょっと休ませてもらうよ」
［吹雪］：「そっか、ゆっくりしていって」
［舞羽］：「ああ。あ、追加でコーヒーもらっていいか？」
［吹雪］：「うん、了解。すぐ持ってくるよ」
舞羽は厨房に戻っていく。そしてすぐに、
［舞羽］：「はい、お待たせしました」
［吹雪］：「お、サンキュー」
軽く冷まして一口飲む。
［吹雪］：「うん、うまい」
［舞羽］：「よかった」
［吹雪］：「舞羽が煎れたのか？」
［舞羽］：「うん、手が空いてたからね」
［吹雪］：「そうか、何か心も温まった気がするよ」
［舞羽］：「あはは、大げさだよ」
［吹雪］：「おいしく飲ませてもらうよ」

［舞羽］：「ありがとう」
［吹雪］：「今日は何時までなんだ？」
［舞羽］：「えーっと、後３０分くらいかな？」
［吹雪］：「あれ？　今日は早いんだな」
［舞羽］：「うん、店長が上がっていいって。学園のほう忙しいんだろうって」
［吹雪］：「知ってるのか店長は、舞羽がピアニストに選出されたこと」
［舞羽］：「うん、愛海が教えたみたい」
［吹雪］：「まあ、何となくそんな気がした」
言い触らすのが仕事と勘違いしてるよな、あいつは。
［舞羽］：「行事が終わるまでは、いつもより早めに上がっていいって言ってくれたの」
［吹雪］：「へえ、よかったじゃないか」
［舞羽］：「うん。……吹雪くん、できれば」
［吹雪］：「ああ、終わるまで待ってるよ」
［舞羽］：「えへへ、ありがとう」
舞羽は嬉しそうに笑っていた。
……。
……。
［舞羽］：「お疲れさまでしたー」
学園の制服に着替えた舞羽が裏口のほうから出てきた。
［舞羽］：「ごめん、お待たせ」
［吹雪］：「おう、お疲れ」
［舞羽］：「うー、やっぱりちょっと寒いね」
吐く息は白く、空に立ち上っていく。まだ5時くらいなんだが、既に太陽は沈んで暗くなっていた。
［吹雪］：「もうすっかり冬だな」
［舞羽］：「そうだね、雪はまだ降ってないみたいだけど」

［吹雪］：「そのうち降るだろうな、この寒さだ。いつ降ってもおかしくない」
［舞羽］：「嬉しさ半分、悲しさ半分、かな？」
［吹雪］：「その理由は？」
舞羽「雪ってキラキラしてて綺麗でしょう？　だからちょっと嬉しい。でも、寒いのはそこまで得意じゃないから、雪が降るってことはそれだけ寒くなったって証拠。それがちょっと悲しいの」
［吹雪］：「確かに、寒いのはちょっとイヤだな。朝起きるのが辛くなる」
［舞羽］：「そうだよね、布団から顔も出せなくなっちゃう」
［吹雪］：「うん、大いに分かる。それさえなければ、冬も悪くはないって思うんだけどな」
［舞羽］：「だね。人生だね」
［吹雪］：「何か急に話が深くなったな」
［舞羽］：「吹雪くんの受け売りだよ」
［吹雪］：「何？　俺そんなこと言ったかな？」
［舞羽］：「うん、子供の頃だけどね。吹雪くん、何かとそれもまた人生って言ってまとめてた。当時の私はそのことがよく分からなかったんだけど、今思うと、とっても深い言葉だよね」
［吹雪］：「とんだませガキだな、俺」
舞羽「私たち子供の頃だし、無性に使いたかったんじゃない？」
［吹雪］：「その可能性はあるかもしれないけど、それも人生って、全てを悟ってるみたいで子供らしくないな」
［舞羽］：「確かに大人っぽいね」
［吹雪］：「いや、変なガキじゃないか」
［舞羽］：「あはは、私はそうは思わなかったよ」
［吹雪］：「ってことは、舞羽もなかなかの変な子供だってことだな」
［舞羽］：「えー？　同類なの？」
［吹雪］：「もちろんだ、変だった俺に着いてこれたってことは、

それだけ舞羽も変だったってことになる」
［舞羽］：「うーん、納得いかないよ、それ」
［吹雪］：「まあ、誰だってそんなもんだ。人間何かしら変な一面を持ってる」
［舞羽］：「じゃあ、変な人に着いていけることが、私の変な一面なの？」
［吹雪］：「そうなるな。今はどうか分からないけど、ひょっとすると今もそのままって可能性もあるし、というかその可能性結構あるんじゃないか？」
［舞羽］：「そ、そうかな？」
［吹雪］：「俺たちの周りの人間を見てみろ。翔に日野にマユ姉、ちょっとおかしい奴らばかりじゃないか」
［舞羽］：「ま、繭さんもその中に入れちゃうんだ」
［吹雪］：「ああ、もちろんだ」
［舞羽］：「そ、そんなに自信を持って……」
［吹雪］：「それよりもだ、どうよ、改まって考えてみて」
［舞羽］：「――うん、そうだね。確かに、ちょっと変わってる人が多いかも」
［吹雪］：「舞羽も、変な人間だってわけだ」
［舞羽］：「うー、何か悲しいなー、それ」
［吹雪］：「心配するな、俺もそのうちの一人だ」
［舞羽］：「嬉しいような嬉しくないような」
［吹雪］：「みんな仲間だ、心配ないさ」
［舞羽］：「う、うん」
［吹雪］：「よし、うまく話がまとまったところで、ちょっと商店街に行こうぜ。夕飯の買い出しに行かないと」
［舞羽］：「今日はどうする？」
［吹雪］：「ああ、大丈夫。今日は俺が作るよ、バイトで疲れてるだろうし。ただ、品定めだけお願いしたい」
［舞羽］：「うん、分かった。良質なもの、頑張って選ぶよ」

［吹雪］：「頼りにしてるぜ。よし、レッツゴーだ」
［舞羽］：「オー！」
俺たちは商店街へと向かった。

エスプレッシーヴォ（3）

・図書室

［場所：教室］

［吹雪］：「さーて、今日も授業が終わったわけだが」
終わったからと言って特にすることがないのが現状。午前中は練習があるから疲れも溜まってるし、真っ直ぐ家に帰るのがいいんだろうな。でも、それだけだと何か、
［カホラ］：「つまらないんでしょ？」
［吹雪］：「おおっ！？」
［カホラ］：「失礼ね、そんなに驚かなくてもいいんじゃない？」
［吹雪］：「いや、だって先輩、この学年じゃないじゃないですか？」
［カホラ］：「学年が違うから来ちゃダメってことはないでしょう？」
［吹雪］：「それは、そうですけど」
［カホラ］：「二学年だからといって二学年の生徒が来るとは限らない。人生ってそんなものよ、吹雪」
［吹雪］：「な、何で人生の話に？」
［カホラ］：「特に理由はないわ」
［吹雪］：「そ、そうですか」
［カホラ］：「それより、吹雪今、つまらないって言ってたわよね」
［吹雪］：「え？　口には出してませんよ？」
［カホラ］：「出してなくても考えてたんじゃないの？　露骨に顔が言ってたわよ」
［吹雪］：「マジですか？」

［カホラ］：「ふふ、吹雪のことは何でも分かるわよ」
［吹雪］：「――というか先輩。先輩はどうしてここへやってきたんですか？」
［カホラ］：「あら？　言ってなかったっけ？」
［吹雪］：「まだ何も聞いてませんよ」
［カホラ］：「そっか」
［吹雪］：「どうしてここへ？」
［カホラ］：「えーっと、そうそう。吹雪にちょっとお願いしに来たんだったわ」
［吹雪］：「お願いですか？」
［カホラ］：「うん、普通に帰るのはつつがないんでしょう？」
［吹雪］：「まあ、確かに」
［カホラ］：「それなら、ちょっと私に付き合ってもらえないかしら？」
［吹雪］：「何かするんですか？」
［カホラ］：「ええ、ちょっと探したい資料があるのよね。一人だと骨が折れるから吹雪に手伝ってもらいたいのよね。ダメかしら？　暇はしないと思うけど」
［吹雪］：「資料探索、何を探すんですか？」
［カホラ］：「それは探してみてのお楽しみ」
［吹雪］：「えー？　教えてくれないんですか？」
［カホラ］：「ふふ、そのほうがやる気が沸いてくるでしょう？」
……まあ、特に家に早く帰る理由もないし。
［吹雪］：「いいですよ、俺でよければ手伝います」
［カホラ］：「ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「全然いいですよ」
［カホラ］：「じゃあ行きましょうか、忘れ物ない？」
［吹雪］：「あってもそこまで困るもんじゃないです」
［カホラ］：「そう、ならいいわね」
……。

エスプレッシーヴォ（4）

［場所：図書室］

［吹雪］：「それで、何を探せばいいんでしょうか？」
［カホラ］：「ええ、いくつかあるんだけど、そうね、吹雪には……うん、あれをお願いしましょう」
［吹雪］：「あれ？」
［カホラ］：「どれよ？」
［吹雪］：「いやいや、俺が聞きたいんですが」
［カホラ］：「ふふ、冗談冗談。昔の偉人のメリアスって人物、吹雪は知ってる？」
［吹雪］：「あ、はい。名前は聞いたことがあります」
何百年か前に、現代でも使われる魔法や発明品を残した人物だ。
［カホラ］：「そのメリアスの著した書があるはずなんだけど、それをとりあえず探してもらえないかしら？　私は私で違うものを探してるから」
［吹雪］：「先輩は何を？」
［カホラ］：「まあ、同じようなものをね。偉人の残した書、幾つか集めてそれぞれ個人的に解明していこうと思うのよ」
［吹雪］：「課題ですか？」
［カホラ］：「そんなとこかな？　結構あるから大変なの。今日中に終わるかは、吹雪の活躍にかかってるかもしれないわね」
［吹雪］：「そりゃ頑張らないといけないですね」
［カホラ］：「頼りにしてるわよ」
［吹雪］：「じゃあ、早速行ってきます」
……。
［吹雪］：「メリアス、メリアス……」
結構有名な人だから、何冊か残してると思うんだけどな。はしごを

使わないといけないほど高くまで積まれた本を上から下までくまなくチェックしていく。
［吹雪］：「お、あった」
発明記、著者メリアスと記された本を発見。だが、
［吹雪］：「高いぜ……」
それがあるのはすっげぇ上のところだった。背伸びしたところで絶対に届かない。こりゃ梯子を借りるしかなさそうだ。
［カホラ］：「ふふ、そんなこともあろうかと」
［吹雪］：「おおうっ！？」
気づけば横には先輩。
［カホラ］：「もう、そんなに私って怖いの？」
［吹雪］：「いや、だって、さっき向こうに行ってたはずでしょう」
［カホラ］：「向こうに行っていたからといってずっとそこにいるとは限らないわよ。人間は、常に動いてるものなんだから」
［吹雪］：「は、はあ」
にしても、全然気がつかなかった。次からは気づけるようにいないと。
［カホラ］：「まあとにかく、吹雪が困ってると思って持ってきてあげたわよ、ほら」
［吹雪］：「おお」
先輩は梯子の前にどんと置いた。
［吹雪］：「俺、まだ何が欲しいのか言ってなかったのに」
［カホラ］：「言ったでしょう？　吹雪のことは何でも知ってるって」
［吹雪］：「マジですか」
［カホラ］：「本当は、吹雪が上を見て悩んでたみたいだったからなんだけど」
軽く舌を出しておどけて見せた。
［カホラ］：「どっちにしたって、使うでしょう？　梯子」
［吹雪］：「はい、助かります。あそこにあるんですよ、見えます

？」

俺は上から3段目の本棚を指差す。

［カホラ］：「ありゃ、随分高いわね」

［吹雪］：「背伸びしても絶対に届かないですよ、あの高さは」

［カホラ］：「じゃあ、持ってきて正解？」

［吹雪］：「はい、大正解です」

［カホラ］：「ふふ、誉められた」

［吹雪］：「じゃあ、ちょっと使わせてもらいますね」

［カホラ］：「ええ」

俺は梯子をかけ、本に向かって少しずつ上っていく。

［カホラ］：「大丈夫？　吹雪」

［吹雪］：「はい、大丈夫です」

［カホラ］：「気をつけてね」

［吹雪］：「はい」

慎重に、慎重に……。よし、後少しだ。

［吹雪］：「よし、着いた」

後はこの本を抜き取って、下に降りるだけ。だが、

［吹雪］：「お、おおっ」

見なければよかったー、思った以上に下まで高さがあったー。

［カホラ］：「どうしたの？　吹雪」

［吹雪］：「い、いえ、問題ないですよ」

［カホラ］：「ひょっとして、高さに驚いちゃった？」

［吹雪］：「え？　いえ、そんなことは、ないですよ？」

［カホラ］：「ふふ、そう」

強がり言ったが、先輩のあの顔、多分感づいてるんだろうな。俺のことは何でも知ってるって言ってたし。

［カホラ］：「ちゃんと押さえてるから、心配しないで」

［吹雪］：「はい、ありがとうございます」

とりあえず、降りよう。足下を見ながら降りれば問題はないはずだ。

［吹雪］：「そーっと、そーっと」

よし、このままいけば、問題なく。
［吹雪］：「――あ」
［カホラ］：「え？」
しまったー！　足を踏み外したー。何でだよ？　俺一時も目を離さず足下を見ていたのに。……あ、よく見たらあれ、先輩の足じゃないか。俺の馬鹿ー！
［吹雪］：「ぎゃあああああ！？」
［カホラ］：「きゃあああああっ！？」
バランスを失った梯子はゆっくりと傾いていく。俺の体は梯子を離れ、先輩めがけて一直線。
［吹雪］：「うわあああああっ！？」
ドン。
ガタンガタン。
大きい音を立てて、梯子は後方に倒れた。
［吹雪］：「いってててて……」
うー、助かった。どうやら体に異常はないらしい。
［カホラ］：「ふ、吹雪」
［吹雪］：「ん？」
何だろう、顔にすごい柔らかな感触がする。一体これは……？
［カホラ］：「ちょ、ちょっと吹雪。顔、顔どけて」
［吹雪］：「え？　……」
こ、これは、ひょっとして――！？
［カホラ］：「うわあああああああっ！？」
俺は急いで顔を離した。自分が何をしてやがったかようやく理解できた。
［吹雪］：「すすすす、すいませんでした先輩。おおおお、俺、俺、せせせせ先輩にとんでもないことを」
［カホラ］：「と、とりあえず落ち着きなさい。口が回ってないわよ」
［吹雪］：「あ、は、はい。スーハー」

［カホラ］：「落ち着いた？」
［吹雪］：「あ、え、えっと、えっと、そそそその……」
［カホラ］：「変わってないじゃない、もう一回深呼吸。落ち着いてしなさい」
［吹雪］：「は、はい。スーハー、スーハー」
［カホラ］：「どう？　今度は大丈夫？」
［吹雪］：「は、はい、す、すいませんでした！」
俺は大きく頭を下げた。
［吹雪］：「お、俺のせいであんなことに、ごめんなさい」
［カホラ］：「いいわよ、大丈夫。事故だったんだし、吹雪は自ら危険を犯してまで胸に飛び込みたいと思うほどやんちゃじゃないはずだしね」
［吹雪］：「そ、それはもちろんです」
［カホラ］：「ならいいわ、許してあげる。梯子登る時は気をつけなさいよ」
［吹雪］：「は、はい」
随分あっさりと、普通ならパンチやキックが飛んできても不思議ではないのに。やはり先輩の物腰は大人だな。
［カホラ］：「怪我はしてない？　吹雪」
［吹雪］：「はい、それはもう」
［カホラ］：「そうね、私のがクッションになったしね」
［吹雪］：「な、ちょっと、先輩！？」
まさか自ら言い出した。
［カホラ］：「そんなに驚かなくてもいいじゃない」
［吹雪］：「いや、だって」
［カホラ］：「吹雪って思ったより純情な男の子だったのね。年頃の子はもう少し楽しそうにこの手の話をするはずなのに」
［吹雪］：「普通はおおっぴらにそんな話はしませんから」
［カホラ］：「あら、だって翔はよくそんな話をするじゃないの」
［吹雪］：「あれは度が過ぎてるんです。普通の男子の行動じゃな

いですから」
［カホラ］：「そうなの？」
［吹雪］：「そうです」
あんなのが男子の一般的言動だったら、女性と男性で戦争が起こってもおかしくない。
［カホラ］：「吹雪はそういうのに興味ないの？」
［吹雪］：「いや、そういうわけじゃ」
［カホラ］：「じゃあ好きなの？」
［吹雪］：「ま、まあ……」
男なら、誰だって好きなはずだ。
［カホラ］：「一応興味はある？」
［吹雪］：「そう、ですね」
［カホラ］：「そう。うふふ……」
何がおかしいんだ？
［カホラ］：「また、吹雪のことに詳しくなったわね」
［吹雪］：「嬉しくないですよ、そんなこと言われても……」
［カホラ］：「ふふ。そういえば本は？」
［吹雪］：「あ、はい。どうぞ」
降りるのに失敗はしたが、本は死守していた。
［カホラ］：「ありがと。じゃあ、残った本を探しましょうか」
［吹雪］：「分かりました」
［カホラ］：「あ、一つお願い」
［吹雪］：「？」
［カホラ］：「あんまり、感触とか思い返さないようにね」
［吹雪］：「っ！？　ちょ、先輩！？」
［カホラ］：「あはは、吹雪、顔真っ赤よ」
［吹雪］：「先輩のせいじゃないですかー」
［カホラ］：「だって、被害者は私だもの、当然のことよー」
……。

……。

エスプレッシーヴォ（4）（後書き）

次回は選択肢・生徒会室の話になります。

エスプレッシーヴォ（5）

・生徒会室

［場所：生徒会室］

［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［ダルク］：「はい、聖奈美。五年前までの水質調査の結果」
［聖奈美］：「ええ、ありがとう」
［吹雪］：「杠、ホッチキスの針がなくなっちまったんだけど」
［聖奈美］：「なら、入り口のところの棚、上から二番目にあるはずだから勝手に取って。もしなかったら黒い紐か何かで縛ってまとめてちょうだい」
［吹雪］：「ああ、上から二番目っていったか？」
［聖奈美］：「ええ、そうよ」
［ダルク］：「あ、いいよ吹雪。私が取ってくるよ」
［聖奈美］：「ダルク、行かなくていいわ。それくらい大久保にもできるでしょう」
［吹雪］：「ああ、ダルクはダルクの作業してくれていいぞ」
［ダルク］：「そ、そう？」
［吹雪］：「ああ、えっと、二番目……」
――このような構図になったのは、今から一時間くらい前に遡る。

［吹雪］：「さてと、用もないし、部活もないし、どうしよう。帰ろうかな」
［翔］：「ふーぶきちゃん、あーそびーま――」
［吹雪］：「よし、帰ろう」

［翔］：「まだ言い終わってないのに！」
［吹雪］：「ああ、翔か」
［翔］：「知ってただろうよ、オレが来てたことに……」
［吹雪］：「悪い、近頃耳が遠くてな」
［翔］：「うう、ホントに最近冷たいな吹雪は。名前どおりになってきちゃってるぜ」
［吹雪］：「そんなことないから、用件は何なんだ？　端的に言ってくれ」
［翔］：「ああ、この後暇なら、ちょっと街まで行って――」
［吹雪］：「ああ、ちょっと難しいな、それは」
［翔］：「まだ言い終わってないのに！　パート2！」
［吹雪］：「元気だな、お前は」
［翔］：「何でだよ？　暇だって言ってたじゃん。どうしようって自問してたじゃん」
［吹雪］：「確かに何も用事はない。が、お前に付き合えるほど俺は暇じゃあないんだ」
［翔］：「何だよそれは！　お前は例外みたいな、そんなにぞんざいに扱わなくてもいいじゃん！」
［吹雪］：「だって、疲れるんだよ、お前といると」
［翔］：「ぐっはぁ！　そ、そんなストレートに」
［吹雪］：「行事の特訓も始まった今、お前に付き合ってたら体力が保たない。よって、お前に付き合っている暇はないんだ」
［翔］：「オレって、そんなに邪魔者なのか？」
［吹雪］：「まあ、場合による、そこまで気にするな」
［翔］：「気になるよ！　場合によるなんて言われたら！」
［吹雪］：「ま、とにかく。今日は大人しく帰ったらどうだ？　罰は当たらないだろう」
［翔］：「うう、吹雪の、バカ……」
男にそんな言葉言われても、あまりぐっとはこないな。さて、翔の追撃を払いのけたわけだけど、本当に何しようかな。ちょうどその

時だった。
［聖奈美］：「大久保、大久保はいる？」
ドアのところで俺の名前を呼ぶ声。そこにいたのは杠だった。とりあえず俺はあいつのところに向かった。
［聖奈美］：「いるのなら返事くらいしなさい、失礼でしょう」
［吹雪］：「悪い。で？　何だよ、お前が俺のところにくるなんて」
［聖奈美］：「もちろん、用があるから来たのよ。それ以外は何もないわ」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「な、何よ？」
［吹雪］：「いや、当然のことを言ってるのは分かるんだが、何かちょっと悲しい気持ちが」
［聖奈美］：「あなた、それ以外のことを考えてたっていうの？」
［吹雪］：「そういうわけじゃあないんだが、よく分かんないな。いいや、忘れてくれ」
［聖奈美］：「変な男ね、まあいいわ。こんな話をしにきたわけじゃないのよ。あなた、この後時間ある？」
［吹雪］：「時間？　ああ、特に予定らしいものは入ってないが」
［聖奈美］：「なら、少しあたしに付き合いなさい」
［吹雪］：「え？」
［聖奈美］：「そ、そういう意味じゃないわよ！　生徒会よ、生徒会」
［吹雪］：「ああ、そういうことか」
一瞬ドキっとしてしまった。
［聖奈美］：「単純に考えて分かるでしょう？」
［吹雪］：「翔あたりなら絶対に勘違いするだろうな」
［聖奈美］：「あ、あれは別物よ。あれを普通の人と一緒にしちゃいけないわ」
［吹雪］：「なかなか言うじゃないか」
［聖奈美］：「自業自得よ、彼が勝手にまいた種なんだから」

［吹雪］：「そうだな」
全てはあいつのせいに違いない。
［吹雪］：「で、何で俺が生徒会に行かなくちゃいけないんだ？
俺より詳しい人はたくさんいるはずだが」
［聖奈美］：「本当なら、生徒会の仕事は生徒会に頼むわよ。ただ
今日も人手が足りないのよ。もともと少人数の活動だから、人手が
足りないのはいつものことなんだけど、このままじゃあ軌道に乗り
きれないのよね。だから、あなたに援護を要請したいの。手伝って
もらいたいのは綴じ込み作業だから、以前やったことがあるあなた
なら無難にこなせると思ったから。それが一番の理由よ」
［吹雪］：「なるほど」
［聖奈美］：「やってもらえないかしら？」
［吹雪］：「やってもいいが、それ以外には何も手伝えないぞ？
生徒会のことは全く分からないから」
［聖奈美］：「心配いらないわ。生徒会の仕事はあたしがこなすか
ら。大久保は綴じ込みに専念してくれればそれでいい」
［吹雪］：「そうか、だったらいいぞ。手伝おう」
［翔］：「なーぜーだー」
［吹雪］：「うおっ！？」
［聖奈美］：「きゃあっ！？」
［吹雪］：「お、お前、帰ったんじゃなかったのかよ」
［翔］：「別にいいじゃないか、帰るも帰らないもオレの勝手だ。
それより、どうしてなの？　どうしてオレの誘いは断るのに、杠の
誘いはそんなあっさりと了承するの？」
［吹雪］：「そりゃあ、決まってるだろ」
［翔］：「何だよ」
［吹雪］：「お前にかまってたら疲労がたまるからだよ」
［翔］：「チクショーーーー！　吹雪のおバカー！　えーーん！」
翔はすごいスピードで教室を去っていった。
［聖奈美］：「いいの？　あんなこと言って」

［吹雪］：「心配ない、あいつは明日になったら今日のこと忘れてる」

［聖奈美］：「そ、それはそれでいいのかしら……」

［吹雪］：「ま、あいつのことはどうでもいいじゃないか」

［聖奈美］：「そ、そうね。じゃあ行きましょう」

俺たちは生徒会室へと向かった。

……。

エスプレッシーヴォ（6）

というわけだ。今もせっせと作業をしている最中だ。
「よっと……」
「よいっしょ」
「二人とも、後どれくらいかかりそう？」
「うーんと、残ってるのが２０部くらいだから、１５分くらいかな？」
「１５分、分かったわ。終わったらまた知らせてちょうだい。違うのを用意するから」
「了解」
「次はこれをしなくちゃ」
杠はすぐに違う用紙に慣れた手つきで文章を書いていく。淀みなくスピーディに仕事をこなしていく姿は、確かに生徒会長の趣があった。
「どうしたの？　じっと見て」
「いや、何でもない」
「そう？　ひょっとして疲れた？」
「そんなんじゃないさ、問題ない」
「無理はしなくていいからね」
「おう、サンキュー」
会話しながらも手は動かす。大分体に染み着いてきたな、この作業。
「あれ？　そういえば今日は祐喜はどうしたんだ？　姿が見えないけど」
「祐喜なら、他のメンバーと部室の検査に行ってるわ」
「部室の検査？」
「そう、定期的に行ってるものよ。あなたたちのところにも、生徒会が来たことあるでしょう？」
「そう言われれば、確かに……」

「あたしたちは生徒を信じてる。でも、絶対に何もしてないって保障はない。だから、あたしたちが直々に出向いて、そういう悪いことをしてないか、変なものがあったりしないかをチェックしてるわけ」
「なるほどな」
「まあ、当たり前のことだけどね」
「で、問題は起きてないのか？　今のところ」
「不審物とかは出てないけど、お菓子とかが出てくる時があるわね。特にサッカー部とかバスケ部とかね」
「そうか」
「他の学校はどうか知らないけど、ハルモニア学園は学内のお菓子の飲食は禁止だから。罰するに値する行為よ」
「過去に何回あったんだ？」
「あたしたちが引き継いでから、二回ほどあるわね」
「引き継いだのはいつだ？」
「9月からよ」
「……頻度高くないか？」
「よっぽど食べたいんでしょう？　お腹が減ってるからなんだろうけど、それなら家に帰って夕ご飯食べなさいよ」
「まあ、そうだな」
「だから、サッカー部とバスケ部は厳しめに見てもらうようにしてるわ。同じ問題を起こしかねないからね」
「やっぱりあるんだよな？　ペナルティとか」
「もちろん、二回までは注意だけだけど、三回やらかしたらもう容赦せずに罰するつもりよ」
「その罰とは？」
「至ってシンプルよ。部費をさっ引いてやるわ」
確かにシンプルだ。だが威力はこの上ないな。
「サッカー部やバスケ部は部費を他の部よりも多くもらっているから成り立っているわけでもある。もし、その一部を減らされたりし

たら……もう言わなくても分かるわよね」
「あ、ああ」
「まあ、絶対にもうしませんって意欲が見えれば返してやらないこともないけどね。懲りないようならそのまま生徒会が預かっておく。あなたたちの部活も、そんなことにならないように注意することね」
「肝に銘じておく」
「賢明ね」
そう返し、杠はまた机に向かっていく。俺も、仕事に集中するか。
……。
……。

エスプレッシーヴォ（7）

［聖奈美］：「よし、今日はここまでにしましょう」
［吹雪］：「ふう」
［ダルク］：「終わったー」
肩の力をふっと抜く。
［ダルク］：「お疲れ、吹雪」
［吹雪］：「お疲れ、ダルク」
同じ仕事を担当していた者どうし、互いに労をねぎらう。
［聖奈美］：「うん、大分綺麗にまとまったわね」
俺たちの脇にはここ数時間で綴じ込んだ資料の山。
［聖奈美］：「まあ、上出来じゃない。誉めてあげるわ」
［吹雪］：「そりゃどうも」
［聖奈美］：「少し見ていたけど、随分手つきが滑らかだったわね。何かその手の仕事でもしていたの？」
［吹雪］：「いや、そんな仕事はしてないが。あれだと思う、俺の所属部での活動」
［聖奈美］：「ん、魔法研究部、だったかしら？」
［吹雪］：「そう。主に作品制作を活動としてるからそれがいい感じにこっちでも活かせたのかもしれない」
［聖奈美］：「ふーん。まあ、綴じ込みは誰でもできる簡単な作業でもあるんだけど」
［吹雪］：「それを言わないでくれよ……」
［聖奈美］：「だからこそ、差がつきやすくもある。もっと早くできるように頑張りなさい」
［吹雪］：「手厳しいな……」
というか、次もやらなければいけないのか？　俺は。
［聖奈美］：「さあ、下校時刻も近いわ。あたしたちも校舎を出ましょう」

放課後の出来事だった。

エスプレッシーヴォ（7）（後書き）

次回は選択肢・自宅の話となります。

エスプレッシーヴォ（8）

・自宅

［場所：自宅］

［吹雪］：「……遅いな」

６時頃には帰ってくると聞いていたんだが。もう１５分程過ぎている。まあ午前中はマユ姉も練習だから、仕事が時間内に終わらないのも無理ないか。気長に待つとしよう。

……。

［繭子］：「ただいまー」

玄関の方から声がする。帰ってきたか。茶の間のほうに、スーツ姿のちっこいのがやってきた。

［繭子］：「ふー、疲れたー」

［吹雪］：「長引いたのか？」

［繭子］：「うん、ホントは上がることもできたんだけど、残すのやだったから終わしてきたの」

［吹雪］：「ほー、マユ姉にしてはまともな判断だな」

［繭子］：「でしょでしょー？　エライ？　エライ？」

軽い皮肉を言ったつもりだったんだけどな。

［吹雪］：「ごく一般的な判断だと思うぞ」

［繭子］：「それができたらエライでしょー？　ねえ、誉めて？　誉めてー」

［吹雪］：「ずっとそれができたら、誉めてやるよ」

［繭子］：「えー？　ぶー、ぶー」

［吹雪］：「ブーイングしてもダメだ」

［繭子］：「うー、いいよ、頑張るから」

［吹雪］：「その意気だ」

さてと。

［吹雪］：「マユ姉、ちょっと買い出しに付き合ってくれ」

［繭子］：「え？　買い出し？」

［吹雪］：「そう、買い出し」

［繭子］：「あれー？　いつもふーちゃん一人で行ってなかったっけ？」

［吹雪］：「まあそうなんだが、とりあえず、これ見れ」

俺は二枚の広告を見せてやる。

［吹雪］：「今日はセールがあるんだよ。野菜がいつもより安いし、卵に至っては半額くらいで買えるかもしれない。でも、お一人様一点限りなんだ。だから、マユ姉に来てもらって、二つ購入したいんだ。付き合ってくれ」

［繭子］：「うん、分かったー。ワタシ、全力で頭打つよー」

自分の役割を分かってくれて何よりだ。

［繭子］：「じゃあ、着替えてくるから少し待っててねー」

［吹雪］：「なるべく早くな」

［繭子］：「はーい」

こういう時は、マユ姉でも役に立つな。逆を言えば、こういうところでしか役に立たないんだが。まあ、昔からこんなだからいいんだけど。

さて、俺は外に出て待ってるか。

……。

エスプレッシーヴォ（9）

［場所：スーパー］

よし、とりあえず卵があるかチェックだ。残ってるといいが。

［繭子］：「あ、ふーちゃん、あれじゃない？」

［吹雪］：「ん？　おっ！」

マユ姉が指差す先には、確かに俺たちの欲する卵があった。

［繭子］：「よかった、まだ余ってた」

半分くらい減っていたが、どうやら手にいれることができた。

［吹雪］：「マユ姉、かごに入れてくれ」

［繭子］：「はーい。よいしょ、よいしょ」

よし、とりあえず第一の目的の品はゲットだ。ここのスーパーはとりあえずオッケー、すぐ次のスーパーに行くとしよう。

……。

［吹雪］：「マユ姉、今日は何が食いたい」

［繭子］：「え？　リクエストしていいのー？」

［吹雪］：「特に今日は決めてなかったからな。決めてもらったほうが作りやすい」

［繭子］：「ホント？　やったー」

そんなに嬉しいことなのか。

［繭子］：「えっと、じゃあねー」

［吹雪］：「できれば俺が作れるもので頼むぞ」

［繭子］：「うん、じゃあ、えっとー。うーん、食べたいものがいっぱいあって一つに絞れないよー」

［吹雪］：「絞れ、気合いで」

［繭子］：「気合いで、よし、脳内ルーレット、スタート！」

何かわけ分からんことを始めやがった。

［繭子］：「グルグルグルグルー」

効果音自分でつけるのかよ。
［繭子］：「ピタ。よーし、決まったー！」
［吹雪］：「で？　何にするんだ？」
［繭子］：「唐揚げ～」
［吹雪］：「唐揚げか……」
それなら、何とか作れるな。ただ、それだけだとバランスが悪いから、
［吹雪］：「唐揚げと野菜サラダでいいか？」
［繭子］：「うん、ノープロブレム」
決定だな、じゃあ野菜を買わないと。俺たちは野菜コーナーへと向かう。
［吹雪］：「えっとキャベツにニンジン長ネギにゴボウ」
なるべく利用機会の多いものを多めに買って食費を節約したいから、
［繭子］：「ふーちゃん、お菓子は？」
［吹雪］：「まだ家に残ってるだろう？　食いかけの奴」
［繭子］：「買っちゃダメ？」
［吹雪］：「だから残ってるだろう？　あれ食べてからにしろって」
［繭子］：「だってー、あれあんまり美味しくないんだもん」
［吹雪］：「買ってって頼んだのマユ姉じゃねぇかよ」
［繭子］：「だって、買う前は美味しいと思ったんだもん、食べてみたら全然美味しくなくて、むしろマズくて食べる気起きないの」
［吹雪］：「だって買ったのはマユ姉なんだから、食べきるのが常識だろう」
［繭子］：「ふーちゃんも食べてみてよー。絶対食べる気おきなくなるからー」
［吹雪］：「どんな味するんだよ、そのお菓子は」
［繭子］：「えっとね、捌く前の魚の味」
［吹雪］：「どんな味だよ、それ」
［繭子］：「ホントにそんな感じなんだってば」
［吹雪］：「何故それを美味しいと思ったんだよ、マユ姉は」

［繭子］：「何事もチャレンジだと思って」
［吹雪］：「もっと違うとこに活かせ、そういうのは」
［繭子］：「次から気をつけるからーね？　お願い」
［吹雪］：「はあ、一つだけだからな？　二つは持ってくるんじゃないぞ？」
［繭子］：「やったー、ふーちゃん大好きー」
マユ姉はお菓子コーナーにとっとこ走っていった。あんなことしてるから子供に間違えられるんだと思うのは俺だけか？　まあ、俺は品定めを続けよう。
［おばさん］：「あら？　吹雪くん？」
［吹雪］：「あ、どうも」
昔から働いているスーパーのおばさんだ。
［おばさん］：「いつもご贔屓ありがとうね」
［吹雪］：「いえ、こちらこそ。いつも美味しく食べさせてもらってます」
［おばさん］：「本当？　それならよかったわ。今日も一人で来たの？」
［吹雪］：「いや、今日は姉と一緒です」
［おばさん］：「あら、繭子ちゃんも。珍しいわね」
［吹雪］：「仕事が早く終わったんで、連れてきたんです」
［おばさん］：「そうなの、でも姿が見えないけど」
［吹雪］：「あっち、お菓子コーナーでお菓子選んでますよ」
［おばさん］：「そう、変わらないわねー繭子ちゃんは」
［吹雪］：「本当に、少しも変わってないんですよ」
［おばさん］：「まあまあ、それはそれでいいことなんじゃないかしら？」
［吹雪］：「そうですか？　俺はあまりよくないと思うんですけど」
［おばさん］：「こんなこと言ったら繭子ちゃん怒るかもしれないけど、繭子ちゃんがあんな感じだから、吹雪くんはしっかりした子になれたんじゃないかしら？」

［吹雪］：「……それは、あるかもしれませんね」
自分で言うのははばかられるが。
［おばさん］：「それに、ああいう感じだから繭子ちゃんって実感が持てるわけだし。大人しかったら繭子ちゃんじゃなくなるんじゃないかしらね」
［吹雪］：「状況によっては大人しさを使い分けれればいいんですけどね」
［おばさん］：「そこは姉弟パワーで何とかしなきゃ、吹雪くんの出番じゃない」
［吹雪］：「マジですか？　そろそろ俺も疲れてきましたよ？」
［おばさん］：「頼りにしてるのよ、吹雪くんを。面倒みてあげなくちゃ。それが吹雪くんの役割よ」
［吹雪］：「そうですよね、一人じゃ何もできないからな、マユ姉は」
［おばさん］：「頑張ってね、私たちもサポートするから。安い食品でね」
［吹雪］：「はは、お願いします」
［おばさん］：「ふーちゃーん、これにするよー。ポテトチップの照り焼きチキン味ー」
どうやら帰ってきたらしい。

エスプレッシーヴォ（１０）

［繭子］：「あれー？　おばさんだ」
［おばさん］：「繭子ちゃん、お久しぶり」
［繭子］：「こんばんはー」
［おばさん］：「元気してたかい？」
［繭子］：「うん、バリバリだよ。リンリンだよ」
［おばさん］：「はは、そうかい。これからも仲良くね」
［繭子］：「もっちろん、全力でふーちゃんと仲良くするよー」
［おばさん］：「じゃあ、仕事に戻るよ、それじゃあね」
［吹雪］：「はい、ありがとうございます」
［おばさん］：「繭子ちゃんも、また来てね」
［繭子］：「はーい」
おばさんは笑いながら向こうの精肉のコーナーへと歩いていった。
［吹雪］：「覚えてるか？　マユ姉」
［繭子］：「もちろんだよー。まだ働いてたんだね、あのおばさん」
［吹雪］：「多分正社員なんだろう、だから何年も勤めてるんじゃないか？」
［繭子］：「そっか。ワタシたち、ちゃんと顔覚えてもらってたんだねー」
［吹雪］：「マユ姉は昔と変わらないって言ってたぞ」
［繭子］：「それってどういう意味ー？」
［吹雪］：「さあな」
［繭子］：「ワタシはちゃんとした大人だよー？　教師だよ？」
……一端の大人、しかも教師ってお菓子ーって駄々こねるもんなんだろうか？　果たして。
［吹雪］：「気にしなくていいんじゃないか？　別に」
［繭子］：「そうだねー」
こういう時、マユ姉の性格はいいと思う、マジで。

［吹雪］：「さあ、残りの買い物済ませちゃうぞ。晩飯が遅くなる」
［繭子］：「うん、ワタシお腹ペコペコ～」
［吹雪］：「じゃあ少し手伝ってくれ。俺のお願いしたもの持ってくるんだ。できるよな？」
［繭子］：「もちろんだよ、マイケル」
［吹雪］：「誰だよそれ」
［繭子］：「アメリカ人？」
［吹雪］：「俺に聞くな、俺に」
［繭子］：「まあ細かいことは気にしないでー、で？　注文は？」
［吹雪］：「ああ、鶏肉取ってきてくれ。ムネの部分、３００グラムくらいの」
［繭子］：「うん、任せてー」
ピャーっと、マユ姉は精肉コーナーに駆けていった。ひょっとしたら、さっきのおばさんがいるかもしれないが、まあいいか、気まずいってわけもないだろうし。
とか考えてるともうこっちに向かって走ってきた。
［繭子］：「ふーちゃーん、ワタシいい仕事してきたよー。ほらほらー」
［吹雪］：「どれ、何がだ？」
［繭子］：「ほら、このシール」
指差した場所には、３割引のシールが貼られていた。
［吹雪］：「貼ってあったのがあったのか？」
［繭子］：「ううん、さっきのおばさんが貼ってくれたのー。サービスって」
［吹雪］：「そりゃありがたい。」
［繭子］：「いいの？　って聞いたらいつもひーきしてくれてるサービスだって言ってた」
［吹雪］：「そうか、今度お礼言わないとな」
［繭子］：「ワタシは言ってきたよーありがとうって」
［吹雪］：「そうか、ならとりあえずオッケーだ」

［繭子］：「うん、次の注文は？」
［吹雪］：「そうだな、じゃあ次は――」
協力して買い物し、俺たちはスーパーを後にした。

ヴィヴァーチェ（1）

12月9日（木曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「はあ、はあ……」

［セフィル］：「よーし、その調子だ。後3周、踏ん張るんだ」

学園長に背中を押され、必死で足を前に出す。この走り込みも始まって一週間近くになり、少しずつ慣れてきたかもしれない。疲労が溜まることには何の変わりもないんだけど。

［セフィル］：「よし、ラスト一周、スパートをかけるんだ」

［吹雪］：「はい！　はあ、はあ……」

腕を必死で振り、ぐっと足を前に出す。

［セフィル］：「よし、ゴール」

［吹雪］：「はあ、やった……」

俺は力つきて芝に体を投げ出した。

［セフィル］：「うん、よく走りきった。大分、スタミナもついてきたようだな」

［吹雪］：「そうですか？　はあ、はあ……」

［セフィル］：「そうさ、始めた当初と比べても、息の荒れ方がかなり穏やかだ。それだけスタミナが付いたということだろう」

［吹雪］：「ありがとうございます、はあ……」

［セフィル］：「おお、そうだ。ほら、ドリンクだ」

［吹雪］：「ありがとうございます」

喉を鳴らしてゴクゴクと飲んでいく。

［セフィル］：「はあ、うまい」

走り終わった後のドリンクのうまさは格別だな。

［セフィル］：「本当に、吹雪は美味しそうに飲むな」

［吹雪］：「学園長も飲みます？　どうぞ」
［セフィル］：「うむ、そうしよう」
ドリンクを受け取り、そのまま口へ運ぶ。
［セフィル］：「はあ、ほうきで飛び終わった後のドリンクは格別だな」
［吹雪］：「疲れるんですか？　ほうきに乗るのは」
［セフィル］：「飛んでる際は、そこまで感じないな。だが、確かに骨は入る。かなりの集中力が必要になるからな。自由に飛び回るには、魔力で制御をしなければならない。ただ乗っていれば自動で飛んでくれるわけではないんだ」
［吹雪］：「そうですよね、やっぱり」
［セフィル］：「乗ってない者から見れば、確かに簡単そうに映るかもしれないな」
［吹雪］：「そうかもしれませんね。学園長、すっごく簡単そうに乗りこなしてますし」
［セフィル］：「昔、血の滲むような練習をしたからな。制御がきかなくて、よく地面に放り出されたものだ」
［吹雪］：「本当ですか？」
［セフィル］：「本当だとも、最初から上手く乗りこなせる者など一握りだ。私にだって、吹雪たちのような時代もあったんだぞ」
［吹雪］：「ちょっと驚きですね」
［セフィル］：「そうだな」
［吹雪］：「いや、学園長は驚かなくていいでしょう」
［セフィル］：「おお、そうだったな」

ヴィヴァーチェ（2）

……。

［セフィル］：「どうだ？　落ち着いたか？」

［吹雪］：「はい、大分」

［セフィル］：「疲れはあるだろうが、今日はもう一つしてもらうことがある。いけそうか？」

［吹雪］：「はい、やります」

［セフィル］：「うむ、いい返事だ。じゃあ準備をしなければ、おーい、フェルー、出番だ」

［フェルシア］：「はーい、今行きます」

［吹雪］：「おおっ！？」

一瞬光ったと思うと、目の前にフェルシア先生が現れた。

［フェルシア］：「おはよう、吹雪くん」

［吹雪］：「お、おはようございます。え？　今のってワープですか？」

［フェルシア］：「ええ、ちょっとかっこよく登場してみようかって思ってね。どうだった？」

［吹雪］：「はい、かっこよかったです」

［セフィル］：「だがフェル、大して離れてないのにワープする必要はなかったんじゃないか？　お前がいた場所はここから３０メートル離れたところだったじゃないか」

確かに、練習前から俺の走ってるところ見てたもんな。

［フェルシア］：「それはあれですよ、学園長。ちょっと、先生らしいところを見せたかったんですよ。それが理由じゃあダメでしょうか？」

［セフィル］：「まあ、気持ちは分かるな。いいだろう、許可する」

［フェルシア］：「ありがとうございます」

仲がいいんだろうな、この二人は……。というか学園長、あなたも

生徒の評価を気にするんですか。堂々と構えているだけで十分なはずなのに。

［セフィル］：「さて、何をするかだが、吹雪、知っているか？」

［吹雪］：「はい、俺の魔力の増加を図るんですよね」

［セフィル］：「うむ、ピンポンだ」

［吹雪］：「ピンポン？」

［セフィル］：「ちょっと言ってみたかっただけだ。気にするな」

［吹雪］：「は、はい」

［セフィル］：「この学園の生徒から見れば、吹雪はかなりの魔力を持っている。しかし、ホーリーカルムを唱えるものと考えるとまだ少し物足りない。だから、唱えられるだけの魔力を養っていかなければならない。効率的に養うには、やはり魔力を放出するのが手っとり早い。フェルは防御系魔法に長けている。フェルに向かって、今自分の中に眠る魔力の８０％くらいをとき放つんだ」

［吹雪］：「８０％ですか？」

［セフィル］：「うむ、全部出し切ってしまうと、この後に支障をきたすからな。８０％でも十分だ。自分で何となく分かるだろう。今自分がどれだけ放出したかは」

［吹雪］：「何となくは」

［セフィル］：「なら問題ない。遠慮せず魔力を使うといい」

［吹雪］：「何でもいいんですか？　魔法は」

［セフィル］：「基本的にはオーケーだ。大半の魔法は把握している。今自分が気に入っているものでもよし、研究中のものでもよし、好みで問題はない。ただ、一つだけお願いがある」

［吹雪］：「はい、何でしょう？」

［セフィル］：「セイクリッドスパークルはＮＧだ。無効化されたら、フェルにダメージが貫通してしまう」

［吹雪］：「あ、はい、分かりました」

［フェルシア］：「お願いよ？　吹雪くんには殺されたくないから」

［吹雪］：「だ、大丈夫ですよ、心配しないでください」

［フェルシア］：「うん、信じるわ」
［セフィル］：「おお、そうだ吹雪」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「始める前に、聞いておきたいことがあるんだが」
［吹雪］：「はい、何でしょう」
［セフィル］：「君は昔、魔力の暴走をよく起こしていたと繭子から聞いたんだが、それは本当なのか？」
［吹雪］：「――はい、本当です」
［セフィル］：「そうか」
［吹雪］：「すいません。言ったほうがよかった、ですよね？」
［セフィル］：「いや、いいんだ。気にすることはない。ひょっとしたらって思ってな。みんなに期待される中で、マジックコロシアム出場を拒んでいたのには、それも理由に含まれていたんだろう？」
［吹雪］：「はい。はっきり言ってしまえば、それが一番の理由ですね」
ここ何年はほとんど安定しているんだが、もしものことはいつも突然起こるもの。そんなことが起こっては、学園にとんでもない迷惑をかける。だから俺は、一観客として楽しむことを選んでいた。
［吹雪］：「問題を起こしたくはなかったですから」
［セフィル］：「なるほどな、吹雪なりのけじめだったのか」
［吹雪］：「一応。とは言っても今年は売り言葉に買い言葉で出場してしまったんですけど」
［セフィル］：「何も起こらなかったんだ、いいじゃないか。近年は安定しているんだろう？」
［吹雪］：「そうですね、魔力のセーブは上手くできてると思います」
［セフィル］：「うむ、この練習の目的にはそれも含まれている。この練習で暴発する癖も解消できるようにしよう。吹雪のためにもなる」
［吹雪］：「はい、努力します」

［セフィル］：「何が原因なのだろうな？　普段の吹雪からするとあまり考えつかないんだが」
［吹雪］：「やっぱり両親の影響を強く受けたんだと思いますよ。受け継いだ魔力を、俺の力でセーブするには有り余っていたんじゃないでしょうか」
［セフィル］：「まあ、魔力の暴走は幼い頃によく起こるものだからな。年を増す毎にそれは解消されていく、理屈には一番合っているな」
［吹雪］：「俺の力が至らなかったんです、多分」
［セフィル］：「全てが吹雪の責任というわけではないことは分かっていないといけないぞ？　暴走を起こす者は多くはないが、時たまあることだ。大問題というわけではない」
［吹雪］：「はい、分かっています」
［フェルシア］：「私たちも協力するから、頑張りましょう、吹雪くん」
［吹雪］：「はい、お願いします」
［セフィル］：「よし、では始めようか。何かあったら私もサポートに入る。自分のペースで魔法を打ち込んでいくといい」
［吹雪］：「はい、じゃあいきます」
［フェルシア］：「ええ、どうぞ」
俺は詠唱の構えに入った。
……。
……。

ヴィヴァーチェ（3）

［場所：教室］

［愛海］：「で、こんな風にぐったりとしてるわけね、大久保くんは」

［舞羽］：「使い果たしたんだね、大半の力を」

［吹雪］：「うう～～～」

［舞羽］：「だ、大丈夫？　吹雪くん」

［吹雪］：「見りゃあ分かるだろう……うう～」

［舞羽］：「ご、ごめん、そうだよね」

［吹雪］：「いや、いいけどよ」

［舞羽］：「そんなになるくらい、過酷な練習だったの？」

［吹雪］：「そうだなー、魔力増幅を図る練習だから、今出来うる限りの魔力を放出する必要があるんだよ」

［舞羽］：「あ、だからぐったりしてるんだ」

［吹雪］：「そういうことだ……はあ……」

８０％でいいと言われていたが、確実に８０％を越えてしまったな。自分を追い込みすぎた。

［舞羽］：「大丈夫？　午後の授業、最後までいけそう？」

［吹雪］：「唯一の救いは、次の授業がマユ姉だってことだな。不謹慎だけど、マユ姉の授業は睡眠に費やさせてもらうよ」

［愛海］：「あら、珍しいわね。大久保くんが積極的に睡眠をしようと言い出すなんて」

［吹雪］：「自分の体力の限界を見誤ったからな。マユ姉も事情分かってるはずだし、見逃してくれるだろう」

少し体を休めないと、この後が保たない。

［吹雪］：「祐喜、ノートお願いしていいか？」

［祐喜］：「うん、いいよ。と言っても、繭子先生の授業、あまり

ノート取るところないんだけどね」
［吹雪］：「今回ばかりはそれが助かるぜ」
［祐喜］：「無理に授業に出ないで、保健室で休んだほうがいいんじゃないの？」
［吹雪］：「いや、それはできない」
［祐喜］：「え？　どうして？」
［吹雪］：「さっきまで、学園長とフェルシア先生に稽古つけてもらってたんだ。体は大丈夫か？　って聞かれた時、つい問題ありませんと答えちまったんだよ。そんなこと言ったのに保健室なんて行けるわけがない」
［祐喜］：「フェルシア先生、保健医だもんね」
［愛海］：「維持を張る必要はないんじゃないの？　体悪くしたら元も子もないじゃない」
［吹雪］：「いや、それはそうだが」
［祐喜］：「愛海さん、そこは気持ちを汲んであげなくちゃ。男には、退けない気持ちってものがあるんだよ」
［愛海］：「あ、それってあれ？　男の信念みたいなもの？」
［祐喜］：「うん、そう。男は一度言ったことを曲げることは許されないんだよ」
［愛海］：「なるほど。それで納得できちゃうあたり、男の信念って確固たるものなのね」
［祐喜］：「そういうこと、だから分かってあげよう」
［愛海］：「そうね、じゃあ私はずっと大久保くんの寝顔をみてようかしら？」
［吹雪］：「寝れなくなるからやめれ」
［舞羽］：「大丈夫、私が阻止するから」
［愛海］：「あら、舞羽が自らそんなことを？　どういう風の吹き回し？」
［舞羽］：「別に、ただ吹雪くんの役に立てたらって思うから」
［愛海］：「珍しく積極的ね。その感じでもう気持ちをさらけだし

ちゃえばいいのに」
［舞羽］：「ち、ちょっと、愛海!?」
［吹雪］：「ん？　気持ち？」
［舞羽］：「あー、な、何でもない、何でもないから気にしないで。お願いだから気にしないで」
［吹雪］：「え？　あ、ああ」
何だ、急にメチャクチャ取り乱し始めて……。
［舞羽］：「ああ、わ、私おトイレ行ってくるね」
［愛海］：「あ、後2分で授業――行っちゃった」
［吹雪］：「お前が変なこと言ったからじゃないのか？」
［愛海］：「だって、進展がなくてつまらないんだもの。こっちはこっちでなかなか気づかないしさ」
［吹雪］：「こっち？」
［愛海］：「分からないならいいわよー」
［吹雪］：「……そうか」
［翔］：「須藤がおトイレ、か。ぐ、ぐふふふふふ」
［吹雪］：「ていっ！」
［翔］：「まごふっ!?」
全く、急に来たと思ったら訳の分からんことをほざきやがって。さて、しっかり疲れを取るとしよう。
……。
……。

ヴィヴァーチェ（4）

［舞羽］：「――くん、吹雪くん」
［吹雪］：「ん？　んん」
［舞羽］：「起きて、吹雪くん」
［吹雪］：「ん、んん……」
徐々に視界が広がっていく。てか、眩しいな。
［吹雪］：「んあ？　あれ」
［舞羽］：「おはよう、吹雪くん」
［吹雪］：「おはよう、あれ？　今、何時？」
［舞羽］：「四時半だよ、もう夕方」
［吹雪］：「そうか、え？　四時半？」
［舞羽］：「うん、四時半」
［吹雪］：「……ひょっとして俺、午後、全部寝てた？」
［舞羽］：「うん、そうだね」
［吹雪］：「おーい！？　舞羽、何故起こしてくれなかったんだ！　起きなかった俺も悪いけど、マユ姉の時間だけって言ってたじゃないかー」
舞羽の華奢な肩を掴んでぐらぐらと揺さぶる。
［舞羽］：「あああううう、ご、ごめんん、で、で、でも、りり理由があるんだってばあああ」
［吹雪］：「何言ってるか分かんないぞ、舞羽」
［舞羽］：「ふ、吹雪くんが、揺さぶってるからでしょおお」
［吹雪］：「なるほど」
俺はピタリと動きを止めた。
［舞羽］：「はあ、ふう」
［吹雪］：「情けないぞ、それくらいでへばっていては」
［舞羽］：「だ、だって、結構すごかったよ？　衝撃が」
［吹雪］：「耐えるんだよ、気合いで」

［舞羽］：「そ、そんな～」
［吹雪］：「で？　その理由とやらを聞かせてもらいたいんだが」
［舞羽］：「え？　うん。一応、吹雪くんを起こそうとはしたんだよ？　起きてって、休み時間の時に何回も声かけたんだよ」
［吹雪］：「ふむ、それで？」
［舞羽］：「そうやって起こそうとしてたら、次の授業の先生が来て吹雪くんのことに気づいてね」
［吹雪］：「ああ」
［舞羽］：「ここ最近、ハーモニクサーとしての努力は知ってるからって、そのまま寝かせてやれって言ってくれたの」
［吹雪］：「先生が言ったのか？」
［舞羽］：「うん、今回だけは許してやるって」
［吹雪］：「何と、そんなことが」
［舞羽］：「だから、私は横で見守ってたの」
［吹雪］：「そんな理由があったのか」
［舞羽］：「うん、納得した？」
［吹雪］：「ああ、揺さぶったりして悪かったな」
［舞羽］：「目は覚めた？」
［吹雪］：「ああ、ばっちりだ」
［舞羽］：「じゃあ、帰ろう？」
［吹雪］：「みんな帰ったのか？」
［舞羽］：「うん、もうかなり前に」
そりゃそうだよな、４時前には全ての日程は終了するわけだし。
［吹雪］：「ごめんな、待たせて」
［舞羽］：「いいよ、早く家に帰ってもやることないしね」
［吹雪］：「準備するから、もう少しだけ待ってくれ」
［舞羽］：「うん、了解」
俺は急いで机の中のものを鞄に閉まった。
［吹雪］：「よし、じゃあ行こうか」
［舞羽］：「うん」

俺たちは揃って教室を後にする。

ヴィヴァーチェ（5）

［吹雪］：「――明日でもいいから、俺が寝てた授業のノート見せてくれないか？」
［舞羽］：「あんまりピックアップされたところはなかったよ」
［吹雪］：「だとしても、あるだけで結構違うと思うからよ。お願いできるか？」
［舞羽］：「うん」
［吹雪］：「世の中、ギブ&テイクだからな。助け合って行こうぜ」
［舞羽］：「そうだね」
そんなどうでもいいことを話しながら階段を降りていくと。
［繭子］：「フェルー、準備できたよー」
［フェルシア］：「じゃあ、行きましょうか」
聞き慣れた二人の声が聞こえる。また違うほうからは、
［ダルク］：「ごめんね、聖奈美、役に立てなくて」
［聖奈美］：「もういいって、今回は仕方ないことだもの。次気をつけてくれればいいわ」
［ダルク］：「うん、ありがとう」
これまた聞き慣れた一人と一匹の声。さらには、
［セフィル］：「さあ、帰ろうか、カホラ」
［カホラ］：「忘れ物はない？」
［セフィル］：「うむ、問題ない」
そして――、
［繭子］：「あ、ふーちゃん」
［フェルシア］：「舞羽ちゃんに吹雪くん」
［聖奈美］：「あ、大久保吹雪」
［ダルク］：「え？　みんな」
［セフィル］：「お？　これは何という偶然」
［カホラ］：「そうね」

みんながみんな、顔を合わせて驚いていた。
［セフィル］：「何で全員集合してるのだ？」
［吹雪］：「いや、多分みんな下校するんだと思いますけど」
［セフィル］：「それもそうか」
［フェルシア］：「でも、何でこんなにタイミングよく」
［繭子］：「それはあれだよー、みんなの心が一つだったからだよ」
［聖奈美］：「こ、心が一つ？」
［繭子］：「うん、みんながそれぞれ、みんなのことを信じて止まなかった。だからこうして顔を合わせることができた。みんなに笑顔が戻った、プロジェ○トX！」
［舞羽］：「なんか、どこかで聞いたことがあるような……」
［繭子］：「でも、ステキなことだよー。こうしてみんなと会えたっていうのは」
［吹雪］：「俺たちは毎日顔を合わせてるがな」
［繭子］：「もう、ふーちゃん。そういうことは言わなくてもいーじゃん」
［吹雪］：「事実を言っただけだ」
［繭子］：「ぶーぶー」
［フェルシア］：「まあまあ、繭子」
［カホラ］：「でも、みんな本当に下校なの？」
［舞羽］：「はい、そうですね」
［聖奈美］：「あたしたちもです」
［フェルシア］：「私たちも、仕事が早めに片づいたからね」
［セフィル］：「同じく、私たちもだ」
［舞羽］：「じゃあ、本当に偶然が重なったんだ」
［ダルク］：「こんなことってあるんだね」
［セフィル］：「確率的には2%あるか分からないな」
［舞羽］：「そ、そんなに低いんですか？」
［セフィル］：「単純に考えてそうではないか。一人とすれ違うならそれなりにあるだろうが、8人が一斉にだからな。普通はそうそ

うあるまい」
［舞羽］：「そっか、そうですね」
［セフィル］：「うむ、これは何か神のお導きを感じるな。――よし、みんな、今からバーバロに行くぞ」
［吹雪］：「え？　バーバロですか？」
［セフィル］：「うむ、バーバロだ」
［吹雪］：「何でそんな急に……」
［セフィル］：「だから、こんな偶然はそんな簡単に起こるものではないんだろう？　祝わなければもったいないじゃないか。盛大に盛り上がるのがいいと私は思うんだよ」
［吹雪］：「でもそんな急に、お金そんなに持ってないですよ」
［セフィル］：「心配するな、私が払いを持ってやろう」
［繭子］：「ええっ！？　学園長が全部？」
［セフィル］：「ああ、私から言い出したんだからな。それに、金銭なら余裕がある」
さすが学園長……というか、そんなことを生徒の前で堂々と言っていいのか？　それなりにもらっているのは想像つくけど。
［カホラ］：「お母さん、そういうことは伏せておくものよ」
［セフィル］：「まあいいじゃないか、自慢したい時というのは誰でもあるだろう」
［聖奈美］：「じ、自慢って……」
［セフィル］：「とにかくそういうことだ。お金の心配はいらないぞ。よくよく考えたら、ピアニストとハーモニクサーに選ばれた者たちを祝ってやってなかったからな。今回がいい機会じゃないか。みんな、予定はないんだろう？」
［聖奈美］：「それは、ありませんけど」
［セフィル］：「ならいいではないか、祝わせてくれ」
［繭子］：「学園長、何を食べてもいいんですかー？」
［吹雪］：「おい、マユ姉」
［セフィル］：「ああ、いいぞ。お祝いなんだからな」

［繭子］：「行こうよー、ふーちゃん」
［吹雪］：「いいのかな？　本当に」
［セフィル］：「私がいいと言っているんだぞ？　遠慮は無用だ」
［吹雪］：「……じゃあ、お言葉に甘えて」
［セフィル］：「よし、聖奈美も来るだろう？」
［聖奈美］：「え？　あたしは？」
［セフィル］：「みんな来るんだ、聖奈美だけ来ないというのは野暮ってものだぞ？」
［繭子］：「行こうよー、聖奈美ちゃん」
［セフィル］：「繭子もそう言っている。来てくれないか？」
［聖奈美］：「わ、分かりました」
［セフィル］：「よーし、全員出席ってことだな。じゃあ、早速行くとしよう。いざ出陣だ」
［舞羽］：「愛海にメールしておこうかな」
［セフィル］：「今日は愛海が入っているのか？」
［舞羽］：「はい、そう言っていました」
［セフィル］：「そうか、からかってやるとしよう」
［カホラ］：「お母さん？」
［セフィル］：「生徒との絡みは大事なことだろう？」
［カホラ］：「もう」
――急遽決まった偶然の出会い＆ピアニスト、ハーモニクサーお祝い会。俺たちは学園長の気遣いに肖り、楽しい一時を過ごしたのだった……。

ヴィヴァーチェ（5）（後書き）

次回は選択肢です。
好きな子をセレクトしててください＾＾

ラルゴ（1）（前書き）

12月10日（金曜日）

・第一音楽室
・第二音楽室
・第三音楽室
・第四音楽室

ラルゴ（1）

・第一音楽室

［場所：第一音楽室］

［吹雪］：「さすがはピアノ経験者、もうすでに全てを通して弾けるようになっているとは」
［舞羽］：「あ、ありがとうございます」
［吹雪］：「何故に敬語だ？」
［舞羽］：「えへへ、先生みたいだからつい」
［吹雪］：「でも、本当にすごいと思うぞ」
［舞羽］：「何度もありがとう。でも、まだまだ出来は不十分だよ。ペースが遅いし、強弱も上手く付けれてないし」
［吹雪］：「でも、通して弾けるっていうのはかなりの収穫だろ？　まだ時間もある。本番までは絶対に間に合うペースなんじゃないか」
［舞羽］：「そうかな？」
［吹雪］：「ああ、行けるさ」
ぐっと親指を立てると、舞羽はにこりと笑った。
［舞羽］：「うん、頑張るよ」
［吹雪］：「どうするんだ？　もう一回弾くのか？」
［舞羽］：「そうだね、もう一回弾いてみるね。聞いててもらえる？」
［吹雪］：「おう、もちろん」
舞羽は鍵盤に指を走らせ始めた。
……。
［舞羽］：「ふう」

俺は一観客として拍手を送る。
［舞羽］：「ありがとう」
［吹雪］：「どんどん形になってきてるんじゃないか？」
［舞羽］：「うーん、まだまだだと思うなー」
［吹雪］：「随分自分に厳しいじゃないか」
［舞羽］：「学園代表だから、個人的なものじゃないって考えるとまだまだって思えるんだ」
［吹雪］：「上昇余地はある、と」
［舞羽］：「そんなところかな」
［吹雪］：「なるほど、いい心がけだな。俺も見習わないとな」
［舞羽］：「えへへ」
［吹雪］：「でも、一つアドバイスすると」
［舞羽］：「？」
［吹雪］：「頑張るのと無理するのは違うから、適度に休みを入れながらやるんだぞ？　体に負荷をかけるのはよくない」
［舞羽］：「うん、分かった」
［吹雪］：「どうする？　始めてから結構経つよな」
［舞羽］：「そうだね、一回休憩しようかな」
［吹雪］：「何か飲むか？　買ってきてやるぞ」
［舞羽］：「え？　ホントに？」
［吹雪］：「ああ、俺は嘘はつかん」
［舞羽］：「じゃあ、吹雪くんセレクトで」
［吹雪］：「お、いいのか？　後悔しないな？」
［舞羽］：「え？　そんなにランダム性高いの？」
［吹雪］：「ふふ、どうだろうな」
［舞羽］：「い、いいよ。吹雪くんに任せます」
［吹雪］：「よし、じゃあ待ってろ。買ってくる」

ラルゴ（2）

……。。

［舞羽］：「ほら、買ってきたぞ」

［吹雪］：「うん、ありがとう」

俺が買ってきたのは、パインサイダーとアイスココア。

［舞羽］：「どっちか好きなのを選ぶといい」

［吹雪］：「うん、これはどういう方針で買ってきたの？」

［舞羽］：「ん？　いや、目をつぶって適当にポチっと」

［吹雪］：「本当にランダムに買ったんだ……」

［舞羽］：「はは、まあちゃんとしたもの買えたし、気にするなって」

ココアがホットじゃないのはちょっと失敗だったかもしれないが。

［吹雪］：「ほら、どっち？」

［舞羽］：「じゃあ――こっち」

舞羽はパインサイダーのほうを選んだ。

［舞羽］：「普通のサイダーと何が違うのかな？」

［吹雪］：「そりゃパインだから、パイナップル風味なんだろうよ。飲んでみれば分かるさ」

［舞羽］：「そうだね、いただきまーす」

舞羽はプルタブを開けて缶に口をつけた。

［舞羽］：「あ、おいしい。酸味が適度に利いてて」

［吹雪］：「そりゃよかった。たまにはいいだろう？　俺のランダムセレクトは」

［舞羽］：「今回は正解だね」

［吹雪］：「俺も飲むか」

タブを開けて一口。

［舞羽］：「ん、ちょっと甘みが強いな」

［舞羽］：「本当？」

［吹雪］：「ああ、今まで数々のココアを飲んできた俺には分かる。いわゆるダダ甘だ」
［舞羽］：「吹雪くん、そこまでココア通だっけ？」
［吹雪］：「いや、一ヶ月に一本飲むか程度だが」
［舞羽］：「すごく一般的だと思うけど」
［吹雪］：「だが、このココアは甘い。甘みが強い」
［舞羽］：「ココアってそんなものなんじゃないの？　お砂糖たっぷり入ってるはずだし」
［吹雪］：「それを引いてもだ、この甘さは俺にはキツい。甘いものがそれほど得意ではない俺にとっては」
［舞羽］：「それが一番甘く感じる理由なんじゃ……」
［吹雪］：「そうかもしれないな」
［舞羽］：「とっかえっこする？」
［吹雪］：「いや、大丈夫。これくらいでヘバってたら男が廃る」
［舞羽］：「缶ジュースにそこまで頑張らなくても」
［吹雪］：「飲むのがいやなわけじゃないから平気だ。舞羽は気にせず飲んでくれ、ゴクゴクと」
［舞羽］：「う、うん、分かった」
舞羽はそう返してサイダーを口に運ぶ。
［吹雪］：「……べっくしゅん！」
［舞羽］：「風邪？　吹雪くん」
［吹雪］：「いや、ちょっとむずっときただけだ」
［舞羽］：「そう？　ならいいけど」
［吹雪］：「最近、めっきり寒くなってきたからな」
［舞羽］：「そうだね、コートを羽織ってもまだ寒いもんね」
［吹雪］：「だな、この島が四季の変化が顕著ってのもあるんだろうけど」
［舞羽］：「そうだね、変わり目がはっきりしてるもんね」
［吹雪］：「最近は、ストーブから離れることが全くできない」
［舞羽］：「みかんでも食べながら？」

［吹雪］：「いや、食べてないな」
［舞羽］：「そうなの？　時期なのに？」
［吹雪］：「ないんだよな家に。今が旬だから食いたいとは思うんだけどよ」
［舞羽］：「今ならスーパー行くと結構安く売ってるんじゃない？」
［吹雪］：「うん、近々買いに行くか。あ、でも合宿までに食いきれる量を買わないと。腐っちまう」
［舞羽］：「お裾分けしてもいいんじゃない？　メンバーに。評価が上がるんじゃない？」
［吹雪］：「うーん、そういう手もあるか」
［舞羽］：「私にしてもいいよ？」
［吹雪］：「なら舞羽にはみかんの皮をあげよう」
［舞羽］：「それって、単なる生ゴミじゃない！？」
［吹雪］：「いや、そうでもないぞ？　皮には果汁が含まれてるから、ちょっとムカつく輩がいたらこうブシュっと」
［舞羽］：「何だか仕返しが地味のような気が、というかムカつく人、今はいないから」
［吹雪］：「ん？　そうなのか？」
［舞羽］：「うん。……そういうことにしておいて」
［吹雪］：「ここで舞羽の評価を下げても困るしな。うん、分かった」
［舞羽］：「評価？」
［吹雪］：「気にしたら負けだぞ」
［舞羽］：「わ、分かった」
ゴクゴクゴク。
［舞羽］：「はあ、美味しかった」
［吹雪］：「どうするんだ？」
［舞羽］：「もちろん、再開するよ。アシスタントよろしく」
［吹雪］：「やる気十分だな、よし、任せとけ」
親指を突き出すと、舞羽も同じように返してきた。

ラルゴ（2）（後書き）

次は選択肢、第二音楽室の内容です。

ラルゴ（3）

・第二音楽室

［場所：第二音楽室］

［聖奈美］：「――ふう」
弾き終わった杠が鍵盤から指を離した。
［聖奈美］：「どうだったかしら？　二人とも」
［吹雪］：「お前、すでに通して弾けるんだな。あんな難しいのを」
［聖奈美］：「選ばれたんだから、全力を尽くすのは当たり前のことよ」
［吹雪］：「ひょっとして、家でも練習してるのか？」
［聖奈美］：「ええ、もちろん」
当たり前のように返答してきたな。
［聖奈美］：「この行事、失敗は許されないんだから。成功するためには日々の鍛錬が重要、あたしは当然のことをしてると思うけど」
［吹雪］：「すごいな、お前……」
［聖奈美］：「そんなことは別にいいのよ。それで、どうだったの？　今のを聞いての感想は」
［吹雪］：「あ、ああ」
［聖奈美］：「前にも言ったけど、遠慮は無用だからね。控えて発言をされてもあたしのためにはならないから。思ったことははっきりと言いなさい」
［吹雪］：「わ、分かった……」
はっきりと、ね。そうは言われても、俺はそこまでピアノのことは分からないんだが。
［聖奈美］：「じゃあ、ダルクから。どうだったかしら？」
［ダルク］：「そうだね。前よりも格段に上手になってると思うよ。

でも、まだリズムが曖昧な感じがするかも。早くなったり遅くなったりすることがあったね。それと、やっぱり強弱が大事かな。もっとはっきりつけないと、何だか全てが同じような音程に聞こえてしまうわ」

［聖奈美］：「リズム、強弱ね。分かった、感謝するわ」

ダルクから受けたアドバイスを、杠は用紙にメモしていく。

［聖奈美］：「大久保はどうだった？」

［吹雪］：「え、ああ」

どうする、何て言ったらいいだろう。テキトーなことは言えないしな。

［吹雪］：「うーん」

［聖奈美］：「何？　ないの？　ないわけはないでしょう？」

［吹雪］：「う、うん」

［聖奈美］：「今さっき言ったばかりでしょう？　遠慮は無用だって。何でもいいから言ってみなさい」

何でもいい、か。なら、

［吹雪］：「すっごく上手かったと思う。その調子で頑張ってくれ」

［聖奈美］：「な――！？　ちょ、ちょっと大久保、あたしがそういうことを聞きたかったんじゃないわよ。お世辞はいらないわ」

［吹雪］：「お世辞なんかじゃねぇよ。俺は本当に上手いと思ったからそれを正直に言ったんだよ。遠慮はもちろんしてない」

［聖奈美］：「む、むう……」

［吹雪］：「これが素直な俺の感想だ。こういう意見は受け付けてはくれないのか？」

［聖奈美］：「ん……。し、仕方ないわね、もう。う、受け取っておくわよ。でも、今回のような発言は制限しなさいよ。じゃないと、逃げの一手と見なすから」

［吹雪］：「分かった」

［聖奈美］：「……」

［ダルク］：「聖奈美、顔、すごく赤いよ？」

［吹雪］：「そ、そんなことないわよ。気のせいよ、気のせい」
［ダルク］：「そっか、……ふふ」
［聖奈美］：「な、何笑ってるのよダルク」
［ダルク］：「何でもないよ、何でも」
［聖奈美］：「きゅ、休憩入れるわ。大久保、ジュース買ってきなさい」
［吹雪］：「ん？　俺？」
［聖奈美］：「そうよ、あなたハーモニクサーでしょう？　ピアニストのアシストが仕事なんだからそれくらいしなさい」
理論が何だか捻れてる気がするが、まあいいか。
［吹雪］：「何がいいんだ？」
［聖奈美］：「何でもいいわ、あなたがセレクトしなさい」
［吹雪］：「文句付けるなよ？　何を買ってきても」
［聖奈美］：「分かってるわよ、ほら、早く」
［吹雪］：「わ、分かったって」
［ダルク］：「あ、吹雪、私も行くよ」
ガチャ。
［聖奈美］：「……」

ラルゴ（4）

［場所：学食］

［吹雪］：「さて、頼まれて買いに来たわけだが」
何を買えばいいんだろう。というより、杠みたいな高潔な奴が自動販売機のジュースなんて飲むのか？
まずそこがちょっと気になる。
［ダルク］：「それは吹雪の偏見だと思うよ」
［吹雪］：「やっぱりそうか？」
［ダルク］：「そうだよ。確かに聖奈美は高潔かもしれないけど、ジュースだって飲むしファーストフードだって食べるよ」
［吹雪］：「そうか、俺の単なる思いこみか」
［ダルク］：「聖奈美も、吹雪たちと全く同じだよ。むしろそういうの大好きだよ、聖奈美は」
［吹雪］：「そうなのか？」
［ダルク］：「うん、特に甘いものが大好きだよ。チョコレートとかクッキーとか」
［吹雪］：「へー、何か意外だな」
随分女の子してるじゃないか。
［ダルク］：「聖奈美も女の子だから、吹雪も覚えといたほうがいいかもね」
［吹雪］：「そうだな、忘れないでおこう」
ダルクのおかげでジュースのチョイスを間違えなくて済みそうだ。
［吹雪］：「甘い飲み物っと」
これでいいかな？　いちご牛乳。何かあんまり想像つかないが、甘いものが好きって言ってたし、大丈夫だと思うけど。
［吹雪］：「どうだ？　ダルク」
［ダルク］：「うん、ばっちりだと思うよ」

小さな指でグッドのサインを出してくれる。
［吹雪］：「お前は何がいいんだ？」
［ダルク］：「え？　私はいいよ。聖奈美に分けてもらうから」
［吹雪］：「遠慮するなよ、金なら心配いらないぞ？」
［ダルク］：「そうじゃなくて……ちょっと、容量オーバー」
［吹雪］：「……なるほど」
ダルクの体で、この量のジュースは飲みきれないってわけか。確かに、こんなにたくさん飲んだら、宙に浮けなくなるかもしれない。
［ダルク］：「気持ちだけで十分だよ」
［吹雪］：「……、前から思ってたんだけど、使い魔って大体どれくらいの質量によって保たれてるんだ？」
［ダルク］：「それって、人間で言うところの体重ってこと？」
［吹雪］：「そんなところかな、ダルクがメスだということを分かっていながら失礼な質問だとは思うが、もし差し支えなければ参考までに教えてくれると嬉しいな」
［ダルク］：「それは別に構わないけど、……使い魔にも色々種類があるから、それぞれにはっきりとした差があるんだよね。吹雪も、私以外の使い魔って見たことはあるでしょう？」
［吹雪］：「ああ、鷹とか猫とかなら」
［ダルク］：「私はその中の小竜、ドラゴンの一種なんだ」
［吹雪］：「ドラゴン……」
見た目でそれっぽいとは思ってたが、やっぱりそうだったのか。
［ダルク］：「このとおり、私は小さいから、質量は１０キロにも満たない。でも、ドラゴンにも種類があって大きなドラゴンだったら普通に１００キロを越えるものもいるよ」
［吹雪］：「マスターを軽く上回るのか」
［ダルク］：「ドラゴンだからね、単純に考えればそれが普通のことではあるんだけど」
［吹雪］：「じゃあ、ダルクみたいな種類は珍しいのか？」
［ダルク］：「そう、なのかな？　大半のドラゴンは中か大の部類

に入るから、小って部類のドラゴンはあんまり見たことないね」
［吹雪］：「じゃあ、ダルクは希少価値が高いということに？」
［ダルク］：「んー、そう、なるのかな？」
［吹雪］：「今のうちにサインをもらっておいたほうがいいのか？」
［ダルク］：「私は未来のスターにはなれないよ」
［吹雪］：「努力次第でどうにでもなるじゃないか。やる前からあきらめてはいけないぞ」
［ダルク］：「あ、あきらめてはいないけど、芸能関係の仕事には就けないから」
［吹雪］：「そうか？　ドラゴンユニットとか組めれば売れそうな気がするんだが」
［ダルク］：「で、できないよ。その前に使い魔がマスターから離れることはできないから」
［吹雪］：「そうか、もったいない」
［ダルク］：「吹雪って、そんなにアイドルが好きなの？」
［吹雪］：「いや、別に」
［ダルク］：「あ、そう……」
［吹雪］：「じゃあ、俺は……コレにするか」
テキトーにボタンをプッシュして飲み物を選んだ。
［吹雪］：「じゃあ、そろそろ戻るか。待たせるとお怒りに触れてしまう」
［ダルク］：「うん」
俺たちは音楽室へと戻る。
……。

ラルゴ（5）

［場所：第二音楽室］

［吹雪］：「ほら、どうぞ」
［聖奈美］：「ええ、いただくわ」
すっかり杠の表情は戻っていた。杠はストローを刺していちご牛乳を飲んでいく。
［聖奈美］：「んっ、んっ……」
［吹雪］：「……」
何だか、イメージにそぐわない光景が目の前に広がってるな。杠が紙パックの飲み物を飲んでいるとは。勝手なイメージで、ティーカップに注がれた飲み物しか興味がないように見えるんだよな、どうしても。俺の偏見にすぎないんだが。
［聖奈美］：「何よ？　人のことジロジロ見て」
［吹雪］：「いや、飲み物、それでよかったか？」
［聖奈美］：「ええ、別に問題ないわ。選ばせたのはあたしなんだから」
［吹雪］：「そうだけど、やっぱ気になるだろ？」
［聖奈美］：「大丈夫よ、甘いものは基本的に好きだから」
［吹雪］：「そうか」
ダルクは微笑んで見せた。
［吹雪］：「よかった」
［聖奈美］：「変ね、文句を言うなって言っていたのに」
［吹雪］：「いや、買う側としてはなるべく不味いものは飲ませたくないだろう」
［聖奈美］：「ふーん、なかなかいい心がけじゃない」
［吹雪］：「そりゃどうも」
［聖奈美］：「とりあえず、甘いものは基本好きだから、覚えてお

くといいわ」
［吹雪］：「ああ、そうする」
［聖奈美］：「あなたは何が好きなのよ？」
［吹雪］：「え、俺？」
何だろうな……。
［吹雪］：「基本何でも好きだぞ」
［聖奈美］：「何よ、その返答。答えになってないじゃない」
［吹雪］：「いや、だって」
［聖奈美］：「その中で、特に何が好きなの？」
［吹雪］：「うーん、ハンバーグとかカレーとか？」
［聖奈美］：「随分子供っぽいものが好きなのね」
［吹雪］：「いいだろー？　すっげぇ美味しいじゃないか。子供にも大人にも愛される料理だぜ。お前、嫌いなのか？」
［聖奈美］：「そういうわけではないけど」
［吹雪］：「じゃあいいじゃないか。答えになってるだろ？」
［聖奈美］：「まあ、いいわ。誰が何を好きだろうと否定はできないものね」
そう言いながら杠はパックに口をつける。
［聖奈美］：「ふう、さて、再開しましょう」
［吹雪］：「もう休憩終了か？」
［聖奈美］：「ええ、あんまり休むと、時間がもったいないもの」
［ダルク］：「無理はダメだからね？　聖奈美」
［聖奈美］：「ええ、分かってるわ」
杠はイスに腰を下ろす。
［聖奈美］：「大久保」
［吹雪］：「何だ？」
［聖奈美］：「今回は、何でもいいから気づいたことを言ってちょうだい、いいわね」
［吹雪］：「ああ、善処する」
［聖奈美］：「じゃあ、弾くから聴いててちょうだい」

杠は鍵盤に指を置いた。

ラルゴ（5）（後書き）

次回、第三音楽室のお話です。

ラルゴ（6）

・第三音楽室

［場所：第三音楽室］

［繭子］：「あ、違う、ここはシャープだから、あ、今度はナチュラルに……うーん」

［吹雪］：「落ち着いてやりな、マユ姉。自分のペースで弾いたほうがいい」

［繭子］：「うん、分かった。んー、ここがシャープでこっちも……」

ゆっくり、ゆっくりマユ姉は楽譜に沿ってメロディーを奏でていく。

［吹雪］：「ん？　そこ、ちょっと音が違うんじゃないか？」

［繭子］：「うん、ワタシも思った。音がズレてたよね」

［吹雪］：「音が下がってるんじゃないか？　記号の見落としか何かなんじゃね？」

［繭子］：「うん、もう一回やるよー」

間違ったところを小説前からやり直す。今度は……クリアしたな。

［繭子］：「これだねー。またシャープの見落としだったみたい」

［吹雪］：「複雑な譜面だからな。見落とさないように注意しないといけないな」

［繭子］：「うん、気をつけるよー」

ひとまず、区切りのいいところまでは漕ぎ着けたな。

［繭子］：「はあー、指がクタクタだよー」

［吹雪］：「休憩入れるか？」

［繭子］：「うん、そうするよー。ふーちゃん、ジュースー」

［吹雪］：「はいはい、何がいいんだ？」

［繭子］：「あれ？　あれれれ？」

［吹雪］：「何だよ、急に首傾げて」
［繭子］：「グキ、グキ……」
［吹雪］：「折れるくらいまで傾けんでいい」
［繭子］：「はあー、苦しかったー」
［吹雪］：「じゃあやらなきゃいいだろうに」
［繭子］：「とにかく、ちょっといつもよりおかしな現象が起きてるよ。ワタシには分かるー」
［吹雪］：「違うって、何が違うんだよ」
［繭子］：「いつもだったらさ、ジュースーって頼んだら、ジュース？　そんなの自分で買いに行けよゴミ虫が！　的なことを言ってくるはずなのに」
［吹雪］：「……そんなひどいこと言ってないだろう、俺は」
［繭子］：「でも、似たようなことは言ってるよー」
［吹雪］：「いや、いくらなんでもそこまではないぞ。絶対に」
［繭子］：「なのに、バッド、今日は文句言わずに買いに行ってくれるって言ってくれてる。これがおかしくないわけがあるだろうか？　いや、ない」
［吹雪］：「反語かよ」
［繭子］：「教師っぽいでしょー？」
［吹雪］：「いや、使おうと思えば誰でも使えるだろう」
［繭子］：「そうかなー？」
［吹雪］：「って、話が反れてるぞ」
［繭子］：「そうだったー。何で今日は買いに行ってくれるのー？　いつものふーちゃんじゃないみたいだよー」
［吹雪］：「失敬だな。いつもどおりだぞ、俺は」
［繭子］：「じゃあ何で？　ＷＨＹ？」
［吹雪］：「変に英語織り交ぜんな。それに意味同じじゃないかよ」
［繭子］：「だってー、使いたかったんだもん」
自分の欲望のためにそんな回りくどいことを。
［吹雪］：「頑張ってるからだよ、マユ姉が」

［繭子］：「え？」
［吹雪］：「俺の役目は、ピアニストのサポートだ。それはマユ姉のサポートでもある。だから俺が買いに行くって言っても別に不思議なことじゃないだろう？」
［繭子］：「そうだけどー」
［吹雪］：「マユ姉にだけ厳しく当たってるわけじゃない。俺は努力してるものにはそれなりの対応をする。マユ姉なら分かってんだろう」
［繭子］：「それは、まあ、お姉ちゃんだし」
［吹雪］：「なら、それでいいじゃないか、別に」
［繭子］：「うー、うん」
［吹雪］：「ほら、何がいいんだ？」
［繭子］：「うーん、甘いのー」
［吹雪］：「大半のジュースが甘いんだが」
［繭子］：「じゃあふーちゃんの直感でいいよー」
［吹雪］：「分かった」
俺は小銭を持って自販機へと向かう。
……。

ラルゴ（7）

［吹雪］：「ほれ」
［繭子］：「わーい、ありがとー」
喜びながら受け取る。買ってきたのはリンゴジュース。確かマユ姉は果物が好きだったはずだ。
［吹雪］：「いただきまーす」
［繭子］：「コボして汚すなよ？」
［吹雪］：「大丈夫だよー、先生だもん」
［繭子］：「そういっていつもコボしてるの誰だよ」
［吹雪］：「誰だろうねー」
ユー、お前だよ。
［繭子］：「んー、練習した後のジュースは美味しいね～」
俺はただ見てただけだけどな。
［繭子］：「ふーちゃんは何にしたのー？」
［吹雪］：「ん？　ああ、コレ」
俺はパックの表面を見せる。
［吹雪］：「青リンゴ、何か違うのー？」
［繭子］：「どうなんだろうな？」
比べて飲んだことはないからどうなのか。
［繭子］：「んー、味見ー！」
［吹雪］：「あ、おい」
言うが早いか、マユ姉は俺のストローに食いついた。
［繭子］：「チュウ、チュウ」
［吹雪］：「おい、飲み過ぎだぞ」
［繭子］：「んー、おいちいね」
［吹雪］：「何故赤ちゃん言葉だ」
［繭子］：「ふー、飲んだ」
随分軽くなってしまった……。

［繭子］：「とっても美味でございました」
［吹雪］：「使う言葉を統一しないか」
［繭子］：「拙者は―」
［吹雪］：「一番使いづらいだろうが！」
［繭子］：「冗談だよー冗談」
［吹雪］：「ったく。で？　味の違いはあったのか？」
［繭子］：「え？　うーんと……」
［吹雪］：「あんだけ飲んで分からなかったって言うのか？」
［繭子］：「ううん、ちょっと待ってー。ええっと」
今飲んだばかりだというのにどうしてそんなに考えなければならないんだ。
［繭子］：「うーんとねー、青リンゴは赤リンゴより甘みが少なかったよ。でも、赤リンゴよりさっぱりしてた」
［吹雪］：「色の違いだけじゃなかったと」
［繭子］：「そう、イグザクトリー！」
［吹雪］：「もういいって、それは」
［繭子］：「とにかく美味しかったよー、ごちそうさまー」
そう言って自分のストローにスライドさせた。俺も同じようにストローに口をつける。
……間接キスになってしまうが、家族なんだから気にしなくていいよな。

ラルゴ（7）（後書き）

後程続きをアップします。

ラルゴ（8）

［吹雪］：「さっき、どこまで弾いたんだ？」
［繭子］：「ん？　ええっと、ここかな？　このページの2小節目」
［吹雪］：「うん。まだ先は長いな」
［繭子］：「やっぱり、そう簡単にはいかないねー」
［吹雪］：「でも達成感はすごくあると思うぞ？　これを上手に弾くことができたら」
［繭子］：「そうだね、できないーって逃げることもできないしね」
［吹雪］：「なかなかいい心がけじゃないか」
［繭子］：「トーゼンだよ、教師だもの。たまには真面目なことも言うよ」
［吹雪］：「いついかなる時もそうであってほしいんだが……」
［繭子］：「そう簡単にはいかないよー」
［吹雪］：「いや、いかなきゃダメなんだっての」
［繭子］：「えへへ。サポートよろしくね」
いつもしてるじゃねぇか……。
［繭子］：「でも、ピアノって難しいねー。弾いてみて改めてそう思ったよー」
［吹雪］：「そうだな」
［繭子］：「すごい繊細なんだよね。一つでも和音がズレちゃうとすっごく汚い音に変わっちゃうしー」
［吹雪］：「まあ、分からない人はどれがどの音なのかも分からないだろうしな」
［繭子］：「でしょー？　初めてピアノを触った日のことを思い出したよー。触ったら急に音がして、驚いてたなー。オバケって思ったこともあったよー」
［吹雪］：「オバケね、まあ怪談話にもピアノはよく出てくるからな」

［繭子］：「だよねー。夜の音楽室とかでピアノが勝手にとか、考えるだけで……うー、お腹と背中がくっつきそうだよ」
［吹雪］：「何故だ！？」
［繭子］：「あ、間違えた。震えてくるみたいだよ」
どうやったらそんな間違いが起こるんだよ……。
［繭子］：「一人で音楽室には近づけないね、ゼッタイ」
［吹雪］：「そもそも近づく理由もないだろう」
肝試しでも開かれない限りな……。
［繭子］：「やっぱり、化けて出てくるとしたらベートーヴェンとかなのかな」
［吹雪］：「知らんよ、そんなことは」
［繭子］：「でも、音楽室のお化けが出るとしたらベートーヴェンのエリーゼのためにがオーソドックスじゃない」
［吹雪］：「そりゃ確かにアニメではよくあるけど」
そもそもお化けに定番何てものはあるのか？
［繭子］：「かわいそうだよね。せっかく心を込めてエリーゼさんに曲を送ったのに、音楽室のお化けのテーマソングにされちゃって」
［吹雪］：「いつテーマソングに抜擢されたんだよ」
［繭子］：「だって、多用されてるから」
［吹雪］：「だからって、それがテーマの絶対的理由にはならないだろう」
［繭子］：「じゃあ運命？」
［吹雪］：「それもベートーヴェンじゃないかよ」
［繭子］：「たっくさん使われてるね、こう考えると。やっぱりかわいそうだよー」
［吹雪］：「でも、そのおかげで、さらにベートーヴェンの知名度が上がったとも取れるぞ」
［繭子］：「あ、そうとも取れるのかー。なるほどー」
何か予想外に納得したな。
［繭子］：「でも、怖い印象をみんなに植え付けちゃったのは、べ

ーさんの望みじゃなかったんじゃない」
［吹雪］：「誰だよ、ベーさんって」
［繭子］：「ベートーヴェンのことだよ」
［吹雪］：「何故そんなにフレンドリーなんだよ」
［繭子］：「そっちのほうが呼びやすいんだもん」
［吹雪］：「だからって偉人をあだ名で呼ぶのはどうなんだよ」
［繭子］：「まあまあ、細かいことは気にしないでいこうよー」
すいません、ベートーヴェンさん。変な呼び方をしてしまって……。
［繭子］：「何とかできないのかなー」
［吹雪］：「する必要あるのか？　そもそも」
［繭子］：「あるよー、エリーゼさんがかわいそうだもん」
［吹雪］：「エリーゼさんて……」
［繭子］：「どうにかならないのかなー？　ふーちゃん」
［吹雪］：「んー、それは無事に年を越せてから考えた方がいいんじゃないか？　それからだって遅くないだろう」
［繭子］：「んー、そうかなー」
［吹雪］：「それに、ベートーヴェンが偉大な人だってことはほとんどの人が分かってるはずだしよ。ちょっと待ってもらえばいいじゃないか」
［繭子］：「うん、そうだね。ベーさん、いいですか？　……うん、いいって」
［吹雪］：「おい、どうして許可をもらえたって分かったんだ」
［繭子］：「何となく、そんな気がしたから」
［吹雪］：「……まあいい。よし、そろそろ再開しようぜ」
［繭子］：「オー、よーし、頑張るぞ～！」
やる気は、十分みたいだな。俺たちはピアノの前に向き合った。

ラルゴ（9）

・第四音楽室

［場所：第四音楽室］

［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
横で流れる先輩のピアノの音色。まだ少々ぎこちないが、それでも着実に進んでいく。
［カホラ］：「あ、ここはそのままシャープでいくのね」
そう言ってその和音を奏でてみる。
［カホラ］：「やっぱりこっちね」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「よし、じゃあ進みましょう」
先輩はまた五線紙の音符を弾き進めていく。
……。
［カホラ］：「ふー、とりあえず一区切りかしら」
［吹雪］：「お疲れさまです、先輩」
［カホラ］：「どうだった？　横で聴いてみた感想は？」
［吹雪］：「先輩の努力が実ってきたように見えますね。いいペースで進んでるんじゃないですか？」
［カホラ］：「本当？　嘘ついてないわね？」
［吹雪］：「今嘘ついても何もメリットないじゃないですか」
［カホラ］：「信じていいのね？　じゃあ」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「ふふ、ありがと」
先輩はウインクして返した。

［カホラ］：「ちょっと休憩入れましょうか。ちょうど一区切りだし」

［吹雪］：「ジュースでも買ってきましょうか？」

［カホラ］：「んー、そうね。あ、私も行くわ、ちょっと場所を変えましょう」

［吹雪］：「そうですか？　休んでていいのに」

［カホラ］：「いいのよ、気分転換にはちょうどいいわ。さ、行きましょう」

［吹雪］：「あ、はい」

……。

ラルゴ（10）

［場所：屋上］

［カホラ］：「ふー、涼しいー」
［吹雪］：「いや、先輩これ、涼しいを通り越してませんか？　というか、寒いです」
［カホラ］：「え？　そうかな？」
［吹雪］：「そ、そうですよ」
今日は雪は降っていないが、季節は冬。
屋上にはビュービューと北風が吹きすさんでいた。
［吹雪］：「ここじゃないとダメなんですか？　場所は」
［カホラ］：「せっかく来たんだから、もうちょっとここにいましょうよー。これくらいの寒さ、男の子なら耐えなくちゃだめよ」
［吹雪］：「でも、この寒さは身を切り刻む勢いですよ。先輩は寒くないんですか？」
［カホラ］：「ええ、そこまで寒いとは思わないわよ？　……へっくしゅ！」
［吹雪］：「……今、くしゃみしましたよね？　やっぱり寒いんじゃ」
［カホラ］：「これは心のくしゃみよ、ちょっとむずっと来ただけ」
何だよ、心のくしゃみって……初めて聞いたぞ。
［カホラ］：「とにかく、もう少し付き合ってよ」
［吹雪］：「わ、分かりました」
これも精神修行か……。
［カホラ］：「いい眺めねー」
［吹雪］：「そうですね」
先輩は買ってきたホットレモンドリンクを開けて口に運ぶ。俺も同じように自分の買ってきたジュースを開けて飲む。ここに来るなら、

俺もホットドリンクを買えばよかったな……。
［カホラ］：「ここから眺める海は本当に好きなのよね、私」
［吹雪］：「確かに、先輩ここに来ること多いですよね」
季節に関係なく、先輩はよくこの場所に来たがる。
［カホラ］：「だって、綺麗じゃない？　眺めが」
［吹雪］：「そうですね」
この島の大きなセールスポイントでもあるからな。海が綺麗というのは。
［カホラ］：「この海を見てると、自分の心も綺麗になる気がするの。悔しかったときとかにここに来てこの海を眺めると、もう一度頑張ろうって気持ちが沸いてくるのよね。吹雪もそう思うでしょう？」
［吹雪］：「そうですね。確かに、広い海見てると、自分の悩みなんてちっぽけなんだなって思いますね」
［カホラ］：「でしょう？　私、生まれ変わったら海賊になりたいって思うのよね」
［吹雪］：「え？　ちょ、ちょっと待ってください先輩」
［カホラ］：「どうしたの？」
［吹雪］：「先輩、海が好きなんですよね？」
［カホラ］：「ええ、好きよ」
［吹雪］：「なのに、海上の悪人になりたいと思うのは、少々矛盾してませんか？」
［カホラ］：「そうかしら？　あ、ひょっとして言い方が悪かったかしら？　私、海の上を旅してみたいのよね」
［吹雪］：「あー、それならしっくりきますね」
［カホラ］：「ごめんね、確かに海賊だとすっごく汚いものだものね」
［吹雪］：「想像つかないです、先輩が海賊になってる姿は」
［カホラ］：「そう？」
［吹雪］：「はい、先輩が金品を巻き上げてる姿は考えつかないで

す」

［カホラ］：「命が欲しければ、金を出すんだな――みたいな？」

［吹雪］：「……ちょっと上手かったですね」

［カホラ］：「気持ちを込めて言ってみたの」

先輩って、実は演技派なんだろうか？

［カホラ］：「でも、確かに私には脅しが似合わないかもしれないわね。というか、脅しをやる機会もないわけなんだけど」

［吹雪］：「ですね、そんな頻繁に脅すチャンスが巡ってきてたら、先輩の職業なんだよって話になりますもんね」

［カホラ］：「夢を盗む仕事です、何て言ったらどうなるかしら？」

［吹雪］：「多分、世界中から大批判喰らうでしょうね」

サンタとの激しいバトルが勃発しそうだ。

［カホラ］：「まあ、何にしてもいつかは海上旅行してみたいわ」

そう言ってホットココアを一口。

［カホラ］：「そろそろ戻りましょうか？　さっきからひっきりなしに震えてるみたいだしね」

［吹雪］：「すいません、バレてましたか」

［カホラ］：「名は体を必ず表すわけじゃなのね、やっぱり」

［吹雪］：「もちろんですよ、というか寒さに弱いのは大半の人だと思うんですけど」

［カホラ］：「仕方ないことだけどね。じゃ、音楽室に戻りましょう」

［吹雪］：「はい」

俺たちは寒い屋上を後にした。

……。

ラルゴ（11）

［場所：第四音楽室］

［カホラ］：「それにしても、この譜面難しいですね」
［吹雪］：「そうね、私も同意だわ」
素人が見ても分かる。この楽譜にはたくさんの音符が五線紙の上で踊っていて、尚且つ複雑な和音によって構成されている。子供の頃に音楽の授業で習った譜面とは訳が違っている。
［吹雪］：「よく弾けるなって思いますよ、本当に」
［カホラ］：「本物のピアニストだったらスラスラと弾けるんでしょうけど、あまりカジったことのない私から見たら、とっても難易度が高いわね」
［吹雪］：「こんなこと言ったらダメなんでしょうけど、俺、ピアニストに選ばれなくてよかったです」
［カホラ］：「ふふ。でも、吹雪の役割はピアニストと同じく大切な役割だから、気を抜いちゃダメよ？」
［吹雪］：「はい、全力で取り組みます」
［カホラ］：「じゃあ、始めましょう。二枚目の三小節目からだったかしら？」
［吹雪］：「そうですね、さっきはここまで弾きましたから」
［カホラ］：「了解、じゃあよろしくお願いします」
［吹雪］：「はい、こちらこそ」
俺たちは譜面に向き合った。

エネルジコ（1）

12月11日（土曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「今日は気分転換に、ピアニストのみんなには吹雪のメニューに付き合ってもらおうと思う」
［舞羽］：「吹雪くんのメニューですか？」
［セフィル］：「そうだ、ずっとピアノピアノでは、みんなも息が続かないだろう？　こうやって普段と違う趣向のメニューを入れることで、効率的なガス抜きが可能になると思うんだよ」
［聖奈美］：「なるほど」
［セフィル］：「吹雪もそう思うだろう？」
［吹雪］：「え？　はい、そうですね」
［セフィル］：「ほら、ハーモニクサーもそう言っているぞ」
［吹雪］：「学園長、俺はいつもどおりのメニューをこなせばいいんですか？」
［セフィル］：「そうだな、吹雪はいつもどおりに、メニューどおりに進めてくれ」
［吹雪］：「はい、分かりました」
俺のガス抜きはどうやらないらしい。
［セフィル］：「すまんな、ガス抜きはピアニストとの戯れで我慢してくれ」
［吹雪］：「た、戯れ！？」
［カホラ］：「ちょっとお母さん、朝から変なこと言わないで」
［セフィル］：「おっとすまない。口が滑ってしまった」
［繭子］：「それで、ワタシたちは何をすればいいんですかー？」
［セフィル］：「うむ、まずは体力付けの基本、ランニングだ」

［舞羽］：「うわ、出た……」
周りの女子が少し顔をシカメる。
［セフィル］：「どうやら知ってる者もいるようだな」
［舞羽］：「はい、吹雪くん、いつも息を荒げて午後の授業に参加してますから」
［セフィル］：「心配するな、ピアニストのみんなにはそこまで全力で望んでもらおうとは思ってない。あくまで息抜き程度の気持ちで望んでくれればいい」
［聖奈美］：「そうですか」
［セフィル］：「吹雪はいつもどおりだぞ？」
［吹雪］：「はい、分かってます」
［舞羽］：「で、学園長、私たちは何周すればいいんですか？」
［セフィル］：「そうだな、このグランド１周が４００ｍだから……逆に聞きたい。お前たちは何周くらい走れると思う？」
［舞羽］：「え？　どうなんだろう」
［聖奈美］：「体育の授業とかだと２キロとかが普通ね」
［カホラ］：「そうね、男子は総じて女子よりも多く走っていたし」
［セフィル］：「気分転換で疲労してはマズいからな。じゃあ、とりあえず５周走ってみてくれ。辛かったら途中でやめてくれて構わない。あ、くどいようだが吹雪はいつもどおりな？」
［吹雪］：「はい、準備は出来てます」
［セフィル］：「うむ、結構。じゃあ女子たちも着替えてきてくれ。一足先にグランドで待ってるぞ」
［舞羽］：「はい、分かりました」
女子たちは更衣室へと向かって歩いていく。
［セフィル］：「……吹雪」
［吹雪］：「何ですか？　学園長」
［セフィル］：「女子たちの覗きには行かなくていいのか？」
［吹雪］：「いや、行きませんよ……」
死にたくはないからな……。

エネルジコ（2）

［繭子］：「えっほ、えっほ」
［舞羽］：「はあ、はあ……」
［カホラ］：「大丈夫？　舞羽」
［舞羽］：「はい、大丈夫です。あんまり運動してなかったから、やっぱり体がナマってますね」
［聖奈美］：「無理しなくてもいいんじゃなくて？　必ず走りきれって決まりはないわけだし」
［舞羽］：「あ、大丈夫。みんなと走ってるの、楽しいから」
［カホラ］：「そうね、頑張りましょ」
［セフィル］：「よーし、いいぞ。ここから少しペースアップだ！」
［吹雪］：「は、はい。はあ、はあ……」
ダダダダダダダダッ。
［繭子］：「は、速いよふーちゃん」
［舞羽］：「すごいなー、ペースが違うよ」
［聖奈美］：「まあ、男子だから当然ね」
［カホラ］：「それにしたって速いわね。吹雪、すっかりランナーみたいになっちゃったわね。走り方が陸上選手さながらだったわ」
［聖奈美］：「今の様子だけみたら、魔法の拾得の練習をしてるとは誰も思わないわね、あれはもはや駅伝よ」
［カホラ］：「しかもアンカーね、前を走る選手を抜かさんとするような勢い」
［繭子］：「わー、もうあんなに差がついてるよー」
［カホラ］：「このペースだと、もう1回追い抜かれるわね」
［繭子］：「ふーちゃんは何周走らなきゃいけないのー？」
［舞羽］：「どうなんでしょうね、私たちがスタートする前にはもうスタートしてましたし」
［カホラ］：「今私たちは3周目だから後2周だけど……フェルシ

ア先生に聞いてみましょうか」
……。
［繭子］：「フェルー」
［フェルシア］：「どうしたの？　繭子。ラスト1周、ファイトよ」
［繭子］：「あ、その前に一つ教えてほしいことがあるの」
［フェルシア］：「どうしたの？」
［繭子］：「えっとねーー」
［カホラ］：「あ、繭子先生、後ろ！」
［繭子］：「へ？」
［吹雪］：「ぬおおおおおおっ！」
［繭子］：「ひゃああっ！？」
［セフィル］：「よーし、そのペースだ。すまんな繭子、驚かせてしまって」
ダダダダダダダダダッ。
［繭子］：「何か、さっきよりペースが上がってない？　ふーちゃん」
［フェルシア］：「ペース走だもの。上がっていくのは当然じゃない？」
［繭子］：「そ、そっか……」
［フェルシア］：「にしてもいい走りっぷりだわ、吹雪くん」
［カホラ］：「まあ、後ろからお母さんが発破かけてるし、ペースが上がるのは当たり前かもしれないけど」
［フェルシア］：「ふふ、で？　何の話だったっけ？」
［繭子］：「あ、そうだ。ふーちゃんってさ、グランド何周しなきゃいけないの？」
［フェルシア］：「普段は20周とか走ってるわよ」
［繭子］：「20周！？　ホントに？」
［フェルシア］：「ええ、初めての時は死にかけてたけど、今は大分慣れてきたみたいでいいペースで走れてるみたいよ」
［舞羽］：「陸上部ってわけじゃないのにね……」

［カホラ］：「さすがは男の子かしらね」
［聖奈美］：「今、大久保は何周目なんですか？」
［聖奈美］：「えっと、今は……９周めかしら？　後１１周、後ちょっとで後半戦ね」
［繭子］：「まだ半分もあるんだー」
［フェルシア］：「まだまだペースも上がっていくから、ここからが正念場ね」
［カホラ］：「……後１周走り終わったら、吹雪のこと応援してあげましょう」
［舞羽］：「そうですね」
［繭子］：「よーし、じゃあラスト１周出発しましょう」
［舞羽］：「ふふ、頑張って」

エネルジコ（3）

［セフィル］：「よーし、半分まで来たな。ここからもう少しペースを上げよう、行けるか？」
［吹雪］：「は、はい。大丈夫です」
［フェルシア］：「後１０周よ、吹雪くんファイト」
フェルシア先生の激励を聞きながら俺は１１周目を走り出す。
［セフィル］：「お、女子たちはどうやらゴールしたようだな」
横目で見ると、ゴール地点で女子たちは楽しそうにしていた。走りきったんだな、全員。
［セフィル］：「５周だけとはいえ、よく走りきったものだ」
［吹雪］：「そうですね」
［セフィル］：「何だ？　随分反応が薄いじゃないか」
［吹雪］：「いや、だって……走ってるからしゃべりずらいんですよ」
息苦しくて、相槌をするのがやっとだ。
［セフィル］：「吹雪なら走りながらでもしゃべれるだろう」
［吹雪］：「いや、何ですか？　その訳分からない理論は」
［セフィル］：「ブリザード理論だ」
［吹雪］：「だから何ですか？　それは」
［セフィル］：「おもしろいな、吹雪は」
［吹雪］：「からかわないでくださいよ……」
［セフィル］：「はっはっは」
何というか、最近は学園長にからかわれてばかりの気がするな……。
学園で一番偉い存在だからして、あまり強く言うことはできないんだけど。
［セフィル］：「どうだ？　最近あの４人とは仲良くやれているのか？」
［吹雪］：「まあ、それなりには」

たまに杠に怒られてしまう以外は、順調と言っていいかもしれない。
［吹雪］：「ぼちぼちってところです」
［セフィル］：「そうか、ならよかった。全員に嫌われてるとか返されたらどうしようかと思っていたところだ」
［吹雪］：「……怖いこと言わないでくださいよ」
［セフィル］：「心配するな、ちょっと言ってみたかっただけだ」
［吹雪］：「あまりそういうことは言わないでほしいんですけど……」
想像するだけでイヤな気持ちになる。
［セフィル］：「イイ子たちだと思うぞ、みんな」
［吹雪］：「そうですか？」
［セフィル］：「ああ、みんな熱心に練習に取り組んでくれるし、聞き分けもいい。ピアニストになるにふさわしい器だったと言っていいだろう」
［吹雪］：「マユ姉も入ってるんですか？　その中には」
［セフィル］：「ああ、もちろんだ」
［吹雪］：「おお……」
［セフィル］：「何だ？　その反応は？　意外とでも言いたそうだな」
［吹雪］：「俺、普段のマユ姉知っちゃってますから、練習はまじめに取り組んでいるのは知ってるんですけど、ふさわしい器って言われるとどうしても……」
［セフィル］：「姉弟故に疑問が残るわけか」
［吹雪］：「全力で姉を褒めたたえるのも、何か気持ち悪いでしょう？」
［セフィル］：「いいじゃないか、別に私はシスコン、ブラコンぐらいでは退かないぞ？」
［吹雪］：「いや、そういう問題でもないんですよ」
［セフィル］：「ん？　違うのか？」
［吹雪］：「俺が言いたいのは、姉っていうふるいにかけると、本

当のマユ姉の姿を信じがたいってことです」

［セフィル］：「つまり、繭子は頑張っているんだろうなー、程度ということか？」

［吹雪］：「そんなところです」

［セフィル］：「心配するな、私の目から見ても繭子はしっかり取り組んでいるよ」

［吹雪］：「そうですか、ならよかったです」

エネルジコ（4）

［セフィル］：「……で？」
［吹雪］：「で？」
［セフィル］：「何だ？」
［吹雪］：「いや、学園長が聞いてきたんでしょう？」
［セフィル］：「何か言いたそうな顔をしていた気がしたからな」
［吹雪］：「何も考えてませんよ、別に」
［セフィル］：「そうか、じゃあ私がしゃべってもいいか？」
［吹雪］：「いや、別に許可を取らなくても」
［セフィル］：「優しいな、吹雪は」
［吹雪］：「普通の返答だと思いますけど」
［セフィル］：「そうか、じゃあ話させてもらおう。いるのか？」
［吹雪］：「へ？」
［セフィル］：「だから何だ？」
［吹雪］：「いや、だから何でもありませんってば」
［セフィル］：「ふむ、そうか？　じゃあ話を戻すが、いるのか？」
［吹雪］：「話が見えないんで、少し詳しく言っていただけますか？」
［セフィル］：「確かに、ちょっと端的すぎたか。じゃあ詳しく話すとしよう」
［フェルシア］：「はーい、吹雪くん後9周ね」
［舞羽］：「吹雪くん、ファイトー」
［繭子］：「ガンガンいっちゃえー、ふーちゃーん」
［カホラ］：「吹雪、ガンバ！」
［聖奈美］：「ほら、もっとペースを上げなさい！」
……。
［セフィル］：「――というわけだよ」
［吹雪］：「いやいや、話が見えてきませんよ」

［セフィル］：「吹雪は鈍感だな」
［吹雪］：「いや、鈍感じゃなかったとしても分かんないですよ。俺、探偵じゃないんですから」
［セフィル］：「じゃあ教えてやるとしよう。吹雪は、あの４人の中で気になってる子はいないのか？」
［吹雪］：「ぶっ！？」
［セフィル］：「おい、きちゃないぞ？　吹雪」
［吹雪］：「何故赤ちゃん言葉ですか？　それに変なこと言い出したのは学園長のほうでしょう」
［セフィル］：「ん？　何がだ？」
［吹雪］：「いや、そんな、気になってるとか……」
［セフィル］：「いたところでおかしいことじゃないじゃないか。あんなにかわいい女の子が周りにいるのに、気にならないわけはないだろう？」
［吹雪］：「そうかもしれませんけど……」
［セフィル］：「じゃあ、吹雪はあの４人は嫌いなのか？」
［吹雪］：「いや、極端にも程がありますよ、それは」
［セフィル］：「じゃあ好きなんだろう？」
［吹雪］：「いや、ですから……」
［セフィル］：「煮え切らない態度だなー」
［吹雪］：「だ、だって……」
［セフィル］：「冗談だよ、そんなに深く考えなくていい。ただ単純に、一緒にいて不快になるような子はいないだろう？」
［吹雪］：「それは、もちろんですよ」
［セフィル］：「なら、少し気になる子だっているはずじゃあないのか？」
［吹雪］：「……戻るんですか？　そこに」
［セフィル］：「だって、知りたいんだもん」
［吹雪］：「もんって、学園長……」
時たま飛び出す現代風の口調にはつい動揺してしまうな。

エネルジコ（5）

［セフィル］：「ちょっと考えてみるだけいいじゃないか？　頭の中を空にして、一番最初に浮かんだ人物」
［吹雪］：「それは、あの４人限定ですか？」
［セフィル］：「うん、モチロンだ」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「さあ、シンキングタイムを与えよう」
［吹雪］：「はあ、はあ……」
［セフィル］：「おい吹雪、息が荒れてるぞ？」
［吹雪］：「そりゃそうでしょう？　今、走ってるんですよ？　それに、ペース上がってるんですよ」
［セフィル］：「ああ、そういえばそうだな」
［吹雪］：「いや、有り得ないでしょう？　それは」
［セフィル］：「まあ、しばらく口を挟まないからしばし考えてみるといい」
［吹雪］：「絶対なんですか？　それは」
［セフィル］：「しなかったら停学にでもするか？」
［吹雪］：「重すぎますよ、それは……」
［セフィル］：「じゃあ、するしかないだろう」
何故そこまで強要するのか……。最初に浮かんだ人物、か。

・舞羽
・聖奈美
・繭子
・カホラ先輩

［セフィル］：「浮かんだか？」

［吹雪］：「まあ。でも、言うのは勘弁してください、恥ずかしいですから」
［セフィル］：「仕方ない、そこは汲み取ってあげるとしよう」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「……で？　気になってる人は？」
［吹雪］：「随分古典的なギャグですね……」
［セフィル］：「昔はウケていたんだがな、こういう典型的なものは」
［吹雪］：「あはは……」
［セフィル］：「さて、ここからは真面目に走るとしようか。息も上がってきてるみたいだしな」
学園長の会話に応じてたからなんだが、それは言うべきじゃないだろう。
［セフィル］：「よし、ペースアップだ」
［吹雪］：「は、はい……」
俺は意識してピッチを上げた。
……。
……。
……。

エネルジコ（6）

［セフィル］：「よし、じゃあ次の練習に移るとしようか」
［吹雪］：「……はあ、はあ」
［舞羽］：「だ、大丈夫？　吹雪くん」
［吹雪］：「は、はっは……ギリギリだな、うん」
後半のペースアップが予想以上に体に応えたようだ。
［カホラ］：「ペース配分を間違えたの？」
［吹雪］：「いや、ペースは学園長が握ってるんで、俺はそれに従って走りました」
［カホラ］：「んー、お母さん、いつも吹雪をこんなになるまで追い込んでるの？」
［セフィル］：「いや、今日は特別だな」
［カホラ］：「どうして？」
［セフィル］：「男子というのは、女子の前で良い所を見せたくなるものだろう？　それを密かに支えてあげようと思ったんだよ」
［カホラ］：「そ、それを言っちゃったら身も蓋もないわよ、お母さん……」
［セフィル］：「ふむ、やってしまったか？」
［カホラ］：「思い切りね」
［セフィル］：「すまないな、吹雪よ」
［吹雪］：「い、いえ……はあ、はあ……いい、メニューでしたよ……はあ、はあ……」
［セフィル］：「できた男だな、君は」
背中をパンパンと叩かれた。
［カホラ］：「お母さん、もう少し休ませてあげましょう？　吹雪、どう見てもまだやれそうにはないわ」
［セフィル］：「確かにそうだな、顔が死んでいる。ペースを上げた自覚はあるが、そんなに上がっていたか？」

［吹雪］：「そうですね……はあ、普段よりは早かったかもしれないです」
［セフィル］：「それはすまなかったな、次からはもう少し気を配るとしよう」
［舞羽］：「私、飲み物買ってくるよ。吹雪くん、何がいい？」
［吹雪］：「いいのか？」
［舞羽］：「うん、私はもうすっかり息も整ったから」
［セフィル］：「じゃあ、スポーツドリンク買ってきてくれ。種類は何でもいいから」
［舞羽］：「うん、分かった」
［繭子］：「あ、舞ちゃん、ワタシも行くよ～」
二人は小走りでグランドを翔けていった。
［聖奈美］：「学園長」
［セフィル］：「ん？　どうした？　聖奈美」
［聖奈美］：「この後は、何をする予定なんですか？」
［セフィル］：「この後は、吹雪の魔力増加を図るメニューをみんなに手伝ってもらう予定だ。吹雪はもう知っているな？」
［吹雪］：「はい」
［聖奈美］：「魔力、増加？」
［セフィル］：「今のランニングもその一環ではあるんだ。魔力を維持できるくらいのスタミナを付けるためのな。今度は、実際に魔法を放出して、吹雪の魔力を高めてやるんだ」
疑問を持った杠に、学園長は丁寧に内容を説明していく。
［セフィル］：「いい表現が思いつかないから、こんな例えになってしまうが、聖奈美たちにはこれから吹雪のサンドバックになってもらうわけだ」
［聖奈美］：「さ、サンドバックですか？」
確かに、俺の攻撃を一方的に受けるわけだから間違ってはいない。
［セフィル］：「まあ、ボコボコになるのはバリアだから、間違っても直撃することはない。いくら吹雪の魔力が凄まじくても、５人

分のバリアを破ることはできないだろう」
［吹雪］：「……破る頃には多分死にかけてますね」
［聖奈美］：「なるほど」
［セフィル］：「聖奈美もやりたいのか？　ひょっとして」
［聖奈美］：「え？　何をですか？」
［セフィル］：「吹雪サイドの練習だが」
［聖奈美］：「え？　どうして？　やりたそうな顔してました？」
［セフィル］：「いや、そういうわけではないが。やけに詳しく聞くから、一緒に吹雪と練習したいのかと思ってな」
［聖奈美］：「そ、そんなことはないですよ。第一、あたしが練習しても意味がないじゃないですか。それに、大久保となんて……」
そこまで言って杠は言葉を止めた。
［聖奈美］：「とにかく、大丈夫ですから」
［カホラ］：「……残念ね、吹雪」
［吹雪］：「な、何がですか？」
［カホラ］：「あんなに冷たく言われちゃって」
［吹雪］：「別に気にしませんよ、あれがあいつの性格ですから。氷魔法の使い手ですし」
［カホラ］：「ふふ、上手いこと言うわね」
［聖奈美］：「そこっ！　聞こえてますよ！？」

エネルジコ（6）（後書き）

地震が続きますが、みんなで精一杯頑張っていきましょう！！

エネルジコ（7）

［フェルシア］：「まあまあ聖奈美ちゃん、そんなに照れないで」
［聖奈美］：「何であたしが照れるんですか！？」
［フェルシア］：「自分のことなんだから、分かってるはずでしょう？」
［聖奈美］：「知りませんよ、そんなこと」
不機嫌そうに杠は顔を背けた。……この話は流したほうがよさそうだな。
［吹雪］：「そういえば、学園長」
［セフィル］：「どうした？」
［吹雪］：「練習始めてから一週間くらい経ちますけど、俺の魔力って少しは高まったんですかね？」
［セフィル］：「ふむ、確かにあの日から魔力の状況を確かめてはいなかったな。よし、じゃあ今から見てやろう」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「１００円でいいぞ？」
［吹雪］：「か、金がいるんですか？」
［カホラ］：「お母さん？」
［セフィル］：「冗談だよ冗談、よし、じゃあ目を閉じてリラックスするんだ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「……」
［吹雪］：「……」
しばらくの沈黙。
［セフィル］：「うん、なるほど。いいぞ？　目を開けて」
［吹雪］：「どんなもんでした？」
［セフィル］：「うん、大体８２ってところか。以前より７ほど上昇しているな」

［吹雪］：「あ、本当ですか？」
［セフィル］：「日々の鍛錬の成果が徐々に現れてるな」
［吹雪］：「よかったー」
［セフィル］：「何だ？　不安だったのか？」
［吹雪］：「そりゃあ、これだけやって何にも伸びてないって言ったら結構ショック大きいですからね」
［カホラ］：「吹雪の場合、ノーマルな状態の魔力が他の人より秀でてるからあまり伸びてるように見えないって可能性もあるわよね」
［セフィル］：「確かに、スタートの値が高かったからな」
［カホラ］：「これが翔とかだったら、きっととんでもない伸び率を誇っていたかもしれないわよ」
［聖奈美］：「でも、元々あいつに魔力なんてほとんどないですよ」
［カホラ］：「例えばの話よ、本気で話してはないわ」
［吹雪］：「……とにかく、上昇してよかったです」
［セフィル］：「その調子で練習を続けていかなくてはな。目標はあくまで１００だからして」
［吹雪］：「はい、努力します」
［聖奈美］：「……」
［カホラ］：「どうしたの？　聖奈美」
［聖奈美］：「な、何でもないです」
［繭子］：「お待たせ～、ふーちゃん、買ってきたよ～」
ジュースを抱えて二人が戻ってきた。

エネルジコ（7）（後書き）

みなさん、余震には十分注意してくださいね（T＿T）

……。

［吹雪］：「――よし、復活」

［セフィル］：「疲れは取れたか？」

［吹雪］：「はい、大分。もう一頑張りいけます」

［セフィル］：「その意気だ。じゃあ、次の練習に移ろう。女子たち、ちょっとこっちに来てくれ。改めて何をするのか説明する」

わらわらと学園長の前に集まる。

［セフィル］：「今から君たちに、吹雪の持つ魔力をを開放するためのバリアを詠唱してほしいんだが、みんなはそれぞれどんなバリアを使うことができるんだ？　ああ、フェルは答えなくていいぞ？　知ってるからな」

［舞羽］：「私は、風系のものであれば多少できます」

［カホラ］：「特にこれといって得意なものはないんだけど、強いて言うなら雷系統のものかしら」

［聖奈美］：「あたしはもちろん氷系のです」

［繭子］：「ワタシはあんまりバリアは得意じゃなくて、強化系のものならできるんですけど～」

［セフィル］：「ふむ、なるほど。――よし、分かった。これならいけるはずだ」

［舞羽］：「いけるって、何がですか？」

［セフィル］：「もちろんバリアさ、しかもとても耐性の高いものがな」

［舞羽］：「そうなんですか？」

［セフィル］：「喜べ吹雪、前以上に全力で魔力を打ち込めるぞ」

［吹雪］：「え？　は、はい」

［セフィル］：「じゃあ、３人はフェルと一緒に自分の得意なバリアの詠唱を、繭子は私と一緒に一旦こっちに来てくれ」

［繭子］：「はーい」
［フェルシア］：「じゃあ、やりましょう」
［三人］：「はい」
［舞羽］：「――エル・エルフュリス、風の精霊よ、我を守る盾となり――エンブレイス！」
［カホラ］：「――エル・エルフィシンデス、雷よ、我を覆う強靭な壁となれ――ライトニアプロテクト！」
［聖奈美］：「――エル・エルベンス、氷の精霊よ、我を包む柔らかな雪となれ――クリスタルパウダー！」
［フェルシア］：「――エル・エリアーデュス・精霊よ、我を守る盾となり――マジックバリア！」
それぞれ詠唱された魔法は、４人の目の前に現れ、強固そうな壁となっている。
［セフィル］：「よし、じゃあ繭子、出番だ」
［繭子］：「はーい」
今度はマユ姉が目を閉じ、詠唱を始める。
［繭子］：「――エル・エルピアニス、精霊よ、我の力を皆の力に――ディヴァインエイダー！」
――詠唱とともに、周囲がキラリと輝き、そして元の状態へと戻った。
［セフィル］：「よし、仕上げは私が――。――エル・エルフィリード・リーリアス、光の精よ、紡がれし力、今ここに一つと成りし――マジカルマージ！」
学園長の詠唱が終わると、周囲の輝きが一層増した。
しばらくすると――。
［吹雪］：「おお、すげー」
口に出さずにはいられない、俺の前には、オーロラのように輝く美しい光景が広がっていた。まだ昼間だというのに、この鮮やかさ、これこそ魔法の力というべきか。
［セフィル］：「吹雪？　聞こえるか？」

［吹雪］：「はい、聞こえます」
［セフィル］：「今、みんなが唱えてくれた魔法を私の魔法で融合させた。おそらくこれ以上ないくらい強固に仕上がっていると思う。そっちから見てどんな感じだ？」
［吹雪］：「いや、何ていうか、とりあえずすごい綺麗です」
［繭子］：「え？　ワタシが？」
言ってねえ、一言も。
［セフィル］：「私たちはこちら側でサポートに入る。とりあえず、何でもいいから一度魔法を唱えてバリアに当ててみてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
じゃあ、最初は……。
［吹雪］：「――エル・エルティクス、大地の精霊よ、我に力を与えたまえ。――スティンガー！」
焦点をバリアに定め、解き放つ。
……。
［吹雪］：「おおっ！」
また声を上げてしまった。俺の放った魔法は完全にバリアの中に飲み込まれていった。バリアに支障は全くなく、俺が放った魔法なんて元からなかったかのようにどっしりと構えている。
［セフィル］：「どうだ？　感想は」
［吹雪］：「すごい吸収力ですね、全くビクともしなくて。これなら何にも気にせず魔法を唱えられます」
［セフィル］：「それはよかった。じゃあ、練習を始めよう。私たちはしばらくここで待機している。何かあったら声をかけてくれ。全員でサポートに回るからな」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「ああ、分かってると思うが、スパークルは絶対にダメだからな？　みんなが吹き飛んでしまうから」
［吹雪］：「大丈夫です、ご心配なく」
［セフィル］：「よし、では、練習始め」

俺は早速魔法の詠唱にかかった。

エネルジコ（9）

……。

……。

……。

［吹雪］：「はあ……はあ……ぜー、ぜー」

［セフィル］：「吹雪、大丈夫か？」

［吹雪］：「うー、ちょっと、ヤバイかもしれません」

かれこれ３０分程魔法を唱え続けただろうか、正直立ってるのもキツいくらいになってしまった。気にしないで撃てるからって聞いて調子に乗りすぎただろうか？

出し切ってはいるから確実に練習にはなってると思うんだけど……。

［セフィル］：「どうする？　もうやめにするか？」

［吹雪］：「そう、ですね……」

……。

よし、じゃあ――。

［吹雪］：「最後に一発だけ撃っていいですか？　それで終わりにします」

［セフィル］：「そうか、分かった」

最後だ、バリアを壊すくらいの気持ちで撃ち込むとしよう。こんだけやってビクともしないから無理だとは思うが、思わないより思ったほうがいいに決まってる。

よし、行こう。精神を集中させ、魔法詠唱の準備に入る。

――そういえば、あのバリアは風、氷、雷、無の属性が混ざり合ったバリアなんだよな。あの防壁に相殺されることのない魔法を撃ち込むと、どうなるんだろう？　今までは何にも意識することなく、自分の持ち技を力の限り撃ち込んでいたけども……。

最後だ、試しにやってみよう。

［吹雪］：「――エル・エルファンディウス、炎の精霊よ、我に力

を、――クロスフレイム！」
逆った炎は十字の形でバリアにぶち当たった。
……うん、さっきよりは少し吸収されるのが遅い気がしたが、やっぱり４重にされて作られたバリアはそんな簡単には割れないよな。
［吹雪］：「はあ……終わった……」
その場に俺は体を投げ出した。
［カホラ］：「お疲れ様、吹雪」
バリアを作ってくれた女子が俺の方にやってきた。
［繭子］：「ふーちゃん、冬なのに汗びっしょりだよー？」
［吹雪］：「そりゃあ、全力でやれば汗くらいでるわ……」
［舞羽］：「はい、これで汗拭いて」
舞羽はポケットからハンカチを出し、俺に貸してくれた。
［舞羽］：「悪い、サンキュー」
顔を伝ってくる汗を、ハンカチが吸収してくれる。
［吹雪］：「はあ、全部出し切ったぜ」
［セフィル］：「そのようだな、精も根も尽きた顔をしている」
［吹雪］：「残念ながら、もう余力はないです」
［セフィル］：「ふむ……聖奈美、今なら吹雪にリベンジするチャンスじゃないか？」
［聖奈美］：「えっ！？」
［セフィル］：「今吹雪は魔法を撃てる状況じゃない。余力がたっぷり残っている今ならコテンパンにできるんじゃないか？」
［聖奈美］：「コテンパン、コロシアムのリベンジ……」
［吹雪］：「待て待て待て、何でそこで悩むんだお前は！？」
［聖奈美］：「だ、だって……」
［吹雪］：「そんなので俺をボコボコにして嬉しいのかお前は。罪悪感が残るんじゃないのか？」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「え？　残らないの？　ひょっとして」
［聖奈美］：「勝てば官軍って言葉があるくらいだからね」

……マジで？

［吹雪］：「いや、今回は勘弁していただけないか？　今お前に本気でこられたら、俺は間違いなく死んじまうって」

［聖奈美］：「……冗談に決まってるでしょう？　あたしを誰だと思ってるの？　ちょっと乗ってみただけよ」

［吹雪］：「ほ、本当か？」

［聖奈美］：「当たり前じゃない？　そんなので勝ったところで嬉しくないもの。ストレスは発散できるかもしれないけど」

［吹雪］：「……お前の中の俺って、そんなにムカつく奴なのか？」

［聖奈美］：「さあ、どうでしょうね？」

［吹雪］：「……学園長も、滅多なこと言わないでくださいよ。ドキっとするじゃないですか？」

［セフィル］：「ギリギリの状態で奮闘する吹雪の姿は見物だと思うんだがな……」

［吹雪］：「ただサンドバックにされておしまいですよ……」

［セフィル］：「残念だ……」

どうしてそこで悲しい顔をするのだろうか？

エネルジコ（9）（後書き）

まだまだ長引きそうですが、負けずにアップしていきたいです！！

エネルジコ（１０）

［セフィル］：「とりあえず、よく頑張った。今日一日でかなりの力が付いたと思うぞ？」
［吹雪］：「そうですか？」
［セフィル］：「ああ、最後の一撃はなかなかだった。後ろで見ていたが、かなりの衝撃が走っていたぞ」
［吹雪］：「そうですか？　前から撃ち込んでた限りは、全くびくともしてませんでしたけど」
［セフィル］：「今回のバリアは特別仕様だからな。そう簡単に壊されては女子たちも悔しいだろう」
確かに、女子の力が全て合わさって作られたものだしな。
［吹雪］：「みんなのおかげでいい練習になりました」
［セフィル］：「当然のことをしたまでだ。だろう？　みんな」
嫌な顔せずにうなずいてくれた。
［繭子］：「ふーちゃんのためなら、吹雪の中でも飛び込むよ～」
［吹雪］：「……つまらないこと言ってるんじゃねぇよ」
［舞羽］：「あははは」
［セフィル］：「今日はこんなところか、みんな、ご苦労だった。今日の練習はこれで終わりだ。帰ってゆっくり休んで疲れを取るといい。明日に休みを挟んで月曜日から、またそれぞれの練習を再開する。そして、１５日からは予定どおり、校内合宿を行うからして、それぞれ準備を忘れないように。日にちが近づくにつれ、練習内容もハードになっていくが、みんなで力を合わせて乗り越えていこう」
［全員］：「はい」
［セフィル］：「それじゃあ、本日はこれで解散」
［繭子］：「ふーちゃん、着替えてくるからちょっと待ってて～」
［吹雪］：「へいへい」
［舞羽］：「吹雪くんは着替えないの？」

［吹雪］：「今日は制服持ってきてないんだ。だからこのまま帰る」
［舞羽］：「そっか、じゃあちょっと待っててね」
４人は校舎に向かって歩いていく。
［セフィル］：「……吹雪」
［吹雪］：「何ですか？」
［セフィル］：「チャンスだぞ？　着替え姿を覗く」
［吹雪］：「だから行きませんってば！」
何でそんなに俺に覗きをさせたいの！？

エネルジコ（１０）（後書き）

次回、選択肢が入ります。好きな子を選んでいてください。

カランド（1）（前書き）

12月13日（月曜日）

・バーバロ
・部室
・教室
・職員室

カランド（1）

・バーバロ

［場所：道路］

［吹雪］：「――ホントに、舞羽って奴は」
［舞羽］：「え？　わ、私!？」
［吹雪］：「ん？　どうした？　舞羽？」
［舞羽］：「え？　今、私の名前言ったよね？」
［吹雪］：「いや、俺は舞羽って奴はって言っただけだぜ？」
［舞羽］：「そ、それ私の名前なんだけど……」
［吹雪］：「ああ、そういえばそうだったな」
［舞羽］：「ちょっと、無理があるんじゃないかな、その言い草は……」
［吹雪］：「で？　何か言うことでもあるのか？」
［舞羽］：「こっちの台詞だよー、それは。私何か悪いことした？」
［吹雪］：「いんや、何も」
［舞羽］：「じゃあ、何でそんな文句ありそうな言葉を？」
［吹雪］：「これ言えば舞羽が困るんじゃないかなーって思ってな」
［舞羽］：「こ、困らせたかったの？　何で？」
［吹雪］：「理由はないぞ、別に」
［舞羽］：「あ、そ、そうなんだ……」
［吹雪］：「俺としてはもう少し慌ててほしかったんだがな～」
［舞羽］：「ご、ごめんなさい……って何で私が謝る必要があるのー？　むしろ私が謝ってほしいくらいだよー」
［吹雪］：「だって、舞羽の驚く顔って、おもしろいからよ」
［舞羽］：「吹雪くん、悪趣味……」
［吹雪］：「旧知の仲だからこそできるからかいじゃないか？　普

通の友達とかだったらこんなことできないぞ？　あんたって最低、バコンって殴られて終わりだ」

［舞羽］：「そ、そうかな？」

［吹雪］：「おそらく。その点、舞羽は温和だからそんなバイオレンスは起こさない」

［舞羽］：「傷つくのは、嫌だからね」

［吹雪］：「だから、安心してからかうことができる」

［舞羽］：「ちょっと、それはどう考えてもおかしいってば！？」

［吹雪］：「まあまあ、深く考えたら負けだぞ？　舞羽」

［舞羽］：「うー、考えさせてるのは吹雪くんじゃないのー」

［吹雪］：「大丈夫だ、全く問題ない」

［舞羽］：「大アリの気がするんだけど……」

［吹雪］：「まあまあ、気にしないでいこうぜ」

［舞羽］：「……納得いかないよ……」

［吹雪］：「それよりほら、目的の場所に向かおうぜ？　頼まれてるんだろう？」

［舞羽］：「う、うん。そうだね……」

［吹雪］：「どうした？　何か顔が引きつってるぞ？」

［舞羽］：「あ、あえて何も言わないことにするよ……」

［吹雪］：「そうか、ならいいか」

［舞羽］：「あは、あははは……」

……。

……。

カランド（2）

［場所：スーパー］

［吹雪］：「随分混んでたな、今日のスーパーは」
［舞羽］：「ちょうどタイムセールの時間だったからね。お客だって安く買えたほうが良いに決まってるし」
［吹雪］：「そりゃそうだ。目的の品はちゃんと買えたか？」
［舞羽］：「うん、バッチリ」
マイバックを俺の目線に持ってくる。
［吹雪］：「確か、パン粉買いに来たんだよな？」
［舞羽］：「うん、今日はホタテの香草焼きを作るから」
［吹雪］：「……メチャクチャ上手そうな献立だな」
［舞羽］：「そう？　吹雪くん家は今日は何を食べるの？」
［吹雪］：「俺の家？　今日は炒め物だな。肉と野菜を入れて適当に」
［舞羽］：「……よかったらおすそ分け持っていく？」
［吹雪］：「いやいや、大丈夫だよ。ボリュームたっぷりに作るから。米も4合炊くし」
［舞羽］：「遠慮ならしなくていいよ？」
［吹雪］：「してないしてない、本当に死ぬほど食いたくなったらお願いするよ」
［舞羽］：「そう？」
［吹雪］：「おう、いつもサンキューな」
頭をぽんぽん撫でてやると、舞羽は恥ずかしそうにはにかんでいた。
さて、今日はこれでやることは全て終了したわけだが……。まだ夕飯を用意するには早い過ぎるな。
［吹雪］：「舞羽、この後の予定は？」
［舞羽］：「夕ご飯の準備をするくらいだよ」

［吹雪］：「じゃあ、特にこれといった用事はないんだな？」
［舞羽］：「うん」
そうか、じゃあ――。
［吹雪］：「寄って行こうぜ？」
［舞羽］：「え？　何処に？」
［吹雪］：「あそこだよ、あそこ」
俺は少々先にある喫茶店を指差した。
［舞羽］：「え？　もしかしてバーバロ？」
［吹雪］：「何だ、舞羽も知ってるのか？」
［舞羽］：「も、もちろん……むしろ知りすぎてるくらいで……」
［吹雪］：「お前のバイト先だもんな」
［舞羽］：「……この会話って必要あったかな？」
［吹雪］：「なかったかもな」
［舞羽］：「あはは……」
［吹雪］：「このまま帰っても暇だからな。ちょっと一服してから帰ってもバチは当たんないんじゃないか？」
［舞羽］：「うん、そうだね……」
［吹雪］：「やっぱり自分のバイト先っていうのはイヤか？」
［舞羽］：「そういうわけじゃないんだけど……何か恥ずかしいというか……」
［吹雪］：「いい機会じゃないか？　自分の店が提供している味がどれ程のものなのかを知ることができる」
［舞羽］：「確かに、そうだね」
［吹雪］：「まあ、直す必要がないくらいにいい味出てるけどな、バーバロのメニューは」
［舞羽］：「いつもご贔屓ありがとうございます」
［吹雪］：「本当のことだぞ、俺はバーバロのファンだからな」
この島一番の喫茶店と言ってもいい。
［吹雪］：「だからよ、寄ってってダメか？　バーバロの軽食が俺を呼んでるのよ」

［舞羽］：「寄る分には全然構わないんだけど、その、私……」
申し訳なさそうに財布を見せてくる。
［吹雪］：「うっかりしちゃって、買い物分のお金しか持ってきてなくて。入っても水しか飲めないんだ」
［舞羽］：「何だそんなことか、なら俺が奢ってやるよ」
［吹雪］：「え！？　え～？」
［舞羽］：「何だ、そんなにびっくりして。そんなに俺は気持ち悪いか？」
［吹雪］：「ひ、一言も言ってないよそんなこと」
［舞羽］：「ならいいじゃねぇか。遠慮すんな」
［舞羽］：「でも、悪いよ……」
［吹雪］：「何戯言言ってやがる」
［舞羽］：「ざ、戯言？」
［吹雪］：「こんなんが悪いって言ったら、週に何度か夕飯作り手伝ってもらってる俺なんか麻薬売りさばいてるマフィア並みに悪い奴だぞ？　大人しく奢らせろよ」
［舞羽］：「本当に？」
［吹雪］：「俺が行きたいって言ったんだ。付き合ってくれたお礼って考えな。それだったら納得だろう？」
［舞羽］：「――うん、ありがとう」
［吹雪］：「よし、じゃあ行こうぜ」
俺たちはバーバロに向かった。
……。

カランド（3）

［場所：バーバロ］

カランコロンカラン。

［愛海］：「はーい、いらっしゃいませー。バーバロへようこ――って大久保くんと舞羽じゃない。あらあら～、なになに？　デート？　デートなの？」

［吹雪］：「……舞羽」

［舞羽］：「何？　吹雪くん？」

［愛海］：「さっき、若干バーバロに行くことを渋ってた理由に、これも少々含まれてたのか？」

［舞羽］：「う、うん。ひょっとしたら違ったかもって思ったんだけど、やっぱり間違いじゃなかったみたい」

［吹雪］：「なるほど……」

［愛海］：「どうしたの～？　何か人の顔見て露骨に嫌そうな顔して……失礼よ？」

［吹雪］：「いや、何でもないぞ」

［愛海］：「本当？　私には“げ、日野がいるのかよ。あー、また俺たちのことからかって楽しむ気なんだろうなー、あーやだやだ”って顔に見えたわよ？」

［吹雪］：「む……」

［愛海］：「やっぱり図星ね？」

［吹雪］：「……そんなことは、ないよな？」

［愛海］：「あるね、絶対。ふふ、じゃあ要望に答えて、イジリ倒してあげようかしら？」

［吹雪］：「よし、舞羽。店変えようぜ？」

［愛海］：「あーん、待ってよ～、冗談、冗談だってばー、カンバーック！」

［舞羽］：「ひゃああっ！？　ちょっと愛海！　どさくさに紛れて何処掴んでるのよ～！？」
［愛海］：「え？　わき腹だけど？」
［舞羽］：「や、やめてー！　あははは、くすぐったいから～」
［吹雪］：「やめんかー！　ていっ！」
ビシッ。
［愛海］：「アウチ！　やるわね、大久保くん」
［吹雪］：「店員はやかましい客を宥めるのが仕事だろう。お前がやかましくしてどうすんだよ」
［愛海］：「大丈夫よ～、今日は客が少ないから～」
［吹雪］：「そういう問題じゃねぇだろ……」
［愛海］：「だってー、つまんなかったんだものー。客もあんまり来ないし、同級生のバイトの子もいないしさー」
［吹雪］：「だからって、俺たちで暇つぶしをするな。一応俺たちも客なんだぞ」
［愛海］：「そうね、デート中だもんね」
［舞羽］：「違うって言ってるでしょう！？」
［吹雪］：「そうだ、俺たちは買い物帰りだ」
［愛海］：「あら、ホントだ。じゃあ買い物デートってことかしら？」
［吹雪］：「いい加減デートってワードから離れてくれ」
［愛海］：「あら大久保くん、デートって言葉の意味は日付とか待ち合わせって意味もあるのよ～？　二人は買い物に行くためにデートしてきたんでしょ～？　私は男女間で蜜月な時間を過ごすほうのデートって意味で使ってた覚えはないんだけどね～」
［吹雪］：「……屁理屈だ、そんなのは」
［愛海］：「んふふ、初々しいわね、二人とも」
［舞羽］：「い、いいから席に案内してよ愛海。じゃないと、ホントに帰るから」
［愛海］：「はいはい～、大久保様、須藤様、こちらにどうぞ～」

［愛海］：「お決まりになりましたらボタンのほうを押してください、お伺いしまーす。――んひひ」
変な笑いを残して日野は戻っていった。
［吹雪］：「はあ……」
［舞羽］：「ごめんね、吹雪くん」
［吹雪］：「何で舞羽が謝るんだよ？」
［舞羽］：「だって、愛海は私の友達だから」
［吹雪］：「俺だって一応そう思ってるぞ？」
［舞羽］：「でも、私がいるからああやって吹雪くんのことも弄ろうとして」
［愛海］：「お調子者だからな、あいつは」
翔と気が合うのも当然ってわけだ。
［吹雪］：「人それぞれだからな。個性が強いんだろうさ、あいつは」
［舞羽］：「だね」
［吹雪］：「仕事中もあんな感じなのか？　日野は」
［舞羽］：「ううん、普通のお客さんにはちゃんと接してるよ、ほら」
舞羽は日野を指差す。
［愛海］：「はい、アップルティーお一つですね、少々お待ちください。お水のお変わりはいかがでしょうか？　失礼します。あ、お手洗いは向こうのほうにございますのでー」
［吹雪］：「ふむ、確かにしっかりこなしてるな」
［舞羽］：「仕事だからね、公私混同はしないようにしてるのかも。……私たちを除いて、ね」
［吹雪］：「仕事の時くらいは、俺たちも普通の客として迎え入れてほしいけどな」

［舞羽］：「今度言っておくよ」
［吹雪］：「ま、いいか。それより、何にするよ？　メニューは」
［舞羽］：「うーん、じゃあ――」
……。

カランド（5）

［吹雪］：「はあ、うまい」
［舞羽］：「本当にありがとね、吹雪くん」
［吹雪］：「だから気にするなって、それ以上言うと怒るぞ？」
［舞羽］：「え、えー？」
俺はミルクレープとアイスコーヒー、舞羽はカスタードプリンとカフェオレを頼んだ。
［吹雪］：「どうだ？　バーバロの料理のお味は」
［舞羽］：「うん、美味しいですね」
［吹雪］：「そうだろ？　うまいんだよ、バーバロの料理は。俺は根っからのバーバロファンだからな」
［舞羽］：「重ね重ねありがとうございます。これからもよろしくお願いします」
［吹雪］：「当然だ、何度でも通うぜ」
お金が続く限りな。
［吹雪］：「でも、初めてじゃないよな？　バーバロの料理を食ったのは」
［舞羽］：「うん、昔はお父さんとお母さんと行ったりしたよ。今は、来ないでって行ってるから来ないけどね」
［吹雪］：「羞恥心？」
［舞羽］：「うん、やっぱり働いてる姿を見られるのは恥ずかしいよ。特に両親に見られるのはね」
［吹雪］：「まあ、その気持ちは分かるな。でもよ、両親に見られるの恥ずかしいんだったら、俺に見られるのだって恥ずかしいんじゃないのか？」
［舞羽］：「うーん、恥ずかしくないって言い切ることはできないんだけど、両親に見られる程じゃないんだよね」
［吹雪］：「それは何故？」

［舞羽］：「何だろう、うーん。やっぱり愛海とかと違ってあんまりからかったりしないからかな。それに、もう週に1回くらいは見られてるわけだから、今更思うところはあまりないのかもしれない」
［吹雪］：「見られることになれたってことか？」
［舞羽］：「そうなるのかな」
［吹雪］：「なるほどな。でもよ、バーバロの制服ってそこまで派手派手じゃないだろ？　そんなにあの制服着るのって恥ずかしいか？」
要所要所にかわいらしいリボンはあしらってあるが、メイドカフェのようなものとは程遠い代物だ。
［舞羽］：「とっても着やすいことは私も実感してるんだけど、何ていうのかな、着ることにすでに羞恥心を持っちゃってるというか、柄じゃないというか……」
［吹雪］：「……言わんとしてることは、何となく分かる気がする」
［舞羽］：「今はさすがに慣れたから、何とも思わないけど、バイト初日とかは結構恥ずかしかったかも」
［吹雪］：「甘酸っぱい思い出だな」
でも、どうして慣れるのに時間がかかったか。それはおそらく、バーバロの店員の中で舞羽は一際目を引く存在だったからだろう。
幼馴染の俺から見ても、舞羽は顔立ちが整ってるからな。美人さんが歩いてたらそりゃ目で追っちゃうだろうよ。言うと全否定してくるだろうから言わないが。
［吹雪］：「とりあえず、制服はバッチリ似合ってるから、これからも見せてくれよ」
［舞羽］：「……吹雪くん、そこだけ聞くと何だか変な風に聞こえるよ」
［吹雪］：「そっちのほうに想像した舞羽のほうがエロイと思うぞ俺は。俺は別にそんな意味で言ったわけじゃないからな」
［舞羽］：「うわわっ！　巧妙なトラップ？」
［吹雪］：「いや、お前が勝手に自爆しただけだ」

［舞羽］：「うう……恥ずかしい……」

――今日もバーバロの料理は絶品だった。

カランド（5）（後書き）

次回は選択肢・部室のお話です。

カランド（6）

・部室

［場所：部室］

［吹雪］：「確かここらへんに……」

探し物だ。以前完成したマジックプラネタリウムを学園のイベントに出展するために、その出展申請書を提出しなければいけないんだ。今はみんな練習をしなければいけないから部活動は行っていない。練習が忙しくて、申請書を出すことをすっかり忘れてしまった。随分前に渡されたから何処にしまったか……。ここのボックスに入れたと思ったんだけどな……。

ガサゴソ、ガサゴソ……。

［カホラ］：「あら？　吹雪……ふふ」

［吹雪］：「んー、見つからねぇな。あれ？　しまったのって俺だよな。ここに入れた記憶しかないのに……何でないんだ？」

［カホラ］：「そーっと……」

［吹雪］：「くそー、ないとなるとマユ姉にもう1枚もらうか。余ってるかな……いやでも絶対あるはずなんだけどな。もう少し探してみるか。ひょっとしたらこっちのほうに入ってたりしないか？」

［カホラ］：「――ふーぶき！」

［吹雪］：「おわあああああっ！？」

ガンッ。

［吹雪］：「お、おおおぉ……」

後ろから突如聞こえた声に、俺は驚き立ち上がり机に頭を強打してしまった。

［吹雪］：「い、いてー……」

［カホラ］：「あー、大丈夫？　吹雪」

［吹雪］：「あ、先輩、こんにちは」
［カホラ］：「こんにちは。そのー、すっごい勢いで打ち付けたように見えたけど」
［吹雪］：「はは、ちょっとびっくりしてしまって」
［カホラ］：「ごめんなさいね、こんなことになるとは思わなくて……」
申し訳なさそうに両手を胸の前に合わせている。
［吹雪］：「いやいや、お気になさらず。しかし、全く音がしなかったですね、魔法でも使ったんですか？」
［カホラ］：「ううん、使ってないわよ。ただ抜き足で忍び寄っただけ」
［吹雪］：「さすがですね、感服です」
［カホラ］：「普通はここでやめてくださいとか言うところなのに、逆に褒められちゃうなんて……こういう場合どう対応すればいいのかしら」
［吹雪］：「そうだ、先輩はどうして部室に？」
［カホラ］：「え？　ああ、私は自習をしようと思ってきたの。図書室がちょっと混んでてね」
［吹雪］：「自習？　先輩はもう進学先が決まってるんじゃ」
［カホラ］：「だからって勉強しなくていいってわけはないでしょう？　人生死ぬまで勉強だからね」
［吹雪］：「なるほど、さすがです」
［カホラ］：「いえいえ、ただの趣味みたいなものだから」
趣味が勉強って時点で相当すごいと思うんだけどな……。
［カホラ］：「吹雪は、見たところ探し物のようね」
［吹雪］：「はい、申請書が見つからなくて」
［カホラ］：「あれよね？　以前完成したプラネタリウムの」
［吹雪］：「そうです、そうです」
［カホラ］：「あれを出さないと出場できないんでしょう」
［吹雪］：「はい、多分職員室行けば余りがあるとは思うんですけ

ど、絶対部室に閉まった記憶があるんで」
［カホラ］：「見つけないと気が済まないと？」
［吹雪］：「そうですね、はい」
［カホラ］：「いいわ、一緒に探しましょう」
［吹雪］：「え？　悪いですよ？」
［カホラ］：「気にしなくていいわよ。同じ部の仲間でしょ？　それに、私のせいで頭を強打させちゃったしね」
［吹雪］：「別に俺怒ってませんよ？」
［カホラ］：「そうかもしれないけど、できれば役に立ちたいかなーって。ほら、私は趣味の時間を過ごすために来たわけだから。言うなれば暇人ってわけ」
［吹雪］：「んー、そういうことならお願いできますか？」
［カホラ］：「モチロンよ」
素敵な戦力が加わってくれた。
［カホラ］：「で、どこにしまった記憶があるの？」
［吹雪］：「確かここのボックスの中に入れたと思うんですけど」
［カホラ］：「ちょっとゴチャゴチャしてるわね」
［吹雪］：「整理してたはずなんですけど、久々に来たら散らかっちゃってて」
日野か翔あたりの仕業か？
［吹雪］：「でも多分、ここ近辺にあるはずです」
［カホラ］：「そう。なら、私はこっちを探してみるわね」
［吹雪］：「あ、お願いします」
二手に別れて捜索を再開する。

カランド（7）

……。

［カホラ］：「うーん、ないわねー」

［吹雪］：「おっかしいなー」

捨てたということは絶対にない。おぼろげではあるが記憶は残っている。

［カホラ］：「用紙の形状とかって覚えてるかしら？」

［吹雪］：「形状は、極普通のものです。ホームルームで配られるような感じの」

［カホラ］：「じゃあ、これと言って特徴もないのね」

［吹雪］：「はい、くそー、こんなことになるなら自分の家に保管しとけばよかった」

［カホラ］：「まだ無くしたって決まったわけじゃないでしょ？　それに、職員室に行けばもらえるんだし、そこまで悔しがらなくてもいいことじゃない？」

［吹雪］：「そうですね」

［カホラ］：「他の場所は？　ひょっとしたらこっちに入れたとかって記憶はない？」

［吹雪］：「うーん、基本的に部に配られる用紙はここにしまうようにしてるんですよね。後何処かに保管するってなると……準備室くらいですかね？」

［カホラ］：「準備室ね、行ってみる？」

［吹雪］：「そうですね、多分ないと思いますけど」

［カホラ］：「でも、ひょっとしたらってことあるでしょう？　探してみるに越したことはないわ」

［吹雪］：「ですね、行ってみましょう」

俺たちはすぐ隣の準備室に移動する。

……。

［吹雪］：「そこに、色々なプリントが入ってますから、あるとしたらそれに混じって、ですね」
［カホラ］：「そう。じゃあ、手分けして探しましょう」
［吹雪］：「はい」
俺たちはゴソゴソとボックスの中を漁る。
［カホラ］：「何だか、私たちの部活と関係ないものもたくさん入ってるわね」
［吹雪］：「まあ、準備室は隣の部と共同で使わないといけないですから。そっちの部の用紙が混ざってるんでしょう」
［カホラ］：「いらないのなら捨てればいいのに、どうせ使わないでしょう？　こんなの。去年の部活会議の日程表とか」
［吹雪］：「確かに、不必要な臭いがプンプンしますね」
［カホラ］：「この際、いらないものは捨てちゃいましょうか？　研究部のだけでも、片付ければ準備室の収納にもなるでしょう」
［吹雪］：「そうですね」
綺麗にしておくに越したことはない。

カランド（8）

……。

［カホラ］：「半分くらいみたけど、出てこないわね」

［吹雪］：「はあ、やっぱりないかー」

こんなはずじゃなかったんだけどなー。

［カホラ］：「しょうがないわ、こういうこともあるでしょう」

次は気をつけないとな。

［カホラ］：「一旦ゴミを捨てましょうか？　吹雪、ゴミ箱持ってきてもらえるかしら？」

［吹雪］：「了解です」

俺は部室に戻り、ゴミ箱を取りに行く。

［カホラ］：「ありゃ、何だよ、まんぱんじゃねぇか」

ここの掃除当番、ゴミ捨てに行くのサボりやがったな。これじゃ不必要な用紙は入り切らないぞ。

［吹雪］：「うーん……」

はあ、ここで悩んでても解決には結びつかないよな。この状況を変えられるのはただ一人。そう、俺だ。

［吹雪］：「行くしかねぇか」

俺はゴミ袋を焼却炉に持っていくことにした。

……。

はあ、次はちゃんと捨てに行ってほしいもんだ。さて、ちょっと遅れてしまったが、準備室に行こう。

［カホラ］：「ちょ、ちょっと？　吹雪？　これは何なの～？」

［吹雪］：「え？　何ですか？」

［カホラ］：「とにかく、こっちに来てよ～！」

何だか先輩が慌てている。俺は言われるままに準備室へと入った。

［吹雪］：「どうしたんですか？　せんぱ、い……」

［カホラ］：「……」

先輩の手に握られていたもの。それは――、
［吹雪］：「おっぱい万歳、巨乳の女優はどんな味……のおおおおおっ！？」
アダルトＤＶＤだった。
［カホラ］：「何でこんなものが準備室にあるのよ！？」
［吹雪］：「し、知らないですよ。俺もびっくりです」
［カホラ］：「本当に？　部室でこっそり見てたんじゃないの？」
［吹雪］：「そ、そんなことしないですよ。何でわざわざ学校でそんなもの見なくちゃいけないんですか？」
［カホラ］：「じゃあ何でこんなものがここにあるの？　しかもこんなところから出てくるってことは、絶対隠してたってことじゃない」
［吹雪］：「それは分かりませんけど、とりあえず俺じゃありません。俺はそんな過激なの持ってません」
［カホラ］：「過激なのってことは、違うのは持ってるってこと？」
［吹雪］：「え？　そ、そんなこと……ないです」
［カホラ］：「絶対持ってるでしょ！　もう、エッチ～」
［吹雪］：「何故俺が責められてるんですか？」
［カホラ］：「だって男の子じゃないの！　男の子しかこんなもの見ないわよ」
［吹雪］：「でも、俺は見てません。そのパッケージだって初めて見ましたよ」
［カホラ］：「本当に？」
［吹雪］：「本当です」
こんなもの学校に持ってくる奴なんて、あいつしかいない。

カランド（9）

［吹雪］：「多分、翔の仕業です。あいつ以外に考えられません」
［カホラ］：「……確かに、あの子なら有り得るかもしれないわね」
［吹雪］：「そんな危ないもの学校に持ってこようなんて思うの、あいつくらいしかいませんよ」
［カホラ］：「……妙にたくさんの用紙があると思ったらこういうことだったのね」
はあ、と先輩は大きなため息を吐いた。
［吹雪］：「すいません、俺から言っておきます」
［カホラ］：「……一緒に見ようとか、考えてない？」
［吹雪］：「いやいや！　しないですよ。見る勇気なんてないです」
［カホラ］：「本当？」
すっげー不審な目で見られてる……。
［吹雪］：「だ、大丈夫ですって。俺を信じてください」
［カホラ］：「……まあ、健全って言えば健全なのかしらね」
さすが先輩、冷静な見解をしてくれた。
［吹雪］：「にしても、何て破廉恥なもの持ってるのかしら。……この子、確かに胸は大きいけど顔立ちは整ってないじゃない」
いやいやいや！
［吹雪］：「先輩」
［カホラ］：「え？」
［吹雪］：「女優の顔はどうだっていいことではないですか？　問題は何で学校にこんなもの置いてたのかってことで」
［カホラ］：「あら？　関係あるじゃない？　このままだと、翔は顔立ちがあんまり整ってない子が好きってことになっちゃうのよ」
［吹雪］：「……メチャクチャどうでもいいことじゃないですか」
あいつの性癖なんて微塵も興味はない。
［吹雪］：「人それぞれってことでまとめておきましょうよ」

［カホラ］：「確かにそうだけど……ひょっとして私がおかしいのかしら？　ねえ、吹雪はどう思う？」
［吹雪］：「はい？」
［カホラ］：「この女優の子、かわいいと思う？」
［吹雪］：「え、えええええっ！？」
［カホラ］：「だって、納得いかないんですもの。どうなの？　ねえ？」
［吹雪］：「先輩、さっきのアクションと真逆のことしてませんか？」
さっきまであんなに不潔そうに俺たちのこと見てたのに、今度はアダルト女優についての意見を求めるなんて……。
［カホラ］：「それはそれ、これはこれよ。好奇心は誰にも止められないものでしょう？　さ、答えて答えて」
目の前にＤＶＤジャケットを差し出される。
［吹雪］：「お、おおおおおっ……」
まじまじと見ると、すごい胸の大きさだ。中に何が詰まってるんだっていうくらいパンパンに膨らんでて、それは正に果実というに相応しい。
［吹雪］：「す、すごいな……」
［カホラ］：「吹雪？　見るところ間違ってるわよ」
［吹雪］：「え？　ああ、すいません」
［カホラ］：「エッチなんだから」
［吹雪］：「目の前にこんなもの出されたら、誰だって反応しますよ」
俺、間違ったこと言ってないよな？　俺は言われたとおり、女優の顔を見てみる。
［カホラ］：「ほら、あんまりかわいくないでしょ？」
［吹雪］：「んー、確かにそうかもしれないけど、そこまで酷くもないんじゃないでしょうか？」
角度というのもあるかもしれないが、先輩が言うほど不細工ではな

いと思われる。
［カホラ］：「えー？　嘘よー、だって崩れてるじゃない。口とか鼻とか」
［吹雪］：「そこまで気にするほどでも……」
［カホラ］：「吹雪もかわいくない子が好みなの？」
［吹雪］：「そ、そういうわけじゃないです。かわいいに越したことはないですから」
［カホラ］：「じゃあ、この子はダメじゃない。かわいくないもの」
［吹雪］：「どうしてそこまで否定するんですか？」
この女優に罪はないはずだが……。
［吹雪］：「何か恨みでもあるんですか？」
［カホラ］：「別に、そういうわけじゃないけど。ただ、かわいくないなーって思ったから」
［吹雪］：「……その分、スタイルがいいからいいんじゃないですか？」
［カホラ］：「……エッチ」
［吹雪］：「ええ？　何で？」
［カホラ］：「そうやって女の子を見定めてるんでしょう？　あの子の肌が綺麗ーとか、おっぱい大きいとか」
［吹雪］：「し、してませんよ。ただのヘンタイじゃないですか？」
［カホラ］：「男の子なんてみーんなヘンタイじゃない」
［吹雪］：「それ言ったら身も蓋もないじゃないですか……」
［カホラ］：「まあ、別にいいんだけどー？　襲ったりしたらダメだからね？」
［吹雪］：「しませんってば！　そんなこと」
［カホラ］：「……うーん、納得いかないわね？」
［吹雪］：「一体先輩は誰とその女優を比べてるんですか？」
［カホラ］：「へ？　ああ、聖奈美だけど？」
［吹雪］：「……だからですよ。この子がかわいく見えないのは」
基準が随分と高い……。

［吹雪］：「杠を平均として見ちゃったら、そりゃかわいくは見えないですよ」
［カホラ］：「え？　私がおかしかったの？」
［吹雪］：「おかしいですよ」
［カホラ］：「それって、つまり吹雪は聖奈美のことをかわいいって思ってるってことね？」
［吹雪］：「え？　ま、まあ一般論ですよ」
［カホラ］：「この女優さんじゃ、聖奈美には勝てないってことでしょう？」
［吹雪］：「まあ、はい」
［カホラ］：「ふうん、そっかそっか。私の基準がおかしかったのね」
［吹雪］：「まあ、何度も言いますけど、人それぞれですから。見てどう感じるかもそれぞれの自由ですから、先輩にはかわいく見えないかもしれないけどだからと言って他の人もそうだとは一概に言えないってことです」
［カホラ］：「吹雪、何だか哲学者みたいね」
［吹雪］：「「自分でもちょっと思いました」
どっかの学者さんが論じそうな意見だった気がする。
［吹雪］：「というか、何で先輩は杠を基準に持ってきてたんですか？」
［カホラ］：「やっぱり、一番この女優に体型が似てるからかしら。まあ、顔は全く似てないけどね」
［吹雪］：「た、体型ですか？」
［カホラ］：「ええ、ナイスバディでしょ？　聖奈美は」
［吹雪］：「ん、んん？　ま、まあ……」
［カホラ］：「あら？　その反応を見る限り、吹雪も思ってるってこと？」
［吹雪］：「え？　そ、そういうわけじゃなくて。あの、あれですよ一般論です。周りからはそう見えてるみたいですから」

ガン見したことないから分からないが、確かにそんな話はあちらこちらで耳にしたことはある。そんなこと大っぴらに言えるわけないが。

［カホラ］：「とにかく、私が基準を間違ってたってことなのね？」

［吹雪］：「そう、なりますかね」

［カホラ］：「でも、この子をかわいいとは認めないわよ？」

［吹雪］：「まあ、それはご自由に」

誰の意見が正しいってこともないからな。それにしても、体型が似てるから杠に重ねて見てたか……。

確かに、杠はスタイル悪くないんだろうが、この体型ならむしろ――。

［カホラ］：「……？　どうしたの？」

［吹雪］：「あ、いえ、何も」

先輩の方がスタイルだけだったら近いものがあるんじゃないのか？

胸でかいし、それに……。

［カホラ］：「吹雪？　何考えてるの？」

［吹雪］：「え？　俺、何も考えてませんよ？」

［カホラ］：「嘘ばっかり。顔に書いてあるわよ？　この女優に一番近いのは先輩じゃないのって」

［吹雪］：「ええ？　い、いやいや、そんなこと全く！」

［カホラ］：「だとしたら何でそんなに狼狽えてるのよ？」

［吹雪］：「あ、あらぬ疑いをかけられたからですよ」

［カホラ］：「ふうん、あらぬ疑いだったらもっとはっきり言えるものじゃないのかしら？」

［吹雪］：「え？　だって、それは……」

［カホラ］：「エッチ」

［吹雪］：「く……」

［カホラ］：「他の女の子もそうやって吟味してるんじゃないでしょうね？」

［吹雪］：「そんなことしませんって！　そんな勇気は俺にありま

せん」
［カホラ］：「本当に？　信じていいのね？」
［吹雪］：「もちろんです！」
［カホラ］：「まあ、今回は許してあげるわ。こんなもの持ってきた翔が悪いんだからね」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［カホラ］：「さ、作業再開しましょう。まだ見つかってないんだから」
［吹雪］：「あ、はい。そうですね」
忘れてしまうところだった……。
……。

カランド（10）

［カホラ］：「なんとなーく、予想はしてたけど、やっぱり出てきたわね」
［吹雪］：「は、はは……」
あの後、ボックスの用紙を最後まで確認したら、エロ本のようなものが2、3冊出現した。
［カホラ］：「翔って、オッパイ大好き少年だったのね」
［吹雪］：「見たいですね」
当たり前のように出てきた女優はFカップ以上の子ばっかりだった。
［カホラ］：「男の人って、みんなこんな感じなの？」
［吹雪］：「……真面目に答えたほうが？」
［カホラ］：「いいわね」
［吹雪］：「……基本的に男性は女性の胸は大好きですよ。しかし、大きさに関しては人それぞれな　んで、みんながみんな巨乳好きではないと思われます」
［カホラ］：「ふ～ん、なるほどね」
何でこんなこと真剣に話してるんだろう……。
［カホラ］：「吹雪は？　オッパイ大好きなの？」
［吹雪］：「え？　ま、まあ……嫌いじゃないですよ？」
［カホラ］：「巨乳？　貧乳？」
［吹雪］：「そ、そこまではプライバシーに引っかかるんじゃないですか？」
［カホラ］：「ここまで言って恥ずかしがる必要ないじゃなーい？」
これ以上恥ずかしくなるのもイヤなんだけどな……。
［吹雪］：「と、特にこだわりとかはないです。好きになった人の胸なら……」
［カホラ］：「なるほど。じゃあ大きさじゃないってことね？」
［吹雪］：「は、はい」

［カホラ］：「……よかった」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「ううん、何でもないわ。こっちの話よ」
［吹雪］：「はあ。それより、すいません。探すの手伝ってもらったのに見つけ出せなくて」
結局変なものばかりが見つかってしまった。
［カホラ］：「しょうがないわよ。こういうことはよくあるでしょ、なくなって初めて気付く大切さってことね」
［吹雪］：「本当ですね」
［カホラ］：「予備があるんでしょ？　職員室に行ってもらってきましょう」
［吹雪］：「はい」
……。

カランド（11）

［場所：職員室］

［吹雪］：「すいません、出場申請書を1枚もらえますか？　ちょっと無くしてしまったんで」
［先生］：「ああ、そう。何処の部活の人かな？」
［吹雪］：「あ、魔法研究部です」
［先生］：「魔法研究部さんねちょっと待っててね」
［カホラ］：「よかったわね、予備があるみたいで」
［吹雪］：「はい」
次はちゃんと保存しておかないとな。
［先生］：「……あら？　魔法研究部さんって言ったわよね」
［吹雪］：「あ、はい。そうです」
［先生］：「おかしいわね、これってあなたたちの部の申請用紙じゃないかしら？」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「え？」
俺たちは差し出された用紙を凝視する。
［先生］：「これ、あなたたちの部のじゃないかしら？」
［カホラ］：「……ちゃんと吹雪の字で書かれてるわね」
［吹雪］：「な、何で？」
俺は書かれている用紙に目をやる。そこには2ヶ月前の日付が書いてあった。
［吹雪］：「……あっ！　そういえば」

“
［舞羽］：「吹雪くん、今回の展示作品どんなものにする？」
［吹雪］：「そうだなー、個人的には今回はロマンティックなもの

を出したいと思うんだけど、どうだ？」
［舞羽］：「うーん、悪くないかもね。とりあえず、イベントには出るってことでいいんだよね？　だったらもうこれ書いちゃって提出しちゃおうよ。出し忘れたら困るからね」
［吹雪］：「ああ、そうだな。忘れないように」
“
［吹雪］：「――あの時、早めに書いて提出したんだっけ」
忘れないようにと思って早めに出していたことをすっかり忘れていたとは……。
……。
……。
［カホラ］：「おっほん。……吹雪？」
［吹雪］：「あ、は、はい」
［カホラ］：「これってどういうことなの？」
［吹雪］：「えっと、それは……」
言い返す言葉は見当たらなかった。
［カホラ］：「もうっ！　おバカ！」
垂直に振り下ろされたチョップが俺の頭を直撃した。
［カホラ］：「今時、出したことを忘れてたなんて古典的なオチを使ってるんじゃないわよ」
［吹雪］：「す、すいません。二ヶ月も前のことだったんでついうっかり……」
［カホラ］：「うっかりじゃないでしょう？　あんなに必死になって探したのに、折角の時間を無駄にしちゃったじゃない」
［吹雪］：「うう、ごめんなさい」
［カホラ］：「罰として、ペナルティーを与えますからね」
［吹雪］：「ペ、ペナルティー？」
［カホラ］：「ええ、そうよ。ふふ、どんなのにしようかなー？」

［吹雪］：「う、ううう……」
［カホラ］：「とりあえず、職員室を出ましょうか？　すいません、迷惑をおかけしました」
［吹雪］：「いえいえ、ご苦労様」
いつもなら早く退出したい職員室が、今ばかりはとても愛おしい空間だった。
――その後俺は、先輩の助手として図書館で必要資料の探索に全力で勤しみ、プラスでバーバロのケーキを奢ることとなった。
……お財布の中身が少し寂しくなった。

カランド（12）

・教室

［場所：教室］

［翔］：「ふーぶーきー。あーそーぼ」
［吹雪］：「いーやーだ！」
［翔］：「テンポに乗せて否定された！」
［吹雪］：「そりゃあ当然のことだろう。お前に付き合ってる時間なんてないの」
［翔］：「何でよ？　今は放課後でしょう？　学生は遊ぶのが仕事でしょう？　どうして断るのよ？」
［吹雪］：「何処の彼女だ、お前は」
［翔］：「え？　オレたちはそういう関係じゃないか」
［吹雪］：「変なこと言うんじゃねぇ！　誤解されたら大変だろうが！」
ゲシ。
［翔］：「お、おいー！　関節にキックはいけないんじゃないか？　外れちゃうでしょう」
［吹雪］：「外れればいいのに」
［翔］：「さらっと恐ろしいことを……」
［吹雪］：「一応言っておくが、学生の本分は遊ぶことも大事だが、それ以上に勉学に励むことが大事なことだからな。だからお前は遊ばないで勉強にだけ勤しんでろ」
［翔］：「オレは遊んじゃダメなの！？」
［吹雪］：「当然だろうが」
［翔］：「そんな殺生な！」
［吹雪］：「だったらテストでそれなりの成績残すんだな」

［翔］：「……とか言って、ホントはオレと遊ぶのがイヤなだけなんじゃないの？」
［吹雪］：「……」
［翔］：「否定してくれない！　つかこの返しの使用回数多くない？」
［吹雪］：「それだけお前がボケ倒してるからだろうが、ツッコミどころ多すぎてこっちも手が回らないんだよ」
［翔］：「だけどさ、マンネリはよくないと思うよ。しかも何も返してくれないって一番こっちは傷つくんだからね？」
［吹雪］：「お前のためを思って言ってるのが分かんないのか」
［翔］：「オレに対する愛情なの？」
［吹雪］：「さあな、つかいい加減少し離れろ。さっきから近いんだよ距離が」
［翔］：「これがオレとお前の心の近さなのだよ」
［吹雪］：「意味分かんないこと言ってんじゃねぇ。また蹴り入れちゃうぞ」
［翔］：「そ、それは勘弁だな」
全く、コイツのテンションについていくのは一苦労だ。
［翔］：「それよりさ、マジでどっかに遊び行かないか？　暇なのよオレ、付き合ってくれないかな？」
［吹雪］：「だからさっきも言っただろう？　勉強してろよ。それか家に帰ってゲームとかしてろよ。そっちのほうがよっぽど楽しいと思うぞ」
［翔］：「オレは一人で遊ぶんじゃなくて、吹雪と遊びたいの」
［吹雪］：「だから何処の彼女だよ、お前は」
［翔］：「なあ？　いいだろう？　頼むよー吹雪ちゃん」
［吹雪］：「そのちゃん付けやめろ、気持ち悪いだろうが」
［翔］：「行こうよー、ねえ？　行こう？」
［吹雪］：「断る。遊ぶ力なんて残ってないんだよ」
ただでさえハーモニクサーの練習で疲れてるんだから……。

［吹雪］：「また次にしてくれよ。来年あたり」
［翔］：「じゃあ、今オレの中で渦巻いてる情熱はどうするんだ？　持て余せっていうのか？」
［吹雪］：「その情熱は別のところに注げよ。別に俺と遊ぶことに注がなくていいだろうが」
［翔］：「オレは吹雪と情熱を燃やしたいのに」
［吹雪］：「他を当たってくれよ、暇を持て余してる奴なら他にだっているだろう」
［翔］：「うーん、ノリ悪いな。じゃあ、他に誰を当たれっていうんだよ」
［祐喜］：「じゃあ、僕に付き合わないかい？　翔」
［翔］：「祐喜？　え？　いつからいたんだ？」
［祐喜］：「今さっき来たんだ。翔が吹雪を口説いてるあたりからね」
［吹雪］：「見てたんなら止めてくれよ、祐喜」
［祐喜］：「ごめんね、何かおもしろそうだったから」
笑顔で祐喜はそう言った。
［祐喜］：「それより、翔は今情熱を持て余してるんだよね？　だったら、僕と一緒にその情熱を燃やさないかい？　無駄にはしないと思うよ？」
［翔］：「まあ、吹雪がダメなら祐喜を当たろうと思ってたからいいんだけど、一体何をするんだよ？」
［祐喜］：「生徒会室で、僕と一緒に書類作業。持て余してる情熱を学園の住みよい空間を作るために使おうよ。悪くない話でしょう？」
［翔］：「え！？　しょ、書類作業？　遊びに付き合ってくれるんじゃないの？」
［祐喜］：「僕は生徒会の人間でもあるんだよ。仕事はちゃんとしないと、みんなからの信頼を無くすからね」
［翔］：「で、でもよー。オレはそういう気分じゃ……」

［祐喜］：「友達ってのは、助け合ってこそでしょ？　友達が困ってるんだから力を貸してよ」
［翔］：「ううう……でも、オレは……」
［祐喜］：「さあ、僕と楽しく書類作業しようね。レッツゴー！」
［翔］：「ちょっと、待って……きゃ～～～～！」
気持ち悪い悲鳴を上げながら、翔は祐喜に連行されていった。きっと、いい感じに情熱を燃やせることだろう。
さてと、俺は……夕食の買い物でもして帰るか。
［祐喜］：「あ、そうだ、吹雪」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［祐喜］：「聖奈美がね、さっき吹雪のこと探してたみたいだったよ？　教室に居たみたいだったから、暇だったら顔出してあげてみてよ。じゃあ、また明日」
［吹雪］：「あ、ああ」
杠が俺を？　普段はあんなに俺のことを煙たそうに扱ってるのに……どういう風の吹き回しだ？　……あんなの伝えられて、無視して帰るわけにはいかないよな。あいつの教室行ってみるか。
……。

カランド（13）

［場所：隣の教室］

さて、いるかね？　俺は教室のドアを開けてみた。
［聖奈美］：「行くわよ？　ダル――ふぐっ！？」
［吹雪］：「ごおおっ！？」
頭が、モロに鼻先に――い、いってええええ！
［聖奈美］：「いったた……ちょ、ちょっと！？　気をつけなさいよ――って、大久保？」
［吹雪］：「おおっ……ぐ、ぐううう……！」
［聖奈美］：「ちょ、ちょっと？　そんな大げさな……ちょっとぶつかっただけじゃないの？」
［吹雪］：「ぐ、ぐううう……ああ……」
［聖奈美］：「お互い様のはずなのに、あたしが悪いみたいじゃないの。もう、とりあえず、ここに座りなさい」
腕を引っ張られて席に座らせられる。本当は返事がしたいんだが、予想外の激痛に何も言うことができない。
［聖奈美］：「ダルク、あたしのハンカチ水で濡らしてきてちょうだい」
［ダルク］：「うん、分かった」
……。
［ダルク］：「はい、聖奈美」
［聖奈美］：「ありがとう」
熱を持った鼻先に冷たいハンカチが当てられる。
［吹雪］：「はあ、ふう……」
［聖奈美］：「どお？　落ち着いた？」
［吹雪］：「ああ、面目ない」
［聖奈美］：「しょうがなかった、ってことにしましょう。お互い

にあれは避けられないでしょう」
［吹雪］：「そうだな。お前は大丈夫だったのか？　ケガとかしてないか？」
［聖奈美］：「痛そうにしてるあなたの様子見てたら、痛みなんてどこかに行っちゃったわ」
［吹雪］：「……大したことないと受け取っていいのか？」
［聖奈美］：「あなたに任せるわ。少なくとも、あなたより打ち所は悪くないわよ」
［吹雪］：「なら、よかった」
［聖奈美］：「……よく自分のほうが痛いのに相手の心配をできるわね」
［吹雪］：「ん？　何か言ったか？」
［聖奈美］：「いえ、別に。……そろそろ、自分でハンカチ持ってくれないかしら？」
［吹雪］：「ああ、悪い。ついうっかり」
俺は自分でハンカチを固定する。
［吹雪］：「それより杠よ」
［聖奈美］：「何よ？」
［吹雪］：「お前、俺のことを探してたって祐喜から聞いたんだが、本当なのか？」
［聖奈美］：「祐喜が？」
［吹雪］：「ああ、探してるみたいだって言われて。だからクラスに顔を出してみたんだが……」
［聖奈美］：「一言も口に出してないのに、どうしてそこまであたしのことを……」
［吹雪］：「違ったか？　ひょっとして」
［聖奈美］：「ちょっと待って、今考えるから」
［吹雪］：「あ、ああ……」
考えるって、一体何をだ？
［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「まあ、この際大久保でいいでしょう？」
［吹雪］：「終わったか？」
［聖奈美］：「ええ」
［吹雪］：「そういえば、さっきどっかに行こうとしてたよな？それと関係があったりするのか？」
［聖奈美］：「まあ、そうなるわね」
ダルクも横でうなずいている。
［聖奈美］：「今日は街のほうで生徒会で使用する備品を買い揃える予定なの。買い物に行く前に必要な物品を定めたら、どうにも一人で買い物するには買い切れない量だってことに気付いたの。でも、生徒会の人には一人で行くと言ってしまったからどうしようかって少し悩んでたところだったらのよ」
［吹雪］：「じゃあ、明確に俺を探していたというわけじゃあない？」
［聖奈美］：「ええ、祐喜があたしの様子を見て勝手にそう解釈したってわけ」
［吹雪］：「で、俺に妥協したと？」
［聖奈美］：「自分から来るってことは、暇があるってことなんでしょう？」
［吹雪］：「まあな。でも……妥協って言われるとちょっと寂しいというか」
［聖奈美］：「じゃあ……大久保、悪いんだけどあたしと買い物に付き合いなさい。一人じゃちょっと荷が重いから。……これでいいかしら？」
［吹雪］：「……さっきよりは良くなったとは思うんだけども」

［聖奈美］：「まだ何か不満があるの？」
最初の頃から比べれば、十分成長したか。
［吹雪］：「いや、ない。俺でよければ手伝うぜ」
［聖奈美］：「よろしい、じゃあ行きましょう。一先ずは商店街に向かいましょう、ダルク」
［ダルク］：「はーい」
ダルクは返事すると、杠の頭の上にチョコンと座った。なるほど、いつもああやって持ち運んでいるのか。
……。

カランド（14）

［場所：商店街］

［吹雪］：「で？　何を買うんだ？」

［聖奈美］：「資料を閉まっておくためのクリアファイルにクリップ、後は筆記用具立てにボックス、ボールペン……他にもいくつか細かいのもあるけど、とりあえずはこんな感じね」

［吹雪］：「当たり前だけど、生徒会にも部費ってあるんだよな？」

［聖奈美］：「ええ、あるわよ。でも、スポーツ部のようにたくさんの備品が絶対必要というわけでもないから、他の部から比べるとそこまで部費はもらえない。極端な話、生徒会の腕章とボールペンがあれば、仕事は可能だから」

［吹雪］：「突き詰めていけばそうなるかもしれないが、実際はそうはいかないだろう」

［聖奈美］：「だからこうして買い物に来てるわけ。調査の結果とかも小まめに記しておかないといけないから、ボールペンのインクの減り具合が早いのよ」

［吹雪］：「もはや教師と同じくらいの仕事をこなしてるわけか」

［聖奈美］：「そこまでじゃないとは思うけどね。でも、忙しいことは確かよ。あなたもそれは分かってるとは思うけど」

［吹雪］：「まあな。でも、そんなに頑張ってるんだから、もっと部費を多くもらえるように頼んでもいいんじゃないのか？　おそらく部活動の中ではトップクラスの働きっぷりなんだろうし、その労力に見合った部費だったら申請しても許可が降りると思うんだが」

［聖奈美］：「その条件が飲まれた結果がこれだとしたら？」

［吹雪］：「え？　じゃあ、それでもこれってことか？」

［聖奈美］：「あなたが思うずっと前から、生徒会の人間はそれを思っていたわ」

当然と言えば当然だな。
［聖奈美］：「でもね、学園の金銭面での都合上これ以上の部費の増額は負担になるらしいのよ。ハルモニア学園は島に位置してるでしょう？　どうしても他の部の遠征によるお金が嵩んでしまうのよ」
［吹雪］：「ああ、確かに」
学割が聞いたとしても、少し本州とは離れているからな。
［聖奈美］：「その点、あたしたちは遠征なんて特にはないからあまりお金を掛けずに済むわけ。それなのに、これ以上の部費増額なんてしてしまったら、この学園を赤字に追い込んでしまうことになる。だから、現状を納得せざるを得ないわけ」
［吹雪］：「全く考えたことなかったぜ」
［聖奈美］：「部費の面で言えば、あなたたちはそこまで学園側に負担をかけていないわ。遠征とかもあまりないようだし」
［吹雪］：「まあ、自己満足みたいなところもあるからな」
［ダルク］：「吹雪は今回何を作ったんだっけ？」
［吹雪］：「ああ、プラネタリウムだ。魔法を動力源にした奴だ」
［ダルク］：「綺麗？」
［吹雪］：「俺たちが見た限りは結構良い出来になったと思うぞ」
［ダルク］：「今度見てみたいなー、ダメ？」
［吹雪］：「大歓迎だ。ダルクは星が好きなのか？」
［ダルク］：「星というよりは、綺麗なものが好きなの」
［吹雪］：「じゃあ、ダイヤモンドとか宝石とかもか？」
［ダルク］：「うん、実物は見たことないけどね」
［吹雪］：「そりゃそうだろうな。じゃあ、ダルク的にはジャスパーはどうなんだ？　杠のグリーンジャスパーは？　あれだって輝いてるだろう」
何も言わずに杠は胸ポケットからジャスパーを取り出した。
［吹雪］：「ちゃんと持ってるんだな」
［聖奈美］：「当たり前でしょう？　肌身離さないようにって言われてるんだから」

［ダルク］：「綺麗だよね～。これって聖奈美たちが役目を終えたらもらえたりするのかな？」
［聖奈美］：「ダルク、これは参加賞とかそういうものじゃないのよ？」
［ダルク］：「あ、やっぱりそうだよね」
［聖奈美］：「きっと、何か違う用途で必要になってくるんでしょう。言い切ることはできないけど」
［ダルク］：「頑張ってね？　二人とも。応援してるから」
［吹雪］：「おう、サンキュー」
……。

カランド（15）

［吹雪］：「持つぞ、杠」
［聖奈美］：「ええ、お願いするわ」
俺は買い物袋を杠から受け取る。
［吹雪］：「後どれくらいなんだ？」
見案身「大体は終わったわ。後は文房具屋で小物を揃えるだけよ」
［吹雪］：「文房具屋までは近いのか？」
［聖奈美］：「ええ、そんなにかからないわ。そもそも、商店街自体そこまで広くもないでしょう」
［吹雪］：「それは、言わないであげたほうがいいんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうね、冷たい言葉だったかもしれないわね」
［吹雪］：「……氷魔法の使い手だもんな」
［聖奈美］：「聞こえたわよ？　大久保」
［吹雪］：「じょ、冗談だよ。本気にしないでくれ」
［聖奈美］：「あなたさえよければ、氷漬けにしてあげてもいいのよ？」
［吹雪］：「そ、それは勘弁……今、ただでさえ寒い時期なんだからよ」
［聖奈美］：「じゃあ、そういう発言はしないことね。いい？」
［吹雪］：「お、おう……」
［聖奈美］：「さあ、行くわよ？　さっさと済ませちゃいましょう」
［吹雪］：「そうだな」
……。
［聖奈美］：「さあ、全て買い終わったし、学校に戻りましょう。そろそろ日が暮れるわ」
［吹雪］：「杠、ちょっといいか？」
［聖奈美］：「え？　何よ？」
［吹雪］：「お前は急いで学校に戻らないとヤバイ感じか？」

［聖奈美］：「別にそういうわけじゃないけど、早いに越したことはないと思ったの。それに、あなたをずっと連れ回してるのもこっちとしては申し訳ないと思って」
［吹雪］：「そりゃあどうも。……早く学校に戻りたいか？」
［聖奈美］：「どうしたのよ？　急に？　どうも帰りたくないような口振りね」
［吹雪］：「いや、別にそういうわけじゃない。その、さっきから歩きっぱなしだろう？　あっちに行ったりこっちに行ったりしてるから少し疲れたんじゃないかって思ってよ」
［聖奈美］：「まあ、そう言われればそうかもしれないけど、そこまで疲労困憊ってわけではないわ」
［吹雪］：「そうか……じゃあいいか」
［聖奈美］：「どうかしたの？」
［吹雪］：「いや、もし疲れてるんであればちょっと休憩していかないかなって思ったんだ。あそこのトロピカルドリンクよく立ち寄って飲んだりするんだけどすっごい美味いんだ。だからよかったら飲まないかって思ったんだけど……どうだ？」
［聖奈美］：「トロピカルドリンク？　西洋の飲み物かしら？」
［吹雪］：「ちょっと違う。南国のフルーツをベースにした飲み物だ。多分お前の口にも合うと思うが、よかったら飲んでいかないか？　代金なら俺が出すからよ」
［聖奈美］：「どうしてあたしにそういう話を持ちかけるの？」
［吹雪］：「どうしてって……ただこのまま帰るのも何だか味気ないだろう？　それに俺自身少し疲れてるってのもあるんだよ」
［聖奈美］：「……あなた、変わってるって言われたことない？」
［吹雪］：「な、何だよ？　急に」
［聖奈美］：「だって、この買い物に付き合わせてるのはあたしのほうなのよ？　本当ならあなたはここにいなくてもいいはずなの。こういうことを誘わなきゃいけないのはむしろあたしのほうなはず。それなのに、あなたはあたしより先にそんな提案……正直、かなり

変わってると思うわ」
［吹雪］：「あんまり言われたことはないけどな」
［聖奈美］：「他の人はそうは言わないかもしれないけど、あたしからしたらあなたはかなり変わってるわ」
［吹雪］：「断言されても、どう返したらいいのか」
とりあえず言えることは――。
［吹雪］：「別に俺はイヤイヤこの買い物に付き合ってるってわけではないぞ？　帰ろうと思えば教室に寄らずに帰ることもできたしな。でも、祐喜から話を聞いて、ふうんって聞き流して帰る気にはなれなかったんだ。お前がどう思ってるのか、俺には分からないけど、俺はお前とは仲直りしたと思ってるから。助け合うのはおかしくないだろう？」
［聖奈美］：「――っ！？　あ、あなた、よくそんなことさらっと」
［吹雪］：「え？　俺変なこと言ったか？」
［聖奈美］：「自覚なしでそんなことを……やっぱりあなた変わってるわ」
［ダルク］：「ふふ、聖奈美顔真っ赤よ？」
［聖奈美］：「う、うるさいわね。ほうっておいて」
［吹雪］：「どうかしたのか？」
［聖奈美］：「な、何でもないわよ。気にしないでちょうだい」
［吹雪］：「ああ。――で、結局飲んでいくか？　トロピカルドリンク、飲んだことないだろう？」
［聖奈美］：「というか、名前も初めて聞いたわ」
［吹雪］：「やっぱり、お前でも知らないことはあるんだな？」
［聖奈美］：「当たり前でしょう？　というか、全てを知ってる人間なんてこの世に存在しないわよ。それは神っていうの」
［吹雪］：「最もだ」
［聖奈美］：「いいわ、寄って行きましょう。でも、代金はあたしが払うわ、付き合わせたのはあたしなんだから」
［吹雪］：「え？　マジで？　俺から誘ったのにそれは……」

［聖奈美］：「黙って奢られなさいよ。ここであなたに払わせたら、あたしの立場がおかしくなるでしょう」
［吹雪］：「おかしく？」
［聖奈美］：「……下僕みたいじゃない。荷物持たせて、ジュースまで奢らせて」
［吹雪］：「誰も思わないと思うけどな」
今のところ顔見知りとかとは会ってない。
［聖奈美］：「とにかく、ここは譲れないわ。あたしが払う、あなたは素直に払われてなさい、いいわね？」
［吹雪］：「じゃ、じゃあお願いします」
［聖奈美］：「お、美味しいんでしょうね？」
［吹雪］：「ひょっとして、怖いか？」
［聖奈美］：「そ、そんなわけないでしょう？　ただ、初めてだから……」
［吹雪］：「心配ないって。イメージとしては紙パックのジュースがより爽やかになった感じ。喉越しもいいし、飲みやすいから」
［聖奈美］：「そう。その言葉、信じていいわね？」
［吹雪］：「不味かったら俺に文句言ってくれてかまわんよ」
［聖奈美］：「じゃ、じゃあ行きましょう」
さっきより何だか態度が少しおかしい気がするんだが……気のせいか？
……。

カランド（16）

近くにあったベンチに座って早速ご賞味。
［吹雪］：「ほら、飲んでみろって」
［聖奈美］：「わ、分かってるわ」
［吹雪］：「そこまで警戒する必要ないと思うんだが」
［聖奈美］：「だって、こんなに鮮やかな色は初めてみるんですもの」
杠が頼んだのはパッションフルーツとパイナップルのミックス。涼しそうな黄色のジュースがグラスに注がれている。
［聖奈美］：「毒とか入ってないでしょうね？」
［吹雪］：「入ってたら俺とっくに死んでるだろうが」
［聖奈美］：「免疫付いてるんじゃないの？」
［吹雪］：「毒が入ってたら1回飲んだだけで死ぬだろうが、免疫付く前に」
［聖奈美］：「そ、それもそうね」
［吹雪］：「大丈夫だって、とりあえず飲んでみろって。絶対美味しいから」
［聖奈美］：「わ、分かった」
グラスに向き合って神妙な面持ちをしている。マジックコロシアムでもこんな表情はしてなかったのにな。
［聖奈美］：「――んっ！　ちゅう、ちゅう」
ようやく杠はストローに口を付けた。
［吹雪］：「どうだ？」
［聖奈美］：「……美味しい。すごく美味しいわ」
［吹雪］：「だろう？」
曇ってた表情が一気に晴れやかになった。
［聖奈美］：「酸っぱいけど、イヤな酸っぱさじゃない。心地いい酸っぱさだから飲みやすくて、それでいてちゃんと甘みもある」

［吹雪］：「嘘は言ってないって言っただろう？」
［聖奈美］：「そうね、買って正解だったわ」
［ダルク］：「聖奈美、その、私も……」
［聖奈美］：「ええ、ほら、飲んでみなさい」
杠はダルクにグラスを持っていく。
［ダルク］：「わー、すっごく美味しい」
［吹雪］：「お、ダルクも分かってくれるか？」
［ダルク］：「こんな美味しい飲み物、久しぶりに飲んだよー」
［吹雪］：「誘った甲斐もあるってもんだ」
［聖奈美］：「あなた、あのお店は行き着けなの？」
［吹雪］：「毎日ってわけではないけど、一ヶ月に1回くらいは飲んでるかもな。3年前に試しにって思って飲んでみたらハマっちゃってな」
［聖奈美］：「好奇心が福を呼んだわけね」
［吹雪］：「だな。お前にとっても福だろう？」
［聖奈美］：「そうね。この味なら確かに飲みたくなっちゃうわ」
そう言って杠は微笑んだ。こいつの笑顔は、初めてみたかもしれない。打ち解けることができたみたいで少し嬉しい。

カランド（17）

［聖奈美］：「少し、見直したわ」
［吹雪］：「そりゃどうも」
［聖奈美］：「あたし、あまりこういう物に関しては詳しくないから、結構新鮮ね」
［吹雪］：「寄ったりしないのか？　学校の帰りとか」
［聖奈美］：「正確には寄れないのよね、生徒会で忙しいし、あたしの帰り道は商店街から逆方向だから」
［吹雪］：「それじゃあしょうがないな。休みの日に遊びには来ないのか？」
［聖奈美］：「そう思い立ってたら、もっと商店街に詳しいでしょう？」
［吹雪］：「……杠は家に居ることが好きなのか？」
［聖奈美］：「そ、そういうわけじゃないわよ！　引きこもりみたいに言わないでちょうだい」
［吹雪］：「だって、家で遊ぶほうが楽しいんだろう」
［聖奈美］：「そういうわけじゃないわよ。こっちにも色々やらなくちゃいけないことがあるのよ」
［吹雪］：「色々ね」
色々何をやってるのか聞きたいところだが、あまり踏み込むのもこいつに迷惑だろう。
［聖奈美］：「お前を見てると、生徒会に入らなくて正解だったって思うよ」
［吹雪］：「何よそれ、何だか癪に触る言い方ね」
［聖奈美］：「喧嘩を売ってるわけじゃないって。ただ、適任がつかないとやっていけない役職だなって実感しただけだ」
［吹雪］：「枠組みはあれでも部活動ってことになってるわ。あなたたちと同じ括りよ」

［聖奈美］：「だったら尚更じゃねぇか。進んで学校を動かそうとできる奴なんてそういないだろ。お前や祐喜がしっかりやってるから、学校だって成り立ってるんじゃないか。だから、俺は生徒会に入らなくて正解だったと思うんだよ」

［聖奈美］：「最終的にどういう意味に結びつくわけ？」

［吹雪］：「これからも頑張ってくれってことだ」

［吹雪］：「……すごく他人行儀ね」

［聖奈美］：「呼ばれれば手伝いに行くぜ？　俺は変わり者らしいからな」

［吹雪］：「変わり者は関係ないでしょう」

［聖奈美］：「でもその事実はお前の中では揺るがないんだろう？」

［吹雪］：「当たり前よ、てこを使ったって動きやしないわ」

そこまでなのか。

［聖奈美］：「多分思ってるのはあたしだけじゃないわ。胸に止めておきなさい」

［吹雪］：「止めといて俺はどうすればいいんだよ？」

［聖奈美］：「そのうち自分がどうしておかしいのかに気付くんじゃない？」

［吹雪］：「何だそれ？」

［聖奈美］：「言ったとおりの意味よ」

言ったとおりがよく分かってないんだよな……。

［ダルク］：「はい、聖奈美」

［聖奈美］：「ええ」

二人で仲良く回し飲みをしている。

［聖奈美］：「ちゅう、ちゅう……ごちそうさま」

どうやら飲み終わったらしい。

［吹雪］：「足りたか？　よければもう一杯飲んだら？」
［聖奈美］：「あたしを太らせたいの？　あなたは。これ以上飲んだら、お腹タプタプになるでしょう」
［吹雪］：「……なっても全然余裕ありそうだけどな」
［聖奈美］：「……スケベ、変態」
［吹雪］：「な、何で！？」
［聖奈美］：「今、イヤらしい目線であたしのこと見たじゃないの」
［吹雪］：「み、見てないって。見たら怒られるの承知してるから」
［聖奈美］：「そ、その解釈の仕方は改めなさい。常に怒ってるみたいじゃないの」
［吹雪］：「……怒ってなかったのか？　普段」
［聖奈美］：「普通に返さないで！　そういうこと」
［吹雪］：「わ、悪い。いや、ほら、いつも注意されてばかりだったからつい……」
［聖奈美］：「別にあなたが憎らしくて注意してたわけじゃないわ。というか、するわけないじゃないの。これがあたしの素なのよ、須藤さんとかが側にいるから分からなかったかもしれないけど」
［吹雪］：「舞羽？」
［聖奈美］：「あの子は、あたしとはまるで逆よ。雰囲気からしてそうだと思わない？」
［吹雪］：「まあ、昔からポヤーンとしてる奴だったからな」
［聖奈美］：「あの子が静だとしてあたしは動。昔からこうなのよ、自分でも分かってはいるけど、マナーが悪い人とかは注意しないと気が済まないの」
［吹雪］：「悪いことじゃないだろう。お前は間違ったことはしてない」
［聖奈美］：「それは、表ではね。でも、それが勘違いを産むこと

もあるのよ。今さっきまでのあなたみたいに」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「怒ってる自覚はないけど、そう捉えられることも少なくない。だから、あたしのイメージは怖い人っていうのが先行するわ。だからといって、あまり変えようとも思わないけどね、これがあたしの素なんだから」
［吹雪］：「お前の言うとおり、気にすることはないと思うぞ、俺は」
［聖奈美］：「……そう？」
［吹雪］：「お前のその態度が素敵―って人も結構いるらしいからな。翔が以前そう言ってた」
［聖奈美］：「……あの男の情報はアテになるの？」
［吹雪］：「あいつ、女の子のことに関してはすごい詳しいから間違ってないと思うぞ」
［聖奈美］：「そ、そう」
［吹雪］：「俺も、ちょっと安心したよ。お前が俺のことを憎たらしいって思ってたわけじゃないことが分かって」
［聖奈美］：「……こういうところは頭が悪いのね、あなた」
［吹雪］：「？」
［聖奈美］：「顔も見たくないような相手に、自分の仕事を手伝わせたりなんてするわけないでしょう？　単純に考えて」
［吹雪］：「いや、それで間違ってたら俺すっげぇ寂しい男じゃないか」
［聖奈美］：「別に嫌いじゃないわよ、あなたのことは」
［吹雪］：「おお……」
［聖奈美］：「な、何よ？」
［吹雪］：「いや、杠からそんな言葉をもらえると、何かちょっとぐっとくるものが」
［聖奈美］：「……あなた変わった性癖を持ってる人なの？」
［吹雪］：「な、何をいきなり？　そんなことはないと思うぞ！」

［聖奈美］：「完璧に否定はしないのね」
［吹雪］：「そこは大目に見てくれると助かる」
何せ、経験なんてないからな。
……。

［場所：校庭］

［聖奈美］：「ここまででいいわ」
［吹雪］：「え？　中まで持ってくぞ？　ここまで来たんだし」
［聖奈美］：「あたし、今日の仕事はこれだけだから、後は置いて帰るだけなの。帰り道が違うし、待たせるのは悪いでしょう」
［吹雪］：「そうか、だったらいいが」
［聖奈美］：「そ、その、ジュース、美味しいところ教えてくれてありがと」
［吹雪］：「おお、気にするな。是非贔屓してくれ」
［聖奈美］：「か、考えておくわ」
どうやら本当に口に合っていたらしい。
［聖奈美］：「じゃあ、今日はこれで」
［吹雪］：「おう、じゃあな」
さて、帰るか。今ならタイムセールとかやってるかもしれないな。

［ダルク］：「聖奈美、今日は何だか表情豊かだったね」
［聖奈美］：「あたしはいつもどおりよ」
［ダルク］：「そうなの？　ホントに？」
［聖奈美］：「何？　違うって言ってほしいの？」
［ダルク］：「だって、ちょっと楽しそうにしてたからさ。私も楽しかったから聖奈美は違うのかなって」
［聖奈美］：「……ま、まあ、それなり、ではあったわよ。少しだけだけどね」
［ダルク］：「そっか、えへへ」

［聖奈美］：「な、何笑ってるのよ？　ダルク」
［ダルク］：「別にー。何でもないよー」

カランド（19）

・職員室

［場所：職員室］

［吹雪］：「で？　どうしたんだよ？　呼び出しなんてして」
［繭子］：「あー、何よーその疑ってるような目はー。今回はちゃーんと用件があって来てもらったんだからねー」ｔ
［吹雪］：「それは裏返すと、今までは用件もなくて呼び出してたってことか？」
［繭子］：「それはそれでちゃんと理由はあるよー」
［吹雪］：「何だよ？」
［繭子］：「自分のクラスメイトとのコミュニケーション」
［吹雪］：「じゃあ俺以外のクラスメイトを呼び出せよ。俺とマユ姉はこれ以上コミュニケーションアップを図る必要はないじゃないか」
［繭子］：「それって、つまりワタシとふーちゃんは誰もが羨む素敵な結びつきがあるってこと？」
［吹雪］：「一緒に住んでるんだぞ？　わざわざ学校で話をせずとも家で話せば済むことじゃねぇか」
［繭子］：「ワタシは学校でふーちゃんとおしゃべりしたいのに」
［吹雪］：「そんな暇が教師にはないだろうが」
［繭子］：「搾り出せば多少は出てくるよ？」
［吹雪］：「その時間を他の作業に当てろよ。もっと有効的な時間の使い方があるはずだ」
［繭子］：「ワタシにとっては最良の使い方なのに……」
［吹雪］：「おしゃべりは有効的とは言わない。完全に無駄な時間だ」

［繭子］：「生きていく上で、無駄な時間なんて1秒だってないよ」
［吹雪］：「……急に哲学者みたいなこと言うなよ」
［繭子］：「こうしてる今だって、ワタシの過ごした大切な時間になってるんだから」
［吹雪］：「……綺麗にまとめようとしてるんじゃねぇ。まだ本題に入ってもいないだろうが」
［繭子］：「あーん、ふーちゃんノリ悪いよ～。もっと乗っかってきてくれなくちゃ」
［吹雪］：「黙らっしゃい！　そんなユルユルのノリに乗っかったところで、俺には何もメリットないんだよ」
［繭子］：「ワタシとしゃべれることはメリットじゃないの？」
［吹雪］：「今は最大のデメリットだ」
［繭子］：「が、ガーン……」
古いな、随分と……。
［吹雪］：「そんなことより、用件はなんなんだよ？」
［繭子］：「えー、もう？　もうちょっとおしゃべりしてたいのに」
［吹雪］：「仕事場に私情を持ち込むのはタブーだろうが。家に帰ったら聞いてやるから」
［繭子］：「ホントに？」
何故そんなに嬉しそうな顔をするんだ？
［繭子］：「絶対だからね？」
「あ、ああ」
［吹雪］：「……じゃあ、本題ね。えっとね――」
……。

カランド（２０）

［場所：教室］

マユ姉の用件はおおむねいつもどおりのものだった。自分はこれから用事があるから、変わりに帰りのホームルームにプリントを配ってほしいとのこと。毎週配られるクラス通信だ。

ここ一週間で起こった出来事やクラスの状況、コメントなどが掲載されている、マユ姉のオリジナルプリント。見た目はあんなんだけど、パソコンとかは人並みに使うことができるから、いつも一週間の最後の日などにせっせと自分の部屋で作業してるのを見かける。

時折クラスのことを聞かれることもある。何だかんだ言っても、マユ姉なりに教師として頑張ってるというのは俺も認めてる。抜けてるところは結構あるけどな。

［吹雪］：「はーい、みんな席着いてくれ。ちゃちゃっと帰りのホームルームしちゃうからよ」

俺の声にみんなは席に戻ってくれる。それと同時に、俺は渡されたプリントを端のほうから順番に配っていく。

［吹雪］：「おなじみのクラス通信です。家に帰ったら目を通してください。もう少ししたら冬休みに入ります、ちょうどテンションが上がってくる時期だと思いますけど、そういう時に事故っていうのは起きやすいから、注意しながら残りの期間を過ごしてください。最近は雪も降ってるから、路面は滑りやすいからそこも注意してください。――と、預かってた連絡はこんなところか。何か質問ある人はいるか？」

……特に質問はない、と。

［吹雪］：「じゃあ、今日はこれで終了です。今日も一日お疲れ様でした」

俺が締めたと同時に、生徒はわらわらと帰宅を始めた。ここで部活

に出る生徒と帰宅する生徒とに別れる。
［愛海］：「はーい、吹雪先生、質問でーす」
［吹雪］：「……何だ？　日野？」
［愛海］：「今日はどうして先生はホームルームに来なかったんですか？」
［吹雪］：「何か用事があるらしいぞ、まあそんなに時間はかからないって言ってたが。どんな用事なのかは知らん」
［愛海］：「そうなんだ」
［吹雪］：「何だよ？　先生に話すことでもあったのか？」
［愛海］：「最近ホームルームを大久保くんがやる機会が多いから、何かあったのかなーって思ってね」
［吹雪］：「ピアノの練習と教師の仕事を両立してるからな。その影響なんじゃないか？　別に本人はそこまで辛そうにはしてないようだったが」
［愛海］：「……それはどうかな？」
どうしてそんな悪そうな顔をする？
［愛海］：「女ってのはたっくさんの顔を持ってるんだよ？　知ってた？」
［吹雪］：「まあ、よく言うよな」
［繭子］：「繭子先生も、そんな風に装ってるだけで本当は極度の疲労を抱えているかもしれない。そして、最終的には授業中にバタリと倒れてしまう。うわ言で大久保くんの名前を仕切りに呼ぶが、大久保くんはその様子を見守ることしかできない。……そこから始まる物語ですよ」
［吹雪］：「……何処にでもありそうな物語設定だな」
［愛海］：「何を言うの？　平凡な話ほど素敵な物語ってないのよ？　平凡こそ非凡これ即ち世の中の必然！」
［吹雪］：「誰もそんな格言を求めてはいないぞ」
［愛海］：「ええ～？　結構自信あったのにな～。そうは思わない？　舞羽」

［舞羽］：「え！？　私」

どうやら青天の霹靂だったようだ。

カランド（２１）

［舞羽］：「な、何の話をしてたの？」
［愛海］：「今日の舞羽の下着の色」
［舞羽］：「ええ！？」
［吹雪］：「してねぇだろ！　そんな話は！」
［愛海］：「えー？　知りたそうな顔してたじゃーん？　今日の舞羽の色は～って？」
［吹雪］：「勝手に人の考えを捏造すんな！」
［愛海］：「ちなみに、今日は黒だったよ？　大人っぽいのを着用してました」
［舞羽］：「ええっ！？　どうして……それを……」
［愛海］：「あり？　ホントだったの？　口から出任せに言ってみただけなんだけど」
［舞羽］：「……ゆ、誘導されたー！？」
［愛海］：「いや、舞羽が自分でポロっと言っちゃっただけでよ」
［吹雪］：「お前が言い出さなければ済む話だろうが」
［愛海］：「またまた～、美味しいと思ってるんじゃないの～？　大久保くん？」
［吹雪］：「……思ってない」
［愛海］：「のわりにはちょっと黙ってなかった？」
［吹雪］：「そんなことはない」
［愛海］：「またまた～、そんな風には見えないわよ～？」
［吹雪］：「……これ以上言うと、さすがに黙っちゃいないぞ」
俺もそうだが、特に舞羽が。
［舞羽］：「ううううっ、愛海っ！」
［愛海］：「は、はいっ！」
［舞羽］：「急に話をフッたかと思えばこんな……あんまりじゃないの！」

［愛海］：「あー、ひょっとして怒ってる？」
［舞羽］：「笑ってるように見えるの？」
［愛海］：「い、いえ……」
当然だよな、急にどうでもいい話を振られ、更には下着のことまでバラされ……完全にトバッチリだ。
［舞羽］：「ものには限度ってものがあるの分かってるでしょう？　もう……」
［愛海］：「あー、私、やりすぎ、かな？」
［吹雪］：「自分の胸に手を当てて考えてみろよ」
［愛海］：「……杠さんほどはないわね、私」
誰がサイズを測れなんて言ったよ！
［舞羽］：「ちょっと、愛海。真面目に聞いてよ！」
［愛海］：「ご、ごめんなさい」
［舞羽］：「もういいよ。私、もう帰るから、吹雪くん、バイバイ」
［愛海］：「あ、舞羽？　ちょっと～！？」
舞羽は肩を怒らせながら、舞羽は教室を出て行った。
［愛海］：「あちゃー、ホントに怒ってるよ～」
［吹雪］：「自業自得だろう、完全に」
日野以外に悪い奴は誰もいない。
［愛海］：「いつもと同じだと思ったんだけどな～」
［吹雪］：「そりゃ下着のことバラされたら誰だって怒るだろう」
［愛海］：「だって大久保くんじゃない？　幼馴染でしょう？」
［吹雪］：「だとしたって、男女の関係だ」
一般的な恥じらいはあるだろう。
［愛海］：「むしろ逆だったかしら？　……失敗したわ」
［吹雪］：「追いかけたほうがいいと思うぞ？　舞羽、そこまで歩く速度早くないだろうから」
［愛海］：「そうね。無視されるのは困るものね、私、追いかけるわ」
［吹雪］：「ちゃんと仲直りするんだぞ」

［愛海］：「もちろん、じゃあ、また明日ね～」

……あんまり焦ってないのがすごいな。それだけ舞羽のことは熟知してるってことだろうか？　普通はあんな素振りされたら心配になるはずだが……。

まあ、あの二人に限って仲違いはないだろう。

「さて、とりあえず帰り支度は済ませておくか」

いつもならこの後、すぐに帰るところなんだが、今日はちょっとやることがある。

……。

カランド（22）

［場所：廊下］

［繭子］：「じゃあ、ゲームスタート！」
［吹雪］：「ゲームじゃねぇだろ。もっと真剣にやれ馬鹿ちん！」
チョップ。
［フェルシア］：「さすが吹雪くんね。鋭い一撃」
［吹雪］：「まあ、慣れてますから」
［繭子］：「慣れてほしくないよー、こっちは痛いんだから～」
［吹雪］：「何度も言うが、喰らいたくなかったらそういう行いは控えろ。こっちだってやりたくてやってるんじゃないんだよ」
［繭子］：「ワタシにはイキイキしてるように見える～」
［吹雪］：「気のせいだ。それを言ったら叩かれてるマユ姉だってイキイキしてるように見えるぞ」
［繭子］：「ええ～！？　そ、それはないよ～」
［フェルシア］：「マユ、意外とそういう気を持ってるのかもしれないわね？」
［繭子］：「ちょ、ちょっとフェル！？　変なこと言わないでよ～」
［フェルシア］：「嘘ではないんじゃないの？　自分の胸に聞いてみないと分からないわ」
［繭子］：「ワタシは……違うと思うよ」
何でそんなに自信なさそうに言うんだ。
［繭子］：「そんなことはいいの～。話を元に戻そうよ～」
［吹雪］：「最初におちゃらけた雰囲気にしたのは誰だよ？」
［繭子］：「誰なの～？」
［吹雪］：「ユーお前だよ。つまんないボケをかましてんじゃねぇよ」
目の前でグーを作ってやると、マユ姉は目をつぶって頭を抑えた。

［繭子］：「……あれ？　――ひゃっ！？」
頭に手を置くだけにしてやった。
［吹雪］：「ほら、さっさと本題に入れ」
［フェルシア］：「教師が生徒に頭を撫でられるって、何だか不思議な光景ね。――私もやってもらおうかしら」
［吹雪］：「いやいやいや、そんな滅相もない」
［フェルシア］：「そう？」
［吹雪］：「フェルシア先生は先生ですし、それに……身長差もありますから」
［繭子］：「確かにフェルのほうがふーちゃんより大きいもんね～」
［吹雪］：「あんまりはっきり言うなよ」
ちょっと気にしてるんだから……。
［フェルシア］：「まあまあ気にしないで。人間身長で決まるものじゃないんだから」
［吹雪］：「そうですよね」
フェルシア先生は優しいな。
［フェルシア］：「それよりも、いい加減本題に入ったほうがいいでしょう。このままじゃあ日が暮れちゃうわ」
［吹雪］：「というか――」
既に暮れ始めていた。
［繭子］：「あ、夕焼け～、綺麗だな～」
［吹雪］：「暢気なことを言ってる場合じゃないだろう。ほら、このままじゃ、完全に夜になっちまうぞ」
［繭子］：「あ、うん。えっとね――」

カランド（23）

これから俺たちがやるべきこと。
それは、マユ姉が見失ってしまった俺たちの家の鍵だ。これが、さっきおおむねと言った理由だ。
俺とマユ姉は常に家の鍵をそれぞれ1個ずつ常備している。見つからなくても俺は鍵を持っているから閉め出されたというわけではない。でも、やっぱり家の鍵をなくしてしまう、というのは少々困る。次に俺がなくしてしまったら事実上ゲームオーバーだからな。もしもの時のためにも、鍵は2つは必要だろう。
［繭子］：「だから、フェルには悪いけど、探すの手伝ってね」
［フェルシア］：「分かったわ」
［吹雪］：「すいません、完全に俺たちの問題なのに」
［フェルシア］：「いいのよ、私の仕事は終わってるし、家に帰っても1人だからね」
［吹雪］：「……何て返せばいいのか難しいですね」
［フェルシア］：「そこは、あれじゃない？　フェルシア先生なら、そんな心配は必要ないですよ、みたいな鼓舞」
［吹雪］：「あ、じゃあ――大丈夫です、フェルシア先生なら、すぐに良い人が見つかりますよ」
［フェルシア］：「え？　そうかしら？」
［吹雪］：「はい、全然問題ありません」
［フェルシア］：「ふふ、ありがとう」
言われたから言われたとおりに返したけど、本当にこれでよかったのかな？
［フェルシア］：「それで、マユは鍵にストラップとか付けてなかったの？」
［繭子］：「あ、えとね……こんな感じなのを付けてた」
［吹雪］：「アバウトにも程があるだろ」

そんな手でマルを作られただけじゃ形は見えてこない。
［フェルシア］：「もっと分かりやすく教えてちょうだい」
［繭子］：「うん。えっとね……小さなクマのストラップと、後暗いところだと光って見える石を付けてたよ」
［吹雪］：「夜行性のものだな」
［繭子］：「そう、暗いところに落としても大丈夫なようにって思って」
［フェルシア］：「だけど、無くしたのは昼間だったと」
［繭子］：「うっ……ワタシ鍵ちゃんたちに何か悪いことしたかな？」
［吹雪］：「管理が悪かったんだろ」
［繭子］：「……あまりにも的確且つ端的な切り返しに何も言い返せないよ」
［吹雪］：「当然だな。誰が悪いって言ったら、うっかり落としてしまったマユ姉が悪い」
［繭子］：「もっともです」
［フェルシア］：「落し物入れには入ってなかったの？」
［繭子］：「うん、確認したけどそれらしいものは届いてないって言ってた」
［吹雪］：「とすると、マユ姉の今日の日程を振り返っていくしかないな」
［繭子］：「うん、だね」
［フェルシア］：「じゃあ、最初のほうから振り返って行きましょう？　まずは――単純に考えれば、吹雪くんたちの教室ね」
［吹雪］：「じゃあ、ちょっと行ってきて見てみますよ」
［繭子］：「よろしく～」
職員室前から教室まではすぐだ。

カランド（２４）

［吹雪］：「ありませんでした」
教室全体をくまなく見てきたが、鍵らしいものは見当たらなかった。
［繭子］：「やっぱりなかったか～」
［吹雪］：「確かに、マユ姉以外にも先生は来るし、それにクラスメイトもいるから誰かしらが見つけてくれる可能性は高いもんな」
［フェルシア］：「それでも声が上がらなかったってことは、そういうことよね」
［繭子］：「だよね～」
［フェルシア］：「次行きましょう？　次、マユが行ったところは？」
［繭子］：「えっと、２年Ｄ組かな。今日は１限目から授業が入ってたから」
［吹雪］：「……それだったらさっきのタイミングでそう言ってくれよ。帰って来ちゃったじゃないか」
［繭子］：「あ、そうだったね。ソーリー」
［吹雪］：「その謝り方、何かムカつくな」
［繭子］：「とか言いながらも二年Ｄ組に向かってくれるふーちゃんだった」
［吹雪］：「マンガの終わりみたいな台詞を付けんなよ」
……。
［吹雪］：「あっちもなかったです」
［フェルシア］：「教室って可能性は、結構低いかもしれないわね。ないとは言えないから回らざるを得ないんだけれど」
［繭子］：「ひょっとして、掃除の時間の時に、ゴミと一緒に片付けられちゃったとか！？」
［吹雪］：「それはないだろう。ストラップ２つも付けてたんだろ？　普通は落し物だって考えるはずだ」

［繭子］：「拾った少年少女が心に闇を持っていたとしたら？」
［フェルシア］：「どっかにありそうね、そういう設定のノベルとか」
［吹雪］：「――確かにそうですけど、今は問題はそこじゃなくて。そんな後ろ向きなことは気にするだけ無駄だろう。落し物入れになかったってことは、学校の何処かにあるってことだ。学校に来るまではちゃんと持ってたんだろ？」
［繭子］：「うん、ちゃんとお尻のポケットからキーホルダーが顔出してたから」
［吹雪］：「なら、単純に考えて、学校の何処かにあるってことだ。ネガティブに考えるのは禁止だ。こっちの探す気もなくなってしまう」
［繭子］：「はーい」
［フェルシア］：「……本当に、どっちが上なのか分からなくなるわね。あなたたち二人は」
［繭子］：「ワタシのほうが上だよ？　スーツ着こなしてるもん」
［フェルシア］：「着こなしは特に関係ないでしょ？　物腰の柔らかさというか、バランスというか、全てにおいて吹雪くんのほうが上を言っているんだもの。他人が納得するのは困難を極めるでしょうね」
［繭子］：「そんなこと言われたって、ワタシのほうが年上なんだもん。年齢詐称だってしてないよ？」
［フェルシア］：「それは知ってるわ。でも……珍しい光景ではあるでしょうね」
［吹雪］：「プラス教師ですからね」
［繭子］：「……これ、新手のイジメ？　あんまり言われると、ワタシ泣いちゃうよ？　涙は女の子の強い武器なんだよ？　泣かせたらどんな状況でも男の子が悪いんだよ？　だから女の子は泣くんだよ？　自分が悪者にならないために」
［吹雪］：「……フェルシア先生。女性の涙って、そこまで深いも

のがあったんですか？」
［フェルシア］：「え？　いや、そこまでの深さはないと思うわよ？　第一、男の子に泣かせられるようなことはされたこともないし」
［吹雪］：「てことは、今のはマユ姉の出任せですよね？」
［フェルシア］：「まあ、６０％くらいはそうかしら？」
［吹雪］：「なら、よかったです」
本当だとしたら、女性に対しての考え方を改めなければいけなかっただろう。
まあ、とりあえず――。
［吹雪］：「誰もイジメてなんてねぇよ。フェルシア先生は自分の思うところを述べただけだ」
［フェルシア］：「大丈夫よ、マユが姉のほうだってことは知ってるから」
［繭子］：「……微妙に慰めになってないように聞こえるのはワタシだけかな？」
［吹雪］：「さあ、フェルシア先生次の場所に移動しましょう」
［フェルシア］：「そうね」
［繭子］：「あ～、二人ともちょっと待ってよ～。まだ場所も言ってないのに～」
……。

カランド（25）

［フェルシア］：「――ここの廊下にも落ちてないわね」
［吹雪］：「あっちにもありませんでした」
［繭子］：「以下同文」
あれから色々な場所を回ってみたけど、何処にも見当たらなかった。
［繭子］：「やっぱり、処分されちゃったのかな～？」
［フェルシア］：「うーん、目ぼしいところはそれなりに見て回ったわよね」
［吹雪］：「後、回ってないところは何処なんだ？」
［繭子］：「うーん、トイレと図書室くらいかな？」
［吹雪］：「ここまで来たんだ、ちょっとでも可能性があるところに行ってみよう」
［フェルシア］：「じゃあ、一番近い職員室トイレからね」
……。
［繭子］：「中を手分けして探そう～二人とも」
［吹雪］：「いやいや、待て待て」
［繭子］：「ん？　何か問題ある～？」
［吹雪］：「分かって言ってるんじゃないか？　問題大アリだろうが」
［繭子］：「――あ」
［吹雪］：「そう、マユ姉は女で俺は男だ。俺が女性トイレに入ったら学校を追い出されちまうだろう」
［繭子］：「ふーちゃんでもやっぱりダメか～」
［吹雪］：「ダメに決まってるだろ」
［繭子］：「じゃあ、ふーちゃんは男子トイレ探してよ。あるかもしれない」
［吹雪］：「いやないだろう、単純に考えて。マユ姉が男子トイレ入ったらそれはそれで問題になる

［繭子］：「少しの可能性があるかもしれないのに？」
［吹雪］：「ねぇよ。俺はここで待ってますから、二人は中を調べてきてください」
［フェルシア］：「ええ、じゃあちょっと待っててね」
［繭子］：「ふーちゃん、すぐに、すぐに戻ってくるから！」
何故今生の別れのような台詞を残したんだ、訳が分からん。
俺はトイレの前で二人を待つ。
……やはり冬は日が暮れるのが早いな。もうすっかり空は暗くなっていた。
今の時間は――まだ大丈夫か、完全下校まではまだ時間がある。
［フェルシア］：「はあ、ダメね。ここにもなかったわ」
フェルシア先生がトイレから出てきた。
［吹雪］：「あれ？　マユ姉は？」
［フェルシア］：「ああ、探索してたら催したらしいの。ちょっと待ってあげましょう」
［吹雪］：「あ、はい」
［フェルシア］：「ここにないとなると、後は図書室しかないわね」
［吹雪］：「あるといいんですけど」
［フェルシア］：「そうね。吹雪くんは、ちゃんと持ってるんでしょう？」
［吹雪］：「はい、俺は――このとおりです」
ベルトのところにチェーンを付け、アクセサリーと一緒に止めている。
［フェルシア］：「あら、何だかかっこいいことしてるわね」
［吹雪］：「こういうのはよくないかなってちょっと思うんですけど、家の鍵だったらいいかなって思って」
［フェルシア］：「別に問題ないと思うわよ。むしろ下手な細工よりも全然いいと思うわ」
［吹雪］：「それは、どうもありがとうございます」
［フェルシア］：「確かにそうやって付けてれば、すぐに落とした

ことにも気付けるわね
［吹雪］：「それに、前に落ちる可能性も高いですから、喧騒に対しても予防線を張れるんで」
［フェルシア］：「なるほど、考えるものね色々と」
［吹雪］：「無くすと困りますからね、家の鍵は」
［フェルシア］：「閉め出されてしまうものね、肌身離さず持っておかないと」
［吹雪］：「先生は、問題なしですか？」
［フェルシア］：「ええ、ちゃーんと持ってるわよ」
胸ポケットから取り出して見せる。
［吹雪］：「あ、先生は鈴を付けてるんですね」
［フェルシア］：「ええ、音が鳴れば落とした時に気付きやすいかなって思って」
［吹雪］：「賢い発想ですね」
［フェルシア］：「誰でも考えると思うわよ？　これくらいは」
［吹雪］：「でも、ほら、俺のとこは、見失っちゃってるんで」
［フェルシア］：「あ、そうね。そうだったわ」
［吹雪］：「アクセサリーも、ただ付けているだけじゃただの錘でしかないんですね」
［フェルシア］：「あ、今の何かすごく心に響く言葉だったわ」
［吹雪］：「ちょっと意識してみました」
［フェルシア］：「なかなかよかったわ。次の授業の時に使ってみようかしら？」
［吹雪］：「保健のですか？」
［フェルシア］：「ええ、臓器はアクセサリーみたいなもので――とかどうかしら？」
［吹雪］：「アクセサリーというには少々重要度が高すぎる気が……」
［フェルシア］：「確かに、体を作ってる器官だもんね。アクセサリーと言うにはちょっと軽んじすぎてるわね」

［吹雪］：「そんな大層な言葉でもないんで、無理に使おうとしないでください。フェルシア先生の生徒に対する思いを授業で伝えるだけでいいんですから」
［フェルシア］：「……また、素敵な言葉が飛び出したわね。吹雪くん、将来詩の本とか出したらどうかしら？」
［吹雪］：「え？　今のは特に意識もしてないんですけど」
［フェルシア］：「だとしたら才能かもしれないわ。今のうちに開花させておくといいことがあるかも」
［吹雪］：「え？　別にこれくらい誰でも……フェルシア先生だってやろうと思えばできますよ、きっと」
［フェルシア］：「そうかしら？　う～ん。……。……人こそが世界に巣食う魔物である」
［吹雪］：「とてつもなくダークな格言ですね」
［フェルシア］：「何か、頭を空にしたらそんなことが浮かんできて」
［吹雪］：「先生のほうが、向いてると思いますよ？　俺は」
［フェルシア］：「そんなことないわよ」
俺たちは声をそろえて笑った。
［吹雪］：「にしても、ちょっと出てくるの遅いですね」
［フェルシア］：「そうね。見てきましょうか？」
［吹雪］：「そうですね」
フェルシア先生はトイレに戻っていった。すると――。
［フェルシア］：「ちょっとマユ、何いびきかいて寝てるのよ！？　起きなさい！」
［繭子］：「にゃあっ！？　ワタシのコンソメスープが！」
［フェルシア］：「訳分かんないこと言ってないで、早く済ませて出てきなさい！」
――出てきたら、とりあえずゲンコツだな。

［繭子］：「うう、痛かった～」
［吹雪］：「自業自得だ。つかどうやったらトイレで居眠りできるんだよ」
［繭子］：「え？　全てを有りのままに受け入れたら自然と……」
［吹雪］：「有りのままに受け入れたらダメなんだよ。今自分が置かれてる状況を理解してれば寝てる暇がないことくらい分かるだろうが」
［繭子］：「だって、睡魔にはどうやったって――」
［吹雪］：「それ以上言うようなら、ゲンコツフルコースだぞ」
［繭子］：「ぜ、絶対に見つけるよ、家の鍵」
マユ姉は職員室に戻り、図書室の鍵を借りに行った。
［吹雪］：「重ね重ね申し訳ないです、フェルシア先生」
［フェルシア］：「あはは、まさかトイレで眠りこけてるとは私も予想外だったわ」
［吹雪］：「なかなかできないですよね、あんな器用なことは」
［フェルシア］：「あれがマユの才能かしらね」
［吹雪］：「何処でも寝れる、ですか？」
［フェルシア］：「ええ、きっとどんな辺境の地でも安眠できるでしょうね」
［吹雪］：「良いんだか悪いんだか……」
［フェルシア］：「確かに、危機感はゼロね。私は欲しくない才能だわ」
［吹雪］：「いや、俺もいりませんよ」
［フェルシア］：「気が合うわね、私たち」
［吹雪］：「そうですね」
［繭子］：「ん？　何の話してたの～？」
［フェルシア］：「マユは何処でも生きていけるって話よ」

［繭子］：「え～？　無理だよ～ワタシふーちゃんがいなかったら今ここにいないもん」
［吹雪］：「そんな自信満々に言うことじゃないだろ……」
［繭子］：「だってホントのことだもん。ずっとレトルトじゃ体壊しちゃうでしょ～？」
［フェルシア］：「自分で作るっていう選択肢はないのね？」
［繭子］：「ないです！　もちろん」
［吹雪］：「自信持っていうな」
［繭子］：「ふーちゃん、これからもワタシを生かしてね」
［吹雪］：「……考えておく」
［繭子］：「二つ返事はしてくれないんだ」
［吹雪］：「これからの態度次第だな。つか、早いとこ図書室行こうぜ」
［繭子］：「あ、そうだね。レッツゴー！」
寝たからだろうか、何かマユ姉の声に張りが戻っていた。

カランド（27）

［場所：図書室］

入ってすぐだった。
［繭子］：「あ、あった」
図書室の中央にある机の上に、書置きと共にキーホルダー付きの鍵が置いてあった。
［フェルシア］：「落し物って書いてあるわね」
［繭子］：「そっか、ここに落ちてたんだ～。あ～見つかってよかった～」
心底安心した様子でマユ姉は鍵を閉まった。
［吹雪］：「掃除してる最中に誰か拾ってくれたんでしょうね」
［フェルシア］：「そうね、落し物って書いてくれてるわけだし。親切な人だったのね」
とりあえず、見つかって何よりだ。
［吹雪］：「もう無くすなよ？　マユ姉」
［繭子］：「うん、肌身離さず持ってるよ～」
――最後は随分とあっけなく、鍵は見つかった。まあどんな形であれ、無くしてしまったわけではないからいいとしよう。
［繭子］：「ふーちゃん、フェル、手伝ってくれてありがとう」
［吹雪］：「まあ自分家のことだからな」
［フェルシア］：「いいのよ、見つかってよかったわね」
こんな顔されたら、何にも言えないよな。

マルカート（1）

12月15日（水曜日）

［場所：家の前］

［舞羽］：「おはようございまーす」
［吹雪］：「おいっす、舞羽。おい、早くしろよマユ姉」
［繭子］：「ちょっと待って～、身嗜みは女の嗜みだから～」
一丁前なことを抜かしやがって。そんなこと言えるなら飯食ってるときに口の周りだって気にできるだろっての。
［吹雪］：「後3分ででかせ。それ以上経ったら置いてくからな」
［繭子］：「うん、分かった～」
洗面所からそんな声が返ってきた。
［吹雪］：「悪いな、ちょっと待ってあげてくれ」
［舞羽］：「うん」
［吹雪］：「にしても、随分軽そうだな。そんな軽装備で大丈夫なのか？」
［舞羽］：「あんまり一杯持って行っても嵩張っちゃうし、必要最低限のものでまとめてみたの。もし足りなかったら取りに戻るつもりだよ」
［吹雪］：「確かに、泊り込みって言っても学校だもんな。そこまで念入りに準備する必要もなかったか」
［舞羽］：「するに越したことはないけどね。2週間弱の長期滞在だから」
［吹雪］：「まあ、今更荷物再整理してる暇はないもんな」
今日から俺たちは、以前に予定していた学校泊り込みの練習に励むことになる。今日からスタートということで、練習前に一旦集まって軽い説明がある。部屋などは知らされてないからどうなるかはま

だ分からない。個人的には、少し広いスペースがいいんだが、その願いは少々贅沢だろうか？　まあ、言ってみれば分かる話か。

［繭子］：「お待たせ～。大久保繭子、ただいま登場！」

［吹雪］：「――よし、行くぞ舞羽」

［繭子］：「華麗にスルーされた～」

［吹雪］：「戯言を言う前に、何か言うことがあるだろう。ん？」

［繭子］：「うっ……出発を遅らせてしまい、どうもすみませんでした」

［吹雪］：「気をつけるように。これからは二人だけの生活じゃないんだ、教師らしいところをちゃんと見せろよ」

［繭子］：「うん、頑張る！」

家に鍵をかけ、学校へ向けて出発する。

……。

マルカート（2）

［場所：学校への道］

［繭子］：「んふふ。未来のワタシに捧げるわ～、悲しみのバラードを～」

何故未来の自分にそんなものを送らないといけないんだろうか？

［舞羽］：「自分改革でもするのかな？」

［吹雪］：「さあな、本人しか分からないだろう」

［舞羽］：「でも、何だかいつもより楽しそうだね、マユさん」

［吹雪］：「昨日からそうなんだ。荷物詰めるときもすっげぇうきうきしながらやってたし、どうやらよっぽど楽しみにしてたらしい」

［舞羽］：「確かに、こんな機会は滅多にないもんね」

あれでも教師だ。こんな泊り込み生活は、学生以来してなかっただろうしな。思い出深いのかもしれない。

［舞羽］：「マユさんの気持ちも、結構分かるかも」

［吹雪］：「だがしかし、ちょっと緊張もしてると」

［舞羽］：「吹雪くん、私の考えてること分かるんだ」

［吹雪］：「ふっ、ナめるなよ？　この俺だぞ？　舞羽のことは６０％くらい知ってる」

［舞羽］：「お、思ったより半端な数字……」

［吹雪］：「あんまり自分を高くみてはいけないものだ」

［舞羽］：「そこは、もうちょっと高くみても……付き合い長いんだから」

［吹雪］：「お、嬉しいこと言うな。じゃあ７８％くらい？」

［舞羽］：「う、うん。どうしてそんな数字なのかは分からないけど……」

［吹雪］：「そっか、俺は舞羽に関しては物知りでいれるんだな」

［舞羽］：「吹雪くん、元々物知りだと思うんだけど」

［吹雪］：「でもよ、俺が舞羽のことを知ってるってことは、逆もまた然りってことか？」
［舞羽］：「そう、だね。私も吹雪くんのことは結構知ってると思う」
［吹雪］：「おお、じゃあ俺の身長は？」
［舞羽］：「１７０くらいかな」
［吹雪］：「おお、やるな。じゃあ、俺の体重は？」
［舞羽］：「えっと……５８くらい？」
［吹雪］：「すげぇな。じゃあ、とっときの問題だ。１年の夏の時に受けた魔法科学のテストでの俺と舞羽の点数差は？」
［舞羽］：「うーんと……確か、吹雪くんが７６点で、私が６７点だったはずだから。９点？」
［吹雪］：「……お前、俺より俺のこと分かってるかもしれんぞ。やるな、舞羽」
［舞羽］：「えへへ、私もたまには頑張れるんだよ」
舞羽の俺に関する知識は俺ペデ○アを記載できるくらいかもしれない。というかだ――。
［吹雪］：「俺の体重って、何処で見たんだ？　俺基本、風呂入る時しか体重計らないんだが」
しかも、その時はパンツ一丁だ。
［舞羽］：「え？　えっと……フィーリング、かな？」
［吹雪］：「のわりにはちょっと慌ててるぞ。――まさか、覗き？」
［舞羽］：「し、してないよ～！　ちゃんと理由はあるから～」
［吹雪］：「うん、言ってみなさい」
［舞羽］：「２年生始まって早々、身体計測があったでしょう？学園全体を使って」
［吹雪］：「うん、確かにあった」
［舞羽］：「それが終わった後、みんなでお話してる時にチラっと……ね？」
首を傾げて俺の顔を覗き込んでくる。

［吹雪］：「なるほど、なら仕方ないな。つか舞羽よ、男の身体計測の結果なんか見て楽しいのか？」
［舞羽］：「ええっ！？　別に私はそういう趣味があるんじゃなくて！　ただ、ホントにチラっと見えたのを覚えてただけだよ？　ホントだよ？」
［吹雪］：「そうか？」
［舞羽］：「うん、もちろんだよ」
［吹雪］：「……分かってるよ、舞羽にそんな変な趣味があるなんて始めから思ってねぇよ」
［舞羽］：「本当？」
［吹雪］：「こんなもんじゃ、手緩いだろ？」
［舞羽］：「そ、そういう解釈なの！？」
［吹雪］：「はっはっは、本当に舞羽はおもしろいな」
［舞羽］：「もう……イジワル」
［吹雪］：「悪かったよ。まあ、見えちまったものはしょうがないな。許すしかあるまい」
［舞羽］：「そ、そう？」
［吹雪］：「その代わりと言っちゃあなんだが、今度舞羽の身体計測の結果見せろ。そしたらチャラにするぜ」
［舞羽］：「え、ええっ！？　そ、それは、ちょっと……」
［吹雪］：「え？　どうして？」
［舞羽］：「だって、ほら……女の子の身体計測には、男子にはない計測があるから、ね？」
［吹雪］：「ああ、なるほどな。まあ、分かった上で俺も聞いてるわけだが」
［舞羽］：「ええ？　そんな……じゃあ、私墓穴？」
［吹雪］：「墓穴だな」
というか、本当に女子はそういうのも計測するんだな。新しい知識が増えた。

マルカート（3）

……こんな会話、杠とかの前でしてたら殺されるだろう。これは、舞羽だから許されるものだ。

［吹雪］：「心配するな、見ようなんて思ってないから。そういうのは、記憶の大事な奥底に閉まっておくのが一番のはずだからな」

［舞羽］：「う、うん。ありがとう？」

［吹雪］：「いやいや、気にすることはない」

むしろ、ありがとう言わないのは俺のほうかもしれない。

［繭子］：「ふーちゃーん、雪降ってきたよ～」

［吹雪］：「あれ？　マジか？」

空を仰いだ直後、白い結晶が俺の眼球に滑り込んできた。

［吹雪］：「うっ！　くそ、やられた」

［舞羽］：「あははは、あっ！？」

横で同じように目を抑え込む。

［舞羽］：「ううう、やられたよ……」

［吹雪］：「自分は大丈夫と思いこむ、その油断が命取りになるぞ」

［舞羽］：「うん、今身に染みて感じてるよ」

［繭子］：「あはは、二人ともおもしろいね～」

［吹雪］：「油断してると、マユ姉も同じことになるぞ」

［繭子］：「大丈夫～、ワタシは二人より年上だから～」

［舞羽］：「年上とか全く関係ないと思うんだけど……」

［吹雪］：「まあ、聞き流してやってくれ」

［舞羽］：「う、うん……積もっちゃうかな？」

［吹雪］：「予報ではどうだったんだ？」

［舞羽］：「降るとは言ってたけど、積もるとは言ってなかったような気がする」

［吹雪］：「まあ、神のみぞ知るって感じか？　積もったら積もったでいつもと違う風景が見えていいんじゃないか？　別に嫌いじゃ

ないだろ？　雪」
［舞羽］：「うん」
［吹雪］：「風情を楽しもうぜ」
［繭子］：「えーい！」
［吹雪］：「わぷっ！」
［繭子］：「わーい、当たった～。オリジナル変化球、“マユーン”」
このチビ介は、風情を欠片も分かってないようだ。
［舞羽］：「うっすらだけど、積もり始めてるみたいだね」
［吹雪］：「よーし、もう1球」
［繭子］：「そうは、させるか！」
［吹雪］：「にゃああっ！？」
俺はマユ姉の額に雪球をぶつけた。
［繭子］：「うう、痛冷たい」
［舞羽］：「新しい単語だね」
［吹雪］：「思い知ったか、ちんちくりんが」
［繭子］：「何～？　なりたくてこうなったんじゃないんだぞ～？」
［吹雪］：「ふん、そんなの理由にならんわ。首を洗って出直して来い」
［繭子］：「むむ、負けるもんか。我の本当の力、今こそ見せてやる」
何だ、そのありきたりの展開は……。
［繭子］：「とりゃあっ！」
［吹雪］：「喰らうかよ！　そらっ！」
――結局、登校するまでの間、マユ姉の雪合戦に付き合う羽目になった。

マルカート（4）

［場所：社会科室］

［セフィル］：「――ここが、しばらく君たちの寝床となるところだ」

案内されたのは、社会科教室だった。

［セフィル］：「広さ、暖房器具、料理をする時に利用する家庭科室からの近さ、その他諸々の条件を一番満たしているのがこの教室だったから、みんなにはここを利用してもらうことにする。よろしいかな？」

全員が首を縦に振った。

［セフィル］：「夜までに、ここに布団を導入してもらう予定だ。誰とどんな風に寝るかは君たちの自由だ。自分のお気に入りポジションは今のうちに確保しておくといい」

［聖奈美］：「あの、学園長、一つ いいでしょうか？」

［セフィル］：「何だ？　聖奈美」

［聖奈美］：「この中に一人、異性が混じっていることはお忘れではありませんよね？」

……明らかに俺のことだな。

［セフィル］：「うむ、お忘れではないぞ」

［聖奈美］：「寝る時も、あたしたちは大久保と和気藹々しなければいけないんですか？」

［セフィル］：「何だ？　イヤなのか？」

［聖奈美］：「親しき仲にも、です。いくら仲の良い異性でも、就寝場所は違うじゃないですか？」

［セフィル］：「それはつまり、聖奈美は吹雪を男として意識してしまって寝るどころの話じゃない、ということか？」

［聖奈美］：「なっ――！？　ち、違います！　そんなことは全く

ありません！」
すごい剣幕で学園長の言葉を否定した。
［聖奈美］：「ど、どうしてあたしが大久保を意識しなくちゃいけないんですか？　大久保のことなんて、毛ほども意識してません」
随分な言われようだな。
［聖奈美］：「あたしはあくまで、一般的な意見を言ってるだけです！」
［セフィル］：「――ということだが、みんなはどうなんだ？　吹雪と同じ場所で寝るのは嫌か？」
［繭子］：「ワタシは全然平気だよ～、姉弟だし、昔はよく一緒に寝てたから～」
［舞羽］：「吹雪くんは、一般的なマナーをわきまえてるはずだから、特に問題はないと思うけど」
［カホラ］：「でも、どうしたって男の子に変わりはないのよねー。私はどっちでもいいわよ」
［セフィル］：「ふむ、吹雪は女性からの評価が高いようだな」
［吹雪］：「大半が顔見知りですからね」
そのうち二人は家族のようなものだ。
［吹雪］：「だったら、こういうのはどうだ？　杠」
［聖奈美］：「何よ？」
［吹雪］：「お前は、寝てる時に俺の顔がチラつくのが嫌なんだよな？」
［聖奈美］：「い、嫌っていうか……その、やっぱり、気になるわよ」
さっきはあんなに否定していたのに、結局気になってるのかよ。まあいい。
［吹雪］：「だとしたら、これでどうだ？」
俺は部屋の奥のほうにあったカーテンを引いた。
［吹雪］：「これだったら、俺の姿は見えないしいいだろ？　常にここに居ろっていうのはさすがに寂しいから寝る時だけにしてくれ

ると嬉しいが。どうだ？」
［聖奈美］：「……いいの？」
［吹雪］：「だって、じゃないと寝れないんだろ？」
［聖奈美］：「ね、寝れなくはないわよ？　ないけど……」
［吹雪］：「なら、こうしようぜ。これで解決」
［聖奈美］：「あ、ありがと」
顔を背け、小さな声でそう呟いた。

マルカート（5）

［セフィル］：「説明するぞ。ここに寝泊りする人数は6人、私は色々とやることがあるので泊まることはできないが、変わりにフェルに監督の先生をお願いすることにした。何か不便なこととかがあったらフェルに伝えてくれ」

［聖奈美］：「よろしくね、みんな」

［繭子］：「ワタシも先生なのに……何で監督はフェルなんだろ？」

それは、マユ姉が監督だと色々と大変だからだろう。言わずとも分かることだ。

［セフィル］：「期間は今日を含めて16日。午前中の練習は今までどおりだが、今日からは夕食後に夜の練習をメニューに加えていく。いつもよりもハードなスケジュールになると思うが、これをやるとやらないとではピアノの演奏、そのアシストの出来が確実に違ってくる。みんな真剣に取り組むように」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「夜の練習は2時間、基本的には8時から10時まで。消灯は12時、強制的に電気を消したりはしないから、なるべくその時間に寝れるように準備をすること。風呂は申し訳ないんだが、学校に設置してあるシャワーを使ってくれ。生憎湯船はこの学校にはないんだ。女子には少々キツイかもしれないが、我慢してくれ。――と、大まかにはこんな感じか。何か質問はあるか？」

特に誰も挙手はしなかった。

［セフィル］：「時折私も様子を見に来る。その時はフレンドリーに振舞ってくれ。では、泊り込み練習会、よろしくお願いします」

［全員］：「よろしくお願いします」

［セフィル］：「じゃあ、荷物の整理をして……30分後に練習を始めれるように。それでは、私は一旦失礼する」

学園長は踵を返して歩いていった。

［繭子］：「ついに始まるんだね～、みんなとの泊まり込み生活が」
［吹雪］：「マユ姉、決して遊びじゃないんだからな？　俺たち自身を成長させるための大事な強化生活だってことを忘れるなよ？」
［繭子］：「大丈夫、簡単には忘れないから」
［吹雪］：「いや、絶対に忘れるな」
［繭子］：「だとしても、うきうきしちゃうよ。みんなと同じところに泊まって、夜ご飯食べて、学生時代の旅行を思い出すよ～」
やっぱり、旅行と重ね合わせていたんだな。

マルカート（6）

［カホラ］：「チームワークも大事な力になるわけだから、この期間を使ってもっとみんなのことを知らないといけないわね」
［繭子］：「じゃあ、一緒にお風呂入らないとダメだね」
［フェルシア］：「……どうしてそこにつながるの？　マユ」
［繭子］：「泊まり込みって言ったらお風呂でしょう？　前からしゃべりたかったあの子やこの子とお近づきになる最大のチャンス。レッツ・バスタイム！」
［フェルシア］：「……さっき学園長が言ってたでしょう？　この学園には湯船はなくて、シャワーしか設置されてないって」
［繭子］：「うん、知ってるよ。だから、一つのシャワーに二人で入るの」
［聖奈美］：「む、無理ですよ。一つ一人しか入れないようにできてるものですよ、ああいうのは」
［繭子］：「そういうのは、気の持ちようだよ聖奈美ちゃん。人間成せば成るようにできてるものだから」
［聖奈美］：「そんなことに全身全霊を注ぐ必要性はないんじゃ……」
［繭子］：「でも、ワタシはみんなと仲良くなりたいから。ダメかな？」
［聖奈美］：「ううっ……」
マユ姉の子供のような純真な眼差しに少々返答が躊躇われているようだ。そろそろ止めるか。
［繭子］：「あいたっ！？」
［吹雪］：「そのへんにしとけ。仲良くなりたいって思ってるなら、そんなくだらないことで端に追い込んでるんじゃねぇよ」
［繭子］：「ええ～くだらないことじゃないよ～ワタシは本気だよ～」

［吹雪］：「そんなこととしなくたって、仲良くなる方法なんていっぱいあるだろう。もっと頭使って考えろ」
［繭子］：「ぶーぶー」
［吹雪］：「反対意見は受け付けん」
［繭子］：「うう、仕方ないな～」
マユ姉はほっといて、いまのうちに聞いておこうか。
［吹雪］：「なあ、今日の夕食を担当してくれる人は誰なんだ？」
［舞羽］：「あ、はい。私です」
舞羽が片手をぴっとあげた。
［吹雪］：「買い物係の俺としては、何を買ってくればいいかを教えてくれるとありがたいんだが」
［舞羽］：「あ、そっか。そうだよね」
［吹雪］：「まだ何を作るか決まってないのか？」
［舞羽］：「うん、選択肢は色々あるから」
［フェルシア］：「さすが、料理が得意な人が言えるコメントね」
［舞羽］：「え、そういう意味で言ったわけじゃ」
［繭子］：「すごいな～、ワタシなんて料理の選択肢なんて存在しないのに～」
［フェルシア］：「できる子だものねー、舞羽ちゃんは」
［繭子］：「……何か言い方に引っかかりを覚えたのは気のせいかな～？」
［フェルシア］：「気のせいでしょう？」
［吹雪］：「どうする？　舞羽よ」
［舞羽］：「うーん、そうだねー」
［吹雪］：「そういえば、家庭科室の冷蔵庫は使用しても大丈夫なんですか？」
［フェルシア］：「ええ、大丈夫よ。いつもは授業がない時はコンセントを抜いておくんだけど、今日のために予め入れておいたわ。いつでも食材を保存可能よ」
［吹雪］：「それはよかったです」

［聖奈美］：「そうなると、なるべく食材は買いためて余ったものを使いまわしていったほうがよさそうね。食費はなるべく抑えておかないと」
［フェルシア］：「あ、ちなみに食費は5万円預かってあるわ。足りなくなった時は常時連絡を。でもなるべくならこの予算で抑えてほしいと言っていたわ」
［吹雪］：「そのお金って、学園長のですよね？」
［フェルシア］：「おそらくね」
［聖奈美］：「節約を常に念頭においていきましょう」
［カホラ］：「コンセプトは、安くてお腹いっぱいってところかしら？」
［舞羽］：「そうですね、……じゃあ、吹雪くん」
［吹雪］：「おう」
［舞羽］：「吹雪くんのお任せで、食材を買ってきてくれないかな？　なるべく色んな料理に使用可能で、長期保存が可能なものを中心で」
［吹雪］：「そんなアバウトでいいのか？」
［舞羽］：「作る料理は、買ってきてくれた食材によって決めるよ。夕食までにいくつかのメニューをイメージしておくから」
［聖奈美］：「須藤さん、そんなに大久保に頼って大丈夫なの？」
［舞羽］：「うん、問題ないよ。吹雪くんは男の子だけど、すごく買い物慣れしてるから。目利きはかなりの腕前だよ」
［繭子］：「人呼んで、半額ハンター」
［聖奈美］：「そ、そうなんですか？」
［繭子］：「ううん、思いついたから言ってみたの」
もちろん俺も初耳だ。
［舞羽］：「信頼していいと思うよ」
［聖奈美］：「そういうなら、信じましょう」
［吹雪］：「じゃあ、何円分買ってくるといいかな？」
［舞羽］：「じゃあ、とりあえず５０００円分くらいかな？」

［吹雪］：「うん、了解した」
なるべく安くて使い回しができて、長期保存が可能なものか。忘れないようにしよう。
［カホラ］：「さあ、そろそろ練習に行きましょう」
［聖奈美］：「頑張らないと」
みんなやる気満々だな。俺も頑張らないと。
そして今日も練習が始まる。

マルカート（7）

［場所：グランド］

［セフィル］：「さて、基礎体力も大分付いてきたはずだ。そろそろ本格的にホーリーカルムの練習に入っていこうと思う」

［吹雪］：「詠唱練習ってことですか？」

［セフィル］：「うむ、泊まり込みに入ったことだし、時間もたっぷりある。ここから本番に向けて仕上げるつもりだ」

先程早めに退出した学園長だったが、俺が走り込みを終えた頃にこうしてやってきてくれた。

［セフィル］：「すでに承知ではあると思うが、ホーリーカルムを詠唱する際に膨大な魔力を必要とする。あまり何度も練習すると大事に至る可能性もあるから、回数制限を設けていくつもりだ」

［吹雪］：「今の俺の魔力で、ホーリーカルムを唱えることはできるんですか？」

［セフィル］：「ここまでの練習は魔力の増加とそれを保つためのスタミナを得ることがメインだった。何度も、とはいかないが、詠唱することはおそらく可能なはずだ」

［吹雪］：「そうですか」

ここまで、自分なりに真面目に練習はしてきたつもりだ。努力が身を結ぶといいんだが……。

［セフィル］：「くれぐれも、無理はしないように。詠唱するだけで疲れる魔法だ。疲れた体で唱えるなど、自殺行為のようなものだからな」

［吹雪］：「はい、分かりました」

［セフィル］：「とりあえず、準備をしよう。フェル、例のものを」

［フェルシア］：「はい」

返事をすると、フェルシア先生は機械らしきものを持ってきた。

［吹雪］：「これは、何ですか？」
［セフィル］：「魔力の変動を測る機械だ。今は無色だが、魔力の変動が激しくなればなるほど機械はより鮮やかな色を示す」
［フェルシア］：「つまり、色が鮮やかになればなるほど、他の人に力を分け与えることができてるってわけ」
［吹雪］：「すごい機械もあるもんですね」
［セフィル］：「日々世界は進歩しているからな。魔法は使い方を間違えさえしなければ立派に生きる糧になる。その結晶がこの機械というわけだ」
［吹雪］：「素敵ですね、そういうの」
［セフィル］：「うん。……いかん、感動して終わりではなかったな」
［吹雪］：「そ、そうですね」
［セフィル］：「話を戻そう。吹雪、体に疲れはあるか？」
［吹雪］：「さっきのランニング以外はないと思います」
［セフィル］：「そうか、なら少し休憩を挟んでからにしよう。万全な状態で望むことが一番大事だ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「今のうちに、機械の使い方を教えておこうか。フェル」
［吹雪］：「はい」
フェルシア先生は、機械に付いている腕輪を右腕に巻き付けた。すると、機械の下に二桁の数字が表示された。

マルカート（8）

［セフィル］：「この数字は、今現在のフェルの魔力のパーセンテージを示している。今のフェルの残り魔力は５５％、つまり４５％を消費してるということだ」

［吹雪］：「これを引き上げることが俺の仕事ってわけですか」

［フェルシア］：「そういうことだ。フェルにはあらかじめ魔法を空打ちして魔力を消費してもらった。吹雪には、フェルに魔力を分け与えてもらう」

［フェルシア］：「機械はもう1台あるから、吹雪くんもこれを付けてちょうだい」

［吹雪］：「はい、分かりました」

フェルシア先生の真似をして、腕に巻いてみる。すると、機械に俺のパーセンテージが表示された。

［セフィル］：「ふむ、９４％か。後６％はどこにやったんだ？」

［吹雪］：「え？　特に身に覚えはないですが」

［フェルシア］：「よくあることよ。完全に１００％になることなんてあんまりないから。知らず知らずに消費してることなんて日常茶飯事よ」

［吹雪］：「そうなんですか？」

［フェルシア］：「ええ、気にすることはないわ。９０％以上は１００％と同じようなものだから」

［セフィル］：「うん、さして問題はないから大丈夫だろう」

それなら一安心だ。

［セフィル］：「ホーリーカルムが見事成功すれば、吹雪の魔力のメーターが減り、フェルの魔力メーターが上昇するわけだ。しかし、ここで注意しなければいけないのは、吹雪の魔力が1減ったからといって、フェルの魔力が1上昇するとは限らないということだ」

［吹雪］：「それはもちろん、フェルシア先生のほうが力を持って

いるからですね」
［セフィル］：「そういうことだ。人それぞれだからな、吹雪の１００％とフェルの１００％にはそれなりの違いがある。まあ、思うように供給できてるか不安になるかもしれないが、吹雪のメーターが減ったぶんだけちゃんとフェルに力はいってるはずだから心配はしなくていいからな」
［吹雪］：「分かりました」
［フェルシア］：「吹雪くんの力、私に分けてね」
［セフィル］：「……フェル、今の発言何だかエロかったな」
［フェルシア］：「え？　そうですか？　自覚はなかったんですけど」
［セフィル］：「そうやって、無意識に男を誘惑しているんだな。恐ろしい子だ」
［フェルシア］：「それはないと思いますよ。だって、吹雪くんは何にも思ってない顔してますし」
［セフィル］：「何？　吹雪、何にも感じなかったか？」
［吹雪］：「え？　ええ、まあ」
［フェルシア］：「学園長、ひょっとして欲求不満なんじゃないですか？」
［セフィル］：「何？　そんなことはないと思うんだが……」
［フェルシア］：「自分で自分に言い聞かせてるって可能性もありますよ？」
［セフィル］：「うむ……後で自問してみるとしよう。――と、話が反れてしまった、というか私が反らしてしまったのか。すまんな、吹雪」
［吹雪］：「いえ、気になさらず」
［セフィル］：「じゃあ、教えていこうか。まず、ホーリーカルムを詠唱するにおいて大事なのは集中力だ。自分の力を分け与える相手のことを思い浮かべて深く祈ること。相手を助けたいと思う心が、自分の力を分け与える力に変わるんだ」

［吹雪］：「集中か……」
［セフィル］：「問題ないと思うが、あの４人との仲は良好か？」
［吹雪］：「はい、俺は別に問題ないと思ってます」
［セフィル］：「そうか、よかった。嫌いな相手に力を与えたいとは思わないだろうからな」
確かに……。

マルカート（9）

［セフィル］：「ちなみに、私たち二人は嫌いか？」
［吹雪］：「え、ええっ！？」
［フェルシア］：「が、学園長ちょっと質問がストレートすぎですよ」
［セフィル］：「しょうがないじゃないか、気になるんだもん」
もんって、また学園長らしからぬ台詞が……。
［セフィル］：「大事なことじゃないか。もし吹雪が私たちを嫌いだったら、練習にはならないんだぞ」
［フェルシア］：「それはそうですけど、もうちょっとこう包んだ言い方というか……」
［セフィル］：「単刀直入に聞いた方が手っとり早いだろう。どうだ？　吹雪。君から見て私たちという存在は」
［吹雪］：「……そんなの、決まってるじゃないですか」
［セフィル］：「……」
［フェルシア］：「……」
［吹雪］：「俺はお二人のこと、好きですよ」
［セフィル］：「吹雪……」
［フェルシア］：「吹雪くん」
［吹雪］：「お二人が今まで練習に付き合ってくれたから、ホーリーカルムを詠唱できるところまで漕ぎ着けることができましたし、こうやって練習を見守ってくれてるだけで、俺たちはみんな頑張ろうって思えるんです。お二人には本当に感謝してます」
……何だこの空気は。まるで二人に告白してるみたいだ。というか俺の発言からしか見ていないなら明らかにそうとしか見えないだろう。
［セフィル］：「君はできた男だな、吹雪。おばさん、少しドキっとしてしまったぞ」

［吹雪］：「お、おばさんって……学園長まだまだ若いでしょう」
［セフィル］：「そう、そういうところだ、君の素敵なところは。すぐに優しいフォローを入れてくれる。やろうとしてもなかなかできることではない」
［吹雪］：「え？　俺、本当のこと言っただけですけど」
［セフィル］：「……いかんな、このままでは」
［フェルシア］：「そうですね、生徒と教師のはあまり受け入れられませんから」
［吹雪］：「あの、お二人とも？」
［フェルシア］：「ああ、はい。ありがとう吹雪くん、私、普通に感動しちゃったわ。吹雪くんにそんな風に言ってもらえて、私は幸せ者だわ」
［吹雪］：「そんな大層なことを言ったつもりはないですけど」
［フェルシア］：「でも私たちは嬉しかったわ。ありがとね」
［吹雪］：「は、はい」
［セフィル］：「よし、これで気兼ねなく練習することができるな」
そうだ、本題はそこだった。
［セフィル］：「フェルに力を与えることに抵抗はないんだな？」
［吹雪］：「はい、もちろんです」
［セフィル］：「うむ、了解した。いいか？　唱え終わったからといってそこで終わりではないからな。　むしろそこからが始まりと言っていい。集中力の維持、それを忘れないように」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「よし、では詠唱の仕方を教えよう。吹雪、こっちに」
［吹雪］：「はい」
……。
……。
……。

マルカート（10）

［セフィル］：「準備はいいか？」
［吹雪］：「はい、オッケーです」
［セフィル］：「じゃあ、自分のタイミングで始めてくれ。何かあったらサポートに入る」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「よし、ではスタートだ」
［吹雪］：「……集中」
自分に言い聞かせ、心を深く静める。そして、魔力を分け与えが上手く言っていることを頭にイメージする。
――よし。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
詠唱すると、絹のような光が、フェルシア先生を包み込んだ。
［セフィル］：「いいぞ、そのまま、集中だ」
うなずくだけにして、俺は目を閉じ、状態を無心に近づける。
……。
しばらくすると、俺の体に徐々に変化が訪れ始めた。
［セフィル］：「よし、いい調子だ。フェル、どうだ？」
［フェルシア］：「ちょっとまだ、メーターに動きはありません」
［セフィル］：「そうか。だがこの調子なら時期に成功するはずだ。吹雪の状態を維持するんだ」
［吹雪］：「はい」
……。
［吹雪］：「ふっ――！」
［フェルシア］：「――あ、学園長」
［セフィル］：「おおっ、来たか？」
［フェルシア］：「はい、ちょっとずつですけど、メーターが上が

ってます」

［セフィル］：「よし、さすがだ。その調子だ、吹雪」

どうやら供給が上手くいってるようだ。少し薄目をあけて自分のメーターを確認してみる。

８８、どうやら６％分の供給ができているらしい。この調子でいこう。

……。

と思ったのだが。

マルカート（11）

［フェルシア］：「うーん、ちょっと上がらなくなったわね」
［セフィル］：「……吹雪、一端止めてくれ」
［吹雪］：「あ、はい」
俺は詠唱を止めた。
［吹雪］：「はあ……はあ……」
停止した瞬間、疲れが押し寄せ俺は地面に片膝をついた。
［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」
［吹雪］：「ちょっと、疲れました」
［セフィル］：「休憩を入れよう。フェル、タオルを」
［フェルシア］：「はい。吹雪くん、どうぞ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
受け取ったタオルで汗を拭った。
［吹雪］：「すみません、上手くできなくて」
［セフィル］：「何を言ってる。今日練習に入ったばかりだろう、そんな簡単にできるものじゃないんだ。そんなすぐに覚えられたら私が嫉妬する」
［吹雪］：「し、嫉妬？」
［セフィル］：「そう、嫉妬だ。吹雪のことを嫉んでやる」
［吹雪］：「そ、それはご勘弁を……」
［セフィル］：「はっは。まあ気に病むことじゃないから安心していい」
［吹雪］：「は、はい……」
［セフィル］：「自分で、上手くできてないと感じたか？」
［吹雪］：「そうですね。何て言うんでしょう、力の供給が感じられなかったといいますか」
［セフィル］：「なるほど、確かに吹雪の言ってることは確かだ」
やっぱりか……。

［セフィル］：「最初のほうは上手くいっていたんだ。ちゃんとフェルのメーターは上昇していた。だが途中から、メーターの上下が止まってしまってな」
［吹雪］：「ああ……」
［セフィル］：「吹雪の魔力だけを消費してしまったようだな。本来なら、消費したものがフェルに渡っているはずなんだが」
［吹雪］：「集中が切れたんでしょうか？」
［セフィル］：「自分ではどんな感じだった？」
［吹雪］：「そうですね、集中は、何度も言い聞かせていたんでできてた気がしたんですけど」
［セフィル］：「確かに、私から見ても乱れのようなものはなかったからな。集中はできていたんだろう、だとすると……集中するあまり魔力を受け渡す相手を思い描くことに失敗したのかもしれないな」
［吹雪］：「うーん……」
［セフィル］：「ホーリーカルムが不発に終わる理由として一番にあげられるのはそれなんだ」
［吹雪］：「なるほど」
確かに言われてみると、頭の中でうまくフェルシア先生の姿を思い浮かべることができていただろうか？

マルカート（12）

［セフィル］：「一番の難関にして最大のポイントだからな。こればっかりは何度も繰り返しやってみるしかない。コツとしてはフェルをジャガイモだと思うことだな」
［吹雪］：「え？　それって対処法違うくないですか？」
その理論でいくと全ての人に俺の魔力を供給することになるような……。
［セフィル］：「違うか？」
［吹雪］：「俺に間違いがなければ」
［セフィル］：「じゃあ、フェルの特徴とかを思い浮かべたらどうだ？
その人の印象深い部分を思い浮かべれば、比較的容易に想像できるだろう」
［吹雪］：「それは言えてるかもしれないですね」
［セフィル］：「フェル、ちょっと観察させてもらうぞ」
［フェルシア］：「え？　は、はい、どうぞ」
［セフィル］：「うむ、さあ吹雪。見るんだ」
［吹雪］：「え？　は、はい」
［フェルシア］：「あ、あんまり隅々まではダメよ？　吹雪くん」
［吹雪］：「だ、大丈夫です。外見しか見ませんから」
フェルシア先生の特徴は……。
［セフィル］：「ふむ、吹雪よりもフェルのほうが身長が高いんだな」
［吹雪］：「ぐさぁ……」
俺の心を学園長の言葉が鋭く抉った。
［フェルシア］：「学園長、ダメですよそんなこと言っちゃ」
［セフィル］：「ん？　普段何言わないから気にしてないのかと思ったんだが……」

［フェルシア］：「普段から気にしているからこそ、そういう話題にならないようにするものなんです」
［セフィル］：「そうか、でもフェルは女性の中でもかなり背が高いから仕方ないことだろう。そんな落ち込むな、吹雪」
［吹雪］：「は、はい……」
［セフィル］：「そんな小さいわけではないだろう？」
［吹雪］：「は、はい。１７０くらいです」
［セフィル］：「うむ、私とほとんど変わらんな」
［吹雪］：「うぐっ……！？」
またしても突き刺さる鋭利な言葉。
［フェルシア］：「だから学園長」
［セフィル］：「あ、すまんすまん。ちょっと意外だったからな、心配無用だぞ吹雪。君は十分大きい」
［吹雪］：「は、はは……本当ですか？」
［セフィル］：「ああ、君より小さい男子なんてこの地球上にこれでもかってくらいいる。そんなことでくじけていてはいかんぞ。祐喜を見てみるんだ。吹雪よりも結構小さいが、全くめげることなく生きているじゃないか。むしろそれを売りにしている勢いだ」
まあ、祐喜は童顔だからな。
［セフィル］：「人間身長じゃない、心だ。だから、気に病むことはない、分かったな？」
［吹雪］：「はい、ありがとうございます？」
［セフィル］：「うん、もうちょっと休むといい。どうする？　もう一度やってみるか？」
俺は魔力のパーセンテージを見てみる。
［吹雪］：「そうですね、もう１回挑戦してみます」
［セフィル］：「了解した」
［フェルシア］：「頑張りましょう」
［吹雪］：「はい」
……。

マルカート（13）

［場所：家庭科室］

［舞羽］：「それで、どうだったの？　吹雪くん」
［吹雪］：「ああ、まだちょっと練習を重ねないとダメみたいだ。完全に集中するってことがうまくできない」
［舞羽］：「そっか、でも今日が初めてだったんでしょう？　ならこれからの頑張り次第で全然変われるはずだよ」
［吹雪］：「そうなんだけどな～、でも今日は少し考えちまいそうだ」
［舞羽］：「そればっかりはしょうがないね」
俺の会話に参加しながら舞羽は手を動かす。今日のメニューは鳥のチリソースらしい。
練習が終わった後、俺は商店街に行き、タイムサービスになっていた安い野菜、肉類を満遍なく買ってきた。それを舞羽に見せた結果、今日の夕食は鳥のチリソースとなった。
［吹雪］：「お、いいにおいだな」
［舞羽］：「手伝ってくれたから、早く出来上がりそうだよ」
［吹雪］：「これくらい当たり前だよ。俺はこのメンバーの雑用係だからな」
［舞羽］：「もうちょっといい係じゃないかな？　――ユーティリティプレーヤーとか？」
［吹雪］：「そこまでいくと大げさじゃないか？　それに洗濯とか買い物なんて誰だってできるだろう。みんなユーティリティになっちまうぞ」
［舞羽］：「うーん、それはそれで素敵じゃない？　みんながユーティリティプレーヤー、夢が広がる気がするよ」
［吹雪］：「世界に家事の輪を広げるのか？」

［舞羽］：「そしたら、保父さんがたくさん働く世界になるだろうね」
［吹雪］：「ん？　そうかな？」
［舞羽］：「そうだよ、きっと」
［吹雪］：「お前は、その世界を望んでるのか？」
［舞羽］：「悪くはないんじゃないかな？　専業主婦さんが少し楽になるよね」
［吹雪］：「単純に考えるとな」
［舞羽］：「うん、いいと思う」
［吹雪］：「それ、軽い仕事放棄にならないか？」
［舞羽］：「え？　そ、そうかな？」
［吹雪］：「差別に聞こえるかもしれないけど、主婦って身の回りの世話を中心に活躍するのが普通だろ？　それを男にも任せたらもうする仕事ないだろ」
［舞羽］：「い、言われてみると確かに……」
［吹雪］：「毎日家でゴロゴロするしかやることないだろうし、……デブまっしぐらだな」
［舞羽］：「うっ、それはちょっと困るね」
［吹雪］：「ふくよかになるのが目標ならいいが、そんな風になりたいって思う奴いないだろ」
［舞羽］：「そうだね……」
［吹雪］：「今のままでいいんじゃないかね？　保父とかにはなりたい人がなればいいさ」
［舞羽］：「そうだね……太るのは勘弁だし」
妙にそこに反応してるな。気にしてるだろうから何も言わないでおくが……。

マルカート（１４）

［繭子］：「んー、おいしー！　舞ちゃん、おかわり～」
［舞羽］：「あ、はーい」
マユ姉のお椀を受け取って、鍋からご飯をよそう。
［フェルシア］：「相変わらず、すごい食欲ね」
［舞羽］：「だっておいしいんだも～ん。舞ちゃんの料理は絶品だからね」
［カホラ］：「ホント、絶妙な味付けね。こんな料理をいつも食べてたのね、吹雪は」
［吹雪］：「なるべく自分で作るように努力はしてるんですけど、どうやったって舞羽の料理には勝てませんよ」
［カホラ］：「これは、ちょっとプレッシャーね、聖奈美」
［聖奈美］：「そうですね。はいダルク、お肉、多めに入れておいたから」
［ダルク］：「うん、ありがとう」
［カホラ］：「最初に舞羽に作らせたのは失敗だったかしら？」
［舞羽］：「えっ？　そ、そんなこと」
［カホラ］：「そりゃあ自分ではそう思うでしょうね。それに舞羽だし」
［舞羽］：「？？？」
［聖奈美］：「頑張るしかないわね」
［繭子］：「期待してるよー、カホラちゃん、聖奈美ちゃん」
［カホラ］：「はい、ありがとうございます」
［吹雪］：「……」
［舞羽］：「吹雪くん、おかわりは？」
［吹雪］：「ん？　あるのか？」
［舞羽］：「うん、残すのはもったいないし」
［吹雪］：「ん、そうだな。じゃあ……スープって余ってるか？」

［舞羽］：「うん」
舞羽は少し嬉しそうに皿にスープをよそってくれる。
［カホラ］：「今日は、どんな練習をしたの？」
［吹雪］：「今日から、本格的にホーリーカルムの練習に入りました。ここからが正念場になりそうです」
［カホラ］：「そうなの」（カホラ）
［吹雪］：「先輩たちは？　そろそろ全員で合わせてみたりするんですか？」
［カホラ］：「そうね、個人個人でどこまで完成してるのかにもよるんだけど、そろそろ合わせていくかもしれないわ」
［吹雪］：「先輩は、もう完成してるんですか？」
［カホラ］：「完成、とは言い切れないけど、大分形にはなってきたと思うわ」
［吹雪］：「なるほど、杠は？」
［聖奈美］：「そうね、あたしも同じ感じよ。形にはなってきてると思うわ」
［吹雪］：「マユ姉は？」
［繭子］：「ワタシは、ちょっと完成はしてないかな。まだ拙いところがあるから、夜はそこを重点的に練習してみようと思ってるよ」
［吹雪］：「舞羽は？」
［舞羽］：「私は、そうだね、通して弾くことはできるようになったかも」
［吹雪］：「なるほど」
みんな、それぞれ頑張ってるんだな。
［吹雪］：「応援してます」
［聖奈美］：「あなたも頑張りなさいよ？　大久保」
［吹雪］：「ああ、全力は尽くすよ」
［聖奈美］：「あなた、夜の練習はないの？」
［吹雪］：「今日は、ないな。ちょっと、魔力を消費しすぎたみたいで……これ以上すると、な」

［聖奈美］：「まあ、魔力の消費は激しいでしょうしね」
［吹雪］：「みんな練習があるんだろう？　後片づけは俺がやっておくから」
［舞羽］：「え？　でも悪いよ～」
［吹雪］：「何言ってやがる。俺は練習がなくて、みんなは練習がある。これからもう一頑張りしなきゃいけない者たちに洗い物なんてさせたらモチベーション上がんないだろ？　今日は任せろって」
［舞羽］：「んー、いいのかな？」
［吹雪］：「いいに決まってる。やらせないとゲンコツすんぞ？」
［舞羽］：「ええっ！？　ゲンコツ！？」
［カホラ］：「……何だかあまり見たことがない言い合いね。洗い物させないならゲンコツするって……聖奈美は見たことある？」
［聖奈美］：「もちろんありません。ま、大久保は変わってますからしょうがないんじゃないでしょうか？」
［吹雪］：「俺って、やっぱり変わってるか？」
［聖奈美］：「変わってるわよ、それもかなりね」
［吹雪］：「んー……」
［カホラ］：「悪い方向で変わってるわけじゃないから心配ないわよ、吹雪」
［吹雪］：「はあ……」
［カホラ］：「舞羽、今日は吹雪に任せましょう。せっかくやってくれるって言ってるんだから」
［舞羽］：「うん、ありがとう吹雪くん」
［吹雪］：「いいんだよ、頑張ってきな」
［舞羽］：「うん」
［繭子］：「――ごっくん。舞ちゃーん、おかわり～」
［舞羽］：「あ、はい。大盛りですか？」
［繭子］：「うん、よろしく～」
［カホラ］：「静かだと思ったら、ひたすらに食べ続けてたのね……」

［吹雪］：「マユ姉ですから……」
［繭子］：「みんなももっと食べようよ～。もう一頑張りするためにもね」
ひょっとしたら、少し聞いていたのかもしれない。

マルカート（15）

［吹雪］：「はあ……」

自然とため息がこぼれ落ちた。別に上手くいってないからというわけじゃない。単純に、体が疲労したからだと思う。まあ、少し失敗したところはあったんだが……。

“［セフィル］：「よし、じゃあ再開しよう。決して無理はするなよ？　いいな？」

［吹雪］：「はい。――ホーリーカルム！」

詠唱を始めると、先程と同じようにフェルシア先生は光に包まれる。ここまではよかった。問題はここからだ。さっきの失敗を繰り返さないためにも頑張ろうとした。

［吹雪］：「……」

深呼吸をし、リラックス。体の力を抜いた状態でフェルシア先生を頭に思い浮かべる。

……。

……。

［セフィル］：「……うーん、なかなか上手くいかないな」

［フェルシア］：「しょうがないですよ。今日が初めてなんですから」

［セフィル］：「それもそうだな。吹雪、詠唱中止」

［吹雪］：「はい」

――ここで気を抜いてしまったのがいけなかったんだろう。

［吹雪］：「……うっ！？」

あの感覚が、俺の体内を走った。

［セフィル］：「むっ？　いかん、フェル！」

［フェルシア］：「あ、はいっ！」

［吹雪］：「くっ……」
体に力が入り、エネルギーが集まってしまう。抑制しようとするが、セーブが効かない。
［吹雪］：「（と、止まれ……！）」
［セフィル］：「ライフガード！」
［フェルシア］：「ライフガード！」
［吹雪］：「う、ぐっ……」
……。
［吹雪］：「すいませんでした」
［セフィル］：「謝ることはない、大事に至ってないのだからな」
“［フェルシア］：「そうよ、気にしちゃダメよ」

二人はそう言って許してくれたが、個人的にはちょっとショックだった。ここ最近は何にも問題はなかったのに、今になって再発してしまうとは……。分かってはいる、この難癖とはこれからもずっと付き合っていかなければならないんだ。だからこそ、自分で制御できなくちゃいけない。だけど、今日はそれが上手くできなかった。先生たちが居たから何ともならなかったが、もし誰もいなかったら……考えると少々怖いな。先生たちがいるから、そんな考えが今回みたいなことを引き起こしてしまったのかもしれないな。もっと注意していかなければ。
［吹雪］：「――よし！」
くよくよしてても仕方ない。起こってしまったことは変わりようのない事実だ。この失敗を次につなげていかないと。
［吹雪］：「さて、洗い物するか」
――こうして、泊まり込み生活１日目が終了した。

共通ルート　ＥＮＤ

マルカート（15）（後書き）

お疲れ様でした。
これで一先ず共通ルートのほうは終了です。
次回から4人のヒロインの個別ルートに入っていくのですが、一応対象キャラは
舞羽ちゃん、繭子ちゃん、聖奈美ちゃん、カホラちゃんになっています。
誰か一人でもお気に入りになってくれていると嬉しいですね。
さて、個別ルートに関してですが、最初に内容を挙げていくのは主人公の一つ上の先輩のカホラにしようと思っています。
個別ルートでありますので、ほかのキャラの出番が少なくなるかと思いますが、そこはご了承ください。
これからも、自分の作品を読んでくれると嬉しいです。
よろしくお願いします。

カホラルート・コモド（1）（前書き）

予告した通り、ここからは個別ルートです。
カホラちゃんのキャラがどんなのか知りたい方は、彼女の選択肢が前回の作品に書いてあるので確認するといいかもしれません。
それでは、拙い文章ですが、楽しんでいただけると幸いです。

カホラルート・コモド（1）

12月16日（木曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「はあ……はあ……」
［セフィル］：「よし、少し休憩を入れよう」
［吹雪］：「はい……」
［セフィル］：「練習を始めてから結構経つが、それでもやっぱり疲れるか」
［吹雪］：「そりゃそうですよ、最初の頃とペースが全然違いますからね」
最近は最初から結構なハイペースだからな、疲れないわけがない。
［吹雪］：「確実に力にはなってると思いますけど」
［セフィル］：「何だかんだ言ってちゃんとペースに従って走れているからな。今なら陸上部とも好勝負できるかもしれないぞ」
［吹雪］：「それはないですよ、あっちはプロフェッショナルなんですから」
［セフィル］：「どんな世界にもビギナーズラックというものが存在するはずじゃないか」
［吹雪］：「いや、それでも善戦止まりですって。というか、俺は決してランナーになりたいんじゃありませんから」
［セフィル］：「うむ、女子相手なら勝てると思うんだがな……」
［吹雪］：「それは話が違ってきますよ……」
女子相手に勝って喜んでいる俺……想像するだけですごく恥ずかしい。
［セフィル］：「気が向いたら勝負してみたらどうだ？」
［吹雪］：「いや、遠慮します。優先しなくちゃいけないのは練習

のほうですから」
［セフィル］：「息抜きにピッタリじゃないか」
［吹雪］：「余計に疲れちゃいますよ……」
［セフィル］：「走るのは嫌いか？」
［吹雪］：「嫌いではないですけど……それだったら陸上部に入ってますし。だからって専門にはしたくないです」
［セフィル］：「難しいところだな」
［吹雪］：「と、とにかく、陸上部との勝負は遠慮させてもらいます。自分の練習を精一杯頑張らせてもらいます」
［セフィル］：「うむ、いい心がけだ。その意気があれば、きっと成功するはずだ」
何故か誉められてしまった。
［セフィル］：「さて、そろそろ行けるか？」
［吹雪］：「はい、大丈夫です」
［セフィル］：「くどいようだが、無理はしては駄目だぞ？　いいな？」
［吹雪］：「はい」
――そして今日も本練習が始まる。

カホラルート・コモド（2）

［場所：家庭科室］

［聖奈美］：「大久保、これ運んでちょうだい」
［吹雪］：「おお」
［繭子］：「ワタシも手伝う～」
［聖奈美］：「じゃあこれをみんなのところに」
［繭子］：「はーい」
［聖奈美］：「まだあるから、またこっちに戻ってきてちょうだい」
［吹雪］：「おお」

［聖奈美］：「はい、お待たせしました」
［繭子］：「わーい、美味しそう～」
横できゃっきゃとマユ姉が騒ぐ。
［繭子］：「聖奈美ちゃんは何でもできるんだね～」
［聖奈美］：「あたしは何にもできないですよ。ただ、それ相応の努力をしてるだけです」
［フェルシア］：「哲学的言葉ね、今のは」
［聖奈美］：「そういう意味で言ったわけじゃ」
［繭子］：「じゃあ、聖奈美ちゃんは努力の天才ってこと？」
［聖奈美］：「努力の天才？」
［繭子］：「努力をしたからここまで成長できたんでしょう？　人一倍の努力をすることができるわけだから、努力の天才、違うかな？」
［フェルシア］：「でもマユ、天才って何もしなくても才能に満ち溢れてるのよ？　努力したら天才じゃないんじゃないかしら？」
［繭子］：「へ？　でも、努力をしなくちゃ上手にはなれないんだよ？」

［フェルシア］：「それを必要としなくても上手なのが天才ってものでしょう？　努力をしちゃったらそれはもう天才とは言えないんじゃない？」
［繭子］：「うーん、哲学だね～？」
［聖奈美］：「そ、そうですね」
［吹雪］：「おい、杠が困ってるぞ？　マユ姉」
［繭子］：「あ、ごめんね？　聖奈美ちゃーん」
［聖奈美］：「いえ、気にしてませんから。大丈夫です」
［舞羽］：「んー……」
［吹雪］：「どうしたんだ？　舞羽」
［舞羽］：「うん、カホラ先輩がいないなーって思って」
［フェルシア］：「そういえば、確かにいないわね」
［繭子］：「まだ社会科教室にいるんじゃないの～？」
［舞羽］：「さっきまで私たちはそこにいましたけど、いなかったと思いますよ」
［フェルシア］：「とすると、放課後に社会科教室に戻った可能性も少ないわね」
［繭子］：「んー、どうかしたのかな～？」
［吹雪］：「……よし」
［舞羽］：「吹雪くん？」
［吹雪］：「俺、ちょっと探してくるわ。何となくだけど、先輩がいる場所が分かる気がするし」
［舞羽］：「あ、じゃあ私も」
［吹雪］：「いや、大丈夫だよ俺一人で。これから練習あるんだから、体力を使ってはいかん」
［舞羽］：「探すのにそんなに体力いるのかな……」
［吹雪］：「いいから、素直に俺の言うことを聞いておきたまえ」
［舞羽］：「は、はい」
［聖奈美］：「何？　その上からな態度は？」
［吹雪］：「俺と舞羽はいつもこんな感じだから、気にしたら負け

だぞ」
［聖奈美］：「べ、別に気にしてるわけじゃないわよ。というか、行くのなら早く行ってきなさいよ」
［吹雪］：「早く戻るようにする。遅くなったら先に食べててもいいから、じゃあ行ってきます」
［舞羽］：「絶対に帰ってきてね？　ワタシ、信じてる」
まるで特攻隊に送り出された気分で俺は家庭科室を出た。

カホラルート・コモド（3）

［場所：図書室］

先輩はすぐに見つかった。
［カホラ］：「……」
フロアの端にある勉強スペースで、真剣に本を読んでいた。相変わらず勉強熱心のかたである。とりあえず声をかけよう。
［吹雪］：「カホラ先輩」
［カホラ］：「……」
どうやら集中しすぎて俺の声が聞こえてないらしい。しょうがないから肩を叩いた。
［吹雪］：「先輩」
［カホラ］：「え？」
やっと振り向いてくれた。
［カホラ］：「あら？　吹雪、どうしたの？」
［吹雪］：「お迎えにきました」
［カホラ］：「お迎え？　私そんなこと頼んだかしら？」
［吹雪］：「別に頼まれてはないですよ、ただ時間がちょっとね」
俺は時計を指さして先輩に伝える。
［カホラ］：「あら、もうそんなに時間が……ごめんなさいね」
［吹雪］：「別に大丈夫ですから。何の本を読んでいたんですか？」
［カホラ］：「ええ、これよ」
それは、この島の歴史書だった。結構古びていて、ところどころがくすんでいた。
［吹雪］：「随分と昔の本ですね」
［カホラ］：「そうね、今から７０年くらい前の本だから」
７０年、そりゃあ本だって劣化していくわけだ。
［吹雪］：「この島の歴史について……気になるんですか？」

［カホラ］：「ええ、もちろん」
何の迷いもなくうなずいて見せた。
［カホラ］：「前に、私がピアノについて調べてるって言ったこと、覚えてる？」
［吹雪］：「はい、暇がある時によく研究してるんですよね」
［カホラ］：「ええ、私は後少しで卒業してしまうから、自由に調べられるのは今しかないの。だから、悔いを残さないようにやれるだけやっとこうと思うのよ」
［吹雪］：「そっか……」
卒業か、先輩がいなくなってしまうのは、寂しいな。
［カホラ］：「吹雪？　何でそんな顔してるの？」
［吹雪］：「え？　だって……」
［カホラ］：「心配ないわよ、まだ3ヶ月もあるのよ？　今からそんな顔しちゃダメよ」
［吹雪］：「は、はい。つい考えちゃって」
［カホラ］：「元気出しなさい？　ね？」
［吹雪］：「は、はい」
［カホラ］：「さあ、戻りましょうか？　みんなに謝らないといけないわね」
［吹雪］：「いいんですか？　まだ終わってないんじゃ」
［カホラ］：「いいわ、明日にでもできるし。それに、さすがに練習をすっぽかすわけにはいかないでしょう？」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「さ、行きましょう」
――改めて、先輩を尊敬したのだった。

カホラルート・コモド（4）

［場所：第四音楽室］

［吹雪］：「失礼します」
俺は音楽室の扉を開けた。
［カホラ］：「あら？　吹雪？」
［セフィル］：「お、来たか」
中にはカホラ先輩と学園長の姿。
［セフィル］：「今日はカホラを指名か？」
［吹雪］：「指名というか、一緒に練習をさせてもらおうという所存です」
［セフィル］：「うむ、大儀である」
［吹雪］：「ありがたきお言葉」
［カホラ］：「何でそんな高貴な会話をしてるの？」
［セフィル］：「いや、特に理由はないぞ。その場の空気に身を任せただけだ」
［吹雪］：「俺は、ただ学園長に敬語を使って話してただけです」
［カホラ］：「つまり、空気の淀みが生み出した状況ってわけね？」
［セフィル］：「それは本当に高貴な人に失礼じゃないか？　本物の高貴はきっと淀みなく今のような会話をしているはずだ」
［カホラ］：「かもしれないけど、お母さんが使うにふさわしい言葉ではないわね」
［セフィル］：「それは言えてるな、自分でも最大の違和感を感じていた」
［カホラ］：「じゃあ普通にしゃべりましょうよ。あんな会話じゃ長くは続かないわ」
［セフィル］：「そうだな、すまないな、吹雪よ」
［吹雪］：「いえ、お気になさらず。今はどんな練習を？」

［セフィル］：「来る前まで、一度全てを通して弾いてみたところだ。最初と比べてかなり形になってきてるぞ」
［吹雪］：「なるほど、じゃあもう全員と合わせて弾くことも」
［セフィル］：「無理ではないだろう、だが、まだ少々荒さが抜け切れてない部分も多少残ってる」
［吹雪］：「でも、完成するのも時間の問題じゃないですか？　すでに通して弾けてるのであれば」
［セフィル］：「かもしれないな」
［カホラ］：「でも、ここで気を緩めたら失敗するわ。もっと自分でも納得のできる出来にしなくちゃ」
［セフィル］：「カホラ、一度吹雪に聴いてもらったらどうだ？　何か別の発見があるかもしれないぞ」
［カホラ］：「そうね、それは一理あるかもしれないわね」
［セフィル］：「どうだ？　吹雪。カホラの演奏を聴いてみては？」
［吹雪］：「はい、是非聴かせてほしいです」
［セフィル］：「カホラ、指名が入ったぞ」
［カホラ］：「お母さん、その言い方はちょっと変よ」
［セフィル］：「そうか？　ごく普通の会話の一部だと思うが」
［カホラ］：「それが普通というのはいかがなものかと思うけど」
［セフィル］：「細かいことじゃないか。それより、吹雪が今か今かと待ち望んでいるぞ」
［吹雪］：「あ、大丈夫ですよ。自分のタイミングで初めてくれて結構ですから」
［カホラ］：「ありがと、吹雪」
肩の力を抜き、深呼吸をする。俺は静かに先輩が弾き始めるのを待った。
［セフィル］：「……」
そして、演奏が始まった。
始めは流れるような曲調。ゆっくりとしたテンポの中にいくつもの和音が重なっている。しかし、どこか足りないような印象を受ける。

きっとそれは、このメロディーだけで構成される曲ではないからだろう。
曲調は少しずつアップテンポに変わっていく。流れていく印象は変わらないが、たくさんの音が一つの小節の中に組み込まれているのを感じた。
時々、何拍かの休を入れるのは、３つのどれかのピアノがメインに変わっているからだろう。
［セフィル］：「どうだ？　吹雪」
［吹雪］：「すごい綺麗ですね」
月並みな表現しかできないが、本当にそんな印象を受ける。とにかく、メロディーが繊細で素敵だった。
［セフィル］：「何度かカホラの練習には立ち会ったことはあるか？」
［吹雪］：「はい、付き合わせてもらいました」
［セフィル］：「その頃から比べてどうだ？　カホラの成長は」
［吹雪］：「俺が言うのは失礼かもしれないですけど、段違いに上達していますね」
［セフィル］：「うむ、吹雪に言ってもらえたら、カホラも嬉しいだろうよ」
……。

カホラルート・コモド（5）

［カホラ］：「――ふう、お粗末さまでした」
自然と拍手で返していた。
［吹雪］：「お疲れさまです」
［カホラ］：「ありがとう」
［カホラ］：「で、どうだったかしら？」
［吹雪］：「それはもう、すごく素敵でした」
またしても月並みな言葉で返してしまった。
［カホラ］：「素敵だった？」
［吹雪］：「はい、流れるようなメロディーが俺の中にすーっと入ってきて、すごくいい気分になりました」
［カホラ］：「本当？」
［吹雪］：「はい、何一つ嘘は言っていません」
［カホラ］：「ありがとう。じゃあ、気になったところとかは？何かあるでしょう？」
［吹雪］：「気になるところですか？」
［カホラ］：「遠慮はしなくていいわ。ちょっとでも気になったところとかがあれば言って？」
［吹雪］：「あー、そうですね」
［セフィル］：「うむ、じゃあ私から幾つかあげよう。吹雪は考えていてくれ。いいか？　カホラ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「まず、吹雪の言うとおり、かなりメロディーラインの出来は上向いていると感じた。そのイメージを忘れないように努力してくれ」
［カホラ］：「はい」
［セフィル］：「で、改善すべきところだがもっと強弱をはっきりつけた方がいいな。全てが同じ音量で聞こえた気がした。平坦な演

奏は他の3人の演奏を台無しにするかもしれない。もっと意識的に強弱をつけてみるんだ」

［カホラ］：「はい。特に気をつけるべきは、やっぱり2枚目の3小節目かしら？」

［セフィル］：「そうだな、そこからしばらくカホラのメインパートだからな。一番気を使わなければいけないな」

［カホラ］：「分かりました、全体的に強弱の確認を怠らず、と」

［セフィル］：「さあ、じゃあ次は吹雪だ」

［吹雪］：「あ、はい」

［カホラ］：「何でもいいわ、思ったことを包み隠さず言ってちょうだい」

［吹雪］：「そうですね……専門的なことは分らないんですが、もっとメロディーラインをはっきりさせたほうがよりよくなるんじゃないでしょうか？」

［カホラ］：「メロディーライン？」

［吹雪］：「はい、この四季のピアノの曲って、テンポの変化が総じて激しいじゃないですか。そこをもっと強調するように弾けば、よりメロディーに味が出て良くなるんじゃないかと」

［セフィル］：「確かに、さっきの感じだと、テンポの変化がイマイチつかめなかったな」

［カホラ］：「そっか。もっと気を配る必要がありそうね」

［吹雪］：「でも、今のままでも十分綺麗なメロディーラインでした」

［カホラ］：「ええ、じゃあ、そこに意識を集中させてみるわ」

［セフィル］：「吹雪、目の付けどころが違うな」

［吹雪］：「いや、本当にちょっとしたことであって……」

［セフィル］：「そういうのをほったらかすのが一番危険なんだ。早期解決が身を結ぶ、すごくいい部分に気がついてくれた。これでまたカホラは一皮剥けるわけだ」

［吹雪］：「役に立てたなら何よりです」

「カホラ」：「じゃあ、今頂いたアドバイスを重点に置いてもう一度弾いてみるわ」

先輩は椅子に座りなおした。

……。

カホラルート・コモド（6）

最初に聴いたものより、メロディーラインに箔が付き、より綺麗な音色となって俺の耳に届いた。

［セフィル］：「いいじゃないか、カホラ」

［カホラ］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「やはり吹雪の言ったことは正解だな。テンポの変化を分かりやすくすることでよりこの曲の深さが味わえる、他の３人にも伝えなくてはいけないな」

学園長は手帳に文字をささっと走らせた。

［カホラ］：「ふう……」

［セフィル］：「ん、もう時間か。今日は上がりにしよう、頑張ったなカホラ」

［カホラ］：「はい、ありがとうございました」

［セフィル］：「吹雪もご苦労だった。君のアドバイスがいい方向に進みそうだ」

［吹雪］：「ご助力できて何よりです」

［セフィル］：「よし、早速メロディーラインに関して3人に伝えてくるとしよう。まだ練習してるはずだからな。カホラ、鍵をかけるのを忘れるなよ」

［カホラ］：「ええ、分かったわ」

［セフィル］：「さて、それじゃあ私はもう一仕事だ」

学園長は先に歩いて行った。時刻は９時４０分、少々早めに終わったらしい。

［吹雪］：「寝床に戻りましょうか？」

何とはなしに聞いてみた。

［カホラ］：「その前にちょっと学食に行きましょう。喉が乾いちゃったわ」

［吹雪］：「あ、了解です」

カホラルート・コモド（7）

［場所：食堂］

［カホラ］：「うーん、何を飲もうかしら？　温かいのかしら、いや、でもあえて冷たいものを飲むのも一考かしら？　どう思う？　吹雪」

［吹雪］：「そうですね。俺はどちらもありだと思いますよ？　冷たいのも温かいのも、どちらもおいしいことに変わりはありませんから」

［カホラ］：「うーん、間を取れるものってないのかしら？」

［吹雪］：「それだと生温いものってことになりますよ」

［カホラ］：「それは聞くだけでちょっとイヤよね？　というか、何か生温いってマイナスのイメージしかないわよね？　気持ち悪いような体に悪そうな」

［吹雪］：「確かに……」

［カホラ］：「生温いものは却下の方向でいきましょう。となると、あれをしましょうか」

先輩は硬貨を入れ、目をつぶった。

［カホラ］：「吹雪、私をくるくるっと回してちょうだい」

［吹雪］：「ああ、はい」

ランダム性を上昇させるためだろう。俺は先輩をぐるぐる回した。

［カホラ］：「ん～」

［吹雪］：「これくらいでいいですか？」

［カホラ］：「うーん、そうね。最後に自販機に背を向けるようにしてちょうだい。そうすれば、さらに分からなくなる」

［吹雪］：「了解です」

言うとおりにしてあげる。

［カホラ］：「よし、準備オッケー。一体何が手に入るのか」

目はつぶったまま、先輩は楽しそうにしている。
［カホラ］：「3、2、1で振り返るわ」
［吹雪］：「何だかガンマンみたいですね」
［カホラ］：「ガンマンのつもりでやってみるわ。狙いは、甘い飲み物」
とっても広い選択範囲だ。きっと問題なく手に入るだろう。
［カホラ］：「じゃあいくわ。――3、2、1、それ！」
素早く振り返って先輩はボタンを押した。ガコンと音がして飲み物が落ちてくる。
手に入ったのは――。

カホラルート・コモド（8）

［カホラ］：「炭酸少女かー。すっごく炭酸が強いのよね、これ」
［吹雪］：「飲んだことあるんですか？」
［カホラ］：「味はおいしいんだけど、刺激がすごく強いのよね。まあ、疲れはとれるか」
［吹雪］：「――よし、俺もやってみます」
［カホラ］：「あら？　吹雪も意外とチャレンジャー？」
［吹雪］：「先輩のを見てたらやりたくなりました。こういうチャレンジ精神が人間を強くするんだと思います」
［カホラ］：「さすが、言うことが違うわね」
硬貨を入れて、レッツチャレンジ。
［吹雪］：「先輩、さっきみたいによろしくお願いします」
［カホラ］：「ええ、オッケー」
先輩にお願いし、グルグルと体を回してもらう。
［カホラ］：「吹雪、結構筋肉付いてるわね」
［吹雪］：「そうですか？　人並みレベルだと思いますけど」
［カホラ］：「最近は走ってるから足にもあるみたいね、筋肉」
［カホラ］：「足はまあ、ついてもしょうがないですね」
あれだけ走ってるもんな……。
［カホラ］：「目指すはボディービルダー？」
［吹雪］：「いやいや、それは次元が違いますよ。なりたいなら違う練習しないと」
［カホラ］：「そう？　なれなくはないと思うけどね」
［吹雪］：「先輩は俺に何を求めてるんですか？」
［カホラ］：「かっこいい男性、かしら？」
［吹雪］：「……ちょっと難しいかもしれませんね」
［カホラ］：「もう、謙遜しちゃって」
［吹雪］：「いやいや――というか先輩、ちょっと回しすぎじゃな

いですか？」
すでに１０回以上回されている気がするんだが。
［吹雪］：「もう平衡感覚すら怪しいんですけど」
［カホラ］：「真剣勝負だから、これくらいでちょうどいいわ」
［吹雪］：「はあ……」
［カホラ］：「よし、じゃあ逆回転しましょうか」
［吹雪］：「ええ？　まだ回すんですか？」
［カホラ］：「ここまできたらとことん回しましょう」
何のスイッチが入ったのか、先輩は楽しそうに俺を回した。
［カホラ］：「どんな感じ？」
［吹雪］：「そうですね、回ってないのに回ってるような感覚です」
［カホラ］：「いい感じね。そんな状態で、一体吹雪はどんなジュースを手に入れるのか？」
バラエティー番組のノリになっている。
［カホラ］：「さあ、緊張の瞬間です」
［吹雪］：「うん、行きます」
そのノリに答えるべく、俺は無駄に精神を集中させてみる。
［吹雪］：「ふう――そりゃ！」
俺は勢いよく振り返ってボタンを押した。……つもりだった。
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「あー、吹雪、そこにボタンはないわよ？」
どうやら検討違いの場所を押していたらしい。
［吹雪］：「すいません、予想以上に目が回ってるっぽいです」
［カホラ］：「もっと回す？」
［吹雪］：「これ以上回されると、多分立つこともままならなくなっちゃいますよ？」
［カホラ］：「うーん、それもちょっと見てみたいかも」
［吹雪］：「どういう意味ですか？」

［カホラ］：「ふふ、とにかく、も一回後ろ向きましょう、仕切り直し」
［吹雪］：「はい」
くるっと体を回され、先程と同じように。
［吹雪］：「では、行きます」
［カホラ］：「ええ、どうぞ」
精神統一、そしてイメージを浮かべる。
［吹雪］：「――ていっ！」
ガコンと音がしてジュースが下に落ちた。今度は成功したらしい。
出てきたのは――？
［吹雪］：「先輩、どうですか？」
［カホラ］：「ちょっと待って。――えーっと、アイスミルクココア。冷たいほうだったわね」
［吹雪］：「うわー、微妙……」
良いとも悪いとも言えない飲み物が落ちてきてしまった。
外すにしても、もう少し何じゃこりゃーってなるものが落ちてきてほしかった。今なら芸人の悩みが分かる気がする。
［吹雪］：「すいません、先輩、ご期待に添えませんでした」
［カホラ］：「どうして謝るの？　そんなことで怒ったりしないわよ」
［吹雪］：「でも何か……悔しいですね」
［カホラ］：「確かに、良からず悪からずだからね。気持ちは分かるわ、でも、普通に美味しい飲み物じゃない。ぶーたれたらアイスミルクココアに失礼だわ」
［吹雪］：「そうですね、美味しくいただきます」
［カホラ］：「戻りましょうか。ストーブを付けた暖かい部屋でコールドドリンクを飲みましょう」
［吹雪］：「……それだけ聞くと、一体何をしたいのか分かりませんね」
［カホラ］：「喉を潤すためでしょう。ちゃんと目的はあるわ、行

きましょう」

［吹雪］：「はい」

……。

カホラルート・コモド（9）

［場所：社会科室］

［カホラ］：「んー、やっぱりすごいわね、炭酸少女、口が爆発しそう」

［吹雪］：「そんなにすごいんですか？」

［カホラ］：「吹雪も飲んでみなさいよ、そしたら分かるわ」

［吹雪］：「あ、はい」

言われるままに缶を交換する。

［カホラ］：「ココアもらうわね」

［吹雪］：「はい、どうぞ」

俺は恐る恐る、炭酸少女に口を付けた。

［吹雪］：「……うわ、すげぇ」

［カホラ］：「とってもリアルな反応ね」

［吹雪］：「いや、これはリアクションを構成してる暇はないですよ」

甘みは確かに感じるが、炭酸の威力が強すぎてあんまり分からない。

［吹雪］：「先輩、これで喉を潤せるんですか？」

［カホラ］：「正直、難しいかもしれないわ。とりあえずココアがとっても美味しいわ」

［吹雪］：「でしょうね……交換しましょうか？　先輩」

［カホラ］：「え？　悪いわよそんなの」

［吹雪］：「いや、元々の目的は先輩の喉を潤すことですから。それで苦しんでたら元も子もありません。ココアでよかったら譲りますよ。それに、何かコイツを飲破しなくちゃいけない気分になってきましたし」

［カホラ］：「宿命でも感じたの？」

［吹雪］：「そうですね、かかってこいよ、みたいな」

それに、正直ココアは俺には甘すぎる。
［カホラ］：「ありがとう、吹雪」
先輩はそう言って笑ってくれた。さて、勝負だ炭酸少女。俺はちょっと勢いをつけて炭酸少女に口を付けた。
［カホラ］：「そうだ、今思ったんだけどさ」
［吹雪］：「ん、はい？」
［カホラ］：「これってさ、間接キスだよね」
［吹雪］：「んぐっ！？　ゲホ、ゲホ」
［カホラ］：「ちょ、ちょっと大丈夫？　吹雪」
［吹雪］：「す、すいません。変なところに入りました」
［カホラ］：「……ふふ、ちょっとびっくり？」
［吹雪］：「言われてみて、気付きました」
［カホラ］：「自然と交換したから分かってたと思ってたんだけど、全く考えてなかっただけだったのね」
［吹雪］：「すみません、鈍くて」
［カホラ］：「いいわよ、むしろそれぐらいでちょうどいいわよ」
うなずきながら先輩は言う。
［カホラ］：「私たちは仲が良いんだから、普通に飲み物の交換くらいできても変じゃないでしょう？　全然気にすることなんてないわ」
［吹雪］：「は、はい」
［カホラ］：「……とは言っても、それに気づかされるとちょっと気になっちゃうって顔してるわね」
［吹雪］：「そりゃあ、まあ」
先輩は、美人さんだしな……。
［吹雪］：「というか、全然問題ないなら、むしろ言わなくてもよかったんじゃないかなっても思うんですけど」
［カホラ］：「あ、確かにそうね」
そこに気付かなかったのか……。
［カホラ］：「別に触れることでもなかったかしら？」

［吹雪］：「むしろ、どうして話したんですか？」
［カホラ］：「ん～。……ふふ、吹雪の恥ずかしがるところを見たかったから、かしら？」
［吹雪］：「せ、先輩……」
［カホラ］：「あははは、顔真っ赤よ？　吹雪」
［吹雪］：「か、からかわないでくださいよ」
［カホラ］：「だって、かわいいんだもの、吹雪」
［吹雪］：「か、かわいいって……」
［カホラ］：「ほら、また赤くなってるわよ」
［吹雪］：「か、勘弁してください」
しばらく、俺は先輩にからかわれ続けていた……。

カホラルート・アンダンティーノ（1）

12月17日（金曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、では練習に入ろうか」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「体調は？　どこか優れない部分とかはあるか？」
［吹雪］：「大丈夫です、万全です」
［セフィル］：「闘志満々だな、何か良いことでもあったのか？」
［吹雪］：「そういうわけじゃないですが、そろそろ成功させたいと思う次第で」
［セフィル］：「うむ、いい意気込みだ。その成功させたいと思う心ほど大事なものはないからな。吹雪は出来た子だ」
［吹雪］：「こんなことで出来た子というのはちょっと甘過ぎはしませんか？」
［セフィル］：「そうか？　――吹雪は誉められるのは嫌いなのか？」
［吹雪］：「え？　そういうわけじゃなくてですね……何て言うかあまり甘やかされると、図に乗ってしまうというか、適度に塩を振って引き締めてもらうことが大事だと思うんです」
［セフィル］：「……自らそんなことを言えるとは、できた男だな」
［吹雪］：「学園長、何か今日おかしくないですか？」
［セフィル］：「え？　何がだ？」
［吹雪］：「何か、異常に誉めるじゃないですか。大したことしてないのに」
［セフィル］：「そんなことはないぞ、吹雪はよくやってる。それは紛れもない事実じゃないか」

［吹雪］：「俺に言われてもですね」
［セフィル］：「期待しているぞ、君には」
［吹雪］：「……期待に添えるように頑張ります」
そろそろ、話に戻ってほしいな。
［セフィル］：「上手く言ったらもっと誉めてやろう」
［吹雪］：「は、はあ……」
［セフィル］：「よし、それでは本題に入ろうか。フェル、準備を」
［フェルシア］：「はい」
先生は、以前使用した機械を持ってくる。
［セフィル］：「とりあえず、魔力ゲージを確認だな」
［吹雪］：「はい」
腕に巻き付けて検査をする。
［セフィル］：「うん、９１％か、まずまずってところか。フェルはどうだ？」
［フェルシア］：「私は５４％です」
［セフィル］：「今日は少ないな、激しい運動でもしたのか？」
［フェルシア］：「そういうのじゃないですよ、昨日は保健室に来る生徒が多かったので、魔力の消費が激しかったんだと思います」
［セフィル］：「なるほど、大人気だったんだな」
［フェルシア］：「あまりいいことではないですけどね、保健室が忙しいというのは」
［セフィル］：「まあな。でも、すぐに補ってもらえるだろうよ。今日は成功させると意気込んでいるからな」
［フェルシア］：「お願いね？　吹雪くん」
［吹雪］：「はい、頑張ります」
［セフィル］：「よし、では準備をしよう」
ファルシア先生と向き合うように立つ。
［セフィル］：「練習を始める前に、ちょっと目を閉じてくれ」
［吹雪］：「はい」
何だろう、一体。

カホラルート・アンダンティーノ（2）

［セフィル］：「――我の中に眠る力、汝に宿したまえ」
［吹雪］：「ん？　お、おお！」
［セフィル］：「どんな感じだ？」
［吹雪］：「何と言うか、力が流れ込んでくるような感じがします」
［セフィル］：「うむ、正しい反応だ。前回の反省を踏まえて、私の魔力を吹雪に一時的に分け与えた。メーターにも現れているはずだ」
確かに、９１だったメーターが今は１００を差していた。
［セフィル］：「前回ああなってしまったのは、吹雪の疲労が極限まで高まってしまったのもあると思うんだ。私の魔力を与えることでそれを少しはカバーできるかと思うのでな。分かってるとは思うが、無理だけはいけないぞ？　危ないと感じたらすぐに詠唱をやめるんだ。いいか？」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「当然のことだ。大切なのはイメージだからな、それを頭に入れ直したら、自分のタイミングで始めてくれ」
［フェルシア］：「はい」
集中、イメージを大切に……。
自分が上手く供給できている様子を思い描いて、一度深呼吸をする。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「そう、集中だ」
［吹雪］：「――ホーリーカルム！」
光が、フェルシア先生を包み込む。ここまでは問題ない、大事なのはここからだ。
……。
［セフィル］：「よし、メーターが動いたな」
［フェルシア］：「その調子よ、吹雪くん」

ちらっとメーターを確認する。学園長のサポートのおかげで、以前よりも魔力の消費が緩やかになっている。フェルシア先生のメーターは……58、上がっている。

この調子だ。

［セフィル］：「そうだ、そのままだ。心に静を宿すんだ」

学園長の言葉どおり、今の状態を保つ意識を作る。

［吹雪］：「……」

［フェルシア］：「いいわ、力が流れ込んでくるのを感じるわ」

確かに、俺力が供給できているような感じがする。このイメージを掴みたいところだ。

……。

［セフィル］：「よし、いいぞ。もう少しだ」

俺のメーターを、フェルシア先生のメーターが上回った。

［フェルシア］：「ファイト、吹雪くん」

集中、集中……自分に言い聞かせる。フェルシア先生のメーターが80になったところで終了となる。

現在77、後少しだ。

［セフィル］：「3……2……」

［フェルシア］：「吹雪くん、ファイト！」

ラストスパートだ。

［セフィル］：「……1、……よし、詠唱やめ」

声を聞き、俺は詠唱を解いた。

［吹雪］：「はあ……」

やめた途端、一気に疲労が襲いかかり、俺は片膝をついた。

［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」

［フェルシア］：「吹雪くん」

［吹雪］：「だ、大丈夫です。ちょっと、力が抜けちゃいました」

［セフィル］：「よく頑張ったな、ほら、飲むといい」

［吹雪］：「ありがとうございます」

もらったドリンクを一口飲んだ。
［吹雪］：「魔力ゲージは？」
［フェルシア］：「吹雪くんのおかげで、ちゃんと回復してるわよ」
ゲージは８０ぴったりになっていた。
そして代わりに、俺のゲージが４０を下回っていた。
［セフィル］：「残りが３６か、うん、まずまずといったところか」
［吹雪］：「学園長のサポートがなかったら、きっとうまくいかなかったですね」
［セフィル］：「だとしても、集中力を持続することができなかったらここまですることは不可能だぞ。自信を持って大丈夫だよ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「とりあえずは及第点だな。今日で成功できたのは大きな収穫だ。もっと鍛えればきっとサポートがなくても上手くいくだろう」
［吹雪］：「はい、頑張ります」
とりあえず、以前のようにならなくてよかった。

カホラルート・アンダンティーノ（3）

［場所：廊下］

［吹雪］：「んー、どこにいるんだ？　先輩は」
さっきから探しているんだが姿が見当たらない。何で探してるかっていうと、今日は先輩が料理担当&ちょっと精肉類がなくなってきたから少し買い足そうということになったからだ。
だから、今日夕食を担当する先輩の欲しいものを買ってこようと思うんだけど……。
［吹雪］：「教室には、いないか」
［吹雪］：「だとしたら、だ」
先輩が好んで行きそうなところと言えば――
［吹雪］：「あそこだな」
……。

［場所：図書室］

［吹雪］：「思ったとおりだ」
先輩は席に座って本を広げ、せっせとペンを走らせていた。ひょっとして、以前も調べてたものかな？
［吹雪］：「カホラ先輩」
とりあえず、俺は声をかけた。
［カホラ］：「あら、吹雪、どうしたの？」
顔を上げて微笑みながら。
［吹雪］：「ちょっとだけ聞きたいことがあってきたんですけど、いいですか？　今」
［カホラ］：「ええ、全然。趣味で調べてるものだから」
［吹雪］：「それって、以前も調べてたものですか？」

［カホラ］：「そうよ、よく分かったわね」
［吹雪］：「先輩、いつも一生懸命やってるから俺も覚えちゃいました」
［カホラ］：「うふふ、理解者がいるって結構嬉しいわね」
［吹雪］：「俺はいつだって先輩の理解者ですよ」
［カホラ］：「ふふ、ありがと。で、聞きたいことって何かしら？」
［吹雪］：「ああ、今から買い出しに行くんですけど、冷凍庫に精肉がなくなってたんです。なんで、今日料理を作ってくれる先輩にどれがいいか聞こうかと思って。何かありますか？」
［カホラ］：「あ、そうなの。うーん、そうねー買ってきたお肉に合わせていくらでも調理は可能だけど」
［吹雪］：「あ、そうなんですか」
［カホラ］：「これでも料理はそれなりにできるのよ。まあ、舞羽ほどじゃないけどね」
［吹雪］：「先輩の夕食、楽しみです」
［カホラ］：「ふふ、期待しててね。うーん、じゃあこうしましょう」
［吹雪］：「はい？」
［カホラ］：「私も一緒に買い物に行くわ。そのほうが決めやすくていいでしょう」
［吹雪］：「確かにそうですけど、悪くないですか？　先輩、この後も練習あるのに、疲れさせちゃうんじゃ」
［カホラ］：「買い物に行くぐらいで疲れることなんてないわ。吹雪には私がそんなにか弱く見えるの？」
［吹雪］：「そ、そういう意味で言ったわけじゃないんですけど、疲労させるのはどうも忍びないんで」
［カホラ］：「それを言ったら吹雪だってそうじゃない。毎日魔力を消費してるわけでしょう？　むしろ吹雪こそ行かないようにするべきじゃない」
［吹雪］：「いや、でも俺は、男なんで」

［カホラ］：「体力があるから大丈夫、と」
［吹雪］：「は、はい」
［カホラ］：「ま、とにかく私も行くわ。最近ずっと学校にいたし、気分転換にもちょうどいいわ」
［吹雪］：「先輩がいいのなら、そうします」
［カホラ］：「うふふ、ちょっとしたデートね」
［吹雪］：「で、デート！？」
［カホラ］：「何そんなに驚いてるのよ、吹雪の中のブームなの？」
［吹雪］：「いや、だって……」
［カホラ］：「意味は間違ってないでしょう？　デートって理由はどうあれ男性と女性が会うことを意味するんだから」
［吹雪］：「た、確かにそうですけど……」
［カホラ］：「うふふ、ちょっと楽しみね」
［吹雪］：「せ、先輩……」
［カホラ］：「さ、行きましょう。時間なくなっちゃうわ」
［吹雪］：「は、はい」
……。

カホラルート・アンダンティーノ（4）

［場所：道路］

［カホラ］：「うう、ちょっと外は寒いわね」
［吹雪］：「さすが冬ですね」
しゃべるだけで白い息が立ち上る。
［カホラ］：「でも、嫌いじゃないわね、こういうのも」
［吹雪］：「そうですか？」
［カホラ］：「ええ、確かに寒いけど、ちゃんと季節がめぐってるって肌で感じれるでしょう？」
［吹雪］：「あ、なるほど」
そういう考え方もあるな。
［カホラ］：「去年の先輩方がきちんと役目を果たせたって証拠でしょう」
［吹雪］：「そうですね、感謝しないとですね」
［カホラ］：「次は、私たちが頑張らなきゃいけない番ね。ちゃんと役目を果たして、この島を住みよい環境にしないと」
［吹雪］：「はい、頑張りましょう！」
［カホラ］：「ええ。……にしても、どうしてなのかしらね？」
［吹雪］：「四季のピアノ、ですか？」
［カホラ］：「ええ、他の島々は何もしなくても普通に季節が巡るのに、どうしてこの島だけはピアノが必要なのかしら」
［吹雪］：「やっぱり、この島だけが特別なんですか？」
［カホラ］：「そうね、資料で調べたけどピアノを弾くことで四季がめぐるというのは全くないわ。あるのは一つの季節しか巡らないとかそういう関係のものだけ、そもそも私たちの島に関しての情報はあんまりないらしいのよね」
［吹雪］：「え？　そうなんですか？」

［カホラ］：「ええ、この島の特産とかそういうのは知られているけど、四季のピアノに関しては謎が多いみたいで、情報らしい情報はさしてないのよ」
［吹雪］：「確かに、島民でも謎ですもんね。だから先輩も解明しようと頑張ってるわけですし」
［カホラ］：「まあね、この謎が解ければ、なかなかの大発見に成り得るでしょうし。……本当にできるか不安なんだけど」
［吹雪］：「やっぱり、情報が少なすぎるんですか？」
［カホラ］：「それもあるし、やっぱり手がかりがほとんどないってことが大きいかしら。昔からあるといっても謎が多い四季のピアノだから、それに、謎のままでいいという学者もいて解明しようとする人材が昔から少ないのよ。それに、探求した学者の多くの意見は曖昧なものが多くて、踏まえていいものか微妙なのよね」
［吹雪］：「なるほど……」
［カホラ］：「私、もう少しで卒業だから、できれば学園に在籍している間に何とかしたいんだよね」
［吹雪］：「ああ、卒業したら、図書館を利用しずらいですもんね」
［カホラ］：「それに、あまり時間もないでしょうし、自由にできるのは今だけなのよ」
［吹雪］：「立派ですね、先輩は」
［カホラ］：「立派じゃないわよ。ただ個人的に興味があるだけ」
［吹雪］：「俺でよければ手伝いますんで、いつでも言ってくださいね」
［カホラ］：「ありがと、吹雪」
［吹雪］：「これくらいしか、俺にできることはありませんから」
［カホラ］：「十分だわ。……そういう意味でもピアニストに選ばれたっていうのは、結構嬉しいわよね。直に触れれば、分かることもたくさんあるはずだしね。既にいくつか気付いたことがあるし」
［吹雪］：「例えば？」
［カホラ］：「たいしたことじゃないけど、一つは市販のピアノと

比べて弾きやすいってことね。他のものと比べると、音色も良いし、どうしてか分からないけど指の動きも滑らかになってる気がするの、気のせいかもしれないけどね」

聞く限り、きっと本当だと思うけどな。

［カホラ］：「もう一つ、関係ないことかもしれないけど、四季のピアノの周りでは、たくさんの魔力が渦巻いているのを感じたわね」

［吹雪］：「あ、それも俺は少し分かります」

［カホラ］：「本当？」

［吹雪］：「はい、みんなで四季のピアノの選出に行った時にそれを感じました」

魔法を扱えるものには感じることのできる魔力の波。おぼろげではあるけど、四季のピアノが置いてある場所には多くの魔力が閉じこめられてる感じがした。

［カホラ］：「そっか、吹雪も感じてたのね」

［吹雪］：「普段はあまり感じないんですけど、あの場所ではすぐに感じましたね」

［カホラ］：「ふふ、仲間がいたのね」

［吹雪］：「やっぱり、四季のピアノと魔法は密接に関係してるんですかね？」

［カホラ］：「おそらくそうでしょうね。私たちは四季のピアノに選ばれたわけですもの、ひょっとしたら、ピアノの中に何かの存在意識が宿っているのかもしれないし」

［吹雪］：「おお、そう言われるとそんな感じもしますね」

［カホラ］：「あくまで仮定よ？　誰もその事実までたどり着いたものもいないから。私の勝手な見解だから」

［吹雪］：「でも、俺の中では一番しっくりくる考え方です」

［カホラ］：「本当はどうなのか、気になるわね」

［吹雪］：「はい、俺も知りたくなってきました」

［カホラ］：「ふふ、分かったらまた何か教えてあげるわ」

［吹雪］：「はい、是非お願いします」

カホラルート・アンダンティーノ（5）

［場所：スーパー］

［カホラ］：「さて、どのお肉にしようかしら？」
話は夕食のことに切り替える。
［吹雪］：「先輩、夕食は何を作ってくれるんですか？」
［カホラ］：「そうね、一応候補としてはシチューに餃子、トンカツとか考えてたんだけど」
［吹雪］：「臨機応変に変えられるんですね」
［カホラ］：「これでも料理は苦手じゃないからね」
左手でポンポンと右腕を叩いた。
［カホラ］：「とりあえず、お肉を見てみましょうか」
［吹雪］：「そうですね」
……。
［カホラ］：「――さて、安いお肉は、と言っても、ここのお肉は基本的に安いのよね」
［吹雪］：「まあ、そうですね」
島価格などどこ吹く風、この店は基本的に割安なお肉を数多く仕入れている。
［カホラ］：「島民に優しいお店で助かるわね」
［吹雪］：「ですね」
［カホラ］：「予算はいくら？　あんまりたくさん買っちゃうと今後に響いちゃうわよね」
［吹雪］：「そうですね、一応２０００円程預かってきてるんでその予算内で収まれば問題ないと思います」
［カホラ］：「２０００円ね、分かったわ。んーと、一番安くてボリュームがあるのは」
先輩は指を頬に当ててじっくり考えている。

［カホラ］：「ねえ、吹雪」
［吹雪］：「はい、何ですか？」
［カホラ］：「水炊きと鳥のカツレツ、どっちが食べたい？」
［吹雪］：「え？　俺が選ぶんですか？」
［カホラ］：「ええ、ボリュームからみて鶏肉が一番お得っぽいから。で、鶏肉の私の得意料理を作るから、吹雪に選んでもらったほうを作ろうと思ったのよ」
［吹雪］：「それ、完全に俺の意見で周りの意見が反映されないんじゃないですか？」
［カホラ］：「誰も文句は言わないわよ。少なくとも吹雪は満足してくれるでしょう？」
［吹雪］：「そうですけど、いいんですか？」
［カホラ］：「当たり前よ、私が言い出したんだから」
［吹雪］：「じゃあ……水炊きがいいです。今まで食べたことないんで」
［カホラ］：「うん、分かったわ。じゃあ今晩は水炊きにしましょう」
先輩は脂の少ない大きな鶏肉をカゴに入れた。
［カホラ］：「吹雪あそこの棚にあるポン酢をとってきてちょうだい。後、昆布も近くにあるはずだから、一つもってきて」
［吹雪］：「分かりました」
俺は言われた品を棚から手に入れた。
……。
［カホラ］：「ふう、ちゃんと予算内に収まったわね」
［吹雪］：「そうですね、５００円も余裕がありますから」
［カホラ］：「ふふ、いい買い物ができてよかったわ」
［吹雪］：「早く、先輩の料理が食いたいです」
［カホラ］：「ふふ、腕によりをかけて作るから」
自然と、足並みは軽くなっていた。
――先輩の料理は、すごく美味しくて、ついつい食べ過ぎてしまっ

た。

カホラルート・アンダンティーノ（6）

12月18日（土曜日）

［場所：社会科室］

［繭子］：「はあ、一息ついた～」
［吹雪］：「午前中の練習は終わったのか？」
［繭子］：「うん、今日は学校が午前中で終わりだから、午後はぐでーっとできるんだ～」
［吹雪］：「疲れをとって夜に備えるんだぞ」
［繭子］：「うん、もちろん」
［聖奈美］：「そういうあなたは？　順調に行ってるんでしょうね？」
［吹雪］：「ああ、学園長とフェルシア先生にアドバイスをもらいながらやってるから、大分形にはなってきてると思う」
［フェルシア］：「ええ、吹雪くんは真面目に取り組んでるから最近はめざましい成長を遂げてるわよ。心配は無用だと思うわ」
［聖奈美］：「ならいいわ。その調子で努力を続けることね」
［ダルク］：「み、聖奈美。そんな言い方……」
［吹雪］：「ダルク、気にするな。杠もな、俺に負けないように頑張れ」
［聖奈美］：「誰が負けるって？　寝言は寝て言いなさい」
［吹雪］：「ははっ」
［舞羽］：「お茶煎れてきたよ、よかったら飲んで」
［繭子］：「わーい、さすが舞ちゃんだ～」
［聖奈美］：「ありがとう、須藤さん」
［フェルシア］：「どうもありがとう」
［舞羽］：「はい、吹雪くん」

［吹雪］：「おう、サンキュー」
早速一口飲んでみる。色と味からしてほうじ茶だろう。
［繭子］：「あー、美味しい～、体に染み渡るよ～」
［舞羽］：「味は大丈夫ですか？」
［フェルシア］：「ええ、全然問題ないわ。１００点満点」
［舞羽］：「よかった。ダルクちゃんにもあるよ、どうぞ」
［ダルク］：「あ、ありがとう舞羽」
ダルクに似合ったかわいらしい小さなコップ。ダルクも同じようにふーふーしながら口に運んだ。
［繭子］：「ねえねえふーちゃん、何かして遊ぼうよ～」
［吹雪］：「遊ぶ？　その年で何言ってるんだよ」
［繭子］：「年は関係ないじゃなーい、誰だってふと童心に帰って遊びたくなる時ってあるでしょう？」
［吹雪］：「万年童心のままじゃねーか、マユ姉は」
［繭子］：「そんなことありません～、ね？　聖奈美ちゃん」
［聖奈美］：「え？　あたしですか？」
［吹雪］：「他の人を巻き込むな」
［繭子］：「巻き込んでないよ～、同意を求めようとしてるだけ」
［吹雪］：「それが巻き込んでるって言うんだよ」
［繭子］：「だって、せっかくの休み時間なんだよ～？　こうやってお茶を飲んで語らってるのもいいけど、楽しく遊んでストレスを解消するのも大事なことだと思うの、ワタシ」
［吹雪］：「夜には練習があるんだぞ？　それなのにここで体力を消費したら夜に保たなくなるだろう」
［繭子］：「でも、悪い言い方かもしれないけど、ワタシたちは指さえ元気なら何とかなるんだよ？」
［吹雪］：「極論だろ、それは」
［繭子］：「一番疲れるのはふーちゃんだね、魔力を消費しなくちゃいけないし」
［吹雪］：「既に消費してるよ。夜は夜でランニングをしないとい

けないし」
［繭子］：「あ、そうなんだ～。――だとすると、遊びたくないっていうのは単純にふーちゃんがイヤなだけなんじゃ？」
［吹雪］：「そんなこともあるが、そんなことはない」
［繭子］：「一体どっち！？」
［吹雪］：「どっちだっていいだろ？　つか、仮に遊ぶとしても遊ぶ道具とかがないだろう」
［繭子］：「道具を使わない遊びはたくさんあるじゃん。かけっことか缶蹴りとか鬼ごっことか」
［吹雪］：「マユ姉、喧嘩売ってるか？」
［繭子］：「え？　何で？」
［吹雪］：「夜の練習メニュー、ランニングだって言っただろうが」
［繭子］：「あ、そっか。マユ大失敗」
かわいく言って誤魔化そうとしてやがる。

［繭子］：「ねえ～、何でもいいからさ、みんなで遊ぼうよ～」
［吹雪］：「一人で自問自答でもしてればいいんじゃねぇのか？」
［繭子］：「そんなの遊びじゃないよ～！」
［吹雪］：「だって、他に何があるんだよ。舞羽、何かあるか？」
［舞羽］：「うーん、何だろう。みんなでできる遊びって言うと、トランプとかしかないよね」
［聖奈美］：「でも、そのトランプがないわけでしょう？　したくてもできないわ」
［フェルシア］：「あ、トランプだったら、保健室にあるわよ」
［繭子］：「え？　そうなの？　フェル」
［フェルシア］：「ええ、何でか分からないけど、保健室には遊具がいくつか置いてあるのよね。暇な時に遊ぶためかしらね」
［聖奈美］：「保健室って、体調が優れないときに利用する場所ですよね？　どうして体調が悪いのに、遊べる元気があるんですか？」
［繭子］：「単純に、フェルシア先生に会いに来る人もいるんだよ、きっと」
［聖奈美］：「ちょっと、納得いきませんね」
［繭子］：「でも、これでみんなで遊べるよ。今からトランプ大会だ～！」
［吹雪］：「結局やるんだな」
［繭子］：「たくさんいたほうが楽しいから、みんなでやろうよ～」
……渋っても無駄か。

カホラルート・アンダンティーノ（8）

［吹雪］：「悪い、みんな付き合ってくれ」
［舞羽］：「うん、いいよ」
［聖奈美］：「ま、他にすることもないから」
［フェルシア］：「じゃあ私、持ってくるわね」
フェルシア先生は部屋を出ていった。
［聖奈美］：「そういえば、カホラ先輩はどうしたの？　さっきから姿が見えないようだけど」
［舞羽］：「確かにいないね、午後は練習がないはずだけど」
［繭子］：「どこかにお出かけしてるのかな？」
ちょうどそんな話をしている時だった。
［吹雪］：「ん？　電話だ」
液晶には、カホラ先輩と映っている。
［吹雪］：「もしもし」
［カホラ］：「もしもし吹雪？　今大丈夫かしら？」
［吹雪］：「ええ、大丈夫です。先輩、どこかにお出かけしてるんですか？」
［カホラ］：「まあ、確かにお出かけかしら。場所は図書館なんだけど」
［吹雪］：「あ、そうですか。いつもの、ですか？」
［カホラ］：「そう、いつものよ」
いつもの、それだけで何をしてたのかが分かった。
［吹雪］：「何か分かったことでもありましたか？」
［カホラ］：「あ、そうそう。ちょっとだけ分かりそうなことがあるんだけど、ちょっと一人じゃ大変なのよ。だから、吹雪に手伝ってもらいたくて電話したの」
［吹雪］：「あ、そうなんですか」
［カホラ］：「いいかしら？　用事があるんならそっちを優先して

くれて構わないけど」
［吹雪］：「いえ、大丈夫です。こっちはダラダラしてるだけですから」
［カホラ］：「本当？　じゃあ、お願いしていいかな？」
［吹雪］：「はい、了解です」
［カホラ］：「じゃあ、図書館にいるから。準備終わったら来てちょうだい」
［吹雪］：「分かりました、じゃあ一旦切りますね」
［カホラ］：「ええ、よろしく」
［繭子］：「カホラちゃん？」
［吹雪］：「ああ、というわけで、俺はちょっと行ってくる」
［繭子］：「ええ！？　一緒に遊ばないの～？」
［吹雪］：「悪いな、協力するって前から言ってたんだ。４人でやっててくれ」
［繭子］：「ふーちゃんとも遊びたかったのに～」
［舞羽］：「そう言わずに。マユさんを楽しませるように頑張りますから」
［フェルシア］：「そうよ。一応教師なんだから、生徒の思いは汲んであげなさい。はい、トランプ」
［繭子］：「一応、じゃないもん。とっても教師だもん」
［フェルシア］：「だったらなおさらよ。気をつけて行ってらっしゃいね？　吹雪くん」
［吹雪］：「はい、分かりました」
［聖奈美］：「先輩に迷惑かけるんじゃないわよ？」
［吹雪］：「努力はするさ」
［ダルク］：「頑張ってねー、吹雪」
……。

カホラルート・アンダンティーノ（9）

［場所：図書室］

［吹雪］：「お待たせしました」
［カホラ］：「あ、いらっしゃい」
手をパタパタと振りながら。
［カホラ］：「大丈夫だった？　抜け出してきたみたいだけど」
［吹雪］：「あれ？　聞こえてました？」
［カホラ］：「電話越しに繭子先生とかの声が聞こえてたし、みんな集まってるんだろうなって思って」
［吹雪］：「先輩、耳がいいんですね」
［カホラ］：「実はそうなのよ。――おっきい声だったから誰でも気付けることでしょうけど」
［吹雪］：「あはは。でも、問題ないですよ、みんな送り出してくれましたから。杠には迷惑はかけるなって注意されましたし」
［カホラ］：「迷惑かけてるのは私なんだけどねー」
［吹雪］：「厳しいのは俺にだけですから。特に問題はないと思いますよ」
［カホラ］：「そう？」
［吹雪］：「はい。それに俺も、先輩の調べてることに興味が湧いてましたから」
［カホラ］：「嬉しい言葉、ありがとう」
［吹雪］：「本当のことですから」
［カホラ］：「ふふ、じゃあ、ちょっと手伝ってもらおうかしら」
［吹雪］：「はい、了解です」
先輩の後ろについて、本のあるところに向かう。
［カホラ］：「そういえば、分かったことがあるんだけどね」
［吹雪］：「はい」

電話で言ってたことか。

カホラルート・アンダンティーノ（１０）

［カホラ］：「まだ確信ではないんだけど、ピアノはどうやらとっても昔に、誰かが生み出したものらしいのよね」
［吹雪］：「え！？　そうなんですか？」
［カホラ］：「まだ本当かは定かじゃないわ。でも、さっき調べた資料の中に、それらしいことが記されていたのよ。あ、ほのめかされてるって言ったほうがいいかもしれないわね」
［吹雪］：「誰の資料に書いてあったんですか？」
［カホラ］：「ピアリーっていう学者。あまり世に広まってはいない人ね」
［吹雪］：「はあ、初めて聞きます」
［カホラ］：「普通はそうよね。特に目立った功績も残していないんだし。でもこの人は、この島に興味をもって調べていた、それは私にとっては大きな発見ね」
［吹雪］：「そうですね。もう故人ですか？　その学者さんは？」
［カホラ］：「そうね、４０年くらい前に」
［吹雪］：「その資料がこの学園にあったってことは、ピアリーはこの学園の卒業者なんでしょうか？」
［カホラ］：「私もそうなのかなと思って、歴代の卒業者の名前を調べたんだけど、ピアリーという名の卒業者はいなかったわね」
［吹雪］：「だとすると、個人的にこの島に興味を持ってここにやってきたってことに」
［カホラ］：「その考えが濃厚だと思う」
［吹雪］：「なるほど」
［カホラ］：「前にも話したけど、この島の人以外の人たちは四季のピアノのことを知らない人が多いから、それを調べようと思う人なんてほとんどいないのよね。そのほんの一握りの内の一人がピアリーってことね」

［吹雪］：「そうですね。四季のピアノが世に広まったら、何か悪事をしようとする人も出てくるかもしれないですからね」
［カホラ］：「そのための結界よ。中からは見えるけど外からは見えないようにするためのね。それがこの島があまり世に広まってない原因なんでしょうけど」
［吹雪］：「魔力がない人には見えないですからね。ん？　だとするとピアリーはかなり魔法に長けた人ってことですか？」
［カホラ］：「可能性は高いわね。この島に来る方法は島の長に連絡をして結界を解除するか、自らの力で解除するくらいしか方法はない。どちらにしても、結界が見えないことには始まらない話だから」
［吹雪］：「仮に後者だったとして、一人の力で島全体を覆う結界って破ることは可能なんですか？」
［カホラ］：「全部を破ったとしたら、それはもう賢者と言っていいかもしれないわね。島民全員で立ち向かっても勝てるか分からないわ」
［吹雪］：「滅ぼされちゃう可能性だってありますね」
［カホラ］：「でも、一部分だったらできなくはないわね。元々結界は魔力の集合体。一部分だけを狙えば、その部分を集合体から解除させることもできるから」
［吹雪］：「でも、かなり魔力は消費しますよね」
［カホラ］：「そうでしょうね、それに、結界には自然治癒の補正もかかっているから、ちょっとの威力じゃすぐに戻ってしまうだろうし」
［吹雪］：「どっちにしても容易ではないと」
［カホラ］：「そうね、でも、恐らくピアリーにはこの島民の中に友人がいたんだと思うわよ。不法侵入だとしたら、何かしらの文献に載ってるはずだもの」
［吹雪］：「島を脅かす邪悪な学者、みたいな感じですか？」
［カホラ］：「雰囲気はそうかもしれないわね。きっとしてないだ

ろうけど」

［吹雪］：「勝手に悪人に仕立てあげちゃダメですね」

ごめんなさい、ピアリーさん。

カホラルート・アンダンティーノ（11）

［カホラ］：「とにかく、ピアリーはこの島にたどり着き、四季のピアノについて研究をしていった。これは変わらない事実ね」
［吹雪］：「その資料をこれから探すんですか？」
［カホラ］：「そうね。基本的に四季のピアノは謎が多いから、それについて調べた学者の研究資料はとっておくのがこの島では普通なの。さっき調べたピアリーの資料に、上って字が入ってたから、きっと下もあるはずなの」
［吹雪］：「それを探せばいいんですね」
［カホラ］：「ええ、でもこの図書室にはない可能性が高いから、古書室のほうに行ってみましょう」
［吹雪］：「古書室？　そんなところがあるんですか？」
［カホラ］：「あるわよ。知らなかった？」
［吹雪］：「初めて聞きました」
［カホラ］：「まあ、図書館員くらいしか利用しないからね。あそこよ、あの鍵がかかった部屋」
先輩が指さした先に、そのドアがある。
［吹雪］：「あ、あそこがそうなんですか？」
［カホラ］：「ええ、そうよ。普段使用されない本、あるいはほとんど生徒に借りられなかった本などは、この古書室に保管されるの。多分ピアリーの研究資料も、この中にあるはず」
［吹雪］：「でも、図書館員しか利用できないんですよね？　鍵が必要なんじゃ――」
［カホラ］：「ふふ、心配ご無用よ」
先輩の指には鍵束が光っていた。
［カホラ］：「ちゃーんと、借りてきてあるわ」
［吹雪］：「要らん心配でしたね」
［カホラ］：「さっき、お母さんから調べたいことがあるからって

お願いしたの」

［吹雪］：「学園長は、先輩が調べてることについて知ってるんですか？」

［カホラ］：「まだ言ってはないけど、知ってるかもしれないわね。毎日のように図書館に通ってるし、母親だしね」

［吹雪］：「鋭いですからね、学園長は」

［カホラ］：「主にどうでもいいこと、だけどね」

［吹雪］：「そこは、ノーコメントってことで」

ガチャリ。

［カホラ］：「さ、中に入りましょう」

［吹雪］：「はい」

カホラルート・アンダンティーノ（12）

［場所：古書室］

中は真っ暗だった。
［吹雪］：「コウモリでも出てきそうですね」
［カホラ］：「下に明かりがあるから、足下に気をつけてね」
どうやら階段になってるようだ。先輩のシルエットが徐々に低くなっていく。
［カホラ］：「えっと、明かり明かり……あった」
視界が一気に開けた。
［吹雪］：「おお……ちょっといぶってますね」
［カホラ］：「古い部屋だし、地下だからしょうがないわね。我慢してちょうだい」
［吹雪］：「はい」
目が慣れてきて、周りをぐるっと見渡してみる。
［吹雪］：「結構広いんですね」
［カホラ］：「そうね。古書室にある本だけでも、図書室を経営することはできるかもしれないわね。内容重視ばかりでおもしろくはないかもしれないけど」
［吹雪］：「図書館におもしろさを求めるのもおかしな話ですよ。一般ウケはしないかもしれないですけど、研究者側からしたら嬉しいくらいじゃないですかね」
［カホラ］：「そういう風に考えることができる吹雪は立派ね。将来、きっと成功するわ。学者として」
［吹雪］：「学者限定ですか！？」
［カホラ］：「大丈夫、大丈夫。冗談だから」
［吹雪］：「成功するって言ってもらえるのは素直に嬉しいですよ。ありがとうございます」

［カホラ］：「どういたしまして。さ、もうちょっと奥よ、行きましょう」
［吹雪］：「はい」
先輩の後ろを付いていく。
［カホラ］：「ここが研究資料が保管されている棚よ」
［吹雪］：「うわ、すごい量ですね」
［カホラ］：「とは言っても、四季のピアノについての研究資料はかなり限られているけどね」
［吹雪］：「そうですよね。これが全部四季のピアノについてのものだったら、ここまで悩むことがないですもんね」
［カホラ］：「そういうこと。でも、ないことはないから探してみましょう」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「ピアリーの資料が第一目的だけど、四季のピアノに関しての資料があれば、それも出しておいて。手がかりになるかもしれないから」
［吹雪］：「分かりました」
［カホラ］：「何か分からないことがあったら言って。教えるから」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「じゃあ、探索開始～」
［吹雪］：「おー！」
……。

カホラルート・アンダンティーノ（13）

［吹雪］：「そう簡単には見つからないですね」
［カホラ］：「そうね」
探し始めて30分程、なかなかお目当ての品は出てこない。
［吹雪］：「ピアリーの研究資料の上って、図書室で見つけたんですか？」
［カホラ］：「ええ、図書室の一角にも、研究資料の棚があるでしょう？　何かヒントになる資料があるかなって思って探してたら、本の奥のほうに押し込まれて入ってたの」
［吹雪］：「誰かがテキトーに閉まったんですかね」
［カホラ］：「そのおかげで見つけられたのかもしれないけどね。ちょっと盛り上がってたから」
［吹雪］：「確かに。でも、上は図書室にあるのに、下が見つからないっていうのはおかしな話ですよね。普通そういうのってセットでおいたりしませんか？」
［カホラ］：「そうなのよね、そこが引っかかってるのよね。上が図書室にあるのに下が一緒にないっていうのはひょっとしたら上しか置いてないんじゃないのかって思えちゃうのよね。あるいは、ちょっとした手違いで処分されちゃったとか」
［吹雪］：「あんまり、考えたくないですね。その可能性は」
［カホラ］：「うん、そうね。ここにあることを信じましょう」
［吹雪］：「そうです、きっとありますよ」
ないって可能性を頭から無くし、あることだけを考える。
［カホラ］：「そういえば、まだ上の資料の内容、詳しく話してなかったわね。聞きたい？」
［吹雪］：「あ、いいんですか？」
［カホラ］：「もちろんよ、それに、ずっと資料と向き合ってるのも退屈でしょう？」

［吹雪］：「そうですね、ちょっと息が詰まっちゃいますね」
［カホラ］：「退屈しのぎになるか分からないけど、教えるわ」
［吹雪］：「はい、お願いします」
［カホラ］：「さっきも少し言ったけど、ピアリーの考えた理論っていうのは、四季のピアノはずっと昔から存在してたのではないかってこと」
［吹雪］：「何年以上昔なんですか？」
［カホラ］：「ピアリーの考えでは、おそらく数千年以上前ではないかと推測されてるわ」
［吹雪］：「確かに、長い年月ですね」
［カホラ］：「その年月を推測するポイントとして、四季のピアノの状態が挙げられるわ。吹雪は四季のピアノがある場所に入ったとき、魔力を感じたって言ってたわよね」
［吹雪］：「はい、波が渦巻いてるのを感じました」
［カホラ］：「その魔力の正体っていうのは、四季のピアノにかけられている保護魔法らしいの。それも、普通の魔法じゃないわ。それこそ強力で、絶対に破れないと言っていいほどの」
［吹雪］：「結界よりも、ですか？」
［カホラ］：「それ以上かもしれないわね。本当に数千年以上、その魔法で保護されていたのだとしたら」
［吹雪］：「なるほど」

カホラルート・アンダンティーノ（14）

［カホラ］：「今度、調べてみる価値はありそうね。ピアリーの資料では、三重ほど、保護魔法が重ねがけされてるらしいわ」
［吹雪］：「三重、それだけで頑丈さが伝わりますね」
［カホラ］：「そうね、それだけ四季のピアノはこの島にとって重要なものなんだということが分かるわ」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「その魔法があるから、四季のピアノは今も汚れることなく存在し続けている。外傷一つないのが何よりの証拠ね」
［吹雪］：「綺麗でしたもんね、四季のピアノは」
［カホラ］：「ええ、今までいろんな資料を見てきたけど、私の中ではこれが一番正しいものだと感じるわ。実際に、肌で魔力を感じることもできたわけだし」
［吹雪］：「俺も何か、そんな感じします」
［カホラ］：「もう一つ、これは今機能しているかが分からないけど、この島には魔力を保つためのストーンサークルがあるみたいなの」
［吹雪］：「ストーンサークル？」
［カホラ］：「何ていうのかしら、魔法陣の石バージョンとでも言えばいいのかしら？」
［吹雪］：「かなり最近っぽくなりましたね」
［カホラ］：「ごめんね、良い例えが思いつかないわ」
［吹雪］：「いえ、何となく分かりましたからオッケーです」
［カホラ］：「主な利用目的は、魔力の保持や増強、または結界としても用いられるわね。今はあまり使わないけど、昔の魔法使いはよく利用していたのよ」
［吹雪］：「色々使い道があるんですね」
［カホラ］：「四季のピアノを守るために、有効活用できるように

したんだと思うわ。少なくとも2つはこの島に存在しているらしいわ。ピアリーが自分の目で確認しているから」

［吹雪］：「そのストーンサークルはどこに？」

［カホラ］：「場所は、上には詳しく述べられていなかったのよ。多分下のほうに詳しく載っているんじゃないかしら」

［吹雪］：「なるほど、それはないと困りますね」

［カホラ］：「ええ。きっとそのストーンサークルに、何か手がかりがあると思うのよ」

［吹雪］：「そうですね、形あるものに、制作した情報を記すのは当然のことですもんね」

［カホラ］：「これも、場所が明確に分かっていれば、行ってみたいところね」

［吹雪］：「俺も、ちょっと見てみたいです」

［カホラ］：「大きくはこの二つ。四季のピアノにかけられた強力な保護魔法とストーンサークル、これがずっと昔に存在していたと推測される大きな理由ね。その続きが下に記されているはずなのよ」

［吹雪］：「このまま終わるわけにはいきませんね」

［カホラ］：「ええ、調査するための情報がほしいわ」

［吹雪］：「ストーンサークルを設置する場所には規則性があるんですか？」

［カホラ］：「基本、島などの場合はその島の中心に設置するのが普通ね。島全体を覆うのに端に設置するのは非効率的だからね」

［吹雪］：「それがこの島にも当てはまるのであれば、島の中心に行けばあるんじゃ」

［カホラ］：「一つのストーンサークルで賄えるのであれば、それでいいはずだけどね」

［吹雪］：「あ、そうか。少なくとも二つは確認されているのか」

［カホラ］：「そう、二つある場合はどこにあるのかが不確定になってしまう。単純に考えれば右半分に一つ左半分に一つと考えるのが妥当なんでしょうけど、この島の場合、常識が通じない可能性も

大いにあるでしょう」
［吹雪］：「ああ、そうですね」
［カホラ］：「だからピアリーは、ストーンサークルの数を少なくとも二つと呈したのかもしれないわ。他にも存在する可能性がないと言い切れないから」
［吹雪］：「じゃあ、四季のピアノに各一つずつって可能性も？」
［カホラ］：「無きにしも有らずね」
［吹雪］：「おお、ちょっとわくわくしてきましたね」
［カホラ］：「ふふ、これが研究するのがやめられない理由なのよ。どんどん謎が解けていくような感覚がたまらないのよね」
［吹雪］：「分かる気がします。……研究はしてないですけど」
［カホラ］：「共感してくれるだけでいい気分よ。一緒に解明できるようにしましょう」
［吹雪］：「はい、そうですね」
話をしながら、俺たちは探し続けた。
……。

カホラルート・アンダンティーノ（15）

［吹雪］：「くそー、どこにいるんだよピアリー」
［カホラ］：「本人はもういないんだけどね」
先ほどから、ひたすら本を出してはしまう作業の繰り返し。さすがに少々飽きてきた。
［カホラ］：「私たちに見つかるのが嫌なのかしら？」
［吹雪］：「それはないと思いますよ。悪意を持ってるわけではないですし。敵対はしてないと思いますけど」
［カホラ］：「そうよね、単純に見つかってないだけよね」
［吹雪］：「きっとそうですよ」
［カホラ］：「うーん。でもさすがにちょっと疲れたわね、休憩しましょうか」
［吹雪］：「そうですね」
イスがないため、その場に腰を降ろすことにする。
［吹雪］：「先輩、スカート汚れませんか？」
［カホラ］：「大丈夫よ、ほろえば平気」
［吹雪］：「ならいいか」
［カホラ］：「……見ちゃダメだからね？」
［吹雪］：「み、見ません！　大丈夫ですよ」
［カホラ］：「ふふ、冗談、冗談」
舌をペロっと出してにやりと笑った。
［カホラ］：「私、ちょっと良いもの持ってるわよ」
［吹雪］：「何ですか？」
［カホラ］：「ちょっと待って」
ポケットをごそごそ探り出す。
［カホラ］：「ほら、チョコビスケット」
［吹雪］：「先輩、図書館での飲食は厳禁じゃあ――」
［カホラ］：「図書館での飲食が厳禁なんでしょう？　ここは古書

室だから大丈夫よ。ふふ」
［吹雪］：「（へ、屁理屈っぽいな……）」
［カホラ］：「汚しさえしなければ大丈夫よ、はい」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［カホラ］：「もらったから、吹雪も共犯ってことで」
［吹雪］：「え、ええ!?」
［カホラ］：「あ、返品は一切受け付けないから、女の子に恥をかかせるのは男としてダメでしょう?」
［吹雪］：「せ、先輩、ずるいですよ」
［カホラ］：「女の子は総じてずるい生き物よ」
［吹雪］：「ま、まあバレなきゃ大丈夫か」
［カホラ］：「そうそう、食べましょう」
先輩の押しに負けて、俺もビスケットを食べることにした。

カホラルート・アンダンティーノ（16）

［吹雪］：「あ、うまい」
［カホラ］：「そうでしょう？　私のお気に入りだから」
［吹雪］：「先輩、そこまでビスケット大好きでしたっけ？」
［カホラ］：「ううん、このシリーズだけよ。他のものが嫌いってわけじゃないけど、ビスケットはこれが一番好き」
［吹雪］：「そうなんですか」
［カホラ］：「1年くらい前にたまたまお母さんが買ってきたのよ、甘いものが食べたかったらしくて。それで一緒に食べてみたら、すごくおいしくて、それ以来ハマっちゃったの」
［吹雪］：「良い出会いをしたんですね」
［カホラ］：「安くておいしいから、吹雪も是非ご贔屓に」
［吹雪］：「せ、宣伝ですか？」
［カホラ］：「何となくね、やったほうがいいと思って」
［吹雪］：「機会があれば、舞羽たちに教えておきますよ。美味しいのは確かですから」
［カホラ］：「よし、ファンが増えたわね」
嬉しそうに先輩は笑った。その姿は、びっくりするくらいかわいらしかった。先輩なのにこんな風に言うのは失礼なのかもしれないけど、かわいらしいというのが一番しっくりくる。
というか、何を考えてるんだ俺は。
［吹雪］：「……忘れよう」
［カホラ］：「ん？　何か言った？　吹雪」
［吹雪］：「い、いえ何でもないです」
［カホラ］：「そお？」
［吹雪］：「お気になさらず」
面と向かって言えるほど俺は強心臓じゃない。
［カホラ］：「今何時かしら？」

［吹雪］：「あ、ちょっと待ってください」
携帯を開いて時刻を確認する。
［吹雪］：「今、2時半ですね」
［カホラ］：「思ったより時間が経ってたのね」
［吹雪］：「ですね、予想外でした」
［カホラ］：「やっぱり、誰かと一緒に作業してると、時間が過ぎるのが早いわね。一人でしてる時と大違い」
［吹雪］：「それは分かりますね。退屈な時間ほど過ぎるのが遅いんですよね」
［カホラ］：「そうよね、どうして逆にならないんだろうって思うわ」
［吹雪］：「人生、そううまくはいかないようにできてるんですよね」
［カホラ］：「詩人みたいなことを言うわね、吹雪」
［吹雪］：「お、思ったことを口にしただけですよ」
［カホラ］：「分かってるわ、私もそう思うもの。それだけ、今の時間が楽しいってことよね」
［吹雪］：「ほ、本当ですか？」
［カホラ］：「ええ。吹雪は話が通じるし、一緒にいてて楽しいからね」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
さすがに、そんなことを面と向かって言ってもらえると――。
［カホラ］：「顔、真っ赤ね」
［吹雪］：「お、お気になさらず。言われ慣れてないものですから」
［カホラ］：「うふふ、そうなの」
ひょっとして、先輩は俺の反応を分かった上で言ってるのだろうか？
……。
……。
……。

カホラルート・アンダンティーノ（17）

そして、休憩を挟んで再開し、しばらくしてようやく――。
［吹雪］：「先輩、ありました！」
［カホラ］：「本当!?　どれどれ？」
［吹雪］：「これです、合ってますよね？」
研究資料の表紙には、ピアリーの名前と下の文字がはっきりと記されている。
［カホラ］：「そうそう、これよ。でかしたわ、吹雪」
［吹雪］：「見つかって何よりです」
［カホラ］：「ドコから出てきたの？」
［吹雪］：「ここです。先輩が上を見つけた時と同じような感じでした」
何部も挟んである本棚の奥、細い一冊と一冊の間に押し込まれていた。
［吹雪］：「見つかりずらいわけですよ」
［カホラ］：「ピアリーって、恥ずかしがり屋だったのかしら？」
［吹雪］：「あんまり関係ないと思いますよ？」
［カホラ］：「でも、捨てられてなくてよかったわ。一時はあきらめかけてたけど、信じる者は救われるようにできてるのね」
［吹雪］：「先輩の頑張りを見てたのかもしれませんね」
［カホラ］：「それは嬉しい限りね。早速、ちょっと中を見てみましょう」
［吹雪］：「はい」
資料はかなり変色していたが、読む分には支障はきたさない。先輩は資料に手をかけた。パラパラとめくり、どんなことが書かれているかを確かめているようだ。
［カホラ］：「――あったわ。ストーンサークルに関する研究資料」
先輩はそこに付箋を貼り付けた。

［カホラ］：「それからこっちは……。……」
先輩はそれきり真剣に資料に目を通していた。
俺はそれをじっと見つめている。先輩は問題なく読んでいるが、俺にはどう書かれているかが読めないからな。違う国の言葉だし……。
［カホラ］：「……なるほどね」
［吹雪］：「もう全部読み終わったんですか？」
［カホラ］：「まさか、触りだけよ。今日一日かけて読み進めるわ。吹雪には明日、内容を教えてあげる」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［カホラ］：「お礼を言うのは私のほうよ。付き合ってくれて感謝してるわ」
［吹雪］：「いえいえ。有力な手がかりを掴めるといいですね」
［カホラ］：「これが見つかっただけでもかなり有力よ。きっと何かは掴めるでしょう」
［吹雪］：「ですね」
［カホラ］：「ふふ、読むのが楽しみだわ」
その宣言通り――。

［場所：社会科室］

［カホラ］：「……」
［繭子］：「ねえねえふーちゃん」
［吹雪］：「何だ？」
［繭子］：「さっきからカホラちゃん、何してるの？　近づいちゃいけないオーラがにじみ出てるんだけど」
［吹雪］：「見たら分かるだろう？　読書してるんだよ、邪魔しちゃいかんぞ？　真剣に仕事してるんだ」
［繭子］：「すごいなー、まるで教師みたいだよ～」
［吹雪］：「マユ姉も教師だろうが……」
本当に、明日には何かが分かりそうだ。

カホラルート・フォルテ（1）

12月19日（日曜日）

［場所：社会科室］

「ん、朝か……」

目覚ましの音で夢から覚めた。思い出せないから大した夢ではないだろう。

みんなはまだ……寝てるか。まあ、後ちょっとで起き出すだろう。

日曜とは言っても練習はあるからな。とりあえず、朝の身だしなみを――。

俺は水飲み場へ向かう。

……。

［場所：水飲み場］

［吹雪］：「ん？」

水飲み場に先客がいた。顔を洗っているのは、先輩か？

［吹雪］：「おはようございます、先輩」

［カホラ］：「あ、吹雪。おはよう」

［吹雪］：「早いですね、起きるの」

［カホラ］：「吹雪も一緒じゃない。今起きたんだから」

［吹雪］：「目覚ましが早くなったんで」

［カホラ］：「早くセットしてたの？　目覚まし」

［吹雪］：「昨日からイジってはいませんね」

［カホラ］：「じゃあ昨日と起きた時間は一緒じゃないの」

優しく頭を小突かれた。

［吹雪］：「昨日よりも気持ち、早く起きた感じがするんですよね」

［カホラ］：「良いことじゃない。早起きは三文の得って言うでしょう？　まあ、１００年早起き続けても１０９円しか儲からないんだけど」
［吹雪］：「ええっ！？　そうなんですか？」
［カホラ］：「そうよ、知らなかった？」
［吹雪］：「全く、ことわざは知ってましたけど」
［カホラ］：「曖昧にしか覚えてないんだけど、一文は一円の千分の一くらいしか価値がないらしいのよ。ほんとに極微少なものなの」
［吹雪］：「マジですか？」
［カホラ］：「マジ。だから、どんなに努力して早起きを繰り返しても１００円くらいしか儲けが出ないの」
［吹雪］：「それだったら、早起きなんてしたくなくなりますね」
［カホラ］：「そうよね。もう少し特典をつけてほしいものよね」
［吹雪］：「でも、おもしろい話ですね。今度友人に自慢します」
［カホラ］：「是非使ってください」
［吹雪］：「先輩は色々なことを知ってるんですね。本当にすごいですよ」
［カホラ］：「私はただ知ろうとしてるだけよ。そして覚えたことだけをしゃべってるだけ、本当の私は何にも知らないわ」
［吹雪］：「でも、その知ろうっていう積み重ねで今の先輩がいるわけですから」
［カホラ］：「ふふ、吹雪は誉め上手ね」
［吹雪］：「嘘ついてませんよ、信じてください」
［カホラ］：「ありがとう。――あ、そうだ。今日、練習終わった後って時間あるかしら？」
［吹雪］：「基本的に、練習時間以外はフリーですよ。あ、ひょっとして分かったんですか？」
［カホラ］：「そうね。昨日一晩かけて、大体は解読することができたから。だから今日は、その情報を元に外に出てみようかと思うの」

［吹雪］：「つまり島探索ってことですか？」
［カホラ］：「そうね。付き合ってくれる？」
［吹雪］：「もちろんです」
［カホラ］：「下の内容は行く途中で話すわね。とりあえず、練習を頑張りましょう」
［吹雪］：「はい」
今から午後が楽しみだ。

カホラルート・フォルテ（2）

［場所：神殿への道］

［カホラ］：「正直言うと、ピアリーの資料は結構曖昧なところが多かったわね」

［吹雪］：「え？　そうなんですか？」

［カホラ］：「あえてって可能性もあるんだけど、やはりまだ謎に包まれていることは多数あるみたいなのよ。項目ごとの締めも自分の目で確かめてみてほしい、とかが多かったし」

［吹雪］：「確証を持てる証拠が見つからないってわけですか？」

［カホラ］：「そうね。でも、彼なりに結論づけた理論がたくさん記されていたから今後のためにつながったわ」

［吹雪］：「ピアリーの株が上がりましたか？」

［カホラ］：「結構ね。それで、知りたかったストーンサークルの場所なんだけど」

［吹雪］：「あ、はい」

［カホラ］：「これも、はっきりここだっていう情報は記載されていなかったのよ」

［吹雪］：「ええ？　そうなんですか？」

［カホラ］：「はっきり書かれていないだけで載ってはいるんだけど、これもちょっと曖昧だったの。これは恐らく、あまり明確に書くと悪事のきっかけになるかもしれないと危惧したんだと思うわ」

［吹雪］：「確かに、それは一理ありますね」

［カホラ］：「ピアリーなりの気配りなんでしょう。これが、資料に記されていたストーンサークルの情報よ」

先輩は一枚の紙を俺に渡した。

［吹雪］：「た、確かにアバウトですね」

［カホラ］：「彼も迷った末に見つけたみたいだから、はっきり書

く自信がなかったのかもしれないわ」
［吹雪］：「ひょっとして、はっきりと書けなかった理由にはそれもあるんじゃ」
［カホラ］：「可能性はなくはないわね」
先輩のメモによれば、第一のストーンサークルは桜花のピアノの南西に位置しているらしい。
［吹雪］：「何か目印みたいな情報は？」
［カホラ］：「特には書いてなかったわ」
［吹雪］：「これは、ちょっと時間がかかりそうですね」
［カホラ］：「まあ、焦らずに行きましょう。今日がダメなら、明日も行けばいいし。気分転換と思うのが一番いいわよ」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「とりあえず、桜花のピアノのところまで行きましょう」
［吹雪］：「はい」
……。

カホラルート・フォルテ（3）

［場所：桜花のピアノ近辺］

［カホラ］：「ひとまず到着ね。そして、ここから南西と」
［吹雪］：「南西っていうと、結構範囲は広いですよね」
［カホラ］：「そうね、向こう側全てに可能性があるわけだし」
［カホラ］：「うーん。何か桜花のピアノに手がかりはないのかしら？」
［吹雪］：「中に入ることは？」
［カホラ］：「今日はダメね。お母さんから了解を得てきてないから」
［吹雪］：「そうですか。じゃあ、周辺だけでも見てみますか？ひょっとしたら何かあるかもしれませんし」
［カホラ］：「そうね、そうしましょうか」
［吹雪］：「どっちを調べますか？」
［カホラ］：「私はこっちを見てみるわ」
［吹雪］：「じゃあ、俺はこっちを見てみますね」
こうして周辺探索が始まった。
……。

［カホラ］：「しかし、立派な神殿だな」
つくづく思う。写真とかでしか見たことがないからかもしれないが、それでも外観だけで神秘的な雰囲気は伝わってくる。俺はその内部も知っているから余計に魅力的に感じる。ずっと昔から存在して、それでも尚昔の形のままで残っている、ミステリーだよな。昔から存在しているのなら多少風化とかしていてもおかしくはないはず。だけど、外傷一つもない、その時点で、この神殿がどれほどこの島にとって重要なものなのかが理解できる。だが、どうして存在しているのかは謎……一般人の俺でもその先は知りたくなる。
それを自らの力で解明しようとする先輩。普通なら誰かが出した答えで納得しようとするはずだけど、先輩は自分が納得する答えを自分で導き出そうとしている。本当に立派だと思う。
［吹雪］：「すごい人だよな」
こんな頑張りやの先輩を、手伝ってあげたいって思うのは不思議じゃないよな。
役に立てているなら幸いなんだけど。
［カホラ］：「きゃあああああっ！！」
［吹雪］：「おおっ！？」
向こうから悲痛な叫び声が聞こえた。明らかに先輩だろう。一体何があったんだ？
［吹雪］：「先輩、どうかしたんですか？」
［カホラ］：「ふ、吹雪、助けて～！」
尋常じゃないくらい怯えてる。これは大変だ！
［吹雪］：「今行きます！」
俺は急いで先輩の元に向かった。
……。

カホラルート・フォルテ（5）

［吹雪］：「先輩、大丈夫ですか！？」
［カホラ］：「ふ、吹雪……た、助けて……」
先輩の前にいたのは、何と――。
［？］：「じじじ～～～」
［カホラ］：「うう、き、気持ち悪い……」
［吹雪］：「あ、あー、なるほど」
先輩の目の前にいたもの、それはちょこちょこと地面を歩き回る「オケラ」だった。確かにオケラは一年中活動してるからな。ちょっと散歩に出かけにでもきたんだろうか？
と、とにかくだ。オケラには悪いが……。
［吹雪］：「ほら、あっちいけ！」
［オケラ］：「じじじ～～」
踏まない程度に地団太を踏み、向こうに追いやった。
［吹雪］：「先輩、もう大丈夫ですよ」
［カホラ］：「ほ、本当？　もう、いない？」
［吹雪］：「はい、何にもいません」
［カホラ］：「よ、よかった～」
心底ほっとしたように先輩はため息を付いた。
今まで知らなかったけど、先輩って昆虫が――。

カホラルート・フォルテ（6）

［カホラ］：「ダメなのよね」
［吹雪］：「そうだったんですか？」
［カホラ］：「あのカサカサ、とかヌルヌルした感じがどうしてもなれないのよ。特にバッタとかコオロギの類は特に」
［吹雪］：「確かに、あっちに悪気はないんでしょうけどこっちに向かってくる時がありますもんね」
［カホラ］：「そう、はあ……吹雪がいてくれてよかったー」
［吹雪］：「立てますか？」
［カホラ］：「ちょっと待って。――あ」
［吹雪］：「どうしました？」
［カホラ］：「腰抜けちゃって、立てないわ」
［吹雪］：「……ふっ」
［カホラ］：「あ、吹雪。今笑ったでしょう！？」
［吹雪］：「す、すいません。でも、ちょっと……ははは」
［カホラ］：「もう、こっちは本当に死ぬかと思ったのよ」
［吹雪］：「もう笑いません、大丈夫です」
［カホラ］：「もう……」
先輩は目を反らして顔を赤くしていた。やっぱり先輩も、一人の女の子なんだな。昆虫が苦手だったのはちょっと意外だったけれど。
［カホラ］：「しばらく、待っててね」
［吹雪］：「はい、了解です」
［カホラ］：「何か手がかりは見つかった？」
［吹雪］：「隅々探索したつもりなんですけど、特にはなにも」
［カホラ］：「そっか、そう簡単には見つからないか」
［吹雪］：「ピアノを保護するためのものですし、何か手がかりがあってもおかしくないと思うんですけどね」
［カホラ］：「できた時期が違うから難しかったのかもしれないわ

ね。それにさっきも言ったけど、大きく目印を残したら簡単に場所が分かってしまって危険だし」
［吹雪］：「やっぱりそうですよね」
［カホラ］：「でも、保護魔法が強力な力を持ってることは分かったわね」
［吹雪］：「確かに」
［カホラ］：「ここ近辺に生えている木々や花が、冬なのにまだ綺麗に咲いている。魔法が有害からそれを守ってる証拠よね」
［吹雪］：「この保護魔法の中には、除菌みたいな作用も含まれてるんですかね？」
［カホラ］：「どうなのかしら？　確かに三重に重ねがけされているわけだし、そういった作用を組み込むことは可能だとは思うけど」
［吹雪］：「ピアノを高潔に保つためにそれを使うのは別に不思議ではないですよね」
［カホラ］：「そうね、それも考えて調べる必要がありそうね。――よいっしょ！」
先輩は力を入れて立ち上がった。
［カホラ］：「はあ、立てた」
［吹雪］：「大丈夫ですか？」
［カホラ］：「ええ。長い間恥ずかしい姿を見せるわけにはいかないしね」
［吹雪］：「別に恥ずかしいことでも」
［カホラ］：「立てなくなった私を笑ったのは誰よー？」
［吹雪］：「た、確かに笑っちゃいましたけど、別にたいしたことじゃあ」
［カホラ］：「私にとってはたいしたことなの。もう大丈夫、完全復活よ」
［吹雪］：「そうですか？　じゃあ、どうします？　もう少しここ一体を調べますか？」
［カホラ］：「南西のほうに行きましょう。神殿にはまた近いうち

に調べるし、南西に何か手がかりがあるかもしれないし」
［吹雪］：「分かりました」
［カホラ］：「じゃあ、行きましょうか」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……先輩、行かないんですか？」
［カホラ］：「吹雪が先に行ってちょうだい。……ちょっと、ね」
［吹雪］：「あ、分かりました」
俺は前方を確認しながら歩みを進めた。
……。

カホラルート・フォルテ（7）

［カホラ］：「ここが、そのエリア内ね」
［吹雪］：「ここのどこかに、ストーンサークルが隠されていると」
［カホラ］：「ええ、おそらく」
［吹雪］：「……相当広いですね、やっぱり」
それにプラスして周りは木々が生い茂っているから視界も悪い。ストーンサークルを隠す絶好の条件ではあるんだが。
［カホラ］：「確かに広いけど、必ずこのエリアにストーンサークルが存在してるのは本当よ」
［吹雪］：「さっき見せてもらったメモにヒントが書いてありましたよね」
［カホラ］：「ええ。森に生きる宝石が目印だって、ピアリーは記してるわね」
［吹雪］：「森に生きる宝石……何のことを言ってるんでしょうね」
［カホラ］：「森に生きるってことは、草木の一種なのかしら？」
［吹雪］：「順当に考えるとそれが一番可能性が高いですよね。それを中心に探してみますか？」
［カホラ］：「そうね。他に宝石と言われて思いつくものがないし」
［吹雪］：「もし、違ったら考え直してみましょう」
［カホラ］：「じゃあ、一緒に探しましょうか、吹雪」
［吹雪］：「はい」
どうして一緒かは……言わずもがなだ。
［吹雪］：「光を放つ植物……先輩は何か知ってますか？」
［カホラ］：「ヒカリゴケ、とかなら知ってるけど、それが宝石かって問われるとそうとは言い難いのよね」
［吹雪］：「そうですね……コケですもんね」
ネーミングからして、お世辞にも宝石というイメージは湧かない。
［カホラ］：「ないとは言えないけど、確信も持てないわね」

［吹雪］：「それだったらラッキーって考えたほうがいいですね」
［カホラ］：「そうね。というか、ふと思ったんだけど」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「光るか光らないかって、夜のほうが探しやすいんじゃないかしら？　夜行性の植物はいないわけじゃないし、暗いほうが見分けがつきやすいわよね」
［吹雪］：「でも、夜は練習があるから来れませんよね」
［カホラ］：「そうなのよね……気にしても仕方ないか」
［吹雪］：「そうですよ、きっとピアリーは昼に見つけたと思いますよ」
［カホラ］：「理由は？」
［吹雪］：「完全に勘です」
［カホラ］：「そう。じゃあ、私その勘を信じるわね。見つからなかったら吹雪のせいね」
［吹雪］：「え？　マジですか？」
［カホラ］：「ええ、マジ」
［吹雪］：「い、意地でも見つけないと……」
とりあえず、植物を中心的に探していこう。
［カホラ］：「手とか切らないように注意しないと」
［吹雪］：「はい」
ケガをしないように。
……。

まあお約束どおり、そんな簡単に見つかるはずもなく。

［カホラ］：「ちょっと休憩しましょうか」

［吹雪］：「そうですね、はあ、はあ……」

［カホラ］：「大丈夫？　吹雪」

［吹雪］：「はい、全然元気ですよ。はあ、はあ……」

［カホラ］：「には見えないわね。どこかに座りましょうか」

［吹雪］：「そうできると嬉しいです」

［カホラ］：「座る場所、座る場所……ん？　何の音かしら？」

［吹雪］：「え？　何か聞こえました？」

［カホラ］：「うん、聞こえない？　何か、流れるような音」

目を閉じて、周囲に耳をそばだてる。

……。

［カホラ］：「ね？　聞こえたでしょう？」

［吹雪］：「はい、ちょっと聞こえました」

サラサラと、水が流れるような音。

［カホラ］：「ひょっとして、近くに水辺があるのかしら？」

［吹雪］：「でも、そんなのがあるなんて、地図に書いてましたか？」

［カホラ］：「地図には載ってないわね。でも、何だかありそうな感じになってるわよね。ねえ、行ってみましょうよ」

［吹雪］：「そうですね、あったら嬉しいですし」

耳に聞こえる音を頼りに、俺たちはその場所を目指していく。徐々に音は大きくなっていく。もう、すぐ近くにあるのかもしれない。

そして――。視界が一気に開けた。そこには――。

カホラルート・フォルテ（9）

［場所：泉］

［カホラ］：「うわ～、すごい」
綺麗な泉が広がっていた。決して大きくはないが、それでも岩の間から水がコンコンと湧き出ていて、とても良い光景だ。
［カホラ］：「綺麗……」
先輩もその光景に目を奪われているようで、目線がそこから離れない。
［カホラ］：「こんな場所が、この島にあったのね」
［吹雪］：「びっくりですね、本当に」
［カホラ］：「人が開拓したわけではないようだし、自然とできたのかしら？」
［吹雪］：「その可能性が高いかもしれませんね」
地図に載ってないことと、踏み荒らした様子もないのが証拠になる。
［カホラ］：「隠しスポットを見つけちゃったみたいね」
［吹雪］：「これは、みんなには秘密にしておきたいですね」
［カホラ］：「ふふ、そうね。私たちだけの場所、みたいな感じかしら？」
［吹雪］：「ですね」
あまり人に知られると、この泉が困りそうだしな。
［カホラ］：「座りましょうか」
［吹雪］：「はい」
俺たちは水辺にある石に腰を降ろした。
［カホラ］：「はあ、落ち着くわ」
［吹雪］：「はい、癒されますね」
水が流れ落ちる音が心地良い。
［吹雪］：「飲めるんですかね？　この水」

［カホラ］：「大丈夫じゃないかしら？　こんなに透き通ってるし」
［吹雪］：「ですね。飲んでみます」
手で水を掬う。
［吹雪］：「冷たいな」
こぼれないようにそのまま口へ。
［カホラ］：「どう？　吹雪」
［吹雪］：「めちゃくちゃ美味しいです」
市販で売ってるミネラルウォーターよりもおいしいかもしれない。
塩素の臭いなんてしないし、とっても冷えてて喉も潤う。
［カホラ］：「先輩も飲んでみたほうがいいですよ」
［吹雪］：「そう？」
先輩も、水を掬って口に運んだ。
［カホラ］：「本当、冷たくておいしい」
［吹雪］：「自然の美味しさを実感しましたね」
［カホラ］：「そうね、なめてたわね私たち。考え方を改めないといけないわね」
［吹雪］：「ですね」
［カホラ］：「ふう……足でも浸そうかしら」
［吹雪］：「いいんじゃないですか？」
誰も咎める者はいない。
［カホラ］：「じゃあ、失礼して――」
先輩は靴を脱いで足を泉に入れた。
［カホラ］：「はあ、気持ちいい～」
［吹雪］：「よかったですね」
足をパタパタしながら、先輩は足を冷やす。
［カホラ］：「意外と、ここが森に生きる宝石だったりしないかしらね？」
［吹雪］：「ああ、そう言われるとしっくりくる気もしなくないですね」
泉の水は、日差しできらきら輝いていて、さながら宝石のように綺

麗だ。

［吹雪］：「有り得るかもしれませんね」

［カホラ］：「ここは、候補に入れておいたほうがいいわね」

先輩は、地図に赤い丸を付けた。

［吹雪］：「名も無き泉……何だか良い響きですね」

［カホラ］：「言い換えれば、私たちの秘密の場所ね」

忘れないようにしないと。

［カホラ］：「はあ」

先輩は今の姿勢を保ったまま、目をゆっくり閉じた。端から見て、かなり絵になる図だった。元々先輩は美人だから、何をしても綺麗なんだが、今はいつも以上に綺麗に映っているように見える。

［カホラ］：「ん？　どうかした？　吹雪」

［吹雪］：「あ、いや、何も」

見入ってしまっていたようだ。何か最近こういうことが多い気がするな。先輩と過ごす時間が増えたからだろうか？

［吹雪］：「うーん……」

［カホラ］：「悩みでもできたの？」

［吹雪］：「いえ、そんなことないですよ」

考えてもしょうがないな。

……。

カホラルート・フォルテ（１０）

それからしばらく、俺たちは泉で休憩していた。思ったよりも体が疲れていたらしく、お互いなかなか動くことができなかった。

［カホラ］：「今日は、引き上げましょうか」

［吹雪］：「そうですね」

これからの練習に支障を来しては仕方ないからな。

［カホラ］：「一つ候補が見つかっただけでも大きな収穫だし、何より良い休憩場所を見つけられたし」

［吹雪］：「価値のある探索になったと思いますよ」

ここ近辺の探索の拠点になりそうだ。

［カホラ］：「次は見つけれるように頑張りましょう」

［吹雪］：「はい」

――こうして、現地探索一日目は終了した。

カホラルート・ジョコーソ（1）（前書き）

ここからしばらく、また共通ルートが入ります。

他のヒロインにもこのパートは出てくるので、あらかじめ伝えておきますね。

カホラルート・ジョコーソ（1）

12月20日（月曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、全員揃ったな。みんな、体調は問題ないか？」

［舞羽］：「はい、大丈夫です」

［繭子］：「元気バリバリでーす」

［聖奈美］：「正常です」

［カホラ］：「問題なく元気よ」

［セフィル］：「吹雪はどうだ？　元気か？」

［吹雪］：「もちろん、何ともないです」

［セフィル］：「うむ、それならよかった。安心して練習を行えるな」

学園長はうなずきながらそう呟いた。今日の練習メニューは、学園長が言ったとおり、合同練習だ。全員のメロディーを一つに合わせる本番を意識した練習、これからはそれが主体になってくる予定だ。

［セフィル］：「みんな、今までやってきた練習の成果を存分に発揮してくれ。だとしても緊張することはないからな。今日から合わせ始めるわけだから、きっとミスも出るだろう。でも悲観することはない、そのミスを今後に活かしていけばきっと成功につながる。そうして完成した演奏を本番でしっかり弾けるようにするんだ」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「では、練習に移ろうと思うんだがその前に。フェル、やるぞ」

［フェルシア］：「はい」

先生たちは目を閉じ、詠唱を始めた。

［フェルシア］：「――エル・エルギュニス、我の精神、その身に宿したまえ、――ソウルイジェクター！」
詠唱と同時に、光を帯びた衣のようなものが、四人の体を包み込んだ。
［繭子］：「わあ、すごーい」
［舞羽］：「何だか、心が安らぐようです」
［セフィル］：「簡単に言うと、精神力アップの補助魔法だ。これで集中してピアノを弾くことができるようになるはずだ」
［聖奈美］：「ありがとうございます」
［カホラ］：「これは助かるわね」
さすが教師だな、みんなの力を発揮できる状況を作ってくれる。
［セフィル］：「吹雪、君には私の魔力を分けてあげよう。こっちに来るんだ」
［吹雪］：「はい」
俺は先生の前へ向かった。
［セフィル］：「じゃあ、目を閉じるんだ」
［吹雪］：「はい」
言われるままに目をつぶる。
［セフィル］：「――我の力、彼の糧とならん。――はっ！」
俺の体に、学園長の魔力が流れ込んでくるのを感じる。
……。

カホラルート・ジョコーソ（2）

［セフィル］：「――よし、完了だ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「どうだ？　体のほうは？」
［吹雪］：「力が漲ってる感じがしますね」
［セフィル］：「それならよかった。これで、力を余すことなく発揮することができるだろう」
［吹雪］：「はい、頑張らせていただきます」
［セフィル］：「じゃあ今から、それぞれ神殿に向かうわけだがちょっとこれを見てほしい」
学園長は一枚の紙を目の前に広げた。
［セフィル］：「これが四季のピアノが置かれている神殿の場所なんだが、吹雪にはその中心に向かってもらう」
［吹雪］：「中心ですか？」
［セフィル］：「うむ、位置で言うとここだな」
学園長は地図の真ん中に黒点を打つ。
［セフィル］：「ここに、ハーモニクサー専用の聖壇がある。吹雪はここから、四人に魔力を供給してもらう」
［吹雪］：「今更なんですけど、魔力は遠距離からでも効果はあるんですか？」
［セフィル］：「もちろんある。確かに近くで詠唱したほうが効果は高いかもしれないが、いちいち移動して供給していては非効率的だし、何より吹雪体が保たないだろう。全員から同距離の場所でやるのが一番無難だ」
［吹雪］：「そうですね、了解しました」
［セフィル］：「ピアニストのみんなは、自分のピアノのところで音を奏でてくれ」
［聖奈美］：「あ、すみません。一つ質問いいでしょうか？」

［セフィル］：「何だ？　聖奈美」
［聖奈美］：「前から思っていたんですが、四季のピアノは四つのピアノのメロディーが全て重なって一つになるんですよね？」
［セフィル］：「うむ、そのとおりだ」
［聖奈美］：「神殿と神殿の距離はかなり離れているのに、どうやって相手の音を認識できるんですか？」
［セフィル］：「そのことか、確かに説明していなかったな。よし、教えてあげよう」
学園長はみんなを自分の元に集めた。

カホラルート・ジョコーソ（3）

［セフィル］：「始めに断っておくと、私たちも正直詳しくは分からないんだ。今も尚謎に包まれている部分が多いから、断定はできないからそこは多めにみてくれ」

［聖奈美］：「分かりました」

［セフィル］：「みんな、ジャスパーは持っているな」

［聖奈美］：「はい、持っています」（聖奈美）

［セフィル］：「ジャスパーには魔力を増幅するパワーが宿っているんだが、それともう一つ力を持っている。それが、音を響かせる力なんだ」

［聖奈美］：「響かせる？」

［セフィル］：「ジャスパーには音を拾う力があるようなんだ。四季のピアノが変化させたわけだから、そう考えると納得がいくんだが。四季のピアノを奏でると、その音に共鳴してジャスパーが発光する、そうすると、自分以外のピアノの音がジャスパーから響いてくるんだ」

［聖奈美］：「でも、普段の練習の時は、みんなの音は聞こえてきませんでしたけど」

［セフィル］：「おそらく、四季のピアノ限定なんだろう。それがどうしてかは説明ができないんだが」

［聖奈美］：「そうですか、分かりました」

［セフィル］：「対策として神殿の中にモニターも用意してある。音が響かなかった時はそれを見てくれると助かる。すまないな、詳しい説明ができなくて」

［聖奈美］：「いえ、結構です。音の認識の方法が知りたかっただけなので、不安は解消されました」

［繭子］：「本当に不思議なんだねー、この石って」

［セフィル］：「うむ、とりあえずそういうことだから安心してく

れ」

［聖奈美］：「はい」

［セフィル］：「他に何か質問はあるか？　難しくないことなら答えるぞ？　――大丈夫か、じゃあそれぞれの場所へ向かおう。ピアニストのみんなは目を閉じるんだ、私とフェルが神殿にワープさせてやろう」

［繭子］：「ちょっとドキドキしてきたよ～」

［舞羽］：「そうですね」

［カホラ］：「頑張りましょう」

［聖奈美］：「練習通りにやれば問題ないでしょう」

［セフィル］：「じゃあ、繭子、カホラ、先に連れていこう。舞羽と聖奈美は待っていてくれ。吹雪は最後に連れていくからな」

［舞羽］：「分かりました」

［吹雪］：「了解です」

［セフィル］：「じゃあフェル、繭子のほうを頼む」

［フェルシア］：「分かりました」

――四人はそこから姿を消した。

［吹雪］：「今更だけど、二人ともちゃんと弾けそうか？」
［舞羽］：「自分のパートはバッチリ。だけど、みんなと合わせるのは初めてだからそこが少し不安かな」（舞羽）
［吹雪］：「やっぱりそうだよな。でも、チームワークなら抜群だろうしきっと大丈夫だろう」
［舞羽］：「うん、頑張るよ」
［聖奈美］：「そういうあなたは？　ホーリーカルム、マスターしたんでしょうね」
［吹雪］：「遠距離からっていうのは初めてだけど、練習ではできるようになってきたよ。上手くいくように頑張るから、見限らないでくれ」
［聖奈美］：「べ、別に見限りなんてしないわ。あなただってあたしたちと同じよ、今ある力を存分に出すだけよ。ま、あなたの力を借りないのが一番の理想なんだけど」
［吹雪］：「それってつまり……お前の力なんて誰も必要としてないってことか？」
［聖奈美］：「何でそんなに悪い方向に持っていくのよ、ノーミスでクリアしたいってことを言ってるの、誰もあなたのことをそんな風に思ってないわよ」
［吹雪］：「そ、そうか？　なら、安心した」
［聖奈美］：「ちょっと不安になってきたわ……」
［セフィル］：「待たせたな、では二人も行こうか」
［舞羽］：「はい。吹雪くん、一生懸命やろうね」
［吹雪］：「おう」
［セフィル］：「じゃあ吹雪、少しの間待っていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
詠唱が終わり、４人はその場からいなくなった。

こうやって一人で待っていると、若干緊張が表に出てしまうな。とりあえず、力まないようにしないと、こんな時に暴発なんてしたら大惨事に成りかねない。力をキープして、精神を集中させることを忘れないようにしないと。

［吹雪］：「よし、やるぞ！」

俺は気合いを入れた。

カホラルート・ジョコーソ（5）

［セフィル］：「うむ、良い心がけだ」
［吹雪］：「うわおっ！？」
既に学園長は戻ってきていた。
［セフィル］：「随分外国人っぽい驚き方だな」
［吹雪］：「別に意識はしてないですけど……早かったですね」
［セフィル］：「吹雪が寂しがるといけないと思ってな、ちょっと早めに折り返してきた」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「もうじきフェルも戻ってくる、そしたら聖壇に向かおう」
［吹雪］：「はい。学園長は、俺のほうに付いてくれるんですか？」
［セフィル］：「私とフェル、二人とも吹雪のほうに付く。ないとは思うが、あれが起きた時にとめられるようにな」
［吹雪］：「……申し訳ないです」
［セフィル］：「気にしなくていい。それに、君には期待しているからな、何かあっては困る」
［吹雪］：「期待に添えるように全力を尽くします」
［フェルシア］：「お待たせしました」
［セフィル］：「うむ、では行こうか」
二人に連れられて、聖壇へと向かった。
……。

カホラルート・ジョコーソ（6）

［吹雪］：「す、すごい」
目の前には聖壇と呼ぶに相応しい光景が広がっていた。
［セフィル］：「驚いたか？」
［吹雪］：「はい、すごく」
［セフィル］：「普段は、一般人が入れないようにバリアが張り巡らされているんだ。聖なる場所を汚されては困るからな」
［吹雪］：「ここで俺は、ホーリーカルムを唱えるんですね」
［セフィル］：「そうだ。そこの四つの柱が、それぞれ四季のピアノの音を聴き取る機能を持っている。最初は、みんなの演奏に耳を傾けてみるといい」
［吹雪］：「供給のタイミングは？」
［セフィル］：「そこは吹雪のタイミングに任せる、と言いたいところだが今回は初めてだからな。私たちが供給のタイミングを知らせよう。後半になってくると、四人の魔力も大分落ちてくるはずだから、おそらくは曲の中盤あたりからだろう。それまでは、モニターでみんなの様子を観察していてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「今回が初めてだから、多少の失敗は仕方ない。リラックスしてやるようにするんだ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「１２時になると同時に演奏を始めるように言ってある。開始まで後、５分程だな」
５分か、今のうちにイメージを膨らませておこう。俺は四人の顔を頭に思い浮かべた。
［吹雪］：「――よし！」
行こう。

カホラルート・ジョコーソ（7）

12時と共に、柱からメロディーが流れてきた。最初のパートは桜花のピアノを弾く舞羽からだ。そして、そのパートを追いかけるように杠の海風のピアノ、マユ姉の月影のピアノ、カホラ先輩の風花のピアノと続いていく。始めはゆっくり歩くようなテンポ、そのメロディーを次は杠が最初に奏で、同じようにマユ姉、カホラ先輩、舞羽と続けていく。

そして一周し、曲調は平均的なものになる。メインパートは舞羽に戻り、他の三人はそのメロディーを引立てるメロディーを奏でる。まだ序盤ではあるが、みんな問題なく弾けているようだ。

［セフィル］：「うん、今のところはいい感じだな」

［吹雪］：「このまま、続いてほしいですね」

［セフィル］：「まだ先は長い、見守っていてあげよう」

（頑張ってくれ、みんな……）

そして、全員がメインパートを弾き終わり、曲調は徐々に早く、激しくなっていく。先程とは打って変わった大きな音とメロディー、変拍子とでも言えばいいだろうか。その複雑なテンポの中でメインパートは移り変わり、引立てられていく。

と、ちょうどその時だった。

［繭子］：「あ……」

一瞬、和音の乱れが生じた。どうやら鍵盤を押し間違えたようだ。

だが、すぐに立て直し、止まることはなかった。

［セフィル］：「大丈夫だ、そのまま続けてくれていい」

やはり、それだけ難しいところなのだろう。

［聖奈美］：「くっ……」

［カホラ］：「あっ……」

変拍子パートの中間らしいところで、杠と先輩が和音を間違えた。

しかし、止まることはなく次のパートに集中する。

［セフィル］：「そろそろ、中盤だな」
ここからはしばらく、ソロパートが続いていく。舞羽、杠、マユ姉、先輩の順に回っていくから、他の三人はしばらくの休憩と言ったところか。
俺個人的には、ここが魔力供給の絶好のポイントだと思うんだが。
［吹雪］：「学園長、タイミングは？」
［セフィル］：「そうだな、舞羽のパートが終わるまで、聖奈美に魔力を供給してみてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
俺は目を閉じ、杠を頭に思い浮かべた。神経を研ぎ澄まし、イメージを働かせる。

カホラルート・ジョコーソ（8）

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

そして、自らの力を解放した。果たして、成功しているか？　俺は、学園長の言葉を待った。

［セフィル］：「うん、問題ない。成功しているようだ」

俺は内心ホッとした。しかし、ここで気を抜いたらいけない。もう一度気合いを入れなおそう。

［セフィル］：「舞羽のパートが始まるぞ」

それと同時に、舞羽のソロメロディーが始まった。最初によく似たゆったりとしたテンポのメロディーが紡がれていく。俺はその間も、杠に魔力を供給する。

［セフィル］：「聖奈美にパートが移ったら、次は繭子に供給してみるんだ」

返事は返せないが、言葉はしっかり受け止めた。

［セフィル］：「そろそろだ」

俺は詠唱を止め、マユ姉に詠唱をシフトさせる。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

そして、杠のパートが始まると同時にマユ姉に供給を始めた。

［繭子］：「おおっ！？」

モニターから声が聞こえた。声の感じからして、どうやら供給はできているらしい。杠のソロメロディーを聞きながら俺は詠唱を続ける。

［セフィル］：「その調子で、次はカホラだ」

先程と同じ要領で、俺は頭の中でカホラ先輩を思い浮かべる。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

照準を先輩に変更。杠のパートが終わり、マユ姉がソロでピアノを弾き始める。秋を司るピアノにあった穏やかなメロディーが響いてくる。

［吹雪］：「う、く……」

［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」

俺はうなずいて返した。

ちょっと、体が重くなってきたな。やはり供給する人を変えているからだろうか？　練習の時よりも、魔力の消費が激しい気がする。でも、もう後半の後半には来ているはず、ここであきらめるのは嫌だ。曲の最後まで踏ん張るんだ。

［セフィル］：「カホラにパートが移ったら、舞羽に魔力を供給するんだ」

曲を聴いている限り、舞羽は個々のパートで最初を担うことが多い。若干他のみんなよりも消費しているかもしれない。なるべく多く、供給したいところだ。今ある魔力をしっかりと注ぐぞ。

カホラルート・ジョコーソ（9）

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そしてソロパートは最後のカホラ先輩に。マユ姉よりもアップテンポの曲調を感じながら俺は舞羽に魔力を与える。この後はおそらく、また四重奏に戻るだろう。もう一息だ、頑張れ、俺。
［セフィル］：「いいぞ、もう少しだ吹雪」
［フェルシア］：「頑張って、吹雪くん」
二人の応援に励まされながら俺は詠唱に心血を注ぐ。
［セフィル］：「よし、詠唱停止」
パートは最後の四重奏に入った。最初と同じ、ゆっくりとしたメロディーが紡がれていく。四人の息はピッタリで、淀みはほとんどない。多少の間違いはあっても、取り戻せる程度だ。徐々に、音量も小さくなっていく。
そして――余韻を残し、メロディーは終わりを迎えた。
それと同時に――。
［セフィル］：「ふ、吹雪!?」
俺の記憶も飛んでしまった。
……。
……。

カホラルート・ジョコーソ（10）

［場所：保健室］

［吹雪］：「ん、んん……」
目を開けると、俺は保健室にいた。
［フェルシア］：「吹雪くん、気がついた？」
［吹雪］：「あ、フェルシア先生」
［フェルシア］：「はあ、よかったー目が覚めたのね」
そうか、俺、詠唱が終わって倒れたんだった。てことは、フェルシア先生が俺を運んでくれたのか？
［フェルシア］：「体は？　痛いところとかない？」
［吹雪］：「痛くはないです。ただ、ちょっと体がダルいですね」
［フェルシア］：「それはそうよ、体内の魔力をほとんど使い切っちゃったんだから」
［吹雪］：「そうだったんですか？」
［フェルシア］：「そうよ、本当に無茶はするなって言ってたのに……」
［吹雪］：「すいません」
予想以上に、人を変えての供給は難しいものだった。まだまだスタミナ不足っていうのもあるな。もっと練習に力を入れないと……。
［舞羽］：「吹雪くん、大丈夫！？」
［繭子］：「ふーちゃん！」
［カホラ］：「吹雪！」
［聖奈美］：「……！」
［吹雪］：「おおっ！？」
一斉に全員が保健室にやってきた。

カホラルート・ジョコーソ（11）

［繭子］：「あ、起きてる、ふーちゃんが起きてる！」
［舞羽］：「大丈夫なの？　体は何ともないの？」
［カホラ］：「痛いところとかは？　どこかおかしいところとかはない？」
［聖奈美］：「し、心配かけるんじゃないわよ！　本当に、びっくりしたんだから」
［吹雪］：「あ、ちょ、ちょっと待ってくれ」
一変にまくし立てられ、どれに答えていいのか分からない。
［吹雪］：「大丈夫だから、ちょっと疲労がたまっただけだから」
［舞羽］：「よ、よかった」
みんな、俺の顔を見てほっとしているようだった。
［フェルシア］：「治癒魔法はかけておいたから、直に良くなってくるはずよ」
［吹雪］：「ごめんな、心配かけて」
［セフィル］：「本当だ、無理をするなとあれだけ言っていたのに」
［吹雪］：「が、学園長！？」
いつからそこにいたんだ？
［セフィル］：「頑張るのは良いことだ、だが、倒れるまで頑張れなど一言も言ってないぞ。それは単なる無茶だ」
［吹雪］：「う……すいません」
［セフィル］：「もしものことがあってからでは遅いんだ。もっと自分の体を大事にしなくては」
［吹雪］：「はい……以後気をつけます」
［セフィル］：「ふう……だがまあ、よく頑張ってくれた。吹雪の魔力を受け取ったおかげで、みんな最後までピアノを弾くことができたしな」
［吹雪］：「あ、本当ですか？」

［セフィル］：「あの後、全員の魔力のチェックをしたんだ。四季のピアノで、どれくらいの魔力を消費するかを知っておくために。そしたら、全員の魔力が４０を下回ってたんだ」
［吹雪］：「そ、そこまでですか？」
一般的に、魔力のパーセンテージは３０を下回ってしまうと極度の負担が体にかかる。それに近いということは、負担もかなりかかっていたということ。
［セフィル］：「舞羽が３７、繭子が３８、聖奈美が３８でカホラが３６。今は治癒魔法で大分回復しているが、終わった直後はみんな相当疲れていたんだ」
［吹雪］：「やっぱり、一筋縄じゃいかないってことですか」
［セフィル］：「そういうことになるな。だが、みんなが疲労しながらも最後まで弾き終えることができたのは、吹雪が中途で魔力を供給したからなんだ」
［吹雪］：「俺、ちゃんと供給できてましたか？」
［セフィル］：「ああ、成功していたぞ。なあ？　みんな」
全員が顔をそろえてうなずいてくれた。
［舞羽］：「吹雪くんの力、弾いてる途中でもすごく伝わってきたよ」
［繭子］：「うんうん、ふーちゃんの後押しがあったからこそだよ～」
［聖奈美］：「まあ、心配してたけど、ちゃんとできてたみたいね。及第点ね」
［カホラ］：「吹雪ならできるって信じてたわ。ありがとね」
全員から賛辞をもらえるなんて、感無量だな。
［吹雪］：「ありがとう、みんな。次はもっと、楽にピアノを弾くことができるように頑張るよ」
［セフィル］：「次は倒れるんじゃないぞ？」
［吹雪］：「は、はい。了解です」
［セフィル］：「うむ、じゃあ、今日の練習はこれで終了としよう。

今日はゆっくり休んで疲れをとること。明日も練習があるから、みんなで頑張っていこう」

［全員］：「はい！」

――全体練習は、色々あったけど、うまくいった。

カホラルート・レント（1）

12月21日（火曜日）

［場所：教室］

［翔］：「――てわけでな、女の子にバイバイされちゃったんだよ。ひどいと思わないか？」
［祐喜］：「ふーん、よかったね。でさ、吹雪――」
［翔］：「ちょいちょいちょい、祐喜くんストップ！」
［祐喜］：「何だい？　翔」
［翔］：「いや、扱いがぞんざいじゃないかなーって思って。そんなさらっと話を受け流さないでくれよ」
［祐喜］：「だって、また女の子に逃げられたって話でしょう？　いい加減つまんないんだよね、聞いてても僕たちのタメにならないしさ」
［翔］：「うぼふっ！？　そ、そんなはっきりと……」
［祐喜］：「だって、本当だから。ねえ？　みんな」
［吹雪］：「うん、つまんないな」
［愛海］：「ご飯時にする話ではないわね」
［舞羽］：「あ、あはは……」
［祐喜］：「というわけだから、話題を変えようよ、ね？　翔」
［翔］：「うう、オレって一体、みんなの何なんだろう……」
［愛海］：「大丈夫よ翔っち、みんなあなたのことを思って言ってるだけだから、元気出しなさい」
［翔］：「日野……」
［愛海］：「だから今は、空気を読みましょう」
［翔］：「うん、全力で読むよ」
［吹雪］：「珍しく日野が翔をなだめてるな」

［愛海］：「あ、何か言いたそうね？　大久保くん」
［吹雪］：「いや、別に。何でもない」
［愛海］：「そう？　じゃあ早速、話を変えましょうか。あ、舞羽、その春巻き交換しましょう、私の肉団子と」
［舞羽］：「うん、いいよ」
［愛海］：「ありがとう。……あれ？　今気づいたんだけど、二人ともお弁当の中身が一緒なのね。どうして？」
［舞羽］：「ああ、ほら、私たち今学校で合宿をしてるから。食事もみんなで共有してるから、お弁当もまとめて作ったの」
［愛海］：「ああ、そういうこと」
［翔］：「にしても学校で合宿か……前々から思っていたんだが……吹雪」
［吹雪］：「あ？　何だ？」

［翔］：「お前、ピアニストの面々と同じ部屋で寝てるのか？」
［吹雪］：「ああ、そうだが」
［翔］：「ま、マジか……な、何て羨ましいんだ！！　じゃ、じゃあ、ひょっとして、一緒に風呂――」
［吹雪］：「一変死んだらどうだ？　翔」
［翔］：「何てひどい言葉！？」
［祐喜］：「単純に考えて分かることだよね。吹雪が翔だったら話は別だけど」
［吹雪］：「おいおい祐喜、コイツと一緒にしないでくれよ」
［愛海］：「二人とも、容赦ないわね」
［舞羽］：「あ、あはは……」（舞羽）
［翔］：「うう……」
［吹雪］：「浴槽なんてないから、シャワーだよ、シャワー。学園に設置されてるものを使ってるんだ」
［愛海］：「なるほどね。でも、みんなと一緒に寝てるのよね……興奮とかしない？　大久保くん」
［吹雪］：「ぶっ……！？　げほ、げほ……」
［舞羽］：「ふ、吹雪くん、お水！」
［吹雪］：「ん、ん……はあ、いきなり何言い出すんだよ、日野！」
［愛海］：「だって、吹雪くんだって男の子でしょう？　それに今年のピアニストはかわいい子ばっかりだし、多少意識はするでしょう？」
［吹雪］：「お前の思考は翔か？」
［翔］：「吹雪、それメチャクチャ失礼じゃないか？」
［祐喜］：「嘘偽りない事実だよ、翔」
［翔］：「……何か、今日はいつにも増して厳しいな、祐喜」
［祐喜］：「そんなことないよ、いつもどおりだよ」

［愛海］：「ねえ？　どうなの？　大久保くん」
［吹雪］：「な、何でそんなことをこんなところで言わなきゃいけないんだよ」
［愛海］：「それはもちろん、私が知りたいからよ」
［吹雪］：「単なるお前の興味本位かよ！」
［愛海］：「キレのあるツッコミね、合宿の成果かしら？」
［吹雪］：「芸人になりたくて合宿してるんじゃねぇんだよ」
［愛海］：「それはそうとして、どうなの？」
［吹雪］：「絶対に言わないぞ、そんなこと」
［愛海］：「残念ね、じゃあ勝手に想像するわ。……うふふふ」
［舞羽］：「な、愛海、顔が怖いよ……」
［愛海］：「ああ、気にしなくていいわよ。うふふ……」
［祐喜］：「ま、まあとにかく、合宿頑張ってよ、吹雪」
［吹雪］：「あ、ああ。サンキューな」
まともなのは祐喜と舞羽だけだな、ホントに。――あ、そうだ。

カホラルート・レント（3）

［吹雪］：「祐喜、ちょっと聞きたいことがあるんだが」
［祐喜］：「うん？　何だい？」
［吹雪］：「お前、何か四季のピアノに関して知ってることってないか？」
［祐喜］：「四季のピアノについて？　えっと、どういう風に答えるといいのかな？」
［吹雪］：「ああ、ごめんな。ちょっと今、やってることがあるんだ」
俺は、カホラ先輩と四季のピアノについて調べていることを簡単に説明した。
［祐喜］：「なるほど、それで情報がほしいわけね」
［吹雪］：「ああ、何か知ってることってないか？」
［祐喜］：「うーん、力になりたいのは山々なんだけど、生憎生徒会の資料の中に四季のピアノの資料はないんだよね。全て事務的なものだから」
［吹雪］：「んー、やっぱりそうだよな」
そう簡単に新たな情報が手に入るわけないよな。
［吹雪］：「舞羽は？　何か知ってたりしないか？」
［舞羽］：「私も正直何も……音色が他のピアノと違って綺麗ってことくらいしか」
［吹雪］：「そうか、分かった」
［舞羽］：「ごめんね、力になれなくて」
［祐喜］：「何か分かったら、追って連絡するよ」
［吹雪］：「ああ、頼む」
自分の力で切り開くのが一番か。一応カホラ先輩に伝えておこう。

カホラルート・レント（4）

［場所：第四音楽室］

［吹雪］：「なんで、祐喜たちも分からないって言ってました」
［カホラ］：「そう、しょうがないわよね。これだけ調べても、まだまだ謎が多いから、それで祐喜が全て知ってたりしたら、逆に困っちゃうわ」
［吹雪］：「そうですね、今までの努力が報われずに終わっちゃいますもんね」
［カホラ］：「私たちの力で切り開いていきましょう」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「というわけで、まずはピアノの練習ね」
［吹雪］：「はい、頑張りましょう」
今からカホラ先輩は自分の全てのパートを弾いていく。俺はその横で、遅れることなく楽譜をめくっていく。
［吹雪］：「本当に、こんなことでいいんですか？」
［カホラ］：「もちろんよ、自分一人で楽譜をめくってたら通して弾くことはできないんだから。とっても大事な役目よ」
［吹雪］：「そうですか？　だとしたら、全力でめくります」
［カホラ］：「力んで破ったりしちゃだめよ？」
［吹雪］：「はい、分かりました」
［カホラ］：「すう……はあ……」
カホラ先輩は深呼吸をし、精神統一に入った。そして――曲を奏で始めた。
［カホラ］：「……」
いつもと同じ、とても安定感のあるメロディーラインだ。以前学園長に指摘された強弱も、今はしっかりとついていて曲調に幅も出た。来たる本番に向けて、形は完成に近づいてると思われる。

俺はタイミングを合わせて楽譜をめくった。先輩は軽くうなずいて、そのまま弾き続ける。今のところノーミス、このままうまく続けられるだろうか。

……。

カホラルート・レント（5）

……。

……。

［カホラ］：「――ふう」

一息ついて、先輩は鍵盤から指を離した。

［吹雪］：「お疲れ様でした」

［カホラ］：「うーん、途中で二回程ミスをしたのが悔やまれるわね」

［吹雪］：「でも、それ以外はほぼ完璧に弾けてたじゃないですか？　本番までは絶対に仕上がりますよ」

［カホラ］：「そうね、次は絶対に成功させないと。えーっと、今間違ったところは」

楽譜をめくってミスをした部分を探り始める。

［カホラ］：「ここね、このパートはシャープがほとんどだからミスが出やすいのよね、もっと意識して弾かないと」

［吹雪］：「傍から見てても、難しいのは伝わってきます」

五線紙の左端の記号の数が、それをガンガン伝えてくれる。

［カホラ］：「指使いに最新の注意が必要ね。よし――」

先輩はメモ帳を取り出して、今自分で言ったことを記した。その意識の高さは、俺も学ばないといけないな。

［カホラ］：「これで良し、明日の練習の前に見直さないと」

［吹雪］：「今日はこれでおしまいですかね」

［カホラ］：「そうね、時間もちょうどいいし。付き合ってくれてありがとね、吹雪」

［吹雪］：「いえ、俺のほうこそ。良い演奏が聴けてよかったです」

［カホラ］：「じゃあ、お疲れ様――って言いたいところなんだけどー。吹雪、今日のこの後の予定は？」

［吹雪］：「え？　予定？」

［カホラ］：「そう、予定。何かあるかしら？」
［吹雪］：「いえ、特には。歯磨いて寝るくらいです」
［カホラ］：「そう」
［吹雪］：「先輩は何かやるんですか？」
［カホラ］：「ええ。――実はこの後、ストーンサークルの再探索をしようと思ってるのよ」
［吹雪］：「え？　この後ですか？」
［カホラ］：「ピアリーの言っていたヒント、覚えてるかしら？森に生きる宝石、このヒントから推測するに、やっぱり夜に探索するほうが手掛かりを見つけられる可能性は高いと思うのよ。仮に宝石に例えられるものが植物だとしたら、夜行性の植物の類が濃厚だろうし」
［吹雪］：「確かに、昼に見つけられなくても、夜なら何か新しい発見があるかもしれませんからね」
むしろ夜にこそ探すべきなのかもしれない。
［吹雪］：「でも、視界が悪いし、ちょっと危険じゃないですか？怪我をするかもしれませんよ」
［カホラ］：「その辺はちゃんと対策をしてきてあるわ。でも、一人じゃ心細いし、何より夜の道を歩くのは怖いから、吹雪が何もないのなら、一緒に来てほしいんだけど……」
申し訳なさそうに、上目遣いで俺の顔を覗き込んでくる。答えは、すでに決まっている。
［吹雪］：「もちろん、一緒に行かせてもらいます」
［カホラ］：「ホント？」
［吹雪］：「ええ、せっかく前回付き合わせてもらったんだし、今回も喜んでお供しますよ。むしろ誘われなかったらどうしようかって思ってました」
［カホラ］：「よかったわ、いつも手伝ってもらってるから悪いかなって思ってたんだけど、そう言ってくれると心が救われるわ」
［吹雪］：「気にしないでください、かなり楽しんでますから」

［カホラ］：「じゃあ、今日の夜に行きましょう」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「ふふ、夜中に学校を抜け出すのは悪いことなんだろうけど、ちょっとわくわくしてきたわね」
［吹雪］：「はは、そうですね。何時頃に学校を出ますか？」
［カホラ］：「そうね、就寝時間が１２時だから、１時過ぎとかがいいかしら？　普通に考えて、１時間もあれば眠りに落ちるものよね」
［吹雪］：「多分そうだと思いますよ？　俺、１時以降の記憶はないですから」
［カホラ］：「私も。自分が寝ないように注意しながらみんなの様子を伺いましょう。床に就くまでは、私たちも同じように振る舞うようにしないと」
［吹雪］：「はい、俺の持ち物はどうすればいいですか？　何かあれば言ってくれると」
［カホラ］：「大丈夫よ、私が持っていくものだけで十分だわ。強いて言えば、探究心くらいね」
［吹雪］：「なるほど、じゃあしっかり抱えていきますね」
［カホラ］：「ええ、頼むわね」
［吹雪］：「任せてください」
［カホラ］：「じゃあ、夜は頑張りましょうね」
［吹雪］：「はい！」
……。
……。
……。

カホラルート・レント（6）

［場所：社会科室］

――そして、１時１０分前。

［舞羽］：「スー……スー……」

［繭子］：「ん～……むにゃむにゃ……」

（みんな寝たかな？）

見た感じ、みんな規則的に寝息を立てている。寝相が悪いのが一人いるが、それはデフォルトだから気にしない。

［吹雪］：「先輩は……」

カーテンの隙間から先輩を見る。俺に気付いてくれたのか、先輩はこっちに来てくれた。

［カホラ］：「大丈夫、みんな寝たみたい」

［吹雪］：「そうですか、じゃあ、今のうちに」

［カホラ］：「ええ、こっそり抜け出しましょう」

足を踏んだりしないように注意を払いながら。

――よし、うまくいきそうだ。

［繭子］：「んむ……ダメだよ～！　ふーちゃん」

［吹雪］：「――っ！？」

［カホラ］：「――っ！？」

突然呼び止められて、かなり動揺してしまった。ひょっとして、気付かれたか？　俺はそーっと後ろを振り返ってみる。

［繭子］：「それはワタシが目をつけてた燕の巣のスープだから～、食べちゃダメ～、あ、そっちの子牛のソテーも……全部、ワタシが食べるんだから～……ムニャムニャ……」

［吹雪］：「……」

［カホラ］：「……寝言、だったみたいね」

［吹雪］：「そ、そうですね。よかった……」

全く、びっくりさせやがって。つか、夢の中まで食い意地を張って

やがる。

［吹雪］：「すいません、恥ずかしいところを」

［カホラ］：「繭子先生らしくていいじゃない」

若干、自分のことのように恥ずかしくなりながら、俺は社会科室を出た。

……。

カホラルート・レント（7）

［場所：昇降口前］

［カホラ］：「何にしても、抜け出すことに成功したわね」
［吹雪］：「はい、後は向かうだけですね」
［カホラ］：「ええ。……でも……」
これから向かっていく道を見て――。
［カホラ］：「ちょっと不気味ね」
［吹雪］：「確かに……」
時刻は真夜中、この時間帯に外を歩くものはほとんどいない。聞こえるのは少し遠くから聞こえる波の音くらいだ。
［カホラ］：「吹雪がいなかったら、ここで引き返してた可能性大だったわ」
［吹雪］：「多分、俺も引き返してると思いますよ」
［カホラ］：「一人がダメでも、二人なら……今ならその言葉がすごく理解できるわ」
［吹雪］：「楽しく行きましょう。実際、今かなりわくわくしてます」
［カホラ］：「うふ、私も。今までなかった感覚ね。ストーンサークル、見つけられるように頑張りましょう」
［吹雪］：「はい」
……。

カホラルート・レント（8）

［場所：神殿への道］

他愛もない話をしながら、俺たちは神殿を目指す。

［吹雪］：「先輩、ランプなんて持ってたんですね」

［カホラ］：「吹雪の家にはないの？」

［吹雪］：「はい、というか、一般家庭でランプを持ってる人はあんまりいないと思いますよ。今じゃあ結構珍しいものですし」

［カホラ］：「そっか。家で懐中電灯探してて、一つしか見つからなかったんだけど、その時に何か変わりになるものはって探した時にこれが出てきたのよ」

［吹雪］：「よく、ランプなんてありましたね」

［カホラ］：「お母さんが使ったりしてたのかしら」

［吹雪］：「書類整理をする時とかにですか？　……普通に電気を付けたほうがいいですよね」

［カホラ］：「いやでも、お母さんだから。そのほうが雰囲気が出ていいんだ、とかは言いそうじゃない？」

［吹雪］：「確かに……」

そうやっている学園長の様子が容易に思い浮かべることができる。

［カホラ］：「今だと不便かもしれないけど、昔はよく使っていたものだからね。そう考えると、常に新しいものを発明していく人たちはすごいって思うわ」

［吹雪］：「確かに。このランプだって、一昔前は偉大な発明だったわけですもんね」

［カホラ］：「そうね、少ない燃料で明かりが長持ちするわけだからね」

［吹雪］：「そういえば、どんな作りになってるのかよく見たことがなかったな……」

［カホラ］：「見てみたら？　ほら」
先輩は持っていたランプを差し出した。
［吹雪］：「じゃあ、ちょっと――」
俺は懐中電灯とランプを交換した。
［吹雪］：「あ、意外と重いな……」
予想外の質量に若干驚いたが、俺はランプをじっくりと見てみる。

カホラルート・レント（9）

［吹雪］：「へえ、こうなってるのか……」
ガラスの内側には、小さな皿が敷かれてありそこに燃料となる油が注がれている。その中心にそこまで太くない芯が立っていて、その先端で赤い炎がゆらゆらと燃えている。この芯に油が染みているんだろう。
［吹雪］：「なるほど……これなら長時間でも安心ですね」
［カホラ］：「そうね、ガラスで保護されてるし、風にもそこそこ強いし」
［吹雪］：「そうですね。ふーん、なるほど……」
［カホラ］：「何か思いついたの？」
［吹雪］：「ええ、次の部の展覧品とかに活用できないかなって思って。例えば、燃料を油じゃなくて魔法に替えるとか」
［カホラ］：「燃料を魔法に、ね。マジックランプってこと？」
［吹雪］：「まあ、そんなところですかね。あーでも、照らすことができればいいわけだから別に火に拘る必要はないのか」
［カホラ］：「要はランプみたいな機能があればいいのよね？　ずっと詠唱し続けてるよりも、容器に閉じ込めたほうが疲労は少ないでしょうね」
［吹雪］：「そうですね。となると、やっぱり魔法ブースターか……」
［カホラ］：「でも、魔法ブースターは動かす時に魔法を送り込まないといけないでしょう？　吹雪がやりたいのは、すでに魔法のエネルギーが入っている状態のものを作ることでしょう？」
［吹雪］：「ああ、確かに。……だとすると、魔法ブースターに何らかの工夫を施さないといけないのか……うーん……」
［カホラ］：「吹雪も、何だかんだ言って発明家ね。サイエンティストみたいな顔をしてるわよ」

［吹雪］：「発明家なんて言えませんよ。俺のはただの趣味ですから」

［カホラ］：「趣味でも、そういう探究心はとっても大事でしょ。人間、みんな発明家みたいなものよ。次に続く新しい発見をしていくわけだからね」

［吹雪］：「おおっ……今の言葉、後世に残していきたいですね」

［カホラ］：「ふふ、大げさ。何か手伝ってほしいことがあったらいいなさい？　力になるわよ」

［吹雪］：「ありがとうございます。すっごく頼もしいです」

［カホラ］：「今日もだけど、いつも吹雪にはお世話になってるからね。いつでも頼っていいわよ？　ふふ」

［吹雪］：「……」

［カホラ］：「どうかした？　吹雪？」

［吹雪］：「あ、いえ、何でもないです」

うーん、また見入ってしまった。本当に最近の俺はおかしいな。注意していかないと……。

［吹雪］：「ランプ、ありがとうございました」

［カホラ］：「別に持っていていいわよ？　何だか似合ってるし」

［吹雪］：「ランプに似合う似合わないってあるんですか？」

［カホラ］：「何となく雰囲気がね。そのままでいいわよ」

［吹雪］：「じゃ、じゃあ……」

［カホラ］：「……今、松の木のところを過ぎたから、もう少しで到着するわ」

［吹雪］：「了解しました」

……。

カホラルート・レント（１０）

［場所：桜花のピアノ近辺］

――そして、ちょっと怖い森の道を抜けて、俺たちは先日訪れた神殿までやってきた。

［カホラ］：「ふう、到着」

［吹雪］：「でもちょっと時間がかかっちゃいましたね」

［カホラ］：「暗かったから仕方ないわね。想定内よ」

［吹雪］：「じゃあ早速――」

［カホラ］：「ええ、探しましょう――と思ったんだけど……吹雪も気付いてるわよね」

［吹雪］：「ええ、バッチリ見えてます」

俺たちに何が見えているか、それは、神殿の先の森の一部。そこから青い光が漏れていたんだ。

［カホラ］：「あそこって確か、以前行った泉よね」

［吹雪］：「位置的に、そうですね」

［カホラ］：「ひょっとしたら、以前言ってた私の予感って――」

［吹雪］：「当たってたのかもしれませんね」

これは行ってみるしかないだろう。

［カホラ］：「行きましょう」

［吹雪］：「はい」

俺たちは足早に、泉のほうへと向かった。

……。

……。

……。

カホラルート・レント（11）

［場所：泉］

［カホラ］：「うわー」
［吹雪］：「すげぇ……」
俺たちは、その光景に目を奪われていた。近くで見ると、それは圧巻だった。青い光が、水のせせらぎと共にキラキラと輝いている。その様子は、正に森に生きる宝石と呼ぶに相応しいだろう。初めて泉を発見した時と同じくらいの驚きを、俺たちは受けていた。
［カホラ］：「……つい見とれちゃったわ」
［吹雪］：「はい。すごいですね、これは」
［カホラ］：「ピアリーが言ってたのって、きっとこれでしょうね」
［吹雪］：「そうに違いないでしょう」
これを宝石と呼ばずに、と言った感じだ。
［カホラ］：「じゃあ、ストーンサークルはこの近辺にあるかもしれないわね」
［吹雪］：「そうですね、探してみましょう」
俺たちは泉近辺の探索を開始する。
……。
［カホラ］：「んー、見つからないわね～」
［吹雪］：「そうですね……」
ストーンサークルと言うくらいだから、それらしいものがあればすぐに見つかるはずなんだが……。
［カホラ］：「一応、あの泉が宝石でないことを想定して夜行性の植物があったりしないかも見てみたけど、それもないし……」
［吹雪］：「うーん、隠されてるんですかね？　地面の下とか」
［カホラ］：「でも、それだと次に使うときとかに面倒だし、何より掘り返すときに傷がついちゃうわよね。機能が失われることは避

けるはず」
［吹雪］：「ですよね。うーん、目印って言うくらいだしそんな遠くにあるはずはないのに……」
［カホラ］：「うーん……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……どうしたの？　吹雪？」
［吹雪］：「うーん、ちょっと考えてて……」
［カホラ］：「ストーンサークルがある場所？」
［吹雪］：「はい。……ひょっとして……いや、うーん」
そんなことってあるのかな？　でも、石らしいものはあのあたりにしかないし……悩んでても仕方ないし、見てみる価値はあるか？
灯台元暗しって言葉もある。
［吹雪］：「先輩、ちょっと泉に戻ってみましょう」
［カホラ］：「え？　うん、いいけど」
可能性に賭けて、俺たちはもう一度泉へ。
……。

カホラルート・レント（12）

相変わらず、泉は綺麗な輝きを保っている。
もし、俺の予想が当たってるのだとしたら――。
［吹雪］：「んー……あれだな」
俺は一本の木を選択する。とにかく、全体を見渡せる場所に行きたかった。
［吹雪］：「先輩、ちょっと行ってきます」
［カホラ］：「行くって、木に登るの？」
［吹雪］：「ええ、ひょっとしたら、何か分かることがあるかもしれないんで」
［カホラ］：「登れるの？　大丈夫？」
［吹雪］：「初体験ですけど、やれるだけやってみます。何かあったら、サポートよろしくお願いします」
［カホラ］：「う、うん。分かったわ」
俺は気合いを入れて、木に足をかける。
［吹雪］：「ふっ！」
枝に足を固定して、慎重に上を目指していく。やっぱり、人間元々猿なだけあって、意外と登れるものだ。
［吹雪］：「あそこまで、行けるか？」
見上げた先にある大きな枝。あそこなら、俺が乗っても折れなさそうだ。
［カホラ］：「吹雪―、ひょっとして吹雪が思ったのって、そういうことなの～？」
どうやら先輩も、俺の思い浮かべたことを理解したようだ。俺はそれに、うなずいて返した。
［吹雪］：「確信はないですけど、見ておいたほうがいいと思って」
［カホラ］：「そうね。後少しよ、頑張って」
先輩の応援を背にして、ちょっとずつ上へ登る。そして――。

［吹雪］：「よっ！　……と」
ようやく目的の高さに到着した。
［吹雪］：「はあ……はあ……」
息を整えて、反対向きの体を泉の方向へ向ける。そして、よく目を凝らす。
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「どう？　吹雪？」
［吹雪］：「……当たってみたいだな」
俺は手で丸を作って見せた。

カホラルート・レント（13）

予感は的中した。岩で囲まれた光る水面の下に、規則正しく描かれたストーンサークルが存在していた。どおりで近辺を探しても見つからなかったはずだ。近辺どころか、目印自体が目的の場所だったのだ。随分とすごいところに隠したものだ。これだったら、なかなか気付くことはできないよな。

［吹雪］：「水の中です。そこに、ストーンサークルが隠されてます」

［カホラ］：「水の中？」

［吹雪］：「はい、岩場の内側に」

［カホラ］：「……やっぱりここからじゃ、見えないわね」

先輩は岩に登って中を見ようとしているが、やはり位置が低いからか見えていないようだ。ここならバッチリ見えるんだが、登ることはできないよな。とりあえず、先輩のところに戻るか。

俺は呼吸を整えて先輩の元に向かった。

……登る時はよかったが、降りるとなるとちょっと怖いな、意外と高さがある。

慎重に降りなければ……。と、思った矢先――。

［吹雪］：「う、やばい……」

降りるポイントを誤った……あると思ったはずの枝がそこにはなかった。下まで一直線、そこまで高くはないが、落ちたら痛そうだ。

［吹雪］：「どうしよう……」

多分死にはしない。仮に頭から落ちても多少の流血だけで済むはず、……いや、流血は結構な怪我か。それはなるべく避ける方向でいこう。

――よし、決めた、このまま降りるぞ。足をかけるポイントがない以上、意を決するしかない。気合いがあれば、何とかなるはずだ。

カホラルート・レント（１４）

［吹雪］：「行くぞ！」
俺はかけ声を入れて、木の下に向けてジャンプした。
［カホラ］：「え？　吹雪！？」
俺が飛び降りると同時に、先輩は振り返った。このままなら、うまく着地……。
［吹雪］：「――あ」
できないようだ、体が斜めに傾いてしまった。
［吹雪］：「んがっ！！」
俺は思い切り尻餅をつく形で落下した。
［吹雪］：「おー、いてて……」
下が草原だったから助かった、ちょうどいいクッションになってくれた。しかし、何と格好の悪い……やっぱりヒーローのようにはいかないよな。
［カホラ］：「大丈夫！？　吹雪」
先輩が心配そうな顔で俺のほうに近づいてきた。
［吹雪］：「はい、大丈夫です。いてて……お尻を強打しただけですから」
［カホラ］：「本当に？　嘘ついてない？」
［吹雪］：「ついてないです。この状況で嘘をついてもメリットがないですし」
［カホラ］：「それもそうね」
着地がケツだっただけまだよかったかもしれない。これが頭からだったら、結構洒落にならなかったかもしれないしな。
［カホラ］：「でも、一応チェックしといたほうが」
［吹雪］：「いや、それはいいです！　本当に大丈夫ですから。問題ありません」
［カホラ］：「そ、そお？　ならいいんだけど……」

先輩に、俺なんかのケツを見せるわけにはいかない。
［吹雪］：「次から気をつけます」
［カホラ］：「大事故にならなくてよかったわ」
先輩は、ほっと安堵の息を漏らした。

カホラルート・レント（15）

［吹雪］：「それより、上でも教えたんですけど、この泉の中にストーンサークルを確認することができました」
［カホラ］：「そうみたいね……そんなとこに隠されていたなんて、全く思わなかったわ」
［吹雪］：「すごい斬新な隠し方ですよね。これは気づけなくて当然ですよ。上からじゃないと見えないですから」
［カホラ］：「ピアリーも、これには焦ったんじゃないかしらね」
［吹雪］：「でしょうね、俺たちだけじゃないはずですよ」
みんながみんな、きっと簡単には見つけられないはずだ。
［カホラ］：「うーん、私も見たいわね。ストーンサークルのメモも取っておきたいし」
［吹雪］：「そうですね、先輩に見てもらわないと、解析もできないですし」
［カホラ］：「何か方法はないかしら？　生憎木には登れないし……」
［吹雪］：「うーん、良い方法は……」
木に登る選択肢を削ると、他に泉を見下ろせる場所として挙げられるものがほとんどなくなってしまう。
［カホラ］：「……？　……」
［吹雪］：「ど、どうかしましたか？」
［カホラ］：「吹雪？　さっき落ちたとき、肩は痛めなかった？」
［吹雪］：「え？　はい、肩は何ともありません」
［カホラ］：「そう。……これしかないわね」
［吹雪］：「何か方法を思いついたんですか？」
［カホラ］：「まあ、吹雪が問題ないならだけど」
［吹雪］：「？　俺次第、ですか？」
［カホラ］：「さっき木から落ちたところに言いずらいんだけど、

私を肩車してほしいの」

［吹雪］：「え？　肩車？」

［カホラ］：「ええ、木に登らないで高さを出すとしたら、これくらいしか方法は残ってないから。岩の上でそれをしたら、木ほどではないけどそれなりに高くはなるはずだから、多少は見えると思うのよね」

［吹雪］：「確かに……」

［カホラ］：「吹雪には悪いけど、私にはこれしか方法は思いつかないの。お願いできるかしら？」

［吹雪］：「肩車か……」

先輩の役に立てるなら、やらないわけにはいかないんだが……。先輩は、俺に肩車されることに不快感はないのだろうか？　先輩からお願いされてるわけだから、それはないのか……。やるか、やらないかは俺次第。……それならもう、やるしかない。

カホラルート・レント（16）

［吹雪］：「分かりました、俺、やります」
［カホラ］：「本当？」
［吹雪］：「はい、ここまできて先輩がストーンサークルを見ることができないなんて許されざることですから。俺、頑張ります」
［カホラ］：「やはり、吹雪は頼れる男の子ね、吹雪は」
［吹雪］：「もったいない言葉です」
［カホラ］：「じゃあ、岩の上に乗って、かがんでくれないかしら？」
［吹雪］：「分かりました」
指示通りにして、俺は先輩を待つ。いいか？　俺、余計なことは考えるなよ？　変に首周りに神経を集中させるんじゃないぞ。
［吹雪］：「いつでもオッケーです」
［カホラ］：「じゃあ、失礼して……よいしょ」
［吹雪］：「おお……」
［カホラ］：「大丈夫？」
［吹雪］：「はい、大丈夫です」
［カホラ］：「バランスを整えて……いいわよ、立ち上がってもらえる？」
［吹雪］：「分かりました」
よし、行くぞ。
［吹雪］：「――ふっ！」
［カホラ］：「きゃっ！？」
先輩の足を支えながら、力を込めて立ち上がる。ちょっと勢いをつけすぎたのか、先輩はバランスを崩し、俺の頭の上に手を置いて支えた。そうなると、自然と先輩の体は折り曲がるわけで……。
（む、胸が！？）
先輩のものが、俺の頭に押しつけられた。

［カホラ］：「ごめんね、吹雪」
［吹雪］：「い、いえ、全然問題ありません」
本当は若干あるが、そんなこと言えるわけがない。
［吹雪］：「どうですか？　ストーンサークルは見えますか？」
［カホラ］：「ちょっと待って」
幸い泉は自ら光を放っているため、懐中電灯で照らす必要はない。
［カホラ］：「――あ、見えるわ。吹雪、ちゃんと見えるわ」
嬉しそうな先輩の声が上から聞こえてきた。
［カホラ］：「へー、こんな風になってたのね」
［吹雪］：「どうですか？　作りに何か特徴はありますか？」
［カホラ］：「うーん、そうね。もうちょっとじっくり見てみるわね」
俺の頭を支えにして、先輩は体を前に押し出す。
［吹雪］：「おお……」
状況はさっきと同じになってしまった。しかも先輩はストーンサークルをじっくり見ているため、体勢はそのまま変わらない。

カホラルート・レント（17）

［カホラ］：「うーん、なるほど……今までみた模様とはまた違うわね」
［吹雪］：「そ、そうなんですか？」
［カホラ］：「ええ、こうして目にするのは初めて。きっとかなり特殊なものなんだと思うわ」
［吹雪］：「やっぱり、ピアノを保護するものだからですかね？」
［カホラ］：「おそらくね」
［吹雪］：「う……」
［カホラ］：「ん？　どうしたの？　吹雪」
［吹雪］：「いえ、何でもないですよ」
気にしないようにしたいんだが、どうしても気になってしまう。だって、押しつけられてるんだもの。感触がするんだもの。感覚をなくさない限り無理だ。
［吹雪］：「耐えろ吹雪、大丈夫だ、理性を保て……」
［カホラ］：「これは、メモを取っておいたほうがいいわね。吹雪、ちょっと頭を借りるわね」
［吹雪］：「は、はい、どうぞ」
先輩はポケットから手帳のようなものを取り出し、サラサラとペンを走らせ始めた。
［カホラ］：「向こうのほうはどうなってるのかしら？　吹雪、場所を移動することってできる？」
［吹雪］：「はい、多分できると思います。反対側ですか？」
［カホラ］：「ええ、確なストーンサークルを写しておきたいから」
［吹雪］：「分かりました、落ちないように気をつけてくださいね」
［カホラ］：「ええ、分かったわ」
俺の頭に手を乗せて体を安定させる。

カホラルート・レント（18）

［吹雪］：「じゃあ、歩きますね」
［カホラ］：「ええ」
転ばないように注意しながら、俺は反対側を目指して歩く。
［カホラ］：「随分久しぶりだわ、肩車をしてもらうなんて」
［吹雪］：「そうでしょうね、幼少の頃くらいしか機会はないでしょうから」
［カホラ］：「昔は、お母さんによくやってもらってたわ。高さが変わるだけで、自分が居た世界が違って見えるようで楽しかったのよね」
［吹雪］：「その気持ちは分かりますね。俺も、先輩と同じでしたから。高いところは、何でかテンションが上がるんですよね」
［カホラ］：「そうね。それを今やってもらってるっていうのは、何だか不思議な感じね」
［吹雪］：「俺も思いますね。やってもらう側が、いつの間にかやってあげれるようになったんですから」
［カホラ］：「男らしくなったってことね」
［吹雪］：「そう、なんですかね」
［カホラ］：「そうよ。パートナーに選んだのが吹雪でよかったわ。こんなこと、吹雪じゃなきゃ頼めないもの」
［吹雪］：「あんまり、そういう状況になることは日常ではありませんよ」
［カホラ］：「だからこそよ、こんなことを頼んで嫌な顔しないで手伝ってくれるのは、吹雪くらいよ。本当に感謝してるわ」
［吹雪］：「同じことばかり言ってますが、役に立てているなら何よりです」
［カホラ］：「うふふ、――あ、ここでいいわ、止まってもらえるかしら？」

［吹雪］：「分かりました」
泉の方に体を向ける。

カホラルート・レント（19）

［カホラ］：「メモ帳を逆さにして……よし、これで続きを……」
――その後俺たちは、同じような感じで泉の周りを2周ほど回った。
明確な答えを導くためには、やはり狂いのない資料が必要不可欠だからな。
［カホラ］：「うん、これくらいね。十分なデータを手に入れられた気がするわ」
［吹雪］：「これで一つの謎が解けますね」
［カホラ］：「ええ。長々と肩車させてごめんなさいね。降ろしていいわよ」
［吹雪］：「あ、分かりました。よいっしょ」
岩の上から降りて、ゆっくりとその場で屈んだ。
［カホラ］：「――ふう。お疲れさま」
［吹雪］：「お疲れさまです」
うん、我ながらよく耐えたぞ、俺。降りたばかりでまだ感触が生々しく残っているが……思い出さないように心がけよう。
［カホラ］：「ストーンサークルも確認できたし、肩車も懐かしくておもしろかったし……今日はもう言うことなしね。探索にきてよかったわ」
［吹雪］：「明日はこのストーンサークルの解析ですか？」
［カホラ］：「そうね、放課後は図書室にいるわ。授業が終わったら来てもらえるかしら？」
［吹雪］：「もちろんです」
［カホラ］：「明日は明日で楽しみね。どんなことが分かるかしら？　ふふ」
俺は時計を見て時刻を確認する。４時ちょっと前、今から帰れば余裕を持って帰ることができる。
［カホラ］：「じゃあ、今日は帰りましょう」

［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「また機会があれば、肩車よろしくね？」
［吹雪］：「が、頑張ります……」
俺の理性を保てるかどうか、それだけが心配だ。
……。
……。
……。

カホラルート・レント（２０）

［場所：昇降口前］

［カホラ］：「はあ、有意義な探索になったわ。これで、何か謎がとけるかもしれない」
［吹雪］：「だといいですね、他のストーンサークルと共通していることがあるかもしれませんし」
［カホラ］：「ええ、解読が楽しみ」
［セフィル］：「ふんふん、なるほど。謎を解明するために、夜な夜なこっそり学校を抜け出したというわけか」
［カホラ］：「きゃあああ！？」
［吹雪］：「おわあっ！？」
［カホラ］：「お、お母さん！？　な、何でこんな夜遅くに起きてるの？」
［セフィル］：「最近、どうも寝つきが悪くて、朝方になってこないと眠くならないんだ。はっは、おかげで睡眠時間が足りなくて困ってるんだ。それに今日は、学校を「エクソダス」した二人の男女もいたことだしな、起きて見張る必要もあった」
［カホラ］：「う……分かってたの？」
［セフィル］：「私を誰だと思ってる？　学園長だぞ？　学校で一番偉い人だぞ？　……ちょっとかっこいいな」
［カホラ］：「それは知らないけど……」
［セフィル］：「全く、夜の森に出歩くなんて危険なことをして……もし何かあったらどうするつもりだったんだ」
［カホラ］：「だ、だから吹雪に付いてきてもらったのよ。一人で危険だと思ったから」
［セフィル］：「危険だと分かっているなら、最初から出歩こうとなんて考えるんじゃない。何事もなく帰ってきたからよかったもの

を……これでカホラが帰ってこなかったら、母さんはどうすればいいんだ」

［カホラ］：「だって、今の時間にしか分からないことがあるかもしれなかったから……その探究心に勝つことができなくて……」

［セフィル］：「せめて何か一言言ってからでもよかったじゃないか」

［カホラ］：「だって、断ったところで、お母さん許してくれないでしょう？」

［セフィル］：「……そんな風に思われていたのか、ちょっとショックだな」

［カホラ］：「じゃあ、許してくれたの？」

［セフィル］：「お前の心意気がヒシヒシと伝わっていれば、分からなかったぞ？」

［カホラ］：「……どっちにしても、悪いのは私ね。ごめんなさい」

［吹雪］：「すいませんでした」

［カホラ］：「ペナルティを科すなら、私だけにして？　吹雪は私のわがままに付き合ってくれただけだから、吹雪は何にも悪くないわ」

［吹雪］：「せ、先輩……」

［カホラ］：「お願い、お母さん」

［セフィル］：「だが、吹雪は吹雪の意思で付いていったんだろう？　出発前、結構楽しそうな顔をしていたからな」

［吹雪］：「まあ、実際、楽しかったですし……」

隠してもしょうがないことだ。

カホラルート・レント（21）

［セフィル］：「だとすると、私は二人に罰を与えなければいけないな。だって、楽しんできたわけだからな」
［カホラ］：「お母さん……」
［セフィル］：「どんな罰を与えようか。うーん……よし、これだ」
［カホラ］：「……」
［セフィル］：「二人には、全てのストーンサークルを観察し、それに関する資料を作成してもらうぞ」
［カホラ］：「え？」
［吹雪］：「学園長？」
［セフィル］：「私も、ストーンサークルに関しては聊か興味があった。しかし、なかなかじっくり見る機会はなかったから、ずっと先送りにしていたんだ。それは今も変わらない、よって、私の代わりに、ストーンサークルを確認し、分かったことを私に教えるんだ。教えてもらうだけなら、時間はあまりかからないからな」
［カホラ］：「お母さん……」
［セフィル］：「今回のことも、多めに見てやる。二人が協力して頑張っているところは、最初から知っていたからな」
［カホラ］：「というか、ストーンサークルのこと知ってたの？お母さんは？」
［セフィル］：「もちろんだ、学園長だぞ私は」
［カホラ］：「教えてくれれば、探索する時間が短く済んだのに」
［セフィル］：「それでは楽しみを潰してしまうと思ったからな、あえて黙っていたんだ」
［カホラ］：「じゃあ、他のストーンサークルの場所も？」
［セフィル］：「私が知っているのは、後一カ所だ。現段階で確認されているストーンサークルは2つだからな」
［カホラ］：「ピアリーの言ってたことと同じね」

［吹雪］：「そうですね、学園長は、どうしてそれを知っていたんですか？」
［セフィル］：「四季のピアノとコンタクトを取るのは私だからな。学園長は、そういったピアノに関する情報を知っておく必要があるんだ。詳しくは、前学園長から、その情報を引き継いでるんだが」
［カホラ］：「でも、私が聞いた時は知らないって言ってたじゃない？」
［セフィル］：「それも先と同じ理由だ。自分で調べて解明するから謎解きはおもしろいものだろう」
［カホラ］：「……お母さんの意地悪」
［セフィル］：「分かった、分かった。明日、私の知っている情報を教えよう、ストーンサークルの場所も教えてやる。それで勘弁してくれ」
［カホラ］：「ゼッタイよ？　教えてくれないと怒るからね？」
［セフィル］：「……ちょっと、それも見てみたい気もするが」
［カホラ］：「お母さん？」
［セフィル］：「大丈夫だ、約束は守る。カホラの怒る姿は見たくないからな、な？　吹雪」
［吹雪］：「え？　まあ、先輩は笑っているのが一番いいですからね」
［セフィル］：「うん、良いことを言ってくれた。それでこそ吹雪だ」
何故か褒められてしまった。
［セフィル］：「とにかく、もう夜の探索は危険だから今回限りにさせてもらうぞ。いいな？」
［カホラ］：「分かったわ」
［吹雪］：「すいませんでした」
［セフィル］：「うむ、ではもう休むといい。疲れただろう？　明日、寝坊するんじゃないぞ？」
［カホラ］：「ええ、そうね。ありがとう、お母さん」

［セフィル］：「これくらい、当然のことだ」
［カホラ］：「行きましょう、吹雪」
［吹雪］：「はい」
学園長に感謝し、俺たちは寝床へと戻った。

［セフィル］：「――うーん、やっぱりあの二人はお似合いだな。
近いうち、今以上に仲が深くなりそうだ」

カホラルート・リテヌート（1）

12月22日（水曜日）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「うう、眠いな……」

毛布を払い、足に力を入れて立ち上がる。

［吹雪］：「分かってはいたけど、体がちょっと重いな……」

理由はもちろん昨日の夜の探索だろう。それ以外に考えられない。

でも、練習を休むわけにはいかない。それはそれ、これはこれ、ハーモニクサーとしての役目を終えるまで練習を怠るわけにはいかない。カーテンを引いて布団から出る。

［吹雪］：「おはよう」

どうやらみんなも起きてるようだ、俺に振り返ってあいさつを返してくる。

［舞羽］：「おはよう、吹雪くん」

［吹雪］：「ああ、おふぁよう……」

つい欠伸が出てしまった。

［舞羽］：「何だか、すごく眠そうだね」

［吹雪］：「あ、ああ、ちょっとな」

［舞羽］：「あ、クマが出来てる……寝不足なの？」

［吹雪］：「ん、まあ昨日だけな。今日はきっと良く眠れるよ」

［舞羽］：「？　昨日だけ？」

［吹雪］：「いや、こっちの話。元気はあるから問題なし」

［舞羽］：「ならいいけど……無理はしちゃダメだよ？」

［吹雪］：「おう。……顔洗って目を覚ましてくるよ」

［舞羽］：「うん、行ってらっしゃい」

一回合同練習で倒れてるからな、これ以上心配はかけないようにし

ないと。

……。

カホラルート・リテヌート（2）

［場所：水飲み場］

［カホラ］：「あ、吹雪、おはよう」
［繭子］：「おはよう～、ふーちゃん」
［吹雪］：「おはようございます」
水飲み場には、先輩とマユ姉がいた。
［カホラ］：「今日も良いお天気ね」
［吹雪］：「はい、絶好の練習日和です」
［カホラ］：「それは吹雪だけじゃない？　ランニングがあるのは吹雪だけでしょう？」
［吹雪］：「あ、確かに。でも、天気が晴れてると頑張ろうって気になりませんか？　雨の日よりも」
［カホラ］：「それはあるわね、気持ちの問題なんだろうけど雨の日に練習するよりは気分が良いわね」
［吹雪］：「今日も練習に精を出せって、神様が言ってるのかもしれませんね」
［カホラ］：「ふふ、じゃあその気持ちに答えないとね」
［吹雪］：「はい」
［繭子］：「……ん～」
［吹雪］：「何だ？　人の顔じっと見て」
［繭子］：「ん～ん、ただ、仲が良いな～って思って」
［カホラ］：「前から私と吹雪は仲がいいですよ？」
［繭子］：「何て言うのかな～それ以上？　この合宿を通して更なる信頼が築かれてるように見えるんだよね～、繭子ＥＹＥには」
［カホラ］：「そうなんですか？　いつもどおりの私たちですけど」
［繭子］：「そっか、いいな～」
［吹雪］：「何がいいんだよ？」

［繭子］：「ワタシもカホラちゃんみたいに優しくされたい～」
［吹雪］：「俺は優しくしてるつもりだぞ」
［繭子］：「じゃあ何でワタシは毎日のようにポコポコ叩かれるの～？」
［吹雪］：「もちろん躾のためだ」
［繭子］：「全然優しくないじゃん、手が出てるんだから～」
［吹雪］：「優しくしてなかったら、もっとバンバン手が出てもおかしくないぞ」
［繭子］：「そういう意味の優しいだったの～！？」
［吹雪］：「俺だって、叩きたくて叩いてるんじゃないんだ。マユ姉に真っ当な人間になってほしくてやっているんだ」
［繭子］：「ワタシ、これでも教師で大人なんだけど～」
［吹雪］：「じゃあ一般学生に日頃から注意されてんじゃねぇよ、もっと努力しろ」
［繭子］：「うう、やっぱり厳しいよ、ふーちゃんは～」
［カホラ］：「繭子先生、ファイトです」
［繭子］：「うう、カホラちゃーん」
マユ姉は先輩の胸に飛び込んだ。本来は生徒を励ます立場が、逆に励まされてどうするんだか……。
……。

カホラルート・リテヌート（3）

ふう、ようやく目が覚めてきた。さて、今日も一日頑張るか。
［カホラ］：「あ、吹雪」
寝床に戻ろうとした時、先輩に呼び止められた。
［カホラ］：「昨日も言ったけど、今日の放課後、図書室でね」
［吹雪］：「あ、はい、分かりました。必ず行きます」
［カホラ］：「ええ、待ってるわ」
［繭子］：「ん～？　どこに行くの～？」
［カホラ］：「図書室です、ちょっと調べるものがありまして」
［繭子］：「そうなんだ～、変なことを調べちゃダメだよ～？」
［吹雪］：「変なことって何だよ？」
［繭子］：「例えば～……」
［吹雪］：「例えも思いついてないのにそういうどうでもいいこと言うんじゃねぇよ」
でしっ。
［繭子］：「イタ……うー、また叩かれた～」
［吹雪］：「躾だ、耐えろ」
［カホラ］：「繭子先生、ファイトです」
［繭子］：「うー、カホラお姉ちゃ～ん」
いつから先輩が姉さんになったんだよ……。

カホラルート・リテヌート（4）

［場所：グランド］

［吹雪］：「はあ……はあ……ゴール……」
［セフィル］：「うむ、相変わらず良い走りだったぞ。どんどんランナーに近づいてるな」
［吹雪］：「なる気はないですからね？　ランナーに」
［セフィル］：「分かっているさ……良い成績を残せると思うんだがな……」
［吹雪］：「そんな寂しそうな目をしないでくださいよ……」
断ってるのが悪いみたいになってくるじゃないか……。
［セフィル］：「よし、休憩を挟んでホーリーカルムの練習に移ろう」
［吹雪］：「はい」
……。
［吹雪］：「――ホーリーカルム！」
いつものように、フェルシア先生に向けて自分の魔力を与える。
［セフィル］：「うん、大分板についてきたようだな」
学園長の言葉を耳に聞きながら、そのまま魔法を送り込む。やはり努力と言うものは、報われるようにできているのかもしれない。この練習を開始した時よりも、スムーズにできているような感覚が自分の中にもある。これを本番までキープ、いや、今以上にしっかりとできるように頑張らなければ。そのためには、今の練習をしっかりこなさなければ。
……。
［吹雪］：「ふう……」
［セフィル］：「よし、終了だ。ほら、飲むといい」
［吹雪］：「ありがとうございます」

ドリンクを受け取り、ごくりと一口。
［吹雪］：「はあ、うまい」
［セフィル］：「日に日に供給にかかる時間が短くなっているぞ」
［吹雪］：「本当ですか？」
［セフィル］：「ああ、そうだろう？　フェル」
［フェルシア］：「はい、魔力の入り方が以前よりもスマートになってるのを感じてるわ」
［吹雪］：「スマート、ですか？」
［フェルシア］：「良い表現が思い浮かばなくて、でも、イメージはそんな感じ。最初の頃と比べて格段によくなってるわ。供給時間が何よりの証拠よ」
［吹雪］：「それは素直に嬉しいです」
倒れない程度に、これからも努力していこう。
……。

カホラルート・リテヌート（5）

［セフィル］：「じゃあ、午前の練習はこれで終了としよう。次は授業を頑張って受けるように」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「お、そうだった。吹雪」
［吹雪］：「はい？　何ですか？」
［セフィル］：「今日の放課後は、カホラとアレか？」
学園長が言うアレとは、きっと昨日のアレだろう。
［吹雪］：「はい、そのつもりです」
［セフィル］：「そうか」
［フェルシア］：「何です？　あれって？」
［吹雪］：「別に如何わしいことではないぞ？」
［フェルシア］：「そんなこと思ってませんでしたけど」
［セフィル］：「む、いかん。口が滑ってしまった」
［フェルシア］：「え？　如何わしいことをするつもりなんですか？　学園長」
［セフィル］：「いや、私ではない。吹雪とカホラがだよ」
［吹雪］：「それも違います！」
［フェルシア］：「放課後に二人きり……誰もいない教室……うわあ、ムードばっちり」
［吹雪］：「だから違うんですってば！　学園長も変なこと言わないでくださいよ」
［セフィル］：「いや、吹雪がどんな反応を見せるのか気になってな。すまなかった」
そう思うのなら最初からやらないでいただきたいんだが……。
［セフィル］：「すまん、フェル。二人はまだそういうことをする雰囲気ではないんだ」
［フェルシア］：「あ、そうなんですか」

［吹雪］：「……」

説明の仕方が引っ掛かるのは俺だけだろうか？

［セフィル］：「教えても問題ないか？　吹雪」

［吹雪］：「あ、はい。フェルシア先生なら」

［セフィル］：「実はな、フェル――」

学園長は、フェルシア先生に俺たちがしていることを説明した。

［フェルシア］：「なるほど、四季のピアノの研究ね。なかなかロマンがあるじゃない？」

［吹雪］：「元々はカホラ先輩が自主的に取り組んでいたことなんですけど、話を聞いてるうちに俺も気になってきて、現在に至ってるんです」

［フェルシア］：「でも、気になる気持ちは分かるわ。あんなにすごい存在感を誇っているのに詳しいことがあまり分かっていないっていうのは疑問があるもんね」

［吹雪］：「フェルシア先生は、何か知ってることとかってありませんか？」

［フェルシア］：「うーん、すでに二人が知ってることしか知らないわね。私もほとんど四季のピアノに関することは分からなくて……ごめんなさいね」

［吹雪］：「いえ、気になさらず。それが普通ですから」

［フェルシア］：「私も、何かあったら協力するわ。言ってちょうだい」

［吹雪］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「で、さっきの話の続きだが、今日の夜、カホラの練習が終わったら教える予定だ。その時は、吹雪も来てくれ。いいか？」

［吹雪］：「はい、必ず行きます」

今日の夜か、どんなことが分かるか、ちょっと楽しみだ。

……。

カホラルート・リテヌート（6）

［場所：図書室］

［吹雪］：「――って、学園長が言っていました」
［カホラ］：「今日の夜ね、分かったわ」
図書室で合流し、先輩にそのことを伝えた。すでに先輩は、昨日のストーンサークルのメモを大きな紙に書き直し、本と照らし合わせて解読を始めていた。
［吹雪］：「すごい、再現力ですね」
俺が木の上から見たものと全く同じに見える。
［カホラ］：「正確な情報じゃないと、解読が難航しちゃうからね。そのための肩車だったわけだし」
［吹雪］：「そうですね。……」
［カホラ］：「ん？　どうしたの？　急に黙っちゃって」
［吹雪］：「いや、別に何でもないです」
いかんな、ちょっと思い出してしまった。これが男の性か……さっきまで忘れていたのに、先輩の口からその言葉が出た途端これだよ……。
［吹雪］：「ダメだ、忘れるんだ、俺」
［カホラ］：「え？　何を？」
［吹雪］：「い、いや、こっちのことですから、気にしなくて大丈夫です」
［カホラ］：「そうなの？　……何か突き放されたみたいで寂しいわね、そんな言い方されると」
［吹雪］：「そ、そういうことじゃないんですよ。自己完結できることなんで」
［カホラ］：「ならいいけど、あまり隠し事はしないでよ？　私と吹雪の仲なんだから、ね？」

［吹雪］：「は、はい」
［カホラ］：「ふふ」
……やっぱり素敵だ、カホラ先輩は。
［カホラ］：「うーん、もう一冊資料が必要ね。吹雪、悪いんだけど、この本を持ってきてくれないかしら」
先輩は、本の名前が書かれた紙を手渡した。
［カホラ］：「受付にこれを渡せば出してくれると思うから」
［吹雪］：「分かりました」
……。

カホラルート・リテヌート（7）

［吹雪］：「借りてきました」
［カホラ］：「ありがとう」
［吹雪］：「何ページですか？」
［カホラ］：「確か……122ページだったはず」
［吹雪］：「お、覚えてるんですか？　どこに何が書いてあるか」
［カホラ］：「その本にはずっとお世話になってるから、いつの間にか暗記しちゃってたみたい。人間の記憶力も、あまり馬鹿にできないわね」
好きな本の内容を忘れないのなら分かるが、ページ数まで覚えるのはなかなかできないと思う。
［カホラ］：「開いたら、私の脇に置いてちょうだい」
［吹雪］：「はい」
言われたとおりに役目をこなす。
［カホラ］：「うーん、この部分が……ポイントになりそうね」
［吹雪］：「やはり他のストーンサークルとは異質なんですか？」
［カホラ］：「ええ、一言でいえば、かなり特殊ね。ここまで緻密なものはあまり見たことがないわ」
こくりとうなずきながら。
［カホラ］：「そもそもストーンサークルっていうのは魔法陣と互換性があるのよ。丸い円の中に、それぞれ異なる紋模様を描いたもの。何故かと言えば、ストーンサークルを基にして、魔法陣は完成されたものだから」
［吹雪］：「そうなんですか？」
［カホラ］：「ええ。円というものは、切り離された空間として捕らえられているの。それを表すのにピッタリだったのがストーンサークルなのね。石は、守りが固くて、壊されにくいから。でも、それを常に行うのは至難の技。時代が進むと、簡易性を求めるように

なってくる。それを追及して完成したのが魔法陣なの。言ってしまえば、別に石を必ず使わなければいけないということはなかったのよ。円と言う概念を根底に置くことができれば。地面に模様を描くだけでも、それなりの効力は発揮できるのよ」

［吹雪］：「仮に円じゃない魔法陣を作ったとしたら、やっぱり威力は落ちるものなんですか？」

［カホラ］：「全部が全部そうとは言い切れないけど、大半のものがそうでしょうね。円の形にすることには、もう一つ理由があるのよ。それは、中に描いた模様を逃がさないためなの」

［吹雪］：「なるほど、閉じ込めているんですね」

［カホラ］：「そう、仮に円を描かずに中の模様だけを描いて発動させると、発動させる範囲が特定できないから、それは不発に終わってしまうの。でも、円を描き範囲を特定させることができれば、魔法陣は問題なく発動する。でも、かと言って円以外で囲むと、効果が発揮されないのよ。これは正直、はっきりとは分からないけど、円の形は魔法が均等に行き渡るからじゃないかなって私は思ってる」

［吹雪］：「なるほど」

［カホラ］：「後は、最初に魔法陣を開発した人が円にしたから、みんながそれに従ったということもあるかもしれないわね」

［吹雪］：「確かに、魔法陣が円じゃない形だと、何か違和感がありますもんね」

［カホラ］：「そうよね、円の形が一番しっくりくるわ」

［吹雪］：「先輩のおかげで、また一つ賢くなりました」

［カホラ］：「是非今度、みんなに教えてあげてちょうだい」

［吹雪］：「はい、機会があれば」

……。

［カホラ］：「ふう、ようやく半分ね」
［吹雪］：「お疲れ様です」
［カホラ］：「ちょっとずつ、どんなものなのかが分かってきたわ。どうやら、四季のピアノのための保護魔法であることは間違いないみたい」
先輩は書き込んだストーンサークルの情報を見せてくれた。
［カホラ］：「それぞれの模様一つ一つに、違う効力が秘められているの。例えばこの、数字の3を鏡合わせにしたみたいな模様は……この本に書いてある補助魔法の一種ね。これでピアノの劣化を防いでいるのね、ストーンサークルの中にこの模様がいくつかあるみたいだから、重ねることで効力を強めているのだと思うわ」
［吹雪］：「ストーンサークルの中でも、模様を重ねるんですね。一度だけでも十分な効力がある気がするんですけど」
［カホラ］：「何年も先のことを見越してのものだから。逆に重ねがけをしていなかったら、今の四季のピアノは劣化していたかもしれないわ。でも、模様の重ねがけは意外とあるものよ。ほら、これを見てみて」
先輩は本をめくって一例を見せてくれる。
［カホラ］：「この左上と右下に、同じ模様が書いてあるでしょう？　これは炎魔法の一種なんだけど、この模様を重ねることで威力を高めているのよ」
［吹雪］：「なるほど、じゃあ、模様を重ねるのは結構普通のことなんですね」
［カホラ］：「そうね、効力を上げるにはこの方法が効率的だからね」
［吹雪］：「初めて知りました」
［カホラ］：「私たちは、あまり魔法陣を利用しないからね。授業

で少し習うくらいだから、当然でしょう」
これも、覚えておいて損はない知識だな。
［カホラ］：「後、ポイントになる模様は……これかしら。ダイヤのような形の中に斑が散りばめてある模様。これには、ピアノを清潔に保つ補助魔法の効果があるわ。この本にある模様と一致しているはず」
［吹雪］：「今で言うところの、どの魔法なんですか？」
［カホラ］：「多分、キュア系の魔法だと思うんだけど、フェルシア先生に聞くのが一番だと思うわ。プロフェッショナルだからね」
［吹雪］：「キュアか、ふむふむ」
［カホラ］：「このストーンサークルには、たくさんの補助魔法が凝縮されているわね。後半分に、何が描いてあるのか、ドキドキしてるわ」
［吹雪］：「そうですね、俺、全力で手伝います」
［カホラ］：「ふふ、じゃあ私も全力で解読するわね」
［吹雪］：「俺たちの力を一つにする時です」
［カホラ］：「ええ、見せてやるとしましょう」
今から、後半戦だ。
……。
……。
……。

カホラルート・リテヌート（9）

そしてそれから1時間後。
［カホラ］：「はあ、完成」
［吹雪］：「やった！」
努力の末、ようやく解読が終了した。
［カホラ］：「今日中に終われてよかったわ」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「……ふふ、じゃあ早速教えてあげましょうか」
［吹雪］：「お願いします」
俺は先輩から、今終えた半分のストーンサークルに関して教えてもらった。やはり描かれていた模様は補助魔法が全般だったようで、風化、防腐などのものがほとんどだった。四季のピアノを昔の状態のままで保つには、これくらいしなければいけないのだろう。
［カホラ］：「重ねがけされていたのは、劣化を防ぐものと清潔に保つものだったわ。特に劣化のほうに関してはもう半分のほうにも、もう一つ同じ模様があったから、計三つかしら」
［吹雪］：「弾けなくなったら大変ですし、これくらいしないとダメなんですね」
［カホラ］：「四季を保つためのピアノが壊れたら、大惨事だからね」
［吹雪］：「ですね」
［カホラ］：「後、これも大事なことね。見に行ったストーンサークル、あれは現在も作動している可能性が高いかもしれないわ」
［吹雪］：「そうなんですか？」
［カホラ］：「ええ、今までは本当か断定できなかったけど、昨日の泉の輝きのおかげでそれが分かったわ」
［吹雪］：「あの輝き……ひょっとしてあれは、ストーンサークルが放っていたものだったんですか？」

［カホラ］：「そうね、私も最初は泉が光っているかと思ったわ。でも、ストーンサークルを間近で見た時、あの光は泉の奥から見えていた。魔法陣は、作動する時に大きな光を放つものが多い。魔法陣はストーンサークルから開発されたものだから、ストーンサークルも同じような反応を示す可能性が高いと思うの」

［吹雪］：「そうですね、俺も魔法陣の反応は見たことがあります」

［カホラ］：「もしそれが正しかったら、なかなかの有力情報ね。もう一つの確認されているストーンサークルも動いてるかもしれないってことになるからね」

［吹雪］：「確かに、同じような作りだとしたら、その可能性は大いにありますもんね」

［カホラ］：「絶対、とは言えないけどね。四季のピアノによって、ストーンサークルの模様の描き方は変わってくるかもしれないし」

［吹雪］：「ああ、そうか。でも、それがあったとしても昨日のストーンサークルが動いているわけですから、確率は結構高いんじゃないですか？」

［カホラ］：「そうね、今も四季のピアノが保たれているのはストーンサークルが作動しているからかもしれないしね」

［吹雪］：「もう一つのストーンサークルも見てみたいですね」

［カホラ］：「ええ、お母さんの情報が楽しみ」

これでまた一つ、四季のピアノについての謎が解けたな。この調子で、前進して行けたらいいと思う。

カホラルート・リテヌート（10）

［カホラ］：「とりあえず、ストーンサークルに関してはこんなところかしら。他に何か知りたいこととかある？　吹雪」
［吹雪］：「そうですね、ストーンサークルに、何か次の手掛かりになるようなものはなかったんですか？」
［カホラ］：「次の手掛かりね、うーん……あ、そういえば一つ」
［吹雪］：「何ですか？」
［カホラ］：「模様の中に、一つだけ記号のようなものが描かれていたのよ。これが何を表しているのかがまだ分からないんだけど、その時代の古代文字の一種だとしたら、あのストーンサークルがいつ作られたのかが特定できるカギになるかもしれないわ」
［吹雪］：「記号か、ストーンサークルを作った人の記録なんですかね？」
［カホラ］：「その可能性もあるけど、他のことを表している可能性もあるわ。何しろ一文字だけだからね、長々と書かれているのだとしたら、記録の可能性が高いのだろうけど」
［吹雪］：「短いが故に、そうだと断定ができなんですね」
［カホラ］：「ええ、手掛かりになるかもしれないから、しっかり記憶はしておくつもりよ」
［吹雪］：「俺も覚えておきます。ちょっと見せてもらってもいいですか？」
［カホラ］：「ええ、これよ」
紙に書かれた模様の右下、確かに今までに見たことがない記号が一文字だけ記されている。
［カホラ］：「このような記号は初めてですね」
［吹雪］：「何かの文献に載ってないかしら？」
［カホラ］：「この後お母さんに聞いてみましょうか、それか図書館の先生に。ひょっとしたら、何か知ってるかもしれないし」

［吹雪］：「それがいいかもしれませんね。……よし、焼き付け完了」

先輩に用紙を返した。

［吹雪］：「これでもう忘れません」

［カホラ］：「よろしい、じゃあ戻りましょうか」

気付けば夕ご飯の時間になっていた。周りを見れば、俺たち以外に人もほとんどいなかった。

［吹雪］：「メチャクチャ集中してやってたんですね、俺たち。周りがいなくなることに気付かないくらい」

［カホラ］：「没頭すると何も見えなくなるっていうのはこのことなのね」

［吹雪］：「身を持って体験しました」

［カホラ］：「急いで戻ったほうがいいかもしれないわね、繭子先生が暴走する前に」

［吹雪］：「……行きましょう」

……。

俺たちが急いで帰ると、餓死寸前のマユ姉が俺たちを迎えてくれていた。

カホラルート・リテヌート（11）

［場所：第四音楽室］

［セフィル］：「――よし、今日の練習はこれで終了だ」
［カホラ］：「お疲れ様でした」
［吹雪］：「お疲れ様です」
他3人の練習を見終わった後に、カホラ先輩の練習に合流し、今に至る。
［セフィル］：「明日は、今日の反省を活かして練習に励むんだ。特に今日間違ったところは次は弾けるようにしないとな」
［カホラ］：「はい、分かりました」
［セフィル］：「じゃあ、ゆっくり休むんだぞ。……よし、切り替えていいぞ、学園長モードはここでオフにする」
［カホラ］：「いいのね？　普通にしゃべって」
［セフィル］：「ここからは家族の会話だからな」
［カホラ］：「その言葉だと、吹雪も家族の一員になっちゃうわよ？」
［セフィル］：「私は一向に構わないがな。吹雪のような男が私の理想だ」
［吹雪］：「そ、そんなことありませんよ。俺なんて全然ですから」
［セフィル］：「そういう謙虚なところがポイント高いな。うん、ますます良い」
［吹雪］：「いや、その……」
［カホラ］：「吹雪を困らせちゃダメよ？　お母さん。それ以上は浮気になるわよ」
［セフィル］：「何？　浮気？」
［カホラ］：「そうでしょう？　よそ様の男の子に手を出してるわけなんだから」

［セフィル］：「年齢がこんなに離れていてもか？」
［カホラ］：「年齢は関係ないでしょう？」
［セフィル］：「なるほど、これも浮気に入ってしまうのか。なるほど……」
［吹雪］：「あの、学園長？」
［セフィル］：「ああ、大丈夫だ、すまないな。今はまだ、生徒と学園長の関係でいこう」
［カホラ］：「何？　その言い方？　いずれはこの関係は解消しますみたいな」
［セフィル］：「そんなことは一切考えてないから心配するな。私は、お父さん一筋だからな」
［カホラ］：「もう、そろそろ突拍子のない発言をするのはやめなよ。結構みんな困惑してるわよ」
［セフィル］：「何？　そんな風には見えないが」
［カホラ］：「気を使ってるに決まってるでしょう、お母さんは学園長なんだから」
［セフィル］：「全然そうは思わなかったな。まあ、問題ないだろう、これが私だ。そうだろう？　吹雪」
［吹雪］：「はは、そうですね」
［カホラ］：「そうやって同意を求めて、ずる賢いんだから」
［セフィル］：「これでもカホラの母なんだぞ？　はっはっは」
学園長はとても楽しそうに笑っていた。やはりこの家族は仲が良い。

カホラルート・リテヌート（12）

［カホラ］：「で、お母さん。そろそろ本題に入ってほしいんだけど」
［セフィル］：「カホラは結構せっかちだな、もう少し三人の会話を楽しんでもいいだろうに」
［カホラ］：「このまま話してたら、お母さんに対するお説教がメインになっちゃうわよ？」
［セフィル］：「うむ、それはちょっと困るな。吹雪の前で怒られるのはちょっと恥ずかしいぞ」
［カホラ］：「恥をさらすのが嫌なら、まず話して。それで許してあげるから」
［セフィル］：「分かった、話すよ」
沢渡家で一番権力を持っているのは、カホラ先輩なのかもしれないな。
［セフィル］：「じゃあ、お待ちかねの情報を提供するとしよう。何から聞きたい？」
［カホラ］：「もう一つの確認されているストーンサークルの場所を教えてほしいわ」
［セフィル］：「ストーンサークルの場所だな？　以前二人が行ってきたのは、桜花のピアノ近辺のほうだったか？」
［カホラ］：「ええ、見つけるのが大変だったわ」
［セフィル］：「でも見つけられたんだろう？　あの少ない情報の中で。それは普通にすごいことだ」
［カホラ］：「吹雪が見つけてくれたのよ、ひょっとしたらあるかもって木に登って上から見下ろして」
［セフィル］：「よく気付いたな？　吹雪よ」
［吹雪］：「最初は二人で泉の周辺を探していたんですけど、全然見つかる気配がなくて、だとしたらどこだって考えた時にそこしか

ないんじゃないかって思ったんです。……後付けのような感じですけど」

［カホラ］：「でも、その考えがなかったらきっと見つからなかったでしょうね」

［セフィル］：「その時はその時で、私がこうして教えてあげていただろうな」

［カホラ］：「もう少し早く教えてくれてれば、もっと嬉しかったんだけど」

［セフィル］：「だから昨日も言っただろう？　自分たちで探すことで、いつもと違った世界が見えてくると」

［カホラ］：「……昨日と言ってることが違うわよ？」

［セフィル］：「何？　そんなはずは……昨日、私は何と言ってた？」

［カホラ］：「自分で調べて解明するから謎解きはおもしろいものだろう、よ」

［セフィル］：「カホラ、すごい記憶力だな」

［カホラ］：「昨日自分で言ったことを覚えてないのもどうかと思うわよ？」

［セフィル］：「……ふふ」

［カホラ］：「笑って誤魔化してるんじゃないわよ」

［セフィル］：「まあ、とりあえずそういうわけだから、教えるのが面倒だとかそういうことではないんだ。分かってくれ」

［カホラ］：「次からは早めによろしくね」

［セフィル］：「私が気付けるようなオーラを出していてくれよ」

［カホラ］：「常にそんな風にしてたわよね？　私たち」

［吹雪］：「こうしてこれから情報を頂けるわけだから、何も言えないんですけどね」

［カホラ］：「そうなのよね」

［セフィル］：「はっは。――話が反れてしまったな。二人とも、島の地図を持ってるか？」

［カホラ］：「みんなの部屋にあるわ。今手元にはないわね」
［吹雪］：「あ、俺持ってきますよ。待っててください」
［カホラ］：「ごめんね、よろしく」
……。

カホラルート・リテヌート（13）

［セフィル］：「以前二人が言ってきたのはこの辺だな。島の地図には記載されてないから特定するのが難しいが」
［カホラ］：「やっぱり地図には記載されてないんですね、あの場所は」
［セフィル］：「何分、隠されているものが隠されているものだからな。更に入り組んだ場所にあるから、泉自体見つけるのが困難なんだ。まあ、ピアノが置かれた神殿に行く者もほとんどいないというのもあるんだろうがな」
［カホラ］：「だとしたら、記載する必要もないわけね」
［セフィル］：「そう、一部の人間さえ知っていればいいというわけだ」
［カホラ］：「なるほどね」
［セフィル］：「で、もう一つのストーンサークルの場所だが……ここだ」
学園長は地図の南西を指差した。
［カホラ］：「この場所って、風花のピアノの近くよね」
［セフィル］：「そうだな、泉と同じように、こっちのストーンサークルもピアノの近くに隠されているんだ。さあ、どこだと思う？」
［カホラ］：「どうしてクイズ形式なのよ？」
［セフィル］：「いや、普通にしゃべるのも味気ないと思ってな」
［カホラ］：「まあいいけど、うーん、泉の中に隠されていたわけだし、こっちのストーンサークルも普通の場所には隠されてないでしょうね」
［吹雪］：「風花のピアノの近辺って、何がありましたっけ？　俺、一回しか言ったことないからそこの事情がよく分からなくて」
［カホラ］：「そうよね、私は担当のピアノがそこだから何度か言ってるけど……あそこって何か目を引くようなポイントってあった

かしら？」
［吹雪］：「うーん……」
［カホラ］：「森？　川なんてなかったし、建物は神殿以外になさそうだったし……分からないわね」
［セフィル］：「ん？　降参か？」
［カホラ］：「降参というか、ヒントもないのに分かるほうがおかしいわよ」
［セフィル］：「じゃあ、リタイアということだな。よし、正解を教えよう」
先輩のツッコミお構いなしに、学園長はそのまま話を進めていく。
［セフィル］：「正解は……木だ」
［カホラ］：「木？」
［吹雪］：「木？」
［セフィル］：「木？」
［吹雪］：「学園長は驚く必要ないですよ」
［セフィル］：「いやいや、二人の反応の良さに乗りたくなってしまった」
［カホラ］：「にしても木？　木に隠されてるって、一体どういうことなの？」
［セフィル］：「言葉通りの意味だぞ。もちろん、出任せでもない」
学園長はおもむろに紙にペンを走らせ始めた。
［セフィル］：「私が言ってるのは、こういうことだな」
［カホラ］：「へー、そういうことね」
［吹雪］：「またすごいところに……」
これは確かに気付くのは難しいだろう。

カホラルート・リテヌート（14）

［カホラ］：「木が入口になってるってことだったのね」
［セフィル］：「そういうことだ」
そう、学園長が書いてくれた絵は、木の根元に人一人が入れるような隙間のある木があり、そこを抜けるとストーンサークルが隠された空間があるというものだ。
［カホラ］：「じゃあ、もう一つのストーンサークルは地上にはないってこと？」
［セフィル］：「そうなるな、木の隙間から下に降りていくわけだから」
［カホラ］：「これは、教えてもらわないと分からなかったかもしれないわね」
［吹雪］：「神殿の周りは木だらけですからね」
軽く数百本以上あるであろう木を調べていくのは気が遠くなるような探索になっていただろう。
［吹雪］：「ちなみに、ピアリーが残していた手掛かりはどんなものでしたか？」
［カホラ］：「ちょっと待って……メモ帳を見てみるわ。――えーっと、風花のピアノが置かれた神殿の南西、森林の中の謎の空洞が目印、って書いてあるわ。正にお母さんの言っていたとおりのことが書かれているわね」
［吹雪］：「でも、それだけだと見つけるのは相当厳しい内容でしたね」
［カホラ］：「ええ、正確な場所が分からないと難航は必至ね」
［セフィル］：「ピアリー、二人が手掛かりにしていた資料を作成した人物か？」
［カホラ］：「ええ、すでに故人だけど、四季のピアノについて独自に調べていた人物よ。個人的には彼の見解が一番正しいんじゃな

いかって思ってるわ」
［セフィル］：「ピアリーか……」
［カホラ］：「お母さん、彼を知ってるの？」
［セフィル］：「いや、うーん、何と言えばいいのだろう。何だかその名前に引っ掛かりがあってな、この学園の卒業生か？」
［カホラ］：「個人に関しての記録はほとんど残っていないみたい。４０歳前後の時に、この島にやってきたってことが資料に書いていたぐらいかしら」
［セフィル］：「この島に？　外からか？」
［カホラ］：「ええ」
［セフィル］：「うーん……外からだとすると違うか、でも、何だか引っ掛かるんだよな」
［カホラ］：「お母さん、実はピアリーを知ってるんじゃ？」
［セフィル］：「どうだろうな、もちろん会ったことはないが……そのうち思い出すかもしれないから、その時に話すとしよう。思い出さないかもしれないが」
［カホラ］：「気のせいってこともあるかもしれないからね」
［セフィル］：「その時は笑って許してくれ」
［カホラ］：「笑いはしないけど、許しはするわ」

カホラルート・リテヌート（15）

［セフィル］：「うん、で、詳しい場所だが……口で説明するのは難しいから私が直々に連れて行くことにするよ。二人とも、明日の午前練習の後は空いているか？　調べるのが早いほうがいいだろう？」

［吹雪］：「え？　本当ですか？」

［セフィル］：「私はワープの魔法を使えるからな。シュッっと二人を連れて行ってシュッと帰ってくればそこまで時間はかからない。前回手伝わなかった分、今回は役立てるようにするさ」

［吹雪］：「それは助かりますね」

［セフィル］：「じゃあ明日、準備ができたら学園長室に来てくれ」

［カホラ］：「分かったわ」

［セフィル］：「さあ、次は何が聞きたい？　知っていることは洗いざらい話すぞ」

［カホラ］：「その言い方だと、私たちお母さんを尋問してるみたいよ……」

［セフィル］：「それは初体験だな」

［カホラ］：「生きてるうちに体験する必要がないものなんだけど……」

［セフィル］：「はっはっは。で？　何が聞きたいんだ？」

［カホラ］：「そうね、四季のピアノがいつ誕生したか、お母さんは知らない？　ずっと前から調べてることなんだけど」

［セフィル］：「うーん、それに関してか。……すまないカホラ、それは私もよく分からないんだ」

［カホラ］：「……お母さんでも分からないか、言われれば当然のことなんだけど」

［セフィル］：「だが、それ以外のことで分かることがあるぞ」

［カホラ］：「何？」

［セフィル］：「カホラが今持っている、ジャスパーに関してだ」
［カホラ］：「ジャスパー？　そういえば、どんな力があるのか聞いてなかったわね」
［セフィル］：「言っていなかったが、ジャスパーはピアニストの４人にとってなかなか重要な力を秘めた宝玉なんだぞ」
［カホラ］：「まあ、四季のピアノの前で形を変えるあたり、ただの綺麗な宝石ってことはないと思っていたけど」
［セフィル］：「そういう雰囲気を感じただろう？」
［カホラ］：「ええ、どんな力があるの？」
［セフィル］：「カホラは、四季のピアノを弾いた時に自分の魔力を大きく消費したことを覚えているか？」
［カホラ］：「それはもちろん。吹雪が倒れるまで頑張って、私たちに自分の魔力を分け与えてくれたから、最後まで弾き終わることができたんだし」
［セフィル］：「そうだな。吹雪が頑張ってくれたおかげで、魔力の消費を抑えることができた。でも、その陰で同じくらいに頑張っていたのが、このジャスパーなんだよ」
［カホラ］：「ジャスパーが？」
［セフィル］：「私が忘れずに持って行けと言ったのは、その力を使わずにピアノを弾くことはとても困難だからだ」
［カホラ］：「私たちが無事に弾けたのは、ジャスパーのおかげってこと？」
［セフィル］：「そうだ、ハーモニクサーである吹雪とジャスパー、二つの力が合わさって初めてピアニストは自分の実力を発揮できるんだ。そのジャスパーの力だが、それは魔力の増加と魔力の抑制だ」
［カホラ］：「抑制？」
［セフィル］：「そう、抑制だ。何で抑制なの？　って顔をしているな」
［カホラ］：「増加だったらうなずけるけど、抑制？　私たちの魔力を抑えちゃうって逆効果になるんじゃ」

［セフィル］：「普通はそう考えるだろうな。だが、それが逆効果ではないんだ。むしろそれが大きく関係しているんだ」
［カホラ］：「その理由は？」
［セフィル］：「四季のピアノが魔力を放っていることは、二人とも知っているか？」
［カホラ］：「それはもちろん、ヒシヒシと肌で感じていたわ」
［セフィル］：「俺も、以前探索した時に感じました」
［カホラ］：「そのピアノが放つ魔力というのはなかなか強力でな、魔力に対する耐性をもたない者はそれに飲み込まれてしまうことがあるんだ。簡単に言うと、魔力の暴走の引き金になる可能性があるんだ」
［カホラ］：「魔力の暴走……」
［吹雪］：「……」
俺が、以前起こしかけたものと同じものだろうか？

カホラルート・リテヌート（16）

［セフィル］：「魔力の暴走は、カホラも知っているだろう？」
［カホラ］：「ええ、自分の力のコントロールが効かなくなって、最悪の場合、死ぬことすらあるとても危険な状態のことでしょう？」
［セフィル］：「そうだ、それを抑えるためのジャスパーなんだ」
［カホラ］：「つまり、ジャスパーがなければ、私たちは魔力の暴走を起こしていたかもしれないってこと？」
［セフィル］：「今回のメンバーなら、何事もなかったかもしれないが、それでも多少の危険は付き纏っていたかもしれないな。一番引き起こす可能性が高まるのは、魔力が少ない者だ。体内に魔力を留めておけなくなるからだ」
［カホラ］：「そうなの」
［セフィル］：「魔力の許容量を超える前に、ジャスパーがその魔力を吸収、その吸収した魔力を、なくなり始めた者に自動で分けてくれるんだ」
［カホラ］：「何だかリサイクルみたいなシステムね」
［セフィル］：「そんな感じかもしれないな、要は使う前に出てきたその者の魔力を戻してあげているようなものだからな。一番その例えがしっくりくるだろう」
［カホラ］：「なるほどね。じゃあ、ジャスパーがピアノに合わせた形に変化したのも、それに当てはまってくるの？」
［セフィル］：「その通りだ、四季のピアノはそれぞれ形が異なるからな。それに対応した宝玉に変わっているんだ。カホラが持っているジャスパーが斑のような形に変化しているのは、風花のピアノに対応したものになっているからなんだ」
［カホラ］：「これね」
先輩は小さな袋からジャスパーを取り出した。
［カホラ］：「ただ綺麗なだけじゃなくて、そんな力も込められて

いたのね」
［セフィル］：「そうだ、ただのアクセサリーではないからな。褒めてあげてくれ」
［カホラ］：「その魔力の抑制は、四季のピアノの時にしか発動しないの？」
［セフィル］：「元々、四季のピアノに対応した宝玉だからな。滅多なことがない限りは、発動はしないかもしれないな。そもそもそんな状況に陥ることはなかなかないと思うが」
［カホラ］：「それもそうね、なら問題ないか。これはレポートにまとめないと」
俺は先輩にうなずいて返した。
［セフィル］：「他に聞きたいことはないか？　結構持っていることを言い尽くした感はあるが」
［カホラ］：「私たちが知らない情報を結構もらえたから、満足してるわ。ありがとう、お母さん」
［セフィル］：「そうか、私はカホラの役に立てたか？」
［カホラ］：「ええ、感謝してるわ」
［セフィル］：「そうか。……ふふふふ」
［カホラ］：「その笑い方怖いわよ？　お母さん」
［セフィル］：「おっと、表に出してしまったか。心の中で笑うとしよう」
［カホラ］：「それはそれで、ちょっと……」
［セフィル］：「じゃあ、今日はこんなところか。明日、さっき言った通りに頼むぞ」
［カホラ］：「ええ、分かったわ。あ、ピアリーに関して思い出したら教えてちょうだいね？」
［セフィル］：「ああ、分かっている」
［カホラ］：「戻りましょうか？　吹雪。早く情報をまとめたいし」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「じゃあお母さん、お休みなさい」

［セフィル］：「ああ、お休み」
［吹雪］：「ありがとうございました」
……。

カホラルート・リテヌート（１６）（後書き）

今回で２００話到達！！　これからも我が作品をどうかよろしくお願いします

カホラルート・リテヌート（17）

［場所：社会科室］

［カホラ］：「これで良しっと」

先輩は、宣言した通り、帰ってすぐに自分のノートに情報をまとめた。

［吹雪］：「また一歩、謎の解明に近づけましたね」

［カホラ］：「そうね、まさかこんなに早く次のストーンサークルの調査ができるなんて思わなかったわ。嬉しい誤算ね」

［吹雪］：「教えてもらえなかったら、ヒントを頼りにぐるぐる回りっぱなしだったかもしれませんからね」

［カホラ］：「その様子、容易に想像できるわね」

［吹雪］：「よかったです」

［カホラ］：「後はジャスパーの秘めた力、正直、ちょっと舐めてたわ。この小さい宝玉にそんな力があったなんて」

［吹雪］：「何か力があるんだろうなっては思いましたけど、そこまで重要なものだとは思ってませんでしたね」

［カホラ］：「そうね、縁の下の力持ちだったのね、このジャスパーは」

［吹雪］：「正直、俺もほしいです、ジャスパー」

［カホラ］：「ふふ、あげないからね？　でも、吹雪だったらどんな形に変化してたんでしょうね？　やっぱり私と同じ斑になってたのかしら？」

［吹雪］：「いや、名前で変化するわけではないですから、その担当するピアノによるんじゃないですか？」

［カホラ］：「だとしたら、吹雪は斑ね。それしかないでしょう」

［吹雪］：「……な、何故ですか？」

［カホラ］：「吹雪って名前なのに、冬を担当しないのはおかしい

もの」
［吹雪］：「おかしいって先輩……俺は別になりたくてこの名前になったわけじゃあ……」
［カホラ］：「だって嫌いではないでしょう？　吹雪って名前は吹雪にとっても合ってると思うわよ。そうよね？　舞羽」
［舞羽］：「え？　何ですか？」
どうしてそこで舞羽に話を振ったのだろうか……。
［カホラ］：「吹雪の名前、吹雪に合ってるわよね？」
［舞羽］：「あ、はい。吹雪くんは吹雪って名前じゃないと吹雪くんだって分からないですね。吹雪って名前以外の吹雪くんは吹雪くんじゃないって思います」
［吹雪］：「……今の台詞の中で何回俺の名前を出したんだ？　舞羽」
［舞羽］：「うーんと、６回？」
［吹雪］：「別に数えなくてもいいけど、無理して話を合わせることはないから」
［舞羽］：「無理なんてしてないよ？　私はいつでも本当のこと言ってるよ」
［吹雪］：「まあ、ありがとよ」
［カホラ］：「慕われてるわね、吹雪」
［舞羽］：「あの、それで用件は何でしょうか？　カホラ先輩」
［カホラ］：「あ、ごめん。今のでオッケーよ、自分のしたいことしてちょうだい」
［舞羽］：「そ、そうですか？」
［カホラ］：「ええ、ありがとね」
［舞羽］：「はい、じゃあ失礼します」
舞羽は寝間着とタオルを持って社会科室を出て行った。どうやらシャワーを浴びに行くようだ。
［カホラ］：「……想像したの？　吹雪」
［吹雪］：「してませんよ！」

［カホラ］：「……まだ何を想像したのって聞いてないのに」
［吹雪］：「し、しまった……！？」
［カホラ］：「ふふ、墓穴を掘ったわね、吹雪」
［吹雪］：「や、やられた……」
その後も、終始先輩はご機嫌な様子だった。ようやく軌道に乗ってきた調査活動、このままどんどん謎を解いていきたいところだ。

カホラルート・プレスト（1）

12月23日（木曜日）

練習に精を出し、昼食を済ませ――。

［カホラ］：「よし、準備完了」

［吹雪］：「じゃあ行きましょうか」

［カホラ］：「そうね」

……。

［場所：学園長室］

コンコン。

［カホラ］：「お母さん、準備できたわよ」

［セフィル］：「ああ、入って来てくれ」

［カホラ］：「入りましょうか」

［吹雪］：「はい。失礼します」

俺たちは学園長室に入らせてもらう。

［セフィル］：「んむ、んむ……」

中に入ると、学園長はもぐもぐとチョコビスケットをかじっていた。

［セフィル］：「やっぱり美味いな、このビスケットは」

［吹雪］：「あれって、以前先輩から食べさせてもらった」

［カホラ］：「ええ、同じものね。私たち親子は、みんなあれが大好きだから」

［セフィル］：「よし、じゃあ幸せを分けてあげよう」

学園長は俺たちに向かってそれを投げた。

［吹雪］：「おっと、ありがとうございます」

［カホラ］：「くれるのは嬉しいけど、そんなに食べて大丈夫なの？　お母さん」

［セフィル］：「まだそんなには食べてないぞ」
［カホラ］：「嘘ばっかり、ごみ箱にたくさんビスケットの袋が入ってるわよ」
［セフィル］：「これは……昨日食べたものだ」
［カホラ］：「だとしてもすごい量じゃないの。太っちゃうわよ？」
［セフィル］：「それは心配ない。今日はこれを食べる代わりに、昼ご飯を食べないことにしているからな」
［カホラ］：「体に悪すぎるわよ、それ」
［セフィル］：「ビスケットは炭水化物だから大丈夫だ」
［カホラ］：「何が大丈夫なのよ、ちゃんと三食しっかり食べないと結局は太っちゃうんだから」
［セフィル］：「とは言ってもこれが美味すぎるんだよ、どうにも手が止まらないんだ」
［カホラ］：「気持ちは分かるけど、ちゃんと食べないとダメ。仮にも学園長なんだから、みんなに認められる生活リズムを確立して」
［セフィル］：「厳しいな、カホラは。――ちょっと待っててくれ、もう少しで紅茶を飲み終えるからな」
［カホラ］：「私たちが来るまでに済ませておいてよ……」
［セフィル］：「はっはっは、心配しなくてもストーンサークルは逃げては行かないさ」
［カホラ］：「そういう問題じゃないんだけど……」
［吹雪］：「まあまあ、先輩」
［カホラ］：「そういえばお母さん、ピアリーのことは何か思い出した？」
［セフィル］：「うーん、それなんだが、昨日からずーっと考えてはみたんだが、まだ何も思い出せないでいないんだ。本当にどこかで聞いた覚えがあるはずなんだが……すまないな。今日も考えてみるつもりだ」
［カホラ］：「そう、分かったわ」
［セフィル］：「もう情報はまとめ終えたのか？」

［カホラ］：「ええ、昨日のうちに全部ノートに記したわ」
［セフィル］：「することが速いな。カホラは良い人材になるな」
［吹雪］：「俺も見習いたいです」
［カホラ］：「吹雪は見習う必要ないわよ、すでに仕事をちゃんとこなせているんだから」
［セフィル］：「そうだぞ？　よかったら私のマネージャーにならないか？　吹雪。今、腕の立つ人材を探しているところでな」
［吹雪］：「ええ！？　それはちょっと……」
［セフィル］：「嫌か？　悪いようにはしないぞ」
［吹雪］：「そ、そういう問題じゃなくてですね……」
突然そんなことを言われても、何て答えていいものか分からない。
［吹雪］：「気持ちは嬉しいんですけど、今は保留ってことで」
［セフィル］：「うーん、残念だ。まあ、気が変わったら言ってくれ。就職が決まらない時とかに来ても私はウェルカムだぞ」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます……」
突然話が現実味を帯びたな……。
……。

カホラルート・プレスト（2）

［セフィル］：「――よし、では行こうか」
［カホラ］：「ええ」
［吹雪］：「お願いします」
［セフィル］：「うむ、じゃあ二人とも目を閉じ、私の方に集まってくれ」
［カホラ］：「ええ。……」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「――エル・エルプリウス。……はっ！」
……。

［場所：風花のピアノ近辺］

［セフィル］：「よし、着いたぞ」
［吹雪］：「……本当だ」
目を開けると、青々とした自然の中にいた。
［セフィル］：「で、ストーンサークルがある場所だが。向こうにたくさんの木が見えてると思うが、そこに入口があるんだ。さあ、ついてくるんだ」
［カホラ］：「行きましょう、吹雪」
［吹雪］：「はい」
……。

カホラルート・プレスト（3）

［セフィル］：「一見普通の木に見えるかもしれないが、ここが入口だ。木と地面の隙間に空洞があるだろう」
［カホラ］：「本当だ、ちょうど人一人入れるくらいね」
［吹雪］：「よくピアリーはこれを見つけられましたね」
［カホラ］：「ひょっとしたらピアリーは、どこかでこの情報を手に入れていたのかしらね？　そうじゃなきゃ何の情報もないのにこんな場所を見つけられるものかしら？」
［吹雪］：「……それか、かなりの幸運の持ち主だったんでしょうか？」
たまたまこの木の近くで休憩してたとか……宝くじの1等が当たるくらい低い確率かもしれないが。
［カホラ］：「本当にそうだとしたら、相当おもしろいわね」
［吹雪］：「ですね」
［カホラ］：「普通にここから入っていいの？」
［セフィル］：「ああ、下まで滑っていけば、そこにストーンサークルがあるはずだ。心配いらないぞ」
［カホラ］：「よかった」
［セフィル］：「では、私は戻るとしよう。しっかりと調査するんだぞ。報告を待ってるからな」
［カホラ］：「ええ、お母さんも仕事頑張りなさいよ？」
［セフィル］：「もちろんだ、しっかり生活費を稼ぐさ」
［カホラ］：「生々しい表現しなくていいわよ」
［セフィル］：「とにかく、気を付けるんだぞ？」
［カホラ］：「ええ」
［吹雪］：「ありがとうございました」
［カホラ］：「では」
シュッと、学園長は目の前から消えた。

［カホラ］：「――よし、じゃあ早速行きましょうか。第二のストーンサークル調査に」
［吹雪］：「はい！」
気合いは十分入っている。しかし――。
［吹雪］：「今さらですけど、本当に入っていけるんでしょうか？　途中でハマったりしませんよね？」
［カホラ］：「だ、大丈夫じゃないかしら？　お母さんもそう言ってたし。危ないのは肥満体質の人だけだと思うわよ」
［吹雪］：「ですよね。……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「す、すみません。ちょっとだけ待ってもらってもいいですか？」
［カホラ］：「ええ、いいわよ。心の準備は必要だしね」
気合いは十分なんだが、ちょっと足が思うように動かない。正直言って、ちょっと怖い。ないとは思うんだが、思うんだけど、もし出られなくなったらってことを考えると……。
［吹雪］：「すいません、情けない姿を」
［カホラ］：「しょうがないわよ、私だって少し思ってるし」
［吹雪］：「あ、本当ですか？」
［カホラ］：「当たり前でしょう？　こんなに狭いんだし、本当に下に続いてるのか心配だもの」
［吹雪］：「先輩も思ってて、ちょっと安心しました」
［カホラ］：「それが普通の考えよ、大丈夫」
［吹雪］：「ちょっと気持ちが軽くなりました、ありがとうございます」
［カホラ］：「どういたしまして」
……今ならいけるかもしれない。
［吹雪］：「よし、もう大丈夫です。行きましょう」
［カホラ］：「ええ、いつまでもここに留まってるわけにもいかないし」

［吹雪］：「俺が先に行きます、先輩はその後に」
［カホラ］：「うん、分かったわ」
――よし、意を決して！
［吹雪］：「行くぞ！　それっ！」
俺は空洞の中に飛び込んだ。
……。

［吹雪］：「うおおおおっ！？」
俺は流れに身を任せてどんどん下に降りていく。……思ったより長いぞ
［吹雪］：「どこまで行くんだ～？」
しばらくして、出口と思える先が見えてきた。もう少しか？
――そして。
［吹雪］：「いてぇ～！」

［場所：地下空間］

吐き出されるように、俺は空洞から飛び出した。おー、よかった、どうにか空洞から出ることはできたようだな。
［カホラ］：「きゃあああああっ！？」
［吹雪］：「ん？　これは？」
先輩の声だな。先輩も空洞に飛び込んだのか？　……ん？　でも待てよ？　出口はここしかないんだよな？　すると、先輩が出てくるであろう場所は――。
［カホラ］：「きゃあああああっ！？」
［吹雪］：「せんぱ――うげえ！？」
当然俺がいる場所だよな。先輩は見事に俺の腰に滑り落ちてきた。
［カホラ］：「イタタ……あ、大丈夫？　吹雪？」
［吹雪］：「はい、大丈夫です……おおっ！」
［カホラ］：「ど、どうしたの？」
いかん、腰が……この年でぎっくり腰か？　しかし、我慢しなければ。男なら耐えてみせろ。
［吹雪］：「な、何でもないです。先輩のほうこそ、大丈夫ですか？」

［カホラ］：「うん、吹雪がクッションになってくれたおかげで、何ともないわ。ありがとう」
［吹雪］：「いえいえ、これくらい当然です」
先輩を守れただけよかったな。
［カホラ］：「あー先輩、そろそろ降りてもらってもいいですか？」
［吹雪］：「あ、ごめんなさい」
別に重くないから苦しくはないが、ずっと乗られていると俺がおかしいことになってくる。何がおかしくなるかは……言わないでおこう。
［吹雪］：「う、いてて……」
［カホラ］：「立てそう？」
［吹雪］：「はい、着地に失敗してケツを強打しちゃいまして」
［カホラ］：「大丈夫？　見ておいたほうが」
［吹雪］：「いえ、大丈夫です。ほっとけば痛みは引くと思いますから」
あれ？　何か前回も同じようなやり取りをしたような気がするな。

カホラルート・プレスト（5）

［吹雪］：「ご心配なく」
［カホラ］：「そう？　ならいいんだけど」
［吹雪］：「はい。――で、ストーンサークルなんですけど、……多分この目の前にあるものですよね？　きっと」
［カホラ］：「そうね、これに間違いないわね」
学園長の言うとおり、探す必要はないようだ。
［カホラ］：「こっちはこっちで大きいわね」
［吹雪］：「そうですね、圧倒されちゃいます」
［カホラ］：「今回は泉の中と違ってしっかり見れるから、情報が漏れる心配はなさそう」
どうやら先輩は、早く調べたくてうずうずしているようだ。
［カホラ］：「じゃあ、調査を始めましょうか」
［吹雪］：「はい、俺は何をするといいですか？」
［カホラ］：「吹雪には、ちょっとお願いがあるわ」
［吹雪］：「はい、何ですか？」
［カホラ］：「このストーンサークルが隠された部屋の中を調査してほしいの。この部屋は思ったより広いから、何か次の手掛かりになりそうなものがあるかもしれないから。その間に私は、ストーンサークルを調べるから」
［吹雪］：「分担作業ということですね」
［カホラ］：「そういうこと、効率よく調査をしていきましょう」
［吹雪］：「了解です」
［カホラ］：「じゃあ、開始しましょう」
［吹雪］：「はい！」
……。

カホラルート・プレスト（6）

さて、まずは壁面を見ていこう。よく情報が残されてる場所と言ったら壁面のはずだ。

［吹雪］：「うーん」

確かに先輩の言うとおり、なかなかに広い空間だな。出てきた入口は結構狭かったはずだが……入口とそれに続く空間はまた違うってことか。じゃあ、まずは向こうから見ていこう。

……。

［吹雪］：「うーん」

くまなくチェックしているつもりなんだが、目当てのものはなかなか見つからない。これだけ広いから、何かあってもおかしくはないと思うんだけど……。まあ、まだ半分しか見てないから、悲観するには早いか。最後まで見てから言ったほうがいいか。

［カホラ］：「……」

先輩は、真剣にノートを片手に調査を続けている。ここから見ると、まるで先輩がここのストーンサークルを作成しているみたいだ。俺も、負けてられないな。

［吹雪］：「続けるか」

気を取り直してもう半分の壁面を調べよう。

……。

［吹雪］：「あってもおかしくないはずなのに」

どうやら壁面には、情報らしい情報は見当たらなかった。現段階のことを先輩に伝えたほうがいいだろう。俺は先輩の元に一旦戻る。

［カホラ］：「あ、吹雪ー」

先輩がしきりに俺をこっちに呼んできた。何だろう？

［吹雪］：「どうしました？　先輩」

［カホラ］：「ううん、ちょっと中間報告をしようかと思って」

［吹雪］：「俺も同じことを考えてました」

［カホラ］：「本当？　ちょうどよかったわ。何か手がかりあった？」
［吹雪］：「ちゃんと確認したつもりなんですけど、今のところは何も」
［カホラ］：「そっか、そればっかりはしょうがないわよね」
［吹雪］：「後でもう一度確認してみます。先輩はどうですか？」
［カホラ］：「ええ、今のところ順調に情報は手に入れてるわ。基本的な構造は泉にあったものと同じね。ピアノの保護とか防腐とか」
［吹雪］：「模様の配置はどうでしたか？」
［カホラ］：「配置は結構違っていたわね。模様の数も、泉のものと違うようだったし。向こうとこっちでは、色々と違いがあるのかもしれないわ」
［吹雪］：「なるほど、そうですか」
［カホラ］：「吹雪は、次はどこを調べるつもり？」
［吹雪］：「壁面に情報がなかったので、次は地面のほうを見てみようと思います」
［カホラ］：「何かはあると思うんだけどね、私の堪では」
［吹雪］：「それを俺も信じてます。終わり次第、また戻ってきますね」
［カホラ］：「ええ、お願い」
［吹雪］：「じゃあ、行ってきます」
俺は目線を下にシフトする。
……。
……。
……。

カホラルート・プレスト（7）

［吹雪］：「これは、結構骨が折れるな……」
軍手とか箒とかを持って来ればよかった。地面は木屑や砂がところどころ散らばっていて見づらいところもあるから、それを除けなければ何が書いてあるのか見えないんだ。壁面を調べるよりも時間がかかるかもしれないな。
……。
［吹雪］：「うーん」
目ぼしいものはなかなか出てこない。ちょっとくらい出てきてくれてもいいと思うのに……。もう調べてない範囲はほとんどない。今俺が立っている場所くらいだ。もし手掛かりがあるとしたら、後はここくらいしかない。
［吹雪］：「あるかな……？」
俺は木屑を払って地面を調べる。
［吹雪］：「……。……ん？　何だ？」
砂を払った場所に、小さく英語のような文字が掘られている。ひょっとして、これは手掛かりか？　俺は地に足をついてその文字を眺めてみる。
［吹雪］：「誰かの名前か？」
はっきりとした名前ではなく、イニシャルのみが記されている。掘られているその英語は……N・P。
……Pってことは、ひょっとしてこれを掘ったのはピアリーか？
ここを発見した時に残したものだろうか？　でも、情報らしい情報はないようだな。あるのはこのイニシャルとここに来たであろう日付のみ。これは後で先輩にも見てもらおう。とりあえず、残った部分も見てみるか。
……。
［吹雪］：「先輩」

［カホラ］：「あ、終わった？　吹雪」
［吹雪］：「はい、先輩も終わりましたか？」
［カホラ］：「ええ、バッチリよ」
ノートを広げながら笑顔を見せてくれる。
［カホラ］：「吹雪は、何か見つけた？」
［吹雪］：「正直、情報らしい情報はなかったんですけど、一つだけ名前のようなものが掘ってあるのを見つけました。ちょっと見てもらってもいいですか？」
［カホラ］：「ええ、ひょっとしてその名前ってピアリーのもの？」
［吹雪］：「俺もそうだと思うんですけど、確信を突く証拠がないので何とも言えないんですけど……」
［カホラ］：「そっか」
［吹雪］：「こっちです」
……。

［カホラ］：「N・P。確かにこのPはピアリーのPかもしれないわね。でも、そうなると頭のNは何を表しているのかしら？」
［吹雪］：「単純に考えたら、ピアリーの名前ですよね」
［カホラ］：「そうね。でも、資料にはピアリーとしか書かれてないから、名字なのか名前なのかはっきりしないのよね。だから、一概にそうとは言えないのよね」
［吹雪］：「うーん、だとすると別人という可能性も出てきますね」
［カホラ］：「私はピアリーが有力だとは思うんだけどね。四季のピアノを調べようと思う人自体あまり多くないから」
［吹雪］：「俺もそんな気がします。……とりあえず、この情報は取っておきますか」
［カホラ］：「そうね、何かを紐解くカギになるかもしれないし」
もらえる情報はもらっておこう。
［カホラ］：「そろそろ出ましょうか」
［吹雪］：「そうですね」
俺たちは出口に向かって歩き出す……はずだったんだが。
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
どうやら先輩も同じことを思ったようだ。
［カホラ］：「ねえ、吹雪」
［吹雪］：「はい、何ですか？」
［カホラ］：「出口って、どこかしら？」
［吹雪］：「あはは、どこでしょうね？」
［カホラ］：「そうよね、吹雪も初めて来たんだから、分かるわけないわよね」
［吹雪］：「……どうしましょう？」
［カホラ］：「ないわけはないはずよね。ここに誰もいないってこ

とは、みんなここから出て行っていることだろうし」
［吹雪］：「ですよね。じゃあ出口は必ずありますよね」
［カホラ］：「どうしてお母さんは、出口の情報をくれなかったのかしら？　もう」
［吹雪］：「忘れちゃってたのかもしれないですね」
［カホラ］：「大事な情報を言い忘れるなんて、もっとしっかりしてほしいわ」
［吹雪］：「とりあえず、歩いてみましょうか？　本当に最悪の場合は、さっききた入口を登っていけばいいですし」
［カホラ］：「吹雪は登れるかもしれないけど、私は登れるのかしら？　意外と急じゃなかった？　あそこ」
［吹雪］：「その時は、俺が先輩を押しながら行きますよ」
［カホラ］：「吹雪？　私今日スカートよ？　見えちゃうんじゃない？」
［吹雪］：「あ……。……その時は、目をつぶりながらすれば」
［カホラ］：「それはちょっと無謀じゃないかしら？　……まあ、最終手段ってことね」
［吹雪］：「とにかく、出口があるか探してみましょう」
きっと、きっと出口があるはずだ。
……。

で、探してみた結果――。
［カホラ］：「多分、ここよね」
［吹雪］：「ここ以外、外につながっていそうな場所はありませんし」
見つけたのは、入口から来た場所と同じような、小さい抜け穴。なだらかな坂になっているところを見ると、地上につながっている可能性がある。しかし――。
［吹雪］：「狭いな！」
［カホラ］：「良いツッコミね、吹雪」
［吹雪］：「ありがとうございます。どうします？　進んでみますか？　ひょっとしたら、待ってるうちに学園長が迎えに来てくれるかもしれないし」
［カホラ］：「確かに行きだけ送って帰りは歩いてこいって言ってなかったからその可能性はあるわね。でも、来なかったらってことを考えると、アクションを起こしたほうがいいって可能性もあるわ」
［吹雪］：「確実ではありませんからね。やれるだけのことはやりましょう」
［カホラ］：「間違っても戻ればいいしね、行きましょう。吹雪」
［吹雪］：「はい。じゃあ、俺が先頭行きます、先輩は俺の後ろに」
［カホラ］：「ええ、分かったわ」
間違ってスカートの中が見えたりしたら大変だからな。
……。

カホラルート・プレスト（１０）

［場所：地下空洞］

［吹雪］：「やっぱり狭いですね、この道も」
［カホラ］：「そうね。それに、結構先が流そう」
［吹雪］：「先の道が真っ暗ですからね、気を付けていかないと。この狭い道も、人に気付かれないようにするための工夫なんですかね？」
［カホラ］：「かもしれないわね。でも、ちょっとこちら側からすると厳しい道かも」
［吹雪］：「早く出れるように頑張りましょう」
［カホラ］：「ええ。でも、頭とかぶつけないように気を付けながらね」
［吹雪］：「そうですね……いてっ！」
飛び出した上部の突起に頭をぶつけてしまった。
［カホラ］：「だ、大丈夫？　吹雪」
［吹雪］：「は、はい。すいません、言ったそばから」
［カホラ］：「しょうがないわよ、暗いんだから。注意していきましょう」
［吹雪］：「はい」
慎重に、ちょっとずつゴールを目指したほうがよさそうだ。
［吹雪］：「今思ったんですけど、この抜け穴はさっきのものとは少し違うようですね」
［カホラ］：「分かるの？」
［吹雪］：「今頭をぶつけた突起が、岩みたいに固かったです」
［カホラ］：「そういえば、全然気にしてなかったわね」
先輩は上の部分をちょっと撫でた。
［カホラ］：「確かに固いわね、本当に岩か何かなのかしら？」

［吹雪］：「さっき滑ってきた入口には、突っかかりはなかったですからね」

［カホラ］：「そうね、材質は違うかもしれないわね。できれば、出口は階段とかにしてほしかったけど」

［吹雪］：「楽をするなってメッセージ何ですかね？　先人たちの」

［カホラ］：「なかなか厳しいわね、言うとおりにしましょうか」

［吹雪］：「そうですね」

……。

カホラルート・プレスト（11）

［吹雪］：「はあ……なかなか見えてこないですね」
［カホラ］：「相当な距離を下ってきてたんでしょうね。長丁場になるかも」
［吹雪］：「スタミナ勝負ってことですか？」
［カホラ］：「そうかもね。ちょっと休憩しましょうか、この辺でスタミナを回復しておくのが適作だと思うわ」
［吹雪］：「そうしましょうか」
幸い座って休めるくらいのスペースはある。
［カホラ］：「よいしょっと」
スカートを直して先輩は腰を下ろした。
［吹雪］：「どのくらい進んで来たんですかね？　俺たち」
［カホラ］：「結構歩いた気がするんだけどね、どの辺にいるんだろうね？」
［吹雪］：「中間地点くらいまで来てたら嬉しいんですけどね」
［カホラ］：「そうね、とりあえず日が暮れるまでには戻れるといいわね」
［吹雪］：「そうですね」
［カホラ］：「――アレを食べましょう？　さっきお母さんからもらったもの」
［吹雪］：「チョコビスケットですか？」
［カホラ］：「うん、糖分を摂っておくと後半も踏ん張れると思うから」
［吹雪］：「そうしましょうか、お茶がないのは残念ですけど」
［カホラ］：「ごめんね、水しか持ってきてないわ」
［吹雪］：「いやいや、全然気にしなくていいですよ。こんなことになるとは思ってませんでしたし」
［カホラ］：「……これを見越して、お母さんはビスケットをくれ

た、何てことはないわよね？」
［吹雪］：「それはいくらなんでも……ないと思いますよ？」
［カホラ］：「はっきり断言させないあたり、お母さんって感じがするわね」
［吹雪］：「申し訳ないです」
［カホラ］：「吹雪は悪くないわよ、悪いのはお母さんだから。……帰ったらお母さんに聞いてみましょう」
本当のところはどうなんだろうな。
［カホラ］：「食べましょう。せっかくもらったわけだし」
［吹雪］：「はい、いただきます」
袋を開けて一口かじった。
［カホラ］：「やっぱり美味しいですね」
甘さ控えめで、くどくないから食べやすい。
［カホラ］：「吹雪も、この美味しさに引き込むことができたみたいね」
［吹雪］：「引き込まれてしまったみたいですね」
［カホラ］：「これからもチョコビスケットをよろしくね？」
［吹雪］：「あれ？　前回も同じような宣伝をされたような気が」
［カホラ］：「私も思ったわ。でも、私は宣伝をしなくちゃいけないから、嫌がらないで聞いてね」
［吹雪］：「先輩の使命だったんですね。チョコビスケットの美味しさを伝えることは」
［カホラ］：「なるべく多くの人に食べてほしいって気持ちはあるわね」
［吹雪］：「だとしたら、舞羽たちに食べさせてあげたらいいと思いますよ？　多分喜んで食べると思いますし、すぐに美味しさに気付くと思います」
［カホラ］：「仲間内から攻めていくのはアリね、吹雪、良いこと言ったわ。そうしましょう」
［吹雪］：「あ、採用ですか？」

［カホラ］：「ええ、みんなに食べさせてあげましょう。そして、美味しさを他の人に伝えてもらう、素晴らしいプランね」
［吹雪］：「近い未来、ブームになってるかもしれないですね」
［カホラ］：「だと嬉しいわね」
［吹雪］：「あはは」
［カホラ］：「ふふ」
お互いに顔を合わせて笑いあう。

カホラルート・プレスト（12）

［カホラ］：「……ありがとね、吹雪」
［吹雪］：「どうしたんですか？　急に」
［カホラ］：「普段思ってることを口にしただけよ？」
［吹雪］：「そんな、俺はやりたいことをやってるだけですよ」
嫌々やっている気は全くない。
［吹雪］：「むしろ付き合わせてもらえて、感謝してます」
［カホラ］：「私も、付き合ってもらえてすごく感謝してるわ。多分、ここまであきらめないでやり続けていられるのは吹雪のおかげだと思うの。ここ数日、吹雪と一緒に探索や調査をやってきたけど、今まで味わったことのない楽しさを覚えたわ。近年では一番って言ってもいいかもしれない、その楽しさをくれたのは他の誰でもない、吹雪だと私は思ってるの」
［吹雪］：「俺が、ですか？」
［カホラ］：「ええ、吹雪じゃなかったら、きっとここまで調査を楽しいとは思えなかったはずよ。何て表現したらいいか分からないけど、多分私たちは、似た者同士なんだと思うわ」
［吹雪］：「似た者同士か、悪い響きじゃないですね」
先輩と似ているって表現してもらえると、誇らしさを感じる。
［カホラ］：「前にも言ったけど、パートナーが吹雪で本当に良かったわ。ありがとう」
［吹雪］：「いえ、俺のほうこそ――」
そうか、今ので気付くことができたぞ。というか、確信することができた。最近、先輩を見る目が以前と少し違う理由は、きっとこれに違いない。
［カホラ］：「――ごちそうさま。さて、そろそろ行きましょうか」
［吹雪］：「はい、出口目指して再出発ですね」
［カホラ］：「ええ、頑張りましょうー！」

［吹雪］：「おー！」

……。

カホラルート・プレスト（13）

［吹雪］：「はあ、はあ……」
［カホラ］：「はあ、はあ……」
再出発して15分ほど経っただろうか？　まだ、目線の先に光は見えてこない。
［吹雪］：「坂がちょっと急になってきましたね」
［カホラ］：「そうね。出口が近くなってきてる証拠かしら？」
［吹雪］：「だとしたら、これを登り切れば出口があるかもしれない？」
［カホラ］：「そうだと思いたいんだけど」
［吹雪］：「俺もです。下ってきた時と同じくらいの距離は進んだと思いますし」
［カホラ］：「これで行き止まりとか言われたら、泣いちゃうわよ？　私」
［吹雪］：「そ、それは考えない方向で行きましょう」
ストーンサークルのあった場所で、そんなふざけたことをする人はいないと信じよう。
［吹雪］：「とにかく、進んでみましょう」
［カホラ］：「ええ」
そんな時だった。
［カホラ］：「――あっ！？」
［吹雪］：「どうしました？　先輩」
［カホラ］：「やっちゃったわ……スカートが何かに引っ掛かったみたい」
［吹雪］：「ええ～？」
［カホラ］：「ん……取れないわ。どうしよう？　下手に動くと破れちゃいそうだし」
［吹雪］：「それは、ヤバいですね」

［カホラ］：「ん……やっぱりダメだわ。手が届かない」
［吹雪］：「何か良い方法は？」
［カホラ］：「これは、吹雪しかないわね」
［吹雪］：「へ？」
［カホラ］：「私の代わりに、スカートの引っ掛かりを取ってちょうだい？」
［吹雪］：「ええ～！？　お、俺がですか？」
［カホラ］：「他に頼れる人もいないし、お願いよ。力任せに引っ張ったら絶対に破けちゃうし、後ろに回り込んで、どうなってるか見てくれないかしら？」
［吹雪］：「で、でもそんなことしたら、先輩のスカートの中が見えちゃいますよ？」
［カホラ］：「この際それは仕方ないわ、ちょっとくらいなら我慢するわ。吹雪は翔とは違うって知ってるし」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［カホラ］：「でも、がん見はしちゃダメよ？　恥ずかしいことには変わりないんだから」
［吹雪］：「そ、それはもちろんです！」
［カホラ］：「じゃあ、向きを変えてこっちに来て」
［吹雪］：「分かりました」
体を逆向きにし、先輩の方へと向かう。

カホラルート・プレスト（１４）

［カホラ］：「私が大勢を低くするから、その間に後ろに回り込んで」
［吹雪］：「分かりました」
［カホラ］：「……」
先輩は身を縮めて俺が通れるくらいのスペースを作ってくれた。その間に、俺は素早く後ろに回る。体は、まだ背中合わせの状態。平静を保つために、一度深呼吸をしよう。
［吹雪］：「スーハースーハー……」
［カホラ］：「べ、別に緊張しなくてもいいのよ？」
［吹雪］：「気遣い、ありがとうございます。……じゃあ、向き直りますね」
［カホラ］：「ええ、よろしく」
俺はゆっくりと先輩の方に向き直る。
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……な、何かした？」
［吹雪］：「い、いえ、何でもないですよ？」
［カホラ］：「どうして疑問形なの？」
［吹雪］：「いや、大丈夫です」
［カホラ］：「な、ならいいけど」
目線の先には先輩のスカート……と、ちょっとだけ覗く中の下着があった。何だろう、完全に丸見えじゃないのは良かったんだが、逆にほんのちょっとだけ見えてるのも、それはそれでヤバい気がするのは俺だけか？　いくら見ないように心掛けるとは言っても、どうしても目線がそっちに向いてしまう。悲しき男の性だ。だ、ダメだ、考えてはいかん。まず、どこにスカートが挟まってるのか確認しないと。
［カホラ］：「どこに引っ掛かってるか、分かった？」

［吹雪］：「い、今見てみます」
顔を少し近づけて、ポイントを探す。よし、目線が上になったから下着も見えなくなったぞ。これなら少し探しやすい。
［カホラ］：「右側だと思うんだけど」
［吹雪］：「右側……あ、見つけた」
細く尖った岩のような部分にスカートが刺さりこんでいる。これがきっと原因だろう。もう少し力を入れていたら、音を立てて裂けていたかもしれない。
［吹雪］：「先輩、見つけました」
［カホラ］：「本当？　じゃあ、取ってちょうだい」
［吹雪］：「分かりました。すいません、ちょっとスカートに触りますね」
［カホラ］：「ええ」
［吹雪］：「スーハースーハー……」
［カホラ］：「ほ、本当に大丈夫？　吹雪」
［吹雪］：「大丈夫です、ご心配なく」
［カホラ］：「……若干心配ね」
呼吸と精神を安定させて、いざ！　……右手で慎重に尖りからスカートを外していく。そうすると、嫌が応にもスカートは上に捲り上がってきて……。
［吹雪］：「おお……！」
いかん、声に出てしまった。落ち着け、俺、大丈夫だ、ちょっと下着が見えただけだ。
［吹雪］：「後少し、後少し……」
そして――。
［吹雪］：「やった、先輩、取れました」
［カホラ］：「本当？　――あ、本当だ、動けるわ」
自由に動けるようになったことを確認した。
［吹雪］：「じゃ、じゃあ俺は前に戻りますので」
［カホラ］：「ええ、ありがとね？　吹雪」

［吹雪］：「いえ、こちらこそ」
［カホラ］：「……それはスカートの中を見せてくれてありがとうってことかしら？」
［吹雪］：「い、いやいやいやいやいや、そ、そんなことは全く考えてないですと言いたいです」
［カホラ］：「あ、慌てすぎよ吹雪。大丈夫、怒ってるわけじゃないから」
［吹雪］：「本当ですか？」
［カホラ］：「ええ、頼んだのは私なんだから。これでチャラってことにしてもらってもいいかしら？」
［吹雪］：「は、はい。構わないです」
［カホラ］：「さあ、前どうぞ？」
［吹雪］：「失礼します」
さっきと同じ要領で俺は再び先頭に戻る。
［吹雪］：「あ、小さい穴が開いてるかもしれないので、後で確認してください」
［カホラ］：「ええ、分かったわ」
大きなハプニングだったが、これでまた前に進めるな。しかし、あそこまで取り乱してしまうとは、別に女性の下着を見るのは初めてのことじゃないのに、やっぱり相手が先輩だからだろうか？　見えてしまったストライプの柄は、しばらく頭から離れそうにない。
……。
……。

カホラルート・プレスト（15）

［吹雪］：「せ、先輩、あの光って？」
［カホラ］：「――ひょっとして、出口じゃない？」
［吹雪］：「行きましょう」
［カホラ］：「ええ」
俺たちは喜び勇んで光を目指す。
［吹雪］：「この上に、地上があるみたいですね」
［カホラ］：「登りましょう」
［吹雪］：「ふっ。……出れた！　先輩、俺につかまってください」
［カホラ］：「うん、よいっしょ！」

［場所：風花のピアノ近辺］

ついに、抜け穴を脱出できた。相当長い時間動き回っていたのだろう、外はすっかりオレンジ色に変わっていた。
［カホラ］：「よかったー、ちゃんと地上につながっていて。行き止まりじゃなくて本当によかった」
［吹雪］：「本当ですね、……あれ？　よく見たらここって」
［カホラ］：「私も、見覚えがあるわ。ていうか、私たちは今、この木から出てきたよね？」
［吹雪］：「見間違いじゃないのなら、そうだと思います」
［カホラ］：「この木って、あれよね？　私たちが最初に飛び込んでいったところよね？」
［吹雪］：「だと思います」
［カホラ］：「……出口もここにつながっていたのね」
［吹雪］：「全然予想してませんでした」
［カホラ］：「途中から材質が変わっていたような感じはしたけど、その理由はこれだったってことね」

［吹雪］：「抜け穴が細かった理由も、これで納得がいきました」
［カホラ］：「――とにかく、色々あったけど、戻ってこれてよかったわー」
［セフィル］：「うんうん、よく頑張ったな、二人とも」
［カホラ］：「え？」
［吹雪］：「おわぁ！？」
［セフィル］：「何だ？　そんなにびっくりして？　リアクションの研究でもしてるのか？」
［吹雪］：「いえ、そんなつもりはないですけど」
［セフィル］：「ん？　何だか二人とも大分汚れているようだな」
［カホラ］：「当たり前よ、ずっと這って移動してたんだから。というかお母さん、どうして出口のことを教えてってくれなかったのよ？　予め教えてくれていれば、もう少し対処の仕様もあったのに」
［セフィル］：「いや、ついうっかり言うのを忘れてしまってな。学園に戻ってきた時にしまったって思ったんだが、二人ならきっと気付くだろうと思って、あえて伝えないことにしたんだ」
［カホラ］：「それは伝えてちょうだいよ、それか早めに迎えに来てくれるとかしてよ。別に自力で帰りたいなんて言った覚えはないし」
［セフィル］：「まあまあ、そう言わないでくれ。次からはそういうことがないように気を付けるから」
［カホラ］：「……後でペナルティを科させてもらうから」
［セフィル］：「あーなるべく、リスクが少ないもので頼む」
［カホラ］：「どうでしょうね？」
［セフィル］：「そ、それより、調査のほうはどうだったんだ？　しっかり情報を得たのか？」
［カホラ］：「ええ、バッチリよ。後でまとめて教えるわ」
［セフィル］：「それは楽しみだ。よし、とにかく戻るか、シャワーでも浴びてさっぱりするといい」
［カホラ］：「そうするわ」

［吹雪］：「疲れた……」
［セフィル］：「さあ、行くぞ」
……。

カホラルート・プレスト（16）

［場所：学園長室］

［カホラ］：「お母さん、入るわよ」
［吹雪］：「失礼します」
今日二回目の、学園長室の訪問だ。
［セフィル］：「待っていたぞ、とりあえず座るといい」
［カホラ］：「じゃあ、遠慮なく」
お客様用の椅子に腰を下ろした。学園長も向かい側のほうに腰を下ろす。
［カホラ］：「お母さんは、魔法陣のことはよく知ってるはずよね」
［セフィル］：「もちろんだ、学園長だから、それなりの知識は豊富なはずだ」
［カホラ］：「じゃあ、模様に関しての説明は省いても問題ないわね。とりあえずは、これを見てちょうだい」
先輩は、学園長の前に二枚の用紙を差し出した。以前俺に見せてくれたものと先程摂ってきた情報の一部だ。
［カホラ］：「左が泉に隠されていたもので、右が地下に隠されていたものよ。保護魔法が集中的にかけられているわ」
［セフィル］：「うむ、そのようだな」
［カホラ］：「基本的には同じような構成ではあるんだけど、微妙に模様の数が違うのは、それぞれ耐性が異なっているからかしら？」
［セフィル］：「そう考えるのが妥当だろうな。ピアノには意思が宿っている、いくら似ていると言っても微妙な変化が出てもおかしくはないだろう」
［カホラ］：「じゃあ、そのような感じでまとめさせてもらうわ。後、お母さんに聞きたいことがあるのよ」
［セフィル］：「何だ？　遠慮なく言ってみるといい」

［カホラ］：「魔法陣の右端に小さく文字が彫られているのが分かるかしら？」
［セフィル］：「右端……これのことか？」
［カホラ］：「ええ、何かの記号のように見えるんだけど、これが何を表しているのか、お母さんは知らないかしら？」
［セフィル］：「うーん、確かにあまり見かけない形のものだな」
［カホラ］：「どちらのストーンサークルにも存在していたわ。何かの手掛かりにならないかなって思うんだけど」
［セフィル］：「うーん……私も初めてみる記号だな。ひょっとしたら、ストーンサークルを作った者がオリジナルで編み出した物、という可能性もあるかもしれないぞ」
［カホラ］：「言語の原点みたいな可能性は？」
［セフィル］：「それも無きにしも非ずだな。正直、私には判断しかねるから、図書館の先生に聞いてみるのが一番いいと思うぞ。ここで下手なことを言って混乱を招くのは避けたいからな」
［カホラ］：「そうね、分かったわ」
［セフィル］：「他には、何かあったか？」
［吹雪］：「はい、次は俺が。これを見てください」
俺はさっき見つけた情報を、学園長に見せた。
［吹雪］：「カホラ先輩と同時進行で、ストーンサークルの周りを調べていたんですが、その中に、この文字を見つけました」
［セフィル］：「これは、イニシャルだな」
［吹雪］：「はい。Ｎ・Ｐと書かれてると思うんですが、これを記したのは、以前名前を挙げたピアリーじゃないかって思うんです。四季のピアノについてここまで調べた人物は、ピアリーくらいしか思いつかないので」
［セフィル］：「確かにその可能性は高そうだな。しかし、そうなるとＮの文字がどうしても気になってくるな」
［吹雪］：「俺たちもそう思ってるんですけど、それがよく分からなくて」

［セフィル］：「N、か。……ピアリー、ピアリー。ん？」
［カホラ］：「どうしたの？　お母さん」
［セフィル］：「いや、何かがここまで来てるんだが……なかなか出てこなくてな」
［カホラ］：「ひょっとして、ピアリーに関して？」
［セフィル］：「かもしれないんだが……うーん」
［カホラ］：「思い出して、頭を柔らかくして思い出して！」
［セフィル］：「うーん。……ピアリー。……、……、……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「学園長？」
［セフィル］：「……！　そうだ、思い出したぞ！」
学園長はそう言うと、立ち上がって棚をごそごそと探り始めた。

カホラルート・プレスト（17）

［カホラ］：「わ、分かったの？　お母さん」
［セフィル］：「おそらくな、確かにこの辺に卒業アルバムがあったはず……あった、これだ」
一冊の分厚い本を手に取って、こっちに戻ってきた。
［セフィル］：「これは、60年以上前に卒業していった二人の先輩たちだ。そして、その中にいる、この人物を見てくれ」
学園長が指差した一人の男性、普通の一般学生のように見えるが。
［セフィル］：「名前を見てくれ」
［カホラ］：「名前。――ネレス・P……！？　ひょっとして、この人」
［セフィル］：「ようやく点と点をつなげることができた。二人が注目していた学者は、この人物に違いないだろう。彼もまた、この学園の卒業生だったということだ」
［カホラ］：「――そっか、以前探しても見つからなかったのは、Pとしか記されてなかったからなのね」
［吹雪］：「この島を問題なく行き来できたのも、この島出身だからってことか」
［カホラ］：「ピアリーは名前ではなかったというわけね」
［セフィル］：「私が、前学園長から四季のピアノの情報を伝えられた時に、ネレスという人物の名前がよく挙げられていたんだ。ピアノについて、一番奥底まで調べた人物だと。その資料は実際に見せてもらったことがあるんだが、その時に一度だけ、前学園長にネレスのフルネームを教えてもらったんだ。それが、二人が注目を置いていたピアリーだったんだ」
［カホラ］：「だから、ピアリーって言われてもピンとこなかったのね」
［セフィル］：「私はネレスという名前で教えられていたのでな。

どこかで聞いたことがあると思っていたんだが、ようやく思い出すことができた」

［吹雪］：「学園長たちの間でも、ピアリーの資料の評価は高いんですね」

［セフィル］：「そうだな。この島を調べようとする学者は、ピアノのことを調べるのではなく、この島の気候の変わり方などを調べるケースが多いんだ。だから、歴史について調べようと思い立つ者はなかなかいなくてな、その数少ない学者で良い情報を私たちに与えてくれたのがネレスだったんだ。この島出身ということもあって、ずっと気になっていたのかもしれないな」

［カホラ］：「言われれば、納得のいく話ね」

［吹雪］：「そうですね」

［カホラ］：「ん？　だとすると、ネレスっていう名前で出した資料も残っているの？」

［セフィル］：「そうだな。私が主に読んだ資料はそっちのほうだったからな、おそらく、まだ古書室に残っていると思うぞ」

［カホラ］：「今度読んでみましょう、何か良い情報があるかもしれない」

［吹雪］：「そうですね」

［セフィル］：「せっかくだ、四季のピアノについて調べた人物の資料をいくつか提供しよう。役に立つかもしれない」

［カホラ］：「ありがたくいただいておくわ」

［セフィル］：「夜の練習が終わったら渡しに行く。それまで待っていてくれ」

［カホラ］：「よろしくね」

カホラルート・プレスト（18）

［セフィル］：「ああ、これで以上か？　報告は」
［カホラ］：「そうね、後お母さんにしなければいけないのは……ペナルティね」
［セフィル］：「む、覚えていたか……」
［カホラ］：「私、記憶力はいいからね？　ふふ」
今までにあまり見たことのない、先輩の邪悪な微笑みだった。
［セフィル］：「分かった、私も学園で一番偉い人間だ。腹を括ろう、だが……痛いのは勘弁してくれないか？」
［カホラ］：「心配しないで、痛くはないわ。いや、お母さんにとっては結構大きいダメージになるかもしれないけど」
［セフィル］：「私にとって？」
［カホラ］：「お母さんがこの部屋に閉まっているチョコビスケットを、私に譲って？　もちろん袋ごと」
［セフィル］：「な、何～！？」
学園長は激しい動揺を見せた。
［セフィル］：「ちょ、ちょっと待ってくれカホラ。それは、本気で言ってるのか？」
［カホラ］：「ええ、もちろん」
［セフィル］：「い、いくら何でも全部はないんじゃないのか？」
［カホラ］：「それぐらいしないと、ペナルティにはならないでしょう」
［セフィル］：「だとしても……明日から私はティータイムに何を食べればいいんだ？　これがないとティータイムがティータイムにならなくなってしまうじゃないか」
［カホラ］：「また買えばいいじゃない？　そんなに高い商品でもないし」
［セフィル］：「買いに行く暇がないんだよ……」

［カホラ］：「ますますもらいたくなってきたわね。それくらいしないと、お母さんのためにならないし」
［セフィル］：「うっ……カホラも随分と残酷になったものだな」
［カホラ］：「ふふ、これがお母さんの子供なのよ？　というわけで――これはもらっていくわね～」
先輩は迷うことなく引き出しを開けて、ビスケットの袋を取り出した。
［セフィル］：「い、一枚でいいから、置いていってくれないか？」
［カホラ］：「ダーメ、お母さんが出口を教えてくれなかったおかげで、こっちはかなりの疲労を蓄積しちゃったんだから。その疲れを癒すために、チョコビスケットは必要不可欠なの。私のお母さんなら、理解してちょうだい」
［セフィル］：「く……」
［カホラ］：「さ、行くわよ？　吹雪」
［吹雪］：「い、いいんですかね？　本当に」
［カホラ］：「大丈夫よ、さあ」
［吹雪］：「は、はい。じゃあ学園長、失礼しました」
［セフィル］：「カホラの鬼～」
［カホラ］：「何とでも言いなさい」

――そしてそのチョコビスケットは、舞羽たちに振る舞われた。みんな口を揃えて美味しいと言い、マユ姉は一人で3枚食べていた。
先輩の作戦は、見事に成功したようだ。
……ちなみにその後の夜の練習の後、資料を学園長からもらう際に、その報酬として先輩はビスケットを一枚渡していた。その時の学園長の顔は……今まで見たことのない表情だった。

カホラルート・プレスト（19）

［場所：社会科室］

［舞羽］：「じゃあ、おやすみなさい」
［繭子］：「おやすみ～」
［聖奈美］：「おやすみ」
［カホラ］：「おやすみ、吹雪」
［吹雪］：「おやすみなさい、先輩」
［カホラ］：「また明日、頑張りましょうね」
［吹雪］：「はい」

先輩は笑顔でそう言って、布団に戻っていった。俺はいつものとおり、カーテンを閉める。

そして俺は、明日あることを先輩に伝える決意をした。言わなくても分かるだろう、そう、あの時に気付いた気持ちだ。

……明日になれば、全てが分かる。緊張はするけど、言わずにはいられない。頭の中で予行演習をしながら、俺は目をつぶり、眠りについた。

カホラルート・ピウ（1）

12月24日（金曜日）

［場所：教室］

［翔］：「今日で学校も終わりだな」
［吹雪］：「そうだな」
［翔］：「――降ってきたな、雪」
［吹雪］：「冬だからな」
［翔］：「そりゃあ分かってるよ。……本当に、最近オレに対して冷たくないか？　吹雪ちゃん」
［吹雪］：「最近、季節と自分の態度を合わせてみようかって思ったのさ」
［翔］：「何故そんな決断を!?　しかも合わせるってことは冬だから寒いじゃないか」
［吹雪］：「そうだな」
［翔］：「う、本当に寒い。やっぱり名前と一致してくるんだな、そういうところ」
［吹雪］：「黙れ、くたばれ」
［翔］：「うわあ、傷つくぜ～」
何だかここ2日、名前をネタにされる回数が多い気がするな。そういう時期なのか？
［愛海］：「うー、廊下はすごく寒いわね～」
［舞羽］：「そうだね。息、とっても白くなるし」
［吹雪］：「確か、今日の最低気温は氷点下になるらしいぜ」
［舞羽］：「ええ～!?　本当に？　じゃあ湯たんぽとか用意したほうがいいかな？」
［吹雪］：「大丈夫じゃないか？　寝床は十分暖かいし、というか

それ以前に湯たんぽが人数分用意できないだろう？」
［舞羽］：「あ、そっか。……風邪引かないように気を付けないと」
［吹雪］：「そうだな、今蹲いてる暇はないからな」
［舞羽］：「うん」
［翔］：「……あれ？　何でだろう？　急に目頭が熱くなってきた。どうしてだろう？　おかしいな……すごく、吹雪の対応に温度差を感じる……」
［吹雪］：「気のせいだ」
［翔］：「ほら、だって端的すぎるもん！　オレとの会話の時１０文字以上口にしないもん！　どうして？　オレ今日何か悪いことした？」
［吹雪］：「祐喜、頼む」
［祐喜］：「うん、分かった」
祐喜はゆっくりと翔の前に立った。
［祐喜］：「翔、今日の昼ご飯のこと覚えてる？」
［翔］：「え？　昼ご飯？」
［祐喜］：「そして、吹雪のしてる恰好……ここまで言えば分かるよね？」
［翔］：「あ、ああ……」
［祐喜］：「そう。翔はしゃべることに夢中になって、お茶とお味噌汁同時に零して、吹雪のブレザーをビシャビシャにしちゃったんだ」
［愛海］：「確かに事故かもしれないけど、大久保くんが怒るのも無理ないわね～」
［舞羽］：「うん、そうだね」
［翔］：「う、でも……それは……」
［吹雪］：「それは、だと？　ふざけるんじゃねぇぞ？　くそ野郎」
［翔］：「ひぃ……！？」
［祐喜］：「ふ、二人とも、向こうを向いて目をつぶってたほうがいいかも」

［愛海］：「そうね。さあ、舞羽」
［舞羽］：「う、うん……」
……。
……。
……。

［吹雪］：「――分かったか！？　この腐れ外道が！」
［翔］：「……」
［祐喜］：「ここまで、吹雪がキャラ崩壊することも珍しいね」
［吹雪］：「はあ、はあ……。ふう……悪いな祐喜、取り乱しちまった」
［祐喜］：「しょうがないよ今回は。これくらい言わないと、翔も分からなかったかもしれないし」
［翔］：「……」
［祐喜］：「ちょっと飛んじゃってるみたいだね」
［吹雪］：「ほっとこうぜ、その内勝手に復活するさ」
［祐喜］：「そうだね。二人とも、もう大丈夫だよ」
祐喜が肩を叩いて二人に知らせる。
［愛海］：「終わった？」
［祐喜］：「うん、終わったよ」
［舞羽］：「……何か魂が抜けてるみたいだけど」
［祐喜］：「はは、大丈夫、大丈夫。ちょっと置いておけば治るはずだから」
［舞羽］：「そ、そうなんだ。……何か涙が目に光ってるけど」
［愛海］：「舞羽、翔っちにはこれくらいがいい気つけなのよ」
［舞羽］：「う、うん」
［愛海］：「スッキリした？　大久保くん」
［吹雪］：「おう、溜まってたもの全て吐き出すことができたからな。気分は晴れ晴れとしてるぞ」
［愛海］：「それはよかったわ。ストレスをため込むのはよくないからね」
［祐喜］：「吹雪を怒らせちゃダメだってことがよく分かったね」
［吹雪］：「大丈夫だ、そう簡単には沸点に達しないはずだから」

［祐喜］：「そう考えると、吹雪の沸点に達するまで怒らせちゃった翔って、ある意味すごいよね」
［翔］：「あう……ああ、う……」
［祐喜］：「完全に抜け殻だけどね」
［舞羽］：「あ、あはは……」
［愛海］：「そういえば、今日はクリスマスイブよね。二人はいつも通り練習なの？」
［舞羽］：「そうだね、本番までちょうど一週間だし、ここで休んでる時間はないから。でも、今日は特別な日だから、夕ご飯は腕によりをかけて作るつもり」
［吹雪］：「そういえば、今日は舞羽が当番だったな。どんな料理になるか楽しみだ」
［舞羽］：「うん、とびっきり美味しいのを作るよ」
［愛海］：「舞羽～、私にはないの～？　ごちそう」
［舞羽］：「一応、こっちも決まった予算内で料理を作ってるから、突然の人数増加には対応できないんだよね」
［愛海］：「食べたかったわ～、舞羽の作るパイグラタン」
［舞羽］：「また今度作ってあげるから、今回は許してよ」
［吹雪］：「つうか、パイグラタンなんていつ作ったんだ？」
［舞羽］：「バーバロで働いてる時に、一回賄いとしてみんなに作ったことがあったの。試作品だったんだけど、結構上手にできたんだ」
［愛海］：「てっきり大久保くんは食べたことあると思ってたんだけど」
［吹雪］：「いや、今日初めて聞いた。本当に何でも作れるんだな、舞羽は」
［舞羽］：「えへへ、それほどでも。残念ながら、今日は作ることはできないけど」
［吹雪］：「気にするな。名前を聞く限り、すごく手間がかかるものなんだろう？」

［舞羽］：「そうだね、じっくり焼かないといけないから」
［吹雪］：「じゃあ、やはり次回に持ち越しだな。楽しみにしてるさ」
［舞羽］：「うん」
［祐喜］：「――あ、そうだ吹雪。前に話した四季のピアノに関して、何か進展はあったの？」
［吹雪］：「ああ、話してなかったな」
［愛海］：「何？　その話。私、聞いた覚えがないんだけど」
［祐喜］：「そういえば、僕たちにしか話してなかったんだっけ。言っても大丈夫かい？　吹雪」
［吹雪］：「……」
［愛海］：「ちょっと大久保くん、どうしてそこで黙っちゃうのよ」
［吹雪］：「いや、日野のことだから、どうせ何かに託けて茶化してきそうだなって思って」
［愛海］：「全くオブラートに包むことなく物申したわね、逆に清々しいわ」
［吹雪］：「俺は間違ったことは言ってない自信がある」
［愛海］：「大丈夫よ～、真剣にやってることなんでしょ～？　それに横槍を入れる気なんてこれっぽっちもないわよ～」
［吹雪］：「そう言ったお前に、俺と舞羽は何度も茶化されてきた記憶があるんだが」
［愛海］：「過去は過去よ、今回はゼーッタイにしないから？　ね？」
［吹雪］：「……破ったら日野にも容赦なく怒るからな」
［愛海］：「ええ、いいわよ」
［吹雪］：「前回祐喜たちにした話っていうのは――」
……。

［吹雪］：「――というわけなんだ」
［愛海］：「そうなんだ、だから最近よくカホラさんと一緒にいるのね」
［吹雪］：「ど、どうして一緒にいたって知ってるんだ」
［愛海］：「図書室に本を返しに行った時、たまたま発見したのを見たから。あの時はどうしてか分からなかったけど、こういうことだったのね。一つ謎が解けたわ」
［吹雪］：「人に言いふらすなよ？」
［愛海］：「大丈夫だってー、そんなに信用ないの？　私」
［吹雪］：「……自分の胸に手を当てて聞いてみろ」
［祐喜］：「それで？　進展はあったのかい？」
［吹雪］：「ああ、あんまり大きい声では言えないが、四季のピアノを守っているストーンサークルを見に行くことができた」
［祐喜］：「へー、すごいじゃない？　どんな感じだったの？」
［吹雪］：「さすがって感じだった。四季のピアノを守るに相応しい作りだった」
［祐喜］：「羨ましいなー、僕も見てみたいよ」
［吹雪］：「残念ながら、これ以上教えるわけにはいかないな。見たいのなら、自分の力で探してくれ」
［祐喜］：「じゃあ、あの日からかなりの進展があったんだね」
［吹雪］：「とは言っても、まだ半分くらいだと思う。ここからが正念場だろうな、今までは資料があったから助かっていたけど、ここからはあまり有力な情報もない。根気が必要になってくるはずだ。今日からは、情報探しがメインだ」
［愛海］：「今日からってことは、今日もカホラさんと調べるの？」
［吹雪］：「ああ、そのつもりだ」
［愛海］：「今日くらい休んだらいいのに、クリスマスイブなのよ

？　その聖なる日をかび臭いにおいのする部屋ですごすなんて、ムードがないじゃない」

［吹雪］：「別に図書室はかび臭くないだろう、別に心配いらねぇよ。それに――」

ちゃんと、言うことは言うつもりでいる。

［愛海］：「それに、の後は何が続くの？」

［吹雪］：「何でもない、とにかく、俺たちは達成のために頑張る」

［祐喜］：「僕たちは何にも手伝えないけど、応援はしてるから、頑張ってね」

［舞羽］：「ファイト、吹雪くん」

［吹雪］：「その言葉で十分だ、ありがとよ」

［繭子］：「はーい、じゃあ授業始めるよ～。あれ？　翔くんはどうしたの～？　何だか死んだ魚みたいな顔をしてるけど」

［祐喜］：「あ、問題ないです。スルーしてくれて大丈夫ですよ」

［繭子］：「そうだね～、じゃあ早速進めていこう～」

マユ姉にもスルーされてしまうとは……翔、逆にすごいぞ、お前。

カホラルート・ピウ（4）

［場所：図書室］

不思議な記号の解析を図書室の先生に頼んでから数１０分。

［吹雪］：「もう少しでしょうか？」

［カホラ］：「どうかしらね、まあ気長に待ちましょう。こっちも読まなきゃいけないし」

［吹雪］：「そうですね。でも先輩、よくそんな難しい本をすらすらと読めますね」

母国の言語しか分からない俺に、昔の文献など読めない。

［カホラ］：「そこまですらすらとは読めてないわよ。途中で立ち止まることだってあるしね」

［吹雪］：「それでも読めるってだけで、俺はすごいと思います」

［カホラ］：「吹雪も努力すれば読めるわよ」

［吹雪］：「残念ながら、難しい文献を読みたいと渇望する自分が心にいないので、努力ができないんです」

［カホラ］：「まあ、気持ちはすごく分かるわ。目が痛くなるし、思うように前に進めないしね。でも、理解できた時の感動は一塩よ？　それに至るまでにたくさんの労力を消費してるからね」

［吹雪］：「それは、そうでしょうね」

［カホラ］：「気が向いた時に読んでみるのもいいかもしれないわよ？　暇つぶしにはなるだろうから」

［吹雪］：「すぐに寝ちゃいそうな気もしますけど」

［カホラ］：「そういう用途で使うのも一考じゃない？」

［吹雪］：「い、いいんですか？」

［カホラ］：「使い方は人それぞれだからね。薬に頼るよりは良いと思うけど」

［吹雪］：「な、なるほど……」

考え方も人それぞれだな。
［カホラ］：「それにしても、昨日はすごかったわね」
［吹雪］：「はい、そうですね」
［カホラ］：「昨日だけでも、ものすごいたくさんの情報を手に入れることができたわ。去年に調べて分かったことを全て合わせても、昨日の情報量には足りないわ」
［吹雪］：「そんなにですか？」
［カホラ］：「ええ。去年は言ってしまえば暗中模索状態だったから。何から手をつければいいのかも分からないような感じ、ストーンサークルのスの字も出てこなかった」
［吹雪］：「でも、その積み重ねがあったから、今の成果につながってるんじゃないですか？」
［カホラ］：「そうかもしれないわね。改めて分かったのは、一人で調べるよりも何人かで力を合わせて進めたほうが格段に良いってことね。今回のことで、それがよーく分かったわ」
［吹雪］：「……何と言っていいのか」
［カホラ］：「ふふ、顔が赤いわよ」
［吹雪］：「す、すいません」
［カホラ］：「謝ることじゃないわよ」
［吹雪］：「と、とにかく、これからも精いっぱい頑張ります」
［カホラ］：「よろしくね？　上手くいけば、年が変わる前に、謎の解明ができるかもしれないから」
［吹雪］：「はい」
［図書室の先生］：「沢渡さーん」
［カホラ］：「終わったのかしら？　行ってみましょう」
［吹雪］：「はい」
俺たちは受付まで向かった。

カホラルート・ピウ（5）

［図書室の先生］：「お待たせしてごめんなさいね」
［吹雪］：「いえ、大丈夫です。それで、何か分かりましたか？」
［図書室の先生］：「一応、完璧にそうだとは言えないけど、おそらく合っていると思うわ」
そう言うと、先生は重そうな辞書をその場で開いた。
［図書室の先生］：「おそらく、沢渡さんが見つけたその記号は、ずっと昔に先人たちの間で使われていた数字だと思うわ」
［カホラ］：「数字ですか」
［図書室の先生］：「そんな予感はしてた？　沢渡さんも」
［カホラ］：「そうですね、一文字しか記されていないところから、これが文章には成り得ないと思いましたから」
［図書室の先生］：「その見解は正しいわね。間違いのないようにいくつかの文字を調べたんだけど、字の形からしてこれが一番しっくりくると思うの。これなんだけど」
俺たちは指で示された文字を見てみる。
［カホラ］：「……本当だ、字のタッチが全体的に丸みを帯びてて特徴的だわ」
［図書室の先生］：「本当の名称が分からないから、私たちはこの学園の名前からとってハルモニア語って呼んでいるの」
［カホラ］：「ハルモニア語、初めて耳にした言葉です」
［図書室の先生］：「この島唯一、そしてずっと昔の言語だから、かなりレアレティの高い言語だと思うから、知らなくて当然よ」
［カホラ］：「これからは覚えておきます。それで、私たちが持ってきたその記号は、どの数字を表すものなんですか？」
［図書室の先生］：「この記号は、数字の『1』を表してると思う。そしてこっちは、数字の『4』を表しているわ」
［カホラ］：「1と4……」

［吹雪］：「1と4……」
［図書室の先生］：「これが、参考にしたページなんだけど見てみるといいわ」
先輩は右手に自分のメモを持って照らし合わせる。
［カホラ］：「本当だ、すごくそっくり……」
［図書室の先生］：「確信はないけど、可能性としてはそれが一番有力だと思うわ。他の言語も見てみたけど、どれも違うものばっかりだったから」
［カホラ］：「そうですか。これ以外に、そのハルモニア語で記された文字のようなものはありませんでしたか？」
［図書室の先生］：「そうね、沢渡さんの資料は全て目を通したけど、ハルモニア語が記されていたのはその二つだけだったわ」
［カホラ］：「そうですか」
［図書室の先生］：「よかったら、このページをコピーしてあげるわよ？」
［カホラ］：「すみません、お願いします」
［図書室の先生］：「はい。ちょっと待ってね」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
先生のコピーが終わる間、俺たちは顔を見合わせていた。

カホラルート・ピウ（6）

［図書室の先生］：「はい、どうぞ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［図書室の先生］：「いえいえ、色々大変みたいだけど、頑張って」
［カホラ］：「はい、また何かあったらよろしくお願いします」
［図書室の先生］：「ええ」
一礼して、俺たちは机に戻った。そして、開口一番――。
［カホラ］：「1と4……私たちが見てきたストーンサークルがそれだとするなら、まだこの島には、第2、第3のストーンサークルが隠されているってことよね？」
［吹雪］：「単純に考えれば、その線で間違いはないですよね」
［カホラ］：「……少なくとも2つと、ピアリーが資料に書いていたのはこれが理由だったのね」
［吹雪］：「先輩が以前言っていたことと全く同じでしたね」
［カホラ］：「今だから言えるけど、ストーンサークルが2つしかないなんておかしいと思っていたのよ。場所も場所だし、もし本当に2つしかないのなら均等な場所に設置するはずだし」
［吹雪］：「あんな偏った場所に置かれているのはおかしいと」
［カホラ］：「桜花のピアノと風花のピアノが極端に耐久力がないとかなら分からなくはないけど、そんな偏りがあるなんて聞いたことがなかったし。でも、これではっきりしたわね。四季のピアノには、それぞれ一つずつ、保護するためのストーンサークルが存在する」
［吹雪］：「でも、問題はここからですね。4つあるってことが分かったのは大きな収穫ですけど、残る2つは一体どこにあるんでしょうか？」
［カホラ］：「そうね、とりあえずお母さんからもらった資料は全部読んでみて……情報がなかったら、二人で考えましょう。ここか

らは、資料にも文献にもない未知の領域だからね」
［吹雪］：「未知の領域……何だかすごいわくわくする響きですね」
［カホラ］：「私も思ったわ。今、すごく興奮してるもの」
［吹雪］：「何とかして、解き明かしたいですね。この謎を」
［カホラ］：「そうね、ここまで来たんだから、できるなら全てのストーンサークルをこの目で見てみたいわ」
［吹雪］：「きっとできますよ、頑張りましょう！」
［カホラ］：「うん。ということで、作業再開ね」
また一歩、真実に近づくことができた。

カホラルート・ピウ（7）

――舞羽のクリスマスディナーを美味しくいただいて、夜の練習。
俺は迷うことなく先輩の練習場所に向かう。

［場所：第四音楽室］

［吹雪］：「失礼します」
［カホラ］：「はーい、どうぞ」
中に入ると、先輩と学園長がすでにピアノの前に座っていた。
［カホラ］：「いらっしゃい、吹雪」
［吹雪］：「お邪魔します、先輩」
［カホラ］：「今日もよろしくね」
［吹雪］：「こちらこそ、ベストを尽くしますね」
［カホラ］：「うん、よろしく」
［セフィル］：「……ん～」
［カホラ］：「どうしたの？　お母さん」
［セフィル］：「いや、何というか、私はここにいてもいいのか？」
［カホラ］：「どうしてよ？」
［セフィル］：「何だか二人だけのほうが楽しそうな雰囲気が体からにじみ出ている」
［カホラ］：「にじみ出ているって……表現の仕方がおかしくない？」
［セフィル］：「概ねあっていると思うが」
［カホラ］：「あってるんだ……」
［セフィル］：「どうなんだ？　私はお邪魔か？」
［カホラ］：「出ていく必要なんてないわよ。これからするのはトークじゃなくて練習なんだから、お母さんがいなかったら話が進まないわ」

［セフィル］：「そうか、よかった……」
［カホラ］：「何がそんなに不安だったのよ」
［セフィル］：「とけ込むことができないような不安があった」
［カホラ］：「あなた私のお母さんでしょう？　仲間外れになんてしないわよ」
［セフィル］：「カホラ……ありがとう」
［カホラ］：「そんな感動の場面じゃないって」
［セフィル］：「そうだったな、よし、練習を始めよう。今日はせっかくのクリスマスだから、少し早めに切り上げる予定だ。それまで精一杯頑張ってくれ」
［カホラ］：「いいの？　今日でちょうど一週間前よ？　今日からラストスパートをかけたほうが」
［セフィル］：「ラストスパートをかける前には息抜きが必要だろう？　今のうちに力を貯めておかないと、途中で失速してしまうかもしれないからな。そのための対策だ。それに、カホラも含めて、４人のピアノはかなり上達してきているから、そこまで焦る必要もないさ」
［カホラ］：「私自身は、まだ改善の余地がある気がするんだけど」
［セフィル］：「いいから、いいから。さあ、今日の練習を始めよう」
［カホラ］：「よろしくお願いします」
［吹雪］：「よろしくお願いします」
……。

カホラルート・ピウ（8）

［セフィル］：「――よし、今日はこれで終了」
［カホラ］：「え？　もう？」
練習が始まって一時間余りで、学園長はそう言った。先輩が聞き返すのも当然か。
［セフィル］：「何か不満か？」
［カホラ］：「不満ってわけじゃないけど、ちょっと早すぎない？」
［セフィル］：「私は最初から一時間で終える予定だったから、ドンピシャだと思っているんだが」
［カホラ］：「でもさ」
［セフィル］：「さっきも言っただろう？　息抜きも必要だと。今日は何も言わずにここで練習を終えておこうじゃないか、カホラ」
［カホラ］：「うーん……」
［セフィル］：「吹雪、後は任せたぞ？　それでは、私は失礼する」
［カホラ］：「あ、ちょっと」
［セフィル］：「ふっふっふ、さらばだ」
学園長は、その場から姿を消した。
［カホラ］：「どうしてわざわざワープで出ていったのかしら」
［吹雪］：「かっこよく去りたかったのかもしれませんね」
［カホラ］：「もう……」
［吹雪］：「今日は好意に甘えておきましょう。今日くらいならきっと問題ありませんから。俺が保障します」
［カホラ］：「吹雪が保障してくれるんだ」
［吹雪］：「聞いている限り、ほぼ先輩のスタイルは確立されている気がするので」
［カホラ］：「そう？」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「……どっちにしても、お母さんもいないし、終わる

しかないか。はあ、まだ準備ができてないのに」
［吹雪］：「準備？」
［カホラ］：「う、ううん、何でもないわ。……どうしよっか？　時間が結構余ってるけど」
［吹雪］：「あ、じゃあ、屋上に行きませんか？」
［カホラ］：「屋上？」
［吹雪］：「はい。唐突ですけど……ちょっと先輩に、お、お話があるので」
意を決してそうお願いをした。
［カホラ］：「お、お話？」
［吹雪］：「はい、いいでしょうか？」
［カホラ］：「ええ、いいわよ。その……私も吹雪に話があったから」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「と、とにかく行きましょう？　開いてるといいわね」
先輩は足早に教室の扉へと向かう。何だかせかせかしているように見えるのは気のせいか？　いや、今はそれどころじゃない。いいか、俺、ちゃんと言うんだぞ。緊張で固まりかけている足を動かし、先輩の後を歩いた。
……。

カホラルート・ピウ（9）

［場所：屋上］

屋上は開いていた。まだ閉められてはいなかったらしい。
俺たち以外にも、人はいないようだ。おまけに――。
［カホラ］：「あ、降ってるわね」
［吹雪］：「本当だ」
空からチラチラと雪が舞っていた。正にホワイトクリスマスだ。
［カホラ］：「綺麗……」
［吹雪］：「はい、そうですね」
先輩のほうが綺麗、などという言葉が頭に浮かんだが、そんな言葉を言うことはできない。その前に、言わなければいけないことがある。
［吹雪］：「先輩、いいですか？」
［カホラ］：「ええ、話だったわよね」
先輩は俺のほうに向き直った。
［カホラ］：「お説教とかは、勘弁してほしいんだけど」
［吹雪］：「そ、そんな話をする気はないです。というか、先輩にお説教するところなんてありません」
［カホラ］：「あ、本当？」
［吹雪］：「そういう話じゃなくて……その、お願いといいますか。俺の願望っていいますか。と、とにかく、今から話します」
［カホラ］：「え、ええ」
［吹雪］：「スーハースーハー……」
深呼吸して精神を落ち着かせる。したところで落ち着かないとは思うが、気休めだ。さあ、いよいよだ。

カホラルート・ピウ（１０）

［吹雪］：「た、単刀直入に言いますから」
［カホラ］：「ええ」
［吹雪］：「――俺、先輩のことが、す、好きです」
［カホラ］：「え、ええっ！？」
俺の言葉を聞いた先輩は、その場で慌てふためく。
［カホラ］：「じょ、冗談とかじゃなくて？」
［吹雪］：「冗談でこんなこと言えません。俺は、真剣にそう思ってます」
［カホラ］：「そ、そうなの？」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「い、いつからそんな風に？」
［吹雪］：「言ったほうがいいですか？　やっぱり」
［カホラ］：「できれば、聞きたいな」
［吹雪］：「その、気持ちに気付いたのは昨日なんです。先輩と抜け穴から脱出しようとしていた時に」
［カホラ］：「……私の下着で気付いたの？」
［吹雪］：「そ、そっちじゃないです！」
［カホラ］：「そ、そうよね？　よかった」
［吹雪］：「抜け穴で休憩している時に、先輩が、俺がパートナーでよかったって言ってくれたじゃないですか。その時に、俺も一緒に調査している人が先輩でよかったって思ったんです。少し前までは、自分の気持ちに気付くことができなかったんですけど、先輩の一言が、俺の心の雲を晴らしてくれたんです」
［カホラ］：「そ、そうだったんだ……」
［吹雪］：「びっくりさせちゃいましたか？」
［カホラ］：「ええ、すごくびっくりしたわ。だって――吹雪からそんな風に言ってもらえると思ってなかったから」

［吹雪］：「え？　……そ、それってどういう？」
［カホラ］：「さっき、言ったでしょう？　私も、吹雪に話があるって」
［吹雪］：「はい、覚えてます」
［カホラ］：「その話の内容は――吹雪が今私に言ったことと同じなの」
［吹雪］：「……え？　それって？」
頭が理解に追いついてこない。

カホラルート・ピウ（11）

［吹雪］：「つまり……？」
［カホラ］：「私も、吹雪に告白するつもりだったの」
［吹雪］：「え、えええええ～～～！？」
［カホラ］：「こ、声が大きいわよ、吹雪」
［吹雪］：「だ、だって――え～？　せ、先輩が、俺に？」
［カホラ］：「べ、別におかしいことじゃないと思うけど」
［吹雪］：「だ、だって、俺ですよ？　先輩が俺なんかを、そんな風に」
［カホラ］：「吹雪だから、私は言おうと思ったのよ」
［吹雪］：「そ、そうなんですか……」
［カホラ］：「理由は、吹雪と似てるわ。私も最初は、すごく良い後輩だと思ってたんだけど、一緒に探索をしていく内に、横でいつもサポートしてくれる吹雪にすごく心を持っていかれるようになったの。ああ、私は吹雪のことが好きなんだなって」
［吹雪］：「そ、それはいつ頃に気付いたんですか？」
［カホラ］：「吹雪が気付くより少し前、一つ目のストーンサークルを探しに行った日からかな」
［吹雪］：「ま、マジですか……」
［カホラ］：「正直、この想いは実らないなって思ってた。吹雪の周りには、舞羽とかもいたから、私じゃないだろうって勝手に決めつけちゃってね。でも、せめてお礼くらいは言いたいなって思ってて、それが、昨日のアレなの。で、それを言った後にまた考えて、どうせダメなら、私の想いもはっきり伝えちゃえって思ってさ。――だから、今こうしているわけ」
［吹雪］：「そ、そんな経緯があったんですか」
［カホラ］：「だから、お母さんがあんなに早く練習を切り上げた時は焦ったわ。まだ心の準備もできてないのに……」

［吹雪］：「あ、早く終わるのを渋ってたのは、それが理由だったんですか？」
［カホラ］：「ええ、伝えるのは練習後って決めてたから、どんな風に話を切り出すかも決めてなかったし」
［吹雪］：「……じゃあ、つまり、今俺たちは――、りょ、両想いってことですか？」
［カホラ］：「そうなるわね」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……す、すいません、まだ実感が湧いてなくて」
［カホラ］：「いいのよ、ゆっくりで。私も、同じだから」
［吹雪］：「でも、すごく嬉しいっていうのは分かります」
［カホラ］：「あ、それは私も思ってるわ」
［吹雪］：「やっぱり、似てるんですね、俺たちは」
［カホラ］：「そうみたいね、ふふ」
［吹雪］：「あはは」
お互い、顔を見つめ合って笑った。

カホラルート・ピウ（11）（後書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。
この後の展開なんですが、少々内容的に年齢制限が含まれる描写が入ります。
なので、載せられるところぎりぎりまで載せて、その後はちょっと考えているところです。
重ね重ね、我が作品をどうかよろしくお願いします。

カホラルート・ピウ（12）

［吹雪］：「あ、まだ大事なことを言ってなかったです。続き、いいですか？」
［カホラ］：「ええ、もちろんよ」
［吹雪］：「――お、俺と付き合ってくれますか？　か、カホラ先輩」
［カホラ］：「――ええ、もちろん。私の彼氏になって？　吹雪」
［吹雪］：「……何だか、むず痒いですね」
［カホラ］：「そうね。でも、じきに慣れてくるものじゃないかしら」
［吹雪］：「あれ？　先輩、男性と付き合うのは初めてなんですか？」
［カホラ］：「ええ、そうだけど」
［吹雪］：「そ、そうだったんだ……」
［カホラ］：「経験があると思ってたの？」
［吹雪］：「正直、結構先輩が素敵だという声を男子の間で聞いてたので」
［カホラ］：「恋愛に関しては、私は初心者よ。逆に吹雪はどうなの？」
［吹雪］：「俺がそんな経験があるように見えますか？」
［カホラ］：「失礼だけど、さっきの感じを見る限り、ないとは思ったわ」
［吹雪］：「そうです、ありません。だから、俺も恋愛は初心者です」
［カホラ］：「そう。それを聞いて、ちょっと安心したわ。できれば、同じスタートラインに立っててほしかったから」
［吹雪］：「俺も、ちょっと嬉しいです。先輩の、初めての彼氏になることができて」

［カホラ］：「そう？　できれば、最初で最後の相手になってくれると嬉しいんだけど」
［吹雪］：「も、もちろんです。良い彼氏になれるように努力は惜しみません」
［カホラ］：「ふふ、今のままでも十分よ。一緒に歩いて行きましょう、お互い初心者なんだから焦る必要もないわ」
［吹雪］：「そうですね」

カホラルート・ピウ（13）

［カホラ］：「でも、一つだけ、吹雪にお願いがあるんだけど、いいかしら？」
［吹雪］：「俺が叶えられるならなんでもします」
［カホラ］：「本当？　じゃあさ――キス、してほしい」
［吹雪］：「き、キスですか？」
［カホラ］：「ええ。私たちは今、付き合ってるんだし、カップルならそれくらい普通でしょう？　それに、疑ってるわけじゃないけど、吹雪が私を好きっていう気持ちを私自身で確かめたいの。ダメ、かしら？」
［吹雪］：「……全然、ダメじゃないです」
［カホラ］：「ほ、本当？」
［吹雪］：「こんなこと言うのは失礼かもしれないけど、メチャクチャかわいいです、今の発言」
［カホラ］：「そ、そんなことないわよ」
［吹雪］：「そういうのは自分では分からないものです。嘘はついてません」
［カホラ］：「じゃ、じゃあお願いできる？」
［吹雪］：「もちろん、喜んで」
［カホラ］：「ど、どうするといいのかしら？」
［吹雪］：「とりあえず、近づきましょうか？」
［カホラ］：「そうね」
向かい合い、体の間隔を一気に０に近づけた。先輩は、必然的に俺の顔を見上げる形になる。
［カホラ］：「やっぱり、先輩は美人ですね」
［吹雪］：「さっきから褒めすぎじゃない？　吹雪」
［吹雪］：「何だか、気持ちが吹っ切れたみたいです。言っても言っても言い足りなくなってる自分がいます」

［カホラ］：「まあ、吹雪に言われるのは嬉しいんだけど」
［吹雪］：「先輩が俺の彼女なんて、今さらだけどすごい幸せです」
［カホラ］：「それは私も同じよ。吹雪が彼氏になってくれて、幸せ」
俺たちは、自然と手を握り合っていた。
先輩の手は、とてもすんなりと俺の指の間に収まった。

カホラルート・ピウ（14）

［カホラ］：「実際にやってみると、結構いいものね、こういうのも」

［吹雪］：「漫画とかだとよくありますけど、実際にやる機会はあまりないですからね」

［カホラ］：「でも、今は違うわよ。しようと思えば、これからいつでもできるんだから」

［吹雪］：「そうですね」

［カホラ］：「吹雪の手、暖かいわね」

［吹雪］：「先輩の手は、ちょっと冷たいですね」

［カホラ］：「ごめんね、ピアノを弾いている時は暖かかったんだけど」

［吹雪］：「全然平気です。それに、手が冷たい人は心が暖かくて優しいって聞いたことがありますから」

［カホラ］：「あ、そうなんだ。どこで調べたの？」

［吹雪］：「以前、誰かから聞きました。信憑性があるか分からないですけど」

［カホラ］：「言ってもらえるだけで嬉しいから、構わないわよ」

［吹雪］：「……じゃあ、そろそろ」

［カホラ］：「ええ、……ドキドキするわね」

［吹雪］：「は、はい」

［カホラ］：「私の心臓の音、聞こえちゃったりしてない？」

［吹雪］：「今のところは。俺のほうはどうですか？」

先輩に負けず劣らずドキドキしているはずだ。

［カホラ］：「大丈夫。まだ聞こえてきてないわ」

［吹雪］：「よかった。――じゃあ改めて、先輩、顔を少し上に傾けてくれませんか？」

［カホラ］：「こうでいい？」

言われたとおりにしてくれる。
［吹雪］：「そしたら、目を閉じてください」
［カホラ］：「うん」
先輩は瞼を閉じた。後は、俺が唇を触れ合わせるだけだ。――緊張はさっきからしてるけど、不思議と体は言うことを聞いてくれた。
［カホラ］：「んぅ……」
吸い込まれるように、俺の唇は先輩の唇に触れ合った。
［カホラ］：「ん……」
隙間なくピッタリと合わさる口。息をするのも忘れてしまいそうというのはこのことだろう。先輩の唇はとても柔らかくて、それにとても良い香りがする。ずっとそうしていたかったけど、息が続かず、自然と唇は離れた。

カホラルート・ピウ（15）

［カホラ］：「はあ、はあ……」
［吹雪］：「どう、でしたか？」
［カホラ］：「キスって、こんなに素敵なものだったのね。今、それを実感したわ」
［吹雪］：「俺もです、何て言ったらいいか分からないけど、良い気分になりました」
［カホラ］：「高揚って言うのかな？　気持ちが登って行ってるような……そんな気分。……ねえ吹雪、その、もう一回してくれないかな？　もう一度、今度は二回目だから、さっきよりキスの感触を味わえると思うから」
［吹雪］：「はい、もちろんです」
俺も、同じことを思っていた。今俺は、身を持って実感している、キスを何度でもしたくなるという気持ちが。
［カホラ］：「今度は私からするわ。吹雪、目をつぶってくれる？」
［吹雪］：「分かりました」
言われるままに瞼を閉じた。そしてそれから5秒ほど――。
［カホラ］：「ん……」
もう一度、唇が重なった。今度は、しっかりと互いの感触を確かめながら。
［カホラ］：「ん……んぅ」
［吹雪］：「……」
甘い香りのする先輩の唇は、とても熱を帯びていて、しっとりと潤っていた。ただ唇を触れ合わせているだけだけど、それでも先輩の熱を直に感じ取ることができて、すごく満たされるような気持ちになる。

カホラルート・ピウ（16）

［カホラ］：「ん……ちゅ、んん」
［吹雪］：「ん……」
［カホラ］：「ん……ぷはっ、はあ……はあ……息をするの、忘れちゃいそうになるわね」
［吹雪］：「はい。でも……ずっと、していたい気分になります」
［カホラ］：「本当？　私も、吹雪の熱が私に伝わってきて、心がつながってるような気分になるの」
［吹雪］：「つながってますよ、俺たちは。心の深いところで」
［カホラ］：「ふふ、さっきからお互いに、恥ずかしいことをすごく口にしちゃってるわね」
［吹雪］：「さっきも言いましたけど、本当に吹っ切れちゃってるみたいで、思ってること全て言わないと気が済まないというか」
［カホラ］：「気持ちはすごく分かるわ。言わないでいられないのよね、全部を知ってほしいような、そんな感覚」
［吹雪］：「それだけ、お互いを愛し合えてるってことですね」
［カホラ］：「うん、違いないわね。――ねえ、吹雪、また、お願いしてもいいかな？」
［吹雪］：「遠慮しないで、どんどん言ってください。クリスマスなんですから、好きな人のお願いは全部叶えてあげたいです」
［カホラ］：「そういう優しいところ、本当に大好きよ。ありがとう、吹雪。お願いっていうのは、さっきと同じキスなんだけど……その、もうちょっと激しいのをしてみたいというか」
［吹雪］：「あれ、ですか？　外人とかが映画でやってるような」
［カホラ］：「そう、普通のキスであんなにすごいんだから、激しいのはどんな気持ちになるんだろうって……ダメ、かな？」
先輩の探究心は、こういうところにも出てくるのだろうか？
［カホラ］：「嫌なら嫌って言ってくれていいから。吹雪の嫌なこ

とは、私はしたくないから」
［吹雪］：「そんなこと、ありませんよ」
安心させるように、俺は笑顔でそう返した。
［吹雪］：「先輩がしたいことは、俺のしたいことでもあるんです。だから、絶対に嫌じゃありません。むしろ、俺もちょっと興味があります」
［カホラ］：「吹雪も、興味あるんだ」
［吹雪］：「それはもちろん。だって、相手が先輩なんですから、先輩が言い出さなかったら、俺が言ってたと思いますし」
［カホラ］：「そうなんだ、ふふ、何だか嬉しい」
俺の大好きな、優しい笑みを浮かべてくれた。
［吹雪］：「どう、しましょうか？」
［カホラ］：「今度も私からするわ。吹雪はさっきと同じようにして」
［吹雪］：「分かりました」
先と同じように瞼を閉じる。先輩の手が、今度は首のほうに回される。そして――。
［カホラ］：「ん……」
今日三度目のキス。しかし、前の二回とは変化がある。

カホラルート・ピウ（16）（後書き）

――すみません、ここまでが全年齢の限界だと思われます。
なんで、申し訳ないですが、この続きは「ノクターンノベルズ」のほうに掲載させていただきます。
この部分を読み飛ばしても、内容に影響は出ないはずなので、ご了承ください。
この続きに興味があれば、読んでいただけると光栄です。
よろしくお願いします。

カホラルート・ピウ（17）（前書き）

『シーン』が終わった後のところから投稿させていただきます。
その『シーンが興味ある方は――こちらをどうぞです。
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１７３５ｔ／

カホラルート・ピウ（17）

……。

……。

……。

先輩との行為が終わってからしばらく、俺たちは動くことができなかった。暴走しないことに努めてやったつもりではいたんだけど……それでも相当な運動になったようだ。体が思うように動かない。でも……決して嫌な疲労感ではなかった。

［カホラ］：「――意外と、吹雪ってSな一面も持っていたのね」

［吹雪］：「え？　Sですか？」

［カホラ］：「あら？　ごまかすの？　私のことかわいがってる時、色々と言っていたじゃない、意地悪なこと」

［吹雪］：「いや、あれは、その……」

［カホラ］：「普段はそんなことないのに、やっぱり人は見かけによらないってことね」

［吹雪］：「げ、幻滅しましたか？」

［カホラ］：「ううん、全然。そんなことで幻滅するわけないでしょう？　むしろ、新しい発見ができて嬉しいわ。吹雪は、そういうことになると積極的になる、ってことが分かって」

［吹雪］：「う……恥ずかしい」

今ではすっかり逆の立場だ。

［カホラ］：「うふふ、ちょっと仕返し」

でも、そんな先輩も、俺は大好きだ。

［カホラ］：「でも、ありがとね、吹雪」

［吹雪］：「え？　何がですか？」

［カホラ］：「何がって、決まってるでしょう？　私を女にしてくれたことよ」

［吹雪］：「先輩がお礼を言うことじゃないですよ」

むしろ言わなきゃいけないのは俺のほうで。
［吹雪］：「すごく、よかったです」
［カホラ］：「本当？　でも、私知ってるわよ？　吹雪、結構加減してやってくれてたわよね？　私が痛いと思って、控えめにしてくれたんでしょう？」
［吹雪］：「……別にしてないですよ、控えめになんて」
［カホラ］：「その割には目が合ってないわよ？」
［吹雪］：「……確かに、力一杯はしてなかったですけど……理由はもう一つありまして」
［カホラ］：「もう一つ？」
［吹雪］：「はい、俺自身の問題です。その……先輩の中に入れた瞬間に、すでにイッパイイッパイになってまして……あんまり早く動かしたら、速攻で終わってしまいそうでしたから。だから、ゆっくりめに動かざるを得なかったといいますか」
［カホラ］：「そ、そうだったんだ」
［吹雪］：「はい。だから、結果的に気を遣ったように見えたかもしれませんが、実は自分が追い込まれてた、という感じです」
さすがに……早漏とは思われたくなかったからな。

カホラルート・ピウ（18）

［吹雪］：「すごかったです、先輩の中は」
［カホラ］：「あ、ありがとうでいいのかしら？　自分ではよく分からないんだけど」
［吹雪］：「分からないのは当然だと思いますよ。善し悪しを決める場なんてないんですから」
［カホラ］：「そうね。吹雪がよかったなら、それだけで嬉しいし」
［吹雪］：「今更ですけど、痛みは大丈夫ですか？」
［カホラ］：「ちょっとヒリヒリしてるけど、痛くはないわ。血も止まってたみたいだから、大丈夫だと思う」
［吹雪］：「それはよかったです」
［カホラ］：「……私も、よかったわよ、吹雪の」
［吹雪］：「え？」
予想外の発言に、びっくりしてしまう。
［カホラ］：「最初はね、結構不安だったの。本当にこういう行為で、気持ちいいって感じることができるのか。でも、実際にしてみたら……すごく、よかった。吹雪の全てが、私に流れ込んでくるみたいな気持ちになって。究極の愛情表現ってことがよく分かったわ」
［吹雪］：「伝わってましたか？　俺の先輩の想い」
［カホラ］：「ええ、とっても。全部、受け取ったわ」
そしてにこりと微笑んで。
［カホラ］：「大好きよ、吹雪」
［吹雪］：「俺も大好きです、先輩」
――俺にとって、人生最高のクリスマスプレゼントをもらった瞬間だった。

カホラルート・アマービレ（1）

12月25日（土曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「――というわけで、カホラ先輩と付き合うことになりました」

［セフィル］：「……そうか」

次の日、練習の前に、俺は学園長にそのことを伝えた。一つのけじめというか、肉親には伝えておくべきだと思ったから。

［吹雪］：「あの、付き合うこと、許してもらえますか？」

［セフィル］：「……遅いな」

［吹雪］：「え？」

［セフィル］：「随分と遅かったんじゃないか？　吹雪よ」

［吹雪］：「お、遅いって？」

［セフィル］：「付き合うことになるのがだよ、それ以外に何がある？」

［吹雪］：「いや、その……」

［セフィル］：「私としてはむしろ、まだ付き合ってなかったのか、という感じを受けるが」

［吹雪］：「え？　そうなんですか？」

［セフィル］：「当たり前だ、きっと思ってたのは私だけじゃないはずだ。そうだろう？　フェル」

［フェルシア］：「そうですね」

［吹雪］：「フェルシア先生もですか？」

［フェルシア］：「当然。二人で行動してることが多かったし、何より二人がとっても楽しそうにしてた。私も、学園長とほぼ同意見よ」

［吹雪］：「そうだったのか……」
［セフィル］：「自信がなかったのか？　カホラが自分を好きになってくれるか」
［吹雪］：「そういうわけではない、とも言えないんですが……自分の気持ちがどうなのか、気づくことができないでいたので」
［セフィル］：「葛藤してた、ということか」
［吹雪］：「はい。でも、学園長にストーンサークルに連れていってもらった時に、自分の気持ちに気付くことができたので、その次の日に、自分の想いを正直に伝えました」
［セフィル］：「そして、カホラはＯＫを出したと」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「なるほど」
［吹雪］：「それでその……付き合うこと、学園長は許してくれますか？」
［セフィル］：「許さん、なんて言うと思うか？」
［吹雪］：「あ、じゃあ……」
［セフィル］：「もちろん許すさ。むしろ、私は吹雪に付き合ってほしいと思っていたくらいだしな」
［セフィル］：「何だ、知らなかったのか？　結構猛烈なアピールをしてたつもりなんだが」
［吹雪］：「そ、そうだったんですか？」
［セフィル］：「うむ、そうだったんだ。身を結んだかはしらないが、理想的な形になってよかったよ」
何と返していいのか分からなく、ちょっと黙ってしまう。
［セフィル］：「思い出すな、私も若い頃は、父さんとこんな風に――」
［フェルシア］：「学園長、その話はまた今度にしておきましょうよ」
［セフィル］：「何だ？　思い出を振り返ってはいけないのか？」
［フェルシア］：「そういうわけじゃないですけど、長くなりそう

なにおいがするので」
［セフィル］：「仕方ないな。とりあえず、付き合うことに関しては私は賛成だ。でも一つ、約束をしてくれ」
［吹雪］：「はい、何でしょうか？」
［セフィル］：「カホラに、幸せな日々を与えてやってくれ。それが条件だ、いいか？」
［吹雪］：「はい、もちろんです」
［セフィル］：「うむ、頼んだぞ？　そして、時折それに私も交ぜてくれると尚良い」
［吹雪］：「いつでも大丈夫です。学園長が良いときに交ざってきてください」
［セフィル］：「若干冗談のつもりだったんだが……許してくれるならそれもアリか。じゃあ、そういうことにしてもらおう」
俺の人生をかけて、カホラ先輩を幸せにしよう。
［セフィル］：「あ、分かってるとは思うが、ホーリーカルムはみんなに平等に頼むぞ？　カホラ一点張りになってしまっては、成功するものも成功しなくなってしまうのでな」
［吹雪］：「はい、気をつけます」
［セフィル］：「よし、じゃあ練習を始めるか。いつものようにランニングからだ」
［吹雪］：「はい」
俺はグランドからスタートを切った。

カホラルート・アマービレ（2）

――そして午後。

［場所：図書室］

［カホラ］：「これが、ネレス時代の資料ね」
［吹雪］：「全部で、3冊ですね」
［カホラ］：「実際のところ、どうなのかしら？　お母さんから話を聞く限りでは、そこまで内容の違いはないみたいだけど」
［吹雪］：「そのようですね。でも、今は次への手がかりがないから、読んでみるしかないんですよね」
［カホラ］：「そうなのよね、頑張ってみましょうか」
［吹雪］：「こっちのほうは、俺も読んでみます」
幸い、学園長がくれた資料には、日本語で書かれた資料もある。これなら、俺でも読むことができる。
［吹雪］：「手分けしてやりましょう」
［カホラ］：「ええ」
俺たちは資料に目を通す。
……。
……。
……。

カホラルート・アマービレ（3）

［カホラ］：「吹雪、そっちはどお？」
［吹雪］：「うーん、情報らしいものはないみたいです」
４冊ほど目を通してみたが、どれも四季のピアノやストーンサークルのことに関して触れられていない。
［吹雪］：「ネレスの資料はどうですか？」
［カホラ］：「うん、多少違う筆記で書かれてはいるんだけど、内容はかなり類似してるわね。以前の私たちなら喜ぶべきことが書いてるんだけど」
［吹雪］：「今の俺たちは、その先が知りたいんですよね」
［カホラ］：「まあ、そう簡単に出てくるものでもないわよね、仕方ないか……今日はこの辺にしておきましょう」
［吹雪］：「明日はこの続きですか？」
［カホラ］：「それも考えてるけど、現地探索をしたほうが早い可能性もあるから、明日になったら詳しく決めましょう」
［吹雪］：「そうですね」
どこ近辺に隠されてるかも何となく予想できるしな。
［カホラ］：「戻って少し休みましょう」
［吹雪］：「はい」
……。

カホラルート・アマービレ（4）

［場所：社会科室］

途中でジュースを買って、寝床に戻った。その直後――。

［繭子］：「あ、カップルが帰ってきた～」

［吹雪］：「なっ――！？」

そのようなことを言われ、俺は狼狽えてしまう。

［繭子］：「お帰り～、二人とも」

［カホラ］：「た、ただいま帰りました」

［繭子］：「どこ行っていたの～？　デート？　デートしてたの？」

［吹雪］：「ちょ、ちょっと待て。マユ姉、一体どうしてそのことを？」

［繭子］：「え？　そのことって～？」

［吹雪］：「俺たちが、カップルだということだ」

［繭子］：「……んふふ、今言ったね？　はっきりと～」

［吹雪］：「何？　――まさか、マユ姉」

［繭子］：「えへへ～だまされたね～、ふーちゃん」

このチビ介、カマをかけやがったか。

［繭子］：「みんな聞いた～？　この二人、めでたくカップルになったんだって～」

真実を掴んだマユ姉が、部屋にいるみんなに大々的に報じやがった。

［繭子］：「どっちから想いを伝えたの～？」

［吹雪］：「――とりあえず、ちょっと黙ってろ、マユ姉」

一人テンション高く話を進めようとするマユ姉の頭に、俺は力強くチョップした。

［繭子］：「――きゅう」

［カホラ］：「だ、大丈夫なの？　吹雪」

［吹雪］：「問題ないです、しばらくすると起きてくると思います

ので。――それにしても」
どうして、マユ姉に俺たちが付き合ってるというような噂が立ったんだ？　つい昨日からそういう関係になったというのに、情報の流れが早すぎる。
［吹雪］：「――ひょっとして、フェルシア先生？」
先輩がそう言うと、フェルシア先生はすまなそうに手を合わせ、頭を下げた。
［フェルシア］：「ごめんなさい、告げ口するつもりは全くなかったんだけど、どうなのって迫られちゃって」
あまりの言われように、真実を告げる以外に方法がなかったってことか。
［フェルシア］：「悪かったわ、二人とも」
［カホラ］：「まあ、どうせいつかバレることだから、しょうがないですね」
意外と、先輩はサバサバしていた。

カホラルート・アマービレ（5）

［カホラ］：「別に怒ってないでしょう？　吹雪」
［吹雪］：「それは、まあ」
絶対に言うなと言ったわけでもないし、仕方ないことだと思う。
［吹雪］：「やっぱり、しょうがないことですね」
［カホラ］：「そうよ、割り切っちゃいましょう」
［フェルシア］：「あ、そのこと何だけどね？　二人とも。メンバーのみんなは、すでにそのことに気付いてたみたいなのよ」
［吹雪］：「え？　そうだったんですか！？」
［聖奈美］：「何をいまさら……分かってないとでも思ってたの？　あなたは」
［舞羽］：「常に二人で行動してたら、そうなんじゃないかって考えは持つよね」
舞羽までがそのようなことを言っている。
［聖奈美］：「言ってしまえば、あたしたちだけじゃなくて、学園の人も、鋭い人はそうなると考えてたと思うわよ。冬休みに入ったから聞くことはできないけど」
［吹雪］：「じゃあ……結構周知ってこと？」
［聖奈美］：「真実かは分からないけど、あたしはそう思うわ」
［吹雪］：「でも、そんな噂が流れてるなんて、俺聞いたことないぞ」
［舞羽］：「それは、あれだよ。二人がお似合いだと思うから、誰も口出しできなかったんだよ」
［カホラ］：「そ、そういう問題なのかしら？」
［舞羽］：「多分、そうだと思います。むしろ、まだ付き合ってなかったってことに驚いたというか」
［聖奈美］：「付き合わないの？　っていう話題は、いくつか出てたわね」

［吹雪］：「知らなかった……」
俺たちの知らないところで、そんなことが言われていたとは……。
［聖奈美］：「これでスッキリした、疑問が一つ晴れたわ」
［舞羽］：「そうだね」
［聖奈美］：「でも、せっかくだから本人の口からそのことを聞きたいところね」
［吹雪］：「ゆ、杠、お前……」
［聖奈美］：「何？　カホラさんのことが好きなら、普通に言えることでしょう？」
口元がつり上がっている。俺がそういう反応をすると知った上で言いやがったな。
［聖奈美］：「男なら言いなさいよ、大久保」
［吹雪］：「く、くそう。分かったよ……」
もうすでにバレてることだ、今更言うことを躊躇う必要はない。

カホラルート・アマービレ（6）

［吹雪］：「……お、俺は今、カホラ先輩と、付き合ってます」
［聖奈美］：「どっちから言ったの？」
［吹雪］：「そ、そこまで言うのかよ」
［聖奈美］：「男だったら言いなさい」
こいつ、絶対に楽しんでやがる。
［吹雪］：「告白は、俺からした……その後、先輩も、俺に対して告白してくれたんだ」
［聖奈美］：「なるほどね……おめでとう、二人とも」
［舞羽］：「おめでとう、吹雪くん、カホラ先輩」
［吹雪］：「お、おお……」
一転して祝福の言葉がかけられ、どう反応していいのか分からなくなる。
［聖奈美］：「大久保が先輩に釣り合うとは思わないけど、先輩がそれで幸せなら、あたしは何も言いません。応援しますよ」
［カホラ］：「ありがとう、聖奈美」
［聖奈美］：「お礼を言われるようなことは言ってませんよ。……大久保、あなたはもっと努力しないとダメよ？　カホラさんの隣に立つには、まだまだ足りてないから」
［吹雪］：「い、言われなくたってそのつもりだ。ちゃんと、幸せにするさ」
［聖奈美］：「心意気は認めてあげる、でも、口だけって言うのは許さないわよ？　ちゃんと実行に移すこと。いい？」
［吹雪］：「分かってるよ」
［舞羽］：「二人の幸せは、私の幸せでもあるから。おめでとう、吹雪くん、カホラ先輩」
［カホラ］：「舞羽も、ありがとね」
［舞羽］：「吹雪くんのこと、よろしくお願いします」

俺って、そんなにダメな男なんだろうか？　ちょっと悲しくなってくる。

［カホラ］：「ええ、任せてちょうだい」

［聖奈美］：「さて、そろそろ夕ご飯でも作りましょうか。二人のお付き合いのお祝いに、ちょっと豪華なメニューにしようかしら？」

［吹雪］：「そ、そんなことしていいのか？」

［聖奈美］：「何よ？　あたしが自ら作ってあげようとしてるのよ？　何か文句でもあるの？」

［吹雪］：「いや、文句じゃないけど……食材は大丈夫なのか？」

［聖奈美］：「もちろん、今ある食材で豪華にするつもりよ、決まってるじゃない」

［吹雪］：「なるほど……」

［聖奈美］：「須藤さんに負けないように頑張るから、期待して待ってなさい、――ダルク」

［ダルク］：「はーい」

［聖奈美］：「おおっ！？」

目の前から、突然ダルクが現れた。

カホラルート・アマービレ（7）

［聖奈美］：「料理を作るから、お手伝いのほうよろしく」
［ダルク］：「うん、分かった」
［聖奈美］：「さあ、行くわよ」
［ダルク］：「うん。――あ、二人ともおめでとう」
［吹雪］：「ああ、サンキュー、ダルク」
二人はドアを開けて家庭科室に向かっていった。
［カホラ］：「――とにかく、私たちは公認ってことになれたのかしら？」
［吹雪］：「そう、みたいですね」
［カホラ］：「これで、隠れる必要はないわね。ふふ」
先輩は嬉しそうに微笑んだ。……ひょっとして先輩は、こそこそしないで付き合うことを望んでいたのかもしれない。だとしたら、これはこれで正解、か。
――杜の作ってくれた料理は、とても工夫されていて、すごく美味しかった。

カホラルート・アマービレ（8）

12月26日（日曜日）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「お疲れさまです、先輩」
［カホラ］：「お疲れさま」
練習を終え、一旦社会科教室に戻ると、約束通り先輩の姿があった。
［吹雪］：「シャワーを浴びてきたの？」
［カホラ］：「はい、ちょっとたくさん汗をかいたので……分かりましたか？」
［吹雪］：「ええ、湯上がりだから、ちょっと色っぽくなってるから」
［カホラ］：「色っぽいって……男で色っぽさはいらないんじゃないですか？」
［吹雪］：「そんなことないわよ、男でも色っぽさは大事よ？　女の子を誘い出すことができるんだから」
［吹雪］：「……俺は先輩しか興味ないから、それだったら色っぽさはいりません」
［カホラ］：「じゃあ、私だけを誘うような色っぽさを出してちょうだい」
［吹雪］：「自信はないけど、頑張ります」
何だか、今の俺たちはすっかりバカップル状態な気がする。でも、やめることができないのは、バカップルマジックなんだろう。
［吹雪］：「それで、今日はどうしましょうか？」
［カホラ］：「ええ、吹雪が戻ってくる間に、そのことについて考えてたんだけど、やっぱり今日は、実際に調査に行ってみようと思うの。情報を探すのも大事だけど、実際に探索することで何か手が

かりが見つかるかもしれないし、それで見つからなかったら、まだ読んでない資料を探してみることにしましょう」

［吹雪］：「そうですね、俺も同じようなこと考えてました」

以前とは違い、本の中で探索するよりも現場で探索したほうが効率はいいはずだ。

［吹雪］：「今まで色んな発見をしてきた俺たちなら、ひょっとしたら見つかるかも分かりませんし」

［カホラ］：「その可能性に賭けてみましょうか」

［吹雪］：「そうしましょう」

［カホラ］：「じゃあ行きましょうか」

［吹雪］：「今日は、歩いて行くんですか？」

［カホラ］：「ううん、今日もお母さんに連れていってもらうわ」

［吹雪］：「いいんですか？　学園長も仕事があるんじゃ」

［カホラ］：「心配ないわ、今回は秘策があるから」

［吹雪］：「秘策？」

……。

カホラルート・アマービレ（9）

［場所：学園長室］

［カホラ］：「お母さん、お邪魔するわよ？」
［吹雪］：「失礼します」
カホラ先輩の後ろを、俺はついていく。当たり前だけど、学園長室には学園長が在籍していた。
［セフィル］：「ん？　カホラに吹雪……噂のカップル二人組か」
［カホラ］：「今何をしてるところ？」
［セフィル］：「パッと見れば分かるだろう？　仕事の真っ最中だ」
机の上には、結構難しそうな書類がたくさん開かれている。
［セフィル］：「今年の総決算のようなものだ。年末まで終わさないといけないんだ。学園長もなかなか楽じゃないよ、全く」
［カホラ］：「私が入学する前からやってるんだから、そろそろ慣れる頃じゃないの？」
［セフィル］：「そう上手くいかないのが人生なんだよ、毎年毎年しなくてはいけないことは微妙に変わるからな。私は、それに対する順応力が少々不足しているようだ」
［カホラ］：「じゃあ、頑張って身につけないとね」
［セフィル］：「うむ。――それで、二人はどうしてここに来たんだ？　用事がないのなら、私は仕事をしなくてはいけないから」
［カホラ］：「もちろん、お母さんにお願いがあるから来たのよ。なかったらここには来ないわ」
［セフィル］：「……それはそれで寂しい気もするが」
［カホラ］：「お願いっていうのは、私たちを神殿の方に送っていってほしいの。移動にかけてる時間がもったいないから」
［セフィル］：「つまり、私に送迎してほしいと」
［カホラ］：「そういうこと」

［セフィル］：「してあげたいのは山々なんだが、私も今暇じゃなくてな、二人で歩いて行ってもらえるとすごく助かるんだが」
［カホラ］：「ワープにそこまで時間はかからないでしょう？　行って戻ってくるのに１０分もかからないじゃない」
［セフィル］：「そうは言ってもだな、集中力が切れては仕事も捗らないだろう」
［カホラ］：「普段そこまで集中して仕事ができてるの？」
［セフィル］：「さらっと失礼なことを……これでもお母さんは学園で一番若いんだぞ？　集中して仕事をしないと追い出されてしまうぞ」
［カホラ］：「その集中力があるのなら、ちょっとくらいの時間なら取り返せるでしょう？　お願いよ」
［セフィル］：「うーん、そうは言ってもな……」
［カホラ］：「ふふ、じゃあ、これならどうかしら？」
先輩は、ポケットからあるものを取り出した。それは、沢渡家のキーアイテムでもある、あのチョコビスケットだった。

カホラルート・アマービレ（10）

［セフィル］：「そ、それは……しかも5枚も！」
［カホラ］：「お母さんから没収した時に、予備で取っておいたのよ。欲しいでしょう？　前回は一枚しか食べてないはずだから、食べ足りてるわけはないわよね？」
［セフィル］：「く、くれるのか？　それを」
［カホラ］：「あげてもいいわよ？　私たちを送迎してくれたらね」
［セフィル］：「く、そのビスケットで私を釣るというわけか。わが娘ながら何とも恐ろしい手段を」
［カホラ］：「ふふ、用意周到と言ってほしいわね」
なるほど、これが先輩の秘策というわけか。確かにすごく効果的な方法だ。学園長から没収した時からこの方法を考えていたとしたら、先輩はすごい策士と言える。
［カホラ］：「どう？　悪い取引じゃないはずよ？　今日のお母さんのティータイムがとってもリッチになるチャンスよ」
［セフィル］：「う……欲しい、しかし……その送迎の時間は惜しい……」
［カホラ］：「そうやって悩んでいる方が、よっぽど惜しいと思うわよ？　スパっと決めちゃったほうがいいわよ？」
更に誘いかける甘い言葉、これにはさすがに学園長も――。
［セフィル］：「……分かった、送迎するから、そのビスケットを私に譲ってくれ」
［カホラ］：「ふふ、交渉成立ね」
先輩は成功とばかりに、俺に向かってウインクをした。
［カホラ］：「じゃあ、とりあえず3枚あげるわ」
［セフィル］：「残りの2枚は？」
［カホラ］：「迎えに来た時にあげるわ、全部渡しちゃうと、迎えに来なくなる可能性もあるからね」

［セフィル］：「実の母を信頼できないというのか？」
［カホラ］：「保険のようなものよ、信頼してないわけじゃないわ」
［セフィル］：「……そういうところも、わが娘というべきか」
学園長は、首をかしげて唸っていた。とにかくこれで、四季のピアノのところに連れて行ってもらえるぞ。
［セフィル］：「それで？　どこの神殿に連れて行けばいいんだ？」
［カホラ］：「そうね、海風のピアノのところにお願いするわ。その周辺を探索するから」
［セフィル］：「探索ということは……ストーンサークルを探すつもりか？」
［カホラ］：「ええ、そうよ」
［セフィル］：「次の手掛かりを見つけたのか？」
［カホラ］：「その逆、手掛かりが見つからないから、それなら一度現地で探したほうが何かあるんじゃないかと思ったの」
［セフィル］：「なるほど、……そう簡単には見つからないかもしれないが、行動することに意味があるはず、ということか」
［カホラ］：「そういうこと」
［セフィル］：「私も、そういう物事の考え方は好きだぞ。頑張ってくれ、応援してるぞ」
［カホラ］：「ありがとう」
［セフィル］：「吹雪、カホラのこと、よろしく頼むぞ」
［吹雪］：「はい、もちろんです」
［セフィル］：「では行こうか。二人とも、前回と同じように」
……。
……。
……。

カホラルート・アマービレ（11）

［場所：海風のピアノ近辺］

［カホラ］：「さて、どこから探しましょうか」

［吹雪］：「前々回といい、前回といい、普通に考えて見つかるような場所にはなかったですからね。そう考えると、今回も相当捻った場所に隠されてるのが予想されるでしょう」

［カホラ］：「普通の隠し場所じゃないってことは確定よね。だとすると、一番隠すことができそうな場所を見て行った方がいいか。そうなると、最初に見なきゃいけないのは――」

［吹雪］：「森の中ですね」

今までストーンサークルが森の中以外に隠されていなかったことはない。順当にいくのであれば、海風のピアノを守るストーンサークルも、森の中に隠されているかもしれない、と考えてもおかしくないはず。

［カホラ］：「そうなるわよね、どうしても」

［吹雪］：「別に間違った選択ではないと思いますよ。俺もそう考えてました」

［カホラ］：「でも、ヒントがないって言う現実は結構厳しいわね。正しく手探り状態だから、何処から調べていけばいいのか」

［吹雪］：「あきらめない心が、今の俺たちには大事だと思いますよ。絶対見つけるっていう意思が通じれば、四季のピアノが道を広げてくれるかもしれません」

［カホラ］：「確かに、そうかもしれないわね。最初から弱腰じゃあ見つかるものも見つからなくなるか……うん、そうするわ。根気よく探しましょう」

［吹雪］：「はい、頑張りましょう！」

［カホラ］：「それじゃあ、ひとまず、森に向かおっか」

カホラルート・アマービレ（12）

草の根を掻き分けてというのは、正にこのことを言うんだろう。神殿近辺の森にやってきた俺たちは、見零しのないように、地面を這いながらストーンサークルの手掛かりを探していた。今この状況を見た人はコンタクトを落とした現場のように思うかもしれないが、断じてそういうわけではない。俺たちは必死に探している最中なんだ。

［カホラ］：「実は地面を掘っていくと、地下に空間が、とかいうことはないかしら？」

［吹雪］：「それはない……って言いたいけど、今までがそれくらいの場所にありましたから、言い切ることはできないですね」

［カホラ］：「今日は地面を睨めっこして終わるかもしれないわね」

［吹雪］：「でも、確実に次につながるアクションだと思いますよ」

［カホラ］：「そうね、行動することに意義があるものね」

［吹雪］：「その通りです」

［カホラ］：「そう考えると、ピアリーはすごいわよね。何の手掛かりもなしに、二つのストーンサークルを見つけ出したんだから」

［吹雪］：「相当、目の付け所がよかったんですかね」

［カホラ］：「それとも、何年も何年も歩き続けて発見したのか」

［吹雪］：「どっちにしても、その探究心はすごいですね」

［カホラ］：「私たちも見習いたいわね、その心は」

［吹雪］：「今さらなんですけど、ピアリーはこの研究を一人でやっていたんですか？　よく本とかに載ってる学者って、助手とかと一緒にやってるケースがありますよね？」

［カホラ］：「ひょっとしたら、いたのかもしれないけど、資料には助手がいたことをほのめかすような文章は見当たらなかったわ。研究をした、発見した、というのがほとんどよ。学者は独りよがりの部分が強いから、一概にそうとは言えないと思うけど、助けてく

れる人がいないっていうのは確かに心細いわね。その点、私は心配ないわね。何と言ったって、自分の一番好きな人が助手についてくれてるんだから」

［吹雪］：「お、お褒めに預かれて恐悦至極です」

［カホラ］：「吹雪がいてくれれば、孤独なんていう敵に負けることは決してないわ」

［吹雪］：「それは俺も同じです、先輩が横にいてくれたら、孤独なんて怖くありません」

［カホラ］：「やっぱり、誰かと一緒に作業するっていうのは素敵ね。喜びを分かち合うってことは、次へのステップになるものね」

［吹雪］：「お互いに、勇気を与えることができますからね」

［カホラ］：「吹雪にもらった勇気を無駄にしないためにも、何とかして見つけたいわね」

［吹雪］：「俺も同じです、先輩の勇気を無駄にしないために、見つけ出したいです」

――このサイクルが、しばらく続く予感がする。

でもそれも、決して無駄な時間ではない。

……。

カホラルート・アマービレ（13）

［吹雪］：「はあ……」
腰をトントンと叩きながら地面とひたすら睨めっこを続ける。この体勢もちょっと疲れてきたな。
［カホラ］：「今の行動、おじいちゃんみたいよ？　吹雪」
［吹雪］：「今ならおじいちゃんの気持ちが理解できる気がします」
［カホラ］：「ふふ、そうね。――ふう、ちょっと疲れたわね」
そう言いながら先輩も自分の腰を叩いた。どうやら先輩も、俺と同じ症状が出ているらしい。
［吹雪］：「休憩しましょうか？」
［カホラ］：「それがいいわね、このまま続けたら、この体勢のまま固まっちゃいそうだし」
先輩はゆっくりと上体を起こして立ち上がった。
［カホラ］：「何だか、一気に景色が広がったわね」
［吹雪］：「――よいしょ」
グキッ。
［吹雪］：「うっ！？」
［カホラ］：「だ、大丈夫？　すごい良い音がしたけど」
［吹雪］：「た、多分大丈夫です。折れてはいないはずです」
［カホラ］：「そ、そうよね。折れてたら悲鳴くらいは上がるはずだし」
ちょうどいい休憩ポイントを見つけ、俺たちは腰を下ろした。
［カホラ］：「四足歩行は楽じゃないってことを再認識したわ」
［吹雪］：「二足歩行が一番ですよ、やっぱり」
［カホラ］：「そうね。――はあ」
ため息をついて、肩をトントンと叩いた。
［吹雪］：「よかったら揉みましょうか？　肩」
［カホラ］：「吹雪も疲れてるでしょう？　無理しないでいいわよ」

［吹雪］：「先輩の疲れてる姿を見てるほうが俺にとっては無理です。やらせてください」
［カホラ］：「――じゃあ、お願いしようかしら」
［吹雪］：「任せてください」
先輩の背中に回り込んで、肩に手を伸ばす。
［カホラ］：「ん……上手ね、吹雪」
［吹雪］：「昔、よく家族にやってましたから。その感覚がまだ指に残ってたみたいです」
［カホラ］：「そっか、親孝行息子だったのね、吹雪は」
［吹雪］：「その頃は親孝行ってことを知らなかったんで、ただ喜んでもらいたい一心でやってたというか」
［カホラ］：「今も、世直しの最中だったかしら？　吹雪のお父さんとお母さんは」
［吹雪］：「そうですね、連絡はないですけど、多分どこかで頑張ってると思いますよ」
聞く人によっては、馬鹿馬鹿しいことかもしれない。その気持ちも分からなくない、何故なら世直しだ、当て所のない旅、そう呼ぶこともできなくはない。でも、両親は本気でこの世界の平和を守るために、確固たる決心で旅立って言ったんだ。だから俺も、本気で応援する義務がある。

カホラルート・アマービレ（14）

［カホラ］：「寂しくはない？」
［吹雪］：「ないって言えば嘘になりますけど、泣きたくなるほどではないです。今は、みんなもいるし、それに――先輩が傍にいてくれますから」
［カホラ］：「嬉しいこと言ってくれるわね」
［吹雪］：「本当のことですよ、お世辞のつもりはありません」
［カホラ］：「寂しくさせないように、頑張らないとね」
［吹雪］：「今のままの先輩でいてくれるだけで、俺は満足ですよ」
［カホラ］：「そう言ってくれるのはありがたいんだけど、どうせなら吹雪の期待以上の私を見せたくなるのよね」
［吹雪］：「き、期待以上ですか？」
［カホラ］：「具体的にどうすればいいのかは分からないけど、吹雪の目に良く映りたいなって思うの」
［吹雪］：「その気持ちだけで俺は十分ですけど」
心の底から、今のままの先輩でも魅力的だと言えるからな。
［吹雪］：「自分に自信をもっていいと思いますよ？　俺が保障します」
［カホラ］：「――日に日に口が上手くなってきてるわね、吹雪」
［吹雪］：「先輩の前でしか、こんなことは言いませんよ？　俺は」
［カホラ］：「大丈夫、ちゃんと分かってるから、ふふ」
そういう先輩も……と言いたいところだけど、笑顔がかわいかったからそれは保留することにした。
［吹雪］：「ちょっと指圧しますね」
［カホラ］：「ええ」
親指に力を込めて、先輩のツボを突いていく。
［カホラ］：「ん、気持ちいい」
［吹雪］：「それは何よりです」

［カホラ］：「ん～……」
［吹雪］：「何ですか？　先輩」
急に振り向き、上目遣いで俺を見てきた。
［カホラ］：「ちょっと前から思ってたことなんだけど」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「吹雪はさ、いつまで私のことを『先輩』って呼ぶの？」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「ほら、私たち付き合ってるでしょう？　私は吹雪って下の名前で呼んでるけど、吹雪は先輩って呼んでるでしょう？　別に嫌ってわけじゃないんだけど、名前で呼んではくれないのかなーってちょっと疑問に思って」
［吹雪］：「あー、それですか」
［カホラ］：「そういう反応するってことは、吹雪も悩んでたってこと」
［吹雪］：「そうですね、悩んでましたね」
隠してもしょうがないから素直に言うことにした。

カホラルート・アマービレ（15）

［吹雪］：「呼んだほうがいいのかなって思ったんですけど、やっぱり先輩は年上だし、急に下の名前で呼んだら、ちょっとおかしくなるかなって不安だったので」
［カホラ］：「呼ぶに呼ぶことができなかった？」
［吹雪］：「はい」
［カホラ］：「気にすることなんてないのに」
［吹雪］：「でも、好きな人でもあり、尊敬する人でもありますから」
［カホラ］：「気持ちは分かるけどね、私が吹雪の立場だったら同じところで悩んでる気はするし。でも、別に不安になることなんてないよ。むしろ、恋人同士なんだから、そういう観念は排除して考えてもいいと思うわよ。というわけで、一回私のこと、名前で呼んでみて？　どんな感じになるのか気になるから」
［吹雪］：「い、今ですよね」
［カホラ］：「ええ、今よ」
［吹雪］：「わ、分かりました」
何でだろう、本人の許可が出ているのにちょっと緊張するな。
［吹雪］：「い、いきます」
［カホラ］：「うん」
［吹雪］：「……か、カホラ」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「ど、どうですか？」
［カホラ］：「うん、すっごくキュンってきちゃった」
そしてクスクスと笑い出した。
［カホラ］：「これからは、名前で呼んでくれるかしら？　名前で呼んでもらえるほうが、恋人なんだって感じがするから」
［吹雪］：「わ、分かりました」

［カホラ］：「あ、敬語も禁止。名前で呼んでるのに丁寧語っていうのは余所余所しいでしょう？」
［吹雪］：「さ、際ですか」
［カホラ］：「ええ、よろしく」
［吹雪］：「ま、参ったな……」
少しずつ慣れていくしかないか。でも、確かに敬語じゃないほうがちょっと近づいた感じはするかもしれない。
……これからの課題だな。
［吹雪］：「つ、続けるね、カホラ」
［カホラ］：「うん」
変に意識することを防ぐために、俺は肩を揉むことに心血を注いだ。
［カホラ］：「ん、そこ、気持ちいい」
［吹雪］：「確かに、ここは凝ってるみたいだね」
［カホラ］：「そういうのも分かるんだ」
［吹雪］：「何となくだけどね、ちゃんと柔らかくなるようにするよ」
カホラがそう言った部分を重点的に指圧していく。
［カホラ］：「はあ、それ、すごく良い感じ」
感想を耳にしながら、俺は作業に没頭する。
……。

カホラルート・アマービレ（16）

［吹雪］：「こんなところかな？　どう？　肩の調子は」
［カホラ］：「さっきと比べて全然軽くなったわ、生き返った感じよ」
［吹雪］：「よかった、また痛くなったら、いつでも言ってよ、やってあげるからさ」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「？　ど、どうかした？」
［カホラ］：「う、うん……ちょっと、吹雪にお願いがあるんだけど」
［吹雪］：「な、何？」
［カホラ］：「もう一カ所、揉んでほしいところがあるの」
［吹雪］：「揉んでほしいところ？　まだ痛いところがあった？」
［カホラ］：「ううん、肩はもう大丈夫。揉んでほしいのは……」
そう言うと、カホラは俺の手を掴んだ。そして、導くその先は――。
［吹雪］：「っ！？　か、カホラ！？」
［カホラ］：「ん……ダメ、かしら？　こんなことお願いするの」
熱っぽい目線を俺に向けてくる。導かれた腕の場所は、カホラの大きな胸だった。
［カホラ］：「実は、さっきから我慢してたのよ。吹雪の指の動きが、ずっと気になってて……でも、吹雪は真剣に私の疲れをとるのに一生懸命だったから、言うに言い出せなくて……だから我慢しようって思ったんだけど、限界が来ちゃったみたい」
［吹雪］：「ぐ、具体的にはいつから？」
［カホラ］：「……吹雪が私の名前を呼んでくれた時」
……言われてみれば、確かにちょっとそんな空気は感じたかも。
［カホラ］：「もう、胸の高鳴りが抑えられなくて……聞こえるでしょう？　私の心臓の鼓動」

手を内側から押し上げる胸の奥から、ドクドクと心臓の音が伝わってきた。

［吹雪］：「本当だ……」

［カホラ］：「お願い、吹雪……」

［吹雪］：「でも、こんな場所で……」

［カホラ］：「大丈夫よ、誰も来ないわ、こんなところなんて……それに……帰るまでなんて、待ってられないよ」

すでに気持ちが出来上がっているカホラ、その様子を見るだけで、俺も気分が高まってくる。

［カホラ］：「しよう？　吹雪」

気付けば野外などという心配は何処かへ吹き飛び、俺はカホラの言葉に嬉々としてうなずいていた。

……。

カホラルート・アマービレ（16）（後書き）

この後の展開は、言わずもがな……
続きも読んでくれるという人は
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１７３５ｔ／
こちらをよろしくお願いします。

カホラルート・アマービレ（17）

［カホラ］：「――今日の探索はここまでね。予想以上に体が言うこと聞かなくなっちゃった」
［吹雪］：「そうだね」
［カホラ］：「……つい情欲に流されてしちゃったけど、もうちょっと考えてするべきだったかな。確かに、すごく気持ちよかったけど、終わるはずの探索が終わらなかったし」
［吹雪］：「次に活かしていければいいんじゃない？」
［カホラ］：「……実はその吹雪の優しい言葉が、私を誘惑してたりしてね」
［吹雪］：「え？　そうなの？」
［カホラ］：「冗談、冗談。本気にしないで、次はちゃんと探索しないとね」
［吹雪］：「う、うん」
［カホラ］：「さあ、迎えを呼びましょうか」
――結局はデートのような一日だったな。明日はしっかり頑張らないと。

カホラルート・アモロサメンテ（1）（前書き）

個別ルートも半分を過ぎました。
もうしばらくお付き合いください。

カホラルート・アモロサメンテ（1）

12月27日（月曜日）

［場所：海風のピアノ近辺］

――そして、昨日の続きをしている俺たち。どうやら地面に手掛かりらしいものは見当たらなかった。探索場所を切り替え、今は生い茂った木々を中心に見ていっている。

［カホラ］：「何もないところから何かを見つけるって、こんなに大変なことだったのね」

［吹雪］：「同感。案外簡単に見つかるかもって考えてた俺はすごく浅はかだったよ」

［カホラ］：「大丈夫よ、私も思ってたから」

［吹雪］：「冷静に考えたら、そんなことあるわけないんだよね。だって、見つかってないんだから」

何てこともない。

［カホラ］：「でも、それを発見できたら、かなりこの島としては大きな発見になるわよね」

［吹雪］：「ひょっとしたら、カホラが未来の歴史の教科書に載ってるかもしれないね」

［カホラ］：「そ、そこまで大きなことかしら？」

［吹雪］：「俺はそうなったら鼻高々だけどね、歴史に名を連ねた人と付き合ってるって自慢できるし」

［カホラ］：「じ、自慢したいの？　吹雪は」

［吹雪］：「それも悪くないかもしれない」

［カホラ］：「以前仲間内に知られた時はあんなに慌ててたのに」

［吹雪］：「あれから考えが変わったみたいで、カホラを恋人にできたってことは実はすごいことなんじゃないかって思うようになっ

てきたんだ」
［カホラ］：「別にすごいことでもないでしょう？」
［吹雪］：「だって、容姿端麗で勉強できて、それでいて優しいでしょう？　付き合いたいって思う男はたくさんいるはずだから。そのたくさんの可能性がある中で、カホラは俺を選んでくれたんだから。これは相当すごいことだよ」
［カホラ］：「……一見可能性はたくさんあるように見えるけど、私がその可能性から吹雪を選んだのは必然のようなものだったわよ」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「確かに、男の子から声をかけられることはあったけど、私、異性と話すのはそこまで上手じゃないの。テキトーに返事をして、席に戻ることがほとんどだったわ。その時点で、仲の良い異性は一気に絞られるでしょう？」
［吹雪］：「……ちょっと意外だな、それは」
［カホラ］：「突然話しかけられるってことになかなか慣れることができなくてね。そういう場が設けられてるなら問題ないんだけど」
［吹雪］：「気持ちはすごく分かるよ」
俺も、突然のことに慣れることはできない。
［カホラ］：「だから、普通にしゃべれる異性の友人は5人もいなかったのよ。で、他の男の子はみんな部活が違う……ここまできたらもう確実でしょう？」
俺の目を見ていつもの微笑み。
［吹雪］：「嫌われるようなことをしなくてよかった」
［カホラ］：「嫌われるようなことなんてできないでしょう？　吹雪は」
［吹雪］：「故意的には、ね。……無意識では、あるかもしれない」
［カホラ］：「それは、そうかもね」
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「吹雪、ちょっと鈍感なところがあるから」
［吹雪］：「え？　例えば？」

［カホラ］：「……これは言っても分からないと思うから言わないでおくわ。言ったら言ったで、困惑するだろうから」
［吹雪］：「？」
［カホラ］：「気にしないでいいわ」
［吹雪］：「何なんだ？　一体……」
［カホラ］：「そんなことよりも、探すことに集中しましょう。今日は以前の遅れを取り戻すことを目標に来たんだから」
［吹雪］：「ああ、そうだね」
誤魔化された感じもするけど……まあいいか。
……。

カホラルート・アモロサメンテ（2）

［カホラ］：「結局見つからなかったか」
［吹雪］：「何度も言ってるけど、しょうがないことだよ」
［カホラ］：「そうなんだけどね、でも、ちょっとヘコんじゃうわ」
気持ちは分かる、探しても見つからないってことは、努力が報われてないということだから。今日は歩いてきたから、帰りも歩きだ。
歩く速度を合わせて二人寄り添って歩く。
［カホラ］：「切り替えてかないと」
［吹雪］：「うん、そうそう」
元気を出させるために、肩をポンポンと叩く。
［カホラ］：「ふふ、ありがと吹雪。――私、最近目標ができたの」
［吹雪］：「目標？」
［カホラ］：「うん、この探索に関してなんだけど」
［吹雪］：「うん」
［カホラ］：「できれば、今年が終わるまでに完成させたいなって思うの」
［吹雪］：「今年が終わるまでって……後４日しかないけど」
［カホラ］：「ええ、そうね」
［吹雪］：「……こんなこと言っていいのか分からないけど、かなり難しいんじゃないか？　それは」
［カホラ］：「確かにそうかも。でも、今年が終われば、吹雪はまた普通の学園生活に戻るでしょう？　授業も朝から夕方まで、思うように時間も取れなくなる。一緒に探すことができなくなっちゃうじゃない」
［吹雪］：「予定を空けさえすれば、それくらい」
［カホラ］：「無理はしちゃダメよ、学生の本分は勉強、私のは趣味の延長線だから、優先されるべきは学校のことでしょう」
正論だから、何も言い返せない。

［カホラ］：「でも、ここまで調査を進めることができたのは、吹雪が一緒に付き合ってくれたおかげ、だから、最後に分かる結果も、吹雪と一緒に見れたらって思うの。この調査を通して、私は吹雪と一緒になれたから、今でも十分忘れられない思い出だけど、どうせならもっともっと大切な日々にしたいから」

［吹雪］：「……そこまで言ってもらって、無理だよ、何て言えないね。だとしたら、俺も頑張らないと」

［カホラ］：「ふふ、やっぱり目標を持つって大事ね。モチベーションにかなりの違いがでるわ」

［吹雪］：「俺も、漠然とした目標よりも、目の前に迫ってる目標があるほうが燃えるよ」

［カホラ］：「ふふ、本当に、吹雪の目、ギラギラ光ってるわ」

［吹雪］：「当たり前だよ、好きな人があんなことを言ってくれたんだ。頑張れないわけがないよ」

俺たちが燃え上がったとしても、隠されたストーンサークルが見つけやすくなるわけじゃない。だけど、信じて続ければ結果が出ることはすでに実証積みだ。今回だって一緒だ、成果が出るまで、あきらめないで続ける、これが、一番大事なこと。

［吹雪］：「カホラの目標達成は、俺の目標達成でもある。今年最後、大きな目標をクリアしよう」

［カホラ］：「うん、そうね。……ピアノの練習もこの勢いでやらないと」

［吹雪］：「その勢いを見せたら、ピアノが何かヒントを教えてくれるかもしれないよ」

［カホラ］：「あはは、そうね、今度聞いてみようかしら」

――太陽の傾きかけた帰り道、俺たちの今年最後の目標が決まった。期限まで後４日、４日だけと考えるか、４日も、と考えるか、もちろん後者に決まってる。全力を尽くすことを、俺は固く誓った。

カホラルート・アモロサメンテ（3）

12月28日（火曜日）

［場所：海風のピアノ近辺］

――というわけで、目標を掲げて実質初日。俺たちは神殿近辺の探索にやってきた。これは、カホラと話し合って決めたことだ。遡って、30分前のことだ。

……。

［吹雪］：「今日はどうする？　カホラ」

［カホラ］：「残ってる時間を有効に使うためにも、今日は二手に分かれて調査を進めていこうと思うの」

［吹雪］：「二手に分かれて？」

［カホラ］：「ええ、一方は昨日と同じ、神殿近辺の探索、もう一方は古書室で残った資料の分析をするの。二人で一緒に探すことができないのが残念だけど、こっちのほうが時間を有効に使えると思うから。何か分かったら、お互いに連絡する形を取りましょう」

［吹雪］：「俺が、神殿近辺の探索ってことでいいのかい？」

［カホラ］：「ええ、疲れちゃうかもしれないけど、現地探索は体力がある人がしたほうがいいはずだし、それに、吹雪は資料がまだまともに読めないでしょう」

［吹雪］：「……俺には探索しか道は残されてないってことだね」

［カホラ］：「そうなるわね、こんな感じで大丈夫かしら？」

［吹雪］：「無問題だよ」

［カホラ］：「吹雪ならそう言ってくれると思ったわ」

［吹雪］：「あ、カホラ、それにあたってだけど、何人か助っ人を雇ってもいいかい？　一人であそこを探すよりも人数がいるほうが効率が上がると思うから」

［カホラ］：「助っ人って、一体誰？」
［吹雪］：「祐喜と舞羽。あいつらには俺たちが調査してることを知ってますし、変に噂したりはしないと思うから」
［カホラ］：「そうね、あの子たちなら問題ないわね。うん、いいわよ、人手は多いに越したことはないから」
［吹雪］：「よし、じゃあ早速行ってくるよ」
［カホラ］：「気を付けてね、行ってらっしゃい」
……。

カホラルート・アモロサメンテ（4）

そんな経緯があって、俺たちはここにやってきた。ちなみに送迎は学園長、カホラが以前と同じ手を使って話をつけてくれた。

［吹雪］：「感謝するぜ、二人とも」

［祐喜］：「気にしなくていいよ、友達だろう？　僕たちは」

［舞羽］：「そうだよ、良くしてもらったカホラ先輩に、恩返しをしたいと思ってたし」

［愛海］：「そうそう、どんどん私たちに頼りなさい」

［吹雪］：「……何で日野がここにいるんだ？」

［愛海］：「さっきもそれ聞かなかったっけ？　大久保くん」

［吹雪］：「今一度確認しておこうと思ってな、俺、お前を探索には誘ってなかったよな」

［愛海］：「そうよ、私と大久保くんの仲にも関わらず、私にだけ召集がかからなかった」

［吹雪］：「いや、翔にもかけてないから日野だけではないぞ」

［愛海］：「どっちだって一緒よ、どうして誘ってくれなかったのよ～」

［吹雪］：「……理由など言わなくても」

［愛海］：「随分ストレートね……心にヒビが入りそう」（

［舞羽］：「ごめんね、吹雪くん。ちょうど電話がかかった時、愛海と一緒にいたから」

［吹雪］：「ああ、舞羽は気にしなくていいんだ。むしろ迷惑かけてごめんな、ピアノの練習して夜に備えて休みたいだろうに」

［舞羽］：「いいんだよ、ただじっとしてるだけより、こっちのほうが健康的だから」

［吹雪］：「助かるぜ、本当に」

［愛海］：「……あの、大久保くん、私の話は？」

［吹雪］：「ああ、そうだったな」

［愛海］：「ナチュラルに忘れられるところだったわ……」
［吹雪］：「正直、人手は多いほうが助かる。日野が良いのであれば、俺も力を貸してほしい。――がだ」
［愛海］：「が？」
［吹雪］：「このことを、年明け早々みんなに言い触らしたりするのであれば、即刻お帰り願うぞ。言い触らしたりしないことを約束してくれれば、俺は喜んで日野の手をかりたい」
［愛海］：「大久保くん、私がそんなことをすると思うの？」
［吹雪］：「思わなければ忠告しないし、最初から探索に召集かけてる」
［愛海］：「信頼ないのね、私……」
［舞羽］：「日頃が、日頃だからね……」
［愛海］：「親友にすらそんな激苦の一言……くう、今年最後の大打撃ね」
［吹雪］：「で？　どうするんだ？　日野」
［愛海］：「決まってるでしょう？　是非、私にも手伝わせて。二人には色々お世話になってるし、役に立ちたいって思ってたから。それに、冬休みに入ってから暇で暇で仕方なかったの。これはその流れを断ち切るのににとても適したイベントだわ」
［吹雪］：「俺の忠告は飲んでくれるんだろうな？」
［愛海］：「もちろんよ、守ることはちゃんと守るから安心して」
［吹雪］：「信じるからな、その言葉を」
［愛海］：「ええ、信じて」
［吹雪］：「ならよし、じゃあ三人とも、今日はよろしく頼む」
［三人］：「オーっ！」
［吹雪］：「さっき説明したけど、普通に探して見つかる場所じゃないから、自分が思う限界まで可能性を広げて探してくれ。何か気になることがあったらすぐに知らせてくれ。それじゃあ、探索開始ー」
［愛海］：「わー」

［吹雪］：「日野、お遊戯会じゃないんだからな」
［愛海］：「心配なし、ちゃーんと探すわー」
あいつは相変わらずだな、まあ変わってたら逆に驚くけど。
さて、俺は――そういえば、神殿のほうはまだ見てなかったな。何もないかもしれないが、一応見てみるか。
俺は踵を返して神殿に向かう。

カホラルート・アモロサメンテ（5）

……。

［吹雪］：「さすがの存在感だな」

いつどんな時に来てもそう思えるから、神殿というに相応しいのかもしれない。ここは海風のピアノが設置されてる神殿か。今は冬だから涼しさは伝わってこないが、でもここの北風は何となく爽やかな感じがする。

神殿の中には入れないから、外観をチェックしてみるか。桜花、風花と何もなかったから、きっとここも何もないと思うんだが……。

［吹雪］：「そんな油断が命取りになるのは避けなければ」

俺は外観を舐めるように観察する。

……。

どうやら俺の予感は悪い意味で当たったらしい。前回、前々回と同様、特に手掛かりらしい手掛かりは見つからなかった。あったのはあまり目立たない外壁の細かな傷くらい。でもまあ、これでここにはストーンサークルは隠されてないってことが分かったわけだし、ポイントを一つ減らすことはできたか。俺も向こうに戻って探すとしよう。

［吹雪］：「じゃあ、お邪魔しました。失礼します」

言う必要はないのかもしれないけど、一応頭を下げておいた。特に理由はない。

……。

［吹雪］：「どうだ？　そっちのほうは？」

［祐喜］：「まだ目立って怪しいところはないかなー、すごく土の質感が良いってことは分かったけど」

［吹雪］：「了解した」

［祐喜］：「分かったらすぐに知らせるよ」

やっぱり一人よりもこっちのほうが頑張れる気持ちになるな。俺も

精一杯探すぞ。

……。

……。

……。

［吹雪］：「――もう日も暮れるな」
そろそろ帰り支度を始めたほうがよさそうだ。
［吹雪］：「おーい、みんな、そろそろおしまいにしよう」
［祐喜］：「分かったー」
［舞羽］：「あ、もうそんな時間だったんだ」
どうやら時間を忘れて探してくれていたらしい。
［舞羽］：「愛海、そろそろ終わりだよー」
［愛海］：「後ちょっとでこっち見終わるから、もう少し待ってー」
［祐喜］：「ふう」
［吹雪］：「お疲れ。何か見つかったか？　――って言いたいけど、あったらとっくに報告してるか」
［祐喜］：「残念だけどね。吹雪のアドバイス通り、舐めるように調べてはいたんだけど」
［舞羽］：「見つけられなかったよ」
［吹雪］：「まあしょうがないか。今回のエリアにはないってことだけでも収穫だな」
［祐喜］：「発見慣れしてる吹雪より先に見つけて、驚かせてやろうって思ってたんだけど、そうは問屋が降ろさなかったみたいだよ」
［吹雪］：「実際、ちょっと思ってただろう？　そんなに見つからないわけがないだろうって」
［祐喜］：「そうだね」
［舞羽］：「う、うん」
二人は顔を合わせて苦笑いする。
［舞羽］：「楽じゃないってこと、身を持って実感しました」
［吹雪］：「そうなんだよ、俺も最初は二人と同じ考えだったからな。でも、カホラの話と初調査に行った時に、ようやくそれを実感したんだ。きっとテレビとかでやってる宝探しよりよっぽど難しい

はずだ」
［祐喜］：「じゃあ、これでストーンサークルを見つけられたらトレジャーハンターも夢じゃないかもしれないね」
［吹雪］：「確かに、多少の才能はあるかもしれないな」
［舞羽］：「トレジャーハンターになりたいの？　祐喜くんは」
［祐喜］：「ううん、全然。それは趣味であって本業にしていいものじゃないと思うから」
［吹雪］：「同感だ、そんな仕事で食っていけるほど世の中甘くないからな」
［舞羽］：「吹雪くん、何だか悟ってるね」
［吹雪］：「ただ現実を受け止めてるだけさ」
［愛海］：「おーい、お待たせー」
夕日に照らされる中、日野が遅れて戻ってきた。
［吹雪］：「何か手がかりは？」
一応聞いてみることにする。案の定日野は首を横に振った。
［愛海］：「指示通りに見て回ったけど、これといって目に留まるようなものは見つからなかったわ。ごめんね」
［吹雪］：「いや、いいんだ。想定の範囲内だからな」
とは言っても、収穫がないのは少々手痛いが……。
［祐喜］：「吹雪、明日はどうするんだい？」
［吹雪］：「ああ、明日も調査はする予定だ」
［祐喜］：「よかったらさ、明日も手伝わせてよ。どうせやることもないしさ」
［吹雪］：「い、いいのか？　今日突然頼んだんだし無理に手伝おうとしなくても……」
［祐喜］：「吹雪はそういうところ、ちょっと固いよね。気にすることないんだって、友達でしょう？　友達、こういう時くらいは頼ってくれないとさ。ね？　二人とも」
［舞羽］：「うん、結構楽しかったしね」
笑顔でそういうのは舞羽。

［愛海］：「私も、大久保くんの心からのありがとうが聞けるまでは付き合うつもりよ」
［吹雪］：「それはありがたい。じゃあ、頼むな、三人とも」
［祐喜］：「もちろん」
［舞羽］：「頑張ろう」
［愛海］：「ええ」
［吹雪］：「――ところで日野、さっきから気になってたんだが、その手に持ってるの何だ？」
［愛海］：「ん？　ああ、これね」
［舞羽］：「あ、そ、それ、ひょっとして――」
普段は大人しい舞羽が、急に大きい反応を示した。

カホラルート・アモロサメンテ（7）

［舞羽］：「じ、自然薯だよね？　きっと」
［吹雪］：「自然薯？　あれだよな、天然の山芋のことだよな」
［祐喜］：「……確かに自然薯だね、これは。結構長いし、山芋独特の匂いもする」
［舞羽］：「どうしてそれを愛海が持ってるの？」
［愛海］：「探索して、向こうのポイントが終わったから場所を変えようって思ってた時に何か地面から飛び出してるの見つけて、ちょっと掘って引っ張ってみたら引っこ抜けたの」
［吹雪］：「……普通自然薯って引っこ抜けるものじゃないよな」
［愛海］：「でも、抜けたわよ、ちゃんと。きっと私の掘り方がよかったのね」
［吹雪］：「自画自賛かよ。……ということは、さっき遅れてやってきたのはそれを掘ってたからなのか？」
［愛海］：「あはは、……そんな時間はかけてないわよ」
［吹雪］：「お前って奴は……まあいい。本当なら今日中にあの一帯は終わらなかったかもしれないから大目にみよう。というか、それ、舞羽に分けてやってくれないか？　目の輝きがちょっとおかしい」
［愛海］：「え？　あ……」
［舞羽］：「いーなー、自然薯。調理してみたいなー」
料理人として、自然薯はかなりポイントの高い食材なのかもしれない。こんなに目をキラキラさせている舞羽を見るのは、子供の時以来かもしれない。
［舞羽］：「いーなー」
［愛海］：「い、いいわよ舞羽。私、そこまで自然薯に興味ないから、あげるわ」
［舞羽］：「え？　い、いいの？」

［愛海］：「ええ、美味しく調理してみんなに食べさせてあげて」
［舞羽］：「やったー！　ありがとう愛海！」
［愛海］：「自然薯のおかげで、久々に舞羽に感謝されたわ」
［吹雪］：「普段のお前って一体何なんだよ」
［愛海］：「親友よ、親友」
［舞羽］：「ふふ、自然薯、自然薯♪」
すっかり自然薯の虜になってしまったようだ。今日の料理当番を変わってほしいって杠に報告しておいたほうがよさそうだ。
［吹雪］：「じゃあ明日の予定が決まったらまた連絡するよ。今から迎えを呼ぶから」
――明日は、何か発見があるといいな。

――そして帰路に着くと同時に舞羽は家庭科室に向かい、楽しそうに調理を始めた。そんな夕食は山芋料理のオンパレードで、俺たちは想定外の食材で腹を満たした。

カホラルート・アモロサメンテ（8）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「――というわけで、ストーンサークルは見つからなかった」

［カホラ］：「手ぶらじゃなくてよかったじゃない。思わぬ食材に有り付くことができてラッキーだったわ」

［吹雪］：「確かに美味しかったけど、それだと本来の目的が……ね」

［カホラ］：「舞羽、すごく嬉しそうに料理してたし。よっぽど自然薯が嬉しかったのね」

［吹雪］：「うん、俺もすごく久しぶりに見たよ、舞羽のあんな弾けた姿」

［カホラ］：「舞羽を弾けさせたい時は、これからは自然薯が必要ね」

［吹雪］：「そ、それはそれでちょっと違うような気も……」

［カホラ］：「ふふ、まあ問題なく終わって、一先ずは安心したわ」

［吹雪］：「うん、カホラのほうはどうだった？　何か手がかりは？」

［カホラ］：「あったら些細なことでも連絡する予定だったんだけどね……」

苦笑いが全てを物語っていた。

［カホラ］：「今日一日かけて、お母さんから受け取った学者の資料は読み終えたんだけど、やっぱり同じようなことしか書いてなくて、初めて知るような情報は載ってなかったわ」

［吹雪］：「今の状況を変えることはできないか」

［カホラ］：「こういうことは去年から繰り返していたし、慣れてはいるけどね。ただ、この状況は早い内になんとかしたいわね」

［吹雪］：「それなんだけどさ、俺、明日は月影のピアノのほうの調査に行ってみたいんだ。今日、近辺を一通り見たつもりなんだけど、目立った発見はなかったから。だから一先ず、全ての神殿近辺を当たってみたほうがいいかなって思うんだ」

［カホラ］：「そうね、一カ所だけ見ないっていうのも何だかスッキリしないしね。うん、分かったわ、じゃあその流れでお願いするわ」

［吹雪］：「カホラはどうする？　もう調べる資料がないんじゃ」

［カホラ］：「探せばまだあるかもしれないわ。明日は空いた時間で古書室の本を片っ端から読んでいってみるわ。ひょっとしたら何かあるかもしれないし、やれることはやっておこうと思って」

［吹雪］：「ひょっとして、古書室全ての資料を読み終えちゃうかも？」

［カホラ］：「それはさすがにないわよ、もう少し時間をもらわないと」

［吹雪］：「時間が余っていればできちゃうんだね……」

［カホラ］：「ふふ、人間、やる気になればなんでもできるものよ」

［吹雪］：「はは、そうかもね。じゃあ、明日はそんな感じで行ってくるよ」

［カホラ］：「ええ、肉体労働ばっかりで悪いけど、よろしくお願いするわ」

［吹雪］：「うん。……あ、そうだ、カホラ」

［カホラ］：「ん？　なーに？」

［吹雪］：「その……今こんなことを言うのはおかしいかもしれないんだけど、仮に、今年中に見つからなかったとしても、俺はカホラが手伝ってほしかったらいつでも手伝うつもりだから。いつもの学園生活に戻って時間が取れないかもしれないけど、俺が一番力になりたい人はカホラだから。それを、分かってほしい」

［カホラ］：「――そういうところよね、私が吹雪を好きになった理由は」

［吹雪］：「これくらい当たり前のことだよ」
［カホラ］：「うん、嬉しいわ。私、この学園を卒業するまでは、この調査は続けるつもりだから、お願いする時はあるかも」
［吹雪］：「あるかもじゃなくて、たくさん頼ってほしい」
［カホラ］：「うふふ、本当に積極的になったわね、吹雪」
［吹雪］：「カホラのことだから、当然さ」
［カホラ］：「じゃあ、いっぱい頼むようにするわ。でも、あくまで私たちの目標は今年中に調査の完成だから、それを忘れちゃダメよ？」
［吹雪］：「うん、明日も全力でやってくるつもりだよ」
［カホラ］：「吉報、待ってるわね」
［吹雪］：「うん！」
［カホラ］：「――吹雪、最後に、いいかしら？」
ちょっと顔を横に向けた後、カホラは目を閉じて顔を上げた。それが何を意味してるかは、すぐに分かった。
［カホラ］：「……ん」
肩を抱き寄せ、俺はカホラの唇を塞いだ。
［カホラ］：「ん、ちゅ……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「はあ、ありがと」
［吹雪］：「これくらい、お安い御用さ」
［カホラ］：「吹雪も、キスが好きなのね」
［吹雪］：「カホラとすること限定だけどね」
［カホラ］：「もう、嬉しいことを――うふふ」
新しい発見を願うばかりだ。

カホラルート・アモロサメンテ（9）

12月29日（水曜日）

［場所：月影のピアノ近辺］

［祐喜］：「さあ、今日も頑張るよ」
［愛海］：「うん、二人のためにも」
［舞羽］：「精一杯探すよー」
［翔］：「よっし、やってやるぞー！」
［吹雪］：「――おい、また一人増えてるように見えるのは気のせいか？」
［翔］：「え？　いったい誰が？」
［吹雪］：「古典的ギャグを求めてはいないんだよ、俺は」
［翔］：「相変わらず鋭いツッコミだ」
［吹雪］：「何で翔がここにいるんだ？　お前に召集をかけた覚えはないが」
［翔］：「そ、それはもちろんあれだ。祐喜に頼んで連れてきてもらったんだ。昨日電話をかけた時に教えてもらって」
［祐喜］：「ごめんね、誤魔化すに誤魔化せなくてさ」
［翔］：「その……クリスマスのこともあるしさ、何か吹雪の役に立てたらって思って、今回の探索に協力したくて来させていただきましてソーロー……」
［吹雪］：「無理して難しい文章にしなくていい、というか、お前の候は字が違う気がするぞ」
［翔］：「え？　マジで？」
［吹雪］：「なれないことはするなよ」
［翔］：「ああ、けどとにかく、吹雪の力にオレはなりたいんだ。だから、手伝わせてくれよ」

［祐喜］：「吹雪に叱られた後、翔、結構ヘコんでたんだ。吹雪に嫌われたんじゃないかってね、だから、ずっと罪滅ぼしする機会を伺ってたみたいだったんだ」
［吹雪］：「それが、今日だと思って出てきたわけか」
［翔］：「吹雪に嫌われたままで年を越すなんて、俺には耐えられないんだ」
［愛海］：「今みたいな台詞って、普通異性に向けて言う台詞よね」
［翔］：「大切な人に向けて言う言葉には違いないだろう。オレにとって吹雪は――」
［吹雪］：「それ以上言うと、速攻でお帰り願うぞ？　俺は」
［翔］：「すいません言いません、殺さないでください」
［吹雪］：「殺しはしないって。……まあ気持ちは嬉しいよ、サンキュー」
［翔］：「ゆ、許してくれるのか？　吹雪」
［吹雪］：「今後はあまり調子に乗るな、それと、人様に迷惑をかけないようにしろ。それが許す条件だ、飲めるか？」
［翔］：「もちろん、一気飲みで飲むさ！」
それ絶対に注意して飲んでない気がするんだが……こいつだからしょうがないか。
［吹雪］：「祐喜から聞いてると思うが、このことを他の人に言いふらすなよ？　言い触らしたら……分かってるな」
［翔］：「もちろん、絶対に言わない」
［吹雪］：「よし、じゃあ、翔にも協力してもらうよ」
［翔］：「よろしくお願いします、吹雪先生！」
［吹雪］：「先生じゃねぇよ」
いつものメンバーが学校外で集結する形になった。こういう時は、頼りになるな。
［吹雪］：「三人は、昨日の探し方を翔に教えてやってくれ。場所は移動したけど、すること自体は昨日と何も変わらないから」
［祐喜］：「何か怪しければ連絡ってことだね」

［吹雪］：「そういうことだ、俺はちょっと神殿のほうを最初に見てくるから。三人はこの周辺を探しててくれ。向こうが調べ終わったら俺もこっちに戻ってくる」
［舞羽］：「うん、分かった」
［吹雪］：「それじゃあ、今日もよろしく」
［四人］：「おーっ！」
さて、俺は早速向かうとしよう。
［翔］：「なあ祐喜、そんなにストーンサークルってのを見つけるのは難しいのか？　結構大きいイメージあるし、そこに続く場所を見つけるのなんてそこまで難しいって思わないんだけど」
［祐喜］：「翔、そんなこと言ってると、後で後悔することになるよ？」
［翔］：「え？　どういうことだよ？」
祐喜の言うとおりだ、と胸の中でつぶやき、俺は神殿へと歩を進めた。
……。

カホラルート・アモロサメンテ（１０）

［吹雪］：「到着、と」
これで、神殿ツアー二周目終了か。月影のピアノが置かれている神殿、何となくだが、この空間一帯は穏やかな流れを感じるな。秋という季節にはそんなイメージが俺の中にはある。さて、今までの感じでいけば、ここにも情報はない可能性が高いんだが……他の神殿を調査してこの神殿だけ探さないというのはどうも後味が悪いもんな。敬意を表して探索させてもらおう。もしかしたら何かあるかもしれない。ちょっとでも可能性があれば、俺はそこに賭けてみたい。
［吹雪］：「じゃあ、ちょっと失礼しますね」
軽く会釈をし、俺は外周を見て回る。
……。
［吹雪］：「うーん、やっぱりないのか？」
ないならないで、それは納得もいく。やっぱり神殿のところにはないってことなのか？
後半分でぐるっと一周か。
……。
［吹雪］：「うん、予想通りの結末か」
こればっかりは仕方ないか。切り替えて向こうの探索に参戦しようか。
［吹雪］：「じゃあ、お邪魔しました」
会釈して引き返そうとした時――。
［吹雪］：「――ん？」
会釈した目線の先、そこにはどこにでもある普通の石が地面に埋まっていた。しかし、その石の表面には少々違うものがあった。
［吹雪］：「これは、文字か？」
人工的とは言い難い、人間によって記された文字がそこには書かれてあった。

［吹雪］：「何て書いてあるんだ？　これは」
石に近づき、目を凝らしてよく見てみる。……何か数字のようなものが彫られてるみたいだ。
［吹雪］：「何々？　――７４Ｐ、Ｎ・Ｐ……ひょっとして、ピアリーが記したものか？　これは」
Ｎ・Ｐっていうのはおそらくピアリーの本名のイニシャルだったはず。その７４Ｐというのは……何かの手掛かりを表しているのか？
　他にも何か記されてないか見てみたが、どうやらこれ以外には何も書かれていないようだ。
［吹雪］：「思わぬところで思わぬものを発見したな」
神殿の裏側の石にこんなものを……ピアリーもなかなかすごいところに文字を残すな。やっぱりそういった才能が彼にはあったのかもしれない。
［吹雪］：「とにかく、これは帰ってカホラに報告しないと」
今日も坊主で帰ることはなくなったかな？
……。

カホラルート・アモロサメンテ（11）

［翔］：「うおー、腰がいて～！　でもここであきらめるわけにはいかないんだ～！」

［祐喜］：「翔、頑張るのはいいけどもう少し落ち着いてしようよ。そうじゃないと見つかるものも見つからなくなるから」

すでにさっきの発言を後悔し出しているようだ。さて、俺も探索を再開するぞ。

……。

［祐喜］：「本当に？　それは何かありそうなメモなんじゃない？」

［吹雪］：「ああ、帰ったらカホラに教えて、調べてみるつもりだ」

手を動かしながら、俺は発見に関して説明した。

［祐喜］：「ようやくそれっぽいものが顔を出したね、ちょっと安心したよ」

［吹雪］：「そうだな、俺もちょっと思ってる」

［祐喜］：「でも、やっぱり最初にそういうのを発見するのは吹雪なんだね。実力の違いを突き付けられてる感じがするよ」

［吹雪］：「今回だって偶々だろう。別に勝負じゃないんだし」

［祐喜］：「あはは、冗談だよ。でも、一つ発見があってこっちとしても嬉しいよ。ストーンサークル本体が顔を出してくれたらもっと嬉しいんだけどね」

［吹雪］：「相当頑固なんだろうぜ、向こうは」

［祐喜］：「そうかもね、よし、そんな感じでストーンサークルも見つけられるように頑張ろう。翔、ギアチェンジするよ」

［翔］：「すでにオレのギアは6ぐらいにチェンジされてるぜ……」

［吹雪］：「どんだけギアついてんだよ、お前」

むしろ切り替えすぎて逆に体力を消耗しているように見える。

［翔］：「大丈夫だ、オレは、まだやれる……絶対に、吹雪に認めてもらうんだ……」

［吹雪］：「だからお前は俺をどんな風に見てるんだよ……」

［翔］：「見ててくれ、吹雪、オレは、やるから」

今にも死にそうな言葉を残しながら、翔は作業を続ける。気持ちは嬉しいんだが、何とも言えない気分だ。

……。

カホラルート・アモロサメンテ（12）

リミットを知らせる携帯のアラームが俺のポケットを揺らした。
［吹雪］：「おーい、みんな！　時間だ」
俺の呼びかけに、みんなはそれぞれ返事をして戻ってきた。
［吹雪］：「お疲れ」
［舞羽］：「うーん、でも、ちょっと残念だなー」
［愛海］：「そうね、こっちでも大きな成果を見せることができなくて」
［翔］：「くそー、オレが不甲斐ないばかりに～！」
［吹雪］：「いや、お前のせいじゃないって。結構頑張ってたみたいだしな」
［翔］：「本当か？　こんなオレを、評価してくれるのか？」
［吹雪］：「それは、まあな」
［翔］：「嬉しいぜ、今年一番嬉しいぜ……」
［愛海］：「翔っちって、こんな性格だったかしら？　もっと女の子大好き人間だった記憶があるんだけど」
［祐喜］：「今回の一件で、吹雪に嫌われるのがどれだけ自分にとって辛いことか認識したんだと思うよ」
［舞羽］：「あははは……」
［翔］：「いつでもオレはお前の力になる、必要な時は言ってくれよ」
［吹雪］：「ああ、分かった分かった」
［愛海］：「……そんな翔っちの使い方を心得てる大久保くんだった」
［吹雪］：「勝手に終わらせるなよ」
［愛海］：「あはは、ごめんごめん。……でも、ちょっと悔しいわね。こんなに死力を尽くしても手掛かりの尻尾すら掴ませてもらえなかったのは」（愛海）

［祐喜］：「そうだね、せめてそれらしいところを見つけたかったね」
［吹雪］：「だけど、その頑張りのおかげで今回は一つ手掛かりを見つけることができたんだぜ」
［愛海］：「それがあったからよかったけど、なかったら結構テンションは下がってたでしょうね」
［舞羽］：「そうだね」
［祐喜］：「僕たちにトレジャーハンターは難しいかもしれないね」
［吹雪］：「これからの鍛え方次第じゃないか？　それは」
［愛海］：「あれ？　昨日と考え方が変わってない？」
［吹雪］：「本気でなるとしたらの話だ」
［愛海］：「な、なるほどね」
［祐喜］：「明日はどうするんだい？　吹雪」
［吹雪］：「ああ、一先ずこのメモをカホラと解読してみて、その結果次第ってことになるから、とりあえずは待機してもらう感じかな。それでいいか？」
［祐喜］：「うん、了解」
［吹雪］：「決まり次第、こっちから連絡するから、随時携帯をチェックしてくれ」
［舞羽］：「分かった」
さて、帰ってカホラに報告だ。
……。
……。

カホラルート・アモロサメンテ（１３）

［場所：社会科室］

――そしてカホラにそのことを伝えると、少し悩んだ後に。

［カホラ］：「単純に考えて、ピアリーの資料に秘密がありそうよね」

［吹雪］：「俺も、それは思ってた。数字の後にあるアルファベットのＰは、ページのＰを表すんじゃないかって」

［カホラ］：「私も、それ以外にＰの頭文字がつく関連しそうな項目が見当たらないわ。お母さんはどう思う？」

何か分かるかもしれないと思い、学園長には相席してもらっている。

［セフィル］：「んー、７４ポイントとか？」

［カホラ］：「何のポイントなの？　クイズでもやっていたの？」

［セフィル］：「それ以外なら、７４ピアリーくらいしかないな？」

［カホラ］：「自分を単位にしちゃったの？　別におもしろくしろとは言ってないから普通に答えていいわ」

［セフィル］：「いつもより口調が厳しいな、カホラ」

［カホラ］：「真剣だからね、いつも以上に」

［セフィル］：「じゃあ真剣に答えるとすると、私も二人の意見に賛成だな。７４ページに何かが隠されてると見て間違いではないと思うぞ？　資料を見てみれば、ひょっとしたら何かあるかもしれない

［吹雪］：「でも、カホラは資料を調べてる時、７４ページも普通に読んでいたよね？　何か隠されていれば、その時に分かる気もするけど」

［カホラ］：「気付かないくらい微々たるものとかなのかしら？　どっちにしても、見てみたほうがいいわね。吹雪、古書室に行きましょう」

［吹雪］：「うん」

［セフィル］：「私も行こう、力になるぞ」
［カホラ］：「今日は気が利くわね、お母さん。ありがとう」
［セフィル］：「……今日はってところにすごく引っ掛かりを覚えるんだが……」
……。

カホラルート・アモロサメンテ（１４）

［場所：古書室］

三人がかりでピアリーの資料の７４ページを見ていく。
［カホラ］：「何かあった？　吹雪」
［吹雪］：「今のところは何も」
手に持っている資料には、それらしきものは見当たらない。
［カホラ］：「まだたくさんあるわ、全部調べてみましょう」
［吹雪］：「うん」
……。
［カホラ］：「残るはこの２冊ね」
俺たちが最初に古書室で探した、ストーンサークルの場所が書かれていた資料だ。一番有力だと思って最後に取っておいた。
［カホラ］：「これで手掛かりがなかったら、また一からやり直しってことね」
［吹雪］：「か、考えたくはないけど」
［セフィル］：「……」
［カホラ］：「見てみましょう」
カホラは資料をめくり、７４ページを開く。
［カホラ］：「このページは、ストーンサークルのことが記されているところだわ」
［吹雪］：「完全に何かありそうな流れだけど」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……っ」
カホラは首を横に振った。俺もその目で確かめてみる。

［カホラ］：「デタラメでそんな情報を残すような人ではないと思うんだけど……何もないのかしら？」
［吹雪］：「……」
確かにこのページには何もおかしいところは見当たらない。でも、そのページを見ると、俺は若干違和感を覚えた。
［吹雪］：「……？」
［カホラ］：「どうしたの？　吹雪」
［吹雪］：「いや、何だか……他のページと違う気がするんだ」
［カホラ］：「違う？　どういうこと？」
［吹雪］：「何だろう？　ちょっと待ってて」
俺は目を閉じて本に右手をかざす。
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……これ、きっと魔力だ」
［カホラ］：「魔力？」
［吹雪］：「うん、本当に微かだけど、このページにだけ魔力を感じるんだ。本当に気付かない程度のものだけど、集中してみるとちょっと分かると思う」
カホラにもやってみるように言う。カホラはうなずいて右手をかざした。
［カホラ］：「……確かに、ちょっとあるかも。本当にほんの少しだけ、それっぽいものを感じるわ。お母さん、ちょっと見て」
［セフィル］：「うむ、分かった」
学園長に本を差し出し、同じようにしてもらう。

カホラルート・アモロサメンテ（15）

［セフィル］：「……」
［カホラ］：「どう？　お母さん」
［セフィル］：「うん、二人の言うとおりだ。このページから魔力が出ている。おそらく、このページには何らかの仕掛けが施されているはずだ。ちょっと待っていてくれ。解除を試みる」
［カホラ］：「お願い」
［セフィル］：「――キャンセラー！」
ページに魔法が放たれる。
［セフィル］：「なるほど、こういうことか」
［カホラ］：「お母さん、見せて」
［セフィル］：「うむ、ほら」
俺も一緒になって資料に目をやる。
［カホラ］：「これって」
［吹雪］：「隠されたページだ」
そう、そこには今まで存在しなかった７４分の５と書かれたページが出現していた。ピアリーが石に残したメッセージはこれのことだろうか？
［カホラ］：「こんな仕掛けが施されていたなんて」
［吹雪］：「俺も、これはちょっと予想外だな」
こんな隠し方があったとは、少々驚きだ。
［吹雪］：「魔力で存在を隠すって、相当高度な技術でしたよね？」
［セフィル］：「まあ、それなりに知識を齧っていないと、できないことかもしれないな」
［吹雪］：「じゃあやっぱり、ピアリーは優れた魔法使いでもあったってことか……」
［カホラ］：「そうかもしれないわね」
［セフィル］：「……それを解除できた私を、すごいとは思ってく

れないのか？」
［カホラ］：「そこまでして隠していたってことは、それだけ重要なことが書かれているってことかしら？」
［吹雪］：「本人ではないから分からないけど、彼なりの想いがあったのかも。読んでみたらいいんじゃないかな？」
［カホラ］：「そうね」
［セフィル］：「返事もなしか、そうか……」
［カホラ］：「じゃあ、読んでみるわね」
カホラは文章に目を落とし、文章を朗読し始める。

カホラルート・アモロサメンテ（16）

［セフィル］：「まずは、このページの秘密を見つけてくれてありがとう。私はネレス・ピアリー、この学園の卒業者で、この島にあるピアノに興味を持った一人の学者だ。このページを見つけたということは、君たちもまた、私と同じく四季のピアノに興味を持ったと考えていいだろう。重ね重ね、私の資料に目を通してくれてありがとう、一学者として、とても光栄に思う。まず、謝っておきたいことがある。それは、私の資料についてだ。読んでみて分かったかもしれないが、私の文章はとても分かりづらい印象を持ったと思う。せっかく目を通してくれたのに、すまないことをした。しかし、怒らないでほしい。私は君たちを悩ませようと思ってこれを作成したわけではない。ただ、君たちには発見を通した喜びというものを分かち合ってほしかったのだ」

［吹雪］：「……何か、わけがありそうだね」

［カホラ］：「続き、読むわね」

［吹雪］：「うん」

［カホラ］：「――私には、一人の妻がいた。彼女はとても優しく、気立ての良いとてもできた子だった。そんな素敵な彼女との出会い、それが四季のピアノの探索中のことだった。私が探索に勤しむ最中、彼女は私に気さくに話しかけてきてくれた。そして、ひょんなことから彼女も私の探索を手伝うこととなった。実は彼女もまた、四季のピアノについて興味を持っていた人物だったのである。探索中、偶然私のことを見つけた彼女は、私も同じことをしているのではと思い、話しかけずにはいられなかったという。私たちは気が合い、呼吸を合わせて毎日探索に励んだ。そして、ついに四季のピアノについての歴史を知ることができた。それを今から記述する。歴史については、自分たちの目で確かめてほしい。――ここからストーンサークルの情報が載っているけど、とりあえず後に回して続きを読

むわね」

［吹雪］：「うん」

［カホラ］：「真実を知っていながら、曖昧なことを述べて申し訳なく思う。しかし、君たちにも私と同じ喜びを得てほしかったのだ。始めこそ私は、歴史を知りたい一心で体を動かしていた。しかし、妻との出会い、協力してくれた島の人たち、険しかったけれど充実した日々――気付けば私はピアノの歴史と言う宝物の他にも、たくさんの宝物を授けてもらっていたのだ。ここに辿り着くまでに、君たちは数々の苦難を乗り越えてきただろう。しかしそれは、君たちが生きていく中での大事な宝となるに違いない。ゴールはもうすぐだ、最後まで頑張ってくれ、未来に生きる君たちを、私は応援している。……これで書かれていることは終わりね」

［吹雪］：「……何て言ったらいいのか分からないけど、ピアリーなりの気遣いだったのかもしれないね」

［カホラ］：「ふふ、そうね。今の私たちも、ピアリーの思ったとおりになっているからね。探索して心が通じ合って……こんなこと言われたら変に隠さなくてよかったのに、何て言えないわよね」

［吹雪］：「そうだね、ピアリーに教えてもらえたね」

［カホラ］：「ええ、調査をすることで発見するもの以外にも、様々な発見がある、心に刻んでおかなくちゃね」

［セフィル］：「……明日、送迎しないわけにはいかなくなったな」

［カホラ］：「あら、珍しくお母さんが空気を読んだわね」

［セフィル］：「読まずにいられると思うか？　そこまで私も鈍感少女ではないぞ」

［カホラ］：「確かに少女ではないものね」

［セフィル］：「……と、とにかくだ。最後の手掛かりもこうして見つけることができたわけだ。しっかりその歴史を、心に刻んでくるといい。そして、その後にある儀式に活かすんだ。いいな？」

［カホラ］：「ええ、もちろん」

［吹雪］：「分かりました」

――手に入れた宝物を胸に刻み、俺たちは最後の探索に意識を燃やした。

カホラルート・ソンス（1）

12月30日（木曜日）

［場所：社会科室］

――一夜明けて、今日はスッキリ目覚めることができた。まだ昨日の興奮が頭から離れていないのもあるかもしれないけど。
おそらく、今日で調査は終了できるはず。嬉しいような悲しいような……でも、今俺はすごいわくわくしてる。今まで頑張って調べてきた結末を知ることができるわけだからな、どんな風にどういう経緯で四季のピアノはできたのか……真実をこの目にしっかり焼き付けないと。
［吹雪］：「とりあえず、顔洗うか」
布団から這いでて、水飲み場へ向かう。
……。

［場所：水飲み場］

［カホラ］：「あ、おはよう吹雪」
どうやら先客がいたらしい。
［吹雪］：「おはよう、カホラ」
［カホラ］：「あら、何だかいつもよりテンション高いわね」
［吹雪］：「今の一言で分かったの？」
［カホラ］：「ええ、ちょっとトーンが高くなってるもの」
［吹雪］：「実際そうだからね、そういうカホラもテンション高く見えるよ」
［カホラ］：「当然よ、ずっと知りたかったことを知ることができるんだから。嬉しい気持ちでいっぱいよ」

［吹雪］：「うん、俺も同じだよ」
［カホラ］：「本当に、ピアリーには感謝しないといけないわね。ここまで調べることができたのは、彼のおかげだもの」
［吹雪］：「カホラが彼に注目したのも大きなポイントだと思うよ」
［カホラ］：「ふふ、そうかしら？　でも、注目せざるを得なかったんだけどね。私の知りたい情報がたくさん載っていたし、他の学者よりも熱心にピアノについて調べていた感じだったから」
［吹雪］：「他の学者にないものを感じ取ったんだね」
［カホラ］：「何て言うのかしら？　女の勘？」
［吹雪］：「こ、ここでそれを持ってくるんだ」
［カホラ］：「おかしかったかしら？　じゃあ、文学者の勘？」
［吹雪］：「……うん、そうだね」
［カホラ］：「あら？　突っ込まれると思ってたんだけど、突っ込まないの？　まだ学生じゃないかーって」
［吹雪］：「ここまで努力して調べて、真実に到達することができたんだから、カホラはもう立派な文学者でしょう。俺は保障できる自信があるよ」
［カホラ］：「……ありがと、吹雪」
柔らかい笑みを浮かべながら。
［カホラ］：「でも、びっくりしたわよね。ピアリーにあんな過去があったなんて」
［吹雪］：「そうだね、てっきり一人で調査をしていたのかと思ってたけど。夫婦で調査していたとは思わなかったよ」
［カホラ］：「一言も名前とか出てこなかったものね。まあ調査資料に彼女の名前なんて出さないか」
［吹雪］：「それは、そうだね」
［カホラ］：「ピアリーも、たくさんの人との交流を通して真実に辿り着いた。学者っていうのは、人とのつながりが大切になるものだって、この調査で学ぶことができたわ」
［吹雪］：「個人のプレイに見えるけど、実際はたくさんの人を通

さないとできないこと」
［カホラ］：「うん、……会ったことはないけどピアリーは私たちの偉大な先輩ね」
［吹雪］：「うん、俺に大切な人を気付かせてくれたし」
［カホラ］：「もう、急にそんなこと言われたら照れちゃうでしょう？」
［吹雪］：「ごめんね、ちょっと狙ってた」
［カホラ］：「意地悪ね、吹雪は。でも、そう思ってるのは吹雪だけじゃないからね、私だって同じくらいそう思ってるから」
［吹雪］：「うん、すっごく嬉しい」
［カホラ］：「……あ、いけない、ちょっと話し込んじゃったわね。そろそろ準備しないと。明日が本番だし、今日は練習もミッチリしないと」
［吹雪］：「そうだね、ここまでやってきてそれは絶対に許されないもんね」
［カホラ］：「ええ、頑張りましょう」
［吹雪］：「おー！」

カホラルート・ソンス（2）

［場所：グランド］

［セフィル］：「――よし、いよいよ明日が本番だ。魔力の低下を防ぐため、今日は軽めに抑えておこう。リラックスを念頭において進めていくぞ」

［吹雪］：「はい！」

［セフィル］：「お？　何だか気合いが入っているようだな」

［吹雪］：「もちろんです、明日が本番なんですから、気合い入れて望まないとピアノに申し訳がないです」

［セフィル］：「……てっきりピアノの歴史ばかり気になって練習がオザナリになるかもと思ってたんだが、どうやら杞憂に終わりそうだな。吹雪に限ってそんなことあるわけないか」

［吹雪］：「それは確かに気になりますけど、逃げていくわけではないと思うので、むしろ歴史を知らせてもらうわけですから、それなりの態度というものを見てもらいたいですし」

［セフィル］：「今私は、すごい感動を覚えた。うん、それでこそハーモニクサーだ」

［吹雪］：「あはは、ありがとうございます」

［セフィル］：「いつでも沢渡の家に来ていいからな？　私は吹雪の母になる気に満ちているぞ」

［吹雪］：「え？　それは、かなり先の話じゃあ……」

［セフィル］：「でも、そんな風に考えたことはあるだろう？　付き合っているわけだから」

［吹雪］：「……ないとは言わないですけど、まだ学生だし、そういうプランはまだ」

カホラからそういう話を聞いたこともないしな。

［セフィル］：「しかし、吹雪の家の両親は世直しで家を離れてい

るわけだ。普通に考えれば、沢渡家に吹雪が養子に来るのがいいと思うんだが」

［吹雪］：「ど、どうして学園長がそこまでお考えに？」

［セフィル］：「それはもちろん……ふっふっふ」

［吹雪］：「怖いです、その笑い方」

［セフィル］：「まあ、あまり気にしなくていいさ。気長に待っているぞ、学園長しながら」

［吹雪］：「と、とにかく練習しましょう。本番に備えなくちゃ」

……。

カホラルート・ソンス（3）

［場所：学園長室］

――そして練習は何事もなく終了。毎日の積み重ねのおかげで、魔力のセーブも上手くコントロールできるようになり、供給もスムーズになった。これを明日もできれば、きっと儀式は問題なく終えることができるだろう。

［セフィル］：「よし、では行こうか」

［カホラ］：「ええ」

［吹雪］：「はい」

俺たちは学園長の近くに寄る。

……。

［場所：海風のピアノ近辺］

［セフィル］：「では、また後でな。調べ終わったら連絡をくれ」

［吹雪］：「学園長は見なくていいんですか？」

［セフィル］：「私は仕事があるからな。見たいのは山々だが、年末までに仕上げなくてはいけないんだ。だから、報告だけは忘れないでくれ。それに――二人だけのほうが嬉しいだろう？」

［カホラ］：「ちょ、ちょっと、お母さん！？」

［セフィル］：「私なりに空気を読んだつもりだぞ？　じゃあ、私は去ることにする」

ふふっと軽く笑いながら、学園長はそこから去っていった。

［カホラ］：「もう、変なこと言うんだから」

［吹雪］：「でもまあ、二人だけのほうが俺は嬉しいからさ」

［カホラ］：「それはそうだけど……まだちょっと恥ずかしさが残るわね」

［吹雪］：「徐々に慣れていけばいいよ」
［カホラ］：「吹雪はもう慣れちゃってるみたいね」
［吹雪］：「これ以上の羞恥を味わったから」
［カホラ］：「ああ、そういえばそうだったわね」
［吹雪］：「今となっては、良い思い出だよ」
［カホラ］：「ふふ、そうね」
［吹雪］：「早速行こうか。メモは持ってきてる？」
［カホラ］：「もちろん、しっかり写してあるわ」
二人でメモを眺める。
［カホラ］：「神殿から少し南東にある森の中の二つの岩がある場所に第2のストーンサークルが隠されているみたいね」
［吹雪］：「そこに入口が隠されているんだね」
［カホラ］：「ええ、行ってみましょう」
［吹雪］：「うん」
地図を見ながらそのポイントへと向かう。
……。

カホラルート・ソンス（4）

［カホラ］：「多分この辺よね」
［吹雪］：「ポイントとしては合ってるはずだけど……あ、あれじゃない？　カホラ」
目線の少し先に、並ぶようにして立っている石が見える。
その存在をカホラに教えてあげる。
［カホラ］：「そうかもしれないわね、近くで見てみましょう」
小走りでそのポイントへ向かう。
［カホラ］：「――きっとこれだわ、ピアリーの残したメモと合致してる」
［吹雪］：「じゃあここに、秘密の入口が隠されてるんだね」
俺は石に手をかざす。
［カホラ］：「どお？」
［吹雪］：「うん、この石からは魔力を感じる。学園長に教えてもらった魔法を唱えてみよう」
ピアリーのメモによれば、第2のストーンサークルの入口を出現させるには、学園長がピアリーの隠されたページを見つけた時に唱えた魔法を使い、石の本当の姿を見抜く必要があるんだ。それを踏まえ、今日の練習の終わりに、学園長からその簡易魔法を教わってきた。それを使えば、ここにストーンサークルにつながる入口が見つかるはずなんだが。
［カホラ］：「……何だか、ちょっと緊張するわね」
［吹雪］：「うん、早速やってみるね」
［カホラ］：「ええ、お願い」
［吹雪］：「――我の前に本当の姿を現したまえ。……キャンセラー！」
俺の指から光が迸り、石に魔法がかけられる。
［吹雪］：「……」

どうだ？　光が徐々になくなっていく。それが晴れた場所には――。
［カホラ］：「吹雪、成功してるみたいよ」
［吹雪］：「よしっ！」
石と石の間に、人一人入れるくらいの入口が出現していた。
［カホラ］：「こういうことだったのね」
［吹雪］：「昔の人も、よく考えるものだね」
［カホラ］：「それは私も思うわ、何と言うか、発想が素敵よね」
［吹雪］：「隠し場所には、度胆を抜かれてばかりだよ」
［カホラ］：「でも、見つけられてるからまだいいわよね」
［吹雪］：「そうだね」
［カホラ］：「さあ、行きましょうか。――といってすぐ向かっていきたいところなんだけど、ちょっとクッションを置かせてもらうわね」
［吹雪］：「よかった、俺も同じことを考えてたところ」
［カホラ］：「そうよね、私と吹雪の仲だから、そう言ってくれると思ったわ」
［吹雪］：「とりあえず、思ったことを二人で言ってみようか」
［カホラ］：「そうね、せーので言いましょう。――せーの」
［吹雪］：「またこの入口かよ！」　［カホラ］：「またこの入口なの！？」
そう、目の前に現れた入口のタイプは、以前学園長から連れて行ってもらった木の根元から入るものと同じ形だった。きっとここを滑って地下に行くのだろうが……以前のことがあるからして、あまり好きな入口とは言い難い。
［カホラ］：「先人たちは、このタイプの入口がお気に入りだったのかしら？」
［吹雪］：「違うって言ったとしても、そう見えるよね、これだったら」
［カホラ］：「確かに地下に置いている方が安全だって思う理論は分かるけど、せめてそこに向かう人間たちの安全面は考慮してほし

いところよね」
［吹雪］：「全く。でも、ここ以外に入口はなさそうだし……行くしかないよね」
［カホラ］：「ええ、覚悟を決めないと」
［吹雪］：「俺が今回も先に行くよ。頑張ってカホラをキャッチできるようにするから」
［カホラ］：「え？　無理しなくていいわよ？　スピードも付いてるし、キャッチなんて難しいわよ」
［吹雪］：「ちょっと前回はカッコ悪いところを見せちゃったからね。ちょっとリベンジしたいって気持ちがあるんだ」
せめて腰を痛めないように。

カホラルート・ソンス（5）

［吹雪］：「女性を守るのは男の仕事だよ」
［カホラ］：「……怪我だけはしないでよ？　無理だと思ったら避けてくれていいから」
［吹雪］：「うん、分かった」
では、そろそろ――。
［カホラ］：「あ、ちょっと待って。今のうちにお母さんに連絡を入れておくわ」
［吹雪］：「ああ、そうだね」
地下だから圏外になる可能性もあるし、以前と同じような作りっていうことになると……言わずもがなだ。
［カホラ］：「――ええ、一時間後くらいに、入口があるはずだから。……これでよし、と。これで準備オッケーよ」
［吹雪］：「よし、じゃあ今度こそ」
俺は膝を付き、入口に体を潜り込ませる。
［吹雪］：「じゃあ、先に行くね」
［カホラ］：「ええ、気を付けて」
［吹雪］：「うん。――それ！」
意を決して手を離すと、俺の体はどんどん下っていく。
……。
［吹雪］：「も、もうちょっとか？」
前回と同じくらい、滑っている感じがする。結構下っているし、そろそろ出口が見えてもいいはずだが。
［吹雪］：「ん？　あそこか？」
徐々に足場らしきものが視界に入ってきた。よし、前回のような失敗はしないぞ。あらかじめ体勢を整えて着地の準備をする。
そして――。

カホラルート・ソンス（6）

［場所：地下空間］

［吹雪］：「――とおっ！」

シュタ。……どうにか前回の二の前にはならなかったようだ。でも、まだ気は抜けないぞ。むしろ勝負はここからだ、カホラをしっかりキャッチして身の安全を確保しなければ。

［吹雪］：「カホラー！」

大声を出してカホラに応答を求める。すると、程なくして――。

［カホラ］：「吹雪ー！」

カホラの声が帰ってきた。まだ遠くから聞こえるから半分を少し過ぎたくらいだろうか？

［吹雪］：「今のうちに」

俺は落ちてくるであろうポイントでカホラの到着を待つ。

［吹雪］：「さあ、いつでも来い」

……。

［カホラ］：「ふ、吹雪ー！」

大分声が近くなっている、もうそろそろか？

［カホラ］：「きゃあああっ！？」

悲鳴と共にカホラは出口から飛び出した。よし、ベストポイントだ。俺はしっかりカホラをキャッチした――が。

［吹雪］：「おわぁ！？」

やっぱり、そう上手くはいかせてくれないらしい。キャッチした時の衝撃でバランスを崩してしまい、カホラを抱えたまま盛大に尻餅をついてしまった。

［吹雪］：「う、うう……ケツが……」

［カホラ］：「だ、大丈夫？　吹雪」

［吹雪］：「あ、うん、全然大丈夫」

腰の次はケツか……というかケツだったら木から落ちた時にも強打したっけな。でもまああの時は一人で勝手に落下したわけだから、その時より成長はしてるな。

［吹雪］：「カホラは大丈夫？　怪我してないかい？」

［カホラ］：「ええ、おかげさまで。……もう、無理しなくていいって言ったのに」

格好はそのままで、俺の頬をぶにぶにと突いてきた。

［吹雪］：「いけると思ったんだよね。……格好よく決められなくてちょっと残念だ」

［カホラ］：「十分カッコいいわよ、こうして支えてくれたんだしね？」

［吹雪］：「あはは、ありがとう」

［カホラ］：「……ひょっとしたら、ピアリーたちもこんな状況になったのかしらね？」

［吹雪］：「可能性は、あるかもしれないね。というか、先人たちがこれを作ったのって……」

［カホラ］：「そ、それはないんじゃないかしら？　……理由はないけど」

先人たちにちょっとした疑問を持ってしまった。

［カホラ］：「ちょっともったいないけど、立たないとね」

［吹雪］：「よ、よろしく」

カホラは上体を起こして立ち上がった。やっぱり以前と同じ作りのようで、目の前にはもうストーンサークルが見えていた。

［カホラ］：「構造自体は、第４のストーンサークルと一緒みたいね」

［吹雪］：「そうみたいだね。だとすると、ストーンサークルの作りも、第４のものと似てるのかな？」

［カホラ］：「真実は目の前にあるし、見てみましょうか。吹雪、アシストよろしく」

［吹雪］：「了解」

俺たちはストーンサークルの調査にかかる。
……。

カホラルート・ソンス（7）

［カホラ］：「似てるみたいだったけど、やっぱり微妙な違いはあるみたいね。四季のピアノにはそれぞれ耐久力が少し異なると考えていいのかしら？」

［吹雪］：「それ以外に思いつかないな、俺は」

単純に考えて、全てのピアノの耐久性が同じならば、ストーンサークルの作りは全て同じでいいはずだ。でもそれが異なっている、とすれば耐久に違いがあると考えるのが無難だ。

［吹雪］：「カホラの考えは間違ってないと思うよ」

［カホラ］：「とりあえず、私たちの意見としてまとめておくとしましょう。それと、やっぱり同じような記号が残されていたわね、このストーンサークルにも」

すでに調査した二つのストーンサークルと同じ部分に、同じような記号が一文字刻まれていた。

［カホラ］：「順番的に考えて、これは数字の2と読むのよね？」

［吹雪］：「ここは海風のピアノだから、春を一番と考えたらそのはずだね」

［カホラ］：「そうよね、……そんな感じでまとめておこう」

［吹雪］：「……これで三つ目のストーンサークルの調査も終了、残りは後一つだね」

壁面も調べてみたけど、ピアリーの言う真実はここには記されていなかった。だとすると、次に行くストーンサークルに、それが記されている可能性が高いだろう。

［カホラ］：「ついにここまで来たわね」

［吹雪］：「俺がカホラの調査を手伝い始めたのはつい最近だけど、それでもすごく長い間調査をしていた気分がするよ」

［カホラ］：「私も、ここ数日間は本当に濃密な時間を過ごしてたからね。そう思うのも当然かしら」

［吹雪］：「次の場所が、俺たちの調査の集大成ってことになるね。最後までしっかりやり遂げないと」
［カホラ］：「そうね。最後だからこそ、今まで以上に気持ちを込めて調査しましょう。――今までがそうじゃないってわけじゃないわよ？」
［吹雪］：「大丈夫、言わなくても分かってるから」
［カホラ］：「うん、頑張りましょう！」
［吹雪］：「おー！」
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「……とりあえず、お母さんが迎えに来るまで待ちましょうか」
［吹雪］：「そうだね」
……。

カホラルート・ソンス（8）

［場所：月影のピアノ近辺］

［セフィル］：「――いよいよ、最後のストーンサークルだな。ここまでやってこれたのは、二人の努力の賜物だろう。よく頑張ったと思うぞ」

［カホラ］：「……何だか裏がありそうな言葉だけど、素直に受け取っておきましょうか」

［セフィル］：「何故母親の賛辞を素直に受け取ってくれない？」

［カホラ］：「ビスケットのこと、実は根に持ってたりするんじゃないかと思って」

［セフィル］：「べ、別にそんなことは……自分のお金で買えさえすれば困るものじゃないからな。まあ、金があっても買いに行く時間がないんだが」

［カホラ］：「やっぱりちょっと思ってるんじゃない」

［セフィル］：「そ、それとはこれとは別だろう？　ビスケットの件とストーンサークルの調査は別問題だ。受け取ってくれよ」

［カホラ］：「……ふふ、冗談よ、お母さん。私たち、本当にお母さんには感謝してるわ」

［セフィル］：「そ、そうなのか？」

［カホラ］：「そうよ、お母さんがストーンサークルの手掛かりをくれなかったら、私たちはここまで辿り着けなかったと思うし、送迎の分で探索時間も大目に取ることができた。お母さんの助力があったから、ここまで来ることができたんだよ」

［吹雪］：「学園長から受けた恩は、一生忘れないです」

［セフィル］：「……何だろう、急に泣きそうな気分になってきたぞ。ぞんざいな扱いから一変したせいなのか？」

［カホラ］：「今言った言葉は、全て事実だから。ね？　吹雪」

［吹雪］：「もちろん、本心から思ってます」
［セフィル］：「う、嬉しいじゃないか、そんなことを言われたら……涙を隠すために私は早めにここを去るとしよう、じゃあ、また後で迎えに来るからな」
［カホラ］：「うん、よろしくね」
［セフィル］：「最後まで、しっかりやるんだぞ」
いつもの学園長とは違う一面を見た気がした。
［吹雪］：「ひどいこと言われても、カホラのことはかわいくて仕方がないんだろうね」
［カホラ］：「ひどいことを言った覚えはないわよ？　ただ現実逃避をさせないようにしてるだけで」
［吹雪］：「学園長からしたら、それはひどいことなのかもしれないよ」
［カホラ］：「それは……そうかもしれないね」
［吹雪］：「これが終わったら、ビスケットの袋買ってあげようぜ。今まで手伝ってくれたお礼として」
［カホラ］：「そうね、それが一番お母さんにとって嬉しいだろうし」
学園長＝ビスケットのような図が出来上がってしまいそうだ。
［カホラ］：「――じゃあ、そろそろ行きましょうか」
［吹雪］：「うん、最後の調査に」
行く場所は、ピアリーのメモで確認している。ここから東にある森の中だ。
……。

カホラルート・ソンス（9）

［カホラ］：「――これよね、きっと」
［吹雪］：「うん、多分そのはず」
俺たちは、森の中にある2本の木の前に立っていた。一見何の変哲もないように見えるが、よーく目を凝らしてみると一部分だけ色が薄くなっている場所があるんだ、ちょうど手をかざせるくらいの大きさの。ここに、俺とカホラの手をかざすと、手から魔力を感じ取り、道が開かれるらしい。
［吹雪］：「最後に訪れるに相応しいような入り方だね」
［カホラ］：「そうね、以前のように一人で調査していたら、絶対に辿り着けなかったわ。入口を見つけられたとしても、開けられないんだから」
［吹雪］：「……こういう仕掛けを見ちゃうと、どうしてもさっき思ったことが本当なんじゃないかって気になってくるね」
［カホラ］：「さっき、私はないんじゃないかって思ったけど、段々考えが吹雪よりになってきてるわ。それはそれで良いことだと思うんだけどね」
勝手に想像を膨らませる俺たち。実際のところは、二人でしか開けられないから侵入者が入りづらい、とかだと思うんだが。
［カホラ］：「……ちょっと緊張してきたわ」
［吹雪］：「俺も」
おそらく大丈夫だとは思うんだが。
［カホラ］：「きっと開くわよね？」
［吹雪］：「きっとね、俺たちの仲なんだから」
［カホラ］：「信じましょう」
俺たちは顔を見合わせて、同時にうなずいた。
［カホラ］：「じゃあ、一緒に手を置きましょう」
［吹雪］：「うん、分かった」

［カホラ］：「――せーの」
掛け声と同時に、俺たちは木のポイントに手をかざした。すると――。
［カホラ］：「っ！？　こ、このままのほうがいいかしら？」
［吹雪］：「そうだね、もう少し見届けよう」
手をかざすと同時に周囲から光が漏れだした。おそらく仕掛けが動き出したんだろう。その証拠に――。
［吹雪］：「カホラ、あれ」
［カホラ］：「あ、入口かしら？」
［吹雪］：「そうじゃないかな」
光の中に、扉のようなものが浮き上がってきている。光が弱まるのに比例して、その存在は大きくなっていく。
……。

カホラルート・ソンス（１０）

やがて光は収まり、目の前には完璧に扉の存在を確認できた。
［カホラ］：「……」
［吹雪］：「触れる？」
［カホラ］：「ええ、ちゃんとここにあるわ」
［吹雪］：「どういう仕掛けなんだろう？　これは」
［カホラ］：「私たちの手がトリガーになってるのよね？　ここだけ仕掛けが他の場所より一際すごい気がするわ」
［吹雪］：「それだけ重要なことが、ここに記されているのかな？」
［カホラ］：「入ってみれば、きっと分かるわ。行きましょう、吹雪」
［吹雪］：「ああ」
［カホラ］：「……大丈夫よね？　実は異世界につながっているとか」
［吹雪］：「そんなひどいことはしないと思うけど」
［カホラ］：「そうよね、考えすぎよね」
［吹雪］：「いざとなったら、二人で乗り越えていけばいいよ」
［カホラ］：「うん、そうね」
安心したのか、カホラはゆっくりとドアノブを捻って扉を開けた。
［カホラ］：「行こう、吹雪」
［吹雪］：「うん」
俺たちは扉の中に足を踏み入れる。
……。

カホラルート・ソンス（11）

［場所：扉の中の部屋］

［カホラ］：「ん……はあ、よかった」
どうやら心配は杞憂に終わったようだ。眩しい光が収まると、そこは今まで見たものと同じ作りの空間になっていた。
しかし、他の場所とは違うものが存在していた。それは――。
［カホラ］：「吹雪、あれって」
［吹雪］：「……間違いないね、何か、文字が記されてる」
俺たちが知っているものとは違う、古代文字のようなもの。種類的には、ストーンサークルに一文字だけ刻まれていたものと似ている。
［カホラ］：「これも、ハルモニア語なのかしら？」
［吹雪］：「以前の資料、持ってきてるよね？」
［カホラ］：「ええ、見てみなくちゃ」
カホラは胸ポケットからハルモニア語についてのメモを取り出し、記された文字と照らし合わせる。
［吹雪］：「どう？」
［カホラ］：「多分、これはハルモニア語で間違いないわ。資料と見比べても、文字の作りが完全に一致してる」
カホラの資料を借りて、俺も実物と見比べてみる。
［吹雪］：「確かに、同じだね」
［カホラ］：「これがピアリーの言っていた、四季のピアノの歴史なのね」
本物を目の前にカホラは感慨深げにそうつぶやく。
［カホラ］：「これを知りたくて、私は今まで頑張ってきた。その努力が、全て報われるのね」
［吹雪］：「おめでとう、カホラ」
［カホラ］：「ありがと、吹雪。ここまで来れたのは、本当に吹雪

のおかげよ、感謝してもしきれないわ」
［吹雪］：「何度も言ってるけど、俺は自分の意思でカホラの力になりたいと思ったんだ。感謝したいのは、俺も一緒だよ」
［カホラ］：「じゃあ、おあいこってことね」
［吹雪］：「そういうこと」
［カホラ］：「……歴史は最後にとっておきましょう。まずはストーンサークルの調査から済ませちゃって」
［吹雪］：「うん、分かった」
気持ちが高揚しているが、気を抜かずに、間違わないように情報を映していく。
……。
……。
……。

カホラルート・ソンス（12）

［カホラ］：「うん、バッチリ」
最終チェックも無事終了。これで全てのストーンサークルの情報を手に入れることができた。
［カホラ］：「記された数字は3、これで1，2，3，4全てが揃ったわね」
［吹雪］：「もう、確定だね。四季のピアノには、それぞれ一つずつ保護の役割を果たすストーンサークルが存在している」
［カホラ］：「……はあ、何だかすごくスッキリしたわ」
今日までカホラは、ストーンサークルに関してずっと引っ掛かりを覚えていたのかもしれない。しかし、それも解明することができた。きっと今は清々しい気分になっているだろう。
［カホラ］：「これを発表したら、賞状とかもらえちゃうのかしら？」
［吹雪］：「表では2つしかないとされているから、島にとっては大ニュースだよね。賞状だけじゃないかもしれないよ」
［カホラ］：「そ、そうかしら？」
［吹雪］：「カホラは、この調査についての研究資料を作るんだよね」
［カホラ］：「ええ。とりあえずはお母さんに向けて作る予定よ、そういう約束だったからね」
［吹雪］：「大々的に発表するのかい？　このこと」
［カホラ］：「今は、ちょっと悩んでるわ。この調査をしてる時に、どれだけ四季のピアノが大切なのか、どれだけ重要なものなのかを知ったから、表だって言っていいこととは思えないからね。だから、研究資料は作るけど、発表はしない方向で考えてるわ。普通の人から見れば、知らなくてもいい事実だと思うし」
［吹雪］：「確かに、そうだね」

［カホラ］：「私たちだけが知っている事実っていうのも、結構素敵じゃない？　ちょっとした優越感に浸れるわよ」
［吹雪］：「あはは、そうだね。……カホラの判断に俺は任せるよ」
［カホラ］：「うん、ありがとう吹雪。――じゃあ、最後の調査に移りましょうか」
［吹雪］：「うん、真実をこの目に焼き付けよう」
俺たちは、記された文字の解読を始める。
……。
……。
……。

カホラルート・ソンス（13）

［カホラ］：「――できた」
開始から1時間程で、解読が終了した。
［吹雪］：「さすが、最後だけあってかなり骨があったね」
［カホラ］：「ええ、でもこれで、全てが終わったわ」
そう言ったカホラの顔は、達成感に満ち溢れていた。
［カホラ］：「じゃあ早速、読んでみるわね。なるべくわかりやすいように言い換えてみるから」
［吹雪］：「うん、よろしく」
ついに、四季のピアノの歴史が語られる。
［カホラ］：「――名も知らぬ偉大な魔法使い、この島にピアノを生み出す。理由は、この島を襲った大きな災害により、島の四季が崩れかけていたから。名はマナストーム、自然災害に行き場を失った魔力が加わったとてつもない災害だ。この島は、それに巻き込まれた。自然は容赦なく壊され、何もかもが奪われた。それだけでなく、マナストームは、その暴れた魔力で、この島の四季すらも傷つけていった。人々はそれを、肌で実感した。マナストームが去った後、傷つけられた自然からは、花も木々も全く咲くことがなくなった。食料も確保することができず、餓死をする者も増えた。もうこの島も終わりだと思った時、一人の若者がこの地に訪れた。名を名乗ることはなく、この島の状況を聞きつけてやってきたのだという。人々は、彼に事情を説明した。何処から来たのかも分からない者に、事情を離すことは憚られたが、状況が状況なだけに、気にしている余裕はなかった。それに、その男からは何か他の者とは違う雰囲気を感じた。事情を聞いた男はこう言った。
『私がこの島を救ってやろう』と。
何もできないこの状況、人々は彼の言葉を信じることしかできなかった。そして彼はその日、魔法の力で、白と黒でできた音の鳴る不

思議なものを生み出した。名前はピアノと言うらしい。それは一台ではなく、四台も生み出された。それぞれ一つ一つに、春夏秋冬が司っているらしい。男は手本としてそれを目の前で弾いて見せた。するとどうだろう、真っ暗だったその島に光が差し込み、木々や花がすくすくと咲きだしたではないか。人々は目を疑ったが、現実であることに間違いはなかった。人々は喜び、彼を讃えた。一夜にして、彼はこの島の英雄となったのだ。しかし、彼が名前を教えることはなかった。そして、彼はピアノという装置の弾き方を我々に伝授し、奏でるべき音色も教えてくれた。そしてこう言った。

『その四つのピアノを、年月の終わりに奏でることで、次年の島の四季は約束される』と。

それだけを言い残し、彼はこの島を去っていった。どうしてピアノというものを奏でることで四季が保てるのかは、誰にも分からない。しかし、それは紛れもない現実であることは確かだ。人々は彼の言うとおり、年月の終わりにそれを奏でた。彼の言うことは間違いではなく、次の年も、次の年も、島には季節が回ってくれた。

人々は、季節をもたらす装置を、彼の言っていた言葉をとって、『四季のピアノ』と呼ぶことにした。そして、その大切な装置が決して壊れることのないように、幾星霜をかけ、それを守り抜くための神殿と、ストーンサークルを作成した。何百年前からこの作業が続けられてきたのかは分からない。しかし、四季のピアノを守るために、後一つ、神殿とストーンサークルを作り上げる必要がある。島民を代表して、この島の歴史と、この島の英雄を、この場所に刻んでおく。決して忘れることのないように、これからもこの島に未来があることを願って――」

［吹雪］：「……終わりかな？」

［カホラ］：「ええ、内容はそこで終わってるわ」

［吹雪］：「なるほど……こんな理由があったとは」

［カホラ］：「偉大な魔法使い、か……聞いてるだけだと作り話のように聞こえるけど、実物がこの島に存在している辺り、紛れもな

い真実であることに違いないわね」
［吹雪］：「うん、そうだね」
俺たちはただ関心していた。
［吹雪］：「歴史を遡っても、誰が生み出したのかが分からないというのはちょっと驚きだね」
［カホラ］：「何だか地球の始まりみたいな話よね。当たり前のように私たちは地球っていう星に住んでるけど、どんな風にしてそれが誕生したのかは分からない。それと同じで、この島は四季のピアノで保たれているけど、どうしてピアノを弾くことで保たれるのかは分からない。ひょっとしたらこれ以上掘り下げることができるのかもしれないけど、今私たちが知ることができる一番根底にあるのが、この事実でしょうね」
［吹雪］：「それでも、十分満足だよ」
［カホラ］：「そうね、私がずっと知りたかったことも全て知ることができた。とりあえず最初に言わなきゃいけないことは、あれね」
［吹雪］：「うん、あれだね」
俺たちは口を揃えて言った。
［二人］：「この島を救ってくれてありがとう、魔法使いさん」
［カホラ］：「よかった、同じことを考えてたみたいで」
［吹雪］：「俺とカホラは似てるんだから、当然だよね」
［カホラ］：「ふふ、そうね」
［吹雪］：「……そういえば、ハーモニクサーについては一切語られてなかったね。当時はハーモニクサーという仕事はなかったのかな？」
［カホラ］：「あったのかもしれないけど、そういう名前はなかったんじゃないかしら？　簡単に言ってしまえば、サポート係みたいなものだから」
［吹雪］：「なるほど……」
［カホラ］：「それはそれで、掘り下げてみると面白いかもしれないわね。それ以外にも、ジャスパーのこととか、ホーリーカルムの

こととか……そう考えると、まだまだ知りたいこと、私はたくさん持ってるかも」

［吹雪］：「その時は、是非俺も参加させてほしいな。カホラのやりたいことは、俺のやりたいことだからさ」

［カホラ］：「ええ、もちろん。でも、今はこの達成感に浸っておきましょう」

［吹雪］：「うん、そうだね」

［カホラ］：「……ひょっとしたら、ピアリーの名前とかが何処かに書いてあったりしてね。実際にここに足を踏み入れてなければあんな風に書けないわけだし」

［吹雪］：「でも、ここ以外の三つのストーンサークルには何も残してなかったよね」

［カホラ］：「ここは結構特別なイメージがあるじゃない？　歴史もこんな風に記されているわけだし。学者としては、そういう事実を残しておきたくなると思うんだけど」

［吹雪］：「カホラだったらそうしてるかい？」

［カホラ］：「多分ね」

［吹雪］：「……探してみようか？　まだ少し時間もあるみたいだし」

［カホラ］：「うふふ、それも良いわね」

……。

カホラルート・ソンス（１４）

［吹雪］：「……あったね」
［カホラ］：「うん、ピアリーの名前に間違いないわ。でさ、この下に書かれてる名前って……ひょっとしてピアリーの彼女さんじゃないかしら？」
Ｐ・ネレスという文字の下に、もう一つ名前のような文字が刻まれているのが見える。
［カホラ］：「オルシア……でいいのかしら？　スペルはそう見えるんだけど」
［吹雪］：「一人でここに来ることは不可能だし、ピアリーのあの文章からしてここに一緒にきた人って言ったら、彼女しか考えられないよね」
［カホラ］：「そうよね。ここにきて、もう一つ発見したわね。偉大な学者、ピアリーを支えた人物、オルシア」
［吹雪］：「恥ずかしかったのかな？　自分の名前を出すのが」
［カホラ］：「それか、ピアリーが独占欲が強かった、とか？」
［吹雪］：「元々拘りがなかったってことも考えられるね」
［カホラ］：「個人的な趣味、とかだったら、そうかもしれないわね」
［吹雪］：「何にしても、彼らのおかげで、俺たちはここまで来ることができたんだよね」
［カホラ］：「本当に、二人に感謝しないとね」
［吹雪］：「――ありがとう、ピアリーさん」
［カホラ］：「――ありがとう、オルシアさん」
俺たちはその刻まれた文字に深く頭を下げた。
［カホラ］：「ねえ、私たちもここに名前を刻みましょうよ」
［吹雪］：「え？　いいのかな？」
［カホラ］：「いいでしょう？　せっかくじゃない、大事な思い出

なんだから……一生忘れることのないね」

［吹雪］：「……うん、それもそうだね」

二人で、数々の困難を潜り抜けてきたその証を、俺たちはその場所に刻んだ。もし、次にここに来るものがいたとするなら、俺たちのように、力を合わせてやってきたものであると願いたい。

――こうして、俺たちの四季のピアノの探索は一先ず終わりを迎えた。今まで支えてもらった人たちには、その事実を伝えた。

学園長、それから手伝ってくれた舞羽や祐喜たち、みんな口を揃えておめでとうと言ってくれた。学園長は、近々カホラが自筆でまとめた資料を読んで内容を把握すると言っていた。そう言った学園長の顔は、すごく読むのを楽しみにしているようだった。

終わりを迎えた、でも、まだやるべきことは残っている。この島を救ってくれたピアノを使って、今度は俺たちが来年のこの島を救ってやるんだ。今の俺たちは、これを成功させることに使命を燃やしている。

カホラルート・ソンス（15）

［場所：昇降口前］

［吹雪］：「ふう。さっぱりした」

夜の練習と、探索での疲労をシャワーで流し、ちょっと気分転換に外に出てみた。普通に外の気温は寒いんだろうが、シャワーの後だからそこまで寒さを感じない。こうして夜風に当たっているだけでも今日の出来事が頭に浮かんでくる。個人的には、結構予想外の結末だった。個人的には四季のピアノもストーンサークルも生み出したのは同じ人物だと思っていたんだが、神殿とストーンサークルは島民の案で完成したとは思わなかった。だけど、言われてみれば当然の判断か、四季を司る大事な物を野ざらしにしておいていいとは思えないだろうからな。壊れてしまったら、また同じような惨劇を生みかねない。そう考えると、今俺たちがこうして難なく暮せているのも昔の島民が完成させたおかげなのかもしれない。

……物事というのは、ある意味奇跡の連鎖で出来ているのかもしれない。俺がこうして生きているのだって、言ってみればある種の奇跡なんだろう。

［カホラ］：「あ、見つけた」

［吹雪］：「ん？」

振り返った先にいたのは、俺の大好きな人だった。

［カホラ］：「どうしたの？　こんなところで？　寒くないの？」

［吹雪］：「うん、シャワー浴びたばっかりだし、ちょっと体が熱いからさ。そういうカホラも、少し熱そうだけど」

［カホラ］：「吹雪の前にシャワー浴びてたのは私だからね、ちょっと余熱があるみたい。一人で何か考えてたの？」

［吹雪］：「いや、たいしたことじゃないよ」

［カホラ］：「ふふ、四季のピアノの歴史についてでしょう？」

［吹雪］：「……どうして分かった？　何て言う必要もないか」
［カホラ］：「むしろ考えてなかったら逆にびっくりしてたわ」
［吹雪］：「はは、そうだろうね。しばらくは忘れられそうにないよ」
［カホラ］：「私も。というか、これから生きていく人生の間、今日のこの日は忘れられないと思う。この数日間の思い出は、私の大切な宝物だから」
［吹雪］：「俺もそうだよ、きっといくつになっても今日のことは鮮明に覚えてられる自信がある」
［カホラ］：「ふふ、大きく出たわね」
［吹雪］：「嘘は言ってないよ？　ちゃんと本心から言ってる」
それだけ、俺にとって印象深い日々だったんだから。

カホラルート・ソンス（16）

［カホラ］：「目標って、やっぱり掲げてみるものね。こんな数日じゃあって私自身も思ってたんだけど、頑張ったら現実になったんだから」

［吹雪］：「カホラの下積みを、神様が見ていてくれたのかもしれないよ。神様というか、ピアリーかもしれないけど」

［カホラ］：「それを言ったら、吹雪だって見られてたはずよ。私のために、一生懸命になってくれたんだから」

［吹雪］：「好きな人のためなら、全力を尽くしたいからね」

［カホラ］：「またそんな恥ずかしいこと……ここ数日でここまで変わるものなのね、人間って」

［吹雪］：「俺もちょっと思ってる、少し前なら絶対に言えなかった」

［カホラ］：「調査の間に、そういうところも成長したのね、吹雪は」

［吹雪］：「そうかもね。というか、今まで自分の気持ちを抑えてただけで、素直になっただけかもしれないし」

［カホラ］：「……素直な吹雪は、恥ずかしいことを平気で言えるようになるってこと？」

［吹雪］：「今の感じだと、そうかもしれない。……そんな俺は、嫌かな？」

［カホラ］：「全然、恥ずかしいけど気持ちを口に出してくれるっていうのはすごく嬉しいことだから。今もそう言ってくれて、すごく幸せよ」

そういうとカホラは体を俺に寄せてきた。

［カホラ］：「ちょっと暖かさ、分けて」

［吹雪］：「余熱があるんじゃなかったっけ？」

［カホラ］：「あるけど、暖かくなりたくなったの」

すり寄ってくる姿は猫のように愛らしい。
［カホラ］：「いよいよ明日ね、本番」
［吹雪］：「そうだね」
［カホラ］：「吹雪は、緊張してる？」
［吹雪］：「してないと言えば嘘だけど、きっと成功できると思う。というか、成功しなくちゃいけないんだけど」
［カホラ］：「そうよね、私たちにこの島の四季が巡るかが左右されるから」
［吹雪］：「今回の調査のおかげで、四季のピアノに対する想いっていうのを改められたからね。今までは当たり前のように一年を過ごしていたけど、その当たり前は四つのピアノが与えてくれてたわけで、それがどれだけ恵まれてるかってことを実感できた。だから、感謝の心っていうのが俺の中に芽生えたんだ。それを伝えるためにも、精いっぱい頑張ろうって気分」
［カホラ］：「すごく立派な考えね」
［吹雪］：「カホラも同じだろう？　気持ち的には」
［カホラ］：「ええ、吹雪と似てるけど、当たり前にある幸せなんてないのよね。だから私も、願いを乗せて明日は音を奏でようって思うわ」
［吹雪］：「成功させよう、みんなの力を合わせて」
［カホラ］：「ええ」
今回の泊まり込みは、一人の人間としても成長できた実感を得た気がするな。今後の生活に活かしていきたいところだ。
［カホラ］：「でも、明日で終わっちゃうっていうのは、ちょっと寂しいわね」
言葉通り、寂しそうな顔をしてカホラは呟いた。
［カホラ］：「明日が終われば、みんなそれぞれの家に帰るのよね」
［吹雪］：「大変だったけど、共同生活は楽しかったからね。俺も、ちょっと寂しいな」
［カホラ］：「このまま毎日みんなで過ごせないかしら？」

［吹雪］：「すごい魅力的だけど、学校側が許してくれないと思うよ」

授業で使う教室が生活スペースとして取られてしまうのはとても不便なはずだ。

［カホラ］：「やっぱりそうよね」

［吹雪］：「日にちを決めて、みんなで集まる機会を作ろうよ。きっと来てくれるはずだ」

［カホラ］：「うん、そうね」

［吹雪］：「遠慮なく言ってよ？　俺は呼ばれればいつだって飛んでいくから。というか、自分からいっちゃうと思うけど」

［カホラ］：「ふふ、それは嬉しいわね。でも、それは私も同じかも、すでに飛んでいきたいって気持ちがあるもの」

［吹雪］：「あ、じゃあここに来てくれたのも」

［カホラ］：「そう、自分の気持ちに正直になった証拠よ」

俺の腕にぎゅっと体を押し付けてくる。

カホラルート・ソンス（17）

［カホラ］：「本当に、以前言ったことが不安になってきちゃうわ」
［吹雪］：「我慢できなくなるってこと？」
［カホラ］：「ええ、ちょっと吹雪が離れちゃうだけでこんなに切なくなるのに、学校が始まっちゃったらずっと一緒にいることなんてできないでしょう？　その間、気持ちを抑えていられるのか」
［吹雪］：「じゃあ、休憩時間に会いに行くよ、俺」
［カホラ］：「え？　それじゃあ吹雪の休憩時間がなくなっちゃうわ」
［吹雪］：「カホラに会えるだけで、授業の疲れなんて飛んでっちゃうよ。俺にとって、それが一番の休憩だからさ」
［カホラ］：「気持ちはすごい嬉しいけど、それだとちょっと目立ちすぎちゃうから……お昼ご飯を一緒に食べましょう。吹雪の好きな物、作ってきてあげるわ」
［吹雪］：「お弁当作ってくれるのかい？」
［カホラ］：「そんな驚くことかしら？　共同生活中、何度か作ったはずだけど」
［吹雪］：「でも、それはみんなのためで、俺のため、というわけじゃなかったからさ」
［カホラ］：「その違いって、やっぱり大きいの？」
［吹雪］：「それはもちろん」
自分の好きな人が自分のために弁当を作ってくれる……この喜びは計り知れない。
［吹雪］：「今から楽しみだよ、カホラのお弁当」
［カホラ］：「じゃあ、腕によりをかけて作るわね。舞羽から吹雪の好物聞いておかないと」
［吹雪］：「本人が目の前にいるけど？」
［カホラ］：「そこで聞いたら何が入ってるかっていうワクワク感

がなくなっちゃうでしょう？　蓋を開けるその時までは内緒」
［吹雪］：「うーん、まあ、しょうがないか」
［カホラ］：「うふふ♪　――あ、流れ星」
［吹雪］：「え？　どこ？」
探してみたけど、どこにあるのか分からない。きっともう流れてしまったんだろう。ふと横を見ると、カホラは目をつぶって手のひらを合わせていた。
［カホラ］：「よし。見た？　吹雪」
［吹雪］：「いや、どこにあるのか分からなくて」
［カホラ］：「ええ？　綺麗だったのに、もったいないわね」
［吹雪］：「どこら辺にあったんだい？　流れ星」
［カホラ］：「私たちの真上よ、結構大きかったと思うんだけど」
［吹雪］：「うーん、残念だ」
［カホラ］：「流れ星ってそういうものよね。見ようと思ってもなかなか見られないから」
［吹雪］：「何か願い事してたみたいだけど、何をお祈りしたんだい？」
［カホラ］：「それを言ったら願い事にならないじゃないの」
［吹雪］：「いいから、いいから」
背中を押して言うように促す。

カホラルート・ソンス（18）

［カホラ］：「しょうがないわね、えーっと、一つは、明日の儀式が上手くいきますようにって。やっぱりあやかれるものにはあやかっておきたいしね」
［吹雪］：「確かにそうだね。でも、一つってことは、もう一つ願い事をしたってこと？」
［カホラ］：「ええ、そう」
［吹雪］：「欲張りだね、カホラは」
［カホラ］：「いいでしょう？　叶えてほしいことなんてたくさんあるんだから」
［吹雪］：「で？　もう一つのお願いは？」
［カホラ］：「うふふ、やっぱり聞きたい？」
［吹雪］：「もちろん、俺たちの間に隠し事はなしだからね」
［カホラ］：「それを出されちゃうと、私も言わざるを得なくなるわね」
［吹雪］：「ほら、教えてよ」
［カホラ］：「――これからも吹雪と、ずっと幸せに過ごしていけますようにって」
［吹雪］：「……カホラ」
［カホラ］：「うふふ――あ、んんっ」
自然と体が動いてしまい、俺はカホラを引き寄せ唇を奪っていた。
［カホラ］：「んんっ……ちゅ、ちゅく――はあ、随分強引ね、吹雪」
［吹雪］：「ごめん、我慢が利かなくなって」
［カホラ］：「うふふ、しょうがないわね」
［吹雪］：「……俺も、願い事すればよかったよ」
［カホラ］：「え？　どんな？」
［吹雪］：「カホラと、ずっとずっと幸せに過ごしていけますよう

にってさ」
［カホラ］：「私は、叶うと思うわよ？　吹雪がずーっと愛してくれれば」
［吹雪］：「もちろんだよ！　俺はカホラしか見えてないんだから」
［カホラ］：「私も、吹雪だけよ。――ん」
今度はカホラから、柔らかな唇を押し付けてきた。
［カホラ］：「んっ、……んちゅ、くちゅ……ん、はぅむ、ん、んふっ」
俺の唇を割り開いて、ちょっと強引に自分の舌を差し入れてくる。
［カホラ］：「はっ、ん……ちゅ、ちゅぴ、くちゅ……ちゅぱ」
［吹雪］：「ん、カホラ……」
［カホラ］：「ん、んんっ――はあ、はあ……」
［吹雪］：「カホラも強引だね」
［カホラ］：「うふ、ちょっとしたお返しよ」
そうつぶやいたカホラの目は、まるで俺を誘っているみたいで。
［カホラ］：「ん、吹雪？」
［吹雪］：「ごめん、本当はこんなことやっちゃダメなんだろうけど」
体が、カホラのことを欲している。
［カホラ］：「初めてね、吹雪からお願いされるなんて」
［吹雪］：「そう、だったかな？」
［カホラ］：「そうよ、最初と二回目は、私からお願いしたんだもの。吹雪からねだられるのは今回が最初よ」
［吹雪］：「あんな風にキスされたら、どうしたって動かされるよ」
［カホラ］：「そっか。じゃあ、ちゃんと面倒みないといけないわね」
何だかんだ言いつつも、カホラもその気はあったようだ。
［カホラ］：「一つ、お願いがあるの。吹雪の勇気を私に分けてちょうだい、明日、絶対に成功できるように」
［吹雪］：「うん、俺のでよければいくらでも。でも、一つだけ条

件がある」
［カホラ］：「なぁに？」
［吹雪］：「カホラの勇気を俺に分けてほしいんだ、明日の儀式を、乗り越えられるように」
［カホラ］：「ふふ、等価交換ってやつね。うん、もちろんあげるわ」
屈託のない笑顔でそう返してくれた。
［カホラ］：「……ここだとバレちゃいそうだから、ちょっと場所を変えましょう」
［吹雪］：「う、うん、そうだね」
俺は前回と同じように、カホラの後ろを付いて行った。
……。
……。
……。

カホラルート・ソンス（１８）（後書き）

この先は……三度目のラブシーンとなります。
なので、続きは……ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１７３５ｔ／
でどうぞ。

カホラルート・ソンス（19）

休憩を挟み、事後処理をした後、俺たちは図書室で寄り添っていた。まだ就寝まで時間があるのと、戻ってしまうと二人きりになれないから。

腰かける椅子があるにもかかわらず、俺たちは床に腰を下ろして座っていた。もちろん、右手でカホラを引き寄せて。

［カホラ］：「ん、暖かい」

［吹雪］：「もう暖房切れちゃってるからね」

［カホラ］：「まあ、こんな時間に利用する人もいないし、当然なんだけど」

［吹雪］：「寒かったら、もっと寄ってもいいからさ」

［カホラ］：「本当？」

［吹雪］：「当たり前だよ」

［カホラ］：「じゃあ、お言葉に甘えて」

体をもう一歩踏み込み、俺に完全に密着する。

［カホラ］：「はあ、こっちのほうが落ち着くわね」

［吹雪］：「俺としても、こっちのほうがいいかな」

［カホラ］：「どうして？」

［吹雪］：「カホラを近くに感じるからね」

［カホラ］：「十分近かったと思うわよ？　この前の格好だって」

［吹雪］：「今は隙間もないから。気分的に、二人の距離はゼロって思えるんだ」

［カホラ］：「うふふ、何だかおもしろい考え方ね」

［吹雪］：「変かい？」

［カホラ］：「ううん、吹雪らしくていいと思うわ」

そう言ったカホラは頭の位置をずらし、俺の太腿を枕にし始めた。

［カホラ］：「普通は逆なんだろうけど、いいよね？」

［吹雪］：「カホラのしたいことは、俺のしたいことだよ」

否定する理由が見当たらない。
［カホラ］：「ゴツゴツしてるのかなって思ったけど、意外と柔らかいものね」
［吹雪］：「意識して固くしない限りはね」
［カホラ］：「じゃあ、今は力を抜いてるってこと？」
［吹雪］：「抜いてるっていうか、抜けてるっていうか……」
［カホラ］：「――もう、エッチね、吹雪は」
［吹雪］：「自分でも思った。今のは言わなくていいことだったね」
［カホラ］：「吹雪は素直だからね。でも、そういう裏表のないところ、私は好きよ」
［吹雪］：「カホラが好いてくれるなら、それだけでいいな」
［カホラ］：「他の人の信頼はいらないってこと？」
［吹雪］：「そういうわけじゃないけど、カホラに信頼されることが、今の俺には一番嬉しいことだからさ」
［カホラ］：「……まだ、このむず痒い感覚には慣れられそうにないわね」
［吹雪］：「無理になれなくてもいいじゃないか、恥ずかしがるカホラが見られないのは寂しいし」
［カホラ］：「そ、そんなところ見たいの？　吹雪は」
［吹雪］：「カホラの仕草は何もかもかわいいからね。可能なら見ていたいって気持ちがある」
［カホラ］：「……意識してできることじゃないわよ、そういうことは」
［吹雪］：「だからこんな風にして褒めてるんだよ」
［カホラ］：「ふ、吹雪、ひょっとして狙ってやってたの？」
［吹雪］：「まあ、ちょっと……でも、嘘は一言も言ってないよ」
全てが本心から来ている言葉だと自信を持って言える。

カホラルート・ソンス（20）

［カホラ］：「……すっかり積極的な男の子になっちゃったわね」
［吹雪］：「カホラの前限定だけどね」
［カホラ］：「そうじゃなかったら、怒っちゃうわよ、私」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「ど、どうしてそこで黙るの？」
［吹雪］：「ちょっと、見てみたいなって一瞬……カホラが怒ったところ、一度も見たことないからさ」
［カホラ］：「怒ってる姿なんて、見てもつまらないでしょう。それを言ったら、私だって吹雪が怒ってる姿見たことないわよ？」
［吹雪］：「え？　マユ姉とかにはしょっちゅう怒ってるじゃない？」
［カホラ］：「あれは本心からじゃないでしょう？　もっと心から、本気で怒ってるところよ」
［吹雪］：「それは、確かにないかもね」
［カホラ］：「そんな姿を見たって、悲しくなるだけじゃない？」
［吹雪］：「……怒られる種類にもよるかな」
［カホラ］：「種類？」
［吹雪］：「カホラが俺のために一生懸命怒ってくれてるとするなら、それは喜びに変わると思うし」
［カホラ］：「……吹雪、そういう性癖を持ってるの？」
［吹雪］：「ないとは思うけど……ただ俺のためを思ってのものだったら、受け止められる自信がある」
［カホラ］：「まあ、それはもちろん――吹雪への愛情で動いてるとは思うわ」
［吹雪］：「なら、問題ないね」
［カホラ］：「あまり見せたい一面ではないけどね、恋人を怒るところなんて」

［吹雪］：「その時は、その時で」
見れたらラッキーくらいに思っておこう。
［カホラ］：「はあ……」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「ん、くすぐったいわ」
サラサラの綺麗な髪をすいてやると、カホラはそう言ってクスクス笑った。別に嫌と言うわけではないらしい。
［カホラ］：「――成功できる気がしてきたわ、明日の儀式」
［吹雪］：「そういえば、勇気を交換し合う名目だったっけ」
［カホラ］：「あはは、後半は本能のままで動いちゃってたしね」
［吹雪］：「そうだね……すごく良かったけど」
［カホラ］：「そ、そういうのは言わなくていいわ。恥ずかしさのレベルが違いすぎるから」
［吹雪］：「あ、ごめん。――でも、後付けに聞こえちゃうかもしれないけど、カホラの勇気、しっかりもらえた気がするよ」
［カホラ］：「私も、吹雪の勇気――たっぷりもらえた気がするわ」
［吹雪］：「……頑張ろうね、カホラ」
［カホラ］：「ええ、ここまで歴史を知ったんだもの。失敗するわけにはいかないわ」
そう言ったカホラの目には、前以上に使命感が宿っていた。

カホラルート・フォルツァンド（1）

12月31日（金曜日）

［場所：グランド］

儀式当日、俺たちは朝から最後の練習に励んでいた。ピアニストの4人は、音楽室にあるピアノを一時的に全て同じところに固め、本番さながらの練習をする。
その間に、俺は学園長と共にホーリーカルムの最終チェック。今日は本番だから、いつものようなことはせず、触りだけを重点的に練習する。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「――うむ、どうやら問題はなさそうだな」
学園長からその言葉を聞き、俺は安堵感を覚えた。
［セフィル］：「本番もこの感じでやれば、間違いなく大丈夫だろう」
［吹雪］：「ここまで来れたのも、学園長のおかげです」
［セフィル］：「……」
［吹雪］：「ど、どうしたんですか？　急に黙って」
［セフィル］：「いや、いつもカホラに注意されるものだから、…
…賛辞の言葉には慣れてなくてな。ちょっと、感動しているんだ」
［吹雪］：「そこまでたいしたことでも……」
［セフィル］：「私にとってはとても大事なことだ。学園長たるもの、誰からも慕われるような存在にならないといけないからな。生徒から愛されて初めて、学園長は意味があるんだ」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「そんな私に初めて賛辞をくれたのは吹雪……君だ」
［吹雪］：「え？　そ、それはないでしょう。絶対」

［セフィル］：「いや、あまり生徒と触れ合う時間もないのでな。リアル吹雪が初めてだと思うが」
［吹雪］：「……面と向かってってことですか？　それは」
［セフィル］：「うん。……初めてを吹雪に奪われたわけだ」
［吹雪］：「な、何だか意味合いが違ってませんか？　それ」
［セフィル］：「とにかくだ、私は嬉しい。ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「俺は褒められるようなことしてませんよ。自分の思ってることを口に出しただけですし」
［セフィル］：「口に出すというのは案外難しいことだぞ」
［吹雪］：「でも、そんなこと気にする仲ではもうないですから。俺と学園長は」
［セフィル］：「……危ないかんけ――」
［吹雪］：「決してそういう意味ではなく！」
［セフィル］：「む、最後まで言わせてもらえなかったぞ」
［吹雪］：「な、何にしても、学園長の支えがあったからこそ、俺はハーモニクサーとしての役割を果たせそうなわけですから。本当に感謝してます」
［セフィル］：「そ、そんな風に言われると、ちょっと照れてしまうな」
恥ずかしそうに笑うところは、親子そろってそっくりだな。
［セフィル］：「もちろん、吹雪が一生懸命努力をしたというのもあるぞ。自信を持っていいからな、その点は」
［吹雪］：「はい」
学園長には、成功という恩返しをしたいところだ。
……。

カホラルート・フォルツァンド（2）

［場所：社会科室］

練習を終え、社会科室に戻ってきた俺たちは、今日の儀式の最終ミーティングを行う。詳しい日程に関しては、昨日のうちに大半を聞いている。場所が場所なだけに、島民から注目を浴びるということはないのだが、島に設置されたスピーカーを通してピアニストの活躍を確認する。そう、この儀式の参加者は、島民全員ということだ。俺も昔、父さん母さんと一緒に住んでいた頃は、家の外の広場に出てピアノの音色を聴いていた記憶がある。それを今回は、俺がサポートする。緊張するけれど、ちょっと誇らしい気分だ。……帰ってきた時にでも伝えてやりたいな。

［セフィル］：「大体のことは把握したな？」

［全員］：「はい」

儀式の始まりは年が変わる１５分前。ピアニストとハーモニクサーが選出されるのと似ていて、曲が終わると同時に四季のピアノが月と共鳴し、優しい光で包まれた時、来年の四季は約束される。

［セフィル］：「練習風景を見せてもらった限り、君たちに落ち度は見当たらなかった。本番もあの感じで弾ければ、間違いなく成功するはずだ。だから、あまり緊張はしないで、リラックスして臨むんだ。いいか？」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「じゃあ、私は用があるから一度退散させてもらうぞ」

学園長は社会科室から出て行った。この後はしばしの休憩を挟み、本番前にもう一度だけ練習を入れる。この休憩で緊張を解せということかもしれない。

［舞羽］：「お茶でも煎れようか、私家庭科室行ってくるよ」

［聖奈美］：「あ、あたしも行くわ」
そう言って二人が立ち上がった時だった。
コンコン。
ドアがノックされ、ガラガラと扉が開かれた。そこから出てきたのは――。
［祐喜］：「失礼します。あ、やっぱりここにいたんだ」
［愛海］：「あ、みんなそろってるわね」
［翔］：「な、何と言う羨ましい光景……」
すっかり見知った三人組だった。
［吹雪］：「お前ら、どうしてここに？」
［愛海］：「そんなの一つしかないでしょう？　友人が大切な儀式の中心として頑張るのに、激励もしないなんて考えられないでしょう？」
［祐喜］：「三人でお金持ち寄って、みんなに差し入れ買ってきたんだ。僕たちにできることと言ったらこれくらいしかないから」
［翔］：「羨ましい光景だ……」
約一名変なことをずっと呟いているが、今はまだ触れないでおこう。
［舞羽］：「わざわざ買ってきてくれたの？」
［祐喜］：「うん、たいしたものは買ってこれなかったけど。はい、どうぞ」
祐喜は舞羽に持っていたものを手渡した。
［祐喜］：「中身はケーキだから、一応美味しそうなものを見つくろってきたつもりだけど……」
［カホラ］：「そこまでしてくれただけで十分嬉しいわ、ありがとう、三人とも」
［繭子］：「わーい、ケーキだケーキだ～」
予想通り、マユ姉は子供のようにきゃっきゃとはしゃぎ出す。
［聖奈美］：「ここまでしてもらって、失敗はできないわね」
その横で杠は静かな闘志を漲らせている。

カホラルート・フォルツァンド（3）

［場所：社会科室］

練習を終え、社会科室に戻ってきた俺たちは、今日の儀式の最終ミーティングを行う。詳しい日程に関しては、昨日のうちに大半を聞いている。場所が場所なだけに、島民から注目を浴びるということはないのだが、島に設置されたスピーカーを通してピアニストの活躍を確認する。そう、この儀式の参加者は、島民全員ということだ。俺も昔、父さん母さんと一緒に住んでいた頃は、家の外の広場に出てピアノの音色を聴いていた記憶がある。それを今回は、俺がサポートする。緊張するけれど、ちょっと誇らしい気分だ。……帰ってきた時にでも伝えてやりたいな。

［セフィル］：「大体のことは把握したな？」

［全員］：「はい」

儀式の始まりは年が変わる１５分前。ピアニストとハーモニクサーが選出されるのと似ていて、曲が終わると同時に四季のピアノが月と共鳴し、優しい光で包まれた時、来年の四季は約束される。

［セフィル］：「練習風景を見せてもらった限り、君たちに落ち度は見当たらなかった。本番もあの感じで弾ければ、間違いなく成功するはずだ。だから、あまり緊張はしないで、リラックスして臨むんだ。いいか？」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「じゃあ、私は用があるから一度退散させてもらうぞ」

学園長は社会科室から出て行った。この後はしばしの休憩を挟み、本番前にもう一度だけ練習を入れる。この休憩で緊張を解せということかもしれない。

［舞羽］：「お茶でも煎れようか、私家庭科室行ってくるよ」

［聖奈美］：「あ、あたしも行くわ」
そう言って二人が立ち上がった時だった。
コンコン。
ドアがノックされ、ガラガラと扉が開かれた。そこから出てきたのは――。
［祐喜］：「失礼します。あ、やっぱりここにいたんだ」
［愛海］：「あ、みんなそろってるわね」
［翔］：「な、何と言う羨ましい光景……」
すっかり見知った三人組だった。
［吹雪］：「お前ら、どうしてここに？」
［愛海］：「そんなの一つしかないでしょう？　友人が大切な儀式の中心として頑張るのに、激励もしないなんて考えられないでしょう？」
［祐喜］：「三人でお金持ち寄って、みんなに差し入れ買ってきたんだ。僕たちにできることと言ったらこれくらいしかないから」
［翔］：「羨ましい光景だ……」
約一名変なことをずっと呟いているが、今はまだ触れないでおこう。
［舞羽］：「わざわざ買ってきてくれたの？」
［祐喜］：「うん、たいしたものは買ってこれなかったけど。はい、どうぞ」
祐喜は舞羽に持っていたものを手渡した。
［祐喜］：「中身はケーキだから、一応美味しそうなものを見つくろってきたつもりだけど……」
［カホラ］：「そこまでしてくれただけで十分嬉しいわ、ありがとう、三人とも」
［繭子］：「わーい、ケーキだケーキだ～」
予想通り、マユ姉は子供のようにきゃっきゃとはしゃぎ出す。
［聖奈美］：「ここまでしてもらって、失敗はできないわね」
その横で杠は静かな闘志を漲らせている。

［舞羽］：「嬉しい、すごく」
［祐喜］：「喜んでもらえたら何よりだよ。僕たちは、成功すること信じてるから……みんな、頑張ってね」
［吹雪］：「おう！」
［舞羽］：「うん！」
［聖奈美］：「任せときなさい」
［カホラ］：「ええ」
［繭子］：「頑張るよ～」
［吹雪］：「――ところで祐喜。あれは、あのままでいいのか？」
［祐喜］：「え？　ああ、これね」
これと言われて指差されたのは、祐喜の横に立っている翔のことだ。
［祐喜］：「さっきからずっといいなーってばっかり言ってて、いざ部屋に入ったら……どっかに魂飛んでっちゃったみたいだね」
［愛海］：「確かに、この空間には美女がたくさんいるもんね。不自然なくらい」
日野はそう言ってピアニスト４人を眺める。
［愛海］：「天は二物を与えずって言うけど、あれは嘘みたいね。美女で才能持ってる人ばかりがここにいるんだから」
［舞羽］：「べ、別にそんなことは……」
［愛海］：「はいストーップ！　舞羽、それ以上言うと、他の女子にいつか刺されちゃうわよ？」
［舞羽］：「さ、刺される！？」
［愛海］：「自覚は持てないとしても、口に出すのはやめとくのが吉よ？　それが自己防衛になるから」
［吹雪］：「……女子の世界って、やっぱりドロドロしてるものなのか？」
［聖奈美］：「あ、あたしに聞くのやめなさいよ……」

［吹雪］：「……確かにそうか」
［聖奈美］：「今の間は一体何よ……」
［吹雪］：「ううん、気にしないでくれ」
［愛海］：「――だから、翔っちが飛んじゃうのは分からなくはないわね。見てるだけで幸せな空間だと思うし」
［祐喜］：「でも、一応言うこと考えてたみたいだし、そろそろ正気に戻さないと」
祐喜は右手の指を三本立て――。
［祐喜］：「ふっ！」
［翔］：「おおおっ！？」
背中の孔にビシっと突き立てた。
［翔］：「え？　あ、オレ……えっと」
どうやら正気に戻ったらしい、目の色がいつもの翔になっていた。
［祐喜］：「言いたいことあるんでしょう？　もう僕たち言ったから、後は翔だけだよ」
［翔］：「あ、ああ。そうなのか、えー、みなさん、オレは手助けも何もすることができませんが、成功することを心から祈ってますので、頑張ってください……決まった」
大きい独り言を零すあたり、こいつらしい。だが、女性陣は何だかんだ言って優しいから――。
［舞羽］：「ありがとう翔くん」
［繭子］：「その言葉で頑張れるよ、ワタシたち」
［聖奈美］：「儀式の時、ちゃんと起きてなさいよ」
［カホラ］：「しっかりやってくるわ」
［翔］：「ううう……今年一番の幸せかもしれない」
どんだけ今年良いことなかったんだよ……。
［翔］：「そして吹雪よ」
［吹雪］：「ん？」
［翔］：「……今度こういうシチュエーションがあったら、オレを呼んでくれよ？」

これが、さっきの理由なんだろうと、俺は確信した。
［祐喜］：「じゃあ、僕たちはそろそろ行くよ。長居したら悪いだろうし」
［愛海］：「また学校で会いましょう」
［翔］：「みんな、オレのこと忘れないでくれよ」
［吹雪］：「おう、サンキューな」
三者三様の言葉を残し、三人は社会科室を出て行った。
［舞羽］：「予想外に、良いものもらっちゃったね」
［吹雪］：「早速食べるか？」
［舞羽］：「うん、せっかくだしね。私、お茶煎れてくるよ」
［聖奈美］：「須藤さん、あたしも行くわ」
――三人が来てくれたおかげで、俺たちから緊張が解けたようだった。やはり持つべきものは友達だな。
［カホラ］：「？　ふふ」
偶然目が合ったカホラが、俺にいつもの笑みを浮かべてくれた。
――そして、来るべき時間がやってくる。

カホラルート・フォルツァンド（5）

［吹雪］：「――よし！」
俺は気合いを入れ直す。儀式開始まで残り３０分、ピアニストの４人は学園長によって神殿まで運ばれる。
［カホラ］：「いよいよね、吹雪」
横にいたカホラがそう語りかけてくる。
［吹雪］：「緊張してるかい？」
［カホラ］：「してない……っては言い切れないわね。でも、吹雪から勇気もらったし……成功する自信はたくさんあるわ」
［吹雪］：「それはよかった。足りないようならあげるつもりでいたけど」
［カホラ］：「こ、ここではさすがに……恥ずかしいわよ」
［吹雪］：「公認になって喜んでたのはカホラのほうじゃなかったっけ？」
［カホラ］：「そうだけど、何だか今は吹雪のほうが嬉しそう」
［吹雪］：「そうかな？　まあ嬉しいと言えば嬉しいけど」
［カホラ］：「そう言い切れちゃう辺り、つくづく成長したって思うわ」
［吹雪］：「嫌だったかい？」
［カホラ］：「……反則よ、その質問は」
逆の意と捉えて問題はないだろう。
［聖奈美］：「ん、んん！　あの、二人とも？　そろそろラブラブモードは解除したほうがいいんじゃないですか？」
［カホラ］：「あ、そ、そうね。ごめんね」
見るに見かねたのか、杠が注意を促してきた。
［聖奈美］：「全く、すぐイチャイチャしだすんだから」
［舞羽］：「でも、最初に公認したのって杠さんだったような」
［聖奈美］：「た、確かにそうだけど……ここまでするとは思って

なかったのよ」
［舞羽］：「ふふ、誤算だったんだね。杠さんらしくないな」
［聖奈美］：「……そういうことに関して、常識は通用しないのよ」
――今ではすっかりこの二人も仲良くなったようだ。見ていて、ちょっと嬉しく感じた。
［繭子］：「みんな、そろそろだよ～」
マユ姉の呼びかけに、俺たちはその場に並んだ。
［セフィル］：「準備はいいか？　五人とも」
［五人］：「はい！」
［セフィル］：「よし、では行くとしよう。じゃあ、舞羽から連れて行くとしよう」
［舞羽］：「はい」
［吹雪］：「頑張れよ、舞羽」
［舞羽］：「うん、吹雪くんもね」
穏やかだけど、力強くうなずき、舞羽は神殿に向かう。
……。
［セフィル］：「次は、聖奈美だな」
［聖奈美］：「はい。……」
特に俺にしゃべりかけるわけではないが、その気持ちはしっかりと伝わってきた。
……。
［セフィル］：「次は、繭子か」
［繭子］：「はい」
［吹雪］：「しっかりな、マユ姉」
［繭子］：「もちろん！　練習の成果、ぜーんぶ出してくるから」
……。
［セフィル］：「じゃあ最後に、カホラ、行くぞ」
［カホラ］：「はい」
うなずき、俺の方に振り返る。
［カホラ］：「行ってくるわね、吹雪」

［吹雪］：「うん。後で、また会おう」
［セフィル］：「はっは、相変わらず熱いな、二人は」
［カホラ］：「嫉妬してるの？　お母さん」
［セフィル］：「何を言うか、そんなことはないぞ」
［カホラ］：「本当かしら？」
［セフィル］：「……そ、そんなことはいいじゃないか。さあ、行くぞ」
［カホラ］：「うん、よろしく」
［セフィル］：「じゃあ吹雪、少し待っていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
手を振ったカホラに、俺も手を振って返した。
……。
そして、数分後、学園長が戻ってきた。
［セフィル］：「待たせたな、では、行こう」
［吹雪］：「はい！」
俺は学園長に連れられて、聖壇へと向かう。
……。

カホラルート・フォルツァンド（6）

［場所：聖壇］

聖壇に来たのはあの日以来だ。前回は練習の一環だったが、今回は本番、自分の力を信じて最後までやり遂げる必要がある。――不安はほとんどない、今までやってきた事実がしっかりと胸に刻まれている。自分を信じてやれば、成果は必ず着いてくるはずだ。

［セフィル］：「良い目をしてるな、吹雪」

［吹雪］：「きっと俺だけじゃないと思いますよ」

きっとピアニストの４人も、同じ目をしているだろう。

［セフィル］：「手伝ってやれないのは少々心苦しいが、しっかりと見届けてやるからな。安心してくれ」

［吹雪］：「はい」

［セフィル］：「じゃあ――頑張るんだぞ、吹雪」

学園長はそう言い残し、俺の前から消えた。儀式まで残り後わずか、俺は精神統一をしてその時を待つ。

モニターには、苦楽を共にした４人の仲間が映し出されている。俺の頭に、今までの生活の思い出が甦り、駆け抜けていく。心を通わせた俺たちなら、きっとうまくいく。俺たちは今、全員同じことを思っているはずだ。

［吹雪］：「（行くぞ、みんな）」

……。

……。

――儀式が始まった。

舞羽から始まり、次いで杠、マユ姉、カホラと追いかけるような形でメロディーが奏でられていく。しばらくして始まりが杠からに変わり、それに次いでマユ姉、カホラ、舞羽と続く。その後はマユ姉、

カホラとパートの始まりが入れ替わり……続いてそれぞれのメインパートへ向かう。
それぞれの曲調が十分に引き出され、前回よりも深みの増したメロディーが俺の耳に届いてくる。
舞羽、杠、マユ姉、カホラ……順々にメインパートが移り、次第に曲調は激しいものに変わっていく。
ここから、前回の練習で手こずったと思われるポイントが続いていく。
変拍子が続くメロディーを正確に弾くことがキーとなるが、きっと今のみんななら、問題なく進めるはずだ。
［吹雪］：「（頑張れ、みんな）」
俺は来るべきその時まで、みんなにエールを送る。
……。
変拍子のパートは、無事問題なくクリアすることができた。ここから、それぞれのソロパートに移っていく。それと同時に、俺は魔法詠唱の準備にかかる。
［吹雪］：「……」
供給する人物を、しっかり脳内でイメージする。――よし。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
俺は魔法を解き放った。そして、供給する人物、杠に向けて魔力を分け与える。
……はっきりとは分からないが、杠の体はぼんやり光を帯びているようだ。これは問題なく魔力が送られている証拠、俺は気を緩めずに供給に徹していく。
……。
舞羽のソロパートが無事に終わり、杠にメインパートが移り変わる。
それと同時に、魔法を杠からマユ姉にシフトする。
先程と同じように集中し、脳内にマユ姉をイメージする。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、

我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

発光を確認し、俺は同じように魔力を分け与える。

杠の鍵盤を走らせる指の動きは滑らかで、とても安定感がある。マユ姉はその間に気持ちを高めているようで、目をつぶって深呼吸をしていた。

……。

そしてパートはマユ姉に移り、次はカホラに供給する。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……問題なく成功。それと同時にマユ姉のパートが始まる。

練習の際、ちょっと他の人よりも間違いが多かったが、今ではしっかりとメロディーを刻むことができている。秋を感じさせる穏やかなメロディーラインが、俺の心にしっかりと響いてきた。

……。

ソロパートもいよいよ最後、俺の魔力の供給も最後となる。以前ほどではないが、体に疲労が蓄積し始めている。だが、それはみんなも同じ、俺だけがここで離脱するわけにはいかない。俺はもう一度気を引き締め、舞羽に向けて供給を開始する。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

――無事成功、後はカホラが無事ソロパートを弾き終えるまで、舞羽に魔力を供給していく。以前の時と同じ、主に曲の始まりを担う舞羽には、三人よりも少し多めに魔力を供給させる必要がある。俺は意識して、舞羽に分ける魔力を増やすよう心掛けた。

……。

そして、程よい余韻を残した後、再び舞羽が鍵盤を弾き始める、それに続いて杠、マユ姉、カホラとメロディーを奏でていく。俺はそれを確認し、詠唱を停止した。

どうやら無事に役目を果たすことができたようだ。後は四人が無事

に弾き終わることを待つのみだ。
［吹雪］：「（もう少しだ、頑張れ、みんな）」
俺は心の中でもう一度エールを送った。
――徐々に、曲のテンポは遅くなり、音量も低くなっていく。
……そして。
［吹雪］：「……」
演奏が終わった。
それとほぼ同時に、新しい年の始まりを告げる鐘の音が島に響き渡る。それと、ほぼ同時だった――。
［吹雪］：「あ、ピアノが」
四季のピアノは白い光を放ち始める。そしてその光は月に向かって一直線に伸びていく。
そして――島全体が優しい光で包まれた。
［吹雪］：「成功、したんだな」
モニターに映るみんなの顔も、成功したという事実に笑顔が満ちていた。
……。
……。
……。

［セフィル］：「――よく頑張ってくれた、みんな」
学園長の顔にも、笑顔が満ち満ちていた。
［セフィル］：「完璧と言っていい演奏だったぞ、練習を教えた私も鼻が高いよ」
［聖奈美］：「これで、儀式は全て終了ですか？」
［セフィル］：「ああ、これで一年、春夏秋冬が滞りなく回っていくはずだ。それもこれも、君たちのおかげだ」
［舞羽］：「役割を果たすことができて何よりです」
［セフィル］：「君たちの名前は、しっかりと学園に刻んでおくからな」
［繭子］：「ワタシたち、歴史の一ページに名を連ねるんだね～」
［聖奈美］：「学園の歴史、だと思いますけど……それでも嬉しいことですね」
［カホラ］：「歴史ということに変わりはないものね」
努力してきたと甲斐があったというものだ。
［セフィル］：「今日はゆっくり休んで疲れをとるといい。明日あたり、みんなで新年会&お疲れ会でも開こうじゃないか」
［繭子］：「わーい、やった～」
――こうしてみんなと笑いあうことができて、本当に幸せだと感じた。

カホラルート・フォルツァンド（8）

［場所：屋上］

［カホラ］：「やったね！」
［吹雪］：「お疲れ」
そして俺たちは、ハイタッチを交わした。
［カホラ］：「これで無事、今年も問題なく一年を過ごせるわね」
［吹雪］：「うん、しかもそれをもたらしたのは俺たちって考えると、喜びも一塩だね」
［カホラ］：「本当に、最高のスタートを切ることができたわ」
［吹雪］：「……」
［カホラ］：「どうしたの？　急に悲しそうな顔して」
［吹雪］：「うん……まだ先のことだって分かってるんだけど、こうしてカホラと学校生活を送れるのも今年だけなんだなって考えちゃって」
［カホラ］：「ああ、そういえばそうね」
俺はカホラの一学年下、来期は俺たちが最上級生になり、カホラは学園を卒業する。
［吹雪］：「考えただけで、すごく寂しくなっちゃって」
［カホラ］：「大丈夫よ、そんな心配しなくたって頻繁に会えるから」
［吹雪］：「……そういえば、カホラの次の進路ってどこなんだい？」
よくよく考えてみたら、進路が決定してること以外聞いたことがなかった。
［カホラ］：「言ってなかったかしら？」
［吹雪］：「うん、聞いた覚えはないよ」
［カホラ］：「私、この島の大学に入学するのよ。ハルモニア大学

にね」
［吹雪］：「あ、そうだったんだ」
［カホラ］：「名前くらいは聞いたことあるでしょう？」
［吹雪］：「うん、もちろん」
この島で一番の偏差値を誇る大学で、外の世界に巣立つ人以外に進学を考える生徒の多くは、ハルモニア大学を受験する。
［カホラ］：「そこでたくさんの知識を学んで、この学校の先生になりたいと思ってるの」
［吹雪］：「先生か……図書室のかい？」
［カホラ］：「さすが、分かってるわね、吹雪は」
［吹雪］：「カホラは本が好きだからね、何となくそんな気がしたんだ」
［カホラ］：「じゃあ、どうして図書室の先生になりたいかも分かるかしら？」
［吹雪］：「……図書室の先生になれば、研究をするのにとても役立つから、かな？」
［カホラ］：「大正解！　さすが私の恋人ね」
柔らかな笑みを浮かべながら。
［カホラ］：「今回の調査を通して、やっぱり私は研究をすることが好きなんだって実感したんだ。かと言って教師になるっていう夢もあきらめられないから、どうせなら欲張ってみようかなって思って」
［吹雪］：「カホラならできると思うよ、俺は」
［カホラ］：「本当？」
［吹雪］：「一緒にさせてもらった探索の毎日が、決定的な証拠さ」
［カホラ］：「ふふ、夢が叶ったら、是非吹雪に助手をお願いするわね」
［吹雪］：「もちろん、楽しみに待ってるよ」
その夢が現実になる日が、今から待ち遠しい。
［カホラ］：「……もう何回目か分からないけど、もう一度言わせ

てね。一緒に調査を手伝ってくれてありがとう、吹雪」
［吹雪］：「俺のほうこそ、調査に付きあわせてくれて、本当に感謝してる」
カホラが誘ってくれて、俺はたくさんの新しいものを発見することができた。その一つひとつが、俺の中に色濃く残り、これからの人生に活かせる糧になる。
［カホラ］：「それともう一つ――私のこと、好きになってくれてありがとう」
［吹雪］：「……その言葉、俺も言いたいな」
［カホラ］：「うふふ、お返ししてくれるの？」
［吹雪］：「もちろん。――俺のこと、好きになってくれてありがとう、カホラ」
［カホラ］：「どういたしまして、でいいのかしら？」
［吹雪］：「うん、それでいいよ」
［カホラ］：「本当に、今まで生きてきて一番楽しい一年だったわ。吹雪との日々は、私の一生の宝物よ」
［吹雪］：「それは、俺も同じだよ。カホラと気持ちがつながって、毎日楽しくて仕方がなかった。一生忘れないよ、この想い出は……でも」
［カホラ］：「ん？　何？」
［吹雪］：「今カホラ、去年が人生で一番楽しかったって言ったよね？」
［カホラ］：「うん、言ったけど」
［吹雪］：「俺、今年の目標が一個できた」
［カホラ］：「目標？　どんな？」
［吹雪］：「去年よりも、カホラと楽しい一年を送ること」
［カホラ］：「……じゃあ、私も一個、今年の目標を立てようかな」
［吹雪］：「ん？　どんな？」
［カホラ］：「吹雪と一緒に、去年よりも楽しい一年を送ること。ふふ♪」

［吹雪］：「――目標がかぶっちゃったな」
［カホラ］：「でも、お互いに目標が一緒だから、それに向かって一緒に進めるでしょう」
［吹雪］：「あはは、そうだね。じゃあ、今年も一緒に楽しんでいこうよ」
［カホラ］：「うん、いつでも一緒よ？　吹雪」
［吹雪］：「もちろんさ」
［カホラ］：「うふふ♪」
俺の大好きな人が、横で楽しそうに微笑んだ。

カホラルート・フィナーレ（1）

エピローグ

［場所：図書室］

［カホラ］：「吹雪、悪いけど古書室に行きましょう。大事な資料を取り忘れてたわ」

［吹雪］：「うん、分かった」

――季節は春、二月の中旬を過ぎる頃には雪もすっかり降らなくなり三月になった今は、春の陽気が差し込んできている。

今から一週間前、カホラは無事学園を卒業した。檀上で証書をもらうカホラの優雅な振る舞いは今もとても印象に残っている。しかし名目上、三月が終わるまでは学園生ということになっているので、今はこうして二人で違う探索を行っている。

まあ違うと言っても、四季のピアノに関係していることなのだが。

［カホラ］：「……後少しで、この学園ともお別れね」

［吹雪］：「寂しいかい？」

［カホラ］：「少しね、でも、二度と戻ってこれないわけじゃないから、泣きそうになるほどじゃないわ」

［吹雪］：「そうだね、四年後の今くらいには、挨拶にやってきてるかもしれないしね」

［カホラ］：「お母さんに挨拶してるってこと？」

［吹雪］：「まずは学園で一番偉い人に挨拶するのが基本だよね？」

［カホラ］：「それまで学園長をやっていれるのかしら？」

［吹雪］：「やってると思うけどね」

［カホラ］：「理由は？」

［吹雪］：「……ごめん、理由はないです。でも、何となくそんな気がしてさ」

［カホラ］：「私も、そうだと思いたいわ」
［吹雪］：「そういえば学園長、カホラのまとめた資料を読んだんだよね？　何て感想言ってた？」
カホラは卒業する前に学園長室に行き、今までの調査結果を資料に持論を交えてまとめ、そして提出した。俺は一度読ませてもらったんだが、ピアリーから得た情報をベースにまとめられた資料はとても分かりやすく、要点を抑えたとても素晴らしい出来だった。
［吹雪］：「何となく予想はつくけど、カホラの口から聞きたいな」
［カホラ］：「ほとんど、吹雪の予想してる通りよ。ふふ、満点合格をもらったわ」
［吹雪］：「それはよかった、俺と同じような反応してたでしょう？」
［カホラ］：「自分で言うのは憚られるけど、そんな感じだったわ。カホラはもう一人前の学者だなって言ってたわ」
［吹雪］：「よかったじゃない、本物の学者になれる日も遠くないね」
［カホラ］：「でも、私が本物の学者になるには、優秀な助手が必要だけどね。例えば、私と同じように四季のピアノに興味を持ってて、私のことを好いてくれる人」
［吹雪］：「……速攻で立候補しますよ、カホラさん。というか、俺以外の人を助手で雇ってほしくないな」
［カホラ］：「うふふ、もちろん冗談よ。吹雪以外の助手なんて、考えられないわ」
［吹雪］：「ちょっと安心した。とにかく、合格をもらえてよかったね」
［カホラ］：「ええ、本当に」
［吹雪］：「その資料は、どうすることにしたんだい？」
［カホラ］：「お母さんとそれに関して話したんだけど、しばらくは、この学園の古書室に置いておくことにしたわ。やっぱり、秘密にしておいたほうがいい情報かもしれないし、公に知らせると色々

と面倒かもしれないしね。来るべき時がきたら、発表するかもしれないけど」

［吹雪］：「そっか」

［カホラ］：「それにね……古書室に私たちの資料を残しておけば、いつか、私たちみたいな人が出てくるかもしれないでしょう？」

［吹雪］：「あはは、なるほどね」

［カホラ］：「滅多にないことかもしれないけど、そのおかげで私たちはこういう関係になれたわけだし」

［吹雪］：「絶対ってことはないだろうね、確実に」

［カホラ］：「でしょう？　そういうわけで、ここに残しておくことにするわ」

［吹雪］：「手に取ってもらえるといいね」

［カホラ］：「欲を言えば、発見する喜びを知ってほしいところね」

［吹雪］：「そうだね、目に見えるもの以外に見つかるものがあるかもしれないし」

［カホラ］：「……私たちの関係、見たいなものとかね」

［吹雪］：「……自分で言って恥ずかしがってない？　カホラ」

［カホラ］：「ちょっとだけ、うふふ」

［吹雪］：「無理にとは言わないけど、人との関わりの大事さとかは知ってほしいね」

［カホラ］：「そうね、それが、未来の自分に役だってくるだろうからね」

［吹雪］：「違いない」

その経験があって、今の俺たちが存在しているから。

［カホラ］：「これからも、二人で頑張っていこうね、吹雪」

［吹雪］：「うん、もちろんだよ！」

［カホラ］：「じゃあ早速、古書室に行きましょう」

［吹雪］：「おおー！」

調査の最中に発見した恋心と言う宝は、これからも俺たちの中で育てていく。どんな困難が待ち受けていても、二人でなら笑って乗り

切れるはずだ。
［カホラ］：「吹雪、ずっとずっと、大好きだからね」
ＥＮＤ

カホラルート・フィナーレ（1）（後書き）

長い間ありがとうございました。
これにてカホラルートは終了です。
次回からは杠聖奈美のルートを載せていきたいと思います。
まだまだ作品は終わりませんが、これからもよろしくお願いします。

聖奈美ルート・アダージオ（1）

12月16日（木曜日）

［場所：教室］

［吹雪］：「ふう……」
［翔］：「どうしたんだよ吹雪、さっきからふうふう言って」
［吹雪］：「見てて分かんないか？　疲れてるんだよ」
［翔］：「なるほど、疲れてるんだな！」
［吹雪］：「たった今俺が言った発言を当てたみたいにして言うんじゃねぇ」
［愛海］：「……本当に疲れてるみたいね、ツッコミにいつもの覇気がないわ」
［舞羽］：「今日の練習メニュー、結構キツかったの？」
［吹雪］：「いつもとあまり変わってないはずなんだけど、最初の走り込みがちょっと体に響いたというか……」
いつも通りの距離をこなしたんだが、今日のランニングペースはいつもよりも早かった。学園長のテンションも心なし高かった気がする。
［吹雪］：「調子が悪かっただけかもしれないけどな」
［舞羽］：「無理はしないでね？」
［吹雪］：「ああ、大丈夫だ」
昨日の失敗を取り返そうと張り切りすぎたせいもあるか。無理はするなって言われてるし、体に合わせた練習を心がけないと。
［吹雪］：「舞羽の弁当食べて、体力回復だ」
［舞羽］：「多分美味しいと思うけど、口に合ってる？」
［吹雪］：「逆に合わないことなんてあるのか？　メチャクチャうまいよ」

［舞羽］：「よかった」
［吹雪］：「お前はもっと自分の味に自信を持ったほうがいい。これで料理上手くないなんて言ったら、世の料理ができない女子に冷たい視線を向けられるぞ？」
［舞羽］：「つ、冷たい視線？」
［吹雪］：「すでに一名、向けてる奴が横に……」
［舞羽］：「え？　あ……」
［愛海］：「……」
［舞羽］：「な、愛海？」
［愛海］：「そうよ、舞羽。大久保くんの言うとおり、あんまりそういうこと言ってると、こういう目で見られちゃうのよ？」
［舞羽］：「あ、う、その……き、気を付けます」
［愛海］：「その卵焼き半分くれたら許してあげるわよ？」
［舞羽］：「あ、ど、どうぞ」
［愛海］：「うひひ、お目当ての品ゲット」
日野は最初からそれが狙いだったのかもしれない……恐ろしい女だ。
［翔］：「オレも食いたいぜ、須藤の手料理」
［吹雪］：「やらんぞ？」
［翔］：「冷たいな、吹雪ちゃんは……」
［吹雪］：「お前も立派な弁当持ってるじゃないか？　それだって手料理だろう」
翔のお母さんが作ったと思われる弁当は、翔にあったとてもボリュームのある品にできあがってる。
［翔］：「確かに美味いことは美味いんだけど、何て言うか……何かが足りないんだよ。……あれだ、フェロモン？」
［吹雪］：「弁当から出るフェロモンって何だよ？」
［翔］：「分かるだろ？　オレが言いたいこと、同い年くらいのうら若き乙女が自分のためにせっせと弁当を作ってくれる……そう、愛情だ、愛情！」
［吹雪］：「どんな間違いしてるんだよ、お前」

フェロモンと愛情は全く違う気がするぞ。

［翔］：「須藤の作った弁当からはそれがすっごく伝わってくるんだよ。オレの弁当からはそれが全く伝わってこない」
［吹雪］：「いや、入ってるだろう。お前を思って作ったお母さんの愛情が」
［翔］：「お母さんの愛情はまた別物なんだよ」
［吹雪］：「……お前の理論はよく分かんねぇ」
［翔］：「結論、食いたいってことだ！」
［吹雪］：「じゃあ今のところの会話いらねぇだろ」
とても不毛な時間だ。
［翔］：「だから吹雪、交換しようぜー？　オレのから揚げと須藤の生姜焼き」
［吹雪］：「ダーメーだ。お前に舞羽の料理を渡したら、使い道を間違える気がする」
［翔］：「食べる以外にどんな使い道があるんだよ！？　そんなことは全然……これっぽっちも考えてないぜ？」
［愛海］：「翔っち、そこは大久保くんに『例えばどんなだよ？』って聞き返さないとダメよ」
［翔］：「う、くそ、その手があったか。というか攻略法知ってるなら教えてくれよ、日野」
［愛海］：「自分で打開しないと翔っちのためにならないでしょう？」
［吹雪］：「……つうわけで、不埒な考えを持つ翔に分けてやることはできない。その邪念を払拭できたら考えてやる」
［翔］：「ううう……修行するしかないのか？　オレ」
正直、払拭するのは無理な気がする。

聖奈美ルート・アダージオ（3）

［祐喜］：「吹雪、隣いいかい？」（祐喜）
［吹雪］：「おう、祐喜。空いてるぞ？」
椅子を引いてやると、祐喜はありがとうと言って座った。
［吹雪］：「先生に呼び出しでもされたのか？」
［祐喜］：「いや、生徒会のほうでちょっとやることがあってね。聖奈美に書類の書き直しをお願いされたんだ」
［吹雪］：「大変だな、生徒会は」
［祐喜］：「まあね。でも、この経験はきっといつか生きてくるはずだから、社会勉強だと思ってやってるよ」
確かに、書類関係に関して無類の強さを発揮できそうだ。
［祐喜］：「よかったらどうですか？　生徒会？　大久保さん、須藤さん」
［吹雪］：「唐突な勧誘だな……」
［祐喜］：「人では大いに越したことはないからね。それに、二人だったら即戦力として活躍してくれそうだし」
［吹雪］：「一体、いつそんな好評価を頂いたんだ？　俺たち」
［祐喜］：「それはもちろん、普段の生活だよ」
［愛海］：「なるほど、だからワタシたち二人はハブかれてるのね？」
［祐喜］：「うん、そうだよ」
［翔］：「ゆ、祐喜、全く隠そうともしないんだな……」
［祐喜］：「だって、隠しても二人のためにならないし、はっきり言っちゃったほうがいいと思ったから」
［翔］：「日野……お前とは仲良くできる気がするぜ」
［愛海］：「そうね、以前から連帯感を感じてた気がするのは、決して間違いじゃなかったのね」
［翔］：「これから、もっと仲良くやっていこうぜ！」

［愛海］：「翔っち！」

横で男女間の友情が生まれていた。

聖奈美ルート・アダージオ（4）

［祐喜］：「で、どうだい？　二人とも」
そしてそれをものともせずにスルーする祐喜、前々から思ってたが、祐喜のスルースキルはとてもレベルが高いな。今度教えてほしいものだ。
［吹雪］：「んー、祐喜には失礼だけど、どうしても面倒くさそうなイメージがあるんだよな。だから、正式な入部はパスさせてもらうよ。手伝いだったらいつでもやってやるけど」
［舞羽］：「私も同じかな。誘ってもらえるのは嬉しいけど、魔法研究部のほうもあるし、バイトもしてるから時間がないから」
［祐喜］：「あはは、そこまで真剣に考えなくていいから。何となく聞いてみただけだからさ」
［吹雪］：「そうか？　でもまあ、人手が足りなくて困ってるなら声かけてくれよ。都合が合えば助けにいくさ」
［祐喜］：「うん、ありがとう」
……。
……。
……。

聖奈美ルート・アダージオ（5）

［場所：廊下］

［ダルク］：「あ、吹雪ー」
［吹雪］：「ん？　ああ、ダルクか」
歩いてる途中、かわいい使い魔に呼び止められた。
［吹雪］：「ご主人様は一緒じゃないのか？」
［ダルク］：「今はちょっと別行動とってるの、聖奈美の仕事の邪魔しちゃいけないから」
［吹雪］：「あーそうなのか。あんまり一人でふらふら歩くのは危険だぞ？　さらわれちゃうかもしれないからな」
［ダルク］：「え？　誰が？」
［吹雪］：「この話の流れから、ダルクしか該当しないと思うんだが」
［ダルク］：「え？　それはないよー」
［吹雪］：「いやいや、あると思うぞ？　俺だったらそうするかもしれない……飼い主が杠だと知ってなければな」
［ダルク］：「そうなの？」
［吹雪］：「ああ、まことに遺憾だ」
使い魔を持っている時点で、かなり魔法使いの素質があるということだからな。誰もがそう見られたいはずだ。
［吹雪］：「社会科室にマユ姉とかいるかもしれないし、そこで時間を潰したらどうだ？」
［ダルク］：「吹雪は、何か用事があるの？」
［吹雪］：「用事がっていうか、杠に聞きたいことがあるから、生徒会室に行こうとしてたんだ」
［ダルク］：「そうだったんだ。何か大事なこと？」
［吹雪］：「まあ、大事って言えば大事かもな。今晩の夕食に関し

てのことだから」
今日の料理当番は杠だから、買い出し係の俺としては新しい食材を補給するか否かを尋ねる必要がある。
［吹雪］：「あいつなら、冷蔵庫にある食材で何とかしそうだけど、確認はしておこうと思ってな」
［ダルク］：「うん、そうだね」
［吹雪］：「ダルクは、杠の作る料理って食べたことあるのか？」
［ダルク］：「うん、もちろんあるよ」
［吹雪］：「実際どうなんだ？　俺たちは今日初めて食べることになるんだけど」
［ダルク］：「本当は言っちゃダメなんだろうけど……作れない、ようなイメージあるでしょう？」
［吹雪］：「……正直言うとな」
聞かれたら大変だから、一応小さな声でそう伝える。
［吹雪］：「どうしても料理ができるって印象は伺えないんだよ」
［ダルク］：「吹雪の言いたいことは良く分かるよ。私も、最初はそう思ってたから」
［吹雪］：「……共感してくれるってことは、本当は上手なんだな？　杠は」
［ダルク］：「うん、人並み以上だと私は思う」
［吹雪］：「そうなのか。何系の料理が得意なんだ？」
［ダルク］：「基本的に何でも作れるんだけど、比較的和食が多いかもしれないね」
［吹雪］：「へえ、ちょっと意外だ」
外見の印象から、洋食とかを好んで食べそうなのに。
［吹雪］：「人は見かけで判断しちゃいけないって、このことを言うのか」
［ダルク］：「嘘はついてないから、地獄みたいな料理を食べさせられることはないと思うよ」
［吹雪］：「それを聞いて安心した」

［ダルク］：「私が生きてるのが何よりの証拠だから」
［吹雪］：「……うん、説得力がメチャクチャ増した」
［ダルク］：「あはは」
夕食、ちょっと期待して待ってみようか。
［吹雪］：「杠は生徒会室いるのか？」
［ダルク］：「うん。『書類を済ませないと』、って言ってたから」
［吹雪］：「そうか、じゃあちょっと行ってくる」
［ダルク］：「うん、頑張ってね」
［吹雪］：「おう」

――というわけで生徒会室に着いたぞ。
早速ノックをして入室を試みる。――コンコン。
「はい、どうぞ」
許可が下りたようなので、俺はドアを開いた。

聖奈美ルート・アダージオ（6）

［場所：生徒会室］

［吹雪］：「失礼します」
［聖奈美］：「……何だ、大久保だったのね」
［吹雪］：「何だとはちょっと失敬じゃないか？」
［聖奈美］：「ノックなんかするから、先生かしらって思ったのよ」
［吹雪］：「ああ、なるほど。でも、入室前にノックするのはマナーだろ、普通」
［聖奈美］：「一般的な礼儀は分かってるみたいね」
［吹雪］：「反面教師を見て育ってきたからな、俺は」
［聖奈美］：「……何て返したらいいのか分からないんだけど」
［吹雪］：「うなずいてくれるだけでいいぜ」
［聖奈美］：「じゃあ、そうするわ」
杠はこくりとうなずいた。
［聖奈美］：「で？　何の用で来たの？　用事もないのに来たのだとしら、お帰り願うところだけど」
［吹雪］：「やっぱり忙しいのか？　生徒会は」
［聖奈美］：「まあね。去年もそうだったけど、学年が上がるとそれに比例してくるのよ」
［吹雪］：「生徒会長だもんな、お前」
［聖奈美］：「なった以上、去年以上に自分の仕事に責任を持ってやらなきゃいけないわけ。忙しくて当たり前なのよ」
［吹雪］：「なるほど」
［聖奈美］：「あたしのことはいいのよ。大久保の用件は何なの？」
［吹雪］：「ああ、悪いな。お前今日、夕食当番だろう？」
［聖奈美］：「それがどうかしたの？」
［吹雪］：「俺、買い物係だから、何か買わなきゃいけない食材と

かあるのかなと思ってさ」
［聖奈美］：「それで、当番のあたしに聞きにきたと」
［吹雪］：「そういうこと」
［聖奈美］：「特に買い足す必要はないわ。まだ何を作るかも決めてないし、冷蔵庫にある食材を使って作るから」
予想通りの返事が帰ってきた。
［吹雪］：「じゃあ、買い出しには行かなくていいんだな」
［聖奈美］：「ええ、何とかなるでしょう」
［吹雪］：「ならよかった。……」
［聖奈美］：「何よ？　じっとこっちを見て」
［吹雪］：「いや。それ、全部書類なのか？」
［聖奈美］：「そうだけど、それがどうかしたの？」
［吹雪］：「いや、それに全部記入していくのか？」
［聖奈美］：「全部ではないわ。半分よ、半分」
杠は右手を書類の上でパンパンと叩く。
［聖奈美］：「書かなきゃいけないのはこっちだけ。こっち半分はこれからファイルに綴じ込むの」
［吹雪］：「にしても、結構量があるんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうかしら？　これ以上多い時だって結構あるし、そこまで驚くことではないわ」
［吹雪］：「俺は驚くべき量だと思うんだが……」
［聖奈美］：「あなたもあたしみたいに仕事してみれば分かるわ、次第に普通に感じてくるから」
［吹雪］：「そういうものなのか？」
［聖奈美］：「そういうものよ、――悪いけど、そろそろ戻ってもらえる？　仕事に集中しないといけないから」
［吹雪］：「ああ、悪い。じゃあ、また後で、頑張れよ」
［聖奈美］：「お疲れ様」
杠は顔を上げずにそう返した。
ガチャン。

なるほど、祐喜が誘ってくるのも何となく分かるな。
あんな風にして、学園を影で支えてるんだな、生徒会は。
［吹雪］：「感謝しないといけないな」
俺の中で生徒会の株が少し上昇した。
……。
……。
……。

聖奈美ルート・アダージオ（7）

［場所：社会科室］

［繭子］：「うー、お腹すいた～」

［カホラ］：「今聖奈美が頑張って作ってるからもう少しの辛抱ですよ、繭子先生」

［繭子］：「うう、我慢しないと～……」

［カホラ］：「きっと我慢した分だけ美味しくなると思いますよ」

［繭子］：「そうだね、じゃあ頑張らないと～」

一体あの小さな体のどこに凄まじい食欲を隠しているんだろう。人間の体はつくづく不思議だ。今家庭科室では、杠とダルクが料理を作っている。今から３０分くらい前に一度荷物を置きに顔を出し、そのまま社会科室を後にした。その様子から、それまでずっと仕事をしていたんだと思う。

［吹雪］：「無理をしてないといいんだがな……」

［舞羽］：「ん？　どうしたの？　吹雪くん」

［吹雪］：「いや、何でもない、こっちの話だ」

［舞羽］：「そう？　――ねえ吹雪くん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

［吹雪］：「ん？　何だ？」

［舞羽］：「杠さんって、料理が上手なのかな？」

俺がダルクにしたような質問が飛んできた。

［舞羽］：「杠さんのことだから、きっとできないことは言わないと思うんだけど、私、杠さんの料理食べたことないから分からなくて」

［吹雪］：「俺も食べるのは今日初めてだぞ？」

［舞羽］：「でも、比較的接する機会は吹雪くんのほうが多いから、何か知ってるかなって思って」

［吹雪］：「正直言うと、不安か？」
［舞羽］：「……あはは」
その苦笑は肯定と受け取って問題ないだろう。
［吹雪］：「実は俺もついさっき、ダルクに同じ質問を投げかけたんだよ。杠は料理ができるのかってな」
［舞羽］：「そうなんだ。で、何て言ってたの？」
［吹雪］：「ダルク曰く、人並み以上に料理はできて、美味しいってさ。自信を持って言ってたあたり、きっと問題はないと思うぞ」
［舞羽］：「そっか、そうだよね。杠さん、自分ができないことはできないってはっきり言えるだろうし」
［吹雪］：「期待して待っててもいいんじゃないか？」
［舞羽］：「そうだね、参考にできるところは参考にしよう」
［吹雪］：「これ以上学ぶことがあるのか？　お前」
［舞羽］：「料理は日々精進なんだよ吹雪くん、自己流だけでは辿り着けない高みが料理には存在するの。だから、学ぶことを怠ったらダメなの」
［吹雪］：「際ですか……」
［舞羽］：「……ちょっと見てみたいな、お料理してるところ」
［吹雪］：「気になるのか？」
［舞羽］：「うん、ちょっとね」
［吹雪］：「じゃあ、行ってみるか？　手伝いに来たって口実で」
［舞羽］：「え？　いいのかな？」
［吹雪］：「さすがにあいつも手伝いに来た人を追い返すマネはしないだろう」
俺単体ではその可能性もあるかもしれないが、舞羽がいることでその可能性はぐっと低くなるはず。

聖奈美ルート・アダージオ（8）

［吹雪］：「思い立ったが吉日だぜ？」
［舞羽］：「……付き合ってもらえる？」
［吹雪］：「ああ」
俺自身、ちょっと興味あるしな。
……。

［場所：家庭科室］

［舞羽］：「お、お邪魔しまーす」
おずおずと入室する舞羽の後ろを俺は着いていく。中では杠が調理の真っ最中だ。
［吹雪］：「舞羽が望んでいた場面じゃないか」
［舞羽］：「うん、でも一応声はかけないと」
［吹雪］：「そうだな、黙ってるのはよくないし」
というわけで、杠のいるところへと向かう。
［舞羽］：「あ、杠さん」
［聖奈美］：「はい？　あら、二人とも、どうかしたの？　夕食までもう少しかかるんだけど」
［舞羽］：「う、うん、何か手伝うことないかなって思ってきたんだけど」
［聖奈美］：「……大久保も同じかしら？」
［吹雪］：「ああ、そんなところ。雑用だからな」
［聖奈美］：「そう、ありがとう、わざわざ来てくれて」
俺の時とは違い、言葉遣いが柔らかいのは舞羽がいるからなんだろう。
［聖奈美］：「でも、特に手伝ってもらうこともないのよね、お皿はダルクが用意してくれてるし……部屋で休んでてくれていいわ」

［舞羽］：「あ、そうなんだ。……じゃ、じゃあ、ちょっと料理してるところ、見せてもらってもいいかな？」
［聖奈美］：「え？　誰の？」
［舞羽］：「杠さんの」
［聖奈美］：「須藤さんが、あたしの？」
どうして？　と言った感じだ。
［聖奈美］：「須藤さん、あたしよりも料理が上手いじゃないの。見ててもおもしろくないでしょう」
［舞羽］：「他の人が料理してるところって、あまり見たことないから、前からちょっと興味があって……杠さん、料理が上手いって教えてもらったから、何か参考になればなって思って」
［聖奈美］：「……上手いっていう情報は誰から聞いたのかしら？」
［舞羽］：「え？　あ、吹雪くんから」
［聖奈美］：「……」
何故か睨まれてしまった。マズイことだったのか？　というか俺もダルクから教えてもらったんだが……。
［聖奈美］：「学ぶことなんてないと思うんだけどね」
［舞羽］：「料理好きな人間としての性なの、見せてもらえると嬉しいな」
舞羽にここまでお願いされて、断ることはできないんだろう。
［聖奈美］：「そこまで言うならいいわ。でも、あたし自己流だから、規則正しい動きはできないわ、そこは目をつぶってちょうだいね」
［舞羽］：「ありがとう、杠さん」
［聖奈美］：「お礼されることじゃないわ」
どうやら交渉成立したようだ。
［吹雪］：「俺はダルクの手伝いでもするか」
［聖奈美］：「別に戻っててもいいわよ？　さっきも言ったけど、一人でも問題なくできるんだから」
［吹雪］：「あっちにいてもやることがないからな、だったら手伝

いしたほうがいいだろう？」

［聖奈美］：「……向こうにいるから、声をかけてみなさい」

［吹雪］：「了解」

俺は準備室へと向かった

……。

聖奈美ルート・アダージオ（9）

［繭子］：「ご飯、ご飯～♪」
夕食完成の報告を受けて、社会科室にいたメンバーも家庭科室にやってきた。
［吹雪］：「すいません、マユ姉が迷惑かけて」
［カホラ］：「大丈夫よ、意外と盛り上がったしね」
［吹雪］：「何かしてたんですか？」
［カホラ］：「そうね、大富豪とかポーカーとか、フェルシア先生が保健室から持ってきてくれてね」
［フェルシア］：「マユ、そういうゲームのルールとか分からなそうなのに、意外と強かったりするのよねー」
［繭子］：「ゲームなら大好きだから～、ふーちゃんにいつも付き合ってもらって修行してるもん」
［カホラ］：「じゃあ、吹雪よりも強いってことですか？　繭子先生は」
［繭子］：「うぐ……」
［フェルシア］：「……勝てないのね、吹雪くんには」
［吹雪］：「小手先の技術だけでは俺は倒せないぞ」
［繭子］：「くそー、いつかリベンジするんだから～」
［吹雪］：「その前にピアノの練習を頑張るんだ、お互いにな」
［繭子］：「う、うん、分かってるよ～」
［聖奈美］：「――お待たせしました」
杠が料理を装って俺たちに回す。
［繭子］：「わーい、カレーだ～！」
［カホラ］：「美味しそうね～」
［聖奈美］：「おかわりありますから、いっぱい食べてください」
エプロンを取って俺の真向かいに腰を下ろす。そして、観察と手伝いをしていた舞羽は俺の横に座った。

［全員］：「いただきます」
［繭子］：「あむ、あむ……」
相当食欲を抑えつけてたのか、マユ姉は皿も食いそうな勢いで食べていく。
［繭子］：「おいじ～い！　すごくおいしいよ～」
［聖奈美］：「そ、それはよかったです」
［カホラ］：「――本当、すごく美味しい」
［フェルシア］：「プロの味みたいね」
そんな評価を横で聞きながら、俺も一口食べてみる。
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……美味い、何だこれ」
みんなが感想を零す通り、お世辞抜きで美味かった。舞羽も同じ感想を持ったようで、俺の隣で同じようなことをつぶやいている。
［吹雪］：「市販じゃないよな？　これ」
［聖奈美］：「そうね、カレールーなかったから、カレー粉から作ったわ。材料の都合上、あまり工夫はできなかったけど」
［カホラ］：「十分よ、むしろ安い食材でここまで作れることがすごいわ」
［聖奈美］：「あ、ありがとうございます」
たくさんの賛辞に、杠はちょっと恥ずかしそうにしている。
［舞羽］：「是非レシピをもらいたいところだね、この味は」
［聖奈美］：「須藤さんだって作れるでしょう、これくらい」
［舞羽］：「できなくはないかもしれないけど、カレー粉から作ったことってないんだ。市販の物にアレンジを加えることが多いから」
［吹雪］：「あれはあれでかなり美味いんだけどな……こっちはこっちで違う美味さがある」
［繭子］：「あむ、もぐ……もぐ……」
［吹雪］：「マユ姉があんな勢いで食うのは、本当に美味いって証拠だからな」
［聖奈美］：「……妙に褒めるわね、あなた」

［吹雪］：「言っておくが嘘は一つも言ってないぞ？　俺は舞羽の料理を食って生きてきたからな。舌は相当肥えてるぞ」
［聖奈美］：「それは、そうでしょうね……」
［吹雪］：「まあなんだ……美味いぞ」
［聖奈美］：「結局それなの……」
［吹雪］：「良い例えが見つからなかった」
自分の語彙力のなさに脱帽する。
［カホラ］：「何だかプレッシャーね、二日続けてこんなに美味しい料理出されたら……ちょっと緊張してきちゃうわ」
［舞羽］：「大丈夫ですよ、カホラさんの料理の美味しさ、私たち知ってますから」
［吹雪］：「はい、先輩の料理もすごく楽しみです」
［カホラ］：「……何だろう、さらにプレッシャーがのしかかる音が聞こえたような……」
［舞羽］：「そ、そういう意味で言ったわけじゃないですから」
［カホラ］：「……多少レベルが落ちても、許してちょうだいね」
許すも何も、作ってくれるだけで無問題だ。
［繭子］：「はぐ、はむ……聖奈美ちゃん、おかわり～」
［聖奈美］：「あ、はい。量はどれくらいですか？」
［繭子］：「大盛り～」
だと思ったぜ。杠はちょっと嬉しそうにご飯を装っていた。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（1）

12月17日（金曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、では練習に入ろうか」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「体調は？　どこか優れない部分とかはあるか？」
［吹雪］：「大丈夫です、万全です」
［セフィル］：「闘志満々だな、何か良いことでもあったのか？」
［吹雪］：「そういうわけじゃないですが、そろそろ成功させたいと思う次第で」
［セフィル］：「うむ、いい意気込みだ。その成功させたいと思う心ほど大事なものはないからな。吹雪は出来た子だ」
［吹雪］：「こんなことで出来た子というのはちょっと甘過ぎはしませんか？」
［セフィル］：「そうか？　――吹雪は誉められるのは嫌いなのか？」
［吹雪］：「え？　そういうわけじゃなくてですね……何て言うかあまり甘やかされると、図に乗ってしまうというか、適度に塩を振って引き締めてもらうことが大事だと思うんです」
［セフィル］：「……自らそんなことを言えるとは、できた男だな」
［吹雪］：「学園長、何か今日おかしくないですか？」
［セフィル］：「え？　何がだ？」
［吹雪］：「何か、異常に誉めるじゃないですか。大したことしてないのに」
［セフィル］：「そんなことはないぞ、吹雪はよくやってる。それは紛れもない事実じゃないか」

［吹雪］：「俺に言われてもですね」
［セフィル］：「期待しているぞ、君には」
［吹雪］：「……期待に添えるように頑張ります」
そろそろ、話に戻ってほしいな。
［セフィル］：「上手く言ったらもっと誉めてやろう」
［吹雪］：「は、はあ……」
［セフィル］：「よし、それでは本題に入ろうか。フェル、準備を」
［フェルシア］：「はい」
先生は、以前使用した機械を持ってくる。
［セフィル］：「とりあえず、魔力ゲージを確認だな」
［吹雪］：「はい」
腕に巻き付けて検査をする。
［吹雪］：「うん、９１％か、まずまずってところか。フェルはどうだ？」
［フェルシア］：「私は５４％です」
［吹雪］：「今日は少ないな、激しい運動でもしたのか？」
［フェルシア］：「そういうのじゃないですよ、昨日は保健室に来る生徒が多かったので、魔力の消費が激しかったんだと思います」
［吹雪］：「なるほど、大人気だったんだな」
［フェルシア］：「あまりいいことではないですけどね、保健室が忙しいというのは」
［吹雪］：「まあな。でも、すぐに補ってもらえるだろうよ。今日は成功させると意気込んでいるからな」
［フェルシア］：「お願いね？　吹雪くん」
［吹雪］：「はい、頑張ります」
［セフィル］：「よし、では準備をしよう」
ファルシア先生と向き合うように立つ。
［吹雪］：「練習を始める前に、ちょっと目を閉じてくれ」
［セフィル］：「はい」
何だろう、一体。

［セフィル］：「――我の中に眠る力、汝に宿したまえ」
［吹雪］：「ん？　お、おお！」
［セフィル］：「どんな感じだ？」
［吹雪］：「何と言うか、力が流れ込んでくるような感じがします」
［セフィル］：「うむ、正しい反応だ。前回の反省を踏まえて、私の魔力を吹雪に一時的に分け与えた。メーターにも現れているはずだ」
確かに、９１だったメーターが今は１００を差していた。
［セフィル］：「前回ああなってしまったのは、吹雪の疲労が極限まで高まってしまったのもあると思うんだ。私の魔力を与えることでそれを少しはカバーできるかと思うのでな。分かってるとは思うが、無理だけはいけないぞ？　危ないと感じたらすぐに詠唱をやめるんだ。いいか？」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「当然のことだ。大切なのはイメージだからな、それを頭に入れ直したら、自分のタイミングで始めてくれ」
［吹雪］：「はい」
集中、イメージを大切に……。
自分が上手く供給できている様子を思い描いて、一度深呼吸をする。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「そう、集中だ」
［吹雪］：「――ホーリーカルム！」
光が、フェルシア先生を包み込む。ここまでは問題ない、大事なのはここからだ。
……。
［吹雪］：「よし、メーターが動いたな」
［フェルシア］：「その調子よ、吹雪くん」
ちらっとメーターを確認する。学園長のサポートのおかげで、以前よりも魔力の消費が緩やかになっている。フェルシア先生のメーターは……５８、上がっている。

この調子だ。
［セフィル］：「そうだ、そのままだ。心に静を宿すんだ」
学園長の言葉どおり、今の状態を保つ意識を作る。
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「いいわ、力が流れ込んでくるのを感じるわ」
確かに、俺力が供給できているような感じがする。このイメージを掴みたいところだ。
……。
［セフィル］：「よし、いいぞ。もう少しだ」
俺のメーターを、フェルシア先生のメーターが上回った。
［フェルシア］：「ファイト、吹雪くん」
集中、集中……自分に言い聞かせる。フェルシア先生のメーターが８０になったところで終了となる。
現在７７、後少しだ。
［セフィル］：「３……２……」
［フェルシア］：「吹雪くん、ファイト！」
ラストスパートだ。
［セフィル］：「……１、……よし、詠唱やめ」
声を聞き、俺は詠唱を解いた。
［吹雪］：「はあ……」
やめた途端、一気に疲労が襲いかかり、俺は片膝をついた。
［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」
［フェルシア］：「吹雪くん」
［吹雪］：「だ、大丈夫です。ちょっと、力が抜けちゃいました」
［セフィル］：「よく頑張ったな、ほら、飲むといい」
［吹雪］：「ありがとうございます」
もらったドリンクを一口飲んだ。
［吹雪］：「魔力ゲージは？」
［フェルシア］：「吹雪くんのおかげで、ちゃんと回復してるわよ」

ゲージは８０ぴったりになっていた。そして代わりに、俺のゲージが４０を下回っていた。

［セフィル］：「残りが３６か、うん、まずまずといったところか」

［吹雪］：「学園長のサポートがなかったら、きっとうまくいかなかったですね」

［セフィル］：「だとしても、集中力を持続することができなかったらここまですることは不可能だぞ。自信を持って大丈夫だよ」

［吹雪］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「とりあえずは及第点だな。今日で成功できたのは大きな収穫だ。もっと鍛えればきっとサポートがなくても上手くいくだろう」

［吹雪］：「はい、頑張ります」

とりあえず、以前のようにならなくてよかった。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（2）

［場所：教室］

――でも、疲労がそう簡単にとれるわけもなく。

［吹雪］：「はあ……」

［舞羽］：「だ、大丈夫？　吹雪くん」

［吹雪］：「ああ、死にはしないと思うぞ」

［舞羽］：「し、死ぬギリギリまで追い込まれてたの？」

［吹雪］：「そういうわけじゃないとは思うんだが……そういうわけでもあるのかな？」

［舞羽］：「？」

［吹雪］：「ごめん、自分でも何言ってるのか分からないわ」

［愛海］：「これは、ちょっとからかったりできなさそうね」

［吹雪］：「いや、変に気を遣わなくていいぞ。いつも通りで頼む」

［愛海］：「……いつも通りで頼むって時点でいつも通りじゃないような気がするのは私だけかしら？」

［吹雪］：「まあ、気にすんなってことだ。疲れてはいるけど、良い気分ではあるから」

［祐喜］：「練習が上手くいったのかい？」

［吹雪］：「まあ、そんなとこだな」

［祐喜］：「それは確かに嬉しいことだね、おめでとう」

祐喜が拍手してくれる。

［吹雪］：「後は供給量を伸ばしていくことが重要だな」

［祐喜］：「吹雪なら、きっとできると思うよ」

［吹雪］：「おう、もちろん頑張るぜ」

［愛海］：「……しかし、そんな話を聞いてると、どんどん大久保くんや舞羽が普通の人に見えなくなってくるわね」

［舞羽］：「え？　どうして？」

［愛海］：「だって、学校代表であり島の運命を託された者たちでしょう？　その時点で……凡人っぽくないもの」
［舞羽］：「別に、そんなことないと思うけど」
［愛海］：「本人はそう思うものなんだろうけど、私たちからはそう見えるのよ。何て言うか、有名人を見るような感じ？」
［舞羽］：「……よく分からないよ」
［愛海］：「とにかく、普通じゃなく見えちゃうってことよ。選ばれるってことは、それだけ素質があるってことなんだから」
［吹雪］：「……結局言いたいことは何なんだ？」
［愛海］：「今のうちにサインもらっておいたほうがいいのかしら？」
全然違う方向に話が飛んで行った。
［愛海］：「今や二人は学園の有名人よ？　二人のサインなら結構高値で――」
［吹雪］：「そんなことするんであれば、俺は日野との縁をスッパリ切るからな」
［愛海］：「ええ～！？　そんな～」
［吹雪］：「合法じゃない手段で金を儲けようとするなんて最低だ。しかも仲間をダシに使って……そんな奴を友達だなんて言えるわけがないだろう」
［愛海］：「じょ、冗談に決まってるでしょう？　いくら私でもそんなことできないわよ」
［舞羽］：「……本当？　愛海」
［愛海］：「大丈夫、しないから。私には二人が必要だから」
［吹雪］：「分かればいいんだ、分かれば」
――ところでだ。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（3）

［吹雪］：「さっきから何なんだ？　こいつは、人の弁当ジロジロみて」
［祐喜］：「そういえば、さっきから一言もしゃべってないね」
［翔］：「……」
［吹雪］：「言いたいことがあるならはっきり言えよ、おい」
［翔］：「いや、その……今日の吹雪の弁当って誰が作ったのかなって思って」
［吹雪］：「誰って……杠だと思うが」
［翔］：「杠って、あの杠か？」
［吹雪］：「ああ」
［翔］：「あの生徒会長の？」
［吹雪］：「だからそうだと言ってるだろうが」
［翔］：「……マジかよ、マジかよ～」
何故二回繰り返したんだ？　こいつは。
［翔］：「うう～、頼む吹雪～、何でもいい、一口食わせてくれ～」
［吹雪］：「な、何だよ急に。あーやめろ、しがみついてくるな」
［翔］：「あん……強引ね……」
［吹雪］：「どっちがだ、気持ち悪いんだよその反応」
［翔］：「頼むよ～、一口でいいからさ～」
［吹雪］：「作ってくれって頼めばいいだろう、本人に」
［翔］：「そんなことできたらとっくにやってるだろう？」
まあ、確かに……女性に声をかけることにためらいないもんな、こいつ。
［翔］：「できないからこうやって頼んでるんでしょうが」
［吹雪］：「大体、何が理由なんだよ？　どうせ昨日みたいなくだらない理由だろう」
［翔］：「そうやって決めつけるのは良くないぞ、吹雪ちゃん。確

かにフェロモンは出てるが、それとは別の理由がある」
結局フェロモン出てるのかよ……。
［翔］：「実をいうとこの学園には、杠ファンクラブというものが存在しているんだ」
［吹雪］：「何だそりゃ？」
［翔］：「まあ、アイドルの追っかけが集うサイトみたいなもんだ。杠は、結構プライドの高さとキツイ性格に定評があるわけだが、実はそれがいいという奴がこの学園にはたくさんいるらしく、彼女の写真は一部で破格の資金で取引されるらしいんだ」
［吹雪］：「……何だか犯罪っぽい臭いがするのは俺だけか？」
［祐喜］：「というか、そういう話を生徒会に所属する僕の前で言っちゃうあたりどうかと思うけど」
［翔］：「だってオレは所属してないもん、そこまで杠のファンじゃないし」
［吹雪］：「じゃあ今の件はいらねぇだろ」
［翔］：「いやいや、今の話がこれからの談判に大きく関係してくるんだって！」
どうやら続きがあるらしい。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（4）

［翔］：「そんな熱狂的ファンがいる女子が作った手作り弁当だぞ？　ファンクラブ会員だったら万単位の金を払ってでも食いたい代物だぞ？　それを食べることができたら――そいつらに自慢できるじゃないか！」

［吹雪］：「……結局私欲のためのお願いじゃねぇか」

［翔］：「私欲で何が悪い！　自分がしたいことの積み重ねで人生は構成されてるんじゃないのか！？　お前にはこの感情が分からないかもしれないが、オレにとってはとっても大事なことなんだ！」

お前は演説者か……。

［翔］：「だから、一口おくんなまし……吹雪様」

［祐喜］：「――って言ってるけど、どうする？　聖奈美」

［翔］：「え？　聖奈美？　みなみ……って……」

錆びついた音が聞こえそうなほど、ぎこちなく翔は後ろを振り返る。

するとそこには――。

［聖奈美］：「……」

ものすごい冷たいオーラをまとった杠が佇んでいた。

［翔］：「え？　いつ、から？　いつから……いた、の……？」

［祐喜］：「んー、そうだね、フェロモンの話くらいからかな？」

［翔］：「え？　どうして……いる、の……？」

［吹雪］：「あれだけでかい声でしゃべってれば、そりゃあ隣のクラスにも声が届くだろうよ」

［翔］：「あ、……そっ……か……」

もはや翔はメルトダウン寸前のマシーンのようにしゃべることすらままならなくなっていく。顔は真っ青になり、口もパクパクするばかり。

［翔］：「あ、えっと……その……」

［聖奈美］：「言いたいことは、それだけかしら？　島貫翔」

［翔］：「あ、ああ……あああっ……」
［聖奈美］：「――クラスのみなさん、申し訳ないけど、ちょっとだけ外で待機してもらっていいかしら？　すぐに終わるわ」
［クラス全員］：「は、はーい」
［聖奈美］：「――心配ない、殺しはしないから」
［翔］：「い――いぎゃあああああっ！？」
［吹雪］：「これは、同情の余地はないな」
俺の言葉に、三人は黙ってうなずいていた。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（5）

［場所：第二音楽室］

［聖奈美］：「――全く、考えられないわ」
どうやら、まだ機嫌は治っていないようだ。
［聖奈美］：「あんなことを大っぴらに言うなんて、神経がマヒしてるとしか思えないわ」
［吹雪］：「元々ああいう奴なんだよ。思ったことを口に出さないと気が済まないんだ」
［聖奈美］：「よくあんなのと友達やってられるわね？　あなた」
［吹雪］：「友達じゃない、悪友だ」
［聖奈美］：「どっちも同じじゃないの」
［吹雪］：「違うぞ、全然違う」
［聖奈美］：「あたしにはどっちでもいいことなのよ」
俺にとってその認識のされかたはよくないんだが……言ったところで改めはしないだろうな。
［聖奈美］：「あなたあいつの知り合いなんだから、そういうのは未然に処理しておきなさいよ」
［吹雪］：「いや、これでもやってるんだぜ？　そういうのはやめたほうがいいとか、絶対に良く思われないぞとか、祐喜と二人で再三言い続けてるんだぜ？」
［聖奈美］：「……それでも、あれなの？」
［吹雪］：「自分の欲求をセーブする力が足らないらしい」
俺たちだって、あいつに手を焼かされっぱなしなんだ。
［吹雪］：「その点を評価していただきたいんだが……」
［聖奈美］：「考えておくわ。――それにしても、ファンクラブが存在するなんて……そんなの初耳よ」
［吹雪］：「本人に知られちゃあマズイから裏で活動してるんだろ」

［聖奈美］：「許可を取らないで活動してるってことが、ちょっと癪に障るわね」
［吹雪］：「でも、仮に許可を取りに来たとして、許すわけないだろ？　お前」
［聖奈美］：「そりゃそうよ、あたしは一生徒に過ぎないんだから」
［吹雪］：「だったら本人に知られないように、こっそりすることを選ぶんじゃないのか？」
［聖奈美］：「そんなの創設して、一体どんな活動するのよ」
［吹雪］：「そりゃあ……お前の話とかするんじゃないのか？」
［聖奈美］：「例えば？」
［吹雪］：「例えば？　うーん……今日も注意してたなとか、魔法の威力すごかったなとか、じゃないか？　基本的に、お前がいたらしゃべれないことをしゃべるんだろ」
［聖奈美］：「……よく分からないわ」
［吹雪］：「本人は分からなくて当然じゃないか？　まあでも、お前のことが嫌いで創設したわけじゃないのは確かだろ。嫌いだったらファンにならないわけだし」
［聖奈美］：「それは、そうなのかしら？」
［吹雪］：「お前はいつも通りにしてればいいんだ。それが、ファンにとって一番喜ばしいことだ」
［聖奈美］：「何だか話が変な方向に言ってないかしら？　別にファンの方に喜んでほしいなんて言ってないわよ」
［吹雪］：「ああ、そうだったな」
［聖奈美］：「そんなことより練習よ、練習。ダルク」
［ダルク］：「うん、了解」
［吹雪］：「……どんな練習をするんだ？」
［聖奈美］：「今日はＣＤを使って練習するわ」
［吹雪］：「ＣＤ？」
［聖奈美］：「ええ。演奏曲を加工して、あたしのパートの音を消したＣＤを作成したから、そこにあたしの音を当てはめていくわ」

［吹雪］：「なるほど、実践に近い練習ってわけか」
［聖奈美］：「そういうこと。とりあえず横で聴いてなさい、終わったら感想聞くから」
［吹雪］：「おう」
［聖奈美］：「じゃあダルク、スイッチ押してちょうだい」
［ダルク］：「うん、――スイッチオン」
スイッチと同時に、演奏曲がスタートした。途中無音になるところに、杠がメロディーを刻んでいく。
――さすがはピアノ経験者という感じか。指使いはとても滑らかで、流れるようという表現がぴったりだ。この時点でもう完璧なんじゃないかという感じもするんだが……多分　そういう解答は受け付けてくれないだろう。
杠のことを考えれば、それは杠が望む答えではないだろうからな。
そうならないように、俺は奏でられるメロディーに集中した。
……。
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（6）

［聖奈美］：「――ふう」
演奏が終わると同時に、俺は拍手を送った。
［聖奈美］：「どうだったかしら？」
［吹雪］：「うん、流れはすごく綺麗だったな。淀みないっていうか、自信を持って弾けてるんだって印象を受けた。でも、もう少し強弱をつけてもいいんじゃないかって思う。分かるには分かるんだけど、もっと強調するところは強調しないと、一辺倒に聞こえてしまうかもしれないから」
［聖奈美］：「なるほどね――ダルクは？」
［ダルク］：「うん、私も吹雪と一緒。前回よりも強弱つけてるようには感じるけど、まだまだつけても問題ないと思うよ。弾いてると感覚掴みずらいかもしれないけどね」
［聖奈美］：「そう……足りない部分が見えたわ」
杠は楽譜にそのことをメモしていく。
［聖奈美］：「じゃあ、今のを意識してもう一度弾いてみるから」
［吹雪］：「ああ」
［ダルク］：「頑張って、聖奈美」
……。
さすが、飲み込みが早いというか杠はすぐに自らの修正を成功させていた。これも経験者故の実力だろうか？

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（7）

12月18日（土曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「はあ……はあ……」
――いつものようにランニングに始まり。
［吹雪］：「――ホーリーカルム！」
――最後はホーリーカルムの練習で終わる。

［場所：廊下］

［吹雪］：「今日も頑張った」
今日は土曜日ということで、学園は午後の授業がない。だから合宿してる俺たちにとっては貴重な休暇のようなものだ。
疲れを取るには絶好のチャンスだ。とは言っても、ただ社会科室にこもっているだけというのも勿体ない気がする。
［吹雪］：「んー、何かするか……」
そんなことを考えながらシャワー室に向かう途中。
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ん？　杠？」
俺の目の前を杠が通り過ぎていった。俺には気付いてないのか、声もかけずにただ通り過ぎる。あっちは確か、生徒会室だった気が。
……あいつ、また仕事があるのか？　せっかく午後が休みだっていうのに。……本当にそうなのか、ふと気になった。
［吹雪］：「行ってみるか」
シャワー室に行くには生徒会室を通る必要がある。ちょっと寄り道していくとしよう。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（8）

コンコン。
［聖奈美］：「どうぞ」
［吹雪］：「失礼します」
ドアノブを捻って中に入らせてもらう。
［聖奈美］：「……またあなたなのね」
［吹雪］：「何だよ、そんな露骨に嫌そうな顔しなくてもいいだろう？」
［聖奈美］：「嫌ではないけど……ノックがやっぱり気になるのよ」
［吹雪］：「先生が来る感じがするからか？」
［聖奈美］：「ええ、そうよ」
［吹雪］：「じゃあ、ノックしないで入っていいのか？　俺は」
［聖奈美］：「それはダメよ。たまに手伝ってもらってるけど、あなたは部外者なんだから」
［吹雪］：「……じゃあ俺はどうしたらいいんだよ？」
［聖奈美］：「……これと言って対処法もないわ」
［吹雪］：「ダメじゃないか、結局」
［聖奈美］：「適当に考えておきなさいよ」
えらく投げやりだな……。とりあえず。
［吹雪］：「よ、ダルク」
［ダルク］：「吹雪、いらっしゃ～い」
ダルクに挨拶をしておいた。
若干杠に睨まれた気がするが、それは気にしないことにする。
［聖奈美］：「それで、今日は何の用なの？」
［吹雪］：「いや、用ってほどじゃないんだが……」
［聖奈美］：「用がないのにわざわざここに来たの？」
［吹雪］：「いや、まあ……やっぱり用がないのに来ちゃダメか？」
［聖奈美］：「普通に考えてそうでしょう？　ここにいるってこと

は仕事をしてるってことなんだから」
［吹雪］：「やっぱり、今日も仕事なのか」
［聖奈美］：「ええ。野球部みたいなもので、生徒会にも休みはほとんどないの。学園を支えなくちゃいけないから当然といえば当然よ」
［吹雪］：「そうなのか……」
［聖奈美］：「何よ？　その顔は？」
［吹雪］：「いや、何て言うか……頑張るのもいいけど、無理はしないほうがいいぞ？　お前」
［聖奈美］：「無理？」
［吹雪］：「朝はピアノの練習で、午後は生徒会の仕事、そして夜の練習だろう？　休まる暇がほとんどないから、疲れが溜まる一方なんじゃないかって思ってよ」
［聖奈美］：「疲れなんて一日ぐっすり眠れば取れるわよ。それに、日曜日は何もない限り仕事は休みだし、そこで疲労は全て消せるでしょ」
［吹雪］：「うーん、そんなものなのか？」
［聖奈美］：「仕事を休むわけにはいかないわ。あたしは生徒会長なんだから、途中で投げ出すことはできないの」
［吹雪］：「……」
そんな風に言われたら。
［吹雪］：「まあ、頑張れよ」
そう返すしかないよな。
［聖奈美］：「言われなくても分かってるわ」
［吹雪］：「……他の生徒会員はいないのか？」
［聖奈美］：「いるにはいるけど、今日は別行動よ。祐喜がスポーツ部の備品のチェックに行ったから、他の子にはそれを補助するように頼んだの」
［吹雪］：「なるほど。じゃあ、ここで仕事するのはお前だけってことか？」

［聖奈美］：「そういうことになるわね」
［吹雪］：「……よし、分かったぞ」
［聖奈美］：「何が分かったのよ？」
［吹雪］：「なるべく早く準備してくるから、ちょっと待っててくれ」
［聖奈美］：「は？」
俺は一先ず生徒会室を後にした。
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（9）

［吹雪］：「――よし、戻ってきたぞ。さあ、来い」
［聖奈美］：「――え？」
［吹雪］：「だから、来い」
［聖奈美］：「話が一ミリも見えてこないんだけど」
［吹雪］：「だから、何が仕事をくれって言ってるんだよ？」
［聖奈美］：「え？　あなた、何言ってるのよ」
［吹雪］：「言葉通りの意味だが」
［聖奈美］：「そういうことじゃなくて、どうしてあなたに仕事を渡さなくちゃいけないのよ？」
［吹雪］：「どうしてって、今日お前は、ここで一人で仕事をしなくちゃいけないんだろう？」
［聖奈美］：「ええ」
［吹雪］：「見た感じ忙しそう、ちょうど俺は何をするかも決まっていなかった……だとしたら、俺の選択肢はもう決まってるだろう」
［聖奈美］：「決まってないわよ、たくさんあるでしょうが」
［吹雪］：「……そんなに変か？　俺の選択」
［聖奈美］：「おかしいわよ、メチャクチャおかしいわ」
メチャクチャをつけられてしまった。
［聖奈美］：「いくら自分が暇だからって、生徒会の仕事なんて手伝う必要ないじゃないの。あなたはあなたのやりたいことをすればいいのに」
［吹雪］：「だからこうして足を運ばせてもらってるんじゃないか」
［聖奈美］：「そうじゃなくて！　気持ちだけでいいのよ、本当に手伝わなくても」
［吹雪］：「んなこと言ったって、もう俺の心決まっちゃってるしな。それに、忙しいのは事実なんだろう」
［聖奈美］：「それは、そうだけど……でも、一人でも十分こなせ

る仕事だし」
［吹雪］：「二人でやればもっと早く終わるじゃないか？　おっと、二人と一匹だったな」
俺はダルクと目を合わせ、そして笑った。
［吹雪］：「どうせすることがなくて暇なら、誰かの役に立ったほうが気分がいいだろう？　杠だってそういう精神でこの仕事をやってるはずだから、俺の気持ちは分かると思うんだが……」
［聖奈美］：「それは……確かに分かるけど……」
［吹雪］：「今回はお前に仕事してくれって頼まれたわけじゃないんだ。別に個人的に付き合ったっていいだろ？　な？」
［聖奈美］：「……本当にいいのね？」
［吹雪］：「よくなかったら来てないって。お前らしくないな」
［聖奈美］：「う、うるさいわね。あたしだって、相手の気持ちは考えるんだから」
［ダルク］：「ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「いいってことよ、衣食住を共にしてるわけだしな」
［聖奈美］：「変な男ね、本当に」
［吹雪］：「それを本人の目の前で言ってしまうってどうなんだよ？」
［聖奈美］：「あたしは思ったことは口に出すタイプだから」
［吹雪］：「そういえば、そうだったな」
［聖奈美］：「む……」
［吹雪］：「そんなことよりほら、仕事くれ、仕事」
［聖奈美］：「分かったわ。じゃあ……そうね――」
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（１０）

［吹雪］：「なあ、一つ聞きたいことあるんだけど」
［聖奈美］：「何よ？　藪から棒に」
ペンを動かす手は止めずに杠はそう返す。俺も、受け渡された仕事、前と同じ綴じ込み作業に専念しながら話を続ける。
［吹雪］：「生徒会に所属してる学生って何人いるんだ？　毎日忙しいところを見る限り、人手が足りてないんじゃないかって思うんだが」
［聖奈美］：「……痛いところを突いてくるわね、あなた」
［吹雪］：「じゃあ、やっぱり足りてないのか」
［聖奈美］：「まあ、現状はそうね。賄えているから問題はないけど、確かに人員は不足してるわね」
［吹雪］：「今、何人いるんだ？　生徒会員は」
［聖奈美］：「今のところ、活動してるメンバーは６人ね」
［吹雪］：「へー、確かにちょっと少ないな」
［聖奈美］：「思ったより驚かないのね」
［吹雪］：「いや、魔法研究部の人員と大して変わらないからな」
同じような境遇だからそこまで驚愕でもない。
［吹雪］：「でも、生徒会と魔法研究部では全然違うか」
［聖奈美］：「そうね、できればこっちとしては１０人くらい欲しかったところなんだけど」
［吹雪］：「入部者が少なかったのか？」
［聖奈美］：「そんなところよ。元々、生徒会に入部する生徒は限られてるし、わざわざ学校の仕事を受け持ちたいって思う人も少ないわ」
［吹雪］：「だから少数精鋭なのか？」
［聖奈美］：「ならざるを得なかったというのが正しいわ。今言ったけど、できることなら人材はたくさん欲しいところだったもの」

［吹雪］：「今年は何人、入部希望があったんだ？」
［聖奈美］：「確か６人だったかしら？　でも、研修を通して合わないと感じた子たちが二人抜けていったから、入部した人数は４人」
［吹雪］：「それが今のメンバーか」
［聖奈美］：「そうなるわ」
［吹雪］：「――ということは、俺たちの代で生徒会に入部したのはお前と祐喜だけってことか？」
［聖奈美］：「ええ。だから入部者が４人と言っても、そこまで少なくないんじゃないかって思っちゃったことがあったわ」
［吹雪］：「ということは、なりたいなりたくない云々以前に、お前か祐喜、どっちかが生徒会長になるのは決まってたのか？」
［聖奈美］：「……言われてみればそうね。どう転んでも会長か副会長にはならなかったわね」
［吹雪］：「何と……」
［聖奈美］：「でも、別にやりたくないなんて思ってなかったわよ。あたしと祐喜で話し合いもしたし、先輩たちから推薦も受けたし……やってみたいって気持ちが大きかったわ」
［吹雪］：「祐喜は推薦されなかったのか？　先輩たちに」
［聖奈美］：「もちろんされたわよ。言われた仕事をテキパキこなす力を持ってたから。……さらっとひどいことを言うこともあるけど」
［吹雪］：「それは……ちょっと分かる」
特に翔に対しての発言はなかなか……。
［聖奈美］：「顔色を変えずに言うから、こっちも反応が難しいのよね」
［吹雪］：「常に笑顔だからな」
［聖奈美］：「それが逆に……不気味なのよね」
［吹雪］：「お前がそう思うって、相当だな」
［聖奈美］：「どういう意味よ、それは」
［吹雪］：「いや、お気になさらず。で？　その続きは」

［聖奈美］：「ええ、先輩たちの代は7人メンバーがいたんだけど、あたしを指名したのが4人、祐喜を指名したのが3人だったの。ほとんど五分五分だったんだけど、祐喜は自分からサポートに回りたいって言ったのよ。みんなの前でしゃべるのは苦手だからって」

［吹雪］：「……できなくはないんだろうが、確かに祐喜は裏方で最大の力を発揮できる気がするな」

［聖奈美］：「本人も分かってたんでしょ。それが満場一致で可決されて、現在に至ってるってわけよ」

［吹雪］：「なるほどな。……あれ？　ダルクはメンバーには含まれてないのか？」

［ダルク］：「私は正式じゃないよ。聖奈美の使い魔だから、聖奈美の中に含まれてるんだ」

［聖奈美］：「ダルクには、今あなたがやってるような綴じ込みなどの作業を手伝ってもらってるわ。実務に手を焼くと、疎かになってしまうから」

［吹雪］：「確かに、手つきがその道のプロっぽいもんな」

一緒になってやっているが、俺とダルクのスピード差は歴然だ。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（11）

［吹雪］：「一年近くやってるんだろう？　ダルクは」
［ダルク］：「うん、それも毎日のように」
［吹雪］：「それは上手くなるわな」
［ダルク］：「こういうのは慣れだよ」
［吹雪］：「その内、早すぎて逆にゆっくりに見えるまでになるかもな」
［ダルク］：「そ、それはないと思うけど……」
［吹雪］：「やればできるって」
［聖奈美］：「あなた、ダルクに何を求めてるのよ」
［吹雪］：「杠の良きパートナーでいてくれればそれで十分だが」
［聖奈美］：「……急に話をまともにしないでよ。返答に困るじゃないの」
［吹雪］：「修業が足らんぞ、杠」
［聖奈美］：「何の修行よ！　全く……」
［吹雪］：「はっはっは」
［聖奈美］：「笑ってんじゃないわよ、もう」
こうしてしゃべってみると、杠は案外普通の女の子と変わりはないんだなと思う。確かに他の子よりもプライドが高いようだが、会話が全然成立しないわけじゃないからそこら辺は柔和だ。当初はこんな風にしゃべれるようになるとは思わなかったが……人生、どう転ぶか分からないもんだ。
［聖奈美］：「――そういうあなたはどうなのよ？」
［吹雪］：「ん？　何がだ？」
［聖奈美］：「部活よ、部活。ちゃんと活動してるの？」
［吹雪］：「ああ、一応してるぞ。今は俺たちがこういう状況だから、制作はできないんだけどな」
［聖奈美］：「……それって活動してることにならないんじゃない

の？」
［吹雪］：「え？　なってると思うぞ？　日野あたりがメンバーとおしゃべりしてるらしい話を舞羽から聞いた」
［聖奈美］：「何の部活か分からないわね、それだけ聞いたら」
［吹雪］：「とりあえず、やってることにはなってる」
［聖奈美］：「そう。――よくよく考えたら、あなたも部長なのよね」
［吹雪］：「そうだな、あんまりそういう意識はないんだが」
［聖奈美］：「持ちなさいよ、部の責任者なんだから」
［吹雪］：「とは言っても、杠みたいに大した仕事もないからな。するのは一部の書類を書いて提出するくらいだし」
［聖奈美］：「あるじゃないの、重大な仕事が」
［吹雪］：「ん？　何だよ？」
［聖奈美］：「島貫翔の抑制よ」
［吹雪］：「……それこそ部の仕事と関係ないんじゃないのか？」
［聖奈美］：「あるわよ、島貫翔は魔法研究部所属なんでしょう？　あなたの管轄であることに違いないわ」
［吹雪］：「ええ？　そりゃないんじゃないのか？　杠さん」
［聖奈美］：「部の責任者なんだから、部員の不祥事は身を持って止めるべきよ」
［吹雪］：「昨日言っただろ？　あれでも祐喜と二人で必死に抑えてるんだって。あれをしなかったら、翔はきっと女の子襲うぞ」
［聖奈美］：「お、襲う！？」
［吹雪］：「……やっていいことと悪いことの区別はついてるとは思うが、それでも止まらない可能性がある」
［聖奈美］：「……前から気になってたんだけど、あなたと祐喜はどういう経緯であの男と付き合うようになったの？」
［吹雪］：「……何でだろうな？」
［聖奈美］：「あたしが聞いてるんだけど……」
［吹雪］：「俺からアプローチかけた記憶はない。ただ、一年の時

から、すでにあいつの名は知られてたから、存在に関しては知ってた」

［聖奈美］：「……もちろん、違う意味で、でしょう？」

［吹雪］：「うん。……ああ、それで席が近かったから、気をつけろ的なことを言ったんだな、俺。そしたら――」

［聖奈美］：「懐かれたってわけ？」

［吹雪］：「どうやら自分のことを気にかけてくれた気持ちが嬉しかったらしい。それは、祐喜も同じだ」

［聖奈美］：「じゃあ、気持ちの押し付けが現状を作ってるってこと？」

［吹雪］：「形的には、そうかもしれないな」

［聖奈美］：「……感心するわ、あんな男と付き合えるなんて」

［吹雪］：「冷静に考えれば、俺だってびっくりなことさ。でも、根は悪い奴じゃないんだ、ただ、女の子が好きすぎるだけで」

［聖奈美］：「……それって最大の問題点じゃないの？」

［吹雪］：「それさえなければ、マシになるんだけどよ」

［聖奈美］：「変えられそうにないの？　それは」

［吹雪］：「杠には悪いが、おそらく無理だ。あいつから女子を取り上げたら、きっとあいつは生きる意味を失う」

［聖奈美］：「そ、そこまで？」

［吹雪］：「うん、大げさじゃない。あいつ、自分でそういうことを前に言っていた」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「まあ何だ、お前も気を付けて生活しろよ？」

［聖奈美］：「わ、分かってるわよそれくらい」

［吹雪］：「ああ、ダルクも同じくな」

［ダルク］：「ええ？　わ、私も？」

［吹雪］：「あいつはかわいい子には目がない。それが例え使い魔だとしても」

ましてダルクはメスだ。油断はできない。

［ダルク］：「き、気を付けます」
［吹雪］：「うん、そうしてくれ」

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（12）

［祐喜］：「ただいま戻りました――ってあれ？　吹雪じゃないか？」
［吹雪］：「お、祐喜。お帰り」
［祐喜］：「うん、ただいま。何だい？　聖奈美に手伝いを依頼されたの？」
［吹雪］：「いや、今回は自分の意志で手伝いに来てみた。何だか、忙しそうなことを聞いたんでな」
［祐喜］：「そっか、それは助かるよ。さすが吹雪、そういうところは分かってるね」
［後輩Ａ］：「祐喜先輩、この人が例の？」
［祐喜］：「うん、大久保吹雪先輩だよ」
よく見たら後ろに女子が２人ほどいた。この子たちは生徒会員なんだろうか？　そういう目線を送ると、祐喜はこくんとうなずいた。
［後輩Ａ］：「あの、こんにちは」
［吹雪］：「ああ、こんにちは。お邪魔してるよ」
［後輩Ｂ］：「いえいえお構いなく、わざわざ手伝いに来てもらって嬉しいです」
［吹雪］：「これくらいどうってことは。杠と祐喜とは知り合いだからね」
［祐喜］：「でも、こんなに仲間想いなのに生徒会員には入ってくれないんだよね、吹雪は」
［吹雪］：「それとはこれとは違うだろ？　俺は向こうの部活に入ってるんだからよ～」
しかも、一応部長だ。さっき杠と話したことだが。
［祐喜］：「冗談じょうだん、ちょっと困らせてみただけさ」
［吹雪］：「おい、祐喜……」
［祐喜］：「あはは」

［後輩Ｂ］：「そういえば、大久保先輩ってよく考えたらマジックコロシアムの――」
［吹雪］：「あ、ああ、出場してたよ」
［後輩Ｂ］：「というか、出場したどころか、優勝してませんでしたか？」
［吹雪］：「え、ああ……まあ……」
［後輩Ｂ］：「そうですよね！　どこかで見たことあると思ったら、杠先輩の連覇を阻止した人だよ～思い出した～！」
［聖奈美］：「うぐ……！」
［後輩Ｂ］：「あの試合、今も脳裏に焼き付いてます。白熱した試合展開には、本当に手に汗握っちゃいました」
［吹雪］：「あ、ああ、ありがとう。でも、運が良かったというか、何というか……」
［後輩Ｂ］：「運だけじゃあ杠先輩には勝てませんよ、ちゃんとした実力があったから杠先輩の連覇を阻止できたんですよ～」
［聖奈美］：「あぐ……！」
［後輩Ａ］：「ちょっと、杠先輩がいる前でそんなこと」
［後輩Ｂ］：「あわわ！？　す、すいません聖奈美先輩、つ、つい……」
［聖奈美］：「い、いいわよ別に、あたしのことは気を遣わなくて」
［ダルク］：「あはは……」
いや、さっきからチクチクと胸に何かが刺さる音が聞こえてるぞ。
［後輩Ｂ］：「とにかく、あの試合はとても感動しました。今までみたマジックコロシアムで一番感動しました」
［後輩Ａ］「一番って、あんたまだ一年生じゃないの」
［後輩Ｂ］：「あ、そうだったね」
どうやらボケとツッコミのバランスが取れているようだ。
［後輩Ｂ］：「大久保先輩は来年も出るんですか？」
［吹雪］：「いや、まだ迷ってるんだ。今回は色々事情があって出たからさ」

［聖奈美］：「む……」
深くは言うなと、杠の冷たい視線を感じる。
［吹雪］：「まだ、考え中かな」
［後輩Ｂ］：「そうですか、でも、出るんだとしたら頑張ってください。応援してますから」
［後輩Ａ］：「聖奈美先輩も応援しないとダメよ？　私たちを育ててくれてる先輩なんだから」
［後輩Ｂ］：「もちろんするよ、聖奈美先輩の戦う姿はカッコいいし」
［祐喜］：「人気者だね、二人とも」
［吹雪］：「そ、そうか？」
［聖奈美］：「ふん、来年あなたが出るのだとしたら、今年のようにはいかないんだから」
［吹雪］：「だからまだ出るとは――」
［聖奈美］：「出るとしたら、って言ったでしょう？　まあ、あなたが出ないんだとしたら、滅多がない限りあたしの返り咲きでしょうけど」
［吹雪］：「……はあ、考えとくよ」
［聖奈美］：「何よ、そのため息は」
［吹雪］：「いや、別に……」
出ないと何か言われるんだろうな、何て言えないよ。
［後輩Ａ］：「とにかく、こっちは大歓迎ですから、たまには顔を出しに来てくださいね？　大久保先輩」
［吹雪］：「え？　あ、うん」
［聖奈美］：「大久保が来たとしても、仕事を忘れるんじゃないわよ？」
［後輩Ａ］：「はーい、分かってます」
……。
その後、祐喜のチェック名簿を確認して、今日の生徒会の仕事は終わりとなった。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（13）

［場所：廊下］

［祐喜］：「じゃあ、二人ともお疲れ～」
［吹雪］：「おう、じゃあな」
［後輩Ａ・Ｂ］：「お疲れ様でした～」
祐喜は後輩と共に学園から帰宅する。俺たちの家は今はここだから、帰り道は全く一緒だ。
［聖奈美］：「忘れ物は？」
［吹雪］：「手ぶらできたから何もないよ」
［聖奈美］：「そう。……？」
［ダルク］：「どうしたの？　聖奈美」
［聖奈美］：「ううん、何でもないわ。……きっと社会科室にあるはずだわ」
何か聞こえたが、多分独り言だろう。
［吹雪］：「それにしても、随分と明るい後輩だったな」
［聖奈美］：「そうね、それなりに良い子たちよ。たまに失礼な発言をするけど」
［吹雪］：「失礼って……やっぱりあれだよな」
［聖奈美］：「べ、別にあのことじゃないわよ！　今までの生活を通してってことよ、あんなことを気にしたりなんてしないわよ」
［吹雪］：「そうか？　でもな……なあダルク」
［ダルク］：「うん、ちょっとだけね」
［聖奈美］：「な、何よ二人して」
［吹雪］：「別に何でもないぞ。な？　ダルク」
［ダルク］：「うん、何でもないよ」
［聖奈美］：「……何かムカつくわね」
［吹雪］：「いいからいいから。ほら、さっさと戻ろうぜ」

杠を何とか宥め、俺たちは寝床へと戻った。

……。

……。

……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（１４）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「ぐう……ぐう……」
［ダルク］：「――き、吹雪」
［吹雪］：「ぐう……ぐう……」
［ダルク］：「吹雪、起きて、吹雪」
［吹雪］：「ん、んんぅ……？」
俺を誰か呼んでるのか？　……ゆっくりとまぶたを引き剥がす。
［ダルク］：「吹雪」
［吹雪］：「ん？　ダルク？」
目の前でふわふわと浮かんでいる。
［ダルク］：「ごめんね、起こしちゃって」
［吹雪］：「はあ～あ、何だよ、眠れないのか？」
［ダルク］：「ううん、寝ようといつでも寝れるよ」
［吹雪］：「そうか、じゃあ一緒寝るか？」
［ダルク］：「そ、そういうお誘いをお願いしてるわけじゃないの。ちょっと、聖奈美が呼んできてほしいって言ってたから」
［吹雪］：「杠が？　こんな夜に？　……」
［ダルク］：「あ、えっと……そういう感じのことじゃないから」
［吹雪］：「だよな、あいつにそんなことするはずがない」
考えるまでもない。
［ダルク］：「とにかく、ちょっと来てもらえるかな？　そーっと」
［吹雪］：「ああ、分かった」
カーテンを開け、杠の布団の所まで静かに移動する。
［吹雪］：「おーい、杠」
ひそひそ声だが、来たことを本人に伝える。
［ダルク］：「起きてもらったよ、聖奈美」

［聖奈美］：「ありがと、ダルク」
［吹雪］：「何だよ？　こんな時間に」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「おい、何で黙ってんだ？」
［聖奈美］：「一つ、聞きたいことがあるわ。今から言うこと、笑ったりしない？」
［吹雪］：「な、何だよいきなり」
［聖奈美］：「質問に答えて、笑ったりしない？」
［吹雪］：「え？　ああ、内容にもよるけど、多分大丈夫だ」
［聖奈美］：「ならいいわ。――一つ、お願いがあるの」
［吹雪］：「お願い……」
［聖奈美］：「ちょ、変な想像しないでよ！　そういうお願いじゃないんだから」
［ダルク］：「聖奈美、もう少し声を抑えて」
［聖奈美］：「あ……」
どうやら、みんな寝たままのようだ。
［聖奈美］：「実は、探し物に付き合ってほしいのよ」
［吹雪］：「探し物？」
［聖奈美］：「ええ、あたしのメガネが見当たらないの。多分、生徒会室か教室に忘れてきたんだと思うの」
［吹雪］：「場所が分かってるんなら、明日の朝にでも行けばいいんじゃないのか？」
［聖奈美］：「この学園、朝にはセキュリティの関係で教室にロックがかかるの知ってるでしょう？」
そういえばそんなの言われたような気がするな……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（15）

［吹雪］：「学園長に頼めば開けてくれるんじゃないのか？」
［聖奈美］：「メガネくらいのことで申し訳ないでしょう、そんなこと頼むの」
［吹雪］：「……そういうものなのか？」
［聖奈美］：「そういうものなのよ」
杠的に納得のいかないことのようだ。
［聖奈美］：「朝は練習があるから取りに行けないし、コンタクトも明日買いに行く予定だったから予備がないのよ。だから明日はメガネがどうしても必要なの。メガネがないと、満足に物を見ることができないから」
［吹雪］：「じゃあ、今もボンヤリしか見えないのか？」
［聖奈美］：「ええ、近づけば誰なのかは特定できるけど」
［吹雪］：「そりゃあ確かに危ないな」
［聖奈美］：「それと……夜の学園は薄気味悪くて一人で歩くことはできないから」
［吹雪］：「何でこんな時間になるまで言い出さなかったんだよ」
［聖奈美］：「しょ、しょうがないでしょう？　みんなに聞かれるのは恥ずかしいし、女子は基本的にそういうの苦手だから、付きあわせるわけにもいかないし。あなたしか使える人いないじゃない」
［吹雪］：「……ダルクも苦手なのか？」
［ダルク］：「うん、基本夜は外に出ないようにしてるから」
［聖奈美］：「つ、付き合ってくれたら何かしらお礼はするつもりよ。だから、協力しなさい」
［吹雪］：「……そういう事情があるなら、しょうがねぇな。付き合ってやるよ」
［聖奈美］：「い、いいのね？」
［吹雪］：「ここでダメって言える勇気を俺は持ってないよ」

［聖奈美］：「……微妙に引っ掛かるのは気のせいかしら？」
［吹雪］：「気のせいだ。お前、懐中電灯とか持ってたりするか？」
［聖奈美］：「……確かフェルシア先生が持ってたと思うわ」
［吹雪］：「じゃあちょっと拝借していこう。取ってきてくれよ」
［聖奈美］：「え、ええ、分かったわ」
［ダルク］：「わ、私も付いていくよ。ここで待ってるのは逆に怖いから」
［吹雪］：「ああ、分かった」
――一応、携帯は持っていくか。電池切れの時、待ち受けの明かりが使える。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（16）

［場所：廊下］

ガラガラ。

ゆっくりとドアを開け、そしてまたゆっくりとドアを閉める。時刻は12時半、さすがにこの時間には光が一切なく、周りは全て闇で構成されていた。

［吹雪］：「何も見えないな」

［聖奈美］：「は、早く懐中電灯付けなさいよ」

［吹雪］：「分かってる」

カチッとスイッチを入れる。全部ではないが、ある程度の視界が開ける。

［聖奈美］：「て、照らしてもまだこんなに暗いのね」

［吹雪］：「何も見えないよりマシだろ」

［聖奈美］：「そ、そうね……」

ダルクは怖いのか、杠の左肩にじっと掴まっている。

［聖奈美］：「しっかりするのよ？　ダルク」

［ダルク］：「う、うん、聖奈美もしっかりね」

［吹雪］：「で？　最初はどっちに向かうんだ？」

［聖奈美］：「そ、そうね、近いところを先に見ましょう」

［吹雪］：「分かった、じゃあ行くか」

どうして先が生徒会室か、何て決まってるか、近くにあるんであればすぐに帰ってこれるからだろう。となると、このまま道なりに歩いて逆の通路に回り込む必要がある。

［聖奈美］：「ちょ、ちょっと大久保、歩くの早いわ」

［吹雪］：「でも、ゆっくり歩くとそれだけ長い時間この暗い道を歩くことになるぞ？」

［聖奈美］：「う……適度なスピードで急ぐことにしましょう」

何とも難しい注文だな。
［吹雪］：「しかし、あれだな。杠もこういうの苦手だったんだな」
変に静かなのは緊張してしまうと思い、俺はふと思ったことを口に出した。
［吹雪］：「てっきり魔法で追っ払うくらいの精神があると思ってたんだが」
［聖奈美］：「で、できることならそうしたいわよ、あたしだって。でも、やっぱり怖いものは怖いわ、あの得も言われぬ不気味さは、慣れることなんてできないわ」
［吹雪］：「何だ？　そういう体験したことあるのか？」
［聖奈美］：「な、ないわよ、そんなこと。ないはずよ……」
［吹雪］：「まあ、普通はないよな」
あったとしても知らないのならそれはないと同じだ。
［聖奈美］：「子供の頃、その手のテレビを興味本位で見てしまったことがあって……それ以来、すっかりダメになってしまったわ」
［吹雪］：「それが普通だって、悲観することじゃないって」
［聖奈美］：「……随分あっさりしてるわね、あなた」
［吹雪］：「そりゃあ、怖がらせたって俺には何のメリットもないし」
［聖奈美］：「……メリットがあったらやってるわけ？」
［吹雪］：「そういうわけじゃねぇよ。女子を怖がらせて楽しむ趣味がないんだ」
［聖奈美］：「あったら困るわよ、そんな趣味」
［吹雪］：「とにかく、深く考えないのが一番だ。そういうこと考えるから、そういうのも寄ってくるって言ってたぞ？　誰かが」
［聖奈美］：「その誰かって誰よ？」
［吹雪］：「誰だったか……ちょっと偉そうな人だった気がするが……」
［聖奈美］：「そこが重要なんでしょうが」
［吹雪］：「まあ、そこまでその人は重要じゃないはずだから」

［聖奈美］：「……そんなぞんざいな扱いでいいの？　それを言った人に呪われるんじゃない？」
［吹雪］：「そしたら横にいた杠も道連れだろうな」
［聖奈美］：「なっ！？　や、やめなさいよ！　呪われるのはあなただけで十分よ」
［吹雪］：「それはそれでどうなんだよ……」
何だか見捨てられた感じだ。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（17）

［聖奈美］：「というか、どうしてあなた、そんなにケロッとしてるのよ？　怖くないの？」
［吹雪］：「そりゃあ、多少怖いけど、考えたら余計怖くなりそうだし。それに、一人で歩いてるわけじゃないからな、お前とダルクがいるし。それが一番の理由か。後もう一つ――」
［聖奈美］：「？」
［吹雪］：「お前が俺に付き添いをお願いしたのに、俺が杠以上に怖がってたら、余計怖くなっちまうだろう？」
［聖奈美］：「……確かに。何で大久保に頼んだってことになるわ」
［吹雪］：「そんなわけで、なるべく怖くないように、俺なりに努めてみてるわけだ」
［聖奈美］：「……な、なかなか心がけじゃない。あなたにしては」
［吹雪］：「そりゃどうも」
［聖奈美］：「あっ！？」
［吹雪］：「おっと」
俺の肩に体が傾いた。どうやら躓いたようだ。
［吹雪］：「大丈夫か？」
［聖奈美］：「え、ええ、何とか」
［吹雪］：「暗いから、足場気をつけろよ」
［聖奈美］：「そうね」
［吹雪］：「……見つかるといいな、メガネ」
［聖奈美］：「ええ、多分あるとは思うんだけど。どっちかに忘れたような記憶があるから」
［吹雪］：「というか、お前がコンタクトだったというのを初めて聞いたんだが」
［聖奈美］：「そりゃそうよ、だって言ってなかったもの」
［吹雪］：「まあ、普段の会話でそういうのは出ないからな」

［聖奈美］：「あなたは裸眼なの？」
［吹雪］：「ああ、両目１くらいはあった気がする」
［聖奈美］：「結構いいじゃないの」
［吹雪］：「お前は？　コンタクトだから１は下回ってるよな」
［聖奈美］：「ええ、両目とも０．１よ」
［吹雪］：「随分と進行しちまってるな」
［聖奈美］：「こればかりはしょうがないわ。今は、裸眼のほうが珍しい時代だからね」
［吹雪］：「じゃあ、俺は珍しい部類に入ってるんだな」
［聖奈美］：「悪くならないように気をつけなさい。目が悪くなっても良いことなんて一つもないんだから」
［吹雪］：「ああ、頑張ってみるさ」
［聖奈美］：「……少し分けてほしいくらいよ。その視力」
［吹雪］：「そういう機能があれば考えるんだけどな。０．２くらいならそこまで困らなそうだし」
［聖奈美］：「０．２を舐めないほうがいいわよ？　それだけでも全然見え方が違ってくるんだから」
［吹雪］：「やっぱりそうなのか」
［聖奈美］：「そうよ、だから大事にしなさいって言ってるんだから」
［吹雪］：「経験者は語るか」
オチオチ目を悪くしてられないな。
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（18）

［場所：生徒会室］

［吹雪］：「着いたんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうね、見てこないと」
［吹雪］：「鍵は開いてるのか？」
［聖奈美］：「空いてなくても、スペアを持ってるから問題ないわ」
［吹雪］：「さすが生徒会長……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……ちょ、ちょっと」
［吹雪］：「ん？」
［聖奈美］：「中に入りなさいよ、一緒に」
［吹雪］：「あ、ああ悪い」
そうか、トイレとは話が違うんだった。
［聖奈美］：「さ、先に開けてちょうだい。後ろから付いていくから」
［吹雪］：「了解」
杠に従い、ドアを開いて先に中へ。
［聖奈美］：「そ、そこで待ってなさい。机のところ見てくるから」
［吹雪］：「ああ、分かった」
いくら生徒会のものとは言え、自分の机を見られるのは嫌なんだろう。
［聖奈美］：「ダルク、一緒に」
［ダルク］：「う、うん」
こんなわずかな距離でもダルクを連れて行くとは……俺の思ってる以上に苦手なのかもしれないな。
俺はドアの前で杠の後ろ姿を見ていた。

……。
しばらくして俺の元に帰ってくる。
［吹雪］：「どうだ？　あったか？」
［聖奈美］：「なかったわ」
［吹雪］：「てことは、教室にあるってことだな？」
［聖奈美］：「う、結局行かなくちゃいけないのね……教室まで」
見るからに行くのが嫌そう……というか怖そうな様子だ。
［吹雪］：「どうする？　やめるか？」
［聖奈美］：「や、やめないわよ。ここまできてやめるなんて、そんなことしないわ。絶対に行くわ」
［吹雪］：「まあ何だ、無理はするなよ？　色々と」
［聖奈美］：「わ、分かってるわ」
［吹雪］：「じゃあ、さっさと行こうぜ。長居してる必要はない」
［聖奈美］：「そ、そうね」
――ちなみにここから俺たちの教室までの道のりは、生徒会室に来る時よりも長い。
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（19）

［場所：廊下］

［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……おい、杠」
［聖奈美］：「――っ！？」
［吹雪］：「おわっ？　何でそんなに驚く……」
［聖奈美］：「きゅ、急に肩に手を置かれたりしたら、それはびっくりするでしょう！？」
［吹雪］：「あー、悪かった、悪かったから」
ものすごい勢いで飛んできた唾を吹きながら。
［聖奈美］：「あ、ご、ごめんなさい……」
［吹雪］：「別にいいが、あんまりキョロキョロしたりしないほうがいいんじゃないか？　怖さ増すぞ」
［聖奈美］：「そ、そんなこと言ったって……」
［吹雪］：「気持ちは分かるが、もうちょっと落ち着け、な？　俺もいるんだからよ」
［聖奈美］：「う、うん……」
恐怖の影響で結構素直になっているようだ。……ちょっとかわいいかも。
［吹雪］：「あそこだな」
窓の向こうに目的地が見えている。
［聖奈美］：「う、まだ遠いわね」
［吹雪］：「言ったってそんなにかからねぇよ、5分くらいで着くさ」
［聖奈美］：「5分……」

「こういう時の5分って、すごく長く感じるのよね」って言いたそうな顔をしているが、口に出さないようにしているようだ。

［ダルク］：「……」

ダルクも杠と同じようなことになってるし、これは気晴らしをしたほうがいいかもしれない。

［吹雪］：「――ふぶき」

［聖奈美］：「え？」

［吹雪］：「ほら、『き』だよ、き。『き』から始まる言葉」

［聖奈美］：「え？　あ、うん」

急遽始めたしりとりに、杠は戸惑いながらも返そうとする。

［聖奈美］：「き、キジムナー。『な』よ？　ダルク」

［ダルク］：「う、うん。な、なずな」

［吹雪］：「な、なまり」

［聖奈美］：「り、リョウゲ」

［ダルク］：「げ、ゲレンデ」

［吹雪］：「で、デカルト」

［聖奈美］：「と、トドメキ」

［ダルク］：「き、キタキツネ」

［吹雪］：「ね、寝巻」

［聖奈美］：「き、キシベコゾウ」

［ダルク］：「う、鵜飼」

［吹雪］：「い、硫黄」

［聖奈美］：「う、ウミボウズ」

［吹雪］：「……おい、杠」

［聖奈美］：「な、何？」

［吹雪］：「お前、わざとか？」

［聖奈美］：「え？　な、何がよ？」

［吹雪］：「お前が俺に返してる言葉、全部たどってみろよ」

［聖奈美］：「……あ」

［吹雪］：「お前が返した言葉は、全部日本の妖怪の名前だぞ」

最後のウミボウズがそれを確信に変えた。
［吹雪］：「何でわざわざ自分が怖くなるような返しをするんだ」
［聖奈美］：「だ、だって……気付いてなかったし……というか、何であなた妖怪だって分かったのよ？　結構マイナーだったはずよ」
［吹雪］：「単純な知識だ。逆に、何でお前はそんなマイナーな妖怪を知ってるんだよ」
［聖奈美］：「それは……あたしだって知識よ」
［吹雪］：「怖いのが苦手なのにどうしてそんなのを調べた……？」
［聖奈美］：「だ、誰にだって知る権利はあるでしょう？」
完全に使いどころをミスしている。
［吹雪］：「もう妖怪は禁止、いいよな？」
［聖奈美］：「え、ええ」
［吹雪］：「じゃあ続きいくぞ？　『ず』だ、ダルク」
［ダルク］：「ず、図式」
［吹雪］：「き、キマイラ」
［聖奈美］：「ら、ラップ現象」
［吹雪］：「はい、ストップ！」
［聖奈美］：「え？　あ……」
［吹雪］：「妖怪の次は怪奇現象かよ。いっぱい知識持ってるんだな、お前」
［聖奈美］：「ご、ごめん……」
［吹雪］：「……やめたほうがいいな。返って逆効果になってる」
［聖奈美］：「ご、ごめん……」
［吹雪］：「いいよ、気にすんな」
元々は気を紛らわせるかと思ってやったことだ。別にやりたかったわけじゃないからな。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（２０）

［吹雪］：「何度も言ってるけど、変に考えるな。一人で来てるわけじゃないんだからよ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「な、何だよ今度は」
［聖奈美］：「……お、思ったより良いところあるじゃないの、あなた」
［吹雪］：「今さらかよ……」
［聖奈美］：「ほ、褒めてるんだからいいじゃない」
［吹雪］：「そりゃそうだが」
普段の俺はどんだけ低い評価を受けてるんだ。
［吹雪］：「何か釈然としないな……」
［聖奈美］：「文句でもあるの？」
［吹雪］：「いや、あっても言わないって」
［聖奈美］：「それはあるってことじゃないの」
［吹雪］：「今はない、つか誰にだってそういうのは一つくらいあるもんだろう？」
［聖奈美］：「それは、そうね」
［吹雪］：「完璧な人間は人間じゃない、そうだろう？」
［聖奈美］：「何で急に哲学っぽいことを」
［吹雪］：「いや、何か言ったほうがいいのかって思って」
［聖奈美］：「誰もリクエストしてないわよ」
少し、表情がいつもの感じに戻ってきたようだ。
［ダルク］：「んー……ふふ」
［聖奈美］：「何よ？　ダルク、急に笑い出して」
［ダルク］：「ううん、二人とも、仲良くなったんだなーって思って」
［聖奈美］：「な、仲良く？」

［ダルク］：「うん、会話も随分楽しそうだもん」
［吹雪］：「最初から比べれば、そうだろうな」
［聖奈美］：「さ、最初のことは……忘れなさい」
［吹雪］：「そうはいかない。あれがあったおかげで、俺とお前は面識を持ったわけだからな」
［聖奈美］：「うぐ……あの時は……あなたがそんな実力を持ってるとは思わなかったから」
［吹雪］：「今は認めてくれてるわけだな？　じゃあ」
［聖奈美］：「……認めざるを得ないでしょう？　ハーモニクサーに選ばれてる時点で、それが証明されてるわ。悔しいけど」
［吹雪］：「お前にそう言ってもらえると、少し自分に自信が持てるな」
［聖奈美］：「ふん、持ってもらわないと困るわよ。あたしをコロシアムで破ったんだから」
［吹雪］：「努力はするよ」
［ダルク］：「これからも、聖奈美と仲良くしてね？　吹雪」
［聖奈美］：「ちょ、ダルク、どういう意味よ、それ」
［ダルク］：「言葉通りの意味だよ、ね？　吹雪」
［吹雪］：「ん？　ああ、そうだな」
ここはダルクに合わせておこう。
……。

聖奈美ルート・アンプリアメンテ（２１）

［場所：教室］

［聖奈美］：「あ、あったわ」

杠の言うとおり、教室でメガネが見つかった。

［聖奈美］：「やっぱり、置きっぱなしにしてたようね」

［吹雪］：「次は気を付けるんだぞ？　こんな風にならないように」

［聖奈美］：「そうね、肝に銘じておくわ」

［吹雪］：「じゃあ、さっさと戻ろうぜ、社会科室に」

［聖奈美］：「う……これで終わりじゃないのよね」

［吹雪］：「後ひと踏ん張りじゃないか？　お前ならいけるって…

…根拠は特にないけど」

［聖奈美］：「ちゃんと考えて発言しなさいよ」

――どうやら、行きの時よりはマシになったようだ。

何とか無事に、メガネを取り戻すことはできたのだった。

聖奈美ルート・モヴィエンド（1）

12月19日（日曜日）

［場所：家庭科室］

［舞羽］：「はい、どうぞ。繭さん」
［繭子］：「ありがとー、舞ちゃん」
昼食後のお茶を舞羽が出してくれる。
［舞羽］：「ダルクちゃんには、こっち。熱いから気を付けてね」
［ダルク］：「ありがと、舞羽」
［カホラ］：「――今日で4日目。ここまでは結構順調にきてるわね」
［繭子］：「そうだね～、少しずつだけど弾けるようになってきてるし～」
［吹雪］：「通して弾けるようになったのか？　マユ姉」
［繭子］：「ふっふっふ～、ワタシを誰だと思ってるの～？　ふーちゃん」
［吹雪］：「教師に見えない教師だけど」
［繭子］：「がびーん」
［フェルシア］：「古いわよ、マユ」
［吹雪］：「古すぎる……」
時代の波にも乗りきれてないようだ。
［繭子］：「そ、そういうことを聞いてるんじゃないんだよ～ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、分かってるよ」
［繭子］：「わ、分かっててあんなこと言ったの？　何故ゆえ？」
［吹雪］：「自覚してほしかったからだ」
［繭子］：「ぶーぶー、意地悪ふーちゃん」

［吹雪］：「そんなことより、質問に答えてくれよ」
［繭子］：「も～、……うん、ちゃんと通して弾けるよ？　まだ戸惑っちゃうところはあるけど」
［吹雪］：「へえ、やるじゃねぇか」
［繭子］：「ふっふっふ、ワタシを誰だと――」
［吹雪］：「その件はつまらないから言わなくていいぞ」
［繭子］：「あ、あうう……」
［聖奈美］：「よ、容赦がないわね、大久保……」
［吹雪］：「まあ、姉だからな」
それに容赦をしてもマユ姉のためにはならない。
［吹雪］：「全部を通して弾けるようになったなら、もっと上手くなれるように頑張らないとな」
［繭子］：「うん……そうだね……」
［舞羽］：「ま、マユさん、大丈夫ですか？」
［繭子］：「うん、元気だよ～……」
［カホラ］：「い、いいの？　吹雪。あんな風になっちゃったけど」
［吹雪］：「気にせず、いつものことですから」
［カホラ］：「そ、そうなんだ……」
［フェルシア］：「――そういえば、そろそろ食材がなくなってきてるわね」
［吹雪］：「え？　そうなんですか？」
［フェルシア］：「ええ、ここ数日間は、みんなある食材を使ってご飯を作ってくれてたけど、そろそろ買い足さないとピンチかもしれないわね」
［吹雪］：「確かに、みんな買い足さなくていいって言いまくってたもんな」
［カホラ］：「少しでも節約できれば、って思ってたからね」
［舞羽］：「うん、無駄遣いはできないし」
［聖奈美］：「当然よ」
［吹雪］：「じゃあ、今日は買い物に行ってくるか。みんな、どん

な食材が欲しい？」
料理人三人にそう尋ねてみる。
［カホラ］：「私は何でも構わないわよ、ある食材を使って料理するから」
［舞羽］：「私もそうかな？　野菜を多めに買ってきてくれれば尚良いかも」
［聖奈美］：「なるべく安いものがいいわ。学園長の負担にならないように」
［吹雪］：「了解。だとすると、やっぱり商店街のほうに行かないとな」
お茶を飲み終わったら行ってくるか。

聖奈美ルート・モヴィエンド（2）

［場所：廊下］

さて、着替えも済んだし、行ってくるか。
［聖奈美］：「大久保、待ちなさい」
［吹雪］：「ん？」
そこには私服に着替えた杠がいた。それにメガネをかけた姿で。
［吹雪］：「おお……」
［聖奈美］：「な、何よ？」
［吹雪］：「いや、メガネも結構良いもんだな」
普段の杠とはちょっと違うように見える。
［聖奈美］：「何言ってるのよ」
［吹雪］：「別に変なことを言ったつもりはないが」
［聖奈美］：「そう。そんなことより、これから行くんでしょう？　買い出し」
［吹雪］：「ああ、そうだけど」
［聖奈美］：「あたしも行くわ、ダルクと一緒にね」
［吹雪］：「え？　一緒に？　だってお前、コンタクトレンズ買いに行くんじゃ」
［聖奈美］：「コンタクトレンズも商店街に売ってるでしょう？　行く場所は同じじゃない」
［吹雪］：「まあ、そうだが……」
［聖奈美］：「何よ？　何か事情があるの？」
［吹雪］：「いや、何て言うか……」
言っていいことなんだろうか？　――まあいいか。
［吹雪］：「お前から誘われるなんて、ほとんどないことだから驚いてるっていうか」
［聖奈美］：「べ、別に行きたくないのなら別行動でも全然構わな

いわよ？　あたしはダルクと行くだけだし……ただ」
［吹雪］：「ん？」
［聖奈美］：「わ、分かるでしょう？　……昨日の、付き合ってくれたお礼をって思ってさ」
［吹雪］：「ああ、なるほど」
別に気にすることでもないと思うが、言っても納得はしないんだろう。ここは厚意に甘えたほうがいいか。
［吹雪］：「そういうことだったら、一緒に行ってもらうか」
［聖奈美］：「え、ええ。分かったわ」
［ダルク］：「えへへ、今日は楽しく歩けそうだね」
［吹雪］：「おう、昨日みたいに暗くはないからな」
［聖奈美］：「お、思い出させないでちょうだい。早く忘れたいんだから」
［吹雪］：「ああ、悪かったな」
［聖奈美］：「さあ、さっさと行くわよ？　商店街まで近くはないから」
メガネを直し、杠は廊下を歩く。ああやって見ると、生徒会長って言葉がピッタリ当てはまるな。

聖奈美ルート・モヴィエンド（3）

［吹雪］：「先にコンタクトレンズ見に行こうぜ。買い出しは一番最後のほうがいい」
［聖奈美］：「そうね、重たくならないほうがいいでしょうし」
［吹雪］：「今さらだが、メガネよりもコンタクトレンズのほうがいいのか？　杠は」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「見てる限り、コンタクトレンズは色々面倒くさそうな手順を追ってる気がするから、ただかけるだけでいいメガネのほうが楽でいいんじゃないかって思ってよ」
［聖奈美］：「あまり深く考えたことはないわ。正直あたしはどっちでもいい感じよ」
［吹雪］：「でも、コンタクトじゃないか？」
［聖奈美］：「あなたには分からないかもしれないけど、メガネはメガネで結構大変なのよ？」
［吹雪］：「そうなのか？」
［聖奈美］：「まず、コンタクトと違って目全体を覆っているわけじゃないから視野が狭くなるし、ものの見え方にもバラつきがある。後、ずっとかけていると目を抑えているところが跡になって痛くなるわ」
［吹雪］：「ふうん、じゃあコンタクトの短所は？」
［聖奈美］：「あなたが言ったことがほとんどね。小まめな洗浄が必要で、尚且つ使用できる時間も限られてる。場合によっては角膜が傷ついてしまう時があるわ」
［吹雪］：「……どっちもどっちってことか？」
［聖奈美］：「そういうこと。だから、メガネもコンタクトもどっちも両立する人が多いの。いざと言う時のためになるから」
［吹雪］：「なるほどな」

［聖奈美］：「だからメガネが良い悪いじゃなく、あたしは視野が広い方を選択しただけ」
［吹雪］：「うーむ……」
［聖奈美］：「まあ、目が悪くなければ全ての手間が省けるんだけどね。あなたが羨ましいわよ」
［吹雪］：「まあ、維持できるようにするさ」
……。

聖奈美ルート・モヴィエンド（4）

［場所：ドラッグストア］

［吹雪］：「ここがいつも買いに来てるところか？」
［聖奈美］：「ええ、そうよ」
俺は杠の後ろを付いていく。
［聖奈美］：「ちょっと待ってなさい。すぐに買ってくるわ」
［吹雪］：「ああ、分かった」
杠はコンタクトレンズの棚へと向かっていく。
［ダルク］：「吹雪～」
［吹雪］：「おう、いいのか？　ご主人様に着いて行かなくて」
［ダルク］：「私もコンタクトレンズのことは分からないからね」
［吹雪］：「はは、そりゃそうだな。というか、目が悪い使い魔って存在するのか？」
［ダルク］：「そういえば、考えたことなかったな……」
［吹雪］：「普通はないだろうな、でも、使い魔が目が悪かったら結構致命的じゃないか？」
周囲が観察できないからサポートもできなくなる。
［吹雪］：「ダルクは大丈夫なんだろう？」
［ダルク］：「うん、私は正常だよ」
［吹雪］：「ならいいんだ。ご主人様が見えなくなった時は、ダルクが目になってやらないとな」
［ダルク］：「あはは、そうだね」
［吹雪］：「――それにしても結構広いな、ここのドラッグストアは」
［ダルク］：「入ったことないの？」
［吹雪］：「そうだな、いつも行ってるところがあるからな」
［ダルク］：「見てみなくていいの？　店内」

［吹雪］：「うーん、特に欲しいものもないからな。それに、必要なものは大方家にあるだろうから」
［ダルク］：「そっか」
こんな感じで買い物をしながら待つ。

聖奈美ルート・モヴィエンド（5）

［聖奈美］：「待たせたわね」
［吹雪］：「買えたか？」
杠は袋を俺に見せた。
［聖奈美］：「これでしばらくは大丈夫ね」
［吹雪］：「よし、じゃあ出るか」
店を出て、商店街を歩きだす。
［聖奈美］：「待って、大久保」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［聖奈美］：「その……ここらで、昨日のお礼をしたいんだけど」
［吹雪］：「ああ、そういえばそう言ってたっけな、お前」
［聖奈美］：「あなた、忘れてたの？」
［吹雪］：「いや、そこまでされることした感じがないからな」
［聖奈美］：「……はあ、あなたって本当に変わってるわね」
［吹雪］：「そうは言われても、昔からこんなんだからな～、直しようもないんだよ」
［聖奈美］：「……それで、何かないの？　食べたいものとか、買ってほしいものとか」
［吹雪］：「何だ？　奢ってくれるのか？」
［聖奈美］：「ええ、お礼をするっていうのは、こういうことでしょう？」
［吹雪］：「まあ、一般的にはそうだな」
［聖奈美］：「ならいいじゃないの。何かないわけ？　そういうものは」
［吹雪］：「んー、急に言われてもパッと出てこないな。ちょっとだけ時間くれないか？」
［聖奈美］：「別にいいけど」
［吹雪］：「んー……」

食べたいもの、買ってほしいもの……。
［吹雪］：「――ん？」
俺は目の前の店に少々興味を持った。うーん、これはこれでありかもしれないぞ？
［吹雪］：「なあ、杠」
［聖奈美］：「何よ？」
［吹雪］：「ちょっとしたいことが出来たんだが、それにお前も付き合ってもらうっていうのはありか？」
［聖奈美］：「それをお礼にしてほしいってこと？」
［吹雪］：「そういうことだ」
［聖奈美］：「まあ、あなたがそれでいいのなら、別に構わないけど」
［吹雪］：「よし、じゃあ行こうぜ」
［聖奈美］：「ちょ、ちょっと、何処に行こうとしてるの？」
［吹雪］：「まあ、来れば分かるって」

聖奈美ルート・モヴィエンド（6）

［場所：ゲームセンター］

［聖奈美］：「――ついさっき、構わないなんて言った自分が悔やまれるわ」

［吹雪］：「まあまあ、そう言うなって」

［聖奈美］：「だって、ここって――」

ガヤガヤと、あちらこちらで人の笑い声とゲームの音が聞こえてくる。

［聖奈美］：「ゲームセンターじゃないのよ」

［吹雪］：「うん、そうだ」

［聖奈美］：「そうだ、じゃなくてね……」

［吹雪］：「その反応からして、ゲームセンターに来たことはないみたいだな」

［聖奈美］：「当たり前よ。こんなうるさいところ、好んで来るわけないでしょう？」

［吹雪］：「そんなこと言えるのは、ゲームセンターのおもしろさを分かってないからだぞ？　杠」

［聖奈美］：「別に分からなくたってあたしは……」

［吹雪］：「それは食わず嫌いって奴じゃないのか？」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「ゲームセンターに付き合ってもらう以上、お前にはゲームに付き合ってもらうぞ」

［聖奈美］：「え、ええ！？」

［吹雪］：「当たり前じゃないか、何のためにここに来たと思ってるんだよ」

［聖奈美］：「それは、あなたが付き合ってほしいっていうから」

［吹雪］：「俺はお前に付き添いを頼んだんじゃない、一緒にゲー

ムをすることを頼んだんだ」
［聖奈美］：「あ、あたしはいいわよ、見てるだけで」
［吹雪］：「そんなことは俺が許さん、絶対に付き合ってもらう。ほら、行くぞ」
［聖奈美］：「ちょ、ちょっと!?　大久保!」
［吹雪］：「ダルク、強制連行だ」
［ダルク］：「うん、分かった」
［聖奈美］：「ちょ、ダルクまで!　や、やめなさいよ」
拒否しようとする杠を強引に押して店内を見て回る。
［聖奈美］：「――ああ、もう。分かった、分かったわよ!　付き合うから背中押すのやめなさい」
［吹雪］：「……本当に分かったのか?」
［聖奈美］：「分かったわよ、あなたの言うことに従うから」
［吹雪］：「手を離した瞬間に逃げたりしないな?」
［聖奈美］：「そんな子供っぽいことしないわよ」
［吹雪］：「……言ったぞ?　俺は聞いたからな?」
［聖奈美］：「分かったから、早くやめなさい。恥ずかしいでしょ……」
なるほど、子供のように扱われるのが嫌だったのか。俺は杠から手を離した。
［聖奈美］：「あなた、結構強引よね」
［吹雪］：「お前はこれくらいしないと分かってくれないからな。行動に移したほうが効率的だ」
［聖奈美］：「……」
［ダルク］：「聖奈美の扱いが分かってるんだね、吹雪」
［聖奈美］：「だ、ダルク!　余計なこと言わないの」
［吹雪］：「はっはっは」
［聖奈美］：「笑ってんじゃないわよ!」
［吹雪］：「まあまあ。――よし、それじゃあ早速何かしようぜ。杠、お前がやりたいのを選ぶといい」

［聖奈美］：「え？　そんなこと言われたって、どれがどうなのかなんてさっぱり分からないわ」
［吹雪］：「何かあるだろ？　お前から見ておもしろそうな雰囲気が出てるゲームが」
［聖奈美］：「だから、あたし初めてなのよ？　ここに来るの」
［吹雪］：「だから直感で選べって言ってるんだ」
［聖奈美］：「……」
怪訝な顔をしながらも、杠は周りのゲームを確認し始める。

聖奈美ルート・モヴィエンド（7）

［聖奈美］：「あれはどんなゲームなの？」
［吹雪］：「ん？　あれは車を運転するゲームだ。目の前の画面に映ってる車をハンドルを使って操作する。まあ、カーレースゲームだな」
［聖奈美］：「じゃあ、あっちは？」
［吹雪］：「あれはタイピングだ。画面に出てくる単語を順番に入力していくゲームだ」
［聖奈美］：「じゃあ、今子供たちがやってるあれは？」
［吹雪］：「ちゃぶ台返し、そのままの意味でちゃぶ台をひっくり返して、飛んでいったものの飛距離を競ったりするんだ」
［聖奈美］：「……あなた、何でそんなに詳しいの？」
［吹雪］：「俺からしたら、そんなのも知らないお前がすごいと思うぞ」
［聖奈美］：「う、うるさいわね、しょうがないじゃないの。あたしは――」
［吹雪］：「わかった、わかった、俺が悪かったって。初めてだもんな、杠は」
［吹雪］：「な、何よ、その子供をあやすみたいな扱い……」
［吹雪］：「そんなつもりは全然ないぞ」
［聖奈美］：「……」
何も言わずに俺の目を見てくる。
［吹雪］：「俺は暇な時によく来るからな、だから知ってるんだ。分からなかったら教えるから早くやろうぜ」
［聖奈美］：「ちょっと待ちなさいよ、今決めてるから」
周りの様子におろおろしてる杠はちょっと新鮮だ。
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「決まったか？」

［聖奈美］：「……あれは、どんなゲームなの？」
杠は入口近くのゲームを指差す。そこではドコドコ太鼓を叩く二人組がいる。
［吹雪］：「見た通り、太鼓を使ったゲームだ。画面に出てくるとおりに太鼓を叩いて、どれだけ上手に叩けたかを競う」
［聖奈美］：「ふーん、そう……」
［吹雪］：「あれにするか？　結構やりやすいと思うが」
［聖奈美］：「……じゃあ、そうするわ」
［吹雪］：「よし、分かった」
ピアノの経験がある杠には、結構合ってるゲームかもな。
［吹雪］：「やるからには全力でいくからな」
［聖奈美］：「べ、別に構わないわよ。……えーっと」
［吹雪］：「ルールなら画面の脇に書いてある。読んでみるといい」
［聖奈美］：「え、ええ……」
杠は体を乗り出してルールを読む。俺はすでに分かっているから読む必要はない。
［吹雪］：「画面に出てくる『ドン』は普通に叩いて、『カッ』は太鼓の端を叩く。連打って出たら連打、基本的に画面の指示に従ってればいいんだ」
［聖奈美］：「そ、そうなの」
［吹雪］：「習うより慣れろだ、やってみようぜ」
俺は財布から小銭を出そうとするが――。
［聖奈美］：「いいわ、あたしが出す」
［吹雪］：「いいのかよ？」
［聖奈美］：「二人で２００円でしょう？　これくらい出させなさいよ」
［吹雪］：「じゃあ、お言葉に甘えるぞ」
杠は財布から１００円玉を二枚出し、投入口に入れた。

聖奈美ルート・モヴィエンド（8）

［ダルク］：「聖奈美、頑張って」
［聖奈美］：「え、ええ」
［吹雪］：「何で緊張してるんだ？　杠」
［聖奈美］：「べ、別にしてないわ。ただちょっと、戸惑ってるだけよ」
認めたぞ、戸惑っていることを。
［吹雪］：「あ、太鼓の真ん中を叩いてくれ。参加者は二人だからな」
［聖奈美］：「普通に叩けばいいのね？」
言われたとおりにドンと叩く。
［聖奈美］：「あ、画面が変わった」
［吹雪］：「次の曲を選ばないといけないんだが……何がいい？」
［聖奈美］：「どんな曲が収録されてるの？」
［吹雪］：「……実際に見たほうが早いな」
俺は太鼓を叩いて収録曲を流していく。
［吹雪］：「それなりに、バリエーションはあるんだが」
［聖奈美］：「……ありすぎて、何を選べばいいのか」
［吹雪］：「お前が良いなって思うのを選べばいいんだ」
［聖奈美］：「……じゃあこれ」
杠が選んだのは、クラシック曲だった。
［吹雪］：「これか、なるほどな」
初めてには最適の曲か。
［聖奈美］：「これだったら、リズムを掴みやすいはず」
［吹雪］：「何だよ？　何だかんだ言って勝つつもりなのか？」
［聖奈美］：「本気で行くって言ったのはあなたでしょう？　少しは張り合いがないとつまらないと思って……」
［吹雪］：「ふっふ、自分で言うのもなんだけど、俺、意外と強い

ぞ、このゲーム」

［聖奈美］：「それであたしに負けたら、あなたカッコ悪いわよ」

［吹雪］：「心配ない、絶対に勝てる」

［聖奈美］：「言ったわね。まあ、やれるだけやってみるわ」

――よし、ちょっといいところを見せてやるか。

［吹雪］：「じゃあ、スタートだ。画面の通りに太鼓を叩くんだぞ」

［聖奈美］：「分かってるわ」

……。

聖奈美ルート・モヴィエンド（9）

［吹雪］：「ふっふっふ、どうだ？　杠」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「な、何だよ？　その顔は」
［聖奈美］：「あなた……気持ち悪いわね」
［吹雪］：「んがっ！？」
すごいと言われる予定だったのに、気持ち悪いだって？
［吹雪］：「何よ、１００コンボって？　あたしはその半分だっていうのに……気持ち悪い数字ね」
［聖奈美］：「いや……いくら何でも気持ち悪いは……」
［吹雪］：「言ったでしょう？　あたしは思ったことは口に出すって」
［聖奈美］：「にしたって……」
ダメージが大きいな。
［吹雪］：「――でも、大体容量は分かったわ。次は、もう少し良い勝負できると思うわ」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「画面見なさいよ、もう一曲遊べるって出てるじゃない」
［聖奈美］：「ああ」
そういえば、二曲遊ぶことができるんだった。
［吹雪］：「何がいい？」
［聖奈美］：「そうね、クラシックで、もう少しテンポの早い曲はあるかしら？　そっちのほうがテンポを取りやすいかもしれないわ」
［吹雪］：「そうか、だとすると――これか」
さっきよりも曲のテンポは早く、叩くポイントも多い。
［吹雪］：「どうだ？」
［聖奈美］：「いいわ、それにしましょう」
［吹雪］：「気持ち悪いと言われようが、経験者だから負けるわけ

にはいかない」
［聖奈美］：「二回目だから、さっきみたいに簡単には勝たせないわよ？」
［吹雪］：「おう、その言葉期待してるぞ」
俺は太鼓を叩き、スタートを切った。難易度の通り、叩く箇所は最初よりもかなり多い。それ故ミスした時の差の開きは増えるが、逆にリードしていても後半の追い上げ次第で逆転される可能性ある。
俺は間違えないように忠実に太鼓を叩いていく。
順調にスタートを切った――んだが。
［聖奈美］：「……」
驚くべきは杠だ。わずか二回目でコツを掴んだのか、今のところ、俺と同じノーミスでここまで来ている。
［吹雪］：「やるじゃねぇか、杠」
［聖奈美］：「言ったでしょう？　簡単には勝たせないって」
［吹雪］：「おう、おもしろくなってきた」
俺はミスに注意しながら集中して叩いていく。そして、曲は徐々にアップテンポになっていく。
［聖奈美］：「早くなってきたわね、でも……あたしにはこっちのほうが叩きやすいわ」
どうやら、変な感覚が開くとテンポを取るのが難しく感じるようだ。その点この曲は一定のリズムで構成されているから叩きやすいんだろう。杠はどんどん調子を上げているようだった。
だが俺だって。
［吹雪］：「……あ」
しまった～、真ん中を叩けばいいのに端を叩いてしまった～！　くそう、コンボ数が一からやり直しになってしまった。
杠は……な！？　まだミスをしていないだと？
［聖奈美］：「ふふ、コツを掴んだわね、このままいくわよ」
［吹雪］：「ぐぅ……」
このままでは……俺は必死に太鼓を叩いていく。そして最後の連打

――。

［吹雪］：「ぬおおおおおおっ！！」

［聖奈美］：「……んんぅ」

そして――曲が終了した。

結果は――。

聖奈美ルート・モヴィエンド（１０）

［吹雪］：「ま、負けた……お、俺が……」
［聖奈美］：「ふふ、初心者を甘く見すぎたわね、大久保」
［吹雪］：「くそ～、初歩的なミスがなければ。というか、お前上達しすぎだろ、どんだけ慣れるの早いんだよ」
［聖奈美］：「まあ、リズムはピアノで鍛えられてるから、それが一番大きいんじゃないかしら？」
［吹雪］：「くそ～……マジで悔しいぜ」
［聖奈美］：「ふふ、あんなに自信満々に言ってた割には、思ったより強くないのね？　大久保」
［吹雪］：「うぐ……い、いいだろう。俺の本当の実力を見せてやるぜ。杠、もう一回だ」
［聖奈美］：「いいわよ、このゲームのことは完全に覚えることができた。今なら好勝負できるわ」
［吹雪］：「ふっふっふ、俺の本当の実力はここからだ。いくぞ、鬼コースだ」
［聖奈美］：「鬼コース？」
［吹雪］：「そう。レベル・難しい、のさらに上を行く難易度を誇るレベルだ。このゲームを理解できた杠なら、これもできるはずだぜ」
［聖奈美］：「ええ、いいわよ。どんな感じなのか見てみたいし」
［吹雪］：「よぅし、次は今のようにはいかんぞ」
鬼コースなら杠とする前に何度も経験している。確かにミスが出る時もあるが、多少のミスならそこまで大きな減点にはならない。何せ叩くポイントがとんでもなく多いからな。だから、どれだけコンボを決められるかが勝敗を分ける。
［ダルク］：「ふ、二人とも勝負師の顔してるよ……」
［吹雪］：「いいか？　準備は」

［聖奈美］：「ええ、いつでも」
［吹雪］：「よし、いくぞ！」
スタートの太鼓を叩いた。
まずはロールのような形で叩くように要求される。最初に普通モードでやっていただけに、どれだけ叩く量が多いかを実感する。
まずはここを順調にクリアだ。しかし、ここからが難関だ。太鼓の打面とふちを鬼のように叩いていく。この連続技は経験者じゃなければクリアできないはず。
できない……はず……。
［吹雪］：「何でだよ～！？」
横を見ている余裕などないが、つい見てしまう。杠は多少顔を歪め、難しそうにはしているものの、まだ一度もミスをしていなかった。
初めてやる人にとっては間違えずに叩けるレベルではないはずなのに、何故なんだ！？
［吹雪］：「う、ダメだ……集中しよう」
気を取られていては叩けるものも叩けない。全力を出し切らなければ勝てない。
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「く……」
終始無言で、ひたすら太鼓を叩いていく。
［ダルク］：「す、すごい……」
［聖奈美］：「くぅ、まだ続くの？」
［吹雪］：「もう、ちょっとだ。まだラストパートのラッシュが残ってるぞ」
［聖奈美］：「そこで、結果が決まりそうね」
［吹雪］：「ああ、勝負だ」
そして――。
［吹雪］：「うおおおおおっ！？」
［聖奈美］：「ふっ……やあぁ！」
最後のラッシュが終わり、曲が終了した。

［吹雪］：「はあ……はあ……」
［聖奈美］：「はあ……はあ……」
さすがは鬼コース、俺たちはかなり疲労していた。
［聖奈美］：「結果は？」
［吹雪］：「今出るだろう」
画面に得点が映される。結果は――。
［吹雪］：「俺が、３４万５４６７点。杠が……がっ！？」
［聖奈美］：「３５万３４２９点。ふふ、またあたしの勝ちみたいね」
［吹雪］：「な、何でだ～！？　全力は出し切ったというのに～」
［聖奈美］：「それは、あれでしょう。元々の腕の差じゃないかしら？」
［吹雪］：「うぐ……くそー、こんな形で連勝が途切れるなんて……」
［聖奈美］：「連勝してたのね、あなた」
［吹雪］：「コンピュータ対戦では、超ムズにも負けたことはなかったんだよ」
［聖奈美］：「所詮はコンピュータよ、人間には勝てないってことね」
［吹雪］：「……見てろよ？　もっともっと修行を積んで、お前を負かしてやるからな」
こんな形でライバルが出現するとは、全く予想外だった。
［聖奈美］：「あら？　ちょっと、画面が変わったわよ？」
［吹雪］：「ん？　ああ、今日の点数のランキングにランクインしたみたいだな、お前」
［聖奈美］：「そういうあなたもじゃないの」
杠が第３位で俺が第５位か……何とも中途半端な場所だ。ランクインしないよりはいいが。

聖奈美ルート・モヴィエンド（１１）

［吹雪］：「ほら、名前入力しろよ」
［聖奈美］：「え、ええ」
杠が名前を入力した後、俺も名前を入力した。
［聖奈美］：「１位の人は５０万以上得点してるのね。そんなことが可能なの？」
［吹雪］：「もちろん可能だ。ノーミスで、尚且つ叩く時のタイミングをジャストミートすれば最高１００万点をとることができるぞ」
［聖奈美］：「１００万……まだまだあたしたちは、レベルが低いってことね」
［吹雪］：「上には上がいるってことだ」
［聖奈美］：「でもこれは……うん……」
［吹雪］：「どうだ？　初めてゲームセンターでやってみたゲームの感想は？」
［聖奈美］：「……ま、まあ、思ってたよりつまらなくはないかもしれないわね。このゲームしかしてないから、本当かどうかは分からないけど」
［吹雪］：「だろう？　よし、それじゃあお前を完璧に楽しいと言わせてやる。俺が普段やってるゲーム、お前に体験してもらうぜ」
［聖奈美］：「しょ、しょうがないわね。付き合ってあげるわ」
そういった杠の表情は、割とまんざらでもないようだった。
……。
それからしばらく、店内のゲームで白熱した。
［吹雪］：「お前、何だかんだいってゲームの才能あるんじゃないのか？」
［聖奈美］：「そうかしら？」
［吹雪］：「でなきゃ俺は、あんなに追い詰められない。もう少し余裕を持ってできたはずだ」

［聖奈美］：「確かにあなた、かなり焦ってたものね」
［吹雪］：「そりゃあ焦るだろ」
カートゲームで、自分の車の後ろにピッタリマークされたら。
［聖奈美］：「何かで見たことあったのよ。スリップに入って付いていくと無駄なく走れる的なものをね」
［吹雪］：「全く……覚えなくてもいい知識を」
［聖奈美］：「日々の努力の賜物よ」
［吹雪］：「くそ、……もっと練習をしないとダメだな」
近いうちに修行に来なければ。
［吹雪］：「さて、後やってないものと言えば――」
ＵＦＯキャッチャーくらいか。
［吹雪］：「どうする？　見てみるか？」
［聖奈美］：「ここまで来たら、全部見ておきましょうか」
俺たちは出口付近に移動し、機械を見て回る。
［吹雪］：「うーむ……これはダメだな、こっちも、イマイチだな」
［聖奈美］：「あなた、何を見てるのよ」
［吹雪］：「何って、アームの力だよ。このアームの力で景品を落とすゲームなんだから、アームの力が弱くちゃ取れるものも取れないだろ」
［聖奈美］：「でも、そんな風に揺らすのって反則なんじゃないの？」
［吹雪］：「……散財を防ぐためだ」
だからこうして店員が見てないところを狙っているんだ。
［聖奈美］：「頼むからばれないでよね？　あたしまで恥をかくんだから」
［吹雪］：「一緒に恥をかいてはくれないのか？」
［聖奈美］：「当たり前でしょう？　恥をかくのが好きな人間なんていないわよ」
［吹雪］：「大丈夫だよ、今まで気づかれたことは少ししかない」
［聖奈美］：「何回かはあるんじゃないの……」

［吹雪］：「細かいことは気にするなよ。……うん、この台が一番良さそうだ」
機械を揺らしてもアームがぶれない。
［吹雪］：「ちなみに、どれが欲しい？」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「お前が良いと思ったものに狙いを定める。だから、どれがいい？」
［聖奈美］：「注文してとれるの？　あなた」
［吹雪］：「目標があったほうが燃えるだろう？　それに、俺は結構やりこんでるぞ、ＵＦＯキャッチャー」

聖奈美ルート・モヴィエンド（12）

［聖奈美］：「……さっきゲームであたしに負けたのに？」
［吹雪］：「ぐっ……そ、それはそれだ。ほら、選んでくれよ」
［聖奈美］：「分かったわ。……んーそうね、ダルクはどれがいい？」
［ダルク］：「うーん、そうだね」
二人で景品を観察し、品定めをする。
［吹雪］：「決まったか？」
［聖奈美］：「ええ、あれがいいわ。真っ白いクマのストラップ」
［吹雪］：「なるほど……」
そこまで奥にあるわけでもないし、大きくもない。多分落とせると思うが……問題は、どうやってアームに引っかけるかだ。
［聖奈美］：「本当に大丈夫なの？」
［吹雪］：「心配するな、俺を信じろ」
［ダルク］：「頑張って、吹雪」
［吹雪］：「……」
［ダルク］：「すごく集中してるね」
［聖奈美］：「ええ、こんな表情、コロシアム以来かも」
［吹雪］：「……よし、この作戦でいこう。作戦Ｃを決行する」
［聖奈美］：「作戦Ｋ？」
［吹雪］：「見てれば分かる、作戦Ｋの意味が」
［聖奈美］：「名前からして理解できない作戦を理解できるのかしら……」
［吹雪］：「とにかく、見ててくれよ」
俺はコインを投入し、アームを動かしにかかる。
［吹雪］：「……」
まずは横に動かし、目標のクマの手前にアームを持ってくる。後は縦にアームを動かし、上手くクマを持ち上げるわけだが……ここか

らが腕の見せ所だ。
［吹雪］：「……」
アームを慎重に動かし、クマの頭に付いているチェーンの輪っかにアームを潜らせにかかる。
［吹雪］：「ここだ」
俺はタイミングを計ってボタンから手を離す。後はアームが勝手にクマに向かって下がっていく。
［聖奈美］：「……あ」
［ダルク］：「すごい、すごいよ吹雪」
［吹雪］：「ふっふっふ」
アームは計算通り、チェーンの輪っかに潜り込み、クマのストラップを持ち上げた。そして、出口まで運び、景品を落とした。
［吹雪］：「――どうだ？　ちゃんと取ったぞ」
［聖奈美］：「取れるものなのね、結構」
［吹雪］：「ＵＦＯキャッチャーのことなら、それなりに自信あるからな。これくらいならお手の物さ」
［聖奈美］：「……その割には、結構緊張してるように見えたんだけど？」
［吹雪］：「ん？　気のせいさ。俺的には全く問題なかったぞ」
ただ、失敗した時のことを考えないようにしていただけだ。
［聖奈美］：「――で、取れたのはすごいと思うけど、作戦Ｋはどういう意味があったの？」
［吹雪］：「え？　見て分からなかったか？」
［聖奈美］：「ええ、さっぱり」
［吹雪］：「作戦Ｋ。『くぐらせて落とす』の略称だよ」
［聖奈美］：「……ネーミングセンスないわね、あなた」
［吹雪］：「アルファベットを取り入れれば、それっぽくなるからいいだろう？」
［聖奈美］：「……あなたがいいならいいけど」
［吹雪］：「そ、それよりほら。お望みの品だぞ」

［聖奈美］：「え？　あたしは別に……」
［吹雪］：「お前がこれがいいって言ったから取ったんだぜ？　お前がもらわなくてどうする」
［聖奈美］：「狙いを絞ってほしかったんじゃないの？」
［吹雪］：「それもある。でも、その品を見事ゲットできたわけだ。欲しい人にあげるのが筋だろう」
［聖奈美］：「あなたはいらないの？」
［吹雪］：「俺がこれを付けてたら、お前はどう思う？」
［聖奈美］：「……う」
［吹雪］：「だろう？　そうなるから、お前にやるよ」
［聖奈美］：「……いいの？」
［吹雪］：「いいからやるって言ってるんだぜ？　それに、俺は景品を取るのが好きなんだ」
［聖奈美］：「……じゃあ、もらっておくわ」
［吹雪］：「うん、そうしろ。――さて、次はダルクのを取ってやる。どれがいい？」
［ダルク］：「え？　いいの？」
［吹雪］：「杠のを取ったらダルクのも取ってあげないとな。ほら、どれがいい」
［ダルク］：「うーん、それじゃあね――」
……。

聖奈美ルート・モヴィエンド（13）

［吹雪］：「今日の収穫はまあまあってとこだったな」
［聖奈美］：「こんなに取って満足してないの？　あなた」
［吹雪］：「取れる時はもっと取れるんだ。それに味を占めちまってるからどうしてもな」
［聖奈美］：「本当に、やりこんでるのね」
［吹雪］：「さっきから言ってるじゃないか」
［ダルク］：「ありがとね、吹雪。大切にするよ」
［吹雪］：「ああ、そうしてくれるとそいつも嬉しいだろう」
あの後、見事にダルクの目当ての品も落とすことに成功し、合計４つの景品を手に入れた。後に取れた２個も、二人にあげた。
［吹雪］：「――で？　どうでしたか？　杠さん、初めてのゲームセンターの感想は」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「え？　じゃなくて、どうだった？　って聞いてるの」
［聖奈美］：「……そうね、食わず嫌いはなるべくしないほうがいいかもしれないわね」
［吹雪］：「ということは？」
［聖奈美］：「……そ、それなりに、楽しいものだったわ」
［吹雪］：「に……」
［ダルク］：「に……」
俺とダルクは顔を合わせて親指を立てた。
［聖奈美］：「な、何よその親指は？」
［吹雪］：「いや、杠の食わず嫌いを直せた喜びさ」
［聖奈美］：「……ゲームで負けてたくせに」
［吹雪］：「お、お前まだそれを……」
［聖奈美］：「事実じゃないの、初心者のあたしに負けるなんて、あなたもまだまだってことよ」

［吹雪］：「だから言っただろ？　今度、一人で修行に来ると。一回り大きくなったら、また勝負してもらうからな」
［聖奈美］：「……ま、まあ、時間が合えばね」
最初のままだったら、こんな言葉は返ってこなかっただろう。
［吹雪］：「さて、買い物して帰るか。よく考えたら、今日はお前が当番だったな」
［聖奈美］：「そうね、あたしも適当に見繕うわ、食材」
［吹雪］：「じゃあ行くか」
俺たちは行きつけの安いスーパーに向かった。
こういう日も、たまには悪くないよな。

聖奈美ルート・モヴィエンド（１４）

１２月２０日（月曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、全員揃ったな。みんな、体調は問題ないか？」

［舞羽］：「はい、大丈夫です」

［繭子］：「元気バリバリでーす」

［聖奈美］：「正常です」

［カホラ］：「問題なく元気よ」

［セフィル］：「吹雪はどうだ？　元気か？」

［吹雪］：「もちろん、何ともないです」

［セフィル］：「うむ、それならよかった。安心して練習を行えるな」

学園長はうなずきながらそう呟いた。今日の練習メニューは、学園長が言ったとおり、合同練習だ。全員のメロディーを一つに合わせる本番を意識した練習、これからはそれが主体になってくる予定だ。

［セフィル］：「みんな、今までやってきた練習の成果を存分に発揮してくれ。だとしても緊張することはないからな。今日から合わせ始めるわけだから、きっとミスも出るだろう。でも悲観することはない、そのミスを今後に活かしていけばきっと成功につながる。そうして完成した演奏を本番でしっかり弾けるようにするんだ」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「では、練習に移ろうと思うんだがその前に。フェル、やるぞ」

［フェルシア］：「はい」

先生たちは目を閉じ、詠唱を始めた。

［フェルシア］：「――エル・エルギュニス、我の精神、その身に宿したまえ、――ソウルイジェクター！」
詠唱と同時に、光を帯びた衣のようなものが、四人の体を包み込んだ。
［繭子］：「わあ、すごーい」
［舞羽］：「何だか、心が安らぐようです」
［セフィル］：「簡単に言うと、精神力アップの補助魔法だ。これで集中してピアノを弾くことができるようになるはずだ」
［聖奈美］：「ありがとうございます」
［カホラ］：「これは助かるわね」
さすが教師だな、みんなの力を発揮できる状況を作ってくれる。
［セフィル］：「吹雪、君には私の魔力を分けてあげよう。こっちに来るんだ」
［吹雪］：「はい」
俺は先生の前へ向かった。
［セフィル］：「じゃあ、目を閉じるんだ」
［吹雪］：「はい」
言われるままに目をつぶる。
［セフィル］：「――我の力、彼の糧とならん。――はっ！」
俺の体に、学園長の魔力が流れ込んでくるのを感じる。
……。
［セフィル］：「――よし、完了だ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「どうだ？　体のほうは？」
［吹雪］：「力が漲ってる感じがしますね」
［セフィル］：「それならよかった。これで、力を余すことなく発揮することができるだろう」
［吹雪］：「はい、頑張らせていただきます」
［セフィル］：「じゃあ今から、それぞれ神殿に向かうわけだがちょっとこれを見てほしい」

学園長は一枚の紙を目の前に広げた。
［セフィル］：「これが四季のピアノが置かれている神殿の場所なんだが、吹雪にはその中心に向かってもらう」
［吹雪］：「中心ですか？」
［セフィル］：「うむ、位置で言うとここだな」
学園長は地図の真ん中に黒点を打つ。
［セフィル］：「ここに、ハーモニクサー専用の聖壇がある。吹雪はここから、四人に魔力を供給してもらう」
［吹雪］：「今更なんですけど、魔力は遠距離からでも効果はあるんですか？」
［セフィル］：「もちろんある。確かに近くで詠唱したほうが効果は高いかもしれないが、いちいち移動して供給していては非効率的だし、何より吹雪体が保たないだろう。全員から同距離の場所でやるのが一番無難だ」
［吹雪］：「そうですね、了解しました」
［セフィル］：「ピアニストのみんなは、自分のピアノのところで音を奏でてくれ」
［聖奈美］：「あ、すみません。一つ質問いいでしょうか？」
［セフィル］：「何だ？　聖奈美」
［聖奈美］：「前から思っていたんですが、四季のピアノは四つのピアノのメロディーが全て重なって一つになるんですよね？」
［セフィル］：「うむ、そのとおりだ」
［聖奈美］：「神殿と神殿の距離はかなり離れているのに、どうやって相手の音を認識できるんですか？」
［セフィル］：「そのことか、確かに説明していなかったな。よし、教えてあげよう」
学園長はみんなを自分の元に集めた。
［セフィル］：「始めに断っておくと、私たちも正直詳しくは分からないんだ。今も尚謎に包まれている部分が多いから、断定はできないからそこは多めにみてくれ」

［聖奈美］：「分かりました」
［セフィル］：「みんな、ジャスパーは持っているな」
［聖奈美］：「はい、持っています」（聖奈美）
［セフィル］：「ジャスパーには魔力を増幅するパワーが宿っているんだが、それともう一つ力を持っている。それが、音を響かせる力なんだ」
［聖奈美］：「響かせる？」
［セフィル］：「ジャスパーには音を拾う力があるようなんだ。四季のピアノが変化させたわけだから、そう考えると納得がいくんだが。四季のピアノを奏でると、その音に共鳴してジャスパーが発光する、そうすると、自分以外のピアノの音がジャスパーから響いてくるんだ」
［聖奈美］：「でも、普段の練習の時は、みんなの音は聞こえてきませんでしたけど」
［セフィル］：「おそらく、四季のピアノ限定なんだろう。それがどうしてかは説明ができないんだが」
［聖奈美］：「そうですか、分かりました」
［セフィル］：「対策として神殿の中にモニターも用意してある。音が響かなかった時はそれを見てくれると助かる。すまないな、詳しい説明ができなくて」
［聖奈美］：「いえ、結構です。音の認識の方法が知りたかっただけなので、不安は解消されました」
［繭子］：「本当に不思議なんだねー、この石って」
［セフィル］：「うむ、とりあえずそういうことだから安心してくれ」
［聖奈美］：「はい」
［セフィル］：「他に何か質問はあるか？　難しくないことなら答えるぞ？　――大丈夫か、じゃあそれぞれの場所へ向かおう。ピアニストのみんなは目を閉じるんだ、私とフェルが神殿にワープさせてやろう」

［繭子］：「ちょっとドキドキしてきたよ～」
［舞羽］：「そうですね」
［カホラ］：「頑張りましょう」
［聖奈美］：「練習通りにやれば問題ないでしょう」
［セフィル］：「じゃあ、繭子、カホラ、先に連れていこう。舞羽と聖奈美は待っていてくれ。吹雪は最後に連れていくからな」
［舞羽］：「分かりました」
［吹雪］：「了解です」
［セフィル］：「じゃあフェル、繭子のほうを頼む」
［フェルシア］：「分かりました」
――四人はそこから姿を消した。
［吹雪］：「今更だけど、二人ともちゃんと弾けそうか？」
［舞羽］：「自分のパートはバッチリ。だけど、みんなと合わせるのは初めてだからそこが少し不安かな」（舞羽）
［吹雪］：「やっぱりそうだよな。でも、チームワークなら抜群だろうしきっと大丈夫だろう」
［舞羽］：「うん、頑張るよ」
［聖奈美］：「そういうあなたは？　ホーリーカルム、マスターしたんでしょうね」
［吹雪］：「遠距離からっていうのは初めてだけど、練習ではできるようになってきたよ。上手くいくように頑張るから、見限らないでくれ」
［聖奈美］：「べ、別に見限りなんてしないわ。あなただってあたしたちと同じよ、今ある力を存分に出すだけよ。ま、あなたの力を借りないのが一番の理想なんだけど」
［吹雪］：「それってつまり……お前の力なんて誰も必要としてないってことか？」
［聖奈美］：「何でそんなに悪い方向に持っていくのよ、ノーミスでクリアしたいってことを言ってるの、誰もあなたのことをそんな風に思ってないわよ」

［吹雪］：「そ、そうか？　なら、安心した」
［聖奈美］：「ちょっと不安になってきたわ……」
［セフィル］：「待たせたな、では二人も行こうか」
［舞羽］：「はい。吹雪くん、一生懸命やろうね」
［吹雪］：「おう」
［セフィル］：「じゃあ吹雪、少しの間待っていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
詠唱が終わり、４人はその場からいなくなった。
こうやって一人で待っていると、若干緊張が表に出てしまうな。とりあえず、力まないようにしないと、こんな時に暴発なんてしたら大惨事に成りかねない。力をキープして、精神を集中させることを忘れないようにしないと。
［吹雪］：「よし、やるぞ！」
俺は気合いを入れた。
［セフィル］：「うむ、良い心がけだ」
［吹雪］：「うわおっ！？」
既に学園長は戻ってきていた。
［セフィル］：「随分外国人っぽい驚き方だな」
［吹雪］：「別に意識はしてないですけど……早かったですね」
［セフィル］：「吹雪が寂しがるといけないと思ってな、ちょっと早めに折り返してきた」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「もうじきフェルも戻ってくる、そしたら聖壇に向かおう」
［吹雪］：「はい。学園長は、俺のほうに付いてくれるんですか？」
［セフィル］：「私とフェル、二人とも吹雪のほうに付く。ないとは思うが、あれが起きた時にとめられるようにな」
［吹雪］：「……申し訳ないです」
［セフィル］：「気にしなくていい。それに、君には期待しているからな、何かあっては困る」

［吹雪］：「期待に添えるように全力を尽くします」
［フェルシア］：「お待たせしました」
［セフィル］：「うむ、では行こうか」
二人に連れられて、聖壇へと向かった。
……。

聖奈美ルート・モヴィエンド（15）

［吹雪］：「す、すごい」
目の前には聖壇と呼ぶに相応しい光景が広がっていた。
［セフィル］：「驚いたか？」
［吹雪］：「はい、すごく」
［セフィル］：「普段は、一般人が入れないようにバリアが張り巡らされているんだ。聖なる場所を汚されては困るからな」
［吹雪］：「ここで俺は、ホーリーカルムを唱えるんですね」
［セフィル］：「そうだ。そこの四つの柱が、それぞれ四季のピアノの音を聴き取る機能を持っている。最初は、みんなの演奏に耳を傾けてみるといい」
［吹雪］：「供給のタイミングは？」
［セフィル］：「そこは吹雪のタイミングに任せる、と言いたいところだが今回は初めてだからな。私たちが供給のタイミングを知らせよう。後半になってくると、四人の魔力も大分落ちてくるはずだから、おそらくは曲の中盤あたりからだろう。それまでは、モニターでみんなの様子を観察していてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「今回が初めてだから、多少の失敗は仕方ない。リラックスしてやるようにするんだ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「１２時になると同時に演奏を始めるように言ってある。開始まで後、５分程だな」
５分か、今のうちにイメージを膨らませておこう。俺は四人の顔を頭に思い浮かべた。
［吹雪］：「――よし！」
行こう。
１２時と共に、柱からメロディーが流れてきた。最初のパートは桜

花のピアノを弾く舞羽からだ。そして、そのパートを追いかけるように杠の海風のピアノ、マユ姉の月影のピアノ、カホラ先輩の風花のピアノと続いていく。始めはゆっくり歩くようなテンポ、そのメロディーを次は杠が最初に奏で、同じようにマユ姉、カホラ先輩、舞羽と続けていく。

そして一周し、曲調は平均的なものになる。メインパートは舞羽に戻り、他の三人はそのメロディーを引立てるメロディーを奏でる。まだ序盤ではあるが、みんな問題なく弾けているようだ。

［セフィル］：「うん、今のところはいい感じだな」

［吹雪］：「このまま、続いてほしいですね」

［セフィル］：「まだ先は長い、見守っていてあげよう」

（頑張ってくれ、みんな……）

そして、全員がメインパートを弾き終わり、曲調は徐々に早く、激しくなっていく。先程とは打って変わった大きな音とメロディー、変拍子とでも言えばいいだろうか。その複雑なテンポの中でメインパートは移り変わり、引立てられていく。

と、ちょうどその時だった。

［繭子］：「あ……」

一瞬、和音の乱れが生じた。どうやら鍵盤を押し間違えたようだ。だが、すぐに立て直し、止まることはなかった。

［セフィル］：「大丈夫だ、そのまま続けてくれていい」

やはり、それだけ難しいところなのだろう。

［聖奈美］：「くっ……」

［カホラ］：「あっ……」

変拍子パートの中間らしいところで、杠と先輩が和音を間違えた。しかし、止まることはなく次のパートに集中する。

［セフィル］：「そろそろ、中盤だな」

ここからはしばらく、ソロパートが続いていく。舞羽、杠、マユ姉、先輩の順に回っていくから、他の三人はしばらくの休憩と言ったところか。

俺個人的には、ここが魔力供給の絶好のポイントだと思うんだが。
［吹雪］：「学園長、タイミングは？」
［セフィル］：「そうだな、舞羽のパートが終わるまで、聖奈美に魔力を供給してみてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
俺は目を閉じ、杠を頭に思い浮かべた。神経を研ぎ澄まし、イメージを働かせる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そして、自らの力を解放した。果たして、成功しているか？　俺は、学園長の言葉を待った。
［セフィル］：「うん、問題ない。成功しているようだ」
俺は内心ホッとした。しかし、ここで気を抜いたらいけない。もう一度気合いを入れなおそう。
［セフィル］：「舞羽のパートが始まるぞ」
それと同時に、舞羽のソロメロディーが始まった。最初によく似たゆったりとしたテンポのメロディーが紡がれていく。俺はその間も、杠に魔力を供給する。
［セフィル］：「聖奈美にパートが移ったら、次は繭子に供給してみるんだ」
返事は返せないが、言葉はしっかり受け止めた。
［セフィル］：「そろそろだ」
俺は詠唱を止め、マユ姉に詠唱をシフトさせる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そして、杠のパートが始まると同時にマユ姉に供給を始めた。
［繭子］：「おおっ！？」
モニターから声が聞こえた。声の感じからして、どうやら供給はできているらしい。杠のソロメロディーを聞きながら俺は詠唱を続ける。

［セフィル］：「その調子で、次はカホラだ」
先程と同じ要領で、俺は頭の中でカホラ先輩を思い浮かべる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
照準を先輩に変更。杠のパートが終わり、マユ姉がソロでピアノを弾き始める。秋を司るピアノにあった穏やかなメロディーが響いてくる。
［吹雪］：「う、く……」
［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」
俺はうなずいて返した。
ちょっと、体が重くなってきたな。やはり供給する人を変えているからだろうか？　練習の時よりも、魔力の消費が激しい気がする。でも、もう後半の後半には来ているはず、ここであきらめるのは嫌だ。曲の最後まで踏ん張るんだ。
［セフィル］：「カホラにパートが移ったら、舞羽に魔力を供給するんだ」
曲を聴いている限り、舞羽は個々のパートで最初を担うことが多い。若干他のみんなよりも消費しているかもしれない。なるべく多く、供給したいところだ。今ある魔力をしっかりと注ぐぞ。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そしてソロパートは最後のカホラ先輩に。マユ姉よりもアップテンポの曲調を感じながら俺は舞羽に魔力を与える。この後はおそらく、また四重奏に戻るだろう。もう一息だ、頑張れ、俺。
［セフィル］：「いいぞ、もう少しだ吹雪」
［フェルシア］：「頑張って、吹雪くん」
二人の応援に励まされながら俺は詠唱に心血を注ぐ。
［セフィル］：「よし、詠唱停止」
パートは最後の四重奏に入った。最初と同じ、ゆっくりとしたメロディーが紡がれていく。四人の息はピッタリで、淀みはほとんどな

い。多少の間違いはあっても、取り戻せる程度だ。徐々に、音量も小さくなっていく。
そして――余韻を残し、メロディーは終わりを迎えた。
それと同時に――。
［セフィル］：「ふ、吹雪！？」
俺の記憶も飛んでしまった。
……。
……。
……。

［場所：保健室］

［吹雪］：「ん、んん……」
目を開けると、俺は保健室にいた。
［フェルシア］：「吹雪くん、気がついた？」
［吹雪］：「あ、フェルシア先生」
［フェルシア］：「はあ、よかったー目が覚めたのね」
そうか、俺、詠唱が終わって倒れたんだった。てことは、フェルシア先生が俺を運んでくれたのか？
［フェルシア］：「体は？　痛いところとかない？」
［吹雪］：「痛くはないです。ただ、ちょっと体がダルいですね」
［フェルシア］：「それはそうよ、体内の魔力をほとんど使い切っちゃったんだから」
［吹雪］：「そうだったんですか？」
［フェルシア］：「そうよ、本当に無茶はするなって言ってたのに……」
［吹雪］：「すいません」
予想以上に、人を変えての供給は難しいものだった。まだまだスタミナ不足っていうのもあるな。もっと練習に力を入れないと……。
［舞羽］：「吹雪くん、大丈夫！？」

［繭子］：「ふーちゃん！」
［カホラ］：「吹雪！」
［聖奈美］：「……！」
［吹雪］：「おおっ！？」
一斉に全員が保健室にやってきた。
［繭子］：「あ、起きてる、ふーちゃんが起きてる！」
［舞羽］：「大丈夫なの？　体は何ともないの？」
［カホラ］：「痛いところとかは？　どこかおかしいところとかはない？」
［聖奈美］：「し、心配かけるんじゃないわよ！　本当に、びっくりしたんだから」
［吹雪］：「あ、ちょ、ちょっと待ってくれ」
一変にまくし立てられ、どれに答えていいのか分からない。
［吹雪］：「大丈夫だから、ちょっと疲労がたまっただけだから」
［舞羽］：「よ、よかった」
みんな、俺の顔を見てほっとしているようだった。
［フェルシア］：「治癒魔法はかけておいたから、直に良くなってくるはずよ」
［吹雪］：「ごめんな、心配かけて」
［セフィル］：「本当だ、無理をするなとあれだけ言っていたのに」
［吹雪］：「が、学園長！？」
いつからそこにいたんだ？
［セフィル］：「頑張るのは良いことだ、だが、倒れるまで頑張れなど一言も言ってないぞ。それは単なる無茶だ」
［吹雪］：「う……すいません」
［セフィル］：「もしものことがあってからでは遅いんだ。もっと自分の体を大事にしなくては」
［吹雪］：「はい……以後気をつけます」
［セフィル］：「ふう……だがまあ、よく頑張ってくれた。吹雪の魔力を受け取ったおかげで、みんな最後までピアノを弾くことがで

きたしな」

［吹雪］：「あ、本当ですか？」

［セフィル］：「あの後、全員の魔力のチェックをしたんだ。四季のピアノで、どれくらいの魔力を消費するかを知っておくために。そしたら、全員の魔力が４０を下回ってたんだ」

［吹雪］：「そ、そこまでですか？」

一般的に、魔力のパーセンテージは３０を下回ってしまうと極度の負担が体にかかる。それに近いということは、負担もかなりかかっていたということ。

［セフィル］：「舞羽が３７、繭子が３８、聖奈美が３８でカホラが３６。今は治癒魔法で大分回復しているが、終わった直後はみんな相当疲れていたんだ」

［吹雪］：「やっぱり、一筋縄じゃいかないってことですか」

［セフィル］：「そういうことになるな。だが、みんなが疲労しながらも最後まで弾き終えることができたのは、吹雪が中途で魔力を供給したからなんだ」

［吹雪］：「俺、ちゃんと供給できてましたか？」

［セフィル］：「ああ、成功していたぞ。なあ？　みんな」

全員が顔をそろえてうなずいてくれた。

［舞羽］：「吹雪くんの力、弾いてる途中でもすごく伝わってきたよ」

［繭子］：「うんうん、ふーちゃんの後押しがあったからこそだよ～」

［聖奈美］：「まあ、心配してたけど、ちゃんとできてたみたいね。及第点ね」

［カホラ］：「吹雪ならできるって信じてたわ。ありがとね」

全員から賛辞をもらえるなんて、感無量だな。

［吹雪］：「ありがとう、みんな。次はもっと、楽にピアノを弾くことができるように頑張るよ」

［セフィル］：「次は倒れるんじゃないぞ？」

［吹雪］：「は、はい。了解です」
［セフィル］：「うむ、じゃあ、今日の練習はこれで終了としよう。今日はゆっくり休んで疲れをとること。明日も練習があるから、みんなで頑張っていこう」
［全員］：「はい！」
――全体練習は、色々あったけど、うまくいった。

聖奈美ルート・ブライト（1）

12月21日（火曜日）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「――ふあ～あ……」

大きく欠伸をし、布団から這い出る。全体練習は少しトラブルがあったけど、何とか形にはなった。まあトラブルの原因の大半は俺なんだが……。これからはそこを鍛えていかなければ。

［吹雪］：「そのためにも、今日の練習を頑張らなければ」

俺は顔を洗いに水飲み場へと向かう。

……。

さっぱりして社会科室に戻ってくると、杠が布団の上に座っていた。起きてると思ってたけど、まだ起きてなかったのか。

［吹雪］：「おはよう、杠」

［ダルク］：「おはよう、吹雪」

［吹雪］：「おう、ダルク。おはよう」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「杠？　おい、杠」

［聖奈美］：「っ！？　な、何！？　……あ、何よ、また大久保……」

［吹雪］：「俺で悪かったな。何だよ、ボーっとしてるみたいだけど」

［聖奈美］：「寝起きよ？　そりゃあボーっともするわ」

［吹雪］：「そうか？　お前にしては珍しく遅起きじゃないか？　いつもはもう少し早く起きてるはずだが」

［聖奈美］：「……え？」

［吹雪］：「いや、だから、ちょっと遅起きじゃないかって言って

るんだ」
［聖奈美］：「そ、そんなことは……ちゃんといつもどおりに起きて……あれ？　おかしいわね……時計が進んでる……」
［吹雪］：「いや、それが今の時刻で間違いないぞ」
［聖奈美］：「……ああ！？　い、いけない、あたしとしたことが寝坊……」
［吹雪］：「まだ間に合う時間だし、そこまで慌てることでも」
［聖奈美］：「い、急いで身支度を済ませなくちゃ……ん」
［吹雪］：「お、おい。杠」
俺の声には目もくれず、杠は社会科室を出て行った。
［吹雪］：「……何か、いつもと様子が違わないか？　杠の奴」
［ダルク］：「うん、私も思った」
［吹雪］：「何て言うか、ちょっと疲れてるように見えたな」
はっきりとではないが、目の下にクマのようなものが見えた気がする。
［吹雪］：「やっぱり無理してるんじゃないのか？　あいつ」
朝と夜の練習、昼は生徒会の仕事をしていれば、疲れないわけがない。それを毎日続けていたらそれは疲労も溜まるはず。一日ぐっすり寝ても多少の疲労は蓄積されるだろう。
［ダルク］：「私も、無理しないでっていつも注意してるんだけど、大丈夫ってしか言わなくてさ」
［吹雪］：「あいつの性格なら、そういうだろうな」
［ダルク］：「……ちょっと心配だな」
［吹雪］：「本人が大丈夫っていう以上、あまり口出しはできないからな……」
［ダルク］：「私、今日は注意して聖奈美のこと見ておくよ」
［吹雪］：「それがいいな。あいつ、今日も生徒会の仕事をするんだろう？」
［ダルク］：「うん、もうすぐ今年の学校生活も終わるし、休めない時期だからね」

［吹雪］：「そうか。――よし、なら俺も手伝いに行くか」
［ダルク］：「え？　本当？」
［吹雪］：「ああ、これ以上あいつの体に負担をかけるのは良くないからな」
一緒に合宿をしている仲間だ。助け合っていくのが大切だ。
［吹雪］：「祐喜に許可を取って行くよ。突然来るのはあいつが嫌がるだろうから」
［ダルク］：「嫌がってるわけじゃないと思うんだけど……」
［吹雪］：「まあ何にしても手伝いには行くよ。杠にも一応伝えておいてくれ」
［ダルク］：「うん、分かった。じゃあ、私も水飲み場に行ってくるね」
［吹雪］：「おう、行って来い」
ダルクはふわふわと飛んで行った。
杠、倒れたりしないといいんだが……。

聖奈美ルート・ブライト（2）

［場所：教室］

［吹雪］：「――そんなわけだから、今日も手伝いに行かせてくれないか？」

［祐喜］：「本当に、吹雪は良い同級生だね。ますます生徒会に欲しい人材になってきたよ」

［吹雪］：「いや、だから入る気はないぜ？　俺」

［祐喜］：「分かってても欲しくさせる吹雪にも否はあると思うんだよね、僕は」

［吹雪］：「え、ええ？」

［祐喜］：「あはは、冗談だから」

［吹雪］：「……祐喜の冗談は、たまに本気で言ってるように聞こえるんだが」

［祐喜］：「それはもちろん、冗談の中に本気も含まれてるからね」

［吹雪］：「……じゃあ本気なんじゃねぇのか？」

［祐喜］：「吹雪の嫌がることはしたくないってこと」

［吹雪］：「それなら、いいんだが……」

［祐喜］：「でも、本当に助かるよ。生徒会は今が追い上げの時期だからね。人材は多ければ多いほど仕事も円滑に進むし」

［吹雪］：「やっぱり、今が一番大変なんだな、生徒会は」

［祐喜］：「そうだね、総決算だし。だから、生徒会長の聖奈美は特に頑張ってるよ」

［吹雪］：「じゃあ、祐喜も分かってるんだよな？　杠のこと」

［祐喜］：「うん、ここ最近は毎日顔を合わせてるからね。あ、それは吹雪も同じか、合宿してるもんね」

［吹雪］：「そうだな」

［祐喜］：「疲れを見せないようにはしてるみたいだけど、やっぱ

り隠しきれてないみたいだね」
［吹雪］：「顕著なのはやっぱり、合宿が始まった頃からか？」
［祐喜］：「うーん、そうかもしれないね。生徒会だけだった時はまだ大丈夫みたいだったけど……とは言っても、選ばれた以上、拒否することもできないから、しょうがないことなんだけどね」
［吹雪］：「それはそうだろうな。杠自身、選ばれたことには誇りを持ってるだろうし」
［祐喜］：「無理をするなって言っても、できないんだろうねやっぱり」
［吹雪］：「そうだろうな」
［祐喜］：「だから、吹雪は手伝いに来てくれるって言ってるわけだし」
［吹雪］：「ま、まあ……あんな性格だからな」
強めにいかなければ首を縦には振らないし。
［祐喜］：「さすが、よく分かってらっしゃる」
［吹雪］：「これが、正しい選択だろう？」
［祐喜］：「うん、模範解答だね」
［吹雪］：「お前がそう言ってくれると、少し心強いな」
［祐喜］：「一緒に仕事してれば、嫌でもそういうのは分かってくるからね、お互いに」（祐喜）
同学年は二人だけだしな、連携がどれだけ上手くいくかが重要なわけだし。
［祐喜］：「僕も積極的に仕事をもらって、負担を軽減できるようにするよ。吹雪はあくまで有志なわけだし、所属している僕が頑張らないと」
［吹雪］：「でも、体は壊すなよ？　お前まで体調を悪化させたらとんでもないことになる」
［祐喜］：「大丈夫、僕は儀式に選ばれてるわけじゃないし、その分疲労は軽いよ。むしろ心配しなきゃいけないのは、吹雪本人だと思うけどね」

［吹雪］：「お、俺か？」
［祐喜］：「そうだよ、吹雪だって朝と夜の練習、特に朝は過酷な体力付けをしてるわけなんだから。正直言って、聖奈美の心配をする余裕もないように思うんだよ、僕としては。更に今日は、それに生徒会の仕事をプラスするわけだし、やってることは聖奈美と全く同じなわけ。何を言いたいか、吹雪はもう分かるよね？」
［吹雪］：「……うん、分かってる。でも、俺は男だからな、体力だけが取り柄だから、一回くらいで体調を崩したりはしないよ。それこそ、朝のランニングで基礎体力はかなり向上してるだろうし」
［祐喜］：「そうだね。けど、気を抜いたらいけないよ？　これは僕からのお願い」
［吹雪］：「ああ、分かった」

聖奈美ルート・ブライト（3）

［場所：廊下］

［祐喜］：「――じゃあ、行こうか、吹雪」
［吹雪］：「おう」
［愛海］：「あら？　二人でお出かけ？」
［祐喜］：「うん、ちょっとね」
［愛海］：「……ふふ」
［吹雪］：「な、何だ？　その笑いは」
［愛海］：「ううん、別に～。……大久保くんと芳田くんのコンビは、結構良いわね」
［吹雪］：「何わけ分かんないこと言ってるんだお前は」
［愛海］：「いやいや、前々からちょっと考えてたことだから気にしないで」
［吹雪］：「……激しく不安だ。頼むから変な噂だけは流すんじゃないぞ？」
［愛海］：「それは、流せっていうフリ？」
［吹雪］：「断じて違う。……行こうぜ祐喜、時間の無駄だ」
［愛海］：「あ、時間の無駄とは失礼ね～、いいわよ。私は一人で遊ぶから」
［祐喜］：「ごめんね、日野さん。じゃあ、そういうことで」
［吹雪］：「……相変わらず、翔を女にしたような感じだ」
［祐喜］：「翔よりは、多少思考回路が優秀だよね」
［吹雪］：「それが困るんだよ……何から何まで手が回るのが早いから」
［祐喜］：「行き過ぎた時は言ってよ。友人と言えどペナルティはしっかり科すから」
［吹雪］：「それは心強いな」

［ダルク］：「あ、吹雪ー、祐喜さーん」
聞き覚えのある声。振り向くと、やはり後ろからダルクが飛んできていた。
［吹雪］：「おう、ダルク。どうしたんだ？」
［祐喜］：「聖奈美と一緒じゃないのかい？」
［ダルク］：「ううん、ついさっきまで一緒だったんだけど、聖奈美が忘れ物したから私が取りに戻ったの。多分先に生徒会室に向かったと思う」
［吹雪］：「忘れ物、何を忘れたんだ？」
［ダルク］：「うん、メガネを忘れたの。ほら」
そうやって俺にメガネケースを見せる。
［吹雪］：「あれ？　前回もメガネを忘れたよな？　あいつ」
［ダルク］：「うん。そうだね……」
［吹雪］：「あー、これは結構きてるかもな」
普段なら同じ過ちを二度も繰り返さないはずだ。
［吹雪］：「授業中の様子はどうだった？」
［ダルク］：「うん。授業自体は真面目に受けてたみたいだけど、時々ボーっとすることが多かったかな」
［吹雪］：「そうか……うーん」
［ダルク］：「大丈夫って聞いたんだけど、聖奈美は大丈夫って答えるし。あんまり言いすぎるとしつこいって思われそうだから、何度も言うわけにもいかなくて」
［吹雪］：「そこら辺、譲らなそうだからな、あいつ」
［祐喜］：「そうだね」
［吹雪］：「――とりあえず、生徒会室に行くか」
［祐喜］：「そうだね」
［ダルク］：「うん」
俺たちは目的地へ向かった。
……。

聖奈美ルート・ブライト（4）

［場所：生徒会室］

［祐喜］：「お疲れ様ー」
［吹雪］：「失礼します」
［聖奈美］：「……」
［後輩Ａ］：「あ、祐喜先輩、こんにちは。……あれ？　吹雪先輩も来てる」
［後輩Ｂ］：「え？　あ、本当だ、吹雪先輩だ～」
［吹雪］：「こんにちは、二人とも」
［後輩Ａ］：「わー、覚えててくれたんですね？　私たちのこと」
［吹雪］：「そんな、三日前のことをすぐには忘れないって」
［後輩Ｂ］：「ちょっと嬉しいですね～」
相変わらず、元気見たいだなこの二人は。
［祐喜］：「聖奈美、今日も吹雪が手伝ってくれるって来てくれたよ」
［聖奈美］：「……」
［祐喜］：「聖奈美？　聖奈美ったら」
［聖奈美］：「え？　あ、ああ、そのことならダルクから聞いてるから。あなたから大久保に適当な仕事を与えてあげて。あたしはこの書類を出かさなきゃいけないから」
［祐喜］：「うん、分かったよ」
［ダルク］：「聖奈美……」
祐喜は首を傾げながらこちらに戻ってきた。
［祐喜］：「どうも声が通りずらいみたいだね、今日の聖奈美は」
［後輩Ａ］：「そうですよね、私たちも感じました」（後輩Ａ）
［後輩Ｂ］：「うん、何でしょう？　気力だけで動いてるみたいな」
［祐喜］：「君たちにも分かるかい？　やっぱり」

［後輩Ａ］：「はい、今日は何だか、雰囲気が違うと言いますか……」
［後輩Ｂ］：「普段の聖奈美先輩とは、思えないですね」
だろうな……。
［祐喜］：「あの二人は来るのかい？　生徒会には」
［後輩Ｂ］：「はい。忙しいってことを伝えたら、絶対に手伝いに来るって言ってました」
［祐喜］：「となると、戦力は7人か。……よし、じゃあ協力して、聖奈美の仕事を少なくできるようにしよう。これ以上、聖奈美の体に負担をかけないようにしないと」
［後輩Ａ］：「そうですね」
［後輩Ｂ］：「頑張りましょう」
［祐喜］：「吹雪には、僕のアシストをお願いしてほしいんだけどいいかい？　なるべく、聖奈美が視界に入るところでやるようにするから」
［吹雪］：「俺は何でもするぜ」
［祐喜］：「はは、それは心強いや」
［聖奈美］：「……４人とも何してるの？　早く仕事に入らないと、冬休みまでに終わらないわよ？」
［祐喜］：「うん、今仕事分担してたとこ。すぐ仕事に入るよ」
［聖奈美］：「なら、いいけど……」
［祐喜］：「よし、じゃあ今日も頑張ろう」
［吹雪＆後輩二人］：「おー！」

聖奈美ルート・ブライト（5）

――その後、もう二人の生徒会員がやってきて、合計9人で生徒会の仕事を行うことになった。遅れてやってきた後輩には、祐喜が事情を説明し、どういうスタンスで動くかを教えた。
現在は全員でそれを実行中だ。
［後輩A］：「あ、聖奈美先輩。その資料は私たちで見ておきますよ。私たちの学年の通信ですから」
［後輩B］：「はい、聖奈美先輩はしばらく休んでいてください」
［聖奈美］：「え？　でも、そういうのをまとめるのはあたしがいつも……」
［後輩A］：「今日はやりたい気分なんです。バリバリ働きたい気分なんです」
［後輩B］：「はい、聖奈美先輩に、イケてるところを見せたいんです」
［聖奈美］：「い、イケてるところって……何？」
［後輩B］：「と、とにかく、これは私たちがやっておきますから、先輩はしばしくつろいでてください」
［聖奈美］：「ちょ、ちょっと……」
［祐喜］：「……ちょっと強引だけど、あれが一番良い戦法だね」
［吹雪］：「ああ、本当なら今日は仕事休めって言いたいところだけど」
［祐喜］：「言ってもやめないだろうからね、きっと。僕が会長だったら、分からなかったかもしれないけど」
［吹雪］：「だな」
［祐喜］：「とにかく今は、少しでも楽にさせれるようにしないと」
［後輩C］：「ありがとうございます、吹雪先輩」
［後輩D］：「わざわざ助けに来てくださって、感謝してもしきれないです」

途中から参戦した後輩二人がそう言ってくる。今日こいつらとは初めて顔を合わせる女子たちとは違い、至って真面目そうな男子たちだった。

［吹雪］：「いいんだ、俺も放課後は特にやることがないんだから」

［後輩Ｄ］：「でも、部活動なさってるんですよね？　そっちに行かなくて大丈夫なんですか？」

［吹雪］：「ああ、そのことは部員に伝えてある。俺たちが一段落するまでは、大きな活動はしないようにって」

［後輩Ｃ］：「大変そうですもんね、ハーモニクサーも」

［吹雪］：「やる前から分かっていたつもりだったが、予想を遥かに上回ってたよ。昨日の練習でそれが決定づけられた」

［後輩Ｄ］：「でも、頑張ってくださいね？　俺たち、応援してますから」

［吹雪］：「ああ、もちろん」

［後輩Ｃ］：「その合同練習って言うのに、聖奈美先輩も参加してたんですよね？」

［吹雪］：「ああ。多分、それも今のあいつの状況に絡んではいるんだろうな」

魔力の消費は、疲労に比例するところがある。でなければ俺が途中で力尽きたりはしない。もちろん、そのことは後輩に伝えていない。

［吹雪］：「悪いな、心配かけて」

［後輩Ｄ］：「そんな、吹雪先輩が謝ることじゃないです」

［後輩Ｃ］：「そうです。誰も悪くないんですから」

［後輩Ｄ］：「……ところで、吹雪先輩はどういう経緯で聖奈美先輩と知り合ったんですか？」

［吹雪］：「あれ？　本人からは聞いてないのか？」

［後輩Ｄ］：「聞こうと思ってたんですが、別にいいでしょ？　と言って教えてくれないんですよ」

［後輩Ｃ］：「言うのが躊躇われる何かがあるんですか？　二人の出会いって」

［吹雪］：「あー、あるような、ないような」
［後輩A&C］：「？？？」
俺からしたらたいしたことないように思うが、杠にとっては結構恥ずかしいかもしれない。何せ、最初のアプローチが……ああいう形だったからな。
［祐喜］：「近いうち、僕が教えてあげるよ。一部始終を見てたからね」
［後輩C］：「あ、いいんですか？　祐喜先輩」
［祐喜］：「うん。ただ、今は聖奈美がいるからね。聞かれたら厄介だから」
［後輩D］：「なるほど、了解しました」
［吹雪］：「……あ、いけね、記入ミスだ」
［祐喜］：「あ、じゃあ修正液使って直すといいよ。はい、吹雪」
［吹雪］：「おう、サンキュー」
祐喜から修正液を受け取り、文字を上書きする。現在やっているのは、部活動毎の部費の計算がずれていないかの確認。来年の予算云々に関わってくるらしい。

［吹雪］：「生徒会無くして、学園成り立たず、って感じか」
いざ一緒になって働いてみると、それがよく分かるな。
［聖奈美］：「――はい、生徒会室です」
どうやら電話が入ってきたようだ。
［聖奈美］：「――はい、では、あたしたちでその場所に案内すればいいんですね？　分かりました。では、終了次第報告に伺いますので、失礼します」
手慣れた対応で、杠は受話器を置いた。
［祐喜］：「何だって？」
［聖奈美］：「部室棟の近くの水道管から赤水が出てきて使用できなくなってるようなの。だから業者に連絡して直してもらうんだけど、その業者の案内をあたしたちにお願いするってことよ」
［祐喜］：「赤水……部室棟の蛇口はあまり使う機会がないからね。腐食するのも当然か」
［聖奈美］：「小まめに点検をしておくべきだったわね。今から20分後くらいに到着するらしいから、あたしが――」
［後輩C］：「い、いえいえ。聖奈美先輩、ここは俺たちが行ってきます」
［後輩D］：「先輩はここで電話が来た時に備えておいてください。生徒会長なんですから」
［聖奈美］：「だって、あなたたち今仕事をしてるじゃないの……」
［後輩A］：「心配ご無用です。私たちが代わりにそちらに回りますから。もう少しでこっちの作業は終了しますし」
［後輩B］：「はい、ここは男子に任せましょうよ？　先輩」
［吹雪］：「……でも……」
［後輩D］：「……よし、早めに行って出迎えの準備をしようぜ」
［後輩C］：「おう、じゃあ、行ってきます」

［聖奈美］：「ちょ、ちょっと！？　出迎えの準備って一体何よ…
…来賓とかじゃないのよ？」
ぶつぶつ言っているようだが、行ってしまった後輩らを止める気はないようだ。
［祐喜］：「グッジョブだね、良い判断力だよ」
……こんな感じで、俺たちはなるべく杠に疲労を溜めないように心掛けて仕事を行った。
――そして夕方。
［祐喜］：「聖奈美、今日はこの辺にしておこう。もう結構良い時間だね」
［聖奈美］：「……そうね。みんな、帰る支度をしなさい」
［後輩Ｂ］：「あ、はい。分かりました」
［後輩Ｄ］：「……どうでしたか？　祐喜先輩」
［祐喜］：「うん、なかなか良かったよ、みんな」
［後輩Ｃ］：「明日もこのスタンスを保ったほうが？」
［祐喜］：「そうだね、聖奈美の疲労をなるべく溜めないように心掛けよう。ピアノの練習もあって休まる暇がないから。いいかい？　みんな」
［四人］：「了解です」
［祐喜］：「じゃあ、この後は頼んだよ？　吹雪、ダルクちゃん」
［吹雪］：「おう」
［ダルク］：「分かりました」
［聖奈美］：「……何ひそひそ話をしてるのよ？　みんなで集まって」
［祐喜］：「ううん、何でもないよ。さ、暗くならないうちに帰ろう。先生には僕たちが言っておくよ」
［聖奈美］：「……言わなくても祐喜がやることに決まってたはずだけどね」
［祐喜］：「一応、確認だよ。あはは」
［聖奈美］：「……」

ガチャリ。
［聖奈美］：「それじゃあ、お疲れ様でした。明日もみんなで頑張りましょう」
［全員］：「はい、お疲れ様でした」
［祐喜］：「じゃあ吹雪、また明日」
［吹雪］：「ああ、じゃあな」
みんなは階段を下りて行った。

聖奈美ルート・ブライト（7）

［吹雪］：「さて、俺たちも戻るか」
［聖奈美］：「はあ……」
［吹雪］：「杠？」
［聖奈美］：「え？　うん、戻りましょう」
［吹雪］：「……」
やっぱり疲れのせいで、耳も遠くなってるのか？
こんな様子を見せられてしまうと――。
［吹雪］：「杠」
［聖奈美］：「何よ？」
［吹雪］：「無理はするなよ？」
［聖奈美］：「無理なんて、してないわ。前も言ったでしょう？」
［吹雪］：「確認だ、確認」
本当なら、もう少し強めに言いたいんだが同じ答えが返ってくるだろうからな。今は杠の言葉を信じることにしよう。下手なことを言えば、こいつのプライドを傷つけかねない。

聖奈美ルート・ブライト（8）

［場所：第二音楽室］

【聖奈美サイド】

……。

［聖奈美］：「どうだった？　ダルク」

［ダルク］：「うーん、悪くはないんだけど……ちょっと強弱がついてなかったと思う」

［聖奈美］：「また？」

［ダルク］：「うん、何ていうか……改善される前に戻っちゃった感じが」

［聖奈美］：「……練習が足りてないのね、きっと」

［ダルク］：「……」

［聖奈美］：「もう一度弾くわ、ダルク。また聴いててもらえるかしら？」

［ダルク］：「……」

［聖奈美］：「ダルク？　どうしたのよ？」

［ダルク］：「……今聖奈美が満足に弾けないのは、練習が足りないからじゃないと思うよ、私は」

［聖奈美］：「ど、どういうこと？」

［ダルク］：「聖奈美は、疲れてるんだよ。疲労が溜まってるから、上手く弾くことができないんだよ。だから、早めに休んだほうがいいよ」

［聖奈美］：「な、何言ってるのよダルク。あたしは元気だって、お昼にもそう言ったでしょう？」

［ダルク］：「私は常に聖奈美と一緒に行動するパートナーだよ？　主人の体調のことは、よく理解してるつもりだけど」

［聖奈美］：「心配しすぎよ、ダルクは。体調管理なら怠ってない

わ」
［ダルク］：「でも、ボーっとしてることが多かったじゃない」
［聖奈美］：「あれは、考え事してただけ。疲れてたわけじゃないわ」
［ダルク］：「……」
［聖奈美］：「今日はちょっと眠りが浅かったの。今日一晩ぐっすり眠れば、疲れなんて全て飛んでいくわ」
［ダルク］：「じゃあ、睡眠時間長く摂るためにも今日は早めに上がって――」
［聖奈美］：「それはできないわ。今ここで休んだら、みんなに遅れを取ってしまう。昨日の失敗を取り返すためにも、休むことはできない」
［ダルク］：「今の状態でしても……」
［聖奈美］：「だから、あたしは正常だって言ってるでしょう？主人がそう言ってるんだから、全然問題ないわ」
［ダルク］：「聖奈美……」
［聖奈美］：「さあ、練習しましょう。――みんなの期待に答えるためにも」
ダルクには申し訳ないけど、あたしは続けなくちゃ。だって、あたしは代表者なんだから。これくらいの疲労で、休んでいる暇はないわ。
大丈夫、今日一日しっかり寝れば、明日はきっと元通りよ……。
【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・エックスプレッション（1）

12月22日（水曜日）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「ん、んん……」

朝か、今日も一日頑張らなければ。だがその前に――。

［吹雪］：「杠、体調は戻ったのか？」

本人は気だけに振る舞っていたが、傍から見た感じ疲労が色濃く見えていた。一晩寝れば直ると言っていたことを、ダルクから教えてもらったが……。

［吹雪］：「本当に戻ったのか？」

俺は仕切りのカーテンを開く。どうやらみんなは……起きて水飲み場でも行ったか。

［吹雪］：「ん？」

まだ一人、布団の上でボーっとしてる奴がいる。もちろん、誰かは決まっている、杠だ。横でダルクが心配そうに見つめている。

［吹雪］：「杠、おはよう」

［聖奈美］：「はあ……はあ……」

［吹雪］：「杠？」

［聖奈美］：「え？　あ、ああ……あなたね……何の用？」

［吹雪］：「何の用って、朝の挨拶だよ。いつもやってるだろう」

［聖奈美］：「そ、そうだったわね……はあ……あたし、身支度してこないと……」

杠は立ち上がろうとするのだが……。

［聖奈美］：「ん、んぅ……」

［吹雪］：「おい、お前……」

足に力が入らないのか、杠は立ち上がることができない。というか、

顔がすごく赤い気がするんだが……。
［聖奈美］：「な、何でかしら？　……はあ……」
［吹雪］：「――ちょっとじっとしてろ、杠」
［聖奈美］：「え？　あ……」
俺は額に手を当ててみる。
［聖奈美］：「な、何を……」
［吹雪］：「お前、熱あるじゃないか？　メチャクチャ熱くなってるぞ」
［聖奈美］：「そ、そんなことないわ……平熱よ……」
［吹雪］：「馬鹿言ってるんじゃねぇよ、どこが平熱だ。早くフェルシア先生に――」
［聖奈美］：「余計なことしないで！　あたしは別に――」
［吹雪］：「ダメだ！　お前が大丈夫だって言っても、俺が大丈夫じゃないんだ。ダルク、フェルシア先生を呼んできてくれ」
［ダルク］：「うん、分かった」
ダルクは先生が向かったであろう水飲み場に向かって飛んでいく。
［聖奈美］：「何、するのよ、あなた……」
［吹雪］：「当然のことをしてるまでだ。今回は、さすがに言うことを聞いてもらわないと困る」
［聖奈美］：「あたしは、本人よ？　自分の体調くらい……自分で……」
［吹雪］：「だったら、今自分が熱を帯びてることくらい分かってるはずだ」
［聖奈美］：「……こんな大事な時期に、休んでる暇なんてないのよ……あなたも分かってるはずよ」
［吹雪］：「それはもちろん分かってる。分かってるからこそ、お前の体調を治してやりたいんだよ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「今はじっとしてろ」
……。

聖奈美ルート・エックスプレッション（2）

その後、フェルシア先生がやってきて、杠の体温を測った。
［フェルシア］：「――38度8分、立派な風邪ね」
［聖奈美］：「……」
［フェルシア］：「今日は一日安静にしてたほうがいいわね。栄養のあるもの食べて、ぐっすり休めばきっと良くなるでしょう」
［聖奈美］：「あ、安静って、一日動くなってことですか？」
［フェルシア］：「そうね。練習も学校も、今日は控えたほうがいいわ」
［聖奈美］：「そ、そんな……今、休んでる暇なんてありません。練習も、生徒会の仕事も……あたしはやる義務があるんです。これくらいの熱で――」
［フェルシア］：「はい、それ以上の異論は認めません」
［聖奈美］：「せ、先生……」
［フェルシア］：「私は保健の先生なのよ？　病人を治す義務があるの。今の聖奈美ちゃんを普通に学校生活に行かせたら、私の沽券に関わってくるわ。だから、今日は私の指示に従ってもらうわ」
［聖奈美］：「で、でも……」
［フェルシア］：「後で保健室に移動させて、そっちで治療をしましょう。完璧な病状が分かったわけじゃないしね」
［聖奈美］：「……」
［ダルク］：「お願い聖奈美、今日だけはゆっくり休んで」
［聖奈美］：「ダルク……」
［ダルク］：「お願い……」
［聖奈美］：「……」
［繭子］：「聖奈美ちゃーん、大丈夫～？」
［舞羽］：「杠さん」
［カホラ］：「聖奈美」

みんなは一斉に杠の周りを取り囲んだ。
そしてみんなに体調を気遣われ、ようやく休むことに同意してくれた。

聖奈美ルート・エックスプレッション（3）

［場所：保健室前］

［フェルシア］：「――吹雪くんの言った通り、疲労が大きな原因かもしれないわね」
［吹雪］：「やっぱり、そうですか」
［フェルシア］：「うん、体全体が重くなってるみたいだったわ。多分相当無理をして仕事と練習を両立してたんでしょう」
［吹雪］：「生徒会、今は忙しいって言ってましたからね」
［フェルシア］：「さらに、聖奈美ちゃんは生徒会長だし、責任も感じてたのかもね」
［吹雪］：「責任か……あいつらしいな」
［フェルシア］：「聖奈美ちゃんが休むことは、私から担任の先生には行っておいたわ。吹雪くんには悪いんだけど、生徒会員には吹雪くんが伝えておいてくれないかしら？　確か同じクラスだったわよね？」
［吹雪］：「はい、分かりました」
［ダルク］：「……」
［フェルシア］：「ダルクちゃん、そんな顔しないで。風邪くらい誰だって引くものよ」
［ダルク］：「でも、私がもう少し強く言っていれば、未然に対処できたかもしれないし……」
［吹雪］：「ダルクだけの責任じゃない。それは、俺も思ってることだ。でも、それはたらればでしかないだろう？　早くあいつの体調が治るようにできることだけのことをする。それが今の俺たちのすることだ。俺たちがしょげててもしょうがないさ」
［ダルク］：「吹雪……うん、そうだね」
［吹雪］：「今日は、杠の横に居てあげてくれ」

［ダルク］：「うん、分かった。……やることはいつも通りだけどね」
［吹雪］：「はは、そうだな」
［フェルシア］：「私も、しっかりと見てるから。心配しなくていいからね」
［吹雪］：「はい、時間があったら途中に顔を出しに来るかもしれません」
［フェルシア］：「ええ、吹雪くんならいつでも歓迎するから」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます。それじゃあ、俺は朝練に行ってきます」
［フェルシア］：「ええ、気を付けてね」
フェルシア先生が杜の看病をするってことは、今日は学園長と二人だけの練習か……ちょっと不安だな。

聖奈美ルート・エックスプレッション（4）

［場所：グランド］

［セフィル］：「――そうか、聖奈美が体調不良か」
［吹雪］：「はい。……昨日から少しおかしいと思ってたんですが……はあ……本人は大丈夫と言い張るんで……あまり口出しすることもできなくて……」
［セフィル］：「そうか、……随分話が途切れ途切れだな、吹雪よ」
［吹雪］：「……その件は、もういいんじゃないですか？」
［セフィル］：「飽きてしまったか？」
［吹雪］：「正直……後、それにツッコむのもキツイです」
［セフィル］：「そうか。なら新しいボケを考えておく必要があるな」
どうしても学園長は俺にツッコませたいんだろうか？
［セフィル］：「それにしても、無理を押して遂行しようとする辺り、聖奈美の性格がよく分かるな」
［吹雪］：「責任感が普通の人より何倍もありそうですからね」
［セフィル］：「それは長所でもあり、短所でもある。今回の体調不良がその証拠だろう」
［吹雪］：「もっと、はっきり言ってやったほうがよかったんですかね？　俺たち」
［セフィル］：「その兆候が見え隠れしていたのか？」
［吹雪］：「見え隠れというか、俺たちにはそれがはっきり見えてたんです。でも、あまり言いすぎるとプライドに傷が付くと思って……」
［セフィル］：「うむ、なるほどな」
［吹雪］：「考えたんですけどね、ダルクと一緒に……」
［セフィル］：「決して間違った選択ではないと思うぞ？　二人は

聖奈美の気持ちを尊重したかったわけなんだからな」
［吹雪］：「でも、止めていたらこういう状況も回避できたのかな、とか思って……」
先程ダルクと話したことを、学園長に問うてみる。
［セフィル］：「それは違うだろう。ひどいことを言ってるかもしれないが、体調を崩したのは聖奈美自身の責任だ。自分の体に負担をかけたから、今の状況に至っているわけだからな。吹雪が今言った理論が当てはまってしまったら、合同練習をすると言った私がほとんど悪いことになるぞ」
［吹雪］：「ああ、確かに……」
［セフィル］：「体調不良なんて、生きてれば必ずあることだ。ほんの少しの気の緩みで、引き起こすことだって度々ある。聖奈美は、そこに足元をすくわれたんだろう。でもそれは、誰にでもあることだ。吹雪だって風邪を引いたことくらいあるだろう？」
［吹雪］：「それはもちろん」
［セフィル］：「だったら、今何をするべきか、自然と答えは出てくるはずだ」
［吹雪］：「そうですね。ちょっと、視界が開けた気がします」
［セフィル］：「ならよかった。だがしかし、吹雪も聖奈美のようになるんじゃないぞ？　吹雪はすでに一回倒れているんだからな」
［吹雪］：「う……す、すいません」
［セフィル］：「まあ、だからこそ聖奈美に無理をさせたくないって思うんだろうがな」
［吹雪］：「心から、気を付けたいと思います」
［セフィル］：「分かればいいんだ。しかし、フェルがいないとなると、少々練習メニューを変える必要があるな」
［吹雪］：「俺は、言われたメニューをこなしますよ」
［セフィル］：「うむ、良い心がけだ。……形は大分できてきてるようだしな。とすると、今吹雪に必要なのは魔力を維持するスタミナか。つまり……よし、吹雪、今日はジョギングデーということに

しよう」
［吹雪］：「え？　じゃあ距離を伸ばすってことですか？」
［セフィル］：「うん、だがその変わり、少しペースは落とすとしよう。今のペースで距離を伸ばしたら、吹雪が戻ってこれなくなるかもしれないからな。それは回避しなければ」
［吹雪］：「あ、ありがたき配慮です」
［セフィル］：「ん？　ちょっと顔が引きつってないか？」
［吹雪］：「い、いえ、気のせいですよ、気のせい」
［セフィル］：「よし、ではそのままノンストップでしばらく走り続けるぞ」
［吹雪］：「は、はい……」
さっきの言葉、今から撤回なんてできないよな……覚悟を決めるしかなさそうだ。

聖奈美ルート・エックスプレッション（5）

［場所：教室］

［祐喜］：「――そっか、じゃあ聖奈美は今日は欠席ってことだね」
［吹雪］：「ああ」
［祐喜］：「うーん、ちょっと悔しいね。吹雪の言った通り、誰も悪くないのは確かなんだけど」
［吹雪］：「ああ、単なる不幸にすぎない」
［祐喜］：「言う勇気っていうのも、今後は必要になってくるかもね。……あ、ダジャレではないからね」
［吹雪］：「大丈夫だ、分かってる」
［祐喜］：「とにかく、後輩たちには僕が伝えておくよ」
［吹雪］：「ああ、よろしく頼む」
［祐喜］：「これくらい、どうってことないさ」
［吹雪］：「助かるぜ、本当なら、生徒会の手伝いに行きたいんだが……」
［祐喜］：「いいんだよ、そんなの。吹雪は吹雪のやることを優先してよ。というか、元々吹雪は生徒会員じゃないから責任を感じる必要はこれっぽっちもないんだよ？　むしろこっちがいつも手伝わせてごめんって感じだよ」
［吹雪］：「そうか？」
［祐喜］：「そうだよ、吹雪は自分の役目を全うしなきゃ。ね？」
今日の俺の役目というのは、杠の代わりの夕飯作りだ。舞羽やカホラ先輩がやってくれると言っていたんだが、二日連続で調理をさせるのは負担がかかると思い、俺が買って出た。俺の夜の練習は、みんなと違って清聴するだけだからな、負担は軽い。
［祐喜］：「それにしても吹雪の料理か、ちょっと気になるね」
［吹雪］：「舞羽たちから比べたら、全然たいしたことないんだけ

どな」

［祐喜］：「それは彼女たちは得意としてるからね。でも、男子でもそれなりに作れるっていうのは結構ポイントが高いんじゃないかな？」

［吹雪］：「でも、結構食材の切り方とかは雑だぜ？　そもそも揃える気もあまりないし」

［祐喜］：「それでも、美味しければ問題ないよ。いつか、吹雪の料理を食べさせてほしいね」

［吹雪］：「じゃあ、祐喜も作ってきてくれよ。食い比べでもしてみるか？」

［祐喜］：「はは、それはおもしろそうだね」

［愛海］：「……お弁当の交換？　やっぱり……ふふ、これは――」

［祐喜］：「――聞こえてるよ？　日野さん」

［愛海］：「え？　あ……え？　何、が？」

［祐喜］：「ここで変な噂を流さないって約束してくれれば、僕も手荒なことをしなくて済むんだけど、お願いできないかな？」

［愛海］：「す、するわけないわよ～、人聞き悪いわねー、芳田くんは」

［祐喜］：「そうだよね？　よかった」

［吹雪］：「……」

やはり、祐喜は優れた実力者だな。

［祐喜］：「そんなことより、行かなくていいのかい？　吹雪」

［吹雪］：「ん？」

［祐喜］：「保健室、様子を見て来るって言ってなかったかい？」

［吹雪］：「ああ、そうだな」

俺が休むように言ったわけだし、ここは顔見せに行かないと。

［吹雪］：「じゃあ、ちょっと行ってくるぜ」

［祐喜］：「うん、頑張って」

聖奈美ルート・エックスプレッション（6）

［場所：保健室］

――そして保健室。

［吹雪］：「失礼します」

ノックと断りを入れ、俺は入室した。

［フェルシア］：「あら、いらっしゃい、吹雪くん」

［吹雪］：「さっきぶりです、フェルシア先生」

先生は笑みを浮かべると、何も言わずに杠の場所を教えてくれた。

杠は端のベットで窓の方を眺めている。

［フェルシア］：「私、席外そうか？」

［吹雪］：「え、いや、別に……」

［フェルシア］：「いいからいいから、少しの間。私がいたらしゃべりづらいこととかあるでしょう？」

［吹雪］：「え、ええ？」

［フェルシア］：「あ、フェルシア先生」

……気を遣ってくれたのか、それとも本人が抜けたいことがあったのか良く分からないテンションだった。先生のことも考えて、ここは気を遣ってくれたことにしておこう。

俺は気を取り直し、杠の所へと向かった。

［吹雪］：「どうだ？　杠、少しは良くなったか？」

［聖奈美］：「……」

杠は俺のことをチラっと見た後、また目線を元に戻した。

［吹雪］：「おい、杠」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「無視するなんて、子供っぽいぞ」

［聖奈美］：「だ、誰が子供よ！　……」

［吹雪］：「何だよ、声が出なくなったのかと思った」

［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「何だよ、怒ってんのか？　お前」
［聖奈美］：「……あなたのせいで、一日を棒にするハメになったんだから、言わなくたって分かるでしょう」
［吹雪］：「それは確かに悪いと思うが、俺は間違ったことをしたとは思ってないぞ。倒れるのは、俺一人で十分だからな」
［聖奈美］：「別に、倒れることなんてなかったわよ」
［吹雪］：「朝方、足元ふらつかせて立てなかったのは誰だよ？」
［聖奈美］：「あれは……寝起きで足に力が入らなかっただけよ」
［吹雪］：「今さら理由を言ったって、休んでもらうことに変わりはないぞ」
［聖奈美］：「わ、分かってるわよ、そんなこと……」
［吹雪］：「……本当のところ、自分の体調が悪いことは知ってたんじゃないのか？　お前」
［聖奈美］：「……そんなこと聞いてどうするのよ？」
［吹雪］：「別に、特に理由なんてない」
［聖奈美］：「……分からないわけないわ、自分の体のことだもの、体が弱ってることぐらいすぐに認識できるわ。だけど、あたしは仕事を休みたくなかった」
［吹雪］：「どうして？」
［聖奈美］：「言わなくたって分かるでしょう？　あたしは生徒会長なの。みんなを引っ張って行かなきゃならないの、今が一番忙しい時期なのに、そんな時に休んでいたら、みんなに迷惑をかける。ピアノのことも一緒よ、あたしはピアノに選んでもらった、それなりの努力をして当然のはず。その大事な時に、休んでる暇なんてあるわけないわ。体力の続く限り、あたしは頑張る必要があるのよ」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「なのに、そんな時にこんな風に足踏みをすることになるなんて……自分が憎いわ。どうしてあたしは、もっと頑張れなかったのか……まだまだあたしは未熟ってことね」

［吹雪］：「……確かに、お前は未熟かもしれないな」
［聖奈美］：「っ！？」
［吹雪］：「頑張るのは確かに良いことだ、でも、頑張ることと無理をするのは別問題だ。……ぶっ倒れた俺が言えたことじゃないと思うが俺はそう思う」
［聖奈美］：「だから、何だって言うのよ？」
［吹雪］：「杠はさ、自分がやらなくてはって思ったりしてないか？」
［聖奈美］：「自分で？」
［吹雪］：「言い方を変える、一人で頑張ろうとしてないか？」
［聖奈美］：「当たり前じゃないの、あたしが頑張らなくちゃ、みんなに申し訳ないし、みんなに迷惑をかけかねない。そんな風になるのは嫌じゃない」
［吹雪］：「その考え方、俺は間違ってると思うぞ」
［聖奈美］：「な、何であなたにそんなことを言われなくちゃいけないのよ」
［吹雪］：「俺は思ったことを言ってるだけだ。別に諭そうとしてるわけじゃない。でも、生徒会長だとしたら、一生徒の意見は聞いてみたほうがいいんじゃないか？」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「杠の言いたいことは俺も分かってるつもりだ。お前が身を粉にして頑張りたいっていう気持ちも分かる。でもだ、自分が休んだら周りに迷惑がかかるというのは、それはちょっとおかしいと思うんだ。その理論でいくと、自分以外は敵みたいなことになってしまわないか？」
［聖奈美］：「そんな風に思ったことなんてないわよ……」
［吹雪］：「ちょっと極端だったな。じゃあ質問を変える。杠は、どうして頑張りたいんだ？」
［聖奈美］：「今度は何なのよ？」
［吹雪］：「そのままの意味さ、杠はどうしてそんなに頑張ろうと

思うんだ？」
［聖奈美］：「そんなの決まってるでしょう？　学校のためにも、この島のためにも、みんなが住みよい生活を送れるようにしたいからよ」
［吹雪］：「だから、お前は頑張ってるわけだ。でもさ、それは一人で頑張ってできることではない、違うか？」
［聖奈美］：「どういうこと？」
［吹雪］：「一人で頑張る必要はないんじゃないかってことさ」
［聖奈美］：「一人で、頑張る必要はない？」
［吹雪］：「自分一人が頑張れば解決する問題じゃない。お前と同じような考えを持ってる仲間が周りにいるだろう？　生徒会員はお前だけじゃない、ピアニストだってそうだ。そういう仲間と手をつないで頑張って初めて、それは解決されるんじゃないのか？」
［聖奈美］：「……でも、あたしが休んだらその分の進行が遅れるのは事実よ。迷惑、かけてるじゃないの」
［吹雪］：「誰も迷惑だなんて思ってない」
［聖奈美］：「思うわよ、こんな大事な時期に休んで……足引っ張りもいいところよ」
［吹雪］：「本当にそう思うのか？　お前は」
［聖奈美］：「だって……」
［吹雪］：「だとしたらお前は、みんなの想いを踏みにじってるぞ？」
［聖奈美］：「っ！？」
［吹雪］：「どうしてみんなは、お前に休めと言ったと思う？　無理をするなって言ったと思う？」
［聖奈美］：「倒れられたら困るから……」
［吹雪］：「もっと、大きなことがあるだろう？」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「お前を、仲間だと思ってるからだよ」
［聖奈美］：「仲間だと？」

［吹雪］：「ああ、そうだ。みんなお前のことが心配だから、お前の体を気遣ってるんだよ。みんなお前のことを、大切に思ってるんだよ」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「単純に考えてみろよ、お前は嫌いな奴と一緒に行動したいなんて思うか？」

杠は首を横に振った。

［吹雪］：「そうだろう？　みんなお前のことが好きだから、早く戻ってきてほしいからそう言うんだよ。その気持ちに答えるためにも、お前は元気な姿で戻ってこなくちゃいけない、そうだろう？」

［聖奈美］：「あたしのために……」

［吹雪］：「そうだ、みんなお前のことを気にかけてるんだよ。大事な仲間なんだよ」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「信じるか信じないかは、お前次第だけどな」

［聖奈美］：「……こんなことをあたしに言ったのは、あなたが初めてよ」

［吹雪］：「不味かったか？」

［聖奈美］：「……ちょっと、考えてみるわ。いい機会だし、一度、自分と向き直ってみる」

［吹雪］：「そうだな、俺もそうしたほうがいいと思う。……さて、そろそろ俺は戻るか、お邪魔して悪かったな」

［聖奈美］：「え、ええ」

［吹雪］：「じゃあ、また後でな」

［聖奈美］：「……あ、ちょっと待って」

［吹雪］：「ん？」

［聖奈美］：「……どうしてあなたは、あたしにこんなことを言ったの？　これはあなたの問題じゃないはずなのに」

［吹雪］：「何言ってんだよ、仲間の問題は、俺の問題でもあるに決まってるだろう」

［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「じゃあ、また来るからな」
ガチャリ。……随分とクサい台詞を残してしまったが……まあいいか。俺の言いたかったことが伝わっていればいいんだが。
［吹雪］：「おっと、チャイムだ」
早く戻った方がよさそうだ。

聖奈美ルート・エックスプレッション（7）

［場所：保健室］

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「……あ、ちょっと待って」

［吹雪］：「ん？」

［聖奈美］：「……どうしてあなたは、あたしにこんなことを言ったの？　これはあなたの問題じゃないはずなのに」

［吹雪］：「何言ってんだよ、仲間の問題は、俺の問題でもあるに決まってるだろう」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「じゃあ、また来るからな」

ガチャリ。

［聖奈美］：「仲間の問題は、俺の問題……」

大久保は、あたしのこと、仲間だと思ってたんだ。本当に、おかしな男よ……最初あんな風な出会い方をしたのにも関わらず……あたしを仲間だなんて……。毎回、あの男には調子を狂わせられる。でも……。

［聖奈美］：「本当にみんな、あたしのことをそんな風に……」

こんな性格だから、みんなに優しい言葉をあまりかけることができない。それでも、大久保はみんな、あたしのことを思ってると言っていた。

［聖奈美］：「信じて、いいのかな？　あの言葉」

――あたしはしばらく考えていた。

【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・エックスプレッション（8）

［場所：家庭科室］

――よし、手も洗って消毒もした。食材、調理器具も用意した。なるべく美味い料理を作る気持ちも十分にある。

［吹雪］：「それじゃあ、調理開始するぞ」

一人で勝手にスタートの合図をする、特に理由なんてない、その場のノリだ。

その直後だった。

［ダルク］：「吹雪ー」

［吹雪］：「ん？」

ドアの向こうにダルクが浮いていた。俺はドアを開いてやる。

［ダルク］：「ごめんね、一人じゃ開けられないから」

［吹雪］：「気にすんな、どうしたんだ？」

［ダルク］：「うん、吹雪の調理を手伝おうと思って」

［吹雪］：「俺の調理を？」

［ダルク］：「うん。厳密に言うと、聖奈美にそれっぽいことを言われたんだけどね」

“

［聖奈美］：「ダルク、気持ちは嬉しいけど、ずっとあたしの傍にいなくてもいいわよ？」

［ダルク］：「え？　急にどうしたの？」

［聖奈美］：「今日は朝からずっと一緒に居てくれたから、ダルクのやりたいことできてないでしょう？　だから、その時間をあげようと思って」

［ダルク］：「そんな、私のしたいことは聖奈美の傍にいることだよ」

［聖奈美］：「でも、ほら……ダルク、大久保と仲が良いでしょう

？　いつも楽しそうに笑ってるし、あいつもダルクとしゃべりたいと思ってるんじゃないの？」
［ダルク］：「確かに吹雪とは仲が良いけど」
［聖奈美］：「じゃあ、少し顔出してきなさい。じゃないとあいつが悲しむかもしれないでしょう」
［ダルク］：「そ、そお？」
［聖奈美］：「ええ、ちょっと、考えたいこともあるし」
［ダルク］：「……うん、分かった」

“

［吹雪］：「なるほどな」
［ダルク］：「そういうわけで、私に手伝わせてほしいな。聖奈美の手伝いをよくしてるから、多少の戦力にはなると思うよ」
［吹雪］：「そんなこと言われたら、一緒にやってもらいたくなるな。よし、採用だ」
［ダルク］：「えへへ、やった」
［吹雪］：「とりあえず、手を洗えよ」
［ダルク］：「はーい」
ダルクは器用に蛇口を回して水を出し、手を洗い始めた。
［吹雪］：「――どうだ？　あれから杠の調子は？」
［ダルク］：「うん、朝よりは熱も下がって、顔色も結構良くなってきてる。フェルシア先生にもらったお薬が良く利いてるのかもしれない」
［吹雪］：「そりゃよかった」
治ったらフェルシア先生にお礼を言わないとな。
［吹雪］：「熱は何度だった？」
［ダルク］：「さっき測った時は、３７度６分だったみたい」
［吹雪］：「確かに良い感じに下がってきてるな」
［ダルク］：「汗も一杯かいてるみたいだし、この分だと明日には良くなるかもしれない」
［吹雪］：「そうだとしたら、嬉しい限りだ。元気な姿を見せてく

れるといいが」

［ダルク］：「うん、本当に」

［吹雪］：「よし、じゃあ早速調理に移るか。ダルクにはちょっとやってほしいことがある」

［ダルク］：「うん、できることなら何でもするよ」

［吹雪］：「助かるぜ」

……。

聖奈美ルート・エックスプレッション（9）

材料と睨めっこをした結果、今日は鶏汁と鶏肉のあんかけを作ることにした。どうして豚汁ではないのか、それは鶏肉が多めに余っていたからだ。作り方は豚汁とほとんど同じだ。まずは材料を切っていくことにする。その間、ダルクには調味料を目安毎に分けてもらうようにお願いした。

［ダルク］：「ちょっと、聖奈美の話をしてもいいかな？」

［吹雪］：「ん？　ああ、いいぞ」

お互いに、手を動かしたままで。

［ダルク］：「まず、吹雪にお礼を言いたいんだ」

［吹雪］：「お礼？　お礼されるようなことしたか？　俺」

［ダルク］：「したよ、昼休みの時、聖奈美に大事なことを教えてくれたでしょう？」

［吹雪］：「あれ？　あの時ダルクはあの場にいなかった気がするんだが……」

［ダルク］：「ああ、そのことなら――それ！」

［吹雪］：「――っ！？　あ、おい」

ダルクは掛け声とともにすっと姿を消した。

［ダルク］：「――はいっと」

しかし、数秒後にまた元に戻った。

［ダルク］：「こんな感じで、私は自分の姿を自由自在に出たり消したりすることができるの。普段はあんまり使わないんだけどね」

［吹雪］：「ダルクはそんな力も持っていたのか、さすがは使い魔だな」

［ダルク］：「そ、そんなことはないけど」

［吹雪］：「……ん？　でも、姿を消すことができるんなら、別にドアを開けなくてもすり抜けることができるんじゃないのか？」

［ダルク］：「……あ」

どうやら今まで気づかなかったらしい。
［ダルク］：「意外な所に盲点があったね」
［吹雪］：「まあ、気付けてよかったじゃないか。今後に活かせよ」
［ダルク］：「うん。それで、さっきの話だけどその力を使ってこっそり吹雪の話を聞いてたんだ。何だか、入るのが申し訳ない空気だったから」
［吹雪］：「まあ確かに、真剣な話だったからな」
［ダルク］：「あの話の後からかな、ちょっと聖奈美の様子が変わったんだ。何て言うんだろう、肩の重荷が取れたみたいな、すごくスッキリしたような顔になった気がするの。多分、吹雪の言葉が、聖奈美に良い影響を与えたんだと思う」
［吹雪］：「俺は、本当のことを言っただけなんだけどな」
［ダルク］：「でも、そういうのは思ってもなかなか言うことができないものだから。特に聖奈美に対しては」
［吹雪］：「全生徒の代表者みたいなものだからな、位置的に」
［ダルク］：「普段の生活を見てもね、聖奈美はいつも教える立場にいるから、どうしてもはっきりと言ってくれる人はいないんだ。みんな、聖奈美には欠点がないって思ってるのかもしれない。でも、本当の聖奈美は、他のみんなと変わらない、普通の女の子なんだよ。ちょっと責任感が強すぎるだけでね」
［吹雪］：「それが、あいつの良いところでも悪いところでもあるんだけどな」
［ダルク］：「うん、だから吹雪があしして言ってくれたことは、聖奈美にとって良いことなんだと思う」
［吹雪］：「だといいんだけどな。余計に気分を重くしちまったらどうしようかとも思ってたけど」
［ダルク］：「全然そんなことないよ。聖奈美のことを、大事に思ってくれて嬉しいよ、私」
［吹雪］：「はは、よせよ。照れちまうぜ」
［ダルク］：「……吹雪にだったら、聞いてももらってもいいのか

な？」

［吹雪］：「何をだ？」

［ダルク］：「聖奈美の家のこと。本人の口から聞いたことはないよね？」

［吹雪］：「そういえばそうだな」

最近あいつと一緒にいる機会は増えたが、あいつは特に自分のことを語ろうとはしなかったな。

［吹雪］：「でもいいのか？　そんなこと勝手に聞いたら、杠に怒られるんじゃ？」

［ダルク］：「その時は、私が何とかするよ。吹雪なら、聖奈美のことをよく理解してくれると思うから」

……そうだな、あいつともっと親しくなるには、聞いておいたほうがいいことかもしれない。

［吹雪］：「じゃあ、教えてもらおうかな？　――とその前に、材料を全部鍋に入れちまおう。下ごしらえは完了したからな」

［ダルク］：「あ、うん、こっちも終わってるよ」

バケットに綺麗に調味料が並べられている。

［吹雪］：「サンキュー」

具材と水を入れ、沸騰するまでしばらく待つ。

［吹雪］：「よし、しばらくはこれでいい。話、続けてくれ」

［ダルク］：「あ、うん。どうして、聖奈美があんなに責任を重んじる性格になったかっていうと、多分聖奈美の実家のことが関係あると思うんだ。実を言うと聖奈美の家は、由緒正しい財閥の家系なの」

［吹雪］：「……なるほど」

［ダルク］：「あれ？　思ったより驚かないんだね」

［吹雪］：「いや、何となくそんな気がしていたというか……そういう雰囲気が体から出ていたというか、そんな感じだ」

そう言った何かを持っている予感はあった。確信は持てなかったけど。

聖奈美ルート・エックスプレッション（１０）

［ダルク］：「そういうのって、感じ取れるものなんだね」
［吹雪］：「たまたまだと思うけどな」
［ダルク］：「そっか。――聖奈美のお父さんは、その財閥の社長として今も活躍してる人なんだ。そういう人って、何となく怖いイメージがあるかもしれないけど、聖奈美のお父さんはそういう感じの人じゃなくて、本当に聖奈美のことを大事に思ってる優しいお父さんなんだ」
［吹雪］：「そうなのか。テレビとかで見る頑固一徹な父親ってわけではないんだな」
［ダルク］：「うん、すごく優しくて良い人だよ。ひょっとしたら、聖奈美とは逆のタイプの人かもしれないね」
［吹雪］：「それは、ちょっと意外だな」
杠の父さんであれば、頑固一徹でもおかしくないと思ってただけに、ちょっと驚きだ。
［ダルク］：「でも……多分その優しさが、聖奈美が責任を重んじる性格になったこととつながってくるかもしれない」
［吹雪］：「ん？　どうしてだ？」
［ダルク］：「吹雪は、この学園で聖奈美と知り合ったんだよね？」
［吹雪］：「そうだな」
［ダルク］：「聖奈美は、昔から人前で話したりすることがよくあってね、何をするにしてもお手本のような感じで発表をしてたんだ。私が聖奈美の使い魔になった頃には、すでにそんな感じだった」
俺はうなずいて返す。
［ダルク］：「はっきり聖奈美がそう言ってたわけじゃないんだけど、聖奈美のことだから、立派に育ててくれたお父さんのために、しっかりとした人間になりたいって考えたんじゃないかって思うんだよね」

［吹雪］：「……杠なら、そう考えるかもしれないな」
その様子が簡単に思い浮かべられる。
［ダルク］：「ああ見えて、結構聖奈美は甘えん坊の一面もあってね。お父さんの前だといつもにこにこ笑いながら話をするんだ。財閥の社長ってこともあって、あまり家に帰ってくることもできないから、一緒にいれる時間を大事にしてるんだと思う」
［吹雪］：「常に笑っている、か……それはちょっと想像つかないな」
［ダルク］：「学園では、そういう姿を見せないからね」
［吹雪］：「お父さんの前でだけ見せる表情か」
その姿、ちょっと見てみたい気がする。
［ダルク］：「大好きなお父さんのために、自分には何ができると言ったら、お父さんに負けないくらい立派な人間になる――そういう考えを持つのは、別に不思議ではないよね」
［吹雪］：「ああ。両親にとっては最高の恩返しだからな」
［ダルク］：「その考え自体はすごく良いと思うんだけど、最近はそれが行き過ぎちゃってるっていうか……『なりたい』って想いよりも、『ならなければいけない』にすり替わってきちゃってたんだと思う」
［吹雪］：「それが、最近のあれか」
［ダルク］：「うん」
そう言われれば、確かに納得がいくかもしれない。
［ダルク］：「吹雪、聖奈美との出会いは覚えてる？」
［吹雪］：「もちろん覚えてるさ、鮮烈な出会いだったからな」
［ダルク］：「あの時の聖奈美、『自分は一番でなくちゃいけない』みたいなことをよく言ってたでしょう？　あれもきっと、今言ったことが原因だったんだと思うんだ」
［吹雪］：「つまり、『一番にならないと、立派ではない』って思いこんでたと」
［ダルク］：「うん、私の推測だけどね」

［吹雪］：「的は得てると思うぞ。ダルクの言った通り、それは行き過ぎてると思うけどな」
［ダルク］：「そうだね。今回の、風邪を引いてでも仕事をするって言ってたのも一緒で、気持ちばっかり先に行っちゃってたんだよ」
［吹雪］：「夢だったものを、知らないうちに必至に変えちまったんだな」
［ダルク］：「そうかもしれない。――でも、最近の聖奈美は、少し丸くなってきたって、私は思うんだ」
［吹雪］：「そうなのか？」
［ダルク］：「うん、吹雪のおかげでね」
［吹雪］：「ん？　俺」
［ダルク］：「そう、吹雪のおかげ」
［吹雪］：「……特に何かした覚えがないんだけど」
［ダルク］：「吹雪と出会って、吹雪と関わったことが、聖奈美に良い影響を与えてるんだよ」
［吹雪］：「……悪い影響しか与えてないような気が」
［ダルク］：「そんなことないよ。私、ずっと横で見てきたんだもん」
　偉く自信を持った発言だ。
［ダルク］：「マジックコロシアムが終わった後、吹雪は聖奈美に声をかけに来てくれたでしょう？　その時吹雪は、聖奈美の実力を認めてくれたよね」
［吹雪］：「まあ、かなり追い込まれたし、実力をまざまざと見せつけられたからな。言わざるを得なかったよ」
［ダルク］：「自分が一番って決めつけないで、聖奈美の実力を素直に認めてくれた。その頃から、聖奈美はちょっとずつだけど、絶対に一番にならなくてもいいんじゃないか？　って考えを持ち始めたと思う。どんなことでも、一番になることが全てじゃないはずだからね」
［吹雪］：「それは言えてるな」

［ダルク］：「そういう想いを聖奈美の中に芽生えさせたのは、吹雪なんだよ」
［吹雪］：「……俺が？」
［ダルク］：「うん」
満面の笑顔で。そんな顔をされては、何も言い返せなくなる。

聖奈美ルート・エックスプレッション（11）

［吹雪］：「正直、自分ではそうは思えないけど、杠には良い影響を与えてるっていうなら、それはそれでいいことなんだよな？」
［ダルク］：「うん、とっても」
［吹雪］：「だとしたら俺は、今まで通りに杠と接していればいいわけか」
［ダルク］：「そうしてくれると、私も嬉しいな。多分、聖奈美も嬉しいと思う」
［吹雪］：「そうか？」
［ダルク］：「うん、何だかんだ言って、聖奈美は結構吹雪のことを認めてるはずだし」
［吹雪］：「そ、そうなのか？」
［ダルク］：「うん」
［吹雪］：「……結構、怒らせたりしてると思うんだが」
［ダルク］：「そんなことないよ」
［吹雪］：「でも、他の女子たちより手厳しい言葉をもらうぜ？」
［ダルク］：「それはあれだよ、吹雪の力を引き出してあげようとしてるんだと思う。聖奈美だって女の子だから、異性を簡単に褒めることはできないんじゃないかな？」
［吹雪］：「厳しい言葉は、あいつなりの励ましってことか？」
［ダルク］：「そう、そんな感じ」
［吹雪］：「……そう解釈していいのか？　本人の了承をもらってないけど」
［ダルク］：「うん、私が許可します」
使い魔の許可は、本人に匹敵する……そう捉えて解決としよう。
［ダルク］：「――吹雪はさ」
［吹雪］：「ん？」
［ダルク］：「吹雪は、聖奈美のことってどう捉えてる？」

［吹雪］：「杠のこと？」
［ダルク］：「うん。多分最初は『何だコイツ？』って思っただろうけど、実際に……こういう風に合宿を一緒にしてみて、何かちょっと印象が変わったとことかない？」
［吹雪］：「杠のことか……」
言われてみれば、あまり深く考えたことはなかったな。というか、考えたらすぐに分かられてしまうと思っていた。そういうところ、鋭いだろうからな。
［吹雪］：「出会いに関しては、ダルクの言ったことと全く同じだな。急に喧嘩を売ってくるとは随分勝気な奴だって思った。でも……そういう印象を持った後に、こうして生活すると、想像してたよりは、普通の女性なんだなって感じたな」
それこそ前回のメガネ探しなんてそうだ。普段は見ることができない一面を垣間見れた。
［吹雪］：「はっきりと事実を認めようとしない辺りは、最初の印象通りだけどな」
［ダルク］：「聖奈美だから、そればかりはしょうがないかな」
［吹雪］：「はは、違いない」
［ダルク］：「……ちょっと、変なこと聞いていいかな？」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［ダルク］：「その……聖奈美と一緒にいて、辛いってことはないよね？」
［吹雪］：「辛い？」
［ダルク］：「うん、言葉通りに捉えてくれると」
［吹雪］：「もちろん、そんなことはないぜ。辛いことを我慢できる性格じゃないし、そうだとしたら俺より先に杠がダルクに言ってるだろう」
［ダルク］：「そっか」
［吹雪］：「心配しなくていいぜ、その辺は」
［ダルク］：「ありがとう、吹雪」

［吹雪］：「お礼を言われるようなことはしてないぜ。……お、煮立ってきたな。そろそろ味付けに入るか？　杠の話は、それくらいか？」
［ダルク］：「あ、うん。こんなところかな」
［吹雪］：「話してくれて助かったよ、あいつのこと、少し分かった気がする」
［ダルク］：「他にも何かあったら、聞いてくれていいから」
［吹雪］：「ああ、サンキュー。――よし、じゃあダルクには次の仕事をお願いするか」
俺たちは、夕飯作りを再開した。

聖奈美ルート・エックスプレッション（12）

［繭子］：「それじゃあ、いただきまーす」
［三人］：「いただきます」
三人は料理に箸を付け、口に運んでいく。俺はその様子を、じっと見守る。味付けは、確認もしたから大丈夫だと思うが、やはり少し緊張する。
［繭子］：「はぐ、はぐ……ん、んむ……」
［舞羽］：「もぐもぐ……」
［カホラ］：「もぐもぐ……」
［吹雪］：「ど、どうかな？　味は？」
［舞羽］：「うん、すごく美味しいよ。吹雪くん」
［カホラ］：「ええ、想像以上だったわ」
［繭子］：「んむ……はぐはぐ……美味しい……」
［舞羽］：「繭さんなんて、美味しすぎてしゃべるのも惜しそうだよ」
［吹雪］：「家でもあんな感じだからな。でも、二人に美味いって言ってもらえるのはかなり嬉しいな」
［カホラ］：「具材も生煮えじゃないし、味付けも間違ってないもの。これなら普通に振る舞えるわ」
［吹雪］：「あんまり、アレンジとかはできなかったですけどね」
［カホラ］：「そういうのは熟練になってからでいいのよ。正確に作れて初めて一人前になるんだから」
［吹雪］：「なるほど」
［カホラ］：「自信持っていいわよ、ふふ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［舞羽］：「吹雪くん、コンニャクは手でちぎって煮込むと味が染みこみやすくなるから、次作る時に試してみるといいよ」
［吹雪］：「なるほど、そんな小技があるのか」

［舞羽］：「手でちぎったほうが、お出汁に浸る体積が増えるから、その分染みこむんだ」
［吹雪］：「……言われてみれば、舞羽が俺の家で料理作ってた時に、そんな光景を見たことがあるような」
［舞羽］：「確かに、何度かあるかもね。煮物とか作ってる時に」
［吹雪］：「チクショー、調理中に思い出すことができなかったぜ……」
［舞羽］：「そんな悔やむことじゃないよ。次に忘れなければいいじゃない」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
［繭子］：「あむ、……ん、ふーちゃん、おかわり～」
［吹雪］：「あーはいはい、どっちだ？　飯か？　鶏汁か？」
［繭子］：「もちろん、どっちも～」
［吹雪］：「ああ、分かったよ」
よく食うなとは思うが、自分が作ったものをたくさん食べてもらうのは、やっぱり嬉しいもんだ。
［ダルク］：「よかったね、吹雪」
［吹雪］：「そうだな、あむ……」
ようやく安心して、俺も料理に手を伸ばす。
［舞羽］：「あれ？　ダルクちゃんは食べないの？」
［ダルク］：「あ、私は後で。聖奈美と一緒に食べるから」
［舞羽］：「あ、そうなんだ」
「これ食い終わったら、あいつの所に持ってってやるつもりなんだ。一緒に食いたいって言うからよ」
［舞羽］：「うん、それがいいね。杠さんも喜ぶよ」
［カホラ］：「洗い物は私たちがやっておくわ、吹雪は料理を運んであげなさい」
［吹雪］：「え？　いいんですか？」
［カホラ］：「料理担当じゃないのにやってくれたんだもの。洗い物くらいさせてもらわないと、三人いればすぐに終わるわ」

［吹雪］：「じゃあ、お言葉に甘えて。お願いします」
［カホラ］：「どういたしまして」
［繭子］：「ふーちゃん、おかわり～」
［吹雪］：「い、今さっきおかわりしたばかりじゃなかったか？」
［繭子］：「美味しいから箸が進んじゃうんだもん～」
さすが、マユ姉だ。胃袋が尋常じゃない……。
……。

聖奈美ルート・エックスプレッション（13）

［場所：保健室］

［吹雪］：「ダルク、ノックしてくれないか？」
［ダルク］：「了解」
俺の代わりにドアを二回叩いてくれる。
［フェルシア］：「はーい」
［吹雪］：「吹雪です、夕ご飯持ってきました」
［フェルシア］：「あ、吹雪くん？　待ってね、今開けるわ」
声がして数秒後、ドアが開かれた。
［フェルシア］：「ありがとね？　重かったでしょう？」
［吹雪］：「いえ、これくらいどうってことないです」
杠は昼間と同じ場所でベッドに寄りかかっていた。
［吹雪］：「夕飯持ってきたぜ？　杠」
［聖奈美］：「え、ええ、ありがとう」
そう言って、杠は靴を履いてこっちにやってきた。
［吹雪］：「大丈夫なのか？　歩いて」
［聖奈美］：「一日安静にしてたのよ？　ほぼ完治したようなものだわ」
［フェルシア］：「今熱を測ったら、37度2分まで落ちてたから、もう一度お薬を飲んで今日一日ぐっすり眠れば、明日には熱が引いてると思うわ」
［ダルク］：「よかった……」
心底安心したような表情を浮かべるダルク。
［聖奈美］：「悪かったわね、心配かけて」
［ダルク］：「ううん。元気な姿に戻ってくれれば、それでいいよ」
［聖奈美］：「ええ、約束するわ。……その、大久保にも言っておくわ、その……迷惑かけて悪かったわ」

［吹雪］：「さっき言っただろう？　迷惑だなんて思ってねぇよ。でも、回復してたみたいで俺も安心した」
［聖奈美］：「あ、あなたも体調崩さないように気をつけなさいよ？」
［吹雪］：「ああ、大丈夫だ」
［ダルク］：「聖奈美、一緒にご飯食べようよ。今日は吹雪が作ってくれたんだよ？」
［聖奈美］：「お、大久保が！？」
［フェルシア］：「あら、まあ」
［吹雪］：「ず、随分驚くじゃないか？」
［聖奈美］：「じょ、冗談じゃなかったのね……祐喜が言ってたことは」
［吹雪］：「祐喜、保健室に来たのか？」
［聖奈美］：「ええ、放課後に顔出しに。生徒会メンバーも一緒だったわ」
［吹雪］：「よかったじゃねぇか」
［聖奈美］：「え、ええ」
［フェルシア］：「――そろそろ夕ご飯食べましょう。折角の料理が冷めてしまうわ」
［聖奈美］：「あ、はい。そうですね」
二人は向かい合って席に座った。そして、聖奈美の横にダルクがちょこんと腰を下ろす。
［吹雪］：「舞羽たちみたいに上手じゃないですけど、頑張って作りました」
［フェルシア］：「見た目は、すごく綺麗だと思うわよ。後は、味付けね」
［ダルク］：「みんな美味しいって言って食べてましたから、何も心配ないと思います」
［フェルシア］：「なら、安心して食べれるわね。――いただきます」

［聖奈美］：「い、いただきます……」
フェルシア先生は普通に、杠はややおっかなびっくりと言った感じで鶏汁に口をつけた。舞羽たちに背中を押してもらってはいるが、やっぱりこの一瞬は緊張が伴う。
［フェルシア］：「――うん、すごく美味しいわ」
［吹雪］：「あ、本当ですか？」
［フェルシア］：「ええ、とっても良い味よ。味加減もちょうどいいわ。聖奈美ちゃんもそう思うでしょう？」
［聖奈美］：「……」
杠は口を離し――。
［聖奈美］：「……うん、美味しいです」
その言葉を聞くことができ、俺は一気に肩の荷が下りた気がした。
［聖奈美］：「ど、どうしたのよ急に」
［吹雪］：「いや、ちょっと力が抜けちまった……」
［フェルシア］：「ふふ、どんな反応されるか不安だったの？」
［吹雪］：「いつも食わせる相手はマユ姉くらいでしたから、こんな風に身内以外に振る舞うことはほとんどないから……」
［フェルシア］：「すでに言われたことかもしれないけど、他の主婦と比べても見劣りしないと思うわよ」
［吹雪］：「そ、そんなたいしたものじゃないですけど……そう言ってもらえるのは嬉しいです」
［フェルシア］：「……うん、こっちのあんかけも美味しいわ。素材の味も出てる」
［ダルク］：「あむ……美味しいよ、吹雪」
［吹雪］：「何度もありがとよ」
［聖奈美］：「あなた、こんなこともできたのね」
［吹雪］：「上手とは言い難いけどな。でも、俺とマユ姉の二人暮らしだし、多少できないと生活できないからな。でも、切り方とかは結構適当だぜ」
［聖奈美］：「コツを掴めば、切り方なんてすぐに覚えられると思

うわよ」
［吹雪］：「じゃあ、今度教えてくれよ。俺でも覚えられるんだろう？　そのコツは」
［聖奈美］：「ま、まあ……会得したいって思い次第かしらね」
［吹雪］：「……じゃあ、やっぱり教えてもらいたいもんだ。こういう場が再び訪れた時に、成長していたいからな」
［聖奈美］：「か、考えておくわ」
――実際に見た感じ、昼よりも体調は良くなっているようだ。フェルシア先生が言っていたように、明日には復活できているかもしれないな。
……。

聖奈美ルート・エックスプレッション（１４）

［フェルシア］：「ごちそうさまでした」
［吹雪］：「お粗末さまでした」
三人とも、残さず全部を食べきってくれた。
［フェルシア］：「ちゃんと全部食べれたのね、聖奈美ちゃん」
［聖奈美］：「はい、食欲がないわけではありませんでしたから」
［フェルシア］：「栄養のあるものも食べたし、きっと元気になれるわね」
［聖奈美］：「明日には、絶対に治して見せます」
［フェルシア］：「その心意気は大事よ、ただ、あまり頑張りすぎないように適度にね」
［聖奈美］：「は、はい」
［吹雪］：「――じゃあ俺、洗い物上に持っていきますから」
［フェルシア］：「あ、いいわ。私が持っていくから、吹雪くんは休んでて。洗い物も私がするからさ」
［吹雪］：「え？　いや、そんな……洗い物まで済ませるのが俺の仕事で――」
［フェルシア］：「いいの、いいの。頑張って作ってくれたんだから、これくらいさせてよ」
さっき同じようなことを先輩からも聞いたような……というか。
［吹雪］：「フェルシア先生だって、ずっと仕事してたでしょう？」
［フェルシア］：「くたくたになるほどやってないわ。今日は生徒も来なかったし平気よ」
［吹雪］：「いや、でも……」
フェルシア先生は俺に顔を近づけて――。
［フェルシア］：「何か、聖奈美ちゃんと話したいこととかあるでしょう？　隠さなくていいわよ」
［吹雪］：「べ、別に隠してなんて……というか何処でそんな情報

を聞いたんですか？」
［フェルシア］：「ふふ、芳田くんとの会話、こっそり聞いちゃったのよね。でも、聞こえるようにしゃべっちゃったほうも悪いと思うのよね、私は」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「そんなわけで、ちょっと時間上げるから。私がいたら話しづらいでしょう？　ふふ」
［吹雪］：「せ、先生……」
［フェルシア］：「じゃあ、ちょっと行ってくるから。聖奈美ちゃんは渡しておいた薬を飲んでてね」
［聖奈美］：「はい、分かってます」
そう言って、フェルシア先生は保健室を出て行った。当然、俺と杠とダルクが残される。杠は目の前に置いてあった薬を手にかける。
［吹雪］：「熱を抑えるやつか？」
［聖奈美］：「そうね、後は頭痛を抑える効果もあるみたい」
［吹雪］：「何だ……さっきも言ったけど、元気になったみたいでよかったよ、本当に」
［聖奈美］：「早く治したいって気持ちは、十分にあったから、体がそれに答えてくれたのかもしれないわ」
［吹雪］：「そりゃよかった。気持ちの面で変わってくるってのも、あながち間違いじゃないかもしれないな」
［聖奈美］：「そうかもしれないわね。……」
［吹雪］：「……」
何だろう、急に話が止まってしまった。別に気まずいってわけでもないが、ちょっと落ち着かないぞ。――でも、黙っていてもしょうがない、ここは口を開こう。
［吹雪］：「なあ――」
［聖奈美］：「あの――」
タイミングをお互いに伺っていたのか、俺たちの言葉がバッティングを起こした。

［吹雪］：「な、何だ？」
［聖奈美］：「あなたこそ、何よ？」
［吹雪］：「いや、たいしたことじゃねぇから、お前から話せよ」
［聖奈美］：「わ、分かったわ」
一泊間を置いて、杠はもう一度口を開いた。

聖奈美ルート・エックスプレッション（15）

［聖奈美］：「その……あたしの代わりに夕ご飯、作ってくれてありがとう」

［吹雪］：「ど、どういたしまして。……何だよ、急に畏まって」

［聖奈美］：「そ、そりゃ畏まるに決まってるでしょう？　本当はあたしの仕事なのに、それを買って出てくれたんだから」

［吹雪］：「まあ、気にすんなよ。本当は舞羽かカホラ先輩がやってくれるって案も出てたんだけど、大変じゃないかって思ったからな、俺が動いた方がいいと思ったんだ」

［聖奈美］：「いずれ、この恩は返すから、安心してちょうだい」

［吹雪］：「……固いぞ？　杠」

［聖奈美］：「え？」

［吹雪］：「考えが固いって言ってんだ。俺は恩を売ったつもりはこれっぽっちもないぞ？」

［聖奈美］：「でも、大久保が料理を作ることになったのは、元はと言えばあたしが体調を崩したからであって――」

［吹雪］：「誰だって体調を崩す時くらいある。何も言わずにサポートするのが、本当の仲間だってものだろう？」

［聖奈美］：「そ、それは……」

［吹雪］：「まあ、どうしても恩を返したいっていうなら、俺がお前に望むことは、さっきダルクの言ったこと同じだ。いつもと同じ元気な姿に戻ること。それ以外は、何もいらねぇよ」

［聖奈美］：「そ、そう……」

［吹雪］：「それだけか？　話すことは？」

［聖奈美］：「あ、ま、まだあるわ。……その、さっきの、こと……」

［吹雪］：「昼に話したことか？」

［聖奈美］：「え、ええ。……あの後、自分でちょっと考えてみた

の。今までの自分のことを思い返してみたりとか……」
［吹雪］：「そうか」
［聖奈美］：「それで……思い返してみて、……大久保の言うことは、間違ってなかったと思ったわ。あたしは、ほとんど誰にも頼らないで、自分の力だけで何とかしようとしていたかもしれないって」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「立派な人間になりたいって目標は変わらないけど、それに到達するには、一人の力じゃ絶対に足りないってこと。それを、今回の風邪で認識することができたわ。あたしは、たくさんの人に助けられてるって、それを通して初めて、人は成長できるんじゃないかって。あたしは、必死になりすぎて、そのことを失念していたみたいだわ」
［吹雪］：「そうだな、一人だけで成長することなんてできやしない。こうして俺たちが生きてることだって、両親が産んでくれたおかげなんだからな」
　俺たちは産まれた時から、人とのつながりを持って生きているんだ。
［聖奈美］：「祐喜が放課後に顔を出してくれたって、さっき話したでしょう？」
［吹雪］：「ああ」
［聖奈美］：「その時に、みんな『あたしの分まで精一杯働くよ』って言ってくれたの。自分の中では、後輩たちに良い印象は与えてないと思ってたから、正直驚いたわ」
　自分でも分かっているのだろう。自分以外の他人にも厳しいということが。
［聖奈美］：「でも、その言葉を聞いた時に、あなたの言った言葉が少し分かった気がするの。こういう助け合う心が、人が成長するのに必要なことなんだって」
［吹雪］：「……さすが生徒会長だ。俺の言いたかったこと、ちゃんと汲み取ってくれたんだな」

［聖奈美］：「そりゃあ、あんな風に言われたら、普通は……」
［吹雪］：「でも、それは冷静になって考えてみた結果だろう？」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「まあ、仕方ないことだと思うよ。人間誰だって、焦りを覚えることくらいある。ちょうど杠はそういう時期だったんだ。色々やることが重なったから、そういう状態になったんだろうよ」
［聖奈美］：「確かに、そんな感じはあったかもしれないわ」
［吹雪］：「自分と向き合うっていうのは、立派な人間になるには重要なスキルだと思うぜ。……やろうと思ってするのは、ちょっと難しいことかもしれないけどな」
［聖奈美］：「……それをあたしに教えたのはあなたじゃないの」
［吹雪］：「教えると実行するってのは、ちょっと違うからな。俺も正直、ちゃんとできてるかちょっと不安なんだよ」
［聖奈美］：「その時は、あたしが言ってあげるわよ。いつも通り、厳しくね」
［吹雪］：「そりゃあ助かる。でも……なるべく優しく頼むぜ？」
［聖奈美］：「それは、あなた次第かしらね？」
――とにかく、無理をすることが良くないということは、しっかり伝わったようだ。

聖奈美ルート・エックスプレッション（16）

［聖奈美］：「それで、あなたが言おうとしてたことは何だったの？」
［吹雪］：「え？　ああ。……何だっけ？」
［聖奈美］：「あたしが分かるわけないでしょう？」
［吹雪］：「はは、忘れちまったみたいだ」
［聖奈美］：「頑張って思い出しなさいよ」
［吹雪］：「いや、思い出せないってことはたいしたことじゃないってことだろう。急ぐことはないさ」
［聖奈美］：「あなたがそれでいいなら、別にいいんだけど」
［吹雪］：「悪い、悪い」
……本当は、分かってるんだけどな。
［吹雪］：「じゃあ俺、そろそろ練習に行ってくる。大事に過ごしてくれよ」
［聖奈美］：「ええ、大丈夫よ。頑張ってきなさい」
［吹雪］：「おう、お前の分までな」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ダルクは、杠と一緒にいるだろう？」
［ダルク］：「うん」（
［吹雪］：「じゃあ、一旦お別れだな。料理手伝ってくれてサンキュー」
［ダルク］：「えへへ、どういたしまして」
［吹雪］：「んじゃ、また明日。お休み」
［聖奈美］：「お、お休み。……大久保、ありがとう」
――俺が言わなかったわけは、杠が述べたことそのままだったからだ。それ以外は、何も理由がない。
立派になりたいっていう強い信念を持ってるだけのことはある。
そんな姿を見てると、俺も自然と頑張ろうと思った。

聖奈美ルート・アッチェレランド（1）

12月23日（木曜日）

［場所：社会科室］

［聖奈美］：「――一日安静にしたので、この通りすっかり完治しました。それもこれもみんなのおかげです。ありがとうございました」

［繭子］：「お帰り～聖奈美ちゃーん」

［カホラ］：「無事に治ってよかったわ」

［聖奈美］：「心配かけて、すみませんでした」

［カホラ］：「いいのよ、健康一番って言うでしょ？」

［繭子］：「そうそう、それが一番だよ～」

［聖奈美］：「はい、そうですね」

［舞羽］：「杠さん、今日から練習に戻るの？」

［聖奈美］：「ええ、みんなに一日遅れをとってしまったし、巻き返しを図っていかないと」

［舞羽］：「……」

［聖奈美］：「大丈夫よ、須藤さん。今日からは、自分の体と相談しながら頑張っていくから」

［舞羽］：「杠さん……うん、そうだね。みんなで頑張ろう」

ちょっと曇り顔だった舞羽も、今の言葉で納得したようだ。

［カホラ］：「ふふ……」

カホラ先輩は、何故か笑いながら俺に向かって親指を立てていた。

［カホラ］：「今日から後半戦よ、みんな、気合い入れて頑張っていきましょー」

［四人］：「おー！」

［聖奈美］：「……あ」

［吹雪］：「？」

何だろう、一瞬杠と目が合ったんだが、何故か目を逸らされてしまった。

［吹雪］：「……気のせいか？」

［セフィル］：「よーし、吹雪。早速ランニングに行くぞ」

［吹雪］：「あ、学園長、おはようございます」

［カホラ］：「どうしたのよ？　いつもは社会科室に呼びに来ないのに」

［セフィル］：「いや、何だか今日は良い感じに吹雪を調教できる気がするのでな……そのままのテンションで呼びに来てみた」

［吹雪］：「調教って……俺、一応人間なんですけど……」

［セフィル］：「ちょっと言ってみたかっただけだ、気にしないでくれ」

［カホラ］：「また、お母さんったら……」

［セフィル］：「ほら、行くぞ吹雪。爽やかな汗をかこうじゃないか」

［吹雪］：「は、はい……」

今日のランニングは、いつもよりハードかもしれない。俺の第六感がそう言っていた。

――その予感は、見事に的中した。

聖奈美ルート・アッチェレランド（2）

［場所：教室］

［吹雪］：「ぜー……ぜー……」
［愛海］：「だ、大丈夫なの？　大久保くんは？」
［舞羽］：「あはは……学園長の言ってたことは、本当だったんだ……」
［愛海］：「学園長が言ってたこと？　何？　それ」
［舞羽］：「うん、朝のことなんだけど――」
舞羽が事情を説明しているが、何を言っているのかがあまり耳に入ってこない。
［祐喜］：「――はい、吹雪」
［吹雪］：「んあ？」
顔を上げると、祐喜が缶ジュースを俺に差し出していた。
［吹雪］：「いいのか？」
［祐喜］：「限界寸前くらいまでヘバッてる姿を見せられたら、素通りすることができなくてね」
［吹雪］：「ごめんな」
［祐喜］：「吹雪がそこまでなるって、相当ハードだったんだろうね」
［吹雪］：「はは、今日はいつも以上だったかもな」
もらったジュースをぐっと飲み込む。
［吹雪］：「――はあっ。いつもランニングにはノルマがあるんだけど、今日はそれに上乗せで１０周プラスだったんだ。その分、魔法の練習は減らしてもらえたんだけど、それでも足への負担がとてつもなかった」
今も机の下で足がプルプル震えている。
［吹雪］：「かなり力が付いた気はするけどな」

［祐喜］：「それで付いてなかったら、悲しすぎて泣けてくるね」
［愛海］：「というか、その上乗せを文句言わずにやり切る大久保くんは凄まじいと思うのは私だけかしら」
［吹雪］：「何だかんだ言って、学園長は俺を成長させようとしてくれてるのが分かってるから、それを無下にもできないし……息が上がって反論する言葉も出てこない」
［愛海］：「な、なるほど……」
［祐喜］：「一昨日と昨日と、結構ハードだったから、それも影響あるのかもしれないね」
［吹雪］：「一昨日と昨日は、しょうがないさ。俺が望んでやったことだから、悔いは全くないよ」
［祐喜］：「分かってると思うけど、体調には注意だよ？」
［吹雪］：「おう」
杠に言った手前、そこは十分気を付けないと。
［吹雪］：「そういえば、あいつはどこ行ったんだ？　姿が見えないが」
［祐喜］：「あ、翔かい？　翔なら吹雪たちが来る前に教室を飛び出していったよ？」
［吹雪］：「飛び出してか……また女子関連か？」
［愛海］：「多分というか、確実にそうね。明日寂しい夜を送りたくない～って言って飛び出して行ったから」
１２０％、女子のことで違いないようだ。
［舞羽］：「そういえば、そんな時期なんだね」
［愛海］：「そうよ、舞羽は決めたの？　誰と過ごすのか？」
［舞羽］：「え？　今年は儀式に参加するみんなと過ごすと思うけど」
［愛海］：「私が知りたいのはそういうことじゃないって分かるでしょ～？　舞羽ちゃ～ん」
［舞羽］：「え？　だって他に候補なんてないよ」
［愛海］：「はあ……これだから無自覚症候群ってのは困るのよね」

［舞羽］：「む、無自覚症候群？」
［愛海］：「舞羽だったら、一緒に過ごす候補なんてその気になれば5秒で作れるっていうのに」
［舞羽］：「ご、5秒？」
［愛海］：「試しに言ってみなさいよ？　『私とクリスマスを一緒に過ごしてくれる人、いないかな？』ってさ」
［舞羽］：「え、ええ？　べ、別に私はそんなこと望んで――」
［愛海］：「いいから、ちょっと騙されたと思って言ってみなさいって」
［舞羽］：「……わ、私と一緒に、クリスマスを過ごしてくれる人、いないかな？」
［男子］：「俺たちでよかったら一緒に過ごさないか！？」
［舞羽］：「ひゃあっ！？」
［愛海］：「ほらね？　言った通りでしょう？」
［舞羽］：「ほらね、じゃなくて……この後、どうすればいいの？」
［愛海］：「……」
［舞羽］：「考えてなかったの！？」
［愛海］：「いや、本当にノリで言ったから、対策が思いついてなかったというか」
つまり、本当に舞羽は騙されてしまったわけか。
［愛海］：「あー、ヨッシー、ちょっとお願いできるかな？」
［祐喜］：「もっと考えてしないとダメだよ？　日野さん」
やれやれと言った様子で、祐喜は男子どものところに注意を促しに行った。休み時間ももうすぐ終わりか。今のうちにトイレを済ませておくとしよう。
……。

聖奈美ルート・アッチェレランド（3）

［場所：廊下］

［吹雪］：「よし、完了」
後は教室に戻るだけ、と。
［吹雪］：「ん？　あれは」
間違いない、杠だ。何やらクラスの女子としゃべっているようだ。
邪魔しちゃ悪い……とは思うが、素通りするのもちょっと気が引けるな。ちょっと恥ずかしいが、行ってみるとしよう。
［吹雪］：「おう、杠」
［聖奈美］：「え？　あ、お、大久保！？」
偉く驚いたような表情を浮かべている。
［吹雪］：「何かしたか？」
［聖奈美］：「え、あ……べ、別に、そんなことないわよ？」
［吹雪］：「何で疑問形なんだよ？」
［聖奈美］：「き、気のせいよ、気のせい」
［吹雪］：「ならいいが……ああ、今日は生徒会で仕事するんだよな？　お前」
［聖奈美］：「え、ええ。そのつもりだけど」
［吹雪］：「そうか、だとすると俺も手伝いに行った方がいいか？　まだ忙しいんだよな？」
［聖奈美］：「い、いいわよ今日は！　無理しないで休んでちょうだい！」
何やらすごい剣幕でそう言われる。
［吹雪］：「別に気にしなくていいんだぜ？」
［聖奈美］：「そ、そういうわけじゃないわ……今日は、本当にいいから……ちょっと、理由があって……」
［吹雪］：「理由？」

［聖奈美］：「とにかく、今日はちょっと……遠慮させてもらうわ……許して、ちょうだい」
［吹雪］：「まあ、そういうならいいんだが。必要になった時は言ってくれよ？」
［聖奈美］：「え、ええ。ありがとう」
［吹雪］：「じゃあ、また後でな」
俺は仲間の女子たちに頭を下げてその場を去ることにした。
明らかに慌てていたように感じたのは気のせいじゃないよな？
それに目もほとんど合わなかったし……そういえば朝も目を逸らされたような……。
［吹雪］：「何かしたか？　俺」

聖奈美ルート・アッチェレランド（4）

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「はあ……」

びっくりした……来るなら来るって言ってくれないと。あんな風に来られたら、準備ができないじゃないの。自分でも分かるくらいに、あたしは狼狽えていた。会話になっていたのがせめての救いだけど。

［聖奈美］：「変に、思われてなきゃいいけど」

そんなことで嫌うような人じゃないはずだけど……でも、せっかくの誘いを断っちゃったし……気分、悪くしちゃったかしら？　だとしたら、後で謝っておかないと。

［聖奈美］：「……大久保」

ひどいわね、あたし。今日はずっと大久保のことばかり頭によぎってる。でも、その理由は何となく分かる。

きっとあたしは、大久保に興味を持っている。今まで、自分の気持ちに気付けなかったけど、昨日のことでそれに気付いてしまった。自分のために、あそこまでしてくれるあの人の優しさが嬉しかった。あたしのために、立派になるためのアドバイスをしてくれた、あの優しさが。

今までは普通にしゃべれたのに、今日はそれができない。しゃべるのも、顔を合わせるのも妙に恥ずかしい。何とかしたいんだけど……こういう時、どうすればいいのか分からない。何せ初めての感覚だから。

そもそも、大久保はあたしのことをどう思っているのだろう？　あの時は、仲間だって言っていたけれど……それはつまり、あたしは異性として見られてないってことかしら？　確かに、こんな性格だからそう思われてもしょうがない、自分で蒔いた種だからあたしが悪い。でも、大久保は誰にでもあんな風に接してたはず。大久保の良いところは誰にでも分け隔てなく接することだから、あたしへの

扱いが決定的な証拠になる。だからこそ分からない。大久保は一体、どういう女性が好きなのか？

　考えたって、本人しかそんなことは知らないのに。というか、今日あたしは何回同じことを考えているのよ。

［聖奈美］：「……断らない方が、よかったのかしら」

［ダルク］：「……やっぱり聖奈美は、吹雪のことを……」

【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・アッチェレランド（5）

［場所：教室］

［吹雪］：「はあ、終わったか」

何事もなく、今日の授業も終わりを迎えた。明日が終われば、学校も来年になるまで休みか、そうなると、幾分か練習の効率も上がるだろうか。今日を含めて後8日、長いように見えて、きっとその日はすぐに来るだろう。

［吹雪］：「一日、一日を大切にしないとな」

――そんなわけで放課後だが。

［吹雪］：「特にやることがないんだよな」

ここ最近は生徒会の仕事に参加していたから、暇を持て余すことはなかったんだが、今日は杠に断られたからな。

……まあでも、こんな時間もたまにはいいか。よくよく考えたら、朝練習の疲れがまだ体に残ってるんだよな。少し眠いし……昼寝して体力の回復を図るか、うん、それがいい。

そうと決まれば、すぐに行こう。俺はカバンを持って教室を後にした。

……。

聖奈美ルート・アッチェレランド（6）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「――やっぱり誰もいないか」

みんなそれぞれ、何かすることがあるんだろう。

「さてと」

俺は布団を敷き直し、いつものスペースに向かう。どうせもう、放課後まで動きはしないだろう。スウェットに着替えても問題はないよな。ブレザーのまま寝るのもどうかと思うし……。

着替えるのと共に、徐々に睡魔が襲ってくる。思ってたより、疲れが溜まってたみたいだな。きっと今からの昼寝はさぞ気持ちがいいだろう。

［吹雪］：「――お休み」

誰に告げるわけでもなく、俺はそうつぶやいて目をつぶった。

そういえば、朝と昼、杠の様子が少し変だったんだよな？　一体原因が何だったんだろう？

――徐々に意識はなくなり、俺は眠りに落ちた。

……。

……。

……。

［吹雪］：「――ん、んんぅ。ん？」
徐々に意識が覚醒していく。そうか、俺は放課後を昼寝の時間に当てたんだった。
……今何時だ？　俺はゆっくり目を開ける。すると――。
［吹雪］：「え？」
［カホラ］：「あ、起きたみたいね」
［吹雪］：「……え？」
何故だろうか。目の前には寝食を共にしているメンバー全員が俺の顔を覗き込んでいた。
［吹雪］：「え？　な、何なんですか？　この状況は」
［繭子］：「うーんとね～、夕ご飯の時間になったから、ふーちゃんを起こそうと思ったんだけど、眠りが深かったみたいでなかなか起きなくて。で、試行錯誤してるうちにみんなが集まってきて、こうして起きるのを見守ってたの～」
［吹雪］：「なるほど……いや、待て待て！　ということは、俺は全員に俺のだらしない寝顔を晒してたってことじゃないのか！？」
［カホラ］：「別にだらしなくなかったわよ？　結構かわいかったし」
［舞羽］：「うん、子供の頃と変わらない寝顔だったよ」
［吹雪］：「うわ……マジかよ……」
まさかこんな形で辱めを受けるとは……。
［吹雪］：「夕ご飯って言っていましたよね？　今、何時ですか？」
［カホラ］：「今、6時半になるわね」
ということは、あれから三時間も経ってたのか？　全然分からなかった。でも、良い感じに睡眠を取れたようだな。
……寝顔はバッチリ見られてしまったようだが。
［フェルシア］：「まあそんなヘコむことはないんじゃない？　女

の子に起こしてもらえるなんて、あまりないイベントでしょう？」
［吹雪］：「それは、まあ……」
美少女５人全員に起こしてもらえるなんて、一種のハーレムであるかもしれないが。
［吹雪］：「でも、全員で起こすのは、次からは勘弁です。自力で頑張って起きますんで」
［カホラ］：「分かったわ。じゃあ、家庭科室行きましょう、ご飯できてるから」
［吹雪］：「はい」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「？」
［聖奈美］：「あ……」
　まただ……長い眠りだったから、てっきり夢かと思ってしまったが、どうやら現実だったようだ。……本当に何かしたか？　俺。
　聞いてみるのが一番か？　自分が分からないところで何かをしてしまうこともあるはず。
今日の練習は、杠に付き合ってみるとしよう。

聖奈美ルート・アッチェレランド（7）

［場所：第二音楽室］

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「はあ……」

……あたしって、こんなに消極的な性格だったのね。せめて普通に振る舞わなきゃいけないのに。あれじゃあ、まるっきり避けてるみたいに思われちゃうわ。

「絶対、思ってるわよね、大久保……」（聖奈美）

誰がどう見ても、あたしの様子はおかしい。須藤さんたちとしゃべる時は普通なのに、大久保としゃべる時はあからさまに態度が違う。

［聖奈美］：「どうしよう……」

――そんなことを考えてる矢先だった。コンコン、音楽室をノックする音が聞こえた。

今日は学園長とフェルシア先生に見てもらう予定ではない。だとすると……まさ、か？

［吹雪］：「俺だ、大久保だ」

［聖奈美］：「う、嘘！？」

ど、どうしよう！？　どうして今日に限って大久保があたしとの練習を選んだの？　今の状態じゃ、普通に話すことなんてできないわよ。

［吹雪］：「杠？　いるんだろ？」

［聖奈美］：「え、あ……い、いるわよ？」

あ、ダメよ。居留守をしたところで通用するわけがない。な、何とかしないと……できなくてもやらなくちゃ。

［ダルク］：「み、聖奈美？」

［聖奈美］：「ダルク、応援しててちょうだい」

［ダルク］：「え？　う、うん」

【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・アッチェレランド（8）

［吹雪］：「俺だ、大久保だ」
［聖奈美］：「う、嘘!?」
［吹雪］：「？」
何やら教室内で焦っているような声が聞こえる。……どうやら俺が原因であることに間違いはないかもしれないな。知らず知らず、何かをやらかしてしまったか？　やっぱり。
それを知るためにも、ここで退くわけにはいくまい。
［吹雪］：「杠？　いるんだろ？」
俺はもう一度杠に声をかける。
［聖奈美］：「え、あ……い、いるわよ？」
少々強引ではあるが、中に入らせてもらうとしよう。
［吹雪］：「入っていいか？」
［聖奈美］：「え、ええ。いいわよ」
許可を得ることができたので、俺は入室した。ピアノの椅子に杠は座って、その少し上でダルクはふわふわと浮いていた。
［吹雪］：「おう、悪いな」
俺はいつも通り振る舞うことにする。俺も変に畏まったら、話が進まなくなりかねない。
［聖奈美］：「き、今日はあたしの所、なのね？」
［吹雪］：「ああ、折角こうして元気になったわけだし、杠の練習に付き合うのがいいかなって思ってよ」
［聖奈美］：「あ、そ、そうなんだ……」
［吹雪］：「ああ」
［聖奈美］：「あ、ありがとう……う、嬉しいわよ？」
［吹雪］：「何で語尾が上がってるんだ？」
まるで俺が嬉しいだろう？　って聞いてるみたいになっている。
［聖奈美］：「ご、ごめんなさい。ちょっと言葉尻に力が入っちゃ

って」

［吹雪］：「どういう状況だとそうなるんだ？　その現象は」

［聖奈美］：「な、何でかしらね？」

［吹雪］：「俺が聞いてるんだがな……」

［聖奈美］：「あ、ごめんなさい……」

［吹雪］：「いや、別に謝らなくてもいいんだけどよ」

［聖奈美］：「ごめんなさい……」

何だ？　今日の杠はメチャクチャ謝ってくるぞ？　いよいよ様子がおかしいことが確信できる。

［聖奈美］：「ちょっと、口元が覚束ないだけだから。大久保は気にしなくていいわ」

［吹雪］：「あ、ああ……」

［聖奈美］：「れ、練習始めましょう？　通して弾いてみるから、何かあったら言ってちょうだい」

［吹雪］：「お、おう……」

チラチラ俺の方を見るような仕草をして。　……こんな様子で集中してピアノが弾けるのだろうか？　原因が俺だとするなら、俺がこんなことを言える質じゃないんだが。

……。

［聖奈美］：「……ごめんなさい」
［吹雪］：「だから、謝らなくていいって」
何と言うか、予想通りの結末だ。今日の杠の演奏は、普段とは全く違う出来だった。何というか……すべてにおいてガチガチだ。
［聖奈美］：「こんなはずじゃなかったのに……」
［吹雪］：「……」
これ以上黙っているのは、我慢の限界だ。もう一度弾いたとしたって、きっと出来は変わらないだろう。
［吹雪］：「杠」
［聖奈美］：「……っ！？」
意を決して、俺は杠に声をかけた。
［聖奈美］：「な、何？」
［吹雪］：「ちょっと、聞きたいことがあるんだが」
［聖奈美］：「え？　な、何かしら？」
［吹雪］：「さっきから……というか、今日の朝辺りから思ってたんだが……今日のお前、何かおかしくないか？」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「はっきり言うと……俺のこと、避けてたりしないか？」
［聖奈美］：「べ、別に避けてるつもりはないわよ」
［吹雪］：「でも、目、合わせてくれないし、会話も成立してないっていうか……ひょっとして俺、お前の気に障るようなことしちまったりしたのか？」
［聖奈美］：「そ、そんなことないわ！　それだけは絶対に在りあえないから」
［吹雪］：「そ、そうなのか？」
昼に見た時と同じくらいの剣幕だ。
［聖奈美］：「大久保には、その……感謝してる、つもりだから…

…あたしに言ってくれた言葉は、全て正論だと思ってる。だから、気に障ることなんて、一切ないわ」

［吹雪］：「それは、どうも。……でも、だとしたら何でそんなにおどおどしてるんだ？　今日のお前を見る限り、俺としゃべってる時は普通じゃないぞ？」

［聖奈美］：「あ、あたしはいつだって普通よ。気のせいじゃないの？」

［吹雪］：「いや、気のせいじゃない。普段のお前は、もっとこう……パリっとしてるっていうか、しゃきしゃきしてるっていうか」

［聖奈美］：「や、野菜みたいな表現ね……」

［吹雪］：「良い例えが思いつかないんだ」

くそ、俺のボキャ貧が。

［吹雪］：「と、とにかく、今日はそれが感じられないんだよ、お前から。また同じことを聞くけど、その原因は俺にあるんじゃないのか？」
［聖奈美］：「そ、そんなことは……」
［吹雪］：「隠さなくていい。悪いことは悪いって言ってくれよ。お前とギクシャクしてるのは、俺としても気分が悪い」
［聖奈美］：「お、大久保の気分が悪くなる……」
［吹雪］：「いや、俺っていうか、お前にとっても嫌なことだと思って」
［聖奈美］：「ひ、独り言だから気にしないでちょうだい」
［吹雪］：「にしては、かなり大きく呟いてたぞ」
［聖奈美］：「たまにはこういう日もあるのよ」
もう言ってることがメチャクチャだ。
［聖奈美］：「ほ、本当に、大久保は悪くないのよ。むしろ悪いのはあたしのほうで」
［吹雪］：「でも、お前をそんな風にしてるのは、俺に何か問題があるからなんじゃないのか？」
［聖奈美］：「大久保に問題なんてないわ。問題があるのはあたしのほう、むしろあたしにしか問題はないわ」
［吹雪］：「いや、でも……お前がおかしくなってたのは俺の前でだけだし、何もないっていうのも納得できないっていうか」
［聖奈美］：「あたし本人が言ってるのよ？　偽りなんてあるわけないわよ」
［吹雪］：「――そのわりには、目が合わないんだが」
［聖奈美］：「――っ！？　だ、だってそれは……」
［吹雪］：「それは？」
［聖奈美］：「あう……コンタクトがゴロゴロしてるから、よ」

［吹雪］：「いや、お前今メガネかけてるじゃないか……」
［聖奈美］：「し、しまった……」
［吹雪］：「何がしまったなんだよ……」
［聖奈美］：「あ、う……」
いかん、ますます杠がおかしくなっている。ツッコミ切れないほどのボケを連発している。こういう姿は新鮮ではあるが、異常事態であることに変わりはない。
［吹雪］：「落ち着けよ、深呼吸しろ、大きく、三回くらい」
［聖奈美］：「え、ええ。……スーハー……」
その間に、俺はダルクに目線を送り、目で会話を図る。
［吹雪］：「（何がどうしたって言うんだ？　杠は……）」
［ダルク］：「（残念だけど私から言うことはできないんだ。これは聖奈美自身のことだから）」
［吹雪］：「（……）」
［聖奈美］：「スーハー……」
［吹雪］：「落ち着いたか？」
［聖奈美］：「え、ええ。少し……」
［吹雪］：「じゃあ、同じ質問を改めて聞くけど、お前がこんな風になってるのは、本当に俺が原因じゃないんだな？」
［聖奈美］：「ええ、原因は全部あたしの中にあるわ」
［吹雪］：「嘘じゃないんだな？　俺の目を見て言えるか？」
［聖奈美］：「お、大久保目を見て？」
［吹雪］：「そうだ、俺の目を見て。いつもお前、人の目を見てしゃべるじゃないか？　俺にできないわけないだろう？　今までだってできてたんだ」
［聖奈美］：「で、でも……今は状況が違うっていうか……」
［吹雪］：「ん？　状況？」
［聖奈美］：「な、何でもないわ。……が、頑張ってみるから」
［吹雪］：「何を頑張るんだよ」
［聖奈美］：「な、何ってそれは……」

……目を見る準備をしている時点で、俺が原因なんじゃないかって思うのは俺だけか？

聖奈美ルート・アッチェレランド（11）

［吹雪］：「なあ、やっぱりお前さ――」
［聖奈美］：「ち、違うって言ってるでしょう！　自分を信じなさいよ」
何故俺が励まされているんだ。
［聖奈美］：「今言うから、待ってて」
どんどん趣旨がずれてきてる気がする。というより、目を見るだけなのにどうしてそんなに時間がかかる？
［聖奈美］：「も、もう一回深呼吸――」
［吹雪］：「はあ……もういいや」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「もういいって、そこまで準備が必要なら、無理にさせるのも悪い気がするし」
［聖奈美］：「で、でもそれじゃあ――」
［吹雪］：「嘘はついてないんだろ？　だったらいい、お前の言うことを信じれば終わる話だ」
［聖奈美］：「……怒っちゃったの？」
［吹雪］：「別にそういうわけじゃないが……何か隠してるんじゃないかっては思うぞ」
むしろ隠してないと言えない程、粗がボロボロと零れてる。
［吹雪］：「話してはくれないのかなって思ってはいる」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「お前が聞かれたくないって言うなら、変に踏み込む気はないけどよ」
［聖奈美］：「あ……」
［吹雪］：「今日は、席を外したほうがよさそうだな。俺がいると、かえって練習の邪魔になりそうだし。他の三人のところに練習付き合ってくるわ」

［聖奈美］：「ちょ、ちょっと待って！」
［吹雪］：「ん？」
杠が、俺の手を掴んで止めていた。それに、何だか表情が寂しそうなものに変わってないか？
［聖奈美］：「あたしが悪かったから……だから、許してちょうだい。気に障ったのなら、謝るから」
［吹雪］：「な、何でお前が謝る必要があるんだよ？」
［聖奈美］：「だって、あたしのせいで、気分が悪くなったんでしょう？　あたしが変だから……気を遣わせちゃったんでしょう？」
［吹雪］：「お前……何言ってるんだ？」
本当に、どうしたんだ？　今日の杠は。急に声が大きくなったり寂しそうな顔になったり……。
［聖奈美］：「本当にあなたは悪くないの。それだけは本当だから、信じてちょうだい」
［吹雪］：「それは、さっき聞いたから分かってるつもりだ。それに俺は気分悪くなんてしてないぞ」
［聖奈美］：「でも……表情が歪んでる」
［吹雪］：「元からこんな顔だよ、俺は」
［聖奈美］：「違うわ、絶対……」
［吹雪］：「……そう思うなら、理由を話してくれ。そうすれば、きっと元に戻ると思う」
［聖奈美］：「う、そ、それは……」
［吹雪］：「俺は、お前のことが心配なんだよ。俺たちは仲間なんだぜ？　問題は共有して解決していけばいいんだ。今のお前の状況を引きずってたら、成功する儀式も成功しなくなっちまう」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「言ってみてくれ。どんなことだとしても、ちゃんと受け止めるからよ」
［聖奈美］：「どんな、ことでも？」
［吹雪］：「ああ」

聖奈美ルート・アッチェレランド（12）

【聖奈美サイド】

［吹雪］：「どんなことでもだとしても、ちゃんと受け止めるからよ」

［聖奈美］：「どんな、ことでも？」

［吹雪］：「ああ」

どうしよう。ここまで言ってるのにやっぱり言えないなんて言ったら、それこそ本当に大久保の機嫌を損ねてしまう。だけど、あなたのことが気になってるから普通に接することができない、ってことを本人に伝えていいの……。大久保は、別にあたしのことをそんな風に見ていないだろう。

それなのに、そんなことを言ったら……それこそ困らせてしまう。

もし、それを言って今までの関係が壊れてしまったら？　……考えるだけでも怖い。

でも……もっと大久保と親しくなりたいという想いもある。他の女の子たちには見せない、あたしだけに見せてくれる大久保の一面を見せてくれたら……そんな想いがあたしの中には眠っている。でも、これは口で直接言わなければ絶対に実ることはない。受け身のままじゃ、絶対に進展しない。

いつものあたしの勢いでいけば、決してできないことではない。なのに、どうしてこんなに足がすくんでしまうのか。

【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・アッチェレランド（13）

［吹雪］：「杠？　大丈夫か？」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「何か、随分悩んでるみたいだったが」
［聖奈美］：「ち、違うのよ。ちょっと、言うことに整理をつけてるっていうか」
……ひょっとして俺は、杠のことを誤解しているのか？　一人でため込むより、誰かに言ってしまったほうがスッキリすると思ったが、誰にでも言いたくない事実というのはある。もしかして俺は、それを言わせようとしているんじゃないか？　もしそうだとしたら、俺は完全に間違っている。
［吹雪］：「言うのが辛いことなら、やっぱり無理はしなくても」
［聖奈美］：「そ、そんなことはないわ」
［吹雪］：「さっきも言ったけど、聞かれたくないことなら、無理して言う必要はない。それでお前を傷つけてたら、本末転倒だ」
［聖奈美］：「待って、大丈夫だから。言うから、ちょっと待って」
［吹雪］：「そ、そうか？」
今の杠を見てると、どうしても不安は拭えない。

聖奈美ルート・アッチェレランド（14）

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「待って、大丈夫だから。言うから、ちょっと待って」

［吹雪］：「そ、そうか？」

どうしよう、言うって言っちゃったわ。これじゃもう後戻りもできない。

散々時間を取らせておいて、『やっぱり話せない』なんて、それこそできない。もう、はっきり言ってしまった方がいいわ。

ふとダルクに目線をやる。よく考えたら、この会話中ダルクは一切口を開いてない。あたしが決める問題だからなんだと思う。そんなダルクが、あたしに向かってこくりとうなずいた。ダルクのことだから、あたしの思ってることは全て分かっているのだろう。だからこそ、うなずいてくれたんだ。大丈夫、と。

それを信じて、言ってみましょう。そうよ、相手は大久保よ？もし、あたしの想いが実らなかったとしても、決して無視をしたりはしないはず。

――行きなさい、杠聖奈美！

【聖奈美サイド　終わり】

［聖奈美］：「その、今から言うことは、冗談じゃないから。あたしが今、本当に想ってることだから、それだけ、忘れないで聞いてほしい」
［吹雪］：「ああ、もちろんだ」
［聖奈美］：「どうして、あなたの前で普通にしゃべれなかったかって言うと――。――あなたのことを見てると、緊張して上がっちゃってたからなの」
［吹雪］：「緊張して、上がってた？」
［聖奈美］：「だから、その……あなたのことが、き、気になってるのよ……」
［吹雪］：「なっ！？」
本当に驚いた時、ろくに声が出ないというのは本当だったのか。
今ならそれが分かる。そんなことに関心してる場合じゃない！
［吹雪］：「お前、俺のことを？」
［聖奈美］：「嘘、ついてないわ……言っておくけど、友達とか、そういうのじゃないわよ？　一人の女性として、ってことだからね？」
［吹雪］：「一人の女性として、俺のことを？」
［聖奈美］：「そうよ。もう一度言ってって言われても、無理だから。恥ずかしすぎるもの……」
［吹雪］：「そ、それは大丈夫だ。うん、一回で把握できた」
でも……相手は杠だぞ？　こういうことを言いそうじゃないこいつが、俺にそんなことを言ってきた？　にわかには信じられない。
だけど、確かにそれが本当なら今までのことは全て納得がいくかもしれない。
つまり杠は、俺のことを意識していたから今まで通りじゃなかった。……自分で言うのはバカみたいだが、端的にまとめればそうい

うことか。
［吹雪］：「な、何でなんだ？」
ついそんな質問をしてしまう。
［聖奈美］：「大久保は、あたしのことを真剣に考えて行動してくれた。あたしが立派になるための道を開いてくれた。その優しさが、嬉しかったの。だから……」
［吹雪］：「……」
言わせた後で、言いづらい理由に気が付いた。そりゃこんなこと、本人の前でさらっと言えるはずがないじゃないか。どうしてそれを察することができなかったのか。
……それも結果論に過ぎないか。そんなことを言われるなんて、言われる前の俺のパターンには存在していない、いや、存在するわけがないと決め込んでいたんだ。
［聖奈美］：「お、大久保？」
［吹雪］：「わ、悪い。ちょっと……びっくりしてた」
［聖奈美］：「そ、そうよね。こんなこと言われたら、誰だって――」
［吹雪］：「さ、先に言っておくが、お前が言ってくれた言葉はすごく嬉しい。絶対に嫌ってことはないから、それだけは勘違いしないでくれ」
［聖奈美］：「え、ええ」
杠は俺のことを……好きと言ったわけだよな？　口では言っていないが、気になってると言うことはそういうことのはず。だとしたら俺は、答えを返さなければいけないだろう。俺は杠のことを、どう思ってるんだ。
好きか嫌いかと言われれば、もちろん好きだ。こいつと一緒にいるのは、何だかんだ言って楽しい。それに、今までのことだって、杠のことが心配だったから、あんな風に積極的に行動するきっかけになったんだと思う。
きっと、俺自身も……杠の気持ちに答えたいと思ってる。でも、

すぐに結論を出していいのか？　正直、こんな展開になることは全く予想してなかった。言い方はよくないが、この場の空気に流されてる可能性もある。それは、本気で想いを伝えてくれた杠に対してとても失礼なことだ。一度自分と向き合って、ちゃんとした答えを出したほうが、俺にとっても、杠にとっても良いことだと思う。

［吹雪］：「杠」

［聖奈美］：「な、何？」

［吹雪］：「悪いんだけど、一日考えさせてくれないか？　ちょっとまだ、自分の気持ちが本当なのかはっきりしないんだ」

［聖奈美］：「そ、そうよね。いいわ、大久保の良い時で」

［吹雪］：「すまない、すぐに返事ができなくて」

［聖奈美］：「き、気にしなくていいわ。あたし自身こういうことになると思わなかったから」

［吹雪］：「じゃあ、そういうことで頼む」

［聖奈美］：「ええ」

――気付けば、もう練習する時間はほとんどなくなっていた。完全に練習時間を面談に使ってしまったようだ。

［吹雪］：「じゃあ俺、一足先に戻ってるから」

［聖奈美］：「え、ええ、分かったわ」

［吹雪］：「失礼しました」

半ば逃げるような形で、俺は音楽室を後にした。あのまま一緒に寝床に帰るのも、ちょっと気まずいだろうし……。

［吹雪］：「今日は、寝れないかもしれないな」

聖奈美ルート・アッチェレランド（16）

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「……。言っちゃった」

大久保に、はっきりと、自分の気持ちを伝えてしまった。いや、この場合は伝えることができた、と言っていいのかしら？　さっきの反応を見ていた限りでは、あたしが嫌いになるような感じは見られなかったと思う。でも……。

［聖奈美］：「言っちゃったのね、全部」

それを考えると、何とも言えない気持ちがこみ上げてきてしまう。一日考えると言っていたから、ひょっとしたら明日には返事が帰ってくる？　すぐに答えを出せないのなら、大久保の良い時まで待つつもりではいるけど……どんな答えが返ってくるんだろう。ものすごい不安と……少しの期待とが入り混じっている。

［聖奈美］：「全ては、大久保次第ってことね」

もう、今さら引き返すことはできない。あたしにできることは、どんな答えが来てもそれを受け止めること。きっと、これで良かったんだわ。今は心なしか、心のモヤモヤも晴れた気がする。

［聖奈美］：「ごめんね、ダルク。ずっと黙らせちゃって」

［ダルク］：「いいんだよ、気にしなくて。私も、早い方がいいかなって思ってたし」

［聖奈美］：「やっぱり、知っていたのね。あたしの想ってること」

［ダルク］：「マスターのことを知っておくことも、使い魔としては大切なことだから」

［聖奈美］：「それもそうね」

［ダルク］：「絶対に、とは言えないけど、私は、良い答えが返ってくると思うよ？　単なる私の堪だけどね」

［聖奈美］：「その言葉だけで十分よ、ありがとう」

――とにかく、明日の練習はしっかりとやらなくちゃ。

【聖奈美サイド　終わり】

……。

……。

……。

聖奈美ルート・アッチェレランド（17）

［場所：社会科室］

――やっぱり、眠れないようだ。さっきの昼寝も影響してるのかな？　まあいい、元々予想していたことだ、ゆっくり考えるにはちょうどいい。

布団の中で、さっきのことを思い浮かべる。

［聖奈美］：「一人の女性として、あなたのことが気になってる」

杠は確かにそう言った。

杠が俺のことを想ってる、まだちょっと驚きがあるな。何が驚きかって、言われた相手が杠だということだ。正直言って、一番そういうことを言うような奴ではないと思ってたから余計にそう思う。

今、俺がどう思っているかと言われれば、もちろん嬉しい。女性に好きだと言われて嬉しくないわけがないし、それに相手は杠だ。女子の中でもトップクラスの美人に含まれるはず。でも、それだけで付き合っていいかと言われればそうではない。ちゃんと自分と向き合って結果を出さなければ。

まず、俺は杠をどういう存在で見ているのか。初めてあった時は、本当に何だコイツと思っていたが、今になってみれば、それはあいつが目標に向かって頑張ってる姿だったのだとうなずける。だが杠は、少々間違った道に進みそうになっていた。今は立ち直ったようだけど、杠はその前まで、自分のやり方を自分自身どうなのかと思い悩んでいた。

その様子を見た俺の心に、何とかしたいという想いが芽生えた。そう考えると、俺にとって杠は、放っておけない存在ってことになるんじゃないか。

これは果たして、好きという感情に含んでいいんだろうか？

――いや、もっと単純に考えてもいいのか？

放っておけないって時点で、俺は杠のことを気にしてるってことなんじゃないのか？　だって放っておけないんだぜ？　目が離せないってことだ。それだけ俺は、杠に心を奪われてるってことなんじゃないか？　何事にも一生懸命に努力をするあいつの姿を見て、俺はどう思った？

心配になる反面、背中を押してやりたいって思った。それを考えた時点で、俺は杠を無意識に想っていたんじゃないのか？

ここ数日のことに関してもそうだ。意識はしていなかったけど、ほとんど毎日、俺は杠と同じ時間を共有した。生徒会だったり、メガネ探索だったり……それは偏に、あいつのために何かしてやりたかったんだろう。一人の男として、あいつに頼ってほしかったんじゃないか。――そう考えると、かなり心がスッキリしてくる。

これは、好きってことなんだよな。俺自身、あいつと一緒にいる時間は楽しいと感じてる。それだけでも、十分な理由になってくるのかな？

［吹雪］：「なら、きっと大丈夫だ」

自分の気持ちに嘘はない。あの時に抱いた感情は、俺の本心だったんだろう。これで、はっきりした答えが返せそうだ。

聖奈美ルート・アッチェレランド（18）

［吹雪］：「ごめんな杠、ようやく分かったぜ」

カーテン越しに、杠のいる布団に向かって小さく呟く。……既に時間は夜の一時を回っていた。さすがに、みんな寝ちゃっただろう。耳を澄ますと小さな寝息が聞こえてくる。杠も、多分寝てるんだよな？　……実はあいつも、俺と同じ状況になってるとか、そんなことがあったりするか？　見てみようか。俺はそーっとカーテンを開けて女子たちの様子を見てみる。すると――。

［聖奈美］：「あ……っ！？」

手前から二番目の布団が、びくっと動いて顔を逸らした。……間違いなく、あれは杠だろう。目がすっかり暗闇になれていたから、誰かも特定ができる。ひょっとして、俺の返す答えが気になって寝れないのか？　時刻は一時、暦の上では、さっきのことは昨日のことになっている。それはつまり、俺が答えを返す明日は今日になってるということで。

もう言ってしまうって手も、ひょっとしたらありなのか？　こういう答えって、なるべく早く返したほうがいいような気がするし。あいつは、まだ眠くないだろうか？　むしろあいつのほうが俺より目が冴えているのか？　あいつは俺の答えを待つ側。気が気じゃないって可能性もある。……思い切って聞いてみるか？　俺はそーっと布団を出て、杠の布団へと向かった。

［吹雪］：「杠」

［聖奈美］：「……っ！？　――すー、すー」

［吹雪］：「おい、起きてんだろ？　バレてるぞ？」

［聖奈美］：「……な、何よ？　一体？　あたし、寝ようとしてたとこなんだけど……」

［吹雪］：「じゃあ何でさっき、あんな反応したんだよ？　確実に顔背けただろ？」

［聖奈美］：「あ、あれは……寝返りよ、ただの」
［吹雪］：「まあ、別にいいけど……それで、眠れないのか？」
［聖奈美］：「……そ、そうね。何て言うか、その……」
言いたいことは何となく分かるが、本人が目の前にいるから言い出せないんだろう。
［吹雪］：「まだ、眠れそうにないか？」
［聖奈美］：「……そんなこと聞いて、どうするのよ？」
［吹雪］：「いや……もし眠れないんなら、月光浴でも一緒にどうかなって思って」
［聖奈美］：「こ、こんな時間に？」
［吹雪］：「月光浴なんだから、夜じゃなきゃできないだろ？　それに……話したいこともあるし」
［聖奈美］：「あ……」
話したいこと、それで俺が誘った意味が分かったんだろう。杠はさっと顔を背けた。
［聖奈美］：「ぜ、全然準備ができてないんだけど……」
［吹雪］：「まあ、そりゃそうだろうな」
俺自身、そう思ってる。
［吹雪］：「でも、こういうのって、早いほうがいいんだろう？　変に緊張させるのも体に良くなさそうだし」
［聖奈美］：「だ、だとしても……こんな真夜中に返事するなんて、聞いたことないわよ」
［吹雪］：「普通じゃないっていうのも、それはそれでいいんじゃないか？　それに、俺もさっき不意打ちを喰らったからな。ちょっとした仕返し、かな？」
［聖奈美］：「な、何よそれ……卑怯よ……」
［吹雪］：「ダメか？　杠」
［聖奈美］：「……わ、分かったわ。付き合うわ」
［吹雪］：「サンキュー。じゃあ、こっそり抜け出ようぜ」
［聖奈美］：「ぼ、防寒はしたほうがいいんじゃないかしら？　外、

寒いでしょう？」

［吹雪］：「あ、そうだな。気付かれないように準備しないと」

俺たちは、こそこそと外に出る準備を始めた。

……。

聖奈美ルート・アッチェレランド（19）

［場所：中庭］

［吹雪］：「はあ、何とかばれずに出てこれたな」
［聖奈美］：「そ、そうね。……」
［吹雪］：「杠、そんなに緊張すんなって」
［聖奈美］：「き、緊張なんて、別に……。うん、してるわ」
［吹雪］：「あれ？　認めたな」
［聖奈美］：「強がるのは……ちょっと無理だと思ったから」
［吹雪］：「――じゃあ、あんまり引っ張るのも悪いから」
［聖奈美］：「え、ええ……」
俺と杠は互いに向き合う。一度深呼吸し、空気を入れ替えてから――。
［吹雪］：「さっきの、杠の言ってくれたことの返事だけど――」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「俺も、お前のことが好きだ。だから、付き合おう」
［聖奈美］：「――っ！？」
その瞬間、杠は後ろのベンチに体を預けた。
［吹雪］：「お、おい、大丈夫か！？」
［聖奈美］：「だ、大丈夫よ……ちょっと、気が抜けただけだから……」
［吹雪］：「これが、俺の答えだ、杠」
［聖奈美］：「ええ、嬉しいわ、すごく」
杠はゆっくり、大きくうなずいた。
［聖奈美］：「……正直、断られるって思ってたわ」
［吹雪］：「何でだ？」
［聖奈美］：「それは、……言わなくたって分かるでしょう？　あなたの周りには、他にも女子がたくさんいるじゃないの」

［吹雪］：「他の？　――舞羽とか、カホラ先輩とかか？」
［聖奈美］：「ええ。あっちのほうが、すごく女の子らしいし、大久保のタイプなんじゃないかって思ってたわ」
［吹雪］：「まあ、嫌いではないけどな。でも、恋愛対象としては見てなかったよ」
［聖奈美］：「そ、そうなんだ……」
［吹雪］：「安心したのか？」
［聖奈美］：「安心っていうか……何て言えばいいか、よく分からない。でも、すごく良い気分ではあるわ」
［吹雪］：「それは、俺も思ってるよ」
　上手く言い表せないけど、心が満たされたようなそんな感覚。これはきっと、お互いの気持ちが通じ合えたからなんだろう。
［吹雪］：「これからも、よろしくな、杠」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ん？　どうした？　杠」
［聖奈美］：「その、もういいんじゃないかって思うんだけど」
［吹雪］：「な、何がだ？」
［聖奈美］：「その、杠っていう呼び方」
［吹雪］：「ああ、そういうことか」
［聖奈美］：「つ、つ、付き合うことになったんだし、名字で呼び合うっていうのもちょっと、固いと思うから」
［吹雪］：「それは、そうだな」
杠が固いと言うのだから間違いない。
［吹雪］：「じゃあ――聖奈美って呼ぶといいんだな」
［聖奈美］：「っ！？　ちょ、ちょっと待って」
［吹雪］：「何だよ？　聖奈美が俺にそう呼べって言ったんだぜ？」
［聖奈美］：「お願いだから、ちょっと待って。……失敗したかしら」
［吹雪］：「何がだよ」
［聖奈美］：「その、恥ずかしさの許容範囲が超えちゃってて……

収集がつかないのよ……異性に下の名前で呼ばれるのは、ほとんどなかったから」

［吹雪］：「祐喜はお前を名前で呼んでるじゃないか」

［聖奈美］：「祐喜は別よ。最初から、そう呼ばれてたから。あなたの場合は、その……言ってもらえた直後だから」

［吹雪］：「――聖奈美」

［聖奈美］：「あ、う……」

［吹雪］：「聖奈美」

［聖奈美］：「ちょ、ちょっと、待ってってば！　お、お願いだから……」

［吹雪］：「早く慣れちまったほうがいいって。聖奈美、聖奈美、みーなーみ」

［聖奈美］：「あう……ぐ、はう……」

呼び方のパターンを変える度に、聖奈美はコロコロ表情を変えていく。

［吹雪］：「大丈夫か？　聖奈美」

［聖奈美］：「あ、あなたがやってるんでしょう！　もう……」

［吹雪］：「はは、かわいいな、聖奈美は」

［聖奈美］：「か、からかわないでよ」

［吹雪］：「いや、本心から言ってるぜ、俺は」

［聖奈美］：「……あたしがかわいいって？」

［吹雪］：「ああ、もちろん」

今の問いかけだって、すごくかわいく見える。相手のことが好きだってことに気付くと、今までしてた仕草もそんな風に見えてくるのかな？

聖奈美ルート・アッチェレランド（２０）

［吹雪］：「俺もこれからは、ずっと下の名前で呼ぶからな」
［聖奈美］：「あう……」
［吹雪］：「――で？」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「え？　じゃなくて、今度はお前が俺の名前を呼ぶ番だろ？」
［聖奈美］：「え？　大久保の、下の名前？」
［吹雪］：「当然だろ？　俺だけ聖奈美って呼ぶのはおかしいし」
［聖奈美］：「あたしが、大久保の下の名前を……」
［吹雪］：「知らなかったか？　俺の下の名前」
［聖奈美］：「そ、そんなことないわよ！　ちゃんと知ってるわ」
［吹雪］：「じゃあ、下の名前で呼んでみようぜ」
［聖奈美］：「う……」
さっきから顔が真っ赤のまま変わらない。今日だけで、聖奈美のたくさんの表情が拝めそうだ。
［吹雪］：「恥ずかしくて、言えないか？」
［聖奈美］：「が、頑張ってみるわ。あなただって、言ってくれたんだから、あたしだって言わないと失礼だし……」
［吹雪］：「いつもみたいに、さらっと言えばいいじゃないか　大久保って言う感じでさ」
［聖奈美］：「無理……今は、絶対にムリよ……」
どうやら、聖奈美は恋愛に関してはメチャクチャうぶのようだ。そのうぶの中でも、かなり上位ランクに入るだろう。俺も恋愛経験はないけど、これを見てたら俺はまだまだ大丈夫だってことが分かる。
［聖奈美］：「い、いくわ……。ふ、ふ、――吹雪」
［吹雪］：「おお……」

［聖奈美］：「な、何よ？　そのおおっていうのは」
［吹雪］：「いや、好きな人に下の名前で呼ばれるのは、新鮮な感じがするから」
［聖奈美］：「あなた、下の名前で呼ばれるのがほとんどじゃないの。合宿をしてる女子たちなんて、あたし以外はみんな下の名前でしょう？」
［吹雪］：「だからこそ、じゃないか。ずっと大久保って呼んでた聖奈美が、俺の下の名前を呼んでくれたんだ、これは、かなり嬉しいぞ」
［聖奈美］：「そ、そう……」
［吹雪］：「じゃあこれからは、互いに下の名前だな」
［聖奈美］：「が、学校生活でも？」
［吹雪］：「ああ。……嫌か？」
［聖奈美］：「い、いやじゃないけど……恥ずかしいっていうか」
［吹雪］：「さっきからそればっかりだな、お前」
［聖奈美］：「しょ、しょうがないじゃない。分かってちょうだい……初めての、経験なんだから」
［吹雪］：「やっぱり、初めてなんだな」
［聖奈美］：「と、当然でしょう？　あたしが以前に付き合った経験があるようには見えないでしょう？」
［吹雪］：「まあ、正直な」
その経験があるなら、下の名前を呼ぶだけでこんなに時間はかからない。
［聖奈美］：「何もかも、初めてのことなんだから」
［吹雪］：「その初めての相手に、俺を選んでくれたんだな、聖奈美は」
［聖奈美］：「そ、そういう恥ずかしいことをあなたは……」
［吹雪］：「だって、本当のことだろ？」
［聖奈美］：「そ、それはそうだけど……時と場所を考えて言ってくれないと……」

［吹雪］：「今は、それを言う絶好の時間じゃないか？」
誰もいない夜のグランド。今言わないでいつ言うんだ。
［聖奈美］：「……あなたって、こんなに積極的だったかしら？」
［吹雪］：「正直になってるだけだと思うぜ。言われるのが嫌だっていうなら言わないけど」
［聖奈美］：「そ、そういうわけじゃ、ないけど……」
［吹雪］：「じゃあ、言ったっていいだろ？」
［聖奈美］：「う……その顔は、反則よ」
［吹雪］：「早く慣れることを、俺は進める」
［聖奈美］：「も、もう……」
聖奈美は、すごくむず痒そうな顔をしていた。
［聖奈美］：「でも……ありがと」
［吹雪］：「ん？」
［聖奈美］：「その、あたしの気持ちに、答えてくれて」
［吹雪］：「それは、俺だって思ってるぜ。むしろお礼を言うのは俺の方だろ、聖奈美が俺に気持ちを伝えてくれたから、俺ははっきり自分の気持ちに気付くことができたんだから」
［聖奈美］：「……あんな風に、あたしのために尽くしてもらえたら、……好きにならざるを得ないもの」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「な、何？　へ、変なこと言っちゃったかしら？」
［吹雪］：「いや、メチャクチャドキっとしたもんだから」
［聖奈美］：「ど、ドキっと？」
［吹雪］：「ああ。何ていうか、心臓が飛び跳ねたっていうか……とりあえず、今の発言がヤバすぎるってことは確実に言える」
［聖奈美］：「や、ヤバい？」
［吹雪］：「有り体に言えば、かわいすぎるってこと」
［聖奈美］：「そ、そんな言葉言ったかしら？　あたし」
［吹雪］：「言ったさ、はっきりと。好きにならざるを得ない……こんなこと言われたら下手な男は鼻血出るぞ」

［聖奈美］：「そ、そんなに？」
［吹雪］：「今の言葉には破壊力がありすぎる。あんまり周りでは言わないほうがいい」
［聖奈美］：「い、言わないわよ。それを言うなら、あなただってそうじゃないの。さっきから、言われて恥ずかしいことばっかりさらっと……あれだって相当危険よ」
［吹雪］：「それなら大丈夫だ、お前にしか言うつもりはない」
［聖奈美］：「そ、それはそれで結構危険よ。あたしの身が……もたなくなるかもしれないし……」
［吹雪］：「まあ、俺の場合は女子からの人気なんてないし、そんな心配いらねぇって」
［聖奈美］：「……あなた、結構鈍感？」
［吹雪］：「ん？　何が？」
［聖奈美］：「ううん、やっぱりいいわ。……変に教えちゃうと、おかしくなるといけないし……」
［吹雪］：「ん？　聞こえなかったんだが……」
［聖奈美］：「いいわ、そのまま聞こえないままでいて」
よく分からんが、いいって言うならそういうことにしておこう。
［吹雪］：「……眠くなってきたか？」
［聖奈美］：「……そういう風に見える？」
［吹雪］：「いや、全然。むしろさらに冴えたって感じがする」
［聖奈美］：「多分、もうしばらくは無理だと思う」
［吹雪］：「俺もだ、――じゃあ、しばらくこうしてしゃべってようぜ。今日一日で、聖奈美の新しい一面を発見したいし」
［聖奈美］：「……既に相当見せちゃってると思うけど」
［吹雪］：「まだまだ足りないって。多分、もっともーっと、あるはずだし……その数だけ、お前のことを好きになれると思うしな」
［聖奈美］：「吹雪……」
［吹雪］：「お？　今はさらっと呼んでくれたな、俺の名前」
［聖奈美］：「頑張って、自分のリミッター壊そうとしてるから」

［吹雪］：「り、リミッターって壊して大丈夫なのか？」
［聖奈美］：「なんとか、なるわ、きっと……ダメだったら、あなたが治してちょうだい」
［吹雪］：「わ、分かった。――とにかく、これからもよろしくな？　聖奈美」
［聖奈美］：「ええ、吹雪」
――俺たちの、新しい一日がこうして始まった。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（1）

12月24日（金曜日）

［場所：中庭］

……。

……。

……。

［吹雪］：「ん？　あれ、ここは？」

目を横にずらすと、俺の肩に顔を寄りかけて眠る聖奈美の姿。ああそうか、昨日はなかなか寝れそうにないから二人でしゃべってて……それで、知らぬ間に寝ちゃったのか。

［吹雪］：「待てよ、時間は……」

俺は携帯で時刻を確認する。――ふう、よかった。どうやら寝坊はしてないようだ。しかし、この寒い中でよく普通に眠れたな。……横に聖奈美の体温があったからか。とりあえず起こすか。俺は聖奈美の体を揺する。

［吹雪］：「おい、聖奈美。起きろ」

［聖奈美］：「ん、んん……」

［吹雪］：「おはよう、聖奈美」

［聖奈美］：「ん、おはよう……あれ？　ここは？」

［吹雪］：「ベンチだ、あのまま俺たち、寝ちゃってたみたいだ」

［聖奈美］：「あのまま……あ……う」

急に聖奈美の顔がゆでダコのように赤くなる。

［吹雪］：「な、何だよ？　起きて早々顔赤くして」

［聖奈美］：「えっと、その、あの……」

［吹雪］：「リミッター解除するとか言ってなかったか？」

［聖奈美］：「そ、そんなこと言ってたかしら？」

［吹雪］：「言ってたぞ？　俺が覚えてる」
［聖奈美］：「……ゆ、夢じゃなかったのね」
［吹雪］：「何だ？　夢にしたかったのか？」
［聖奈美］：「そ、そんなわけじゃないわ……ただ、どこから現実でどこまで夢なのかが区別がつかないっていうか」
［吹雪］：「多分、全部現実だと思うぞ」
［聖奈美］：「そ、そっか……」
［吹雪］：「俺はお前の彼氏で、お前は俺の彼女。夢じゃなく、現実だぜ」
［聖奈美］：「……そうね、うん……思い出してきたわ」
［吹雪］：「想いがつながって……感想は？」
［聖奈美］：「……やっぱり、嬉しいわね。何て言うか……気持ちが晴れやかっていうか、そんな感じ」
［吹雪］：「俺も、聖奈美と同じで嬉しいよ」
［聖奈美］：「――うん」
［吹雪］：「とにかく、みんなのところ戻るか」
まだ起床時間ではないから、きっと今なら何事もなかったかのように戻れるはず。
……。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（2）

［場所：社会科室］

――どうやら俺は、考えを誤っていたようだ。

［繭子］：「はーい、お帰りなさい～ナイスカップルさーん」

［聖奈美］：「あ、え？　な、何で？　どういうことなの？」

聖奈美は状況が飲み込めずにアタフタしている。

［吹雪］：「――しまった。寝てると思って抜け出したけど、実は起きてやがったか」

［繭子］：「ふっふっふ～、いくら静かに抜けてったとしても、隣でしゃべってたらさすがに気付いちゃうよ～二人とも」

［吹雪］：「やられた……」

［聖奈美］：「――つ、つまり？」

［吹雪］：「俺たちのことは、みんなに伝わってしまったらしい」

［聖奈美］：「――っ！？」

［繭子］：「――というわけで、おめでと～二人とも～」

［カホラ］：「おめでとー」

［舞羽］：「おめでとう」

［ダルク］：「おめでとう」

［吹雪］：「あ、ありがとう、ございます……」

［聖奈美］：「……」

［吹雪］：「おい、聖奈美、しっかりしろ」

［聖奈美］：「あ、え、ええ……バレちゃったのなら、隠したってしょうがないわね」

［繭子］：「まあ、隠しきれてなかったけどね～」

［聖奈美］：「そ、そうなんですか？」

［カホラ］：「まあ、確信はなかったけど」

［舞羽］：「あってもおかしくはないかなーっては思ってたかな」

［吹雪］：「どの辺がそうだと？」
［カホラ］：「どの辺っていうか、合宿に入ってから、二人はよく一緒に行動してたでしょう？　それを結構目撃したからってとこかしら？」
［舞羽］：「私も同じかな。二人とも、一緒にいる時すごく楽しそうだったから」
――想像以上に、周りの目は鋭いものだった。
［カホラ］：「よかったじゃないの、想いが伝わって」
［舞羽］：「お似合いだと思うよ」
［吹雪］：「何だか……優しいな、みんな」
［カホラ］：「何？　冷やかしてほしいの？　吹雪は」
［吹雪］：「い、いや……そんなことは決して」
［カホラ］：「それも少しは考えたけど……聖奈美のその様子を見てたらね……」
［吹雪］：「な、なるほど」
今の聖奈美は、ゆでダコ以上に赤くなっているかもしれない。
［カホラ］：「人間って、ここまで赤くなれるものなのね」
［吹雪］：「あはは、そうみたいですね」
［カホラ］：「とにかく、これからも仲良くね？　喧嘩なんかしちゃダメよ」
［吹雪］：「はい、もちろん気を付けます。な？　聖奈美」
［聖奈美］：「は、はい……大丈夫です」
［吹雪］：「お前、本当に大丈夫か？」
［聖奈美］：「え、ええ……何とか」
――想いが伝わった初日に、俺たちの関係はバレてしまったのだった。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（3）

［吹雪］：「どうだ？　少し落ち着いたか？」
［聖奈美］：「ええ、大分。……ごめんなさいね、色々と」
［吹雪］：「まあ、しょうがないんじゃないか？」
［聖奈美］：「ここ一日で、一年分くらい恥ずかしがったかもしれないわね」
［吹雪］：「はは、確かにそうかもな」
［聖奈美］：「あなたは、たいしたことなさそうね」
［吹雪］：「聖奈美が俺の分まで恥ずかしがってるからな。だから普通にしてられるんだよ」
［聖奈美］：「……慣れてる？　ひょっとしてこういうの」
［吹雪］：「馬鹿言うな、俺だって女性と付き合うのは初めてだぞ」
［聖奈美］：「そ、そうなの？」
［吹雪］：「ああ、言わなかったっけ？」
［聖奈美］：「うん、初めて聞いたわ」
［吹雪］：「じゃあ覚えといてくれよ、俺も、女の子と付き合うのは初めてだよ」
［聖奈美］：「そのわりには、結構大丈夫そうね」
［吹雪］：「確かに、俺だって恥ずかしいぜ？　でも、恥ずかしがって何もできないっていうのは嫌だから、多少の恥ずかしさは我慢して、楽しもうって思いが強いんだ」
［聖奈美］：「楽しむ？」
［吹雪］：「そう、聖奈美と付き合ってなきゃできないことだってたくさんあるはずだろう？　俺はそれを思う存分楽しみたいって思ってる。だから聖奈美もさ、恥ずかしいのは分かるけど、あんまり気にしないで一緒に楽しんでいこうぜ。むしろ、俺たちの仲の良さを見せつけるくらいの勢いでさ、どうせみんなにはバレちまってるんだし」

［聖奈美］：「確かに、今さら隠しても遅いわね……うん、そうね」
［吹雪］：「よし、それじゃあまずは、お互いの練習を頑張ろう。
もう、普通に練習できるだろ？」
［聖奈美］：「ええ、大丈夫だと思うわ」
［吹雪］：「昼飯、一緒に食おうな」
［聖奈美］：「ええ、分かったわ」

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（4）

［場所：教室］

［祐喜］：「――そっか、おめでとう吹雪」
［吹雪］：「あれ？　思ったより驚かないんだな」
［祐喜］：「もっと驚いてほしかったかい？」
［吹雪］：「別に反応にこだわりはないが……ひょっとして、薄々分かってたとか？」
［祐喜］：「まあ、そういうこともあるかな？　何となく、そんな気はしてたかも」
［吹雪］：「そうか」
［祐喜］：「これでも吹雪よりも聖奈美と一緒にいた期間は長いからね。自然と分かってくるような感じかな？」
［吹雪］：「なるほど」
［祐喜］：「ありがとね、わざわざ教えてくれて」
［吹雪］：「知っておいてほしかったからな、祐喜には」
ほっといてもそのうち知ることにはなるんだろうが、早い内に言っておいた方が対応できるだろうからな。それに、祐喜だったら変に冷やかすこともしない。
［祐喜］：「後輩たちにも、これは教えていいのかい？」
［吹雪］：「ああ、大丈夫だと思う。……実は生徒会の間でも祐喜と同じような予想がされてたりするのか？」
［祐喜］：「ん～無きにしも非ずかも。結構後輩たちは、そういう話に敏感なところあったかもしれないから」
［吹雪］：「それは、生徒会だからか？」
［祐喜］：「ただ、異性の話に敏感なだけだよ、きっと」
［吹雪］：「健全な女子と男子の思考か」
［祐喜］：「そういうこと。――聖奈美のこと、これからよろしく

ね」
［吹雪］：「おう、任せてくれ」
一緒に楽しんでいくと誓ったしな。
［祐喜］：「聖奈美の耳寄り情報を知りたいかい？　吹雪」
［吹雪］：「耳より情報？」
［祐喜］：「うん、聖奈美と付き合うことになった吹雪を祝して、僕が今まで一緒にいて分かった聖奈美の情報を提供してあげようかなって思って。まだ、聖奈美について知らないことってあるでしょ？」
［吹雪］：「そうだな」
きっと、まだまだたくさん出てくるはずだ。
［祐喜］：「これから使えるであろう情報を提供してあげるよ。もちろん、数はあまり多くなくするよ、自分で見つける楽しさが半減しちゃうからね」
［吹雪］：「はは、気遣いサンキュー」
［祐喜］：「じゃあ、教えてあげる。聖奈美はね――」
……。
［祐喜］：「まあ、これくらいかな。分かってることかもしれないけど」
［吹雪］：「いや、それを知ってると知らないでは結構違ってくるよ。教えてもらえて助かるぜ」
［祐喜］：「是非、今後に活かしてください」
［吹雪］：「ああ、そうする」
［聖奈美］：「――吹雪、待たせたわね」
［祐喜］：「噂をすれば、ってやつだね」
聖奈美は教室のドアの前で手を上げている。
［吹雪］：「おう、今行くよ。じゃあ、祐喜、ちょっと行ってくる」
［祐喜］：「うん、楽しんできてよ」
［聖奈美］：「――何か話してたの？　祐喜と」
［吹雪］：「ああ、内容は後で話す。とりあえず、移動しようぜ。

なるべく、静かなところで食いたいって思うが」
［聖奈美］：「そうね……じゃあ中庭にしましょう。ほとんどの人が学食に行くから空いてると思うし」
［吹雪］：「ああ、そうするか」
俺たちは階段を下りて中庭へ――。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（5）

［場所：中庭］

［吹雪］：「よっこらしょ」
［聖奈美］：「隣、いいわよね？」
［吹雪］：「隣以外に聖奈美が座っていい席はないぜ？」
［聖奈美］：「なら、遠慮なく」
聖奈美は俺の横に、スカートを抑えながら座る。朝のように、体を俺に寄せながら。
［聖奈美］：「いい、よね？」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
［聖奈美］：「――食べましょう」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
俺たちは弁当を広げて昼食を取る。作ってくれたのはカホラ先輩だ。
［吹雪］：「お、うまそうだな」
［聖奈美］：「そうね、彩り鮮やかで」
［吹雪］：「じゃあ、いただきます」
［聖奈美］：「いただきます」
早速弁当に箸を伸ばす。
［吹雪］：「うん、うまい」
［聖奈美］：「本当に……味付けがすごくちょうどいいわ」
［吹雪］：「これは、元気が出てくるな」
［聖奈美］：「うん、そうな」
［吹雪］：「うん……こっちのおかずもなかなか……」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「もぐもぐ……ん？　どうした？　聖奈美」
気付けば俺のほうをじっと見つめている。

［聖奈美］：「ううん、その……あたしのお弁当の時も、そうやって食べてくれてるのかなって心配になって……」
［吹雪］：「もちろんじゃないか、聖奈美の作る弁当だって最高だぜ？」
［聖奈美］：「でも、クラスが違うからその様子は見えないし」
［吹雪］：「お前の作った夕食を食ってる時の俺の様子が証拠にはならないか？」
［聖奈美］：「それは知ってる。嬉しいんだけど、お弁当でも……褒めてほしいっていうか」
［吹雪］：「……今の、ヤバいな」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「嫉妬っていうのかな？　今の聖奈美の発言は。それがすごく、グッときた」
［聖奈美］：「し、嫉妬とかそういうのじゃ……。……なのかしら？」
［吹雪］：「カホラ先輩の料理を美味しく食べてる俺に対して、悔しいって思ったか？」
［聖奈美］：「悔しいっていうか、不安になったというか」
［吹雪］：「多分、同じようなものだな」
［聖奈美］：「何でそれが嬉しいって思うのよ？」
［吹雪］：「そりゃそうだろ。自分の好きな人が、自分のことを想って対抗してくれてるんだ。男冥利に尽きるってやつだよ」
［聖奈美］：「そ、そこまでなの？」
［吹雪］：「ああ。恋人の嫉妬っていうのは、基本的に嬉しいことだと俺は思う」
［聖奈美］：「じゃあ、あなたもあたしに対してそれを抱くことも？」
［吹雪］：「あるだろうな、きっと」
［聖奈美］：「あたしが、他の男子としゃべっていたら？」
［吹雪］：「嫌だな、それは。聖奈美には、俺とだけしゃべってほ

しいって思うから」
［聖奈美］：「相手が祐喜とかでも？」
［吹雪］：「うーん、それは悩むところだな。あいつは良い奴だし、俺たちのことを分かってくれてるから……それは許そう、うん。でも、あまり他の男子としゃべってはほしくないな、俺が暴れ出すかもしれない」
［聖奈美］：「そ、そうなの」
［吹雪］：「ああ、そうだ。祐喜で思い出したけど、さっき何を話してたかって、俺たちの関係のことを話してたんだ。俺と聖奈美が付き合うことになったって」
［聖奈美］：「あ、教えちゃったのね」
［吹雪］：「あいつには結構お世話になってるからな。早いうちに分かってもらったほうが対応しやすいと思って」
［聖奈美］：「そうね。何て言ってたの？　祐喜は」
［吹雪］：「純粋に喜んでくれてたよ。何となくそんな気はしていたらしい」
［聖奈美］：「……分からなくもないような気がするわね」
［吹雪］：「思い返してみるとな。お前を助けたくて、必死に動いてた姿を見てたわけだし」
［聖奈美］：「そうね。頭に焼き付いてるわ、あなたがあたしのために動いてくれてた姿」
［吹雪］：「それは嬉しいな。頑張った甲斐もあったってもんだ」
［聖奈美］：「お互いに助け合っていくっていう大事なことを、あなたはあたしに教えてくれた。これからは、それを念頭に置いて頑張っていくわ」
［吹雪］：「ああ、一緒にな。お前の目標は俺の目標でもあるから」
［聖奈美］：「じゃあ、あたしだってあなたのことを応援しないと。……吹雪の目標って何なのよ？　よく考えたら聞いたことなかったわ」
［吹雪］：「まあ、言ってなかったからな」

［聖奈美］：「そうよね……何なの？　吹雪の目標は？」
［吹雪］：「……言われてみると、あんまりこれと言ったものがないというか」
［聖奈美］：「何かあるでしょう？　思い返したら」
［吹雪］：「まあ、今一番望んでることだったら――あれだけどな」
［聖奈美］：「それを教えなさいよ」
［吹雪］：「いいのか？　言って。結構恥ずかしいことだと思うぞ」
［聖奈美］：「大丈夫、朝に気持ちは切り替えたはずよ」
［吹雪］：「じゃあ言うぜ？　今俺が望んでることは、聖奈美と幸せな日々を送っていくこと。それが、今俺が一番望んでることだ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「やっぱり、恥ずかしかったよな？」
［聖奈美］：「ううん、何となく予想はしてたんだけど……一番って言葉に心が反応したみたいで」
［吹雪］：「でも、事実だ。一番の目標は何だって言われたら、聖奈美との幸せな時間って言うぞ」
［聖奈美］：「じゃあ、あたしもそれを応援するわ。あたしも、それを望んでるから」
［吹雪］：「じゃあ、一緒に目指していこうな」
［聖奈美］：「ええ。ふふ」
今、聖奈美が笑ったよな？　今のは見間違いじゃないはず。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（6）

［聖奈美］：「どうしたの？　あたしの顔見て」
［吹雪］：「今、聖奈美が笑ったなって思って」
［聖奈美］：「ええ、それがどうかしたの？」
［吹雪］：「いや、すげぇ嬉しい」
［聖奈美］：「どうして？　笑っただけなのに」
［吹雪］：「あー、えっと。……怒らないか？」
［聖奈美］：「聞いてみないと分からないわよ。でも……多分大丈夫だと思う」
［吹雪］：「じゃあ、話すよ。実は聖奈美が風邪で休んでる時、ダルクから聖奈美の家のことを聞かせてもらったんだ」
［聖奈美］：「ああ……」
ちょっと複雑な表情を浮かべる聖奈美だったが、俺はそのまま言葉を続ける。
［吹雪］：「その時に、聖奈美が笑ってる表情は珍しいことを知ってさ。だから、すごく嬉しかったんだ、聖奈美を笑わせることができて。……気に障ったか？」
［聖奈美］：「ううん、大丈夫よ。それくらいで怒ったりしないわ」
［吹雪］：「そりゃ、よかった」
［聖奈美］：「自分でも薄々分かってたから。あたし、こんな性格だから、どうしても人前で笑ったりしたら……みたいなことを考えちゃうのよ」
［吹雪］：「ああ、なるほど」
何となく分かる気がする。
［聖奈美］：「周りの空気、って言ったらいけないかもしれないけど、あたしは笑わないほうがいいようなイメージがみんなに着いちゃってるからより一層し辛いというか……そんな感じなの」
［吹雪］：「だから、笑える場所が限定なのか」

［聖奈美］：「ええ、家族の前で表情を作る必要もないし」
［吹雪］：「じゃあ、その中に俺も入れてもらえてるのか？」
［聖奈美］：「――さっきのあたしの顔が、その証拠でしょう？　別に聞かなくったって」
［吹雪］：「いや、直接言ってもらわないと、人間ってのは不安になるんだ」
［聖奈美］：「しょうがないわね。――もちろん、吹雪も含まれてるわ……その……あたしの恋人だもの」
［吹雪］：「――生きててよかったと実感するな」
［聖奈美］：「そ、そんな大げさよ」
［吹雪］：「大げさなもんか。俺はお前との幸せな日々を望んでる男だぞ？　これ以上嬉しいことはない」
［聖奈美］：「こ、声が大きいわよ、吹雪。あ、あたしも嬉しいわ、ありがとう」
［吹雪］：「うん。やっぱり、聖奈美には笑っていてほしいもんだ」
笑顔でいれば、自然と幸福を呼んでくれる気がするし。
［聖奈美］：「それは、吹雪の今後次第で変わるかもしれないわね」
［吹雪］：「つまり、俺が聖奈美を幸せにすればいいわけだ」
［聖奈美］：「もちろん、あたしも頑張るけどね」
［吹雪］：「任せろ、全力でお前を楽しませるよ」
［聖奈美］：「ふふ、楽しみにしてるわ」
［吹雪］：「――にしても、聖奈美は親孝行だよな」
［聖奈美］：「どうしたのよ、急に」
［吹雪］：「いや、ダルクから話を聞いた時から思ってたことだよ。月並みな言い方だけど、偉いと思う、ホントに」
［聖奈美］：「褒めても何も出ないわよ？」
［吹雪］：「純粋に思ってるだけさ。仮に俺が聖奈美のような立場だとしたら、かなり萎縮してたと思う。財閥の社長の子供だったら、嫌が応にも期待とかを背負わなくちゃならない。そんな環境で育ったら、絶対にプレッシャーを感じるはずだ。それも、普通とは比べ

物にならないくらいの。逃げ出したいって気持ちがあってもしょうがないことだと思う。だけど、聖奈美はそれをちゃんと真正面から受け止めて、やり抜こうとしてる。期待に答えたいってあきらめずに努力してる。これは気持ちだけではできないことだろ？　聖奈美の父さんも、きっと鼻が高いだろうさ」

［聖奈美］：「――ありがとう、そういう風に捉えてくれて」

［吹雪］：「誰もが思うと思うけどな。だって、聖奈美は自分が財閥の娘だって言ってないんだろう？」

［聖奈美］：「ええ、入学の時にも伏せてもらうように言ってあるわ。分かってる人は分かってるでしょうけどね」

［吹雪］：「結構大きな財閥なんだよな？　……俺は今まで知らなかったけど」

［聖奈美］：「別に知らなくてもいいわ。知ってほしかったら入学当初から自分で公表してるでしょう？」

［吹雪］：「そうだな。それも、自分を磨くためなんだろう」

［聖奈美］：「そうね。あまり、財閥の娘として見られるのは嫌だったから。普通の生徒として過ごすことで、何か分かることがあるかなって思ったし」

［吹雪］：「――きっと、聖奈美の父さんは立派な人なんだろうな」

［聖奈美］：「どうして、そう思うの？」

［吹雪］：「お前を見てたら、自然とそう思うさ」

［聖奈美］：「ええ。家族を抜きにしても、とても良い人よ、あたしのお父さんは」

表情を見てる限り、本当にそうなんだと感じる。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（7）

［聖奈美］：「吹雪は、社長って聞くとどういうイメージを想像するかしら？」
［吹雪］：「思ってることを素直に言っていいのか？」
［聖奈美］：「ええ」
［吹雪］：「上に立つものだから、どうしても厳しそうなイメージがあるな。ちょっとスパルタが入ってそうな」
［聖奈美］：「一般的な意見でしょうね。でも、あたしのお父さんはちょっと違うの。厳しい人でもあるんだけど、すごく優しい人でもあるの」
［吹雪］：「メリハリがついてるってことか？」
［聖奈美］：「そう。後、誰に対しても平等なところも、お父さんの良いところよ。自分の立場に驕ることなく、誰にでも同じ態度で接する。人によっては厳しいイメージが目立つかもしれないけど、でもそれはお父さんが、その人を伸ばしたいって思うからこその優しさであると思うの」
［吹雪］：「鞭だけじゃないってことだな」
［聖奈美］：「ええ、褒める時は褒めてくれるから。だからあたしもこうして頑張ることができる」
［吹雪］：「なるほどな」
［聖奈美］：「あたしのお父さんは、あたしの目標よ」
［吹雪］：「――いつか、会ってみたいもんだな」
［聖奈美］：「あたしも会いたいわ。仕事が忙しいから、あまり会えないのよね。出張とかはしょっちゅうあるし、帰宅時間も夜遅いし」
［吹雪］：「多忙なんだな」
［聖奈美］：「社長だからしょうがないことだけどね。だから普段は、あまり会話とかできないのよ」

［吹雪］：「やっぱり、寂しいよな？」
［聖奈美］：「でも、それと同じくらい尊敬の念を抱くわ。投げ出すことなくひたむきに続けてるんだもの。……寂しいのは確かだけどね」
［吹雪］：「――代わりになれるかは分からないけど、そういう時はいつでも言えよ？」
［聖奈美］：「ええ、ありがとう」
［吹雪］：「……ちょっと、嫉妬しちまったよ、聖奈美のお父さんに」
［聖奈美］：「え？　どうしてよ？」
［吹雪］：「聞いてるだけでも、すごい立派な人なんだってことが分かるからさ。それに、俺の知らない聖奈美をたくさん知ってるわけだし。同じくらいの存在になれるのかってちょっと不安になってな」
［聖奈美］：「……馬鹿ね、あなたは」
［吹雪］：「まあ、そうだろうな」
［聖奈美］：「そ、そこで素直に認められるのもちょっと……」
［吹雪］：「はは、自分でも何言ってるんだって思うからよ」
張り合う相手を全く間違えている。だけど――。
［聖奈美］：「大丈夫よ、あなただって、十分立派だから」
［吹雪］：「聖奈美？」
［聖奈美］：「確かに、お父さんはすごい人だって思うわよ？　でも、同じくらいあなたもすごいってあたしは思ってるわ。もう、隠す必要もないから言うわ。あなたは、あたしにとって理想の人よ」
［吹雪］：「なっ！？　マジか？」
［聖奈美］：「ええ、マジよ」
［吹雪］：「でも俺、お前に結構注意をされたりしてきたぞ？」
［聖奈美］：「それは日常のほんのちょっとしたことでしょう？　あなたの本質を注意してたわけじゃないもの」
［吹雪］：「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、そんな理想と思

われるようなことをしてたか？　俺は」
［聖奈美］：「ええ、してたわよ」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「何よ？　今度は黙って」
［吹雪］：「いや、聖奈美がすらすらとそんなことを言ってくれるとは思わなくて……」
［聖奈美］：「朝に気持ちを切り替えたから。それを教えてくれたのだってあなたじゃないの」
［吹雪］：「まあ、そうなんだが」
［聖奈美］：「今だから言うわ、怒らないで聞いてくれる？」
［吹雪］：「ああ」
［聖奈美］：「正直言ってあたし、最初はあなたのことが嫌いだったわ。ピークはマジックコロシアムの当日かしら。理由は単純よ、得意としてた魔法の実技で初めて負けてしまった相手だから」
［吹雪］：「ああ、なるほど」
［聖奈美］：「すごく、悔しかったわ。たくさん練習をして、たくさん魔法に磨きをかけてたつもりだったから。テストが終わった後も、勝手に1位だと確信してた。そしたら、あなたが1位であたしが2位。わずかな点数差でも負けは負け、行場のない悔しさが体中を駆け巡ったわ。そして、その後に誓ったの。次は絶対に勝ってやるって。試験が始まるずーっと前から細目に練習を続けた。あなたに負けた時以上の練習を重ねてきたつもりだった。でも――結果はまた一緒だった」
［吹雪］：「それで、あれか」
［聖奈美］：「今思い返せば、完璧に理不尽だって思うわ。自分だけがたゆまぬ努力をしてるって思いこんでいたから。ただ、もやもやが収まらなくて気付いたらあなたに喧嘩を売りに行ってた」
［吹雪］：「確かに、あれは衝撃だったな」
［聖奈美］：「悪かったと思うわ、本当に」
［吹雪］：「まあまあ。それで、続きは」

［聖奈美］：「それで、あたしは勝手にあなたに復讐しようと思って、マジックコロシアムへの出場を命令した。あたしのほうがあなたよりも実力が上なんだって証明したくてしょうがなかった。次こそは絶対に……そう何度も言い聞かせて、前年以上に魔法の練習をしてきた。そして、当日……あたしはちょっと心が揺らいだわ、あなたの魔法を見て」

［吹雪］：「俺の魔法？」

［聖奈美］：「ええ。あなたは予選の試合で、あたしが唱えることができない魔法を唱えていた。それも、一つや二つじゃなくて、たくさん……その時に、本当に勝てるのかってすごく不安になってた。自分を鼓舞してあなたに戦いを挑んだけど……結果はあなたの勝利。すごく悔しかったわ、実技と合わせて、あなたに三連敗を喫したわけだから」

［吹雪］：「かなり、追い詰められたけどな」

本当に、紙一重の勝利だったと思う。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（8）

［聖奈美］：「事実は事実で受け止めようとした、でも、敗北した理由は分からなかった。あなたに負けてしばらく、そればっかり考えてた。そんな時、あなたがあたしの教室にやってきた、その時に、予想外の言葉をかけてくれたわ。あなたは覚えてる？」

［吹雪］：「もちろん。――変ないがみ合いはこれまでにしないか？　って俺は言った」

［聖奈美］：「ええ。すごく、びっくりしたわ。あたしはあなたを勝手に悪者にしてたのに、それなのにあなたはあたしに優しく声をかけてくれた。さらに、その後――」

［吹雪］：「仲良くしないか？」

［聖奈美］：「あたしが負けたっていうのに、あなたはあたしの実力を認めてくれた。自分のことよりも、他人のことを心配してくれた。その時あたしは、どうして自分が負けたのかが分かった気がした。はっきりではなかったけど、自分に足りないものが少し見えた気もした。――自分の考えを改めるきっかけをくれたあなたに、あたしは少なからず好感を持った。それが今に至ってるのよ、――実際は全然理解してなかったんだけどね」

［吹雪］：「そうだったのか……聖奈美に良い影響を与えてたんなら、俺は嬉しいけどな」

［聖奈美］：「……やっぱり変わってるわ、あなた」

［吹雪］：「もう言われ慣れちまったな、それは」

［聖奈美］：「別にけなしてるわけじゃないわよ？　今は褒め言葉みたいなものよ」

［吹雪］：「具体的にどういうとことが変わってるんだ？　まだちょっと理解できてないんだよな」

［聖奈美］：「――一言で言えば、あたしのことを気にかけてくれるところかしら」

［吹雪］：「聖奈美を気にかける……当然のことじゃないか？」
［聖奈美］：「それは今だからでしょう？　ちょっと前のことを考えてみなさい。あたしは生徒会長で、風紀の鬼と言われてたの。それに、生徒会長とは思えない横暴と言える物言いをあなたにした女……普通だったら、こんな女に関わろうなんて思わないはずよ？　だけど、あなたはそういう目で見なかった。見てたかもしれないけど、嫌な顔をしなかった。普通の女性としてあたしを扱ってくれた。変わってるって思って当然じゃないかしら？」
［吹雪］：「うーん……」
［聖奈美］：「分からないか……それも変わってるところよね」
［吹雪］：「変人なのか？　俺は」
［聖奈美］：「ええ、変人も変人よ。でも……そんなあなただから、あたしは良かったんだろうけど」
［吹雪］：「はは。まあ、良い意味の変人なら、俺は喜んで変人でいるけどな。俺が変人だったから、聖奈美とこうしていられるわけだろ？」
［聖奈美］：「そうね」
［吹雪］：「じゃあ、このまま、変人でいるよ、俺は。見捨てないでくれよ？　俺を」
［聖奈美］：「当たり前よ。最後まで責任は取るわ」
［吹雪］：「ああ、よろしく頼むぜ」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
何だろう、この空気は。別に嫌とかそういうのじゃないんだが、何だかさっきと違う空気が流れている。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（9）

［吹雪］：「そういえば、ダルクは一緒じゃなかったんだな？」
［聖奈美］：「え、ええ。二人でご飯を食べてきてって言われたから」
［吹雪］：「あ、そうなのか」
［聖奈美］：「ええ、気を遣ってもらったみたい」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「……」
これはきっとあれだ。お互いにお互いを意識してるんだと思う。
でなきゃ、俺の心臓はこんなにドキドキ言わないはずだ。きっと聖奈美も、俺と同じような気持ちになってるんじゃないだろうか。
［聖奈美］：「ね、ねえ」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［聖奈美］：「その……今、何を考えてたのかなって……黙ってたでしょう？」
［吹雪］：「ああ、……多分、聖奈美と同じようなことだと思うが」
［聖奈美］：「あ、そうなんだ。……じゃあその……してみたいって思わないかしら？」
［吹雪］：「え？」
［聖奈美］：「えって……同じこと考えてたんじゃないの？　その……言っていいかしら？」
［吹雪］：「ああ、別に問題ない」
［聖奈美］：「その……キス、とかそういうこと」
［吹雪］：「あ、ああ……そうか、うん」
俺は一体何を勘違いして……そんな先を予想してもしょうがないだろうよ。
［聖奈美］：「今日の朝は、あたしが上がりすぎてて何もできなかったから……吹雪に我慢させてたんじゃないかって思って」

［吹雪］：「確かに、してなかったな」
［聖奈美］：「だから、吹雪がいいなら……あたしはしてみてもいいかなって」
［吹雪］：「ここでか？」
［聖奈美］：「え、ええ。今、中庭には誰もいないみたいだし……ちょっとだけならバレないでしょう？　多分」
［吹雪］：「まあ、そうだろうが……いいのか？　俺は嬉しいが、聖奈美の気持ちは？」
［聖奈美］：「良くなかったら、自分からこんなこと言い出さないわよ、普通。……言い方、悪かったわね。あたし、吹雪とキスがしてみたいって思ってるの」
［吹雪］：「み、聖奈美」
［聖奈美］：「だから、付き合ってみてくれないかしら？」
そんなこと言われて、黙ってられるわけがない。
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「どうしたの？」
［吹雪］：「いや、一応確認をば」
よし、本当に誰もいないようだ。
［聖奈美］：「ど、どうするといいかしら？」
［吹雪］：「こういうのは、男からしたほうがいいよな？　じゃあ、聖奈美は目をつぶっててくれ。俺が、するから」
［聖奈美］：「い、いいの？」
［吹雪］：「ああ。俺から……させてくれ」
［聖奈美］：「ええ、分かったわ」
［吹雪］：「ちなみに、経験は？」
［聖奈美］：「言ったでしょう？　男性と付き合うのは初めてだって、したことなんて、一回もないわ」
［吹雪］：「じゃあ、お互いに初めてだな」
［聖奈美］：「ええ。これがあたしの、ファーストキスよ」
［吹雪］：「おお……またぐっと来てしまった」

［聖奈美］：「ま、また？」
［吹雪］：「ああ。今日の聖奈美は、色々とかわいすぎる」
［聖奈美］：「ま、またそんなこと言って……」
［吹雪］：「本当のことだ、言ったっていいだろ？」
［聖奈美］：「それは、嬉しいけど……やっぱり外だから」
［吹雪］：「今からキスしようとしてるのに、そんなこと言うのか？」
［聖奈美］：「あ……そうね……うん」
［吹雪］：「大丈夫か？」
［聖奈美］：「ええ、大丈夫よ。……もう、閉じたほうがいいかしら？」
［吹雪］：「ああ、いいよ」
［聖奈美］：「じゃあ――ん」

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（１０）

聖奈美は顔をこちらに向け、すっと目を閉じた。改めて見ると聖奈美はすごく顔立ちが美しい。その下方にある桜色の唇。これを今から、自分の唇と重ねるのか。他の男子からしたら、相当羨ましいことなんだろうな。それを今から自分ができる……喜びも倍増だ。お互いに初めてだ。上手くできるか分からないけど、なるべく上手くできるように心掛けよう。

［聖奈美］：「あ……」

俺は聖奈美の肩に手を置き、自分の顔を近づける。そして、目をつぶり――。

［聖奈美］：「ん……」

［吹雪］：「……」

俺たちの唇が重なった。特に動かしたりはせず、お互いに唇の体温を測るように。

［聖奈美］：「ん、ん……」

［吹雪］：「……」

１０秒程経った頃、俺はゆっくり顔を離した。

［聖奈美］：「はあ……」

［吹雪］：「どう、だった？」

［聖奈美］：「何て言えばいいのかしら？　その……吹雪の唇が重なった時に、色んな気持ちが上に上がってきて……えと、つまり――よかったわ」

［吹雪］：「そうか、ならよかった」

［聖奈美］：「――ねえ」

［吹雪］：「ん？」

［聖奈美］：「今度は、あたしからしてみても、いいかしら？」

［吹雪］：「聖奈美から？」

［聖奈美］：「ええ、吹雪にだけしてもらうのは、不公平かなって

思うし。あたしからも……してあげたいって思うから」
何て嬉しいことを言ってくれるんだろう。俺はすぐにうなずいた。
［吹雪］：「同じようにするといいか？　俺が自分で言ったように」
［聖奈美］：「ええ、できたら」
［吹雪］：「分かった」
今度は俺が目をつぶって待つ。
［聖奈美］：「――ん」
柔らかな感触が唇に伝わった。
［聖奈美］：「ん、ちゅ……」
［吹雪］：「聖奈美……」
……。
［聖奈美］：「ん……はあ……」
しばらくした後、聖奈美は体を離した。
［吹雪］：「ありがとう、聖奈美」
［聖奈美］：「どう、だったかしら？」
［吹雪］：「うん、俺も何て言えばいいのか……とにかく、すごい嬉しいのは確かなんだけど」
［聖奈美］：「お互いに初めてだし、少しずつ知っていけばいいわよね？」
［吹雪］：「そうだな、焦らなくていいはずだ」
［聖奈美］：「ええ」
［吹雪］：「でも、……うん」
［聖奈美］：「どうしたの？」
［吹雪］：「いや、以前誰かが言ってたんだ。キスも魔法の一つだって……今の感覚は、確かにそんな気がしたなって思ってさ」
［聖奈美］：「誰が言ったかは、やっぱり覚えてないのね」
［吹雪］：「非公表かもしれないぜ？　大っぴらに言うのは恥ずかしい内容だし」
［聖奈美］：「そうね。でも、分かる気がするわね」
［吹雪］：「ああ。触れ合った時に、聖奈美の感情とかが伝わって

きて、すごく幸せな気持ちになった」
［聖奈美］：「あたしもよ。吹雪の心が、自分に伝わってきて、すごく良い気持ちになったわ」
［吹雪］：「素敵な魔法を会得したかもな、俺たちは」
［聖奈美］：「ふふ、そうね」
ぎこちなかったけど、これが俺たちのファーストキスだ。
――もっとこうして二人だけでいたかったけど。
［聖奈美］：「――時間、来ちゃったわね」
［吹雪］：「ああ」
今日が今年最後の授業、休むわけにはいかない。
［吹雪］：「今日、生徒会はあるのか？」
［聖奈美］：「ええ、来てくれるかしら？」
［吹雪］：「ああ、もちろん。結構大詰めなんだよな？」
［聖奈美］：「そうね、今日で終わることができるのが理想なんだけど」
［吹雪］：「じゃあ俺も、力を貸すよ」
［聖奈美］：「悪いわね、本当に。生徒会じゃないのに」
［吹雪］：「もう、言わなくても分かるだろう？　俺は、聖奈美の喜ぶことがしたいんだ。だからいいのさ」
［聖奈美］：「ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「教室戻るか」
［聖奈美］：「ええ、そうしましょう」
……。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（11）

［場所：教室］

［聖奈美］：「じゃあ、また後でね」
［吹雪］：「ああ、またな」
――今から放課後が待ち遠しい。
たった一日でこうも変わるとは……俺にもこんな一面があったんだな。……恋は盲目、よくできた言葉だ。
……。
……。
［吹雪］：「祐喜、生徒会室に行くんだろう？」
［祐喜］：「うん、そうだよ。……それを聞いてくるってことは？」
［吹雪］：「ああ、俺も手伝いに行く」
［祐喜］：「そっか。……生徒会の二学期の救世主は吹雪で決まりかもしれないね」
［吹雪］：「大げさだって。手伝ったのなんてほんの少しの期間じゃないか」
［祐喜］：「その数日はかなり大きいんだよ。我が生徒会は、吹雪にどれだけ助けられているか」
［吹雪］：「何度も言うけど、役に立てているなら俺は嬉しいよ」
［祐喜］：「はあ……どうして吹雪は生徒会じゃないんだろうなー」
［吹雪］：「何でって言われてもな……」
［祐喜］：「分かってるよ、気持ちは。でも、それだけにすごく悔しいんだよ……入学当初から目を付けているんだったよ」
［吹雪］：「入学当初は、祐喜だって生徒会に入るとは決まってなかったんじゃないか」
［祐喜］：「まあ、そうなんだけど……今の記憶のまま元に戻れる

なら、絶対に吹雪をスカウトしてるよ、僕は」
［吹雪］：「俺の記憶は消去されてるんだよな？　その場合」
［祐喜］：「そうだね、吹雪も知ってたら話は進まないし」
［吹雪］：「そうなると、祐喜の第一印象はただのスカウトマンってことになるぜ？　そうなると、今みたいな関係にはなれないかもしれないぞ？」
［祐喜］：「あー、そういう可能性も出ちゃうのか……じゃあやっぱり、今からスカウトしたほうがいいのかな……」
［吹雪］：「おいおい……」
［祐喜］：「大きな原石を落としてしまったよ、我が生徒会は」
［吹雪］：「まあまあ。今日がラストスパートなんだろう？」
［祐喜］：「うん、そうだね。今日の出来次第で冬休みもあるかないかが決まるんだ」
［吹雪］：「じゃあ、早く行こうぜ」
［祐喜］：「うん、早く聖奈美に会いたいだろうしね」
［吹雪］：「ゆ、祐喜……」
［祐喜］：「あはは、照れない照れない……」

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（12）

［場所：生徒会室］

［祐喜］：「お疲れ様ー」
［吹雪］：「失礼します」
俺が部屋に入ったと同時だった――。
パン、パン。
［吹雪］：「おおっ！？」
ドアの両サイドからクラッカーが打ち鳴らされた。
［吹雪］：「な、何だ！？　一体」
［後輩Ａ］：「せーの！」
［四人］：「聖奈美先輩、吹雪先輩、おめでとうございまーす！」
そしてパチパチと拍手が上がる。聖奈美は机の上で恥ずかしそうに顔を赤くしている。
［吹雪］：「えっと……これは祐喜が企画したのか？」
［祐喜］：「ううん、まだそのことについては説明してなかったはずなんだけど」
［吹雪］：「じゃあ、自発的にってことか？」
［祐喜］：「多分、そうだと思う。そうだよね？　みんな」
四人の後輩は一斉にうなずいた。
［吹雪］：「何で、このことを知ってるんだ？」
［後輩Ｂ］：「すいません。実は中庭を通り過ぎた時に、お二人が仲良くお弁当を食べてるところを見つけてしまったんです」
［後輩Ａ］：「で、これはもしかしたらと思って先にきた聖奈美先輩にお話を伺ってみたところ……そうだという言葉をいただいたんです」
［吹雪］：「なるほどな……」
［後輩Ｃ］：「おめでとうございます、吹雪先輩」

［後輩Ｄ］：「近年稀に見るベストカップルだと思いますよ、俺」
［吹雪］：「あ、ありがとう……」
［後輩Ｂ］：「本当に、すごいカップルの誕生よね？　だってマジックコロシアム優勝者と準優勝者の二人でしょ？　ここまで魔法に長けたカップルはいないんじゃないかしら？」
［後輩Ａ］：「うんうん、そうよね。すっごく素敵」
［後輩Ｃ］：「吹雪先輩、俺、心から応援してますから」
［後輩Ｄ］：「俺もです、聖奈美先輩と幸せになってください」
［吹雪］：「お、おう……」
何だか、後輩たちのテンションがすごいな。
［後輩Ａ］：「あ、ひょっとして迷惑でしたか？」
［吹雪］：「え？　いや、別に、そんなことはないよ」
［後輩Ｂ］：「すいません。でも、折角付き合うことになったから、少しお祝いしたいなーって思って」
［吹雪］：「ああ、分かってる。気持ちはすごい嬉しいんだ。ただ……まだお互いになれてないところがあってな、だから、どう反応すればいいかとか分かんなくて。聖奈美を見れば分かると思うけど」
後輩たちの視線の先には、顔を赤くしてモジモジする聖奈美の姿。
［吹雪］：「迷惑ってわけじゃないから、心配しないでくれ」
［後輩Ａ］：「それならよかった。二人の迷惑になることはしたくなかったから」
［後輩Ｂ］：「頑張ってくださいね？　二人とも」
［吹雪］：「お、おう。頑張るよ」
［後輩Ｃ］：「聖奈美先輩？」
［聖奈美］：「な、何かしら？」
［後輩Ｃ］：「吹雪先輩と、楽しい日々を送ってくださいね」
［後輩Ｄ］：「俺たち、それを心から願ってます」
［聖奈美］：「え、ええ。ありがとう」
［後輩Ａ］：「よーし、じゃあお二人のカップル成立を祝して、書類処理祭りを開催するわよ！　今日で今年の仕事を終了させましょ

う！」
［四人］：「おー！」
［後輩Ａ］：「というわけで、聖奈美先輩。お仕事をたくさん分けてください」
［聖奈美］：「あ、うん。分かったわ、じゃあ、どうしようかしら――」
［祐喜］：「――僕の予想してたのとちょっと違ってたな」
［吹雪］：「予想？」
［祐喜］：「うん。僕はてっきり、どういう経緯で付き合うに至ったのか、みたいなことを聞くんじゃないかって思ってたんだけど、純粋に吹雪と聖奈美のことを祝福してた。本当は聞きたかったかもしれないけど、二人への配慮を忘れなかった。あの心遣いがあれば、来年は心配なく引き継げそうだよ」
［吹雪］：「良い後輩たちでこっちも安心したよ」
［祐喜］：「そうだね。――よし、じゃあ僕も仕事しようかな」
［吹雪］：「あ、俺はどうするといい？」
［祐喜］：「じゃあ、また前みたいに僕に付き合ってもらおうかな」
［吹雪］：「了解、任せてくれ」
俺は祐喜と共に席に移動する。
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
目が合った時、聖奈美は穏やかな表情を見せてくれた。恥ずかしかっただろうけど、それでいて嬉しさもあったのかもしれない。
……。
……。
――そして、放課後ギリギリまでかかったが、無事に生徒会の仕事は終了した。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（13）

［場所：廊下］

［吹雪］：「よかったな、無事に終わって」
［聖奈美］：「ええ、それもこれも、みんなのたゆまぬ努力があったからこそね」
［吹雪］：「これで、心配することなくピアノの練習に打ち込めるんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうね。生徒会の仕事が終わったからって気は抜けないわね。まだあたしには、大事な仕事が残ってる」
［吹雪］：「同じく。頑張っていこうぜ」
［聖奈美］：「もちろん、ペース配分を考えてね」
［吹雪］：「うんうん、そうそう。それが大事だ」
［聖奈美］：「うふふ」
［吹雪］：「どうしたんだよ？　急に笑ったりして」
［聖奈美］：「別に、何でもないけど」
［吹雪］：「何でもないのに笑うのか？　お前が笑ってる姿を見るのは嬉しい限りだけどよ」
［聖奈美］：「楽しいんだと思うわ。あなたと一緒にいることが」
［吹雪］：「……それだけか？」
［聖奈美］：「ええ、それだけ。多分、あなたと付き合えてるって実感が大きくなってきてるんだと思うわ。だから、自然と心も踊ってきてるのかもしれない」
［吹雪］：「……」
ちょっと感動だな、聖奈美の口からそんな言葉を聞けるというのは。
［吹雪］：「俺も、聖奈美と付き合えて嬉しいって思うよ」
［聖奈美］：「本当に？」

［吹雪］：「ああ、本当」
［聖奈美］：「さっきの生徒会の時、みんなからおめでとうって言われた時はさすがに恥ずかしかったけど、でも、あれがあったおかげで今言ったような実感が得られたのかもしれないわ」
［吹雪］：「恥ずかしさがその証拠になったってことか？」
［聖奈美］：「ええ、そうみたい」
［吹雪］：「俺はもう、昼休みからそうだったけどな」
［聖奈美］：「あ、昼休み、ね……」
忘れてるわけがないはずだ。ついさっきの、衝撃の体験を。
［聖奈美］：「心配してもしょうがないんでしょうけど、ひょっとして、あれを見られたりしたのかしら？　あたしたち」
［吹雪］：「弁当を食ってた時って言ってたよな？　したのはその後だし……そこまでは見てないんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうよね。キス……する前に周囲は確認したはずだし、大丈夫よね」
［吹雪］：「多分、大丈夫だと思うぞ。……まあ、見られたら見られたで割り切るしかないだろう、付き合ってるんだし、それくらいして当然じゃないか？」
［聖奈美］：「そ、そうなんだけど……よくよく考えたらあたし……風紀に関しても任されてるのよね……あの時はすっかり忘れちゃってたけど」
［吹雪］：「ああ、なるほど……まあ、見られたって情報は入ってないし、問題ないんじゃないか？」
［聖奈美］：「そうよね、いいわよね、別に」
［吹雪］：「決めるのはお前だし、大丈夫だろ」
［聖奈美］：「少し前までは、そういうことを学園でするのは言語道断って思ってたけど、自分がその立場になって考えると、間違ってるんじゃないかって思えちゃうわね」
［吹雪］：「そういう境遇になって初めて分かることって多いからな。来期に活かせばいいんじゃないか？　それは。これからしばら

くは、学園もお休みなんだし」
［聖奈美］：「そうね、そうするわ」
［吹雪］：「――今さらだけど、今日はクリスマスイブなんだよな」
［聖奈美］：「そういえば、そうだったわね」
［吹雪］：「はは、すっかり聖奈美のことで頭いっぱいで日付の感覚忘れちまってたよ」
［聖奈美］：「あたしも同じ。あなたのこと考えててすっかり忘れてたわ」
［吹雪］：「まあ、あまり気にすることでもないな。プレゼントは、すでに今日いただいたわけだし」
聖奈美のほうをじっと見ながら。すぐに、聖奈美はその視線に気付いた。
［聖奈美］：「吹雪……」
［吹雪］：「聖奈美という恋人をな」
［聖奈美］：「す、すごいわね。よくそんな言葉をさらっと……」
［吹雪］：「自分でも思うけど、何か普通に言えちゃったよ」
［聖奈美］：「でも、すごく嬉しいよ。あたしも、同じ気持ちだから」
［吹雪］：「ああ、ありがとう」
その言葉だけで、すごく満足だ。
［吹雪］：「好きだよ、聖奈美」
［聖奈美］：「も、もう……またそんな言葉……」
恥ずかしがる聖奈美は、やっぱりかわいらしい。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（１４）

［場所：廊下］

さて、歯磨きに行くか。歯ブラシを持って水飲み場へ――。

［聖奈美］：「吹雪」

［吹雪］：「ん？」

後ろを振り向くと、聖奈美が追いかけてきていた。

［聖奈美］：「あたしも行くわ」

［吹雪］：「何だ？　一人で行くのが怖いのか？」

［聖奈美］：「そ、そんなことないわよ。もう、慣れたわ」

［吹雪］：「ん？　何て言った？　今？」

［聖奈美］：「な、慣れたって言ったのよ」

［吹雪］：「ん？　もう一回聞きたいな」

［聖奈美］：「……慣れてないけど、今は吹雪がいるから平気よ」

［吹雪］：「そうだよな、そう簡単に慣れるわけないもんな」

［聖奈美］：「もう……意地悪ね」

［吹雪］：「はは、ごめんごめん」

［聖奈美］：「別に、いいけど」

［吹雪］：「本当にかわいいな、聖奈美は」

［聖奈美］：「今日はそればっかりね、あなた」

［吹雪］：「何だか中毒化しちゃったみたいだ。聖奈美中毒みたいな感じ？　言ってないと気が済まない、みたいな」

［聖奈美］：「そ、それは治るの？」

［吹雪］：「しばらくは治らないだろうな。というか、治りたくない」

［聖奈美］：「それってつまり……」

［吹雪］：「ずっとお前を好きでいたいってことだな」

［聖奈美］：「も、もう……」

今日何度目か分からない、顔を赤くする聖奈美。でも、満更ではなさそうだ。

［聖奈美］：「他の子にそんなこと言っちゃ、嫌だからね」

［吹雪］：「もちろん、聖奈美の前でしか言わないさ」

［聖奈美］：「だったら、ずっと中毒でいてほしいわね」

［吹雪］：「はは、本人お墨付きなら安心だな」

ずっとかかっていようじゃないか。

［聖奈美］：「――あ、そうだわ。ちょっとあなたにお話があるの」

［吹雪］：「ん？　話？」

［聖奈美］：「ええ、みんなの前じゃ、ちょっと話づらいから」

［吹雪］：「ああ、何だ？」

［聖奈美］：「えっとね……今日の夜って、吹雪は何か予定ある？」

［吹雪］：「え？　この後の時間ってことか？」

［聖奈美］：「ええ、そう」

［吹雪］：「この後は……もう寝るしか選択肢は残ってないけど」

［聖奈美］：「そうよね、やっぱり。……よかったらさ、昨日みたいに、月光浴しない？　みんなが寝た後にこっそり抜け出して」

［吹雪］：「この後、だよな？」

［聖奈美］：「ええ。ちょっと……話したいこともあって……吹雪が良かったらでいいんだけど、どうかしら？」

［吹雪］：「大事な話か？」

［聖奈美］：「ん、そうね。それなりに、大事なことかも」

［吹雪］：「……聖奈美の頼みを断ることはできないな。いいよ、付き合う」

［聖奈美］：「ありがとう」

［吹雪］：「いいってことよ。ちなみに、暗い話、とかじゃないよな？」

［聖奈美］：「そ、それは大丈夫。微塵もする気はないわ」

［吹雪］：「うん、なら安心した」

聖奈美から誘ってもらえるというのが俺のテンションを加速させ

るな。

［聖奈美］：「みんなが寝静まった頃にメールを送るわ。サイレントモードで観察しててちょうだい」

［吹雪］：「ああ、今日は気付かれないようにしないとな」

［聖奈美］：「そ、そうね。抜からないようにしないと」

特に横で眠るマユ姉には注意が必要だ。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（15）

［場所：中庭］

［吹雪］：「――そう何度も同じ失敗は繰り返さないよな」
［聖奈美］：「そうね。気付いてないはずよね、今回は」
［吹雪］：「ああ。狸寝入りしていないか確認もしたし」
あれは完全に規則正しい寝息だった。きっと起こしてはいないだろう。
［吹雪］：「成功だと思うぞ」
［聖奈美］：「だといいわね」
［吹雪］：「ああ」
――空は晴れていて、星が綺麗に光り輝いている。月光浴には最適な天気だろう。
［聖奈美］：「と、とりあえず座りましょう」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
［聖奈美］：「ん……」
二人掛けのベンチに聖奈美が先に腰を下ろす。もちろん残りの半分のスペースに俺が座る。
［聖奈美］：「ごめんなさいね、わがまま言って付き合ってもらって」
［吹雪］：「いいんだって、そんなこと気にしなくて。俺、聖奈美にこうして誘ってもらって嬉しいんだぜ？」
［聖奈美］：「そ、そう？」
［吹雪］：「ああ。今までは俺の方からってことが多かったからな。自然にテンションは上がってくるよ」
［聖奈美］：「そ、そうなの？」
［吹雪］：「もちろん嘘は言わないぜ」
［聖奈美］：「じゃ、じゃあこれからも、こういう感じで誘っても

いいのよね？」
［吹雪］：「そうしてくれると、すごく嬉しいよ。何度も言うけど、聖奈美と一緒に何かをできるのは、俺の一番の喜びだから」
［聖奈美］：「あたしも。あなたに誘ってもらえると、すごく心が高鳴るわ」
［吹雪］：「……気持ちは一緒だな」
［聖奈美］：「ええ、そうよ」
そう言ってニコリと笑顔。心を許してくれている証拠だろう。
［聖奈美］：「吹雪、明日は何か予定あるかしら？」
［吹雪］：「明日か？　明日は、土曜日だよな？」
［聖奈美］：「そうよ」
［吹雪］：「練習以外に特に予定はないけど……」
［聖奈美］：「そう。……じゃあ、明日街に出かけましょう？　料理食材を少し買い足しておきたいし、休日に黙っているのも勿体ないし」
［吹雪］：「早速、デートに誘ってくれるんだな」
［聖奈美］：「も、元々行きたいって思ってたし……あんな風に言ってくれたら一人で行く理由なんて一つも見当たらないわ。」
［吹雪］：「あの時以来だな、コンタクトを買いに行った時」
［聖奈美］：「そうね。あの時はあの時で、良い思い出よ」
［吹雪］：「ゲームセンターに初めて聖奈美を連れてった時は、良い思い出とは絶対に言わなそうだったのに、……人間変わるもんだな」
［聖奈美］：「あ、あれは許してちょうだいよ。本当に、耳に悪いイメージしか持ってなかったんだから。今は、それだけの場所とは見てないわ」
［吹雪］：「まあ、聖奈美の言うことも間違ってないからな。確かにガンガン音楽がかかってうるさいところではあるし。でも、あの空間はあれじゃないと成り立たないからさ、仕方ないんだよ」
［聖奈美］：「ええ、あれで静かだったら盛り上がらない気がする

もの」
［吹雪］：「それを分かってくれたんだから、問題はないさ。結構楽しんでくれてたみたいだったしな」
［聖奈美］：「吹雪が言ってた言葉を理解できたから。できたら、またやりたいわね、あの太鼓ゲーム」
［吹雪］：「ああ、そうだな……」
［聖奈美］：「な、何で急に顔が曇ったの？」
［吹雪］：「いや、聖奈美の上達の速さが半端じゃなかったから……嫉妬だな」
［聖奈美］：「絶対に次は勝つって言ってなかったかしら？」
［吹雪］：「いや、勝つつもりではいるぜ？　でもまだ修行に行ってないから状況は変わってないかもしれない……」
［聖奈美］：「いいじゃないの。ああいうのは楽しめて初めて意味を成すんでしょう？　そこまでシビアに拘らなくてもいいじゃない。二人で楽しめれば」
［吹雪］：「聖奈美がそう言ってくれると、何だか妙に感動するな」
［聖奈美］：「あなたに教えてもらったことよ、これは」
［吹雪］：「うん、そうだな。じゃあ、明日は二人プレイのゲームに挑戦してみるか」
［聖奈美］：「そんなのもあるのね」
［吹雪］：「ああ、結構項目も豊富だからな」
［聖奈美］：「ふふ、楽しみだわ」
［吹雪］：「目一杯楽しもうな」
［聖奈美］：「ええ、もちろん」
［吹雪］：「――話したかったことっていうのは、これのことか？」
［聖奈美］：「これもそうだけど……もう一つあるの。聞いてもらえるかしら？」
［吹雪］：「ああ、構わないよ」
［聖奈美］：「ありがとう。――スーハー」
おもむろに深呼吸を挟む聖奈美。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（16）

［吹雪］：「無理して言おうとしてるわけじゃない、よな？」
［聖奈美］：「え、ええ、違うわ。そういうことじゃあ、ないから……」
［吹雪］：「そうか？」
心なし、言葉に緊張が見える気がする。
［聖奈美］：「そ、その……一つ、お願いがあるわ」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［聖奈美］：「そ、その……もし嫌ならはっきり言ってくれて構わないから。今から言うことに、無理に合わせる必要はないってことを頭に入れてちょうだい」
［吹雪］：「あ、ああ。分かった」
［聖奈美］：「あ、あまり、驚かないでちょうだいね」
［吹雪］：「妙に畏まるんだな」
［聖奈美］：「そ、それだけのことを言わんとしてると思うからそこまで前置きをするって、一体聖奈美はどんなことを言うつもりなんだ？
［聖奈美］：「じゃ、じゃあ言うわね」
［吹雪］：「おう」
自然とこっちも緊張してきてしまう。
［聖奈美］：「えっと、その――ふ、吹雪はさ、あたしと、その……やりたいとかって思ってるの、かしら？」
［吹雪］：「――――え？」
［聖奈美］：「だ、だから……あたしと、セックスしたいとかって、思う？」
［吹雪］：「なっ！？　え？　何で急にそんなことを？」
［聖奈美］：「お、落ち着いてちょうだい。こうならないように、最初に前置きをしたんだから」

［吹雪］：「そ、そういうことか……」
［聖奈美］：「ふざけて言ってるわけじゃない、あたしは至極真剣に聞いてるわ。だから吹雪にも、真剣に答えてほしい」
［吹雪］：「あ、ああ」
［聖奈美］：「どう、思ってるかしら？」
［吹雪］：「それは、もちろん……聖奈美は綺麗でかわいいから……もちろん、そういう思いは持ってるよ」
［聖奈美］：「そ、そうなんだ……」
［吹雪］：「むしろ、思わないわけがないよ」
［聖奈美］：「あ、ありがとう。そう言ってもらえると、嬉しいわ」
［吹雪］：「でも、どうしてそんなことを俺に尋ねるんだ？」
［聖奈美］：「えっと、……さっき、クリスマスイブの話をしたでしょう？　その時に、吹雪は何もいらないって言ってたけど……でも、せっかくの日なのに、何もあげれないっていうのはちょっと寂しい気がしたから。吹雪はあたしの恋人、あたしにしかできない何かと言ったら……こういうことかなって思ったの」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「お、おかしいかしら？　言ってること」
［吹雪］：「いや、すっごく嬉しいよ」
そこまで俺のことを考えてくれてる、その心遣いだけでかなり心が揺さぶられる。だけど……。
［吹雪］：「無理、してないか？」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「その……聖奈美は、こういうの、初めてなんだろう？」
キスをするのも、恋愛を経験するのも初めてなんだ。当然、セックスだって初めてに決まってるはず。
［聖奈美］：「ええ、一度もしたことないわ」
予想通りの答え。
［吹雪］：「俺は男だから、聖奈美の誘いはすごく受けたいと思ってる。でも、これは俺だけの欲求でしていいことじゃないと思うん

だ。聖奈美が無理をして言ってくれてるのなら、日を改めてしたほうがいいと思う。痛みを伴うって聞くから」

［聖奈美］：「それは、知ってるわ。よく、耳にするもの」

［吹雪］：「俺は、お前を大事にしたいと思ってる。無理強いはしたくない、気持ちだけでも十分嬉しいから、別に今日じゃなくても、俺は大丈夫だよ？」

［聖奈美］：「――あたしは、大丈夫だから言ってるつもりよ」

［吹雪］：「聖奈美……」

［聖奈美］：「確かに、言い方悪いけどキスくらいであそこまで動揺してるのに、こんなこと言い出すのは変かもしれない。でも、あたしにとって、今日は比べ物にならないくらい特別な日だから、もっともっとその気持ちを詰め込みたいっても思うの。それこそ、何十年経っても忘れられないくらいの。それに、あたしだって女の子だから、人並みにそういうことには興味があるわ。相手が吹雪だったら、尚更、ね……」

［吹雪］：「……」

［聖奈美］：「だから、あたしの気持ちは、すでに決まってるよ。でなかったら、吹雪にこんなことは言い出さないわ」

［吹雪］：「多分、どうあっても痛みは伴うと思うぞ」

［聖奈美］：「覚悟はできてるわ。それに、痛いくらいじゃないと、特別な感じはしないでしょう？」

［吹雪］：「それは、そうかもな」

［聖奈美］：「大丈夫、吹雪のあたしを労わる気持ちは十分伝わってるわ。だから、遠慮しないでいいわ」

――今さらだけど、聖奈美はこんなにもかわいい女の子だったのかと実感する。俺が思っている何十倍も、聖奈美は女の子で、純情だったんだ。

［聖奈美］：「して、もらえるかしら？　吹雪」

［吹雪］：「――大切にする、お前のこと。俺だって、今日は特別な日だから」

［聖奈美］：「じゃあ、一緒にその日を作っていきましょう」

俺は聖奈美とキスを交わし、場所を移動した……。

……。

……。

……。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（16）（後書き）

この後の展開は……言わずもがなラブシーンとなります。
お待たせいたしました（笑）。
いつものようにこちらのほうに投稿いたしますので、お暇なかたはお付き合いください。よろしくお願いします。
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１７３５ｔ／

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（17）（前書き）

聖奈美ルート、ｌｏｖｅ／ｖｅｒからの続きから――

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（17）

［聖奈美］：「ふう……」
［吹雪］：「落ち着いたか？」
［聖奈美］：「え、ええ。大分……」
［吹雪］：「そうか、ならよかった」
息が乱れた原因は俺だから、ちょっと気になっていた。
［吹雪］：「その、ありがとう。同じことで悪いけど、すごく嬉しかった、聖奈美の気持ち」
［聖奈美］：「そう？」
［吹雪］：「ああ。聖奈美が初めてを俺に選んでくれたこと、そして俺が聖奈美の初めてをもらえたこと……一生の思い出になると思う」
［聖奈美］：「ちょ、ちょっと大げさな気もするけど」
［吹雪］：「大げさなもんか。その……女の子の初めては、すごく大切なものなんだろう？」
［聖奈美］：「それは、まあ……一生に一度のものだから」
［吹雪］：「なら、大げさじゃないよ」
それ相応の価値がある。
［吹雪］：「ありがとう、本当に」
［聖奈美］：「……想像以上に喜んでくれたみたいね」
［吹雪］：「そうなのか？」
［聖奈美］：「ええ。……ふふ、ちょっとおかしいわ」
［吹雪］：「何がだ？」
［聖奈美］：「ううん、何でもないわ」
［吹雪］：「？」
まあ、聖奈美の笑顔が見れたからいいか。
［吹雪］：「大切にするよ、聖奈美のこと」
［聖奈美］：「お願いよ？　一緒に歩んでいくって約束、破らない

でね？」
［吹雪］：「破るもんか」
［聖奈美］：「ずっと、一緒だからね」
［吹雪］：「もちろん」
俺は聖奈美の肩を抱き寄せた。
［聖奈美］：「どうしたの？　急に」
［吹雪］：「いや、一応冬だし寒いかなって思って」
［聖奈美］：「……本当にそれだけ？」
［吹雪］：「……ごめん、俺自身こうしたかったんだ」
聖奈美の体温を、肌に感じたかった。
［吹雪］：「いい、よな？」
［聖奈美］：「嫌って言うと思う？」
そう言って、聖奈美は体を俺に預けた。
［聖奈美］：「――あ、雪、降ってきたわよ」
［吹雪］：「え？　――うわっ！？」
上を向いた瞬間、雪が眼球に飛び込んできた。
［吹雪］：「くそ、やられちまった……」
［聖奈美］：「よく目に入ったわね」
［吹雪］：「油断してたよ、完全に」
［聖奈美］：「……綺麗ね、すごく」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
月の光に照らされてチラチラと舞う様は、ちょっとした宝石のような雰囲気を醸し出している。

聖奈美ルート・アフェッツオーソ（18）

［聖奈美］：「今年は、ホワイトクリスマスね」
［吹雪］：「ああ」
［聖奈美］：「メリークリスマス、吹雪」
［吹雪］：「メリークリスマス、聖奈美。最高のプレゼント、ありがとう」
［聖奈美］：「ふふ、どういたしまして」
聖奈美はそう言って、空を見上げた。
［聖奈美］：「いいのかしら？　急にこんな幸せになって」
［吹雪］：「悪いことなんてあるのか？」
［聖奈美］：「ないとは思うけど……何となく分からない？　幸せすぎて怖いって感覚」
［吹雪］：「分かんなくはないな、うん」
いつか不幸が来るんじゃないかっていう不安はある。
［吹雪］：「でも、聖奈美は今まですごく頑張ってきたんだから、幸せすぎるくらいがちょうどいいと思うぞ」
［聖奈美］：「そうかしら？」
［吹雪］：「ああ。俺が許可する」
［聖奈美］：「じゃあ、幸せのまま突き進むことにするわ」
［吹雪］：「うん、それがいい。俺も、それを所望するから。もっとも、聖奈美が横にいるだけで、俺は幸せなんだけどな」
［聖奈美］：「あなただけがそう思ってるんじゃないからね？　それは、あたしも思ってることなんだから」
［吹雪］：「そう考えると、不幸なんて訪れないかもしれないな」
俺の横には、いつだって幸せが寄り添っているんだから。
［吹雪］：「怖がる必要なんてないな」
［聖奈美］：「そうかもしれないわね」
［吹雪］：「大好きだよ、聖奈美」

［聖奈美］：「あたしもよ、吹雪。」

今日何度目かの愛の告白。でも、いくら言っても足りないと思うのは、恋の魔力なんだろう。

［吹雪］：「どうする？　そろそろ戻るか？」

［聖奈美］：「……もう少しだけ、こうしていていいかしら？」

［吹雪］：「もちろんです、聖奈美様」

［聖奈美］：「どうして急に紳士ぶるのよ？」

［吹雪］：「いや、特に意味はない。やってみただけだ」

［聖奈美］：「変なの、ふふ」

――改めて思った。聖奈美といる時間は、俺にとって最高の幸せであると。

聖奈美ルート・レゲーロ（1）

12月25日（土曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

……。

［セフィル］：「――よし、詠唱終了」

［吹雪］：「はい」

［セフィル］：「うん、もうすっかり形ができているな。大したものだ」

［吹雪］：「いえ、学園長とフェルシア先生の手解きがあったからこそです」

［セフィル］：「よせ、照れるじゃないか」

［フェルシア］：「でも、上達してるのは本当に目に見えて分かるわよ」

［吹雪］：「何度もありがとうございます。本番まで、もっと集中して頑張っていきたいと思います」

［セフィル］：「うん、やはり吹雪は魅力的だ。是非、家の婿候補として……」

［吹雪］：「あ、いえ。それはちょっと……はい……」

［フェルシア］：「ダメですよ、学園長。吹雪くんにはもうガールフレンドがいるんですから」

［吹雪］：「ちょ、ちょっと！？　フェルシア先生？」

［フェルシア］：「あれ？　ダメだったかしら？」

［吹雪］：「ま、まだ学園長には言ってないんですよ……」
［セフィル］：「いや、知ってるぞ？　聖奈美だろう？」
［吹雪］：「え？　何でそれを？」
言った覚えはないはずなのに……。
［セフィル］：「吹雪は私の目を甘く見ているようだな。私だってれっきとした女性だ。話を聞いていれば、吹雪がどんな子に興味を持っているのかくらいすぐに分かる」
［吹雪］：「そ、そうなんですか？」
［セフィル］：「ああ。何となくそんな気がしたのは……聖奈美が風邪を引いて休むことになった日だな。あの日、吹雪の話を聞いて、ああなるほど、と思ったわけだ」
［吹雪］：「な、なるほど……」
［セフィル］：「おばさんだからって目が死んでるわけではないんだぞ？　吹雪」
［吹雪］：「い、いえ。そんな風に思ってはないですから」
［セフィル］：「まあ何にしても、仲良く過ごすんだぞ？　私も若い頃は昔――」
［フェルシア］：「応援してるわね、二人の関係」
［吹雪］：「あ、はい。ありがとうございます」
［セフィル］：「むう。フェル、どうして話をさせてくれないんだ？」
［フェルシア］：「学園長のその話、以前聞いたけど長いんですもの。もう少しコンパクトにまとめてくれないと午前中に終わりませんし」
［セフィル］：「そんなことを言われてもな……私と夫の恋路は短くまとまるものではないからな」
［フェルシア］：「なら、また機会を改めてってことで。それか文章としてまとめるとか」
［セフィル］：「むう、残念だ」
フェルシア先生は、学園長の扱いに慣れているようだ。

［セフィル］：「とにかく、恋愛は生きていく上で大事な要素だ。楽しむといい、だが、練習を怠ってはいけないぞ？」
［吹雪］：「それはもう、重々承知してます」
聖奈美とそれだけはないようにとケジメをつけたところだ。自分たちの使命は必ず全うする、それが絶対条件だ。
［セフィル］：「確かに、今日の練習を見る限り大丈夫そうだな。ちょっと心配していたんだよ、恋人のことを考えすぎて練習に集中できないようなことにならないかとな」
［吹雪］：「聖奈美と話をしまして、切り替えをしっかりするようにと決めたんです」
［セフィル］：「うむ、それを分かっているなら安心だな。後一週間を切った、ここからが正念場だからな」
［吹雪］：「はい、精一杯頑張らせてもらいます」
［セフィル］：「うむ。――で？　今日この後の予定は？　聖奈美とデートか？」
［吹雪］：「え？　な、何でそれを？」
［セフィル］：「ん？　当たっていたか。当てずっぽうで言ってみたんだが……」
［吹雪］：「し、しまった……」
［セフィル］：「まあいいじゃないか。バレたところで問題ないだろう、もはや周知の事実なんだろう」
［吹雪］：「ま、まあ、合宿メンバーには」
［セフィル］：「ならいいじゃないか。今さら恥らっても仕方ないだろう、堂々と行くといいさ」
［吹雪］：「は、はあ……」
［セフィル］：「……職員にでも話をしてみるのもおもしろいだろうか」
［吹雪］：「が、学園長！？」
今、ちょっと怪しい言葉が聞こえたような！？
［セフィル］：「心配するな、そんなことはしないよ」

［吹雪］：「お、お願いしますよ？」
［セフィル］：「もちろん、私を信じるんだ」
［吹雪］：「あはは……」
ちょっと、不安だな……。

聖奈美ルート・レゲーロ（2）

［場所：商店街］

［吹雪］：「――まあ、気にしたところでしょうがないよな」
［聖奈美］：「え？　どうかしたの？」
［吹雪］：「いや、こっちの話。気にしないでくれ」
学園長は悪い人ではないし、それを信じるとしよう。それより、今と言う時間を満喫したほうがいい。
［吹雪］：「戻ってきたぜ、商店街に」
［聖奈美］：「前回来たのが今週の日曜日……あれからまだ一週間経ってないのね」
［吹雪］：「何だかそんな感じがしないな」
［聖奈美］：「あたしもそう思うわ」
［吹雪］：「ここ一週間、色々と濃縮された日々だったからかな？」
［聖奈美］：「確かに、それは言えてるわ」
［吹雪］：「俺たちの関係も、一週間かからずここまで進展したし」
［聖奈美］：「う、嬉しいことでしょう？　お互いに」
［吹雪］：「ああ、もちろん。ただ、結構すごいことなのかなって……今思えばだけどな」
［聖奈美］：「人間関係の変化は、かなり著しいってことよね」
［吹雪］：「違いない」
きっと今の俺たちは、世間で言う所のバカップルに属されるんだろう。
［吹雪］：「前回以上に楽しめるといいな」
［聖奈美］：「あたしは、そのつもりで来たわよ」
［吹雪］：「まあ、スタート位置は前回より有利だもんな。聖奈美がゲームセンターのおもしろさを知ってるっていう点では。後は……俺の力だな、どれだけ聖奈美を飽きさせずに楽しませることがで

きるか」
［聖奈美］：「ふふ、期待してるわよ」
［吹雪］：「全力を尽くす。――そうだ、聖奈美はゲームセンター以外に行きたいところってあったりするのか？」
［聖奈美］：「え？　どうして？」
［吹雪］：「失礼なことを言うが、聖奈美はゲームセンター以外にも毛嫌いして行ってないところがあるだろう？」
［聖奈美］：「う……ストレートに来たわね」
［吹雪］：「聖奈美を信じて思い切ってみたんだ」
［聖奈美］：「……まあ、あるにはあるわね」
［吹雪］：「確実とは言えないけど、きっと聖奈美が気に入る店とかもあると思うんだよ。だからそういう所を回ってみるのもありかなって思ってさ。どうだ？」
［聖奈美］：「新しい発見があるかもしれないってこと？」
［吹雪］：「そういうこと」
［聖奈美］：「ゲームセンターが予想に反してたわけだし、その可能性もなくはないわよね」
［吹雪］：「だろう？　時間もないわけじゃないし、聖奈美がいいのなら喜んで連れて行くぜ？」
［聖奈美］：「うーん、そうね……そうしてみようかしら？」
［吹雪］：「よし、決まり。じゃあまず、聖奈美が行ったことがない店をピックアップしてみようぜ。いくつか挙げてみてくれ」
［聖奈美］：「え、ええ。分かったわ……。……ダーツ、カラオケ、ボーリング、……言われてすぐ挙がるのはこれくらいかしら？」
［吹雪］：「ふむふむ、なるほどなるほど」
予想通りのものが挙げられたな。

聖奈美ルート・レゲーロ（3）

［吹雪］：「ダーツ、ボーリング、カラオケ……一人で行くのが嫌なのか？」
［聖奈美］：「そうね。そういう店っていうのは数人で集まって行くところでしょう？」
［吹雪］：「でも、ストレス発散目的で一人でやってる人も結構いるんだぜ？」
［聖奈美］：「そうなの？」
［吹雪］：「ああ、真ん中に刺したり、ストライク取ったり、大声で歌ったりするとスカッとするし」
［聖奈美］：「それ以外にもストレスを発散させる方法があると思うんだけど……」
［吹雪］：「それは、今回は度外視する方向で」
［聖奈美］：「そ、そうね、分かったわ」
［吹雪］：「でも、そうか……。……」
［聖奈美］：「どうしたの？」
［吹雪］：「……よし、決めたぞ」
［聖奈美］：「決めた？」
［吹雪］：「ああ、今日の日程だ。どういうコースで回るか」
［聖奈美］：「それを考えてたのね」
［吹雪］：「そうだ。今聖奈美は、ダーツ、ボーリング、カラオケをピックアップしたよな？」
［聖奈美］：「ええ、そうだけど」
［吹雪］：「今日は、そこを全部回るぞ。そして最後にゲームセンターに寄る」
［聖奈美］：「え、ええ！？　ほ、本気なの？」
［吹雪］：「もちろん、俺はいつだって本気だ」
［聖奈美］：「そ、そんな……どれか一つとかじゃなくて全部？」

［吹雪］：「ああ、全部」
［聖奈美］：「全部なんて回ったら時間がオーバーしちゃうでしょう？」
［吹雪］：「そんなことないさ。全部1ゲームとかで済ませればそこまで時間は取らないよ」
［聖奈美］：「そ、そうなの？　でも、全部って……」
［吹雪］：「心配するな、何度か実践したことはある」
［聖奈美］：「――え？」
［吹雪］：「な、何だよ？　その顔は。暇だったから回ってみようかって思ったことがあったんだよ……そういう気持ちになったりしないのか？」
［聖奈美］：「あったらダーツ行ったことないとか言わないでしょう？」
　う、寂しそうな目線が痛い……。
［吹雪］：「……と、とにかく、時間は心配しなくていい。保障するから」
［聖奈美］：「う、うーん……」
［吹雪］：「何が不安なんだ？」
［聖奈美］：「その……張り合いがなくてつまらないんじゃないかなって思って」
［吹雪］：「……そんなこと気にしてるのか？」
［聖奈美］：「そ、そんなことって……吹雪も楽しんでもらえないとあたしは……」
　何ていじらしいんだろう、こいつは。
［吹雪］：「楽しいに決まってるじゃないか、聖奈美。自分が好きなものを相手に知ってもらうってだけで、相当嬉しいことなんだぜ？」
［聖奈美］：「そ、そういうものなの？」
［吹雪］：「そうだよ。それに、俺は別に勝負をしたいって思ってるわけじゃない。どっちかっていうと、聖奈美が楽しんでる姿を見

たいっていうか」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「いや、これ本当。彼女が喜んでる姿を見てるだけで、自然と楽しくなってくるからさ、勝負は上手になってからとかでいいし」
［聖奈美］：「吹雪……」
［吹雪］：「――こうしてる時間がもったいないな。早速行動あるのみだ」
［聖奈美］：「え？　あ……」
俺は聖奈美の手をぎゅっと握った。
［吹雪］：「よし、目的地に向かうぞ。それっ！」
［聖奈美］：「あ、ちょっと、別に走らなくても！　というか吹雪、早いわよ！」
［吹雪］：「当然だ、毎日ランニングをしてるんだから」
［聖奈美］：「そういうこと言ってるんじゃないわよ！　ちょ、こらっ！」
……。

聖奈美ルート・レゲーロ（4）

［場所：ダーツ場］

［吹雪］：「ほら、投げてみろって」
［聖奈美］：「そ、そんな急に言われても……」
［吹雪］：「投げるだけなんだから、難しいルールじゃないだろう」
［聖奈美］：「そういうことを言ってるんじゃなくて、急にここに立たされて矢を投げろって言われても焦るのは当然でしょうって言いたいの」
［吹雪］：「大丈夫だ、次第に落ち着いてくるから」
［聖奈美］：「話が噛み合ってないわよ……」
［吹雪］：「とにかくやってみようぜ？　コツとかはおいおい教えるから。お前のことだ、一回やったらすぐに上手くなっちまうって」
［聖奈美］：「……今日は随分強引なのね、あなた」
［吹雪］：「ちょっと覚えたんだよ。聖奈美と遊びに行く時のコツを」
［聖奈美］：「こ、コツ？」
［吹雪］：「もちろん、それは秘密だけど」
祐喜、感謝してるぜ。
［吹雪］：「さあさあ、レッツチャレンジ！　初めてのダーツ」
［聖奈美］：「も、もう……三回投げればいいのよね？」
［吹雪］：「ああ、そうだ」
［聖奈美］：「……」
何だかんだ言いつつ、真剣に投げようとするところが聖奈美らしい。聖奈美なりに狙いを定めて、一投目を投じる。
［聖奈美］：「それ！」
ビッと音が鳴り、刺さったことを知らせる。
［聖奈美］：「ふ、吹雪？」

［吹雪］：「そのまま二本投げて大丈夫だよ」
［聖奈美］：「わ、分かったわ」
聖奈美はそのまま、二本目、三本目を投げる。
［吹雪］：「画面に表示されてるのが現在の得点だ」
［聖奈美］：「２６……これって良いの？　悪いの？」
［吹雪］：「……まあ、最初なんだ。徐々に良くなるよ」
［聖奈美］：「悪いのね、その表情は……」
［吹雪］：「だって、言いたくないじゃないか。どんなことだろうと、彼女に対して悪いなんて言うのは」
［聖奈美］：「そ、そうだけど……そんな妙に優しい表情されるのもちょっと傷つくわよ」
［吹雪］：「それは、ごめん」
［聖奈美］：「次、あなたの番じゃないの？」
［吹雪］：「ああ、今投げるよ」
俺はラインの前に立つ。

聖奈美ルート・レゲーロ（5）

［聖奈美］：「見させてもらうわよ、吹雪の姿から研究してみるから」

［吹雪］：「また、前回のゲームセンターのようなシナリオになってしまうのか……」

［聖奈美］：「どうでしょうね？　うふふ」

くそ、そう簡単に負けたくはない。ちょっと良いところを見せたいぞ。俺は矢を三本手に持ち、微調整する。

［吹雪］：「……」

まず、一投目。

［吹雪］：「２０点……」

二投目。

［吹雪］：「１８点……」

三投目。

［吹雪］：「３２点……」

合計、７０点。最初にしてはなかなかじゃないか？

［吹雪］：「どうだ？　聖奈美」

［聖奈美］：「どうして最後、点数が二倍に跳ね上がったの？」

［吹雪］：「ああ、ボードの間にちょっと小さい隙間があるだろう？　あれの内側がトリプルリング、外側がダブルリングって言って、そこに刺さるとポイントがそれぞれ三倍、二倍に倍加されるんだ。つまり、効率よくポイントを稼げるわけだ」

［聖奈美］：「じゃあ、単純計算、２０点のトリプルリングに三回命中すれば１８０点ももらえるってこと？」

［吹雪］：「そうだな。でも、やっぱりそう簡単には決まらないと思うぞ」

［聖奈美］：「ずっとやってるあなたでも７０点ですものね……」

［吹雪］：「だ、ダサかったか？」

［聖奈美］：「ううん、そんなことないわ。投げてる姿、結構かっこよかったわよ？」
［吹雪］：「……へへ」
［聖奈美］：「顔、崩れてるわよ？」
［吹雪］：「そりゃあそうだ。一番そう言われたい人にそう言ってもらえたんだぜ」
嬉しくないわけがない。
［聖奈美］：「そ、そういうのは隠すものじゃないの？」
［吹雪］：「いいじゃないか、そういう決まりがあるわけじゃないし」
［聖奈美］：「も、もう……」
［吹雪］：「ほら、聖奈美の番だぜ」
［聖奈美］：「え、ええ」
椅子から立ち上がり、ラインの前へ。
［吹雪］：「今の俺を見て、何か発見はあったか？」
［聖奈美］：「ちょっとね。今、それを実践してみるわ」
［吹雪］：「おう、頑張れ」
［聖奈美］：「……」
心なし、フォームもちょっと良くなった気がする。まあでも、ダーツにはダーツの難しさもあるから、そう簡単に高得点とは行かないと思うな。
［聖奈美］：「それっ！」
［吹雪］：「――え！？」
そのまま二投目、三投目。いずれも高得点、且つ一つはダブルリングを射抜いている。得点は――。
［聖奈美］：「ふふ、６４点。パワーアップ成功ね」
［吹雪］：「だから何でそんなすぐに追いついてくるんだよ！」
［聖奈美］：「言ったでしょう？　実践してみるって、それが上手く行ったのよ」
［吹雪］：「まだ二順目じゃないか……ダーツっていうのは何度も

何度も経験を通して上手くなっていくもののはず……お前は一体、何者なんだ？」

［聖奈美］：「あなたの恋人、杠聖奈美よ？」

［吹雪］：「うぐ……この天才肌め」

［聖奈美］：「まあ、まだ始まったばかりだし、今のはたまたまって可能性もあるわ。次から真価が試されるわね」

［吹雪］：「……何なんだ、この見えない重圧は」

［聖奈美］：「ふふ、楽しいでしょう？」

［吹雪］：「う……」

張り合いがないなんて、嘘ばっかりだ。改めて思う、聖奈美は侮ってはいけない。

［吹雪］：「くそ、今日こそは経験者としての意地を見せてやる」

［聖奈美］：「ええ、あたしも見てみたいわ」

［吹雪］：「よし、行くぜ！」

……。

聖奈美ルート・レゲーロ（6）

［場所：カラオケボックス］

［吹雪］：「――危なかったぜ、メチャクチャ」
［聖奈美］：「経験者の意地、しっかり見せてもらったわ」
［吹雪］：「ぐ……余裕たっぷりに言いやがって」
［聖奈美］：「そんなことないわよ。喰らいつくのが大変だったんだから」
［吹雪］：「初めてダーツをやった人間に、いとも簡単に喰らいつかれる俺って一体……」
［聖奈美］：「だから、簡単じゃなかったって言ってるでしょう？」
［吹雪］：「そうか？」
［聖奈美］：「そうよ、吹雪だって高得点を連続で叩き出してたじゃないの」
［吹雪］：「でも、それは聖奈美だって」
［聖奈美］：「あたしはあなたが見本を見せてくれたからよ。それがなかったら最初のままだったわ。あなたのおかげで成長できたのよ」
［吹雪］：「俺の、おかげで？」
［聖奈美］：「そうよ。だから、自信持ちなさい」
［吹雪］：「聖奈美……ありがとう」
――何だろう、教える側が教わる側に励まされてしまった。ダーツも、もっと修行が必要かもしれない。
［聖奈美］：「それより、吹雪、ここは？」
［吹雪］：「ああ、カラオケボックスだ。名前の通り、カラオケを楽しむ空間さ。自分の歌いたい曲をガンガン歌えばそれだけでオッケー」
［聖奈美］：「それだけ？」

［吹雪］：「ああ、むしろそれ以外なんて何もない。だから、どんどん曲をセレクトしてけばいいよ」
［聖奈美］：「そ、そうなの」
［吹雪］：「これ使えよ。歌いたい曲を検索して、機械に送信すれば完了だから」
［聖奈美］：「何でもいいの？」
［吹雪］：「ああ、俺がいるからって気にしなくていいぞ」
［聖奈美］：「……最初は吹雪が歌って？　あたしはその間に曲を探すから」
［吹雪］：「そうか？　じゃあ、遠慮なく――」
俺はお気に入りのナンバーを送信した。
［吹雪］：「じゃあ、歌わせてもらうぜ！」
足でリズムを取りながら俺は曲を歌い上げる。
……。

聖奈美ルート・レゲーロ（7）

［吹雪］：「ふう。――こんな感じかな」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「ん？　どうした？」
［聖奈美］：「あなたって、意外と歌が上手いのね」
［吹雪］：「そうか？　普通だと思うけどな、今まで言われたことないし」
［聖奈美］：「音程が一切ずれてなかったわ。失礼だけど、ちょっとびっくりだわ」
［吹雪］：「はは、それはどうも。で？　お前は曲を入れたのか」
［聖奈美］：「あ、今入れるわ。……下手でも怒らないでよ？」
［吹雪］：「何で怒るんだよ、言っただろう？　自分の歌いたい曲を歌えばいいって」
むしろ、下手だとしたらそれはそれでかわいいというか……ちょっと萌えるな。
［聖奈美］：「吹雪、何を想像してるの？」
［吹雪］：「え？　いや、何も想像してないよ？」
［聖奈美］：「……その反応は、想像してたという風に捉えれるわよ？」
［吹雪］：「……ごめんなさい、ちょっとしてました」
素直に謝罪しておこう。
［吹雪］：「楽しみだ、聖奈美の歌声」
［聖奈美］：「そ、そんな風に見られると緊張するわね」
［吹雪］：「オーディションだと思えばいいじゃないか」
［聖奈美］：「そ、そんなの受ける気はないからね？」
［吹雪］：「気分だよ、気分。聖奈美がオーディション受けるなんて言ったら、俺は断固拒否するから」
［聖奈美］：「そ、そうなの？」

［吹雪］：「当たり前じゃないか？　一般客に聖奈美を変な目で見られるなんて絶対に嫌だから」
［聖奈美］：「それって……嫉妬って言うんじゃないのかしら？」
［吹雪］：「ああそうだ。嫉妬で間違いない」
［聖奈美］：「そ、そこまではっきり肯定されると何も言い返せなくなるわね……」
［吹雪］：「俺の大事な彼女を、視聴者に見られてたまるものか」
［聖奈美］：「だ、大丈夫よ。鼻からなる気はないから」
［吹雪］：「そうか？」
［聖奈美］：「あたしが先になる気がないって言ったのよ。そうに決まってるでしょう」
［吹雪］：「なら、よかった……」
［聖奈美］：「他の人に見せたくないって言ってくれてありがとう」
［吹雪］：「いつも言ってるだろう？　俺は本音を言ってるだけだよ」
［聖奈美］：「……吹雪がそういう一面を持ってるっていうのはちょっと驚きね」
［吹雪］：「ん？　そうか？」
［聖奈美］：「ええ。だって、誰に対しても分け隔てなく接するのが吹雪の良いところだって認識があったもの、あたし。その吹雪が、一人の女性に固執するっていうのは、ちょっと意外だなって思って」
［吹雪］：「分け隔てなく……聖奈美は俺をそんな風に捉えてたのか」
［聖奈美］：「他の人はどうか分からないけど、あたしはそう思ってたわ」
［吹雪］：「まあ、結論は一つだな。分かり切った答えだけど」
［聖奈美］：「……聞いてもいい？」
［吹雪］：「ああ、もちろん。――理由はただ一つ、俺が聖奈美を好きすぎてるから」
　他の人に見せたくないって思うのも、偏に聖奈美が魅力的すぎる

から。それ以外に理由はない。
［吹雪］：「今お前が俺の前からいなくなったら、きっと俺は発狂する」
［聖奈美］：「は、発狂？」
［吹雪］：「ああ、結構リアルだと思う」
［聖奈美］：「そ、そうなの」
［吹雪］：「だから、ずっと傍にいてくれよ？」
［聖奈美］：「当たり前よ、あたしだって、あなたに夢中なんだから」
［吹雪］：「――お、そろそろ曲が始まるんじゃないか？」
画面に歌詞が表示されメロディーが再生される。
［聖奈美］：「あ、マイク、マイク」
［吹雪］：「ほら」
［聖奈美］：「ありがとう」
［吹雪］：「ついに聴けるんだな、聖奈美の歌声が」
［聖奈美］：「あ、あまり過度な期待はしないでちょうだいね」
……。

聖奈美ルート・レゲーロ（8）

［場所：商店街］

［吹雪］：「――いや～、すっかり聴き惚れてしまった」
［聖奈美］：「さっきからそればっかり……」
［吹雪］：「だって、本当のことだもん」
［聖奈美］：「もんって、あなた……」
［吹雪］：「マジで癒されたよ、俺」
聖奈美の歌声は、冗談抜きで上手かった。音程、裏声、メロディーラインどれをとってもハイレベルで、実は歌手なんじゃないかって思うほどだった。
［吹雪］：「あんなに歌えるのに、どうして今まで披露しなかったんだよ」
［聖奈美］：「どうしてって、そういう場もなかったし……」
［吹雪］：「生徒会でそういうイベントを設ければいいじゃないか」
［聖奈美］：「自分の声を聴かせるために？　どこのナルシストよ」
［吹雪］：「でも、昔の聖奈美は……」
［聖奈美］：「そ、それは言わないで！　お願いだから……」
［吹雪］：「……今の、メチャクチャかわいかったぞ。もう一回してもらっていいか？」
［聖奈美］：「そ、そんなのお願いしないでよ……」
［吹雪］：「人に聴かせる価値がある歌声だと思うよ、あれは」
［聖奈美］：「あたしは……吹雪にそう言ってもらえるだけで、満足よ」
［吹雪］：「――また俺が喜ぶことを」
［聖奈美］：「本当のことを言っただけよ」
［吹雪］：「俺の言葉をパクッたな？」
［聖奈美］：「恋人なんだから、有効活用したっていいでしょう？」

［吹雪］：「しょうがない、全力で許す」
［聖奈美］：「ふふ」
俺だけが知ってる聖奈美の美しい歌声……それはそれで素敵だな。
［吹雪］：「にへへ……」
［聖奈美］：「吹雪、また顔が……」
［吹雪］：「あ、悪い。……戻ったか？」
［聖奈美］：「え、ええ。あまり、表情を崩しすぎないほうがいいわよ？　ちょっと、怖いから」
［吹雪］：「き、気を付ける……」
俺の顔は俺の想像以上に崩れていたようだ。
［聖奈美］：「次は、ボーリングに行くのよね？」
［吹雪］：「ああ。コツとかの話をしてあげたいんだが……実は俺、ボーリングはそんなに行ったことないんだ」
［聖奈美］：「え？　そうだったの？」
［吹雪］：「ああ、最初に行った二つとゲームセンターのリピートはしてるんだが、ボーリングはそこまでリピートしてないんだ。だから、俺もボーリングは初心者みたいなもんなんだ。だから、コツとかそういうのは……分からない」
［聖奈美］：「一人で楽しんでる姿を想像できるのに……」
［吹雪］：「俺にも行かない場所があるってことだよ。ちょっと意外だったろ？」
［聖奈美］：「ええ、かなり。娯楽施設は全てマスターしてるとばかり思っていたから」
［吹雪］：「期待を裏切ってしまって申し訳ない」
［聖奈美］：「べ、別に謝らなくていいわよ。そういう意味で言ったんじゃないから……いいじゃないの、お互いに初心者なんだし、二人で色んな発見ができるでしょう」
［吹雪］：「それは言えてるな」
［聖奈美］：「二人で研究していきましょう。ね？」
［吹雪］：「そうだな。よし、いっちょやるか！」

［聖奈美］：「ええ」

……。

……。

……。

聖奈美ルート・レゲーロ（9）

［場所：道路］

［吹雪］：「――ふう、楽しかったな」
［聖奈美］：「ええ、とても有意義な時間だったわ」
空が徐々に暮れてきた頃、俺たちはトロピカルドリンクを飲みながら帰宅する最中だ。今回のデートで、聖奈美について分かったことと言えば――。
［吹雪］：「聖奈美は、何でもできる子なんだな」
［聖奈美］：「な、何よ？　いきなり」
［吹雪］：「いや、前回から思ってたことなんだけど、今回のデートで確信がついたから」
［聖奈美］：「別に、普通だと思うわよ」
［吹雪］：「……頼むから今この場で普通って言わないでくれ。俺、結構傷ついてるんだから……」
［聖奈美］：「え？　あ、ご、ごめんなさい」
［吹雪］：「分かってくれればいいんだ、うん」
［聖奈美］：「（あたしの想像以上に、心に傷を負ってたのね……）」
［吹雪］：「話を戻すと、ダーツにしろボーリングにしろ、最後にやったゲームセンターの太鼓ゲームにしろ、どれもすぐにコツを掴んで上手にやってただろう？　普通の人じゃ、最初からあんな風にはできないと思うんだよ」
［聖奈美］：「さっきも言ったけど、吹雪がポイントを教えてくれるからでしょう？」
［吹雪］：「いや、教えたって一回であんなに上手くはなれないよ。何かコツを掴むコツがあるんじゃないのか？」
［聖奈美］：「またややこしいことを聞くわね……」

［吹雪］：「俺もそう思うけど、俺の言いたいことは伝わってるだろ？」

［聖奈美］：「まあ、一応……」

［吹雪］：「何か心掛けてることとかあるのか？」

［聖奈美］：「そうね……教えてくれる人の言ったことはなるべく守るようにしてるかしら。自分なりのアレンジを加えるのはそれをマスターしてからって思うから、まずは上手な人の動きを真似してみることから始めるようにしてるわ。基本ができない内からアレンジを加えたって上手くはなれないでしょう？　何事も基本が大事、それを念頭に置いてるわ」

［吹雪］：「なるほど……」

生まれ持った才能と、順応するための努力の融合が、聖奈美の上達のコツってわけだな。

［吹雪］：「ためになります、聖奈美先生」

［聖奈美］：「せ、先生言うのやめなさい。……恥ずかしいでしょう」

［吹雪］：「だって、下手な先生よりよっぽど説得力あるから」

［聖奈美］：「それ、あたしっていう補正をかけてないかしら？」

［吹雪］：「いや、かけたいけどかけてないぞ」

［聖奈美］：「かけたいって気持ちはあるのね……」

［吹雪］：「筋はすごく通ってるからさ。さすがは杜グループの娘だ」

［聖奈美］：「……外でそれを言うのはやめましょうよ。誰かに聞かれたくないから」

［吹雪］：「ああ、すまない」

今はまだ非公表だったな。

聖奈美ルート・レゲーロ（１０）

［聖奈美］：「やっぱり、吹雪の提案を飲んで正解だったわね」
［吹雪］：「ん？　提案？」
［聖奈美］：「あたしの行ったことがないところを回ったことよ。吹雪の言った通り、毛嫌いはするべきじゃないってことが分かったわ」
［吹雪］：「それを分かってもらえたのは嬉しい限りだ」
［聖奈美］：「吹雪のおかげで、あたしは色んなものに触れ合う機会をもらった気がするわ」
［吹雪］：「ほとんど娯楽施設だけどな」
［聖奈美］：「でも、それだって知ってると知らないとではかなり違うはずよ。あたしは、大切なことを知ったと思ってる」
［吹雪］：「確かに、聖奈美は息抜きを忘れてしまうことがあったからな。今は、違うだろうけど」
［聖奈美］：「吹雪のおかげで考え方を変えることができたし、選択の幅も増えた。何だか、今まで以上に普段の生活が楽しくなった気がするの。それを与えてくれたのは、他の誰でもない、吹雪よ」
［吹雪］：「聖奈美……」
［聖奈美］：「これからも、色んなところに連れて行ってくれるかしら？」
［吹雪］：「もちろん、喜んでエスコートさせてもらうよ」
［聖奈美］：「ふふ、これからが楽しみだわ」
夕焼けの輝きに負けないくらい、聖奈美の顔も輝いていた。
［吹雪］：「今のうちに、次に行きたいところを考えておけよ、連れて行ってやるから」
［聖奈美］：「次はダルクも一緒に連れて行きたいわね」
［吹雪］：「そういえば、今日は留守番してるのか？　あいつ」
［聖奈美］：「ええ、二人で楽しんできてって。気を遣ってくれた

みたい」
［吹雪］：「本当に、良い使い魔だよ、あいつは」
［聖奈美］：「ええ。あたしの大切なパートナーだわ」
……今度、改めてお礼を言うとしよう。
［吹雪］：「――ふう、ごちそうさま」
［聖奈美］：「そうだわ。今日あたしが料理当番なんだけど、何か食べたいものとかあるかしら？　リクエストがあれば叶えたいと思うんだけど」
［吹雪］：「え？　いいのか？」
［聖奈美］：「イブは終わったけど、今日はまだクリスマスよ。願い事は叶えてあげたいなって思って」
［吹雪］：「どうやら、サンタクロースは実在してたようだ。俺の目の前に」
［聖奈美］：「あ、あたし？」
［吹雪］：「お前以外に誰がいるんだ。願い事を叶えてくれる人は、俺にとってサンタクロースさ。つまり、聖奈美ってことだ」
［聖奈美］：「そ、そんなたいそうな存在じゃないわよ」
［吹雪］：「でも、メチャクチャ感動した……ありがとう」
［聖奈美］：「どういたしまして。それで、何が食べたいの？」
［吹雪］：「うーん、そうだな……」

――その日の料理、聖奈美特製のスパゲティフルコースは泣きそうな程の美味しさだった。

聖奈美ルート・グラシア（1）

12月27日（月曜日）

［場所：道路］

［吹雪］：「――悪いな、聖奈美、ダルク。付き合わせちまって」
［聖奈美］：「いいのよ、社会科室に黙っているのもつまらないし」
［ダルク］：「うん、良い気分転換になるよ」
［聖奈美］：「吹雪と一緒にでかけられる口実ができたしね」
［吹雪］：「……本当、男心が分かってるな、聖奈美は」
［聖奈美］：「ふふ、吹雪限定だけどね」
［ダルク］：「成長したね、聖奈美も」
［聖奈美］：「ありがとう」
三人で、俺の家へと向かう。
実はさっきマユ姉から依頼を受けたんだ。学校関係の書類を作成するための資料を家から取って来てほしいと。マユ姉は昼から仕事をするから自分では取りに行けない。そうなると、自然と俺が取りに行くことになる。それで、行くための準備をしていたら、聖奈美が付いてきてくれると言ってくれたんだ。ちょっと面倒くさいと思ってたお使いも、これなら全く苦にならない。むしろお使いを頼んだマユ姉にお礼を言ってもいいくらいだ。もちろん、こういうミスは無くしてほしいところだが。まあ、仕事を真面目にするって意志が見えただけ良いとしよう。
［ダルク］：「楽しみだな、吹雪の家」
［吹雪］：「ああ、そういえば連れてったことなかったな」
［聖奈美］：「吹雪の家に行くどころか、こっち方面に来たことすらないわよ」
［吹雪］：「全く違う方向だもんな、聖奈美の家は」

［聖奈美］：「ええ、だから結構新鮮よ」
［吹雪］：「初体験か？」
［聖奈美］：「そうね」
［ダルク］：「いいよね、この道。すぐ傍に海が見えて」
［吹雪］：「まあな、夏は潮風が吹いてきて気持ちいいんだ。……冬は全然そうは思わないが」
［聖奈美］：「むしろ、寒いわよね」
［ダルク］：「そ、そうだね」
［吹雪］：「もう少し続くから、我慢してくれ」
［聖奈美］：「え、ええ。大丈夫よ」
［吹雪］：「……」
今この道には誰もいないし……言ってみようか。
［吹雪］：「み、聖奈美？」
［聖奈美］：「何？」
［吹雪］：「えっと……ん……」
俺は右肘を聖奈美に突き出してみた。

聖奈美ルート・グラシア（2）

［聖奈美］：「こ、これは？」
［吹雪］：「いや、寒さを凌ぐ方法として……くっついてれば、自然と暖かくなるんじゃないかと思ってさ。今は、誰もいないし……どうだ？」
［聖奈美］：「……うん、そうね。折角だし、お邪魔させてもらおうかしら」
［吹雪］：「ああ。どうぞ」
［聖奈美］：「じゃあ、失礼するわね」
聖奈美は俺の肘の内側に左腕を差し入れ、体をくっつけた。
［聖奈美］：「こ、こんな感じかしら？」
［吹雪］：「ああ、間違ってないと思うぞ」
［聖奈美］：「ならよかったわ。……確かに暖かいわ、吹雪の腕」
［吹雪］：「聖奈美の腕も暖かいよ、それに、くっついてる体も」
服越しでも、四肢の体の柔らかさが伝わってくる。
［ダルク］：「似合ってるよ、二人とも」
［吹雪］：「こ、この体勢に似合ってる似合ってないってあるのか？」
［ダルク］：「もちろんあると思うよ。二人がそうやってる姿に、違和感は感じないもの」
［吹雪］：「そ、そうか？」
［ダルク］：「うん、バッチリだよ」
［聖奈美］：「でも、これを人前でやる勇気は……まだないわね」
［吹雪］：「それはそうだな」
周りの目を気にしなくならないまでに成長しないことには難しいだろう。……もちろん、必ずしなくちゃいけないわけではないけど。
［吹雪］：「無理してやることでもないし、いいんじゃないか？気にしなくても」

［聖奈美］：「そうよね。……こういう人目のない場所で問題ないわよね」
［吹雪］：「そうそう」
［聖奈美］：「……もうちょっと、くっついていいかしら？」
［吹雪］：「もちろん」
嬉しい限りだ。
［聖奈美］：「うん、良い感じね」
表情が、ちょっと楽しそうだった。その頭の上で、ダルクが親指をグッと立てている。俺は同じようにグッと親指を立てて返した。
……。
［吹雪］：「――ん？」
頬にピチャリと一滴の水が落ちてきた。
［吹雪］：「水？」
［聖奈美］：「あたしも感じたわ」
［ダルク］：「私の背中にも落ちてきたよ」
すると、また同じように頬に冷たい感触が。
［吹雪］：「雨、降ってきてるか？」
空を見上げると、グレーがかった雲が空一面を覆っていた。いつ雨が降ってもおかしくない状況だ。
［ダルク］：「天気、悪くなってきてたんだね」
［吹雪］：「そのようだ」
［聖奈美］：「吹雪の家まで、後どれくらいかかるの？」
［吹雪］：「後少しで着くんだけど……保ってくれるかな？」
［聖奈美］：「急いで行ったほうがいいかもしれないわね」
［吹雪］：「そうだな、ちょっと残念だが……そうしよう」
俺たちは小走りで自宅を目指す。
［吹雪］：「うわ、とうとうきやがった」
ザーっという音と共に、水の粒が空から降ってくる。
［吹雪］：「もうちょっとだから、我慢してくれ二人とも」
［聖奈美］：「ええ」

［ダルク］：「うん」

……。

聖奈美ルート・グラシア（3）

［場所：自宅］

［吹雪］：「――とりあえず、乾かそうか」
［聖奈美］：「そうね」
お互いにコートを脱ぎ、ストーブの前にかけておく。長時間雨の中にいたわけではないけど、髪はすっかりビショビショになってしまった。
［吹雪］：「乾くまで、しばらく待たないとな」
［聖奈美］：「そうね。……くしゅん！」
［吹雪］：「聖奈美？」
［聖奈美］：「大丈夫、体がちょっと冷えてるだけだから」
この時期の雨は寒いからな。ストーブだとすぐには暖まれないし……よし。
［吹雪］：「風呂、沸かそうか。そうすれば、体ポッカポカになるし」
［聖奈美］：「え？　そんな、悪いわよ」
［吹雪］：「何遠慮してんだよ。濡れた髪も確かに素敵だけど、そのままじゃあみんなのところに戻れないだろう？　それに、しばらくシャワーだけで生活してたし、足を伸ばして湯船に浸かれなかっただろう、入っていけよ」
［聖奈美］：「……じゃあ、お言葉に甘えて」
［吹雪］：「よし、じゃあすぐ沸かしてくる。ちょっと待っててくれ」
湯船にお湯を溜めなくては。
［聖奈美］：「……」
……。

聖奈美ルート・グラシア（4）

［吹雪］：「できたぞ、聖奈美」
［聖奈美］：「え、ええ、ありがとう。……」
［吹雪］：「何だよ、入らないのか？」
［聖奈美］：「その、先に吹雪が入ってくれないかしら？」
［吹雪］：「え？　何で？」
［聖奈美］：「吹雪だって、雨に濡れて体冷えてるでしょう？　あたしはお客なんだし、先に家人が入るのは当然じゃない」
［吹雪］：「いや、別にそんなこと気にしなくても」
［聖奈美］：「い、いいから。ね？　入ってよ」
［吹雪］：「妙に勧めるな、何かあったのか？」
［聖奈美］：「べ、別に何もないわよ……」
［吹雪］：「うーん……」
聖奈美のために風呂を沸かしたのに、俺が先に入るってのは釈然としないんだが……。
［聖奈美］：「お願いよ、吹雪」
［吹雪］：「分かった。じゃあ、すぐに入って順番を回すよ。それまでストーブに当たって待っていてくれ」
［聖奈美］：「え、ええ」
［吹雪］：「じゃあ、先に失礼するぞ」
……何で、俺を先に入れるように勧めたんだろうな？　ちょっと理解がしがたい。まあいい、早く順番を回すとしよう。確かに、俺も体冷えてたしな。
俺は服を脱いで浴槽に体を沈めた。

聖奈美ルート・グラシア（5）

【聖奈美サイド】

［聖奈美］：「――よし、行くわよ」

［ダルク］：「聖奈美？」

［聖奈美］：「ダルク、ちょっと悪いんだけど、姿を消しててくれないかしら？　少しの間」

［ダルク］：「え？　どうして？」

［聖奈美］：「あたし、今から吹雪のいるお風呂場に行ってくるから」

［ダルク］：「え、ええ！？」

［聖奈美］：「や、やっぱりおかしいかしら？」

［ダルク］：「いや、だって……聖奈美にしては大胆すぎるというか……ど、どうしてそんなことを？」

［聖奈美］：「だって、普通男の人って女性に背中を流してもらうことって嬉しいことなんでしょう？　まだ吹雪にしてあげたことないから、してあげようかなって思って」

［ダルク］：「まだしたことないって、吹雪と聖奈美が付き合ってからまだ一週間も経ってないんだよ？」

［聖奈美］：「それは、分かってるわ。でも……吹雪の喜ぶことはしてあげたいって思うし……好きな人の喜ぶ姿を、あたしは見ていたいの」

［ダルク］：「聖奈美……。そこまで思ってるなら、止めるのは野暮だよね。いいよ、聖奈美の好きなようにするといいよ」

［聖奈美］：「ごめんなさいね、急にこんなこと言い出して」

［ダルク］：「いいんだよ、むしろ恥ずかしいことを言わせた私がごめんなさいというか」

　確かに、言われてみればとっても恥ずかしいことを言ってるわね。相手がダルクで本当に助かったわ。

［ダルク］：「じゃあ、頑張ってね。応援してるから」
［聖奈美］：「え、ええ」
［ダルク］：「じゃあ、また後で」
ダルクはすっと、姿を消した。
［聖奈美］：「頑張るのよ、あたし」
深呼吸をし、いざ吹雪のいるお風呂場へ。
【聖奈美サイド　終わり】

聖奈美ルート・グラシア（6）

［場所：お風呂場］

［吹雪］：「――ふう、大分暖まってきたな」

体に溜まっていた冷たさはもうすっかり取れている。後は体と髪を洗って、聖奈美に順番を回せばオッケーだ。

［吹雪］：「早いとこ洗おう」

その時だった――。

［吹雪］：「ん？」

何だ？　今、洗面所から音が聞こえたような気が……うん、やっぱり聞こえるぞ。今、俺以外にこの家にいるのは聖奈美とダルクだけ。だから、もし音が聞こえてもどちらか二人が出した音ということになる。まあ、それはそれでいいとして――どうして今、洗面所から音がしたんだ？　しかも、よく聞けば服が擦れるような音だ。元からダルクは服を着てないし、後服を着ているのは聖奈美以外にいない。

［吹雪］：「ま、まさか――？」

いや、でも、まさか、そんなことは――。ゆっくりと、風呂場のドアが開けられる。

［聖奈美］：「……」

そんなこと、あったようだ。

［吹雪］：「お、お前何で！？」

［聖奈美］：「その、背中でも流そうかなって思ったから……ダメかしら？」

［吹雪］：「ダメっていうか……一人でゆっくり入らせようと思ってたのに……」

［聖奈美］：「その……こうすると、吹雪は喜んでくれないかなって思って……め、迷惑だったかしら？」

［吹雪］：「いや……」

バスタオルが体に巻いてあると言っても、聖奈美の整ったプロポーションははっきり視界に映っている。むしろバスタオルを巻いていることで、出ているところ、くびれてるところがより鮮明に見えるというか。まあ、つまりは――。

［吹雪］：「――メチャクチャ、嬉しいけど」

［聖奈美］：「よかった。入ってきた時、あまり反応なかったから」

［吹雪］：「いや、驚きすぎて何をしゃべっていいのか分からなくなって……」

［聖奈美］：「そ、それはそうよね。あたしが吹雪の立場でもきっと思うでしょうし。でも、サプライズも大事って思って」

確かに、ニトロ級のサプライズだな、これは。

［聖奈美］：「ま、まだ体洗ってないわよね？　あたしが、洗ってあげるわ」

［吹雪］：「え？　でも……」

［聖奈美］：「い、いいから。ほら、椅子に座って？」

そう言って、聖奈美は椅子の前に腰を下ろす。バスタオルで隠しきれない小麦色の太腿がとても綺麗で、どうしても目線が行ってしまう。

［聖奈美］：「ふ、吹雪？」

［吹雪］：「あ、うん、分かった。じゃあ、お願いするよ」

どうしても聖奈美を意識してしまい、上手く言葉をつなげられない。どうにかしたいとは思うけど、こんな状況で正常な思考など働けるわけがない。何とか、椅子に腰を下ろすことはできた。

［聖奈美］：「じゃあ、失礼するわね？」

［吹雪］：「あ、ああ」

聖奈美は、この状況を何とも思ってないのだろうか？　風呂場の気温が高いから、顔が赤いのかどうかが上手く判別できない。

［聖奈美］：「じゃあ、まず体から……」

ボディーソープに手を伸ばし、泡立て、俺の体に手を滑らせる。

［吹雪］：「うっ……」
［聖奈美］：「あ、冷たかった？」
［吹雪］：「いや、大丈夫。そのまま続けてくれ」
［聖奈美］：「分かったわ」
背中越しに聖奈美の声。心臓はバクバク言って飛び出してきそうになっている。
［聖奈美］：「ん……ん……」
［吹雪］：「き、気持ちいいよ」
［聖奈美］：「本当？」
［吹雪］：「ああ、本当」
［聖奈美］：「よかったわ。人の体を洗うのは、初めてだから」
［吹雪］：「そ、そうなのか？」
［聖奈美］：「ええ。だから、これも初めての体験よ」
［吹雪］：「……」
今のこの状況で、そんなことを言われたら……ヤバい、股間に血液が集中してきてる。
［聖奈美］：「腕、借りるわね」
［吹雪］：「あ、ああ」
［聖奈美］：「……。あなた、結構筋肉質なのね」
［吹雪］：「ま、まあ、男だから。女性より多少そうじゃないと」
［聖奈美］：「でも、こことかかなり盛り上がってない？」
そう言って二の腕を触ってくる。
［吹雪］：「べ、別に普通だと思うぞ」
［聖奈美］：「そうかしら？」
［吹雪］：「言ってもらえるのは嬉しいけど、多分そう」
［聖奈美］：「そうなの」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「ふ、吹雪？」
［吹雪］：「な、何だ？」
［聖奈美］：「その、後ろは終わったから、今度は前を洗わせてく

れないかしら？」
［吹雪］：「ま、前か？」
［聖奈美］：「え、ええ」
果たして、今の俺に耐えきれるのか？　……でも、やるしかないよな。
［吹雪］：「今、向きを変えるから」
［聖奈美］：「ええ」
意を決して、俺は体の向きを逆にした。当然視界には、聖奈美の顔とバスタオルに包まれた体が飛び込んでくる。
［吹雪］：「よ、よろしく……」
［聖奈美］：「ええ。じゃあ、また失礼するわね」
聖奈美はボディーソープに手を伸ばす。しかし――。
［聖奈美］：「あっ！？」
バランスが悪かったのか、聖奈美は手を伸ばしたまま、俺の体に寄りかかってしまった。言うなれば、聖奈美が俺の胸に飛び込んできた感じだ。
［吹雪］：「う……」
押し付けられる聖奈美の体の感触。目線の先にあるＶの字を描いた胸の谷間、そして聖奈美の甘い香り……。……我慢、できそうにない。
［聖奈美］：「ふ、吹雪？　きゃっ！？」
俺は自分の気持ちに正直になって、聖奈美の体をぎゅっと抱きしめた。
［聖奈美］：「ふ、吹雪？」
［吹雪］：「ごめん。俺、もう……我慢が限界に達しちまったよ」
隠しきれない感情をそのまま伝える。
［吹雪］：「聖奈美のそんな姿見せられたら、もう、自分の気持ちのセーブが効かなくて……」
［聖奈美］：「吹雪……我慢してたのね、やっぱり」
［吹雪］：「ば、バレてたか？」

［聖奈美］：「疑問はあったわ。ちょっと、会話の歯切れが悪かったから」
［吹雪］：「申し訳ない」
［聖奈美］：「いいのよ。あたしだけじゃなくて、安心したわ」
［吹雪］：「え？」
［聖奈美］：「あたしも、吹雪と同じ気持ちだったわ。最初は意識しないようにしようって思ってたんだけど、吹雪の体を触ってたら、どんどんそんな気持ちが溢れてきて……あたしも、我慢してたのよ」
［吹雪］：「そ、そうだったのか」
［聖奈美］：「そんな風に、思わなかった？」
［吹雪］：「いや、だって……会話がいつも通りな感じだったし、何ともないように二の腕とか触っていたから……」
［聖奈美］：「あれは、女の意地よ。もし、あたしだけがそんな風なこと考えてたら、すごく恥ずかしいじゃない」
［吹雪］：「つまり、俺たちは同じことを考えてたってことか？」
［聖奈美］：「そう、なるわね」
［吹雪］：「――はは、こんなところでも、俺たちは一緒なんだな」
［聖奈美］：「ふふ、そうみたいね」
だとしたら、俺が次何をするかも知っているだろう。
［聖奈美］：「んふ……ちゅ……」
顎にすっと手を伸ばすと、聖奈美は目を閉じて唇を差し出してくれた。お湯の蒸気で、聖奈美の唇は少し濡れていた。
［吹雪］：「聖奈美」
［聖奈美］：「ええ。――しましょう、吹雪」

聖奈美ルート・グラシア（6）（後書き）

この後のシーンは、ラブシーンｖｅｒでお楽しみください。

［吹雪］：「ほら、来いよ。聖奈美」
［聖奈美］：「だ、大丈夫かしら？」
［吹雪］：「大丈夫だよ、ほら、早く」
［聖奈美］：「じゃ、じゃあ……失礼するわ」
先に湯船に入った俺の上に、聖奈美はおずおずと腰を下ろす。もちろん、バスタオルは付けてない。
［聖奈美］：「はあ……気持ちいい」
［吹雪］：「沸かした甲斐があったってもんだ」
［聖奈美］：「……エッチな感情も、同時に湧いちゃったけどね」
［吹雪］：「ま、まあな」
まだちょっと、高揚感が抜け切れてない俺たち。まあ、数十分前だから当たり前なんだろうけど。
［吹雪］：「なあ、ちょっと変なこと聞いていいか？」
［聖奈美］：「な、何？」
［吹雪］：「その……聖奈美はどこで……口でするってことを覚えたんだ？」
［聖奈美］：「あ、あれね。あれは……パソコンで調べたのよ。やっぱり、一度そういうのを体験したら、他にどういうやり方があるのかって気になるでしょう？　だから、空いた時間にちょっと……」
［吹雪］：「なるほどな……」
［聖奈美］：「へ、変だったかしら？」
［吹雪］：「まさか。むしろ感動だったよ」
［聖奈美］：「か、感動？」
［吹雪］：「正直、まさか聖奈美に口でしてもらえるなんて思ってもなかったから」
［聖奈美］：「……期待してなかったってこと？」
［吹雪］：「そういうことじゃなくて、何て言えばいいのか……聖

奈美のイメージじゃないなって考える自分がいたんだ、俺の中に」
［聖奈美］：「あ、あなた……してもらう姿を想像してたの？」
［吹雪］：「……べ、別にしてないぞ？」
［聖奈美］：「目、泳いでるわよ？」
［吹雪］：「いや、普通だ普通。でも、そんなイメージはあったんだよ。だけど……実際にしてもらって、がらっと印象が変わったな。イメージと違って……メチャクチャエロくてかわいかった」
［聖奈美］：「え、エロいって……それ、褒め言葉なの？」
［吹雪］：「当たり前じゃないか？　この場合のエロいは、魅力的ってことを意味するんだぜ？」
［聖奈美］：「そ、それなら魅力的って言ってくれた方が……」
［吹雪］：「いや……聖奈美のあの姿を見たら、エロいと言わざるを得ないというか……」
［聖奈美］：「う……思い返すと、恥ずかしいわね」
［吹雪］：「でも、すごくかわいかったぞ」
聖奈美があそこまで乱れた姿を見たのは、きっと俺一人のはずだ。

聖奈美ルート・グラシア（8）

［吹雪］：「想い出に大切に閉まっておくよ」
［聖奈美］：「あ、あんまり読み返さないでちょうだいね？」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「こ、こらっ！　言ってる側から……」
［吹雪］：「そんなこと言われたってな……読み返したいほどの内容だったわけで……」
［聖奈美］：「……あ、あたしもそうは思うけど、せめてあたしがいないところでしてちょうだい、お願いだから……」
［吹雪］：「……善処はする」
［聖奈美］：「断言してくれないのね……」
［吹雪］：「言い切れる自信がない！」
［聖奈美］：「そこをそんな自信満々に言わなくても……」
［吹雪］：「それだけ、印象深かったんだよ」
［聖奈美］：「うう……」
［吹雪］：「――ありがとよ、聖奈美」
［聖奈美］：「え？　ひゃっ！？」
俺は後ろから聖奈美を抱きしめた。
［聖奈美］：「な、何よ？　急に？」
［吹雪］：「こうするのに、理由が必要か？」
［聖奈美］：「べ、別にそういうわけじゃないけど……びっくりしたから」
［吹雪］：「嫌ならやめるけど」
［聖奈美］：「嫌なんかじゃないわ」
聖奈美は俺の腕を外側から掴んだ。
［聖奈美］：「吹雪に抱きしめられると、すごい心が安らぐから」
［吹雪］：「俺も、聖奈美を抱きしめてると、すごく心が暖かくなる」

［聖奈美］：「でも、どうしてありがとうなの？」
［吹雪］：「ん？　あげたらきりがないんだけど……強いて言うなら、俺に幸せをくれてることかな？」
［聖奈美］：「……本当にあなた、恥ずかしいことをさらっと言うわね」
［吹雪］：「もちろん、聖奈美にたいしてだけだ。他の人にこんなことは言えないし」
［聖奈美］：「当たり前よ。他の人にそんなこと言ってたら、あたしもさすがに怒るわよ？　容赦なく氷漬けにしちゃうから」
［吹雪］：「しないしない。それを知ったから余計にしない」
マジックコロシアムでの怒涛の攻撃は、今も鮮明に覚えている。
［吹雪］：「俺自身、聖奈美にしか言いたくないから」
［聖奈美］：「あたしだって、吹雪だから……気持ちを伝えるんだから」
［吹雪］：「相思相愛ってやつか？」
［聖奈美］：「ええ、そうね」
――この上ない幸せ、絶対に手放さないようにしよう。

聖奈美ルート・イグアル（1）

12月29日（水曜日）

［場所：社会科室］

［聖奈美］：「――すいません、ちょっと電話が来ちゃったので出させてもらえますか？」

［カホラ］：「ええ、いいわよ」

［聖奈美］：「失礼します。ダルク、あたしの分もよろしく」

［ダルク］：「うん、分かった」

合宿メンバーでトランプをしてる最中、聖奈美が携帯電話を片手に外に出て行った。

［フェルシア］：「誰から電話かしらね？」

［舞羽］：「生徒会関係のことかな？」

［吹雪］：「いや、だとしたら先生がここまで呼びに来るだろ。勤務中の人がいるだろうし」

［繭子］：「じゃあ……誰か男の人、とか～？」

［吹雪］：「何？」

［舞羽］：「ふ、吹雪くん……め、目が……」

［吹雪］：「おっと、取り乱しかけるところだった。ごめんな、舞羽」

［舞羽］：「う、ううん。別に大丈夫だけど」

［吹雪］：「滅多なこと言わないでくれよ、マユ姉」

［繭子］：「ごめんね～ふーちゃん」

［吹雪］：「頼むぜ、マジで」

まあ、大したことじゃないだろう。電話くらい、誰にだってかかってくるだろうし。

［カホラ］：「――それにしても、最近の聖奈美、変わってきたわ

よね」
［フェルシア］：「うん。それ、私も思ってたわ」
［カホラ］：「あ、フェルシア先生もですか？」
［フェルシア］：「ええ。よかった、私だけが思ってたんじゃなかったのね」
［カホラ］：「当然です。あれは誰が見ても分かるくらいの変化ですよ。二人もそう思うでしょう？」
［繭子］：「聖奈美ちゃんのこと～？」
［舞羽］：「言われてみれば、最初にあったトゲトゲ感がなくなったような……」
［カホラ］：「そうよね。ダルクちゃんは特にそれが分かるでしょう？」
［ダルク］：「はい、それはもうヒシヒシと感じてます。以前よりさらに魅力が増した気がします」
［カホラ］：「だよねー。まあ、それもこれも全て――」
［吹雪］：「――ん？」
［カホラ］：「彼氏のおかげよね」
［吹雪］：「え？　俺ですか？」
［カホラ］：「他に誰がいるっていうの？　ねえ、みんな」
メンバーはこくこくとうなずく。

聖奈美ルート・イグアル（2）

［吹雪］：「いや、聖奈美があんな風に一皮剥けたのはみんなとの生活のおかげで俺のおかげってわけでは」
［カホラ］：「でも、一番の功労者は吹雪じゃないの。一番聖奈美のことを理解して、一番聖奈美のために動いたんだから。違う？」
［吹雪］：「んー、言ってもらえるのは嬉しいですけど」
［カホラ］：「どうですか？　ダルクちゃん」
［ダルク］：「そうですね。いつも一緒に聖奈美と行動してましたけど、聖奈美のことを一番考えてくれてたのは、カホラさんの言うとおり吹雪だったと思います」
［カホラ］：「ほら、一番身近にいる使い魔ちゃんがそう言ってるんだからそうに違いないわ。もっと誇っていいのよ」
［吹雪］：「いや、誇るなんて滅相もない。あいつ自身が変わろうって思ってくれたから、今に至ってるんだと思いますし」
［フェルシア］：「本当に、吹雪くんは謙虚ね」
［カホラ］：「謙虚すぎると、いつか損しちゃうわよ？　吹雪」
［吹雪］：「そ、損ですか？」
［カホラ］：「たまには誇ることも大切よ？　それ相応の活躍をしたことはみんな分かってるんだから。ちょっと胸を張ったって平気よ」
［吹雪］：「は、はあ……」
［繭子］：「まあ、そこがふーちゃんの良いところでもあるんだけどね～」
［フェルシア］：「あら、マユにしては分かったようなこと言うじゃない」
［繭子］：「当然だよ～、ワタシ、ふーちゃんの姉だも～ん」
［カホラ］：「――まあ、総括して何を言いたいかっていうと、これからも二人仲良くねってこと」

［吹雪］：「あ、はい。もちろん、幸せな日々を送ります」
［カホラ］：「うん、よろしい」
何だかそういう流れのようには見えなかった気がしたけど……まあ、いいか。
［舞羽］：「――あ、やった。また当たった」
［吹雪］：「何だよ、これで三連続かよ」
［舞羽］：「えへへ、次も当たらないかなー」
ちなみに、やっているのは神経衰弱だ。
……。
［聖奈美］：「ごめんね、ダルク」
［ダルク］：「あ、ううん、大丈夫だよ」
しばらくして、聖奈美が帰ってきた。さっき座っていた場所に腰を下ろす。
［吹雪］：「誰からだったんだ？」
［聖奈美］：「あ、そのことは、後で詳しく話すわ」
［吹雪］：「……何か、あったのか？」
［聖奈美］：「心配しないで、暗い話ではないから」
［フェルシア］：「聖奈美ちゃん、順番よ」
［聖奈美］：「あ、はい。えっと……」
詳しく話すか……一体何の話なんだろう？

聖奈美ルート・イグアル（3）

［場所：第二音楽室］

［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……」
［ダルク］：「……」
流されるＣＤの音に合わせて、聖奈美は鍵盤を叩き、メロディーを刻んでいく。本番が近いだけあって、ほぼ完成し尽された演奏と言っていいだろう。淀みのないメロディーは、安心して耳を傾けることができる。
［聖奈美］：「――ふう」
演奏が終わると同時に、俺は拍手を送る。
［吹雪］：「もう、完璧なんじゃないか？　聖奈美」
［聖奈美］：「そうかしら？　自分でも、成長したかなとは思うけど」
［ダルク］：「私も問題ないと思う。強弱もテンポもメリハリがついてるし、この分なら本番も上手くいくよ」
［聖奈美］：「ありがとう、ダルク。じゃあ、今の状態を保って本番に望めれば一番理想ね」
［吹雪］：「俺は、ホーリーカルムを成功させればいいんだな」
［聖奈美］：「そっちは、順調なの？」
［吹雪］：「まあボチボチ。前回みたいに倒れるようなことはなくなったから」
［聖奈美］：「……それが当たり前だと思うんだけど。あたしが言えたことじゃないけど……」
［吹雪］：「大分コントロールできるようになってきたと思う。学園長からもそう言ってもらえたし」
［聖奈美］：「学園長が言うなら、そこそこ信頼できるわね」

［吹雪］：「……俺が言うことは信用できないってことか？」
［聖奈美］：「そういうことを言ってるんじゃないわ。吹雪はホーリーカルムを教わる側なんだから、教える人の言うことのほうが信用できて当然でしょう？」
［吹雪］：「ああ、まあな」
［聖奈美］：「学園長に認められてるんだから、お互いに頑張らないと。二日後の今頃は、もう準備が始まってるでしょうし」
［吹雪］：「だろうな。……そう考えると、ちょっと緊張してくるな」
［聖奈美］：「い、今から？　ちょっと早いんじゃないの？」
［吹雪］：「いやでも、俺たちは島の代表なわけだろう？　未来をしょって立ってるわけだから、どうしてな」
［聖奈美］：「良いプレッシャーって考えましょう。気持ちは分かるけど、そこで動揺してたら成功するものも成功しなくなるわ。自分に自信を持って、持てる力を全て発揮して頑張るの。そうすれば、きっと未来は見えてくるはずよ」
［吹雪］：「……そうだな、聖奈美の言うとおりだ。緊張しすぎてもしょうがないし、なるべく自然体でいるようにしよう」
［聖奈美］：「そうそう」
［ダルク］：「大丈夫だよ、二人なら絶対に上手くいくよ。私が保障する」
［吹雪］：「ああ、サンキューな、ダルク」
［聖奈美］：「――まだ時間あるわね。もう一度通して弾いてみるわ」
［吹雪］：「指に負担はないか？」
［聖奈美］：「ええ、まだいけるわ。痛くなったらすぐに中止するから」
［吹雪］：「了解」
［聖奈美］：「ダルク、スイッチを」
［ダルク］：「うん、スイッチオン」

……。

聞き惚れていたから、あっという間に時間が来た感じだ。
［吹雪］：「お疲れ、聖奈美」
［聖奈美］：「ええ、お疲れ様」
［ダルク］：「お疲れ様」
［吹雪］：「この後は？　いつもだったら、聖奈美はシャワーを浴びに行くよな」
［聖奈美］：「そうだけど……ちょっと、中庭に行かない？　さっきの話、聞かせてあげるから」
［吹雪］：「ああ、そうだったな」
昼の電話の内容を教えてくれる約束だった。
［吹雪］：「今さらかもしれないけど、言いたくないなら言わなくていいからな？」
［聖奈美］：「それだったら言いたくないってさっきの段階で言ってるわ。だから、無問題よ」
［吹雪］：「それならいいんだけど」
［聖奈美］：「吹雪が心配してるようなことじゃないわ。どちらかと言えば、吉報のほうに入ると思うわよ」
［吹雪］：「そうなのか？」
［聖奈美］：「ええ、あたしにとっては結構嬉しいことよ」
［吹雪］：「なら、ちょっと安心した」
［聖奈美］：「じゃあ、行きましょう。ダルクも来て、あなたにも教えておきたいから」
［ダルク］：「うん、分かった」
［吹雪］：「――ダルクもまだ聞いてないのか？」
［ダルク］：「うん、後で教えるからって言われてたから」
［吹雪］：「ふーん」

聖奈美ルート・イグアル（5）

［場所：中庭］

［吹雪］：「サンキュー、奢ってくれて」
［聖奈美］：「一人で飲むのも、何だか寂しかったから」
途中で食堂に寄り、ホットココアを買ってきた。ダルクの分は蓋を器代わりに使用して飲んでもらうことにする。
［聖奈美］：「じゃあ、早速話すわね」
［吹雪］：「ああ」
［聖奈美］：「さっき、あたしに電話をかけてきたのは、あたしのお父さんだったの」
［吹雪］：「ああ、聖奈美がリスペクトしてる人だな」
［聖奈美］：「ええ。その内容だけど、卒業後、あたしを秘書として置くことが正式に決まったっていう連絡だったの」
［吹雪］：「秘書として？」
［聖奈美］：「つまり、お父さんの側近ね」
［吹雪］：「……おおっ！　つまり卒業待たずして内定が決まったってことか？」
［聖奈美］：「まあ、そういうことね」
［吹雪］：「よかったじゃないか！　おめでとう」
［ダルク］：「すごいねー、聖奈美」
［聖奈美］：「あ、ありがとう。……予想以上の反応ね」
［吹雪］：「いや、そりゃそうだろう。な？　ダルク」
［ダルク］：「うん。今のご時世、簡単に就職が決まらないんだし」
［吹雪］：「でも、随分早い決定だな。会議でもあったのか？」
［聖奈美］：「前々から、あたしに経験を積ませるつもりで動いていたらしいから。早めに時期を提示すれば、モチベーションを高めてほしいからだと思うわ」

［吹雪］：「ん？　経験？」
［聖奈美］：「ああ、そっちもまだ言ってなかったわね」
［吹雪］：「そっち？」
［聖奈美］：「まだまだ先の話だけど、お父さんが定年で引退したら、あたしがお父さんの後を継ぐことになってるの」
［吹雪］：「えっと……つまり、聖奈美が社長になるってことか？」
［聖奈美］：「そういうことになるわね」
［吹雪］：「聖奈美が社長……。……すごいじゃないか！　それ」
［聖奈美］：「な、何だか反応が遅かったわね」
［吹雪］：「いや、ちょっと聖奈美が社長になってる姿を想像してたんだ。なるほど、そういうことなら経験を積ませるって意味が分かる」
［聖奈美］：「ごめんなさいね。そのことを話してしまうと、取っ付きにくくなってしまうと思って。だから、今までは伏せていたの」
［吹雪］：「謝る必要はないさ。その事実を話して退いて行ってしまう奴なんてほっとけばいいんだ。そんな奴に友人を名乗る資格はない。まあ、びっくりはするだろうけどな」
［聖奈美］：「現にあなたもびっくりしたものね」
［吹雪］：「いやー、さすがにするって。そうか……そういう未来が待っているから、聖奈美は頑張ってたんだな」
［聖奈美］：「それだけってわけじゃないわ。純粋にお父さんのように立派になりたいとは思ってたし……断ることも、決して無理ではなかったはずだもの」
［吹雪］：「話を聞く限り、聖奈美のお父さんは無理強いしなそうだもんな」
［聖奈美］：「実際に、嫌がるようなことはさせないわ。別に無理にあたしを使わなくても、財閥にはたくさんの良い人材がいるでしょうし」
［吹雪］：「大手だもんな」

［聖奈美］：「そう。だけど、あたしはお父さんを目標にしていたから、断る理由はなかった。それを、お父さんも分かってくれてたから。だから、あたしを次期社長候補として考えてくれている」

［吹雪］：「だからこそ、まずは秘書として雇用するんだな」

社長の仕事を近くで観察することで、どのように仕事を進めていけばいいのかを学ばせ、いざ自分がその職についた時に慌てることのないように。

聖奈美ルート・イグアル（6）

［吹雪］：「大手企業の社長らしい考えだ」
［聖奈美］：「結構、一般的な考えだと思うけど」
［吹雪］：「でも、秘書がそのまま社長になるって……あんまり聞いたことない気がするが」
［聖奈美］：「確かに、あまりそういうケースはないかもしれないわね。秘書は秘書のままで、次期社長をサポートするってケースのほうが多いでしょうし。でも、無理ではないと思うわよ。秘書が社長の代理として仕事を回すこともなくはないみたいだし」
［吹雪］：「それは、少し聞いたことがあるな」
［聖奈美］：「社長になるのはまだまだ先の話よ。ひょっとしたら、秘書の他に何か違う仕事をすることになるかもしれない」
［吹雪］：「あくまで予定の域を超えないしな」
［聖奈美］：「そういうことよ」
［吹雪］：「ダルクは、聖奈美が次期社長になるってこと知ってたのか？」
［ダルク］：「うん、知ってたよ。というか、教えられる前に、耳に挟んじゃったことが……盗み聞きしたとかそういうわけじゃなくて、本当たまたま」
［聖奈美］：「秘密裏に進めてたことじゃないし、そんな気にしなくていいわよ」
［ダルク］：「うん、ありがとう」
［聖奈美］：「――まあそんなわけで、とりあえずは卒業後、お父さんの企業で働くことが決まったって内容よ」
［吹雪］：「本当におめでとう」
［聖奈美］：「ふふ、何回もありがとう」
［吹雪］：「聖奈美社長……いいじゃないか……すげぇ、綺麗だ……」

［聖奈美］：「ちょ、ちょっと？　変な目線で想像してない？」
［吹雪］：「そんなことはないぞ？　ただ、びしっとスーツを着てる聖奈美をイメージしてるだけで」
［聖奈美］：「それが、綺麗って？」
［吹雪］：「ああ、見たことないけど、想像ではメチャクチャ綺麗に映ってる」
［聖奈美］：「あ、ありがとう」
［吹雪］：「――そういう事実を聞くと、聖奈美の人生のシナリオはまだ始まったばかりってわけか」
［聖奈美］：「そうかもしれないわね。今は、起承転結の『起』辺りかしら」
［吹雪］：「聖奈美なら、できると思うよ。俺は」
［聖奈美］：「それ、恋人っていう補正がかかってない？」
［吹雪］：「かけてねぇよ。お世辞言って嬉しがらないってことは知ってるから、心の底から、そう思ってるよ」
［聖奈美］：「ふふ、ありがとう。――そのシナリオには、あなたも参加してちょうだいね？　絶対に」
［吹雪］：「お、俺が登場してもいいのか？」
［聖奈美］：「もちろんよ、むしろあなたがいなかったらあたしのシナリオは進まないわ」
［吹雪］：「じゃあ、出させてもらわないとな」
［ダルク］：「わ、私は？　出てもいい？」
［聖奈美］：「もちろんよ。ダルクは、あたしの大切な使い魔なんだから」
［ダルク］：「えへへ」
［聖奈美］：「――そういえば、吹雪は卒業後の進路をどう考えてるの？」
［吹雪］：「うーん。正直、まだ深く考えてないんだよな。そろそろ考えていかないとっては思ってたんだけど」
［聖奈美］：「まあ時期も時期だし、儀式もあるしね」

［吹雪］：「でも……今日聖奈美の話を聞けたことは、今後の方向に影響が出るかもしれない」
［聖奈美］：「そ、そうなの？」
［吹雪］：「まだ予想だけどな。とりあえずは、儀式を無事成功させてから考えるよ」
［聖奈美］：「それがいいわね」
――聖奈美が次期社長か……うん、やっぱり様になってるな。

聖奈美ルート・イグアル（7）

12月30日（木曜日）

［場所：グランド］

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

［セフィル］：「どうだ？　フェル」

［フェルシア］：「――はい、問題ありません」

［セフィル］：「よし。吹雪、詠唱を止めてくれ」

［吹雪］：「はい。……どうでしたか？」

［フェルシア］：「うん、パーフェクト。今までで一番の出来だと思うわ」

［吹雪］：「本当ですか？」

［フェルシア］：「ええ。この調子で明日も頑張って」

［吹雪］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「……魔力の減りが、以前と比べて大分少なくなっているな。無駄な消費をしなくなってるんだろう」

［吹雪］：「毎日あきらめず努力した甲斐がありました。明日、学園長とフェルシア先生へ恩を返す意味でも、絶対に成功させたいと思います」

［フェルシア］：「ええ、応援してるわよ」

［セフィル］：「……」

［フェルシア］：「どうしたんですか？　学園長」

［セフィル］：「いや、明日が終われば、この合宿も終了するのかと思ってな」

［フェルシア］：「儀式が終われば、必然的にみんなは自宅に帰る

でしょうね」
［セフィル］：「ちょっと、寂しくなってしまったよ」
［フェルシア］：「今日まで、早かったですよね」
［セフィル］：「明日で今年も終わってしまう。また年をとってしまうわけだ」
［フェルシア］：「まだまだお若いじゃないですか、学園長は」
［セフィル］：「何だ？　褒めてもボーナスに影響は出ないぞ？」
［フェルシア］：「そんなの狙ってません。素直な感想を言ってるだけですよ」
［セフィル］：「そ、そうか？」
［フェルシア］：「はい、もちろん」
［セフィル］：「……ありがとう、フェル」
［フェルシア］：「いえ、どういたしまして」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「どうしたの？　吹雪くん」
［吹雪］：「え？」
［セフィル］：「うむ……茶番劇はもういいから……とか思ってたか？」
［吹雪］：「そ、そんなことは全く！　学園長と同じことを考えてただけです。明日で終わっちゃうんだって……そう考えると、ちょっと名残惜しさが胸に込み上げてきたんです」
［フェルシア］：「二週間の間、衣食住を共にしてきたんだものね。その気持ち分かるわ」
［吹雪］：「はい。ちょっと……別れが辛いですね」
［セフィル］：「今生の別れというわけではないんだ。新学期になればまた会えるじゃないか」
［吹雪］：「そうなんですが……」
　みんなと一緒に送ってきた生活と別れることに、辛さを感じている。
［セフィル］：「吹雪の言いたいことは分かるが、さすがに儀式が

終了しても合宿を続けていると色々問題が出てきてしまうんだよ。
その問題は私の責任になってしまうから……」
［吹雪］：「いやいや、続行をお願いしているわけではないので」
［セフィル］：「そうか？」
［吹雪］：「はい、当然です。明日の儀式を成功させるためにみんな頑張ってきたんです。それが終わっても尚合宿をしても正直意味がないので、みんな、帰る家がありますから」
［セフィル］：「確かに」
［吹雪］：「大切に、思い出のページに閉まっておきます」
［フェルシア］：「まだ合宿は終わってないのよ？　最後まで全力で走り抜けましょう？　ね？」
［吹雪］：「……はい、そうですね！」
最後まで、全力でか……。
……。
……。
……。

聖奈美ルート・イグアル（8）

［場所：体育館］

［セフィル］：「よし、じゃあ準備ができたところで、全体で通して弾いてみよう。四人とも、用意はいいか？」

［四人］：「はい」

［セフィル］：「よし、じゃあ舞羽。自分のタイミングで開始してくれ」

［舞羽］：「はい、分かりました」

舞羽は四人に目配せし、指を鍵盤に添える。俺やダルク、フェルシア先生はそれを成功するように見守る。

［舞羽］：「――行きます」

――綺麗な和音と共に、曲が始まった。

……。

［カホラ］：「……」

最後にカホラ先輩が和音を弾き、静かに曲は終了した。全体を通して、淀みはほとんどなく、しっかり完成しているようだった。ピアノを弾き終えた四人に、俺は盛大な拍手を送った。

［セフィル］：「よし、いいぞ四人とも」

学園長の元に、四人はいそいそと集まった。

［セフィル］：「たった今、四人の音色を聴かせてもらったが、……文句なしだ。今までの練習の成果がはっきり出ていて、とても素晴らしいものだったよ」

学園長の言葉に、四人はそれぞれ喜びの反応を示した。舞羽とマユ姉は手をつないではしゃぎ、カホラ先輩は微笑み、聖奈美は……俺に視線を向けてきた。俺はそれに、親指を立てて返してやった。

［セフィル］：「明日もう一度、曲を通して演奏してもらう。それが、合宿最後の練習だ。今の君たちなら、本番もきっと成功し、ピ

アノに認められるはずだ。自分の力を信じて頑張ってくれ」
［四人］：「はい」
［セフィル］：「じゃあ最後に――吹雪」
［吹雪］：「え？」
［セフィル］：「四人に何か伝えてあげるんだ」
［吹雪］：「ま、マジですか……」
［セフィル］：「私はいつだってマジだぞ？」
青天の霹靂とはこのことを言うのか？　何にも、考えてなかったぞ。だけど……言うしかないよな。
［吹雪］：「えっと……今俺も聴かせてもらったけど、本当にすごく良い感じだったと思います。後は、それぞれ離れたところにピアノが安置されているので、メロディーの時間差だけを気を付けてくれれば間違いないと思います。俺も頑張るんで、四人も頑張っていきましょう。――以上です」
［セフィル］：「随分と普通だな、吹雪」
［吹雪］：「勘弁してください、学園長」
この状況でボケてる余裕はありません。
［セフィル］：「ということだ。よし、今日はこれで終わりとしよう。明日に備えて疲れを取っておくんだぞ？　では、お疲れ様でした」
［全員］：「お疲れ様でしたー」
まさか、本当に俺の言葉で終わしてしまうとは……学園長の考えることは予測がつかない。
［聖奈美］：「ふふ」
ドギマギしている俺を見て、聖奈美は気付かない振りをして笑っていた。……ちゃんと見えてるぞ？　聖奈美。

聖奈美ルート・イグアル（9）

［場所：中庭］

［聖奈美］：「ごめんってば、許してちょうだいよ」
［吹雪］：「そんなに、おもしろかったか？」
［聖奈美］：「だって、あんなに取り乱してたから」
［吹雪］：「取り乱しもするって。普通、あんな流れになるなんて考えられないじゃないか」
［聖奈美］：「学園長は考えていたんでしょう？」
［吹雪］：「まあ……時々トリッキーなことを言い出すからな」
それを見抜けなかった俺も悪いのかもしれないけど……それにしたって……。
［聖奈美］：「まあ、気持ちは分かるけど……うふふ」
［吹雪］：「笑いすぎだろ～？　聖奈美」
［聖奈美］：「ごめんなさい。普段見せない一面だったからつい」
［吹雪］：「……次は対応できるように、メモ帳でも持っておくか」
［聖奈美］：「別に変なコメントはしてなかったじゃない」
［吹雪］：「無理やり絞り出したからな。もし次が来た時は、余裕を持って答えたいんだ」
［聖奈美］：「まず、アドリブを利かせられるようにしないとね」
［吹雪］：「こ、今後の課題だな……」
［聖奈美］：「ふふ、頑張りなさいよ」
［吹雪］：「ああ。……ダルクは？」
［聖奈美］：「社会科室にいると思うわ。二人で会ってきてって」
［吹雪］：「本当に……できた使い魔だな」
［聖奈美］：「ええ。あんまり、あそこまで賢い使い魔っていないと思うわ」
［吹雪］：「だよな。それだけ、聖奈美が優れた魔法使いってこと

じゃないか」
優れた実力者には優れた使い魔がつく。
［吹雪］：「良い仕事をしたよ」
［聖奈美］：「本当、生まれてきてくれたのがダルクでよかったわ」
［吹雪］：「大事にしていかないとな」
［聖奈美］：「ええ、当然よ」
こてん。聖奈美が頭を俺の肩に倒した。以前なら恥ずかしがってできなかっただろうに、そういう面も成長したんだと実感する。

聖奈美ルート・イグアル（１０）

［聖奈美］：「いよいよ、明日ね」
［吹雪］：「そうだな」
［聖奈美］：「やっぱり、緊張してる？」
［吹雪］：「それはまあ。だけど、昨日ほどではない、かな。聖奈美に助言してもらったから」
［聖奈美］：「そう、安心したわ。もしガチガチなってたら、ほぐしてあげようと思ってたけど……大丈夫ならそれに越したことはないわね」
［吹雪］：「感謝してます、聖奈美先生」
［聖奈美］：「先生言わないの」
［吹雪］：「似合うと思うけどな、教師っていう仕事も」
［聖奈美］：「そんなことないわ」
［吹雪］：「いや、あうと思うぞ？　少なくともマユ姉よりは似合ってると思う」
［聖奈美］：「……いいの？　そんなこと言っちゃって」
［吹雪］：「似合うか似合わないかは、また別の話だからな。別にマユ姉が教師じゃないって言ってるわけじゃないし」
［聖奈美］：「それはそうだけど……聞いたら怒るんじゃないかしら？」
［吹雪］：「大丈夫だ、聞いてないはずだ」
［聖奈美］：「本人の前では、あまり言わない方がいいんじゃない？」
［吹雪］：「それは心得てるつもりだ。言うのは、注意する時だけさ」
［聖奈美］：「……その流れだと、結構頻繁に言うことになるような」
［吹雪］：「まあ、そこは割り切っていくしかないな」

［聖奈美］：「そうね……あまり深く考えないようにしましょう」
［吹雪］：「ちょっと話が反れたけど……似合うと思うぜ？　俺は」
［聖奈美］：「その自信は、どこから出てくるの？」
［吹雪］：「無論、聖奈美が綺麗だからさ」
［聖奈美］：「……その切り返しにも、少しずつ慣れていかないといけないわね」
［吹雪］：「そうだな。聖奈美を見てるとつい言いたくなっちゃうからな」
［聖奈美］：「あたしも、吹雪のことを言えないかもしれないわね」
［吹雪］：「でも、今みたいな反応をする聖奈美もかなり好きだぞ？　俺」
［聖奈美］：「も、もう。そういうことは言わなくていいわよ」
［吹雪］：「んなこと言ってもな」
好きなんだから、しょうがない。
［吹雪］：「スーツを着たことはあるんだろう？」
［聖奈美］：「それはまあ。式典とかに参加する時もあるから」
［吹雪］：「その時の写真とか持ってないのか？」
［聖奈美］：「ないことはないけど……そんなのいちいち持ち歩かないわ」
［吹雪］：「だよな。……見てみたいぜ、聖奈美のスーツ姿」
［聖奈美］：「……そんなに見たいの？」
［吹雪］：「それはもちろん」
［聖奈美］：「……」
［吹雪］：「……ひょっとして？」
［聖奈美］：「……一応、何かあったらいけないと思って、入れてきてたのよ。持ち物の中に」
［吹雪］：「ほ、本当か！？」
［聖奈美］：「す、すごい顔してるわよ？　吹雪」
［吹雪］：「そりゃあそうさ。つうか、何故そんな大事なことを黙っていたんだ？」

［聖奈美］：「だって……そこまで吹雪がスーツに食いつくなんて思ってもなかったもの。持ってるよって言ったところで、普通はそうなんだってしか答えようがないじゃない」
［吹雪］：「確かに……」
［聖奈美］：「だから、今までは言わなかったの。納得してくれた？」
［吹雪］：「ああ、納得だ。……とどのつまり、今聖奈美はスーツを持ってきてるってことで間違いないんだな？」
［聖奈美］：「ま、まあ……持ってきてるわよ」
［吹雪］：「――聖奈美様！」
［聖奈美］：「あ……」
俺は聖奈美の両手をぎゅっと握りしめ……。
［吹雪］：「頼む。スーツ姿、俺に見せてくれ！」
［聖奈美］：「お願いしてまで見たいのね？　吹雪は」
［吹雪］：「もちろんだ。聖奈美のスーツ姿には、メチャクチャ興味がある！」
［聖奈美］：「す、すごい押しね……」
［吹雪］：「それだけ、必死なんです」
［聖奈美］：「……吹雪の頼みじゃあ、断れないわね」
［吹雪］：「じゃあ、着てくれるのか？」
［聖奈美］：「ええ」
［吹雪］：「しゃあ！」
［聖奈美］：「こ、ここだとバレちゃう可能性が高いから屋上に行きましょう？　で、吹雪は先に行っててちょうだい。更衣室とか使って着替えてくるから」
［吹雪］：「おう、了解した」
［聖奈美］：「……すごい嬉しそうね」
［吹雪］：「実際、すごく嬉しいんだ。普段の聖奈美と、また違った一面を見れるわけだからな」
大事な儀式の前に何してるんだ……と思うかもしれないが、自分

の衝動を止めることはできない。
［吹雪］：「楽しみに、待ってます」
［聖奈美］：「じゃ、じゃあ移動しましょう」
……。
……。
……。

聖奈美ルート・イグアル（11）

［場所：屋上］

［吹雪］：「――どんな感じかな？」

今、妄想が現実になろうとしている。冬の屋上は結構寒いが、それを忘れるくらい今の俺はわくわくしていた。

［吹雪］：「早く、来ないかな」

ふと思った。俺って、こんなにスーツフェチだったっけ？　いや、聖奈美の着るスーツに思い入れているだけか。誰のスーツ姿でもそんな気持ちになるわけじゃないはず。大丈夫、きっと正常だろう。

……。

しばらくして、屋上をノックする音が聞こえた。

［聖奈美］：「吹雪、あたしよ」

［吹雪］：「おう、入ってくれ」

扉が少しずつ開かれる。そして――。

［聖奈美］：「ど、どうかしら？」

［吹雪］：「……」

ついに、現実の聖奈美のスーツ姿を拝むことができた。

［吹雪］：「……」

［聖奈美］：「ど、どうしたの？　ずっと黙って」

［吹雪］：「ああ。言葉を失うくらいに似合ってるから……」

本物のスーツ姿は、俺の妄想を遥かに上回っていた。何て表現したらいいのか……こういう時、自分の語彙力のなさを実感する。とにかく――。

［吹雪］：「メチャクチャかっこいいし、綺麗だよ」

［聖奈美］：「そう？　ありがとう」

見た目は、マユ姉と同じような色遣いのものだ。ただ、聖奈美は比較的身長が高いから、すごく大人びた印象が伺える。……こんな

美人秘書が横にいたら、仕事ができないんじゃないだろうか？
［吹雪］：「マジで、綺麗だ……悪い、さっきから同じことばっかりで」
［聖奈美］：「いいわよ。言ってくれるだけで、嬉しいから」
［吹雪］：「メチャクチャ、様になってる。今からでも秘書を始められそう」
［聖奈美］：「これでも、まだ学生なんだけど？」
［吹雪］：「分かってるけど……いや、マジで感動だ……」
［聖奈美］：「あはは……予想以上に喜んでくれたみたいね……」
［吹雪］：「喜ばないわけがないって」
［聖奈美］：「ふふ。じゃあ……ちょっとだけサービスね？　――失礼します、吹雪社長。今日は、どのようなご用件でしょうか？」
［吹雪］：「――――っ！？」
覗き込むようにして言葉をささやかれる。
［聖奈美］：「どうしたのですか？　何やら慌ててらっしゃるみたいですが」
［吹雪］：「い、いや何でもないよ」
［聖奈美］：「社長、隠さないで言ってください」
［吹雪］：「本当に、大丈夫だから」
もちろん、大丈夫なわけはない。あまりの似合いっぷりに、上手く言葉がつながらないんだ。

聖奈美ルート・イグアル（12）

［聖奈美］：「あたしにできることなら、何でもご相談ください。微力ながら、力になりますよ？」
［吹雪］：「な、何でも？」
［聖奈美］：「はい、何でもです」
［吹雪］：「じゃ、じゃあ――ん？」
言葉を返そうとした時、聖奈美がすっと人差し指を俺の口に伸ばした。
［聖奈美］：「演技よ？　吹雪。どう？　ちゃんとできてたかしら？」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「吹雪？」
［吹雪］：「あ、ああ。文句なしだ、さっきも言ったけど、今から秘書になっても全く問題ないと思う」
一体俺は、聖奈美にどんなことを言おうとしていたんだ？　演技と言うことを今の短い間に忘れてしまうなんて……変態だな、俺は。
［聖奈美］：「そう？　そう言ってもらえると、嬉しいわ」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「吹雪？」
［吹雪］：「あ、いや、何でもないぞ」
［聖奈美］：「……分かってるわよ、何を言おうとしてたか」
［吹雪］：「え？　――ん！」
［聖奈美］：「んん……」
気付いた時には、聖奈美に口を塞がれていた。唇と唇が隙間なくピッタリと重なって、口で息を吸うことができない。
［聖奈美］：「ちゅ……」
［吹雪］：「……」
予想外の聖奈美からの口付けに、俺は為すがままになっていた。

［聖奈美］：「ん……はあ……」
やがて、聖奈美が唇を離す。
［吹雪］：「み、聖奈美……」
［聖奈美］：「こういうことを、望んでたんじゃないの？」
［吹雪］：「……ごめん。聖奈美の演技に、つい引き込まれて……」
［聖奈美］：「謝ることなんてないわ。だって――引き込もうとしたんだもの」
［吹雪］：「え？」
［聖奈美］：「スーツを着てほしいって言われた時から、あたし、こういうことをするんじゃないかなって勝手に考えてたわ。でも、吹雪は気付いてくれてないように見えたから……ちょっと強引だけど、引き込んでみたの」
［吹雪］：「だから最後……ギリギリで止めたのか？」
［聖奈美］：「ええ……そういうことよ。ひょっとして吹雪は、そういうの、考えてなかったかしら？」
［吹雪］：「……最初から、隠す必要なんてなかったんだな」
どうやら、最初から全開でよかったらしい。
［聖奈美］：「ダメね、あたし。生徒会長なのに、すっかり恋に夢中になってる」
［吹雪］：「そういう生徒会長も、全然ありだと思うよ。俺は」
［聖奈美］：「吹雪がそう言ってくれたら、それでいい気になってしまうわね」
［吹雪］：「聖奈美」
［聖奈美］：「は……んちゅ……」
再びキス。触れ合わせるだけではない、舌を絡め合う濃厚なもの。
［聖奈美］：「あっ……んむ……ちゅ、ちゅぷ……あ、ん……ちゅ、ちゅむ」
［吹雪］：「ん……」
［聖奈美］：「んんっ……本当は……あ、んふ……こんなこと、してる場合……じゃないって思う……ん、ちゅぷ、あむ……でも、合

宿も、明日で終わりで……もう、吹雪と一緒に寝泊まりできなくなるから、ふ、ちゅぴ……だから、最後に……ん、ちゅ、忘れられない思い出が、欲しくて、……ちゅ、ちゅぷぷ……だから、あたし、あ、ちゅぴ、れろ……吹雪と、ちゅ、ぴちゃ……ぴちゃ……」

［吹雪］：「心配ない。俺も同じこと、考えてた」

［聖奈美］：「んふ……じゃあ……ちゅ、ちゅぱ……」

［吹雪］：「聖奈美と、一つになりたい」

［聖奈美］：「ん……はあっ」

口の間に銀色のアーチがかかる。

［吹雪］：「聖奈美」

［聖奈美］：「ええ。……しよう？　吹雪」

――万一に備え、俺は屋上に鍵をかけた。

……。

……。

……。

聖奈美ルート・イグアル（１２）（後書き）

ここから先は、ラブシーンｖｅｒでどうぞ！

聖奈美ルート・イグアル（１３）

事の処理を済ませた後、俺は聖奈美と空を眺めていた。後ろから、聖奈美を抱きしめる形で。

［聖奈美］：「これ、さっきの体勢じゃ」

［吹雪］：「これが一番暖かいかなって思ってさ」

寒いのなら中に移動するのが一番なんだろうが、二人きりになれるのは今くらいだからな。

［吹雪］：「嫌いじゃないだろう？」

［聖奈美］：「そうだけど、……その、思い出しちゃいそうで」

［吹雪］：「聖奈美もエッチになったな」

［聖奈美］：「そ、そんな、ことは……多少、あるかもしれないけど……」

ちゃんと認めはしたようだ。

［聖奈美］：「だから、言ってるでしょう？　あなたの前でだけだって」

［吹雪］：「ああ、ちゃんと覚えてる。聖奈美は、俺の前でだけ乱れてくれること」

［聖奈美］：「う……その言い方は、ちょっと」

［吹雪］：「そういうことじゃないのか？」

［聖奈美］：「間違ってはいないけど……何だか、そういう捉え方は……吹雪の前ではずっと乱れてるみたいだし」

［吹雪］：「大丈夫だよ、そこはちゃんと分かってるから。それに、俺の前でだけっていうのは、個人的にはかなり嬉しいことだぜ」

［聖奈美］：「そ、そうなの？」

［吹雪］：「だって、俺しか知らないってことなんだぜ？　世界中で俺しか知らないんだぜ？　嬉しくないわけがないさ」

［聖奈美］：「確かに、そうかもしれないわね」

［吹雪］：「まあ、結局行きつく結論は――聖奈美のことが大好き

だってこと」

［聖奈美］：「ええ、あたしも。吹雪のこと、大好きよ」

もう、愛の言葉を交わすのに抵抗はなくなっていた。

［聖奈美］：「そろそろ、戻る？」

［吹雪］：「もうちょっと、このままでいていいか？」

［聖奈美］：「寒いの？」

［吹雪］：「いや、明日に備えて聖奈美のパワーを充電してるんだ」

［聖奈美］：「じゅ、充電って……」

［吹雪］：「たくさんの作用があるんだぞ？　集中力アップ、脳の回転率アップ、疲労回復、打ち身、打撲、肩こり、冷え症、ストレスを緩和する効果……」

［聖奈美］：「それ、後半は温泉の効能じゃないの？」

［吹雪］：「あれ？　混ざってたか？」

［聖奈美］：「ええ、あたしにはそんな効能は確実にないと思う」

［吹雪］：「そうかな？」

［聖奈美］：「どう考えてもそうでしょう？　あたしに触れるだけで肩こりとかが治るなら、みんなあたしに触れようとするでしょう？　というか、前半も前半でおかしい気もするし」

［吹雪］：「俺はあると思うけどな」

［聖奈美］：「吹雪の言うことは尊重したいと思うけど、今回はさすがに同意できないわ」

［吹雪］：「くそー、否決されてしまった」

［聖奈美］：「普通はするでしょう、どう考えても」

［吹雪］：「でも、こうしてると、すごい落ち着くのは本当だぜ？　聖奈美の体温を直に感じると、心が穏やかになるっていうかさ……それは認めてくれるだろう？」

［聖奈美］：「それは、もちろん。あたしも今、すごく気持ちが安らいでるから」

［吹雪］：「よかった。これを否決されたらどうしようかと思ったぜ」

［聖奈美］：「それも否決するようだったら、こうしてくっついてなんていないわよ」
［吹雪］：「はは、それもそうだな」
［聖奈美］：「ふふ」
聖奈美がきゅっと、俺が回した腕を握ってくる。
［聖奈美］：「あたしも、充電させてもらうわ。吹雪のパワーを」
［吹雪］：「ああ、ガンガン吸うといい。俺は聖奈美のパワーをガンガン吸うから」
［聖奈美］：「当たり前だけど、枯渇しない程度にお願いね」
［吹雪］：「ああ、適度にするさ。明日を乗り切れるくらいの量を受け取るよ。足りなくなったらまたもらうけど」
［聖奈美］：「ええ、いつでも分けてあげるわよ」
［吹雪］：「頑張ろうな、聖奈美」
［聖奈美］：「ええ。学園の代表として、堂々と行きましょう」
［吹雪］：「ああ！」
――儀式前日の夜は、こうして過ぎていった。

聖奈美ルート・イグアル（１４）

１２月３１日（金曜日）

［場所：グランド］

儀式当日、俺たちは朝から最後の練習に励んでいた。ピアニストの４人は、音楽室にあるピアノを一時的に全て同じところに固め、本番さながらの練習をする。
その間に、俺は学園長と共にホーリーカルムの最終チェック。今日は本番だから、いつものようなことはせず、触りだけを重点的に練習する。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「――うむ、どうやら問題はなさそうだな」
学園長からその言葉を聞き、俺は安堵感を覚えた。
［セフィル］：「本番もこの感じでやれば、間違いなく大丈夫だろう」
［吹雪］：「ここまで来れたのも、学園長のおかげです」
［セフィル］：「……」
［吹雪］：「ど、どうしたんですか？　急に黙って」
［セフィル］：「いや、いつもカホラに注意されるものだから、…
…賛辞の言葉には慣れてなくてな。ちょっと、感動しているんだ」
［吹雪］：「そこまでたいしたことでも……」
［セフィル］：「私にとってはとても大事なことだ。学園長たるもの、誰からも慕われるような存在にならないといけないからな。生徒から愛されて初めて、学園長は意味があるんだ」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「そんな私に初めて賛辞をくれたのは吹雪……君だ」
［吹雪］：「え？　そ、それはないでしょう。絶対」

［セフィル］：「いや、あまり生徒と触れ合う時間もないのでな。リアル吹雪が初めてだと思うが」
［吹雪］：「……面と向かってってことですか？　それは」
［セフィル］：「うん。……初めてを吹雪に奪われたわけだ」
［吹雪］：「な、何だか意味合いが違ってませんか？　それ」
［セフィル］：「とにかくだ、私は嬉しい。ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「俺は褒められるようなことしてませんよ。自分の思ってることを口に出しただけですし」
［セフィル］：「口に出すというのは案外難しいことだぞ」
［吹雪］：「でも、そんなこと気にする仲ではもうないですから。俺と学園長は」
［セフィル］：「……危ないかんけ――」
［吹雪］：「決してそういう意味ではなく！」
［セフィル］：「む、最後まで言わせてもらえなかったぞ」
［吹雪］：「な、何にしても、学園長の支えがあったからこそ、俺はハーモニクサーとしての役割を果たせそうなわけですから。本当に感謝してます」
［セフィル］：「そ、そんな風に言われると、ちょっと照れてしまうな」
恥ずかしそうに笑うところは、親子そろってそっくりだな。
［セフィル］：「もちろん、吹雪が一生懸命努力をしたというのもあるぞ。自信を持っていいからな、その点は」
［吹雪］：「はい」
学園長には、成功という恩返しをしたいところだ。
……。

［場所：社会科室］

練習を終え、社会科室に戻ってきた俺たちは、今日の儀式の最終ミーティングを行う。詳しい日程に関しては、昨日のうちに大半を聞

いている。場所が場所なだけに、島民から注目を浴びるということはないのだが、島に設置されたスピーカーを通してピアニストの活躍を確認する。そう、この儀式の参加者は、島民全員ということだ。俺も昔、父さん母さんと一緒に住んでいた頃は、家の外の広場に出てピアノの音色を聴いていた記憶がある。それを今回は、俺がサポートする。緊張するけれど、ちょっと誇らしい気分だ。……帰ってきた時にでも伝えてやりたいな。

［セフィル］：「大体のことは把握したな？」

［全員］：「はい」

儀式の始まりは年が変わる１５分前。ピアニストとハーモニクサーが選出されるのと似ていて、曲が終わると同時に四季のピアノが月と共鳴し、優しい光で包まれた時、来年の四季は約束される。

［セフィル］：「練習風景を見せてもらった限り、君たちに落ち度は見当たらなかった。本番もあの感じで弾ければ、間違いなく成功するはずだ。だから、あまり緊張はしないで、リラックスして臨むんだ。いいか？」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「じゃあ、私は用があるから一度退散させてもらうぞ」

学園長は社会科室から出て行った。この後はしばしの休憩を挟み、本番前にもう一度だけ練習を入れる。この休憩で緊張を解せということかもしれない。

［舞羽］：「お茶でも煎れようか、私家庭科室行ってくるよ」

［聖奈美］：「あ、あたしも行くわ」

そう言って二人が立ち上がった時だった。

コンコン。

ドアがノックされ、ガラガラと扉が開かれた。そこから出てきたのは――。

［祐喜］：「失礼します。あ、やっぱりここにいたんだ」

［愛海］：「あ、みんなそろってるわね」

［翔］：「な、何と言う羨ましい光景……」
すっかり見知った三人組だった。
［吹雪］：「お前ら、どうしてここに？」
［愛海］：「そんなの一つしかないでしょう？　友人が大切な儀式の中心として頑張るのに、激励もしないなんて考えられないでしょう？」
［祐喜］：「三人でお金持ち寄って、みんなに差し入れ買ってきたんだ。僕たちにできることと言ったらこれくらいしかないから」
［翔］：「羨ましい光景だ……」
約一名変なことをずっと呟いているが、今はまだ触れないでおこう。
［舞羽］：「わざわざ買ってきてくれたの？」
［祐喜］：「うん、たいしたものは買ってこれなかったけど。はい、どうぞ」
祐喜は舞羽に持っていたものを手渡した。
［祐喜］：「中身はケーキだから、一応美味しそうなものを見つくろってきたつもりだけど……」
［カホラ］：「そこまでしてくれただけで十分嬉しいわ、ありがとう、三人とも」
［繭子］：「わーい、ケーキだケーキだ～」
予想通り、マユ姉は子供のようにきゃっきゃとはしゃぎ出す。
［聖奈美］：「ここまでしてもらって、失敗はできないわね」
その横で聖奈美は静かな闘志を漲らせている。
［舞羽］：「嬉しい、すごく」
［祐喜］：「喜んでもらえたら何よりだよ。僕たちは、成功すること信じてるから……みんな、頑張ってね」
［吹雪］：「おう！」
［舞羽］：「うん！」
［聖奈美］：「任せときなさい」
［カホラ］：「ええ」
［繭子］：「頑張るよ～」

［吹雪］：「――ところで祐喜。あれは、あのままでいいのか？」
［祐喜］：「え？　ああ、これね」
これと言われて指差されたのは、祐喜の横に立っている翔のことだ。
［祐喜］：「さっきからずっといいなーってばっかり言ってて、いざ部屋に入ったら……どっかに魂飛んでっちゃったみたいだね」
［愛海］：「確かに、この空間には美女がたくさんいるもんね。不自然なくらい」
日野はそう言ってピアニスト４人を眺める。
［愛海］：「天は二物を与えずって言うけど、あれは嘘みたいね。美女で才能持ってる人ばかりがここにいるんだから」
［舞羽］：「べ、別にそんなことは……」
［愛海］：「はいストーップ！　舞羽、それ以上言うと、他の女子にいつか刺されちゃうわよ？」
［舞羽］：「さ、刺される！？」
［愛海］：「自覚は持てないとしても、口に出すのはやめとくのが吉よ？　それが自己防衛になるから」
［吹雪］：「……女子の世界って、やっぱりドロドロしてるものなのか？」
［聖奈美］：「あ、あたしに聞くのやめなさいよ……」
［吹雪］：「……確かにそうか」
［聖奈美］：「今の間は一体何よ……」
［吹雪］：「ううん、気にしないでくれ」
［愛海］：「――だから、翔っちが飛んじゃうのは分からなくはないわね。見てるだけで幸せな空間だと思うし」
［祐喜］：「でも、一応言うこと考えてたみたいだし、そろそろ正気に戻さないと」
祐喜は右手の指を三本立て――。
［祐喜］：「ふっ！」
［翔］：「おおおっ！？」
背中の孔にビシっと突き立てた。

［翔］：「え？　あ、オレ……えっと」
どうやら正気に戻ったらしい、目の色がいつもの翔になっていた。
［祐喜］：「言いたいことあるんでしょう？　もう僕たち言ったから、後は翔だけだよ」
［翔］：「あ、ああ。そうなのか、えー、みなさん、オレは手助けも何もすることができませんが、成功することを心から祈ってますので、頑張ってください……決まった」
大きい独り言を零すあたり、こいつらしい。だが、女性陣は何だかんだ言って優しいから――。
［舞羽］：「ありがとう翔くん」
［繭子］：「その言葉で頑張れるよ、ワタシたち」
［聖奈美］：「儀式の時、ちゃんと起きてなさいよ」
［カホラ］：「しっかりやってくるわ」
［翔］：「ううう……今年一番の幸せかもしれない」
どんだけ今年良いことなかったんだよ……。
［翔］：「そして吹雪よ」
［吹雪］：「ん？」
［翔］：「……今度こういうシチュエーションがあったら、オレを呼んでくれよ？」
これが、さっきの理由なんだろうと、俺は確信した。
［祐喜］：「じゃあ、僕たちはそろそろ行くよ。長居したら悪いだろうし」
［愛海］：「また学校で会いましょう」
［翔］：「みんな、オレのこと忘れないでくれよ」
［吹雪］：「おう、サンキューな」
三者三様の言葉を残し、三人は社会科室を出て行った。
［舞羽］：「予想外に、良いものもらっちゃったね」
［吹雪］：「早速食べるか？」
［舞羽］：「うん、せっかくだしね。私、お茶煎れてくるよ」
［聖奈美］：「須藤さん、あたしも行くわ」

――三人が来てくれたおかげで、俺たちから緊張が解けたようだった。やはり持つべきものは友達だな。

――そして、来るべき時間がやってくる。

［吹雪］：「――よし！」

俺は気合いを入れ直す。儀式開始まで残り３０分、ピアニストの４人は学園長によって神殿まで運ばれる。

［セフィル］：「準備はいいか？　五人とも」

［五人］：「はい！」

［セフィル］：「よし、では行くとしよう。じゃあ、舞羽から連れて行くとしよう」

［舞羽］：「はい」

［吹雪］：「頑張れよ、舞羽」

［舞羽］：「うん、吹雪くんもね」

穏やかだけど、力強くうなずき、舞羽は神殿に向かう。

……。

［セフィル］：「次は、繭子か」

［繭子］：「はい」

［吹雪］：「しっかりな、マユ姉」

［繭子］：「もちろん！　練習の成果、ぜーんぶ出してくるから」

……。

［セフィル］：「カホラ、行くぞ」

［カホラ］：「はい」

［吹雪］：「頑張りましょう、先輩」

［カホラ］：「ええ。吹雪もサポートよろしくね」

［吹雪］：「はい」

……。

［セフィル］：「じゃあ、最後に聖奈美、行こうか」

［聖奈美］：「はい」

いざ神殿に向かおうとする聖奈美の表情は、とても凛々しかった。
［吹雪］：「聖奈美、頑張ろうな」
［聖奈美］：「ええ、絶対に成功させるわ。吹雪も、しっかりね」
［吹雪］：「もちろん、離れていても、心は一つだからな」
［聖奈美］：「ええ」
［セフィル］：「――良いカップルに成長したものだな」
［吹雪］：「あ、すいません……」
［セフィル］：「いいんだいいんだ。仲が良くて大変に結構、その調子で頼んだぞ」
［聖奈美］：「は、はい」
［セフィル］：「じゃあ、連れて行こう」
［吹雪］：「また後でな」
［聖奈美］：「ええ」
……。
そして、数分後、学園長が戻ってきた。
［セフィル］：「待たせたな、では、行こう」
［吹雪］：「はい！」
俺は学園長に連れられて、聖壇へと向かう。
……。

［場所：聖壇］

聖壇に来たのはあの日以来だ。前回は練習の一環だったが、今回は本番、自分の力を信じて最後までやり遂げる必要がある。――不安はほとんどない、今までやってきた事実がしっかりと胸に刻まれている。自分を信じてやれば、成果は必ず着いてくるはずだ。
［セフィル］：「良い目をしてるな、吹雪」
［吹雪］：「きっと俺だけじゃないと思いますよ」
きっとピアニストの４人も、同じ目をしているだろう。
［セフィル］：「手伝ってやれないのは少々心苦しいが、しっかり

と見届けてやるからな。安心してくれ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「じゃあ――頑張るんだぞ、吹雪」
学園長はそう言い残し、俺の前から消えた。儀式まで残り後わずか、俺は精神統一をしてその時を待つ。
モニターには、苦楽を共にした４人の仲間が映し出されている。俺の頭に、今までの生活の思い出が甦り、駆け抜けていく。心を通わせた俺たちなら、きっとうまくいく。俺たちは今、全員同じことを思っているはずだ。
［吹雪］：「（行くぞ、みんな）」
……。
……。
――儀式が始まった。
舞羽から始まり、次いで聖奈美、マユ姉、カホラ先輩と追いかけるような形でメロディーが奏でられていく。しばらくして始まりが聖奈美に変わり、それに次いでマユ姉、カホラ、舞羽と続く。その後はマユ姉、カホラとパートの始まりが入れ替わり……続いてそれぞれのメインパートへ向かう。
それぞれの曲調が十分に引き出され、前回よりも深みの増したメロディーが俺の耳に届いてくる。
舞羽、聖奈美、マユ姉、カホラ先輩……順々にメインパートが移り、次第に曲調は激しいものに変わっていく。
ここから、前回の練習で手こずったと思われるポイントが続いていく。
変拍子が続くメロディーを正確に弾くことがキーとなるが、きっと今のみんななら、問題なく進めるはずだ。
［吹雪］：「（頑張れ、みんな）」
俺は来るべきその時まで、みんなにエールを送る。
……。

変拍子のパートは、無事問題なくクリアすることができた。ここから、それぞれのソロパートに移っていく。それと同時に、俺は魔法詠唱の準備にかかる。

［吹雪］：「……」

供給する人物を、しっかり脳内でイメージする。――よし。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

俺は魔法を解き放った。そして、供給する人物、聖奈美に向けて魔力を分け与える。

……はっきりとは分からないが、聖奈美の体はぼんやり光を帯びているようだ。これは問題なく魔力が送られている証拠、俺は気を緩めずに供給に徹していく。

……。

舞羽のソロパートが無事に終わり、聖奈美にメインパートが移り変わる。それと同時に、魔法を聖奈美からマユ姉にシフトする。

先程と同じように集中し、脳内にマユ姉をイメージする。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

発光を確認し、俺は同じように魔力を分け与える。

聖奈美の鍵盤を走らせる指の動きは滑らかで、とても安定感がある。

マユ姉はその間に気持ちを高めているようで、目をつぶって深呼吸をしていた。

……。

そしてパートはマユ姉に移り、次はカホラ先輩に供給する。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……問題なく成功。それと同時にマユ姉のパートが始まる。

練習の際、ちょっと他の人よりも間違いが多かったが、今ではしっかりとメロディーを刻むことができている。秋を感じさせる穏やか

なメロディーラインが、俺の心にしっかりと響いてきた。
……。
ソロパートもいよいよ最後、俺の魔力の供給も最後となる。以前ほどではないが、体に疲労が蓄積し始めている。だが、それはみんなも同じ、俺だけがここで離脱するわけにはいかない。俺はもう一度気を引き締め、舞羽に向けて供給を開始する。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
――無事成功、後はカホラ先輩が無事ソロパートを弾き終えるまで、舞羽に魔力を供給していく。以前の時と同じ、主に曲の始まりを担う舞羽には、三人よりも少し多めに魔力を供給させる必要がある。
俺は意識して、舞羽に分ける魔力を増やすよう心掛けた。
……。
そして、程よい余韻を残した後、再び舞羽が鍵盤を弾き始める、それに続いて聖奈美、マユ姉、カホラ先輩とメロディーを奏でていく。
俺はそれを確認し、詠唱を停止した。
どうやら無事に役目を果たすことができたようだ。後は四人が無事に弾き終わることを待つのみだ。
［吹雪］：「（もう少しだ、頑張れ、みんな）」
俺は心の中でもう一度エールを送った。
――徐々に、曲のテンポは遅くなり、音量も低くなっていく。
……そして。
［吹雪］：「……」
演奏が終わった。
それとほぼ同時に、新しい年の始まりを告げる鐘の音が島に響き渡る。それと、ほぼ同時だった――。
［吹雪］：「あ、ピアノが」
四季のピアノは白い光を放ち始める。そしてその光は月に向かって一直線に伸びていく。
そして――島全体が優しい光で包まれた。

［吹雪］：「成功、したんだな」
モニターに映るみんなの顔も、成功したという事実に笑顔が満ちていた。
……。
……。
……。

［場所：グランド］

［セフィル］：「――よく頑張ってくれた、みんな」
学園長の顔にも、笑顔が満ち満ちていた。
［セフィル］：「完璧と言っていい演奏だったぞ、練習を教えた私も鼻が高いよ」
［聖奈美］：「これで、儀式は全て終了ですか？」
［セフィル］：「ああ、これで一年、春夏秋冬が滞りなく回っていくはずだ。それもこれも、君たちのおかげだ」
［舞羽］：「役割を果たすことができて何よりです」
［セフィル］：「君たちの名前は、しっかりと学園に刻んでおくからな」
［繭子］：「ワタシたち、歴史の一ページに名を連ねるんだね～」
［聖奈美］：「学園の歴史、だと思いますけど……それでも嬉しいことですね」
［カホラ］：「歴史ということに変わりはないものね」
努力してきたと甲斐があったというものだ。
［セフィル］：「今日はゆっくり休んで疲れをとるといい。明日あたり、みんなで新年会&お疲れ会でも開こうじゃないか」
［繭子］：「わーい、やった～」
――こうしてみんなと笑いあうことができて、本当に幸せだと感じた。

聖奈美ルート・イグアル（１５）

［場所：中庭］

［聖奈美］：「――本当に、成功してよかったわ」
［吹雪］：「ああ、あきらめず頑張った結果だな」
［聖奈美］：「ええ」
綺麗な微笑みを浮かべながら。
［聖奈美］：「でもどこかの誰かさんは、本番の少し前にちょっぴり不安がってたのよね」
［吹雪］：「……すいません、俺です。でも、その時に助言してくれたおかげで、俺は今日を新年を迎えることができてます」
［聖奈美］：「ふふ、どういたしまして。あたしも同じよ、あなたが人とのつながりを教えてくれたおかげで、こうして新年を迎えることができてる。人間として、大きい成長をすることができた」
［吹雪］：「これからもそうだろう？　俺たちは二人で歩んで行って、成長を共にしていくんだ」
［聖奈美］：「ええ。あなたがいないと、成り立たないからね」
［吹雪］：「俺だって同じさ」
［聖奈美］：「すっかり、あなたなしでは生きていけなくなってしまったわね、あたし」
［吹雪］：「ドラマとかだけだと思ったら、本当に思うものだったんだな」
［聖奈美］：「実際に体験しないと分からないことってあるのね」
［吹雪］：「これも、一つの成長じゃないか」
［聖奈美］：「ふふ、そうみたいね」
――自然と、俺たちは向き合っていた。
［吹雪］：「なあ、聖奈美」
［聖奈美］：「どうしたの？　改まって」

［吹雪］：「まだ先の話なんだけど……俺、この学園を卒業したら、お前の会社に就職することを目標に頑張っていこうと思ってるんだ」
［聖奈美］：「え？」
［吹雪］：「俺、杠グループの社員になろうと考えてる」
［聖奈美］：「ほ、本当に！？」
［吹雪］：「ああ、本当」
［聖奈美］：「でもあなた、まだ決められないって言ってたじゃない」
［吹雪］：「そうなんだけど、つい一人の時にそのことを考えちゃってさ……自分は何をしたいのか、どんな職に就きたいのかって。それを考えてる時に、聖奈美の将来の話が頭の中で再生されて……思ったんだ。俺、聖奈美の会社で仕事をしたいって」
［聖奈美］：「吹雪……」
［吹雪］：「さっきも言ったけど、ふざけて言ってるわけじゃないんだ。今は本気で、杠グループの一員になれたらなって思ってる。杠グループって言えば有数の大企業だから、そこで働くことができれば自分にとっても誇りになる。困難な道だとは思うけど、それだけに成りがいがあるだろうし、なったらなったで頑張ろうって気持ちになる。それに何より――聖奈美が同じ場所で働いてるってだけですごい励みにもなる」
［聖奈美］：「確かに、杠グループはエリートを好む会社だから自信は持てるでしょうね」
［吹雪］：「ああ。だから、目標にするには申し分ないと思うんだ」
［聖奈美］：「でも、吹雪には他にやりたいこととかあるんじゃないの？」
［吹雪］：「それももちろん考えたさ。でも、今俺がやりたいことっていうのは、聖奈美と同じ時間を過ごしたいってことだから、既に願いは叶ってるんだ。だから、自分の想いを殺してるわけじゃないよ」
［聖奈美］：「あなた、またさらっとそんなこと言って」

［吹雪］：「もう、慣れちゃったぜ。聖奈美も慣れただろう？」
［聖奈美］：「大分、耐性はついてきたと思うわ」
［吹雪］：「はは、そうか」
［聖奈美］：「……杠グループに入社するのだとしたら、結構な学歴を問われると思うわよ」
［吹雪］：「ああ。だから学園を卒業したら、大学へ進学する予定でいる。そこでたくさん勉強して、杠グループに応募するつもり」
［聖奈美］：「分かってると思うけど、あたしが顔見知りですごい良い人材って推薦したとしても、簡単に罷り通れはしないわよ」
［吹雪］：「それは重々承知だ。それに、自分の力で就職したいって思ってる。聖奈美の力を借りなくてもできるところを見せたいんだ」
［聖奈美］：「……吹雪が杠グループで働いていたら、あたしもきっとたくさん頑張れるでしょうね」
［吹雪］：「はは、そうか？」
［聖奈美］：「でも、あたしたちはまだ学生。卒業まで一年以上ある。だから、これはあくまで仮として考えていいわ。吹雪にやりたいこと、なりたい職業ができたら、そっちを優先してくれて構わないから。大丈夫、杠グループを断念したとしても、あたしは吹雪を嫌いになったりなんて絶対にしないから」
［吹雪］：「ああ、ありがとう」
［聖奈美］：「あたし、ずっと応援してるわ」
［吹雪］：「おう！」
――この目標を叶えられるよう、たくさん努力していこう。そして、聖奈美という大切な恋人と一緒に、これからも手を取り合って歩んでいこう。
まだ優しい光に包まれている空を仰ぎながら、俺は強く誓った

聖奈美ルート・フィナーレ（1）

エピローグ

［場所：学園の外］

――それからの一年はあっという間に過ぎていった。時が過ぎるというのは本当に早い。そして――早いもので、俺たちの学園生活も今日で終わりを告げる。

［舞羽］：「――終わっちゃったね」

［吹雪］：「そうだな」

［愛海］：「あーあ、もう一年くらい学園生でいたかったわね～」

［祐喜］：「翔は、頑張ればそのままもう一年できたかもしれないね」

［翔］：「それはどういう意味だよ？　祐喜」

［祐喜］：「え？　言葉通りの意味だよ」

［翔］：「くぅ……最後まで厳しい言葉を……」

［愛海］：「え？　何？　翔っちって留年しそうだったの？」

［翔］：「ぐっはぁ！？」

［舞羽］：「な、愛海。そこはみんな暗黙の了解で避けてた場所だったのよ」

［愛海］：「あ、だからヨッシーは暈かしながらしゃべってたのね」

［舞羽］：「気付くのが遅いよ……」

［翔］：「い、いいじゃないか。こうしてちゃんと卒業できたんだから！」

［愛海］：「そうそう、しそうになっただけでしてないんだから大丈夫よ」

［吹雪］：「……あんまりフォローになってないよな」

［祐喜］：「むしろ悲哀を煽ってるような感じだね」

［翔］：「うあーん、吹雪～」
［吹雪］：「だあ～、来んじゃねぇ～！」
［翔］：「あん！」
蹴っ飛ばして体から引き剥がすと、何とも気持ち悪い声を出しやがった。
［祐喜］：「それより吹雪、聖奈美とは一緒じゃないのかい？」
［聖奈美］：「クラスが違うからな。長引いてるのかもしれない」
それに今、昇降口付近は卒業生と後輩で溢れかえっている。探しているけど、見つからないって可能性もある。
［吹雪］：「まあ携帯もあるし、遅くなるようだったら連絡すればいいさ」
［祐喜］：「そっか。……やっぱ一年も経つと、落ち着きもでてくるものだね」
［吹雪］：「はは、祐喜には大分助けてもらったからな。感謝してるよ」
［祐喜］：「いえいえ、二人の様子を見ているのは結構楽しかったからね。時々、会話を聞くのが恥ずかしいなって思うこともあったけど」
［吹雪］：「あ～、それは……すいません」
［祐喜］：「いいんだよ、あれはあれで良い思い出だしね」
［吹雪］：「……これからもよろしくな」
［祐喜］：「うん、もちろん」
［愛海］：「大久保く～ん、私たちにはその言葉はないの～？」
［吹雪］：「あー分かった分かった。よろしくなー」
［愛海］：「うわ、すごい棒読み……」
［翔］：「吹雪に、傷物にされた」
［吹雪］：「人聞きの悪いこと言うな」
［聖奈美］：「吹雪ー！」
［祐喜］：「お、吹雪、来たみたいだよ」
［吹雪］：「おお、聖奈美、こっちだ」

［聖奈美］：「はあ……ごめんなさい、後輩たちに囲まれちゃって」
なるほど、だから遅くなったのか。
［吹雪］：「人気者は大変だな」
［聖奈美］：「何よ、他人事みたいに」
［吹雪］：「そういうわけではないんだけど……」
［祐喜］：「――みんな、向こうのほう盛り上がってるから向こうに行こうか」
［舞羽］：「そうだね、ちょっと楽しそうだし」
［愛海］：「ええ、二人きりの時間が欲しいだろうしね～うふふ」
［翔］：「うう……オレもいつか、あんな風になれるのかな」
［祐喜］：「あーなれるなれる。心配しないでいいよー」
［翔］：「祐喜、メチャクチャ棒読みじゃなかったか？　多分聞き間違いじゃなかったぞ」
［祐喜］：「あー気のせい気のせい。じゃあね吹雪、聖奈美」
［吹雪］：「あ、ああ」
［祐喜］：「よし、行こうか」
［聖奈美］：「何か、気を遣わせちゃったみたいね」
［吹雪］：「まあ、気にしない方向で行こうぜ」
［聖奈美］：「そ、そうね」
［吹雪］：「それにしても、後輩たちに囲まれたって……生徒会のか？」
［聖奈美］：「ええ。逃げようとしたわけじゃないけど、見つかっちゃって……一緒に写真を取ったりしてたのよ。最後の思い出だからって」
［吹雪］：「そんな風に言われたら、付き合わざるを得ないよな」
［聖奈美］：「あの子たちなら、生徒会も安泰だと思うわ」
［吹雪］：「聖奈美直々のご指導だもんな。そりゃあ成長もするだろう」
［聖奈美］：「だといいんだけど。そう言えば、あなたのことも言ってたわよ」

［吹雪］：「俺のこと？」
［聖奈美］：「ええ。大学生活頑張ってくださいって」
［吹雪］：「俺のこと、覚えてたんだな」
［聖奈美］：「それは覚えてるわよ。わざわざ手伝いに来てくれた人なんだもの」
［吹雪］：「部活を引退してからは、ほとんど会える機会がなかったからな」
［聖奈美］：「でも、忘れてなかったわ。それだけ良い先輩ってイメージを残せたんでしょう」
［吹雪］：「だとしたら、嬉しい限りだけどな」
［聖奈美］：「そうね。――大学生活、頑張ってよ？」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
俺は春から、この島にあるハルモニア大学に通うことになっている。島の中では一番偏差値の高い大学だ。正直、受かるかどうかすごく不安だったけど、聖奈美のフォローのおかげで見事合格することができた。
ハルモニア大学に通うのは俺だけではない。祐喜も入学することが決定しており、カホラ先輩もそこに通っているとか。同士がいて助かったと内心ホッとしている。
聖奈美は、当初の予定通り、杜グループの秘書として勤めることになっている。
だからこれからはしばらく、会う機会が少なくなるだろう。
少し寂しいけど、それでも――。
［吹雪］：「目標達成のためには、これからが大事になるからな」
［聖奈美］：「ええ、そうね。たくさん、勉強して、たくさん楽しむといいわ」
［吹雪］：「ああ、聖奈美の分まで」
［聖奈美］：「分かってると思うけど……他の女性になびいたりしたら、許さないからね」
［吹雪］：「そんなこと絶対にしないから。俺は、お前にしか興味

がないんだから」
［聖奈美］：「それはそれで、どうかと思うけど……」
［吹雪］：「大丈夫だ、信じてくれ」
［聖奈美］：「ただ確認しただけよ。最初から信じてるわ」
［吹雪］：「聖奈美も……他の男には注意してくれよ？」
［聖奈美］：「やっぱり、心配？」
［吹雪］：「そりゃあまあ……信じてるつもりだけど、聖奈美のスーツ姿は美しすぎるから」
［聖奈美］：「あ、あなただけじゃないの？　あそこまで執着してるのは」
［吹雪］：「いや、そんなことは……ないと思う」
［聖奈美］：「自信ないんじゃないの」
［吹雪］：「とにかく、俺以上に言い寄られる可能性は高いと思うから、その辺は回避してくれ。出ないと俺、泣いちゃうから」
［聖奈美］：「安心して。あたしだって、あなた一筋だから」
［吹雪］：「……ヤバい、ちょー嬉しいぞ」
［聖奈美］：「ふふ」
可憐な微笑み。いつ見ても素敵だ。
［聖奈美］：「――これからしばらくは、別々の道を歩くことになるけど、目的地は同じだから、手を取り合って前に進んでいきましょう」
［吹雪］：「ああ、心はいつだってつながってるからな」
［聖奈美］：「ええ！」
――これから先も、俺たちはこうして手を取り合って進んでいくのだろう。大きな壁に行く手を阻まれても、きっと二人でなら乗り越えられる。
だって、俺たちの心は一つだから。
［聖奈美］：「吹雪、これからもずっと――よろしくね！」
［吹雪］：「ああ、絶対に離さないからな」
［聖奈美］：「うふふ」

いつまでも、一緒に――。

END

聖奈美ルート・フィナーレ（1）（後書き）

お読みくださってありがとうございました。
次回から、三人目、義姉である繭子ルートに入っていきますので、
そちらもよろしくお願いします。

繭子ルート・レブハフト（1）

12月16日（木曜日）

“［吹雪の母］：「吹雪、紹介するわ。この子が、あなたのお姉ちゃんになる繭子ちゃんよ」

［繭子］：「繭子だよ～、よろしくね？　吹雪ちゃん」

［吹雪］：「その呼び方、やめろ。俺は、男だ……ちゃんなんてつけるんじゃねぇ」

［繭子］：「じゃあ……何て呼べばいいの～？　吹雪っち？　ふーちゃん？　あ、今の響きすごく良かったよ。よし、今日からワタシ、ふーちゃんって呼ぶことにしまーす」

［吹雪］：「人の話、聞いてなかったのか？　あんた。俺はちゃんをつけるなって言ったんだぞ？　その呼び方の語尾にもしっかりちゃんついてるじゃねぇかよ」

［繭子］：「だって、呼びやすいんだもん。ふーちゃん、悪くないと思うんだけどな～」

［吹雪］：「悪い、変えろ。変えないと怒るぞ」

［繭子］：「えー？　何で～？」

［吹雪］：「何でもだ、そんなダサい呼び方されるのはゴメンだ」

［吹雪の母］：「吹雪、繭子ちゃんはあなたのお姉ちゃんなのよ？　お姉ちゃんの言うことはきかないとダメでしょう？」

［吹雪］：「だけど、母さん」

［繭子］：「えへへ、ふーちゃんでいいよね？　お母さん？」

［吹雪の母］：「ええ、もちろん。姉弟になるんだから、好きなように呼ぶといいわ」

［繭子］：「えへへ、お母さんからもOKもらったし、これで決定だね？」

［吹雪］：「俺の意志はガン無視なのかよ……」

［繭子］：「あきらめなよ？　ふーちゃん」
［吹雪］：「あんたが言い出したからこういうことになったんだろうが」
［繭子］：「あんたじゃないよ～お姉ちゃんだよ？」
［吹雪］：「俺は姉ちゃんなんていらない」
［繭子］：「そんな～、姉弟なんだよ～？　ワタシたち。仲良くしようよ～」
［吹雪］：「だったら、まずそのダサい呼び方を直せ」
［繭子］：「それはダーメ、もう決めたことだから」
［吹雪］：「じゃあ、無理だ。俺はあんたと仲良くはできない」
［繭子］：「あー、そんな～」
［吹雪の母］：「もう、吹雪？」
［吹雪］：「だって、母さん！」
［母さん］：「ごめんなさいね？　繭子ちゃん。吹雪は女の子とあんまりしゃべったことないから緊張してるのよ」
［吹雪］：「き、緊張なんかしてねぇよ！　テキトーなこと言わないでくれ」
［繭子］：「あーそうなんだ～、うんうん、そっかそっか～」
［吹雪］：「絶対に違う！　母さんの言うことを間に受けるな」
［繭子］：「その割には、ちょっと顔赤くなってるよ～？」
［吹雪］：「な、なってない！　勝手なこと言うな！」
［繭子］：「にひひ、照れちゃって～」
［吹雪］：「この……母さん！　俺、こんな奴の弟なんてなりたくねぇ！」
［母さん］：「またそんなこと言って。繭子ちゃんはとっても良い子よ？　吹雪は分かってないだけ」
［吹雪］：「そんなことない。今だって、俺のことをからかって笑ったじゃないか」
［母さん］：「それは吹雪がかわいいからでしょう？　緊張してないで、もっとフランクにならないと」

［繭子］：「そうそう、フランクにいこうよ～」
［吹雪］：「お前が言うな！」
［母さん］：「――さあ、もうちょっとでお父さんが来るわ。今のうちに色々とやっておかないと。三人、力を合わせてやっていきましょう」
［繭子］：「オー！」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「ふーちゃん、返事は？」
［吹雪］：「うるさい……」
［繭子］：「もう～、えいっ！」
［吹雪］：「うわっ！？　な、何しやがる！？」
［繭子］：「何って、ふーちゃんが元気になるようにハグしてるんだよ？」
［吹雪］：「えーい、離れろ！　俺にくっつくんじゃねぇ」
［繭子］：「そんなこと言って～本当は嬉しいくせに～」
［吹雪］：「嬉しくねぇ！」
［繭子］：「ほら、グリグリ～」
［吹雪］：「なっ……やめろ、本当、やめろ！　か、母さん、ちょっと……見てないで助けてくれよ！」
［母さん］：「……」
［吹雪］：「か、母さん？」
［母さん］：「うふふ、私も混ざっちゃおーっと！」
［吹雪］：「なっ！？　んが……！？」
［母さん］：「うん、暖かいわねー二人とも」
［繭子］：「あはは、お母さんも暖かいよ～」
［母さん］：「お母さん愛情をこめて抱きしめてるからね。当然よ」
［繭子］：「えへへ、どお？　ふーちゃんも暖かいでしょう？」
［吹雪］：「んぐ……んん～！」
［母さん］：「あん、もう。おっぱいに顔埋めるなんて、吹雪ったら」

［繭子］：「あはは、すごい嬉しそうだね～」
［吹雪］：「んん……。……」
［母さん］：「あら？　ひょっとして息が出来てないのかしら？」
［吹雪］：「――ぷはっ！　はあ、はあ……何すんだよ、母さん」
［母さん］：「だって、二人で楽しそうにしてるから」
［吹雪］：「楽しくなんてしてない！　見たら分かるだろう！」
［母さん］：「はいはい、ごめんごめん。もう一回してあげればいいんでしょう？」
［吹雪］：「そ、そうじゃない。だから俺は！」
［母さん］：「繭子ちゃん、もう一回やりましょう」
［繭子］：「うん、もちろん」
［吹雪］：「だ、だから違うって！」
［母さん］：「せーの、それ」
［繭子］：「あはは、ぎゅー！」
［父さん］：「ただいまー。おっと？　これはどういう状況なんだ？」
［繭子］：「あ、お父さん。今三人で遊んでるんだ～お父さんも一緒に遊ぼうよ～」
［父さん］：「ルールは？」
［繭子］：「ただくっつけばいいだけだよ～」
［父さん］：「何だ、それだけか。なら、お父さんも全力でくっつくとしよう」
［吹雪］：「ん、んん～……！」
［父さん］：「はいはい、嬉しいのね？　分かってる分かってる」
［吹雪］：「（違うんだってば～）」
［父さん］：「よし、父さんも行くぞ！」
［吹雪］：「（やめてくれー！）」”
……。
……。

繭子ルート・レブハフト（2）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「ん、んん？」

――何だ、夢か。随分とリアルな夢を見たな。

幼かった頃の思い出を見るとは……知らないうちに、二人のことを思っていたんだろうか？　今の時間は……まだ目覚ましが鳴る1時間前か。まだちょっと眠いし、二度寝でもしようか。

［？］：「すー、すー……」

［吹雪］：「ん？」

俺の隣で、俺以外の音が聞こえてきた。おかしいな、カーテンで仕切ってるから俺以外この空間にはいないはずなんだが……。

［吹雪］：「誰だ？　一体」

布団をめくってみる。するとそこには――。

［繭子］：「スースー……」

［吹雪］：「……なるほどな」

だから、今日見た夢はあんな感じだったんだろう。布団に入った時は確かに一人だったのに、一体いつ潜り込んできたんだ？

――とりあえず起こすか。

［吹雪］：「おい、マユ姉」

［繭子］：「ん～……すー、すー」

［吹雪］：「マユ姉、起きろ」

［繭子］：「んにゅ～……すー、すー」

［吹雪］：「……またウォーターホール頭に被せるぞ」

［繭子］：「んん……それは、イヤ～……」

［吹雪］：「じゃあ起きろ、3秒で。1、2、3」

［繭子］：「んっ！　……おはよう、ふーちゃん」

［吹雪］：「ああ、おはよう。……起き抜けのところ悪いが、一つ

質問だ」

［繭子］：「ふぇ？　うん」

［吹雪］：「何で俺の布団に入ってたんだ？」

［繭子］：「へ？　……あ」

どうやら気付いてなかったらしい。

［吹雪］：「いつ、潜り込んできたんだ？」

［繭子］：「んーっと……あ、ひょっとしてあの時かな？」

［吹雪］：「あの時？」

［繭子］：「うん。トイレに起きた時、暖房が切れててすごい寒かったの。だから、どこか暖かい場所ないかな～って探した時、ふーちゃんが寝てる場所って案がワタシの中に浮かんだの～。それを躊躇うことなく実行に移してみたの」

［吹雪］：「ふーん」

［繭子］：「すっごく暖かくて、すっごく寝やすかったよ～。ワタシの作戦は大成功だったね」

［吹雪］：「どうして俺なんだよ？　横に寝てる女子にくっつけばよかっただろうが」

［繭子］：「え～？　無理だよそんなの～」

［吹雪］：「何で？」

［繭子］：「ふーちゃんが一番くっつきやすい人なんだもん」

［吹雪］：「理由になってねぇよ、それ」

［繭子］：「理由がなかったらくっついちゃダメなの～？」

［吹雪］：「……今俺たちが送ってる生活でそれを言うのか？　ちょっと考えたら分かるだろう？」

［繭子］：「？？？」

ダメだ、このパープー教師は理解していない。

繭子ルート・レブハフト（3）

［吹雪］：「確かに、俺たちは姉弟だ。だが俺は男でマユ姉は女、こんな風に一つの布団で二人で寝てるところを誰かに見られようものなら、変な誤解をされかねないだろ」

［繭子］：「そうかな～？」

［吹雪］：「どう考えたってそうだろ」

［繭子］：「ワタシは、問題ないと思うんだけどな～」

［吹雪］：「何を根拠にそんなことを……」

［繭子］：「だってワタシ、普段からふーちゃんにくっついてるもん。今さら布団に潜り込んでたくらいで大事にはならないと思うよ～」

［吹雪］：「……今回はレベルが違うだろうが」

［繭子］：「具体的には？」

［吹雪］：「……言わせんな、そんなことを」

［繭子］：「にゅふふ～、照れてるの？　照れてるんだよね？　ふーちゃん」

［吹雪］：「照れてなんかねぇよ」

［繭子］：「じゃあ何で目を合わせないの～？」

［吹雪］：「……こっちにも事情があるんだ。いいからさっさと自分の布団に戻れ。今ならまだ、みんな寝てるはずだ」

［繭子］：「え～？　そんな～」

［吹雪］：「も、ど、れ。じゃないと、魔法を撃つぞ」

［繭子］：「そんなことしたらバレちゃうよ～？」

［吹雪］：「じゃあ……こっちをしてやろうか？」

目の前でグーを二つ作って回転させる。

［繭子］：「……じゃあ、また後でね～」

ぴゅーっと音が聞こえそうな勢いで、マユ姉はカーテンの外に出て行った。全く、寝起きとは思えないテンションの高さだな。

……ちょっと疲れたな。もう少し時間あるし、二度寝するとしよう。

［フェルシア］：「ひゃんっ！　ちょ、ちょっとマユ、何してるのよ？」

［繭子］：「だって寒いんだもーん。フェルの体温ちょっと分けて～」

［フェルシア］：「もう、そんなんだから吹雪くんに子供って言われるのよ？」

［繭子］：「子供じゃないよ、ちゃんと教師だよ」

……すいませんフェルシア先生。後でびしっと言っておきます。

さっきのことを気付かれないように、俺はそのまま二度寝をした。

……。

繭子ルート・レブハフト（4）

［吹雪］：「ふあ～あ……」
［舞羽］：「おっきな欠伸だね？　吹雪くん」
［吹雪］：「おう、おはよう舞羽」
［舞羽］：「おはよう、寝つきでも悪かったの？」
［吹雪］：「いや、朝はいつだって眠いもんだろう。普段の休日ならこの時間帯は確実に爆睡してるし、舞羽も知ってるだろう？」
［舞羽］：「確かに……朝の十時に行った時、まだ起きてなかったことあったもんね」
［吹雪］：「七時起きというのは、体に堪えるんだよ」
［舞羽］：「そんなおじいちゃんみたいなこと……吹雪くん、まだまだ若いじゃない」
［吹雪］：「若くても堪えるのは確かなんだよ。……あ、別に弱音を吐いてるわけじゃないからな？　練習は全力で頑張るつもりだからそこは安心してくれ」
［舞羽］：「う、うん。……眠くてしょうがない時は、私が起こすから安心して」
［吹雪］：「おう、頼む。……歯磨きに行こうぜ」
［舞羽］：「うん」

繭子ルート・レブハフト（5）

［場所：水飲み場］

［フェルシア］：「あ、二人ともおはよう」
［吹雪］：「おはようございます、フェルシア先生」
［舞羽］：「おはようございます」
［繭子］：「おはよー、舞ちゃん、ふーちゃん……にひひ」
［吹雪］：「む……」
俺の顔を見て、にやにや笑いを浮かべるマユ姉。……フェルシア先生にあのこと言ってないだろうな？
［舞羽］：「どうかしたの？　吹雪くん」
［吹雪］：「ん？　いや、何でもないぞ」
［舞羽］：「そお？」
［吹雪］：「ああ。……おっと、サンキュー」
歯磨き粉のチューブを絞って歯ブラシに付けてくれる。
［繭子］：「そうだ、ねえねえふーちゃん」
［吹雪］：「ああ？　何だよ」
［繭子］：「ワタシね、今日夢を見たんだー」
［吹雪］：「マユ姉は今日に限らずいつでも夢を見てるだろ」
［繭子］：「え？　別にそんなことないよ～」
［吹雪］：「あるだろ？　いっつも寝言言いながら寝てるじゃないか、しかも食い物のことばっかり」
［繭子］：「それはたまたまだよ～、食べ物食べてる夢ばっかり見てるわけじゃないよ～」
［吹雪］：「……本当か？」
［繭子］：「そうだよ～。聞いてよ、今日の夢の話」
［吹雪］：「ああ、分かった分かった。で？　何の夢を見たんだ？」
［繭子］：「うん、今日見た夢は、ふーちゃんと初めて会った日の

夢だったの～」
［吹雪］：「っ！？　俺と初めて会った時の？」
［繭子］：「うん。どうしたの？　何だかびっくりしたように見えたけど」
［吹雪］：「いや、別に」
特に隠す必要もないんだが、どうしてか俺も同じ夢を見たとは言おうと思わなかった。
［吹雪］：「初めて会った時っていうのは……あれ、だよな？」
［繭子］：「うん、もちろん！　あの頃のふーちゃんはまだワタシより小さかったんだよね～今じゃあ考えられないけど」
［吹雪］：「今でもマユ姉より小さかったら、かなり問題だろ」
［フェルシア］：「というより、マユより小さい子は女性でもあんまり……」
［繭子］：「ぐさ……こ、これでも小さい頃は大きいほうの生徒として数えられてたんだからね？　ワタシ！　ただ……子供の頃から身長が伸びなかっただけで……」
［舞羽］：「女性って、そういうものですよね？　子供の頃に身長が伸びると、大きくなってからあんまり伸びない……途中までは、私のほうが吹雪くんより身長高かったし」
［吹雪］：「男の身長が伸び出す時期は女性とは違うからな。あの時は、このまま止まってしまうんじゃないかって心配したよ」
人並みの身長が手に入ったのはよかった。

［繭子］：「でも……ふーちゃんフェルよりも身長低いよね？」
［吹雪］：「んぐ……っ！？　マユ姉……また傷口を……」
［舞羽］：「ま、マユさん、そこは触れてはいけないところで……」
［繭子］：「あ、あれ？　ひょっとして……地雷ふんじゃった？　ワタシ？」
［フェルシア］：「結構大きいのをね……」
［吹雪］：「い、いや……大丈夫です。ご心配なく……傷ついてなんてませんよ？　俺は、一般男性の平均身長はあるわけですから、別に人間としておかしいわけじゃないし……別に気に病むことでは……」
［舞羽］：「ふ、吹雪くん。何か目頭が……」
［吹雪］：「はは、大丈夫だよ。これは、目にゴミが入っただけだ」
［フェルシア］：「何か、ごめんなさいね？　吹雪くん」
［吹雪］：「別にフェルシア先生は謝る必要ないですよ。フェルシア先生はその身長だからこそいいんですから」
［フェルシア］：「あ、ありがとね？」
［繭子］：「ご、ごめんね？　ふーちゃん……今後、身長の話題は出さないようにするよ～」
［吹雪］：「……分かってくれれば、それでいい」
［フェルシア］：「は、話が反れてたわね。今日マユが見た夢の話だったわね」
［繭子］：「ああ、そうだった」
［舞羽］：「吹雪くん、さっき言ってたあれっていうのは何なの？」
［吹雪］：「き、聞いてたのか？　舞羽」
［舞羽］：「え？　聞き流してたほうがよかったのかな？」
［吹雪］：「ん、いや、その……」
［繭子］：「全然大丈夫だよ～舞ちゃん。ふーちゃんはちょっと恥

ずかしかったかもしれないけど、ワタシはすごい嬉しかったことだから～」

［舞羽］：「そうなんですか」

［繭子］：「言っても大丈夫でしょ～？　ふーちゃん」

［吹雪］：「……すげぇ居た堪れないんだが」

［繭子］：「居てよ～ふーちゃんがいないと成立しない話なんだから～」

［吹雪］：「……」

［舞羽］：「吹雪くん、顔が真っ赤」

［フェルシア］：「そんな恥ずかしいことをマユは吹雪くんに仕掛けたわけ？」

［繭子］：「ワタシだけじゃないよ？　家族全員でだよ～？」

［フェルシア］：「……話を聞いてるだけだと、どういう状況なのか想像がつかないわね」

［繭子］：「口で言うより、実際に再現したほうが早いよね～。ふーちゃん――えいっ！」

［吹雪］：「お、おいっ！？」

マユ姉は俺の体をがっちりホールドした。

繭子ルート・レブハフト（7）

［繭子］：「初めて会った時、ふーちゃんはワタシとしゃべろうとしてくれなかったの。大丈夫だよ～って言っても全然聞こうとしてくれないから、ワタシはそれを態度で示そうとした。それが、このホールド攻撃なんだ。距離を無くすことで、お互いの心が近づけるんじゃないかと思ったんですよ」

［フェルシア］：「さっき、マユは家族でって言ってたわよね？」

［繭子］：「うん、だから……舞ちゃん、フェル、私の横でふーちゃんを包んで」

［舞羽］：「ええ？」

［フェルシア］：「こ、こうかしら？」

［吹雪］：「なっ！？　ちょっと……」

二人が距離を近づけてくる。マユ姉はともかく、二人の顔が近くにあるとさすがに動揺が隠せない。

［繭子］：「こんな風にして、みんなでふーちゃんを包み込んだんだよ～」

［フェルシア］：「あはは……吹雪くんが恥ずかしがるのも無理ないわね」

［吹雪］：「わ、分かってくれますか？」

［繭子］：「昔は、こんなに抱きつきづらくなかったんだけどな～」

［吹雪］：「昔のまま変わらないでいられるわけないだろう」

［繭子］：「まあ、そうなんだけど。……こっちのふーちゃんはこっちのふーちゃんでなかなかの抱き心地だからいいっか」

［吹雪］：「おい、そろそろ離れろ」

［繭子］：「ええ？　もうちょっといいでしょ～？」

［吹雪］：「再現したかっただけなんだろう？　もう二人は分かったんだからいいだろ」

［繭子］：「うーん、名残り惜しいなあ～」

［吹雪］：「はあ……」
ようやく解放された。
［繭子］：「――というわけなんです。分かってくれた～？　二人とも」
［舞羽］：「はい。吹雪くんとマユさんは家族ととっても仲良しってことを再認識しました」
［フェルシア］：「吹雪くんは、家族全員から愛されてたのね」
［吹雪］：「……愛してもらえたことは嬉しいんですけど、あの当時は結構洒落になりませんでした」
みんな力いっぱい抱きしめるから、息が出来なかったり……。
［フェルシア］：「いいじゃないの。その愛情を一身に受けたから、こうして元気に育ったわけなんだし」
［吹雪］：「それは、そうかもしれませんね」
［繭子］：「んふふ、姉のワタシは鼻が高いよ～」
［フェルシア］：「高くするのもいいけど、自分も成長しないとダメよ？　マユ」
［繭子］：「はーい、気を付けまーす」
［聖奈美］：「――お話は終わりましたか？　みなさん」
［舞羽］：「あ、杠さん」
［聖奈美］：「話をするのは結構ですけど、そろそろ済ませないと、練習時間に遅れてしまいますよ？」
［フェルシア］：「ああ、ごめんなさい。つい話に花が咲いちゃって……」
［聖奈美］：「分かればいいです。……早く来てくださいね」
［繭子］：「はーい」
［吹雪］：「……急ぎましょうか？」
［フェルシア］：「そうね。今日も一日頑張りましょう」
［三人］：「オー！」
……。

繭子ルート・レブハフト（8）

［場所：教室］

［翔］：「――吹雪ー、ちょっといいか？」
［吹雪］：「ん？　何だ？」
［翔］：「この後の授業って、マユちゃんだったよな？　何か宿題って出てたか？」
［吹雪］：「宿題っていうか小テストだろ？　漢字の書き取りと意味だったよな……合ってるか？　祐喜」
［祐喜］：「うん、合ってるよ」
［翔］：「何ページ？」
［吹雪］：「確か……ここだ」
［翔］：「うわ、難しそうだ……」
［吹雪］：「その口ぶりからして、やってねぇんだな？　お前」
［翔］：「だって……今思い出したんだもん」
［吹雪］：「もん、じゃねぇよ。時間有り余ってるんだからそれくらいやっとけよ」
［翔］：「い、今から空いた時間でやろうと思ってるんだけど……吹雪はマユちゃんはどこを出してくると踏んでる？　ちょっとでいいから教えてくれないか？」
［吹雪］：「絞らないで全部をやればいいじゃねぇか」
［翔］：「オレに全てを覚えられる頭はない！」
［吹雪］：「そんなとこばっかり自信持つんじゃねぇよ」
［祐喜］：「翔はよくハルモニア学園に入学できたよね」
［翔］：「頼む、二人とも～。この通りだ」
［吹雪］：「どうする？　祐喜」
［祐喜］：「……小テストも成績に加味されるって言ってたし、ちょっとだけ教えてあげよう。留置なんて言われたら、翔の両親がか

わいそうだし」

［翔］：「お、オレはかわいそうとは思わないの？」

［祐喜］：「それは、ねえ？」

［吹雪］：「お前の自業自得だから、同情の余地はない」

［翔］：「うぐ……」

人数は多い方がいいか。

［吹雪］：「舞羽、ちょっといいか？」

［舞羽］：「うん、いいよ」

……。

繭子ルート・レブハフト（9）

［繭子］：「はい、お疲れ様でした～。それじゃあ解答用紙を回収してくださーい」

席の一番後ろの奴が順々に解答を回収し、マユ姉の元に持っていく。

［繭子］：「解答は次回に返します。じゃあ次、前回の小テストの解答を返したいと思います。呼ばれたら取りにきてね～。ちなみに、五回小テストで赤点を取った人は後々補習をさせる予定でいるから、自分が危ないって分かってる人はこれから努力するように。先生が言わなくても、自分の胸に手を当てれば分かるよね～？」

［翔］：「うぐ……」

翔が小さなうめき声を上げる。あの様子からすると、補習に王手がかかってるのかもしれないな。まあ、さっきも言ったが自業自得だ。そればっかりはこっちも手に負えない。さっき教えてやったポイントが活かせてれば、今回は赤点ではなくなる可能性はあるが。

［繭子］：「はい、次はふーちゃん」

［吹雪］：「……学校ではその呼び方をやめろって言ってるだろう？」

［繭子］：「だって……口が勝手に言っちゃうんだもん」

［吹雪］：「直せ、努力次第で何とかなるはずだ」

［繭子］：「む～、とにかく、はい解答。９２点だよ、次は１００点取れるように頑張ってね～」

［吹雪］：「はいはい、分かりました」

［繭子］：「じゃあ次、大塚さ～ん」

……。

繭子ルート・レブハフト（１０）

［繭子］：「次、翔く～ん」
［翔］：「は、はいっ！」
ぎこちない歩き方でマユ姉の元へ向かう。
［繭子］：「んふふ～」
［翔］：「う、あんまり見られると、その……」
［繭子］：「……惜しかったね～翔くん。後１３点だったよ～」
［翔］：「うげえ……と、いうことは……？」
［繭子］：「大手飛車取り～ってところかな？　いよいよ後がないよ～？　補習受けたくないのなら努力しないとね～」
［翔］：「努力って言っても……もう解答出しちゃってますよ～」
［繭子］：「あ、そうだったね。じゃあ……一緒にガンバろうね？」
［翔］：「もう補習受けること決定してる！？」
［繭子］：「冗談、冗談～……だと思うよ？」
［翔］：「あぐ……お、オレはどうすればいいんだ……」
とにかく、席に戻ることを始めるべきだろうな……つうか、１３点は惜しいに含まれないと思うんだが。
……その後、解答が返され、舞羽が８８点、日野が７７点、祐喜が９４点だった。
［繭子］：「よし、それじゃあ授業に入るね～。今日は前回の続き、教科書１０４ページから始めるよ～」
［吹雪］：「……」
――確かに普段はあんな感じだけど、教壇に立っている時のマユ姉は割かし普通だ。以前、フェルシア先生がマユ姉はマユ姉なりに努力をしていると言っていたけど、確かにそうなのかもしれない。
……時々ぐだってることをアピールするのはどうかと思うが。
［繭子］：「難しい言葉だけど、たまに新聞とかで使われる言葉だから覚えておくとちょっと得すると思うよ～。じゃあ次の語句、『

水際立つ』の意味を……舞ちゃん、調べてきたのを発表してみよう」
［舞羽］：「はい。えーっと……一際目立っているって意味です」
［繭子］：「うん、オッケーだね。じゃあ次の人に軽く例文を作ってみてもらおうかな～……あ、んふふ」
マユ姉と目が合ってしまった。
［繭子］：「じゃあ、ふ――吹雪くん、お願いできるかな～？」
［吹雪］：「はい」
俺はノートに映した文章をそのまま読み上げた。
［繭子］：「良くできました～。吹雪くんの頭の良さは水際立ってるね～」
［吹雪］：「……生徒に怒られますよ？　そんなこと言うと」
［繭子］：「あ、つい普段の癖が……もちろん、みんなも出来る子って思ってるから安心してね～」
クラスメイトはそれを聞いてけらけらと笑っていた。
［繭子］：「じゃあ、続きを読んでいくから～」
……。

繭子ルート・レブハフト（１１）

［繭子］：「――それじゃあ、今日はここまでね～。さっきも言ったけど、次の授業の時に今日の小テストの結果を返すから～……覚悟する人は覚悟していてね？　特に、名字が『し』から始まって名前が『る』で終わる人とかは十分に覚悟しておくといいかも。じゃあ、また後でね～」

　マユ姉はパタパタと走りながら教室を後にした。

［翔］：「くそー、まだ決まったわけじゃないのに～」

［吹雪］：「王手飛車取りをかけられてるんだ、もう決まったようなもんだろ」

［翔］：「そ、そんな！　まだ終わったわけじゃあ」

［祐喜］：「確かに今年はもう少しで終わりだけど、来年になったからってカウントがチャラになるわけじゃないだろうからね。週に２～３回授業あるし、まだ１０回以上は授業があるし……」

［翔］：「……うわあああああんっ！　成績優秀者なんてこの世からいなくなっちまえばいいんだ～！　わあああああっ！」

［吹雪］：「いや、悪いのは明らかにお前……聞いてないか」

［祐喜］：「時々ああやっていなくなるけど、どこに行ってるんだろうね」

［吹雪］：「どこだろうな？　多分学園内のどこかだと思うけど」

［愛海］：「――何か翔っちが廊下を激走していったんだけど」

［祐喜］：「ああ、ほっといて平気だよ。自分で蒔いた種だから」

［舞羽］：「大丈夫かな……」

［吹雪］：「舞羽は心配性だな。無問題だよ」

［舞羽］：「そ、そお？」

［吹雪］：「いちいち気にしてたら舞羽がおかしくなっちまうって」

［祐喜］：「そうそう、同情する必要はないよ」

［舞羽］：「う、うん……」

［愛海］：「――それにしても、繭子先生の授業っておもしろいわよね。聞いてても眠くならない」
［吹雪］：「むしろマユ姉が寝そうになったりするからな」
［愛海］：「まあ、それも愛嬌じゃないかしら？　そっちのほうが繭子先生っぽいし」
［祐喜］：「確かに、日野さんの言うように、繭子先生の授業って退屈しないよね。教えてることは他の先生と変わらないんだと思うけど、何でか他の先生よりも知識の入り方が良いっていうか……」
［吹雪］：「……無理して言ってないよな？　祐喜」
［祐喜］：「僕はそんなことしないよ。本当に思ってるよ」
［吹雪］：「ならいいけど……」
［愛海］：「舞羽だってそう思うでしょう？」
［舞羽］：「うん、私もマユさんの授業は好きだよ」
［愛海］：「ほら、これで三人目。支持率は今のところ１００％」
本人が聞いたらさぞ喜ぶだろうな。

繭子ルート・レブハフト（12）

［愛海］：「大久保くんは、そうは思わないの？」
［吹雪］：「誰もそんなこと言ってないだろう」
［愛海］：「でも、大久保くん、舞羽とかにはすごく優しいけど、繭子先生と翔っちには厳しい印象があるんだよね～私の中で」
［吹雪］：「失礼な、俺はみんなに平等に接してるつもりだぞ」
［祐喜］：「でも、確かに吹雪が繭子先生を誉めるところはほとんどみないね」
［吹雪］：「家族なんだぜ？　姉を全力で褒め称える弟なんて、気持ち悪いと思わないか？」
［舞羽］：「……恥ずかしくて、言えないってこと？」
［吹雪］：「ち、違うわ！」
［舞羽］：「あうっ！」
［愛海］：「め、珍しく舞羽にチョップが飛んだわね」
［吹雪］：「そういうことを言ってるんじゃなくて、俺は普段のマユ姉を知ってるから、なかなかそういう目で見ることはできないって言ってるんだ。マユ姉は一長一短のところがあるからな」
［祐喜］：「そういうものかなー？」
［吹雪］：「そういうもんだ。それに……俺はマユ姉を嫌って言ってるわけじゃない」
［愛海］：「おお……」
［吹雪］：「き、姉弟なんだ。仲が悪いより良いほうがいいだろう？」
［愛海］：「特に何も言ってないけど」
［吹雪］：「……この」
［舞羽］：「あうっ！　な、何で私！？」
［吹雪］：「俺とマユ姉のことは昔から知ってるだろう？　だったら何かフォロー入れなさい」

［舞羽］：「そ、そんな～」
［愛海］：「大久保くんにしては筋の通ってない発言ね」
［吹雪］：「……も、もういいだろ？　この話は。俺、トイレ行ってくる」
［祐喜］：「ああ、授業もうちょっとで始まるから急いでよ？」
［愛海］：「ふふ、大久保くんってちょっとツンデレなところがあるのかしらね？」
［祐喜］：「確かに、あんまり見たことない表情してたね」
［愛海］：「……結構、おもしろかったわね」
［舞羽］：「理由なくチョップされるとは思わなかったよ……」
……。
……。
……。

繭子ルート・レブハフト（13）

［場所：第三音楽室］

［吹雪］：「――失礼します」
ガラガラ。
［繭子］：「あ、ふーちゃん。来てくれたんだ～」
［吹雪］：「そりゃあ来るだろ。マユ姉にお願いされたんだから」
［繭子］：「む～、そこは『マユ姉のお願いを断れるわけないじゃないか？　俺は、マユ姉の弟なんだから』くらいのことを言ってほしかったよ～」
［吹雪］：「……そんな言葉を俺が言えると思うのか？」
［繭子］：「ううん、多額の金品を渡しても言ってくれないと思う」
［吹雪］：「そこまで分かってるのなら期待するなよ」
［繭子］：「だって、ワタシ、奇跡は信じるタイプだから」
……随分と軽い奇跡だな、それは。
［吹雪］：「とにかく、練習始めようぜ。一緒に頑張れば捗るだろうから」
［繭子］：「うん、そうだね」
マユ姉は楽譜を広げ始める。
［吹雪］：「通して弾けるようにはなったのか？」
［繭子］：「一応はね、でも、まだまだヘタッピなのは確か。色んな箇所で躓いちゃうからそこを直していかないといけないね」
［吹雪］：「通して弾けるようになっただけでも大きな進歩じゃないか」
まだ時間はある。伸び代は十分にあるはずだ。
［吹雪］：「見てるから、ちょっと弾いてみてくれよ」
［繭子］：「うん、分かった。スーハー……」
――深呼吸を挟んだ後、マユ姉は指を鍵盤に走らせた。

マユ姉は他の三人よりもピアノを弾いた経験というものがない。だから、どうしても進むペースはゆっくりになりがちだ。だが、上達するペースを競っているわけじゃないから焦ることはない。マユ姉はマユ姉のペースで前進していければいい。

［繭子］：「あ……」

［吹雪］：「気にするな、そのまま進めな」

俺もピアノのことはそこまで詳しくない。舞羽が自宅で弾いているのを見たことは何度もあるけど、それでも楽譜を十分に読むことはできない。ただ分かるのは、今マユ姉が弾く儀式の曲がとても難しいということ。

［繭子］：「あ、ここはナチュラルだからそのままでよかったんだ……あ、こっちはシャープがついてるから……」

五線紙にびっしりとかかれた音符と記号の量から、難しさがヒシヒシと伝わってくる。この楽譜を前に逃げ出さないだけでも十分立派だと思う。

言ってはいけないことなんだろうが、俺はハーモニクサーで本当によかったと思う。

［繭子］：「あ……またやっちゃった」

［吹雪］：「落ち着きながらでいいよ、マユ姉」

［繭子］：「う、うん……」

……。

繭子ルート・レブハフト（１４）

［繭子］：「――ふう、一応これで全部だよ」
［吹雪］：「うん、一先ずお疲れ様」
［繭子］：「うーん、まだまだだね～突っかかっちゃう箇所がたっくさんあるよ～」
［吹雪］：「指の着地が難しいんだろう？」
［繭子］：「うん、一気に２オクターブ飛んだりするポイントとかがあるから。それが黒鍵盤だったりすると尚更」
［吹雪］：「こればっかりは、慣れていくしかないな」
以前舞羽がそんなことを言っていた。ピアノは何度も弾いて慣れることが大事だと。
［繭子］：「練習あるのみ、ってことだよね」
［吹雪］：「だな。もう一回弾けそうか？」
［繭子］：「うん、もちろん」
［吹雪］：「じゃあ、やってみよう」
［繭子］：「うん！」
……。
［繭子］：「ううう……指が攣りそうだよ～」
［吹雪］：「休憩入れるか」
難解な曲調だ、指が疲れるのは当然のことだろう。
［繭子］：「イテテ……」
［吹雪］：「……手、こっちに出しな、マユ姉」
［繭子］：「え？　うん」
［吹雪］：「……」
モミモミ。
［繭子］：「あ、ふーちゃん」
［吹雪］：「嫌ならやめるぞ？」
［繭子］：「ううん、全力で肯定します！」

［吹雪］：「なら、いいけどよ……」
そこまで大きな声を上げなくてもいいと思うが……。
［繭子］：「うーん、気持ちいい～♪」
足をプラプラさせながら。――それにしても。
［吹雪］：「ちっちぇーな」
［繭子］：「へ？　何？」
［吹雪］：「いや、ちっちぇーなって思って」
［繭子］：「そ、それは……身長ってこと～！？」
［吹雪］：「違うよ、マユ姉の手のことを言ってるんだ」
［繭子］：「あ、そうなの？」
やっぱり、身長のことは気にしているようだな。
［繭子］：「ふーちゃんが大きいだけなんじゃないの～？」
［吹雪］：「俺は普通サイズだ、多分」
そもそも、手の大きい小さいの基準はすごく分かりづらい気がする。ただ、その基準の分かりづらさを差し引いても、マユ姉の手は小さいと思う。
［繭子］：「ん……」
手のひらを合わせろってことか？
［繭子］：「ふーちゃんとワタシ、一回りくらい違うんだね～」
［吹雪］：「男だからな、俺は」
［繭子］：「手の大きさに男とかって関係あるの～？」
［吹雪］：「……言われてみればそうだな」
［繭子］：「男女差別はんたーい」
［吹雪］：「別に差別じゃねぇだろ、これは」
［繭子］：「んふふ～、ちょっと焦ったね？　ふーちゃん」
［吹雪］：「……そんなこと言うと、揉むのやめるぞ」
［繭子］：「あーん、待ってプリーズ！」
……ひょっとしたら、鍵盤に思うように着地できない理由の一つに手の大きさが小さいっていうのも含まれるんだろうか？　直しようがない点ではあるが……可能性はあるよな。

とある歴史上のピアニストは鍵盤2オクターブ分の手の大きさを持ってたと言われる。手が大きい方がピアノは弾きやすいんだろうか？

……まあ、手の大きさで上手い下手はそうそう決まらないだろう。練習を怠らなければ、マユ姉もきっと上達するはずだ。

［繭子］：「ふーちゃん、こっちも～」

［吹雪］：「はいはい」

そのためにも俺は、マユ姉が上達できるようにサポートをしていかないとな。

繭子ルート・ピアチェーレ（1）

12月17日（金曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、では練習に入ろうか」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「体調は？　どこか優れない部分とかはあるか？」
［吹雪］：「大丈夫です、万全です」
［セフィル］：「闘志満々だな、何か良いことでもあったのか？」
［吹雪］：「そういうわけじゃないですが、そろそろ成功させたいと思う次第で」
［セフィル］：「うむ、いい意気込みだ。その成功させたいと思う心ほど大事なものはないからな。吹雪は出来た子だ」
［吹雪］：「こんなことで出来た子というのはちょっと甘過ぎはしませんか？」
［セフィル］：「そうか？　――吹雪は誉められるのは嫌いなのか？」
［吹雪］：「え？　そういうわけじゃなくてですね……何て言うかあまり甘やかされると、図に乗ってしまうというか、適度に塩を振って引き締めてもらうことが大事だと思うんです」
［セフィル］：「……自らそんなことを言えるとは、できた男だな」
［吹雪］：「学園長、何か今日おかしくないですか？」
［セフィル］：「え？　何がだ？」
［吹雪］：「何か、異常に誉めるじゃないですか。大したことしてないのに」
［セフィル］：「そんなことはないぞ、吹雪はよくやってる。それは紛れもない事実じゃないか」

［吹雪］：「俺に言われてもですね」
［セフィル］：「期待しているぞ、君には」
［吹雪］：「……期待に添えるように頑張ります」
そろそろ、話に戻ってほしいな。
［セフィル］：「上手く言ったらもっと誉めてやろう」
［吹雪］：「は、はあ……」
［セフィル］：「よし、それでは本題に入ろうか。フェル、準備を」
［フェルシア］：「はい」
先生は、以前使用した機械を持ってくる。
［セフィル］：「とりあえず、魔力ゲージを確認だな」
［吹雪］：「はい」
腕に巻き付けて検査をする。
［吹雪］：「うん、９１％か、まずまずってところか。フェルはどうだ？」
［フェルシア］：「私は５４％です」
［吹雪］：「今日は少ないな、激しい運動でもしたのか？」
［フェルシア］：「そういうのじゃないですよ、昨日は保健室に来る生徒が多かったので、魔力の消費が激しかったんだと思います」
［吹雪］：「なるほど、大人気だったんだな」
［フェルシア］：「あまりいいことではないですけどね、保健室が忙しいというのは」
［吹雪］：「まあな。でも、すぐに補ってもらえるだろうよ。今日は成功させると意気込んでいるからな」
［フェルシア］：「お願いね？　吹雪くん」
［吹雪］：「はい、頑張ります」
［セフィル］：「よし、では準備をしよう」
ファルシア先生と向き合うように立つ。
［吹雪］：「練習を始める前に、ちょっと目を閉じてくれ」
［セフィル］：「はい」
何だろう、一体。

［セフィル］：「――我の中に眠る力、汝に宿したまえ」
［吹雪］：「ん？　お、おお！」
［セフィル］：「どんな感じだ？」
［吹雪］：「何と言うか、力が流れ込んでくるような感じがします」
［セフィル］：「うむ、正しい反応だ。前回の反省を踏まえて、私の魔力を吹雪に一時的に分け与えた。メーターにも現れているはずだ」
確かに、９１だったメーターが今は１００を差していた。
［セフィル］：「前回ああなってしまったのは、吹雪の疲労が極限まで高まってしまったのもあると思うんだ。私の魔力を与えることでそれを少しはカバーできるかと思うのでな。分かってるとは思うが、無理だけはいけないぞ？　危ないと感じたらすぐに詠唱をやめるんだ。いいか？」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「当然のことだ。大切なのはイメージだからな、それを頭に入れ直したら、自分のタイミングで始めてくれ」
［吹雪］：「はい」
集中、イメージを大切に……。
自分が上手く供給できている様子を思い描いて、一度深呼吸をする。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「そう、集中だ」
［吹雪］：「――ホーリーカルム！」
光が、フェルシア先生を包み込む。ここまでは問題ない、大事なのはここからだ。
……。
［吹雪］：「よし、メーターが動いたな」
［フェルシア］：「その調子よ、吹雪くん」
ちらっとメーターを確認する。学園長のサポートのおかげで、以前よりも魔力の消費が緩やかになっている。フェルシア先生のメーターは……５８、上がっている。

この調子だ。
［セフィル］：「そうだ、そのままだ。心に静を宿すんだ」
学園長の言葉どおり、今の状態を保つ意識を作る。
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「いいわ、力が流れ込んでくるのを感じるわ」
確かに、俺力が供給できているような感じがする。このイメージを掴みたいところだ。
……。
［セフィル］：「よし、いいぞ。もう少しだ」
俺のメーターを、フェルシア先生のメーターが上回った。
［フェルシア］：「ファイト、吹雪くん」
集中、集中……自分に言い聞かせる。フェルシア先生のメーターが８０になったところで終了となる。
現在７７、後少しだ。
［セフィル］：「３……２……」
［フェルシア］：「吹雪くん、ファイト！」
ラストスパートだ。
［セフィル］：「……１、……よし、詠唱やめ」
声を聞き、俺は詠唱を解いた。
［吹雪］：「はあ……」
やめた途端、一気に疲労が襲いかかり、俺は片膝をついた。
［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」
［フェルシア］：「吹雪くん」
［吹雪］：「だ、大丈夫です。ちょっと、力が抜けちゃいました」
［セフィル］：「よく頑張ったな、ほら、飲むといい」
［吹雪］：「ありがとうございます」
もらったドリンクを一口飲んだ。
［吹雪］：「魔力ゲージは？」
［フェルシア］：「吹雪くんのおかげで、ちゃんと回復してるわよ」

ゲージは８０ぴったりになっていた。そして代わりに、俺のゲージが４０を下回っていた。

［セフィル］：「残りが３６か、うん、まずまずといったところか」

［吹雪］：「学園長のサポートがなかったら、きっとうまくいかなかったですね」

［セフィル］：「だとしても、集中力を持続することができなかったらここまですることは不可能だぞ。自信を持って大丈夫だよ」

［吹雪］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「とりあえずは及第点だな。今日で成功できたのは大きな収穫だ。もっと鍛えればきっとサポートがなくても上手くいくだろう」

［吹雪］：「はい、頑張ります」

とりあえず、以前のようにならなくてよかった。

繭子ルート・ピアチェーレ（2）

［場所：教室］

［繭子］：「――それじゃあみんな、また明日ね～」

ホームルームが終わり、今日の学園生活が終わりを迎える。後はそれぞれ部活に行くなり下校するなり生徒の自由だ。俺はというと――。

……。

［繭子］：「ふーちゃーん、お待たせ～」

［吹雪］：「ちゃんと片づけてきたのか？」

［繭子］：「うん、今日の仕事は全て片づけてきたよ～。後、机も～」

［吹雪］：「ならいいだろう」

［場所：道路］

買い出しの話を出したところ、どういうわけかマユ姉も付いてくることになった。

一人でも問題はなかったんだが、連れて行くことを断る理由もなかったから二人で行くことになったけど。

［吹雪］：「何で買い物なんかに付き合おうって思ったんだよ」

［繭子］：「へ？」

［吹雪］：「折角早上がりだったんだ。社会科室とかで休んでた方がよっぽど有意義な時間を過ごせてたかもしれないじゃないか」

［繭子］：「もちろん、それも考えてたよ～。でも、久しぶりに行きたかったんだよね～ふーちゃんと外出に～」

［吹雪］：「外出って、料理用の食材を買いに行くだけなんだぞ」

［繭子］：「それでも、商店街に向かうんだから立派な外出だよ～。

息抜きにはちょうどいいもん」
［吹雪］：「息抜きね～」
むしろ荷物を持ち運ぶ点では疲労する可能性が高いんだが。
［繭子］：「んふふ、ひょっとしてワタシの体が心配とか～？」
［吹雪］：「ああ」
［繭子］：「……え？」
［吹雪］：「は？」
［繭子］：「……あれ？　おかしいな～」
［吹雪］：「何だよ？」
［繭子］：「だって、予想外の方向に会話が進んでるから」
［吹雪］：「予想外って、何がだよ？」
［繭子］：「てっきり、『んなわけねぇだろ！』的なツッコミが返ってくるものとばっかり思ってたのに……肯定されちゃったよ～？」
［吹雪］：「俺が肯定すると、何か問題でもあるのか？」
［繭子］：「……ふーちゃん、今日体調悪いんじゃないの？」
［吹雪］：「……そうくるか」
確かに、マユ姉が普段の俺を見てる限り、滅多にそういうことを言わないだろうって認識はあるだろうな。

繭子ルート・ピアチェーレ（3）

［繭子］：「何か悪いものでも食べた？　フォアグラのソテーとか」
［吹雪］：「それ全く悪いものじゃねぇだろ。むしろテンション上がりまくりだ」
［繭子］：「あ、ふーちゃんでもテンション上がるんだ」
［吹雪］：「そりゃそうだ。できればバルサミコソースでいただきたい」
［繭子］：「うわ～、想像するだけで涎が出てきそうだよ～」
［吹雪］：「……おい、ホントに垂れてるぞ」
［繭子］：「おっと！　……じゅる」
［吹雪］：「話を戻すと、俺は別に体調悪くなんてないぞ？　至って正常だ」
若干朝の練習で疲労はしているが……それを除けば普段と何も変わらない。
［繭子］：「……ホントに？」
［吹雪］：「そんなに俺の発言がおかしいか？」
［繭子］：「おかしいっていうか……レアだよ。ホログラフィックレアだよ」
［吹雪］：「何だよそれ」
［繭子］：「だって……ふーちゃんが普通にワタシの体を心配するなんて……頭とかだったらよくあることだけど、体を気遣ってくれるなんて～！」
［吹雪］：「……あのな、マユ姉」
［繭子］：「は、はい」
［吹雪］：「マユ姉は家族なんだ。家族の心配をするのは当然のこと。違うか？」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「おい、今度はどうした？」

［繭子］：「……今の言葉、録音してもいいかな～？」
［吹雪］：「録音って……」
［繭子］：「だって、ふーちゃんだよ？　ツンデレのふーちゃんがそんなことを言うなんて、姉としてはこんな貴重な言葉を見逃すわけには」
［吹雪］：「誰がツンデレだよ。それに、別に貴重でもないだろ、いつだって俺はみんなのことを気にかけてるつもりだ」
［繭子］：「はあ～、今の言葉も収録しておきたいよ～」
［吹雪］：「どこのジャーナリストだよ、マユ姉は」
［繭子］：「大久保家のです」
［吹雪］：「そういうことを言ってるんじゃねぇよ」
［繭子］：「うう……素直に嬉しいですよ～お姉ちゃんは～」
たいしたことを言ったつもりはないんだけどな……。

繭子ルート・ピアチェーレ（4）

［繭子］：「――にしても、どうして心配してくれたの～？」
［吹雪］：「家族の体調を心配するのに理由がいるのか？」
［繭子］：「そういうわけじゃないけど～、ほら、やっぱりふーちゃんだし」
［吹雪］：「俺という存在を理由にするなよ……。単純さ、いくら午後だけとはいえ、教師の仕事と練習を両立してるんだ。疲労も溜まってく一方じゃないかって思ったんだ」
［繭子］：「あ～、確かにそうだね～」
［吹雪］：「確かにって、他人事じゃねぇんだぞ？　マユ姉」
［繭子］：「でもでも、それを言ったらみんなだって条件は一緒だと思うよ～？　みんな午後は授業受けてるんだし、聖奈美ちゃんなんてその後に生徒会もしてるんだよ～？　むしろワタシより働いてるような気がするけど」
［吹雪］：「俺たちはいいんだよ……まだ若いし」
［繭子］：「あ～何よそれ～？　ワタシが若くないって言いたいの～？」
［吹雪］：「そういうことを言ってるんじゃなくてだな」
むしろマユ姉は下手したら俺たちより年下に見られる可能性も……。
［吹雪］：「教えられる側と教える側じゃあ、疲労の具合が違うと思うんだよ、俺は」
［繭子］：「むむ、なるほロケット」
［吹雪］：「新しい言葉だな」
［繭子］：「今にも発射しそうだね～」
［吹雪］：「どうでもいいよ、それは」
［繭子］：「つまりふーちゃんは、ワタシがみんな以上に疲れを溜めてるんじゃないか心配してくれたってことだね？」

［吹雪］：「そういうことだ」
［繭子］：「んふふ、ありがとふーちゃん♪　ワタシは全然大丈夫だよ～」
　子供のような満面の笑みを浮かべながら。
［繭子］：「無理は一切してないから安心して。それに無理してるけどしてないって言っても、ふーちゃんはそんなのすぐに見破れるでしょ～？　今のワタシに、無理は見受けられる？」
［吹雪］：「……いや、ない」
［繭子］：「だから安心していいよ～。繭子は元気印がチャームポイントだから～」
［吹雪］：「確かにマユ姉から元気をとったら、ほとんど残らないだろうな」
［繭子］：「ぶー、そんなことないよ～もう二つ残るものがあるもん」
［吹雪］：「何だよ？」
［繭子］：「食欲と美貌！」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「――さあ、早く商店街に行こうか」
［繭子］：「ちょ、ちょっとふーちゃん！？　あんなにたっぷり間を取ったのにノーコメントなの～？　何か言ってよ～」
［吹雪］：「さて、今日は何が安く売ってるかな」
［繭子］：「あーん、何かコメントしてよ～言ったワタシが恥ずかしいじゃないの～！」
　……。

繭子ルート・ピアチェーレ（5）

［吹雪］：「よし、コストを削減して食材を手に入れることができたぞ」
［繭子］：「うう、結局触れてもらえなかったよ……」
［吹雪］：「何のことだ？　マユ姉」
［繭子］：「あ、その話もなかったことにするんだ……そっかそっか……」
……何と返していいか困る時は、とことん流してしまうに限る。
［吹雪］：「さあ、暗くならないうちに帰ろうぜ」
［繭子］：「商店街は夜からは楽しいんだよ～？」
［吹雪］：「俺たちにそんな暇はない」
それ以前にマユ姉は入店できるかが怪しい。
［繭子］：「ふーちゃん、今失礼なこと考えなかった～？」
［吹雪］：「何のことだ？」
［繭子］：「お姉ちゃんは見逃してないよ？　ふーちゃんの考えていたことを！　ふーちゃんは今、ワタシが夜のお店に入店できないと考えていた！　違いますか？」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「さあ、早いとこ帰ろうぜ」
［繭子］：「あーん、またそれ使うの～？　だから待ってプリーズ！　別に怒ってるわけじゃないから～！　何か返してよ～」
今にも泣きそうになるマユ姉をとことん無視して俺は帰路へ急いだ。

［繭子］：「ふーちゃーん！　待ってよ～！」

繭子ルート・ピアチェーレ（6）

［場所：第三音楽室］

コンコン。

［繭子］：「はい、どうぞ～」

［セフィル］：「失礼するぞ、繭子」

入ってきたのは――学園長だった。

［繭子］：「あ、学園長～。こんばんは」

［吹雪］：「お疲れ様です、学園長」

［セフィル］：「うむ、姉弟力を合わせて頑張っているんだな」

［繭子］：「わざわざこんな所に来て……どうしたんですか～？」

［セフィル］：「ああ、ちょっと繭子の現状を見に来たんだよ。学園長としては、どこまで成長したのかを知る義務があるからな」

［吹雪］：「じゃあ、他のみんなの所にも回ってきたんですか？」

［セフィル］：「ああ。繭子のを見た後は、カホラのところを回るつもりだ」

［繭子］：「……」

［セフィル］：「どうした？　繭子」

［繭子］：「あの～、ワタシ、まだ上手く弾くことができてないというか……満足な出来ではないというか……」

［セフィル］：「ふんふん、つまり？」

［繭子］：「あーうー……えっと……」

［セフィル］：「……吹雪、繭子は何を心配しているんだ？」

［吹雪］：「多分、満足に弾くことができない現状を怒らないでほしいんだと思います。最近、柄になくそれを気にしているみたいなんで」

［セフィル］：「なるほど……さすが姉のことは分かっているな」

［吹雪］：「それは、まあ」

［セフィル］：「心配するな繭子、私は現状を見たくて来ただけだ。出来云々を叱責しに来たのではない」
［繭子］：「あ、本当ですか～？」
［セフィル］：「そもそも私は怒るのが嫌いでな。人間は褒められて伸びるものだと考えている。だから、繭子の気持ちはよーく分かってるつもりだ」
［繭子］：「そうなんですか～？」
［セフィル］：「ああ、そうだ。私も……よくカホラに注意されてヘコむからな」
　なるほど……。
［セフィル］：「だから、心配しなくていい。気楽に弾いてくれ。まだ日にちはあるんだ、その期間内に完成すれば何にも問題ないのだから」
［繭子］：「うわ～学園長が菩薩に見えてきました～」
［セフィル］：「はっは。よせ、照れるじゃないか」
　この二人、思ってたより馬が合うようだな。
［セフィル］：「では、弾いてみてくれるか？」
［繭子］：「はい。ふーちゃん、楽譜めくりよろしくね～」
［吹雪］：「ああ」
　マユ姉はピアノを弾き始める。
　――マユ姉の担当する月影のピアノのパートは、秋を思わせる緩やかなテンポが多いのだが、そのパートにはたくさんの難所がある。特にオクターブ飛びの箇所がいくつかあり、マユ姉はそこに苦戦している。その部分を今弾いているんだが……。
［繭子］：「あ……」
　未だ、そこをクリアすることができない。どうにも上手く着地ができないんだ。
［吹雪］：「マユ姉の手が小さいのが原因なんですかね？」
　気になっていたことを学園長に問うてみる。
［セフィル］：「確かに、繭子の手は他の三人と比べて小さいな。

だが、ピアノを弾くのに支障を来すほどじゃない。目立った原因ではないだろう。単純に難しいからだと思うが」

［吹雪］：「そうですか」

［セフィル］：「他の三人より、ピアノの経験が少ないからな。当然だと思うぞ。ここまで弾けるようになっただけでも立派だろう」

［吹雪］：「それは、そうですね」

［セフィル］：「……あれを使うか」

［吹雪］：「？」

［セフィル］：「繭子が弾き終ったら、説明するよ」

［吹雪］：「はい。……おっと」

俺は遅れないように楽譜をめくった。

……。

繭子ルート・ピアチェーレ（7）

［セフィル］：「――ふむ、一先ずお疲れ様だな」
［繭子］：「すいません、学園長～」
［セフィル］：「悲観的にならなくていい。繭子はこれから上達するんだから。そのために、私が一つ手解きをしようじゃないか」
［繭子］：「手解き？」
［セフィル］：「そうだ。早速だが繭子、ちょっと目をつぶっていてくれ」
［繭子］：「へ？　はい。……」
［セフィル］：「……」
学園長がマユ姉に手をかざす。どうやら、何か魔法をかけるようだ。
［セフィル］：「――我の力、汝の糧とならん。――アビリティグロー！」
［繭子］：「わわっ！？」
詠唱とともに、マユ姉の体が発光を始めた。
［セフィル］：「心配するな、もう少しすると自然と治まってくるから」
［繭子］：「は、はい～」
［セフィル］：「――よし、目を開けていいぞ」
［繭子］：「はい……」
［吹雪］：「学園長、今のは？」
［セフィル］：「繭子、軽くでいいからピアノを弾いてみてくれ」
［繭子］：「え？　はい～」
マユ姉は指を鍵盤に走らせる。すると――。
［繭子］：「――あら？　何だろう、すごく……指が動きやすいよ？」
［セフィル］：「よし、上手くいったようだ」

［吹雪］：「補助魔法の一種ですか？」
［セフィル］：「そんな感じかな。一時的ではあるが、個々の能力を引き出すことができるんだ。今回は繭子が上手くピアノを弾くことを念頭において唱えたから、指使いが滑らかになったんだろう」
［繭子］：「すごいよふーちゃん、すごい指が動くよ～」
［吹雪］：「今聞いたぞ、それ」
［繭子］：「でも、本当にすごいよこれ～」
［セフィル］：「その状態でもう一度通して弾いてみるんだ。おそらく、さっきよりも突っかかることは少なくなると思うぞ。今の状態で感覚を掴めれば、きっと魔法がなくても滑らかに弾くことができるようになるはずだ」
［繭子］：「はい、やってみます。ふーちゃん、お願い」
［吹雪］：「ああ、頑張れ」
［繭子］：「うん！」
マユ姉はもう一度弾き始める。するとどうだろう――先程ミスした部分を問題なくクリアすることができた。

繭子ルート・ピアチェーレ（8）

［吹雪］：「すごい、ほとんど躓かなくなった」
［セフィル］：「どうやら成功のようだな」
学園長の顔は満足気だった。
［セフィル］：「元々繭子は不器用ではないからな。感覚さえ覚えれば、きっとすぐに上達できると思うんだよ」
［吹雪］：「ピアノを弾くにおいて、感覚は重要なんですか？」
［セフィル］：「ああ、特に四季のピアノを弾くにおいてはな。吹雪も知っていると思うが、四季のピアノの曲調はコロコロ変わる。楽譜を見ていても、時折どこを弾いているか見失う時もある。そんな時、どのパートをどういった具合に弾けばいいか、自分の感覚を信じなければいけない。四人居て初めて成り立つ曲だ。ちょっとのミスが大きなミスになりかねない。そういった時、培った感覚というものを活かしていけば、自然とミスは少なくできる……と私は思っている」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「さっきの魔法も、できることなら本番でも使用してやりたいんだが……何分儀式でそのような行いはできない。自分の力で弾くこと、それが条件だからな」
［吹雪］：「……マユ姉もそれは分かってるはずです」
柄になく焦っているのがその証拠だろう。
［吹雪］：「覚えたいって心はあるみたいですから、きっと弾けるようになると思いますよ」
［セフィル］：「そうだな。弟の言うことだから間違いないだろう」
［吹雪］：「……その根拠はよく分からないんですけど」
［セフィル］：「気にしたら負けだぞ、吹雪。ほら、そろそろ出番じゃないか？」
［吹雪］：「ああ。……」

――一度目よりも大幅にミスを無くし、マユ姉は曲を弾き終えた。
［セフィル］：「見事だ、繭子」
［繭子］：「学園長の魔法のおかげです～」
［セフィル］：「しばしの間は、あの魔法を使って練習するとしよう。繰り返すうちに、自然と指使いも覚えて、魔法を使わずとも弾けるようになるはずだ。頑張っていこうじゃないか」
［繭子］：「はい！　頑張ります～！」
［セフィル］：「じゃあ、私はこの辺で失礼しよう。カホラの所に向かわなくては、吹雪、後は頼んだぞ」
［吹雪］：「はい、ありがとうございました」
［セフィル］：「なに、当然のことだよ」
学園長の後ろ姿は、ちょっとかっこよかった。
［繭子］：「やっぱり、学園長はすごいな～」
［吹雪］：「まあ、学園長だからな」
［繭子］：「今のうちにたくさん弾いて覚えなくちゃ～」
［吹雪］：「指、休めなくて大丈夫か？」
［繭子］：「うん、もう少しいけるよ～それに、今はもう一度弾きたいって心が思ってるから」
［吹雪］：「分かった、じゃあ続けて弾いてくれ。ただ、無理はするなよ」
［繭子］：「はーい」
――まだ二週間もある。上昇余地は十分だ。

繭子ルート・アタッカ（1）

12月18日（土曜日）

［場所：社会科室］

土曜日の午後は、珍しく合宿メンバー全員が揃っていた。予定がないからみんなのんびりしようとしているらしい。夜にも練習があるから、とても正しい選択だろう。だが、それを良く思わない人間も中には存在していた。

［繭子］：「ねえねえふーちゃん、何かして遊ぼうよ～」

［吹雪］：「あー？　冗談だろう」

［繭子］：「冗談じゃないよ～ワタシは本気だよ？」

［吹雪］：「そうか、それはよかった」

［繭子］：「まだ話は続くよ。勝手に終わらせちゃいや～」

［吹雪］：「だーもう、体を揺するなよ」

［繭子］：「じゃあこっち向いて～」

渋々体をマユ姉の方向に向ける。

［吹雪］：「何だって？」

［繭子］：「ワタシ、遊びたいです」

［吹雪］：「……仮にも教師が遊びを切り出すってどうよ？」

［繭子］：「教師は関係ないよ～、教師でも童心は持ち合わせてるものだよ～」

［吹雪］：「マユ姉は童心の固まりじゃないか」

ネバーランドがあれば疑わずしてついていってしまいそうだ。

［吹雪］：「休んでおけよ。悪いこと言わないから」

［繭子］：「でもでも～、何にもしないで6時間もじっとしてられないよ～。せっかくみんながここに揃ってるんだからさ～」

［吹雪］：「遊ぶためにみんなは揃ってるんじゃないぞ」

［繭子］：「冬なんだし、適度に運動はしておかないと体脂肪が激増して肥満の原因に――」
［吹雪］：「だとすると、俺は絶対に問題ないな。毎日ランニングを欠かさずしてるし」
［繭子］：「ここでもう一汗かくと、漏れなく上腕二頭筋をサービス――」
［吹雪］：「筋肉にサービスもくそもあるかよ」
チョップ。
［繭子］：「あうっ！」
［吹雪］：「俺、筋肉なら間に合ってるんで」
［繭子］：「お願いだよふーちゃーん。この世に一人しかいない姉の要望を飲んでよ～」
［吹雪］：「あー、だから揺するなって」
本当に、そういうところが子供っぽいって分からないのかね？
［吹雪］：「遊ぶって言っても、具体的に何がしたいんだよ。どうせ決まってないんだろう？」
［繭子］：「あります。やりたい遊び、決まってます！」
［吹雪］：「何だよ、一体」
［繭子］：「かくれんぼ！」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「横恋慕じゃないよ？」
［吹雪］：「分かってるわ、そんなことは」
ここにいるメンバー全員が「かくれんぼかよ……」と思ったに違いない。

繭子ルート・アタッカ（2）

［吹雪］：「理由は？」
［繭子］：「久しぶりにやりたくなったから。できれば校舎全体でやりたいね～」
［吹雪］：「……学校を遊び場に使用するのって、普通はダメなんじゃないのか？」
［繭子］：「でもほら、今は放課後だから。使用しちゃいけないのは学校生活中だよ？」
［吹雪］：「……そうなんですか？　フェルシア先生」
［フェルシア］：「まあ、言ってることは間違いじゃないけど」
［繭子］：「たまには童心に帰って遊ぶことも大切だよ？　きっと良い気分転換になるよ～」
［吹雪］：「気分転換って……」
かくれんぼ以外にもたくさん方法は……。
［繭子］：「みんなでやろうよ～。きっと楽しいから～」
［吹雪］：「楽しいとかの問題じゃなくてだな」
［繭子］：「じゃあどんな問題～？」
［吹雪］：「……俺はともかく、みんなに付き合わせるのは良くないだろ？　みんなそれぞれ、やりたいこととかもあるはずだ」
［繭子］：「でも、ワタシとふーちゃんだけでやってもつまんないよ？」
［吹雪］：「だから、やる前提で考えるなって……」
［セフィル］：「――別にいいじゃないか、吹雪」
［吹雪］：「うわおっ！？」
が、学園長？
［吹雪］：「ど、どこから出て来たんですか？」
［セフィル］：「ああ、ここからだが」
［吹雪］：「そ、そうですか……」

［セフィル］：「話はおおよそ分かった。吹雪よ、繭子の願いを聞いてやってもいいんじゃないか？」
［吹雪］：「ええ？　でも、学校を使ってかくれんぼをするっていうのは」
［セフィル］：「学園長がいいと言ってるんだ、すでに許可は下りてるが？」
［吹雪］：「いや、そういう問題ではなくて……」
［セフィル］：「ここ毎日ずーっと練習をしているんだ。みんな知らず知らずストレスとかを溜めこんでいるはずだ。そんな状態ではピアノの練習に望んでも成果は生まれない。適度なガス抜きというのは必要不可欠。故にかくれんぼだ」
［吹雪］：「……今話の行程を三つほど飛ばしませんでしたか？」
［セフィル］：「かくれんぼは大人数でやるほど楽しい。楽しいということはストレスの発散になっている証拠だ」
［吹雪］：「あ、あの……」
［セフィル］：「折角だから私も参加しよう。吹雪も参加したまえ」
［吹雪］：「え、ええ？」
［セフィル］：「みんなも一緒にやろうじゃないか。みんなでやれば、きっと楽しいはずだ」
何か話が勝手に進められてる……。

繭子ルート・アタッカ（3）

［舞羽］：「ど、どうしようかな……？」
［聖奈美］：「この歳で、かくれんぼっていうのは……」
［カホラ］：「というか、母さんがただやりたいだけなんじゃないの？」
［セフィル］：「……そんなことはない」
［カホラ］：「今の間は一体何よ？」
［セフィル］：「いいじゃないか、堅いことは言いっこなしだ」
［カホラ］：「……はあ、しょうがないんだから」
［吹雪］：「……ごめんなさい、みなさん」
［舞羽］：「あはは、学園長が言うんならしょうがないよね」
［聖奈美］：「ま、まあ……学園長が言うなら、やるしかない、わよね？」
［フェルシア］：「童心に帰ることも大事か」
［カホラ］：「本当、学園長の自覚あるのかしら？」
［繭子］：「学園長ありがと～」
［セフィル］：「なに、気にするな繭子。私と繭子の仲じゃないか」
［繭子］：「母さん～！」
［セフィル］：「はっはっは！」
……マユ姉はいつから学園長の子供になったんだ？　というより――。
［フェルシア］：「いつから、あんなに仲良くなったのかしらね？」
全くだ……。
……。
［フェルシア］：「じゃあ数えますね？　いーち」
［セフィル］：「うむ、みんな隠れるぞ」
［繭子］：「わーい！」

繭子ルート・アタッカ（4）

［場所：廊下］

――というわけで、校舎全体かくれんぼが始まってしまった。鬼はフェルシア先生、その補佐役としてダルクが付いている。
校舎全体が隠れていいことになってはいるが、体育館や剣道場など、部活動をしている場所や男女別になっている場所などに隠れてはいけない。
また、校舎を順次移動することはできず、一度身を隠した場所からは動いてはいけない。これは鬼に対する配慮だろう。
尚見つかった人間はその時点で鬼となり、残りの隠れている者を探すのに参加する。
最後まで見つからなかった者には――何かご褒美があるらしい（学園長談）。
［吹雪］：「にしても、マジでやることになるとは」
いつも通り代案を出して言いくるめようと思っていたのに、そこに学園長が入ってくるとは……学園長も、仕事仕事で息抜きがしたかったんだろうか？　……校舎全体をかくれんぼを切り出す学園長なんて、俺たちの学園くらいしかないだろうな。
［吹雪］：「悪いな、みんな」
［舞羽］：「吹雪くんが謝ることじゃないよ。それに、ちょっとわくわくしてきたし」
［聖奈美］：「学園長は、あたしの思ってた以上に変わってるようね」
［カホラ］：「こういうのは今回限りにしてもらわないと……学園長として自覚を持ってもらわないと困るわ」
［吹雪］：「発想は、おもしろいと思いますけどね」
［カホラ］：「いいのよ吹雪、無理に評価しなくても」

［吹雪］：「そ、そうですか？」
［カホラ］：「まあでも、始まっちゃったものはしょうがないし、頑張って隠れましょう？　真面目にやらないと、お母さん拗ねるから」
［舞羽］：「す、拗ねる？」
［カホラ］：「そういう人なのよ。……それより、繭子先生は？」
［吹雪］：「学園長と一緒にどっかに行きました。行先は分からないです」
［カホラ］：「……おそらく、繭子先生が優勝候補でしょうね。身を隠すのが得意そう」
［吹雪］：「実際、得意だと思いますよ」
　昔は舞羽と三人でかくれんぼをしていたからな。マユ姉を見つけるのにとても苦労した記憶がある。
［吹雪］：「俺たちが隠れてもすぐ見つかるような場所でも、マユ姉が隠れると何故か見つからなくなるんです」
［カホラ］：「……いるわよね、そういうかくれんぼが異常に上手い人って」
［聖奈美］：「鬼にならなくてよかったわ」
［吹雪］：「でも、今回の鬼はフェルシア先生だから、マユ姉がどこに隠れるかとか分かってるかもしれないぜ？　あの二人、仲が良いし」
　実際はマユ姉が懐いてるだけかもしれないが。
［カホラ］：「まあとにかく、ご褒美がでるみたいだし、そこそこ頑張ってみましょうか。疲れない程度にね」
［舞羽］：「そうですね」
［カホラ］：「さて、そろそろ散りましょうか。じゃあ、私はこっちに行くわね」
［聖奈美］：「じゃあ、あたしはこっち」
［舞羽］：「じゃあ、私も……またね？　吹雪くん」
［吹雪］：「おう、じゃあな」

――さて、隠れる場所を決めないといけないんだが……どこに隠れよう？　校舎全体が隠れていい場所と言っても、身を隠せるようなところは案外ないものだ。

［吹雪］：「どこにするか……」

あまり考えている時間がないのも事実。……いいか、適当に近場に身を潜めるとしよう。俺の目線の先にあるのは――第三音楽室だ。

繭子ルート・アタッカ（5）

［場所：第三音楽室］

ガラガラ。

場所が決まったのはいいが、身を隠せるところがほとんどない。

……仕方ない、ここは定番ともいえる掃除用具入れに入るとしよう。

俺は体を折り曲げて、何とか中に入った。

［吹雪］：「ふう、入れた……」

子供の頃は簡単に入れたけど、今はなかなか難しい。それだけ、俺が大きくなったってことなのかな？　……足の位置が悪いな。ちょっとずらすか。

［吹雪］：「よ……っと」

［？？？］：「あんぎゅ！」

［吹雪］：「ん？」

今何か聞こえたような……それもかなり近いところで。

［吹雪］：「気のせい、か？」

［？？？］：「んぎゅ……」

［吹雪］：「っ！？」

やっぱり聞こえるぞ。つか近いところっていうか……俺のすぐ後ろで聞こえてる気がするんだが……。――ひょっとして？　俺は何とか体勢を後ろ向きに変え、箒の束を掻き分けて奥を覗いてみる。

すると――。

［繭子］：「誰もいないよ～」

［吹雪］：「……なるほど」

簡単に入れなかったのはコレのせいか。

［繭子］：「ん～？　あれ？　ふーちゃん？　ふーちゃんだよね？」

［吹雪］：「……ああ」

［繭子］：「何だ～、てっきりフェルかと思ったよ～。にしても、

どうしてここに～？」

［吹雪］：「いや、隠れる場所を探してたら、ここに行き着いただけだ」

［繭子］：「そうなんだ～、偶然ってあるもんだね～」

……激しく隠れる場所を変えたいんだが、一度身を潜めた場所からは出ていけないというルールがある。どうしてここに隠れてしまったのか、とっても自分を責めたい気分だ。

［吹雪］：「……」

［繭子］：「どうしたの？　ふーちゃん。何だか顔が良く見えないよ？」

［吹雪］：「当たり前だろ、暗いんだから」

［繭子］：「あ、なるほロケット」

［吹雪］：「ハマってるのか？　それ」

［繭子］：「ワタシの密かなマイブームですよ」

［吹雪］：「隠さず言いまくってるから密かじゃないだろ」

［繭子］：「だって一人で言ってもつまらないじゃん？　誰かに聞いてもらわないと～、ふーちゃんはそれに適してるんだもん」

［吹雪］：「……どうでもいいが、あんまりしゃべるなよ。ばれちまうだろ？」

ただでさえ狭い空間だ。ちょっと身じろぎするだけでカタカタと揺れてしまう。

繭子ルート・アタッカ（6）

［繭子］：「え～？　思いがけなく二人の空間ができたのに～」
［吹雪］：「どういう意味だよ？　それは」
［繭子］：「言葉通りの意味だよ？」
［吹雪］：「……確実に失敗が招いた事故だよ、これは」
［繭子］：「そうかな～？　ワタシはちょっと嬉しいけどな～」
［吹雪］：「う、嬉しい？」
［繭子］：「うん。隠れてるとは言っても、ふーちゃんと密着できてるしね♪」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「また反応してくれない～。それすごい寂しくなるからやめようよ～」
［吹雪］：「じゃあそういう発言は控えろ。返答に困るんだよ」
［繭子］：「ふーちゃんなら絞り出せるはずだよ！」
［吹雪］：「意味なく自信を持つな」
［繭子］：「……んふふ、この狭いスペースなら、ふーちゃん得意のチョップを繰り出せないよね～？」
［吹雪］：「……」
ビシッ！
［繭子］：「あうっ！　何で～？　さっきふーちゃんうるさくするなって自分で言ってたのに～！」
［吹雪］：「お仕置きが第一。うるさくしないのはその後だ」
［繭子］：「エゴだ～、完全なるエゴだよ、それ～」
［吹雪］：「何とでも言え、俺は間違ったことはしてない自信がある」
［繭子］：「ぶーぶー」
はっきりとは見えないが、不服そうな顔をしてるようだ。
［吹雪］：「……」

特に足音は聞こえないから、まだこっちのフロアには来ていないようだ。

［繭子］：「静かだね～」

［吹雪］：「近くに来た時に騒いだら、確実にバレるな」

［繭子］：「じゃあ……近くに来るまでは騒いでいいってこと？」

［吹雪］：「そんなわけはない、ずっと静かにしてるのが理想だ。……まあ、それでもここをスルーする可能性は低いと思うけど」

人が隠れられそうな場所は基本的に調べていくはず。ロッカーは隠れるには持ってこいの場所。いずれ絶対に開けられるだろう。

［吹雪］：「大人しくしてたほうがいい」

［繭子］：「はーい」

そう言いながら――。

ダキッ。

繭子ルート・アタッカ（7）

［吹雪］：「――おい、マユ姉」
［繭子］：「何？」
［吹雪］：「何をしてるんだ？」
［繭子］：「何って、大人しくしてるんだよ～？」
［吹雪］：「そうじゃなくて、何故俺に抱きつく必要があるんだ？」
［繭子］：「大人しくするにはふーちゃんから分泌されるふーちゃん成分が必要だから～」
［吹雪］：「……頭大丈夫か？　マユ姉」
［繭子］：「うん、教師だもん！」
そこでそれを使うのか？
［繭子］：「まだこの音楽室、暖房入ってないから寒いんだもん～。だから、ふーちゃんで暖を取らせてもらおうと思って～」
［吹雪］：「俺は湯たんぽかよ」
［繭子］：「カイロって可能性もあるよ」
［吹雪］：「どうでもいいんだよそんなの」
［繭子］：「こんなに狭いんだもん、距離を開けるなんてできないよ～。折角だしくっつかせてよ～」
［吹雪］：「くっつかれたら、動きづらいだろ？」
［繭子］：「動いたらガタガタ揺れてうるさくなるよ～？　うるさくするなって言ったのはふーちゃんじゃなかったっけ～？」
［吹雪］：「む……」
こういう時だけ頭の回転が速いんだよな……。
［繭子］：「にひひ、暖まらせてもらおーっと！」
［吹雪］：「おのれ……」
いくら姉弟みたいとは言え、さすがに抱きつかれるのは恥ずかしいぞ。動揺を表に出さないようにしなければ……。
……。

繭子ルート・アタッカ（8）

――10分程経過しただろうか？

［吹雪］：「特に音はしない、か……」

［繭子］：「ん～、ぬくぬく～」

時間が経過しても尚、マユ姉は俺に抱きついたままだ。目は大分暗闇に慣れてきて、今はマユ姉の姿がはっきり分かる。目線を下に落とすと、マユ姉の小さい頭があった。

［繭子］：「ん～？」

［吹雪］：「ん……」

［繭子］：「何で目を反らすの～？」

［吹雪］：「別に、理由なんてねぇよ」

［繭子］：「んふふ、恥ずかしい、とか？」

［吹雪］：「そんなことねぇよ」

［繭子］：「でも拳に力入ってるよ～？」

［吹雪］：「癖だ」

［繭子］：「嘘、ふーちゃんはそんな癖持ってないよ～」

［吹雪］：「何故言い切れるんだよ？」

［繭子］：「ワタシはふーちゃんのお姉ちゃんだから。これでもふーちゃんに関する知識はそこそこあるよ～」

［吹雪］：「そうかい」

［繭子］：「うん、そうです。……ぐりぐり～」

［吹雪］：「お、おい。あんまり体押し付けるな」

［繭子］：「ちょっと、ポジションチェンジ」

すっかりマユ姉の良いように体を使われてるな。……そういう意味ではないからな？

［繭子］：「ぬくぬく～」

ピョコピョコ動く頭から、シャンプーの甘い匂いが香ってきた。

［繭子］：「何だか、昔を思い出すね～こうしてると」

［吹雪］：「昔……俺たちが出会いたての頃か？」
［繭子］：「うん。あの時はよくこうして、みんなで抱き合ってたでしょ～？　覚えてるよね？」
［吹雪］：「……忘れるわけがない」
［繭子］：「んふふ、やっぱり～？」
［吹雪］：「ああ。……相当、苦しかったからな」
別に嫌だったというわけじゃない。ただ、いつも抱きしめられる時、何故か俺は一番内側に入れられることが多かったんだ。抱きしめられている間、ろくに呼吸ができなかったことを覚えている。

繭子ルート・アタッカ（9）

［吹雪］：「母さんといい、父さんといい、何かある度に抱きしめてたよな」
［繭子］：「大久保家には、代々そういう習慣があったんだよ～」
［吹雪］：「家庭内限定だからよかったものの、外でもやっていたとしたら欧米もびっくりだっただろうな」
［繭子］：「ワタシは嫌いじゃなかったよ～？　お父さんお母さんのハグは～」
［吹雪］：「……そうだろうな」
だからマユ姉も、くっつくのが好きなんだろうから。
［繭子］：「良い思い出だよ～」
［吹雪］：「……まあな」
［繭子］：「……あの頃は小さかったふーちゃんも、今ではこんなに大きくなったのか～」
［吹雪］：「そりゃあ大きくなってないとおかしいだろ……というか、前にもこんな話をしなかったか？」
［繭子］：「そうだっけ～？　――別に楽しいから気にしない！」
一瞬で俺の言葉は流されてしまった。
［繭子］：「こんなに大きいのに、ワタシより小さかった頃があるなんて考えられないね～」
［吹雪］：「俺も、考えられないな」
こんなに小さいマユ姉より小さかった頃があるなんて……。
［繭子］：「人間は変わりゆくものだってことがよく分かるよ～」
［吹雪］：「不満なのか？　現状に」
［繭子］：「ううん、全然！　満足してるよ？　でも、もうちょっと身長は欲しかったかもしれないね～せめて１５０を超えるくらい」
［吹雪］：「……マユ姉、１５０ないのか？」
［繭子］：「へ？　……うん、ないです」

［吹雪］：「……そうだったのか」
［繭子］：「な、何？　そんなしみじみと」
［吹雪］：「いや？　うん……まあ……うん……」
［繭子］：「あーん、何かヤダよ～その反応～」
［吹雪］：「お、おいこら！　叩くなよ、揺れてるだろ」
［繭子］：「ああ、そうだった……」
俺に言われて動きをピタッと止める。
［繭子］：「うう、言わなきゃよかったよ～」
［吹雪］：「まあ、パッと見でそう分かるものじゃないし、気にしたってしょうがないだろ」
［繭子］：「……それ、フォローになってないような気が……ワタシの気のせいかな？」
［吹雪］：「――ん？　ちょっと静かに」
［繭子］：「わぷっ！？」
今まで聞こえてこなかった足音が、廊下から聞こえてきた。
［フェルシア］：「こっちのほうには、誰か隠れてるかしら？」
［ダルク］：「どうでしょう？　あんまりここ近辺って隠れるところがないですよね？」
［フェルシア］：「そうなのよねー。でも、可能性がないとは言えないし、虱潰しに見ていきましょうか」
［ダルク］：「そうですね。後見つけてないのは……三人ですよね？　学園長と繭子さんと、吹雪」
［フェルシア］：「ええ、そろそろ見つけてあげないと不安になってくるかもしれないしね」
――どうやらさっき別れた三人は見つかってしまったらしい。序盤に見つかるとばかり思っていたが意外と粘っていたようだな。

繭子ルート・アタッカ（１０）

［繭子］：「フェルたちがこっちに来てるの？」
声のトーンを落としたマユ姉が問いかける。
［吹雪］：「ああ、ここも時間の問題だな」
［繭子］：「うー、場所をコロコロ変えれるなら、見つからない自信があるのに」
［吹雪］：「さっきも言っただろ？　それはルールに反するから禁止だって」
［繭子］：「はーい。やり過ごせるように静かにしてまーす」
口を閉じるマユ姉。しかし、体勢を変えようとはしない。そんなに俺と離れるのが嫌なんだろうか？
［吹雪］：「……」
コツコツコツ……。足音は徐々に大きくなってくる。悪いことをしているわけではないが、身を潜めながら足音に耳を澄ましていると不思議と緊張が湧きあがってくる。
［繭子］：「ふーちゃん、心臓ドクドクいってきてるね」
［吹雪］：「ほっとけよ、俺の意志じゃない」
［繭子］：「ふふ、は～い」
何がおもしろいんだか……。
［フェルシア］：「んー、こっちの部屋にはいなかったわね」
［ダルク］：「じゃあ、次はここですね。第三音楽室」
［フェルシア］：「こんなところに隠れるところなさそうだけど……一応見ておかないとダメよね」
［ダルク］：「そうですね。……誰も、いないですよね」
［フェルシア］：「ええ、入りましょうか。ダルクちゃん」
ああ、これは見つかっちまうな。
［吹雪］：「マユ姉、多分もう無理だ」
［繭子］：「あきらめたらそこで試合終了だよ？　ふーちゃん」

［吹雪］：「あきらめるも何も……逃げれないんだよ」
［繭子］：「あはは、じゃあ見つかるまで待ってよ～」
そして……ピタリと動きを止める。しかし腕は背中に回されたままだ。
ガラガラ。
［フェルシア］：「とりあえず、準備室のほうを見てみましょうか」
［ダルク］：「そうですね」
……どうやらこのフロアは最後に見に来るようだ。
［繭子］：「向こうに行ったみたいだね」
［吹雪］：「まあ、ちょっと時間が伸びただけだがな」
［繭子］：「それでも、ひょっとしたらタッチの差で見つかる時間がワタシたちのほうが遅くなるかもよ～」
［吹雪］：「そんな上手くいくか？」
［繭子］：「さっきも言ったけど、あきらめないでみようよ～。……は、ハックション！」
［吹雪］：「うわ……」
［繭子］：「じゅる……ごしごし……」
［吹雪］：「っておい！　何人の服で鼻を拭ってる！」
つうか結構今のくしゃみ、音が大きかったぞ。

繭子ルート・アタッカ（11）

［フェルシア］：「ねえダルクちゃん、向こうで何か音聞こえなかった？」
［ダルク］：「そうですね、ちょっとくしゃみっぽかった気もしますね」
［フェルシア］：「そうよね……ってことは、第三音楽室に三人のうちの誰かがいるかもね。一般生徒はいなかったみたいだし」
［吹雪］：「……バレちまったぞ、確実に」
［繭子］：「じゅる……ごめん、生理現象を止めれなかったよ～。……は、は……はあっ！」
［吹雪］：「ま、待て。我慢しろって！」
［繭子］：「んぎゅっ……！？」
俺はマユ姉の鼻を手のひらで塞いだ。
［繭子］：「ん～ん～……」
［吹雪］：「仕方ないだろ。正当防衛だ」
さっきは助かったが、さっきと同じ勢いでくしゃみをされたら鼻水がこっちまで飛んで来かねない。
［繭子］：「ぷはっ！　もー、苦しいよ～ふーちゃん」
［吹雪］：「正当防衛だ」
［繭子］：「それにしたっていきなりすぎ……は、は、はあっ――！」
［吹雪］：「だから抑えろって！」
［繭子］：「無理、止まんない……は、は、ハーックション！！」
［吹雪］：「ぐわああっ！？」
凄まじい音量のくしゃみが密室に響く。しかし、悲劇はそれだけで収まらなかった。
マユ姉が体を折り曲げた瞬間――。
［繭子］：「――あっ！」

［吹雪］：「ちょ、ちょっと待て！　まさか！」
［繭子］：「そ、そんなこと言ったって～……うひゃあああっ！」
［吹雪］：「わあああああっ！」
そう。バランスを崩した掃除用具入れが、前のめりにそのまま――。
ドンガラガッシャーン！　俺たちの上から掃除用具が襲い掛かる。
［吹雪］：「いってぇ！」
モップの柄が頭にゴンっとヒットする。
［繭子］：「イタタタ……あ、大丈夫～？　ふーちゃん！」
［吹雪］：「あ、ああ……何とか……」
反射的に、後頭部に両手を回したのがよかった。それがなかったら、頭を強打かもしれない。
［吹雪］：「マユ姉は？　何ともないか？」
［繭子］：「う、うん……」
――気付けばさっきの比じゃないくらい、マユ姉の顔が近くにあった。ほんの少し、口を近づければ触れ合ってしまうほどに。

繭子ルート・アタッカ（12）

［繭子］：「ううん、ごめんなさい……こんなことになって～」
［吹雪］：「掃除用具入れを倒すほどって……どんだけ威力あるくしゃみをしたんだよ」
［繭子］：「一回、ふーちゃんに抑えられたから……威力が上がったのかな？」
［吹雪］：「俺のせいってことかよ？」
［繭子］：「そ、そういうわけじゃないけど～……一回目が不発だったから、その分の威力が加わっちゃったのかな～って」
［吹雪］：「……多分、フェルシア先生は気付いてるよな？」
この状態では入口が閉じ切っているため自力で出ることは無理だ。さっきの大音量に反応する声が聞こえたから、こっちに来てくれると思うが。
［吹雪］：「助けてもらえるのを待とう」
［繭子］：「ホント、反省します～……」
［吹雪］：「……分かったんならいい。だが……次からは合図を入れてくれ」
そうじゃないと、対処が間に合わない。
［繭子］：「は、はーい」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
な、何だ？　この空気は。変にマユ姉のことを意識してるような……この体勢がそうさせてるんだよな？　きっと。それ以外に考えられない。
［繭子］：「……」
［吹雪］：「ま、マユ姉？」
［繭子］：「へ？　誰もいないよ～？」
［吹雪］：「いやいるだろ、今正に目の前に」

［繭子］：「あ、ごめん……何だろ、ちょっと……ね？　えへへ」
［吹雪］：「な、何だよ？」
［繭子］：「その……こんなにふーちゃんの顔が近くにあると……さすがのワタシもちょっと意識しちゃうっていうか……何か恥ずかしいなーって思ってさ……あははは」
　どうやらマユ姉も同じことを考えていたらしい。まあ、無理もないんだけど……。
［繭子］：「べ、別に嫌なわけじゃないよ？　ふーちゃんの温度も匂いも大好きだから、ワタシ。ただ、距離がほぼゼロだから考えないわけにはいかないというか……」
［吹雪］：「……俺、何も言ってないけど」
［繭子］：「あ、大丈夫。全部ひとりごとだから～」
［吹雪］：「ひとりごとにしては声が大きすぎやしないか？」
［繭子］：「そ、そうかな～？」
［吹雪］：「……とりあえず落ち着け、深呼吸しろ」
［繭子］：「スーハー、スーハー……」
　言われたとおり、深呼吸を二回。

繭子ルート・アタッカ（13）

［吹雪］：「……どうだ？」
［繭子］：「……うん、飲み込んだ！」
［吹雪］：「しばらく、それを維持しろよ？　そろそろフェルシア先生たちが来るはず――」
［ダルク］：「あ、フェルシア先生、何か掃除用具入れが倒れてます」
　ついに来てくれたか？　チャンスだ。
［吹雪］：「フェルシア先生ー！　ダルク！　いるんだろ？　吹雪です」
［ダルク］：「ふ、吹雪？　フェルシア先生、掃除用具入れから声が」
［フェルシア］：「ええ？　わっ!?　た、倒れてる……吹雪くんがこの中に？」
［吹雪］：「フェルシア先生？　すいません、起こしてください。一人じゃ出れないんです」
［繭子］：「繭子もいるよ～、フェル～出して～」
［フェルシア］：「ま、マユも一緒にいるの？　……事情を聞くのは後ね。とりあえず、これを起こさないと……ダルクちゃん、力貸してちょうだい」
［ダルク］：「はい」
　ふう、これで脱出することができるぞ。
［フェルシア］：「せーのっ！」
［ダルク］：「それっ！」
　掃除用具入れが持ち上がる。すると――パカっと……掃除用具入れが開いてしまった。その拍子に、俺たちはそこから吐き出されるようにして――。
［吹雪］：「うわああっ！」

［繭子］：「うひゃあああっ！」
外に体が飛び出した。
――ゴン。

繭子ルート・アタッカ（１４）

［吹雪］：「お、おおおおおっ……」
俺の頭は、床に勢いよく叩きつけられた。
［フェルシア］：「だ、大丈夫？　吹雪くん」
［吹雪］：「いてて……何とか、大丈夫です……」
［フェルシア］：「マユは？　怪我とかしてない？」
［繭子］：「うん、大丈夫～ふーちゃんが守ってくれたから……」
［フェルシア］：「……とりあえず、マユは吹雪くんの体から離れたほうがいいと思うわよ。その体勢は、色々と問題だから」
［繭子］：「あ！　うん、そうだね」
マユ姉の体が離れる。かなり体が軽くなった感じがした。それだけ密着してた時間が長かったんだろう。俺もゆっくりと体を起こす。
［フェルシア］：「……とりあえず――吹雪くんとマユをみーつけた」
［繭子］：「ああ、見つかっちゃった～」
［フェルシア］：「……色々聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」
まあ、当然のことだろう。こんな狭い場所から二人も出てきたんだから……。
――俺はフェルシア先生の質問を一つずつ説明していった。
［吹雪］：「――なので、場所を変えたかったんですけど、変えられなかったんです」
［フェルシア］：「なるほど、納得したわ」
［吹雪］：「よかった……」
［フェルシア］：「そうよね、マユならまだしも吹雪くんが同じところに隠れようと言い出すわけはないものね。相手が男だったら分かるけど――」
［吹雪］：「いや、男なら尚更拒否すると思いますよ！？」

密室に男同士二人きりなんて……考えただけでも恐ろしい。
［フェルシア］：「――幸い見たのは私とダルクちゃんだけだし、みんなには内緒にしておくわ。バラしてもしょうがないことだしね」
［吹雪］：「助かります」
それが伝わったら、杠たちに蔑みの目で見られかねないからな。
［繭子］：「ありがとね、ふーちゃん。身を挺してワタシを守ってくれて」
［吹雪］：「自然に身を挺する形になっただけなんだが……まあ、怪我がなくてよかったじゃないか」
［繭子］：「うん。やっぱりふーちゃんは頼れる男の子だよ」
［フェルシア］：「それにしても、くしゃみで掃除用具入れを倒すって……マユのくしゃみは下手な魔法より強力かもしれないわね」
［吹雪］：「はは……そうですね」
大魔王もびっくりの威力ではあったな。
［フェルシア］：「さて、残すは――学園長のみね」
［吹雪］：「さすが……学園の長だけありますね」
［フェルシア］：「どこに隠れてるのか……みんなで手分けして探しましょう」
［繭子］：「任せて～、全力で探すから」
――学園長は、家庭科室のフライパンなどを入れるスペースに無理やり体をねじ込んでいた。

繭子ルート・アタッカ（15）

［場所：社会科室］

［セフィル］：「いてて……これは明日は筋肉痛かもしれないな」
［カホラ］：「あんな狭いところに無理して隠れるからよ。全く、無茶して……」
［セフィル］：「一度きりの人生、自分に正直に生きるべきだと思ったからな。自分の感覚に身を任せてみたんだ」
［カホラ］：「はあ～……」
大きなため息が俺の横から聞こえてきた。
［セフィル］：「それじゃあ、一番最後まで見つからなかった者にご褒美をあげるとしよう」
［繭子］：「へ？　最後まで残ってたのは学園長じゃないですか？」
［セフィル］：「自分に褒美を与えてもつまらないじゃないか。私を抜きにして一番最後に見つかったものに与えるに決まっている」
［舞羽］：「ということは、一番最後まで残ってたのは――」
［吹雪］：「マユ姉、だな」
［繭子］：「へ？　ワタシだけじゃなくふーちゃんも――」
［フェルシア］：「マユで間違いないわ。私が見つけたから」
［吹雪］：「（同時に見つかったことは内緒だ。あれがバレたら、俺はみんなと同じ寝床にいられなくなる）」
［繭子］：「（そ、そうだったね、ごめんね～）」
［聖奈美］：「……二人で見つめ合って、何してるのよ？」
［吹雪］：「いや、何でもないから」
［セフィル］：「それじゃあ繭子、こっちに来てくれ。褒美を渡そう」
［繭子］：「あ、はーい」
トコトコと学園長の元に歩み寄る。

［セフィル］：「何を渡すか迷ったが、私は私の好きな物を贈ることにしたぞ。というわけで、繭子にこれをプレゼントだ」
［カホラ］：「あっ！　そ、それは――」
［繭子］：「わーい、チョコビスケットだ～」
［セフィル］：「これは沢渡家では必須アイテムなんだ、ほっぺが落ちる程美味いから是非食べてみてくれ」
［カホラ］：「不覚だわ……まさかお母さんがまともなものを褒美で与えるなんて」
［セフィル］：「はっは、私のパターンを分かっているが故に憶測を見誤ったようだな。残念だったな、カホラ」
［カホラ］：「くぅ……褒美がそれだと分かっていたら……是が非でも最後まで逃げ切ってたのに……」
［舞羽］：「……カホラ先輩があんなに取り乱すのって珍しいよね？」
［吹雪］：「それだけ、あのビスケットが好きなんだろうよ」
［セフィル］：「おめでとう繭子。繭子なら最後まで逃げ切れると、私は密かに思っていたぞ」
［繭子］：「そうなんですか？」
［セフィル］：「ああ、私の目に狂いはなかったよ」
［繭子］：「――母さん！」
［セフィル］：「はっはっは」
［聖奈美］：「……あの二人、家族だったかしら？」
［吹雪］：「いや、俺の家族だ」
［繭子］：「せっかくだからみんなで食べようよ。ちょうど三時になるところだし」
［セフィル］：「ふむ、それはいい考えだ。是非そうしよう」
［舞羽］：「あ、じゃあ私お茶を煎れてきます」
［聖奈美］：「あたしも手伝うわ、須藤さん」
――学園長のくれたチョコビスケットは確かに美味で、みんな絶賛しながら食べていた。

［繭子］：「はあ、楽しかったな～」
［吹雪］：「楽しんだんだから、次はみっちり練習しないとな」
［繭子］：「うん、ガッテン！　やる気は満々だよ」
どうやら本心から言っているようだ。
［繭子］：「――また一つ、ふーちゃんとの思い出が増えたね……」
［吹雪］：「ん？　何か言ったか？」
［繭子］：「ううん、何でもないよ～ただのひとりごと」
［吹雪］：「そうか」
［繭子］：「（えへへ、今日のこと、心にしっかり刻んでおこーっと♪）」

繭子ルート・ローコ（1）

12月20日（月曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、全員揃ったな。みんな、体調は問題ないか？」

［舞羽］：「はい、大丈夫です」

［繭子］：「元気バリバリでーす」

［聖奈美］：「正常です」

［カホラ］：「問題なく元気よ」

［セフィル］：「吹雪はどうだ？　元気か？」

［吹雪］：「もちろん、何ともないです」

［セフィル］：「うむ、それならよかった。安心して練習を行えるな」

学園長はうなずきながらそう呟いた。今日の練習メニューは、学園長が言ったとおり、合同練習だ。全員のメロディーを一つに合わせる本番を意識した練習、これからはそれが主体になってくる予定だ。

［セフィル］：「みんな、今までやってきた練習の成果を存分に発揮してくれ。だとしても緊張することはないからな。今日から合わせ始めるわけだから、きっとミスも出るだろう。でも悲観することはない、そのミスを今後に活かしていけばきっと成功につながる。そうして完成した演奏を本番でしっかり弾けるようにするんだ」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「では、練習に移ろうと思うんだがその前に。フェル、やるぞ」

［フェルシア］：「はい」

先生たちは目を閉じ、詠唱を始めた。

［フェルシア］：「――エル・エルギュニス、我の精神、その身に宿したまえ、――ソウルイジェクター！」
詠唱と同時に、光を帯びた衣のようなものが、四人の体を包み込んだ。
［繭子］：「わあ、すごーい」
［舞羽］：「何だか、心が安らぐようです」
［セフィル］：「簡単に言うと、精神力アップの補助魔法だ。これで集中してピアノを弾くことができるようになるはずだ」
［聖奈美］：「ありがとうございます」
［カホラ］：「これは助かるわね」
さすが教師だな、みんなの力を発揮できる状況を作ってくれる。
［セフィル］：「吹雪、君には私の魔力を分けてあげよう。こっちに来るんだ」
［吹雪］：「はい」
俺は先生の前へ向かった。
［セフィル］：「じゃあ、目を閉じるんだ」
［吹雪］：「はい」
言われるままに目をつぶる。
［セフィル］：「――我の力、彼の糧とならん。――はっ！」
俺の体に、学園長の魔力が流れ込んでくるのを感じる。
……。
［セフィル］：「――よし、完了だ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「どうだ？　体のほうは？」
［吹雪］：「力が漲ってる感じがしますね」
［セフィル］：「それならよかった。これで、力を余すことなく発揮することができるだろう」
［吹雪］：「はい、頑張らせていただきます」
［セフィル］：「じゃあ今から、それぞれ神殿に向かうわけだがちょっとこれを見てほしい」

学園長は一枚の紙を目の前に広げた。
［セフィル］：「これが四季のピアノが置かれている神殿の場所なんだが、吹雪にはその中心に向かってもらう」
［吹雪］：「中心ですか？」
［セフィル］：「うむ、位置で言うとここだな」
学園長は地図の真ん中に黒点を打つ。
［セフィル］：「ここに、ハーモニクサー専用の聖壇がある。吹雪はここから、四人に魔力を供給してもらう」
［吹雪］：「今更なんですけど、魔力は遠距離からでも効果はあるんですか？」
［セフィル］：「もちろんある。確かに近くで詠唱したほうが効果は高いかもしれないが、いちいち移動して供給していては非効率的だし、何より吹雪体が保たないだろう。全員から同距離の場所でやるのが一番無難だ」
［吹雪］：「そうですね、了解しました」
［セフィル］：「ピアニストのみんなは、自分のピアノのところで音を奏でてくれ」
［聖奈美］：「あ、すみません。一つ質問いいでしょうか？」
［セフィル］：「何だ？　聖奈美」
［聖奈美］：「前から思っていたんですが、四季のピアノは四つのピアノのメロディーが全て重なって一つになるんですよね？」
［セフィル］：「うむ、そのとおりだ」
［聖奈美］：「神殿と神殿の距離はかなり離れているのに、どうやって相手の音を認識できるんですか？」
［セフィル］：「そのことか、確かに説明していなかったな。よし、教えてあげよう」
学園長はみんなを自分の元に集めた。
［セフィル］：「始めに断っておくと、私たちも正直詳しくは分からないんだ。今も尚謎に包まれている部分が多いから、断定はできないからそこは多めにみてくれ」

［聖奈美］：「分かりました」
［セフィル］：「みんな、ジャスパーは持っているな」
［聖奈美］：「はい、持っています」（聖奈美）
［セフィル］：「ジャスパーには魔力を増幅するパワーが宿っているんだが、それともう一つ力を持っている。それが、音を響かせる力なんだ」
［聖奈美］：「響かせる？」
［セフィル］：「ジャスパーには音を拾う力があるようなんだ。四季のピアノが変化させたわけだから、そう考えると納得がいくんだが。四季のピアノを奏でると、その音に共鳴してジャスパーが発光する、そうすると、自分以外のピアノの音がジャスパーから響いてくるんだ」
［聖奈美］：「でも、普段の練習の時は、みんなの音は聞こえてきませんでしたけど」
［セフィル］：「おそらく、四季のピアノ限定なんだろう。それがどうしてかは説明ができないんだが」
［聖奈美］：「そうですか、分かりました」
［セフィル］：「対策として神殿の中にモニターも用意してある。音が響かなかった時はそれを見てくれると助かる。すまないな、詳しい説明ができなくて」
［聖奈美］：「いえ、結構です。音の認識の方法が知りたかっただけなので、不安は解消されました」
［繭子］：「本当に不思議なんだねー、この石って」
［セフィル］：「うむ、とりあえずそういうことだから安心してくれ」
［聖奈美］：「はい」
［セフィル］：「他に何か質問はあるか？　難しくないことなら答えるぞ？　――大丈夫か、じゃあそれぞれの場所へ向かおう。ピアニストのみんなは目を閉じるんだ、私とフェルが神殿にワープさせてやろう」

［繭子］：「ちょっとドキドキしてきたよ～」
［舞羽］：「そうですね」
［カホラ］：「頑張りましょう」
［聖奈美］：「練習通りにやれば問題ないでしょう」
［セフィル］：「じゃあ、繭子、カホラ、先に連れていこう。舞羽と聖奈美は待っていてくれ。吹雪は最後に連れていくからな」
［舞羽］：「分かりました」
［吹雪］：「了解です」
［セフィル］：「じゃあフェル、繭子のほうを頼む」
［フェルシア］：「分かりました」
――四人はそこから姿を消した。
［吹雪］：「今更だけど、二人ともちゃんと弾けそうか？」
［舞羽］：「自分のパートはバッチリ。だけど、みんなと合わせるのは初めてだからそこが少し不安かな」（舞羽）
［吹雪］：「やっぱりそうだよな。でも、チームワークなら抜群だろうしきっと大丈夫だろう」
［舞羽］：「うん、頑張るよ」
［聖奈美］：「そういうあなたは？　ホーリーカルム、マスターしたんでしょうね」
［吹雪］：「遠距離からっていうのは初めてだけど、練習ではできるようになってきたよ。上手くいくように頑張るから、見限らないでくれ」
［聖奈美］：「べ、別に見限りなんてしないわ。あなただってあたしたちと同じよ、今ある力を存分に出すだけよ。ま、あなたの力を借りないのが一番の理想なんだけど」
［吹雪］：「それってつまり……お前の力なんて誰も必要としてないってことか？」
［聖奈美］：「何でそんなに悪い方向に持っていくのよ、ノーミスでクリアしたいってことを言ってるの、誰もあなたのことをそんな風に思ってないわよ」

［吹雪］：「そ、そうか？　なら、安心した」
［聖奈美］：「ちょっと不安になってきたわ……」
［セフィル］：「待たせたな、では二人も行こうか」
［舞羽］：「はい。吹雪くん、一生懸命やろうね」
［吹雪］：「おう」
［セフィル］：「じゃあ吹雪、少しの間待っていてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
詠唱が終わり、４人はその場からいなくなった。
こうやって一人で待っていると、若干緊張が表に出てしまうな。とりあえず、力まないようにしないと、こんな時に暴発なんてしたら大惨事に成りかねない。力をキープして、精神を集中させることを忘れないようにしないと。
［吹雪］：「よし、やるぞ！」
俺は気合いを入れた。
［セフィル］：「うむ、良い心がけだ」
［吹雪］：「うわおっ！？」
既に学園長は戻ってきていた。
［セフィル］：「随分外国人っぽい驚き方だな」
［吹雪］：「別に意識はしてないですけど……早かったですね」
［セフィル］：「吹雪が寂しがるといけないと思ってな、ちょっと早めに折り返してきた」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「もうじきフェルも戻ってくる、そしたら聖壇に向かおう」
［吹雪］：「はい。学園長は、俺のほうに付いてくれるんですか？」
［セフィル］：「私とフェル、二人とも吹雪のほうに付く。ないとは思うが、あれが起きた時にとめられるようにな」
［吹雪］：「……申し訳ないです」
［セフィル］：「気にしなくていい。それに、君には期待しているからな、何かあっては困る」

［吹雪］：「期待に添えるように全力を尽くします」
［フェルシア］：「お待たせしました」
［セフィル］：「うむ、では行こうか」
二人に連れられて、聖壇へと向かった。
……。
［吹雪］：「す、すごい」
目の前には聖壇と呼ぶに相応しい光景が広がっていた。
［セフィル］：「驚いたか？」
［吹雪］：「はい、すごく」
［セフィル］：「普段は、一般人が入れないようにバリアが張り巡らされているんだ。聖なる場所を汚されては困るからな」
［吹雪］：「ここで俺は、ホーリーカルムを唱えるんですね」
［セフィル］：「そうだ。そこの四つの柱が、それぞれ四季のピアノの音を聴き取る機能を持っている。最初は、みんなの演奏に耳を傾けてみるといい」
［吹雪］：「供給のタイミングは？」
［セフィル］：「そこは吹雪のタイミングに任せる、と言いたいところだが今回は初めてだからな。私たちが供給のタイミングを知らせよう。後半になってくると、四人の魔力も大分落ちてくるはずだから、おそらくは曲の中盤あたりからだろう。それまでは、モニターでみんなの様子を観察していてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「今回が初めてだから、多少の失敗は仕方ない。リラックスしてやるようにするんだ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「１２時になると同時に演奏を始めるように言ってある。開始まで後、５分程だな」
５分か、今のうちにイメージを膨らませておこう。俺は四人の顔を頭に思い浮かべた。
［吹雪］：「――よし！」

行こう。
１２時と共に、柱からメロディーが流れてきた。最初のパートは桜花のピアノを弾く舞羽からだ。そして、そのパートを追いかけるように杠の海風のピアノ、マユ姉の月影のピアノ、カホラ先輩の風花のピアノと続いていく。始めはゆっくり歩くようなテンポ、そのメロディーを次は杠が最初に奏で、同じようにマユ姉、カホラ先輩、舞羽と続けていく。
そして一周し、曲調は平均的なものになる。メインパートは舞羽に戻り、他の三人はそのメロディーを引立てるメロディーを奏でる。まだ序盤ではあるが、みんな問題なく弾けているようだ。
［セフィル］：「うん、今のところはいい感じだな」
［吹雪］：「このまま、続いてほしいですね」
［セフィル］：「まだ先は長い、見守っていてあげよう」
（頑張ってくれ、みんな……）
そして、全員がメインパートを弾き終わり、曲調は徐々に早く、激しくなっていく。先程とは打って変わった大きな音とメロディー、変拍子とでも言えばいいだろうか。その複雑なテンポの中でメインパートは移り変わり、引立てられていく。
と、ちょうどその時だった。
［繭子］：「あ……」
一瞬、和音の乱れが生じた。どうやら鍵盤を押し間違えたようだ。だが、すぐに立て直し、止まることはなかった。
［セフィル］：「大丈夫だ、そのまま続けてくれていい」
やはり、それだけ難しいところなのだろう。
［聖奈美］：「くっ……」
［カホラ］：「あっ……」
変拍子パートの中間らしいところで、杠と先輩が和音を間違えた。しかし、止まることはなく次のパートに集中する。
［セフィル］：「そろそろ、中盤だな」
ここからはしばらく、ソロパートが続いていく。舞羽、杠、マユ姉、

先輩の順に回っていくから、他の三人はしばらくの休憩と言ったところか。
俺個人的には、ここが魔力供給の絶好のポイントだと思うんだが。
［吹雪］：「学園長、タイミングは？」
［セフィル］：「そうだな、舞羽のパートが終わるまで、聖奈美に魔力を供給してみてくれ」
［吹雪］：「分かりました」
俺は目を閉じ、杠を頭に思い浮かべた。神経を研ぎ澄まし、イメージを働かせる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そして、自らの力を解放した。果たして、成功しているか？　俺は、学園長の言葉を待った。
［セフィル］：「うん、問題ない。成功しているようだ」
俺は内心ホッとした。しかし、ここで気を抜いたらいけない。もう一度気合いを入れなおそう。
［セフィル］：「舞羽のパートが始まるぞ」
それと同時に、舞羽のソロメロディーが始まった。最初によく似たゆったりとしたテンポのメロディーが紡がれていく。俺はその間も、杠に魔力を供給する。
［セフィル］：「聖奈美にパートが移ったら、次は繭子に供給してみるんだ」
返事は返せないが、言葉はしっかり受け止めた。
［セフィル］：「そろそろだ」
俺は詠唱を止め、マユ姉に詠唱をシフトさせる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
そして、杠のパートが始まると同時にマユ姉に供給を始めた。
［繭子］：「おおっ！？」
モニターから声が聞こえた。声の感じからして、どうやら供給はで

きているらしい。杠のソロメロディーを聞きながら俺は詠唱を続ける。

［セフィル］：「その調子で、次はカホラだ」

先程と同じ要領で、俺は頭の中でカホラ先輩を思い浮かべる。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

照準を先輩に変更。杠のパートが終わり、マユ姉がソロでピアノを弾き始める。秋を司るピアノにあった穏やかなメロディーが響いてくる。

［吹雪］：「う、く……」

［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」

俺はうなずいて返した。

ちょっと、体が重くなってきたな。やはり供給する人を変えているからだろうか？　練習の時よりも、魔力の消費が激しい気がする。でも、もう後半の後半には来ているはず、ここであきらめるのは嫌だ。曲の最後まで踏ん張るんだ。

［セフィル］：「カホラにパートが移ったら、舞羽に魔力を供給するんだ」

曲を聴いている限り、舞羽は個々のパートで最初を担うことが多い。若干他のみんなよりも消費しているかもしれない。なるべく多く、供給したいところだ。今ある魔力をしっかりと注ぐぞ。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

そしてソロパートは最後のカホラ先輩に。マユ姉よりもアップテンポの曲調を感じながら俺は舞羽に魔力を与える。この後はおそらく、また四重奏に戻るだろう。もう一息だ、頑張れ、俺。

［セフィル］：「いいぞ、もう少しだ吹雪」

［フェルシア］：「頑張って、吹雪くん」

二人の応援に励まされながら俺は詠唱に心血を注ぐ。

［セフィル］：「よし、詠唱停止」

パートは最後の四重奏に入った。最初と同じ、ゆっくりとしたメロディーが紡がれていく。四人の息はピッタリで、淀みはほとんどない。多少の間違いはあっても、取り戻せる程度だ。徐々に、音量も小さくなっていく。

そして――余韻を残し、メロディーは終わりを迎えた。

それと同時に――。

「セフィル」：「ふ、吹雪!?」

俺の記憶も飛んでしまった。

……。

……。

……。

繭子ルート・ローコ（2）

［場所：保健室］

［吹雪］：「ん、んん……」
目を開けると、俺は保健室にいた。
［フェルシア］：「吹雪くん、気がついた？」
［吹雪］：「あ、フェルシア先生」
［フェルシア］：「はあ、よかったー目が覚めたのね」
そうか、俺、詠唱が終わって倒れたんだった。てことは、フェルシア先生が俺を運んでくれたのか？
［フェルシア］：「体は？　痛いところとかない？」
［吹雪］：「痛くはないです。ただ、ちょっと体がダルいですね」
［フェルシア］：「それはそうよ、体内の魔力をほとんど使い切っちゃったんだから」
［吹雪］：「そうだったんですか？」
［フェルシア］：「そうよ、本当に無茶はするなって言ってたのに……」
［吹雪］：「すいません」
予想以上に、人を変えての供給は難しいものだった。まだまだスタミナ不足っていうのもあるな。もっと練習に力を入れないと……。
［舞羽］：「吹雪くん、大丈夫！？」
［繭子］：「ふーちゃん！」
［カホラ］：「吹雪！」
［聖奈美］：「……！」
［吹雪］：「おおっ！？」
一斉に全員が保健室にやってきた。
［繭子］：「あ、起きてる、ふーちゃんが起きてる！」
［舞羽］：「大丈夫なの？　体は何ともないの？」

［カホラ］：「痛いところとかは？　どこかおかしいところとかはない？」
［聖奈美］：「し、心配かけるんじゃないわよ！　本当に、びっくりしたんだから」
［吹雪］：「あ、ちょ、ちょっと待ってくれ」
一変にまくし立てられ、どれに答えていいのか分からない。
［吹雪］：「大丈夫だから、ちょっと疲労がたまっただけだから」
［舞羽］：「よ、よかった」
みんな、俺の顔を見てほっとしているようだった。
［フェルシア］：「治癒魔法はかけておいたから、直に良くなってくるはずよ」
［吹雪］：「ごめんな、心配かけて」
［セフィル］：「本当だ、無理をするなとあれだけ言っていたのに」
［吹雪］：「が、学園長！？」
いつからそこにいたんだ？
［セフィル］：「頑張るのは良いことだ、だが、倒れるまで頑張れなど一言も言ってないぞ。それは単なる無茶だ」
［吹雪］：「う……すいません」
［セフィル］：「もしものことがあってからでは遅いんだ。もっと自分の体を大事にしなくては」
［吹雪］：「はい……以後気をつけます」
［セフィル］：「ふう……だがまあ、よく頑張ってくれた。吹雪の魔力を受け取ったおかげで、みんな最後までピアノを弾くことができたしな」
［吹雪］：「あ、本当ですか？」
［セフィル］：「あの後、全員の魔力のチェックをしたんだ。四季のピアノで、どれくらいの魔力を消費するかを知っておくために。そしたら、全員の魔力が４０を下回ってたんだ」
［吹雪］：「そ、そこまでですか？」
一般的に、魔力のパーセンテージは３０を下回ってしまうと極度の

負担が体にかかる。それに近いということは、負担もかなりかかっていたということ。

［セフィル］：「舞羽が３７、繭子が３８、聖奈美が３８でカホラが３６。今は治癒魔法で大分回復しているが、終わった直後はみんな相当疲れていたんだ」

［吹雪］：「やっぱり、一筋縄じゃいかないってことですか」

［セフィル］：「そういうことになるな。だが、みんなが疲労しながらも最後まで弾き終えることができたのは、吹雪が中途で魔力を供給したからなんだ」

［吹雪］：「俺、ちゃんと供給できてましたか？」

［セフィル］：「ああ、成功していたぞ。なあ？　みんな」

全員が顔をそろえてうなずいてくれた。

［舞羽］：「吹雪くんの力、弾いてる途中でもすごく伝わってきたよ」

［繭子］：「うんうん、ふーちゃんの後押しがあったからこそだよ～」

［聖奈美］：「まあ、心配してたけど、ちゃんとできてたみたいね。及第点ね」

［カホラ］：「吹雪ならできるって信じてたわ。ありがとね」

全員から賛辞をもらえるなんて、感無量だな。

［吹雪］：「ありがとう、みんな。次はもっと、楽にピアノを弾くことができるように頑張るよ」

［セフィル］：「次は倒れるんじゃないぞ？」

［吹雪］：「は、はい。了解です」

［セフィル］：「うむ、じゃあ、今日の練習はこれで終了としよう。今日はゆっくり休んで疲れをとること。明日も練習があるから、みんなで頑張っていこう」

［全員］：「はい！」

――全体練習は、色々あったけど、うまくいった。

繭子ルート・ローコ（3）

12月21日（火曜日）

“［吹雪］：「うう……くそ……また失敗だ……」
［繭子］：「あ、ふーちゃん見つけた～！」
［吹雪］：「……何だよ、俺は呼んだ覚えはないぞ」
［繭子］：「うん、ワタシも呼ばれた覚えはない！」
［吹雪］：「じゃあ、何でここにいるんだよ」
［繭子］：「姉弟が会うのに、理由なんていらないじゃん」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「それにさ～……ふーちゃん、結構体傷ついてるよ？　気付いてないかもしれないけどね？」
［吹雪］：「……これは、転んだ擦り傷だ」
［繭子］：「ホント～？　そのわりには擦り傷みたいなのが見えないんだけど～」
［吹雪］：「め、目に見えるものが擦り傷とは限らないんだ！　目に見えなくても、心に擦り傷がついてるかもしれないだろ」
［繭子］：「うーん、何だかすごく奥深い台詞だね～」
［吹雪］：「とにかく、俺は別に何ともない。ほっといてくれ。俺にかまうな」
［繭子］：「……分かった」
［吹雪］：「もっと練習をしないと……お父さんとお母さんみたいにはなれないんだ」
［繭子］：「――キュア……」
［吹雪］：「――っ！？　おい、俺のことはほっとけって言っただろ。何勝手に魔法をかけてるんだよ」
［繭子］：「へ？　ワタシ、そんなことしたっけ～？」
［吹雪］：「とぼけるな、まだあんたの体が光ってる」

［繭子］：「うーん……証拠は消すのはなかなか難しいね～」
［吹雪］：「やっぱりあんたじゃないか……余計なことしやがって」
［繭子］：「でもワタシ、ふーちゃんの言いつけは守ってたと思うけど？」
［吹雪］：「どの口が言ってるんだ。たった今あんたは俺に魔法をかけたじゃないか」
［繭子］：「だから、ワタシは『ふーちゃん』に魔法をかけたんだもん。『俺』って人には干渉してないからね。えへへ～」
［吹雪］：「……人の揚げ足を取りやがって」
［繭子］：「……言っておくけどね、ふーちゃん。今のふーちゃんは力を使い切ってるから、魔法を撃てる状態じゃないよ？」
［吹雪］：「自分のことは自分がよく分かってる。俺はまだ、やれる」
［繭子］：「……足、フラフラしてるよ？」
［吹雪］：「わざとだ」
［繭子］：「わざと足をフラフラさせるなんて聞いたことないよ」
［吹雪］：「人それぞれだ、やる人だっている。俺はその一人だ」
［繭子］：「ふーちゃんって、おもしろいんだね～」
［吹雪］：「俺は至って普通だ」
［繭子］：「今日はやめておこうよ～、これ以上無理をしたら体に障るって」
［吹雪］：「俺は、まだ大丈夫だ」
［繭子］：「大丈夫じゃない人に限ってそういうこと言うんだよ～。ダメ、許しません」
［吹雪］：「なっ――、ちょっと、離せよ」
［繭子］：「ダーメ、死んでも離さないもーん」
［吹雪］：「離せ、俺はまだ――」
［繭子］：「頑張るのと、無理をするのはまったく別物だよ？　今日はワタシに従って、じゃないと、無断で練習してたことバラしちゃうよ～？」

［吹雪］：「ぐ……」
［繭子］：「まあ、その体の状態を見せたらワタシが言わなくてもバレちゃうか。バレたらきっと、お仕置きされちゃうんじゃないかな～？」
［吹雪］：「う……お仕置きは……イヤだ……」
［繭子］：「だよね～、ふーちゃんお仕置きだけは嫌いだもんね～」
［吹雪］：「う、うるさい……」
［繭子］：「だ、か、ら♪　今日はワタシの言うことを聞いた方がいいよ？　ふーちゃんがバレないようにしてあげるから～」
［吹雪］：「俺は……あんたの言うことなんて……」
［繭子］：「おかあさーん、ふーちゃんがまた――」
［吹雪］：「だっ！？　わ、分かったよ。悪かったから言うのはやめて――」
［繭子］：「んふふ～、最初からそう言ってればいいのよ～」
［吹雪］：「う……この……」
［繭子］：「……よかった、今日は何も起こらなくて」
［吹雪］：「今日、は？」
［繭子］：「ん？　どうかした～？」
［吹雪］：「……ひょっとしてあんた、俺の練習をいつも――」
［繭子］：「ずっと言ってるけど、ワタシはあんたって名前じゃないよ。繭子って名前がちゃーんとあるんだから。ふーちゃんの姉・大久保繭子ですよ」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「できたら練習をする時、ワタシに一声かけてくれると嬉しいかも～なんて。あ、これひとりごとだから気にしないでね～」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「さあ、暗くなる前に戻ろう～」“

繭子ルート・ローコ（4）

［場所：社会科室］

……。

……。

……。

［吹雪］：「ん、んん……」

――夢か。また随分と懐かしい夢を……何だか最近こういう風な夢ばっかりだな。

あの時からか、マユ姉のことを姉として見れるようになってきたのは。自分の知らないところで自分をこっそり見守ってくれていたこと……それに気付いた時、心が動いたのを覚えている。

……どうしてあの時の俺は、マユ姉を毛嫌いしていたのか……はっきり言って特に理由なんてないんだ。ただ、突然やってきた女の子が姉になるということを素直に受け入れられなかっただけ。……今となっては考えられないことだよな。

それにしても、何でまた子供の頃の夢を見たんだろう、俺は。ここ最近で家族のことを考えた日は特になかったはずなんだが……。

……。

［？？？］：「スースー……」

［吹雪］：「――ひょっとして、これが原因かな？」

横で当たり前のようにスヤスヤ眠るちっこい女の子。とっても気持ちよさそうな寝息を立てている。全く……舌の根も乾かぬうちに同じ過ちを犯すとは。

……とりあえず、起こさないと始まらないな。

［吹雪］：「おい、起きろマユ姉」

［繭子］：「ん～？　……ん～」

［吹雪］：「おい、聞こえてるだろ？　起きろって」

［繭子］：「ん～……。……あれ？　ふーちゃん？　何か……大きくなったね」
［吹雪］：「俺は元々この大きさだよ」
［繭子］：「あれ？　そうだっけ……ああ、そうだったね」
［吹雪］：「そんなことより……何でまたここに潜り込んだんだよ」
［繭子］：「へ？　ここ？　……あら～」
［吹雪］：「あら～じゃねぇよ」
［繭子］：「あはは、どうりで暖かかったわけだね～おかげでぐっすり眠れたよ～」
［吹雪］：「そんな感想聞いてねぇよ。何か言うことがあるんじゃねぇのか？」
［繭子］：「あ～……ごめんなさい。無意識にやってしまいました」
［吹雪］：「ったく、何で間違えるんだよ自分の場所を」
［繭子］：「何でだろうね～」
［吹雪］：「他人事のように言うな。マユ姉の問題なんだぞ」
［繭子］：「……あれかな？　一昨日の暖かさを体が求めてたのかも～」
　一昨日、掃除用具入れに隠れていた時か。
［繭子］：「無意識にふーちゃんの温もりをほっしていたのかもしれないね～」
［吹雪］：「……無意識だからってしょうがないとはならん。次は絶対にこんなことがないようにするんだ。理由は……分かってるよな？」
［繭子］：「うん、分かった～」
［吹雪］：「ほら、バレないうちに早く自分の場所に――」
［聖奈美］：「何が、バレないようになの？」
［吹雪］：「――っ！？」
［繭子］：「あ、聖奈美ちゃん」
［吹雪］：「ち、違うんだ杠。これには訳があって――」
［聖奈美］：「繭子先生の着衣の乱れ……一つの布団……あなたの

今の発言……弁明の余地は……ないわよ！」
［吹雪］：「だっ！？　本当に違うんだって……マユ姉の寝相の悪さは生まれつきなんだよ！　それに、俺にそんなことする度胸はねぇよ！　だ、だから……その氷の球は閉まってくれ！」
［聖奈美］：「嘘おっしゃい！　男なんてみんなそんなこと考えてるものなのよ！　かわいければ姉だろうと手を出す生き物って決まってるわ！」
［吹雪］：「何だその曲解した理論は！」
［聖奈美］：「喰らいなさい！　生徒会の一撃！」
［繭子］：「ま、待ってよ聖奈美ちゃん～！　ふーちゃんの言ってることは本当なんだよ～」
［聖奈美］：「いいんですよ繭子先生。大久保に口止めされてるんでしょう？　任せてください、あたしがきっちり締めますのね」
［繭子］：「ち、違うんだってば～」
［聖奈美］：「喰らいなさい、アイスエッジ！」
［吹雪］：「うわあああああっ！」
――ああ、何て一日の始まり方だよ……。

繭子ルート・ローコ（5）

［場所：グランド］

［セフィル］：「はっはっは、それは災難だったな」
［吹雪］：「笑いごとじゃないですよ学園長」
後一歩回避が遅かったら、俺は氷の刃に貫かれていたかもしれない。というか、マジで手加減なしで撃ってきたからなあいつ。
［吹雪］：「死ぬかと思いましたよ」
［セフィル］：「まあまあ、納得してもらえたんだからいいじゃないか。それだけ吹雪が信頼されてるってことだろう」
［吹雪］：「……信頼されてるのならこんなことにもならないはずなんですけど」
［セフィル］：「だが、謝ってもらえたんだろう？」
［吹雪］：「それは、まあ……」
［セフィル］：「なら笑って許してあげるんだ。それが、男の美学だ」
［吹雪］：「学園長、男の美学が分かるんですか？」
［セフィル］：「いや、フィーリングで言ってみただけだ」
［吹雪］：「そ、そうですか……」
［セフィル］：「そういう日もあるってことだな」
［吹雪］：「早く、忘れようと思います」
［セフィル］：「――それにしても、繭子は本当に吹雪のことを大事に思っているんだろうな」
［吹雪］：「きゅ、急に何ですか？」
［セフィル］：「急でもないじゃないか。ことの発端は繭子が吹雪の横で寝てたことから始まったんだろう？　今時、姉弟で一緒の布団に寝ることなんてほとんどないぞ」
［吹雪］：「学園長、聞いてましたよね？　あれはマユ姉が寝ぼけ

て」
［セフィル］：「寝ぼけてでもさ。……いや、寝ぼけてないで布団に向かうのは……」
［吹雪］：「いやいやいや！　学園長、そっちに持っていくのはやめたほうが」
［セフィル］：「おお、そうだな。危なかった……」
俺もひやひやしてしまった……。
［セフィル］：「何を言いたいかっていうと、無意識に吹雪の所に行きたくなるほど、繭子の中の吹雪の存在は大きいんじゃないかってことだ。実際、繭子は吹雪がいなかったらとんでもないことになっていると思うしな」
［吹雪］：「とんでもない、こと？」
［セフィル］：「ストッパーがいなくなるから、いつでもフルスロットル状態だ」
［吹雪］：「そ、そういう意味ですか？」
［セフィル］：「まあ、それは冗談だが……的外れな見解ではないと思うぞ、自分で言うのもなんだが」
［吹雪］：「うーん」
［セフィル］：「今までたくさんの生徒たちを見てきたが、吹雪たちほど仲の良い姉弟は初めて見るかもしれないな」
［吹雪］：「そ、そうなんですか？」
［セフィル］：「ああ。何と表現したらいいのか……隠し事がないように見えるんだよ、吹雪たちからは。いくらきょうだいと言っても知られたくない秘密の一つや二つ持っててもおかしくないだろう？　でも、吹雪と繭子からはそういうのをあまり感じないんだよな。吹雪は分からないが、繭子は吹雪に全てを曝け出してる感じがするんだよ」
［吹雪］：「はあ……」
［セフィル］：「とどのつまり、姉弟仲良くしていくように」
［吹雪］：「……そうですね」

いつ、父さん母さんが帰ってくるのかも分からないしな。二人で助け合っていかないと。

［セフィル］：「よーし、ではそろそろペースを上げるとしようか」

そうだった、ランニング中だったんだ。

……。

……。

……。

繭子ルート・ローコ（6）

［場所：第三音楽室］

［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」

マユ姉の弾くピアノの音色に耳を傾ける。
練習の成果は徐々に表れ始め、以前と比べ、躓く箇所も大分少なくなってきた。確かにまだ学園長に補助魔法をかけてもらってはいるが、それでも指使いなどは確実に向上しているように見える。魔法をかけてもらえずとも、そこそこのレベルには達しているだろう。

［吹雪］：「その調子だ、マユ姉」
［繭子］：「うん」

そして曲はソロパートへ入っていく――。

……。

［繭子］：「どうだったかな？　ふーちゃん」
［吹雪］：「うん、良くなってきてると思うぞ」
［繭子］：「ホント？　よかった～」
［吹雪］：「そろそろ補助魔法がなくても弾けるようになってるんじゃないか？」
［繭子］：「どうかな～？　体に感覚が馴染んでるような気はしてるんだけど」
［吹雪］：「じゃあ、明日辺り試してみろよ。それによって今後の方向性が見えてくるし」
［繭子］：「うん、そうだね。ふーちゃんも参加してくれる？」
［吹雪］：「ああ、いいよ」
［繭子］：「ありがと～ふーちゃん、繭子感激～」
［吹雪］：「はいはい、分かった分かった」
［繭子］：「……何かリアクションが雑に見えるんだけど～」

［吹雪］：「気のせいだ。ほら、もう一回弾いてみようぜ」

［繭子］：「え、うん。分かったよ～、スーハー……」

……。

繭子ルート・ローコ（7）

――曲が終わると同時に、音楽室の時計が十時を示した。
［吹雪］：「ちょうど、時間になったな」
［繭子］：「ふー、今日も頑張ったよ～」
［吹雪］：「お疲れ。指は？　痛くないか？」
［繭子］：「うん、折れてないよ～」
［吹雪］：「……折れるまでやらせるほど俺はスパルタじゃない」
［繭子］：「ちょっとダジャレっぽかったね、今の台詞～」
［吹雪］：「別に意識して言ってないからな」
［繭子］：「んふふ。とりあえず、お付き合いございました、ふーちゃん」
［吹雪］：「おう、お疲れ」
［繭子］：「明日もよろしくね？」
［吹雪］：「ああ」
［繭子］：「……ふーちゃん、今からって時間ある？」
［吹雪］：「時間？　まあ、後は寝るだけだからな」
［繭子］：「じゃあさ、ちょっと一服付き合ってくれないかな～？　ちょっと、気分転換がしたい気分なんだ」
［吹雪］：「気分転換がしたい気分って……日本語おかしいんじゃないか？」
［繭子］：「へ？　……ああそっか、気分転換だけでいいんだ」　しっかりしろよ国語の先生。
［繭子］：「えへへ、いいかな？」
［吹雪］：「まあ、別にいいけど……シャワー浴びないといけないんじゃないのか？」
［繭子］：「ああ、大丈夫。それまでには帰ってくるから～」　浴びる順番でもあるんだろうか……別に聞きはしないけど。
［繭子］：「じゃあ、行く前に暖かい飲み物買っていかないと～食

堂寄って行こう～」

そう言うと、マユ姉は俺の腕をぎゅっと掴んだ。

［吹雪］：「おい、分かったから引っ張るなって」

［繭子］：「んふふ～♪」

［吹雪］：「……どこに行く気なんだ？」

繭子ルート・ローコ（8）

［場所：屋上］

［繭子］：「えへへ、到着～」
屋上のドアを開けると、その勢いで手すりの場所へと向かっていく。
［繭子］：「うーん、やっぱりここからの景色は綺麗だね～」
目線の先には島の街並みと大海原が見える。
［繭子］：「空には星が光ってるし、最高のロケーションだね♪」
［吹雪］：「確かに」
［繭子］：「ふーちゃんも一緒に見よう？　ほらほら」
そう言って自分の隣の手すりをポンポン叩く。
［吹雪］：「にしても、何で屋上なんだ？」
［繭子］：「特に理由はないよ～、何となく、来てみたかったのです」
［吹雪］：「ああ、そう」
［繭子］：「完全に思いつきだったけど、個人的には成功だったと思うよ～」
［吹雪］：「まあ、そうだな」
目の前の景色は、お世辞じゃなく綺麗だと思う。ただ……。
［吹雪］：「かなり、寒いけどな」
［繭子］：「それは、目をつぶる方向で行こう」
［吹雪］：「飲み物を買って行こうと言ったのは、これが理由だったのか」
［繭子］：「えへへ、用意周到でしょう～？」
［吹雪］：「いや、誰もが考えつくことだと思うが」
［繭子］：「ぶー、ふーちゃんが褒めてくれなかった」
［吹雪］：「もっと自分を磨くことだ。そしたら、考えなくもない

ぞ」
［繭子］：「はーい、精進しまーす」
マユ姉は蓋を開けて飲み物を飲む。ちなみに中身はホットレモンだ。
［繭子］：「はあ、暖まるな～」
俺も飲むか。蓋を開けてぐっと一口。
［吹雪］：「……それで？」
［繭子］：「へ？」
［吹雪］：「何か話があるんじゃないのか？　口には出してなかったが」
［繭子］：「さすがふーちゃん、よく分かったね～」
［吹雪］：「そりゃあ分かるさ」
［繭子］：「姉弟だから？」
［吹雪］：「……まあ、そんなところだ」
［繭子］：「んふふ～♪」
何故そんなに嬉しそうにするんだ？
［繭子］：「そこまで大それた内容じゃないから安心して。ちょっとした確認をしたいだけだから」
［吹雪］：「確認？」
［繭子］：「うん、ふーちゃんの体の確認」
［吹雪］：「……あの時のか？」
［繭子］：「うん、回復してるかな～って思って」
あの時というのは、合同練習を行った日のことだ。
俺は魔力の使い過ぎで倒れてしまった。きっとマユ姉はそれを心配していたんだろう。

繭子ルート・ローコ（9）

［吹雪］：「大丈夫だよ。フェルシア先生に治療してもらったから」
［繭子］：「本当？　無理はしてない？」
［吹雪］：「ああ、気を遣いながら練習に望んでる。学園長も付いてくれてるし」
［繭子］：「うん、だったらいいんだ。何かあってからじゃ遅いからね～」
［吹雪］：「悪かった、心配かけちまって」
［繭子］：「いいの、今こうして元気にいてくれてるから～」
――昔から、マユ姉は俺のことを心配してくれてたな。普段はあんな風に子供っぽいんだけど、俺の身に何かあると一番最初に駆けつけてくるのは決まってマユ姉だ。その度に、マユ姉は決まってこう言うんだ。
［繭子］：「ふーちゃんは、大事な弟だからね」
［吹雪］：「ああ、サンキュー」
どうしてマユ姉が、俺の身を案じてくれるのか。それは、俺の体質を知っているからだ。
未だに信じられないが、俺は他の人間と比べて膨大な魔力が体内に秘められているんだ。両親の血を色濃く受け継いだのが原因らしい。それ故、幼い頃はそれが制御できず、よく魔力が溢れることがあった。まあ、言ってしまえば暴走だ。それを、マユ姉は間近で見ている。だから、俺の体調に関して親身になってくれてるんだ。今俺たちの両親は世直しに出かけていて、いつ帰ってくるか分からない。二人で協力して生きていかなければならないこの状況も大きな理由かもしれない。
［繭子］：「それを聞いて安心したよ。聞きたかったのはこれだけだよ」
［吹雪］：「これだけでいいのか？」

［繭子］：「うん、これだけでいい。だから後は――お話に付き合ってくれると嬉しいな～」
［吹雪］：「結局それかよ……」
［繭子］：「だって、ふーちゃんとしゃべるの好きすぎるんだもん」
［吹雪］：「だもんって……」
［繭子］：「夜景と星を見ながら弟と語らう……何ともロマンチックではないか」
［吹雪］：「そこは弟じゃないとダメなのか？」
［繭子］：「ダメ、ゼッタイ！」
断言されてしまった。
［繭子］：「弟だからこそ、このシチュエーションは光るんだよ～」
［吹雪］：「際ですか……」
［繭子］：「うん。近状を報告し合いましょ～」
［吹雪］：「普段からしてると思うんだが……」
まあいい。呼ばれた時点でこうなることも何となく分かってたからな。満足するまで付き合うとしよう。

繭子ルート・ローコ（１０）

［場所：社会科室］

【繭子サイド】

［繭子］：「じゃあねふーちゃん、おやすみ～」

［吹雪］：「ああ。もう、同じ過ちは犯すなよ」

［繭子］：「ぜ、善処しまーす」

今日は頑張って抑えないと、次やったらふーちゃんに怒られちゃうと思うしね。

［繭子］：「はあ……」

今日は何事もなくてよかったよ……前回のようなことは、もう起きてほしくないな。

昔と比べて、大分魔力のセーブはできているみたいだけど、それでもまだ未熟な所があるのは確か。特に、ふーちゃんは疲労が溜まってくるとそれが顕著に出てくる。他人の心配をしてる暇はないんだろうけど、それでも本番にそれが起きないか心配だな。

もう、あんなことは起きてほしくないから。お父さん、お母さんとも約束したし。ワタシがふーちゃんを守っていかないといけない。

姉として、大切な弟を守ってあげなくちゃ。

そのためにも、ワタシは練習を頑張ろう。ワタシがピアノの腕前を上達させれば、ふーちゃんへの負担も少なくなるし。明日は補助魔法に頼らず弾くことになってるから、自分があの時と比べてどれくらい成長できたかが分かる。ふーちゃんも来てくれるし、下手な姿は見せたくない。良い所を見せれたらいいな～。

カーテンの向こうについ目がいく。

［繭子］：「ふーちゃん、ワタシ頑張るからね！」

［フェルシア］：「……意気込みはいいけど、ひとりごとが大きいわよマユ」

［繭子］：「はあっ！？　ふぇ、フェル……聞いてたの～？」
［フェルシア］：「聞いてたっていうか、どうしたって聞こえるでしょう？　隣なんだから」
［繭子］：「うわー、恥ずかしい～……」
［フェルシア］：「まあ、頑張りなさい。私も応援してるから」
［繭子］：「うん、フェルありがと～」
［フェルシア］：「あ、ちょっと……くっつくのはやめなさい」
【繭子サイド　終わり】

［吹雪］：「……マユ姉、俺じゃなきゃくっついていいってわけじゃないんだぞ？」
何の話をしているか分からないが、マユ姉がフェルシア先生に甘えてるのは確かだろう。
明日、謝っておかないとな。
……こうして今日の夜も更けていく。

繭子ルート・ムイ（1）

12月22日（水曜日）

［場所：教室］

［繭子］：「はい、それじゃあ前回の小テストを返しますね～。呼ばれたら取りに来てください」

［翔］：「頼む、神様……」

俺の席の近くで翔がお祈りしている。既に結果は出てるから拝んでも無駄なんだけどな。

［舞羽］：「必死なんだね、翔くん」

［吹雪］：「どうなるかね？」

［繭子］：「次、ふー……吹雪くん！」

どうやらギリギリ踏み止まったようだ。

［繭子］：「何とか抑制できたよ」

［吹雪］：「今後もそうしてくれ」

［繭子］：「はい、答案。もう一歩だから次こそは取れるように頑張ってね～」

［吹雪］：「ちっ、またか……」

書かれた得点は95点、またしてもケアレスミスをしていたようだ。

［舞羽］：「うわー、惜しかったね」

［吹雪］：「なかなか、満点はとれないな」

マユ姉の小テストは決して難しいわけではないんだが、かといってそこまで優しいわけじゃないからなかなか得点は三ケタに乗らない。

［舞羽］：「次は、とれるんじゃないかな？」

［吹雪］：「だといいんだけどな」

［繭子］：「次、翔くーん――んふふ～」
マユ姉が不気味な笑みを浮かべている。
［翔］：「うう、受け取りたくないぜ……」
恐る恐ると言った感じでマユ姉の元に向かう。
［繭子］：「はい、答案」
［翔］：「――勝負っ！　おおっ！　首の皮一枚つながったぞ～！」
どうやら赤点は免れたようだ。
［繭子］：「冬休みに補習はなくなったみたいだけど、気を抜いちゃダメだからね～？　まだ小テストはいっぱいやっていくから。勉強しておいたほうがいいよ～？　んっふっふ～」
［翔］：「ま、マユちゃん、今日は何だか黒いっすね……」
［繭子］：「うん、意識してやってみてるから……翔くんオンリーで」
［翔］：「何故にオレだけ限定!?」
［繭子］：「はい次、鈴木さーん」
［翔］：「しかも無視ですか！」
――きっとマユ姉なりの配慮なんじゃないだろうか？　マユ姉だって、補習に時間を取られたくないだろうし。
ちなみに仲間たちの得点は、舞羽９０点、祐喜９３点、日野８３点、翔４４点だった。本当に首の皮一枚でつながっていたようだ。
……。

繭子ルート・ムイ（2）

［繭子］：「あ、チャイムだね。それじゃあ今日はこれで終了。ワタシの授業は冬休み前にもう一回あるから今日やったところは復習しておいてね？　それじゃあお疲れ様でした～」

［吹雪］：「――ふう、終わった。……ん？」

マユ姉が俺に向かって手招きしている。こっちに来いってことだろうか？　「俺か？」と目線を送ると、マユ姉はこくこくとうなずいた。

呼ばれたから行くしかないよな。俺は教室の外に出てマユ姉の所に向かう。

［吹雪］：「どうしたんだ？」

［繭子］：「うん、ちょっとお願いしたいことが」

［吹雪］：「……フェルシア先生へのお届けか？」

［繭子］：「へ？　何で分かったの～？　ワタシまだ何も言ってないよね～？　ふーちゃんって、実はエスパー？」

［吹雪］：「いや、たまたま言ったのが的中しただけだが」

［繭子］：「……ふーちゃんの多才ぶりには驚くばかりだよ」

［吹雪］：「たった一度予想が当たっただけでそれは言い過ぎだろ、どう考えても」

［繭子］：「いや、ワタシには見えるよ。ふーちゃんの才能が――」

［吹雪］：「それより、何を届ければいいんだ？」

［繭子］：「そしてこのスルースキル……ふーちゃんには勝てる気がしないよ……」

［吹雪］：「スルーとは無意識にするものだから、俺は決してスルースキルが高いわけではない」

［繭子］：「じゃあ……今のは意識してスルーをしたってこと！？」

［吹雪］：「ああ、長くなりそうだったから」

［繭子］：「……マユちゃん大ショックですよ」

［吹雪］：「あんまり長引いても良いことないだろ？　まだ仕事中なんだからよ」
［繭子］：「う～、話したい時に話ができないって辛いね～」
［吹雪］：「その楽しみは夜にとっておけ。ほら、渡さなきゃいけないもの、早く出せよ」
［繭子］：「うん、これ」
一冊のノートを手渡される。
［繭子］：「できたら明日までによろしく～って言ってたって言ってたって言ってくれないかな～？」
［吹雪］：「言ってたの回数が多いぞ。真ん中の二回が余分だ」
［繭子］：「ちょっとおもしろいかな～って思って」
［吹雪］：「ややこしいだけだよ」
［繭子］：「とにかく、そう伝えてくれないかな？」
［吹雪］：「ああ、言っておくよ」
［繭子］：「ありがと～。あ、渡すのは放課後になってからでいいよ。フェル、放課後も残ってるって言ってたから」
［吹雪］：「そうか」
［繭子］：「じゃあ、ワタシは次の授業に行って参ります」
［吹雪］：「ああ、頑張れ」
［繭子］：「はーい、えへへ～」
笑顔が悪いとは言わないが、マユ姉が笑うタイミングは毎度掴めないな。

蘭子ルート・ムイ（3）

［場所：保健室］

――ドアの前に『アスタルテは在室です』のカードがぶら下げてある。どうやら探しに行く必要はないようだ。

コンコン、ノックをしてドアを開く。

［吹雪］：「失礼します」

［フェルシア］：「はーい、あら吹雪くん、いらっしゃーい」

［吹雪］：「お疲れ様です、フェルシア先生」

［フェルシア］：「ここで会うのはあの日以来ね。……今日は体調が優れないってわけではなさそうね」

［吹雪］：「ええ。疲労は若干溜まってますけど、至って健康です。実はマユ姉から届け物を預かったんで持ってきました」

［フェルシア］：「ああなるほどね、わざわざありがとう」

［吹雪］：「いえ、ありがとうを言うのはこっちのほうで。いつも見てもらってるみたいで」

［フェルシア］：「いいのよ、結構読むのも楽しいから。ちょっとした勉強にもなるし」

［吹雪］：「言伝なんですけど、『明日までにできれば』だそうです」

［フェルシア］：「今年最後の授業用なのね……了解」

［吹雪］：「問題とかありませんか？」

［フェルシア］：「大丈夫大丈夫、2時間あれば終わるから」

［吹雪］：「よろしくお願いします」

［フェルシア］：「はい、お願いされました。ところで……吹雪くんはこの後暇？」

［吹雪］：「え？　ええ、まあ」

［フェルシア］：「じゃあ、ちょっとお話し相手になってくれない

かしら？　さっきから暇で暇でしょうがないのよー」
［吹雪］：「そ、そうなんですか」
［フェルシア］：「業界用語で言うと、『まーひー』ってやつね」
言う必要があったんだろうか？　暇だって事実はすごく伝わるけど……。
［フェルシア］：「お茶でも出すから、ほら、座って」
［吹雪］：「ああ、はい」
言われるままに、俺はテーブル椅子に腰を下ろした。予定もないし、ちょっと休憩させてもらおうか。
［フェルシア］：「はい、どうぞ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［フェルシア］：「それから――はいこれ。お茶請けね、今は放課後だから食べても平気よね？」
［吹雪］：「はい、いただきます」
美味しそうな羊羹だが、いつもどこから出しているんだろう？
［フェルシア］：「今日は本当に暇だったのよー、朝から夕方まで誰も来なくて」
［吹雪］：「保健室の先生から見れば、誰も来ないに越したことはないんじゃないんですか？」
［フェルシア］：「そうなんだけど、仕事をしてないみたいでちょっとね……矛盾してるのは分かるんだけど」
［吹雪］：「何となく分かりますけど」
［フェルシア］：「吹雪くんが今日最初のお客様よ」
［吹雪］：「何か、正常ですいません」
［フェルシア］：「正常で結構よ。むしろ異常じゃなくても来てほしいくらいだわ、吹雪くんなら」
［吹雪］：「保健室に用もなく来るのはさすがにどうかと……」
［フェルシア］：「先生に会いに来た、とかでも構わないけど」
［吹雪］：「いやいや、それはできないですよ」
保健室は暇つぶしに使用していい場所ではない。

繭子ルート・ムイ（4）

［フェルシア］：「何だか寂しいわねー」
［吹雪］：「そ、そう言われましても……」
［フェルシア］：「ふふ、分かってるわよ。ちょっと言ってみただけだから」
［吹雪］：「ふう、よかった」
［フェルシア］：「――そうだ、体はあれから何ともない？」
［吹雪］：「はい、おかげさまで。何事もなく練習に打ち込めてます」
［フェルシア］：「そう、よかったわ。確かに今日の練習を見てても、特に問題はなさそうだったしね」
［吹雪］：「フェルシア先生のおかげです」
［フェルシア］：「いえいえ、これも仕事だから。マユにも同じことを聞かれたんじゃない？」
［吹雪］：「ええ、バッチリ確認されました」
［フェルシア］：「ふふ、やっぱりね」
［吹雪］：「その話を、二人でしたんですか？」
［フェルシア］：「ええ、その日はほぼずっとだったわね。『ふーちゃん大丈夫かなー』とか、『ふーちゃん心配だなー』とか、暇さえあれば吹雪くんのことを心配してたわね」
［吹雪］：「マジですか」
［フェルシア］：「ええ、マジよ」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「ふふ、大好きなんでしょうね。吹雪くんのことが？」
［吹雪］：「うーん……ちょっと複雑だな……」
［フェルシア］：「そう？　仲が悪いよりは全然良いと思うけど？」
［吹雪］：「それはそうなんですけど……俺にばかり目が言ってる

ことに個人的に引っ掛かりを覚えてるというか……心配してくれるのはありがたいんですけどね」

［フェルシア］：「ふむふむ」

［吹雪］：「家族を大事にって精神は俺も同意ですけど、もっと視野を広くするのも大事かなって思って」

［フェルシア］：「――確かに吹雪くんの言いたいことは分かるわ。でも、一つ間違いがあるわね」

［吹雪］：「え？　間違い？」

［フェルシア］：「そう、マユに関する認識」

［吹雪］：「認識？　どんな風に間違ってるんですか？」

［フェルシア］：「それは……ちょっと教えられないわね」

［吹雪］：「ええ？　そんな……」

［フェルシア］：「知りたい情報というのは、得てしてゲットしにくいものよ。大丈夫、そのうち気付くと思うから」

［吹雪］：「自分で見つけろってことですか……」

［フェルシア］：「そういうこと。吹雪くんならやれるはずよ」

［吹雪］：「際ですか……」

まあいい、先生の言うことを信じるとしよう。――ああ、そうだ。

［吹雪］：「フェルシア先生、昨日の夜はすいませんでした」

［フェルシア］：「え？　どうしたの？　藪から棒に……私吹雪くんに何かされたかしら？」

［吹雪］：「いや、俺じゃなくてマユ姉が……先生は昨日の夜、抱きつかれたでしょう？　マユ姉に」

［フェルシア］：「ああ、それね」

［吹雪］：「申し訳ないです、本当」

［フェルシア］：「いいのよ、もう慣れてるから。むしろあれくらい元気がないとマユは気持ち悪いし。というか、聞こえちゃってたのね、昨日の会話」

［吹雪］：「まあ、そこそこ音量が大きかったので」

［フェルシア］：「あちゃー。ということは、他のみんなにも聞か

れてたんでしょうね。ちょっと恥ずかしいわね」

［吹雪］：「すいません」

俺には謝ることしかできない。

繭子ルート・ムイ（5）

［フェルシア］：「家でもマユはああいう感じなの？」
［吹雪］：「と、言いますと？」
［フェルシア］：「人にくっつきたがること。まあ、家には吹雪くんしかいないからくっつけるのは吹雪くんだけなんだけど」
［吹雪］：「そうですね……家ではそこまでではないかもしれません。あんまりすると俺が怒るってことを体で覚えているんで……ただ、舞羽にはしょっちゅうしてたイメージはありますね。あいつ、優しいからそういうことしても嫌がらないんで」
［フェルシア］：「なるほどね」
［吹雪］：「絶対にするなっては言いませんけど、時と場所は選んでくれると嬉しいんですけどね」
［フェルシア］：「ふふふ、お父さんみたいね吹雪くんは」
［吹雪］：「あんまり嬉しくないですね。普通だったら俺が教えてもらう立場なんでしょうけど」
［フェルシア］：「でも、もう見慣れちゃってるから今のほうがしっくりくるわね、個人的には」
［吹雪］：「それは、そうですね。想像がつかないし、ちょっと気持ちが悪いです」
［フェルシア］：「マユにはあの性格が一番合ってるわ。見た目のイメージとピッタリマッチしてるし。……ちょっと若すぎるけどね」
［吹雪］：「そうですね」
［フェルシア］：「未だに顔パスで買わせてもらえないんでしょう？　お酒」
［吹雪］：「そうですね。必ず身分証明書を提示させられるようで……毎回レジの人の驚く顔を見てます」
［フェルシア］：「気持ちはすごい分かるけどね」
［吹雪］：「分からないわけがないです」

俺自身、信じられない部分があるから。
［フェルシア］：「人間って、不思議よね」
［吹雪］：「全くです」
話の結論が導かれた。
……。

繭子ルート・ムイ（6）

［フェルシア］：「――あら？　もうこんな時間か」
［吹雪］：「気付かなかったです」
時計の針は5時を過ぎていた。
［フェルシア］：「結局、今日は吹雪くん以外誰も来なかったわね」
［吹雪］：「しかも患者じゃないですからね、俺」
［フェルシア］：「みんな健康に過ごしたって書いておきましょう」
［吹雪］：「じゃあ、俺は先に戻ってます。お茶、ごちそうさまでした」
［フェルシア］：「ええ、ありがとね。話し相手になってくれて」
［吹雪］：「いえ、俺もすごく楽しかったです。機会があれば、また」
［フェルシア］：「機会はいつだってあるわよ？　吹雪くんが来てくれれば」
［吹雪］：「さっきも言いましたけど、それは……」
［フェルシア］：「ふふ、吹雪くんの反応はいつみてもおもしろいわね」
［吹雪］：「せ、先生……」
［フェルシア］：「ふふ、お使いご苦労様」
［吹雪］：「じゃあ、また後で。失礼します」
ガラガラ。
――ふう、結構長い時間居てしまったけど、仕事の方は大丈夫だったのかな？　大丈夫だからお茶に誘ってくれたんだと思うが……それと、認識が間違ってるって言ってたけど、どこが間違っていたんだろう？　いずれ分かるとは言ってたけど本当なんだろうか？
［吹雪］：「うーん……」
悩んでもしょうがないか、切り替えていこう。俺は社会科室に戻った。

繭子ルート・ムイ（7）

［場所：第三音楽室］

［セフィル］：「――じゃあ、今日は魔法を使わなくていいということか？」

［繭子］：「はい、どれだけ感覚を掴んだのか知りたいので」

［セフィル］：「確かに、そろそろ指が覚えてきてもおかしくない頃だな。よし、じゃあ弾いてみてくれ」

［繭子］：「はい、ふーちゃんよろしくね？」

［吹雪］：「ああ」

俺はマユ姉の隣に腰を下ろす。

［繭子］：「スーハー……」

今日の出来具合によって、まだ魔法が必要かどうかが分かる。俺的には、大分滑らかに弾けるようになってると思うんだが、果たしてどうだろう？

［繭子］：「じゃあ、弾きます」

マユ姉はそう言い、スタートを切った。

――出だしは順調、大事なのはこの後だ。

［繭子］：「……」

この後のマユ姉のソロパート。ここを上手に弾くことができれば、感覚を掴んだ証明となる。踏ん張ってほしいところだ。

［セフィル］：「そろそろだな」

［吹雪］：「そうですね」

頑張れ、マユ姉。

［繭子］：「……」

そして問題のソロパートへ。マユ姉が躓いてた所はオクターブ飛びのパート。正確な指使いが成功の鍵となるが……。

［繭子］：「……」

［セフィル］：「ふむ、最初の箇所は成功だな」
［吹雪］：「そうですね」
マユ姉の指使いは以前と比べてかなり滑らかに動いているように見える。今までの練習は間違ってはいなかったようだ。
［セフィル］：「まだこの後も続く。粘ってほしいところだ」
［吹雪］：「そうですね」
［繭子］：「……」
真剣な表情で、マユ姉はピアノを弾いていく。
……。

繭子ルート・ムイ（8）

［繭子］：「――ふう」
自然と俺たちは拍手をしていた。
［繭子］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「すごいじゃないか繭子。見違えたぞ」
［繭子］：「あはは、ホントですか？」
［セフィル］：「ああ、この分ならもう補助魔法は必要ないだろう」
あの後、鍵盤を同時に叩いてしまうなどのミスはあったものの、以前躓いていたパートはほとんどノーミスでクリアすることができていた。今までの練習の成果が見事に実ったようだ。指使いも格段に上昇していたし、全てにおいて一回り大きくなったようだ。
［繭子］：「よかった～」
［吹雪］：「頑張ったじゃないか、マユ姉」
［繭子］：「うわ～、ついにふーちゃんに褒められたよ～」
［吹雪］：「この調子で努力をしていくんだ。俺も一緒に頑張るからよ」
［繭子］：「うんっ！　へへっ」
［セフィル］：「今日の感覚を忘れないようにな。後、小さいミスもなくしていけるようにするんだ」
［繭子］：「はい、分かりました～」
［セフィル］：「吹雪、後は頼めるか？」
［吹雪］：「はい、付き合ってくれてありがとうございます」
［セフィル］：「何、これくらい学園長として当然のことさ。では、頑張ってくれ」
［繭子］：「ありがとうございました、学園長」
［セフィル］：「では、さらばだ」
学園長はその場から消えた。わざわざワープをしていったようだ。
［吹雪］：「かっこよく去りたかったのかな？」

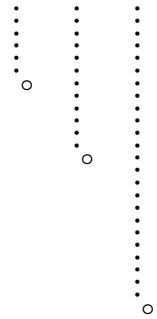
［繭子］：「十分学園長はかっこいいけどね～」
［吹雪］：「さて、どうする？　休憩いれるか？」
［繭子］：「ううん、もう一回弾いてみるよ。今のうちに体に刷り込んでおきたいから」
［吹雪］：「ああ、了解」
やる気になってくれてるのは、すごく良いことだ。
［繭子］：「じゃあ、弾きます――」
マユ姉はもう一度、ピアノを弾き始める。――二回目も、一回目と同じく上々の出来だった。ミスも少なくなって、着実に完成に近づいてきている。この調子を保っていけば、きっと本番も上手くいくだろう。
俺も、頑張って仕上げなければ。明日の練習、しっかり頑張ろう。

繭子ルート・パソドブレ（1）

12月23日（木曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「――というわけで、今日の午前中は気分転換として吹雪の練習に混ざってもらうことにする。いいか？　みんな」
［四人］：「はい」
［セフィル］：「あ、もちろん普段通りの練習だから」
［吹雪］：「はい、分かってます」
［セフィル］：「よし、では行こうか。四人はフェルの指示に従ってくれ。私たちはランニングをしているからな」
［繭子］：「ふーちゃん、ファイト～」
［舞羽］：「頑張って」
［吹雪］：「ああ、行ってくるよ」
［セフィル］：「よし、ではよーい、スタート！」
女性陣の前で情けない姿は見せられない。気合いで走り抜くぞ。
――事の発端は今日の朝だった。朝食と身支度を済ませ、いざ練習に行こうとした時に、学園長が社会科室にやってきて、午前中のメニューの変更を言い出した。おそらく、ピアノ漬けの女子たちへの配慮なんだろう。普段は個別の練習だけど、こうやってみんなで練習すると、自然と頑張ろうって気持ちになるはずだからな。それは俺も同じだ。観客がいるということが、男のプライドに火を付ける。意識せずとも、自然とやる気に溢れている。
［セフィル］：「うん、良い感じにやる気に満ち溢れているな。さあ、そろそろペースを上げていくぞ」
［吹雪］：「はい！」
――この状況だけを見たら、俺は完全にランナーだな。



繭子ルート・パソドブレ（2）

［吹雪］：「ぜー、ぜー……」
［繭子］：「ふ、ふーちゃんが死にそうに～……」
［セフィル］：「心配するな、いつも走り終わった時はこんな感じだから」
［繭子］：「そ、そうなんですか？」
［カホラ］：「よくやるわ、さすが男の子ね……」
そうだった……走り終わった後の姿が一番情けないんだった……。
［舞羽］：「はい吹雪くん、スポーツドリンク」
［吹雪］：「おう、サンキュー……」
［セフィル］：「さて、疲れているところ申し訳ないが、この後の練習について説明させてもらう。吹雪にホーリーカルムを唱えてもらうんだが、今回供給してもらう相手はフェルではなく、ここにいる四人にしてもらうことにする」
［吹雪］：「あ、そうなんですか？」
［セフィル］：「私たちが走っている間に、フェルに準備をしてもらったんだ。四人には適度に魔力を消費してもらってあるから、本番さながらの練習ができるだろう」
［吹雪］：「なるほど……」
フェルシア先生の周りに集まっていたのはそれが理由だったのか。何をしてるんだろうと思って見ていたが……。
［セフィル］：「四人の残り魔力ゲージは７０、これが１０回復した時点で次に移ってもらう。順番は吹雪に任せるから、自分の良い順番を決めてくれ。四人は吹雪の様子を見守ってくれていればいいから」
［聖奈美］：「目の前でホーリーカルムを見るのは初めてね」
［カホラ］：「そういえばそうね。前は場所が違ったから」
［繭子］：「どうなるのか、ちょっと楽しみだね～」

［吹雪］：「はあ……はあ……」
［セフィル］：「もうしばらく、元に戻るまでかかりそうだな」
［吹雪］：「す、すみません……」
［セフィル］：「気にするな。息を整えてからでないと、色々と危ないからな」
……。

繭子ルート・パソドブレ（3）

［吹雪］：「――回復しました」
［セフィル］：「そうか？」
［吹雪］：「はい、息も整ってます」
［セフィル］：「じゃあ、本練習を始めるとしよう。まず誰からする？」
［吹雪］：「じゃあ、舞羽からで」
［セフィル］：「分かった。舞羽、ご指名だ」
［舞羽］：「し、指名？」
［カホラ］：「お母さん？」
［セフィル］：「怒らないでくれ、ちょっとしたお茶目だ」
［カホラ］：「もう、威厳がないんだから」
［セフィル］：「はっは。舞羽、これを腕にはめてくれ」
［舞羽］：「はい、分かりました」
機械をはめ、俺と舞羽は向き合う。
［セフィル］：「よし、後は吹雪の良いタイミングで開始してくれ。詠唱をやめるタイミングも吹雪に任せる」
［吹雪］：「分かりました」
全ては俺の判断か……確かに本番に向けての練習には持ってこいだ。
［吹雪］：「よろしくな、舞羽」
［舞羽］：「うん、こちらこそ」
［繭子］：「ふーちゃん、頑張って～！」
――よし。俺は目をつぶり、精神を集中させ、詠唱に入る。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
詠唱と共に、自らの力を舞羽に与える。
すると、舞羽の体が光り始める。これが、供給ができている印だ。

イメージ通り、舞羽に上手く魔力が流れ込んでいるようだ。メーターも、上昇し始めている。

［吹雪］：「（よし、いいぞ。このままだ……）」

舞羽のメーターを時折確認しながら、状態をキープする。どれくらいのタイミングで詠唱を中止するのかも覚えないといけないな。

……。

繭子ルート・パソドブレ（4）

［吹雪］：「――よし」

俺はメーターを確認して詠唱を止めた。同時に舞羽の体から光が消える。

［吹雪］：「ふう」

［舞羽］：「お疲れ様、吹雪くん」

［吹雪］：「おう、どうだった？」

［舞羽］：「うん。良いものを見せてもらった感じかな？」

［吹雪］：「はは、大げさだな」

［セフィル］：「よし、舞羽。機械を外していいぞ」

［舞羽］：「あ、はーい」

［聖奈美］：「ふぅん、あれがホーリーカルムなのね……」

［カホラ］：「結構綺麗ね、ちょっと神秘的だったわ」

［繭子］：「……」

［フェルシア］：「どうしたの？　マユ」

［繭子］：「へ？　ううん、何でもないよ～」

［フェルシア］：「？」

［繭子］：「（大丈夫かな～？　ふーちゃん、ちょっと疲れてるような顔してたように見えたんだけど……無理してないかな？……）」

……。

……。

――よし、杠の供給も無事完了だ。

［吹雪］：「ふう……」

これで三人への供給が終了した、残すはマユ姉の供給のみだ。俺の残りゲージは53、いつも通りのペースで来ている。

［セフィル］：「いけるか？　吹雪」

［吹雪］：「はい、問題ありません」

［セフィル］：「次で最後だ。気を抜かないようにな」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「じゃあ繭子。機械を手にはめるんだ」
［繭子］：「……」
［セフィル］：「繭子？　どうしたんだ？」
［繭子］：「へ？　あ、はい、今すぐにはめます～」
［セフィル］：「……珍しいな、繭子がぼーっとしてるなんて」
［繭子］：「――よし。よろしくね、ふーちゃん」
［吹雪］：「おう。……ふう」
［繭子］：「大丈夫～？」
［吹雪］：「ああ、心配ない。いつも練習の最後はこんな感じなんだ。ここでの踏ん張りが俺を成長させるわけなんだし、ここで休むわけにはいかないさ」
［繭子］：「……無理は、しないでね？」
［吹雪］：「分かってるよ」
マユ姉もあんなに成長したんだし、俺も成長した姿を見せないとな。
後、もう一踏ん張りだ。俺は目を閉じ集中し、魔法の詠唱にかかる。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

繭子ルート・パソドブレ（5）

【繭子サイド】

［繭子］：「……無理はしないでね？」

［吹雪］：「分かってるよ」

……何だろう、以前のふーちゃんの倒れた姿を見たせいかな、すごく不安になってる自分がいる。普段の練習の時は何も起こってないから問題ないんだろうけど……どうしても落ち着かない。

ワタシの考えすぎで終わればいいんだけど……。

そんなことを考えているうちに、ふーちゃんは魔法の詠唱に入った。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

詠唱が開始されると、ワタシの体が白く光り出す。ふーちゃんが供給を始めた証拠だ。あれからも頑張って練習してたのがはっきり分かる淀みのない詠唱。ふーちゃんの素質の高さが伺える。開始してほんのわずかしか時間が過ぎてないのに、ワタシの魔力ゲージは早くも上昇し始めた。

［繭子］：「頑張って、ふーちゃん」

ワタシは祈るような気持ちでふーちゃんを見つめる。ふーちゃんは目をつぶって集中している。このまま無事に終わってほしい、ワタシは強く願う。

……。

ゲージは８６まで回復した。半分を過ぎ、ゴールまであとわずかだ。

［繭子］：「（頑張って、ふーちゃん）」

心の中でふーちゃんを応援している時……ワタシの目にある物が映った。ふーちゃんの体に帯びている白い光とは違う、黒い光。見間違いではない、あれは……あの時も見た！

［繭子］：「ふーちゃん！　詠唱を止めて！」
ワタシは大きな声で叫んでいた。
【繭子サイド　終わり】

繭子ルート・パソドブレ（6）

［吹雪］：「（よし、半分を切ったな……もうちょっとで……）」
その時だった――。
［吹雪］：「ん？　何だ？」
自分の意志とは違う、黒い光が体に帯びている。これは……そんな、どうしてだ？
［吹雪］：「（まだ、魔力に余裕があるのに……く、ヤバいぞ！）」
俺は体に力を込め、抑制を図る。しかし――。
［吹雪］：「（く……言うことが、効かない……）」
このままでは、あの時と同じに……それだけは、避けないと……！
［繭子］：「ふーちゃん、詠唱を止めて！」
［吹雪］：「ま、マユ姉？」
目を開けると、マユ姉が大きな声でそう叫んでいた。……そうだ、まずは詠唱を中断して魔力の消費をカットするんだ。
俺は口を閉じ、詠唱を止める。だが……。
［吹雪］：「う、ぐ……」
奥底から湧き上がってくるような感覚。間違いなく、これは……。
［吹雪］：「うぐ……」
また、飲み込まれちまうのか？
［繭子］：「ふーちゃん！　――エル・エルフュリス、風の精霊よ、我に力を。――エンブレイス！」
［吹雪］：「マユ、姉……」
マユ姉の詠唱した魔法が、俺を外側から包み込む。
［繭子］：「学園長！　フェル、今のうちにふーちゃんを！」
［セフィル］：「うむ、任せろ。フェル、行くぞ」
［フェルシア］：「了解です」
［二人］：「――ライフガード！」
［吹雪］：「く……ぐぅ……」

俺の体に二人の魔法が注がれ、俺の力を押さえつける。
［吹雪］：「止まれ……止まれっ！」
自分で自分に語り掛け、力を内に入れ戻す。
すると――しばらくして体から力が抜け、光が徐々に消えていった。どうやら、放出は免れたようだ。
［吹雪］：「う……」
同時に激しい眩暈が襲い掛かってきた。体もふら付き、まともに立っていられなくなる。く……このままじゃ、また……。
――必死に抗おうとしたが、俺の意識は徐々に薄れていく。
［繭子］：「ふーちゃん！　ふーちゃん！」
［吹雪］：「マユ、姉……」
マユ姉がこちらに走り寄ってきたのを最後に、俺の意識は途切れた。
……。
……。
……。

繭子ルート・パソドブレ（7）

“［吹雪］：「――嫌だ、そんなの嫌だ！　どうして？　どうして俺たちは一緒に行けないんだ。何でお母さんたちと離れないといけないんだよ！」

［母さん］：「あなたたちを危険には巻き込めないから。吹雪と繭子には安全に暮らしてほしいのよ」

［吹雪］：「じゃあ行かなきゃいいじゃないか！　どうしてわざわざ危険なところに向かって行くんだよ、お父さんもお母さんもおかしいよ！」

［父さん］：「確かに、吹雪の言うとおりかもしれない。だけど、お父さんたちは行かなければいけないんだ」

［吹雪］：「何で？　どうして？」

［母さん］：「この世界を守りたいからよ」

［吹雪］：「世界を？」

［母さん］：「何を言ってるのって思うかもしれないけど、母さんたちは本気なの。私たちの力だけで何とかなるとは思ってない。だけど、少しでも世界の平和を守るためにお母さんたちは自分の力を使いたいの。私たちが生まれ持ったこの力は、そのために使えるものだと思うから」

［吹雪］：「……分かんないよそんなの。何でなんだよ？　二人とも、俺のことが嫌いになったの？」

［父さん］：「そんなわけないじゃないか。私たちは吹雪と繭子が大好きだ」

［吹雪］：「じゃあ何で！？　何で俺たちを置いて行こうとするの？　仲間外れにするの？　いつ帰ってくるかも分からないのに……そんなの納得いかないよ！」

［繭子］：「……」

［母さん］：「さっきも言ったけど、二人を危険に巻き込むわけに

はいかないの」

［吹雪］：「危険だって構わない。父さんと母さんと離れるなんて、そんなの嫌だ！　せっかく楽しい暮らしを手に入れたのに、またすぐそれを失うなんて……俺には耐えられないよ！」

［父さん］：「吹雪、父さんたちだって二人とは別れたくないんだ。本当ならば連れて行きたい」

［吹雪］：「だったら――！」

［父さん］：「でもね……父さんたちは、二人が傷つくのを見るのが一番耐えられないんだ。これから行く場所にはいくつもの危険がある。そんなところに二人を連れて行くなんて……お父さんたちにはできない」

［吹雪］：「じゃあ……行かないでよ！　ここに……ずっと居て。そうすれば……」

［父さん］：「すまない吹雪……分かってほしい」

［吹雪］：「分かってなんて……そんなの……」

［繭子］：「ふーちゃん……」

［吹雪］：「マユ姉も何か言えよ。何で何も言おうとしないんだよ？」

［繭子］：「ワタシは、二人の気持ちが分かるから……」

［吹雪］：「二人の、気持ち？」

［繭子］：「うん、お母さんとお父さんが言ってることは全部本当だと思うよ。心から、ワタシたちを巻き込みたくない、守ってあげたいって思ってる。ワタシたちを守りたいから、二人はワタシたちに残ってほしいって思ってるんだよ」

［吹雪］：「守りたいから離れるのか？　言ってることがおかしいじゃないか！」

［繭子］：「でも、本当のことだよ。それに、いつになるかは分からなくても、二人は絶対に帰ってくる。ワタシはそれを信じてる。だから、ちょっとの間別行動をするだけだよ」

［吹雪］：「……」

［母さん］：「吹雪、お願い。お母さんたちを許してちょうだい」
［父さん］：「吹雪」
［吹雪］：「……嫌だ、嫌だ嫌だ！　俺は……二人と別れたくない！！」

繭子ルート・パソドブレ（8）

［母さん］：「――っ！？　これは……吹雪！」
［父さん］：「いかん！　繭子、離れるんだ！」
［吹雪］：「うわあああああああっ！」
［母さん］：「吹雪っ！　お父さん、制御魔法を！」
［父さん］：「分かった。――ライフガード！　……くっ、ダメだ。弾き返されている」
［母さん］：「そんな……――エンブレイス！」
［父さん］：「母さん、危ないぞ！」
［母さん］：「きゃあっ！？」
ズガーン！
［吹雪］：「父さん、母さん……行かないでくれ！」
［父さん］：「吹雪、自分をしっかり持つんだ。魔力に飲み込まれたらダメだ！」
［母さん］：「吹雪、元に戻って！」
［吹雪］：「嫌だ……二人と別れるなんて……嫌だ……」
ズガーン！
［父さん］：「吹雪……うわあっ！」
［母さん］：「きゃああっ！？」
［繭子］：「お父さん、お母さん！」
［父さん］：「ダメだ繭子、こっちに来たら危険だ。――マジックバリア！」
［母さん］：「――ライフガード！　……くっ、ダメだわ、弾き返されてしまう」
［父さん］：「このままでは、吹雪が……」
［吹雪］：「父さん……母さん……」
［父さん］：「いかん、バリアが壊される」
［母さん］：「父さん、離れて！」

ズガーン！

［父さん］：「く……ぐああっ！」

［母さん］：「父さん！　きゃああっ！？」

［繭子］：「お父さん、お母さん！　……ふーちゃん、もうやめてよ……」

［父さん］：「く……どうすればあれを押さえつけれるんだ……」

［母さん］：「私がやってみるわ……大事な我が子を、絶対に守ってみせる！」

［父さん］：「私の力も分け与えよう。頼むぞ、母さん」

［母さん］：「――我を包み込む暖かな光よ。その力を今、我に与えん。――エル・エルフィリード、マーキス。光の精霊よ、我に大いなる力を与えたまえ。――セイクリッドスパークル！」

［父さん］：「頼む、吹雪……元の姿に戻ってくれ……」

［吹雪］：「……」

［母さん］：「お願い、吹雪……お願い……」

［繭子］：「ふーちゃん……」

［吹雪］：「う、くぅ……」

［父さん］：「よし、力が和らいできている。今のうちに――ライフガード！」

［吹雪］：「く……父さん……母さん……」

［母さん］：「吹雪……」

［吹雪］：「うっ……」

バタリ。

［父さん］：「吹雪！」

［母さん］：「吹雪！」

［繭子］：「ふーちゃん！」

［吹雪］：「う、く……」

［繭子］：「ふーちゃん、しっかりして！　ふーちゃん！」

……。

“……。

繭子ルート・パソドブレ（9）

――忘れることのない、今までで一番の暴走を起こした日。俺は父さん、母さんと離れるのが耐えられなくて、自らの力に飲み込まれた。押さえつけてた感情が剥がれ、剥き出しとなった想いがあのような事故を起こしてしまった。

力を使い果たした俺は気を失って、その場にぶっ倒れた。目を覚ました時、そこには父さん、母さん、そしてマユ姉が立っていた。父さんは泣いていなかったけど、母さんとマユ姉は目を赤く腫れていた。その時、マユ姉が俺に飛びついてきたのは覚えている。マユ姉は良かった、良かったと何度もそう繰り返し、そして泣いた。

それを父さんと母さんは見守っていた。

その時、俺はようやく気付いたんだ。父さんと母さんは、俺のことを嫌いになったんじゃないって。目を覚ました時、俺は絶対に怒られるものだと思っていた。だけど、二人は怒ることなく、ただただ俺の無事を喜んでくれた。その姿に、俺は心を打たれた。

俺は何て自分勝手なことを言っていたんだろうと。二人の気持ちを全く察せず、自分の気持ちばかりをぶつけた自分がバカみたいだった。

その時、俺は思った。「二人は絶対に帰ってくる。ワタシはそれを信じてる」マユ姉のその言葉を、俺も信じてみようと。

繭子ルート・パソドブレ（１０）

［場所：保健室］

［繭子］：「……ちゃん……ふ……ちゃん……」

［吹雪］：「ん……んん……」

眩しさを感じながら、俺はゆっくりと目を開けた。視界がはっきりしてくると同時に、徐々に自分の身に起こったことを思い出してくる。

［吹雪］：「そうか俺……また暴走を起こしかけて……」

［繭子］：「ん、んん……」

［吹雪］：「ん？」

何故だか布団が重い。体をゆっくり起こすと――。

［繭子］：「スー……スー……」

布団に寄りかかって眠るマユ姉の姿があった。その顔には、涙の跡が残っていた。

［吹雪］：「ずっと、見ててくれたのか……」

あれから何時間過ぎたのかは分からない。だけど、記憶が飛ぶ前と同じ服を着ているということが、それを証明してくれた。

［繭子］：「ん、ふー……ちゃん……」

ごめんな、また心配をかけてしまった。

未然に防ぐことができたのは、マユ姉のおかげだ。あの時、マユ姉が真っ先に保護魔法をかけてくれなかったら、同じような惨劇を繰り返していたかもしれない。マユ姉の対応が早かったから、俺は暴走を起こさずに済んだんだ。

［繭子］：「んん……」

あの時も、こうしてベッドの横で見守っててくれてたんだろう。

でなければ、真っ先に俺に飛びついたりはできないはずだ。

［繭子］：「ん、んん……」

少しして、マユ姉はゆっくりと体を起こした。
［繭子］：「あれ？　ワタシ寝ちゃって……あ、ふーちゃん？」
［吹雪］：「マユ姉……」
［繭子］：「――っ！？」
［吹雪］：「うわっ！？」
俺の顔を見るや否や、マユ姉は俺の胸に飛び込んできた。幼い頃のあの日のように。
［吹雪］：「ま、マユ姉……」
［繭子］：「よかった……ホントによかったよー、なかなか目を覚ましてくれないから……ずっと心配してたんだよ」
［吹雪］：「……ごめん」
乾き始めていた涙の跡の上に、新しい涙が流れ落ちる。
［吹雪］：「また、心配かけちまった」
［繭子］：「いいんだよ、ふーちゃん。こうして無事でいてくれたんだから」
［吹雪］：「未然に防ぐことができたのは、マユ姉のおかげだよ」
［繭子］：「当然だよ、大切なふーちゃんのことなんだもん。姉として、大切な家族を守るのは当然だから」
［吹雪］：「……」

繭子ルート・パソドブレ（11）

泣きじゃくりながらも紡いでくれたその言葉に、俺の中で得も言われぬ感情が込みあがってきた。嬉しさ、喜び、愛情……きっとこれは、たくさんの幸福が混ざり合ったものだろう。それをこうしてまた教えてくれたのは、目の前にいるこの人だ。だから俺は――。

［吹雪］：「ありがとう、姉さん」

［繭子］：「へぇ!?　ふ、ふーちゃん、今……何て?」

［吹雪］：「姉さんって言ったんだよ」

［繭子］：「え、あの……な、何で急に?」

［吹雪］：「おかしいか?」

［繭子］：「だ、だってー……今までずっとマユ姉って呼んでたから……」

［吹雪］：「何だ、感謝の印というか……そんな感じ」

今までは、照れくささもあってそう呼ぶのを躊躇っていた。だけど、自分の犠牲を省みず、俺を守ろうとする一心で動いてくれたこの人は、俺の中でマユ姉と言う存在ではなく、姉さんという存在になった。

［吹雪］：「これからは、ずっとそう呼ぶからな」

［繭子］：「え、ええっ!?　ど、どうしよう……何か、色々パニック……」

［吹雪］：「心配するな、俺もちょっとパニックだ」

［繭子］：「え、ええ?」

マユ姉じゃなく、姉さんと呼ぶことは決定した。だけど、昔からずっとマユ姉と呼んできたから、魚の小骨が引っ掛かったような感覚が伴っている。徐々に慣れていくとは思うが、しばらくはずっと付き纏うだろう。

［吹雪］：「直に慣れてくる、お互いにな」

［繭子］：「そ、そうかな～……呼ばれてるの気付かなくなりそう

だよ」

［吹雪］：「気付け、声で分かるだろ」

［繭子］：「声は分かるけど、自分の名前が入らなくなってるから、どの姉さんかって分からなくなりそうで」

［吹雪］：「俺の姉さんはあなたしかいないじゃないか」

［繭子］：「うー……何だろう、すごく恥ずかしいよ～」

［吹雪］：「大丈夫だ、俺も恥ずかしい」

［繭子］：「あはは、じゃあお相子だね～」

［吹雪］：「そうなるな」

［繭子］：「あはは……本当によかった。ふーちゃんが起きてくれて」

［吹雪］：「……本当に、ごめん」

今の俺には、謝ることしかできない。

［繭子］：「別に、責めてるわけじゃないからねー？　ただ……ほっとしたというか……全身から力が抜けたっていうか」

［吹雪］：「俺は、この通り元気だから、安心してくれ」

［繭子］：「うん！　……ちゃんと、ふーちゃんの温もりが伝わってくるから」

［吹雪］：「……」

［繭子］：「今日は、避けないんだね？」

［吹雪］：「ま、まあな」

［繭子］：「えへへ」

俺の一言で、姉さんは色々と理解したようだ。見せた笑顔がその証拠だろう。

［繭子］：「もうちょっと、このままでいさせてね」

［吹雪］：「ああ」

俺は気付いていた。抱きついてきた姉さんの体が小刻みに震えていたこと。起こりかけた最悪の事態に、とてつもない不安を抱えていたんだろう。その不安を与えたのは、他の誰でもない俺だ。だから俺は、それを取り除いてやらなければならない。俺の胸でそれが

治るのなら、俺はいくらだって貸す。
［繭子］：「ん……ふーちゃん……」
［吹雪］：「ありがとな、姉さん」
［繭子］：「あれ？　さっき聞いたよ～？」
［吹雪］：「もう一度、言っておきたかった」
［繭子］：「んふふ、どういたしまして～」
いつもの感じでそう返す姉さん。
普段は何とも思わないけれど、今日はそれが心地良かった。
［吹雪］：「そういえば、他のみんなはどうしたんだ？　……ああ、寝てたから分からないか」
［繭子］：「起きてた時は、みんな居たはずなんだけど～」
［吹雪］：「……全員居たのか」
［繭子］：「そりゃあそうだよ～、心配してたのはワタシだけじゃないんだから」
［吹雪］：「……迷惑をかけたな」
［繭子］：「みんなそんな風には思ってないよ～。仲間なんだから、助け合って当然だよ？」
仲間か、……そうだな。
［吹雪］：「帰ってきたら、ありがとうって言わないとな」
［繭子］：「うん、それがいいよ～。――それにしても、何で誰もいないんだろうね？」
［吹雪］：「さあな」
……。

繭子ルート・パソドブレ（12）

［セフィル］：「うう……泣けてくる話だな」
［フェルシア］：「姉弟って、やっぱり素晴らしいですね」
［カホラ］：「にしても、姉さんかー……吹雪がついに照れを捨てたわね」
［聖奈美］：「照れてたから、あんな呼び方だったんですか？」
［カホラ］：「ええ。男の子っていうのは、家族にも照れを見せるものなのよ」
［聖奈美］：「そ、そうなんですか……」
［舞羽］：「……」
［フェルシア］：「どうしたの？　舞羽ちゃん」
［舞羽］：「あ、いえ……何でもないです。……とにかく、吹雪くんが無事で何よりでした」
［セフィル］：「そうだな……本当に、よかったよ」
［フェルシア］：「――それで、いつになったら入れるんですかね？　私たち」
［セフィル］：「ふむ、あの空気を壊すのは聊か申し訳ないからな……もう少し待つとしよう」
［カホラ］：「そうね」
［フェルシア］：「（吹雪くん、私の言った言葉の意味が分かったかしらね？　――マユが吹雪くんを心配するのは、弟だからって理由だけじゃないってこと）」
……。
……。
……。

繭子ルート・パソドブレ（13）

［場所：学園長室］

［吹雪］：「学園長、吹雪です」
［セフィル］：「おお、入っていいぞ」
ガラガラ。
［吹雪］：「失礼します」
［セフィル］：「うむ、よく来た愛弟子よ」
［吹雪］：「ま、愛弟子になったんですか？　俺」
［セフィル］：「いや、一回言ってみたかったんだよこの台詞」
［吹雪］：「はは、そうですか……」
［セフィル］：「心配するな、実際に私は吹雪を愛弟子と思っているよ」
［吹雪］：「それはありがとうございます」
［セフィル］：「さ、どこでもいい。腰を下ろしてくれ」
［吹雪］：「はい」
俺は失礼して目の前のソファーに腰を下ろす。その真向かいに学園長は腰を下ろした。
［セフィル］：「どうだ？　少しは落ち着いたか？」
［吹雪］：「はい。……心配をかけて、すみませんでした」
［セフィル］：「なに、気にしてはいけないぞ？　吹雪の意志でしたわけではないんだから。君が無事でいてくれただけで十分さ」
［吹雪］：「……ありがとうございます」
そう言ってくれると、少し心が軽くなる。
［セフィル］：「来る前から分かっていたと思うが、今日はそのことを話そうと思っていたんだ。少し時間をもらってもいいか？」
［吹雪］：「もちろんです。俺も、そのことについて相談したかったですから」

［セフィル］：「うむ。私なりに、吹雪のあれに関して考えてみたんだ。ちょっと聞いてもらえるか？」
［吹雪］：「はい、お願いします」
［セフィル］：「では――と、その前にお茶を出すとしよう。座っていてくれ、すっかり忘れていたよ」
［吹雪］：「あ、別にお構いなく」
［セフィル］：「いやいや、お客様にお茶を出すのは当然だ。出さないと、カホラに叱られるからな」
［吹雪］：「し、叱られるって……」
学園長とカホラ先輩の力関係ってどうなっているんだろう……。
……。

［セフィル］：「待たせたな、紅茶でよかったか？」
［吹雪］：「はい、お構いなく」
［セフィル］：「アーンド、お菓子。沢渡家お気に入りの品だ」
以前頂いたビスケットがお皿に添えられる。
［セフィル］：「さあ、遠慮せず飲むといい」
［吹雪］：「あ、はい。いただきます」
軽く冷まして口に運んだ。
［吹雪］：「おいしいです、学園長」
［セフィル］：「そうか、うん。そう言ってもらえて嬉しいぞ」
そう言いながら自分も一口。
［セフィル］：「――さて、一息ついたところで、さっき言った話をしようか」
［吹雪］：「はい、お願いします」
［セフィル］：「そうだな――じゃあまずは、どうして魔力の暴走が起きたかについて話そうか」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「吹雪は、どうして魔力の暴走というのが起こるかは知っているか？」
［吹雪］：「はい、大まかになら知ってます」
魔力の暴走が起こる原因として多いのは、自分の持つ魔力の制御ができなくなることだ。俺が度々起こしてしまう理由は、おそらくこれに該当するだろう。
その他にも、極度のストレス、疲労、珍しい場合にはくしゃみなどの拍子に魔力が意志と関係なく溢れ出す時もあるらしい。
［セフィル］：「それなら話は早い。おそらく、今回吹雪が暴走を起こしかけた原因は以前と同じく、ちょっとした拍子に魔力が溢れたのが原因なんだと思うんだが……今回は、前回と異なる部分があ

るんだよ。分かるか？」
［吹雪］：「はい。魔力の残量の違いですよね？」
［セフィル］：「その通り。魔力の制御が効かなくなる原因の多くは、魔力の消費によって齎される疲労によって、制御する力が脆弱になることがほとんどだ。だが、今回の吹雪に関しては、魔力ゲージが半分以上残っていたんだ。力を半分もセーブしていた状態で暴走が起こったとすると、今回の暴走は疲労が主な原因ではないと、私は思うんだよ」
［吹雪］：「俺も、そう思ってました。いつも、自分の魔力に飲み込まれそうになる時とは違う感覚がありました」
［セフィル］：「そのことについて、私も考えてな。一つ、これじゃないかって思う原因を見つけたんだ」
［吹雪］：「それは、何ですか？」
［セフィル］：「うむ。吹雪はひょっとすると、精神のどこかで、自分の魔力を恐れているのかもしれない」
［吹雪］：「自分の魔力を、恐れる？」
［セフィル］：「魔力の暴走が起こる原因にも取り上げられることがある。自らの力に恐怖するあまり、無意識に体が制御を拒むようになることがあるらしいんだ。ひょっとすると吹雪は、その嫌いがあるかもしれない」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「自分で、そう感じたりしたことはないか？」
［吹雪］：「そうですね……幼少の頃には、何度かありました」
［セフィル］：「ふむ。幼少の頃というと……聞いても大丈夫か？」
［吹雪］：「はい。俺、幼少の頃、両親と別れることになった時、物凄い暴走を起こしたことがあったんです。両親と別れることを嫌がった時に、俺は自分の魔力に完全に飲み込まれてしまって……その時に……」
［セフィル］：「自分の力に恐怖を覚えたと」
［吹雪］：「だけど、その反面で体質を治そうって想いもありまし

た。個人的には、そっちの想いのほうが強かったと思います。両親がいなくなった後も、俺は両親に強い憧れを持っていて、魔法の練習も結構してましたから」

［セフィル］：「ふむ、なるほど。それが、学校の試験の成績に活かされているわけだな」

［吹雪］：「それは、分からないですけど……それが成果なんだとしたら嬉しい限りではあります」

［セフィル］：「うん。うーむ……難しいところだな。何かの拍子にその時の感情が復活してしまったんだろうか？　何か思い当たる節はあるか？」

［吹雪］：「……ひょっとしたら、合宿の初日のことがまだ頭から離れていないのかもしれません」

［セフィル］：「あの時のことか」

合宿の初日、俺は今回と同じように自分の魔力に飲み込まれかけた。学園長とフェルシア先生のおかげで未然に防いでもらったが、力添えがなかったら、やはり昔の惨劇を繰り返していたのかもしれない。

［吹雪］：「消去できたと思ってた感情が、実はずっと心に残っていて、魔力に飲み込まれかけた感覚によって肥大化したのかもしれません」

いくら治そうという想いが恐怖を上回っていたとしても、ちょっとしたことで思い出すことは多々あるものだ。

繭子ルート・パソドブレ（15）

［セフィル］：「確かに、その可能性はあるかもしれないな。自分では思っていなくても、勝手にそうなるのが無意識だ」
［吹雪］：「治す方法って、あるんでしょうか？」
［セフィル］：「暴走というのは、基本的に個人が成長することで自然に収まっていくものなんだ。暴走が幼少の頃に起こると言われるのはそれだ。自分の魔力を抑えるだけの力が足りてないからな。まあ、吹雪は例外なんだが」
［吹雪］：「そうでしょうか？　俺がただ未熟なだけで……」
［セフィル］：「いや、そんなことはない。未熟だったらマジックコロシアムで優勝などできないぞ」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「吹雪の両親はとても優秀な魔法使いだったんだろう？　吹雪はまだ若い。おそらく両親から受け継いだ力をフルに受け入れられるまでの時間が他の者より長いんだよ。今はまだその途中なんだと私は思う」
［吹雪］：「じゃあ、解決するには時間が必要なんですか？」
［セフィル］：「単純に考えればそうだな」
［吹雪］：「……他に、完全に治せるってわけじゃなくても、耐性をつけられるような方法ってないでしょうか？」
　すでに本番の日にちまで１０日を切っている。今のままでは、本番の時に自分の力に負けて暴走を起こしかねない。
［セフィル］：「うーん、そうだな……。今聞くことではないかもしれないが、吹雪は魔力の暴走が決して悪いことだけではないことを知っているか？」
［吹雪］：「え？　そうなんですか？」
［セフィル］：「うむ、使いようによっては能力を上げる力になる時もあるんだ」

［吹雪］：「マジですか？」
［セフィル］：「うむ、マジだ。もちろん、無意識ではなく、意識的に起こす暴走だがな。まあ、私は使いこなせないんだが……」
［吹雪］：「どうして、暴走が能力を上げる力になるんですか？」
［セフィル］：「暴走というのは、さっきも言った通り自分の力を制御できなくて起こるものだ。しかし、暴走が起こらないということは、全ての力を出し切ってないことになる。制御する力が残っているわけだからな。だから、意識的に暴走を起こすことで、自分が秘めている力を最大限に発揮することが可能になるわけだ。代償として、使い切った後はとんでもない疲労が体に溜まるが。だが、自分の力を全てぶつけることができるという点では、悪くないんだ。まあ、それができるのは高度な魔法使い限定なんだと思うがな」
［吹雪］：「逆転の発想ですね……」
［セフィル］：「ああ。だからひょっとすると、吹雪が暴走を起こしかけているのは、暴走を上手く使いこなす力を習得しようとしているからかもしれない。吹雪の両親は優れた魔法使いだったわけだからな」
［吹雪］：「そ、そんなことあるんでしょうか……」
［セフィル］：「無きにしも非ずじゃないか？」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「だがまあ、吹雪の言ったことには私は賛成だ。儀式の最中に暴走が起こることは避けたいからな。そのための耐性は付けたほうがいいだろう」
［吹雪］：「方法、あるんですか？」
［セフィル］：「あることはある。だが、完全に消せるという保障があわけではないが……それでもいいか？」
［吹雪］：「それでもいいです。やれることは、全てやらせてほしいです」
［セフィル］：「そうか、分かった。なら、明日からその練習も加えていくとしよう。１週間あれば、効果は表れるはずだ」

［吹雪］：「ありがとうございます、学園長」
［セフィル］：「なに、かわいい生徒のためだ。これくらい当然さ」
――頑張って、耐性をつけよう。
それが、今の俺にできる精一杯だ。
［吹雪］：「（――やってやるぞ、絶対に！）」
俺は強く心に誓った。

繭子ルート・パソドブレ（16）

［場所：社会科室］

【繭子サイド】

［繭子］：「――あれ？　ふーちゃん？」

ふーちゃんは一人社会科室を出て行った。

［繭子］：「どこに行くんだろう……」

［フェルシア］：「どうしたの？　マユ？」

［繭子］：「あ、フェル。ふーちゃんが社会科室を出て行ったんだけど……何でか知ってる？」

［フェルシア］：「ああ、吹雪くんはこれから学園長と話があるのよ。ほら、今日のことについての話よ」

［繭子］：「あ、そうなんだ。確かに、今日は練習できないだろうしね」

［フェルシア］：「ええ。何が原因で起きたのかを検証して、今後に活かしていくみたいよ」

［繭子］：「ふーちゃん……あきらめてないんだね」

［フェルシア］：「あら、そんな心配してたの？　マユは」

［繭子］：「べ、別にそんなことないって思ってはいたけど、そういう可能性もなくはないって思ってただけで……」

［フェルシア］：「ふふ、『姉さん』らしい心配ね」

［繭子］：「なぁ～、フェルまで同じことを～」

［フェルシア］：「だって、本当のことじゃないの。吹雪くんもそう呼ぶようになってたし」

［繭子］：「うう……まだ恥ずかしさが抜け切れてないのに～」

［フェルシア］：「でも、それだけ姉らしい姿を見せたってことじゃない。吹雪くんがそう呼ぶようになったのも、それが大きいんだと思うけど？」

［繭子］：「そ、そうなのかな～？」
確かに、守りたいって想いで動いたけど……。
［繭子］：「それだけ、だったのかな？」
個人的に、ちょっとおかしいことが身に起こっていた。それは、さっき――ふーちゃんの体に飛びついた時。
あの時、ワタシの心臓はドキドキしていた。ふーちゃんが無事かどうか心配だったからそうなっていたんだと思っていたけど、それとはまた違う感覚が自分の中で生まれているみたいな……そんな感じだった。ふーちゃんは、ワタシの大切な弟だ。
だけど、あの時の高鳴りは……。
［繭子］：「ワタシ、ふーちゃんのこと……」
［フェルシア］：「マユ？　どうしたの？」
［繭子］：「にゃああっ！？」
［フェルシア］：「きゃあっ！？　び、びっくりさせないでよ」
［繭子］：「あ、ごめん……」
そうだ、フェルと会話中だったんだ。

繭子ルート・パソドブレ（17）

［フェルシア］：「急に黙ったかと思えば急に猫みたいな声上げだして……」

［繭子］：「ご、ごめん、ちょっとボーっとしてたよ～」

［フェルシア］：「まあ、いいけど。――あ、そろそろ夜の練習の時間じゃないの？」

［繭子］：「あ、そうだった」

［フェルシア］：「結構上達してるんだってね？　学園長から聞いたわよ？」

［繭子］：「えへへ～、あきらめずに努力したからね～。それに、ふーちゃんにも手伝ってもらったし」

［フェルシア］：「そう。そのままの調子をキープできるようにね」

［繭子］：「うん、もちろん！　じゃあ、行ってきまーす」

――明日、もう一度試してみようかな？　そうすれば、きっと分かると思うしね。

今日も、目一杯練習を頑張ろう。

【繭子サイド　終わり】

繭子ルート・アモローソ（1）

12月24日（金曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「――今日はランニングはしないぞ、吹雪」
［吹雪］：「え？　そうなんですか！？」
［セフィル］：「何だ？　そんなに驚くことか？」
［吹雪］：「いや、その……」
最早俺のメニューは、ランニング無くして語れるものではないとばかり思っていたから……。
［セフィル］：「ランニングをずっとやり続けてきたのは、吹雪のスタミナを上昇させるためだ。ほぼ毎日のように続けてきたから、初めの頃とは比べ物にならないくらい成長している。一日くらい休んでも問題はないだろう。その代わりに、昨日言っていた魔力の暴走の耐性をつける特訓を取り入れる」
［吹雪］：「あ、はい。分かりました」
［セフィル］：「まあ、吹雪がどうしても走りたいというのなら走ってもいいが」
［吹雪］：「い、いえいえ！　そんなことはないです。特訓を優先させていただきます」
［セフィル］：「そうか、気合いが入っているようで何よりだ」
［吹雪］：「もちろんです」
完璧とは言えずとも、自分の難癖を克服したい気持ちは強いからな。
［セフィル］：「とりあえず、今日の吹雪の魔力ゲージをチェックさせてもらおう。目をつぶってくれ」
［吹雪］：「はい、分かりました」

俺はその場で目をつぶる。……。
［セフィル］：「――よし、目を開けていいぞ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「うむ、７５といったところか……まだ暴走した分の疲れが残っているようだな」
［吹雪］：「特訓に支障が出てしまいますか？」
［セフィル］：「いや、差し支えないよ。満タンじゃなくてはいけない理由はないからな」
［吹雪］：「そうですか」
［セフィル］：「少々キツいメニューになると思うが、我慢してくれ」
［吹雪］：「はい、もちろんです！」
［セフィル］：「うむ、良い返事だ。じゃあ今から、特訓について説明をするから聞いていてくれ」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「まず、吹雪にはいつも通りホーリーカルムを唱えてもらう。今日の対象は私だ」
［吹雪］：「学園長にですか？」
［セフィル］：「フェルじゃないと嫌だったか？」
［吹雪］：「いえいえ、学園長がいいです」
［セフィル］：「……指名されてしまったな」
［吹雪］：「え、ええっ！？」
［セフィル］：「はっは、冗談だ。そんな本気にしなくていいぞ」
［吹雪］：「あ、はい……」
［セフィル］：「それで、ホーリーカルムを唱えてもらうんだが。今日は吹雪には限界までホーリーカルムを唱え続けてもらおうと思っている」
［吹雪］：「限界か……」
［セフィル］：「つまり、ゲージが０になるまで続けてもらう。ここまではオッケーか？」

［吹雪］：「はい、オッケーです」
［セフィル］：「どうしてゲージが０になるまで唱えてもらうかというと、今まで吹雪の練習を見てきて分かったのは、吹雪は魔力の残りが３０を切る頃から、魔力の制御が不安定になることが多いということだ。以前吹雪が魔力の暴走を起こしかけた時も、残り魔力は３０近辺だった。だから、魔力の暴走を起こすとすれば、ゲージが３０近辺か、３０を下回った時に一番可能性が上がるわけだ。つまり、ゲージが３０を下回ったところで踏ん張り切ることができれば、魔力の暴走の耐性を付けることができるわけだ。前回はゲージが余っていたにもかかわらず暴走が起こりかけたが、今回はあえてそれを度外視したメニューにしてみた。頻度が高いほうを練習したほうがいいからな」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「もちろん、ただ唱えてもらうだけではない。これを身に付けて唱えてもらう」
そう言って、学園長は俺にブレスレットのようなものを手渡した。

繭子ルート・アモローソ（2）

［吹雪］：「防具の一種ですか？」
［セフィル］：「特に名前はないんだが『ホーリーブレスレット』とでも命名しておこうか。これには、魔力の暴走を抑えつける作用があるんだ。付けているだけで効果がある」
［吹雪］：「これは、学園長が作ったんですか？」
［セフィル］：「いや、この学園に元々あったものだ。大きな事故を未然に防ぐためにいくつか用意してあってな。有効活用させてもらうことにしたんだ。まあ、そのまま使うのも勿体ないから少々手を加えさせてもらったが……普通に使うよりも、効果はアップしていると思われるぞ」
［吹雪］：「ありがたいです」
そうだよな、魔力の暴走を起こす生徒は、俺だけって限らないだろうからな。ちゃんと対処法は用意してあるわけか。
［セフィル］：「それを付けていれば、仮に暴走しかけたとしても抑え込む力が働くし、光で装備している者の危険を教えてくれるから、多少安心して特訓ができるだろう」
［吹雪］：「はい、そうですね」
［セフィル］：「ただ注意してくれ。吹雪の魔力の暴走は、一般の生徒のものと違う可能性があるからな」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「――といった感じで、魔力が底を尽きる程度までホーリーカルムを唱えてもらうんだが……そこで終わりではない。むしろ、そこからが本番と言っても可能ではないな」
［吹雪］：「どうするんですか？」
［セフィル］：「うむ。吹雪からもらった魔力を、今度は私が吹雪に送り返すんだ」
［吹雪］：「え？　それってつまり……学園長もホーリーカルムを

唱えるってことですか？」
［セフィル］：「ああ、そういうことだ」
［吹雪］：「……学園長も、ホーリーカルムを唱えることができるんですね？」
［セフィル］：「黙っていたわけではないが、唱えることはできるぞ。仮にもハーモニクサーの指導をしている立場だ、習得していないほうがおかしいだろう？」
　確かに……。
［セフィル］：「とにかく、吹雪の魔力がなくなった時点で、今度は私が吹雪に魔力を送り返す。ただし、ゲージが３０になった時点で止める。それが終わり次第、吹雪にはまたホーリーカルムを再開してもらう。何故３０になった時点でやめるかは、言わなくても分かっているな？」
［吹雪］：「はい。耐性をつけるための特訓ですよね？」
［セフィル］：「その通り。これは私の勝手な見解だが、暴走を起こさないポイントも基本的には感覚が大事だと思っている。繰り返し繰り返し行うことで、体は自然とそれを学び、自分の力にしてくれると思うんだ」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「特訓の題名は……『ホーリーカルム合戦』でどうだ？」
［吹雪］：「……何だか、すごいシュールですね」
［セフィル］：「超人っぽい雰囲気は出ているだろう？」
［吹雪］：「それは、まあ……」
　唱えるだけでも結構な鍛錬が必要だからな。

繭子ルート・アモローソ（3）

［セフィル］：「では、それで決定しよう。――聞いただけでも分かったと思うが、この特訓、かなりの疲労が伴うのは必至だ。特にゲージが３０を下回った状態が長時間続くから、体への負担が半端じゃない。だが、それを乗り越えることができれば、魔力の暴走を抑制する力は確実に身に付いてくるはずだ。その練習に耐えるということは、自分の力に打ち勝つということになるからな。……やれるか？　吹雪」

［吹雪］：「もちろんです、是非やらせてください！」

［セフィル］：「うん、良い返事だ。――では、１０分後に特訓を開始しよう。それまでに、準備を済ませておくんだぞ」

［吹雪］：「はい」

――絶対に、暴走を抑える力を身に付けよう。

自分のために、そして……俺を見守り続けている姉さんのために。

……。

繭子ルート・アモローソ（4）

［吹雪］：「く……はぁ、はぁ……」

魔力ゲージは、ついに３０を下回った。ここからが正念場だ。

［セフィル］：「よし、そのまま集中するんだ」

学園長の声を耳に聞きながら、詠唱を続けていく。やはりブレスレットの作用が働いているんだろう。以前と比べて自分の力をコントロールしやすい気がする。このまま、我慢を続けるんだ。

［吹雪］：「はぁ、はぁ……」

体には、徐々に疲労が溜まっていく。だけど、それに反比例して、自分に必要な力を付けるためと考えると、自然とやる気は増していった。

ゲージは少しずつ少なくなり、学園長に魔力が流れていく。

――ついにゲージは２０を下回った。ここから先は、未知の領域だ。

［セフィル］：「さあ、ここからが大事だぞ吹雪。自分を強く持ち、自分はできると言い聞かせるんだ」

自分を強く持って、できると言い聞かせる……。

［吹雪］：「（俺はできる……絶対にできる……）」

学園長の言うとおりに、自分を鼓舞し、気持ちを奮い立たせる。少しずつだが、ゲージは確実に少なくなる。しかし、確実に抑え込む力も弱くなっていく。ブレスレットの作用で半減しているが、徐々にその感覚は大きくなっていた。

［吹雪］：「く……だけど……」

ここで踏ん張らなければ。俺は歯を食いしばって込み上げる感覚を抑え込む。深層心理の戦いとは、こういうことを言うのかもしれない。

［セフィル］：「いいぞ、吹雪。もう少しだ」

ゲージはいよいよ一桁に到達する。ここまで魔力が少なくなれば、

暴走を起こした時の威力はたいしたことはない。だが、だからと言って気を緩めるわけにはいかない。ここまできたら、最後まで……。

［吹雪］：「はぁ……はぁ……」

もう少し、後少し……。

……。

繭子ルート・アモローソ（5）

――そしてついに。

［吹雪］：「ふぅ……」

魔力のゲージは０になり、俺の体は自然と詠唱を止めた。もう体に魔力は残っていない。代わりにとんでもない疲労が体にのしかかる。だが……本当の練習はここからだ。

［セフィル］：「さあ、行くぞ吹雪」

［吹雪］：「はい、お願いします」

［セフィル］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

俺が与えた魔力が、学園長を経由して戻される。

学園長が供給するスピードは俺よりも格段に早く、それでいて魔力の減りがかなり少ない。学園長と俺のレベルの違いがはっきりと分かるな。――魔力のゲージは瞬く間に増えていき……数字は３０を示した。それを確認し、学園長は詠唱を止める。

［セフィル］：「よし、完了。吹雪、交代だ」

［吹雪］：「はい」

これを何度も繰り返し、感覚を養っていく。一回できただけでは成長したと言えない。連続で成功して初めて、自分に力がついた証拠となるんだ。二回目……開始だ。

［吹雪］：「「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

ゲージは２０を下回り、間もなく１０台に突入する。疲労のせいか、俺の学園長への供給のペースは一回目よりも遅くなっている。

［セフィル］：「焦ることはない。自分のペースで問題ないからな」

学園長の言葉にうなずき、俺はそのままの状態を維持する。そう、

焦ったところでどうしようもない。むしろ焦りは暴走の原因に成り得る。ここはゆっくりでも確実に供給を行おう。

［吹雪］：「……」

１４、１３、１２……ちょっとずつメーターの数字は減っていく。

［セフィル］：「そうだ、それでいい」

……。

……。

……。

繭子ルート・アモローソ（6）

［吹雪］：「はあ……はあ……」

二回目も何とか成功し、次は三回目に突入しようというところだ。

［セフィル］：「疲労も限界を超えてしまっているかもしれない。今日はこれで最後にしておこう。もう一踏ん張りだ」

［吹雪］：「はい……はあ、はあ……」

俺の想像していた以上に、体への負担は大きかった。ここまでヘロヘロになるとは予想していなかったが……どうやら大間違いだったようだ。だけど……やめる気はない。ここで弱音を吐いてしまっては、身に付くものも身に付かなくなる。今日は、とことん自分を限界まで追い込むぞ。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

力を振り絞り、俺は三度目の詠唱を始めた。学園長の体が光り、俺を伝って魔力が移動していく。

……。

蘭子ルート・アモローソ（7）

――残り魔力は１０を切った。このままいけば、三回連続で力を最後まで出し切れたことになる。

［セフィル］：「そうだ、いいぞ吹雪」

学園長の激励を受けながら、俺は詠唱を続ける。後、もう少しだ……。

――その焦りがいけなかったんだろう。

［吹雪］：「――っ！？」

腕に付けていたブレスレットが、光を帯び始めた。光を帯びたということは、魔力が暴走しかけている証拠。

［吹雪］：「が、学園長！？」

［セフィル］：「うむ、詠唱中止だ」

俺は口を閉じ、詠唱を止める。

［セフィル］：「――ライフガード！」

そして、学園長は俺に向けて補助魔法を唱えた。――ブレスレットは輝きを失い、やがて光は消えていった。

［吹雪］：「う……」

俺はその場に膝をついてしまった。まるで肩を誰かに押されたような感覚だ。

［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」

［吹雪］：「はい……ありがとうございます。学園長」

［セフィル］：「何、良く頑張ったじゃないか」

魔力の残量が少なかったおかげか、暴走も比較的容易に抑えることができたようだ。何事もなく終わったのはよかったんだが……少々悔しい。

［吹雪］：「後、ちょっとだったのになー」

［セフィル］：「次の課題ということさ。ブレスレットを付けていたとはいえ、二度も魔力を使い切ることができたんだ。十分だと思

うぞ？」
［吹雪］：「そうですかね？」
［セフィル］：「ああ、そうだとも。吹雪の想いが恐怖に打ち勝っていた証拠だろう」
［吹雪］：「……次も、頑張りたいと思います」
［セフィル］：「うむ、その意気だ。その想いさえあれば、きっと克服できるはずさ」
［吹雪］：「……はあ……」
［セフィル］：「さて、さすがにその状態で授業を受けさせるのも厳しいだろうから……私の魔力を分けてあげよう。それと、回復魔法もかけてやる。特訓を乗り切ったサービスだ」
［吹雪］：「助かります」
そうだ、この後のことをすっかり失念していた……特訓は乗り切れたが、授業を乗り切れるかちょっと心配だ。
……。
……。
……。

繭子ルート・アモローソ（8）

［場所：教室］

［先生］：「――はい、それじゃあ今日の授業はこれで終わりね。みなさん、お疲れ様でした」

バタン。

［舞羽］：「あ、ふ、吹雪くん!?」

［翔］：「何だよ須藤？　どうしたんだ？」

［舞羽］：「ふ、吹雪くんがいきなり――」

［祐喜］：「何？　どうしたんだい？」

［愛海］：「大久保くんがどうかしたの？」

［吹雪］：「スー……スー……」

［舞羽］：「――この音って」

［祐喜］：「うん、寝てるね。完全に」

［翔］：「何だよ～びっくりしたぜ。あんまり脅かさないでくれよ須藤」

［舞羽］：「だ、だって、机に顔から飛び込んだからびっくりして……」

［愛海］：「確かに、それはびっくりするわね。――それにしても、よく授業終了まで耐えたわね大久保くん」

［祐喜］：「それだけ練習に根を詰めてたのかな？　それか、今年最後の授業はちゃんと受けたいと思っていたのか……翔にも見習ってほしいね」

［翔］：「べ、別にオレを引き合いに出さなくても……」

［祐喜］：「だって、授業中バッチリ寝てたでしょう？　僕はちゃんと見てたよ」

［翔］：「うぐ……バレてる……」

［祐喜］：「来年、補習を受けないようにちゃんと勉強しておくん

だよ？」

［翔］：「ま、任せとけ！　バッチリ……やる、さ……」

［愛海］：「すごく尻すぼみだったわね」

［舞羽］：「どうしよう？　このままにしてて大丈夫なのかな？」

［愛海］：「いいでしょう？　というか、その状態じゃ起こしても起きないでしょう」

［舞羽］：「うん、そうだね」

［愛海］：「せっかくのクリスマスイブだっていうのに、放課後を寝て過ごすなんて、勿体ないな～」

［翔］：「そうか、そういえば今日はクリスマスイブか。ふっふっふ、満を持して今こそオレが商店街に繰り出す時――」

［祐喜］：「無理だと思うからやめておきなよ翔。惨めになるだけだよ」

［翔］：「うはああっ！？　よ、容赦ないですね、祐喜さん」

［祐喜］：「翔のために言ってるんだよ、僕は」

［翔］：「そのわりにはダメージがえげつないんですけど……」

［祐喜］：「気のせい気のせい。さあ、まっすぐ家に帰ろうか」

［翔］：「え？　待って……オレは！」

［祐喜］：「ほら、ここでしゃべってたら吹雪が寝辛いでしょう？　早く外に出よう」

［翔］：「な、祐喜、押すなって」

［愛海］：「あははは、舞羽はこの後どうするの？　何もないんなら、お茶飲みにでも行く？」

［舞羽］：「うーん、どうしようかな？」

［愛海］：「とりあえず出ましょう」

［舞羽］：「うん、そうだね」

［吹雪］：「スー……スー……」

……。

……。

繭子ルート・アモローソ（9）

［繭子］：「……ちゃん、ふーちゃん」
［吹雪］：「ん、んん……？」
［繭子］：「ふーちゃん、起きてよふーちゃん」
［吹雪］：「ん、んん……」
ぼやけた視界が徐々にはっきり見えてくる。すると目の前には――。
［繭子］：「あ、やっと起きた～」
［吹雪］：「ん？　姉さん」
［繭子］：「おはよう、ふーちゃん」
［吹雪］：「おはよう？　……そんな時間じゃないよな？」
［繭子］：「あはは、寝起きでもちゃんと分かるんだね」
［吹雪］：「まあな。起こしに来てくれたのか？」
［繭子］：「うん、この教室だけ明かりがついてたから誰かいるのかな～って思ったらふーちゃんだったんだもん。びっくりしたよ～」
確か放課後になった瞬間糸が切れて……それから一回も起きなかったんだよな。そりゃ夜にもなるか……。
［繭子］：「えへへ、いつもと逆だね～？」
［吹雪］：「ああ、普段は俺が起こす立場だからな。寝ぼすけの姉さんを」
［繭子］：「え～？　ワタシは別に寝ぼすけなんかじゃ――」
［吹雪］：「あん？」
［繭子］：「――繭子は紛うことなき寝ぼすけです」
［吹雪］：「うん、そうだな」
［繭子］：「うう……」
［吹雪］：「まあでも、サンキュー姉さん。起こしてくれて」
［繭子］：「ううん、これくらい当然だよ～」
［吹雪］：「んで、今何時だ？」

［繭子］：「えーっと……五時五十分だね」
あれから二時間以上か……相当疲れてたのかな？
［繭子］：「疲れてたんだね～ふーちゃん」
今正に考えていたことと同じことを、姉さんは口に出した。

繭子ルート・アモローソ（１０）

［繭子］：「見えてたよ～？　ふーちゃんがグランドで一生懸命練習してる姿～」
［吹雪］：「マジか？」
［繭子］：「うん、はっきりは見えてなかったけど特定はできたよ。――暴走を抑える練習をしてるんだよね？　フェルから教えてもらっちゃった」
［吹雪］：「ああ。やっぱり、あのまま放っといていいことじゃないからな。今のままだと、本番でも同じようなことが起こりかねない。だから、今の自分にできることを精一杯やろうって思ったんだ」
［繭子］：「ふーちゃんはいつでもそうしてるのに～」
［吹雪］：「そう言ってくれるのは嬉しいけど、まだ足りないんだと思う。だから俺は、自分の力に飲み込まれかけた。姉さんがいち早く気付いてくれなかったら、俺は同じ惨劇を繰り返していたかもしれない。そうならないためにも、前以上に努力してみようって思うんだ」
［繭子］：「頑張り屋さんだね、ふーちゃんは」
［吹雪］：「そういうわけじゃないと思うが」
［繭子］：「ううん、普通なら投げ出しちゃいそうになってもおかしくないことだよ～？　でも、ふーちゃんは現実とちゃんと向き合って頑張ろうとしてる。簡単にはできないことだよ～。ワタシが保障する」
［吹雪］：「そ、そりゃどうも……」
［繭子］：「でも、一人で頑張ろうとしちゃダメだよ？　ふーちゃんの周りにはみーんながいること、忘れないでね～？　もちろん、ワタシもいるから」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
俺が自分の難癖を治したいと思う一番の想いは……。

［繭子］：「そろそろ戻ろっか？　夕ご飯までもう少しだし」
［吹雪］：「もう、仕事は終わったのか？」
［繭子］：「うん、ちゃーんと全部負終わしてきたよ～せっかくのお休みを潰すわけにはいかないもん」
［吹雪］：「うん、それでいい」
［繭子］：「――あ、そうだ」
［吹雪］：「ん？」
［繭子］：「（キョロキョロ……）」
［吹雪］：「何だよ？　急に？」
［繭子］：「あ、ううん。……今が、試すチャンスかな？」
［吹雪］：「何ぶつぶつ言ってるんだよ？」
［繭子］：「――ねえ、ふーちゃん。ちょっとお願いがあるんだけどいいかな？」
［吹雪］：「ん？　お願い？」
［繭子］：「あ、大丈夫だよ。変なことをさせようなんて思ってないから～」
［吹雪］：「……それは変なことをさせようとしてるから言ったのか？」
［繭子］：「ううん、ふーちゃんにそんなことさせるわけないよ～」
［吹雪］：「……本当か？」
［繭子］：「姉さんを信じてください！」
［吹雪］：「……まあいいけど。それで？　何だよ？　お願いって」
［繭子］：「うーんとね……その……ああ、もういいや！　えいっ！」
［吹雪］：「なっ――！？」
　コロコロと表情を変えた後に、姉さんはいきなり俺の体に飛びついた。

繭子ルート・アモローソ（11）

［吹雪］：「お、おいっ！　急に何だよ？」
［繭子］：「いいから～、こうさせてほしかったんだもん」
［吹雪］：「だからって、何でこんなところで？」
こんなところ誰かに見られたら大変なことに……だから周囲を確認していたのか？
［繭子］：「後ちょっとでいいから。このままで……」
［吹雪］：「……」
がしっと腕を回されてるから動こうにも動けない。仕方ないからじっとしていることにした。
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「……おい、そろそろいいだろう？」
［繭子］：「――うん、ありがと」
姉さんはすっと腕を緩めた。
［吹雪］：「何だって急にこんなことを？」
［繭子］：「うーんと～……」
［吹雪］：「理由ないのかよ？」
［繭子］：「いや、あるにはあるんだけど～……言うのが恥ずかしいというか……」
俺からすれば抱きつく方がよっぽど恥ずかしいと思うんだが……。
［繭子］：「と、とにかくありがと。とってもよかったよ～」
［吹雪］：「……もういいんだな？」
［繭子］：「うん、今度こそ戻ろう～」
マジでびっくりしたな。抱きつかれたことは何度もあるけど、今回は前触れがなかったからな……。姉さんの考えることはよく分からない。

繭子ルート・アモローソ（12）

【繭子サイド】

［繭子］：「――やっぱり、本当だった」

ふーちゃんにもう一度抱きついてみて、ワタシは確信した。

――ワタシは、ふーちゃんが好き。弟としてだけじゃなく、一人の男の子としても、ふーちゃんが好き。

そうでなくちゃ、こんなに心臓がドキドキ言わないもん。

こんなに胸がときめかないもん。

自分の気持ちに気付くと、その想いだけで胸が埋まってしまいそうになる。

正直言って、前々からそんな風な気はしていたんだよね。ただ、弟という立場上その気持ちにはなかなか気付けなかった。だけど、今なら分かる。はっきりと、自分の気持ちを見つけ出すことができている。

［繭子］：「でも……どうすればいいんだろ？」

いくら気持ちに気付けても、ふーちゃんがワタシの弟であることに変わりはない。確かに血は繋がってないけど……ワタシの抱く想いは、世間では『タブー』なんだよね？

でも、だからといってこの想いを押し殺すことはできない。せめて、この気持ちをふーちゃんに伝えたい。考えてみたら、今日はクリスマスイブだ。告白するには最高のシチュエーションだよね？

どんな形になったとしても、ふーちゃんとは姉弟での関係は続けられるはずだし……。

［繭子］：「ウジウジしてるのは、ワタシらしくないもんね」

思い立ったが吉日。ワタシは今日、ふーちゃんに告白するぞ！

――その前にふーちゃんを呼び出さないとね……。何か良い作戦は……。

【繭子サイド　終わり】

繭子ルート・アモローソ（13）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「――ふぁーあ……」

自然と欠伸が口から漏れてしまう。放課後あんなに寝たっていうのに……それだけ負担がかかってたってことか？　自分ではあまりそうは感じないんだけど……まあ、目に見えないものだから仕方ないのか。明日もきっと同じような特訓をするはずだ、疲れは残さないでおきたいから……ちょっと早いけど寝ようかな？

そう思って布団に向かおうとした時だった――。

［吹雪］：「ん？」

俺の携帯がブルブルと震えた。

メールか？　一体誰から？　そう思って画面を開くと――。

［吹雪］：「姉さん？」

何でわざわざメールを？　近くにいるんだからメールする必要もないだろうに……そんなことを思いながら内容に目を通してみる。

［繭子］：「（ちょっと屋上に来てくれないかな？　ふーちゃんにお話しがあるから。先にそこで待ってるから来てください。Ｐ・Ｓ：絶対に一人で来てね？）」

［吹雪］：「――一体何なんだ？」

普段送られてくるメールとは少し違う空気を感じる。

何ていうか……二人きりを望むような感じの文面だし。

……早めに休もうと思ったけど、確認したからには行くしかないよな。

［フェルシア］：「あら？　吹雪くんどこかに行くの？」

［吹雪］：「ああ、ちょっと気分転換に。就寝前には戻ってきますんで」

［フェルシア］：「そう、気を付けて行ってきてね」

［吹雪］：「はい、じゃあちょっと行ってきます」
［フェルシア］：「――あら？　そういえば繭子も帰ってきてないわね。……ふふ、ひょっとしたら、ひょっとするのかしら？」
……。

繭子ルート・アモローソ（１４）

［場所：屋上］

［吹雪］：「うー、寒いな～」

屋上に向かう階段を上っていくだけで、相当の寒気を体に感じる。

中でこれなら、外はもっと寒いんだろうな。

［吹雪］：「先に待ってるって言ってたけど……ちゃんといるのか？」

俺は半信半疑で扉を開けた。

［吹雪］：「（あ、見つけた……）」

探すまでもない、姉さんは手すりに寄りかかって空を眺めていた。

……どうやら、まだ俺が入ってきたことに気付いてないらしい。

［吹雪］：「おい、姉さん」

だから俺は、来たことを知らせるために姉さんを呼んだ。

［繭子］：「あ、ふーちゃん」

姉さんは俺のほうに振り返り、俺の元に駆け寄った。

［繭子］：「うー、寒ーい……」

［吹雪］：「……震えてるじゃないか。一体いつからここにいたんだよ」

［繭子］：「うーんと、３０分くらい前かな～？　ちょっと心構えに準備が必要で」

［吹雪］：「心構え？」

［繭子］：「うん、こっちのことだから～」

［吹雪］：「まあ、いいけどよ」

［繭子］：「それより、空見てみてよふーちゃん。すっごく綺麗だよ～」

［吹雪］：「ああ、そうだな」

空にはたくさんの星がキラキラと瞬いていた。雲がないからとて

もくっきりと見える。
［繭子］：「素敵だよね～、こういうの、ワタシ大好き～」
［吹雪］：「姉さんも、こういうのを素敵だって思うんだな」
［繭子］：「あ、失礼だよふーちゃん。ワタシだってこういうものの良さはしっかり分かるんだから～」
［吹雪］：「俺はてっきり、食い物にしか魅力を感じないものとばっかり――」
［繭子］：「ひどーい。確かに食べ物は好きだけど、それだけってことはないもん」
［吹雪］：「はは、悪かったって」
［繭子］：「ぶー……」
［吹雪］：「――そういえば、話があるんだったよな？　何の話だ？」
［繭子］：「ああ、うん。ちょっとふーちゃんに、聞いてほしいことがあって」
［吹雪］：「聞いてほしいこと？」
［繭子］：「うん、ふーちゃんにだけ聞いてほしいことなんだ。他のみんなには、聞かれたくなかったから」
［吹雪］：「だから、メールで呼び出したのか？」
［繭子］：「うん」
こくりと頷きながら。

繭子ルート・アモローソ（15）

［繭子］：「聞いてもらって、いいかな？」

姉さんは、いつも以上に挙動不審で目がアッチコッチにキョロキョロと動いている。

何やら緊張しているようだが……どうして緊張しなければいけないんだろう？

［繭子］：「えっと……とりあえず、座ろっか」

［吹雪］：「あ、ああ」

姉さんが腰を下ろしたベンチの隣に俺も腰を下ろす。

［繭子］：「スーハー……スーハー……よし」

［吹雪］：「どうして気合いを入れてるんだ？」

［繭子］：「ちゃんと口が回るようにと思って」

［吹雪］：「？」

［繭子］：「一つ注意してほしいんだけど、今からワタシが言うことは冗談じゃないから。紛れもない本心だから。それだけ分かってくれると嬉しいな」

［吹雪］：「ああ、分かった」

［繭子］：「単刀直入に言うから、よく聞いてね」

［吹雪］：「ああ」

［繭子］：「スーハー……」

姉さんは、もう一度深呼吸を挟むと――。

［繭子］：「ワタシ、ふーちゃんのことが好きです」

［吹雪］：「……え？」

［繭子］：「ふーちゃんのことが好きです。弟としてじゃなく、異性としてふーちゃんを好きになりました」

［吹雪］：「な――っ！？　そ、そんなこと……」

［繭子］：「言う前に忠告は入れたよ？」

［吹雪］：「……ね、姉さん、本気で？」

［繭子］：「うん、本気です」
［吹雪］：「……」
どうしよう、言葉が出てこない。姉さんが、俺のことを好き？
弟としてじゃなく、異性としてだって？　――とりあえず。
［吹雪］：「ごめん、ちょっと落ち着くまで時間をくれ」
［繭子］：「うん、いいよ」
頭が状況を理解していないから、言い聞かせてやらないと。
……。

繭子ルート・アモローソ（16）

［吹雪］：「ありがとう、ちょっと落ち着いた」
［繭子］：「お礼を言うのはワタシのほうだけどね。戸惑わせるようなことを言ったのはワタシなんだから」
［吹雪］：「いや、そんなことはないが……何で、俺のことを？」
［繭子］：「……何でなんだろうね？」
［吹雪］：「え？　俺がそれを尋ねてるんだけど？」
［繭子］：「ワタシも最初はそうだと思ってなかったんだ。ふーちゃんと過ごす時間はすごく大切ですごく楽しいっては感じてたんだけど、いつの間にか、恋みたいな感情が生まれてて、気付いたら好きになってたんだ。だから、特に理由らしい理由はないんだよね。多分、あれだと思うよ、恋をするのに理由なんてないってやつ」
［吹雪］：「ああ、なるほど……」
実際にその理由で言い包められる日が来るとは……。
［繭子］：「多分、ワタシはずっと前からふーちゃんを男の子としても好きになってたんだと思う。今日まで気付けなかったのは、ふーちゃんがワタシの弟だったからだと思うんだ。一般的に、姉弟が好きあうことってあんまりないからね」
［吹雪］：「まあ、そうだよな……」
姉弟とは異性というジャンルには含まれず、家族というジャンルに含まれるはずだからな。
［繭子］：「気持ちに確信が付いたのは、さっきふーちゃんに抱き着かせてもらった時だよ。あの時、はっきりと胸の高鳴りを感じたんだ」
［吹雪］：「あ、あれはそういう意味だったのか……」
［繭子］：「お願いしてもさせてもらえないって思ったから、ちょっと強硬手段に出ちゃったんだ。ごめんね？」
好きかどうか確かめたいから、何て理由を言えるわけないもんな。

許さざるを得ないだろう。

［繭子］：「あの時のワタシの鼓動は、確実にふーちゃんに対してときめきを覚えたものだった。間違いないです」

［吹雪］：「姉さん……」

［繭子］：「ホントにごめんね？　急にこんなこと言い出して」

［吹雪］：「……大丈夫だ。少しずつ、理解してきてるから」

［繭子］：「早いうちに言っておいたほうがいいって思ったの。自分の気持ちを抑えているのも辛いしね」

［吹雪］：「ああ。姉さんの気持ちは、ちゃんと分かった」

［繭子］：「うん、ありがとうふーちゃん」

繭子ルート・アモローソ（17）

――これは告白だ。姉さんは一人の女として、男の俺に勇気を出して自分の気持ちを伝えた。だから、次は俺が自分の気持ちを伝えなければならない。俺は、姉さんのことをどう想っているかということを。

確かに俺は、姉さんのことは好きだ。血は繋がっていなくても、幼い頃から一緒に暮らして、両親が旅に出てからは二人で支え合って生きてきた。俺にとって姉さんは、かけがえのない存在であることは違いない。

だけど……この好きという想いは異性としての好きに含まれるべきなのか？　俺は今日まで、姉さんを恋愛対象として見たことがない。いや、見てはいけないと考えていた。何故なら姉弟だからだ。さっき姉さんが言った通り、姉弟で恋仲になるというのは一般的ではない。そういう概念を捨てて考えなくては、姉さんへの返事は返せない。

そのための時間が、今は欲しい。

繭子ルート・アモローソ（18）

［吹雪］：「姉さん」
［繭子］：「うん」
［吹雪］：「俺に、一日時間をくれないか？　姉さんに抱いてる想い、俺にとっての姉さんの存在とかをじっくり考えてから答えを出したいんだ。今ここで適当な答えを出したら、真剣に想いを伝えてくれた姉さんに失礼だ」
［繭子］：「……こういう時でも、ふーちゃんはワタシのことを考えてくれるんだね。うん、ふーちゃんの思うとおりにしてくれていいよ」
［吹雪］：「ああ、ありがとう」
［繭子］：「お礼を言うのはこっちのほうだよ～。ワタシの想いを聞いてくれてありがとう」
　そう言った姉さんは、笑顔を浮かべていた。
［繭子］：「ねえ、ふーちゃん」
［吹雪］：「何だ？」
［繭子］：「――ううん、やっぱり何でもない」
［吹雪］：「そうか」
［繭子］：「自分の気持ちに正直になってくれれば、ワタシはそれでいいからね。ふーちゃんに自分の気持ちを言えただけでも、ワタシは満足してるから」
［吹雪］：「姉さん……」
［繭子］：「そろそろ戻ろっか？　ちょっと、寒くなってきたし」
［吹雪］：「最初からフルスロットルで寒いと思うんだが……」
［繭子］：「綺麗な景色を見るためには、多少の代償は必要ってことだね～」
　――その後、姉さんはいつも通りの姉さんに戻っていた。
　俺は姉さんをどう想っているか。明日一日じっくり考えて、結論

を出そう。

……。

……。

……。

繭子ルート・モルデント（1）

12月25日（土曜日）

［場所：グランド］

――次の日、俺は学園長と昨日と同じ特訓を行った。昨日の反省を頭に一つずつ焼き付けながら自分の魔力を解き放つ。そして魔力が空になったところで学園長が俺の魔力を30まで引き上げる。昨日は三度目の終わり寸前で力尽きてしまった。今日は三度目も最後まで力を使い切りたい。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

そして、問題の三回目に突入する。

……。

［吹雪］：「う、く……」

［セフィル］：「その調子だ、後少し」

ゆっくりとゲージは0に近づいていく。昨日はここで失敗したんだ、最後まで気を抜くなよ、俺……。――5、4、3、2、1、……そして――。

［吹雪］：「はぁ……はぁ……」

魔力が底を尽き、俺の詠唱は自然と止まった。何とか、自己記録を更新できたぞ。

［セフィル］：「よく我慢したぞ、吹雪」

［吹雪］：「ありがとうございます」

［セフィル］：「今日はここでやめておこう。耐性は確実に付いてきていると思うぞ」

［吹雪］：「この調子でいけば大丈夫ですかね？」

［セフィル］：「ああ。ホーリーカルムを詠唱しながらの特訓だか

ら、本番に向けての練習にもなっている。今の調子を保つことができれば、儀式もきっと成功するはずだ」

［吹雪］：「気を抜かないように頑張っていきます」

［セフィル］：「うむ。それでは魔力を回復しようか」

［吹雪］：「あ、お願いします」

俺は学園長と向き合った。

［セフィル］：「――そういえば吹雪よ」

［吹雪］：「何ですか？」

［セフィル］：「昨日はクリスマスイブだったが、何か嬉しいイベントはなかったのか？」

［吹雪］：「え？　いや、それは……」

［セフィル］：「その反応はあったんだな？　さすが吹雪だ」

［吹雪］：「な、何がさすがなんですか？」

［セフィル］：「何、吹雪は籠絡王の名を欲しいままにしているからな」

［吹雪］：「な、何ですか？　それ」

聞く限り最悪の称号の気がするんだが……。

［セフィル］：「吹雪は女生徒に人気がありそうな匂いがするからな。だから籠絡王と命名してみた」

［吹雪］：「……断じてそんなことはありませんよ、学園長」

［セフィル］：「でも、告白されたんじゃないのか？」

［吹雪］：「そ、それは……。ただ、学園長が思い浮かべているようなことではないです、絶対に」

［セフィル］：「――ハーレムじゃないってことか？」

［吹雪］：「学園長には俺はどんな風に映ってるんですか？」

第一ハーレムを築く勇気もない。

［セフィル］：「うーん、そうか。現実は思い描いたものとは違うものだな」

［吹雪］：「学園長の思い描きがちょっとズレてるんだと思いますけど……」

［セフィル］：「む、そうか？　結構自信があったんだがな」
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「まあ、あまり首を突っ込むとカホラに怒られそうだから聞かないが、とにかく上手くいくことを願っているからな」
［吹雪］：「は、はい。ありがとうございます」
［セフィル］：「――では、魔力を分けよう」
上手くいく、か……。この場合の上手くいくというのは、一体どっちのことを指すんだろうか？　俺の中で、まだ姉さんに返す答えは見つかっていない。
……。

繭子ルート・モルデント（2）

［場所：社会科室］

［吹雪］：「……」

布団に寝っころがって何分経つだろうか？　みんなどこかに出かけたのか、社会科室には俺一人しかいない。考えるには持ってこいの空間ではあるが、イマイチ頭が回ってくれない。

［吹雪］：「うーん……」

おそらく、どっちの選択をしても姉さんとは今のような関係を気付いていけると思う。姉さんもきっと、そう考えているはずだ。俺にとってたった一人の姉弟関係にある人、だからこそ、中途半端な答えを返すわけにはいかない。でも、その答えは未だに出てこない。考えすぎている、というわけでもないはずだ。何というか、決定的な証拠が足りないというか……上手く言い表すことができないんだが……。

［吹雪］：「難しいな……」

ちょうどその時だった――。

ガラガラ。

［フェルシア］：「――あら？　吹雪くん？　残ってたのね」

［吹雪］：「あ、フェルシア先生。どこかにお出かけですか？」

［フェルシア］：「行って帰ってきたところよ。ちょっと薬局で治療道具の補給をしてきたの」

［吹雪］：「そうですか」

［フェルシア］：「みんな街のほうに出て行ったみたいだけど、吹雪くんは行かなくていいの？」

［吹雪］：「はい。……ちょっと、考えなきゃいけないことがあって」

［フェルシア］：「ふーん」

［吹雪］：「俺は別に一人でいいんで、どうぞお構いなく――」
［フェルシア］：「吹雪くんが今悩んでることって、マユのことでしょう？」
［吹雪］：「え――っ！？」
［フェルシア］：「ふふ、動揺したってことは、そうみたいだね」
［吹雪］：「いや、そんなことは……ない、ですよ？」
［フェルシア］：「ごまかしてもダーメよ。顔に書いてあるもの」
［吹雪］：「う……」
［フェルシア］：「多分、みんなも吹雪くんが悩んでることは知ってると思うわよ？　何が理由までかは分かってないかもしれないけど」
［吹雪］：「マジですか？」
［フェルシア］：「ええ、顔に出てるしね。それに――マユも同じような感じだったから」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「姉弟揃って同じ顔をしてるんですもの、これはその間に何かあったと考えておかしくないでしょう？」
［吹雪］：「う、その通りです……」
ごまかしきれず、俺はフェルシア先生の言葉を肯定した。
［フェルシア］：「――私暇だからさ、ちょっと保健室に行かない？」
［吹雪］：「いや、でも……」
［フェルシア］：「遠慮しないの。それにこういう時、他の人の意見を聞いてみることも大事よ？　一人で悩むよりも発見があるかもしれないじゃない？」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「さあ、行きましょう。ほらほら」
［吹雪］：「あ、は、はい！」

繭子ルート・モルデント（3）

［場所：保健室］

［フェルシア］：「今お茶を出すから待っててね」
［吹雪］：「あ、お構いなく」
ついこうやって来てしまったけど、本当によかったんだろうか？
［フェルシア］：「はい、どうぞ」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
頂いたお茶を一口飲む。
［フェルシア］：「――それで吹雪くんの悩みについてなんだけど……私の予想を言ってみてもいいかしら？」
［吹雪］：「予想、というと？」
［フェルシア］：「吹雪くんがどうして悩んでいるかの理由」
［吹雪］：「べ、別に構いませんけど」
［フェルシア］：「じゃあ言うわね。――吹雪くん、マユに告白されたんじゃないの？」
［吹雪］：「――っ！？」
［フェルシア］：「ふふ、図星かしら？」
［吹雪］：「……全くズレがありません」
［フェルシア］：「もちろん、覗き見なんてしてないわよ？　私は二人が社会科室にいなかった時間帯はずっとそこにいたから」
［吹雪］：「ど、どうしてそうだと思ったんですか？」
［フェルシア］：「正直に言えば、前々から思ってた事なのよ。ほら、私いつもマユと一緒に行動してるでしょう？　だから、マユが考えることはなんとなく分かるのよ。吹雪くんを好いていたことは、吹雪くんがこの学園に入学する前から知ってたんだけど、ここ最近マユの吹雪くんへの視線がちょっと違うような気がしてね。何だか視線が乙女のような感じになってたから、もしかしたらって思った

のよ」

［吹雪］：「な、なるほど……」

［フェルシア］：「こんな解答で大丈夫？」

［吹雪］：「はい、納得できました」

繭子ルート・モルデント（4）

［フェルシア］：「よかった。――吹雪くんが悩むのも、しょうがないことよね？　血が繋がっていなくても、家族の一員であることに変わりはないもの。私が吹雪くんの立場だったら、吹雪くんと同じだったと思うわ」

［吹雪］：「分かってくれると、ちょっと救われます。答えを出さなきゃって思ってはいるんですけど」

［フェルシア］：「なかなか見つからない、と」

［吹雪］：「はい……」

［フェルシア］：「具体的に、どういうところで悩んでるの？　まあ、姉と弟ってことなんでしょうけど」

［吹雪］：「やっぱり、それは大きいですね。姉さんのことは、確かに好きです。大事にしたい存在でもあります。だけど、この好きって感情は、家族としてのもののような気もするんです。だけど、好きって気持ちには変わりはないから……すいません、ややこしいことを言ってしまって」

［フェルシア］：「大丈夫よ、吹雪くんの言いたいことは伝わってるわ」

［吹雪］：「そうですか？」

［フェルシア］：「姉から異性として好きって言われることは、あまり例がないことだもんね」

［吹雪］：「やっぱりそうですよね」

［フェルシア］：「まあ、私は構わないと思うけどね。お互いに同意の上であれば、男と女ってことには変わりないんだし、誰を好きになってもその人の自由だもの。他人が干渉する余地はないからね」

［吹雪］：「立派な意見ですね」

［フェルシア］：「ふふ、ありがとう。……一つ、質問してもいいかしら？」

［吹雪］：「はい、何でしょう？」
［フェルシア］：「吹雪くんは、マユのこととかでドキッとしたことってあるかしら？」
［吹雪］：「ドキッと、ですか？」
［フェルシア］：「ええ、何でもいいの。あるかってないかって言われるとどっち？」
姉さんにドキッとしたことは――。
［吹雪］：「――あります」
以前のかくれんぼで、謝って同じ場所に身を隠した時、変に姉さんのことを意識してしまったことがあった。
［フェルシア］：「そっか、あるのね」
［吹雪］：「はい」
［フェルシア］：「その時の気持ちは？　恥ずかしかった？　それとも嫌だった？」
［吹雪］：「そうですね……あまり考えてはなかったですけど、結構恥ずかしさはあったかもしれません」
［フェルシア］：「うん、なるほどね。少なくとも、マユを異性としては見てるのね、吹雪くんは」
［吹雪］：「そ、それはまあ……」
［フェルシア］：「そっか。うーん……」
フェルシア先生は考えながらお茶をすする。

繭子ルート・モルデント（5）

［吹雪］：「何かすいません、俺の問題なのに……」
［フェルシア］：「いいのいいの。マユは私の妹みたいな感じだから」
［吹雪］：「俺には、母さんみたいに見えますね」
［フェルシア］：「ふふ、これでも同い年なのよ？　だーれも信じてくれないんだけど」
それはそうだ。
［吹雪］：「フェルシア先生は、姉さんのことをどんな風に思ってるんですか？」
［フェルシア］：「うーん、そうね。今も言ったけど、妹みたいに人懐こくて、やっぱり、外見があんな感じだからかわいいって思うわね。子供の頃の制服とかが似合いそうだし」
［吹雪］：「あはは……」
おそらく、着ようと思えば着れるだろうな。
［フェルシア］：「時々失敗もするけど、でもあきらめないで頑張ろうとする姿は立派だって思う。表には見えないけど、教師としての自覚を持ってやってるのよねマユは」
俺はうなずいて返す。以前頼まれたノートの件はそれの表れだろう。
［フェルシア］：「もう一つ、私が一番いいなって思ったことは――家族をすごく大切にしていることかしら」
［吹雪］：「……」
［フェルシア］：「いつも話してくれるわよ、自分の家族のこと。お母さん、お父さん、そして吹雪くんのこと。その話をしてる時は、いつも笑顔がこぼれてるわ。その表情を見るだけで、どれだけ大切な存在なのかってことが分かるわ。家族と仲が良いっていうこと、私は大好きだからね」

［吹雪］：「そうですか」
［フェルシア］：「ちょっと話が飛んじゃったような感じだけど…総合的に、マユは私にとってとても良い親友であることに違いないわね」
［吹雪］：「――弟として、姉さんのことをそう思ってくれてるのは嬉しいですね」
［フェルシア］：「あ、もちろん吹雪くんのことも良い生徒だって思ってるからね？」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます、わざわざ言ってもらって……」
［フェルシア］：「ふふ。――あ、そうだわ、吹雪くんって、どうしてマユが教師になったのかって知ってる？」
［吹雪］：「姉さんが教師になった理由ですか？」
［フェルシア］：「ええ」
［吹雪］：「そういえば、詳しく聞いたことはなかったですね。教師の免許を取って合格したってことは知ってたんですが、なりたかった理由は全然分からないです」
［フェルシア］：「あ、そうだったんだ」
［吹雪］：「何か明確な理由があるんですか？」
［フェルシア］：「そうね。知りたい？」
［吹雪］：「聞いてもいいのであれば」
［フェルシア］：「ふふ、マユも許してくれるわよね？　こういう時だもの」
［吹雪］：「何か言えない事情でもあったんですか？」
［フェルシア］：「まあ、本人はそうかもしれないわね。でも大丈夫よ、恥ずかしがるだけだろうから」

繭子ルート・モルデント（6）

［吹雪］：「恥ずかしい？」
［フェルシア］：「多分、吹雪くんも聞けば納得すると思うわよ」
［吹雪］：「そ、そうですか？」
［フェルシア］：「じゃあ話すわね。――あ、その前にお茶のおかわりどうぞ」
［吹雪］：「あ、すいません」
［フェルシア］：「そのことを話してくれたのは、吹雪くんがこの学園に入学する前にマユと夕ご飯を食べに行った時だったんだけど――」

“［フェルシア］：「マユ？　仕事は片付いた？」
［繭子］：「ちょっと待って～。机を綺麗にすれば終わりだから～」
［フェルシア］：「ああ、急がなくてもいいから。ゆっくりやりなさい」
［繭子］：「――よし、完了～。フェル終わったよ～」
［フェルシア］：「そう、じゃあ行きましょうか」
……。

繭子ルート・モルデント（7）

［フェルシア］：「今さらだけど、本当によかったの？　弟を家で留守番させて」

［繭子］：「うん、大丈夫だよ～。というか、同じ教師の人と仲良くしてこいって送り出されちゃったんだもん。行かないわけにはいかないよ～」

［フェルシア］：「へぇー、立派な弟なのね」

［繭子］：「うん、すっごく良い子だよ～。ワタシのことをよく注意してくれるし」

［フェルシア］：「そ、それは教師としてどうなの？　普通は姉が弟を注意するものじゃないの？」

［繭子］：「そうかもしれないけど、ワタシの家はずーっと逆だったから。そういう常識がよく理解できないんだよね～」

［フェルシア］：「……マユの弟くんは、かなりしっかりしてるのね」

［繭子］：「うん、すっごく真面目ですっごくテキパキ行動するよ。身の回りの家事とかはほとんどやってくれるんだ～」

［フェルシア］：「それは、何？　マユに負担をかけないようにってこと？　それともマユが家事をできないからってこと？」

［繭子］：「うーん、両方？　やろうとした時に、いいから座ってろって言われるの」

［フェルシア］：「なるほど、確かにどっちも含まれる気がしてきたわ」

［繭子］：「それに、隣の家の幼馴染ちゃんが手伝いにきてくれるから、そんなに大変でもないのかもしれない」

［フェルシア］：「そうなの。どっちにしても、家事をこなしてくれるっていうのは立派ね」

［繭子］：「ふーちゃん、ハルモニア学園を受験するって言ってた

からフェルも会えると思うよ」
［フェルシア］：「ふーちゃん？　それはあだ名なの？」
［繭子］：「あ、ごめんつい癖で。弟の名前が吹雪だから、いつもふーちゃんって呼んでるんだ」

繭子ルート・モルデント（8）

［フェルシア］：「あ、そうだったのね。吹雪、か……珍しい名前ね」

［繭子］：「でも、外見と名前は一致してるからワタシは好きだよ～」

［フェルシア］：「そうなの、会ってみたいわね。じゃあこの学園に無事入学できたら、マユは弟くんに授業を教えることになるかもしれないのね」

［繭子］：「そうだね。そうだとしたら、すごい嬉しいよ～。実現できるといいな」

［フェルシア］：「合格はできそうなの？」

［繭子］：「多分大丈夫だと思うよ。そんなに悪い判定をもらってなかったみたいだし」

［フェルシア］：「そう、なら安心ね」

［繭子］：「ホントに、ふーちゃんには感謝してるよ～。いつも励まされてるし、いつも背中をくれるんだ」

［フェルシア］：「マユは弟くんが大好きなのね」

［繭子］：「うん、だーいすき！　目に入れても痛くないと思うよ」

［フェルシア］：「ふふ、そうなの」

［繭子］：「――本人には言えないけど、ワタシがこうして教師になったのはふーちゃんが一番の理由だから」

［フェルシア］：「あら、そうだったの？」

［繭子］：「本人には内緒にしてることなんだけどね。結構自己チューな考え方だと思うから」

［フェルシア］：「ちょっと知りたいわね、それ。どうして弟くんのためなの？」

［繭子］：「うーんと、ワタシの家には、今お父さんとお母さんがいないってことは前に話したよね？」

［フェルシア］：「ええ、世界中を旅して回っているのよね」
［繭子］：「お父さんとお母さんが旅に出るって行った時、ふーちゃんはすごく嫌がってね……両親と離れることができないって泣いちゃって。気持ちはすごく分かるよ、まだ甘えたい年頃のことだし、ワタシもそう思ってたから。でも、やっぱり行かなくちゃいけないからお父さんとお母さんはふーちゃんを説得しようとしたんだけど、ふーちゃんはそれを受け止められなくて、それが原因で事故を起こしちゃったんだ」
［フェルシア］：「事故？」
［繭子］：「うん、魔力の暴走だね」
［フェルシア］：「ああ、そうなのね……」
［繭子］：「ふーちゃんは結構魔力に恵まれてて、幼いけどすごく力を持ってる子だったんだ。だから、暴走を抑えるのがなかなか困難で、お父さんとお母さんでも苦戦を強いられちゃうくらいだったの。ほとんど力がないワタシは、それを見てることしかできなかった。ちょっと悔しかったこと覚えてるよ」
［フェルシア］：「……」

繭子ルート・モルデント（9）

［繭子］：「ふーちゃんはその後、必死に自分を止めてくれたお父さんとお母さんの愛情を理解することができて、二人を送り出すことを決めてくれた。その時に、ワタシは二人に呼び出されて、こう言われたんだ。私たちがいない間、ふーちゃんの支えになってくれ、ふーちゃんを守ってくれって。ワタシ自身もふーちゃんにとってそういう存在になりたいって思ってたから、強くうなずいたの。だけど、初めのうちは具体的にどういうことをすればいいのか分からなかった。守るってことは誓ったけど、それをする方法を全然知らなかったから。だけど、少しして、一つ思いついたことがあってね」

［フェルシア］：「――それが、教師の仕事？」

［繭子］：「ワタシもまだ幼かったから、ちょっと考え方が幼稚だったなって今なら思えるね。多分、お父さんとお母さんもそういうことを言ってたんじゃないんだよね、きっと。でも、思いついたら止まらなくなっちゃって……教師というのは子供を守るのが仕事、つまりふーちゃんを守ることができるって。そう思い立った時には、教師になる方法を調べ始めてた」

［フェルシア］：「へぇー、そんな裏話があったのね」

［繭子］：「えへへ、考え方はすごい子供っぽかったけど、教師になったことに後悔はないよ。合格した時はすごい嬉しかったし、やりがいのある仕事だって思うから。それにふーちゃんがこの学園に入学すれば、ワタシはふーちゃんに勉強を教えることができる。一緒に授業ができるかもしれないしね」

［フェルシア］：「じゃあ、入学する日が楽しみね」

［繭子］：「うん、そうだね」

［フェルシア］：「――結構感動したわ、私」

［繭子］：「え？　ホントに？」

［フェルシア］：「ええ、本当よ。ワタシの中でマユの株がかなり

上がったわ」
［繭子］：「そ、そうなの？　な、何て反応していいのかな～？」
［フェルシア］：「自信を持っていいと思うわよ。それだけのことをマユはしてるはずだから」
［繭子］：「そ、そうなのかな？」
［フェルシア］：「ええ、そうよ。――さて、知りたいことがたくさん出てきたし、続きは夕ご飯の時にでも聞かせてもらいましょう。さあ、行きましょ」
［繭子］：「あ、うん、そうだね。お腹もペコペコだし～」
［フェルシア］：「たくさん食べて、たくさん話しましょうね」“

繭子ルート・モルデント（１０）

……。

……。

……。

［吹雪］：「……」

［フェルシア］：「――という理由だったのよ。驚いた？」

［吹雪］：「もう、何て言ったらいいのか……」

驚く次元すら超えているかもしれない。だって、言ってしまえば――。

［吹雪］：「姉さんは、俺のために教師になったってことですよね？」

［フェルシア］：「きっかけは、確かに吹雪くんだったかもしれないわね」

［吹雪］：「……」

［フェルシア］：「何度も言ってることだけど、やっぱりマユにとって吹雪くんはすごく大切な存在なのよ」

［吹雪］：「……はい」

俺のために、姉さんは教師の道を選んだ。俺を守るために……。

その時、俺の心臓は大きく高鳴った。

この感覚は――。

［フェルシア］：「どうしたの？　吹雪くん」

［吹雪］：「あ、いえ……」

［フェルシア］：「ちょっと、心が揺れ動いた？」

［吹雪］：「あ、その……そうかもしれません」

姉さんの優しさと、俺に対する愛情の量がそうさせたのかもしれない。

［フェルシア］：「ふふ、ちょっと前進かしらね」

［吹雪］：「は、はい……」

［フェルシア］：「――吹雪くんには、マユが私に話してくれたことを教えることで何か発見をするかもしれないわね。まだ結構あるのよ、マユから聞いた吹雪くんが関わるお話」
［吹雪］：「そ、そうなんですか？」
［フェルシア］：「ええ、そりゃあもうたくさん。どお？　聞いてみる価値はあるんじゃないかしら？」
［吹雪］：「すごく恥ずかしくなりそうな予感がするんですけど……」
［フェルシア］：「それは耐えてもらわないと。ちゃんとした答えを出すためにもね」
［吹雪］：「う、そうですね……」
　確かに、フェルシア先生の話は一理あるからな。
俺はまだ、姉さんについて知らないことがあるようだし……この場合は知っていた気になっていたというべきか。それを知ることで、姉さんに対する俺の想いが見えてくるかもしれない。
［吹雪］：「お願いします、フェルシア先生」
［フェルシア］：「ええ。じゃあ、どれから話すとしようかしら？」

繭子ルート・モルデント（11）

……。

……。

……。

――それから俺は、たくさんの話をフェルシア先生から聞かせてもらった。その話は、どれもこれも驚くことばかりだった。だけど、その数だけ俺は、姉さんが俺に抱いてくれていた想いを知ることができた。

［フェルシア］：「まだまだあるんだけどねー」

［吹雪］：「きょ、今日はこのくらいで結構です。これ以上は、お腹いっぱいで入りません」

［フェルシア］：「あら、そう？　まだ半分くらいなんだけどね」

［吹雪］：「すいません、本当に」

［フェルシア］：「まあいいわ。……大分分かってきたかしら？　マユに対する想い」

［吹雪］：「――そうですね。少しずつ、視界が晴れてきた感じがします」

［フェルシア］：「答えは聞かないわ。私がここで聞くのは野暮ってものだし。一番最初にマユに教えてあげないとね」

［吹雪］：「はい。ありがとうございます、やっぱり聞いて正解でした」

［フェルシア］：「役に立てたのならよかったわ。……落ち着いたらでいいから、どんな返事を返したか教えてね？」

［吹雪］：「分かりました。今度、何かしらお礼をさせてください」

［フェルシア］：「ふふ、ちょっと期待してるわね」

［吹雪］：「はい」

［フェルシア］：「ああ、そうだわ。吹雪くんに一つ、覚えててほしいことがあるんだけど」

［吹雪］：「何ですか？」
［フェルシア］：「もし、自分の気持ちが本当か知りたい時は、ドキッとした時のことを自分から仕掛けてみると分かるかもしれないわよ。かなり荒っぽい方法かもしれないけど」
［吹雪］：「自分から仕掛ける、ですか？」
［フェルシア］：「ええ、するかしないかは吹雪くんの判断に任せる。ただ、そういう方法もあるよってことだけ覚えててくれればそれでいいわ」
［吹雪］：「なるほど……分かりました」
［フェルシア］：「それくらいかしら。後は吹雪くんの判断でね」
自分から仕掛けてみる、か……。一応覚えておこう。
［フェルシア］：「じゃあ、頑張ってね。吹雪くん」
［吹雪］：「はい、本当にありがとうございました」
［フェルシア］：「どういたしまして」
俺が姉さんに告げる答えは――。

繭子ルート・モルデント（12）

［場所：屋上］

――そして昨日と同じ時間帯、俺は昨日と同じ場所で姉さんを待っている。この待っている時間というのは、やはりどうしても緊張してしまうな。姉さんが、俺が来る前に一人の時間を過ごしていたのも、こういう状態が原因だったのかもしれない。

姉さんはすでに呼び出してある。今は来るのをじっと待っていよう。

……。

……。

……。

そして――。

［繭子］：「――お待たせー、ふーちゃん」

姉さんが屋上のドアを開き、こちらにやってきた。

［吹雪］：「……寒いな、やっぱりここは」

［繭子］：「あはは、昨日のワタシと同じこと言ってるね」

［吹雪］：「今なら、姉さんの気持ちが分かる気がするよ」

実際実感していたことなんだが……。

［繭子］：「えへへ、そっか～」

［吹雪］：「――で、だ」

［繭子］：「うん」

［吹雪］：「その……昨日の返事なんだけど」

［繭子］：「……うん」

［吹雪］：「と、とりあえず座ろうぜ。あそこのベンチに」

［繭子］：「うん、そうだね」

しっかり言うんだぞ、俺。ベンチに座り、一呼吸置いた後で話を切り出す。

［吹雪］：「昨日はありがとな、俺への気持ちを伝えてくれて」
［繭子］：「お礼を言われることじゃないよ。ワタシはワタシが思ってることを正直に言っただけなんだし」
［吹雪］：「それでもだ。そう言ってくれたこと、俺は嬉しかった」
［繭子］：「ふふ、そう言ってもらえるだけで、ちゃんと伝えておいてよかったって思うよ」
［吹雪］：「で、今からその答えを返すんだけど――」
［繭子］：「あ、ちょっと待ってふーちゃん」
［吹雪］：「な、何だ？」
［繭子］：「ちょっと、深呼吸させてもらってもいい？」
［吹雪］：「ああ、いいけど」
［繭子］：「ありがと。……スーハー、スーハー」
そうか、姉さんも緊張しているのか。そうだよな、俺の言葉次第で色んな方向に運命が傾くかもしれないんだ。俺だけが緊張してるってわけじゃなかったのか……それが分かると、俺の中の緊張が少し和らいだ。

繭子ルート・モルデント（13）

［繭子］：「よし、準備オッケーだよ」
［吹雪］：「そうか？」
［繭子］：「うん、どんな答えでも、ワタシは前向きに受け止めるよ～」
前向きに、か……じゃあ、そうしてもらいたいものだ。
［吹雪］：「じゃあ、言うぞ」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「――俺でよかったら、付き合ってくれ、姉さん」
［繭子］：「えっ……？　そ、それって？」
［吹雪］：「俺も、姉さんのことが好きだ。姉としても、一人の女性としても」
［繭子］：「え、えええええっ！？」
――てっきり喜んでくれるかと思っていたんだが、予想に反して驚かれてしまった。
［吹雪］：「何でそんなに驚くんだ？」
［繭子］：「いや、あの、その……ワタシが練習してたシチュエーションと違ったから」
［吹雪］：「シチュエーション？　シミュレーションじゃなくてか？」
［繭子］：「そう、そっちそっち。それと違ったからつい……」
［吹雪］：「ということは、姉さんは俺が断るものとばかり思っていたわけか」
［繭子］：「えっと……ごめん」
姉さんは指を突きあわせながら謝った。
［繭子］：「その、昨日のふーちゃんの反応を見た限り、そういう返事が返ってくるとは思えなくて……勝手にそういう方向で考えちゃってました……」

［吹雪］：「まあ、確かに俺も微妙な反応しちまってたしな」

そう思われるのもしょうがないことか。

繭子ルート・モルデント（１４）

［吹雪］：「先に言っておくけど、今の返事は真剣だから。一日考えて、はっきりと導いた答えだから」
［繭子］：「う、うん。……つまり、ワタシたちは――今日から、こ、恋人同士？」
［吹雪］：「ま、まあ。そういうことになるな。……一応、返事、聞かせてもらっていいか？」
［繭子］：「あ、うん。もちろん！」
姉さんは俺の方に向き直り――。
［繭子］：「ワタシこそ、付き合ってください、ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
［繭子］：「――今のところは、吹雪さんって言った方がよかったのかな？」
［吹雪］：「関係は姉弟のままなんだ。その呼び方のままでいいだろう」
［繭子］：「えへへ、そうだね～」
［吹雪］：「ごめんな。一日とはいえ、返事を待たせちまって」
［繭子］：「ううん、一日くらい全然平気だよ～。むしろ一日待ってなくちゃ、ここまで感動は大きくならないもん」
そういう考え方もあるのか。
［繭子］：「はふー、何だか体から力が抜けちゃった」
［吹雪］：「はは、俺もだ」
言葉を口にした瞬間、体の筋肉という筋肉が弛緩したようだ。よっぽど緊張で体が硬くなっていたんだろう。
［吹雪］：「でも、嫌な感覚ではないな」
［繭子］：「ワタシも、それ思ってたよ～」
達成感、と言って正しいんだろうか。

繭子ルート・モルデント（15）

［繭子］：「ねえふーちゃん」
［吹雪］：「何だ？」
［繭子］：「言いたくなかったらいいんだけど、どうしてオッケーを出してくれたのかとかって聞いても大丈夫？」
［吹雪］：「ああ、それか。やっぱり、知りたいか？」
［繭子］：「そうだね。ワタシも一応女の子なんで、そういうのは気になってしまうもので」
だよな。姉さんも理由を話してくれたし、俺だけ話さないのはおかしいか。
［吹雪］：「みんながでかけてた時、俺は一人社会科室で姉さんに返す答えを考えていたんだけど、その時はまだはっきりした答えが見出せてなかったんだ。だけど、ちょうどその時、フェルシア先生が買い物から帰ってきて、それで俺の様子の違いに気付いて……相談にのってくれたんだ」
［繭子］：「フェルが？」
［吹雪］：「ああ、何でも姉さんの表情と俺の表情が同じことに気付いてたらしい」
［繭子］：「あらら、フェルにはバレちゃってたのか」
［吹雪］：「それで、そのことについてフェルシア先生と話して……その時に……」
［繭子］：「その時に？　どうしたの？」
［吹雪］：「その……言っても大丈夫か？」
［繭子］：「言ってみなくちゃ分からないよ～、それがポイントだったんでしょ？」
［吹雪］：「まあ、そうなんだけど」
［繭子］：「大丈夫、ちゃんと受け止めるよ」
［吹雪］：「――その時に、姉さんが教師になった理由を教えても

らったんだ」
［繭子］：「んにゃあああっ！？」
姉さんはアニメのようなリアクションで驚きを表現した。
［繭子］：「そ、それを聞いちゃったの？　全部？」
［吹雪］：「ああ、全部」
［繭子］：「――――っ！？」
かなり恥ずかしいようで、姉さんの顔はゆでダコみたいになってしまった。
［繭子］：「うう～、まさかこんな形でふーちゃんに知られちゃうなんて」
［吹雪］：「だから、言うのを迷ったんだ。フェルシア先生にも、同じようなことを言われたから」
聞いた俺が恥ずかしかったんだ、本人の恥ずかしさは俺の更に上をいくだろう。

だけど――。

［吹雪］：「でも、俺はそれがすごく嬉しかったんだ」

［蘭子］：「え？」

［吹雪］：「姉さんが、俺を守るために教師になろうとしてくれたその想いが、俺の心にすごく響いたんだ」

［蘭子］：「そ、そうなの？」

［吹雪］：「ああ。その話以外にも、フェルシア先生には姉さんの色んな話を聞かせてもらったよ」

［蘭子］：「うわ～、どんどん赤裸々になっていく～」

［吹雪］：「その話してくれた数だけ、俺は姉さんのことを知ることができた。姉さんのことは他の人よりも知ってるって思ってたけど、実際は自分でそう思ってただけでまだまだ知らないことが多かったんだ。――姉さんが、どれだけ俺のことを大事に想ってくれてたのか、とかな」

［蘭子］：「……」

［吹雪］：「そういうことを教えてもらってるうちに、俺は一つの感情を抱いたんだ。姉さんについて、もっと知りたいってな。気付いてなかったけど、俺は姉さんに対して、はっきりとした想いを持っていたんだ。だから、俺はさっきの答えを返したんだ」

［蘭子］：「……」

［吹雪］：「こんな答えで大丈夫か？」

［蘭子］：「うん、もちろん。――そんな風に想ってもらえたんなら、聞いてもらえてよかったって思えるよ」

［吹雪］：「むしろ、聞かなかったら気付いてなかったかもしれない」

［蘭子］：「変に黙ってないほうがよかったんだねー」

［吹雪］：「まあ、それだけ突然言われても困るんだけどな」

［繭子］：「えへへ。でも……これでワタシとふーちゃんは両想いってことだよね？」
［吹雪］：「ああ、そういうことになるな」
［繭子］：「……うん、徐々に実感が湧いてきたよ～」
どうやらまだ実感してなかったらしい。普通はそうだろうけどな、何故なら俺たちは姉弟でもあるからだ。

繭子ルート・モルデント（17）

［繭子］：「えへへ、ワタシ嬉しいよ、とっても♪」
やっぱり、姉さんには笑顔が良く似合う。今は夜で明るくないけど、その笑顔はすごく輝いていた。
［吹雪］：「（そういえば……）」
フェルシア先生の言ってたあれ……一応試してみたほうがいいかな？　確か自分がドキッとしたことを自分から仕掛ければいいんだよな……つまり俺は姉さんを……。
晴れて恋人同士の関係にもなったんだ。これくらいしても大丈夫だろう。というか……してやりたい気持ちが俺の中で芽生えている。
［吹雪］：「姉さん」
［繭子］：「ん？　何？　ふーちゃん」
［吹雪］：「ちょっと、いいか？」
［繭子］：「へ？　うん――ひゃっ！？」
時間が経って恥ずかしさが上り詰めてくる前に、俺は勢いで姉さんを抱きしめた。
［繭子］：「えへへ、初めてかもしれないね？　ふーちゃんのほうからワタシを抱きしめてくれるなんて」
［吹雪］：「そ、そうだったか？」
［繭子］：「うん。ワタシが抱きついたことは何百回ってあるけど、ふーちゃんはいつも恥ずかしがってしてくれなかったもん」
［吹雪］：「それは……あれだ……照れだ」
男が女に抱きつくのには、それなりの勇気がいるからな。
［繭子］：「ふふ、じゃあふーちゃんはとんでもない照れ屋ってことだね」
［吹雪］：「……今してることで、許してくれないか？」
［繭子］：「あはは、怒ってるわけじゃないから。……でもちょっと、感動してる」

姉さんはそう言って、顔を俺の胸に押し付けた。
見た目もそうだけど、俺から抱きしめてみて、姉さんは想像以上に小さくてそして華奢だった。手にすっぽり覆われてしまう大きさ、強く抱きしめたら壊れてしまいそうな体。この小さな体で、俺をずっと守ってきてくれたんだ。

繭子ルート・モルデント（18）

［吹雪］：「……完璧だな」
今ので確信した。俺が抱いている気持ちは……間違いじゃない。
［繭子］：「――ふう」
［吹雪］：「えっと……ありがとう」
［繭子］：「あはは、その返事もちょっとヘンテコだね」
［吹雪］：「どうにもこういうのは、慣れてなくてな」
［繭子］：「大丈夫、ワタシも初めてだから～。男性と付き合うのは、ふーちゃんが初めてですよ」
［吹雪］：「相手が家族っていうのは……やっぱりちょっとすごいな」
［繭子］：「改めて考えてみるとね。だけど、本当に好きって思ってるからしょうがないよね？　誰にもこの想いは止められないよ」
［吹雪］：「まあ、そうだな」
好きなものはしょうがない、今ならそれがはっきりと分かる。
［繭子］：「というわけで――ワタシからお返し」
［吹雪］：「お、おおっ！？」
今度は姉さんから、俺を抱きしめてきた。
［繭子］：「えへへ、これからはあんまり気にせずにこうすることができるんだね」
［吹雪］：「学校生活中では、控えてくれよ？」
いくら姉弟だとしても、学校では生徒と教師だ。色々と面倒なことになりかねない。
［繭子］：「それはもちろん。ちゃんとみんながいないところでする予定だから～」
［吹雪］：「結局するのかよ……」
［繭子］：「気持ちが抑えられなくなったらね？　極力頑張ってみるよ～。そのためにも今は……ふーちゃんの温もりを体全体に染み

こませておくの」
［吹雪］：「何だか出汁みたいだな、俺……」
［繭子］：「ふーちゃんエキスは凄まじい威力を誇ってるよ。ワタシは大好きです」
［吹雪］：「そうかい……」
俺は姉さんの背中を抱きしめ返した。
［繭子］：「えへへ、ふーちゃんが抱きしめ返してくれたのも今回が初めてだね」
［吹雪］：「恋人同士なんだ。変じゃないだろう？　別に」
［繭子］：「うん！　これからは、ドンドンそうして？　嬉しくなるだけだから」
サラサラの髪からシャンプーの匂いが漂ってくる。来る前にシャワーを浴びてきたのかもしれない。

繭子ルート・モルデント（19）

［繭子］：「――あ、そうだ。ねえふーちゃん」
［吹雪］：「何だ？」
［繭子］：「ふーちゃんは、何か欲しいものとかってある？」
［吹雪］：「何だよ？　急に」
［繭子］：「今日は何の日？」
［吹雪］：「え？　12月25日だけど……ああ、クリスマスか」
［繭子］：「そう！　本来なら昨日にそういうものを上げるはずなんだけど、そういう状況じゃなかったから……だから、ワタシにできることなら、何でもするよ」
［吹雪］：「んー、何かって言われてもな……」
［繭子］：「別に私物とかでもいいよ？　ボーナスが入ると思うし」
［吹雪］：「ああ、確かにそうだな……」
［繭子］：「何がいい？　マユサンタがふーちゃんの願いを叶えましょう」
［吹雪］：「うーん……」
［繭子］：「ドキドキ……」
［吹雪］：「――なあ、かなり恥ずかしいこと言ってもいいか？」
［繭子］：「あらかじめ宣言するんだ」
［吹雪］：「おそらく、言うほうも言われるほうも恥ずかしさを伴うと思うからな。断っておいたほうが身構えられるだろう」
［繭子］：「そっか。――いいよ、許可します」
［吹雪］：「姉さんがそう言ってくれるのはすごく嬉しい。だけど、俺はもう姉さんっていう恋人をもらうことができたから、それだけで十分なプレゼントだよ。だから、これ以上は望まないよ、俺は。いや、望むべきものがないよ」
［繭子］：「――――っ！？　～～～っ！？」
姉さんはその場で激しく悶えた。

繭子ルート・モルデント（２０）

［吹雪］：「な？　だから言っただろう？」
［繭子］：「う、うん。予想以上のダメージ……苦しいよ……あ、苦しいって意味が違うからね？　間違っちゃダメだよ？　ううう……」
［吹雪］：「あ、ああ」
［繭子］：「ふーちゃんの愛情がストレートに伝わってきて、嬉しくて苦しいんだよ」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「ふーちゃんも、顔真っ赤だね」
［吹雪］：「俺だって、今みたいなことを言うのは慣れてないんだ。凄まじく恥ずかしいよ」
［繭子］：「お互いにって言ってたもんね、あはは……」
二人で顔を赤くして笑い合う。
［繭子］：「でも、すっごく嬉しいよ。そう言ってもらえて、お姉ちゃん幸せです」
［吹雪］：「本心を言っただけだよ」
［繭子］：「その本心ってのがすごく嬉しいです、ワタシ」
［吹雪］：「……そういう姉さんは？　何か欲しいものとかないのか？」
［繭子］：「へ？」
［吹雪］：「姉さんはないのか？　欲しいものとか。俺だって聞く権利くらいあるだろ？」
［繭子］：「あ、そっか。……バレンタインとかとは違うもんね～」
［吹雪］：「そうだ、クリスマスに性別は関係ない。何かないのか？」
［繭子］：「うーん、ワタシもふーちゃんと同じ気持ちなんだよね～。あ、言ったほうがいいかな？」
［吹雪］：「いや、大丈夫だ。気持ちは伝わってるから」

［繭子］：「そう？　んー、でもこのままだと何か味気なくないかな？」
［吹雪］：「そんなことないだろ？　気持ちに気付いただけでも、十分じゃないか」
［繭子］：「そうなんだけど……あれ？　――そうだ、これにしよう！」
［吹雪］：「な、何だ？」
［繭子］：「ねえふーちゃん。さっき、姉さんっていうプレゼントをもらえただけで嬉しいって言ってくれたよね？」
［吹雪］：「あ、ああ。言ったよ」
［繭子］：「――それにしよう」
［吹雪］：「ん？」
［繭子］：「ふーちゃんに、ワタシ自身を上げるの」
［吹雪］：「……待て、それってつまり」
［繭子］：「ワタシの体、ふーちゃんに上げる」
［吹雪］：「なっ――っ！？」
驚きすぎて、声にならなかった。

繭子ルート・モルデント（２１）

［吹雪］：「ね、姉さん、本気で言ってるのか？」
［繭子］：「もちろん、本気じゃなきゃこんなこと言わないよ」
［吹雪］：「だって、姉さん……」
［繭子］：「言っておくけど、ワタシだって人並みには性知識あるよ～？　それ関係の本も読んだことあるよ～ワタシ、教師だから」
［吹雪］：「いや、そういうことを言ってるんじゃなくてだな」
確かに性知識を持っていたこともちょっと驚きだが、問題はそっちじゃなく。
［吹雪］：「姉さん、その……経験、ないだろう？」
［繭子］：「もちろん、ふーちゃんしか好きになったことないから」
［吹雪］：「やっぱり、そうだよな」
［繭子］：「ふーちゃんは？　どーてーなの？」
［吹雪］：「う……ああ、そうだ」
［繭子］：「そうなんだ、ちょっと意外」
［吹雪］：「どういう意味だ？　それは」
［繭子］：「ふーちゃん、モテそうだから。付き合った経験はなくとも、そっちの経験はあるかもって思ってたからー」
［吹雪］：「俺は好きな女性以外としたいとは思わん」
［繭子］：「おお、男らしい～」
［吹雪］：「まあ、そこはいいんだよ。俺が言いたいのは……初めての相手が、俺でいいのかってことだ」
確かに恋人ではあるが、弟であることも事実だ。家族に初めてを捧げるというのは、色々とハードルが高いはずだ。
［吹雪］：「姉さんは、弟でもある俺に抱かれることに、抵抗はないのか？」
［繭子］：「その質問、ふーちゃんにそっくり返すよ～。ふーちゃんは？　ワタシを抱くことに抵抗あったりする？」

［吹雪］：「それは……」
ちょっと考えてみる。
［繭子］：「どお？　ある？」
［吹雪］：「……特にはない」
姉であるとしても、好きな人に変わりない。好きな人となら、そういう関係になりたい。

繭子ルート・モルデント（22）

［繭子］：「でしょう？　だったら、ワタシも同じだよ～。ふーちゃんが弟だとしても、好きな人には変わりないもん。捧げたいって、思うよ、心から」

［吹雪］：「……姉さん」

［繭子］：「あ、でもその前に一つ――」

［吹雪］：「？」

［繭子］：「ワタシたちまだ、キスとかしてなかったよね？」

［吹雪］：「ああ、してないな」

抱き合いはしたが、その過程にはすすんでない。

［繭子］：「よかったら、恋人の誓いのキスがしたいな。えへへ、結局お願いしちゃったね」

［吹雪］：「心配ない、俺もそう思ってた」

［繭子］：「じゃあ、気持ちのぶつかり合いで相殺だね」

［吹雪］：「ああ」

俺は姉さんの背中に手を回した。

［繭子］：「わー、何か緊張するよ～」

［吹雪］：「心配ない、俺も緊張してる」

［繭子］：「やっぱり、ワタシたちは姉弟だね～」

［吹雪］：「こればっかりは、姉弟じゃなくてもなると思うぞ」

好きな人とキスをするというのは、誰だって緊張するものに変わりはないはず。

［吹雪］：「上手にできる自信はないが……」

［繭子］：「そういう心配はいらないよ？　ふーちゃん。初めてなんだもん、上手か下手かなんて判断できないんだから」

［吹雪］：「まあ、そうなんだろうが……」

［繭子］：「それに、ふーちゃんにしてもらえるだけで、ワタシにとっては素敵なことだから」

［吹雪］：「……」
［繭子］：「んふふ、赤くなっちゃった」
［吹雪］：「そりゃそうだろ……」
［繭子］：「二人でちょっとずつ成長していければいいよ。ね？」
［吹雪］：「そうだな」
［繭子］：「――というわけで。んー」
姉さんは目をつぶって唇を上向けた。後は俺が、唇を触れ合わせればいい。

繭子ルート・モルデント（２３）

［吹雪］：「……」
口に溜まった唾を飲み込み、俺はゆっくりと顔を近づける。
［繭子］：「ん……」
そして、互いの唇が触れ合った。
［繭子］：「ちゅ……ちゅ……」
［吹雪］：「……」
ピッタリ重なって、姉さんの唇の柔らかさを感じる。程よい弾力が適度に心地いい。
［繭子］：「ん……」
触れ合った唇から姉さんの温度を感じる。
［繭子］：「ちゅ……」
［吹雪］：「ん……」
［繭子］：「――はぁ、はぁ……」
三十秒程した後に、俺は唇を離した。
［吹雪］：「ど、どうだった？」
［繭子］：「うん、ふーちゃんの体温が流れ込んできて、何て言うか……幸せでした」
［吹雪］：「俺も、そんな感じだ」
［繭子］：「あはは、ホント～？」
［吹雪］：「上手い言葉が、すぐに浮かんでこない」
ボキャブラリーの貧困さがここにきて出てしまった。
［繭子］：「じゃあもう一回、幸せを味わってもいいかな？」
［吹雪］：「ああ、もちろん」
［繭子］：「じゃあ、今度はワタシからするね」
［吹雪］：「わ、分かった」
［繭子］：「目、つぶっててね」
どうやら俺がしたのと同じシチュエーションでしたいらしい。俺

は言われたとおりに目をつぶった。
［吹雪］：「……」
キスを待つ間、自分の心臓の鼓動がとてもはっきりと聞こえる。
外に飛び出てきそうな程だった。
［繭子］：「――ん」
そして、二回目の唇が重なった。
［繭子］：「ん、ちゅ……」
俺の頬を抑えながら、姉さんは俺の唇を固定する。
［繭子］：「ん……」
真正面からではなく微妙に角度をずらした口づけは、最初のものとは違う感触があった。
［繭子］：「ん、んん……」
［吹雪］：「……」
触れ合わせているだけだけど、それだけで気分が高揚してくる。
それはきっと、恋人である姉さんだからなんだろう。

繭子ルート・モルデント（２４）

［繭子］：「ん、ちゅ」
隙間なく重なった口では息ができない。それは姉さんも同じのようで――。
［繭子］：「はふ……はぁ、はぁ」
限界と同時に、互いの唇は離れた。
［繭子］：「はあ……あのまましてたら、窒息してたかもしれないね」
［吹雪］：「鼻では、息できるだろ？」
［繭子］：「できるけど、ちょっと恥ずかしいというか……鼻息荒げてるのは聞かれたくないじゃん？」
［吹雪］：「まあ、確かに」
［繭子］：「キスって、思ったよりも難しいんだね」
［吹雪］：「そうだな」
［繭子］：「でも……気持ちが直に伝わってくるから好き」
［吹雪］：「ああ」
言葉を交わさなくても、心が通じ合ってるのを実感した。
［繭子］：「えへへ、癖になっちゃうかもしれないね～。やめたくなくなりそう」
［吹雪］：「別に、今はやめる必要ないんじゃないか？」
［繭子］：「おお、ふーちゃんからの誘いの言葉」
［吹雪］：「俺だって、姉さんと同じ気持ちなんだよ」
［繭子］：「えへへ、そっか～。えへへへ」
［吹雪］：「随分笑うじゃないか」
［繭子］：「だって、嬉しいんだもん♪　ふーちゃんと心が一つになっているのが」
［吹雪］：「そうか？」
［繭子］：「うん！　とっても」

屈託のない、俺の大好きな笑顔だった。
［繭子］：「じゃあ、お言葉に甘えて――ん」
［吹雪］：「んっ！？」
跳ねるように、姉さんは俺に唇を押し付けた。勢いがついた分、お互いの唇の密着度がさっきよりも高い。
［繭子］：「んん……ちゅ」
今日三回目のキス。それは、先程の二回よりも少し濃厚だ。
［繭子］：「ん、ちゅ」
先程のキスの影響なのか、姉さんの口元は少し濡れていて、今まであまり感じなかった色気のようなものを感じた。
［繭子］：「ん……」
［吹雪］：「……」
首元に腕を絡め、俺の体にしがみつきながら。その体を俺も後ろから支えた。
［繭子］：「ん、ふーちゃん」
口の隙間で姉さんが俺の名前をつぶやく。息を吸い込むと、またその隙間をピタリと閉じた。どうやらまだ離さないらしい。
［繭子］：「ん、はぁ」
［吹雪］：「ん……」
潤った唇はほのかに甘く、俺の脳内に刺激を送り込んでいく。
［繭子］：「ん、ん」
姉さんの顔をチラッとのぞくと、何とも言えない女の子の顔をしていた。それは、今まで目にしたことのない姉さんの顔だった。
［繭子］：「ん、はぁん……」
［吹雪］：「ん……」
［繭子］：「――ぷはっ！」
三度目のキスは、先程よりもかなり長時間に渡って続いた。
［繭子］：「えへへ、途中で息をしたのが正解だったね」
［吹雪］：「まあ、長くしてたほうがいいってわけでもないけどな」
［繭子］：「でも、せっかくのキスなんだし、なるべく重ねていた

いって思うんだ、ワタシ」
［吹雪］：「分からなくはないけどな」
［繭子］：「――じゃあそろそろ、ふーちゃんにバトンタッチしようかな」
［吹雪］：「あ、ああ」
キスが一旦終わりを告げ、俺に主導権を譲るということは――。
［繭子］：「ワタシを、ふーちゃんに捧げます」
心臓がドクンと高鳴った。
［繭子］：「やっぱり、ちょっと恥ずかしいね」
［吹雪］：「心配ない、俺もだ」
［繭子］：「あはは、さっきからふーちゃんそればっかりだね」
［吹雪］：「本当のことだからな」
姉さんだけがそう思っているんじゃない。
［繭子］：「恥ずかしいけど、ふーちゃんだったら大丈夫だよ」
［吹雪］：「そう言ってくれると、嬉しい」
［繭子］：「えへへ、よろしくね？　ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、こちらこそ」
……。

繭子ルート・モルデント（２４）（後書き）

次回、繭子ルート、ラブシーンに突入します。
そちらのほうもよろしくお願いします。

繭子ルート・モルデント（２５）

［繭子］：「ん～」
［吹雪］：「何だ？　どうかしたのか？」
俺の横にピッタリくっつく姉さんに問いかける。
［繭子］：「いやーその、本当に身も心も恋人関係になったんだなーって実感してたの」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
［繭子］：「もう、引き返せないね」
［吹雪］：「引き返したいのか？」
［繭子］：「まさか、そんなの絶対イヤ」
きっぱり言い切ったな。
［繭子］：「神様に命令されても断る自信はあるよ？　ワタシ」
［吹雪］：「そりゃあすごいな」
［繭子］：「だって、それだけ嬉しかったんだもん。ふーちゃんとこういう関係も結べたことがね」
［吹雪］：「それは、俺も一緒だ」
［繭子］：「んふふー、繭子幸せです♪」
そう言って、俺の首筋に鼻面を寄せた。
［吹雪］：「おい、くすぐったいって」
［繭子］：「いいじゃーん、愛情表現だよ」
［吹雪］：「愛情は嬉しいが……ちょっと」
［繭子］：「ワタシに鼻面を寄せられると能力が開花するよ」
［吹雪］：「どんな鼻だよ、それは」
［繭子］：「ふーちゃんしか開花しないけどね～」
［吹雪］：「仮にその能力が本当だとして、一体どんな能力が開花するんだよ」
［繭子］：「うーんと……」
［吹雪］：「考えてなかったのか？　姉さん」

［繭子］：「その場の思いつきで言っちゃったからね～」
［吹雪］：「話を広げたいのなら多少シナリオを練ってからにするように」
［繭子］：「はい、気を付けます。――というわけで」
スリスリスリ……。
［吹雪］：「おい、だからくすぐったいって」
［繭子］：「ちょっと我慢してよ～。こうしてると気持ちいいんだもん」
［吹雪］：「……ったく」
今日は、我慢することにしよう。
――大事な話が、もう一つ残っているから。想いを伝えてから、言おうと思っていたことだ。

繭子ルート・モルデント（２６）

［吹雪］：「なあ、姉さん」
［繭子］：「ん？　何～？」
［吹雪］：「俺のやってる練習に関してなんだけどさ、本番の少し前に、俺の魔力制御の練習を見てもらえないか？」
［繭子］：「練習を見る？」
［吹雪］：「ああ。まだ完成はしていないけど、学園長に手伝ってもらって、少しずつだけど自分の力のセーブができるようになっているみたいなんだ。今の調子でいけば、本番も安心して詠唱を行うことが可能かもしれない」
［繭子］：「そっか、ふーちゃんの努力があってこそだね」
［吹雪］：「その成果を、姉さんに見てもらいたいんだ、俺」
［繭子］：「ワタシに？」
［吹雪］：「ああ、姉さんに」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「姉さんはあの時、危険を省みずに俺を助けてくれた。本当に頼もしかったし、本当に感謝している。だから、その恩返しってわけではないけど、何度も俺を救ってくれた姉さんに、自分の成長を見せたいんだ。そして、安心してほしいんだ。俺のせいで何度も、怖い想いをさせてしまったしな」
［繭子］：「何度も言ってるけど、ふーちゃんは悪いこと一切してないよ？　あれは事故なんだから」
［吹雪］：「ああ、分かってる。でも、努力次第では未然に防ぐことも可能だと思うからな。それができるのは、他ならぬ俺だから。そのためにも、姉さんには横にいてほしい。姉さんがいるだけで、すごく安心するからさ」
［繭子］：「……ふーちゃんの成長力は底が見えないね～」
［吹雪］：「まだまだ未熟さ、俺なんて」

［繭子］：「成長したいって想いがある時点でふーちゃんは相当できた子だよ～。最近は高みを目指さない子が多発してるんだから」
［吹雪］：「まあ、まともに育つことができたのも、父さんと母さんのおかげだな」
［繭子］：「んふふ、そうだね」
［吹雪］：「お願いできるか？　姉さん」
［繭子］：「もっちろんだよ！　喜んで参加させてもらうよ」
［吹雪］：「ありがとう」
［繭子］：「弟と恋人さんの目標は、ワタシの目標だからね。状況によっては助力するからね」
［吹雪］：「はは、サンキュー。でも、姉さんはピアノをマスターしないといけないだろう？　まずはそっちを優先してくれよ」
［繭子］：「そうだね。本番までもっともっとマスターしないと」
［吹雪］：「期待してるぞ、俺」
［繭子］：「うん！」
――俺たちの新しい関係が始まった。

繭子ルート・アクセント（1）

12月26日（日曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「今日もメニューは昨日と同じく三回だ。だが、今日が成功すれば明日はブレスレットを外して特訓をしようと思っている。なに、今の吹雪ははっきりとした成長が確認できている。きっとうまくいくと思うぞ」

［吹雪］：「期待に答えられるよう、精一杯頑張ります」

［セフィル］：「うむ。では、早速練習を始めようか」

［吹雪］：「はい」

いつものように、手にブレスレットをはめる。練習時に必ずつけるからか、大分腕にも馴染んできた。だが、これに頼らずともできるようになることが、当面の目標だな。集中して――。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

……。

……。

5、4、3、2、1……0。俺の詠唱は自然終了する。

繭子ルート・アクセント（2）

［セフィル］：「よーし、上出来だぞ吹雪」
［吹雪］：「はぁ……はぁ……」
俺はその場に膝をついた。上手くいくようになっても、魔力を全て使い切るのはかなりの疲労となる。だがそれだけに、良い特訓になったと実感できる。
［セフィル］：「大丈夫か？　ほら、飲むといい」
［吹雪］：「ありがとうございます」
学園長からいつものドリンクを手渡される。
［セフィル］：「いいじゃないか吹雪。三回までなら、無難にこなせるようになってきてるじゃないか」
［吹雪］：「はい、何とか。嬉しい限りです」
［セフィル］：「魔力の制御が安定してきている証拠だな。ブレスレットも光を見せることがなかったし」
［吹雪］：「外しても今の状態を保てるのが理想ですね」
［セフィル］：「そうだな。だが、今の吹雪ならば、それも可能だと私は踏んでいるがな。今日の集中力はかなり目を見張るものだった。きっと恐怖などに揺さぶられることはないと思うぞ」
［吹雪］：「ありがとうございます。それを現実にしたいですね」
［セフィル］：「うむ、頑張ろうじゃないか」
［吹雪］：「――学園長、一つお願いがあるんですが」
［セフィル］：「ん？　何だ？」
［吹雪］：「本番前、魔力制御の最終チェックを行う時、姉さんに立ち会ってもらってもいいでしょうか？」
［セフィル］：「繭子にか？」
［吹雪］：「はい。姉さんには、いつも魔力の暴走で世話になってきているんで、自分の成長を見せて安心させてあげたいって思って。ちょっとした恩返しがしたいんです」

［セフィル］：「ふむふむ。そういうことなら全然構わないぞ、存分に成長を見せるといい」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「当然のことだ。繭子だって、吹雪の成長を見届けたいと思うだろうしな。私が繭子ならば、確実にそうしてるはずだし」
［吹雪］：「学園長が姉さん……想像がつかないですね」
［セフィル］：「うむ、私も想像つかない。……私にロリは似合わないからな」
［吹雪］：「ろ、ロリ？」
［セフィル］：「あれ？　言葉の使い方を間違えたか？」
［吹雪］：「いえ、別にそういうわけではないんですが……」
学園長の口からロリという言葉が出たのが驚きだった。しかも、姉さんはロリの部類に含められているのか。……間違ってはないけどな。
［セフィル］：「そもそも、この歳では無理があるからな」
［吹雪］：「げ、元気出してください。学園長はまだまだ若くて素敵ですよ」
［セフィル］：「吹雪……どうしよう、ちょっとキュンときてしまったぞ」
［吹雪］：「え、ええ？　そ、それはちょっと……」
［セフィル］：「吹雪はオバサンは嫌いか？」
［吹雪］：「そ、そういうわけではなくて……」
というか、学園長は年相応には見えない。
［吹雪］：「カホラ先輩に怒られちゃいますよ、そういうことを言っちゃうと」
［セフィル］：「む、それはいかんな。回避しなければ」
学園長は周囲を見渡した。よっぽど先輩に怒られるのが嫌らしい。
［吹雪］：「と、とにかく。よろしくお願いします、学園長」
［セフィル］：「うむ、了解した。最終調整は２９日に行う予定で

いる。その日を繭子に教えてあげてくれ」
［吹雪］：「はい、分かりました」
俺の成長を、姉さんにしっかり見せなければ。

繭子ルート・アクセント（3）

［場所：社会科室］

［繭子］：「――そっか、２９日だね。うん、分かった」
［吹雪］：「成長した俺を見せてやる」
［繭子］：「ふふ、頼もしいな～かっこいいよ～」
［吹雪］：「既に制御をマスターしてれば、もっとかっこいいんだろうが……」
［繭子］：「そこはほら、触れない方向でいかないと。完璧な人間なんていないんだから」
［吹雪］：「それもそうか」
［繭子］：「そう、大事なのは今なんだから。努力した分だけ、必ず見返りは来るはずだよ」
［吹雪］：「……珍しく姉さんが良いことを言ってるな」
［繭子］：「珍しくは余計じゃないの？　ふーちゃん」
［吹雪］：「いや、珍しくをつけないといつもの姉さんではない」
［繭子］：「う、言い切っちゃうんだね……そこを……」
［吹雪］：「当然だろ」
［繭子］：「……はい、その通りです」
［吹雪］：「分かればいいんだ、分かれば」
とにかく、２９日までに特訓を積んでいこう。
［繭子］：「ねえふーちゃん。この後って予定ある？」
［吹雪］：「いや、特にないぞ」
［繭子］：「そお？　じゃあさじゃあさ、ワタシと一緒に――」
［吹雪］：「そうだな、遊びに行くか」
［繭子］：「まだ全部言い切ってないのに～」
［吹雪］：「言い切らなくても分かるよ。今まで何度となく誘われてきたんだから」

姉さんの顔色を見るだけで、大体のことは読み取れる。
［吹雪］：「合ってるだろ？　言いたかったことは？」
［繭子］：「うん、それはもうバッチリ」
［吹雪］：「いいよ、休日に家にいるのもつまんないし」
［繭子］：「うわ～」
［吹雪］：「何だよ？」
［繭子］：「いやー、そのー……いつもふーちゃんに遊びを誘っては断られてきたから、こうまですんなりオッケーがもらえると逆に不安になって……」
［吹雪］：「何か裏があるんじゃないかってか？　ねぇよ、そんなの」
［繭子］：「そ、そお？」
［吹雪］：「嘘ついてもメリットねぇだろ？　それに、断る時は必ず何かしらの理由があっただろう？　テスト前だとか、遊びに行く費用がないとか。今日はそれがないし、時期も休日、息抜きには最適な一日だろう。そんな日にずっとここにいるのも勿体ないし、違うか？」
［繭子］：「うん、違ったらそもそも遊びに誘わないから」
［吹雪］：「だったら、いいに決まってる。遊び、行こうぜ」
言い方によっては、デートになるんだろうが恥ずかしいから俺は言わない、つか言えない。

繭子ルート・アクセント（4）

［繭子］：「やった～、ふーちゃんと外出ができるよ～」
［吹雪］：「具体的には、どこに行きたいんだ？」
［繭子］：「うーん、そういえば考えてなかったな～」
［吹雪］：「考えてないのかよ……てっきりあるかと思ったが」
［繭子］：「正直言っちゃうと、ふーちゃんと外出できればそれでいいなーって思ってたの。ふーちゃんが横にいるだけで、何でも楽しくなると思うから」
［吹雪］：「……面と向かって言われると……」
［繭子］：「あ、ふーちゃん顔が赤くなった」
［吹雪］：「そりゃあなるだろ、普通」
［繭子］：「えへへ、赤くなるふーちゃんもかっこいいな～」
［吹雪］：「その発言はよく分からないぞ」
［繭子］：「言葉通りの意味だよ？　照れてても素敵ってことだよ」
［吹雪］：「また、そんなことを」
［繭子］：「えへへー、なかなか治ってくれないね」
［吹雪］：「姉さんがそういうことを言うからだろう？」
［繭子］：「あはは、まあまあ気にしないで。嘘は言ってないから」
［吹雪］：「……仕方ねぇな」
［聖奈美］：「……ねえ、カホラさん」
［カホラ］：「ええ、あれは確実に何かあったわね。そうでしょう？　フェルシア先生」
［フェルシア］：「あはは、まあ二人が出かけた後にでも話すわ。あの感じなら、バレた所で何とも思わないでしょうし」
［聖奈美］：「むしろバレたくないのにあんな風にしてるのなら、若干怒りたいくらいですけどね」
［舞羽］：「ま、まあまあ仲が良くて何よりじゃないかな」
［聖奈美］：「須藤さんは優しいのね」

［舞羽］：「まあ……ちょっと、悔しい気もするけどね」
［聖奈美］：「え？」
［舞羽］：「な、何でもない。気にしないで」
［繭子］：「じゃあ、準備するから少し待っててね？　ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、俺も準備済ましておくよ。……ん？　そこ、固まってどうかしたのか？」
［聖奈美］：「別に、何でもないわよ」
［吹雪］：「そうか？　あ、俺たちちょっとでかけてくるから――」
［聖奈美］：「大丈夫よ、聞こえてるから。夕ご飯までには帰ってくるのよ」
［吹雪］：「あ、ああ」
［舞羽］：「楽しんできてね、吹雪くん」
［吹雪］：「ああ」
……何だか偉く話が早かったな。まあ、別にいいんだけど。

繭子ルート・アクセント（5）

［場所：商店街］

［繭子］：「――何だかんだ言って久しぶりだよね。こうして二人で街に出てくるの」
［吹雪］：「そうだな。ここ最近は練習も根を詰めてたし」
［繭子］：「でも、街並みは特に変わってないね」
［吹雪］：「そりゃそうだろ」
ここ数日で変わっていたら、ちょっとした事件だ。
［繭子］：「久しぶりの街だし、存分に楽しんじゃおーっと」
［吹雪］：「どこに行きたいんだ？　姉さん」
［繭子］：「うーんと……あ、じゃああそこ」
姉さんが指を差したのは洋服屋だった。
［吹雪］：「服が欲しいのか？」
［繭子］：「それもそうだけど、ふーちゃんに選んでほしいんだよね～。恋人がお気に入りの服を着るのも悪くないかなーって」
［吹雪］：「つまり、俺のリクエストに応えてくれると」
［繭子］：「そういうことかな」
［吹雪］：「……なかなかに嬉しいことを言ってくれるな」
［繭子］：「えへへ、女性ものの服屋に入るのは抵抗あるかもしれないけど、いいかな？」
［吹雪］：「なくはないが、姉さんの誘いは嬉しい限りだ。多少のリスクがあっても入る」
［繭子］：「よーし、じゃあレッツゴー」
……。

繭子ルート・アクセント（6）

［繭子］：「ブーブー……」
［吹雪］：「まあまあ、元気出せよ姉さん」
［繭子］：「そりゃあ、フェルには何度も言われたりしてるから分かってるつもりだよ？　でも、やっぱり本気で間違われるのはどうしてもね」
［吹雪］：「店員も悪気があったわけじゃないんだ。何度も謝ってただろう？」
［繭子］：「それはそうだけどー……そこまで幼く見られてるんだーって、ちょっぴりブレイクハート」
――何があったか、分かっているとは思うが、姉さんは先程の店で俺の妹だと勘違いされた。しかも、十代前半くらいのお嬢ちゃんに……。
まあ、ぶっちゃけてしまえば店員さんがそんな風に間違うのも分かる。姉さんの容姿はかなり若いからな。スーツを着ると多少はごまかせるんだが、今は私服どうしてもカバーは仕切れない。
［繭子］：「どうにかならないものかな～」
［吹雪］：「年齢ごまかしてるわけじゃないんだ。堂々としてればいいんじゃないか？」
［繭子］：「でもさーふーちゃんは分かってくれる？　何か物を購入するたびに年齢を尋ねられるワタシの気持ち。結構苦しいものですよ～？」
［吹雪］：「……分かってはいるつもりだ。だとしても、ドンマイとしか言いようがない」
［繭子］：「うへー、やっぱり～」
［吹雪］：「だが、これだけは言える」
［繭子］：「ん？　何？」
［吹雪］：「どんな風に見られようが、俺は姉さんが好きなことに

変わりはないってことだ。幼く見えようがなんだろうが、姉さんは俺の恋人だってこと」

［繭子］：「ふーちゃん……うわああ、どうしよう、すごく恥ずかしいよ～」

［吹雪］：「心配するな、俺もすごく恥ずかしい」

［繭子］：「だと思ってたけど、じゃあ何でこんな街中でそんなことを～？」

［吹雪］：「言われっぱなしもあれだと思ってな。それに、今のうちに免疫をつけておこうとも思ってたから」

［繭子］：「でも、まだ抜け切れないと」

［吹雪］：「そう簡単に抜けるものじゃなさそうだ。そもそも、経験もほとんどなかったからな。長丁場になると思うな」

［繭子］：「大丈夫、それはワタシも一緒だから。ふーちゃんだけじゃないよ」

［吹雪］：「そうだな」

［繭子］：「――ねえふーちゃん、ワタシ甘いものが食べたくなってきたよ～」

［吹雪］：「甘いもの？」

［繭子］：「うん、つまりスウィーツ。……あ、女の子の別称じゃないよ？」

［吹雪］：「そんなことは分かってる」

［繭子］：「ふーちゃんは女子をそんな風に見てないよね？」

［吹雪］：「見てるわけないだろ。見てたら女子に興味は持たねぇよ」

［繭子］：「そうだよね、うん。安心しました」

［吹雪］：「そもそもどうしてそんな質問をした？」

［繭子］：「最近、そういう男子もいるって聞いたからさ～」

［吹雪］：「ごく一部の話だよ、それは」

［繭子］：「そうだよね～やっぱり」

大分変な会話をしてしまったな。

［吹雪］：「甘いものなら何でもいいのか？」
［繭子］：「うん、美味しければ文句はありません」
実はそれが一番の難題だったりするんだが……だがまあ、商店街で甘いものが食える場所と言ったら自然に決まってくる。
［吹雪］：「――クレープ屋でいいか？　もう少し奥にあるところの」
［繭子］：「うん、クレープは大好きだよ～」
日によって開いてたり閉まってたりするんだけど……多分大丈夫だろう。
……。

繭子ルート・アクセント（7）

［吹雪］：「こんにちは」
［クレープ屋］：「いらっしゃい～……あら？　見たことある顔ね」
［吹雪］：「いつも美味しく食べさせてもらってます」
［クレープ屋］：「あ、やっぱりそうよね。間違いじゃなくてよかったわ」
　ここのクレープ屋の店員さんは結構フレンドリーで、たまにこうして話をすることがある。最近はあまり来ることができなかったが、それでも覚えていてくれてたらしい。
　俺は甘いものはあまり得意ではないんだが、ここのクレープは甘さ控え目だから俺の口にも合う。
［クレープ屋］：「今日は一人じゃないのね。何？　彼女？」
［吹雪］：「はい、そうです」
［繭子］：「こんにちは～」
［クレープ屋］：「やっぱりそうなんだ～。へー、かなりかわいいわね」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「はは、ありがとうございます」
［クレープ屋］：「良さそうな子じゃないの、大切にしてあげないとね」
［繭子］：「子？　……ううん」
［クレープ屋］：「あら？　あたし、傷つくようなこと言ったかしら？」
［吹雪］：「あー、実はですね……」
　俺は姉さんの年齢をそっと伝えてあげた。
［クレープ屋］：「ええ～！？　ほ、ホントに～？」
　案の定ぶったまげていた。
［クレープ屋］：「それなのにあたしったら子とか言っちゃって…

…すいませんでした」
［吹雪］：「いいんです、よく言われることですから」
［繭子］：「う、うん……」
［吹雪］：「気にしないでください」
［クレープ屋］：「そっかー、教師なんだー……ってことは、お二人は教師と生徒の関係ってことよね？」
［吹雪］：「はい、そうですね」
［クレープ屋］：「――つまり甘く危険な関係ってことよね？」
［吹雪］：「そ、そうなんですかね？」
確かに教師と生徒はタブーと言われるけど、俺たちの関係も関係だからな……そこまで危険とも思えない。

繭子ルート・アクセント（8）

［クレープ屋］：「そうよ、きっとそう」
［吹雪］：「は、はあ」
［クレープ屋］：「あたし、そういうの大好きなのよ～」
［吹雪］：「そ、そうなんですか？」
［クレープ屋］：「だって、恋は障害があるほうが燃えるでしょう？　生徒と教師の関係なんて特にそう。いつ関係が壊れてもおかしくないような状況じゃない……ロマンがあるわ」
［吹雪］：「そういう考えですか……」
［クレープ屋］：「頑張ってね？　応援してるから」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［クレープ屋］：「サービスでプリントッピングで乗せてあげる。失礼なこと言っちゃったお礼よ」
［繭子］：「ホント？　わーい」
［吹雪］：「すいません、わざわざ」
［クレープ屋］：「いいのいいの。その代わり、またお店に顔出してちょうだいよ？」
［吹雪］：「はい、もちろんです」
［クレープ屋］：「じゃあ先生、またのお越しを」
［繭子］：「うん、ありがとう～」
姉さんはプリンのトッピングで元気を取り戻していた。
［吹雪］：「――悪い人じゃないだろう？」
［繭子］：「うん、そうだね」
［吹雪］：「もちろん、プリンをくれたからってだけで言ってないよな？」
［繭子］：「うん、話を聞いててもとっても親しみやすそうな人だったのが分かるよ」
［吹雪］：「なら、よし」

［繭子］：「伊達に教師やってませんよ～人を見る目はそこそこありますので」
［吹雪］：「その辺は心配しなくて済むな、じゃあ」
［繭子］：「心配？」
［吹雪］：「へんなおじさんにホイホイついて行ったりする心配」
［繭子］：「そんなことしないよ～、そういうのが危険だってくらいちゃんと分かってるんだから～」
［吹雪］：「だよな、それを生徒に教える側だもんな」
［繭子］：「そうだよ～、も～ふーちゃんったら～」
［吹雪］：「冗談だよ、冗談」
［繭子］：「ブー……それよりふーちゃんよかったの？　クレープ一つしか頼まなくて」
［吹雪］：「ああ、いいんだ」
さっき昼飯を食べたばかりでこの大きいクレープを食い切れるとは思えないからな。あの店、かなりサービスが良いから基本的にクレープのサイズは大きいんだ。それにプリンがプラスされてるから尚更ボリュームが半端ない。

繭子ルート・アクセント（9）

［吹雪］：「ちょっと齧らせてもらえれば俺は満足だからよ」
［繭子］：「そお？」
［吹雪］：「姉さんが食いたいって言ったんだ。思う存分食べろよ」
［繭子］：「うん、ありがと」
……向けられた笑顔に、親心のようなものを感じたとは言うまい。
［繭子］：「あむ……あむ……わー、美味しい～」
［吹雪］：「だろ？　俺おススメの店だからな」
［繭子］：「確かにこれなら、ふーちゃんが食べやすいって言ってたのが分かるよ～」
スプーンでプリンをすくって口に運ぶ。
［繭子］：「プリンも美味しい～」
［吹雪］：「よかったな」
［繭子］：「ふーちゃんも、分け合って食べよ～？」
［吹雪］：「ああ、じゃあ一口もらうか？」
［繭子］：「待ってて……はい」
［吹雪］：「……こ、これは？」
［繭子］：「あ、あーん？」
だよな、スプーンを目の前に差し出されるってことは。……すごく恥ずかしいが、それは姉さんも同じだろう。恋人同士だし、これくらいは許されるはず。
――よし。
［吹雪］：「あむ……」
［繭子］：「あ、食べた……」
［吹雪］：「うん、普通に美味い」
［繭子］：「味、分かんなくならなかった？」
［吹雪］：「大丈夫だ。逆に冷静に味わってる自分がいたから」
［繭子］：「あはは、さすがふーちゃんだね」

何がさすがなのかは分からないが……まあ、こういうのも悪くないかもしれないな。

［繭子］：「あむ……あむ……」

［吹雪］：「姉さん、そっちのクリーム垂れてきてるぞ」

［繭子］：「あ、ホントだ……んむ、ぺろ……」

［吹雪］：「……」

何だ？　普通にクリームを舐めてるだけのはずなのに、何で変な風に見えてくるんだ？

［繭子］：「ぺろ……あむ、ちゅる……」

やっぱり、昨日のあれが原因なんだろうか？　そういうことに敏感になってしまっているのか？　……今はそういう空気ではない。煩悩は退散させなければ。

［繭子］：「ちゅる……ん、ぺろ……ん？　ふーちゃん？　どうしたの？」

［吹雪］：「え？　あ、いや……何でもない」

［繭子］：「そお？　もう一口食べる？」

［吹雪］：「いや、大丈夫だ。姉さんが食べてくれ」

［繭子］：「そお？　あむ……あむ……」

……分別はつくほうだと思っていたんだが、思ってただけだったのかもしれないな。

……。

繭子ルート・アクセント（１０）

［繭子］：「はー、美味しかった～余は満足じゃ」
［吹雪］：「そりゃよかった」
［繭子］：「リピーターになりそうな予感がするね～」
［吹雪］：「なってくれると、あの人も喜ぶと思うぞ」
［繭子］：「えへへ、また機会があったら行こうかな」
［吹雪］：「いいんじゃないか？　止めはしないぜ」
［繭子］：「その時もできればふーちゃんと一緒に行きたいな～」
［吹雪］：「ん？　何でだ？」
［繭子］：「ふーちゃんが横にいると、美味しさが倍増するから」
［吹雪］：「俺にそんな作用はないと思うが……」
［繭子］：「あるんだよね～それが。ワタシ感じちゃったもん」
［吹雪］：「際ですか……」
［繭子］：「うん、際です」
理由は……多分なさそうだから聞かなくていいだろう。おそらくフィーリングでしゃべっているだろうから。
［繭子］：「いいでしょ？　ふーちゃん」
［吹雪］：「まあ、それは構わないが」
［繭子］：「えへへ、そう言ってくれると思った」
姉さんは笑って俺の左手の隙間に右手を差し入れた。
［吹雪］：「おっと」
［繭子］：「えへへ、ようやくできたよ」
［吹雪］：「機会伺ってたのか？」
［繭子］：「うん、今までクレープ食べてたからね。クリームで服を汚しちゃいけないし、手がフリーになった今なら問題なくできると思って」
［吹雪］：「……立派な判断ができるようになったな」
［繭子］：「ワタシは、日々成長していくからね」

胸を張ってそう答える。張る胸がないというのは禁句だ。

［繭子］：「……昔はよくこうして歩いてたけど、今やってみるとちょっと違う感覚があるね」

［吹雪］：「例えば？」

［繭子］：「例えば～……いちご？」

［吹雪］：「例えがよく分かんないんだが……」

［繭子］：「甘酸っぱいって言うのかな？　そんな感じがするね、恥ずかしさもあるけど、それでいて充実感もあって」

［吹雪］：「そういうことか……」

［繭子］：「分かってくれたかな？　ワタシの気持ち」

［吹雪］：「まあな。今は……恋人同士でもあるからな」

違う関係性がプラスされるだけでこうまで変わるんだから、人間は不思議だ。

繭子ルート・アクセント（11）

［繭子］：「えへへ、ちょっと照れるけど良い気分だよ」
［吹雪］：「しばらくは、このままだな」
［繭子］：「うん、テキトーにぶらぶらしよ？」
［吹雪］：「姉さんがそうしたいなら」
……。

［繭子］：「ねえふーちゃん、ゲームセンター入ってみてもいい？」
［吹雪］：「ああ、いいぞ」

［場所：ゲームセンター］

［繭子］：「――昔と比べて結構内装が変わったね～」
［吹雪］：「ここは結構コロコロ変わるけどな」
［繭子］：「え？　そうなの？」
［吹雪］：「暇な時に来てるからな」
［繭子］：「じゃあ、ふーちゃんもゲーマーなんだ～」
［吹雪］：「まあ、命までは賭けてないが……暇つぶしにはちょうどいいからな」
間違った使い方をしなければ、そこそこ低予算で遊べるし。
［繭子］：「何かワタシにもできるゲームはないかな～？」
［吹雪］：「見てみたらいいさ、分かる範囲で教えてやる」
［繭子］：「あはは、頼もしい～」
姉さんは楽しそうにトコトコ走り回る。
［繭子］：「へぇ～、こんな風になったんだ～」
［吹雪］：「びっくりか？」
［繭子］：「うん、結構。ワタシが知ってるゲームがほとんどなくなってるから」

［吹雪］：「姉さんが最後に来たのっていつだ？」
［繭子］：「うーんと……教師になってからは初めてだよ」
［吹雪］：「少なくとも三年以上か……そんだけ期間が空いてれば、ほとんど変わってもおかしくはないな」
［繭子］：「あ、でもこれなんかは知ってるよ？　銃撃戦ゲーム、次から次に現れるゾンビとかを撃っていくんだよね？」
［吹雪］：「ああ、そうだ。正確に言えば、それも昔よりもバージョンアップしてるんだが」
［繭子］：「え？　そうなの～？」
［吹雪］：「ああ、そもそも映像が綺麗になってるし、動きもよりリアルになってる。全体的に臨場感がアップしてるんだよ」
［繭子］：「さすがふーちゃん、詳しいね～」
［吹雪］：「三年も月日があれば、技術の進歩も著しいからな。当然といえば当然のことさ」
［繭子］：「何だかかっこいいね、その言葉」
［吹雪］：「いや、事実を言っただけだぞ」
［繭子］：「ふーちゃんが言うと何でもカッコよく見えるんだ～最近のワタシ」
［吹雪］：「じゃあ今の言葉に限ったことでもないだろう」
［繭子］：「その反論すらもカッコいいもん、男らしくて」
［吹雪］：「……一種の病気なんじゃないのか？　それ」
［繭子］：「至って元気だよ？　ワタシ」
［吹雪］：「だとしてもよ……」
［繭子］：「んふふ、だとしたら病気にかけたふーちゃんが責任を持って治さないとね～」
［吹雪］：「どうやったら治るんだよ」
［繭子］：「それは単純だよ。ずーっとワタシと一緒にいて、もちろん死ぬまで」
［吹雪］：「……だったらお安い御用だ」
元からそのつもりで考えていた。

繭子ルート・アクセント（12）

［吹雪］：「でも、病気を移した人間と寄り添ってたら余計病気がひどくなるんじゃないのか？」
［繭子］：「あ、それもそっか。……じゃあいいや、ずっと病気にかかってるよ、そっちの幸せだし」
［吹雪］：「随分あっさりだな」
［繭子］：「かかってたほうがいい病気……ナウい感じが滲み出してるよね」
［吹雪］：「実際はそんな病気ないがな」
［繭子］：「ワタシだけがかかってる病気だね。んふふ」
上目遣いがかなり魅力的だった。
［繭子］：「――ん？　ふーちゃん、あのゲームなんだろ？」
［吹雪］：「ん？　どれだ？」
［繭子］：「あれあれ、裏口のところにあるやつだよ」
姉さんに手を引かれてそこまで行ってみる。
［繭子］：「これこれ。何なに～？　『恋人相性占い』だって。こんなゲーム前からあったっけ？」
［吹雪］：「いや、俺も初めてみるな」
最近稼働し始めたのかもしれない。
［繭子］：「あなたの恋人との相性度、シンクロ率を計測します。あなたとあなたの恋人との仲は果たして――」
［吹雪］：「恋人との相性ね……」
［繭子］：「……ちょっとおもしろそうだね～」
［吹雪］：「そうか？」
［繭子］：「うん。ワタシも女の子、占い関係は結構気になっちゃうから」
［吹雪］：「何で女性の人って、占いとかそういう類のものが好きなんだ？」

［繭子］：「うーん、何て言ったらいいのかな～？　結構みんな本能的なところがあると思うんだよ。好きな人との相性が良かったら嬉しいし、そうじゃなくても頑張ろうって気になるでしょう？」
［吹雪］：「う、うん？」
［繭子］：「ぶっちゃけちゃうと、理由なんてないんだよ～。好きなものは好きだからしょうがないってことで」
［吹雪］：「……随分端折ったな、姉さん」
［繭子］：「上手く言い包める自信がなかったです。すいません」
［吹雪］：「まあ別にいいけどよ」
［繭子］：「――ってことで、一回やってみてもいい？　ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、構わない」
［繭子］：「じゃあ、コインを入れて――」
画面がかわいらしいものに変化した。確実にこの機械は女性層を狙っているものだろう。
［繭子］：「あなたの名前と生年月日を入れてください。大久保繭子……生年月日は――」
入力し終わると、また新たな画面が出てくる。
［吹雪］：「今度は俺の名前と生年月日か」
［繭子］：「大久保吹雪……生年月日は――」
入力し終えると、また新しい画面に変わる。

繭子ルート・アクセント（１３）

［繭子］：「うわぁ、あなたのプロフィールを入れてくださいだって」
［吹雪］：「随分本格的だな」
［繭子］：「えーっと、身長……１４９．９――」
［吹雪］：「ちょい待ち、姉さん」
［繭子］：「へ？　な、何？」
［吹雪］：「その数字、間違ってないか？」
［繭子］：「へ？　な、何で？　ま、間違ってなんてないよ？」
［吹雪］：「じゃあ何故に目がキョドっているんだ？」
［繭子］：「え？　あ、その……」
［吹雪］：「前、１５０がないって俺は聞いた覚えがある。でも、だからって１ミリしか低くないってことはないだろう？　違うか？」
［繭子］：「……」
［吹雪］：「嘘はよくないぞ、嘘は」
［繭子］：「……はい、正直に入力します」
姉さんは身長の項目に１４７．５と記入した。
［吹雪］：「うん、それでよし」
［繭子］：「うう、現実は残酷だよ……」
［吹雪］：「まあ頑張れ」
［繭子］：「な、何を頑張ればいいの？　この場合」
［吹雪］：「それよりほら、他の所も入力しろよ」
［繭子］：「う、うん。――体重、３８．６キロ、血液型、Ｏ型……」
それから２０個程項目を入力すると、今度は俺のプロフィールを問われた。
［吹雪］：「随分時間がかかる占いだな」
［繭子］：「それだけしっかりした答えが返ってくるんじゃないか

な？」

［吹雪］：「そうなのかね？」

［繭子］：「とにかく入力していこうよ～。身長、１７０．３、体重、体重５８キロ、血液型Ａ型……」

［吹雪］：「よく俺の項目をすらすらと入れてけるな……」

［繭子］：「んふふ、だって姉弟でもあるんだから。長い付き合いをしていればこれくらいはスラスラ出てくるよ～」

そういえば舞羽も俺の身長、体重とかバッチリ把握してたっけ…

…ひょっとして近所の奴らには俺の情報が丸分かりなんだろうか？

［繭子］：「一応確認お願い？　合ってるよね？」

［吹雪］：「……ああ、問題ない」

俺の項目のほうが手早く入力できてるという……どこの姉もこういうものなのか？

［繭子］：「――これでいいですか？　だって。最終確認みたいだよ～」

［吹雪］：「オッケーでいいんじゃないか？」

［繭子］：「うん。じゃあ、診断開始！」

姉さんはボタンを押した。

［繭子］：「ドキドキ……ワクワク……」

［吹雪］：「……」

しばらくして――

［繭子］：「あ、出たよふーちゃん」

画面に診断結果が表示された。

繭子ルート・アクセント（１４）

［繭子］：「わーすごい。ふーちゃんとワタシの相性の良さ９４％だって～！」

［吹雪］：「何なに……あなたの彼は冷静で気配りが上手です。あなたが困っている時にいち早く助けに来てくれるような言わば騎士のような人でしょう。彼にはもっと甘えて大丈夫、きっと全てを受け止めてくれるでしょう」

［繭子］：「恋愛に関しては保守的な傾向があるようです。明るく積極的にアプローチをすると関係はより良好になります。時折毒舌を言うこともありますが、彼の個性なので受け止めてあげましょう……なるほどなるほど」

［吹雪］：「……合ってるか？　これ」

［繭子］：「うん、完璧だと思うよ？　ワタシは」

［吹雪］：「マジかよ？」

俺が騎士のようとか……有り得ないと思うんだが……。

［繭子］：「ダイヤモンドグラフが出るみたいだね」

［吹雪］：「ああ、押してみろよ」

［繭子］：「うん、それ。――わー、全部のメーターの数値が高いね～」

［吹雪］：「……愛情度、信頼率に関してはマックスかよ」

［繭子］：「えへへ、姉弟の補正がかかってるのかもしれないね」

［吹雪］：「姉弟の相性占いではないんだけどな」

［繭子］：「でも、悪い気はしないよね。いい感じの診断結果だし」

［吹雪］：「まあな」

こういうゲームの傾向として、あまり悪いことは言わないように作られてるんだと思うが……でもまあ、その中でもかなり良い評価かもしれないし、素直に喜んでおこう。

［繭子］：「んふふ、機械にも公認されたみたいだね、ワタシたち

の関係は」

［吹雪］：「そうだな」

［繭子］：「ふふ、幸せ♪」

［吹雪］：「もう少し見てみるか？　何かやりたいゲームがあれば付き合ってやるぞ」

［繭子］：「わーい、じゃあね、えっと――」

……。

……。

……。

繭子ルート・アクセント（15）

［場所：商店街］

［繭子］：「さすがふーちゃん、よく遊びに来るだけあるね～」
［吹雪］：「さっきやったゲームは、結構好きなやつだったからな。一人の時によくやってるのさ」
［繭子］：「ふーちゃんに助けられっぱなしだったね～。おんぶに抱っこ状態だったよ～」
［吹雪］：「別にいいさ、ゲームなんだからよ」
［繭子］：「……やっぱり騎士のような人だね、ふーちゃんは」
［吹雪］：「いや、それはもういいって」
［繭子］：「どうして～？　ベストアンサーだと思うけどな～」
［吹雪］：「自分で自分を騎士のような男だなんて思えるわけないだろ」

どこの痛い人だって話だ……。

［吹雪］：「恥ずかしいからやめてくれ」
［繭子］：「もう、照れ屋なんだから～ふーちゃんは」
［吹雪］：「姉さんがそれを言えるかよ」
［繭子］：「えへへ、ふーちゃん程ではないと思うけどね」
［吹雪］：「何を根拠に……」
［繭子］：「もちろん、フィーリングだよ」
［吹雪］：「もちろんなのか……」
［繭子］：「便利な言葉だよ、フィーリングって」
［吹雪］：「頼りすぎるのもどうかと思うがな……」
［繭子］：「適材適所に使用することが大切だね」
［吹雪］：「……どんどん話が見えなくなってるな」
［繭子］：「とにかく、久しぶりのゲームセンターはとっても楽しかったね～」

［吹雪］：「ああ、そうだな」
［繭子］：「……ふーちゃん、ワタシちょっと休憩したいかもしれない」
さっきから立ちっぱなしだったからな、足も疲れてきてるんだろう。
［吹雪］：「じゃあ、どっか座れるところに行くか」
ここから一番近いところは――。

繭子ルート・アクセント（16）

［場所：公園］

［吹雪］：「ここだろうな」
［繭子］：「あ、ベンチ発見～。ふーちゃん座ろうよ～」
［吹雪］：「先に座ってろよ。俺、ジュース買ってくるから」
［繭子］：「え？　いいの～？」
［吹雪］：「ああ、何がいいんだ？」
［繭子］：「んー、じゃあふーちゃんセレクトでお願い」
［吹雪］：「ん、分かった」
とすると買うべきジュースは――。
［吹雪］：「――ほら、コーラ」
［繭子］：「さすがふーちゃん、分かってる～」
嬉しそうに開けて飲み始める。
［繭子］：「ごく、ごく、ごく……はぁ、美味しい」
［吹雪］：「喉乾いてたんだな、姉さん」
［繭子］：「さっきすごくハッスルしたからね～。結構声出したし」
［吹雪］：「確かに、盛り上がってたもんな」
俺も買ったお茶を飲む。
［繭子］：「良い気分転換になったよ～」
［吹雪］：「そうだな、これでまた練習を頑張れる」
［繭子］：「燃えてるね～ふーちゃん」
［吹雪］：「当たり前だよ。儀式の成功がかかってるし、何より自分のためでもあるからな。それに、もう一つ――」
［繭子］：「もう一つ？」
［吹雪］：「姉さんに成長した姿を見せたいからな」
［繭子］：「おお～……」
［吹雪］：「ちょっと恥ずかしいが……頑張って口に出してみた」

［繭子］：「感動と喜びが一気に込み上げてきたよ」
そう言ってくれると、こっちも嬉しいものだ。
［繭子］：「ふーちゃんの成長の著しさは半端じゃないね～」
［吹雪］：「口に出したほうが、達成する力も湧いてくるからな」
［繭子］：「ワタシも見習わないとな～」
［吹雪］：「姉さんだって努力したから教師になれたんだろ？」
［繭子］：「ま、まあね」
［吹雪］：「しかも、俺のために――」
［繭子］：「あわわ、ふーちゃんストップ！　それ以上は、恥ずかしいです」
［吹雪］：「あ、そうだったな」
［繭子］：「あはは、ホントに恥ずかしがってばっかりだね、ワタシたち」
［吹雪］：「そうだな」
でも、自然とそういうことを言いたくなるから不思議なもので。

繭子ルート・アクセント（17）

［繭子］：「教師になったから、はいおしまいってわけにはいかないからね。むしろ、ここからが正念場だよ。立派な教師の称号をもらうためには、もっともっと努力しないといけないから」
［吹雪］：「おお、立派じゃないか姉さん」
［繭子］：「――だから、至らないところがあったらサポートよろしくね？　ふーちゃん」
［吹雪］：「生徒にサポートを頼むっていうのはどうなんだ？」
［繭子］：「生徒にしか分からない何かもあるでしょう？　そういうのを知っていくことで成長できると思うんですよ」
［吹雪］：「なるほど……」
［繭子］：「どうでしょうか？　ワタシの意見」
［吹雪］：「悪くないんじゃないか？　まあ、俺が今アドバイスするんであれば、ＨＲは真面目にやってほうがいいってことだな。たまに投げ出しちまう時あっただろう？」
［繭子］：「う、うん……」
［吹雪］：「今回の合宿が良い転機だろう。一皮剥けた姉さんを新学期に見せてやるんだ」
［繭子］：「おお、何か素敵」
［吹雪］：「今の姉さんならできるはずだ。そうだろ？」
［繭子］：「うん、頑張れると思う」
［吹雪］：「じゃあ頑張れ。その時は俺が見ててやる」
［繭子］：「はい、よろしくお願いします！」
［吹雪］：「……別に敬語じゃなくてもよかったんだが」
［繭子］：「あ、つい……ふーちゃんが上司みたいだったから」
［吹雪］：「こんな感じなのか？　上司は」
［繭子］：「そういうわけじゃないけど、振る舞いがそんな様子を醸し出してた」

［吹雪］：「とにかく、お互いに頑張ろうぜ」
［繭子］：「うん！　えへへ、やっぱりふーちゃんと落ち着くな～」
［吹雪］：「そうか？」
［繭子］：「うん。ありのままのワタシでいることができるからね～」
［吹雪］：「小さい頃から一緒だしな。むしろ今、ありのままでいれてないって言われたら、かなりショックがでかい」
［繭子］：「ふーちゃんでもショック受けるんだ？」
［吹雪］：「当たり前だろ？　家族に気を遣われるなんて……想像しただけでも嫌だ」
［繭子］：「でも、昔のふーちゃんは……」
［吹雪］：「言わないでくれ……あの時は、自分の愚かさに気付いてなかったんだ……」
［繭子］：「ふ、ふーちゃん声が低すぎる！」
［吹雪］：「今の俺は昔とは全然違うから。家族を何よりも大事って思ってる。つまり姉さんは大事ってことだ」
［繭子］：「それはワタシも一緒だよ。ふーちゃんなら、目に入れても痛くないもん……入らないだろうけど」
［吹雪］：「入れれたら確実に引くだろうな、俺」
［繭子］：「あはは、そうだろうね。……大好きだよ、ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、俺もだ」
［繭子］：「……」
姉さんは急に周囲をキョロキョロ見渡した。

繭子ルート・アクセント（18）

［吹雪］：「ど、どうしたんだ？」
［繭子］：「……誰もいないのなら――んっ！」
［吹雪］：「――っ！？」
不意打ちのキスを喰らった。
［繭子］：「ん、ちゅ」
［吹雪］：「ね、姉さん……」
［繭子］：「えへへ、まだ昨日の熱が冷めてないみたいで……お昼の時からずっと我慢してたんだよ？」
［吹雪］：「そ、そうだったのか？」
［繭子］：「必死に隠してたけどね、表に出さないように……でも、今は誰もいないからいいかなって思って」
［吹雪］：「……もっと、するか？」
自然とそんな言葉を発していた。
［繭子］：「えへへ、じゃあお願いしようかな」
姉さんの桜色の唇がもう一度触れる。
［繭子］：「ん……ちゅぷ、ぴちゃ……れろ、ちゅ、ぁん……んむ」
ソフトなキスから、行為の最中に交わしたディープキスに切り替わる。熱烈に唇を吸われると、互いの口は自然と開き、舌を突き合わせていた。
［繭子］：「んむ……ちゅ、ぴちゃ、ちゅく……ん、んちゅ、ちゅぱ……」
［吹雪］：「ん……」
［繭子］：「ぴちゃ、れる……ん、ふ、ぁむ……ちゅ、ちゅぷん……あ、ん、むぅ」
にゅるにゅると舌を絡め合う。唇とは異なる柔らかい感触が、また違う気持ち良さを与える。
［繭子］：「ん……ちゅ、んんぅ、ぴちゃ……ぴちゃ、ん、ぁあ…

…んむ、んちゅ、ちゅ」
［吹雪］：「姉さん、ちゅ……」
［繭子］：「んんぅ……ふーちゃん、は、んん……ちゅぷ、ちゅぷ……ちゅぷぷ、ぁ、はむ、ぁあむ……ん、ん」
唇を割り開いて舌を進入させる。
［繭子］：「ぁむ……っ！？　ん、は、ちゅぷ……ん、んん、ぁ、んむ……は、くふ、ぁ」
ツルツルの歯茎を舐めると、姉さんはくすぐったそうな表情をしていた。
［繭子］：「んふふ……んむ、ちゅ、ちゅぷ……ぁむ……ん～、ちゅ、ちゅぷ、ぴちゅ、ちゅぷ、ちゅぷ……ちゅぷ」
［吹雪］：「ん、ちゅ……」
［繭子］：「ちゅぷ……ちゅ、ちゅる……ぁむ、ん、ふ、んちゅぷ……ぷちゅ、ん、ふぁ……ん、あむ、ぴちゃ……」
お返しとばかりに、今度は姉さんの舌が俺の口腔内に進入してくる。
［繭子］：「ふ、ぁ……ん、ちゅ、ちゅぷ……じゅる、ん、ぁむ……ふ、ぴちゃ」
舌移しで姉さんの唾液が俺の口に流し込まれる。俺はそれを喉を鳴らして飲み込んでいく。
［繭子］：「ちゅ……ん、ふ、ぁむ……ちゅ、ちゅる、じゅりゅ……ん、ぴちゃ、れろ、れろ……ん、ちゅぷ」
首に手が回され、顔を離すことを拒否されてしまう。だから俺は、お返しとばかりに背中に手を回してぎゅっと抱きすくめた。
［繭子］：「んふっ……ぁ、んん、ちゅ、ちゅっ……」
互いの距離が縮まり、比例して唇との距離も近くなる。
［繭子］：「んぁ……ん、ぷちゅ、ん、ふぁ……ぴちゃ、ちゅぷ……んちゅ、ちゅく……ちゅ、ちゅぷぷ」
唾液が口の端から零れても、姉さんはお構いなしだった。
［繭子］：「ぴちゃ……じゅぴ……ちゅ、ちゅる……じゅ、じゅぱ

……ん、ぁ、んん……」

目はすっかり蕩けきっていて、顔も赤くなっている。

［繭子］：「ふ、ぁ……ちゅ、ちゅぷ……ん、れろ……ん、ぁ、くちゅ……ちゅ、ちゅぱぁ」

［吹雪］：「ん、姉さん……ちょっと」

［繭子］：「ふぇ？　ん――ぷはっ……はぁ、はぁ……」

息が続かなくなり、俺は姉さんと唇を離した。互いの口元は唾液で濡れまくっている。

［繭子］：「ごめんね、夢中になっちゃって……気付けなかったよ」

［吹雪］：「別にいいんだ、それくらいのこと」

［繭子］：「んー……ふーちゃんのそれ、すごいことになってない？」

［吹雪］：「これは……反応しないほうがおかしいっていうか」

興奮を隠せない舌使いだったからどうしようもなかった。

［繭子］：「えへへ、そうだよね。ワタシも……そうだと思うし」

［吹雪］：「そう、なのか？」

［繭子］：「――人もいないみたいだし、いいかな？　ふーちゃん」

［吹雪］：「昨日の今日だぞ？　まだ痛みがあるんじゃ……」

［繭子］：「かもしれないけど、……気持ち、抑えられそうになくて。ふーちゃんとまたつながりたいって想いが溢れてきちゃってるの」

［吹雪］：「……」

［繭子］：「お願い、ふーちゃん」

［吹雪］：「……いくら人がいないといってもここは危険だ。あっちの茂みに行こう」

［繭子］：「うん、分かった」

姉さんがそう言ってくれてよかった。どう考えたって、この状態で帰ることなんてできるわけがなかったから。

俺たちは人気のない茂みへと向かった。

繭子ルート・アクセント（１８）（後書き）

ここから、またラブシーンです。
ラブシーンバージョンに続きがありますので、よろしくお願いします。

繭子ルート・アクセント（19）

［繭子］：「ううー、ううー……」
［吹雪］：「そんなに落ち込むなって……」
［繭子］：「だって、だって～……この歳になってお漏らししちゃうなんて～……姉としての威厳が……」
元からあまりない、と言いたいが、これ以上へこむようなことは言わないでおく。何とかして励まさないと。
［吹雪］：「俺以外には見てないんだ、問題ないだろ」
［繭子］：「ふーちゃんに見られたのが問題なんだよ～」
［吹雪］：「何故？」
［繭子］：「見たくもないもの見せちゃったわけだもん……」
［吹雪］：「……」
なるほど。つまり、姉さんが心配してることは――。
［吹雪］：「俺に軽蔑されるんじゃないかって思ってるのか？　姉さんは」
［繭子］：「……うん」
［吹雪］：「馬鹿だな、姉さんは。そんなことで軽蔑するわけないだろ」
［繭子］：「ほ、ホント？」
［吹雪］：「ああ。むしろ、見ることができてよかったよ」
［繭子］：「え？　……ふーちゃん、そういう方向に興味があるの？」
［吹雪］：「そ、そういうのじゃねぇよ！」
若干興奮は覚えていたが……それは問題ではない。

繭子ルート・アクセント（２０）

［吹雪］：「お漏らししてしまうほど、俺で感じてくれたわけだからさ。そこまで腰砕けにできたのは、個人的に嬉しかったから。だから、姉さんが漏らしてしまった原因は、ほとんど俺にあるわけだよ」

［繭子］：「確かに、今日のふーちゃんは激しかったね……」

［吹雪］：「姉さんもな。相当乱れてたぞ」

［繭子］：「あう……だって、すごく気持ちよかったから」

［吹雪］：「だよな、じゃないとあんなに連続では――」

［繭子］：「あう……終わった後に言われると、恥ずかしさが一気に……」

［吹雪］：「心配するな、俺も同じ気持ちだ」

［繭子］：「あはは、じゃあお互い様なんだね」

［吹雪］：「ああ。だから、気にするな。俺は何とも思ってないから、姉さんのことは好きなまんまだよ」

［繭子］：「……ありがと。ワタシもふーちゃん大好きだよ～」

［吹雪］：「わっ！　……ん」

［繭子］：「ちゅ、ちゅ……ちゅ」

――とても素敵な休暇を送った俺たちだった。

繭子ルート・ラピード（1）

12月27日（月曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、では昨日の予告通り、今日はブレスレットを付けずにやってみよう」
［吹雪］：「はい。回数は同じままでやるんですか？」
［セフィル］：「まずは様子をみよう。吹雪の体力次第でメニューを多少変えていく」
［吹雪］：「分かりました」
［セフィル］：「とりあえず、なるべくリラックスをしながら詠唱するようにな。変に意識しすぎると、魔力が乱れてしまうこともある。まあ、吹雪なら言わなくても分かっていると思うが」
［吹雪］：「はい、もう一度自分に言い聞かせます」
［セフィル］：「うむ。……どうだ？　調子のほうは」
［吹雪］：「はい、今のところは順調です。魔力も、しっかり回復してます」
［セフィル］：「そうか。本番で成功できるように、頑張ろうじゃないか」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「よし。それじゃあ準備を始めよう」
俺はいつも通り、魔力の測定装置を腕に装着する。数字は、８４％を表示……この練習を続けたおかげか、魔力の回復スピードも上がった気がするな。前なら７０％いくかいかないかくらいだったのに……嬉しい誤算だ。
［セフィル］：「――よし。いつでもオッケーだぞ、吹雪」
［吹雪］：「はい、よろしくお願いします」

［セフィル］：「うむ」

――精神を集中させ、供給するイメージを膨らませる。そして、言われたとおり、なるべくリラックスをしながら……。

よし、そろそろ始めるぞ。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

俺は詠唱を開始した。それと同時に、学園長への供給が始まる。

ここまでは問題なくできている。大事なのは、魔力が減ってきた頃からだ。今日はブレスレットを付けていないから、俺自身の力が決め手となる。ここ数日の特訓でどれだけ自分の力を伸ばせたのか……どんな結果であれ、それを受け止め、次に進んでいかなければ。

……。

繭子ルート・ラピード（2）

――そしてゲージは４０を下回り始めた。徐々に体に疲労が溜まってきているのを感じる。

［セフィル］：「吹雪、ここから勝負だぞ」

俺は学園長の言葉にうなずく。特に指示がないあたり、供給自体は上手くできているようだ。後はこれを、最後まで持続させれば。

［吹雪］：「……」

ゲージは、３０を下回り始める。

［セフィル］：「うむ、良い感じで落ち着いているな」

普段ならば、この辺りから徐々に自分の力を抑えられなくなるのだが、今現在そのような兆候はない。疲労はゲージが減るごとに溜まっていくが、それでもはっきりと意識はある。

［吹雪］：「（この状態をキープするんだ、俺）」

自分に言い聞かせ、更に集中する。

２０、１９、１８……。

［吹雪］：「う、く……」

ゲージが２０を下回ると、先よりもどっと疲れが増してきた。これはおそらく、ブレスレットを付けていないからだろう。大きな恩恵を受けていたことが分かるな。

だが、装飾品に頼らずともできるようにならなければいけない。自分の成長を、自分自身に証明するんだ。

［吹雪］：「……」

自分で思っているよりも、精神は落ち着きを保っていた。

［セフィル］：「（ふむ、順調にいっているな吹雪。その調子で頑張るんだ）」

ゲージは順調に消費されていき、ついに一桁になった。

［吹雪］：「う、く……」

額から汗が流れ落ちていくのが分かる。体もがくがくと震え出し

ていた。
だが、決して詠唱を止めようなどとは思わない。むしろ、ここからが特訓の成果を見せる時だ。極限状態であっても集中を途切れさせなければ、それだけ自分の魔力を制御できていることになる。
自分の実力を証明づける証拠になる。
［吹雪］：「（俺は、やる……！）」
［セフィル］：「いいぞ吹雪、そのままだ」
学園長の声を聞きながら、俺は供給を続ける。
7、6、5……。魔力の全てを使い切るカウントダウンが始まる。
後少しで、詠唱が自動的に停止する。
もう、ちょっとだ……。
そして――。
［吹雪］：「――はぁ、はぁ」
俺の体と、学園長の体から光が消えた。
どうやら、やり遂げることができたようだ。

［吹雪］：「おおっ……」
体がふらつき、俺の片膝が地面に着いた。
［セフィル］：「大丈夫か？　吹雪」
［吹雪］：「はい、何とか……」
［セフィル］：「よくやったな、装飾品に頼っていないのに」
［吹雪］：「まだ、一回目ですから。大事なのはこれからです。気を引き締めてかからないと」
［セフィル］：「……その様子だと、もう一度くらいやりたそうだな」
［吹雪］：「お願いできますか？　学園長」
［セフィル］：「吹雪がやりたいというのなら、私は止めないさ。ただ、危険だと感じたら自分でもすぐに詠唱を止めるんだぞ？　今吹雪の身に何かあったら只事ではすまない。……蘭子に殺されてしまうかもしれないからな」
［吹雪］：「そ、それはないと思いますけど……」
［セフィル］：「とにかく、安全第一でやるとしよう。いいな？」
［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「どうする？　休憩を入れてからにするか？　それともすぐに開始するか？」
［吹雪］：「すぐに、やらせてください。もっと、自分を追い込みたいので」
［セフィル］：「分かった。じゃあ、今から吹雪に魔力を戻すからな」
［吹雪］：「はい、お願いします」
今のうちに、呼吸を整えておこう。
［セフィル］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム

！」

学園長の詠唱が始まり、俺の体に魔力が戻される。

――相変わらず学園長の供給のスピードは速く、俺が供給にかかった半分の時間で俺の回復を終えてしまった。

［セフィル］：「まあ、学園長だからな」

これればかりは、さすがの一言だ。

［セフィル］：「自分の良いタイミングで始めていいからな」

［吹雪］：「はい」

俺は二回程深呼吸をし、心を落ち着かせる。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

二度目の詠唱を開始した。魔力はいつも通り、３０から再スタートだ。先程より、多少疲労は和らいでいるが、それでも怠さは残っている。でも、自分を追い込むにはこれがちょうどいい。

［吹雪］：「……」

何度も自分の心に集中を言い聞かせ、リラックスすることを心がけて。

［セフィル］：「うん、それでいい」

［吹雪］：「……」

二回目、そしてブレスレット未装着というのもあり、ゲージの減りはやはり遅い。だが、焦ってもしょうがないのは今までの特訓で把握している。ペースが遅くても、そのペースを乱さずに進めていけばいい。この練習、油断が一番の大敵だからな。

［吹雪］：「（ゆっくりでも、確実に……）」

２５、２４、２３……。

時間はかかるが、それでもゲージは減っていく。学園長の体も光っているから、供給場所もブレていない。

［吹雪］：「……」

この調子で、二回目も成功させるぞ。

……。

繭子ルート・ラピード（4）

現在のゲージは15を下回った。

［吹雪］：「……」

体の疲労は相変わらずだが、それでも順調にゲージはなくなっている。このまま最後までキープだ。

［セフィル］：「（うむ、この調子ならば問題なくいけるか）」

13、12、11、10……。

ゲージは二回目の一桁に突入する。

――ちょうどその時だった。

［吹雪］：「う……」

一瞬、体から黒い光が帯びていた。気を抜いたつもりはないのだが……やはりブレスレットをしていないからか？

［吹雪］：「う、く……」

一瞬だった黒い光は回数を増し、何度も目に映るようになってくる。くそ、このままだと……また俺は……。

［吹雪］：「く……」

［セフィル］：「吹雪！　無理をするな、詠唱を止めるんだ」

［吹雪］：「……っ！」

［セフィル］：「吹雪……」

［吹雪］：「く、負けないぞ、俺は――！」

［セフィル］：「飲み込まれる寸前で制御する力がもう一度働きだした……これは、ひょっとすると……」

今までの練習を思い出すんだ。ギリギリまで肉体を追い込み、倒れそうになりながらも俺はあきらめないで練習を続けてきた。自分のために、ずっと見守ってくれた姉さんのために。辛くても、弱音を吐かずに努力してきたんだ。

俺が送ってきた日々の特訓は、確実に自分の糧になっている。だから……自分の力に恐怖することは一切ない。自分の力を信じて、

最後まで突き進むのみ。
［吹雪］：「自分の持つ恐怖に……打ち勝つ！」
心の中に存在し続ける闇を、今こそぶっ飛ばす時だ。
――体は黒い光で徐々に覆われていく。普段ならば、ここで学園長が止めに入ってきていたはず。しかし、今日の学園長は止めに入る気配はない。俺の様子を見た上で、俺の姿を見守っている。
［セフィル］：「打ち勝つんだ、吹雪」
その言葉が、はっきり俺に伝わってきた。
［吹雪］：「く、ぐ……」
残り魔力が少ないにもかかわらず、自分の残った力はかなり手強い。……これが、俺が両親から受け継いだ力……。

繭子ルート・ラピード（5）

自分の力を自分で使いこなせない日は、今日で終わりだ。俺は……俺の力で暴走を止めるんだ！

［吹雪］：「く……もう、負けねー」

自分の内に残るパワーを集結させ、自分を覆う黒い光を追い出す。

［吹雪］：「く、うぐ……」

必死に抵抗するが、さすが魔力の暴走、一筋縄ではいかない。俺の魔力を外側から覆いつくそうとする。

［吹雪］：「くそ、後もう一押しが足りない……」

魔力の残り自体はほぼわずかだから、俺が抑制に失敗しても学園長が抑えるのは容易だろう。でも……ここでまた暴走を起こしたら前の俺と何も変わっていない。

［吹雪］：「何か、吹き飛ばす手段は……」

その時、俺の頭の中に、姉さんの姿が浮かんだ。

［吹雪］：「姉さん……」

今こうして特訓を積んでいるのは自分のためでもあり、いつも心配をかけている姉さんを安心させたいからだ。同じ失敗を繰り返しては、姉さんを安心させることなどできない。［吹雪］：「誓ったはずだぞ、俺は……」

俺の意志は本物だった。心の底から、魔力の暴走を止めたいと思っていた。

今の俺にできることは……自分の力を信じ、恐怖に飲み込まれない強い意志を内側から全力でぶつけること。

今俺を覆っている黒い光は、俺の恐怖そのものだ。こんなものに、負けるわけにはいかない。

［吹雪］：「うおおおおおおっ！」

［セフィル］：「お、これは……吹雪！」

［吹雪］：「吹き飛べ！　俺の恐怖っ！」

心の底から、俺の想いを全力でぶつけた。
力と力がぶつかり合い、黒い光は激しい抵抗を見せる。しかし、
徐々にそれは色が薄くなっていく、後少しだ。

繭子ルート・ラピード（6）

［吹雪］：「く、うおおおおっ！」

そしてついに――黒い光を跳ね除け、俺の体は白く綺麗な光に包まれた。体から変な強張りが取れ、圧迫感がなくなった。

［吹雪］：「はぁ……はぁ……」

やった、やったぞ……俺は、自分の恐怖に打ち勝つことができた。

［吹雪］：「う……」

足元がふらつき、またしても片膝を着いてしまう。

［セフィル］：「吹雪、無事か？」

ずっと様子を見守っていた学園長が俺の元に走ってきた。

［吹雪］：「はい、大丈夫です」

［セフィル］：「全部見ていたぞ。自分の力で、暴走する力を抑えた……いや、弾き飛ばしたといったほうが正しいか」

［吹雪］：「そうかもしれないですね。外に吹き飛んでった感覚がありましたから」

［セフィル］：「あの力は、特訓を続けてきた賜物だな。昔の吹雪であれば、抗うこともできなかっただろう」

［吹雪］：「これで、心の底から自分の力を信頼できそうです」

［セフィル］：「――その強い想いがあれば、魔力の暴走も未然に処理ができるだろう」

［吹雪］：「そうですね」

俺は今、心のどこかに抱いていた恐怖に打ち勝つことができた。胸に満ちているこの想いを忘れなければ、何度だって跳ね除けられるはずだ。

［セフィル］：「これで、今年の儀式は成功確実だな」

［吹雪］：「あはは、本当ですか？」

［セフィル］：「そうだとも。魔力の暴走を克服した吹雪は今、とんでもない力を持った魔法使いの仲間入りを果たしたんだ。鬼に金

棒と言っても足りないくらいだと思うぞ」
［吹雪］：「そ、それは言い過ぎですよ学園長」
［セフィル］：「今吹雪と勝負したら勝てるかどうか……学園長はとっても不安だよ」
［吹雪］：「じ、自信持ってください。負けるわけないですから」
［セフィル］：「そうか？」
［吹雪］：「そうですよ、学園長は学園長なんですよ？　魔法使いが集う学園の学園長なんですよ？」
［セフィル］：「今の台詞で、相当学園長と言ったな吹雪」
［吹雪］：「それだけすごいってことですよ、学園長は」
［セフィル］：「そうか？　そう言ってもらえると何だか自信が湧いてきたぞ」
［吹雪］：「そうです、それでいいんです」
［セフィル］：「ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「いえいえ」
……すっかり話が違う方向に反れてしまっていた。

繭子ルート・ラピード（7）

［セフィル］：「とにかく、おめでとう吹雪」
その反れた話の方向を学園長が繋ぎ直した。
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「しかし、吹雪が本気で叫ぶところを初めてみたな」
［吹雪］：「いや、その……気合いを前面に押し出そうと思ったんで」
［セフィル］：「普段はそういうキャラではないから、何とも新鮮だった」
［吹雪］：「あ、その……恥ずかしいのでその話はしない方向でお願いしたいです」
夢中だったから気付かなかったが、冷静に振り返ると結構羞恥心に駆られる。
［セフィル］：「そうか？　結構様になってたと思うが」
［吹雪］：「そう言ってくれるのは嬉しいですけど、あまり言われるとその……恥ずかしいです」
［セフィル］：「はは、やはり吹雪は吹雪だな」
ポンポンと背中を叩かれた。
［セフィル］：「今日はこの後、ゆっくり休むんだ。フェルにマッサージでもしてもらうといい、疲れも取れるだろう。お願いしておいてやるよ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「なに、これくらい当然のことだ。……胸を張って、繭子に伝えるといいぞ」
［吹雪］：「はい、そうさせてもらいます」
［セフィル］：「一先ずは――そこのベンチで休憩したほうがいいだろう。立てるか？」
［吹雪］：「はい、立てます」

［セフィル］：「私が治癒魔法をかけよう。いつもより効果を増量してやるぞ」
［吹雪］：「それはありがたい」
――今日の特訓は、大成功に終わった。

繭子ルート・ラピード（8）

［場所：保健室］

［フェルシア］：「――それはよかったわねー、やっぱり努力は必ず実るのね」
［吹雪］：「そ、そうですね……イテテっ！」
［フェルシア］：「ちょっと我慢してね。今ツボを刺激してるから」
［吹雪］：「は、はい。……う、ぐぐ……っ！」
［繭子］：「フェ、フェル～、何かふーちゃんすごい声出してるんだけど～」
［フェルシア］：「問題ないわよ、それだけ体に疲労が溜まってる証拠なのよ。普通なら押されてもここまで痛がらないんだもの」
［繭子］：「そ、そうなんだ」
［フェルシア］：「自分ではとれていると思った疲労も、そう簡単にはとれないものなのよ。それが積み重なったんでしょうね」
［繭子］：「……毎日、魂すり減らすぐらい頑張ってたもんね。ふーちゃん」
［吹雪］：「まあ、弱音は吐かずに頑張ってきたと思う、が……アダっ！」
［フェルシア］：「ごめんごめん、もう少しだから踏ん張って吹雪くん」
［吹雪］：「は、はい……んぐっ！」
［繭子］：「……この様子だけ見てると、フェルがふーちゃんに馬乗りして攻めてるように見えちゃうね」
［フェルシア］：「ちょっとマユ、最初からここにずっといたでしょう？　マッサージしてるのよ、マッサージ」
［繭子］：「分かってるんだけどね、ただそんな風に見えちゃったから」

［フェルシア］：「――つまり、焼きもち？」
［繭子］：「へぇ？　そ、そんなことは――」
［フェルシア］：「その割にはあたふたしてるわね」
［繭子］：「うう……焼きもちなのかな？　フェルが略奪とかしないことは分かってるけど、他の女子としゃべってるのを見ると焦っちゃうというか」
［フェルシア］：「それ、完全なる焼きもちじゃない？　マユ」
［繭子］：「うわ～、ワタシ焼きもち女になっちゃったの～？　どうしようふーちゃん」
［吹雪］：「どうしようって……俺に言われても……うごっ！」
［フェルシア］：「男の子は総じて焼きもち焼かれるのは好きよね？　確か」
［吹雪］：「うく……まあ、公言してしまうのはどうかと思うんですが……嫌いではないと思いますよ……あぐっ！」
［繭子］：「ワタシって、こんなに嫉妬深かったっけ～？」
［フェルシア］：「恋人ができると変わるものなのよ、そういうのは。まあ、マユは昔から結構吹雪くんを独占してたと思うけど」
［繭子］：「え？　ホントに～？」
［フェルシア］：「ええ、何かにつけて吹雪くんに会いに行ってたじゃない？　しかも結構な頻度で休み時間とかに」
［繭子］：「き、気付かなかったよ～」
いや、そこは気付いてないとおかしいんじゃないのか……？

繭子ルート・ラピード（9）

［フェルシア］：「とどのつまり、マユは吹雪くんが大好きだったっていうことよね」
［繭子］：「そうだね～」
［フェルシア］：「吹雪くんもそれを認めたわけだし、相思相愛ってやつよね。羨ましいわ～」
［吹雪］：「あ、その……あの……んぐっ！」
［フェルシア］：「ずっと仲良くしていきなさいよ？　マユ」
［繭子］：「それはもちろん！　ふーちゃんがいない人生なんて考えられないもん」
［フェルシア］：「……聞いた？　吹雪くん。あなたなしでは生きていけないって言ってるわよ」
［吹雪］：「お、俺も……姉さんがいないと……ダメ――あうっ！」
［繭子］：「あーん、素敵な言葉が台無しに～」
［フェルシア］：「マッサージされながら愛の言葉を交わし合うっていうのも結構シュールよね」
［吹雪］：「う、ぐぐ……おお～！」
［繭子］：「ふーちゃんがどんどん獣みたいになっていくよ。……夜はいつも獣なのかもしれないけど」
［吹雪］：「お、おいっ！　まだ、昼間だぞ姉さん。そういう発言は控えたほうが……んぐ！」
［フェルシア］：「積もる話はマッサージが終わってからにしたほうがよさそうね」
［繭子］：「うん、そうだね。後どれくらい？　フェル」
［フェルシア］：「そうね。後十分くらいかしら？」
［吹雪］：「じゅ、十分！？」
［フェルシア］：「ふふ、今すぐにでも終わりたいと思ってるんでしょうけど、このマッサージが終わった後と前では体の軽さが全然

違うから。頑張って耐えることおススメするわよ？　大丈夫、絶対死なないから。魔力の暴走を自らの力で克服した吹雪くんなら乗り越えれるわ」

というか、マッサージなのに死ぬなんてことが有り得るのか？

［フェルシア］：「さあ、後半戦行きましょうか」

［繭子］：「頑張って～ふーちゃん」

［吹雪］：「お、お願いします……んがっ！」

［フェルシア］：「次は肩甲骨のほうを」

［吹雪］：「あ、ぐぅ……うぁあああっ！」

……。

……。

……。

繭子ルート・ラピード（１０）

［場所：第三音楽室］

［繭子］：「――疲れはとれた？　ふーちゃん」
［吹雪］：「ああ。やっぱり、我慢して最後まで耐えてよかった」
［繭子］：「断末魔の叫び声みたいにも聞こえてたけどね～」
［吹雪］：「だって、本当に痛かったんだよ。声も止められないくらいに。姉さんもされてみれば分かるさ」
［繭子］：「ん～、今は遠慮しておくよ。ふーちゃん程肉体的な疲れはないと思うからね」
［吹雪］：「そうか……ちっ」
［繭子］：「へ？　舌打ち！？」
［吹雪］：「いや、気のせいだろ」
［繭子］：「へ？　で、でも今確実に――」
［吹雪］：「姉さん、あんまり細かいことにこだわらないほうがいいぞ。な？」
［繭子］：「……は、はい」
［吹雪］：「うん、物分かりが良い姉さんは好きだぞ」
［繭子］：「……気にしない方がよさそうだね。何も聞こえなかった……そうしておこう」
［吹雪］：「それより、練習に入ろうぜ、姉さん」
［繭子］：「うん、そうだね」
［吹雪］：「もう、学園長の魔法に頼らなくても弾けるんだよな？」
［繭子］：「うん、バッチリ。正直、魔法をかけてもらってた時よりも上手になったと思うよ～」
［吹雪］：「お、それはかなりの自信だな」
［繭子］：「ふーちゃんと同じく、ワタシも精一杯練習を繰り返してたから」

［吹雪］：「それは楽しみだな。早く聴いてみたいぜ」
［繭子］：「えへへ、それじゃあよろしくお願いします」
姉さんはペコリとお辞儀をし、鍵盤に向き直る。
［繭子］：「じゃあ、弾くね～」
［吹雪］：「おう」
――姉さんは指を鍵盤に置き、音色を奏で始めた。
［繭子］：「……」
――自信を持ってただけのことはあり、姉さんの指使いは以前よりもさらにしなやかになっていて、且つメリハリが付いていた。
強弱がしっかりついたピアノのメロディは、聴いているだけでとても心地が良い。姉さんも、俺と同じくらいの練習を続けてきたことが伺えた。
前半のパートを弾き終え、難関だったソロパートへと入っていく。以前なら少し慌て気味だったが、今の姉さんは違っていた。
［繭子］：「……」
表情は一切変わらず、流れるようなメロディを刻んでいく。鍵盤を飛び回る指も、全く淀みがなかった。今の姉さんの様子は、さながら本物のピアニストのように感じる。
［吹雪］：「成長したな、姉さん」
俺は、ただただ姉さんの演奏に酔いしれていた。
……。

繭子ルート・ラピード（１１）

［繭子］：「――ふう、お粗末さまでした」
俺は拍手で演奏を讃えた。
［繭子］：「いかがでしたでしょうか？　ふーちゃん」
［吹雪］：「正直、驚いたな。ここまで姉さんが上手くなるとは」
［繭子］：「あはは、ホントに？」
［吹雪］：「ああ、練習を始めた頃の姉さんの面影は何もない」
［繭子］：「んふふ、言ったでしょ～？　たっくさん練習を繰り返してたって」
［吹雪］：「うん、文句なしだ」
［繭子］：「わーい、褒めてもらえたよ～」
［吹雪］：「姉さんたちは、四人で曲を弾いたりしてるのか？」
［繭子］：「うん、最近の午前中の練習はそれを中心にやってるよ」
［吹雪］：「そっちのほうは、順調なのか？」
［繭子］：「形にはなってきてると思うよ、たまにミスが出ちゃう時もあるけどね。やっぱり四人で弾くとなると、ちょっとしたことでリズムがずれちゃう時もあるから、結構タイミングがシビアなんだよね」
［吹雪］：「だろうな」
［繭子］：「でも、個人個人のパートはみんな上手に弾けているから、練習を繰り返していればきっと完成すると思うよ」
［吹雪］：「そうか。午前中の練習風景を、俺は見ることができないからな」
［繭子］：「フェルだけじゃなく、他の先生も見に来てるんだよ。主に魔法の授業を担当してる先生たちが」
［吹雪］：「へー、それは初耳だな」
［繭子］：「先生たちも力になってくれてるから、頑張らないわけにはいかないね」

［吹雪］：「というか、サボりたいなんて少しも思わないだろ？」
［繭子］：「とーぜん！　全力で勤しむまでだよ」
［吹雪］：「うん、それでいい。もう儀式まで一週間を切ってる。最後の追い込みをしていかないとな」
［繭子］：「だね。――というわけで、練習を再開するよ。さっきは上手く弾けたけど、ちょっと苦手意識を持ってるところがあるから。そこを今日は重点的にやってみる」
［吹雪］：「おう、見てるから頑張れ」
［繭子］：「えへへ、目に焼き付けてね、ワタシの演奏～」
真剣に練習をしながらも、姉さんの表情はどこか楽しそうだった、単純にピアノを弾くことに喜びを覚えてきたのかもしれない。
……。
……。
……。

繭子ルート・アルモニコス（1）

12月28日（火曜日）

［場所：体育館］

［セフィル］：「――よし、準備オッケーだな」
［フェルシア］：「はい、設置完了です」
体育館に、それぞれの音楽室からピアノが運ばれた。
［セフィル］：「ふう、重量があるものをワープさせるのは、なかなかに骨がいるな」
［吹雪］：「お疲れ様です、学園長」
［セフィル］：「吹雪もワープの練習をしてみたらどうだ？　意外と習得できたりするかもしれないぞ？」
［吹雪］：「今は、ちょっと……ホーリーカルムの練習をしないといけませんので」
［セフィル］：「本番前に他の魔法の練習をしてる場合じゃないもんな。これは失礼した」
［吹雪］：「魅力的ではありますけどね、ワープの魔法は」
［セフィル］：「うん、便利だぞ。行きたい所に瞬時に移動できるからな。まあ失敗するとどこに飛ばされるか分からないが」
［吹雪］：「は、ハイリスクハイリターンですね」
［セフィル］：「要は成功させればいいんだよ。それだけの話だ」
その成功させるというのがとっても難しいのではないのだろうか……簡単に言ってのけてるけど。
［セフィル］：「暇な時にでも聞きに来るといい。学園長室で待っているぞ」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます」
［セフィル］：「さて、後は四人が来ればオッケーだな。吹雪、呼

んできてくれ」

［吹雪］：「はい、分かりました」

……。

蘭子ルート・アルモニコス（2）

［セフィル］：「――えー、今日からは合同練習を中心にやっていこうと思う。本番まで残り日数も少ないから、本番を意識した練習に切り替えていく。いいかな？」
［四人］：「はい」
［セフィル］：「練習方法は午前中と同じで、曲を通して弾いていくことがメインになる。間違いが多い個所などがあれば、その都度時間を割いて克服していく。これの繰り返しだ。時間の使い分けは四人に任せる。私たちはその様子を見守っているからな。分からないことがあればいつでも声をかけるように」
［四人］：「はい」
［セフィル］：「それでは早速、練習を始めてくれ」
四人はそれぞれピアノの元へと向かう。
［セフィル］：「吹雪は、私とフェルと一緒に観察だな」
［吹雪］：「はい。……本当にそれだけでいいんですかね？」
［セフィル］：「いいんだ。というか、本当ならば社会科室で休んでいてもいいくらいなんだぞ？　魔力を消費して疲れているだろうからな」
［吹雪］：「一人で社会科室にいるのはちょっと寂しいですからね。それに、みんなの頑張ってる姿を見ていたいですから」
［セフィル］：「吹雪らしい答えだな」
［吹雪］：「あはは、そうですか？」
［セフィル］：「ああ、心構えもハーモニクサーになってきている」
［吹雪］：「あ、ありがとうございます……」
［セフィル］：「見守ってくれてるだけで、吹雪は相当な役目を果たしている。だから、今の自分のしてることに自信を持ってくれて大丈夫だからな」
［吹雪］：「分かりました。じゃあ、全力で観察します」

［セフィル］：「うん、私も全力でそうしよう」
四人とも、頑張ってくれ。
［カホラ］：「じゃあ、少し指慣らしをした後に全体を通して弾いてみましょう」
［聖奈美］：「分かりました」
［繭子］：「時間は何分くらい取ろうか？」
［カホラ］：「十分くらいでどうでしょうか？」
［繭子］：「うん、そうだね。分かった～」
［カホラ］：「じゃあ、今から十分、指慣らし開始」
……。

繭子ルート・アルモニコス（3）

［繭子］：「指の温め、無事完了～」
［カホラ］：「じゃあ、一回通して弾いてみましょう。舞羽、自分の良いタイミングで始めてちょうだい。それにみんなも合わせるから」
［舞羽］：「はい、分かりました。……よし」
――しばらくして、四人の演奏が始まった。俺はその音色に耳を傾ける。
［舞羽］：「……」
［聖奈美］：「……」
［繭子］：「……」
［カホラ］：「……」
やはり毎日のように練習を重ねてきただけあって、四人の奏でる音色はとても綺麗だった。実際に四季のピアノを使用して練習した時も形になっていたが、その時よりも完成度は増している感じがする。
［セフィル］：「うむ、良い感じだな」
［吹雪］：「そうですね」
［セフィル］：「本当なら、ここら辺で吹雪もスタンバイを始めるんだが……今日は必要ないからな」
［吹雪］：「はい、本番に全力を注ぎます」
そして、曲はソロパートへと入っていく。
［舞羽］：「……」
舞羽――。
［聖奈美］：「……」
杠――。
［繭子］：「……」
姉さん――。

［カホラ］：「……」

先輩――。

それぞれの良さが存分に出た素晴らしい演奏が続いていく。曲は再び四人での演奏に戻り、最後の盛り上がりを見せる。

……。

繭子ルート・アルモニコス（4）

そして、曲は淀みないまま終了を迎えた。俺は四人に拍手を送った。
［繭子］：「ありがと～ふーちゃん」
［カホラ］：「そこから聞いてどうだったかしら？」
［吹雪］：「文句なしです。聴いてるだけですごい良い気分になりました」
［舞羽］：「ふう、よかった」
［聖奈美］：「周囲の人にそう言ってもらえると、少し安心するわね」
［セフィル］：「私も、すごく良い演奏だと思った。フェルはどうだ？」
［フェルシア］：「そうですね、ほぼ問題ないと思います。後は、ちょっとしたミスを起こさないように気を付ければ完璧かと」
［セフィル］：「だそうだ。引き続き、四人で協力して練習を行ってくれ」
［四人］：「はい」
息もピッタリ合っている。
［セフィル］：「この様子なら、本番も問題なさそうだな」
［吹雪］：「そうですね、俺も頑張らないと」
明日は、俺にとってかなり重要な日でもある。姉さんに、俺の成長を見てもらう日……絶対に成功させなければ。
［セフィル］：「お？　吹雪から溢れ出る闘志を感じるぞ」
［吹雪］：「四人の練習を見てたら、俺も燃えてきちゃいました」
［セフィル］：「その力、明日存分に発揮するといいぞ」
［吹雪］：「はい、そのつもりです」
［カホラ］：「――じゃあ、もう一度弾いてみましょうか」
［舞羽］：「そうですね」
［聖奈美］：「分かりました」

［繭子］：「頑張ろ～！」

――儀式まで後三日、各自ラストスパートをかけ始める。

繭子ルート・アルモニコス（5）

12月29日（水曜日）

［場所：社会科室］

――爽やかな朝だった。

寝覚めも悪くない。それだけ、今日の自分は気合いが入ってるということだろう。

［吹雪］：「やるぜ、俺は」

というわけで、まずは身だしなみを整えなければ。いつものように水飲み場へ向かう。

［場所：水飲み場］

［繭子］：「おはよ～、ふーちゃん」

［吹雪］：「あれ、姉さん……一人で起きたのか？」

［繭子］：「うん、そうだけど……どうしてそんなに驚いてるの？」

［吹雪］：「いや、だって……寝起きの悪さに定評があったはずだから」

［繭子］：「ううん、ストレートな物言い……でも自覚があるから言い返すことができないよ～」

［吹雪］：「珍しいこともあるもんだな」

［繭子］：「今日は自然と目が覚めたんだ。今日は……大事な日でもあるしね」

［吹雪］：「なるほど。俺と同じ気持ちなわけか」

［繭子］：「そうかもしれないね」

［吹雪］：「……見ててくれ。ちゃんと、成功してみせるから」

［繭子］：「んふふ、その辺の不安はあまりないよ？　ワタシ。ふ

ーちゃんの力を信じてるからね～」
［吹雪］：「それは嬉しい限りだ。期待に、応えないとな」
［繭子］：「うん、頑張って？　見守ってるから」
［吹雪］：「おう、もちろん！」
［繭子］：「……んー」
姉さんが爪先立ちで俺に唇を寄せる。俺はそれに、自分の唇を重ね合わせた。
［繭子］：「ちゅ……」
［吹雪］：「ちゅ」
［繭子］：「今日は、結構ソフトだね～」
［吹雪］：「朝っぱらからは、さすがにな。空気は読まないといけないだろ？」
［繭子］：「それもそうだね～」
……。

繭子ルート・アルモニコス（6）

［舞羽］：「うう、何とも入って行きづらい空気だよ……」
［聖奈美］：「十分空気を読んでないと思うんだけどね、あの二人」
［カホラ］：「まあまあ、できたばっかりのカップルはあんなものでしょう？　長い目で見てあげないと」
［舞羽］：「そ、そうですね……」

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、いいぞ。その調子だ」
［吹雪］：「はい。はあ……はあ……」
姉さんが練習を終えてここに来るまでの間、俺はランニングに勤しむことになった。本番前のウォーミングアップということでやっているのだが……四日間程走っていなかったせいか、息の上がり方がいつもより早くなっていた。
［セフィル］：「やはり、少し鈍ってきてたようだな」
学園長にはしっかり見破られていた。
［吹雪］：「日々の鍛錬の重要さが分かりますね」
［セフィル］：「仕方ないと言えば仕方ないんだがな。あの特訓の他にランニングまでしていたら、昏倒は必至だっただろうし」
［吹雪］：「そうですね……」
［セフィル］：「今日は気分転換だと思って走るといい。いつもみたいにビルドアップをさせたりはしないからな」
［吹雪］：「ありがとうございます……はあ……はあ……」
学園長のお言葉に甘え、俺は少しペースを落として走らせてもらった。ここで体力を消費していては、後の特訓に響く可能性があるからな。
……。

ちょうど良い感じで体も温まった。そろそろ姉さんも来る頃だろう。
［吹雪］：「よし、やるぞ。俺」
［セフィル］：「お、来たみたいだな」
グランドの向こうから姉さんがこっちに走ってくる……プラスで、他のメンバーもこちらに向かってきているのが見えた。
［吹雪］：「ん？　何で舞羽たちまでこっちに？」
［蘭子］：「ふーちゃーん、お待たせ～」
［カホラ］：「うふふ、来ちゃったわ」
［吹雪］：「どうして、ここに？」
［カホラ］：「蘭子先生からお話を聞かせてもらったの。で、どうせだったらみんなで応援したほうがいいかなって思ってね」
［舞羽］：「いつも私たちの練習を見届けてもらってるから、今度は私たちが見届けてあげたいんだ」
［聖奈美］：「……二人の言った通りよ」
［フェルシア］：「私は、もしものための補助役として学園長に呼ばれたわ。まあ、話を聞く限り私の出番はないと思うけどね」
［蘭子］：「みーんな、ふーちゃんのこと大切に想ってるからこそのアクションだよね。さすがワタシの弟だよ～」
［吹雪］：「俺のために、わざわざここまで……絶対に失敗するわけにはいかないな」
俺の中の気合いゲージは更に上昇した。
［吹雪］：「ありがとうみんな。俺は、絶対に成功させてみせる！」
［蘭子］：「す、すごい。ふーちゃんが燃えまくってるよ」
［カホラ］：「マジックコロシアムの時くらいの気合いの入り方ね」
［聖奈美］：「うう……嫌な思い出が……」
［舞羽］：「げ、元気出して、杠さん」
［セフィル］：「――みんな揃ったところで、早速始めようか。い

つでもオッケーか？　吹雪」
［吹雪］：「はい、準備は万端です」
［セフィル］：「うむ。それでは繭子、前と同じような感じで頼む。他のみんなは少し下がって見守っていてくれ」
［三人］：「はい」
あらかじめ、姉さんの魔力は半分ほど消費してもらっている。それを俺がホーリーカルムで補い、且つ暴走を起こさずにやり遂げる。供給する俺の魔力は、ゲージを全て使い果たすために４０程度まで減らしてある。
［セフィル］：「吹雪の良いタイミングで始めていいからな」
［吹雪］：「はい、分かりました」
お互いに、しっかりと機械を腕にはめる。

繭子ルート・アルモニコス（8）

［吹雪］：「姉さん、よろしく頼むぜ」
［繭子］：「こちらこそ。ワタシの恋人さんの成長、この目でしっかり焼き付けさせてもらうね」
［吹雪］：「ああ、必ず期待に応えてみせるさ」
［繭子］：「えへへ、それでこそふーちゃんだよ」
［セフィル］：「うむ、なかなか見せつけてくれるなあの二人」
［フェルシア］：「とっても仲が良いですからね、あの二人」
［セフィル］：「ああやって、互いに支え合ってきたんだろうからな、きっと上手くいくだろう」
［フェルシア］：「ですね。みんなでそうなることを祈りましょう」
［吹雪］：「じゃあ、行くぜ。姉さん」
［繭子］：「うん、自分の力を信じるんだよ」
［吹雪］：「おう」
俺は目を閉じ、精神統一を始める。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
俺は詠唱を始めた。
ホーリーカルムの光が、姉さんを優しく包み込む。そして、俺のゲージが減り出し、姉さんのゲージが上昇を始める。
３９、３８……出だしは順調だ。
［カホラ］：「すごい。吹雪、ホーリーカルムを当たり前のように使いこなしてるわね」
［セフィル］：「みんなと同じように、日々厳しい特訓に耐えてきたからな」
［聖奈美］：「……認めざるを得ないわね、ちょっと悔しいけど」
［舞羽］：「……頑張って、吹雪くん」
――ゲージは３０を下回り始めた。

［フェルシア］：「以前だったら、この辺から徐々に雲行きが怪しくなってきてたんだけど……」
［セフィル］：「今の吹雪なら、ここはまだ安全パイさ」
［フェルシア］：「そうみたいですね。吹雪くんの表情は、一切変わってない」
［セフィル］：「自分の力を信じている証拠だろう」
［フェルシア］：「以前から力はあったみたいですけど、この合宿で更なる成長を遂げましたね本当に」
［繭子］：「――いいよ、ふーちゃん。その調子だよ」
２５、２４、２３……。特訓を重ねたおかげで、供給はとても上手くいっている。ホーリーカルムで大事なのは、供給する人をしっかりイメージすること。
完成しつつある今こそ、初心を忘れずに臨むことが大切だ。
そしてゲージは２０を下回る。ここからの数値は、他の女子にとって初めての光景となるだろう。

繭子ルート・アルモニコス（9）

［カホラ］：「本当に全て使い切るつもりなのね、吹雪は」
［聖奈美］：「分かってますけど、体への負担は半端ではないですよね？」
［セフィル］：「もちろん、女性で同じことをしようとすると状況によっては気を失いかねないだろう。スタミナがある男子だからこそできる芸当だと思うな。もっとも、男子でも気を失う可能性は十分にあるが」
［聖奈美］：「そうですよね、やっぱり」
［セフィル］：「これが可能になったのも、偏に特訓を積んできたからだな」
１８、１７、１６……。
よし、順調だ。このままの状態を保っていくぞ。ちらっと姉さんの姿を見ると、両手を結んで祈っていた。成功するように願ってくれているのだろう。
［吹雪］：「（大丈夫だ、姉さん）」
俺は目で姉さんにそう伝えた。すると、姉さんはそれに気付いたのか――軽くうなずいて返してくれた。
さあ、ここからが勝負だな。
１４、１３、１２、１１……。
ゲージは１０を示し、いよいよ一桁に突入する。
［カホラ］：「残り１０を切ったわね……」
［聖奈美］：「本当に、大丈夫なのかしら？」
［舞羽］：「吹雪くん、頑張って」
［セフィル］：「――落ち着いてやれば、問題ないはずだ」
［フェルシア］：「ファイト、吹雪くん」
［繭子］：「ふーちゃん、もう少しだよ……」
――みんなの応援が、俺の耳にはしっかり聞こえていた。心の中

でお礼を言い、俺は詠唱に集中する。
9、8……。
ゲージが減少する中……ついにあの光が体に見え始めた。

繭子ルート・アルモニコス（10）

［舞羽］：「……学園長、今吹雪くんの体から」
［セフィル］：「ああ、みんなにも見えたか」
［カホラ］：「ええ」
［聖奈美］：「あたしも見えました」
［セフィル］：「そうか」
［カホラ］：「そうかって……大丈夫なの？　止めに行かなくても」
［セフィル］：「以前だったら危険だったと思う。だが、今の吹雪なら問題はない。吹雪の表情を見てみるといい」
［吹雪］：「……」
［聖奈美］：「全然動じてないわね」
［セフィル］：「だろう？　動じてないってことは、自分の力で解決できる自信があるってことだ」
［カホラ］：「……そうね」
［繭子］：「ふーちゃん……」
［フェルシア］：「マユ……不安かもしれないけど、吹雪くんを信じてあげて。絶対に何とかするはずだから」
前回と同様、黒い光は俺を覆い尽くそうと浸食を始める。
［吹雪］：「（来たな……でも、もう怖くなんかないぞ）」
俺はもう慌てない。自分の力を信じ、内側から弾き飛ばすのみ。
［吹雪］：「――ふっ！」
俺は気合いと共に、内側から黒い光に魔力をぶつけた。
さすが、自分の中にずっと潜伏していただけあって簡単には消えてくれない。だが、確実にこちら側のほうが力は上手。
［吹雪］：「（吹き、飛べ！）」
強く念じ、内側から更に気合いをぶつける。すると――。
バシュウウウウ！

繭子ルート・アルモニコス（11）

［セフィル］：「うむ、見事だ」
［繭子］：「わわっ！？」
黒い光は弾き飛び、俺の体は再び白い光に覆われた。
自分で言うのは何だが……克服は成功したと言えるだろう。
……。
魔力ゲージは0を表示し、俺の詠唱は自然と停止した。
［吹雪］：「ふう……」
俺と姉さんの体に帯びた光は消えていった。供給は、無事に成功した。
［吹雪］：「終わったぞ、姉さん」
［繭子］：「うん！　ふーちゃんの魔力、確かに受け取ったよ」
満面の笑顔で、姉さんはそう返してくれた。
［吹雪］：「自分で言うのもおかしいけど、俺の成長、感じてもらえたか？」
［繭子］：「もちろんだよ。この目にしっかり焼き付いてるよ、ふーちゃんの成長した姿が」
［吹雪］：「よかったぜ、本当に」
［フェルシア］：「――お疲れ様、吹雪くん」
［セフィル］：「よく頑張ったな、吹雪」
見守ってくれていたみんなが、俺の周りに集まってきた。
［吹雪］：「みんな、見守っててくれてありがとう」
［カホラ］：「いいのよ、気にしなくて。良いもの見せてもらったしね」
［舞羽］：「うん、かっこよかったよ、吹雪くん」
［聖奈美］：「……認めざるを得ないわ。あなたの実力」
［吹雪］：「あはは、サンキュー」
［カホラ］：「この調子なら、本番はリラックスして臨むことがで

きそうね」
［吹雪］：「全力でサポートさせてもらいます。だから、みんなも頑張って」
［カホラ］：「ええ、もちろん」
［舞羽］：「うん」
［聖奈美］：「そうね」
［セフィル］：「――もう、魔力の暴走に悩まされることはなさそうだな」
［吹雪］：「学園長が特訓に付き合ってくれたおかげです」
［セフィル］：「私はただ指示を出していただけだ。努力を怠らなかった吹雪自身の実力だよ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
［セフィル］：「今はまだ黒い光が見え隠れしているが、今の調子を保ち続ければ、いずれ黒い光も見えなくなるだろう。その後をどうするかは……吹雪に任せる。以前の話、忘れてはいないよな？」
［吹雪］：「はい」
自らの意志で魔力の暴走を起こす件についてだろう。

繭子ルート・アルモニコス（12）

［セフィル］：「どんな決断をしても吹雪の自由だ。何かあれば、いつでも力になるからな」
［吹雪］：「はい、ありがとうございます」
［セフィル］：「うむ、特訓はこれで終了だ。残すは儀式を成功させるのみ。全員で力を合わせて乗り越えていこうじゃないか」
［全員］：「はい！」
本番に向けて、メンバーのモチベーションはさらに高まった。
――魔力の暴走、無事に克服。
……。

［場所：中庭］

［繭子］：「んふふふ～♪」
［吹雪］：「随分ご機嫌だな、さっきから」
［繭子］：「だってー、嬉しいんだもん。ふーちゃんの成長っぷりを生で拝見することができて」
［吹雪］：「そ、そうか？」
［繭子］：「うん。真剣な表情はとっても魅力的だったし。一粒で四度くらい美味しかったよ～」
［吹雪］：「……安心させることができて、ホッとしてるよ」
［繭子］：「やっぱり、緊張してたんだ」
［吹雪］：「当たり前だろ？　一世一代の大勝負って言ってもいいくらいさ」
［繭子］：「覚悟決めて臨んでたんだね」
［吹雪］：「それくらいの心構えでいかないと、姉さんに失礼だしな」
［繭子］：「……こんなに素敵な弟を持った姉って、ワタシ以外に

いないだろうな～。ふふ♪」
俺の腕に腕を絡めながら。

繭子ルート・アルモニコス（13）

［吹雪］：「……姉さんのおかげだ、ここまで成長できたのは」
［繭子］：「ワタシはただ、ふーちゃんの様子を見守ってきただけだよ？」
［吹雪］：「それが何よりの力になってたんだ。姉さんがいつも側にいてくれたから、今の俺がいるんだと思う」
［繭子］：「うわ～、面と向かって言われると恥ずかしいな～」
［吹雪］：「どうにも、言わずにはいられない気分でな」
［繭子］：「ふふ、大丈夫だよ。恥ずかしいけど、すっごく幸せな気分だから」
［吹雪］：「今まで守ってもらっていた分、今度は俺が姉さんを守るからな」
［繭子］：「これ以上ないくらいたくましい言葉だね」
［吹雪］：「もっとたくましくなれるように努力するさ。言葉だけじゃなくてな」
［繭子］：「将来のふーちゃんの姿をみるのがとっても楽しみだよ」
［吹雪］：「期待しててくれ」
［繭子］：「うん！　ワタシも頑張るからね。ふーちゃんが努力するって言ってるのに、ワタシは何もしないでいることはできないもん。立派な教師になれるように、もっと成長していくから」
［吹雪］：「それは楽しみだ」
［繭子］：「だから、一緒に手を取り合って頑張っていこう？　二人で支え合っていけば、きっと上手くいくと思うから。ね？」
［吹雪］：「ああ、そうだな」
［繭子］：「――というわけで、まずは儀式をクリアしないとね。学園長も言っていたけど、全員で力を合わせて臨まないと」
［吹雪］：「ああ。後練習ができるのは、今日と明日か」
［繭子］：「もうすぐ目の前なんだよね。……考えるとドキドキし

てきちゃうよ～」
［吹雪］：「だな。でも、きっと成功すると思うぜ俺は。今まであきらめないで、みんなは練習を続けてきたんだ。その努力は絶対に報われるとはずだから」
　現に昨日の練習で、四人のピアノの成長は拝見させてもらっている。自分が言った言葉にも自信が持てるというものだ。
［吹雪］：「リラックスして臨んで大丈夫だろう」
［繭子］：「そうだね、うん。リラックスしよう、スーハー、スーハー……うん、落ち着いた」
［吹雪］：「今やる必要はあったのか？」
［繭子］：「今のワタシも緊張してたみたいだったから、ついやってしまいました」
［吹雪］：「まあ、別にいいけど」
［繭子］：「今日と明日、しっかり練習しよう。思い残すことがないようにね」
［吹雪］：「俺も。後悔だけはしたくないからな」
［繭子］：「大久保姉弟の力を見せてやろう～！」
［吹雪］：「おー！」
……。
……。
……。

繭子ルート・アルモニコス（１４）

１２月３０日（木曜日）

［場所：グランド］

［セフィル］：「よし、そのペースを保って走ろう」
［吹雪］：「はい」
今日は儀式前日というだけあって、いつもより軽めのメニュー構成となっている。今のランニングのペースも、どちらかといえばジョギングに近い。
これが終わった後は――。
……。
［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」
［セフィル］：「うむ、問題ないようだな」
……。
［セフィル］：「よし、詠唱止めていいぞ。吹雪」
［吹雪］：「はい」
ゲージが７０になったところで終了。
［セフィル］：「うむ、今日はこれぐらいでいいだろう」
［吹雪］：「はい、ありがとうございました」
［セフィル］：「体の方は何ともないか？」
［吹雪］：「はい、異常なしです」
［セフィル］：「そうか、それなら安心だ。じゃあ、後はゆっくり休んで疲労を取るようにな。今日の練習はこれで終了」
［吹雪］：「お疲れ様でした」
いつもより一時間以上早く、練習が終わった。このまま社会科室に戻ってもいいんだが、そこで一人じっとして過ごすのはもったい

ない気がする。だとすれば、だ。
［吹雪］：「学園長。他の四人は体育館で練習してるんですよね？」
［セフィル］：「ああ、全員で曲を弾いているところだと思うぞ」
［吹雪］：「ありがとうございます」
悔いは残さない、昨日姉さんとそう宣言したからな。自分が納得のいく行動をしよう。
［吹雪］：「ちょっと、四人の練習を見に行ってきます」
［セフィル］：「うむ、そう言うと思ったぞ吹雪」
［吹雪］：「え？」
［セフィル］：「ちょっと予想していたんだよ。練習が早く終わった時、吹雪はどんな行動を取るだろうかとな。私の予想では、残りの時間で四人の練習に参加する、だったんだ。ズバリだったわけだ」
［吹雪］：「なるほど」
［セフィル］：「吹雪とは毎日のように練習を共にしてきたからな。多少の勝手が分かれたようで嬉しいぞ」
［吹雪］：「分かっていただいて嬉しいです」
この返事で合っているのだろうか？
［セフィル］：「私も行こうと思っていたところだ。一緒に行こうではないか」
［吹雪］：「はい」
……。

繭子ルート・アルモニコス（15）

［場所：屋上］

――四人の演奏は、今日もとても素晴らしかった。今日が本番の日だと言われても、きっと問題なく弾くことができるだろう。

［繭子］：「えへへ、そお？」

［吹雪］：「ああ、嘘ついたって仕方ないだろ」

［繭子］：「お褒めに預かり光栄です」

隣に座る姉さんがにこりと笑う。

［吹雪］：「今日の夜も、四人の演奏を見させてもらうから、頑張ってくれ」

［繭子］：「うん。ふーちゃんが来てくれるだけで、普段の倍くらい頑張れる気がするよ～。ふーちゃんパワーは偉大だね」

［吹雪］：「ただ立ってるだけなんだけどな、俺」

［繭子］：「ふーちゃんは側にいてくれるだけで、ワタシの力になってるんだよ。……昨日、ふーちゃんがワタシに言ってくれたことをオマージュしてみました」

［吹雪］：「確かに、そうだな。居るだけで力になれる……言われてみると、分かる気がする」

自分が思っていることは、相手も思っていることが多いってことか。

［繭子］：「はりきっちゃうよ、ワタシ」

［吹雪］：「間違って指を怪我したりしないようにな」

［繭子］：「うん、気を配りながらやるよ。……というか、ピアノで考えられる指の怪我ってどんなのかな？」

［吹雪］：「突き指とかじゃないか？　やっぱり」

［繭子］：「勢い余って指を押し付けすぎた～、みたいな？」

［吹雪］：「それ以外は、思い浮かばないな」

［繭子］：「だよねー。ふと考えてみたら、ピアノで重傷を負ったりした人の話とか聞いたことがないからさ」
［吹雪］：「普通に弾いている分には、ほとんどないだろうな。投げつけられたとかだったら話は別だが」
［繭子］：「もはや弾く目的じゃないもんね」
［吹雪］：「まあ何にしても、指を大事にしろってことだ」
［繭子］：「そうだね、気を付けます」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「眠いの？　ふーちゃん」
［吹雪］：「いや、全然」
［繭子］：「そっか。……明日で合宿も終わりだね」
［吹雪］：「そうだな。長いようで短い時間だった」
［繭子］：「ワタシもそう思ってた。合宿が始まってすぐの頃は、特に早かった気がするよ」
［吹雪］：「なかなか、覚えられなかったからか？」
［繭子］：「それもあるし、何より他の三人に遅れちゃいけないって思ってたから。舞ちゃんと聖奈美ちゃんはピアノ経験者って聞いてたし、カホラちゃんも器用だからスラスラ覚えていってた……まともに弾くことができなかったのはワタシだけだったからね。どうしても、プレッシャーを感じずにはいられなくて」
［吹雪］：「焦ってしまったと」
［繭子］：「うん。焦っても解決しないってことは分かってたけど、なかなか冷静にはなれなくて……不安が結構多かったかな。あの時は」
［吹雪］：「姉さんだけじゃないと思うぞ、そう感じていたのは。俺だって、同じようなことを思ってた」
他三人も、きっとそう言うだろう。

繭子ルート・アルモニコス（16）

［繭子］：「儀式までに完成できる自信は、ほとんどなかったね」
［吹雪］：「でも、あきらめなかったから、今の姉さんがこうしているわけだろ」
［繭子］：「そうだね、みんなの支えがあったから、こうしてここまで進むことができた。感謝、感謝だよ」
［吹雪］：「仲間がいるっていうことが、どれだけ自分にとって重要なのか、この合宿を通して、それも再認識することができたな」
［繭子］：「うん。この合宿はワタシにとって、人生の宝だね。色んなことを学ぶことができたし、何より――ふーちゃんとの仲をより深めることができた」
［吹雪］：「俺も、それを思ってたよ」
この合宿がなかったら、姉さんとは姉弟の関係のままだったかもしれない。この合宿を一緒に頑張ってきたから、姉さんの気持ちに気付くことができたんだと思う。
［繭子］：「これからの人生、もっともーっと楽しくなると思うよ。ワタシ」
［吹雪］：「それが現実になるように、俺は全力を尽くさないとな」
［繭子］：「もちろんワタシもそのつもりだよ。ふーちゃんはワタシのために、ワタシはふーちゃんのために。素敵だね」
［吹雪］：「有名な言葉を俺たちに置き換えただけのような感じだが……」
［繭子］：「まあまあ。ちょっと使わせてもらっても罰はあたらないと思うよ」
［吹雪］：「気にしたら負けか……」
［繭子］：「そうそう」
何はともあれ、たくさんの収穫があった合宿であったことは間違いない。その日々も、明日が最後となるわけか。

［繭子］：「明日が終われば、ワタシたちは家に帰れるんだよね？」
［吹雪］：「ああ、おそらくな」
［繭子］：「そうだよね。……そう考えると、ちょっと寂しいね」
［吹雪］：「気持ちは分かるけどな」
強化合宿とはいえ、みんなで一つの部屋に寝泊まりした生活は結構楽しかった。お互いの絆も深めることができたし、名残惜しさはどうしても残る。
［繭子］：「もう少しこの生活を続けてもよかったなって思うね」
［吹雪］：「そう思えるくらい、メンバーと仲良くなれたんだな、姉さんは」
［繭子］：「ふーちゃんは？　ワタシと同じ気持ちじゃない？」
［吹雪］：「それも悪くないとは思うが……さすがにこれ以上はみんなの家族も心配するだろうし……何より学園に迷惑をかけちまうだろうからな」
［繭子］：「そうだよね～、短い期間だからこそ、良い思い出として心の中で輝き続けるんだよね、きっと。……今、結構良いこと言ったよね？　ワタシ」
［吹雪］：「あ、ああ。ちょっと詩人みたいだったな」
［繭子］：「これも合宿を通してきたおかげなのかな？」
［吹雪］：「それはあまり関係ないと思うぞ」
［繭子］：「あはは、やっぱり？　ワタシもそれはないかなって思ってたよ」
［吹雪］：「肯定してたらどうするつもりだったんだよ……」
［繭子］：「自分で言っておいて何だけど、多分否定してたと思うね～」
……そこで調子に乗らなくなった辺り、姉さんは大人として一回り大きくなったかもしれないな。

繭子ルート・アルモニコス（17）

［繭子］：「合宿が終わった後も、良い関係を続けていきたいね～」
［吹雪］：「姉さんがそう思っていれば、他のみんなもそう思ってるだろうよ」
［繭子］：「本当に、そうだといいね」
そう言うと、姉さんは俺の肩に頭を乗せてきた。俺は姉さんの左肩に手を伸ばし、ぐっと自分の体に引き寄せる。
［繭子］：「えへへ、ふーちゃんも少し積極的になったね」
［吹雪］：「姉さんだって、こうしてほしかったんじゃないのか？」
［繭子］：「やっぱり、分かってるね～。さすがワタシの弟だよ」
［吹雪］：「伊達に何年も一緒に生活してないからな」
［繭子］：「うん。ふーちゃんの体は、やっぱりぽかぽかしてて暖かいな～」
そう言いつつ肩に頬を摺り寄せる。
［繭子］：「考えてみたら、あの日から一週間も経ってないんだよね？　ワタシたちのもう一つの関係が始まってから」
［吹雪］：「そうだな、そんな感じはほとんどないけど」
［繭子］：「だよね～。関係が一つ増えても、やることはほとんど変わりがなかったんだね」
［吹雪］：「だな、うん」
［繭子］：「でも、やっぱり今のほうがより幸せって感じるな～。もう無理に自分の気持ちを隠したりする必要がないし」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「ん？　どうしたの？　ふーちゃん。急に黙っちゃって」
［吹雪］：「いや、別に。何でもないさ」
［繭子］：「ん？　そお？」
あれで抑えてたつもりだったのか……と言いたかったが、姉さんがそう言ってるのなら、そういうことで納得しておこう。

［繭子］：「んふふ、ぐりぐり～」
［吹雪］：「ちょっと、くすぐったいぞ」
擦り寄ってくる姿はすごくかわいいんだが……。
［繭子］：「今日はまだ甘えてなかったから、今のうちに甘えておこうかなって思って。夜は最後の全体練習で時間も取れないだろうし。いいでしょ～？」
［吹雪］：「断る気はないけど、断っても強行するんだろう？」
［繭子］：「うん。ふーちゃんの成分はマメに摂取しておかないといけないしね」
［吹雪］：「……なら、仕方ないな」
［繭子］：「えへへ♪」
ぎゅう……姉さんの腕が背中に回され、互いの体が密着する。相変わらず姉さんの体は柔らかく、そして甘い匂いがする。この匂いは、シャンプーの匂いと姉さんの体の匂いがミックスしたものなんだろうか？　どちらにしても、良い気分にさせてくれる匂いだ。

繭子ルート・アルモニコス（18）

［繭子］：「「ふーちゃんの胸板、結構厚いね」
［吹雪］：「普通だと思うぞ？　俺は」
［繭子］：「でも、ワタシよりは厚いよ」
［吹雪］：「それは、当然だと思うぞ……」
姉さんは女で、俺は男だ。
［繭子］：「ワタシはいつもここに収まってるんだね」
姉さんのスキンシップは徐々に過激になり、俺の膝に体を乗せ、胸板に体を潜り込ませてきた。
［繭子］：「ふーちゃん、ぎゅーってして？」
［吹雪］：「あ、ああ」
言われるままに、姉さんの体を抱きしめる。
［繭子］：「んふ～、気持ちいいな～」
髪から漂う甘い香りに鼻孔をくすぐられながら、柔らかい感触を腕いっぱいに受け止める。
［吹雪］：「スー、ハー」
［繭子］：「髪の匂い、好きなの？」
［吹雪］：「良い匂いがするから、つい反応しちまった」
［繭子］：「えへへ、これでもお手入れはしっかりしてるからね～。身だしなみは大切だから」
［吹雪］：「乙女の嗜みってやつか？」
［繭子］：「そうそう、それそれ」
後ろに回した右手で、髪をすいてみる。
［吹雪］：「指通り、滑らかだな」
［繭子］：「ホント？　そう言ってもらえると素直に嬉しいな」
［吹雪］：「すっげぇサラサラで、こうやってるだけで飽きない」
［繭子］：「いいよ、ふーちゃんだったら、いくらでも髪のお触りオッケーです」

なら、お言葉に甘えさせてもらおう。
［繭子］：「じゃあワタシもお邪魔しよーっと。ん～スリスリ～」
姉さんはじゃれる猫のように、胸板に頬ずりをし始めた。
［吹雪］：「……」
どんなに繰り返しても、指に髪が絡まることはなかった。すいた髪が風で靡くと、髪の甘い香りが胸いっぱいに入り込む。
うん、この匂い、結構癖になるかもしれないな。

繭子ルート・アルモニコス（19）

［繭子］：「ん、ふーちゃん、鼻がスピスピいってるよ？」
［吹雪］：「何か、ハマってきたみたいだ」
［繭子］：「ふーちゃんにハマってもらえるなら、それは嬉しい限りだね」
［吹雪］：「もうちょっと、嗅がせてくれ」
［繭子］：「んふふ、いいよ～」
俺は鼻を近づけてもう一度匂いを吸い込む。
［吹雪］：「前から、このシャンプー使ってたのか？」
［繭子］：「うーん、日によって変えてたりする時もあるね。良い気分転換になるし」
［吹雪］：「そうか」
［繭子］：「違う匂いも嗅いでみたかったり？」
［吹雪］：「……そうだな。できるのであれば」
［繭子］：「ふーちゃんって、意外と匂いフェチだったりする？」
［吹雪］：「いや、ここまで匂いに執着したのは初めてだな」
［繭子］：「今日になって開花した感じ？」
［吹雪］：「姉さんの匂い限定、だと思うが」
［繭子］：「ワタシ限定の匂いフェチか……それはそれで悪くないかも。ふーちゃんを虜にできてるわけだしね～」
自分にこんな一面もあったとは……別に変な性癖ではない、よな？
［繭子］：「じゃあ、今日の夜は違うシャンプーを使っておくね。今とはまた違う匂いがするとは思うよ～」
［吹雪］：「それは、楽しみだな」
［繭子］：「だから今は、この匂いを存分に楽しんでね～」
［吹雪］：「うん、そうさせてもらおう」
俺は姉さんの髪に顔を埋める。

繭子ルート・アルモニコス（２０）

［繭子］：「んふふ、ふーちゃん、何かかわいいね」
［吹雪］：「姉さんのほうがかわいいよ」
［繭子］：「うわ、普通に切り返されちゃったよ」
［吹雪］：「決してお世辞じゃないからな。本心から言ってるぞ、俺は」
［繭子］：「ふーちゃん、何か昨日より成長してる」
［吹雪］：「人間、日々進化していくもんだからな」
［繭子］：「哲学だね～」
［吹雪］：「……話の流れが一気に変わっちまったな」
［繭子］：「そういうのもひっくるめて、ワタシはふーちゃんが大好きです」
［吹雪］：「すげー強引に話を引き戻したな」
［繭子］：「あはは、やっぱりちょっと無理があったかな～」
［吹雪］：「まあ、いいんじゃないか別に」
元は俺が進化とかそういうことを言ったのが原因みたいだしな。
［吹雪］：「その流れに話を戻そう」
［繭子］：「うん、分かった。ぐりぐり～」
姉さんはまた、頬ずりを始めた。
［繭子］：「んふふ、良い感触だよ～」
［吹雪］：「そんなにいいか？　俺の胸板は」
［繭子］：「気持ちが良いからこうやってぐりぐりするんだよ。体も暖かくなれるし、もう病みつきだよ～」
［吹雪］：「……そんなに好きなら、気が済むまでそうしててくれ」
［繭子］：「あは、ふーちゃん優しい」
［吹雪］：「髪の分のお返しだ」
もらってばかりでは男が廃るというものだ。
［繭子］：「ギブ&テイクってことだね」

［吹雪］：「そういうことだ」
［繭子］：「じゃあ、さらに遠慮なく♪　んふふ～」
心底嬉しそうな表情を浮かべながら、姉さんはより強く体を密着させる。そうなると、必然的に姉さんの胸は、俺の胸板にぐっと押し付けられて。
［吹雪］：「う……」
確かに小振りな胸ではあるが、女性にしかない柔らかさは十二分に伝わってくる。しかし、姉さんはまだそれに気付いてな……い。
［繭子］：「えへへ♪　ん～」
どうやら、俺の思い込みに過ぎなかったようだ。姉さんは、確信犯だったらしい。

繭子ルート・アルモニコス（21）

［吹雪］：「わざと、やってるんだよね？　姉さん」
［繭子］：「ふーちゃん、喜んでくれるかと思ってね。どうかな？」
［吹雪］：「どうっていうか……」
今みたいな体勢でそんなことをされると――。
［吹雪］：「誘ってるようにしか見えないぞ」
［繭子］：「もし、そうだって言ったらどうする？」
［吹雪］：「姉さん……」
［繭子］：「明日は儀式本番だから、こうやってラブラブしてる時間もないし……合宿中はこれが最後の二人の時間だと思うんだ。……後の行動は、ふーちゃんに任せるよ」
［吹雪］：「……」
［繭子］：「どうする？　ふーちゃん」
［吹雪］：「……屋上に、鍵かけてくる」
儀式の前日にこんなことをしたいと思うのは間違ってるかもしれないけど……我慢は、できそうになかった。
ガチャリ。これで完全に、屋上は俺たちだけの空間になった。
［繭子］：「ありがと、ふーちゃん」
［吹雪］：「自分の気持ちに正直になっただけさ」
［繭子］：「でも、嬉しいよ。ワタシと同じことを考えててくれたんだもん」
［吹雪］：「好きな人にあんな風に誘われて、断れるほど心は強くないからな」
［繭子］：「それは、ワタシも一緒だよ。ふーちゃんに同じように誘われたら、絶対に断れない自信があるから」
［吹雪］：「……今日も、よろしく頼むな」
［繭子］：「うん、喜んで」
……。

繭子ルート・アルモニコス（22）

［繭子］：「はふ～」
［吹雪］：「落ち着いたか？　姉さん」
［繭子］：「うん、もう大丈夫だよ～」
膝に頭を乗せた姉さんが返答する。あの後、しばらく姉さんは起き上がることができなかった。まあ、当然と言えば当然なのかもしれないが……。
事後処理は全て俺が行い、こうして姉さんの回復を待っている。
［吹雪］：「ごめんな、ちょっと調子に乗りすぎたかもしれない」
［繭子］：「いいんだよ～。元々ワタシがやろうって誘ったんだもん」
［吹雪］：「でも、かなり激しくしてしまったから」
［繭子］：「全然平気だよ。むしろふーちゃんの新しい一面を見れて、新鮮です。若いうちしかこういうのはできないんだから、今のうちにやっておくに越したことはないよ～」
［吹雪］：「そ、そうか？」
［繭子］：「うん、そうだよ～無問題」
親指をぐっと立てながら。
［繭子］：「もうちょっと、このままでいていいかな？」
［吹雪］：「ああ、気の済むまでそうしてていい」
［繭子］：「わーい、やった～」
――合宿最後の姉さんとの一時、ギリギリまで味わっておくとしよう。

繭子ルート・アルモニコス（２３）

［場所：社会科室］

［カホラ］：「じゃあみんな、お休み」
［舞羽］：「お休みなさい」
［聖奈美］：「お休み」
［吹雪］：「明日、頑張ろうなみんな」
［カホラ］：「ええ、もちろん」
［舞羽］：「うん！」
［聖奈美］：「言われなくてもそのつもりよ」
［フェルシア］：「ふふ、期待してるわよみんな」
全員の目に、闘志の炎が燃えているのを感じた。
［吹雪］：「じゃあ姉さん、お休み」
［繭子］：「うん、お休みふーちゃん」
俺は自分のスペースに戻る。
［繭子］：「あ、待ってふーちゃん」
［吹雪］：「ん？　――っ！？」
不意打ちのキスを喰らった。

繭子ルート・アルモニコス（２４）

［舞羽］：「うわ～」
［カホラ］：「こ、ここでそれを？」
［聖奈美］：「……」
［繭子］：「えへへ、明日の儀式成功のおまじないだよ♪」
［吹雪］：「わ、わざわざみんなの前でやらなくても……」
［繭子］：「だって、しておきたかったんだもん」
［吹雪］：「……できれば次は人目がないところで頼む」
［繭子］：「えへへ、分かった」
［聖奈美］：「それはこっちの台詞なんだけど……って言うのは野暮なんでしょうか？」
［フェルシア］：「ごめんね、多めに見てあげてちょうだい」
［カホラ］：「別にフェルシア先生が謝ることはないですよ。それに、怒ってるわけじゃないですから。ただ、見てるのが恥ずかしいだけで」
［聖奈美］：「……早いとこ布団に入ってしまいましょう」
［カホラ］：「あはは、そうね」
［舞羽］：「お、お休み吹雪くん」
［繭子］：「じゃあふーちゃん、また明日ね」
［吹雪］：「おう！」
――いよいよ明日、儀式が始まる。

繭子ルート・アルモニコス（25）

12月31日（金曜日）

［場所：グランド］

儀式当日、俺たちは朝から最後の練習に励んでいた。ピアニストの4人は、音楽室にあるピアノを一時的に全て同じところに固め、本番さながらの練習をする。
その間に、俺は学園長と共にホーリーカルムの最終チェック。今日は本番だから、いつものようなことはせず、触りだけを重点的に練習する。
［吹雪］：「……」
［セフィル］：「――うむ、どうやら問題はなさそうだな」
学園長からその言葉を聞き、俺は安堵感を覚えた。
［セフィル］：「本番もこの感じでやれば、間違いなく大丈夫だろう」
［吹雪］：「ここまで来れたのも、学園長のおかげです」
［セフィル］：「……」
［吹雪］：「ど、どうしたんですか？　急に黙って」
［セフィル］：「いや、いつもカホラに注意されるものだから、…
…賛辞の言葉には慣れてなくてな。ちょっと、感動しているんだ」
［吹雪］：「そこまでたいしたことでも……」
［セフィル］：「私にとってはとても大事なことだ。学園長たるもの、誰からも慕われるような存在にならないといけないからな。生徒から愛されて初めて、学園長は意味があるんだ」
［吹雪］：「なるほど……」
［セフィル］：「そんな私に初めて賛辞をくれたのは吹雪……君だ」
［吹雪］：「え？　そ、それはないでしょう。絶対」

［セフィル］：「いや、あまり生徒と触れ合う時間もないのでな。リアル吹雪が初めてだと思うが」
［吹雪］：「……面と向かってってことですか？　それは」
［セフィル］：「うん。……初めてを吹雪に奪われたわけだ」
［吹雪］：「な、何だか意味合いが違ってませんか？　それ」
［セフィル］：「とにかくだ、私は嬉しい。ありがとう、吹雪」
［吹雪］：「俺は褒められるようなことしてませんよ。自分の思ってることを口に出しただけですし」
［セフィル］：「口に出すというのは案外難しいことだぞ」
［吹雪］：「でも、そんなこと気にする仲ではもうないですから。俺と学園長は」
［セフィル］：「……危ないかんけ――」
［吹雪］：「決してそういう意味ではなく！」
［セフィル］：「む、最後まで言わせてもらえなかったぞ」
［吹雪］：「な、何にしても、学園長の支えがあったからこそ、俺はハーモニクサーとしての役割を果たせそうなわけですから。本当に感謝してます」
［セフィル］：「そ、そんな風に言われると、ちょっと照れてしまうな」
恥ずかしそうに笑うところは、親子そろってそっくりだな。
［セフィル］：「もちろん、吹雪が一生懸命努力をしたというのもあるぞ。自信を持っていいからな、その点は」
［吹雪］：「はい」
学園長には、成功という恩返しをしたいところだ。
……。

［場所：社会科室］

練習を終え、社会科室に戻ってきた俺たちは、今日の儀式の最終ミーティングを行う。詳しい日程に関しては、昨日のうちに大半を聞

いている。場所が場所なだけに、島民から注目を浴びるということはないのだが、島に設置されたスピーカーを通してピアニストの活躍を確認する。そう、この儀式の参加者は、島民全員ということだ。俺も昔、父さん母さんと一緒に住んでいた頃は、家の外の広場に出てピアノの音色を聴いていた記憶がある。それを今回は、俺がサポートする。緊張するけれど、ちょっと誇らしい気分だ。……帰ってきた時にでも伝えてやりたいな。

［セフィル］：「大体のことは把握したな？」

［全員］：「はい」

儀式の始まりは年が変わる１５分前。ピアニストとハーモニクサーが選出されるのと似ていて、曲が終わると同時に四季のピアノが月と共鳴し、優しい光で包まれた時、来年の四季は約束される。

［セフィル］：「練習風景を見せてもらった限り、君たちに落ち度は見当たらなかった。本番もあの感じで弾ければ、間違いなく成功するはずだ。だから、あまり緊張はしないで、リラックスして臨むんだ。いいか？」

［全員］：「はい」

［セフィル］：「じゃあ、私は用があるから一度退散させてもらうぞ」

学園長は社会科室から出て行った。この後はしばしの休憩を挟み、本番前にもう一度だけ練習を入れる。この休憩で緊張を解せということかもしれない。

［舞羽］：「お茶でも煎れようか、私家庭科室行ってくるよ」

［聖奈美］：「あ、あたしも行くわ」

そう言って二人が立ち上がった時だった。

コンコン。

ドアがノックされ、ガラガラと扉が開かれた。そこから出てきたのは――。

［祐喜］：「失礼します。あ、やっぱりここにいたんだ」

［愛海］：「あ、みんなそろってるわね」

［翔］：「な、何と言う羨ましい光景……」
すっかり見知った三人組だった。
［吹雪］：「お前ら、どうしてここに？」
［愛海］：「そんなの一つしかないでしょう？　友人が大切な儀式の中心として頑張るのに、激励もしないなんて考えられないでしょう？」
［祐喜］：「三人でお金持ち寄って、みんなに差し入れ買ってきたんだ。僕たちにできることと言ったらこれくらいしかないから」
［翔］：「羨ましい光景だ……」
約一名変なことをずっと呟いているが、今はまだ触れないでおこう。
［舞羽］：「わざわざ買ってきてくれたの？」
［祐喜］：「うん、たいしたものは買ってこれなかったけど。はい、どうぞ」
祐喜は舞羽に持っていたものを手渡した。
［祐喜］：「中身はケーキだから、一応美味しそうなものを見つくろってきたつもりだけど……」
［カホラ］：「そこまでしてくれただけで十分嬉しいわ、ありがとう、三人とも」
［繭子］：「わーい、ケーキだケーキだ～」
予想通り、姉さんは子供のようにきゃっきゃとはしゃぎ出す。
［聖奈美］：「ここまでしてもらって、失敗はできないわね」
その横で杠は静かな闘志を漲らせている。
［舞羽］：「嬉しい、すごく」
［祐喜］：「喜んでもらえたら何よりだよ。僕たちは、成功すること信じてるから……みんな、頑張ってね」
［吹雪］：「おう！」
［舞羽］：「うん！」
［聖奈美］：「任せときなさい」
［カホラ］：「ええ」
［繭子］：「頑張るよ～」

［吹雪］：「――ところで祐喜。あれは、あのままでいいのか？」
［祐喜］：「え？　ああ、これね」
これと言われて指差されたのは、祐喜の横に立っている翔のことだ。
［祐喜］：「さっきからずっといいなーってばっかり言ってて、いざ部屋に入ったら……どっかに魂飛んでっちゃったみたいだね」
［愛海］：「確かに、この空間には美女がたくさんいるもんね。不自然なくらい」
日野はそう言ってピアニスト４人を眺める。
［愛海］：「天は二物を与えずって言うけど、あれは嘘みたいね。美女で才能持ってる人ばかりがここにいるんだから」
［舞羽］：「べ、別にそんなことは……」
［愛海］：「はいストーップ！　舞羽、それ以上言うと、他の女子にいつか刺されちゃうわよ？」
［舞羽］：「さ、刺される！？」
［愛海］：「自覚は持てないとしても、口に出すのはやめとくのが吉よ？　それが自己防衛になるから」
［吹雪］：「……女子の世界って、やっぱりドロドロしてるものなのか？」
［聖奈美］：「あ、あたしに聞くのやめなさいよ……」
［吹雪］：「……確かにそうか」
［聖奈美］：「今の間は一体何よ……」
［吹雪］：「ううん、気にしないでくれ」
［愛海］：「――だから、翔っちが飛んじゃうのは分からなくはないわね。見てるだけで幸せな空間だと思うし」
［祐喜］：「でも、一応言うこと考えてたみたいだし、そろそろ正気に戻さないと」
祐喜は右手の指を三本立て――。
［祐喜］：「ふっ！」
［翔］：「おおおっ！？」
背中の孔にビシっと突き立てた。

［翔］：「え？　あ、オレ……えっと」
どうやら正気に戻ったらしい、目の色がいつもの翔になっていた。
［祐喜］：「言いたいことあるんでしょう？　もう僕たち言ったから、後は翔だけだよ」
［翔］：「あ、ああ。そうなのか、えー、みなさん、オレは手助けも何もすることができませんが、成功することを心から祈ってますので、頑張ってください……決まった」
大きい独り言を零すあたり、こいつらしい。だが、女性陣は何だかんだ言って優しいから――。
［舞羽］：「ありがとう翔くん」
［繭子］：「その言葉で頑張れるよ、ワタシたち」
［聖奈美］：「儀式の時、ちゃんと起きてなさいよ」
［カホラ］：「しっかりやってくるわ」
［翔］：「ううう……今年一番の幸せかもしれない」
どんだけ今年良いことなかったんだよ……。
［翔］：「そして吹雪よ」
［吹雪］：「ん？」
［翔］：「……今度こういうシチュエーションがあったら、オレを呼んでくれよ？」
これが、さっきの理由なんだろうと、俺は確信した。
［祐喜］：「じゃあ、僕たちはそろそろ行くよ。長居したら悪いだろうし」
［愛海］：「また学校で会いましょう」
［翔］：「みんな、オレのこと忘れないでくれよ」
［吹雪］：「おう、サンキューな」
三者三様の言葉を残し、三人は社会科室を出て行った。
［舞羽］：「予想外に、良いものもらっちゃったね」
［吹雪］：「早速食べるか？」
［舞羽］：「うん、せっかくだしね。私、お茶煎れてくるよ」
［聖奈美］：「須藤さん、あたしも行くわ」

――三人が来てくれたおかげで、俺たちから緊張が解けたようだった。やはり持つべきものは友達だな。

［カホラ］：「？　ふふ」

偶然目が合ったカホラ先輩が、俺に笑みを浮かべてくれた。

――そして、来るべき時間がやってくる。

繭子ルート・アルモニコス（２６）

［吹雪］：「――よし！」
俺は気合いを入れ直す。儀式開始まで残り３０分、ピアニストの４人は学園長によって神殿まで運ばれる。
［繭子］：「みんな、そろそろだよ～」
姉さんの呼びかけに、俺たちはその場に並んだ。
［セフィル］：「準備はいいか？　五人とも」
［五人］：「はい！」
［セフィル］：「よし、では行くとしよう。じゃあ、舞羽から連れて行くとしよう」
［舞羽］：「はい」
［吹雪］：「頑張れよ、舞羽」
［舞羽］：「うん、吹雪くんもね」
穏やかだけど、力強くうなずき、舞羽は神殿に向かう。
……。
［セフィル］：「次は、聖奈美だな」
［聖奈美］：「はい。……」
特に俺にしゃべりかけるわけではないが、その気持ちはしっかりと伝わってきた。
……。
［セフィル］：「次は、カホラか」
［吹雪］：「頑張りましょう、先輩」
［カホラ］：「ええ。吹雪もサポートよろしくね」
［吹雪］：「はい」
……。
［セフィル］：「じゃあ最後に――繭子行くぞ」
［繭子］：「はい」
返事をした後、姉さんがこちらを振り返る。

［吹雪］：「練習の成果、しっかり見せてやろうぜ」
［繭子］：「うん！　絶対に成功させようね」
［吹雪］：「ああ。姉さんのピアノの演奏は、しっかり耳に刻んでおくから」
［繭子］：「うん。ワタシもふーちゃんの魔法、しっかり体に刻んでおくから」
［吹雪］：「はは、よろしくな」
［セフィル］：「うむ、良い姉弟愛だな。見ていて微笑ましい」
［吹雪］：「あ、すいません学園長」
［セフィル］：「いいんだ、いいんだ。気にしないでくれ」
［繭子］：「じゃあ、また後で会おうねふーちゃん」
［吹雪］：「ああ、じゃあな」
……。
そして、数分後、学園長が戻ってきた。
［セフィル］：「待たせたな、では、行こう」
［吹雪］：「はい！」
俺は学園長に連れられて、聖壇へと向かう。
……。

［場所：聖壇］

聖壇に来たのはあの日以来だ。前回は練習の一環だったが、今回は本番、自分の力を信じて最後までやり遂げる必要がある。――不安はほとんどない、今までやってきた事実がしっかりと胸に刻まれている。自分を信じてやれば、成果は必ず着いてくるはずだ。
［セフィル］：「良い目をしてるな、吹雪」
［吹雪］：「きっと俺だけじゃないと思いますよ」
きっとピアニストの４人も、同じ目をしているだろう。
［セフィル］：「手伝ってやれないのは少々心苦しいが、しっかりと見届けてやるからな。安心してくれ」

［吹雪］：「はい」
［セフィル］：「じゃあ――頑張るんだぞ、吹雪」
学園長はそう言い残し、俺の前から消えた。儀式まで残り後わずか、俺は精神統一をしてその時を待つ。
モニターには、苦楽を共にした４人の仲間が映し出されている。俺の頭に、今までの生活の思い出が甦り、駆け抜けていく。心を通わせた俺たちなら、きっとうまくいく。俺たちは今、全員同じことを思っているはずだ。
［吹雪］：「（行くぞ、みんな）」
……。
……。
――儀式が始まった。
舞羽から始まり、次いで杠、マユ姉、カホラと追いかけるような形でメロディーが奏でられていく。しばらくして始まりが杠からに変わり、それに次いでマユ姉、カホラ、舞羽と続く。その後はマユ姉、カホラとパートの始まりが入れ替わり……続いてそれぞれのメインパートへ向かう。
それぞれの曲調が十分に引き出され、前回よりも深みの増したメロディーが俺の耳に届いてくる。
舞羽、杠、マユ姉、カホラ……順々にメインパートが移り、次第に曲調は激しいものに変わっていく。
ここから、前回の練習で手こずったと思われるポイントが続いていく。
変拍子が続くメロディーを正確に弾くことがキーとなるが、きっと今のみんななら、問題なく進めるはずだ。
［吹雪］：「（頑張れ、みんな）」
俺は来るべきその時まで、みんなにエールを送る。
……。
変拍子のパートは、無事問題なくクリアすることができた。ここか

ら、それぞれのソロパートに移っていく。それと同時に、俺は魔法詠唱の準備にかかる。

［吹雪］：「……」

供給する人物を、しっかり脳内でイメージする。――よし。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

俺は魔法を解き放った。そして、供給する人物、杠に向けて魔力を分け与える。

……はっきりとは分からないが、杠の体はぼんやり光を帯びているようだ。これは問題なく魔力が送られている証拠、俺は気を緩めずに供給に徹していく。

……。

舞羽のソロパートが無事に終わり、杠にメインパートが移り変わる。

それと同時に、魔法を杠からマユ姉にシフトする。

先程と同じように集中し、脳内にマユ姉をイメージする。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……。

発光を確認し、俺は同じように魔力を分け与える。

杠の鍵盤を走らせる指の動きは滑らかで、とても安定感がある。マユ姉はその間に気持ちを高めているようで、目をつぶって深呼吸をしていた。

……。

そしてパートはマユ姉に移り、次はカホラに供給する。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

……問題なく成功。それと同時にマユ姉のパートが始まる。

練習の際、ちょっと他の人よりも間違いが多かったが、今ではしっかりとメロディーを刻むことができている。秋を感じさせる穏やかなメロディーラインが、俺の心にしっかりと響いてきた。

……。

ソロパートもいよいよ最後、俺の魔力の供給も最後となる。以前ほどではないが、体に疲労が蓄積し始めている。だが、それはみんなも同じ、俺だけがここで離脱するわけにはいかない。俺はもう一度気を引き締め、舞羽に向けて供給を開始する。

［吹雪］：「――エル・エルフィリード・グラディアス。光の精よ、我の力となり、一筋の煌めきを与えん。――ホーリーカルム！」

――無事成功、後はカホラが無事ソロパートを弾き終えるまで、舞羽に魔力を供給していく。以前の時と同じ、主に曲の始まりを担う舞羽には、三人よりも少し多めに魔力を供給させる必要がある。俺は意識して、舞羽に分ける魔力を増やすよう心掛けた。

……。

そして、程よい余韻を残した後、再び舞羽が鍵盤を弾き始める、それに続いて杜、マユ姉、カホラとメロディーを奏でていく。俺はそれを確認し、詠唱を停止した。

どうやら無事に役目を果たすことができたようだ。後は四人が無事に弾き終わることを待つのみだ。

［吹雪］：「（もう少しだ、頑張れ、みんな）」

俺は心の中でもう一度エールを送った。

――徐々に、曲のテンポは遅くなり、音量も低くなっていく。

……そして。

［吹雪］：「……」

演奏が終わった。

それとほぼ同時に、新しい年の始まりを告げる鐘の音が島に響き渡る。それと、ほぼ同時だった――。

［吹雪］：「あ、ピアノが」

四季のピアノは白い光を放ち始める。そしてその光は月に向かって一直線に伸びていく。

そして――島全体が優しい光で包まれた。

［吹雪］：「成功、したんだな」

モニターに映るみんなの顔も、成功したという事実に笑顔が満ちていた。

……。

……。

……。

［セフィル］：「――よく頑張ってくれた、みんな」

学園長の顔にも、笑顔が満ち満ちていた。

［セフィル］：「完璧と言っていい演奏だったぞ、練習を教えた私も鼻が高いよ」

［聖奈美］：「これで、儀式は全て終了ですか？」

［セフィル］：「ああ、これで一年、春夏秋冬が滞りなく回っていくはずだ。それもこれも、君たちのおかげだ」

［舞羽］：「役割を果たすことができて何よりです」

［セフィル］：「君たちの名前は、しっかりと学園に刻んでおくからな」

［繭子］：「ワタシたち、歴史の一ページに名を連ねるんだね～」

［聖奈美］：「学園の歴史、だと思いますけど……それでも嬉しいことですね」

［カホラ］：「歴史ということに変わりはないものね」

努力してきたと甲斐があったというものだ。

［セフィル］：「今日はゆっくり休んで疲れをとるといい。明日あたり、みんなで新年会&お疲れ会でも開こうじゃないか」

［繭子］：「わーい、やった～」

――こうしてみんなと笑いあうことができて、本当に幸せだと感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6154q/

ソプラノ

2011年10月26日12時06分発行